

---

# Prism Hearts

霧原真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P r i s m   H e a r t s

### 【Nコード】

N 3 1 8 5 0

### 【作者名】

霧原真

### 【あらすじ】

高校二年生に進級した三木幸久は、料理が趣味な自称「普通の少年」である。しかしなにがそうさせるのか、彼の周りは普通ではない。ヘタレ幼馴染、超人的バカ、まじめ堅物風紀委員、無口なケータイ少女等々、何人もの少女によって、彼の日常は水面の木の葉のように翻弄される。女難の巻き込まれ型主人公は、どこまで周囲に振り回されるのか。

当方の私事ですが、就職活動がひと段落つくまで更新を控えさせていただきます。読者の方々にはご迷惑をおかけしますが、どうぞご

容赦ください。連載再開時期については未定ですが、必ず機を見て更新していけるようにしていきたいと思いますので、気長にお待ちくだされば幸いです。

## いつもの朝

ちゅん、ちゅちゅん、ちゅん……。

外からは朝の到来を告げる小鳥の鳴き声が聞こえ、カーテンの隙間からは朝日が容赦なく差し込んでくる。

朝の集合住宅、2DK。そしてそんな中、自室の布団で惰眠をむさぼる俺、三木幸久<ミツキ ユキヒサ>、16歳

「幸久様…、幸久様……」

ゆさゆさ…、ゆさゆさ……。

そして、毎朝変わらない同じリズムで俺の眠りを妨げる緩やかな振動  
「幸久様、お言いつけになられた時間にございます。幸久様」

いつものようにその振動をキーにして脳が覚醒。覚醒から起床までを速やかに済ませ、全身隈なく一気に血が流れていくのを感じる。

「ふぁ…、よし、起きた。広太、毎朝ご苦労だな」

「いえ、毎朝敬愛すべきご主人さまをお起こしする。これも執事の特権にてございますので」

「そうか、それじゃ朝飯はすぐにつくる。もうちょっとだけ待ってろよ、腹減ってんだろ？」

「申し訳ございません…、毎朝、朝食の支度の手間を煩わせてしまい……。私がつくることができればこのようなこともないのですが……」

「はは、こんなの広太の料理を毎朝食うのに比べれば大した手間じゃねえよ。こればかりは、黙って俺がつくるのを待ってるのが一番だ」

「はい……」

毎朝変わらずに交わされる軽口。まだ少し眠い頭を軽く振ってから俺はエプロンを装着し、とりあえずトースターの電源コードを差し、食パン二切れを差し込む。

そしてトースターがパンに焼き目をつけるまでの時間を利用してサ

ラダ菜を洗い、手で適当にちぎる。簡単だがサラダの仕度をする。それから二口のコンロに一つずつフライパンを置き、脂を薄く流してから一つには卵を二つ割り入れ、もうひとつには一口大に切ったソーセージを適当に投入。

そういえば、さっき俺を起こしに来たのは庄司広太くショウジ コウタ>という。なんと説明すればいいか迷うが、うちの専属執事だ。どうして一般家庭、しかも男の一人暮らしなんぞに執事がついているのかという疑問はもつともすぎて逆に笑えてくるが、せっかくだから説明しておこうと思う。

なんでも俺の先祖である三木の家っていうのは旧華族の家系らしくて、庄司家は代々三木につかえる家系らしい。らしいっていうのは、俺自身はそんなご大層な暮らしはしていないからだ。

どうも親父のときにはすでにこんな状況だったらしく、どうせ爺さんあたりが無計画に財産をばらまいたりして失ったんだろう。

うちの爺さんは変人と言うか、バカというか、考えなしだったらしいし、博打にでも突っ込んで有り金残らずスっちまったとか、どうせそんな話に違いない。

色んな事情で両親がいない俺は庄司のおじさんとおばさんに大いに世話になっているわけだが、そんな庄司のおじさんもちよっと前までは親父の執事をやっていたらしいから、家同士のつながりっていうのもなかなかのものなんだろう。

まあ、俺にとっては昔からおじさんとおばさんは親代わりであり、俺も含めて家族みたいな関係だったから、庄司の人たちが三木の家に仕える、ということに対する実感は特にない。

しかし、広太がどうして俺に対して忠義心とかを持っているのかは今一つわからないのだが。弟から兄への尊敬、みたいなものだろうか？

だが庄司の人たちはどうしてまだ三木の家に仕えてくれているのだろうか……。確かに昔は家に仕えていたのかもしれないけど、没落した今となっては家に仕える意味なんてあるんだろうか……。

まあ、そんなことを聞くこと自体がおじさんたちに失礼ってことなのかもしれないけど。

そしていまの集合住宅生活に至るわけなんだが、これはおじさんからの提案だ。できるだけ家柄に恥じない暮らしをしてほしい、ということだが、それ以上に当主として、そして男としての自主独立性を育むためにこういうことになっている、んだそうだ。今は広太といっしょに男二人でルームシェア状態だ。

しかしこんなんではんとに自主独立性が育まれるのかどうか、疑問でならない。普通そういうことがしたいんだったら、一人暮らしするもんじゃないんだろうか。

だいたい、おじさんたちに比べたら未熟なのかもしれないが、広太だって執事としての基礎素養はほとんど修得済みなんだから、俺の生活はかなり広太に依存している。独立してるって言えばそうなのは毎朝毎晩の料理だけだろう。

ぼんやりと考え事をしているうちに朝飯が完成していた。

「広太、飯できた」

「承りました」

エプロンを外して適当に畳んでテーブルに朝飯を持っていき、リビングでテーブルセッティングに精を出している広太を呼ぶ。

今日の朝飯はトースト、目玉焼き、ソーセージ、サラダ。サラダにはつくり置きのクルトンと最後に気分で作ったカリカリに焼いたベーコンが乗っている。

「それじゃ、食うか」

「いただきます」

「はい、いただきます」

朝飯が始まる。時間は06:34、いつも通りの朝だった。

.....

さて、そろそろ学校にでも行くか…、新学期なんだから張り切っていないとな。

「広太、行ってくる。家のことは任せたぞ」

「はっ、おおせのままに……。いつてらっしゃいませ」

「今日は昼前に帰ってくる。飯はつくるから待っていてくれ、帰る前に一回連絡すっから」

「それではそのようにいたします」

広太は高校に通っていない。

それは広太も納得してるからだから、別に俺が口をはさむようなことじゃないような気がするんだけど、いつか何とかしてやりたいもんだ。

さてと、とりあえず今日もいつも通りに日課を果たさないとな……。日課っていうのは毎日やってこそその日課なんだから。

今朝も俺は、湧き上がる欠伸を噛み殺しながら三軒隣の一軒家、天方家へと向かう。

テクテクとゆっくり歩いて三分とかからないご近所さんである。ピンポン

『はいはい、どうせ幸久なんですよ。いま開けるから、ちょっと待ってなさい。ガチャガチャしたら怒るわよ、っていうか入れてあげないわよ』

「はい、わかってます」

インターフォン越しの声は晴子くハルコくさん。

天方家は女三人の女所帯だ。お母さんの雪美くユキミくさんと長女の晴子さん、そして霧子くキリコくだ。

ちなみに俺は今、十年來の幼なじみであるところの天方霧子くアマカタ キリコくを起こしに行くところなのだ。がちやつ

「ほら、入っていいから、早く入んなさい」

「分かりました」

さらにちなみに、晴子さんは俺の料理の師匠ということもあって、

何があっても逆らうことのできない相手だ。

「あら、幸久くん、今朝もいらっしやうい。もう朝御飯食べちゃった？」

「食べるにきまつてるじゃない。えっ？ まさか食べないなんて不遜なことは言わないわよね。師匠から学ぶ機会をふいにするなんてことないでしょ」

「食べます、いただきますよ。今日も晴子さんのごはんで勉強させてもらいます」

「まあ、当然よね」

「恐れいます」

「じゃあ、幸久くん。その前に霧子ちゃん起こすのおねがい、ね？」

「あっ、はい」

そして本来の目的を思い出す。別に雪美さんと晴子さんとおしゃべりするのは嫌いじゃないんだが、その前にいつものをやっておかないといけない。

よし、起こしに行くか……。

俺はリビングで朝の一時を満喫している二人に背を向け、階段を昇って二階を目指す。

がちやり……

なんとなくまだ眠く、はつきりとしていない頭を軽く振ってから、俺はネームプレートに霧子の名前が刻まれた扉を開き、部屋へと踏み込んだ。

「霧子、起きろ。今日は始業式だぞ。遅刻はまずい。ゆえに起きろ。さもないと強硬手段に出ざるを得ない。それでも構わないって言うんならまだ寝ててもいいぞ」

いつも通りに寝ているだろうから特にノックはしない。声をかけつつ一挙動で扉を開け放つ。

しかし中に踏み込んでから気づく、部屋の中にあった異変に。いつもだった起こりえない不自然さがそこにあった。

なんでかは分からないが、半脱ぎの霧子が部屋の中に立っていたの



である。俺はとりあえず、その不自然さに困惑して首をかしげてみた。

「にゅっ!? ゆ、幸久君!? だだ、だめ! き、着替え中だよ!」

「え、あ、ごめん…、出てくわ…」

そう言われて我に返り、とりあえず謝りながら部屋から出ると、その扉を静かに閉める。予想外の事態に俺の脳の処理が追いついていない。

あれ? なんで起きてるんだろう? なんで着替えてるんだろう? だって俺は、あいつを起こしに来たんだぞ? 起きてるやつは、起こせないじゃないか。

しかし、ああ、びっくりした…。今年に入ってから一番びっくりしたかもしれない。ぼんやりとしていた頭も一気に覚醒した。

学園で男女を問わず人気があり、地下組織的にファンクラブとかも存在しているらしい霧子だが、基本設定からして一人で起きられない。もともとはそういう設定だったはずだ…、ったんだが…、なんだ今のは?

どうしたことか、今日に限っては何事もなく起きていて、あまつさえ着替えまで始めていた。驚天動地の出来事というしかない。

年に一回二回あるかないかの滅多にない珍しい出来事が今日起こってしまったのだろうか。もしかしたら今日は良くないことが起こるのかもしれない。

なんというか、不幸とか危険とかの予兆的なあれだったらどうしよう。

さっき目に飛び込んできた光景を脳内で反芻する。

スラッとき長い足と高い上背、均整のとれたスタイル。いわゆるモデル体型ってやつだろう

さらに背中にたれる髪を高く結ったポニーテイル。

美人の家系である天方家の血を色濃く受け継いだ目鼻立ち。

我が幼なじみながらどこまでも末恐ろしい娘だ。

「幸久君…、入って、いいよ……」

「ああ」

俺がそれなりに状況を理解するだけの時間が経ってから、扉越しに霧子の声がした。

再びゆっくりとドアを開ける。

するとそこには、すっかり学園の制服に着替え終わった霧子がいた。眠気ともすっかりおさらばした頭で、ついで程度に考えてみれば、今日が始業式、つまり大きな節目の行事であることを考えればこの状況も、実はたいして驚異的な事件じゃないことに思い至るのだった。

「霧子、どうしたんだ、今日は。もしかして、一人で起きられたのか？」

若干ふらふらとしながらも、平静を装っている霧子に、俺は何事もないように話しかける。

「う、うにゅ…、そう、だよ？」  
なぜキョドる。

「ウソだな、ぜんぜん寝てないんだろ」

「ね、寝たもん……。寝た…、よ……？」

「じゃあなんで目の下にそんなクマつくってんだよ」

「にゅっ、ウソ……！？」

急いで鏡を手にとってのぞきこみ、目の下のあたりをぺたぺたと触る。しかしそこには何もない、あるのはぷにぷにの白い肌だけだ。

不思議そうな顔をする霧子。

「ウソだ、一徹くらいじゃそんなにクマなんてできるか」

「あ、あう……」

「正直に言いなさい、寝れてないんだろ？」

「う、うにゅ…、ごめんなさい……」

「別にいいって、そんなこと」

どうせ新学期のクラス替えの楽しさと不安がない交ぜになって眠れなかっただけだろう。まさしく、遠足前夜の小学生みたいな状態だ。

熱を出したりしないだけマシなのかもしれないが。

「晴子さんが朝飯つくって待ってるから早く行こうぜ」

「にゅん……」

「ほら、寝不足でふらふらなら肩くらいだったら貸してやってもいいぞ」

「ありがと、幸久君」

階下のリビングへと霧子を強制連行する。…、どうにも軽いな、最近ちゃんと飯食ってんのか？　こんど腹いっぱい飯を食わせてやろう、うん……。

……………

「霧子ちゃん、幸久くん、行ってらっしゃい」

それから俺たちは朝飯をありがたくいただいて、そろって学園に向かう。

ちなみにだが、俺はすでに自宅で朝食を済ませているので、晴子さんの料理はほんの少しもらうだけに収めた。

「行ってきます、雪美さん」

「いってきまゝす」

時間的には余裕だ、ゆっくり行こう。毎朝こんな風に霧子起きてくれればいいんだけどな……。

いや、そうなたらそもそもここに起こしに来る必要もなくなるのかもしれないが。

「今年もおんなじクラスになれるといいね、幸久君」

「霧子は選択科目、何とったんだ？」

「幸久君と同じ科目をとったよ、なんで？」

二年生のクラス分けは、一年の年末にした選択科目アンケートによるということもあり、朝の通学路を進みながらの世間話にもその話題が昇る。

そしてさも当然のようにそう応えた霧子に、俺は足を止めずに考え

る。選ぶ理由が俺と同じだからっていうのはどうなんだろうな、と。そろそろ自分のやりたいこととかは見つからないんだろうか。まるで我が娘のように、将来が心配でならない今日この頃だ。

「いや、別に問題はない。そうか、それなら今年もきつと同じだろうな」

俺と霧子は小学校のころからだから、もう10年も連続で同じクラスになる記録を、今なお更新中だ。この分だとどうせ今年も同じクラスに違いないから、これで連続11年目だ。

気づけばかなりの、いや、ありえないほどの大記録になってきたらしい。

「ふわあ……」

手で隠しきれないほどの大きな欠伸を、霧子がこぼす。

昨日は徹夜で一睡もできなかったこともあってお眠なんだろう。健康優良児な霧子はいつも10時頃には床についているらしいからな。

「霧子、学校までがんばれば、もうじきに着く。学校まで、いや、クラスまでは耐えるんだ」

「にゅ、う……ん。ねむいよお……」

「着いたらいくらでも寝ていいからな」

「うん……、がんばるう……」

何事もなければあと数分の辛抱だ。あくまでも、何事もなければだが。

ふらふらと歩く霧子に合わせて、ゆっくりと学校を目指す。いつもの時間だったら遅刻確定の速度だが、幸か不幸か早くに出てくることができたので、時間ギリギリになるのは避けられないが、遅刻は免れそうだ。

なんか、早く出られても遅刻ギリになるんなら、早く出る意味ねえな。明日からもいつも通りでいいか。

「霧子、明日はしっかり寝るんだぞ」

「う……ん、わかったよ……」

だめだな、半分寝ながら歩いてる。

「霧子、こっちだ。曲がるぞ…、そっちじゃない、左だ」

「う…ん、わかったよ…」

俺の声に引っ張られるように霧子はフラフラとその進行方向を修正して角を曲がる。

先に曲がった俺がそれを待っていると、進行方向の右弦前方から何かが飛んでくる気配。適当に首を振って回避に成功する。

続いて第二射が左弦上方から飛来。体を変えて半身になり回避。

霧子が角から顔を出したところで砲撃は終了した。

そしてまるで何事も無かったかのように、向こうに立っている電柱の上の方からこちらに手を振っている砲手は、なんてことはない、ただのバカだった。

「ゆっきい、きりりん、おっはよ」

「なんだ、バカ志穂じゃないか。朝から砲撃してくるのは止めろって、何度言ったら分かるんだ、言ってみろ」

「だいじょぶだよ、ぜんぜんよけるよ。それにゆっきいがこんなのに当たるわけじゃないじゃん！」

そのバカは、名を皆藤志穂<カイドウ シホ>という。一個のバカである。

一言で言うとバカ、二言で言うすごいバカ。しかしその小さいなりからは想像もつかないが、1000万パワーの極悪悪魔超人だ。気合いを入れれば〇〇波みたいな遠距離技くらいだったら出せるかもしれない。もしかしくなくても屁のつつぱりくらいにはなるに違いない。

志穂は電柱から躊躇なく跳ぶと（今志穂がいるところはだいたい地上三メートルほど）、無駄にくるくると縦に二回転してから道路へと降り立った。

無駄な動きにバカの度合いを感じる。

「しいちゃん…おは、よ…」

「ありり？ きりりんはまだ眠いの？」

「ああ、なんでも徹夜らしいぜ」

「うにゅ……」

霧子の返事はもはや小動物の鳴き声と化していた。ちょっとおかしいながらもかわいいと思うが、昔からのことなので特に突っ込んだりはしない。

「今日はどうしたの。いつもゆっきいが来る時間に比べるとちょっと早いね」

「俺、じゃない、霧子だ」

「あゝ…、そういえば毎朝きりりんを起こすので大変だゝ、っていつてたね。あたしも朝起きるの大変だからゆっきいに起こしてほしいよ」

「うにゅ……。幸久君、ごめんね……」

志穂の戯言は華麗にスルー。これ以上手間掛けさせられてたまるかってんだ。

「それで志穂、お前、授業なにとった？」

「あたしは家庭科だよ。あのね、家庭科の授業って毎週美味しいご飯が食べられるんだって。すごいよねえ。びっくりだよねゝ」

スルーされても動じない。志穂は強い子。

「なんだじゃあお前も同じクラスか」

「あり？ やっぱりゆっきいも家庭科なんだ？ やった、毎週ゆっきいのおいしいご飯だね。ゆっきい、だいすき！！」

「そういえば、班決めは毎回任意とか言ってたっけか。説明会で先生が言ってた、うん」

「おいしいご飯を食べてるのに先生に怒られないなんてすごいよねゝ。誰だろうね、こんなすごいこと考えたの」

「まあ、どうせそんなことだろうと思ってたけどな」  
理由は単純でいい。それでこそこいつだ。

「一回目は今週だよ。もう今から楽しみだなあ。なにが食べられるのかなあゝ。ねえねえ、ゆっきいはなにが食べたい？」

「それはわからねえって、前日までに告知があるんじゃないか？

それに俺は自分のつくった料理を、志穂にばくばく食われて消費さ

れるかと思うと、切なくてたまらねえな」

「あっ、ねえねえ、お料理っていうのは大切な人に食べてもらうとほんもくなんだって聞いたよ。好きな人とか、大事な人とか」

「急に話変えたな……。ああ、まったくその通りだな。志穂もいいこと知ってるじゃねえか」

「ということは、ゆっきいにとってあたしは大事じゃないってこと？ ひどいよ、さみしいよ……」

泣き真似をするように、涙をぬぐう仕草で両手を目元に当てる志穂。どうやら話は変わっていなかったらしい。

「というか、俺は志穂のことが大切じゃないなんてことを言っただろうか。どの文脈を拾ってきての発言だ？」

「うにゅ……」

「はあ、なに言ってるんだか……」

「でもね、あんなにおいしいご飯が毎日食べられるなら、ゆっきいといっしょに暮らすのもいいかも。でも、ゆっきいはあたしが大事じゃないんでしょ？ あたしはこんなにゆっきいがだいすきなのに……」

「どうも理解が共有できてねえな……。お前の頭でも理解できるように言うんだな、俺が悲しいって言ってるのはお前の食い方なんだけど、そこんとかいいか？」

「？ 食べ方？」

「あのいかにも『消費されてます』みたいな食い方を見せられると、イヤでも無常を感じさせられるっていうかな。なんというか、料理っていう俺の行動を否定されるっていうか、逆に肯定されてるっていうか……」

「ああ……、なあんだ、そうだったんだ、あたし、勘違いしちゃったよ。……、ところでゆっきい？」

こいつ、おそらく分かっているみたい。

しかし、わざわざそんなところにかかずらう俺ではない。

「どうした？」

「みてみて。きりりんが立ったままねてるよ。ほらほら、かわいいねえ。ほったつんつんしちゃおっと。うわあ、ぷにぷにだよ、ゆっきい」

「ああ、ほんとだな。ほんと、だな……」

背伸びしながら霧子の頬に立てた人差し指を突き刺して、ぷにぷにとその感触を楽しんでいる志穂。そしてため息を吐く俺。

見ると霧子が俺の肩に頭を乗せ、安らかな寝息をたてていた。さっきから話に混ざってこないから、まさかとは思ってたが。仕方ないから俺も志穂といっしょにつんつんと頬を突いてみる。ちよっただけ楽しい。

「さあ、志穂。どうしようか、この状況」

「どうするもこうするもないよ。あたしじゃきりりんはおんぶできないからね。ただゆっきい、ガンバとしか言えないよ。ゆっきい、ガンバ！」

「そうだよなあ」

「すっかり寝ちゃってるからおんぶするしかないね」

「やっぱりそれしかないよな…、霧子？」

試しに霧子の肩を揺すってみる。

ゆさゆさ、ゆさゆさ

「うにゅ……」

揺すられた振動が気に入らないのか、逃げるようにわずかに身をよじらせるが、起きそうな感じはさっぱり感じられない。

だいたいこんなところでぐだぐだしてたら遅刻が確定するのは時間の問題でしかないのだ。

仕方ねえな、いつもいつも手間がかかるやつだ。

「志穂、かばん頼む」

「まかせてっ！」

志穂に俺と霧子の分のかばんを投げる。それを受け取った志穂はなぜか片手に三つかばんを持った。それって持ちにくくないのだろうか？



「うにゅ……」

俺は、ひょいっと霧子をおぶった。

背中には、昔からの慣れた重みを感じる。

しかし、ああ、このまま学校に行ったら俺はどんな目にあわされるんだろうか。霧子は人気があるから、ただでさえ常日頃側にいる俺はいい顔されないというのに、想像するだけに恐ろしい。

学校、行きたくなくなってきた……。

## いつもの朝（後書き）

学園ラブコメです。おそらくコメディ色の方が強い作品ですが、楽しんでください！

## 滑り込み登校

寝不足がたたって爆睡している霧子を背中にくっつけて登校する。当然だが、人一人背負っているわけだからそんなにスピードが出るはずもなく、のろのろと学校への道を進むことになる。

「あのね、今日の朝ごはんはふりかけごはんだったんだよ。ゆっきいは、なにたべたの？」

「…、パン」

「パンもおいしいよね。パンだったらたまごのパンが好き」

「そうか……」

片手にもった三つのバックを感じさせないような軽快な腕振りで、俺の隣を志穂が歩いている。こうして益体のない話をしていても、俺はどこか気もそぞろだった。

「ゆっきいは力持ちだねえ」

「霧子は軽いから、そんなでもない」

「でもあたしはおんぶできないよ？」

「お前は小さいからな。さっき自分で言ってたろ」

「？ そだっけ？」

どうしても、後ろから注がれているいくつもの視線が気になって気になって仕方なかった。俺たちのことなんて気にしないでさっさと追いぬいてくれればいいのに、どうしてか、ちんたら歩いている俺たちを追い抜こうとしないのか。

いくつもの視線の針に全身を突き貫かれているような、そんな気分だった。一言でいうなら最悪だ。

当然分かっていただけ、周りを歩く人たちの視線が相当に痛い。その視線の出所の大半はうちの学園の生徒たちだ。

新人生か、あるいは周りのことに興味が全くないような人でもない限り、たいていの人は霧子のことを知っている。それほどまでに、俺の背中で無邪気に安らかな寝息を立てる娘は名の知れた存在だっ

た。

さて、はたして彼らはどのような心持ちで俺に視線を送っているというのだろうか。

去年同じクラスで、その上理解もあるようなやつなら、もしかしたら生暖かい目に諦感を込めてスルーしてくれるかもしれない。

しかしそれはあくまでごく少数で、大半の生徒はそんなことをしてはくれない。恐らくこの光景を見てこう思うだろう、「あの男はなんなんだ、この野郎」と。

俺としては、別に代わってくれるならその役を譲ってやっていいとまで思っているのだが、遠巻きに俺に視線を送るだけで、「代わりましょうか?」という一言をかけることすらしてこない。

こんなことは、さすがに滅多にないのだが、ある度にこうして好奇と怨嗟の入り混じったような視線に刺されるのは、正直疲れる。

登校中に眠るということの恐ろしさについて、今度しっかりと教え込んでやることにしよう。

「ゆっきい、おつかれなの?」

「いや、なんか、もうずいぶん慣れてきた」

「ゆっきい、また強くなったね!」

「ああ、志穂よ。俺は、どこに行くんだろうな……」

「ついたところが行くところだよ。ついたらわかるんじゃない?」

あたしもいっしょに行っている?」

「志穂……お前たまに言うこと深いな……」

「? どういうこと?」

「……まあ、別に気にしなくていいぞ。俺の思い過ぎしの可能性がものすごく高いからな。スルーしようぜ」

「え、なにになに? どういうことなの?」

「せっかくスルーしようと提案してるのに……」

「ゆっきい、むずかしいこと言うからわかんない。わかるようにちゃんといっている!」

霧子をおぶりながら登校ということで、比較的テンパっている俺な

のだが、志穂はそんな俺の腕にしがみつき、ぶんぶん振って俺に言葉の続きをせがむ。志穂はポテンシャルが半端じゃないので、当然腕力も相当以上に強い。

しかもさらに、追い打ちをかけるように俺の腕に体重を預け、ぶら下がるようにして全ての体重をかけてくるのだった。

人間一人としての重さ自体はたいしたことはないのだが、しかしそれでもやはりけっこうな負担だったりするわけである。

頼むから、俺の体にこれ以上負荷をかけるんじゃない。

「あぁっ！ もう！ 言うよ、言うよ！ 言うから、俺の腕にぶら下がるのをやめなさい！」

「はーい」

まるでうんていで遊ぶ子どものようにぶらぶらと体を揺らしていた志穂だったが、意外とあっさり俺の腕にぶら下がるのをやめてくれたのだった。

人一人分の重しが取れた俺は、少しだけ開放的な気分浸っていた。「お前はたまに言うことが深い、ってことはだな、逆に考えるといつも浅いってことだな。今のが湖くらいの深さだとするならだな、いつものがどれくらいかっていうと……」

「ゆっきい、よくわかんないから、もういい」

「そうか、それならもう止めておこうか。しかし…、お前はいつもだいたい自分勝手だよな。自分からしたいって言った話を自分で打ち切るのほどうかと思うぞ？」

「むずかしい話するとね、頭がうにゅ、ってなりそうだから、やめとく。ゆっきいはやっぱりすごいね！」

「そうか？ ……、あぁ、やっと着いたな」

「あつ、もう校門が見えるよ。ちこくにならなくてよかったね」

「ほんとだな。さて、そろそろ霧子起こさねえとなぁ。志穂、歩きながらで悪いけどちょっと頼むわ」

「うん、いいよ」

志穂は俺の背中にいまだくっついていいる霧子の足を片方持つとロー

フアーを脱がせる。志穂の名誉のために言っておくが、こいつは決して特殊性癖持ちというわけではない。

「はい、くつ。あとバックも」

「はいはい、つと。よし、やってやれ」

俺は霧子の靴と志穂の腕にある三つのかばんを受け取った。もちろん俺も、靴を受け取りはしたものの、特殊な性癖を持っているというわけではない。

霧子の足の裏に親指をあて、狙いをつけて押す。狙うのはこの間ネツトで調べた寝不足のツボ。一切の容赦も呵責もなく、一気に撃ち抜いた。

「ふわあっ！ い、痛っ！」

一撃で、全身に痺れるような痛みが走ったのだろう、霧子は体を震わせて、文字通り飛び起きた。軽く涙目になっていることだろう。

「霧子、おはよう」

「幸久君…、おはよ」

「肩くらいなら貸してやる。少しは寝たし、あとは自分で歩けるよな？」

「あ、うん。幸久君、ごめんね、重かった…、かな……？」

「いや、身長のわりに軽すぎるな。きつと晴子さんがあんまり食わせてくれてないんだろ。俺に任せろ、今度腹いっぱい食わせてやるからな」

「う、うん、わかったよ」

「よし、分かればよろしい。さあ、そろそろ遅刻でもおかしくない時間だ、急ぐぞ。志穂も急げよ」

「はーい」

志穂に撃ち抜かれた左足は当分使い物にならないだろうから、俺は霧子の左側に立って肩を貸してやる。

二人三脚みたいになりながら校門を目指しているわけだが、時間的にはかなりやばい。

少しでも早く出てきたのに始業式から遅刻なんてことにはなりたく

ない。できるだけがんばろう。

.....

「あと一分で門を閉じる！ 走れば間に合うぞ、急げ！」

ずいぶんと近くに見えてきた門のあたりから、凜と響く風紀委員の声。ヤバいな、門を閉じられるまでに着かないと遅刻扱いだ。

けっきょく今日も遅刻ギリギリとは、よくないな。

「ちっ…、まずいな……。志穂、霧子を頼んだぞ」

「ゆっきいときりりんのピンチだからがんばるよ。おまかせだよ、ゆっきい！」

足がまだ痛いらしく、肩を貸していた霧子を志穂に預けるよ、俺は一足先に正門へと走り、手をメガホンのようにしてよく通る声を響かせながら姿勢よく立ってる風紀委員の少女に声をかける。

「よお、姐さん。おはよう」

「ん、三木か。新学期早々遅刻間際ではないか、今度からはもっと早く来るように気をつけるんだぞ」

「そうするよ、今度からね」

「まったく…、きちんと余裕を持って家を出れば遅刻などしないのだぞ」

「分かってるって。あっ、そういえば、姐さんは選択なに取ったの？」

「私か？ 私は家庭科だ。確か三木も同じだったように思うぞ。クラス分けは、もう確認したからな」

「あっ、探してくれたの？ なんか、手間かけたな」

「気にするな、手間などかかっていない」

「そうだ姐さん、今日は手伝うぜ。探してくれたお礼。カウントすればいいんだっけか？」

「ああ、そうだ、時間は…、ふむ、あと30秒といったところだな。頼めるか？」

「まかせてくれよ、姐さん」

やや向こうの方に霧子と志穂が見える。どうやら志穂が霧子をおぶっているようで、小走りくらいのスピードで門へと迫っている。これならさっきも志穂におぶらせればよかったかもしれない。

まあいい、追加の時間は五秒もあれば足りるだろう……、それではカウントを始めよう。

30から始めて、20を過ぎ、10に差し掛かる。

「9…、8…、7…、6…、5…、4…、3…、」

ゼロに迫るカウントが耳に届いたのだろうか、志穂のスピードが一気にあがる。人を一人おぶっているとか、そんなことを感じさせない軽快な走りだった。

「あっ、そうだ。姐さん、いま何時か分かる？」

「またか…、はあ、八時だ」

「7…、6…、5…、4…、3…、2…、」

霧子を背中に乗せているはずの志穂が、まるで競走馬のようにゴールラインである正門に突っ込み、そして速度を落とさず向こうの方へと駆けて行った。

その背中が、もうすでに見えない。

「門を閉める！ 怪我をするようなことはしないように！」

そしてゆっくりと門が閉められ、脇に控えていた数人の風紀委員によって止められた遅刻者は門の外に閉め出されるのだった。

「間に合ったものは行ってよし。門外のものとは生徒手帳を出して待つように」

「それじゃあな姐さん」

「三木、それではまたあとでな。皆藤と天方にも遅刻には気をつけるように言っておいてくれ。あと、こんなことはもうしないからな」

「おっけ、了解」

そう言いながらも付き合ってくれる姐さんが大好きだ。

さて、志穂はどこまで行ったかな、と。

「おお、いたか」



基本的に全力で走り出したら直線にしか進めない志穂は、どうやら昇降口のあたりまで行ってようやく止まることができたらしい。

急ブレーキでもしたようなゴムが地面に焦げ付いた匂いを周囲にばらまきつつ、志穂はこちらに向かってぶんぶんと手を振っている。

その横で霧子が

「よしよし、今日も遅刻にならなかったな」

「うまくいったね！」

「ね、ねえ…、のりちゃんに悪いからもう止めない？」

「霧子が寝坊しないようになったら止めような」

「う、うにゅ……」

明らかに原因が自分にあると分かっているからか、簡単に引き下がる霧子。これをやめてしまうと、これまでギリギリと偽っていたものがまるごと遅刻になってしまいかねないのだ。

まあ、姐さんも分かかって付き合ってくれているというか、優しさで見逃してくれているというかだし、まあ、本当にマズいとなれば言ってくれるだろう。

「っていうか、あれは姐さんの温情だしな」

「りこたん、やさしいからね」

「うにゅ、だから早くやめさせてあげられるようにがんばらないと……」

さて、さっさとクラス分けを見に行かないとな。さっきの口ぶりからして姐さんは俺と同じクラスらしい。となると、家庭科専攻は一人クラスにまとめるって話を聞いているし、俺たち四人は全員同じクラスっていうことになるのだろうか。

出席番号的に霧子の名前を探すのが一番早いな。その名前があった組が一年間我らのホームになるわけだ。

早く探して教室にいかないと、せっかく門を抜けたのに遅刻にされるしな、急がないと。

そういえば、さっきの風紀委員の女の子の名前は風間紀子<sup>カザマノリコ</sup>という。

通称「風紀の申し子」「風紀の戦乙女」。

どこからどう見ても普通の学生にしか見えないけど、彼女は風紀委員会のエリート部隊、特別突撃鎮圧部隊に所属する俺たちの友だちだ。

どちらかといえば地味な外見をしているが、それとは裏腹に普通とか地味とかからはほど遠い、非常に充実した学生生活を送っている。入学式の翌日には風紀委員に入っていたという奇特な志願兵であり、一兵卒から実績を積み上げ、夏休みが終わるころには今も所属している部隊に所属替えになったというエースアタッカーである。

風紀委員長、またの名を幕僚長にもっとも近い人間といわれている、それが我らの姐さんだった。

もう姐さん以外に呼び方が思いつかない。

たぶんまともに張り合えるのは志穂くらいだろう。二人が手加減抜きの本気の本気でふつかりあったら地が裂け、天が割れると言われている。

ああ、二人とも俺の味方でほんとによかった、とほっと胸をなでおろしたくなるほどだ。

「ゆっきい、はやくはやく！」

「ほんとに、霧子の名前は探しやすくていいな。出席番号二番なんて、俺からしたら信じられないぜ」

「にゅ、今年は一番じゃなかったね」

「一番なんて夢のまた夢だな、俺にとって」

「ゆっきい、はやくはやく！」

そして、俺たちの教室は二年七組だったらしい。

まあ、二年からは単位制だから共通科目とHR以外はクラスがばらけることも多いのだが、教室の中のつながりっていうのはけっこう重要なわけである。

それに選択授業もそこまで多いわけじゃないしな。

しかし…、今年も席が遠いな……。

「いや、別に分かったことなんだけどさ」

天方、皆藤、風間と来て、三木だから仕方ないんだけど、なんか

まらん。だいたい席順が名前の順だからいけないんだ。事態の改善を要求したいところだ。

…、いやいや、そんな後ろ向きはいけない。前向きに解決策を探ろう。

そうだな…、まずは手始めに周りのやつに声をかけてみるか。それで話相手をつくればいいな。

…、なんて思いながら教室までたどり着いたわけなんだが、周りを見渡すとどこを見ても男がいない。

「あれ？」

えっ？ なになに？ みんな遅刻？

そんなことはあり得ないと、俺だって分かっているが、どうしても悪い想像を心の底に押し込み、ずっとまじな幻想に逃げ込もうとしてしまう自分がいた。

だが現実是非情である。すでに席はすべて埋まっている。

男、俺一人、なの……？

なんだ、みんなそんなに単位が大事か？ そんなに勉強が大事か？

俺は異端者か？

いや、なんか空気がおかしいと思ったんだよ。教室入ったときほんのり甘い香りがした気もする。

まあ、家庭科だしな……。ほんの、ほんっの少しだけなら覚悟してたよ。

まあ、ほんとになるなんて思ってたけどさ。

とりあえずだ…、当初の目標通りに席の近くに話せる人を見つけねえとな。

「あ…、あの……」

「ん……？」

俺が「俺ならできる俺ならできる俺ならできる……」と効果があるのか甚だ怪しい独り言自己暗示をかけていると、なにか声のようなものが聞こえてきたような気がする。

ついで肩になにかがかすったような感覚があった。

「…、俺、ですか？」

可能性にかけて振り返ってみる。

初日から、クラス唯一の男子というマイノリティになってしまった俺に降って湧いたような大チャンス。世界もまだまだ捨てたもんじやないかもしれないな……。

しかし俺が振りかえると、隣に座っている女子はアプローチをかけてきたときのアグレッシブさはどこへやら、急にあたふたとし始めた。

あれ…、もしかして、ただの気のせいだったのか？

しかし、一度掴んだチャンスをやすやすと手放すことはできない。そんなことをしてしまえば俺はクラス唯一の男子として、肩身の狭い生活を送ることになりそうな感じがしてならないから。

「いま俺の肩、叩いたよね。俺は三木幸久。よかったら、君の名前、教えてくれないかな？」

できるだけ優しく、丁寧に言葉を選んでいい奴を演出しながら、俺はいまだわたわたとあわてた様子の隣の席の女の子に声をかけていく。

わたわたと、なぜか自分のカバンをあさり始めるお隣さん。どうしたんだ？ 宗教上の理由か？

「あの…、どうかした？」

俺の声が聞こえないかのように無心にカバンをがさがさとあさり、そしてぱっと嬉しそうな顔をしたと思うと、なにかを取り出した。

……。携帯…、電話？

メールでも来ていたのか、急にキーをかたかたと叩き始めたかと思うと、今度はその画面を俺にぐいっと突きつけてきた。見せられたのなら見ないわけにはいかない。

仕方なく、画面に踊る文字に目をやった。

『持田メイ』

持田、メイ？ もちだって…、もしかして名前か？

「もしかして…、名前？」

こくっ こくっ

ああ、なるほど、お隣さんのお名前は持田さんだったわけだな。そうだよな、俺は「み」なんだし、「も」はけっこう近いしな。しかし、なぜに携帯電話？

「…で、持田さん」

『メイ』

「…、メイちゃん」

『メイ』

「…、メイも、家庭科専攻だよな。料理好きか？」

『あんまりやったことない』

「ああ、なるほど、できるようになりたいってことか」

『うん』

なんだかチャットしてるみたいだ。会話に挟まる微妙なタイムラグとかのあたりが。

あと、意外と押しの強い娘なのかもしれない。

『アドレス教えてほしい』

「ん？ メアド？ いいよ」

俺は、カバンから携帯を取り出した。

そして気づく。

「なんだ、もしかして同じ機種じゃない？ おお…、なんかこの機種使ってるやつ少ないんだよね」

こくっ こくっ

なんだかそれだけで仲間のような気がしてくるから不思議である。

いつの時代でもマイノリティは結束するものなのだ。

「ほれ、赤外線」

俺が携帯を差し出すと、メイもおずおずと携帯を出してくる。赤外線を飛ばして通信完了。

すぐにメールが届いた。

『メイです、これからお隣さんだけどよろしくね♪ 仲良くしてほしいな？』

「ああ、よろしく」

しかし、打つの速いな…、確かにこれだけ速けりや会話もできるか。っていうか、今も会話してたか。

『幸久くんはお料理するの?』

「ああ。そうだ、ここで隣になったのもなにかの縁だからさ、調理実習同じ班になろうぜ」

前情報によると、実習は五人で一つの班になるらしい。俺、霧子、志穂、姐さん、メイでちょうど五人になるわけだしちよいどいいだろう。

しかしこの班だと五人のうち霧子と志穂が使い物にならないという状況になるわけで。若干だが、これでいいのか、と思わないこともない。

ちよいどいい、この機会に二人の考えを修正して、料理上手のいいお嫁さんに仕立てあげてやることにしよう。

『いいの? うれしい…』

「いや、あと一人どうしようかと思ってたから、こっちとしても助かってるんだ。お互い様だな」

『あたし、お友だち少ないからどうしようかと思ってたの。誘ってくれて、ありがと』

「それならさ、あとで俺の友だちに紹介するよ。仲良くしてもらえばいい」

『幸久くんも、なかよくしてくれる?』

「当然だ。お隣さんだからな」

少し恥ずかしそうにはにかむメイに、なんとなく心が温かくなるような気がした。

よしよし、無事にお隣さんと仲良くなることができたぞ。しかし、これって俺が一人でしゃべってるみたいに見えないだろうか?

それで変人扱いされたりしたら、ちょっと嫌だな……。

そしてチャイムが鳴って教師が扉を開き、朝のホームルームが始まるのだった。今日はこのあとの始業式が終われば学校も終わりで、

すぐ家に帰れる。

せっかくだから霧子と志穂と、あとメイ、時間が空いてるなら姐さんも家に呼んで、昼飯でもいいっしょに食うとしよう。

そうしたら、みんなの親交もきっともっと深まることだろう。

## 放課後の教室で

「ゆっきいゝ、もう帰っていいんだよね？　はやく帰ろゝ」

始業式もつつがなく終了し、ホームルームもついさつき終わったわけで、まだ昼前ではあるが放課の時間となったのだった。

これから俺はみんなを昼飯に誘って、それから六人分の昼飯を調理しなくてはならない。少なくとも、今日の学校よりも大変な作業になることだろう。

「はやくはやくゝ」

欠伸をしながら隣の席でちょこちょこ動いて荷物をまとめているメイを観察していると、学校が終わってうれしいのだろう、目をらんらんと輝かせた志穂がこっちにやってくる。

その後ろには霧子と姐さんもついてきて、一気に俺の机を囲む人数が倍增するのだった。

「志穂、そんなに急がなくてもいいだろ。なんか姐さんが少し用事があるんだってさ、ちょっとだけ待とうぜ」

「ええゝ、りこたん用事あるの？」

不満そうにそう言った志穂に、姐さんは申し訳なさそうに頭をかいた。

「すまんな皆藤。すぐに済むことなんだが、待てないんなら先に帰っていても構わないぞ」

「そうなんだ……。みんなでいっしょに帰りたいけど…、でももうお腹すいたよ……」

なぜだろう、ただ腹が減ったと言っているだけなのに、こいつが言うと妙に切実な感じがするのは。

「だが俺は待つ。霧子も待つ。どうしてもっていうんなら一人で先に帰ってもいいぞ、好きにしなさい」

「ううゝ、そうだけどゝ…、あ、そだ、きりりん、パン買いに行こ？」



「えと、ごめんね、しいちゃん。あたしはおうちに帰ってからごはん食べるから…、ごめんね？」

「うう…、おうなくさすういたう！」

ついには地団太を踏み始める始末。そんなに腹が減ったのだろうか。「わがまま言うんじゃありません。もう高校生なんだからちよつと我慢するくらい簡単だろ。っていうか、我慢できないなら帰れよ」

「いっしょに帰るもん！　がまんするもん！」

何が気に食わなかったのか、ぷいっ、っとそっぽを向いてしまう志穂だった。

腹が減ったからといって自分勝手なことをしていいわけではないし、八つ当たりはよくないぞ。

「どうしても、お腹すいたか？」

「お腹すいた……」

「もう少し我慢したらいいことあるぞ？」

「いいことってなに？」

「我慢できなくてパンを食うっていうんなら、きっとそれはそんなにいいことじゃなくなると思うな」

「？　　どういうこと？」

俺の話に興味を持ったのか、さっきまでの空腹による不満顔はどこかにいってしまったようで。こう、感情がころころ変わるのは相手をしていて疲れるが、不機嫌が長続きしないのは志穂のいいところだと思う。

「今日な、このあとみんなの都合がよかったら俺が昼飯つくってやろうと思ったんだ。でも、ほら、あれじゃん？　俺の家、素直ない子しか入れないからさ」

「そうなんだ…、それなら、お腹ぺこぺこだけがまんするよ。ゆっきいのご飯、すっごくおいしいし、あたしもだいすきだもん」

「そうか、それじゃあいい子で待てるか？　怒ったり、機嫌悪そうにしないで」

「うん、待ってる」

「もう、俺に八つ当たりしないな？」

「ゆっきい、ごめんね……」

「別にいいよ、気にしてない。あと、姐さんを困らせるようなことも言わないな？」

「いわないよ。りこたん、ごめんね」

「気にするな。私も気にしないことにする」

「よし、いい子だな。これで志穂もうちに來れるぞ」

「んゅ……」

ご褒美の代わりに、髪の毛がくしゃくしゃになるくらいぐしぐしと頭をなでてやる。

いけないことをしたときはすぐにたしなめ、いいことをしたときはすぐに褒めてやるのが、志穂のしつけをするときに一番重要なことだ。

時間をおくと何について叱られているのか褒められているのか分からなくなつて、何の効果もなくなるからな。

「そういうわけだから用事でもなんでも済ませてきちゃってくれよ、姐さん。俺たちはここで待ってるからさ」

「みんなすまん、30分もしないで戻る」

「りこたん、いつてらっしゃい。お土産買ってきてねえ」

「のりちゃん、待ってるよ」

志穂と霧子が大きく手を振って姐さんを見送る。まあ、姐さんのことだ、かかる時間は七掛けくらいと見積もつて、20分つてところだろう。

それまでに、俺は俺でやることやつておかないとな。

「はい、志穂、霧子。注目、こっち注目してね」

「どうしたの幸久君？」

「えっ、なにになに？ ゆっきいどうしたの？」

「いいですかあ、今日は新しいおともだちの紹介をしまあす。静かにしてるように」

「えー、だれだれ？」

案の定、一番に興味深そうに食いついてきたのは志穂だった。そして志穂のようにあからさまにはしないが、霧子もそわそわしているらしいことが分かる。

霧子は友だちがほしいが、自分から話しかけるのは苦手だ。基本的には受け身で待ち構えているタイプなわけで、こんな感じに友だちを紹介されるのはけっこううれしかったりする。

「はい、今日、偶然、俺の隣の席になった持田メイさん、メイです。みんな仲良くしてあげるようにね」

そして、俺の影に隠れるように、すっぽりと俺の後ろに収まっていたメイが出てくるのだった。

『よろしく、おねがいます』

メイはすでにそう打ち込まれているケータイの液晶をぐっ、と突き出す。

「見た通りの無口の恥ずかしがり屋キャラだけど、いじめたりするんじゃないよ。特に志穂、何気ない一言が他人を傷つけてるかもって思いながら日々を過ごすこと。わかったな？」

「はい！」

「霧子は毎日元気でいてくれれば、俺は何も言わない。霧子はいいい子だからな」

「うん、わかったよ」

「…、ねえ、ゆっきい。えこひいきっていうのは人を傷つけないのかな？」

「ああ、少し志穂をひいきしすぎたか…、悪かったな、霧子…、許してくれ……」

「う、うん。平気だよ？ 気にしないで、幸久君」

「うう…、ゆっきい、ひどい……」

「勘違いするな、俺は志穂もかなり大事にしてるぞ。厳しくするのはお前のことが大事だからだ」

「ゆ、ゆっきい……！」

「言わば愛、愛の鞭さ」

「…、あたし、ゆっきいがそこまで考えてくれてるなんて思わなくて…。ごめんね、ゆっきい……」

「いいんだ、志穂。それにペットは飼い初めの時期が大切なんだ。適度に厳しくするのが重要。しかし厳しすぎも厳禁だ。そう、飴と鞭なんだよ、飴と鞭」

そもそのところ、一年ぼっちなんかじゃまともな教育ができるはずがないんだ。教育っていうのは長期的な視点が必要になってくるもので。

「志穂は飲み込みがいいからな、俺としてもいろいろと助かってるんだぞ？」

「そ、そうかな？ えへへ」

「そうだ、志穂はできる子だ」

ちようどいい力を込めて頭を撫でてやる。このように、ときには褒めてやりましょう。厳しさ一辺倒では成長の芽を摘むことになりかねません。

「それでだ、メイ。さっき言ったから覚えてると思うけど、俺は幸久、三木幸久だ」

『うん』

「でだ、このちっちゃいのが皆藤志穂、こっちのポニーテイルが天方霧子、さっき出かけたのが風間紀子だ」

『しほちゃん、きりこちゃん、のりこちゃん？』

「そうだ」

『しほちゃん、きりちゃん、のりちゃん？』

「縮めたければ縮めればいい」

『しほちゃん』

「うん」

『きりちゃん』

「はい」

『おとも、だち？』

「うん、そうだよ」

「よろしくね、メイちゃん」

「おとも、だち…、えへへ……」

「うおっ！ ゆ、ゆっきい…、しゃ、しゃべった、今、しゃべったよ！」

「志穂、そういうの、特に気をつけような？」

「あ、うん。ごめんなさい」

「よくできました」

なでなで。

一年かけてやっとすなおに謝ることを覚えてくれた。これも俺の教育の賜ですよ、奥さん。

「あとは姐さんが戻るまでフリータイム。質疑応答でも何でも自由にどうぞ」

「はいはいはーい！」

「ゆっくりな」

「はーい……」

「元気出して、しいちゃん」

「うん、ありがと、きりりん」

どうやら、特に問題なく新しい友だちを受け入れられたようだった。姐さんが戻ってくるまでもう少しあるし、少しでも話をするといいいよ。

………

「待たせたな」

姐さんは、それから20分もしないで帰ってきた。何の用事だったんだろう、とも思ったが、風紀委員の用事だろうし、一般生徒には話せないようなものだったら悪いし、ここは突っ込まない方がいいかもしれない。

「もう帰ってきたんか、早かったな」

「ああ、思った以上にスムーズに話が進んでな…、おや？ なんだ

か一人増えていないか？」

「目ざといな。実は増えてるんだ。彼女は三木組の新しい構成員の持田メイさんです」

「そうか。持田は確か三木の隣の席だったな」

「ああ。今年も一人で席が離れてるからさ、なんつうか、さみしいじゃん？」

俺には霧子と姐さんと志穂がいるから、他に友だちなんていらん！と豪語できるほど俺は閉じていない。三人は友人として別格かもしれないが、しかしだからといって他の全ての人間関係を放棄することはできないのだ。

自分の席の周りに気軽にしゃべりできるやつがいてほしいし、クラスメイトともやつぱり仲良くなっていきたい。

全員と友人になれるかどうかは分からないが、でもだからといって最初から何もしないということはないのだ。

「そうだな、ふむ。私はてっきり、また三木が不用意に女子に手を出したのかと思ったぞ」

「あれ、俺って姐さんの中だとそんなキャラなの？」

チャライキャラとか、定着させたくないぞ。

「いや、そういうわけではない。ただ、浮いた話などはないが、三木の周りには不思議と女子が多いな、と思ってな」

「そうかな…、確かに男が少ないかもしれないけど」

「現にこのクラスには女子しかいないじゃないか」

「それは…、不可抗力ですよ？」

「本当か？」

「俺に何ができるっていうんだい、姐さん」

「いや、なんというか、魔力のようなもので女子を引きよせ、男子を退けたのかと思ってな」

「残念だけど、俺にはそんな能力はないなあ……」

俺だって、別にクラス替えに介入して自分以外全員が女子というこのクラスを作り上げたわけではないのだ。というか、むしろ男子が

まったくいないクラスというのは、俺の望んだものとは違っているのだから。

趣味の料理が高じて選択授業に家庭科を選んだというだけで、確かに男として家庭科専攻というのは異端かもしれないが、女子目当てでそうしたわけではない。

ただ、行動の結果として女子ばかりのクラスになってしまおうという現実が生じただけなのだ。

「ただそうとしか思えないというだけだ。さすがに三木におかしな力があるとは思っていない。しかし、こうして新しい友を増やすことができるというのは、クラス替えのいいところだな」

「こうして新しい出会いがあるっていうのは、新鮮でいいよな。こっけてっけこう生徒数多いからさ、知ってるやつばかりじゃないってことだな。このクラスにだって、顔見たことすらない奴が半分以上くらいだぜ」

一つの学年に七クラス、それぞれのクラスにおおむね40人ずつの生徒が配当され、さらにそれが三学年あるのだ。単純に計算してしまえば、850人くらいが学生としてこの学園に在籍していることになる。

その中で俺が知っている人数など、本当にたかが知れているというものだ。さらに友人と限定してしまえば、本当に数えるほどしかないだろう。

特に俺は部活にも委員会にも入っていないので、人間関係は非常に狭い方だと言っている。逆にそういうものに所属している人たちは俺よりも広い人間関係を保っているのだろうが。

「…、ああ、そうか。普通はそうだったな」

「へっ？　普通は、ってなに？」

「いや、顔と名前だけだったら、私はそれなりに生徒を把握しているということだ。持田も、顔と名前だけなら前から知っているぞ」

「へえ、メイって有名だったのか？」

俺は寡聞にして知らないが、実は有名な生徒だったのかもしれない。

たとえば部活ですごい活躍してるとか、めっちゃ頭がいいとか、そういうあれで。

あるいはは、女子の間でだけ有名とか？ 女子の噂の情報網とかすごそうな感じがするし、そういう可能性もなくはないだろう。

「いや、風紀委員会で学生の所属情報を把握しているだけだ。何のことはない、彼女は普通の生徒だよ」

「えっ、なに？ 風紀委員ってそんなことまで覚えなないといけないの？」

「いや、私が個人的に覚えているだけだ。知っていて困ることではないからな」

「…、お疲れ様です、姐さん」

この分だと、それなりとか言っていたが、生徒全員の情報を把握しているに違いない。姐さんは、やると言ったらとことんまでやる性質だ。

もしかしたら、今日の用事というのは新入生の情報を把握するためのものだったのかもしれない。あまりに仕事熱心すぎて、突っ込むことすらできなかった。

「ほらほらお嬢ちゃんたち、姐さんのお帰りだよ」

「リコちゃん、おかえり」

「天方に皆藤、待たせて悪かったな、それに持田、これからよろしくな。私は……」

『のりちゃん？』

「ああ、それでいい。よろしくな、持田」

『おともだち？』

「そうだ」

『よろしく、おねがいします』

「ああ」

「よし、全員メイとメアドの交換をしちゃいなさい。それでこれからは常に携帯を携帯すること。メイの基本的なコミュニケーションデバイスは筆談だけど、メールもよく使うみたいらしいな。特に



霧子、携帯を家においてきちゃダメだからな？」

「き、気をつけるなきゃ……！」

「仕方ないな、それじゃあ霧子には携帯を毎朝手渡してやるからな。そうすれば忘れないだろう？」

「うん、そうだね」

どうやらだが、メイは上手くこの面子に馴染んでくれたらしい。友だちというのは、多くて困るものではない。友情は財産だというが、それは本当のことだろう。

「よし、じゃあ帰るか。うちで飯食わせてやるから、付いてこーい！」

「わーい、まってましたー！」

一人でとても盛り上がる志穂。他の三人の盛り上がりはまずまずだが、嫌がっているような感じは見えないし、付き合いで仕方なくみたいのではないだろう。

まあ、予想した通りのリアクションだな。これくらいのテンションのバランスが一番やりやすいんだ。楽しみにされすぎるのも疲れるし、無理に突き合わせるのも何か違う感じがするし、なかなかに難しい。

「幸久君、今日は何をつくるの？」

「今日も人数が多いからってわけじゃないけど、そうだな、中華にするか。あつ、そうだ、ちゃんと家に連絡いれとけよ」

「ああ、そうだな。何も言わずにいては親御さんを心配させてしまうだろう。そういうわけにはいかないからな」

「よし、五分後に出発するから準備するように。遅いやつは置いてかれても文句言わないようにな。親御さんにちゃんと連絡して、昼を外で食っていいか聞くことが参加条件だから、よろしく」

「じゃあ、おねえちゃんにメールしないと」

「私も母に連絡を入れよう。そろそろ昼食の支度を始めてしまうころだからな」

「ゆっつきい、あたしはいつでも行けるよ！」

家に連絡を入れるためにみんながそろって携帯をいじり始める中、志穂が俺の背中に飛び乗ってくる。不意を突かれた形だが、志穂程度の重さに負けるほど軟弱な俺ではない。

しかし、ほんとに軽いな。この身体のどこにあの力が収まっているのか、疑問でならない。

「今朝はきりりんがおぶってもらったからね。帰りはあたしをおんぶだよ」

「どういう理論だ。ったく、小学生じゃあるまいし」

「いいでしょ、ゆっきいにおんぶされるのすき」

「おんぶとか、恥ずかしくないのか、志穂」

「なんで？」

なんで、と来たか……。上等だ、後で恥ずかしくなっても絶対にやめてやらないからな。

「いいだろう、おぶってやる。降ろしてって言っても降ろしてやらないからな」

「ほんと？ やった！ ゆっきい、すき」

首にまわした腕で、まるで俺の頭を抱きしめるようにする志穂。髪に頬ずりするんじゃない。

まあ、なつかれてるんだし、悪い気はしないか。なんだかんだいって志穂もかわいいやつだからな。

「志穂は、連絡しなくていいのか？」

「うん、今日はね、どうじょでごはん食べるはずだったんだけどね、さっき気を送ったからへいき」

「…、へえ、そうなんだ」

「メールだよ、うん」

「よしわかった、それ以上何もいうな。もう連絡できたか、じゃあ行くぞ」

「出発だー！」

俺は、志穂の発言を聞かなかったことにして、出発の号令をかけるのだった。

とりあえず、帰ったら昼飯六人前か。けっこうな量になるだろうし、何とかがんばるしかないな。

まずは広太に連絡だ。買い物して食材をそろえておいてもらわないといけないからな。さて、冷蔵庫の中には何がどれだけあったか…。

## 我が家いいところ、一度はおいで

学校からてくてくと歩くこと20分、大通りを二本横切ってようやくたどり着くそこに、我が家であるところのアパート「サクラ荘」があった。

一階に管理人室と101号と102号の二室、二階に201号から203号までの三室があり、俺たちの部屋はその中の202号。

バストイレ別、洗面台あり、洗濯機用水道あり、ベランダあり、窓は西向き。間取りは2DK、それぞれの個室は四畳半と少々手狭だ。う。キッチンが据え置き式の二口コンロが初期装備としてある。作業台は思っていたよりも広く、シンクは意外としっかりしており、細かな収納スペースも多い。リビングは八畳あり、居住空間として有り余るほどだ。

最寄り駅まで徒歩15分、最寄りバス停まで徒歩10分、商店街まで徒歩5分、最寄りのスーパー「マルトミ」まで徒歩10分。住宅地のご真ん中と言っているくらい、どこからもほどほどに離れている我が家である。

まあ、商店街だけはかなり近いので、生きていく分にそう問題があるわけではなく、その立地条件もあってか、家賃自体も相当安い。自殺があったとか、霊が出るとか、そういう訳あり物件などではないか、と思うくらいに安い。

そんな家に、俺は住んでいるのである。正直、野郎が二人で暮らすにはお洒落すぎるというか、こう、もったいない感じがそこはかとなく漂っているのだ。

俺はそういうアパートの賃料事情などに疎いので、精確なところこの物件がどれほど安いのかということは分からないのだが、やはりかなり安いのではないだろうか。

広太なんかは、大家が昔々に三木の世話になっていたとかなんだか

で、さらに俺のことも昔から知っているらしく、そういう義理と人情的な人間関係が絡み合った結果、少し安くしてくれているのでは、ということだった。

しかし残念ながら俺にとっては大家のおっさんは、結局ただの近所のおっさんでしかなく、昔ちよつと世話になったかもしれないけど、特別に思っていることはないのだ。

おっさんは、やはり大家のおっさんなのである。

あとうちの近所には庄司の実家と霧子の家がある。霧子の家は徒歩20歩、庄司の実家は徒歩50歩ほどだろうか、どちらにしてもめちゃめちゃ近い。

現についさっき、庄司の実家の前も霧子の家の前も通過してきたところだ。

横目に確かめた感じ、晴子さんのいつも乗っている原付バイク（白いボディがかわいい。特徴はオイルタンクのイニシャルのステッカー）がなかったので、おそらくまだ大学から戻っていないのだろう。雪美さんが一人で昼飯か、と思うと、少しだけ心配だった。

まあ、今はそれはいいとして、だ。

そうしてたどり着いたアパートの階段を五人で、俺を先頭に置いた縦隊を組んで昇っていく。二人も三人も横に並んで通れるほど、うちのアパートの階段は手広く作られてはいないのである。

一番階段側の一室をスルーして、その隣の部屋の扉に俺はポケットから取り出したルームキーを差し込み、そして鍵をあける。

「おかえりなさいませ、幸久様。食材の準備は済んでおります」

「ああ、さんきゅ広太」

アパートのドアを開けるとそこでは広太が待ちかまえていた。また階段を昇ってくる音で俺が帰ってきたことを察知したんだろう。

いつも言っていることなのだが、一向に出迎えを止めそうな気配なんて感じられない。執事も主もない、と昔から言っているのだが、どうも伝わっていないようだ。

「僭越ながら、今日はいつもより一人分多いように思われたのです

が……」

「そうなんだ、これからは一人分多くなりそうだからよろしく頼むな」

「仰せの通りにいたします」

「悪いな、面倒かけて」

「格別のご配慮、痛み入ります。ですが、幸久様の言いつけに従うことは、面倒ではありませんので」

「そうか、それならいい」

まあ、広太がいいっていうなら、別にいいんだけどな。

「なあ、広太、俺の部屋…、っていうか全部の部屋に鍵かけたか？」

「既に施錠済みでございます」

「そうか、それは助かる」

「もったいないお言葉です」

「よし、じゃあ入ってもらうからな。そこで第一波を止めろ」

「了解しました、ダイニングにお通しします」

普通だったなら、ここまで過敏になる必要などまったくないだろう。

しかし志穂だけは、残念ながら普通とか、常識とかいう枠の中におとなしく収まってくれる存在ではないのだ。

あいつは好奇心が旺盛過ぎるので前回来たときも前々回来たときも、ドアというドアを全て開け放った。他所様の家にお邪魔して、ドアを全て開け放っていくなんて、そんな無礼が許されるだろうか。いや、許されまい。

まあ、我が家は基本的に広太が命をかけて掃除をし、整理整頓という行為の可能性の開拓に余念がないのでただ開けられるだけなら実害はない。

しかし、それだからといってそんなことをしていいわけではないし、それ以上に俺の部屋のガサ入れなんてしていいわけがない。

教訓と経験則を生かすことは、賢く生きていく上で非常に重要なことだ。もう二度とガサ入れなどという無法が許されてはならないのだ。そしてその日から、我が家には全部屋に鍵が装備された。

志穂がうちにくるとき以外は特に使われることもない、ある意味では無用の長物でしかないのだが、しかし志穂が我が家に訪れるときにはなくてはならない重要な装備なのだ。

まあ、さすがに鍵を壊してまで開けようとは思えないよな。…、しないよな？

「悪かったな、入っていいぞ」

「ゆっきいゆっきい、またえっちな本かくしてたの？」

「…、志穂、別に飯食わずに帰ってもらってもいいんだぞ？　俺はそれでもかまわないし、それでもいいか？」

「ゆっきいがえっちな本なんてもってるのがいけないの！　そんなの持ってちゃダメなんだから！」

「よし、帰れ。お前は今すぐ家に帰りなさい！」

「やゝだゝ、ゆっきいのごはん食べるのゝ！」

「じゃあおとなしくしてるんだな。開けようとしたら、飯食わせてやらないからな」

「うゆ…、わかったよ……」

「あとな、うちの全てのドアに鍵を取りつけたからな、絶対無理矢理開けようとするんじゃないぞ」

「そ、そんなことしないよ…、幸久君……」

「そうだぞ三木。押し込み強盗ではないんだからな」

「志穂に言ってるんだからな。お前は、家の中のものに触るな。壊しかねんからな」

「でもあのとき、きりりんもりこたんもいっしょにやってたもん。べつにあたしだけが悪いんじゃないもん」

仮にそうだとしても、間違はなく一番悪い主犯格は志穂なのだ。そもそも最初にやりはじめて、けっきょく全員を巻き込んだのは志穂だったからな。

しかも俺が料理から手が離せないときを狙って、俺が手を出しに行けないとわかっているときに、だ。

そういえば、そのとき広太はいったい何をしていたんだろうか。あ

いつならちゃんと止めるはずなんだが……。

もしかして、いっしょになって家探ししてたなんてこと、ないよな？

「そういうわけで志穂。俺か、広太でもいいけど、無断で他の部屋に入ったら一週間一切遊んでやらん。あと、何か物を壊しても同じだからな、気をつけて生きろよ」

「ええ、ひどい。ゆっきいのいじわるう」

志穂が不満そうに口をとがらせるが、そんな顔をしてもらえばかりはだめなわけである。

この世にはどうしても許可できないことがあるのだ。

「そういうわけでまずは志穂だけ先に入れ。中で広太が待ってるから通してもらって、おとなしく待ってろ」

「はぁい……」

志穂が開いたままにしてある扉をくぐって、部屋の中へと入っていく。脱ぎ散らかした靴が飛んできて俺の脚に二つとも当たった。絶対に狙って飛ばしやがった。

「いらっしやいませ、志穂様。お待ちしておりました」

「こうたん、こんにちわ」

「はい、こんにちわ。お荷物をお預かりします。こちらにどうぞ」

「はーい」

志穂が廊下の向こうのダイニングに消えると、アパートの廊下が一気に静かになった。どう考えても志穂ばかりじゃべりすぎだったな、うん。

「メイ、いるか？」

俺が呼ぶと、姐さんの肩口のあたりに弱々しく揺れる携帯のバックライトを発見。

教室で見たときよりもずっと弱った感じになっていた。

「大丈夫か、メイ？」

やはりこういうのは苦手だったのだろうか。人付き合いとか得意なタイプではないと思っていたが、一発目から家に呼んで、というのは、やはりハードルが高すぎたのかもしれない。



俺としては仲良くなるために呼んだのだが、しかしその結果として負担をかけてしまうのならば、それはこちらの本意ではない。

もしそうなのだとしたら、今さら取りやめにすることはできないが、次からはもう少しソフトなアプローチを取っていくように気をつけないといけないな。

『平気。おともだちの家に来るのは初めてだから、ちょっと緊張してるだけ』

キータツチも、どことなくだが小刻みに震えているような気がする。志穂も姐さんも、こういうところで物怖じするタイプじゃなかったからな…、小さいころの霧子に接するように接するようにしよう。あの、一番弱かったときの霧子のように。

「別にそんなに緊張なんかしないでいいんだぞ？」

「そうだぞ、持田。普通だったら男の家に誘われて、それについて行くなどということはよくないことなのだが、三木たちに限ってはなんの問題もないからな。なんと言っても紳士だからな」

「そうだよ、なんにもないからだいじよぶだよ。幸久君はね、やさしくてお料理も上手なんだよ」

『そうなの？』

「だが気をつけるに越したことはない」

メイの両肩に手を置き、マジな顔で愉快なことを言い始める姐さん。もしかしても、姐さんはここまで来ておきながら飯を食わずに帰りたいんだろうか？

さらにメイはそれをある程度真に受けたようで、こちらにちらちらと視線を送りながら、少しだけ腰が引けている。

なんてことを言うんだ。もしも誤解されてこれから避けられるようになったらどうしてくれるつもりなんだ。

「姐さん、なにが言いたいのかはあえて不問にするけど、そういう不穏当なことを言っちゃう人に食わせる飯はないですよ？」

「もちろん悪い意味などではない。私としてはどちらかというと褒めているつもりだがな。もしも侮辱したと思われているのならば、

それは心外だ」

「あたしはね、幸久君は自分からそういうことはしないと思うの。なんていうか、偶然とか、なの」

「霧子は話をややこしくしない。変なこと言わないの」

「にゅ…、ごめんね……」

「とりあえず…、そろそろ志穂がなんとかなってる頃だろ。三人とももう入っていいぞ。さっき志穂にも言ったけど、ドアとか鍵とか開けないようにな」

「しない、っていうか、できないよ……」

「できないならそれでいい。問題は、出来る出来ないにかかわらず、それをしないことだ」

「にゅん、分かったよ」

「分かったなら、入って良し」

「おじゃまします」

「邪魔するぞ」

『おじゃまします』

ふう、これでなんとか全員収容できたか。なんでこんなに時間がかかるって、俺が無駄なことに気を回し過ぎるからのような気がする。まあ、あれだ。まだ早い時間だし、隣人が出てきたりしなくてよかったわ。もしも出てこられて、あまつさえ絡まれたりしたらめんどくさい人だからな。

ここは黙って夕方まで寝ていてくれて正解だ。

さあ、俺は料理だ。得意分野だからな、気合入れて行くぜ。

………

さて、五人も人間がいるというのに、ダイニングは思っていた以上に静かだった。いつもだったら志穂が騒いでいるのを霧子と姐さんがなんとか収めているのを広太が静観、俺が傍観って感じだから、この状況はやっぱり新鮮だった。

志穂はグラスを両手で抱えるように持ってソファに座り、ストローで大好きなオレンジジュースをちゅうちゅう飲んでいゝる。まるで人形のようにおとなしくしているのだが、オレンジジュースをやっておけばそうやって静かにしてくれゝることに最近気づいた。好きだとは言っていたが、まさかそんなに好きだとはな。まったく想像の外だぜ。

志穂は黙ってゐればけっこうかわいいが、いかんせんまだ少し落着きがない。普通にしているても常にお行儀よくしてゐられ、人前に出せるようになるまではまだまだ遠いだろう。

その横で霧子と姐さんはメイへの質問タイムを続けている。こういうことに食いつくあたり、霧子も姐さんもやっぱり女の子なんだなあ、と実感させられる。

メイは相変わらずディスプレイの文字で会話している。どうして普通に話をしないでそうしているのかはまだ知らないが、いつかそのわけを聞くことができるばいと思う。

ちなみに、広太は部屋の中でも特に目立たない、家具の影になるあたりに控えている。有能な執事は主にとって優れた家家具を有しているのと同じであるというが、こういう様子を見ると本当にそうなんだな、と思う。まあ、料理のことだけは別だけだな。

いや、それとも、執事というのはそもそも料理をしないものなのだろうか？

さて、そろそろ細かいことは置いておいて、志穂が騒ぎ始める前に料理に取り掛からなくては。今日は中華な気分だから中華なのだ。広太も飯ぐらいならまともに炊けるので、すでに飯は大量に炊けている。

志穂の空腹具合が分からず、どれだけ食べるか分からなかったので、今回は保険をかけて六合炊いてある。もしもこれで足りなくなるんだったら、そのときはもう知らん。

メニューは麻婆豆腐、かに玉、炒飯。あとは卵のスープでもつくるか。ちなみに、かき卵のスープは中華料理の中でも霧子の好物だ。

霧子は辛い物があまり得意ではないので、今日の麻婆はマイルドタイプで。メイの好みもまだ今一つ分かってないし、ここは無難に行くのが正道だろう。

どちらかというと辛いのが好きな志穂とか姐さんは、きっと勝手にラー油でも足すだろ。弱い味を後から強めることはできるが、強い味を後から弱めることは難しいのだ。

まずはスープのための水を張った中鍋を火にかけてから、その間に色々な下拵えを始めよう。

まずは必要な調味料を食品庫から調達してきて、作業台の一角にまとめておき、それからニンニクとかしょうがとかネギとかを切る。大量に切る。

卵を溶いて、肉を切って、軽く下味をつけておく。

中華鍋を火にかけて、溶き卵が浮くくらいの油を投入。卵を流し入れ、軽く混ぜつつ火を通して鍋からあげる。

次いでその鍋にほんの少しだけ油を足し、ニンニクを炒め、チャーシューを炒める。さらに飯をお釜の半分より少し多く入れて、手早くバラけさせる。

そこにさっき鍋からあげた炒り卵を合わせ、味を見つつオイスターソースとか塩コショウとかを足して味を整えて炒飯が完成。

同時進行でつくっていたスープのほうにもガラスープ、塩コショウ、ごま油で味付けし、溶いた片栗粉でとろみをつけてから溶き卵を流して完成。流した卵が、まるで花を咲かせるようにフワツ、と広がる。

四合ほどの量をつくった炒飯は、二つ用意した大皿にほぼ均等に分けてしまう。

一つは真ん中に置いて皿で、もう一つは志穂の皿だ。

この二つを分けないと皆で仲良く食事できない。

あとは志穂の腹を少しでも埋めておかないといけないっていうものがある。そうしないと、このあとの大皿の料理を安心して出すことができないのだ。

スープは一人ずつにとりわけ、残りは中鍋に残しておく。

「広太、運んでくれ」

「承知しました」

俺に呼ばれた瞬間には、広太はすでにキッチンの入口まで来ていて、作業台に並べられた皿たちを手早くダイニングテーブルへと運んでいく。

「残りもすぐにつくっちゃうから、炒飯でも食いながらもう少しだけ待っててくれ。志穂にはそれ一皿やるからな、静かに待ってるよ」

「うんわかったよ、ゆっさい」

「ゆっ：くり、食うんだぞ、志穂」

「は～い」

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

「先にいただきます」

『いただきます』

「メイ、食事中は携帯しまう」

『は～い』

さて、さっさと続きを仕上げないと、俺の食う分がなくなりかねないな。できるだけ急ぐとするか。

それから、俺は残りの二品を可及的速やかに仕上げて、食事の席に加わることができた。スープ鍋をどけて二口でつくったのもあって、思ったよりも早くつくり終わることができたのは、うれしい誤算だ。そして俺が食事を始めるのを物陰で気配を消して待っていた広太も、同じタイミングで食事に加わってくる。なんでも、執事が主と食事の席を同じくすることもそもそもならばおかしいのだから、これくらいは守らせてもらうんだとかなんとか、言っていたっけか。

冷めたらおいしくなくなるし、先に食っても俺は全然構わないんだけどなあ……。なんというか：、どうしても頭の堅いやつだ。

それじゃまあ、俺もいただきますか。

## 君が師匠で弟子が俺で

「にゃー、ごちそうさまでした」

他の面々が食事を終え、おしゃべりタイムに移行してからも、最後の最後まで食い続けていた志穂がようやく箸を置いたことによって、昼飯会は晴れて終了の運びと相成った。もしかしたら残ってしまった、今日の夕食も残り物の中華になるのではないか、あるいはお隣にお裾分けにでも行かなくてはならないかと思うほどつくった料理だったが、まるでイナゴの大群のような大活躍を果たした志穂によって飯一粒、肉一切れ、スープ一滴たりとも残りはしなかった。

おかしいな…、十人前はつくったつもりだったんだけど……。どうして俺の前に、ただきれいに空になっている皿だけがいくつも並んでいるのだろうか。こいつの体には、食いすぎという言葉はないのだろうか。

まあしかし、実質志穂が食ったのは四人前くらいのものか……。常識的に考えれば小柄な女の子が一人で食べる量などではあり得ないのだが、だがしかし、そこは志穂である。これくらいの量は日常茶飯事、というものだ。

「志穂、いつも思うことなんだが、そんなに食って体は大丈夫なのか？ あんまり食いすぎると太るぞ、っていうかここまでくると体を壊すぞ」

「そうだな、私もそれは常々思っていた。皆藤、教えてくれないか、そうやって大量に摂取した食べ物はいったいどうやって消費しているんだ。どれだけ運動すれば、あれだけ食べて平気な顔をしている」

「いわれてみれば、そうだよな。しいちゃんは不思議だなあ。あたしの何倍も何倍もご飯食べてるのに、どうしてぜんぜん太らないんだろうね？」

『そんなに食べたなら、きもちわるくなっちゃう』

自分でもそんなに考えたことがあるわけではないのだろう、全員から一斉にそんなに食べてはおかしいと言われて初めて、それについてうーんと深く悩みこむ志穂。姐さんのように毎日厳しいトレーニングを積んでいるようにも見えず、だからといって決して、霧子のようにあまり量を食べないというわけではない。

この世界にはエネルギー保存の法則という物がある。摂取したエネルギーは、ブラックホールに吸い込まれるのでもない限りどこかしらに向けて発散されなくてはならないのだ。過剰に発散している姐さんは別だが、ふつうは日常生活を送っていくことで消費していく。しかし志穂の得ているエネルギーは、決して日常生活だけで使いきれ程度の量ではないのだ。

使いきれないならば、それは脂肪とか肉とかになって体に蓄積していくはずなのに、しかしそんな様子が見られるというわけでもない。俺の料理は、果たしてドコに消えてしまったのだろうか。もしかして本当に志穂の体の中にはブラックホールがあって、その中へと吸い込まれているというのだろうか。

だからこいつの食いはまさに「消費しているよう」としか言いようがないのだ。

「別に、平気だよ?」

「いや、平気ってことはないだろ。お前、あれだけ俺の飯食ったんだぞ」

「志穂様が食べすぎてしまうのは、ひとえに幸久様のつくられるお料理が美味し過ぎるからではないでしょうか。そういうことならば、食べ過ぎてしまうことも仕方のないことではございませんか」

「そうかも、ゆっきいのお料理はすごいおいしいからだいすき。ママがつくってくれたのを食べるときよりも、もしかしたらいっぱい食べてるかもだよ」

食後のオレンジジュースをちゅうちゅう吸いながら、志穂はなんにも考えていないような顔でそう言った。

「いや、そう言ってくれるのは俺としちゃうれしいことなんだけさ、なんでそんだけ食って平気なのかっていうことについてはなんにも分かってねえんだからな？」

『もしかして、すっごくいっぱい運動してるとか？』

「ええ、そんなにはしてないよ。運動はしてるけど、してるっていつても一時間とかほんのちょっとだけだしなく。しかも走ったりするわけじゃないし」

「じゃあなんだ、お前はなにもしなくてもこんだけ食った料理のエネルギーを全部消費しきってるってことなのか？　ぜんぜん太ったりしないのか？　生きてるだけで？」

「ん、そういうことになるのかな？」

「なんなんだ、お前は。溶鉱炉とか原子炉とか、ブラックホールとかの類なのか」

もしくは、その小さい体の中に大喰らいのなにかをたくさん飼っているとか、そういうオカルトじみたことを言い始めるつもりなのだろうか。いや、もしもそんなことを言われたとして、少しは信じてしまいたいような気がするのも事実なのだが。

「だから志穂に飯を食わせると疲れるんだよ……。こう、いくらつくっても無駄、みたいなの？」

「でも、ゆっきいのごはんはおいしいよね」

「もしかして、小さなときから料理をしていたのか？　お母様に教わったとか、そういう経験があるからなのか？」

『あつ、あたしも気になるかも』

志穂がどうしてこれだけの量食えるのかから、どうやって志穂にこれだけの量を食わせることができるのかということに疑問がシフトしたのか、ここで霧子以外の三人から一様に疑問が出されるのだった。それは応えてしまえば非常に簡単なことで、それほどの言葉を重ねずとも全員から理解を得ることができるだろうことは明らかだった。

「ああ、それはな」



「あのね、幸久くんはね、昔からうちのおねえちゃんに料理を習ってるんだよ」

しかし俺が応えるより早く、その疑問には霧子が、どうしてか自慢げに応えてくれた。

『きりちゃんの、おねえさん？』

「うん、おねえちゃんも料理がすごい上手なの。幸久くんよりも上手なんだよ、ほんとだよ」

「えー、ゆっきいよりもうまいなんてウソだろ。だってゆっきいはあたしが知ってるなかでいちばんおいしいごはんつくるんだもん」

「ほ、ほんとだよ？ ウソじゃないよ？」

「そうか、それはすごいな。天方の姉君は、たとえば料理研究家だとかシェフだとか、そういうことを仕事にしている人なのか？」

「そういうのじゃないって。晴子さんは、ああ、霧子の姉ちゃんは大学生だよ。それに料理が俺よりも上手っていうのは仕方ないことだ。晴子さんは俺が個人的に料理を教わってる師匠なんだからこればかりはどうしようもないだろ。弟子が師匠を超えるのは、なかなか出来ることじゃないからな」

『師匠なの？ すごいね』

「そうだ、晴子さんは俺にとって師匠で、俺は晴子さんにとって弟子だ。あと、弟子と書いて遊び道具と読む存在だ

でもある。ペットと飼い主とも言うかもしれない」

晴子さんの料理はすごく上手い。だからこそ俺は師匠と弟子なんていう時代遅れな言葉を使ってまで晴子さんに教えを乞うているわけだ。

まあ、弟子になったからって遊び道具にされるとまでは思っていなかったが、これも晴子さんののでしでいるために必要なことだとあきらめるのが吉だ。

それに、晴子さんは基本的には俺のことをよく考えてくれてるわけだし、別に少しおもちやにされるくらいは受け入れるのも悪くない。むしろ俺にとってはうれしいことの方が多いくらいだ。

「ゆつきいはどうしてししょーのでしよーになったの？ あかね、あたしはししょーにつかまってどーじょーにつれていかれたんだよ」

「へ、へえ……」

『そのお話、聞きたい』

「いや、別にいいけどさ、たいして楽しい話じゃないなあ…、ああ、広太、今からあんまりかつこよくない話するからさ、ショックを受けて幻滅とかしたくなかったら席外した方がいいぞ」

「どのような話をなさるにしても、幸久様への忠誠の心は変わりません。しかし、聞くなどおっしゃるならば私は洗い物をしましょう。洗い物をしていれば話が聞こえることもありませんでしようし」

「じゃあそうしてくれ」

「仰せのままに」

まあ広太は、詳しい話は知らないかもしれないけど、大まかにどういう経緯で俺が晴子さんの弟子になったかは知っているはずだし、別に聞かれたとしても問題があるわけではないのだが。

広太がキッチンに入り、袖をまくってスポンジを手を取った。話をするならばさっさと話してしまうのがいいだろう。こういう場合において、大切になってくるのは勢いなのだから。

「じゃあ聞きたいやつだけ聞いてればいいからな……」

………

俺が晴子さんに料理をならい始めたのは、忘れもしないあの日、小学校の三年の夏のころだった。

比較的小賢しいクソガキだった俺は、そのころにはとくに、理由までは教えてもらっていないので分からないが、自分の両親がすでに死んでいていないということに、うっすらではあるものの、気づいていた。そして、自分のことを庄司の家に住まわせてもらっている厄介ものだ、とも思っていた。

確かに、おじさんもおばさんも、それこそ本当の子供として俺のこ

とを世話してくれていた。しかしそこには、間違い無く最後の一線とでも呼ぶべきものが引かれていて、それ故に、俺はそこによそよそしさを感じていたのかもしれない。

特にそう思わせたのは広太の存在だったわけなんだが、あいつは昔からあんなしゃべり方で、当時の俺にはよそよそしく感じられることこのうえなかったわけだ。

実際には俺が厄介ものだったわけじゃなくて、おじさんに言わせれば、仕えるものとしての分をわきまえていただけということになるんだろうけど、そんな機微を的確に捉えられる小学生では、さすがになかった。

そんなわけで、おじさんとおばさん、というか庄司の家に迷惑をかけまくってるんだ、と思いこんでいたのだ。そしてさらにまずいことに、当時の俺は自分のことを一人前の人間だと信じて疑っていなかった。

一人前の人間が迷惑をかけっぱなしではいけないなどと、愚かしくも思ったんだろう。俺はなんとかして恩の一部だけでも返せたいいなと考え、そのときちょうどおじさんの誕生日が訪れた。でもただプレゼントを渡すだけじゃ芸がないし、そうだ、誕生日ケーキをつくってみよう。

もちろんだが、そんなことを考えたのにはちゃんと理由がある。残念ながら俺は、理由もなしにそんなことを思いつくほどイマジネーションに溢れたガキではなかったわけで、ヒントがあるのだ。庄司の家では、誕生日とかクリスマスとか、なにかイベントがあるたびにおばさんがケーキをつくっていたのである。

おばさんはとても料理が得意な人で、いつも簡単そうにヒョイヒョイとケーキをつくっていた。だから、そんなに簡単につくれるものなら、とケーキくらい俺にも難なくつくれるに違いないと高をくくっていたわけだ。

昔から小器用で、何事も人並み以上にこなすことができた俺はその年代特有の思い上がりの万能感に酔っていて、故に俺は根拠のない

自信に包まれていたわけである。

しかし、さすがに自分がつくっているところを見られてしまつては、褒めてはもらえるかもしれないが、誰もびっくりしない。そこでどうしたものかと悩んだ俺は、その頃からよくいっしょに遊んでいた霧子にその話をしてみたところ、おねえちゃん、つまりは当時まだ中学生くらいの晴子さんに聞いてみてくれると言った。

そして霧子を介して訪ねていった俺のお願い、どう考えても面倒で引き受けるのが馬鹿らしいようなお願いを二つ返事で引き受けてくれた晴子さんは、いま思えば完全に面白がつていたんだと思う。そして俺ができれば一人でつくりたいと言うと、晴子さんはペラペラのレシピを、本当に最低限のことしか書いていないレシピを一枚だけ渡してくれた。

しかしまあ、そんなガキが調子に乗ってつくった料理が成功するほど世界は優しくない。レシピ通りに一分の隙もなく（と子どもなりに思い込んで）つくったはずなのにケーキは上手くいかなかった。これは俺にとって初めての敗北だった。しかも、そもそもなんで上手いかわからないのかが分からないという、言うならば完全敗北だ。

美味しいケーキが食べられると思って楽しみに待っていた霧子も、のすごくがっかりしていた様子は、今でも頭の片隅に残っている。あそこまでがっかりされたのは今も昔もあの一度だけだ。そして霧子にもものすごく落ち込まれた俺だったのだが、それと同じくらいに、いや、それ以上に落ち込んでいた。

晴子さんはそんなベコベコにへこんでいる俺たちの様子を一通り笑ったあと、俺のケーキづくりを手伝ってくれた。なんということはない、晴子さんが手伝ってくれるとケーキはいとも簡単に成功した。さっきと同じことを同じようにしかしていないはずのケーキは、なぜかさっきとはまるで違ってきれいに膨らんでいた。

そして、晴子さんはまだ小さかった俺を見下して、鼻で笑いながらこう言った。

「ふん、まだまだだね。悔しかったらおねえさんに、お料理教えてく

ださいってお願いしなさい。見所はあるみたいだから、教えてあげないこともないわ。どうするかしら？」

「よろしくおねがいします」

俺はまだまだガキで単純に料理なんかで敗けたまままでののがイヤだった。負けず嫌いの性格はガキの頃からの筋金入りだ。

「じゃああたしが師匠であなたが弟子。あたしのことは師匠、または晴子さんと呼ぶこと。あんた、名前は？」

「幸久、三木幸久」

「ああ、近くに住んでる庄司さん家の子ね。そういえば霧子のお友だちですっごい可愛がつてる子がいるって母さんが言ってたけど、ああ、あんたがそう、と。いいわ幸久、これから暇があったらうちに来なさい。いろいろ教えてあげるわ。ただし一つ、条件があるわ」

「条…、件？」

「条件っていうのは約束ってことよ。分かるわよね、約束」

「分かる」

「賢い子ね。だいじよぶ、すっごく簡単なことよ。しかもたったの一つだけなんだから。お姉ちゃんの言うことに絶対に聞くの、いいわね」

「分かった」

「返事はい」

「はい！」

実のところ、俺はそのとき「絶対」という言葉の持っている意味、というかその強度についてよく分かっていた。これから、俺は晴子さんによってマンガみたいなぶっちゃけありえない特訓をさせられることになるんだが、このときはそんなことになるなんて、思いすらなかった。

いま思うに、晴子さんの性格を考えれば、当時、将来自分が楽をするためのお料理マシーンを作っている気分だったんだろうし、あとは手頃なオモチャが欲しかったとか、そういうのに違いない。

まあその結果として、俺は晴子さんのスパルタ特訓を乗りこえて今

に至るわけだし、技量もそれなりに身に付きつつあるわけで、ここで感謝こそすれ、恨み言をいうのは筋違いというものだ。それに姉代わりとしてたいそう世話かけたのも事実だし、俺は晴子さんには今になっても頭が上がらないというわけなのだ。

## 解錠・侵入・対応

「ってことなんだ、けど、おい、志穂…、お前、話も聞かないでなにしているんだ」

「えっ？」

してほしいと求められたからこそ、俺は特に面白くもない、どちらかというところ己の無様をさらすような話を、恥を忍んでしているというのに、どうしたことだろう、俺の目の前に座っていたはずの志穂がいつの間にやらいなくなっていた。

まさか勝手に立ち歩いてドアを破壊しようとしているのではあるまいか、と急いで周囲を見回すが、しかしその姿を見出すことはそこまで難しいことではなかった。志穂は、俺に背を向けるようにすぐそこにあるドア、つまり俺の自室のドアの前に座り込んで、何かをしていた。いや、何をしているのか、ということはすぐに分かったのだが。

志穂は俺の自室のドアの前に座り込んで、どこからか調達してきたらしい針金二本を折り曲げ、狭い鍵穴の上と下に差しこんでガチャガチャと鳴らしている。なにをしているんだろうなあ、と小首を傾げて見守っていることができるほど、それは微笑ましい行為ではなかった。

錠の落ちているドアに対して、鍵穴の中に針金のような細くて硬いものを差し込み、本来の鍵を用いずに解錠する技術。人はそれをピッキングと呼ぶ。

まさかこいつそんな針金（おそらくヘアピンか何かだと思われる）で、俺が少ない生活費を切りつめて、なんとか鍵をつけた扉を開けるつもりなのか？　開けるなよ、とあれだけ念を押して言ったのに、俺の言葉をあえて無視してまで開けるつもりなのか？

「開けるなよ！」というのは、決して「開けろ」という振りではない。俺だって、伊達や酔狂でドアに鍵をつけたわけではないのだ。

本当に開けないでほしいなあ、と思っているからこそ、わざわざ大仰に鍵などつけたというのに、こいつはそれが分からないのだろうか。人の行動からその心情を察するという、人付き合いの基礎的技術が、こいつにはまるで備わっていないというのか。

当然だが、俺にだってプライバシーというものがある。

人が生活をする、その生活の場にはその人間の精神的な傾向が顕現するものだ。その人間がどのようなことを考えて毎日を過ごしているのか、とか何が好きで何が嫌いなのか、とか、そういう普段外では繕われて見えないラフな姿が見えてくる。完全に素のままで生きている人間なんて、滅多にいるものではないのだから。

それを見られるのは、やはり恥ずかしい。見られたくないからこそ、外では繕っているのだ。そんなもの、あえて暴き立てられたくはない。隠す、という言葉の意味をよく考えればすぐにわかることだ。

しかし、まあ、あれだ。ピッキングなんて冗談ではないと思う反面、そんなことではいはい開くわけがないだろう、と思っている自分もいるわけだ。そんな素人考えで開くことができるほど、技術大国日本の錠前は甘くないだろう。確かに、安いのでもいいかな、と多少日和った感はあるが、しかしだからといってメイドインジャパンである。世界に誇る日本の工業力は、値段の多寡などによって左右されるものではないのだ。

それから何秒か、鍵穴からはカチャカチャという音が続いた。そろそろ諦めてもよさそうなのに、一向にそうする気配がない。いや、開けることを諦めていないというか、むしろああやってガチャガチャさせること自体が面白くなってきているのかもしれない。

「あっ、開いた」

しかし、いつまでもそんなことをされていては鍵穴がダメになってしまうかもしれない、と思った俺はいい加減に止めることにした。だが「おいおいそろそろ止めてくれよそんなことで開くわけがないだろう」と声をかけようと思った瞬間、今まで鳴っていた音とはどことなく違う、カチャン、という軽い音が俺の耳に届いた。それに



続くように志穂の言葉が届く。そして志穂の小さな手がノブにかかり、ひねると俺の部屋の扉がゆっくりと開いていく。

「えっ、あれ…、えっ？」

そしてなんの躊躇もなく、志穂はまるで自分の部屋に入るような気軽な足取りで俺の部屋へと足を踏み入れていく。開けるなど言われていた鍵を開けたことへの罪悪感も、他人の私室に侵入することへの後ろめたさも、何も感じさせない。それはあまりに自然な動作で、自然すぎる動作で、俺はその違和感に気づくまでにしばらくの時間を要した。

「お、おいっ！ ちょっと待て！」

なんとか動揺を振り払い、俺は動く。だがしかし、時すでに遅し、なんとか椅子から腰を浮かせただけの俺の目の前で、あざ笑うかのように扉はゆっくりと閉まっていく。そして中から錠が落とされ、開いたときは逆に重い、ガチャリ、という音が鳴った。

すぐに何が起こったのかは理解した。これからどうしたらいいかもすぐに理解した。しかし一瞬だけ、確かに俺は頭の中が真っ白になった。一瞬くらいは、真っ白になりたかった。

「…、広太！ 鍵だ、鍵持ってこい！」

「どうなさいましたか、幸久様。あまり声を荒げるのは感心しません」

水道をキュッと締め、手を布巾でふきふき台所から出てくる広太は、おそらく何も見ていなかったのだろう、冷静にそんなことを言ってくる。普通の状況ならまさに正論なのだが、今は緊急事態なわけでそれを聞き入れる余裕はない。

「志穂だ。志穂が俺の部屋に入って中から鍵をかけた。すぐに開けるぞ！」

前回の大変な事態が脳裏をよぎり、少しだけ声が震える。あんなことは二度とさせてはいけない。完全にしっちゃんかめっちゃかにされた部屋の片づけは、思っている以上に骨が折れるのだ。

俺の話を聞きながら腕を前で組み、顎に右手を当てながら思案顔の

広太。昔、何かの本でそんな感じの恰好をしながら謎を解く探偵がいたような気がする。しかし、そんな余裕を見せている場合ではない。

「鍵をかけたことが裏目に出ましたね……。まさかピッキングで解錠されるとは考えていませんでした…。申し訳ありません幸久様、私の落ち度です」

「今は誰が悪いとかそういうことを言ってるときじゃない。広太、とりあえずすぐに鍵を持ってこい。俺はそれまで何とかできないかいろいろ試す」

「幸久様、もしかしたら窓伝いにお部屋まで行くことができるかもしれない。ですが窓が開いていないとどうにもなりませんし、危険ですのでお勧めはしません」

広太はそう言い残すとダッシュでいつも鍵をしまっているところまで走った。部屋の中で、常に優雅に振る舞うことが求められる執事であるところの広太が走るというのは、実際、滅多にあることではない。つまり今はそれだけの緊急事態だということなのだが。

しかしあそこにはいろいろな鍵が束になっておいてあるので、目的の鍵を見つけ出すのは少し骨だ。そしてそれ以前に、その鍵自体が嚴重に仕舞い込まれているので、広太が分かりやすいようにラベリングしているが、それでも持ってくるまでに多少の時間がかかる。危険を冒すことは、当然あまり良いことではない。しかしそれも時と場合によるだろう。今、志穂が俺の部屋をひっくり返そうとしている今、そんなことを言っている場合ではない。行くしかない。少しでも思いきるしかない。大丈夫、もし落ちたとしてもここは二階だ、ほんのちよっと痛いだけ。どちらにしても問題は無い。

「よし、窓から行けるか確かめる。姐さん、頼む、ちよっと支えてくれないか？」

「分かった。だが、あまり体を乗り出すなよ。たとえ二階とはいえ、落ちたら危ないことには変わらない」

「分かってる。霧子は中の志穂に声をかけて動きを止めてくれ。ほ

んの少しだけでいいから、頼むぞ」

「う、うん、わかったよ。ガンバル」

「ちょっと時間を稼いでくれるだけでいいからな」

『あたしは?』

仕事を割り振り終わったところで、目の前でメイの携帯の液晶が揺れる。

「えっと…、それじゃあ後で志穂を折檻するために、荷造り用のひもを取ってきてくれ。たしか洗面台の下に入ってたはずだ、探せばすぐに見つかる」

『わかった』

そうして総員散開、状況を開始する。

「しいちゃん、だめだよ、幸久君のお部屋をぐちゃぐちゃにしちゃダメだよ」

『ほえ、きりりん? きりりんも入る?』

「だ、だめだよ、幸久君に怒られちゃうよ」

『でも、ゆっきいはえっちいのをかくしてるよ?』

「幸久君はそんなの持ってないよ、隠してないよ……、たぶん……」

『でも前はでてきたよ?』

「あ、あれはそういうのじゃなかったよ。ただのマンガだったよ。少しくらいは…、えっちだったかもしれないけど……」

『えっちいのはよくないよ。きりりんもさがさない』

「え、えと…、にゅう……」

志穂のやつめ、ふざけたことを。そんな本、出てくるわけないだろうが。ちゃんとすぐには見つからないところに隠しているに、決まっているだろう。引き出しの二重底の中とか、ベッドの下マットレスの下の収納とか、あとは、まあ、いろんなところに分散させてるんだぞ。

「霧子、ダメだからな!」

「が、がんばる!」

本当に、がんばってももらわないと困る。志穂の仲間を増やすためにそこに霧子を置いてあるわけではないのだ。

「姐さん、もうちょっと先まで行ってみる」

「押さえているが、気をつけろよ」

「分かっている！」

姐さんを信頼して大きく身を乗り出してグッと手を伸ばす。ベルトが腹に食い込む感覚を無視して、落ちないようにバランスを取りながら手を伸ばす。

何度か手で空をつかみ、がんばってそこからさらに三センチだけ身を乗りだして、ようやく手の中に自室の窓柵を掴み込んだ。よし、届いた。届いた、が、これからどうすればいい？ 掴んだ後のことを、俺は何も考えていなかった。

「三木、どうなった。届いたのか？」

背中越しに、姐さんの声が聞こえる。しかし振り向くことはできない。この時点ですでにいっぱいいいいで、首の筋を回すことはできないのだ。

「届いた、届いたけど…、俺はどうすればいい」

「あとはそのまま乗り移ってよじ登るんだが、…、気合いだ、三木！」

「ムリだ！」

現状どうなっているかといえば、俺はアパートの壁に沿って窓と窓の間をつなぐ橋のようになっている。しかし、俺の筋力ではこれ以上はなんともならない。換気のために窓があいてることは確かめられたのだが、ここから乗り移ってよじ登ることなど、どうしたってできないはずなのである。

「広太！ まだ鍵は見つからないか！」

「もう少々お待ちください。もうすぐにお持ちいたします！」

「とりあえずだれかを送り込めれば…、時間くらいは稼げるっていうのに……」

広太がすぐに持って来れないということは、鍵はそうとう引き出し

の深いところに隠されているらしい。あと数分はかかると踏むほうが賢いだろう。

しかし、送り込むと言っても体格的に俺の上を渡って部屋まで行けるのは志穂くらいだ。姐さんの支えがなくなったら俺は落ちるし、霧子は軽いが、上背を考えたらということにすぎない。

「あっ、いる！」

そして気づく。今日この場にいるのは俺を含めて六人で、いつもよりも一人多いのだ。今日に限っては、メイがいた。

「メイ！」

勇気と気合と背筋、そして姐さんの助力を得て俺はダイニングに戻り、洗面所で荷造りひもを探しているメイを呼んだ。するとすぐに扉の陰からメイが顔を出し、とてとてと戻ってくる。

「ひも、ないよ？」

「メイ、聞いてくれ。それ以上に重要なミッションができてしまった。少しだけ危険なミッションなんだが、それでも行ってくれるか？」

本来ならば、こんな危ないことをメイに頼むのは筋違いかもしれない。メイには断る権利が大いに保障されてしかるべきなのだ。しかしメイの返事是否定のそれではなかった。

『がんばる。幸久くん、困ってる』

「助かる、メイ。今度、ジュース買ってやるからな」

……………説明中……………

「っていうことなんだ。行けるか？」

『やってみる』

「危ないと思ったらすぐにやめて構わないからな。メイに怪我なんかさせたくないからな。ヤバいと思ったら、すぐに背中を叩いてくれ」

こくん

メイの了解を得て、俺たちはすぐに策を実行するための準備に取り掛かる。俺はさっきよりももう少しだけ前に乗りだし、姐さんはさつきと同じように俺を支えてくれる。そしてメイは姐さんの脇に控えている。

この作戦はメイの冷静さと姐さんのパワー、そして何より俺の腹筋と背筋と握力の耐久力にかかっている。

「持田が乗るぞ、三木」

「よっしゃ、どんと来い！」

ポスッ、と俺の背中に軽いが確かな重みがかかり、そしてずりずりとすり足で歩くように重みが移動している。ギシギシと、腹筋の断続的に負荷がかかってくるが、それになんとか耐える。

この作戦は俺が橋になって、姐さんがそれを支えて、メイが渡って、窓から潜入して志穂を止めるというだけのもの。かなりシンプルな作戦だが、作戦っていうのはシンプルであるほど成功率が上がるものだと思う。だから今回もあまり複雑なことは決めず、状況にに応じて臨機応変な感じで作戦を進めていくのがいいだろう。

しかしメイは軽い。身長が同じくらいの志穂よりも軽い感じがする。これくらいの重さなら、なんとか耐えることができるんじゃないかと思う。

…、実は、口に出すことはできないんだが、全身に走る負荷以上に気になることが、一つだけある。しかしそれを口に出してしまえば、せつかく俺のために、文字どおり危ない橋を渡ってくれているメイに対して、非常な失礼を働くことになってしまう。

そういうことなので、それについては心の深いところに秘めて考えないようにしようと思う。もちろん、口に出すなんてもってのほかだ。

男児たるもの、女の子に恥ずかしい思いをさせてはいけない。それは紳士道にもとる振る舞いであり、常に気を払うべきことである。思ったことを率直に表明する素直さが常に最上の美徳であるわけではない。思いを心に秘める奥ゆかしさも併せ持つべきだろう。いか

に男の子として気になることがあっても、素知らぬふりをするのが紳士というものなのだ。

「メイ、気をつけろよ」

早くこの瞬間が過ぎ去ってほしい。反面、この瞬間が永遠であってほしい。精神と肉体が相反する思いに裂かれてしまったように、まるで真逆のことを思っていた。これが感情の板挟み、言うところの二律背反、ダブルバインドというやつなのだろう。

無心だ、無心になれ。心を空っぽにして、風に揺れる柳のように穏やかな心を保つのがいい。メイが俺の上をわたり終わるまで、ほんのわずかな間だろう。それくらいならば、フィボナッチ数列を延々と並べていけばいつの間にか終わってしまうに違いない。

よし、数えよう。

1、1、2、3、5、8、13……

## 突入・捕縛・簀巻き

フィボナッチ数列について考えよう。

そもそもフィボナッチ数 (Fibonacci number) とは、イタリアの数学者レオナルド・フィボナッチ、通称ピサのレオナルドの名にちなんで名付けられた数のことだ。最初に発表されたのは1202年に発行された彼の著書、『算盤の書』に記載された「兎の問題」による考察からであるという。

その数列は、 $F_0 = 0$ 、 $F_1 = 1$ としたとき、 $n$ が0以上ならば $F_n$ と $F_{n+1}$ の和が $F_{n+2}$ になるというもので、つまり0, 1, 1, 2, 3, 5, 8...という風に数列が進行していくのだ。

詳しいことまで考えるとあまりに難しいので、俺にはよく分からない。分かるのは、そういう数列があるということと、俺にはそれを理論的に理解することができないだろうということだけだ。分からないということだけは、間違いなくわかっている

そう、今はそこが問題なのではない。

問題は、俺の部屋に侵入した志穂をいかにして懲らしめるかということであり、またそれ以前に、そのためにメイには危ない目にあってもらっているわけなのだが、それを最大限安全に行なうかということに他ならないのである。

窓と窓の間に渡された橋のようになっていて俺の上を、ゆっくりと慎重に渡っているメイの安全を確保することこそが最上の命題として掲げられるべきで、それ以外のことににかかずらっている場合などではないのだ。

フィボナッチ数列はそのために用いているだけで、別にフィボナッチ数列について深く考えるべきではない。

そう、集中。集中だ。集中するためにそれを使っているだけなんだ。別にフィボナッチ数列じゃなくてもいいんだ。



でも今はフィボナッチ数列だった。なぜなら思いついてしまったから。故に俺はフィボナッチ数を順番に数え上げていた。なぜそんなことをする必要があるのかは、紳士だから言わない。

俺はフィボナッチ数を数えている。

数えていて、36番目の数を求められなくなっていた。こういうのは一度混乱して分からなくなってしまうともうだめで、その瞬間せっかく求めた35番目の数と34番目の数も完全に飛んでしまった。ちなみに後で求めたが、36番目のフィボナッチ数は14930352だ。完全に桁が俺の暗算の限界を超えている。

俺のフィボナッチ数列をめぐる冒険はその瞬間に完全に頓挫したのだった。しかし同時にその瞬間、がらりと窓の開く音が俺の耳に届いた。どうやらメイの冒険は、俺とは違い無事に成功を収めようとしているらしかった。

今まで足の方から順々に重みがかかってきたわけで、しかし最後の最後、腕の上を通過する段になって、ここにきて最大のものすごい負荷がかかったのだが、それもなんとか耐えきって、メイは無事に窓から俺の部屋への侵入を果たしたのだった。

俺の気合も、なかなか捨てたものではないのかもしれない、と我がことながら称賛してしまう。まあ、どれだけ部屋の中を見られたくないんだよ、と言われてしまえばそれまでなのだが、そんなことを言えるのは志穂の好奇心の強さとその行動力の勢いを知らないからなのだ。

よっこいしょ、とすら声がしないので状況が今一つわからないのだが、俺の上から完全にメイの重みが消えたので、おそらくもう部屋の中には入ったのだろう。俺は、頭をあげてもいいだろうか？　うっかりあげたばっかりにメイのスカートの中を見てしまったとか、これからの関係に支障をきたすようなことはおきないだろうか？

「三木、もう平気だ。戻っても大丈夫だぞ」

「マジで？」

「ああ、持田はもう部屋の中に入った。落ちる前に、早く戻って来

い」

メイとのこれからの関係を考えると易々と顔をあげることの出来ない俺は、部屋の中の音に耳を澄ます。さっきまでは全身全霊でフィボナッチだったので気付かなかったが、いつのまにか志穂が部屋の中を荒らす音がやんでいた。その代わりに聞こえてくるのは、「メイメイどうしたの?」とか、「おはなしってなに?」とか、志穂が一人でしゃべっている声だ。

まさか独り言でもあるまいし、メイが志穂と話してその気を引いているので間違いないだろう。まあ、俺が重みを感じていないうえに部屋の中に入れていないとすると、それは間違いなく下に落ちていくわけで、そんなことになっていたら姐さんが冷静に俺に戻れなんて声をかけている場合ではないわけで。

「よっしゃ、姐さん引っ張り戻しておくれ」

「分かった。力を入れるよ、まずは引っ張るからな」

ベルトとシャツを掴まれて、一気にぐいっと室内に引っ張り戻される感覚に、なんとなく市場の冷凍マグロにでもなった気分だった。

いや、そんなことを思っている場合でもないのだが、しかしくだらないことでも考えていないと、引き上げられた襟首で首が思い切り締まっている事実に耐えられそうになかった。

姐さんの助力で室内に引き戻されてから、とりあえず第一段階がなんとかなったことに安堵する。これで、あと危ない目に会うのは俺だけということになり、一安心といったところだろうか。

なんというか、橋の代わりになった肉体よりも、メイのことが心配で心配でたまらなかった精神のほうがぼろぼろに摩耗した気分だ。

「姐さん、支えてくれて、さんきゅな」

「大丈夫だ、問題ない。私の体重がもう少し軽ければ、持田に危ない思いをさせなくてもよかったと思うと、私ばかりが安全で楽な役に回って心苦しかったくらいだ」

「それは、俺も思うわ。俺のジャンプ力がもっとあれば、あそこまで跳べたわけだしな」

「何においても、持田の苦勞に報いるべきだ。三木、次はどうするんだ」

「俺が中に入って志穂を捕まえる。さっき聞いた感じだと、志穂とメイは俺のベッドに座ってしゃべってる。窓から入ったメイがそっちの側に座っていると想定して、何とかする」

「そうか、私に出来ることは？」

「姐さんは、何とかメイに俺たちが部屋に踏み込むときに合図してくれ。乱戦になるからな、少しでも中心からは遠い方がいいだろ」

「ああ、分かった」

これであとは、俺が実際に部屋に突入してなんとかするだけだ。広太は、というか、鍵はどうなっているんだろう。そろそろ取り出せているころだとは思うが、いかんせん奥の奥にしまっていたみたいだし、まだかかるだろうか。

「広太、鍵は！」

「ただいまお持ちしました。すぐにでも解錠できます」

広太は、右手に鍵束、左手に荷造り用のビニールひもを持って俺の自室扉の前に控えていた。俺の指示を待たず勝手に扉を開けたりしないあたり、分かっているというか、分かりすぎているというか。一言でいうなら、うちの執事はとてもよくできたやつですよ、という感じだろうか。

「よし、開いたらすぐに俺が突入して志穂を取り押さえる。広太は続いて入って志穂の手足を縛って抵抗できないように無力化するんだ。俺が押さえていられるのは二秒か三秒だから、何とかしてまず足を縛れ。きっと暴れて足をぶん回すと思うけど、そこは何とかしろ」

「了解いたしました」

広太は、俺のむちゃくちゃな要求にも臆することなく頼もしくうなずいた。実際、広太は俺よりもずっと有能なわけで、今回も最初に志穂を押さえるだけの俺は捨て駒でしかなく、本命の捕縛係は広太だ。

というか、広太は俺を護衛するためとかいう名目で合気道とか護身術とか、いろんな格闘技を叩き込まれているわけで、本当のところ俺よりもずっと強いのだ。

「いきます……」

鍵が、音をたてないように鍵穴に差し込まれ、そしてゆっくりと回される。急げと言いたいところだが、ここで急かしてもいいことは何一つとしてない。おそらく普通に開けてしまっただけは音で志穂に気づかれてしまう。

気づかれてしまっただけは待ち構えられてしまう。待ちかまえている志穂を何とかできると思うほど、俺は自分のことを過大評価することはできない。俺に出来るのは不意打ちで襲いかかって、それから三秒くらいベッドに押さえつけて置くことくらいなのだ。

言葉を交わさずとも俺の意向をくみ取っている広太が細心の注意を払い、わずかにかちやりと小さな音を立て解錠完了。これくらいの音ならば、メイとのおしゃべりに熱心になっているだろう志穂が気づくことはないだろう。

それから、窓際で志穂たちの様子を耳で探っている姐さんの合図で、思った通り志穂がメイと話に夢中で気づいていないであろうことが伝えられる。行くならば、今しかないだろう。

部屋の中の間取りを一回克明に脳内で再生してから、俺は一度深呼吸してノブに手をかける。後ろで広太が荷造り用のひもを志穂の足を拘束出来るくらい引っ張り出している。

「幸久君、がんばってね…、無理しちゃダメだよ？」

横でかたずを飲んで見守る霧子のありがたいお言葉を心の中で反芻する。そう無理してはいけない。俺は無理をしたところでどだい志穂を仕留めるには至らないのだ。無理だったらすぐに作戦を取りやめ、普通に説教をしてやることにしよう。

「分かってる。無理だったらすぐ止めるよ。広太も、無理しなくていいからな」

「幸久様の策、必ず成し遂げて御覧に入れます」

「無理、しなくていいからな？」

「無理などではありません。幸久様のご命令を為すことが、私の存在意義ですから」

「…、無理すんな。これも命令な」

「はっ、了解いたしました」

ゆっくりとノブをひねり、音をたてないようにドアに覗きこめるくらしいの隙間を開ける。その隙間からはベッドに座ってなにか話している志穂とメイの姿が見える。よしよし、メイは本当に有能だな。ちゃんと志穂の意識を引きつけてくれているじゃないか。

後ろで控え、俺の動きを待っている広太と呼吸を合わせる。吸って、吐いて、吸って…。

タイミングが合った瞬間、一気にドアを開け放ち志穂の下の方の視界を遮るように飛びかかる。一步早く姐さんからの合図が届いたメイは、あらかじめベッドから立ち上がり横に動いていて、安全圏に退避していた。

これで、メイに危ない思いはさせないで済む！

ドアが開き、俺が入ってきたことに志穂は動物並の脊髓反射的な反応で対応するがここまでは想定している。攻撃を回避すべく頭を下げようとしたが座った体勢ですでに下げられるスペースがない。

それならば、と横に体を逃がす志穂。俺の攻撃を空転させて逃げようという魂胆だろうが、残念ながらその回避行動まで読んでいた。

今回、俺の特攻に対して志穂のとることのできる行動はかなり限られている。体を逃がすことのできる方向は、前にかがむか、後ろにのけぞるか、それとも横に逃がすかしかない。いかに志穂といえども、気づいてから一秒未満で立ち上がり退避することはできない。いや、あるいは座ったままジャンプするくらいできるかもしれないが、それが出来る唯一の方向である窓側にはメイがいる。

さすがの志穂でも、もしも力加減を間違えてメイを巻き添えにしては、と思うだろう。

だからベッドの上に体を逃がすしかない。まあ、一瞬で志穂がそこ

まで判断しているかは疑問だが。

だから俺は部屋に踏み込んだ一步目に左足一本で跳び、志穂が横倒しに逃がした体に覆いかぶさるようにしてベッドに着地。両肩に手を置き、少しの間だけ抵抗できないように拘束する。

「にゃ、ゆっきい？ ふぁ、びっくりした〜」

覆いかぶさっているのが俺だと気づいて安心したのか、気の抜けたような声で志穂がそう言った。なぜ俺だと安心するのかはよく分からないが、暴れないというのならそれは好都合だ。一瞬だけタイミングをずらして飛び込んだ広太が滑り込み、華麗なひも捌きですぐさま志穂の両足をまとめて縛りあげる。

「！！」

縛られたことに気づいてにわかに俺の下でもがき始める志穂だったが、時すでに遅し、というものだ。一瞬で縛ったわりに、広太の縛りは頑丈で志穂の足は完全に封じたといつてよさそうだ。おじさんは、広太に縄術まで仕込んでいたのだろうか…、おじさんの目指す最高の執事の姿が若干見えなくなった瞬間だった。

しかしそんなこと思っている暇もなく、あっという間に志穂の暴れる力を押さえこんでおくことの出来なくなった俺は、その体を起こそうとする力を利用して志穂をひっくり返す。そして自分の力によってひっくり返り、にゃっ！といって腹ばいになったその背中に、俺は全体重をかけて座るのだった。

「広太、早く手も縛れ！ そのあと上下をつなげ！」

「了解しました！ 志穂様、失礼いたします！」

俺の指示通りに広太が手早く動き、志穂の両手をひょいっと縛りあげる。そして両手を縛ったヒモと両足を縛ったヒモをさらに追加された一本のヒモによって連結する。海老反り状態を強制的に作られ、動きを封じられた志穂は、まるで生きのいい鮮魚のように器用にぴちぴちとベッドの上で跳ねている。

いや、これでもまだもしかしたら逃げられるかもしれない……。念のために掛け布団で志穂を簀巻き状態にし、さらにそれもヒモで

きつくふん縛った。

「よし…、これで大丈夫だろ」

「お疲れ様です、幸久様。部屋はほぼそのままですし荒らされてはいないようです。多少乱れてはいますが、そこまでのことでもありません」

「さあ、志穂…、お仕置きの間だ。どうなるか…、わかってるんだろうな」

「このお布団、ゆっきいの匂いがする。くんくん」

簀巻きにされ抵抗不可能な状況にいるにもかかわらず、なぜか余裕綽々の志穂。しかもなぜか俺の布団の匂いを嗅いでいる。どうすればいいのか若干分からない。

とりあえず一回、適当に頭と思われるところを叩いておく。ぼすつ、と布団の感触しかなかった。

「志穂、開けちゃダメって言われたのになんで開けた」

「ダメって言われたから逆に開けたくなっちゃった？」

「疑問形でふざけたことを言うんじゃないやありません。鍵がかかっているところは普通は開けちゃいけないところなんだぞ。分かっているのか？」

「でもゆっきいの部屋だったから」

「俺の部屋なら入っていいとでも言うのか」

「だめだけども、ゆっきいなら許してくれるかなあ、って思ったんだけど…、だめ？」

「ダメだ」

「許してくれない？」

「許すとか許さないとかの前にやることがあるだろ」

「やること？」

「よくないことをしたときには、どうするんだ？」

床に簀巻き状態で転がる志穂を上から目線で見ながら諭すようにゆっくりと語りかける。

しかし、いかんせんどこに頭があるのかということすら分からない

ありさまであり、どこに視線を向ければいいのか少し迷う。

「え、えっと…、ごめんなさい、する…。」

志穂は悩むように一瞬黙り込むが、すぐに思い出してぼつが悪そうにぼそりと呟く。しかし何度も言うが、簀巻き状態なわけでどんな顔をしているかも見えなければ声もくぐもっていて感情を読み取ることはできない。

「そうだよな？　悪いことしたら謝るんだよな？」

「ゆっきい…、ごめんなさい…。」

「まあ、許せないけど、諦めてやるよ。ほんと、今回だけだからな？」

志穂の脇に座り、ぐしぐしと頭と思われる場所をなでてやる。家猫のようになされるがままになっているが、それは全身を完全に拘束されているからである。加えて言うならば、俺が撫でているのが頭かどうか、実際には疑わしいところだ。

「ごめんなさい、ゆっきい」

「今度は、ぜったいするなよ？」

「うん、しない」

「約束だぞ？」

「約束するよ、指切りするよ」

「指がどこか分からん」

「じゃあ唄だけ」

右手の小指を絡ませることが物理的に出来ないので、嘘をついたら針千本を呑むことを唄だけで誓う。まさか思いつきで簀巻きにしたことで指切りげんまんが出来なくなるとは思わなかった。

ああいう物理的で具体的な行動を伴う約束の方が、志穂には分かりやすくいいのだが、今度ばかりは仕方あるまい。

「さて、それじゃあお茶でも飲むか」

「うん！」

「広太、頼んだぞ」

「はい、仰せのままに」



「メイ、ありがとな。いろいろ危ない目にあわせて悪かったな」

『ぜんぜん平気。気にしないで』

「そうか、助かるよ。メイはいい子だな」

『そんなこと、ない』

「よし、メイには茶菓子が多めにあげよう」

『幸久くん、やさしい』

「姐さんも霧子も助かったわ、さんきゅ」

「さっきも言ったが、気にしないでいいぞ」

「あたしも、大したことしてないもん」

「座っててくれな、広太がすぐに用意するから」

「広太くん、ありがと」

「いえ、これも執事の務めですので」

「広太、メイが執事かっこいいって」

「恐縮です」

和気あいあいと俺たちはリビングに戻り、広太はキッチンへと向かう。みんなで力を合わせて何かを成し遂げるというのは、やはり喜ばしいことだ。

「えっと、ゆっきい…?」

ただしただ一人、志穂だけを部屋に残してだが。

「ん? どうした、志穂」

「あたしもお茶、のみたいなあ?」

「お前はもう少しそのまま反省してろ。許さないって言っただろ?」

「えー、そんなあ」

「一時間くらいしたら解いてやるよ。それまでは我慢して反省だな」

「くんくん、周りがゆっきいの匂いでいっぱい。なんだか眠くなってきたかも……」

「話を聞かんか!」

「すう…、すう……」

あつという間に環境に順応したのか、志穂はもう安らかな寝息を立てていた。あんな体勢のまま寝たら体中の筋が悲鳴をあげるような

気もしたが、まあ、志穂なら平気なんじゃないかなあ、と思う。

もし起きたとき体中が痛んでいたら、それを記憶に刻み込んで反省の証としてもらおうと思う。

「おやすみ、志穂」

「すう…、そんなにたべられないよお……」

あんなに食ったというのにまた夢の中でも何か食っている志穂をベッドに転がしたまま、俺はリビングに戻って広太が紅茶を淹れ終わるのを待つことにした。

少し時間はかかるが、広太の紅茶よりも美味しい紅茶を飲んだことがない。だから、こうして待つ時間も退屈なものではなく、むしろ楽しい時間だろう。

ばたんと部屋の扉を閉め、俺は一仕事やり終えたような、どこか清々しい気分浸っていた。

## うちの高校は、いろいろおかしい

うちの高校は、他と比べたことがあるわけでないから確かにそうと言いきれないのだが、学校を挙げてのイベントというのが少ないように思う。

まあ、基本的なところとして夏前の体育祭と冬前の文化祭は押さえているのだが、それ以外のこまごまとした行事、たとえば中学のときにはあったマラソン大会とか、高校になったら普通はいくらやるだろう球技大会とか、そういうのがないようなのだ。

少なくとも、去年一年をこの学園で過ごしてみたわけなのだが、そういう行事みたいなものはなかった。だから、そういう行事を隔年でしかやらない、とかいうおかしい決まり事でもない限りは今年も同様にやらないのだろう。

そういうスポーツ系の行事で活躍して女の子にモテモテとか、俺はそういうのを狙っているわけではないし、そういうことができるほど身体的に優れた能力を持っているわけでもないが、やっぱりそういう行事はあってもいいと思う。

まあ、そもそも学生の本分は学業だろう、といわれてしまえばそれまでだし、そういうことがしたくてこの学校に入学したわけではないから特に文句を言ってやろうというわけでもないのだが。

しかしそうなっていると、学生たちは学校生活で溜まったストレスの発散先を行事に見出すことができなくなるわけだ。だからというわけではないが、うちの学園は部活動がかなり盛んである。運動部だけでなく文化部も有名なところが多く、毎年いくつもの部活動が全国大会に出場するとかいう話を聞く。

あるいは校内で騒ぐことによってそれを解消しようとする輩も、決していないわけではない。あるいは、ストレスが高じて騒ぎを起こすような輩も同様にいる。そういう、結果的に人に迷惑をかけるような行為に走るものを取り締まるために、学園の風紀委員は非常に

発達しているのだ。

姐さんを見ればわかるように、まるで暴徒鎮圧隊のようなことまでやらされるのだから、信じがたい。ここまできると、ストレス発散の場を公式に用意してやれよ、とも思うが、学校側はどうしてかそれをしようとしない。

授業時間を少しでも減らすことが、進学校としての実績に傷をつけるとでも思っているのだろうか。

さて、それではストレスをあまり感じていない者はどうだろうか。勉強はそこそこにしているだけのやつは当然空いた時間を自分のために使えるのだが、しかし俺のように時間の使い方が下手なやつというのも少なからずいる、と思う。たとえばうちのクラスの面々だ。何と言っても、進路希望調査をやらせたらクラスの六割近くが第一から第三希望のどこかに「お嫁さん」とか「結婚」とか臆面もなく書くようなやつらだ。本当に、何のためにこんな学校に来ているんだ、と問いただしたところでもな答えが返ってくるわけがない。ちなみにそういうことを書かない真面目なやつは、真剣に進路希望調査らしく学校の名前を列举していたわけなのだが。俺も当然そうやって書いた。

いや、もしかしたら、「お嫁さん」というのもまんざら冗談で書いているというわけでもないのかもしれないが。事実、うちのクラスには、霧子との付き合いで美少女慣れしている俺から見ても、将来男に請われて結婚するんだろうなあ、と思うような容姿のとても整ったやつらがそろっているわけであり、それを生かして将来生きて行こうという強かさの表明と取れないこともない。

そして、そんなあまり真面目で真っ当というわけではないやつらが集まったうちのクラスに、当然だが、がんばって勉強するぞ、という空気はあまり感じられない。そもそも、進学校に入ったのだからいい大学に合格しよう、という進学校的な気概を持っているやつならば、二年の選択科目で家庭科を専攻したりなどしない。

さて、そんなに勉強しないというのならば、いったい何をしに学校

に来るのだろうか。そこで一つの結論として出てくるのがエンタテインメントというわけだ。学校にエンターテインメントを求めるな、と言いたいが、まあ、俺も楽しい方が好きなわけで異論を唱えるわけではない。

そんなこともあってか、イベントが少ないはずうちの学園にありながら、家庭科クラスだけには固有のイベントが多数存在しているのだそう。

聞いた話では今の季節には校内の桜のきれいなところを陣取って大々的に花見をするらしいし、夏になったらプールで遊ぶとか言ってたし、秋には紅葉狩りもするとか、冬には雪祭りだとか、そういうおかしな話ばかりが聞こえてくる。

しかしそういうのはどうなんだろう。やっぱり公的な場であるところの学校において、ただ花見をするというわけにはいかないだろう。そんなわけでそれらのイベントたちは、ただのお遊びでありながら、授業の一環として実施します、という魔法の言葉を駆使することによってまるで法の穴を抜けるようにして開催されているのだ。つまり教師ぐるみ、いや学校ぐるみでイベントを開いている、ということなのだ。そういうのはどうなんだろう。いかにここが私立の高校で、学校側も完全に黙認しているとしてるからって、やっていいことと悪いことがあると思う。

そして実は今日、俺がいいと思っていようが悪いと思っていようが関係なく、春の一大イベントである花見の日を迎えていたりする。

今日の午後の授業である家庭科の授業に時間をそっくり使って花見のための料理作りが行なわれるわけだ。花見をするための大義名分として家庭科の時間が犠牲になり、そしてそこでつくられた料理は成績をつけるための採点という名目で花見でつままれるお弁当となるのだ。

しかしここで行なわれる料理は、結局のところ花見のためのお弁当作りなのだが、やはり調理実習でもあるということを忘れてはいけない。つまりやってられん、と調理を放り投げたりすると、花見に

参加できないだけでなく成績に響くのだ。逆に花見の名目ということに目を瞑ってしっかりと取り組めば、当然だが、成績にも考慮されるということだ。

つまりこの実習、名目上のことではあるがやはり授業であり、成績のことを考えれば決して失敗するわけにはいかないのである。まあ、俺は、自分でいうのもなんだが趣味が料理という設定だし、料理は得意だから問題はない。

しかしながら、これは調理実習。家で一人で料理をするのとはまったく異なる戦いである。当然だが、調理実習は班で、しかも五人の班で行なわなくてはならず、全部を一人で気楽にやっつてしまえる家調理とは、やはり勝手が違うのではないだろうか。

普通は調理実習なのだから調理をしていればいいと思うのだが、比較的余裕のある俺はそれ以外に班員の、特に料理のセンスがない霧子と料理ができそうにない志穂の面倒を見ないといけないと思われる。

いや、志穂は分からないか。もしかしたら、俺が知らないだけで少しぐらいはできるかもしれない。意外な才能があつて、とかいうこともあり得ないことじゃないだろう。

しかし、ここで楽観的な予想をしたとしても、結局できないのであればそれはダメだ。期待を裏切られたら精神的にダメージがかいから、そういう希望的観測をしてはいけないのだ。

逆に姐さんは、これもなんとなくだが、やってくれるというイメージがある。姐さんなら何でもそれなりにこなしてくれるんじゃないか、という不思議な信頼感があるわけだ。これは日頃の行ないを見ていていうのもあるが、姐さんにできないことがあるとは思えない、という俺の勝手な思い込みもあるのだが。

だってそうじゃないか。自分がすごいと思っている人に出来ないことがあるなんて、思いたくはないだろう？　それだけ高尚に美化されてるんだよ、姐さんは、俺の中で。

メイは、家庭科を専攻した理由を「あんまりしたことがないから」

と言っていたが、それでも霧子ほどひどくはないんじゃないかと思う。いや、思いたい。メイは、イメージ的に自分を過小評価しそうなところがありそうだから、「あんまりやってない」というのは「特技が料理とはいえない」とかそういうレベルの話に違いない。

しかし、よく考えたら班員の中で俺が力量を知っているのは霧子だけだな。やっぱり、少し偉そうに思われるかもしれないけど、実習の前にみんながどれだけ出来るのか見せてもらったほうがいいのかもしれない。

だがとりあえず分かっていることは、霧子だけは間違いなくダメだ、ということだ。こいつは何もできないんじゃないかと、余計なことをしすぎる。霧子は完全な善意で余計なことをしてくるから性質が悪い。

例えとしていくつか挙げるならば、やたらと砂糖を入れたがる。あと、酢とかみりんとかも入れたがる。それ以外にも数えきれないほどの奇怪な衝動をその内に秘めている霧子とともに厨房に立つということは、それだけで俺の料理が危険に晒されることを意味する。

そしてさらに言うならば、経験値はあるくせに壊滅的に要領が悪い。目分量で測れないくせに目分量で調味料を入れたがる。自分でつくったものの味見をしない。つくっている途中でも味見をしない。隠し味、という言葉に心惹かれて、なんでもかんでも隠し味にしたがる。奇抜なことをしたがる。味付けのセンスがない。等々、様々な欠陥を抱えているのである。

それ故に俺は霧子から目が放せない。いや、放してはいけない。つまり霧子以外の面倒を見ている場合ではない、という状況も存分にありうるのだ。

今回採ると思われる作戦はこうだ。俺は霧子を見張る。姐さんはメイを見てやる。志穂はひとまずやらせてみて、まったく出来なかったら椅子に座らせておく。

あるいは、霧子にはなにか、野菜を切るとか卵を割るとか洗い物をするとか直接調理には関係ない仕事を割り振っておいて、俺は調理

しつつ他のメンバーの様子を見て回るというのでもいいかもしれない。

まあ、実際のところ、なんとかはなると思っている。

ちなみに食材は持ち込み自由で、領収書を渡すと一班五千円まで返金されるらしい。やたらと太っ腹だけど、学校の経営的に大丈夫なのだろうか。

そういえば家庭科専攻は経営における財政圧迫の第一要因だっていう噂を聞いたことがある。実際に御取り潰しがPTA会議の議題にあがったこともあるらしい。俺としてはなんで今でもここが残ってるのか疑問でならない。まあ、もしも残ってなかったら俺もここにいなかったわけだが。

なにはともあれ、時間は俺たちを待ってくれないようで、あつという間に昼休みになってしまった。俺たちはこれから調理室に入って、料理をどんどんつくっていかなくてはならない。

ひと段落つくまでは、当然昼飯も抜きだ。

.....

「ええ、班員諸氏に告ぐ。まだ昼休みだというのに集合御苦労。

今回だけでなく全ての実習について言えることだが、調理の結果は成績に直結している。したがって、大きな失敗はできない。すなわち食えないものをつくるわけにもいかないわけであり、一般的に調理し、一般的な料理をつくることが求められているのである」

時間は昼休み開始からすでに10分が過ぎている。俺たちは四限終了とほぼ同時に五人で連れ立って調理室に向かい、他の班に先駆けてちよっくら一仕事という体で今に至るというわけだ。

こんなに早く来る必要はないかもしれないが、先にやることをやってしまっ、休憩をはさんでから本番という方が精神的に余裕ができると思ったからこそその動きだ。それにもしも思ったよりも状況が絶望的だったときは、時間はいくらあっても足りないだろうからな。



「しかしここで一つ問題がある。お前たちは俺の力を多少知っているかもしれないが、俺はお前たちの力量を知らない。お互いの力を知り合うというのは、全員で力を合わせていくうえで非常に重要なことだ。全員が共有しなければいけない情報だろう。つまり、なにが言いたいかというのだな……」

一息ついてから、どうしたものかと頭を悩ませた結果、昨日の夜になって思いついたことを話す。

「実技試験だ」

これによって、全員の實力の程を班の中で共有する。そうすることで、フォローするべきは誰なのか、みんなを引っ張っていけるのは誰なのか、困ったときは誰に聞けばいいか、ということが明らかになる。

もちろん俺も参加する。しなかったら不公平だからな。

「時間もないことだし玉子焼きでもつくってもらおう。使う卵は二つで調味料はそこらへんにあるのを適当に使っていい。幸いまだ他の班は来てないみたいだからコンロの数は十分以上にある。焦らなくていいから、ゆっくりつくってくればいい」

「はーい、しつもんしつもん。ゆっきい、しつもん」

「よし、発言を許可する」

「うん。あのね、もしかしてなんだけど、このたまごやきがお昼ごはんなの？ あたし、おなかへったよ？」

「まあ、そういうことになるだろうな、必然的に」

「じゃあがんばらないとお昼ぬき？」

「志穂は後で購買にでも行くんだろうから、昼抜きにはならないだろ。でもまあ、下手なもんつくったら昼のおかずが一品少なくなるのは避けられないだろうな」

「わかった、がんばるよ」

「志穂以外に質問は」

「はい」

「はい、姐さん」

「食べられないものができた場合は、どうすれば」

「∴、製造者責任に基づいて適切に処分してくれ。食っても食わせなくても、どうしてもなら廃棄でも」

「了解した」

『はい』

「はい、メイ、どうした」

『もうどうにもならなくなったら、幸久くんは助けてくれる?』

「んー、今回はどれだけ出来るのかを見たいから基本的に手伝わないつもりだけど∴、まあ、本当にどうにもならないって言うんなら、助けるよ。無理をさせるのが目的じゃないからな」

『わかった』

「よし。あつ、霧子、一ついいか?」

「にゅ? なあに?」

「食材は有限なんだ。あんまり無駄にするなよ」

「にゅう、幸久くんひどい。あたしだっておねえちゃんがお料理してるのを見て勉強してるんだから」

「ほお、そうか。ならいいんだけどな。じゃあちゃっちゃと始めるか。はい、散・開!」

「お」

ぱんっ、と手を打って合図をすると、四人が四人、手に卵をもって空いている調理台へと散っていく。さて、俺はさくっとつくって、みんなの様子を見て回らないとな。

まあ、あれだ。試食はどうせ俺になるんだろうし、神様、どうかマジで人間に食べられないものだけは来ないようにしてください。昔から霧子の料理を食べてきて鍛えられてはいるけど、俺だって何にだって耐えられるようには出来ていないんですから、ね?

## 実技試験なう

卵焼きというものは、決して簡単な料理というわけではないように思われる。もちろん、適当に味や形にこだわらずつくるのであれば、それはただ溶いた卵をフライパンで焼けばいいだけの簡単な料理かもしれない。

実際のところ、卵焼きを造るために必要な動作は卵を割ること、卵を溶くこと、味をつけること、焼くことといったほんの四動作しかない、比較的単純な調理活動だと言えるだろう。しかしこの中であえて難しいと言うならば最後の焼成作業だろう。

卵焼きの切り口は、木の切り株に見られる年輪のような様子をしていいるのだが、これは当然、卵焼きの焼成の特徴である、くるくると丸める作業によるのである。

まずフライパン、四角い卵焼き用のものもあるが、に薄く油を塗り広げ、溶いて味付けをした卵液をお玉に一杯ほど流し入れる。これを薄焼きにするようにフライパン全体に回して広げてやる。そして火が通り全体的に固まってきたところで、端から手元に向かって緩やかに巻きあげていく。手元の端まで巻き切ったら、空いた部分に油をもう一度薄く塗り、巻いたものをフライパンの先まで送ってやってから、卵液をまたお玉に一杯流し込む。

それから、用意した卵液がなくなるまで同じ作業を延々繰り返し、幾度となくくるくると巻いていくのだ。ちなみに、巻いていく途中でフライパンの中の卵の塊に箸を何度か刺して空気を入れてやる工夫をすることで、仕上がりがよくつくりあげることができる。

しかし、こうして巻きながら焼いていく作業は、実際に巻けていなくても、一塊の卵焼きとしてまとまってさえいればなんとなく見れるものが出来てしまうのだ。少しくらい歪んでしまっても、なんとか最後の帳尻を合わせてしまえば、卵焼きとして完成するのだ。

だから、卵焼きをつくってもらえば、基礎的に身につけている技量の的な面だけでなく、どれだけ調理に対して真剣に取り組んでいるかという意欲の面までもなんとなく見えてくるのである。

まあ、そこでのいう意欲というのは、けっきょく基礎的なものを身につけていることを前提として考えなくてはいけないわけで、あまり確かなものではないともいえるのだが。だってそうだろう。あまりきれいに出来ていなかったからといって必ずしもやる気がないわけではない。昔は俺もそうだったが、やる気満々に調理をしたというのはまったくそれがうまくいかないということも、料理に慣れていない人にとっては往々にしてあり得ることなのだ。

だから、出来上がりの作品だけを見てすべてを判断することはできないのだ。本当にその人の力量を見ようと思ったら、その調理過程をしつかり見ておかないといけないわけである。

つまり、俺はこれから四人がどのようなにして卵焼きをつくっているのか、という様子を見に行かなくてはならないわけであり、自分のものをいつまでもつくっているわけにはいかないということだ。

俺は自分の分の卵焼きを速攻で仕上げることにした。卵を二つ手早く割ってぱっと溶いていく。いつもなら気になるから殻座を全部とるのだが、今回はそんなことはしないで、手早く混ぜてしまう。そしていつもなら顆粒出汁を使って味を調えていたりするのだが、それもしない。味は砂糖と醤油を入れてつくっていく。焼きもスピード重視で行なっていく。巻いている過程で少し歪んだ気もするけど、まあ、そこまでのものではない。これならば、急いでつくったんですと言いつくすれば、晴子さんに見せたとしても軽くはっ倒されるくらいで済むだろう。

最後に心が許せなかったところだけを軽く修正すると、もう少しだけまともな見た目になったような気がする。フライパンからあらかじめ出しておいた皿に開けてやると、黄金色の表面からはふわり、と湯気が立ち上がり、なんとなく美味しそうに見えるから不思議だ。軽くフライパンを流してやってから周りを見渡してみると、意外な

ことに志穂の作業が早いようだった。もしかしたら握力の加減が難しい、とか言って卵を割る段階から引つかかっているのではないかとも思ったが、そんなことはなかったようで、すでにコンロに火を入れて焼く作業に入っている。くるくると巻いていく手際もそんなに悪くないようで、リズムよくフライパンと箸を動かしていた。

「ふ〜んふ〜ん、ふふ〜ん♪」

あまつさえ、楽しそうに余裕綽々で鼻歌まで歌っている始末だ。

驚いたな。勝手なイメージで志穂はダメなんじゃないかなあ、と思ってたわけだが、いい意味で期待を裏切ってくれたようだ。それっぽい動きがこれだけできるのならば、出来上がる卵焼きの外見はそこまでひどいものにはならないだろう。まあ、味がどうかといえど、それは霧子の例もあるわけだし、動き良く調理出来ているとしてもそれが保障になることはないのだが。

しかしこれで、志穂が少なくとも、それなりのスキルだけはもっているということが分かった。これで味付けに問題がないのならば、本格的に調理する担当、つまりは実習の主戦力として存分に働いてもらうことになるだろう。やれやれこれで、「志穂はやばいんじゃないか」という最大の不安材料がなくなったわけだ。しかしまあ、「霧子はヤバイ」という最大の懸念材料はいまだ残っているのだが。

しかし、志穂の面倒を見なくてもいいことが分かったのは、それだけでも俺にとってはかなり有力な情報である。何故ならば、それは俺が他のやつの面倒をみるのに時間を割くことができる、ということとを意味するのだから。というか、志穂一人の面倒を見るよりも、霧子とメイの二人の面倒を見ていた方が楽だからな。

よしよし、これならばなんとかなりそうだな。五人の班で志穂と霧子がいるとなったときはどうしたものかと頭を抱えたものだが、なに、ふたを開いてみればそう厳しいものでもなかったようだ。

五人中三人ができて、一人は少し不安で、最後の一人が大問題という程度なら、何ということはない。この程度の逆境、逆境と呼ぶことすらおこがましい。

さて、他のやつらはどんな案配でやってるんだろうか。とりあえず、まずは目下最大の懸念材料からチェックしに行くとしようかね。なに、霧子がちょっとくらいヤバくたって、大丈夫大丈夫。

えっと、霧子は…、そこか。

「おい、霧子。どんな感じ、んっ……!？」

霧子のいる調理台に気楽な感じで歩み寄ると、少し浮かれたような俺の気持ちを地に落とすような異臭が、鼻孔に突き刺さってきた。俺の足が、料理をつくるものとしての本能が、そのテーブルに近寄ることを一瞬だけ拒んだ。

とても悲惨なことがそこで起こっている。直接その場に行かなくても、近づくだけで分かってしまう。というか、近づきたくない。でも、近づかなくてはならない、霧子がどれだけヤバいかを再認識しなくてはならないから。

この臭いは…、バルサミコ酢？

高校の調理室っていうのはそんなものまであるのか。そもそもものところ、どんなものを使うことを想定しているんだろうか。そういう危ないものは、子どもの手が届くところに置いてはいけないだろうに、危機管理意識が欠如しているといわざるを得ないだろう。

「霧子、どうなってる？」

「あれ、幸久君はもう終わったの？」

「まあな」

俺は意を決して、鼻を掴みながら霧子の手元にあるボールを覗き込む。食材に、その存在意義を全うさせることが料理だと思っている俺にとって、かちゃかちゃとかき混ぜられているそれは、俺の思いを真っ向から否定するものである。自然、自分の腰が引けているのが分かる。

それは、普通に卵焼きをつくるための溶き卵とは圧倒的に違っていた。まずは色が超越的におかしい。どうやってその色を作ったのかまったくわからないのだが、どこことなく赤黒い。次に臭いが不思議とおかしい。最初に感じたバルサミコ酢だけではなく、きつとそれ

以外にもなにか強烈な臭いのものが入っているに違いない。バルサミコ酢が普通に置いてある調理室だ、魚醤くらいあってもおかしくはないだろう。最後に量がどうしてかおかしい。普通に卵を割って調味料を入れて、と準備を進めたとして、ここまで容積が増えるようなことはないだろう。どれだけ調味料を入れればこんなことになってしまふんだい、と優しくも厳しく問い詰めたくなる。

なんだろうなあ、前よりも悪くなってるような気がするぞ。さっきは「晴子さんのことを見て勉強している」なんて言ってたけど、成長というよりも退化しているようにしか思えない。晴子さんは、いったい霧子にないを見せたというんだろうか。

正直に今までの経験から言って、きちんと食えるものができてくる確率は、よくても五割を切るだろう。どうしてただ卵焼きをつくるだけだというのに成功率が五割しかないんだよ。

霧子、残念だよ。

「霧子…、がんばれよ」

「にゅ、がんばるよ」

「ほんとに、がんばれよ」

「？　がんばるよ？」

「ほんとにほんとだからな！」

「にゅ…、にゅん……」

一口なら、さすがに一口だけなら、腹を壊すようなことはないだろう。ないと信じたい。

ここで俺が腹を壊して保健室送りなんてことになったら、この班の調理実習はきつとマズいことになる。そしてこの班に所属する俺の成績も、きつと芳しくないものになるだろうことは、明らかだ。

俺の胃腸にはがんばってもらうしかない、ということだ。せめて、壊れるならば実習が終わってから、ということにしてみらわなければ。

さて、気を取り直して、メイはどうなっているだろう。あんまりやったことないって言ってたけど、もしかして本当に全然やったこと

ないのかなあ……。

……………

メイのところでは、いい意味でも悪い意味でも、何も起こっていなかった。というか、そもそも何も始まっていなかった。

「…、そうか、こういうのもあるのか……」

俺はメイの様子を見て、新しいな、と思った。どうやらメイはさっきから卵を割ろうとしているようなのだが、今のところ、その試みが功を奏している気配はまったくない。

再び失敗したメイは、どうして割れないのか、と不思議そうな表情で卵を眺めている。しかしややあって、卵を持った手が肩の高さから振り下ろされ、重力加速に従ってスピードを上げる。

それで卵は割れるはずだった。しかし割れない。

それは至極単純な理由で、メイは卵がテーブルにぶつかる直前に腕に力を込めて、重力に抗がってみせたのだ。そして結果的に卵にはひびが入らず、かすかにこつんと音をたてるだけだった。

「メイ、だいじょぶか？」

作業台に置いたケータイを、卵を持っていない左手でカチカチと打つ。利き手じゃないのにそれだけの早さとはな、器用だ。

『われないよ？』

「まあ、そりゃ、逆方向に全力疾走したら成功するものも成功しないよな……」

俺は、自分が経験したこともないような、別次元の疑問に捕らわれているメイにかける言葉を探すのに、少しだけ考える時間を必要とした。

卵を割ることすらもできない時点で、メイの実力はほとんど分かった。あんまりやったことがないっていうのは誇張でもなんでもないということだ。これならば、足手まといとかいう次元すら超えているから、逆に役に立ってくれるだろう。



しかし、そうだな…、それだったら、少しくらい手伝ってもいいかもしれない。きっとこのまま放っておいたら、永遠にこの卵焼きは完成しないだろうから。

「いいか、メイ。卵なんてちょっと力入れれば割れるんだ。こうやってだな……」

俺はメイの後ろにまわって、自分の右手をメイの右手の上から被せた。卵の割り方を教えるときは、こうやってやるのが一番わかりやすい。俺も晴子さんにこうやって教えてもらったものだ。

すると不意に、緊張したようにメイの体に力が入る。メイの握力がもう少し強ければ、あるいは卵は手の中で割れていたかもしれない。

「メイ？」

『なんでもない』

「そうか？　ならいいんだけど。それでな、軽く力を入れるだけでいいんだ。こうやって腕を持ち上げて、下ろすだろ？」

テーブルの天板に卵を軽く打ちつけ、その殻にほんの軽くひびを入れる。卵の殻というものは二層構造になっているわけで、外殻にひびが入ったからといってすぐに中身がこぼれてくるというわけではない。

「な？」

『ひびができた』

「で、ここからは指でなんとかして割るんだ。あとはもうできるかな？」

『がんばってみる。一人だけズルしちゃダメ』

「卵焼きにするのは、分かるか？」

『がんばる』

「よし、その意気だ。がんばれよ、俺は何が出てきても食うから、な？」

『うん』

よし、これでメイは、大丈夫かどうかはわからないが、とりあえず土俵に乗ることはできたわけだ。この後どうなるかは分からないが、

少なくとも調理することはできるわけだし、何ものかは出来上がる  
ことだろう。

調味料入りの生卵でないかぎり、とにかく俺はなんとかして食うこ  
とができるはずだ。晴子さんによって料理の腕を鍛えられるのと同  
じくらい、俺は霧子によって胃腸が鍛えられている。ちよつとやそ  
つとの変な料理ではやられることはあるまい。

それこそ超弩級の、霧子の失敗作級のものが来ない限り、俺が負け  
ることなどありえないのだ。

さてこれまで志穂、霧子、メイと見てきたわけなんだが、あと残っ  
ているのは姐さんか。しかし、姐さんか…、俺にしてみたら、姐さ  
んのことを心配するということが自体がかなり不遜なことだ。

ここは、姐さんについては完全に任せて、俺はただ受け入れるとい  
う体勢を取った方がいいような気がする。そもそも俺は姐さんのこ  
とは信頼しているし、姐さんに限って料理が壊滅的にできないなん  
てこと考えられないじゃないか。

確かに姐さんだって人間だから、普通に考えればできないことくら  
いあるかもしれないけど、しかし俺はそうだとは思えない。姐さん  
にできないことなんて、ないだろ。

そう、問題はない。俺はただ姐さんを信頼して、目の前に出てくる  
ものを美味しくいただければいいんだ。もし、俺のよりも立派なのが  
出てきちゃったらしよう、偉そうなこと言ったのが恥ずかしい  
ぜ。

姐さんなら、大丈夫だ、問題ない。

## 試食・評価・いただきます

そして数分の後、俺の座っているテーブルに五つの玉子焼きが並べられた。

時計はまだ昼休みの中ごろを指しているが、調理室にはちらほらとクラスメイト達の姿も見え始めた。他の班でも昼休みから作業を始めようというところがあるのだろう。それは俺たち自身がそうしていることから、おかしいことではないことが分かる。

しかし俺たちがしているようなことは、どこの班でも行なわれていないように思う。他の班では、班内での話し合いを既に済ませているのか、入ってくるや否やてきぱきと実習自体の準備を進めているようだった。

もしかして、それなりにできるやつらが集まった班なのだろうか。みんな準備の手際もいいようだ。確かあれば、茅場と北本と真田と、えっと、佐原だったか。いいなあ、俺もあそこに入っちゃえば、楽な実習なるんだろうなあ。

しかし、そんな現実逃避をしている場合ではない。俺は目の前に並べられた、この五つの卵焼きと向き合っていかなければならないのだ。

「それじゃあ、いただきますか」

しかし、どれもなかなか味の見える外見をしているようだ。まあ、問題は形ではなく、結局は味なわけだ。味さえまともなら、形が多少微妙だとしてもこの場合は問題ないといえるだろう。逆に、形はよくても味がヤバイ場合は、やはりヤバイという判断を下さないわけにはいかないのだ。

「ど、どれからに、しようかなあ……」

それは、あまり嬉々として行なわれる選択ではない。俺はこれから自分自身のものを含めて五つの卵焼きを、少なくとも一口ずつ食うわけなのだが、どの順番で食べ進めていくか、ということは意外と

重要な選択なのかもしれない。

最初に美味しいものを食べてしまえば、後から食べるそんなに美味くないものの感想が過小評価されてしまう。逆に最初にヤバいのを食べてしまったならば、後の普通のものが過大評価されることになりかねない。

客観的で安定した評価が求められる今、どの順番で食べていくか、ということとはとても大切な要素なのだ。一般的に考えれば。

しかしそんなことに気を配っていられるほど、今の俺の状況は悠長なものではない。そんなことよりも、どうやって食べて行くのが一番ダメージを少なく済ませることが出来るか、ということを考えるべきなのだ。

とりあえず、不安要素を二つ続けるのはダメだ。志穂がそれなりにつくれるということは分かったが、だからといって味が問題ないとは限らない。故に、霧子↓志穂とかの順番で食べてはいけない。姐さんかメイを間に挟む必要がある。

となると、霧子↓メイ↓姐さん↓志穂とかが順番としてはいいのかもしれない。間に置くクッションは多ければ多いほどいい。

ちなみに霧子を一番最初に置くのは、別に食べるのを楽しみにしているとかではなく、可能性としてみんなの作品がすべからくヤバかった場合、ダメージを蓄積させた状態で食べるのは危険というだけだ。ワン&ツージャブからストレートで沈められることだけは、あってはならないわけで、それならば一番最初にストレートを受けてしまおうという腹積もりである。

俺には全員分を食べて判断するという使命があるのだから、一つ目でK・O・なんてことだけは許されない。これくらいの打算は、必要になってくるのだ。

しかし、ほんとに大丈夫なのだろうか、こんなこととしてしまっ  
いや、時間がないんだ、さっさと食わなくちゃダメだ。

男なら、やると決めたら一直線だ。

「じゃあ…、霧子のから食おうか」

俺は己の決断を実行に移すべく、迷うことなく皿を一つ手元に寄せた。

「わわ、すごい。なんでそれがあたしのだってわかったの、幸久君？」

「まあ、俺にしてみたら、分からないわけないだろ、って感じなんだけどさ」

「にゅ？」

「だから、…、あー…、特徴的ってことだよ」

「個性的ってこと？」

「まあ、よく言えばそうかもな。よく言えば、な」

俺が手に取った皿が霧子の作品である、と判断するのはそれほど難しいことではないだろう。それは、他の四つの皿と比べてもひととき、異彩を放っているのだから。まず一つ、一番外形がきれいであること。一つ、色が一般的な卵焼きのそれとかけ離れていること。一つ、大きさが他のものと比べて約1.5倍はあること。

火を通したことによって、製作途上における最大の懸念材料だった異臭は消しおおせたようだが、異常な量の調味料と、その妙なセレクトによって発生した容積の肥大と表面色の変調だけはどうにもできなかつたらしい。

「こわいなあ…、箸入れるのが、こわいわあ…」

「がんばったよ！」

「その頑張りが裏目ってないといいんだけどな」

きゅっ、と両手を胸の前で握り、かわいいポーズで頑張ったアピールを行なう霧子であるが、それは残念ながらまったく信用ならないわけである。がんばった方向が間違っていれば、それが実を結ぶはずがない。

現に、言っては悪いが、これはあまり成功しているようには思えない。調味料というものは入れれば入れるほどいい、というものではない。適度に適切なものを入れ、ちょうどよく組み合わせ、初めてよい味付けが生まれるのである。

サービス精神かなにかは知らないが、過ぎたるは及ばざるがごとし、という言葉覚えなす必要があるかもしれない。

しかし、本当に怖いな。こんな色の卵焼き、霧子以外にはつくれないだろう。晴子さんが見たら何というだろうか。いや、霧子がつくったのなら、なにも言わずに全部俺に食わせるだろう。もし俺がつくったら、一昼夜軒先に逆さ吊りにされて心の灰抜きをする、とかされてもおかしくない。

食えること自体は、霧子の料理にはもう耐性がついてるから平気だと思う。これくらいいの、見て何をつくったのか分かるレベルのものならば、大した問題もなく受け入れることはできるだろう。

そもそも、霧子の料理を食うときに一番怖いのは、何をつくったのか分からないものを食えるときであり、これはなんだい？ と聞いても納得できないときなのだ。

この程度のものならば、何の問題もなく体内の抗体で処理しきれるはずだ。

「いただきます……」

俺は、意を決して箸を卵焼きに突き立てる。表面は程よく箸を押し返す弾力を持ちながらも、しかしわずかな力で難なく突き破られる。色的に血糊が噴きあげてきそうな不安に襲われるが、そんなことはさすがになかった。

しかし、血糊の代わりに臭気が噴出した。何と何を混ぜたらこんな匂いになるのかさっぱり分からない。きつと犬ならば一瞬で嗅覚が麻痺して匂いを感じなくなるような、そんなレベルの臭気である。

ここで俺は認識を改める必要があった。霧子は退化などしていない。間違いなく進化している。しかし逆向きに、全力疾走で。

臭いを情報として受け取った脳が発するシグナルはレッド。生存本能によって、一瞬だけ行動に抑制がかかる。

だが、そんなことにかかずらっている時間はないのである。脳が止めようとするのを無視して、俺は箸で卵の塊から一切れ切り取って、口元に運んだ。

嗅覚から流れ込んでくる情報を無視して口に放りこんだ。何とも表現しにくい、酸っぱい甘辛い味がする。なんていうか、東南アジア風味だろうか。臭いの割には、案外不安定な味はしていない。

焦げたり炭化したりしていないし、殻が混入したりしているわけではないから食えないことはない、ん、だが、如何せん美味くない。もっと直接的に言うなら不味い。卵焼きに東南アジア風味を採用するセンスも絶望的だが、そもそもから味のバランス感覚がない。

そこはまあ、進化していないというか、停滞していると言えるだろう。

「はい、霧子、ごちそうさまでした」

「一口でいいの？」

「もういい。十分すぎる。そうだな30点かなあ」

「わっ、高い」

「志し低いよ！？」 キレイにつくれてるけど、おいしくない。調味料はもうちょっと考えて使って、あと完成したら味見をしなさい」

「うん、分かった」

そう言われて初めて、己の卵焼きを小さく一口だけ口にする霧子。んぐんぐと咀嚼、こくんと嚥下。

「んと、ちょっとお酢入れすぎた、かな？」

小首を傾げて、感想はそれ一言だけである。そもそも卵焼きに酢を入れるということ自体がおかしことに、いつになったら気づいてくれるのだろうか。

「自分のセンスに疑問を持て。少なくともそれは、俺の知っている玉子焼きの常識の枠を破壊しようとしているとしか考えられない。いったい晴子さんの何を見たらこれが出来上がるのか、俺に教えてくれ」

「そんなに変、かな？」

「変です。きついです。はい、次」

俺は手元の巨大な卵焼きを霧子に突き返すと、次の皿を選ぶ作業に移る。次はこの、なぜだか炒り卵になってしまっている皿にしよう

か。というか、ほぼ間違いなくメイの作品に違いない。消去法的に考えるわけではないが、メイの料理初めて度合いを考慮に入れると、そう結論せざるを得ないだろう。

あれだけ料理初めてのメイならば、逆におかしなものはつくれないはずなのである。おかしなものをつくるには、それはそれで勇気が必要なのだから。

「これ、メイのでいいな？」

『ごめんなさい』

「別に気にしないでいいぞ。誰でも最初はこんなもんだからな」

『でも、上手にできなくて』

「上手にできなくてもいいんだよ。これから練習して上手くなればいいんだからさ」

盛りつけられた炒り卵の山から、箸で一欠片をつまんで口に放り込む。卵焼きの作り方は知っていたのだろう、パラパラとまとまっていないう欠片たちからは、どことなく巻こうとした形跡が見られる。しかし途中でどうにもならなくなって諦めてしまったに違いない。その結果としてここにあるのが炒り卵なのだ。

つまり、これは一般的に見たら炒り卵かもしれないが、メイの努力まで考慮して見れば卵焼きなのだ。初めて料理をしたがんばりは、何においても評価されるべきものなのである。

「うん、うん……」

出来栄え、というか味としては、特に何も味付けをしてはいないのだろう、無添加の卵の味がする。だが、それ以外のところは、焼き加減や盛り付けなどの諸点については特に問題はない。

「メイ、料理には味付けが必要なんだけどな、まあ、それはやっていくうちに覚えていくものだから、今はそんなに気にしないでいい。あと、技術的な面もやっていくうちになんとかなっていくものだから、今はそんなに気にしないでいいぞ」

『ん』

携帯の文字は無機質で、メイの感情を的確に示しはしないが、その



体中から落ち込んだオーラが発散されていることだけはよくわかる。軽く頭を俯けているのが可哀そうに思えて、でも少し可愛くて、俺は両側で小さく結っている髪を乱さないように頭を撫でてやった。もし嫌がられたら止めようとも思ったが、拒まれなかったので流れに沿って髪の上に手を滑らせる。滑らかな手触りは心地よく、いつまでも撫でていたいほどだ。

「大丈夫、美味しかったよ」

『ほんと？』

「ああ、料理は初めてだったんだろ？」

『うん』

「初めてで食えるもんがくれたんだから、すごいって」

『うん』

「よし、次はどっちだ？ こっちが志穂のだな」

しかしいつまでもそうしているわけにもいかないわけで、俺は次の皿を選ぶことにした。

そして表面が微妙に焦げて炭化し、多少歪んでいる方を指さして、俺はそう断定した。けっこう手際良さそうに見えたが、ふむ、案外そうというわけではなかったということだ。

なぜ断定できるかといえば、残った皿は三つで、一つは俺ので、一つがこれ。それで最後に残ったこっちのきれいなのが姐さんの作品なのは間違いないだろうから、消去法的にこれが志穂のに決まっている、というわけだ。

「ぶぶー、こっちはりこたんのでしたー。あたしのはこっちだよー」しかし、俺の予想を裏切って、志穂は愉快げにそう言って、きれいに出来ている方の皿を手を取った。なんてことをするんだ、信じられない。姐さんが料理苦手なわけないんだから、そのきれいなやつは姐さんのに決まってるだろう。

「志穂、ウソを吐いちゃいけないっていつも言ってるだろ。その皿を姐さんに返しなさい」

「？ うそじゃないよ」

「またそうやって。嘘を重ねるんじゃないやありません」

「三木……、すまん……」

「ああ、姐さん。すぐに取り返してやるからちょっと待っててな。……、どうかした？」

姐さんは力なく頭を垂れながら右手で自分を、左手でテーブルの上に残された皿を指さす。残されている皿というのは、当然志穂がつくったと思われる、出来栄的には微妙な卵焼きである。

「え？ 姐さん、なに？」

「私だ……」

私だ、とはどういう意味だろうか。

「えっ？ ……あれ？ ちょっとタイムな、ちょっと」

考えをまとめよう。姐さんは料理ができるだろう、というのは、確かに俺の勝手な決めつけかもしれない。今まで姐さんと付き合ってきて、こんなに何でもできる人は、他にいないと思った。勉強もできる、運動も得意。人望もある。隙と言えるようなものは、ほとんど見つからない。

だから今度もそうだと思った。料理ごとき、姐さんの手にかかれればちよちよいのちよいだと思った。

「姐さん、料理……」

でも、もしかして、違った？

「そうなんだ、苦手なんだ……、だから、克服しようと思って、二年では家庭科を……」

姐さんは、顔を真っ赤にして恥ずかしそうにそう言っていると、その場にうずくまってしまう。しまった……、こんなところで姐さんに恥をかかせてしまうとは……。

不覚だ。俺が変なことを言わなければ姐さんは、実は料理は苦手なんだ、と自分から打ち明けることができただろうに、やってしまったな。くそ、失敗だ。

「だ、だいじょぶだって、姐さん。何ていうのかなあ……、あの、ちよつとくらい苦手なことがあった方がかわいいていうかさ、隙が

ある方が魅力的っていうか…、えと…、萌え？ 萌えだよ」

「三木、無理しなくてもいいんだ。私の分は、別に食わなくてもいい。不味いものを、食わせるわけにはいかないんだ」

姐さんは、意外といったら失礼だが、かなりの恥ずかしがり屋である。こうやって、自分の至らない部分とかを見られると顔を真っ赤にしてしまうのである。まあ、至らないといっても、完璧主義者の姐さんが至らないと思っただけであり、一般的に見たら問題ない程度なのだが。

「いや、食べる、食べます！ いただきます。食べさせてください！」

姐さんが俺の手の届かないところに皿を引っ込めてしまう前に、俺は何とか手を伸ばしてそれを止め、箸で一口分を切り取って口に入れてしまう。

「あれ？」

普通の味がする。普通の卵焼きの味だ。

ちょっと表面が焦げているとか、ちょっと歪んでいるとか、確かに少し気にならないことはないけど、でも卵焼きとしては何の問題もない。味付けはシンプルにまとまっている。これまでに食べた三つの中で考えれば間違いなく一番でかい。

「姐さん、美味い」

「まさか。こんなに焦げてるし、歪んでいる。そんなはずがないだろう」

「いや、確かに見栄えは抜群にいいってことはないけど、でも美味しいよ」

「そ、そう…、なのか？ この卵焼きは、大丈夫なのか？」

「大丈夫だって、あとは火加減とか気をつけてればいいだけだし、全然問題ないって」

「問題ない…、大丈夫なのか。よかった…」

ほっ、と小さく息を吐き、姐さんは安心したような様子で自分の手の中にある卵焼きに視線を落とした。姐さんは完璧主義者だから、

不完全な料理が気になっていたんだろう。

完璧な料理なんて、そんなものなかつくれるものじゃない。確かにそれは目標ではあるけれど、同時に叶い難い夢でもあるからな。完璧な料理、それは晴子さんに見せても文句ひとつ言われない、完全無欠の料理。

そんなもの、今のところできる気すらしないのが現状だ。晴子さんがひれ伏すような料理がつかれるようになれば、俺はきっとこの腕一本で店をやっているだろう。

「さて、最後は志穂、お前か」

ポケットから出したハンカチで口を拭って、調理台の上に残された最後の一皿を手元に寄せた。さすがに少し時間が経ってしまったので、湯気がたつてほかほかというわけにはいかないが、その見た目から感じる美味しそうな感じは損なわれていない。

しかし志穂がつくったというただその一点だけが、俺の不安な心を加速させる。どうしてこんなに心配なんだろう、ただ志穂がつくったというだけなのに。

「…、これ、本当に食えるんだろうな。上手く出来てるみたいに見えるけど、爆発とかしないよな」

「しないからたべてたべて、ゆっきい。ししよもね、わるくないっていうんだよ」

「悪くないって、それ褒めてるのか？」

「ほめてるより、たぶん」

「まあ、それはいいや。そうか、爆発はしないのか」

「ばくはつしたことは、一回もないよ」

「じゃあ、一口だけ食べてみるか」

「おいしかったら、口からビーム出る？」

「出ない」

今日四度目の卵焼きを、俺は箸で一口大に切り取った。箸でつまみ、鼻先まで持ってきてから口に入れる前に一回だけ深呼吸をして、それからぽいっ、と口に投げ入れた。噛みきった瞬間、ふわりとやさ

しい味が広がった。

「志穂…、美味いぞ……」

「でしょ、あたしもできるんだから」

「ほんとに美味い。お前、ほんとに志穂か？」

「そうだよ、ビーム出る？」

「出ない」

驚いた、という言葉で片付けてしまうには、その衝撃はあまりに大きすぎた。志穂があんなふうにはフライパンを操っていたというだけでも相当なのに、それでできてきたのがこれで、しかも味はまともだというのだから、これを何と表現すればいいのだろうか。

しかし、その驚きと同時に、俺の中には一つの違和感があった。口に広がるのは出汁ではなくミルクの香り、感じるのは塩辛い塩ではなく甘い砂糖の風味。これは卵焼きというより……。

「？ ゆっきい、どうかした？」

「なあ、これ、オムレツの味付けしただろ？」

「…、どういうこと？」

「いや、これオムレツ、洋風。俺がいったの玉子焼き、和風。和と洋で味が全然違うだろ。卵焼きは、日本の食べ物だろうが」

「ん？ うん？ どういうこと？」

本当に俺の言っていることが分からないようで、しきりに首を傾げる志穂。そもそもミルクなんてどこから持ってきたのか、と問いたいのだが。少なくとも、俺が用意した食材の中に牛乳は含まれていなかったはずなのだが、どういうことだ？

「…、がんばってつくったよ！」

「はいダメ、失格」

「え、なんで？」

「言われたものつくってないんだから失格に決まってるんだろ。たてるなら、回答欄の書き間違いだな」

「きりりんだって味がぜんぜん違うって、ゆっきいさっき自分で言ったよ！」

「霧子のは、傾向として卵焼きに近いものをつくろうとしてる気配はあったからな、お前のとは少し違う」

「あたしも合格がいい〜!」

「合格がいい〜、って言われてもなあ……。じゃあがんばったで賞な、がんばったで賞やるよ」

「がんばったで賞? やった〜」

「よかったな、志穂」

「ごね始めた志穂を適当にあしらって、俺はイスに座ったまま背筋をくっ、と伸ばした。」

「とりあえず、これで班員の實力、というか力量は分かったわけだ。さて、これで一応の準備は整ったといえるだろう。」

「志穂は思った以上に役立っただろうし、姐さんは俺の予想からは多少落ちるが十分に働いてくれるレベル。メイは素直に言われたとおりやってくれそうだし、霧子は俺が見張ってさえいれば有能な助手として働いてくれることだろう。」

「これだけの戦力がそろっているならば、うん、実習も何とかかなりそうな気がしてきたぞ。ヤバいんじゃないか、なんて思っていたのがアホみたいだ。」

「じゃあそろそろつくるか。締め切りまであんまり時間ないからな」

「ええ〜、昼休み終わってからがいい〜」

「そうか? じゃあ、昼休み終わってからにするか」

「ああ、昼食を取らなくては、午後に力が出ないからな。時間は少ないが、食べてしまおうしよう」

「っていうか、弁当とか持ってきてるのか? 俺は一応持ってきてるけど」

「あたしは持ってきたよ。しいちゃんは、購買に行くんだっけ?」

「そうだよ。おさいふ持ってきたから、かいにいかないとダメなんだよ」

「そうか、それでは行ってくるといい。私たちも、少しならば待っているぞ」

「いつてきまゝす」

「…、さて、少し待ったな」

「早いよ、幸久君」

「もう少し待ってやってもいいだろう」

『幸久くん、いじわる』

「いや、購買に行かないといけないのはあいつが早弁したからで、自業自得じゃん。少し待ったんだからもういいだろ」

「それはそうかも知れど、でも待っててあげようよ」

「戻ってくるまで待ってやってもいいではないか。時間も、まだあることはあるだろう」

「…、分かったよ、待つって」

調理室に来て早々引き出しの中にしまいこんでいた弁当を出して開こうとした俺だったが、この場に残った三人から総スカンを受けたこともあって、包みの結び目にかけて手を離すのだった。

そういうえば、班の五人はみんな弁当を持ってきているわけだが、自分でつくっているやつはいるのだろうか。ちなみに俺は自分でつくっていて、霧子の分は晴子さんがつくってくれている。

いや、まあ、それはいいとして、できることなら昼休みの間に弁当を食べ終わって、チャイムと同時に作業を始めたいな。そのためには志穂が早く帰ってきて、弁当の時間にしなくてはならない。とりあえず、早く戻って来い、志穂

昼休みが終わるまで、あと15分もない。

## お料理をしよう！

さっさと始めなくてはいけないと思っていても、休み始めたら時間はあっという間に過ぎてしまうわけで。結局、俺たちが弁当を食べ終わって調理に取り掛かる決意をしたのは、「食休みしてから」とか言って少し休んでからだった。

よし、それじゃあやるぞ！ と立ち上がったときには昼休みも終わるころで、もう他の班のやつらもほとんど調理室に集まっていて、けっきょく俺たちの「昼休みが終わる前から調理作業始めちゃう作戦」は発動されることなくお蔵入りとなったのだった。まあ、昼休みの間に班員の力量を把握しておけたのは、よかったと思う。

「うし、そろそろ始めるか」

「そうだな、もう一時になってしまったし、片付けも考えると時間が心もとない」

「まあ、二時間もあるわけだし、みんながちゃんと動けば余裕で間に合うって」

実際問題、そんなに難しいものをつくることはないわけだし、コンロの数の関係でつくる順番とかに気をつけないといけないだろうが、時間は問題ないと思う。というか、根本的な疑問なのだが、もしも間に合わなかったときは何かあったりするのだろうか。

まあ、間に合ってしまえばいいわけだし、そんなことを考えている暇があったら遅れないようにつくりましょう、ということだ。さて、とりあえずはなにをつくっていいこうか。

「ねえねえ、ゆっきい。なにつくんの？」

「そうだな、色々つくれるように食材は買ってきてあるから、適当につくれそうなのをつくっていいこう。確か、弁当みたいなかたちにして、つくったものもいい感じに盛り付けましょう、って感じの課題だったはずだしな」

「うん、そうだよ。ええとね、『支給された器にあわせて料理をつ



くること。内容は自由』って書いてあるよ」

霧子はポケットからキレイに折りたたまれたわら半紙のプリントを取り出すと、それを広げて読み上げた。どうもそれは、一週間前くらいに配られた実習の予告プリントのようだった。

そんなものをよく持ってたな。俺が最後にあのプリントを目にしたのはいつのことだろうか。もらってから二三日で見当たらなくなっただような気がする。

「そんなプリントよく持ってたな、霧子。うわ、懐かしいな、それ。もらってときに一回見たけど、それからしばらくしてどっか行っちゃったんだよねあ」

「えっ！ ゆっきいすごい！ あたしはおうちに帰ってからもう一回みようとおもったら見つからなかったんだよ。帰ってるうちゅうでどっかにいっちゃたの」

「その日もらったプリントが家に帰ったときにはもうないって、それどういことだよ。宿題とか家に持って帰れないじゃん」

「えー、いつもなくなるわけじゃないもん。十回に七回くらいしかないもん」

「それは、ほぼ毎回って言うんだよ」

「三木、皆藤。先生から配布されるプリントには必要なことが書かれているんだぞ。それをなくしてしまっただけ配布する意味がないではないか。内容を覚えていればいいというものではない、プリントはしっかりと保管しておかないと駄目なんだ」

なるほど、それは確かにその通りだろう。今回は内容を漠然とでも覚えていたからよかったが、もしも忘れてしまったときには見直して確認することもできないわけであり、どうしようもないからな。しかし俺だって、別になくしたくてプリントをなくしているわけではないのだ。俺としてもプリントがなくなってしまうという事実には憂慮しているわけで、なくさないように気をつけるぞ！ と、ほんのわずかにではあるが毎回気合を入れている、つもりなのだ。

「いや、姐さん。毎回毎回プリントのやつがな……」

「三木は、プリントを配られてたとき、すぐに机の奥へ適当に押し込んでしまっているだろう。そんなことをするからからなくなってしまうんだ。ちゃんとファイリングするなり、意識的に保管しておけばなくならないものだぞ」

「マジで？　でも俺、そんなデカイファイルをプリント用とか言っ  
て持ち歩くのやなんだけど」

「別に小さなクリアファイルでもいいだろう。それに持ち歩く必要もない、いつでも見なおせるようにロッカーにでもしまっておけばいい」

「ああ、そっか。姐さん、賢いな」

「それくらい、賢いうちには入らないぞ。当然の配慮だろう。まあ、必要な分をまとめて持ち歩くのが一番いいと思うのだから」

「でもりこたん、ちゃんとカバンに入れてもってても、いつのまにかなくなるよ？」

「皆藤はいつもプリントをくしゃくしゃに丸めてカバンに入れているだろう。かばんにきちんとしまっているのはいいかもしれないが、あれではゴミと区別することが出来ないではないか」

「それじゃあ、まるめなきゃいいの？」

「そうだな、丸めてしまうよりも折った方が数倍いいだろう。これは三木と同じだが、クリアファイルに挟んでおけばそう簡単には折れないだろう」

「りこたん、かしこい」

「別にそんなことはないだろう。とにかく、これから気をつけるんだぞ。そんなことをしていて損をするのはお前たち自身なんだからな」

「ああ、気をつけるよ、姐さん」

「あたしも気をつけるよ！」

プリントなんて適当にしまっておいて、必要になったら机の中から掘り出して、どうしても見つからなかったら霧子に見せてもらう、というのがこれまでの俺の常だった。霧子はそういうのを几帳面に

とっておく性質なので、見せてくれといえれば必ずそのプリントが出てきたから甘えてしまっていたのかもしれない。

そういう風に霧子に頼っているから、自分でしっかりとしまうっていう発想が出てこなかったのかもしれない。しかしいつも霧子の方が俺に迷惑をかけているんだから、これくらいなら頼ってもいい気はするのだが。

まあ、家に帰っても覚えていて、その上で家にクリアファイルがあったら姐さんの言うことを実行してみようと思う。あくまでも、覚えていたら、なのだが。

「それでは始めようか。しかし、三木、色々買ってきたんだな…、私は食料品の買い物というのはあまりしないから相場が分からないのだが、本当にこれは五千円で足りているのか？ たしか、はみ出たしまった分は班の中で頭割りにするという話だったが」

「ぜんぜん大丈夫だって、足りてる足りてる。っていうか、実習で使うものを買うだけで五千円も使いきれないから、逆に余ってるくらいだよ。それとも買い物してもらったレシート、見るか？」

「いや、見なくてもいい。三木がちゃんと買ってきてくれたというのだから、それを信じることにしよう」

「幸久君は買い物上手なんだよね。スーパーじゃなくて商店街に行ったりするんだよ」

「三木、やはり商店街の方が安くそろえることができるのか？ 私はこういうものの買い物はあまりしないから分からないのだが」

「別に商店街に行ったからって、何でもかんでも安く済むってわけじゃないって。スーパーの方が安くあがることだって、なくはないんだぜ？」

けっきょく問題は、いかにして商店街の人たちと顔なじみになるか、ということなのだ。顔なじみであれば、少しだけまけてくれることもあるし、少しサービスしてくれたりもするのだ。

うちでは、基本的に買い物は広太の担当で、晴子さんの教えに基づいて商店街をその主なフィールドにしている。だからある意味で、

馴染みになっているのは広太の方だったりする。いや、馴染みというよりも、毎日毎日白昼堂々執事服で買い物かご片手に商店街を闊歩しているわけで、名物的な存在と化しているのかもしれないのだが。

そして俺は、商店街のマスコットになってしまった広太のご主人さまとして知られているらしい。前に広太といっしょに買い物に行ったときにそう紹介されてしまって、それから商店街に行くたびに「ご主人、お安くしとくよ」だ。安くしてくれるのはうれしいのだが…、いや、文句は言うまい。

「まあ、いいや、始めようぜ。ほら、材料はいろいろあるから、これでつくれそうなもので、食べたいものを言ってつてくれ」

そして俺は、袋の中から材料をどんどん取り出して机の上に並べていく。いろいろな小袋がたくさん出てきて、調理台の一角が袋で埋め尽くされる。

スーパーだったらこんな売り方はなかなかしていないだろう。商店街らしいどんぶり勘定で買い物をしていくのはなかなか楽しいものだ。

「ほお、よくこんな量で小売りにしてくれるものだな。商店街というのは、やはりこういう細かいところで要望を聞いてくれるものなのか」

「まあ、いろいろあってな。いろいろさ」

実は学校の実習でいろいろ必要で、五人分を五千円でそろえてるんだ、と言ったら「あれも持ってけ、これも持ってけ。全部まとめて300円な」といろいろ持たされてしまったのだ。しかもそれを行く店行く店でやられたものだから、遠慮するのが大変過ぎてヤバかった。

いろいろサービスしてくれるのはうれしいんだが、適度に遠慮していかないと今後の人間関係をどうしていけばいいか分からなくなる。こう、受け取ってばかりだと申し訳ない気分になるからな。

「ゆっつきい、あたしハンバーグ食べたーい」

「じゃああたしは唐揚げが食べたいな」

『卵焼き』

「そうなるよ、たんぱく質が多くなるな。簡単にサラダもつくって欲しいところだな」

「じゃあねえ、あとねえ……」

「おい、言う分には自由だけど、つくるのは自分たちなんだからそこらへんのところ考えて言ってくれよ。自分たちにつくれそうな範囲のもので、食べたいもの、だからな」

確かに言ってくれとは言ったが、好き勝手に言い放題だぞ、といった覚えはない。これがピクニックに行くから弁当つくるぞ！　というのならそれでもいいかもしれないが、これは実習なのだから、そういうわけにもいかないだろう。

「ええー、みんなゆっきがつくってくれるんじゃないの？」

「当然だろ、俺はお前のお母さんじゃないし、これは調理実習なんだぞ。みんなで力を合わせてやらないとダメだろ。っていうか、何のためにさっき卵焼きつくってテストしたと思ってるんだよ」

「幸久くんがつくってくれたほうがあたしがつくるよりも絶対美味しいのが出来るのに……」

「霧子…、そういうことばかり言ってるからいつまで経っても味付けが上手くできるようにならないんだからな？」

「最近は少し出来るようになってきたもん。でも、幸久君がつくってくれた方がおいしいよ」

「霧子、何度でも言うが、今日の卵焼きはうまくいってないんだからな？　あんなのばかりだと、少しはできるようになってきた、なんて言わないんだからな？」

「うゆ…、おねえちゃんと同じこと言う……」

「俺だって別に晴子さんと同じことを言いたいわけじゃないんだぞ。でも、こうやって何度でも言ってるのが霧子のためだと思うからであってだな」

「うう、それもいっしょ……」

「細かいこと気にすんなよ。師匠と弟子は思考パターンが似てくるものなんじゃないのか、よく知らんが」

「おねえちゃんが二人…、うう……」

霧子は、うう、おねえちゃん…、と頭を抱えて、自分を守るように床にしゃがみこんでしまった。もしかしてそのポーズ、ぶたれるのを防御しているのだろうか？

晴子さん、常日頃霧子に何をしているんですか。俺に対してと違って、けっこう甘やかしてるんじゃないんですか？

まあ、俺に対する仕方の半分以下の厳しさだとしても、それは霧子にとって大ダメージなのかもしれないし、一概になんとも言えないわけなのだが。あるいは、晴子さんの素はけっこうきついので、俺に話すような調子で霧子にも話してしまっているのかもしれない。どちらにしても、俺にならどれだけ厳しくしてもいいんで、霧子には優しくしてやってください。

「ああ、ゆっきいがきりりんいじめてる〜！」

「ちょ、ばっか、いじめてなんかねえよ！」

「いつけないんだ〜」

「いじめてねえよ、仲良しだよ」

しゃがみ込んだ霧子の頭に手をポンと置き、そのままぐしぐしと撫でる。特に意味はない。

「三木、皆藤、遊んでいる場合ではない。他の班はもう作業をしているんだぞ」

「はっ！ そうだな…、遊んでる場合じゃない、つくろう。あんまりぐだぐだしていると間に合わなくなっちゃうからな。ほら、霧子も立てよ、な？」

「うん、分かった……」

そう、遊んでいる場合ではないのだ。俺は霧子の防御態勢？ を強引に解かせると立ち上がらせ、少しだけ床にこすっていたポニーさんの先っぽを軽くはたいてやる。

「きりりん、ゆっきいがいじわるだけど、げんきだして！」

『ふぁいと』

「うん……」

「あぁもう、いじわるでもなんでもいいよ！ さぁ、つくるぞ、お  
ゝ！」

「おゝ」

もうなんというか、全体的にぐだぐだだし、俺はやけくそだった。  
こういうときは、とりあえず作業を始めてしまうのがいい。作業を  
始めてしまえば、全員が料理に集中するわけだから、もうなにも気  
にしないでいいわけだからな。

とりあえず、揚げ物もしていいことになっているし、さつき食べた  
いと言っていたものは全部つくれるだろう。しかしさっき言ったも  
のだけでは絶対におかずの種類が足りないだろうから、それ以外に  
もぽぽっとそろえる必要があるな。まぁ、幸い材料はいろいろある  
わけだし、なんとでもなるだろう。

さぁ、お料理の時間だ。

## 調理終わって……

「これで、完成でいいのか？」

「そうだな、もう器に隙間もないし、完成でいいんじゃないか？」

「おいしそうなのがいっぱいだね、食べていい？」

「し、しいちゃん、先生に見せるまでは食べちゃダメだよ……」

『出来たの？』

「ああ、出来た出来た。あとはこれを提出すればいいんだっけか？」

「先生は外にいるから、外まで持っていくんだって」

「もっていったらお花見？」

「さあ？ たぶんそうじゃね？」

「そのあたりは、連絡を受けていないな。まあ、行けば分かるだろう」

調理実習は、なんと、つつがなく終了したのだった。もっと時間がかかったり不測の事態の收拾に追われるのではないかと、と恐恐としていた俺だったが、意外と、というか予想外にとんとん拍子で事は進み、特に大きな問題もなく料理は逐次出来ていったのだった。

絶対一回は何かが発発すると思ったのに、そんなことはなかったし、少なくとも一回は霧子が転んで調理台の上に何かをまき散らすと思ったのに、そんなこともなかったし。

もしかしてこれは大成功の部類に入るのではないかと、と自惚れてしまっただけに、弁当は悠々と余裕を持って完成したのだった。

いや、大丈夫だと思いがちながらもどこか不安に思う心もあったわけだ、こう上手くいってしまうと逆にどうしたらいいかわからないな。はは、もしかしてここでキレイに事が進んだ分、これから何か大変なことが起こったりして、なんてな、はははは。

いいことが起こった分大変なことが起こるなんて、ないない。たまには素直に自分の幸運を喜んでみようかな。

しかしまあ、けっこう何とかなっちゃうものだなあ。実際、霧子と



志穂を組ませたときは分の悪い賭けをしてる気分だったけど、思ったよりもしっかりと料理してたし、出来てきたものはちゃんとまともなものだった。

「霧子と志穂でつくったハンバーグ、案外まともだよな。普通に食えたし」

霧子には最初、味付けが介入する余地のない炊飯作業を割り振っていたのだが、しかしそんなものに大して時間をかけていいわけもない。五分もしないでそれを終えた霧子は、そのあと志穂の作業に合流する。

志穂のしていた作業というのは、最初に自分で食べたいと言っていたハンバーグづくりだ。作り方は、俺が簡単に教えただけだったのだが、母親のつくっている様子でも見たことがあったのか、テキパキと作業していた。

合流した霧子も、玉ねぎを切ってぼろぼろ涙流してたりだ焼く前に両手でお手玉して空気を抜いていたりだと、しっかり作業に参加していたようだ。

「しかし、霧子も一緒につくったはずなのに、普通に食えるハンバーグが出来るとはこれいかに、だな」

「あたし、そこまでじゃないもん」

「きりりんがんばってたよ、ゆっきい。あたしよりパシパシするのうまかったよ」

「いや、あれはお前が思った以上に下手だったんだろ。力入れ過ぎだから肉が円盤状を通り越して平面に近くなっちまうんだよ」

「おかあさんは力入れてやってたよ？　おかあさんの方がじょうずなんだからまねしないでだよ」

「お母さんは一般人だろ。お前といっしょにするな。同じやり方したら不具合出るじゃん」

「えー、あたしとおかあさんのどこがちがうのー？」

「そもそもパワーが違うわ」

志穂は別に筋肉質とかいうわけじゃないのに、瞬発的に出る力が異

常に強い。だから力を入れてパティの空気抜きなんてやったら、空気が抜けすぎてペちゃんになる、という寸法だ。

こう、ところどころで常人離れしているわけなのだが、昔から通っているとかいう山の道場とやらに原因があるような気がしてならない。その道場、もしかして世界征服をたくらむ悪の組織の改造人間製造工場だったりしないかな……。

「まあ、美味しくできるのもある意味当たり前なのかもしれないけどな。味付けは、志穂がやったんだろ？」

「えっ、うん、そだよ。あたしがちよいちよい、ぱらぱらっって適当にやったよ」

「志穂は、適当に適切な味がつけられるのか。すごいじゃないか」

「えへへ、もっとほめてえへ」

「霧子も志穂を見習おうな」

「にゅん、しいちゃんすごいんだよ。あんなちよつとの調味料で、味付けしてるんだから」

「俺も晴子さんも、そんなに調味料ぶち込んでないだろ。お前は俺たちの料理のどこを見てるんだ、霧子」

「幸久君とおねえちゃんは、早すぎてどこみたらいいか分からない……」

「いや、そんなにでもないだろ」

「でも、一度にいろんなことするから、どれ見てたらいいか分からなくなっちゃうんだよ」

「ああ、確かにそうだな。晴子さんは四つくらい並行作業でつくってるから、確かにどこ見たらいいかわからんな」

晴子さんは俺の師匠で、当然俺なんかよりもずっと料理が上手い。晴子さんの特にすごいところは、何個も料理を並行してつくっていくところにある。簡単な料理だったら、四つも五つも並行でつくっていくから調理台の上はごちゃごちゃで、晴子さんにしか分からない理論と秩序がそこには広がっているのだ。

しかし晴子さんは、別に望んで曲芸的な調理法をしようとしている

わけではない。その行動原理は、単に生来の面倒くさがりにあるのである。

何回も同じ行程を繰り返すのはめんどくさい、とか洗い物が増えたらめんどくさい、とか、そういう面倒くささに対する逃避が極まっていた結果、極限まで行動の無駄がそぎ落とされ、時間のロスが消滅し、最終的にあの境地にたどり着いてしまったということだ。

ある意味では、面倒さを避けるために全力の努力を払った結果、今の晴子さんがある。面倒くさがりのくせに、どうして自分が楽をするための努力だけは怠らないのだろうか。

普通に努力すれば、いいんじゃないのか？

「霧子は、早く普通の味がつけられるようになるといいな」「うにゅ」

霧子は長年晴子さんの料理を食べ続けてるはずなのに、いつまでたっても味付けに対するバランス感覚が身についていない。俺も同じように晴子さんの料理を食べ続けここまで来ているというのに、まったくもって不思議でならない。

霧子も晴子さんの料理が美味しいということは理解しているんだろうし、その味を真似してみよう、という気にはならないのだろうか。それとも、もしかして、同じじゃ面白くない、とかいう理由でオリジナリティを追求しちゃったりしているのだろうか。

「技術的にはつくれてるのに、どうして味だけダメなんだろうなあ……」

「あたしの味は、ダメなの？」

「まあ、ダメっていうか、マッチしてないんだろうな。この料理にはこういう味付けが合う、みたいなものってあるだろ？　それが出来てないんだよ、多分」

それも、味付けに対するバランス感覚の一つなんだろうな。目指すべき終着点を上手くイメージできていないっていうのが、最大の問題なんだろうと思う。

「まあ、じきに味も付けられるようになるだろ」

「そうかな……?」

「ああ、たぶんな。じきに美味しい料理もつくれるようになるだろう、たぶん」

しかしまあ、三年くらい前からずっとそう言っているわけののだが、今のところそうなりそうな感じはない。そしてもちろんそうなる、という根拠もまったくないが、そう言ってやること以外に俺にできることなど何もなかった。

「天方は私よりもずいぶんと手際がいい。私よりも早く上手くつくれるようになるさ」

「きりりん、がんばってね!」

『きりちゃん、上手。すぐにもっと上手になる』

「がんばってれば、出来るようになるな、うん」

そもそも晴子さんの飯を毎日食っているという時点で、俺にしてみれば多大なアドバンテージを取っているのだ、時間さえかければ、料理が上手くならないわけがないのである。

そして俺たちが、調理が完成したことへの感慨か、霧子の味付けが上達しないことへの悲しみかに浸っていると、目の前にニュッと携帯の液晶が生えてきた。あまりに目の前すぎて、バックライトの光に目をやられたかと思った。

『幸久くん』

「おお、メイ。そうだそうだ、メイもよくがんばってくれたんだよな。相撲でいうなら敢闘賞だ」

なでなで、なでなで

俺が自然に手を伸ばして頭を撫でると、メイがビクッと身をすくめてうつ向いてしまうのだった。今どんな顔をしているかは、顔がすっかり下に向いてしまっているので確認できない。

あれ…、もしかしてイヤだったか……?

俺は、昔から人を褒めるときとか慰めるときとかに頭を撫でてやる癖がある。そんなことをするようになった原因が何なのかといえば、昔、霧子の頭を撫でてやったらこいつがエライ喜んだのだ、それが

いけなかった。

そんな、霧子を褒めてやって頭を撫でてやってという連係が常識となった環境に十年も浸っていれば、褒める＝頭を撫でるとつながってしまってもおかしくないのだ。

しかし、こんな癖、そろそろ直さないとまずいのかもなあ。志穂とか霧子とかは全然嫌がらないから、みんな平気なのか、って勘違いしそうになる。霧子なんて、褒めようとするとき少し屈んで、俺が撫でやすいようにするからな……。犬か、と。

そして、ビクツとなったメイの頭にいつまでも手を乗っけているわけにもいかず、何事もなかったように手をそこから退けたのだが、しかしその手のやり場を失ってしまい、なんとなくひらひらとさせていた。もう一度乗せるわけにもいかないし、急いで手元に引き戻すのもなんとなくおかしい気がする。

「ああ…、メイ？　なんか嫌だったみたいだから謝る、すまん」

『なにが？』

急に謝った俺に、メイは何の話か分かりませんみたいな顔で携帯を突きつけた。ふっ、とあげた顔には、微妙に朱が入っているようだった。

「頭、撫でられるの嫌だったろ？　なんかメイ、ビクツてなったからさ」

『イヤ、じゃない』

「そうなのか？」

『イヤなんじゃなくて、ちょっとびっくりした。ちょっと恥ずかしかった』

「三木、なぜそんなところで手をひらひらとさせているんだ。行動が不審だぞ」

「いや、そんなことないって」

「いや、怪しいな」

『違うの、のりちゃん』

「むっ、そうか、違うのか、持田」

『違う』

「本人がそういうのならばいいだろう。しかし三木は時折信じられないようなことをするからな、そんなことになったら恥ずかしがらず正直に言うんだぞ。風紀を動かすことも不可能ではないからな」

『うん、ありがと』

「えっ、なんで俺、そんなに信用しないの？」

「それは自分の胸に聴いてみるんだな」

自分の胸に聞いてみた。よく分からなかった。

「それで三木、ここで初めて見たわけではないのだが、お前は どうしてしばしば女子の頭を撫でているんだ」

「いや、理由ってほどのことはないんだけどさ……」

「なんだと！ 理由もなく異性に接触しているというのか！」

「その言い方、なんか俺がエロい人みたいじゃね！？」

「あのね、りこたん。ゆっきいはね、おんなのこのかみをなでなでする『とくしゅせゝへき』があるんだって」

間違いなくなにも考えていない志穂の言葉を受け取って、姐さんはザッ…、と俺から一步距離を取った。今ここで取られた距離が、俺と姐さんの心の距離をあらわしているようで、それは思った以上にショックだった。

「三木……、貴様……」

姐さんの俺をいぶかしむ目が、かつてないほどに厳しい。志穂の世迷言なんていつものことなのに…、俺の信頼度なんて所詮こんなもの、ということなのだろうか。

「志穂、どうしてそんな言い方しかできないんだ。お前は俺を追い詰めて楽しいのか？ なぁ？」

今の気分を的確に言い表すならば、今すぐに、志穂の両肩を掴んで前後左右にぶんぶんと振りまわしてやりたい気分である。

何というか、もう泣きそうだった。今まで一年近くかけて姐さんとは信頼関係を築いていたような気になってたんだけど、もしかしてそれは俺の幻想なのだろうか。

しかし、志穂がその無思慮な一言によって大いに損ねた姐さんの俺への信頼を、霧子がフォローする。

「幸久君がなでなでするのは、癖なの、ね？」

「そうなんだ、俺は人を褒めると頭を撫でる癖があるんだ。昔、撫でてやったら霧子が喜んで、それから十年くらいそれを続けてたら癖になった」

「癖か…、まあ、無くて七癖というからな、そういう人がいてもおかしくはない、ということか」

「そうなんだ、仕方ないんだ、見逃してくれ」

「見逃すも何も、癖なのだから仕方がないではないか。しかしあまり褒められた癖でないのも確かだ。直すことを勧めるぞ。ところで三木、天方や皆藤を撫でている姿はよく見るのだが、私のことは撫でないのか？ 癖なのだったら、同じくらい共に時間を過ごしている私のことを撫でても、決しておかしくはないだろう？」

それは、おそらくただ純粹な疑問なのだろう。確かに言っていることはもっともで、俺は姐さんのことはまったく撫でていない。撫でようとしたことも、あるいはないかもしれない。

「ああ、確かにそうだ。ほんとだな」

「そうだろう。分からねければそれでいいのだが」

「いや、別になんとなく、かな……？ 特に意識はしてないんだけど、もしかしたら、無意識に姐さんのことを撫でるなんて許されないことだと思ってるのかも」

「？ それは、どういうことだ？」

「いや、分からないけどさ、こう、俺が姐さんのことを撫でるなんて百年早い的な、そんなのだよ、たぶん」

「ふむ…、よく分からないな。それはなんだ、遠慮か？」

「遠慮っていうか、敬意だよ。いや、畏敬かも」

「そんなものは持たなくていい。私たちは友人なのだからな」

「でもまあ、親しき仲にも礼儀ありっていうかさ」

「それならば、天方や皆藤には礼を失していることにならないか？」

「あ？ …、ああ…、ほんとだな」

「それならば、私に対してもそのような遠慮などは不要だ。しかしかといて、気易く撫でていいというわけではないのだからな」

「それは、分かってるぜ」

確かに、別にそんなつもりは全くなかったのだが、俺は無意識に姐さんと他のやつらを区別しているのかもしれない。そうか、それは姐さんにしてみれば一人区別されているわけだし、いい気分というわけにはいかないだろう。

姐さんのことはすごいと思っているのだが、しかし尊敬しすぎるのも考え物だな。

『幸久くん、幸久くん』

俺が自分の行動を振り返って、うんうんと納得していると、また目と鼻の先を携帯のバックライトが通過した。

「ん？ どうしたんだ、メイ」

『お料理、運ばないと』

「あっ……」

そうだった。そうだそうだ、運ばなくちゃダメだよな。こんなところで無駄話してる場合じゃないんだよ。

時計を確かめてみると、確かに時間はさっきよりも過ぎていて、もうぎりぎりなどということはないが、しかし余裕綽々と言うほどでもない。他の班の作業も、盛り付けなどの最終段階に至っていると、ころがほとんどだ。

「じゃあさっさと持ってくか」

「はいはい、あたし持つ」

「お前、なんか落としそうだなあ…、やっぱ俺が持つわ」

「えー、あたしも持ちたいー！」

「それじゃあ霧子でも抱えてろよ。これよりは重くて持ち甲斐があるぞ」

「それじゃそうする」

「ひゃっ！！ しいちゃん、危ないよ！！」



俺の適当な言葉を真に受けて、霧子をひょいと持ち上げた志穂だったが、その姿勢は霧子一人持ち上げたくらいではびくともしなかった。もしかしたら、あと二人三人くらいならば乗ることができるかもしれない。というか、人一人を肩に乗せていて、バランスをまったく崩さないというのはどういうことだろうか。霧子は霧子でわたわたと暴れているわけで、普通なら少しくらいふらふらしたりするだろうに、そんな様子は全く見られない。

まあ、それはいいとして、料理を先生の待っているところまで運ぶわけなのだが、時間的にはまだもう少しだけ余裕があったりする。それならば、まだそう急ぐこともないだろう。

それならば、焦らずゆっくりと行こうではないか。

## 花見、和の心

花見とは、文字通り花を見ることである。

ここでいうところの花とは、何でもかんでも全ての花、というわけではなく、春に咲く代表的な花であり、また日本の国花であり、日本という国を代表する花であると言っても過言でない桜の花である。それは美しい花を咲かせるだけでなく、パッと咲きパッと散る、潔さとも言えるその性質に日本人の精神性を映すとまで言われる、日本と切っても切り離せない花だ。

春、多種多様な花が咲き乱れ、生物が息づく動の季節。その季節に、一瞬の美として咲き誇る桜を眺め、愛でる。言ってしまうえば花見とは、ある意味ではそれだけの行事なのだ。

しかしそれは、四季の移り変わりを色濃く感じることでできる日本だからこそそのイベントであり、風流を重んじる古来からの心意気の表れでもあるだろう。故に、花見をすることは、とても文化的な行為なのかもしれない。

まあ、そもそも学園の敷地内にこれだけ立派な桜があるのだから、花見をしないのも逆に失礼なのかもしれないのだが。

さて、ほんの少しではあるが花見というものに対して思いを馳せたところで、現状に頭を切り替えていこう。

荷物片手に調理室を出て、やってきたのは学園の敷地の隅の方にある大きな桜の下である。その木の周囲には、木を囲むようにでかいシートが何枚も敷かれていた。そこにはもうすでに何人かの人が座っていて、少しではあるが、すでに何やら楽しそうな雰囲気が漂ってくるようである。

この花見イベントというのは、俺は家庭科クラスだけで行なう懇親会的な小規模なものだと思っていたのだが、しかしそうではなかったらしい。そこに敷かれているシートの数を考えてみると、うちのクラスの30人程度で使いきれぬ広さではなく、それ以外にも多数

の参加者がこれから訪れるだろうことを予感させた。

そしておそらくその参加者というのは、生徒ではなく学園中の教師たちで、今ここにいる人数がそんなに多くないのはまだ授業時間が十分ほど残っているからだろう。

きつと授業が終わったら各クラスの担任や各教科の担当、用務員さんから事務さんまでがわらわらと大挙して押し寄せるに違いないのだ。

「しかし、ほんとにただの花見だな」

たくさん敷かれているシートのそばには、何箇所か飲み物が入っているとおぼしき巨大なクーラーボックスが置かれ、花見の準備はほぼ万端といったところだろうか。あとはただ、参加者がやってくるのを待つばかりという状態なのだろう。

そして向こうのシート、まだぜんぜん参加者が集まっていない今、人が座っているのはそのシートともう一つだけなのだが、何人かの教師が楽しそうに喋り合っているのが見える。手元には小さな重箱が置かれているし、一足先に花見を始めてしまっているのだろう。というか、そのシートの脇にはうず高く重箱が積まれている。なるほど、俺たちは自分らの分の食べ物を実習でつくったわけなのだが、先生たちのために用意した分はあれ、ということなのだろう。

「まったく、本当だな。授業の一環といえば何をしてもいいということはないだろうに、言うに事欠いて花見など許されんだろう」

「りこたんはお花見、きらいなの？」

「いや、花見をすること自体が嫌いというのではなくてだな、学校という公的な場でそのようなことをするのがどうなのだろうか、と言うのだ」

「でも、せんせーがしていいってってるんだし、いいんじゃないの？」

「皆藤、そうやって与えられる状況をただ惰性で受け入れ続けているだけでは、いけないぞ。いかに先生方がそう言っているとしても、それが正しくないということだってあるのだからな。批判的に状況

を理解していくことも重要なんだぞ」

「ひはんてき、って…、なに？」

「先生の言うことを聞いているだけではなく、自分でも考えてみるということだ。そうすることで、本当のことが見えてくるかもしれないからな」

「…、よく分かんない！」

「む、分からないのか……」

「志穂は言われたことやってればいいよ、だいじょぶだいじょぶ」

「ゆっきいがそういうなら、そうする」

「皆藤……」

俺たちは、先生が待っている課題提出先を目指しててくと歩いている。みんなで力を合わせてつくった、まだ温かい料理たちは俺が手に提げて持っている。

志穂はぺちゃくちゃ姐さんとおしゃべりしているわけだが、その肩にはまだ霧子を乗っけているわけで、どうしてそんなに余裕綽々なのか聞きたいくらいだった。乗つけられている方の霧子もその状況に慣れてきたようで、もうバタバタと暴れるようなことはなくなっていた。もしかして、運んでもらって楽だなあ、とか思い始めているのかもしれない。メイは何を思っているのか、一人押し黙って俺たちの隣を歩いている。しかしメイは絶対に人前で言葉を発しないぞ、と誓いを立てているようで、今までしゃべったことは、始業式の日には俺に声をかけたあの一回だけだから、黙っているというのは描写として正しくないかもしれないのだが。

「りこちゃん、せっかくなんだから楽しくお花見したほうがいいよ。だって、お花見をするっていうのはもう決まってることなんだから、つまらなくしてたら損だよ」

「まあ、せっかく花見をするのだから楽しくというのには賛成なのだが、しかしな、気になるものは気になってしまう。昔からそういう性分だな」

「りこたん、しょうぶんってなに？」

「そうだな…、そういう性格ということだ」

「そうなんだ、それならしょうがないよね」

志穂の語彙力が網羅している範囲には、時たま疑問を覚えることがある。普通に16年間の人生を送ってきて、知らないで困らないのだろうか、と思うような言葉を知らなかったりして、返答に窮することもたまにある。

そういうときは、俺は適度に適当なことを言っておまかせことにしている。

『でも、ほんとにこんなこととしていいのかな？ 怒られたりしない？』

提出しに行こうというときは平気だったのに、ここに来て急におどし始めるメイだった。きつとシートに座っている先生を見て不安になってしまったに違いない。

しかしまあ、少なくとも俺たちが怒られることはないような気がする。

「全然平気だって、問題ない。見ろよ、あそこ。八坂先生と木原先生がいて、その隣に座ってるのは校長と教頭だろ。学校のトップがやってることなんだから、それに付き合っている生徒が怒られるなんてことはないって」

ちなみに、木原先生というのは俺たちのクラスの担任で、フルネームを木原綾キハラアヤといい担当教科は英語。出る場所はしっかり出て、引っ込むところは引っ込んでいるとてもスタイルのいい人だ。しかも着ている服はいつもタイトスカートタイトプのスーツというのだから、男の子的にはいつも非常に目のやり場に困る。

そしてもう一人、八坂先生というのは副担任で、フルネームは八坂ゆりという。担当教科は、今まさに俺たちがやっている家庭科。とてもおっとりしているように見えるが、しかしその実機敏な人で、料理の手際の良さは折り紙つきだ。着ている服は、なぜかいつも振り袖で、どうやら何種類も保有しているらしく、同じ柄のものを着ていることはあまり見ないオシャレさんだ。

「本当だ、校長先生と教頭先生だな。ここまで上にいる先生が認めているということは、この花見は学校行事と捉えてもいいのかもしれないな」

「もうなんでもいいじゃん。気にしたら負けだよ」

「きつとあたしたちが何を言ってもお花見はするんだよ。それなら楽しくしてたほうが得だよ、幸久君」

「そうそう、抗っても無駄だよ。一生徒が何か言ったくらいでなくなる行事なら、もうとっくの昔になくなってるだろ」

「ふむ、確かに一理あるな。それもそうかもしれない」

今のところシートに座っているのは担任と副担任、校長と教頭の教師四人に、俺たちよりも早く調理を終えて調理室を出た班、八坂先生の肝いりであり家政部に所属する弓倉を筆頭に料理が比較的得意そうな感じがする高見、遠藤、榎木の四人で、計八人だ。

まあ、クラスの連中とはまだほとんど話せていないし、その四人がどういう人なのかということも実際のところほとんど知らないわけだ。どうして料理が得意そうと思ったかだって、実際に料理しているところを見てそう感じたからでしかないのだ。

「っていうかここにあるシートが全部埋まるとなると、この後かなりの人数来るんだろうな……」

「そうだな、おそらくこれだけシートが敷いてあるということとは、学校中の職員の方々が軒並み集まってくるのだろうな」

「そうだろうなあ、先生のところに積んである重箱の数も相当のもんだしなあ」

「一人に一つではないにせよ、あれだけの数なら60人ほどは集まってくると思うぞ」

『知らない人、いっぱいになる？』

「うーん、そうなるんじゃないか？」

『どうしよう……』

知らない人がいっぱいというのが怖いのか、花見なんてしていて怒られないかとおどおどしていたときはまた違う意味でおどおどし

ているメイだった。しかしそんなことを気にしていたら、人ごみの中を歩くなどの日常生活が健全に送れないのではないだろうか。

というか、メイはバス通学だったはずだし、バスの中なんて知らない人ばかりなのではないだろうか。いや、それとも学園に向かう人がその乗客の大半を占めていて周りはみんな同じ制服、みたいな状況なのかもしれない。

それならば、あるいは普通に人ごみの中を歩いて通学するよりも安心感はあるのかもしれないな。まあ、詳しいことはメイ本人に聞かないと分からないわけなのだが。

「メイ、そんなこと別に気にしなくていいって。知らない人っていても相手はこの学園の職員じゃん。見ず知らずの赤の他人というわけでもないんじゃないか？」

『そうだけど』

「まあ、何にせよ初めて会う人って緊張するよな」

『うん』

「それじゃあそうだな、メイは先生たちから一番遠いところに座るといい。そうしたらさ、話しかけられる確率も減るかもだろ？」

『ほんと？』

「うーん、絶対そうとは言えないけど、そうなるかもしれないと思ってる。っていうか、思ってたなかったらそんなこと言えない」

『なら、幸久君が考えてくれた通りにしてみる』

「ああ、俺も、先生が来てもメイの方に行かないようにしてやるわ」  
『幸久君、ありがとう』

「別になんて事ないって。で、話は変わるけど、志穂はいつまで霧子のことを肩に乗っけてるんだ？」

「ほえ？　べつにきめてないよ？」

「幸久君、しいちゃんの肩に乗っかっていると、いつもより背が高くなった気分だよ」

「お前はそれ以上背がでかくなってどうしようっていうんだよ」

「にゅ、たしかにもうおつきくならなくていいかも」

「もうすでにかなりでけえつつうのに、これ以上は止めといてくれよ。霧子、俺よりもでかくなっちゃダメだからな？」

「だ、だいじょぶ、身長はもう去年からあんまり伸びてないから」

「あんまり伸びられるとき、こう、悲しいじゃん？　なんていうかさ、頭に手とかすんなり届かなくなるだろうし。現に今も…、遠いなあ」

「にゅ…、あんまり伸びないようにする……」

霧子の頭を撫でられなくなるというのは、昔からやっていたことができなくなるということで、別に具体的に不利益のようなものがあるわけではないが、想像してみると少し物寂しいものがある。たどえるなら昔からなじみの駄菓子屋さんがなくなってしまいうような、そんな感覚だろうか。

「まあ、成長には抗えないよな、仕方ない。今度はさ、身長だけじゃなくて他のところが成長するといいな」

「ほんとにね……」

ついさっきまで軽い苦笑い話をしていたはずの霧子の顔が、俺のたった一つの発言によって一気に物悲しいものへと変わってしまった。正直に言おうと思う、今のは完全に口が滑った。

霧子にはそういう、体の成長に関する話題は基本的に禁止なのだ。

「こんなに育っちゃってもう……」という話題ならまだ大丈夫なのだが、特に「ぜんぜん育ってないね……」という話題は決定的にいかんのである。ナメクジに塩をかけるよりいかんのである。

別に俺は、胸の大きさを女性のことを差別するような危険な原理主義思想を持ってはいない。

胸が大きく膨らんでいるというのは、ある意味では母性を表徴してるわけで、女性としての魅力の一つの形であるとは思う。しかし、慎ましやかな胸をしているというのも、ある意味では乙女らしさや可愛らしさを表徴しているといえるわけで、これも一つの魅力だろう。

さらに、女性の魅力について考えるとき着目するべきところは一部



分ではなく、全体をトータルで見たときの総合点だ。いかに一部分がとても魅力的でも他のところが今一つならば、それはあまり魅力的な異性とは言えないのではないだろうか。

つまり、テストで大問一つが満点だとしても他の部分で全く点が取れなければ、全体で見たとときのいい点は取れないということだ。まあ、そもそも俺が他の人の魅力を探点することができるほど大層な人間なのか、というところに視点を戻してしまえば、俺自身沈黙するしかないのだが。

そろそろいったい何のフォローをしているのか分からなくなってきた頃だが、霧子はスレンダーなモテカワスリムの愛されガール、それでいいのだ。

細かいことを、気にしてはいけないのである。

## 先生とおしゃべり

「八坂先生、三班です」

先生たちの座っているシートのところまでつくった料理を持っていくと、そこでは絶賛酒盛り中だった。

「あら、三班さんは二着ですね」

にこにこしながらクルリと振り向いた八坂先生だが、水ではない透明な液体が満ちたグラスを両手で包むように持って、時折それを傾けて少しずつ喉に流している。木原先生はその後ろで、校長と教頭のグラスに一升瓶からトクトクと酒を注いでいた。

「時間まではもう少しありますけど、まだみなさん調理室にいましたか？」

しかしまだ始まったばかりのようで、四人の真ん中に置かれた重箱にはほとんど手がつけられていないように見えた。

こちらを向いている八坂先生は、ほとんど酔っている様子は見られない。またそれは、後ろの先生たちも同じことである。

「他の班もすぐに来ると思います。私たちが調理室を出るころには、皆盛り付けをしていましたから」

「そうですか、報告ありがとうございます、風間ちゃん」

「いえ、当然のことです」

いかに年齢的に問題がないからといって、学校で酒を飲んでいるということが風紀委員として認めがたいのか、先生たちに向けている姐さんの笑顔は微妙にひきつっていた。

本質的に真面目な姐さんは、風紀委員ということもあって教師ウケがいいので、こうやって先生と話をするのが比較的上手だ。風紀委員であるという事実、それだけで教師たちにとってかなり信頼に値するのだろう。

まあ、あれだけ大変な風紀委員の仕事をこなしているのだ、そりゃ先生たちから信頼もされるだろうな、と。

「三班さんは三木ちゃんがいるから一番に来ると思ってたんですが、惜しかったですね」

「いや、がんばったんですけどね」

「でも、スピード勝負というわけではないので、気にすることはいいですよ」

「いや、霧子が足引っ張りまして」

「にゅ、そんなことないもん！」

「天方ちゃんは、お料理苦手ちゃんですよ？」

「ちょ、ちょっとだけです……」

「これから上手くなればいいですよ。そのために家庭科のお勉強するのですから」

「にゅ…、はい……」

「とりあえずお疲れさまでした、あっちのほうが一着のシートです」

「はい」

つまり着順は花見の席順だったわけだ。俺たちは二着だから結構いいところに違いない。

「あつ、三木ちゃんはちょっと待つですよ」

「えっ？ あつ、はい」

「よし、あっちだそうだ、私は飲み物取ってきてやろう。みんな、何が飲みたいか言ってくれ」

「あれ、待ってくれないの？　すぐ終わる用事だと思うよ？」

「オレンジジュース！」

「お茶っぽいのがいいな」

『あんまり甘すぎないのがいいな』

三人はてんでばらばらの注文をしている。俺の話は素通りしている。

「えっ？　ちょ、ちょっと？」

「分かった。それでは先に行っていてくれ」

「じゃあ待ってるね」

「はーい」

『お料理は幸久君が持つてきてくれる？』

「ああ、そうだろうな」

「あ、姐さん、俺、炭酸！ 炭酸のあったら、取っついて！ 炭酸ほしい！」

「ああ、あったら取っておこう」

「はい、三木ちゃんは、ここに座るですよ」

「あっ、はい」

「それではな、三木」

「先に行ってるね、幸久君」

「ばいばい、ゆっかい」

『あとで』

わけも分からず八坂先生の隣に座らせられた俺は、ただ手を振りながら去っていく仲間たちを見送ることしかできない。なんというか、置いてけぼりにされるというのは、意外と精神的にダメージがでかいようだった。なんか楽しそうにおしゃべりしながら背中を向けて離れて行く仲間の中を見送るのは、正直キツイ。

俺はあまり人に置いてけぼりにされることはなかった。というか、置いてけぼりにされるのは霧子の専売特許だったはずで、立場が逆だろう、と。そうか、これが霧子の気持ちということなのか。

「三木ちゃん、どうしてここに残されたか分かりますか？」

「わ、分からないです……」

何だろう…、こうやって先生に残らされるっていう経験自体が生涯通じて少ないから、これから何が起るのかまったくわからない。もしかして怒られるのだろうか。

しかし怒られるといっても何を？ 俺はなにも怒られるようなことはしていないつもりだ。しかし実は何らか俺の行動が先生の目についていて、俺は怒られるようなことではないと思っただけ、先生にしてみれば怒るべきことだったとかいうこともありえないわけじゃない。

ああ、まずい、混乱してる。混乱してるぞ、俺……。

「実は、特に意味はないですよ」

「えっ、意味ないんですか!？」

「あゝ、いえゝ、意味はあります。深刻な意味はない、ということですよ」

「えっ? 何か怒られるとかじゃ、ないんですか?」

「なんで三木ちゃんを怒るんですか?」

先生は、心底分らないという顔で、くいつ、と小首を傾げる。普通だったら、先生が生徒を呼びとめるというのは何らか意味がある。しかもそれは何か用事を言いつけるとかでもない限り、それなりに重い事情があるはずだろう。たとえば問題行動を注意するとか、何か理由があって怒るとかだ。

「いや、だって、えっ? じゃあ、何のために?」

「三木ちゃんは、こんなにいい子なんですよ。先生は怒ることなんてないですよ。三木ちゃんがここに座ったのは、先生の相手をするためですよ」

「相手、ですか?」

相手をするってどういうことだろう。俺は年齢的にも体質的にも酒は飲めないから、酌をすることはできるかもしれないが、酌み交わすことはできない。

出来ることと言ったら、ただおしゃべりをするとか、いっしょに重箱をつつととか、そんなことしかない。それだったら、年齢が近くて立場も近い木原先生が隣にいるじゃないか。八坂先生は木原先生と仲もいいみたいだし、俺ではどう考えても役不足だろう。

「木原先生が、そこにいますけど……?」

「先輩は、ダメですよ。ああやって偉い先生に媚を売ることしか考えられない出世の鬼になってしまったので、先生ではどうすることもできないですよ」

「ああ、つまり、木原先生がしている接待が終わるまで相手をしろ、ってことですね?」

「別に先輩が戻ってきてからもう、相手してくれてもいいですよ」

」？

「いえ、それは…、まあ、そのときになってから…。」

「そうですね、それがいいでしょう。」

一瞬、俺が「木原先生が戻ってきたらみんなのところに戻ります」、と言おうとしたところ、先生の目元がギリリ、と光り、俺はそれ以上何も言えなくなった。

あれは獣の目、狩りをする野獣の目だ。下手なことを言ったら狩られる。ここはおとなしく先生の言うとおりにしておいた方がいいのかもしれない。まあ、別に先生は美人だし、いっしょにいて役得だと思うことはあっても、辛いと思うことなどはないのだが。

「先生は、木原先生みたいにしないでもいいんですか？ 出世とか、あるんじゃないんですか？」

「先生は、出世なんてどうでもいいのです。」

「そうなんですか？ 確かに野心家っていう感じには見えませんが…。」

先生は野心家というよりも、むしろ若くして隠居しているようなといった方がしっくりくる。いつも和服でゆったりとした性格だし、風に舞う羽毛のように、ただあるようにある生き方が合っている感じはする。

「出世はどうでもよくて、ただ楽しくお料理して、ただ楽しくみんなといっしょにお勉強していられれば、何でもいいです。」

「でも、やっぱりお金とか必要じゃないですか？ 楽しく過ごしていてもお金はかかりますし、あって困るものでもありませんし。」

「いえいえ。そういえば、先生はですね、実は大学生のころに株っていうのをやってたんですよ。」

「株？ ああ、株価とかの、あれですか？」

なんでここで株の話？ 何かつながる話なのだろうか。お金は大事だよ、って話じゃないのか？

「そうですね。もともとは先輩がやってたんですが、こらえ性がないのであまりうまくいかないんですね。それでですね、先生

は付き合いでついでにちよつとだけやってただけなんですよ」

「へえ、そうなんですか。そういうのはちよつとだけやってる分には楽しそうですね」

「そうですね、ちよつとしたゲームみたいなものですから、楽しいは楽しかったですよ。でも、三木ちゃんはやっちゃメ、ですよ？」

「ダメなんですか？」

「そうですね、三木ちゃんのはめり込むタイプみたいですし、やっちゃメ、ですよ」

「心しておきます」

「いい子いい子ですよ、よしよし」

頭を撫でられてしまった。先生の小さな手が髪の上を行ったり来たりするために鼻先を振り袖の大きな袖がかすめ、いいにおいがふわりと漂う。何かお香を焚きしめたりしているのかもしれない。

「それでですね、株のお話なんですが」

「あつ、はい。それでどうなったんですか？」

「ゲームみたいなものなんですが、お金がかかっているんですね。確か、デイトレーディングとか言うんですよ」

「はい、企業とか銀行とかと関係なくそういうことをするアマチュアみたいの人たちがやってると、そうやって言うんだった気がします」

「先生は、そういう細かいことはよくわからないのですが、まあ、そういうことをやっていたんです。それでですね、先生はそういうのでお金が儲かるなんて全然信じられなくてですね、本当に先輩の付き合いでやってたんですよ」

「まあ、ゲームみたいなものですし、博打で金もうけしていいこうとするようなものじゃないですか？」

「いえ、純粹に博打というわけでもないんですね。確率しか関与しないサイコロの出目にお金をかけているわけではないので」

「そうなんですか？」

「株というのは会社があるからあるんです。会社は人がやっていますよね？　ですから、単純に株価の上がり下がり確率で理解されるわけではないんですよ」

「ふむふむ……」

「なんといいますか、これからその会社がどうなっていくかという見越すといいますか、頑張ってくれそうか、そうではないかを察知するんですよ」

「ああ、なるほど」

「まあ、それを思うのは最近になってからですよ。当時はそんなことを考えていなかったの、単純に運任せでやっていました」

「それは、純粹に博打ですね」

「そうですね、ルーレットの数字にかけるようなものですね」

「ということは、先生は何度か買ったり売ったりしたってことですよね？」

「してないです、先生は一回買って、それを売っただけなんですよ」

「へえ、本当に付き合い、っていう感じだったんですね」

「そうですね。で、ですねえ、先生は、お遊びにあんまり高いお金は使いたくなかったんですが、みんな十万円ずつ買うという取り決めだったらしくて、先生も諦めてそれだけ買ったんです」

「十万ですか、学生としては、高いですね」

「先輩はお遊びに本気を出す性質でして、中途半端も嫌いだし、先生もそれに付き合ってたんですね」

「同じものを、買ったんですか？」

「いゝえ、先輩は先輩の上がりそうだと思ったところを買いましたし、先生は先生のいいなあ、と思ったところの株を買ったですよ」

「どういふところの株を？」

「小さな売れていない、上場したての食器輸入会社です。ホーム



ページを見て素敵な食器をたくさん輸入してくださっているということが分かったので、頑張ってください、という気持ちで、どんと十万円分、買ってあげたですよ」

「はあ…、豪気ですねえ……」

それは、ある意味では金をどぶに捨てるような行為かもしれない。まったく売れていないということは、その会社が注目される可能性はとても低く、同時に株価が上昇する可能性もとても低いということだ。

そういうお金の使い方ができるということは、もしかして先生はいいところの生まれだったりするのだろうか。それともただ、金銭感覚が俺とは違うだけなのかもしれない。

「それですね、そのあと三年くらいその株のことは忘れていました。その会社のことは気にしていたんですけど、株価には興味がなかったのさ」

なんだらう、なんとなくだけど、すごく痛快な話に発展していくような気がする。この話、もしかして最初の話とつながっているのか？

「も、もしかして…、三年後に確かめてみたら株価がすごい上がったとか…、そういうお話ですか？」

「？ いえ？ そんなことはないですけど？」

「あれ？ えっ、そういう話のつながりがあるんじゃないんですか？」

「つながりは、ないですね。ただの世間話、というか先生の昔のお話ですから」

「え…、ただの昔話なんですか…？」

「はい、その会社は倒産はしていませんが、いまも大して流行っていませんね。株価も、別に成長はしてない、というかむしろ下がってます。ですが、輸入している食器はいつ見ても素敵なものばかりで、たまに株主優待で安く買ってます」

「あっ、そうなんですか。食器っていいですね。実用性の中に美があつて」

「分かってるですね、三木ちゃん。だから好きです、かわいいですね」

よしよし、と再び先生の手が俺の頭に乗せられる。なんだろう、ごまかされてる……？　っていうか、好きとか言われても戸惑うんだが。

「で、あの、お金はいいっていうお話は？」

「ああ、お金ですか？　先生は慎ましやかに暮らしているので、今もらっているお給料だけで十分ということですよ。それに、確かにあって困るものではないですが、必要以上にあっても、必要ないですから」

「そういう考え方も、ありますね」

「そうですね、先生は今のままゆっくり生きていけばいいですから。それで、あと五年くらいで結婚すればばっちりですよ」

「そういう当てがあるんですか？」

「うふふ、どうですかね？」

むう、どうにも意味深長である。

そのとき、料理が終わったのだろう、調理室からクラス的面々が大挙して押し寄せるのが眼の端に映った。これから先生はそれぞれの班の重箱のチェックに忙しくなるだろうし、ここには邪魔になっってしまうかもしれない。

これは、そろそろ退散するときが来たのかもしれない。

「あらら、みんな来ちゃいましたね。これでおしゃべりもおしまいですかね」

「そうですね。俺もそろそろ戻ります。邪魔になったら悪いですし」「そうですか？　それでは、あとでまた見回りに行きますね」

「失礼します、先生」

おしゃべりしながらもチェックを済ませてくれたのだろう、俺の手元にはすでに料理を詰めた箱が戻っていた。それじゃあ、これをもって班のシートに向かうとするか。

確か、あっちだったな。うん、あっちだ、あそこにいるのが見える

からな、間違いない。

## 突撃！隣の花見ご飯！

みんなといっしょに二着の班に割り当てられたシートに向かおうとしたところ、先生に呼びとめられてしまった俺は、しばらく先生とのおしゃべりに付き合っていたわけなのだが、しかし調理の制限時間が終わりに近づくにつれて先生の仕事が激化したこともあって、俺はその邪魔にならないようにおとなしく、手元に戻ってきた大きな箱を手提げで自分のいるべき場所に帰ることにした。

ここから見る限り、四人はもう飲み物を開けて飲んでいるらしく、俺抜きで楽しそうにおしゃべりをしているようだった。なんだろう、この言い知れない疎外感。

「別に寂しいんじゃないし。何でもないし」

無性に手に持った荷物をぶんぶんと振りまわしたい衝動に駆られるが、そんなことをしては中の料理が攪拌されて凄まじいことになるてしまうので、当然そんなことはできない。そんな俺に出来ることといったら、少し地面を蹴って、他人の迷惑にならない程度に砂煙を立てることくらいしかない。

「やあ、三木君。お疲れ様」

俺がいないのに楽しんでるなんて、と拗ねているわけではないが、上の空で歩いていた俺に声がかけられたことに、ふと気がついた。すわ何事か、とあたりを見渡すと、ちょうど俺たちよりも先に先生のチェックを通った一着の班が座っているシート、つまりは弓倉チームということなのだが、の真横を通り過ぎるところだった。

「ああ、高見、お疲れさん。トップだったんだってな、すげえな」

「いや、そんなことはないよ。弓倉さんが大半やってくれたようなものさ。僕なんて、たいして役には立たなかったさ」

背筋の伸びたきれいな正座のままで俺に声をかけたのは、高見順<タカミ ジュン>。

身長が高くショートカットでスレンダーな彼女は、しっかりと男っ

ばい格好をしてしまえば、あるいは美少年で通るのではないか、というほど中性的な風貌をしており、初対面でその性別を即断することとは難しいかもしれない。俺も最初に見たときは、女物の制服を着ているというのに、異性なのか同性なのか少しだけ迷った。

しかし、動きとか仕草とかは誰よりも女の子らしいのかもしれない、と、よく観察していた甲斐あって最近に分かってきた。ちなみにクラスの中でも、うちの班の面々以外で、一番俺と話をしてくれるやつだったりもする。

「そんなことはないわ、高見さんだってきちんと割り振られた役割は果たしていたでしょう。そうやって変に引くのは感心しないわ」

「そうかい？　はは、弓倉さんは手厳しいな」

「わたしは本当のことを言っただけよ。確かにわたしの方がみんなよりも少しだけ多く料理をしたかもしれないけれど、それはただそうだったというだけで、特別わたしが役を為したというわけではないわ」

「弓倉は家政部だしな、自分の割り当てが早く終わったんだろ？」

「ええ、そうよ。家政部だからというのは理由にならないけれど、少し早く済んだというだけのことだわ」

高見のちょうど横のあたりで、つんとして紙コップを傾けているのは、弓倉楓くユミクラ　カエデ>。

中背でほっそりとしている外見、軽くブラウンが入ってふわっとしたワンレングスのショートボブ、目元は少しきつい感じ。教室では俺の後ろに座っていることもあり、たまにおしゃべりするが、少し取っつきにくい感じもあって、今までそんなに深く話したことはない。

家庭科専攻クラスで家政部という、ある意味ではクラスの中で一番料理をつくることに対して真剣な彼女は、おそらくクラスの中でもトップクラスの調理スキルを持っているだろう。いつか、料理の話とかしてみたいなあ、と思うが、それはいつのことになるだろうか。「三木君も、料理は得意なんでしょう？　それくらいのこととは、見

ていれば分かるわ」

「いや、得意ってほどでもないって。家で必要に駆られてやってるけど、趣味程度だ」

「そう、それならいいんだけど。せっかく料理が好きなんだったら家政部に入ればいいのに、と思っただけよ。別段人数が足りなくて廃部の危機ということはないけれど、料理が好きな人はいつでも歓迎だから」

「部活か…、今はちよつとな…」

「まあ、そうよね。入るなら一年の最初に入ってるわ。別に無理強いているわけではないから、そんなに気にしないでちょうだい」

「ああ、興味はあるから、余裕ができたら入るかもしれない。まあ、今はとにかくそれどころじゃないから無理なだけどさ」

「もし入りたくなったらゆり先生に言っちょうだい。顧問をやってくださいっているから」

「分かった、そのときはそうさせてもらうよ」

「三木君は、お料理得意なんやなあ。うちは、もう大ざっぱにしかつくれへんから、あかんわあ」

どこの方言かは分からないが、おそらく西側の言葉で気さくに口をはさんだのは、榎木浩子<エノキ ヒロコ>。

背は平均くらい。背中まで垂れている明るめの色の長髪に毛先のあたりでリボンを縛って、まるで提灯のような形に整えている。太っているという感じではないが、要所要所がふくよかで全体的に女性的な、ふんわりとした印象を受けるクラスメイト。

話を聞くとところによると、ご両親が共働きの上に家には小さな弟やら妹がたくさんいて、その世話で毎日大変なんだそうだ。俺は、一度にたくさんのお小さい子たちを世話する、というのはしたことがないからよくわからないが、それはたいそう大変なことだろう。志穂一人の面倒を見るだけでいっぱいいい俺には、そんなことはできないに違いない。

「大ざっぱにつくれるのって、俺はある意味特技だと思うけどな。」

細かいことにばかりこだわって失敗するくらいなら、少し適当でもいいから成功させることの方が大事だと思うし」

「そっかあ？ なんやいつもごちゃごちゃってつくってもうて、見栄えとかあかんねんで？ エラいがんばらんと、きれいにつくれへんねん」

「美味ければ、少しくらい見栄えが悪くてもいいと思うけどなあ……」

「そのあたりは、わたしとは違うわね。見解の相違だわ。料理の見栄えは、その料理を引き立てる一つの重要なファクターよ。食べられればいいなんて考え、よくないと思っているわ」

「せやろなあ、うちもせやわあ。お店とかで見栄え悪いのとか出てきたら、感じ悪いやん？」

「でも家でつくるんなら別に問題ないんじゃないか？ 家で食べるんだったら、見栄えがよくて普通の味っていうよりも、見栄え悪くても美味しいのの方じゃないか」

「そういう話をしているんじゃないの。見栄えの良し悪しを感じる味にも影響してくる、という話をしているのよ。おいしい料理をつくるのは前提として、そこに付加条件として料理の見栄えがどう関わるか、ということよ」

「うちは、やっぱきれいな方がええなあ。チビさんたちもな、おべんとさんかわいくつくったげると、ようさん喜んでくれるんよ」

「あと、最初から見栄えが多少悪くてもいいと思ってつくると、最終的につくり自体も雑になってしまいうわ。そうなってしまえば、いかに美味しくつくろうと思っていても本末転倒になる。完璧なものをつくらうとする結果として、一つの料理が出来上がるの。そのの不出来は、あくまでも自分自身の力量不足であるべきだわ」

「ふむ、そうか、全力を尽くすことこそが求めるわけで、一つの妥協によって料理全体に妥協が感染するってことだな。なるほど、力量不足の結果として見栄えが悪かったり味がよくなかったりするのと、最初からある程度諦めていてそうなるのとはまったく別物って

ことだ」

「あら、物分かりがいいのね。賢い人は好きよ」

「それはどうも。俺も比較的賢いやつは好きだぜ。バカが嫌いってわけじゃないけどな」

まあ、そもそも頭のいい悪いで人付き合いはしていないわけで。もしバカが嫌いなら、志穂などといっしょに過ごすことには耐えられないだろう。

「せやけどほんま、お料理ってむずかしいわなあ」

「ええ、難しいわ。ほんの一瞬、一挙動でその良し悪しがすっかり変わってしまうんですから」

「弓倉は、なんというか、志しが高いな」

「楓ちゃんはなあ、将来お料理つくる人になるんよ」

「調理師よ。高校を出たら専門学校に入って、それからイタリアに修業に行くの」

「はあ、そりやすげえな……。ビジョンがあるんだな、ちゃんと」

「ただの夢よ。具体的なプランではないわ」

「俺なんか、今が精いっぱい将来のことなんて全然見えないよ。夢があるって、いいことじゃん」

「うちはな、幼稚園の先生になるんや。それが昔からの夢なんよ」

「なんだ、みんな夢があるのか。俺だけ夢も希望もない人間みたいじゃん」

「三木君、僕も同じだ。今のところはとりあえず進学、としか考えていないよ」

「なんだ高見もか。夢も希望もない仲間だな」

「はは、そうだね」

「いや、そないなくくり方はどないやろ……。夢も希望も、心の中にはあるんちゃうん？」

「ああ……、ある、かもしれない」

「それに、夢や希望を持っていればいいというものでもないでしょう。ただの夢は、夢想でしかないわ。それをいかに実現するか、と



いうことを視野に入れなければ、そんなもの持ってもあまり意味はないわ」

「必要なのは、夢ではなく目標ということだね。となると、僕の今の目的は大学に合格して将来したいことを探すこと、になるのかな？」

「ええ、それでもいいと思うわ。漠然とした御大層な夢を持って未来に足を進めても、それに伴う意思がなければいずれ潰れてしまうわ。分不相応な夢に向かうには、それだけ覚悟と意思がいるということ。一歩ずつ、段階的に目の前の目標を超えて行くことで、夢に向かって進んでいく方が、わたしはいいと思うわ。そうしていれば、夢想でしかなかった夢が、目標に変わる日が来るかもしれないじゃない」

「弓倉は、難しいこと言うなあ……」

「確かにそうかもしれないわね。現に私も、そうしたらいいとは思っているけれど、実際にそうすることはできていないもの」

「でも、そんなこと考えてるなんて、進んでるな」

「そうかしら？　これくらいのこと、みんな、潜在的に考えているんじゃない？」

「少なくとも俺は、そこまで詳しくは考えてなかったな。将来のことともそうだし、夢っていうものについても」

「そう。それならば、今から考えて行けばいいわ」

「ああ、とりあえずはそうしてみるよ」

実際、昔思っていた将来の夢は何だっただろうか。今となってはすっかり忘れてしまったが、確かに何かしら思っていたような気はする。夢も希望もないのではなく、夢も希望も、思い出せなくなってしまうただけなのかもしれない。

あるいは、本当に思い出す価値もないくらいしょうもないことを思っていたのだろうか。帰ったら、小学校の卒業アルバムでも探してみよう。

「何にしても、今はとりあえず花見でいいんじゃないか？　とりあ

えず目の前の目標はクリアしたわけだし、その先について考えるのは、少し休憩したあとでもいいと思うぞ」

「そうだね。せっかくつくった料理が食べないうちに冷めてしまうというのも、もったいない話だよ。さあ、僕たちも食べようか」

「せやなあ、桜もこないきれいに咲いとるし、おしゃべりばかりしとつても失礼やろ。うちら、お花見に来てるんやさかい、お花、見んとあかんで」

「そうかもしれないわね。満開に咲いた桜を見ながら楽しく過ごするのが、お花見だもの」

「あつ、せや。あんなあ、うち、センスに割りばしもろたで。これ使って食べ、て」

「ほら、遠藤さんもいっしょに食べよう」

「う、うん……」

高見の後ろに、まるで俺の目から隠れるように、と言ったら言い過ぎかもしれないが、座っていてそこからそろそろと顔を出したのは、遠藤涼くエンドウ スズ>。

志穂やメイと大して変わらない、ちんまりとした上背に、座敷わらしのようと言ったら失礼だろうか、耳まで隠れるおかつぱを乗せ、伏し目がちな彼女だが、しかし俺は残念ながらほとんど会話をしたことがない。

図書委員に所属していること。とても静かで本を読むのが好きらしいこと。いつも昼休みはお弁当を持ってどこか、おそらく図書室、に出かけていくということ。彼女についてはそれくらいしか知らない。話をしてみたいが、驚かせてしまうのも悪いので、とりあえずあちらから話しかけてくれるまで待つことにしている。

「三木君、どうかしら、せっかくだから一口くらい食べていかない？ 評価する視点ではない見方で食べてくれる、料理の上手な人の意見を聞いてみたいの」

「えっ、いいの？」

「みんな、それでいいかしら？ それとも嫌なら、わたしのつくっ

ただのだけということでもいいけれど」

「ええよく、うちは。ぜんぜん気にならへんから」

「僕もかまわないよ。もっとも、三木君の口に合うかは分からないけれど」

「あ、あたし、も…、平気、です……」

「じゃ、じゃあ、一口だけでもらっちゃおう、かな？」

手に提げた荷物をシートの上に置かせてもらって、俺は靴を脱いで高見の横に失礼することにした。こうして快く迎えてくれるようないい奴らが相手なら、クラスで唯一の男子、という壁を超えることも、そんなに難しいことではないのかもしれない、と思えてきた。しかし八坂先生が直々に、一年もの間技術を授けてきた、いわば先生の弟子ともいえる弓倉のつくった料理は、正直に言ってかなり楽しみだった。学ぶところも、いろいろあるだろう。

自分の班に戻るのは、ここで少し料理を食べさせてもらってからでも遅くはないし、しばらくの間ゆっくりさせてもらおうとするか。

## じゃんけんをしようよ！（1）

「っと、そろそろ行くわ」

弓倉たちのつくった料理たちのご相伴にあずかりながら少しおしゃべりしていたわけなのだが、しかしよく考えたら俺は自分の班のシートに戻っている途中だったということを、不意に思い出した。

弓倉たちの料理が刻一刻と冷めていくのと同様に、俺たちの班の料理たちも冷めていくのだ。いつまでも他所の班で道草を食っているわけにはいかないのである。いや、食っているのは弁当なのだが。

「ごちそうさんな、みんな美味かったよ」

「おろろ？ 三木くん、戻ってまうんか？」

「ああ、食うだけ食って逃げるみたいになっちまって」

「別に気にしなくていいわ。こちらから食べてくれないか、と言いつ出したのだから」

「そうか、そう言ってくれと助かるわ」

実際、一口食べさせてもらうどころではなく、それなりに食ってしまっただけからこんな気分になっているわけなのだが、それもこれも美味かったからと理解してもらえると助かる。別に俺だって、意味もなく他の班の料理を食い散らしているわけではないのだ。

「じゃあ、また片付けのとき、になるのかな？」

「そうなるのか？ 別にこのあとうちの方まで来てくれてもぜんぜんいいけど？」

「わたしは、ここで静かにお花見をさせてもらうわ。あんまり騒ぐのは、好きじゃないの」

「うちもそうさせてもらうわあ、キレイにつくらんとて気い張ったから疲れててん。静かにして、回復せんとあかんわ」

「そうか、それなら僕もここでゆっくりすることにするよ。またあとでね」

「ああ、あとでな。遠藤も、あとで」

「う…、うん、また…、あとで、ね？」

そして俺は自分の班のシートに戻ることにした。調理の制限時間もそろそろ終わるころ、ということもあり、ほとんどすべての班がシートに座っている。そしてそれ以外のシートには、いつの間に集まったのだろうか、たくさんの学校関係者が座っていた。

花見は特に開始の音頭が取られたわけではないが、三々五々勝手に始められているようだった。学校行事的に校長とかの仕切りが入るかとも思ったが、そんなことはないようだった。仲のいい人たちが集まり次第始めるなんて、まるで本当にただのイベントのようだった。

「まあ、何でもいいんだけどさ」

とりあえず俺は、敷かれたシートの間を縫うように自分のシートに向かって歩いていく。職員たちはさっそく飲み始めているようで、にぎやかな気配がそこかしこに充満している。

教師の威厳とかそういうものについて、どう考えているのか、少し聞いてみたい気分だ。少なくとも、生徒側としては、それにどう関わり合っていけばいいのか、ということは計り知れない感じだった。

「ただいま」

気軽な感じに声をかけて、俺は手に提げた大きな箱をシートの上を下ろした。靴を脱いで、他のみんなの靴に並べるように、シートの端に揃えて置く。志穂の靴が吹っ飛んでいたので、それも拾って並べておいてやる。

よいしょっと、姐さんの横に腰かけて、飲み物を紙コップに注いでもらい、くっと一息に飲み干した。さっき食べたエビチリの味が、すっと流れたような感じだった。

ものすごく美味しかったから、ちょっとだけもったいないことをした気分だった。

「っはあ…、で」

一息おいてから、俺は現実を目を向けることにした。

「志穂、なに、やってんだ？」

「ほえ？ あっ、ゆっきい、おかえり」

「にゅ、幸久君、遅かったね」

『おかえり』

どうして霧子が上着を脱ごうとしているのだろうか。確かに今日はそんなに寒くないし、暑くなったから脱ぐというのは分からないでもない。しかし、霧子はそんなに暑がりではなく、むしろ寒がりだ。俺が上着を脱いでいない状況で、霧子が脱いだという判断は、今までの経験則からしてあまり適格ではない。

とにかく落ち着いて考えよう。これはきっと重要な案件のように思う。冷静に判断して、的確に対処しなければ、おそらくマズいことになるってしまう、俺の本能がそう告げている。

「とりあえず、何をしているのか俺に教えてくれ。話はそれからだ」  
今、見て分かるレベルの状況を認識するならば、志穂がよろこんでる横で霧子が上着を脱いでいる。いや、あるいは脱がせられているのだろうか。

この状況だけで何が起きているのかを正確に把握、理解することが出来るやつがいたとしたら、それはきっと超能力者か何かに違いない。ゆえに俺には把握はできるが、理解にまでは及ばないのである。

理解が及ばない事実直面したとき、それは対話によってのみ解消されなくてはならない。話し合うことは、お互いの思いと考えを交換し合い、交流させ合うことをその意図としている。そうすることで、理解の及ばない事実が言語化され、それに対するお互いのスタンスを確認することを容易にするのだ。

「なについて、やきゅーけんだよ？」

「はっ？ やきゅーけんって、野球拳のことか？ やーきゅーう、すーるなら、の野球拳か？」

「たぶんそうだよ、うん」

「なんで野球拳なんてやってるんだよ……。まったく意味が分からないんだが……」

「こうやってお花見とかするときは、そうやってもりあげるんだって、どこかできいたよ」

「どこかってどこだ、その情報ソースを俺が完膚なきまでにぶっ潰す」

「えゝゝゝ、テレビ？」

「よし、皆藤家のテレビの寿命は今日までだ。覚悟しろよ」

「このあいだあたらしいのに変えたばかりだから、ダメゝ」

なにゝゝ、我が家のテレビはいまだボロのままだというのに、新しいものに買い替えただとゝゝゝ。許せないな。

「ゝゝ、よし、分かった、テレビを破壊するのは止めておく。止めておくとして、だ」

しかし問題はそこではないのだ。別に志穂が変なテレビを見て変な知識を仕入れていても、言ってしまうえばそんなものどうでもいい。いや、よくはないけど、今はそこまでの問題ではない。

その知識がいいものか悪いものかということを判断できないこいつには、その分別を与えてやるのが重要なのである。ダメなものはダメと教えてやる必要があるものであり、それがしつけ、もとい教育なのだ。

「志穂、屋外で野球拳はよせ。それはよくないことだ、分かるか？」

「えゝ、ダメなの？ あぶないことしてないんだし、いいでしょ？」

「危ないことしてるだろ、野球拳の行きつくところはストリップショーだぞ。お前、こんなところで霧子を裸にして何が楽しいんだ」

「え？ そうなの？」

「え？ 知らないで野球拳しようとか言ってたのか？ お前にとって野球拳ってどういう遊びなんだよ」

「じゃんけんのつよいやつ」

「よし、野球拳がいかに危険なものか、その身に刻み込んでやろう。霧子と勝負するのはやめろ、俺と勝負だ」

「えゝ、きりりんには一回勝ったのにゝゝ！」

「じゃあ俺が霧子の分も脱ぐから、それでいいだろ。一枚だから、

上着な」

「よし、しょうぶ！」

「お前は、えと、あと上着とシャツと下着が上下とスカートとタイと、くつ下左右だから八枚な。俺は上着一枚脱いだから、シャツとネクタイとスラックスと靴下左右だから、五枚だ。よし、八連勝してやるよ！」

実際は八連勝なんてしなくても、俺は次負けたらシャツを脱いで上半身裸になるし、そうすれば姐さんが強制的に止めるだろう。もし俺が勝ち続けたとしても、さすがに五回負けて下着を晒すことになればギブアップするだろう。

「ま、待て、三木！ お前は男だろう！ そういう遊びは同性同士でするなら遊びかもしれないが、異性同士するのはよくないぞ！」

「姐さん、止めてくれるな。俺はこいつに善悪というものを教えてやらないといけないんだ！」

「よし、まっけないぞ！」

「はい！ やくきゅう、するなら！ こういう感じにしなしゃんせつ！ アウト！ セーフ！ よよいの……」

姐さんの制止を振り切って、俺たちのデュエルは始まった。志穂は野球拳の意味を理解していなかっただけで、それ自体についてはしっかり理解していたようで、掛け声に合わせてちゃんと踊っている。こういうところでも運動神経のよさが影響するのか、踊りのキレが半端じゃなくいい。

なんていうのか、一つ一つの挙動がやけにキレているというか、しゅぽっ！ しゅぽっ！ って感じた。いや、今はそんなことはどうでもいい。今はただ、目の前の勝負に全てを賭けるしかない。

負ければ即終了、勝てばもう一戦となるだろうし、正直負けの方が楽かもしれない。しかし負ければ姐さんからの鉄拳制裁は避けがたいだろうし、できれば勝って終わらせていきたいところだ。

「よいっ！！」

左手を右手に被せ、振りかぶり、そして振り下ろした。



「っしゅあっ!!」

グーとパー。

志穂がグー、俺がパー。

勝った! まずは一勝!

「俺の勝ちだっ! ざまあみろ、志穂!!」

「にゃー! 負けたく!!」

本当に悔しがっているようで、志穂は今すぐにでもゴロゴロと転がり始めそうな程だ。志穂はそれだけ本気ということだ。

それならば俺も本気で応じるまで! 敗者に対して容赦することは、それすなわち本気への礼を失すること。本気で応えたと決めた以上、手心を加えることは許されないのである。

「ほら脱げ脱げ! 負けたやつは一枚脱ぐ、それがルールだからな!」

「分かってるもん! 次は負けないんだから!」

まあ、脱ぐといっても、どうせ一枚目は上着かタイだ。別にその一敗が致命傷となることはないだろうが、しかし一敗は一敗。一步押し込んだと言っているだろう。

「んしょっ…、と」

上着かタイ、すなわち上半身に向かうと思われた志穂の手だったのだが、しかし俺の迷惑をやすやすと裏切られた。その小さな手は、予想外に下半身へと伸びる。

そうか、くつ下から脱ぐのか。まあ、それでも構わないだろう。安牌を一枚切る、ということに変わりはないのだから。

しかしその手は、くつ下へと到達する前に停止する。つい、っとスカートをたくし上げる。その動きを俺が理解するまで、ほんの少しの間を必要とした。

「か、皆藤!？」

姐さんが、素っ頓狂な声を挙げたが、その声の意味も俺はなかなか理解できなかった。目の前で志穂がそもそも何をしているのか、それが分からなかったのである。

スカートの中から、すつ、と白とピンクの縦縞のかわいらしい柔らかな布が下りてきた。それはどうも、三角形的なフォルムをしているらしい。そしてそれは、どうやら右足と左足の両方に引っかかっているらしく、志穂は右、左と順にそこから足を抜いた。それから八つ当たりだろうか、ぽいすつ、とそれを俺の方に投げつけた。

投げつけられた俺は、それを、不意打ちだったので少しお手玉するようになってしまいが、反射的に受け止めてしまう。

「……………」

手の中には、志穂が俺に投げつけてきた布が、ちよん、と収まっている。その布は、ほんのついさっきまで志穂が身に着けていたこともあって、どことなくほんのりと温かい。あと、思った通り、それは柔らかかった。

しかしそれ以外のことは、何一つとして理解することができなかった。

すっかり思考が停止している。

「…、えっ、なに？」

俺たちの周りも、完全に凍りついていた。

メイの手から、携帯がぼろりと落ちた。

「あっ…、そうか」

俺は、手の中のモノを、とりあえずポケットに入れた。受け取ったものは、ポケットにしまう。それは大切なものを失くしてしまわなため、必要な行為だった。

しかしその行為は、この場においては間違いだったらしく、そしてそのことに俺が気付いたのは、姐さんの拳によって地面を舐めてからだった。

「かはっ!？」

姐さんは、無言のまま俺の脇腹、的確に肝臓を、腰を落とした模範通りの正拳突きで打ち抜いた。肝臓だけが彼方にぶっ飛んでいくような、そんな思いもしないような感覚を味わうことになろうとは、

とんと考えていなかった。

そして、俺は膝を突く。膝を突いてしばらくむせ込んでから、ようやく思考が追いついた。

「お前！ ごほっ、かはっ！ なに脱いでるのっ！！」

「ほえ？ 負けたから？」

志穂は、心底分からんという顔。いや、こいつなに言っちゃってるんだか、という顔かもしれない。

「最初のもっと無難なところから脱ぐの！ 上着とか！」

「じぶんをおいつめなさい、ってししよゝが……」

「絶対に追い詰め方間違ってるよ！？」

俺のポケットの中に収まっているもの、それはなんだろうか、といえば。

「一枚目からそこ脱いじゃダメなの！」

志穂の選択は、ショーツだった。

野球拳で負けて、一枚目に脱いだのは、ショーツだったのだ。

「もっと恥じらって！ 野球拳って、そういう羞恥心との闘いなの！」

自分の追い込み方としては、ダイエットするから山籠りするぜ、というくらいの飛躍ぶりだった。このとき俺は、志穂がバカなんだ、と再確認したように思う。

じゃんけんをしようよ！ (1) (後書き)

じゃんけん対決はまだ続く。 (2) へ

## じゃんけんをしようよ！（2）

そして俺は、一度はポケットにしまってしまったそれをすばやく取り出して、本来の持ち主である志穂に向かって投げ返すのだった。

「早く穿きなさい！ それから、もう少し無難なところから脱ぎなさいよ！」

「ダメだよ、いちどぬいだのはもう着ちゃいけないルールでしょ？」

「それじゃあ、少なくともそれは自分で持ってる！」

「はい」

志穂はそれを受け取ると、穿き直すようなことはなく、足元にぺすっ、と打ち捨てる。何度も言うが、自分を追い詰める方向性が間違っている。

確かに野球拳というゲームにおいて、どこから脱いでいくかということについては明確な規定はされていないことだろう。しかしだからといって一発目から、最後まで残すべきところを脱いでしまうのは、どうかと思うのだ。

あるいは、もしかして、最初からありえない選択をすることによって、俺に精神的な動揺を与えようとしていたのかもしれない。そうだとすれば、それは試みとして大成功だったといえよう。少なくとも、俺はその行為によって姐さんから正拳突きを受けることになったのだから。

「次は負けないんだから！」

「くっ…、まだやるのか……。仕方ない、次も俺が勝つからな！」

「よし、負けないぞー！」

姐さんはまだ、この野球拳自体を止めようとはしていない。もしかしたら、「勝負」というワードの魔力に負けているのかもしれない。なんだかんだと真面目で堅物なところのある姐さんだが、勝負とか決闘とか、そういう熱血ワードには弱いところがあるからな。本当にギリギリ、風紀委員として見過ごせない領域に到達するまでは止

めてくれないだろう。

「次はもうちょっと無難なところを脱げよ！ 上着とかな！」

「わかった」

そうして第二戦である。いや、霧子がしたという一回目を加えれば、三戦目ということになるのだろうか。

負けられない戦いというよりも、負けたくない戦いである。姐さんからの鉄拳制裁を今しがた受けたばかりであることを考えれば、負けによって下される制裁までは、正直なところ受けたくない。

一日に二度もそんなこと、されたくないに決まっているのだ。

「はい！ やゝきゅうゝ、すゝるなら！ こういう感じにしなしゃんせっ！ アウト！ セーフ！」

じゃんけんとは、当然だが、グーチョキパーの三つの出し手で勝敗を決める遊びであり、その三つはいわゆる三竦みの状態である。グーはチョキに勝つ、チョキはパーに勝つ、パーはグーに勝つ、といったように。

何か一つの手、たとえばグーを選択したとき、単純に見て勝つ確率は三割強。しかし両者が同じ手を出したときにあいこになることを考えれば、一つの手で負けない確率は六割半ばを超える。つまり、じゃんけんとは、勝つより負けないようにする方が楽なゲームと考えることもできる。

そして仮にだが、相手の出し手を一つ可能性から消すことができたならば、負けない確率は十割である。たとえばチョキを封じたならばパーを出しておけば負けない、といった具合にだ。勝ちの確率を十割にすることは出来なくても、負ける可能性を無くしてしまうことはできる、それがじゃんけんというものである。

普通は二人の人間が思考の限りを尽くして、相手の癖などから逆算して、手を読み尽くして自らの手を決めるので、なかなかそういうことにはならない。自分でも気づいていない癖や、出し方の傾向を見極められてしまうと、もはや確率の通りにことは進まないのだ。あるいは逆に、読み切ったと思っていてもそれが勘違いである可能

性は否めないわけであり、底の浅い深読みでしかないことも往々にしてありうる。そのような思い込みもまた、事象を確率概念から乖離させる

機械が意思を差し挟まずに試行を繰り返したとしても必然として生じる、確立という思考理論の持つ性質である現実事象との乖離性が、人間二人による試行という不確実性を強めた場ではより顕著なものとなるのである。

「よよいの……」

そして俺と志穂のじゃんけん勝負は、概ね確率に依らないのである。俺は、志穂の癖を知っている。それも八割九割当てはまるほぼ確実なものを、である。

志穂は、連続でじゃんけんをするとき、前に出した手を連続で出すことを避ける傾向にある。同じ手を出したら負けっているのか、あるいは連続で同じ手を出すのが反則だと思っているのかは知らないが、その傾向はほぼ確実なものだ。

もし一回目にグーを出したとき、二回目にも連続してグーを出す確率が、志穂の場合は極端に低い。連続で同じ手を出してくる確率は、もしかしたら一割にも満たないかもしれない。

それゆえに俺は、志穂とのじゃんけんの勝敗をある程度操作することができるとだ。勝ち過ぎては自分に何か癖があるのではないかと疑われてしまうから、適度に負けてやるのが重要なのであるが、それも癖から逆算してやれば容易なことである。

あと、一発目の勝負にはそれを使うことはできない。あくまでも連続で勝負したとき、というパターンにおける癖でしかないからな。

「よいっ！」

さっきの勝負、志穂はグーを出したので出す確率が高いのはチョキとパー。故に俺はチョキを選択。チョキを出しておけば、負けない確率が非常に高くなる。

何度も言うが、この戦いは、出来るだけ負けたくないのだ。

振り下ろされた手は、人差し指と中指を立てた、チョキ。両者とも

にチョキ、あいこ。

「よよいの、よいっ！」

チョキの次はパー。迷わず俺はそれを選択する。

「っし！ 勝ったあ！！」

志穂の選択はグー。グーとパーならば当然グーの負けである。

「脱ぐげ、脱ぐげ！」

「うう……、負けた……！」

今度こそ、志穂は上着を脱ぎ捨てた。できれば一枚目からそこを選択してほしかったが、今さらである。

「よし、そろそろギブアップしてもいいんだぞ？」

「しないもん！」

「えっ、しないの？ ま、まあ、まだくつ下とかタイとかも残ってるし、そうか……」

くそっ、ギブアップしないのなら仕方がない。ギブアップするしかないところまで追い込んでやるぜ。

「ギブアップしたくなったら、いつでもしていいんだぞ？」

「次は勝つからしいの！ みんな勝つもん！」

「そうか、がんばれよ」

志穂が俺に一勝すること自体は、そう出来ないことではない。パターンが崩れれば、たしかに一回や二回負けることはあるだろう。しかし連戦連勝することができるといえば、それは無理だ。

志穂はまだ、自分の手の出し方の方向性と傾向に気づいていない。そんな中で、十回に一度程度見せるパターンのブレくらいで、俺を打倒することはできないのだ。

俺に連戦連勝して完膚なきまでにやっつけたいんだったら、その自分の癖を利用して俺を翻弄するくらいでないとイケない。手なりでじゃんけんしているだけでは、絶対、間違いなく、俺から連戦連勝することなど出来ないのだ。俺たちの戦いは、すでに確率に左右される段階を超越しているのだから。

仕方がない、あと二回くらい勝ったら、一回くらい負けてやるとする



か。あんまり勝ちすぎると流石に怪しまれるかもしれないからな。

「ゆっきい、つぎまけたら五枚ね！　五枚ぬぐの！」

「はっ？　五枚？　なんで？」

ここで、志穂からありえない提案が投げつけられる。まさかのレートアップ。しかも倍ならまだしも、一気に五倍。負けたら五枚脱ぐ、五倍勝負を突きつけてきた。

それは、五回分の勝負を一度に凝縮すること。勝負の濃度を一気に高めること。

「なんでも！　じぶんをおいこまないとダメなの！」

「まあ、別にいい……」

いや、待て、少し待て。受けるのか、この勝負。

いいだろう、と言いかけて、無意識にその思考に制止がかかる。五枚といえば、それは俺の全ライフポイントであると同時に、志穂も上半身か下半身のどちらかを衆目にさらさざるを得ない枚数だった。待て待て、冷静に考えろ。ここから五枚というと、まずタイだろ、くつ下左右だろ、シャツで四枚だから…、そうだ、間違いない、残っているのはスカートと上の下着だけだから、そこから一枚脱ぐとアウトだ。

くそ、この小娘、なんて追い込み方しやがる……。一般常識から考えて、女の子の肌を徒に衆目にさらすことはよしとされない。当然俺も、そんなことが目の前で行なわれるのは看過できない。

しかもそれが、俺のかかわっている状況の下で行なわれているのならば、なおさらそうである。

五枚はダメだ。四枚ならまだしも、五枚はダメ。こいつは、勝負事で負けたとなったら、何としてもその罰ゲームは実行する。それは自他を問わず、問答無用で実行するのだ。故に、脱ぐ。負けたとなれば、全裸になろうがなんだろうが、絶対に脱ぐのだ。

それはいけない。ここで求められるのは、平穏な解決でしかない。そもそもこの勝負に持ち込んだのだって、霧子と志穂の対決という構図では後半になればなるほど俺が介入できる余地が狭まってくる

と見込んで、早々に勝負自体を肩代わりしたというだけなのだ。

別に志穂を全裸にしたいとか、そういう目的で霧子から勝負の場を奪い取ったわけではないのである。八方丸く収めるために、まあ、あったとしても俺以外のどこにも痛みがないように、状況を收拾するためには俺はこの場に昇ったのだ。

こんなチキンレースみたいなこと、認めるわけにはいかない。しかし志穂が言いだしたことだ、その意思の強さを考えると無下に突っぱねるということもできない。となると説得するよりも妥協させるしかない。

妥協ラインは、四枚。四枚ならば、ギブアップするだけの猶予を与えることができる。流石の志穂も、上の下着とスカート（下は穿いてない）という状況になれば勝負自体から身を引くはず。ギブアップだって、仕方なしにすることだろう。

「ご、五枚は、ダメだ！ 賭けるのは四枚までにしろ！」

「？　なんで？」

「五枚だと、俺が一回でパンクする。そんな賭けは、受けられない。四枚なら、まだ一枚残るだろ？」

「でも、ぎゃんぶるはそういうものだってししょーがいったよ」

「いや、それは、そうかもしれないけど……」

「やるときはとことんやりなさいって」

「くっ……、それも、そうだな……」

「やるならごまい、だよ！」

マズい、正論だ。言い返せない。

ギャンブルというのは、本来そういうもの。

厚く張るべきときというのは、存在する。ギリギリまで自分を追い込むことによって、初めて見えてくるものというのは、絶対に存在しているのだ。

それは、神憑り。ありえない確率をその身に引き込む、言ってしまえば奇跡のようなもの。

しかし負ければおしまい。厚く張っても、負けてしまえばおしまい。

神憑りの何かを為したとしても、それでも敗北し得る。それがギャンブル。

そういう不確定的なものに身を任せる、それがギャンブルの本質。死ぬときは、無為に死ぬ。それこそがギャンブルなのである。

そんなギャンブルの気配を読み解くとしたら、厚く張るべきは、今。それが今、このときであろう。

このままやっけていてもジリ貧だと、本能的に察知したのだろうか。俺を倒すには神憑りの一撃を通すしかない、と判断したのだろうか。その一撃は、今しかない。自分は限界まで追い詰められるが、しかし勝てば相手が死ぬ、その状況に挑める最後の瞬間こそが今なのだ。確かに、二連敗している今、客観的に見て流れはよくない。よくない流れのまま、そこにいづれかが死ぬギャンブルを持ち込めば、死ぬのは間違いなく自分。高確率、いや、ほぼ間違いなく、自分なのだ。

しかしその無茶が、断崖の縁まで自分を追い込むめちゃくちゃが、何かを呼び込む。その狂気が、全てをフラットまで平均化するのだ。「……、つく……!」

そういう意味で、これはやっていること自体はお遊びの野球拳ではないが、この無茶によって本質的な、ギャンブルそのものへと昇華した。そしてここまで己を追い込む志穂に、次の勝負、なにが起るか分からない。下手をすると、わけも分からないうちに俺が負かされる可能性も、なくはない。

さっき志穂が出したのはグー。故に、俺はチョキを出しておけば安定して戦いを行なうことができる。しかし、それでも何かの間違いで負けてしまうことも十分にあり得る。

それならば行くべき。迷うことなど、必要ない。

しかしここから先は、確率も可能性も、法則すらもねじ曲がりかねない意志の世界。志穂ならば、裂帛の気合だけで全てをかき消してしまいかねない。

勝ちたい、負けたくない、という強い思いが、決して絶対ではない

が、常識を捻じ曲げる世界。

「五枚でしようぶ！　しょ！」

しかし勝ってしまったえば、志穂は全裸にほど近い状況まで追い込まれることになる。それはそれで、よくない。

そもそもからして、俺はそれを望んでいないのだ。

くっ…、俺はどうすればいい。

というか、そろそろ姐さんが止めてくれないか…、いい加減に、校内風紀的にまずいところまで話が展開してきてるぞ？

「……………」

しかし姐さんは、俺と志穂の様子を固唾をのんで見守っていた。話に割って入るとか、そういう発想自体がそこには存在していないようだった。外からの助力は、あまり期待できそうもない。

「どうするの、ゆっきい！」

「俺は、その勝負……」

俺は選択する。選択するしかない。

それが、種々選択した結果としてそこにあるならば。

拒むは理性。受けるは漢気。

提案を拒み、薄まったギャンブルを続けて勝ち逃げするのは理性。しかし、勝ち波に乗っている今、少しムチャに思える提案も聞いてやるのが漢気。

どちらを選択すれば正解かと言えば、それは間違いなく前者である。状況的にレートで妥協させることができないならば、勝負そのものに乗らないのが賢い選択なのだ。しかしそれでいいのか、と問われれば、俺は沈黙せざるを得ない。少しのムチャにも乗ってやれないというのは、これがあくまでお遊びでしかないということを考えれば、己の狭量を晒すことになるのだ。

それは自分の器の小ささを露呈させることで、気風の悪いところを見せることにほかならない。それでいいのか、という自分が、確かに心の中にはいるのだ。そんなことをするのが、気持ちのいい漢の生き様とは思えない。危ない橋の一本や二本、渡れずして漢と言え

るのだろうか。  
拒むは理性。受けるは漢気。  
俺の選択は……。

じゃんけんをしようよ！ (2) (後書き)

(2) でも終わらなかった。(3) へ

### じゃんけんをしようよ！(3)

「…、分かった、いいだろう。どうせ勝つのは俺だ」

「いいの？ よし、勝つぞー！」

俺は、その五枚勝負を受けることにした。

志穂のライフは六、俺のライフポイントは五。勝てば志穂をギブアップさせることができるだろうが、もし負ければ俺はその瞬間にパンクすることになる。さっきよりもなおさら負けられない勝負である。

「ゆっきい、四枚がいいって言ってたけど、五枚でいいの？」

「いい。四枚にするなんて、一步引くようなこと、しなくていい」

志穂は、一気にレートを五倍まで釣り上げた。それは、もはや異常な事態だろう。その異常を引き起こすことで波を、ツキを引き込もうという考えなのは間違いない。それは、勝負を純粹に運と気合の領域にまで引きずりおろすためには最適に行為である。勝負はフラット、いや、勝負に対する気合の差で、おそらく志穂に分がある。それならば、それ以上の賭けに出ることでは、流れを取り返すことはできない。いや、おそらく志穂以上に何かを引き寄せることはできないだろうから、せめてフラットの位置にまで全てを戻す。少なくとも俺の勝利への理と、志穂の必勝の気合とが拮抗するフラットまで。

だからライフを残すことはしない。一撃で死ぬギャンブルを受けるというリスクならば、レートを五倍までぶち上げるというリスクとつり合うだろう。

フラットまで戻してしまえば、気合と理とでのぶつかりあいならば、それはさすがに理に軍配が上がる、いや、上がらなくてはならないのだ。理とは、そういうもの。一時の幸運や、気合などでくじかれてはいけない、絶対的な信仰の対象なのだ。

「負けた後でも、謝れば許してやるからな？」

「ゆるしてくれなくていいもん。負けたらゆっきいもぬぐんだからね？」

「まあ、負けたらな？」

負けてやるつもりは、当然ない。志穂は、ここにきてびびってギブアップするようなやつではない。ここまでできてしまえば、躊躇なく一步を踏み出すやつだ。

だから俺は勝ったらすぐにダッシュで逃げる。脱がれる前に逃げてしまえば、別に脱がれたとしても俺にとっては関係のないことである。野球拳で勝ったからといって、その一部始終を見守ってやらなければならぬという取り決めも、またどこから脱ぐかという取り決めがないのと同様にないのだから。

「ゆっきい、つぎ、あたしがなに出すかわかる？」

「いや、分かんけど？」

「わかんないなら、ゆっきいがぜったい勝つわけじゃないよね？」

「まあ、そういうことになるな。じゃんけんっていうのは、そういうものだから」

「んふー、まっけないぞー！」

どうやらそれを確認しただけで志穂は満足したようで、今は握った拳をぶんぶんと回して準備にいそしんでいるようだった。そんな肩を回していて、痛くなったりはしないのだろうか、とどうでもいいことが心配になってしまう。

まあ、俺は嘘は吐いていない。志穂が次に何の手を出してくるのかということについては、確かに知っているわけではないのだから。俺が知っているのは志穂が次に何を出さないかであって、グーチョキパーのどれを選択してくることを直接知っているわけではないのだ。

志穂が言ったのはじゃんけんの出し手推測の表面でしかなく、俺のように裏面から、つまり消去法的な考え方から迫る方法もあるということにまったく思い至っていないのであろう。そのようでは、読み合いで俺を上回ることはできず、つまり自分の癖を逆用して俺の



読みを裏目に落とすこともしてきそうにない、ということが分かる。大丈夫、俺の理が崩れることはない。ごくまれな事象のブレが起こりそうな感じも、あまりしない。これは直感でしかないが、志穂は手なりで手を出し続けるだけで、何か必勝の策を持っているわけではないような気がする。志穂の中にあるのは、ただ絶対に勝つてやるという気合と、そして気概だけ。

それならば勝つ。理で勝つ。理詰めで勝ちおおせる。これが最後の一手、王を追い詰める詰みの一手。

俺の選択はチョキ、理によってチョキ。志穂がパーなら即決着、チョキならあいこでもう一戦。あいこになったら次はパー、もう一回あいこになったら、次もあいこなら。

そう、理によって一瞬で、まるで数式の変数に数字を代入するように、次に打つべき手は決まってくる。これが俺の方程式、志穂とのじゃんけんを支配する、絶対の方程式なのだ。

「よし、勝負！」

「いっくよー！！」

しかし、あるいは、ここまできて理にすぎるのは愚かに映るかもしれない。一発勝負、一瞬で死ぬ勝負なのだ、己の天運に賭けてみるのが正しいようにも思う。絶対の方程式といったが、すべての場合において正確ではないことは、何度も言っている通りだ。志穂がほんの気まぐれで滅多にしないことをしてしまえば、それだけで俺の負けは確定。穴はある、完全な理とはいえない、張り子の虎である。しかし、仮に一発勝負で天運を信じるということが自分を信じることにつながるのなら、それは同じことでしかない。俺が信じるのは己が見出し、そして組みたてた理であり、それは俺にとっては自分自身の天運よりも重きを置くものである。これを信じることは、俺にとって、もはや天運を信じることよりも重い。

逆にそれを捨てて天運などという不確定極まりないものに走るというのなら、それこそ惑っている証拠である。俺には、信じるに足る理がある。ブレを含めても勝率九割の理は、六割を積み重ねてい

かなくてはならない天運よりも、少なくとも俺の中では強い。

「はい！ やゝきゅうゝ、すゝるなら！ こういう感じにしなしゃんせっ！ アウト！ セーフ！」

それを信用できなくなったら、俺は本格的におしまいだろう。理を信仰する者は、理に殉じなくてはならないのだ。たとえば武将が自らの刀に殉じ、戦場で散っていくのと同様に、軍師もまた同様に、自らの献策に殉じ、その策と理とともに死ぬのである。

だから、共に死ぬのならば刀ではなく策、天運ではなく理なのである。頭でっかちに、理想を抱いて溺死するのはいけないことではない。そうすることが、いや、そうせずにはいられない生き物が、理の信者なのである。

死ぬ？ 否、死なない。俺は勝つ、勝つんだよ！

「よよいの……」

俺と志穂は、体が反るほど思い切り振りかぶり、お互い殴り合いでもするのではないか、という勢いでその握った拳を振り下ろす。

振り下ろされるまでのわずかな間に出し手が決定されるが、しかしそれを確認できるほど俺の動体視力は化物じみていない。志穂ならば、あるいはそれによって相手の出し手を判断することもできるかもしれないが、しかしその発想に至るだけの知力がない。

仮にできるとしたら、その方法は簡単だ。じゃんけんの手は開くか閉じるかのどちらかしかない。振り下ろすまでに開きそうな感じがしたらチョキかパーが来るからチョキを、閉じそうな感じがしたらグーで確定なのだからパーを出してやれば、勝率は十割にかぎりなく近づく。俺の持っている理よりも安定感があり、なおかつ確率も高い。勝敗のコントロールもより容易である。

しかし俺はそれを教えない。教えてしまうということは、俺が志穂にじゃんけんで勝てなくなるということの意味するからだ。

それはいけない。そんなことをしてしまえば、俺が志穂に対してたまに提案する「仕方ないからじゃんけんで決めるか、三回勝負な」、が出来なくなってしまうのではないか。あれは公平感を装いながらも、

俺の理を用いることでほぼ確実にこちらが決定権を取ることができ  
る秘策なのである。

もし教えてしまえば志穂は、絶対に俺の教えてやった方法を実行するのだ。怪しまれるから毎回はやらないとか、そういう配慮は一切せず、躊躇なく毎回使う。そうやってしまえば、俺が志穂に対して取っているさまざまなアドバンテージのうちの一つが失われてしまうではないか。

その方法は相手の出し手に対応して自分の出し手を決める方法なので、俺の理も必然適応できなくなり、その使用そのものが不可能になってしまうので、そうやってしまえば俺が勝つ確率の方が零になってしまうのだ。

「よいっ!!」

そして出し手を決定。

俺は当然チョキ、理のほかに寄る辺などなし。これで勝てば、あと俺は走って逃げるだけ。

対して志穂はチョキ、俺とあいこのチョキ。

ここも理の導く解の通り。ブレはない。

「よいいの……」

あいこなので、もう一度出し手を選択。俺の理に則れば、志穂にとつてはあいこと負けの確率は五分と五分。そうそう何度もあいこでかわし続けることはできない。

そして仮にかわし続けたとしても、けっきょく最後は敗北という現実が降りかかってくるのだ。あいこはただの延命でしかない。すっぱり負けないだけの、先延ばしでしかないのである。

「よい!!」

さっきよりも強く気合を込めて、志穂は拳を振り上げ、そして振り下ろす。拳を振り下ろしたただけなのに、ひゅん! と軽く風切り音がして、くつ下で滑るのか、足元が少しだけずれたのが見えた。

危ないな…、こんなところですっ転んだりして、けがでもしたらどうするんだ。気をつけろよ、ほんとに……。

俺の選択はパー、迷うことはない。

しかし志穂の選択も、俺の出し手と同様にパー。再び、勝負決まらず。

確率的には四回に一回は起こることなので決して珍しいことではないが、二度続けてあいこである。

だが、問題はない。二度続けてあいこになったのなら、三度目で殺せばいい。この場合ならば、「二度あることは三度ある」よりも、「三度目の正直」の方が可能性としては大きい。三度続けてあいこになど、滅多になるものではないのだ。

あいこになったが故に、俺たちの動きは止まらない。そのまま続けて三度目の試行に移行する。一度目も二度目も、三度目も変わらない。やることは、ただじゃんけんである。

今度こそ、仕留める！　そしてダッシュで逃げる！

「よよいの……」

志穂は、まるで野球の投手のように背をのけぞらせ、セットポジションで拳を振りかぶる。あんまり足を持ち上げられると、必然スカートがたくし上がり、なにも穿いていないスカートの中が見えてしまいそうになるので、出来ればそこらへんで自重していただきたいところだ。

当然だが、いかに振りかぶったからといってじゃんけんにおける勝率が変動することはあり得ないわけで、この動作には実質なんの意味もない。あるとしたら、自分の気分を高めるとか、その程度のものでしかないのだ。

「よいっ!!」

「ふんにやっ!」

「うおあ!」

これを決着にしようという意気は俺と志穂で一致していたようで、今までのじゃんけんとは比べ物にならないほどの気合を込めた勢いで志穂の拳は振り下ろされる。しかしその気合が思わぬ事態を引き起こした。いや、思わぬ、何ていう適当な言葉では俺の驚愕は伝わ

り切らない。

じゃんけん発すべきでない珍妙な鳴き声を志穂と俺の両方が発してしまったのもそのせいなのだが、そのことについて、詳細に説明をしてもおそらく理解は得られないだろう。しかしここは勇気を持って俺の目の前で発生した出来ごとについて説明してみよう。

まず、志穂が張り切りまくって大きく拳を振りかぶったところまではいい。ここまではおおむね理解可能。次に思い切り振り下ろした。それもいい、あれだけ振りかぶったのだから、当然振り下ろすのもそれなり以上の勢いが必要である。

そして志穂は、その振り下ろした拳の勢いでくるり、と一回、拳に全身を引っ張られるように前方へと向かって転倒、というよりも回転した。バカなことをいうな、と言いたいだろうが、それこそ俺が言いたいセリフなのである。

現に、志穂が前方回転なぞしてくれやがったおかげで、俺は出所が見えない、縦回転のローリングソバットとしか言いようのない攻撃をこの身に受けかけたのだから。俺が奇跡的な反応で回避に成功したからいいものの、あんなものを、あんな冗談ではない勢いで首元に叩き込まれれば、少なくとも二時間は保健室のお世話になっていたことだろう。

どうして自分の振り下ろした拳骨に自分の体が翻弄されているのか、ということはおそらく考えても無駄だろう。そうなってしまったのだから、そうなのだ。考えたところで理解することができないことは確かにあって、それはそういうものとして受け入れるしかない。だからこれも、そうなのだ。

問題は今、この様である志穂をどうするかということに他ならない。よく分からないが、とりあえずどこかを強打したということはなさそうであった。本当にキレイに一回転したようで、今はぺたんと尻もちを着いたような体勢で地面に座っている。

ちなみに、俺の目前で縦回転なんぞをしたことによって、非常に不

本意ではあるのだが、というか申し訳ないのだが、見えてはならぬところが俺に見えてしまっていた。いや、俺だって出来ることならば目くらいはそらしたかったし、可能ならばそうしたに違いない。しかしあれは無理だ。俺は不意に襲いかかってきた攻撃の回避に精いっぱいであるところまで気を回している余裕はなかったのだ。まあ、あれだ、なんていうのかな……、こういうのも一つの得難い体験というやつなのかもしれないな。バカで強くてバカな志穂も、やっぱり女の子だったんだね！

しかし、見えてしまったものは仕方ない、などと開き直るつもりはない。まあ、謝るくらいはしておくのが筋というものだ。とりあえず今は謝る前に立たせてやるのがいいだろう。目の前に立っているんだ、手くらい貸してやらないといけない。

っと、手をグーの形に握ったままではそんなことはできるはずないつつうの。アホかって。

じゃんけんをしようよ！ (3) (後書き)

じゃんけん、次回決着

## 偶然×正論×決着！

「おい、志穂。だいじょぶか？」

俺の前で奇跡のアクロバティックを繰り出した志穂は、自分の動きに自分で驚いているのか、きょとんとしたような顔でぺたんとシートに座りこんでいる。まあ、当然だろうな。あんな動き、いかに志穂といえども初めてに違いないし、驚くに決まっているのだ。

よかったのは志穂が怪我をしなかったことと、もうひとつ、俺と視点を共有している人が一人もいなかったこと。こんなくだらないことのせいで怪我をするなんて冗談ではない。なにが悲しくてじゃんけんをして怪我をしなくてはいけないのだ。

そしてもう一つの方は、俺と志穂の両方にとってよかったことだろう。志穂にとって、どことははっきり言わないが、見られてしまったこと自体がかなりの精神的痛手であることは分かる。しかし俺一人という最少人数で被害が収まっているとも言うこともできる。不特定多数に目撃されるという大きな被害を出すよりはなんぼかマシと言うことも、あるいはできるかもしれない。

さらに、俺にとってなにがよかったかといえば、それを目撃したという事実ではなく、その事実を他の人と共有していないことだ。つまり「私にも見えたんだから、三木くん、君にも見えてたよねえ？」というような類の、逃げるのに困難するような追求がかからないのである。これならば、おおっぴらには見えてなんていない、と突っ張って、あとで個人的に志穂に詫びを入れるということが出来る。

「どっかぶついたりしてないか？」

「……………」

「志穂？」

しかし、どこかをぶついたりしていないようなのだが、志穂は俺の声になかなか反応しない。こんなことでびっくりしすぎて放心するような、そんなやわな心はしていないはずなのだが、どうかした



のか？

「立てないのか？」

「……、そっかあ」

「はっ？ なにが？」

そして志穂から上がったのはそんな、何かに納得したような言葉で、だが何に納得したのか俺にはさっぱり分からないのだった。というか、今の動きからいったい何を納得したというのか。

重力の存在とか、力学的なエネルギーの存在とか、そういう変なものに対してじゃないといいんだが、どうだろうか。

「これがししょの言ってたわざか」

「技！？ まさかお前、じゃんけんとみせかけて俺のこと倒しにきてたのか！？」

「ちがうよ、そういうのをね、こないだ聞いたの。きいたけど、よくわかんなかったんだけど……、これでわかった」

「そ、そうか……、それはよかったな」

「うん、ししょにもかえったらみせたげる」

「とりあえずあれだ、早く立ちなさい。ケツ冷やすぞ」

「は……い」

「ほら、手、貸してやるから」

それから俺は、もう一度志穂の前に手を伸ばしてやる。

掴みやすいように、さっきのじゃんけんの出し手であるグーの形ではなく、当然手は開いている。

「ありがと、ゆっさい」

志穂は、素直に俺の手に向かって自分の右手を差し出した。差し出したからには握るものと、俺は思っていた。

「はっ！？ ぽんっ！」

しかし何を思ったのか、志穂はハッとしたような顔をする。

「？ なに？」

「ちょきちょき」

「……、なにをしている」

「ちよきちよき」

しかし志穂は俺の手を握らなかった。

握らず、立てている人差し指と中指で、ちよきちよきと俺の手をはさんでくる。それはまるでハサミで紙を切るような、そんな動き。

「ゆつきいは、パーで、あたしは、チョキだよ？」

「……、まあ、待て、話せばわかる」

「んゆ？　どうということ？」

俺が出したのは、グーだ。決してパーではない。

ここでこうしているのは、ただ志穂を立てさせてやろうという親切心でしかなく、決してパーを出しているというわけではないのである。オーディエンスだって、俺がさつきグーを出したところは見ているわけだし、ちゃんと話せば今の勝負の俺の出し手がグーだったことは分かるわけだ。そうなればグーとチョキで俺の勝ち、ということころまで容易に辿り着くはずなのだ。

これで、完全に理の勝利。理によって、この勝負を詰め切った、ということになるであろう。

「俺が出したのはグーだ。悪いが俺の勝ちだ」

「うっそ、だってそれはパーだよ？」

「いや、これはパーじゃなくて、お前を立てさせてやるために手を伸ばしただけだよ。グーのままじゃお前がつかめないだろう？」

「えー、じゃあグーなんて、いつ出したの？」

「さつきだよ。よよいのよい、で出したんだよ。お前だってそのときにそのチョキを出したんだろ？」

「そうだけど、そのときゆつきいがなに出してたかなんてしらないよ？」

「お前は知らなくても、他に見てる人がいるだろ。こういうときはな、俺たち二人が話し合うよりもそばで見てた公平な立場の人に意見を聞くのがいいんだぞ。俺たちが言い合いになると、両方が自分の勝ちだ、っていうからどうしたらいいか分からないだろう？」

「そうなんだ、あっ、しんぱんみたいなの？」

「そうそう、試合するときには審判いるよな。それぞれ。審判の言うことなら、従うっきゃないよな」

「しんぱんのいうことにさからうと、怒られちゃうってししょもいってたよ」

「そうだ」

「そういうときは、変なことをいわれるまえにしんぱんをたおすんだ、って」

「それは今すぐ忘れなさい。今、すぐな」

「はーい」

よし、これで公平な立場の人に俺の出し手を保証してもらえば、俺の勝ちで確定だな。まったく、志穂がおかしなことを言い出したときはどうしたものかと思ったが、しかしこれで決着だ。

問題はない。この勝負の終着駅は、変わらず俺の勝利である。

「姐さん、俺の出した手、グーだったよな？」

そして、ここで一番熱心にこちらに注目していて、加えて最も公平公正な存在といえば、姐さんをおいてほかに存在しない。あれだけ集中していた姐さんが、この勝負のクライマックスである俺たちの出し手を見そこなっているはずが、

「すまん、見落とした」

ないのである！

「はっ……？」

「だから、三木の出し手だが、見落とした」

「えっ…、見落としたって…、見てないってことだよな？ 見てないってことは、俺の出し手がグーだったって保証できないってことになるのか……？」

「そうだな、そういうことになる。見落としている私が偉そうに保証など、できるはずがない」

「な、なんで！？ だって、見てたじゃん！ ずっと、見てたじゃん！」

「見ていたな」

「見てたなら、俺の手も見てたんじゃないの!？」

「見てはいたが、見落としたんだ。しかし、よそ見をしていたわけでもない」

「えっ…、どういうこと……?」

見ていたのに、見ていなかった。注目していたが見落とした。それは並存するのか。簡略化すれば、その言葉は「したが、していない」ということになり、矛盾するのではないだろうか。

姐さんが、そんなことをするはずがない。姐さんは見ていたなら見ているし、注目していたなら見落とすことはない。

ということは、どういうことだ? 何が起こっている?

「私はよそ見などしていない、それは確かだ。そうだろう、天方、持田」

「にゅ、のりちゃんは、ずっとそっち見てたよ」

『みてた』

「霧子たちはなにしてた?」

「お茶、飲んできたよ」

『ウーロン茶、飲んできた』

「のりちゃんはすっごく集中してたから、邪魔しちゃいけないと思っ  
てそっとしておいたよ」

「そういうことだ」

姐さんはよそ見をしていない。ということは本来、そこに見落としてはありえない。

そして姐さんはそんなことで嘘を吐かない。見落としたというのなら、本当に見落としているのだ。

ということはなんだ、何かあったのか。集中していた姐さんが俺たちの出し手を見落とすような何かが。何かしらのイレギュラーが起こったとでもいうのか?

「りこたんは、どうして見えなかったの?」

「そ、そうだ、どうして見落としたんだ?」

「偶然、スカートの陰に隠れてしまったんだ。私の視界では、皆藤

が回ってしまつて、そのスカートがちょうど出し手に被つたんだ。そしてスカートがどいたときにはもう三木は手を引いていた。だから私は見落とした。この勝負の出し手について、私は判断する資格がない」

「…、手を引いた……？ 確かに、そうかも……」

確かに、俺は志穂の攻撃を回避するために上半身を引いた。そのときに、前に出していた手、つまりは俺の出し手だが、もいっしょに引いた気がする。

いや、引いたというか、上半身をあまりに緊急回避的に引いたもので、手だけを前にとどめる、なんて器用なことができなかったのだ。というか、手を引いておかなかったら、位置的に志穂の蹴りを打ち込まれていたかもしれないので、あれは仕方なかったと言うべき不可抗力なのだ。

じゃんけんの出し手というものは、前に出ていて初めてそうであると呼べるのであり、引いてしまつては手であるとはいえない。なるほど確かにその通りである。

引いてしまつては、それがグーの手なのかただ握りしめているだけなのか、それがパーの手なのかただ開いているだけなのか、それがチョキの手なのかただのピースサインなのか分かりはしない。判断すること自体が不可能な状況に陥るのである。

だから姐さんは判断しない。俺の引いてしまつた手がグーの形をしていたことくらいは見えたかもしれないが、それをグーであつたと憶測することはないのだ。その判断に責任を持つことができない以上、姐さんがそこへと無責任に踏み込むことはないのである。

「で、でも俺は、グーだぜ？」

姐さんが見えていないということは、他の人もまた見えていない可能性が高い。というか、他の見ている人たちは漠然と俺と志穂との戦いを見ているのであり、俺たちの出し手にまで集中してみている人なんて、姐さん以外にはいないのである。

となると、俺の手がグーだったということは誰からの保証も得られ

ない。俺の理を説明したとしても、そこから俺の出し手の保証にまではつながらない。俺がその理に従って出し手を決定したということ自体への保証も、同様にないのだから。

「三木、私からお前の手について何かを言うことはできないが、一つだけ言えることがある」

「な、なに？」

「皆藤の手は、最初から今までずっとチョキだ。それだけは間違いない。私はお前たちの横、特にいうなら皆藤の右側に座っているから皆藤の右手の動きは始動点から終着点までよく見える。しかし逆に、三木の右手の始動点はよく見えない。始動点が見えればグーかどうかの判断はできるが、それが出来ない以上、私からお前の手について言えることはなにもないんだ、すまないな」

「いや、それは…、もういい…」

「ねえ、りこたん？ どうしたらいいの？」

「ん？ それは、皆藤の勝ちだろう」

「はっ？」

「勝ち？ やった、勝った！」

姐さんは言った。言ってしまった。そして志穂はぴょんぴょんと飛び跳ねて喜んでいる。

ちよ、ちよっと待ってくれ！

姐さんは、どういう意図を持ってしてか分からないが、志穂の勝ちであると宣言してしまった。勝負にかかわりのない第三者が、である。

それをされてしまうと、勝敗が決定してしまうのではないか。それはいけない。

「ちよ、ちよっと待って！」

俺はそれを許すわけにはいかず、ここで口を挟まないわけにはいかなかった。だって負け。負けになってしまう。勝っているのに、勝っていたのに！

俺は、負けていないじゃないか！

「なんで！　なんで志穂の勝ち！？　俺、負けてなくね！？」

「いや、負けているだろう。現に皆藤はチョキだ、最初からずっとチョキだったことは、私が保証する。対して三木、お前はパーじゃないか。そうして出しているのがパーである以上、そうとしか言えないぞ」

「い、いや、これは、志穂を起こしてやろうとしただけで……！！」

「そんなこと、私には分からないぞ。さっきも言ったが、私には三木が何の手を出していたかは分からないんだ。それに、お前がどんな意図を持ってその手を出したのかも、私には分からない」

姐さんの口からは、ただ真つ当な正論だけがつらつらと紡がれていく。正論とは、そもそも論駁することができないからそう呼ばれるのであり、今回もご多分にもれずそうだった。

「まさかそうだとは思っていないが、出した手が負けていたから『助け起こそうとしていたんだ』とごまかしているだけかもしれない。それを私は判断することができない。出来ない以上、目の前にある結果を結果として採用するしかないではないか、違うか？」

「ち、違う、ないです…、あっ！　違うって！　これは明らかにアクシデント！　アクシデントなんだから、取り直しだって！　再戦が、一番妥当！！」

「妥当ではない。言っただろう。最悪、お前が負けのごまかし、言い逃れをしている可能性がある、と。そんなことをしていたら、問答無用で負け、ルール違反だ。再戦を認めることはその違反を看過することにつながる可能性もある。だから、目の前にある結果を採用するのが最も妥当」

正論は、実際問題、非常に辛い。正論に余地はないのだ。理詰め、これこそ理詰め。俺のような勝ち方も理詰めなら、姐さんの説明も理詰めなのである。

それは追い詰めるためのものだ。逃げ場などない。正論に、抜け道はないのである。

「そういうゴネからの再戦を許していたら、負けそうになったら再

戦要求という寝技が横行して、そもそも勝負自体が成立しない。それに再戦というのは、勝負自体が崩壊したときの取り直しとするものだ。今の場合、確かにアクシデントはあったが、どちらからも待ったがかからなかったではないか。勝負の場が崩れたから再戦にしたいというのなら、アクシデントが起こった次の瞬間に、それこそ皆藤を助け起こす前に声をあげて止めるべきではないのか？」

「…、そう、だね……」

正論すぎる、本当に反論できない。止めなかったということは、状況を受け入れたということ。そう判断されても、仕方ないのである。状況を受け入れたうえで、現にある事実として俺が負けているように見えて、その上で実は勝っていた、負けていない、再戦だ、と騒ぎ立てるのは、間違っている。正論である。

「三木、お前の負けだろう」

「…、負け…、です……。騒いで…、すいませんでした……」

もはや、負けを認めるしかない。姐さんが真っ当すぎる正論で武装しているとなると、それを打ち破ることはできないのだ。負けた。何に負けた。

試合？ 勝負？ 気合？ それとも、偶然？

俺は、ガクッと膝を突いた。

少なくとも、しばらくは立ち上がれない。



## 負けず嫌い哀歌

俺と志穂とで長々とじゃんけんをし続けていたような気もするが、しかし実際に時間は四五分も経っていない。言い方を変えるならば、俺はほんの四五分もしないうちにここまで追い詰められた、と言いかえることもできるだろう。

「勝ってたのになぁ…、負けじゃないのになぁ……」

俺は、志穂とのじゃんけん勝負に負けた。ここ一番、負けてはならない勝負に負けてしまったのだ。

ただじゃんけんに負けただけでは。野球拳で負けたのだ。しかも五枚の脱衣を賭けた、必勝を期すべき勝負に、おそろくただの偶然によって負けた。

信じていた俺の勝つための仕組みは、ただの偶然によって挫かれてしまったのだ。それはもう、へこむというものだ。誰だって、ぶつぶつと、恨み言の一つや二つ、零したくもなるに決まっている。

「よし、これで勝負はついたな。皆藤の勝ちだ、よかったな。うんうん」

「うん！ 勝ったよー！」

寝転がったまま膝を抱えていじけている俺とは対照的に、志穂はぴょんぴょんと飛び跳ね回って全身で喜びを表現しているようだった。偶然勝った、みたいな形になっただけなのに…、俺が、勝ってたのに……。

「じゃあ、ゆっきい、脱いでね」  
来た……。

負けたのだから、当然そうなる。

俺も勝ったときは志穂を脱がせたのだ、自分が負けたときは、当然脱がなくてはならない。それが、自身を全裸にする行為であっても、その約束を違えるわけにはいかないのである。

もし違えれば、それは己の覚悟を裏切るということ。確かに俺はほ

ば必勝で脱ぐ確立の方が圧倒的に低かったとはいえ、少なくともその覚悟だけはしていた。

さっきは、負けたときはダッシュで逃げるなどと思っていたものだが、そんなことはしてはいけないのである。

相手を脱がせていいのは、自分が脱ぐ覚悟のあるものだけなのだ。

「分かってるよ…、脱ぐに決まってるだろ。四枚でも五枚でも、負けた分だけきっちり脱いでやるよ……」

しかしだからといって嬉々としてその行為に向かうことはできない。何が悲しくてこんなところで全裸にならなくてはいけないのだ。いくら学校の敷地内だからって、そんなことしたら通報だよ、通報。…、脱いだらすぐに服を持って逃げよう。俺が脱いだという事実さえあれば志穂はそれで満足するわけだし、逃げたとしても文句を言われる筋合いはないのだ。それに、そうすることによって俺自身へのけじめもちゃんとつけられる。

そもそもお座敷芸であるところの野球拳を、こんな野外でしようという発想自体が間違っているものであり、それくらいのことは許してもらわないと困るのである。

というか、よく考えたら、こんなところで脱ぐのか？

こんなクラスのと真ん中みたいな場所？

そんなことして俺、明日からこのクラスにいられるか？

「……………」

思考停止。

ダメだ、考えるな。

俺は負けたんだから脱ぐしかない。

そのことだけを考えろ。

羞恥心なんて、今はポイっ！　だっ！

「くっそお……、志穂、絶対許さないからな……！」

俺は一枚目、ネクタイの結び目を解き、思い切り志穂に向かって投げつけるが、そもそもそんなものをまともに投げるなど出来ないわけで、体を軽く反らせただけで簡単に回避されてしまう。

体を反らして紙一重で攻撃をかわすこと、それはスウェー。それはボクシングの高等回避技術。

「ぬげ！　ぬげ！」

志穂は楽しそうだ。シートにぺたつと腰を下ろして手拍子をしながらこちらをじっと眺めている。ついさっきまでの俺を見るようで、なんてバカなことをしているんだ、俺、と軽く自己嫌悪である。

霧子とメイはお茶を飲んでおしゃべりをしているように見せて、その実ちらちらとこちらを見ている。羞恥心はなかなかポイできるものではないので、出来ればこっちを見ないでほしい。

姐さんは硬直している。おそらく本当に脱ぎ始めた俺をどう始末したのか考えているに違いない。姐さんが動き出したとき、俺はきつとやられていることだろう。

そして周囲からも、志穂に敗北した俺が脱ぎ始めたのがそんなに興味深いのか、ちらちらと視線が集まっているのを感じる。

どうして志穂は、こんな中であんなにやすやすと脱いでいたのだろうか。それとももしかして俺は、このまま五枚連続で脱ぐことが決まっているからこんなに注目されているのだろうか。

「負けてない。俺は負けてないんだ。偶然負けたみたいに見えただけで、実際は勝ってたんだ。だから悔しくない、悔しくなんてない」左右のくつ下を脱ぐ。その二枚を、間をおかずに志穂に向かって投擲する。

しかし志穂は、今度は上体を大きく沈ませ、飛んでくる二枚のくつ下の下を連続でくぐって回避した。攻撃目標を失った俺のくつ下は、すぐに減速してシートの端のあたりに墜落するのだった。

それはダッキング。攻撃を回避しながら相手の懐に潜り込むための、攻防一体のボクシングの防御技術。

「心は負けてない。心は負けてないぞ。魂は勝ってるんだ。だからここで脱ぐのは負けを認めることじゃない。むしろ勝ちだ。ここで脱いでいるのは、むしろ、勝ちっ！」

かちやかちやとベルトを外す。ベルト通しからスッ！　と抜いて、

くるくると金具を中心にして巻き付けていく。そして俺はそこでできた渦巻状に巻かれたベルトの塊を、志穂に投げつける。

しかし志穂は、それをぺいつ、と難なくはたき落とす。

そして次に脱ぐべきシャツに手をかけ、ボタンを三つ外したから、ふと気付く。

「…、なあ、ベルトって、一枚じゃないか？」

「ほえ？」

「はっ？　なんだ、三木、何か言ったか？」

「あつ、いや、だからさ、さっきは数えるの忘れたんだけどさ、ベルトって一枚になるんじゃないかなあ、って。だってくつ下とかネクタイも一枚なんだからさ、それならベルトも一枚じゃない？」  
言うまでもなく、これは苦し紛れ。

最初から申告していればそういうことになったかもしれないが、それを今さら言うてどうするという話だ。申告しなかった以上、普通はベルトをズボンの一部として捉え、枚数にはカウントしてくれないだろう。

「まあ、別に今さらそうやってライフを増やそうなんてことを」

「確かに、そうかもしれないな」

「ベルトもライフにするの？　りこたん？」

「いや、そもそもな、皆藤と三木のライフの枚数に差があることは気になっていたんだ。勝負である以上平等であるべきなのだから、ライフの数も同じであるべきだと思っていた」

「俺は一枚脱いで始めたときに残りが五だったから、六で、志穂は八だったからな。確かに二枚違ってる」

「いや、一枚だ。三木、お前はあのとき自分の服が上着、シャツ、ネクタイ、スラックス、くつ下左右と言った。しかし自分の下着を数えていないではないか。まさか穿いていないというわけではあるまい」

「あつ、忘れてた」

それは、確かに本当に忘れていた。しまったな……。

「だから本当は七枚と八枚だ。ということは、そのベルトを入れて八枚同士にすることもできる、が」

そして姐さんは、顎に手を当てて考え事をするように目を閉じた。数秒、そのまま空間が停止、姐さんの沙汰を待つ。

「七枚と八枚でいいな。ベルトは含まん」

「そっか……」

「女子は下着が二枚、男子は下着が一枚。その一枚の差は下着の差だと思えば問題あるまい。そこにさらにベルトのことまで足してしまえば、今度は三木の方が多くなってしまいうからな。それに、下着については仕方ないとはいえ、ベルトを一枚とすればそれは不必要にライフを嵩増しするだけでしかない」

「それは、そうだと思う。分かった。言ってみただけだから気にしないでくれ」

ぷつつぷつつ、とボタンを外しながら、一枚、また一枚と着ている服は減っているのだが、しかし俺は心の中でほくそ笑んでいた。

これは好機。全裸となりライフ切れのパンクを起こしたと思っていた自分に、まさかもう一枚あったとは。数え忘れのもう一枚、いうなら俺も知らない埋蔵金。あるはずのない、寄り切られて超えた徳俵の向こうに、もうひとつの徳俵という異例。

これでまだ戦える。俺は、まだ勝負できる。

俺の理に寄れば、ここからでも比較的容易に逆転可能。志穂がいままで通りに手なりで手を出し続ければ、それだけで俺は勝ち続けられる。

「ベルトは含まないから、これで四枚目だ」

投げたワイシャツはふわっとシートに落ちる。

「志穂、これでお前の勝ちかと思ったけど、どうもまだだったみたいだな」

「そうだよね、ゆっきいはズボン脱ぐだけでおしまいだから、まだいちまいあるよ」

「俺は一枚、お前は六枚。圧倒的だ」

何より大きいのは、志穂が全てを賭けた一撃、アクションを引き込んで本来の勝負の結果をひっくり返すという偶然勝ちを、俺がしのいだということ。一撃で殺さなくてはいけなかった勝ちの仕組みを持っている俺を、二度は起こせないだろう神憑りの勝利を持つてしても仕留めきれなかったこと。

「分かるか、志穂。これが逆境…、逆境っていうのはこれなんだよ……！」

いや、逆境ではない。志穂から流れは去った。神憑りは一度きり、二度目はない。いかに神憑りのであろうと、二度目であれば理を持ってして打ち取り得るのである。

「勝負だ、志穂！　これから俺はお前に六連勝する！　そして勝利するんだ！！」

そして俺は、スラックスを脱ぎ捨てた。パンツ一丁である。しかしまだ全裸ではない。

まだ全裸ではないのだ。一度勝負に負けたが、まだトータルの試合では負けていない。俺はまだ、戦うことができる。

「よし、もう一回勝つんだから！　まけないぞ！」

「ふざけるなあああああああああああ！！」

再び勝負の炎をともし、四度目のじゃんけんに移ろうとする俺と志穂の間に、姐さんが割り込んだ。具体的には俺の腹筋のあたりに中段蹴りを飛ばし、俺を後ろに吹き飛ばしてから割って入った。

俺は思ったよりも不意打ちだった攻撃に、腹筋に力を込めることもできず、吹き飛ばされるままに後ろに向かって転がった。パンツ一丁で服を着ていないので、転がったダメージが直接体に伝わってき、すごく痛い。

「三木、貴様…、こんなところでこれ以上脱衣するつもりか！　羞恥心など、捨ててしまったということか！」

「止めないでくれ、姐さん。男には、やらなきゃいけない時があるんだ」

「それならば、風紀委員にもやらなくてはならない時があるぞ！」

姐さんは、志穂には目もくれず、ただ俺の方にだけ集中を向けている。確かに、今となっては志穂よりも全裸に近い俺の方が危ない存在であり、姐さんの中で優先すべき排除対象となったのだろう。

いや、俺だって別にこんなところで全裸になりたいわけではない。勝てるからこそ、こんなことを言っているのだ。あとは理で詰められる、もう一度詰め切れるのだ。

「私は止める！ 止めるぞ！ その覚悟があるのならば、もう一度『勝負する』と言ってしろ！！」

「俺はやる…、勝つんだ！ 負けたまま引き下がることは、できないんだ！！」

「その言葉聞き遂げた！ 私は風紀委員だ！ 覚悟を持って挑むものから逃げはしない！！」

しかし、そこから俺が言葉を継ぐ間は与えられなかった。姐さんは、俺が言葉を出すよりも早く動いたのだ。

「眠っている…、三木っ！！」

俺にはその動きが見えた。

見えたが反応はできない。

俺の左側に、姐さんは一步を踏んだ。体を大きく沈みこませるように上体を振り、そしてその振り戻しを使って力を込めないまま掌底が振りぬかれる。

顎の先を、打ち抜かれた。

これが脳を揺すられるということなのだと、俺はその感覚を初めて知覚した。視界が、ぐにやりと歪む。

上と下、天と地が混ざる。

体を立てておくことが、できない。

俺は、前も後ろもなく、シートの上に倒れ込んだ。

気絶…、そう、気絶である。

………

「の、のりちゃん…、幸久君が……」

「大丈夫だ。脳震とうで気絶させただけだから問題はない」

「平気、なの？」

「ああ、怪我をさせたわけでもないし、しばらくしたら目を覚ますだろう」

『幸久君、このままじゃかわいそう』

「そうだな、服を着せてやってくれ。私は、少し顔を洗ってくる」

「ゆっきいゝ、おゝい」

「しいちゃん、つんつんしてないで服着せてあげないと……」

『ほんとにだいじょうぶ？』

「大丈夫だ。力は込めていないから顎の骨が砕けたりはしていないし、掌底を打ったから痛めるようなこともないだろう。まあ、少なからず痛かっただろうが、それくらいは熱くなりすぎた代償だ」

「ゆっきいゝ、おゝい」

「にゅ…、しいちゃんも手伝ってよお……」

『幸久君、重い……』



## ネコなでなで

それからしばらくして、俺はパツと目を覚ました。

まだぐらぐらする頭を押さえながら、俺はついさっき自分に何が起こったのかを思い出そうとしていた。思い出そうとして、すぐにさっきあったいろいろなことがフラッシュバックするように頭の中に浮かび上がってくる。

「自業自得とはいえ…、頭、いってえ……」

そして、記憶の中ではじゃんけんに負けてパンツ一丁まで服を脱いでいたはずだったのだが、今はきちんと上着にネクタイまで締めていることに、ふと気づいた。結び目に触って、霧子が着せてくれたんだ、ということが分かる。

それはなぜかといえば、霧子が俺のネクタイを締めようとする、逆向きの動きが難しいのか、なにかおかしい結び目になってしまったのだ。去年はなぜか、俺のネクタイを締めるのが霧子のマイブームだったようで、時たま結ばせてやっていたからそれが分かる。

とりあえず、後でネクタイは結びなおしておこうと思う。

「まあ、あとでお礼でも言っとくか」

しかし、思い返せばさっきは熱くなりすぎた。自分が基本的に負けず嫌いだということは分かっているつもりなのだが、なかなかそれを直していくことはできない。さっきだって別にあそこからもう一戦、と持ちかける必要はまったくなかった。

むしろ、ライフの数え間違いがあって、俺のライフが零になってもなお一枚残っていたのだから、そこで「俺の負けだな」と勝負を閉じるのが最善の選択だったに違いないのである。そうしていれば、風紀を乱したと判断されて姐さんからしばかれることもなかったのだ。

そしてそれは、最初からの目的である、穏便に野球拳という危険要素と場を収める、というものにも合致する。それだというのにどう

して、そこでもう一戦、という発想に至ってしまうのか、今思えばまったく謎である。

「勝負とかギャンブルとか、そういうのがそもそも向いてないんだろうな、俺」

引き際をわきまえないということは、つまりどこまでも熱くなるままに突っ込んでいってしまふ、ということである。今回のことだつて、最初から目標を定めていたというのに、気づけばそんなことを忘れて勝つことに終始していたわけだ。それに、きっと勝負を再開してしまえば、不確定要素もなく今度こそ勝ち切つて、志穂が全裸になるまで勝負を止めなかったに違いない。まったく、そうなる前に姐さんが止めてくれてよかった。

そして、もうひとつ。

「メイ、悪かったな」

シートに大の字に横たわり天を見上げるのみである俺の目の前には、しかし両目を閉じているメイの顔があった。そして頭は硬い地面ではなく、柔らかくハリのある枕のようなものに乗せられている。

こうして目を閉じて動かない様子を見ると、その小ささも相まって、まるで人形か何かのようなかわいさだな、と思った。もう少しの間だったら、このまま眺めていてもいいかもしれない。

「枕にさせてくれたみたいで、助かったよ」

だが、まあ、実際のところそんなことをいつまでもしているわけにもいかなないのである。

しかし、俺に膝枕してくれたメイから、どうしたことかいくら声をかけても反応がない。もしかして寝てしまったのかな、と頬に手を伸ばし、ぺちぺちと二度軽く手を当ててみるが、やはり反応なし。寝てしまったのか、と思ったわけだが、どうやらその眠りは俺が思ったよりも深いらしかった。耳を澄ましてみれば、あたりの喧騒にかき消されそうな音でしかないが、すーすー、と静かな寝息も聞こえてくる。

「メイ？」

しかし、よく見ると、まだ陽が傾いているわけでもないのに、その頬にほんのりと朱が差していることに気付いた。なんだ？　もしかして具合でも悪いのか？

しかし、調理が終わってから今まで、ほんの一時間も経っていない。そのときも具合が悪そうにしている感じはなかったし、どうしたところだろうか。もしかして外にいただけで風邪を引いたのか？

いくらメイが弱弱しく見えるからといって、そんなことはないのではないだろうか。

調理室ではあんなに元気に料理していたわけだし、そもそも、一時間ぽっち外にいただけで風邪をひいたりしたら体育の授業もできないだろう。

「メイ、ちょっとごめん」

メイの膝枕から起き上がるのはもったいない気もしたが、今はそんなことを言っている場合ではない。俺は上半身を持ち上げて体を起こすと、メイと向き合うように体の向きを変える。

下から見上げたときは勘違いかも、と思ったが、しかしこうして正面から見るとその変調は明らかだった。まず頬に朱が差していると思ったのは間違いで、実際のところ顔は真っ赤で、その中でも頬が特に赤かったのだ。

まず、両頬に手を当てる。けっこう熱い。メイは、俺の当てた手が冷たくて気持ちいいのか、すりすりとかすりつけて手に懐いてくる。俺と友だちになろうとしてくれるのはよく分かるのだが、志穂がするような身体的接触を避けようとする傾向があるメイがそんなことをしていると思うと、ちょっとだけドキドキする。

こんなに無防備なメイは初めてだ……。志穂は、一年間の飴と鞭と飴攻勢によって、俺に対しての警戒心がアホのようにダルダルになってしまっている、言うならば家猫状態なのだが、メイはまだ俺との関係にそんなに慣れていない、仲良くなっている途中の新参猫でもないようなのだ。だからこうして無防備に懐いてくれるのを見るのは、少しだけうれしい。

「あ、熱いなあ…、心配だなあ……」

熱っぽいメイが心配だぞ、と自分自身に対してのいいわけをしてから、あたりをちらちらと確かめてメイの頬から両手を外す。熱が少しだけ移った手は、俺のものとは違う体温でほんのりと温かい。

両手をシート越しに地面につけて冷やし、それからもう一度メイの両頬に当ててやる。さっきよりもさらに冷たいものを当てられて少しだけ驚いたのか、体を小さくピクリ、と震わせるが、今度もまた逃げようとしたり体を硬くしてしまうことはない。

それどころか、冷たさを求めているようで、さっきよりも強く熱心に俺の手に頬ずりをしてくる。小さな黒猫がにーにー鳴きながら手に懷いてくる様を想像して、にやにや笑いが止まらなかった。

これ、俺から撫でたらどうなるんだろう。さすがに目を開けるだろうか。でも、ほんの少しだけだったら……。

俺は左手を離し、右手だけをメイの頬に当てる。両方から押さえられていたさっきよりも動きやすくなったからか、より積極的俺の手に懷いてくるメイを、しかし今度は俺の方からも撫でていく。

「メイ？　だいじよぶか？」

心配そうにしている体を装いながら、いや、心配はしているのだが、メイの頬ずりにあわせるように少しだけ手を動かしていく。すりすり、温かくて柔らかい頬が、俺の手の上を行ったり来たりしている。なんだか、だんだん変な気分になってきた。

い、いかん…、これ以上やっていたら、気づいたらメイの頭を抱きしめていたとかいう状況が普通に起こってしまいかねない。そんなことをしている場合じゃないだろう、落ち着くんだ、俺。

すりすりとなんか残惜しそうに俺の手に懷いているメイから、俺は涙をのんで手を離す。もしかしたら具合が悪いかもしれないメイを相手に何をしているんだ、俺は。

深呼吸をもう一回、乱れた心を落ち着ける。

「メイ、大丈夫か？」

気を取り直してメイに声をかけながら、俺はそのおでこに手を当て

て、自分の体温と比べてみる。俺の体温はそんなに高いわけではないから何とも言い難いが、少し熱が高くなっているように感じられる。

さっきはそんなことないと思ったが、しかしこうやって真面目に体温を感じてみると、やっぱり具合が悪いのかもしれない。それならば、保健室にでも運んでやるのが正しいような気がしてきた。やはり、風邪をひいたとするなら、こんなところにいつまでも居させるわけにはいかない。

「保健室、連れていった方がいいな」

保健室につれていってやれば先生に診てもらうか、もしいいとしてもベッドで寝かせてやることができる。少なくともこんなところで俺に膝枕をしながらうたた寝するように寝ているよりはいいに違いない。

それにもし具合が悪いのではないとしても、少なくともここよりは保健室のベッドの方が上等なわけであり、もう少しは安らかに眠ることも出来よう、というものだ。

「おんぶするからな、メイ」

しゃがんだままメイに背を向けて、その細い両手を俺の肩越しに前に回させる。そしてそのまま背中中に密着させるようにしてから、その両手の合わせ目を片手でつかんで、てこの原理でくっ、と持ち上げる。

重さは、ほとんど感じない。その身長と細さのせいだろう、志穂なんかよりもずっと軽い。ここまで軽いと、本当にお人形さんかなにかでも運んでいるような、そんな気になってくるじゃないか。

メイの両手は俺の首に抱きつくようにさせ、そして俺は上半身を前に傾けるようにしてメイが俺にもたれかかるようにする。メイから力を入れてくれない以上、こうしておんぶするのが一番背負われている方の負担が少ないのである。長年の霧子に対するおんぶ経験の積み重ねが、ついにこのスタイルを確立させたのだ。

しかしこうしておんぶをするとき、一つ問題になるのは、背負われ

ている側の頭の位置だ。当然、背負われている側に意識があるのなら顔をあげていてくれる。しかしそうでない場合、頭は前か後ろ、どちらかに流れざるを得ず、そして俺のしているように前かがみで背負った場合は必然前に流れるのである。

頭が前に流れるということは、前に回している左右どちらかの肩の上に置かれるというわけであり、必然的に背負う者の顔と背負われる者の顔とが非常に接近するわけである。もしその相手が霧子だったら俺としても慣れたものであり、いくらかわいい寝顔ですやすやにゆんにゆん言っていたとしてもまったく動揺することはないのだが、しかしメイが相手ではその限りではない。

だから、気になって気になって。ピコピコと揺れているツインテールが気になって、ふわふわ漂ってくる髪の毛の匂いが気になって気になって。そして、気づいた。

それはかいだことのある匂いだった。最近では料理をしているときにかいだ。庄司の家を放り出される前には毎日かいでいた匂い。ああ、あとは隣家ののんだくれ女が家にやってくる時も、いつも漂わせている匂いだった。

それは、メイの呼気に混じって、俺の鼻孔に到達した。

おそらくだが、アルコール。

もっと端的に言ってしまうえば、酒である。

それはアルコールの匂い、さらにいえば、アルコールを摂取した人の匂い。本来ならばありえないだろうに、どうしてメイからそんな匂いがしてくるといえるのか。

アルコールなんて、ここになかったじゃないか。メイは自分から酒を飲んでしまうような悪い子じゃないし、そもそもそんなものを持つてくることを姐さんが許しはしない。家に酒を飲む人のいない霧子が、実は俺に隠れて飲酒の味を占めていて、俺が意識を失ったのをいいことに持ってくるとも考えがたい。

となると、志穂か？ 志穂がなんにも考えないでこんなことをしたというのか？ 大して意味もなくこんなわけの分からないことを…、

やりかねない！

「志穂〜！ どこだ〜！！」

俺は一度メイを背負って立ち上がったものの、最有力容疑者である志穂を探し出すためにメイをシートにもう一度横にしてやり、そして再び立ち上がるのだった。

そのまま寝たのでは体が痛くなってしまうかもしれないが、すぐに志穂を断罪して、メイを保健室につれて行ってやるので問題はあるまい。

しかしとりあえず、俺は上着を脱いで折りたたみ、枕の代わりにメイの頭の下に敷いてやることにする。こうしておいた方が、ただ地面に寝かせるよりは負担も少ないのではないか、と思う。

できればさっきしてくれていたのと同じように、俺が枕になってやればいいのだが、しかしまずはこの状況をそもそも作り出したと思しき志穂に罰を与えなくてはならないのだ。

志穂のやつめ…、気絶した俺のために枕になるという大変な役を買って出てくれたメイに、動けないのをいいことに酒を飲ませたに違いないのだ。

そんなこと、絶対に許してやることは出来ないのである！！

## 逃げ損ないと攻め損ない

「志穂〜！！ どこだ〜！！」

もしかして志穂がみんなに酒を飲ませているのではないか、という疑念が、ここにあった。それは確かに確証があるわけではないし、あるいは志穂はなにも悪くない、という可能性も大いにある。しかし志穂は怪しい、怪しすぎる。

今まであいつがやってきた行動から顧みても、ここは志穂が無条件に怪しいのである。こういう普通だったらやらないようなことを、その場の勢いと思いつきで、無思慮に実行してしまうのが志穂なのだ。

いや、もしかしたら、それが酒だと理解しないままに飲み飲ませているのかもしれない。最近の酒の缶は、なんとなくかわいらしくキレイで、志穂が興味を持ちそうな感じをしていることだしな。

「絶対に許さないからな、志穂〜！！」

しかし悪いのは、志穂だけということは決めているのであるまい。むしろ悪いのは酒を曖昧に管理していた教師たちであり、志穂がそれと気づいてしまうようなところに置いてしまう迂闊さなのだ。

というか、そもそも学生の手が届いてしまうところに酒を放置するな、というのだ。別に酒を飲むんじゃないとまでは言わないが、しかしそれだとしても、教師としてそのあたりの管理は徹底してほしい。

本当に、何のために教師という職が存在していると思っているんだろうか。頼むから未成年の飲酒を助長するようなことをしないでくれ。

「子どもがお酒なんて、飲んでいいわけないだろうが！！ って、あれっ！？ なにこれ！？」

俺はガバツと立ち上がり、そして志穂を発見・誅殺するために周囲へと目線を走らせる。そして不意の出来事にあまりに驚いて、うつ



かりいつもならしないようになりアクションを取ってしまった。

不意の出来事とは何か、といえば、それは目の前に思ってもみなかった光景が広がっていたのである。それは、思ってもみないというよりもむしろ信じられない、いや、ありえない光景が広がっていた。もう、俺が寝てる間に何が起こった、とても言いたいような、そんな惨状がそこには広がっていたのである。

「えっ……、あれ！？　なに、えと、えっ！？　何がどうなってる感じなんですか！？」

あまりに狼狽し、あまりに焦った結果、俺は自分でも気づかぬ間に丁寧語になってしまっていた。普段はそんな言葉を使わないだけに、自分で感じる違和感が半端ではないのである。いや、そんなことはどうでもよくて。

辺りを見回しても、残念ながら今ここでなにが起こっているのかを教えてくれそうな人の影はない。というよりもむしろ、正気を保っている人の影すらも見えない。おそらくこの場でもっとも正常の思考状態を保っているのは俺だ。

「どうしよう、どうしたらいいか分からん……」

俺の周りは、さっきはメイしか目に入っていなかったのだが、落ちて着いて見るとかなりの数の女の子がぐったりと倒れ込んでいた。倒れているのは、だいたいクラスの半分くらいだろうか。

しかし残りの半分は、倒れてこそいなかったものの、様子がおかしい。やけに陽気そうにしていたり、やけに陰気そうにしていたり、いつも教室で見せるような姿ではない、頭の中の大事なねじが何本かズレてしまったかのような、そんなおかしさを感させた。

さっき俺に料理を食べさせてくれた弓倉たちの班が座っているシートでは、遠藤が倒れている横で、いつもならそういうのを放っておけない質の高見が体育座りで膝に顔を埋めているし、弓倉はなににもいないはずの虚空に向かって何かを延々と話しかけているようだし、榎木はけらけらと異常なほど愉快そうに、まるで小さな子どものようにペタンと地面の腰を下ろし伸ばした足をばたばたとさせながら

笑い続けている。

「……、逃げる……?」

状況は、限りなく危険である。おそらく俺がこれまでに遭遇した中でも一二を争うほどの、俺の力ではどうすることもできない最悪の状況だった。このままここにいても、俺はなにも出来ない。いや、何らか改善していくことが出来ないどころか、まさに刻一刻と悪化していくこの状況を、悪くなっていくままに傍観していることしかできず、現状維持すらもできないのだ。

脳内にエマージェンシーコールが鳴り響き、パトランプが真つ赤な光線をまき散らしながらくると回っているような、そんなイメージ。どうすることが正解なのか、ということは、もはや考えるまでもない。

逃亡。

事ここに至っては、状況から逃亡することこそが正解。

ここは一回退いて、しっかりとした状況の認識を行ない、そしてそれに対してある程度以上の対策を組み上げて、なにがどう問題なのかという意識とそれにどう取り組んでいくのかという姿勢をしつかり立て直す必要がある。

しかしその判断よりも速く、脳ではなく脊髄が反応する。反射的に、俺はこの状況から最短距離での逃走を謀った。メイを担ぎ直すとか、犯人の最有力候補である志穂を見つけ出して説教するとか、そんなことを考えている場合ではなかった。

俺はこの状況の中に巻き込まれてはいけない。もし俺がここに取り込まれてしまえば、この状況を解決してくれるものが、時間以外になくなってしまうではないか。

だから、逃げなくてはいいけない。

「っ!?!? なんだ!?!?」

俺は逃げ出した。

しかし、逃げることはできなかった。

そこまで決意しておきながら、俺は走り出すことができなかった。

いや、走り出すことはおろか、一步を踏むことすら、足がほんの少し前にやることすらできなかったのである。

足が、なぜかやけに重かった。それはまるで重しをつけられたようであり、あるいは何かが絡みついているようでもあった。

その異常の原因を求めて、俺はすばやく振り返り背後に視線を飛ばす。何が絡みついているのかを、俺は確かめなくてはならない。そしてそれを振り払い、俺は逃げ出さなくてはならないのである。

足を両手でつかみ、そこに両腕を絡みつけていたのは、ある意味で案の定というかなんというか、志穂と霧子だった。右足は志穂に、左足は霧子に、それぞれがまるで抱きしめられるように捕えられていた。

決してそのことを予想していたわけではないが、正直に言うと、なんとなくそんな気はしていた。実はさっき辺りを見回して一瞬放心したとき、絡みつかれたような感覚が、なくはなかったのだ。

そして相手が志穂と霧子なので、普段はあまりそうとは捉えていないとはいえ、女の子相手に力に任せて引きはがすというわけにもいかないのである。男たるもの女の子は大切にするものであり、怪我をさせること、暴力を振るうことなど論外の問題外なのだ。

こんなときにでも、そんな晴子さんの洗脳に強迫的に従ってしまう自分かもどかしい。女の子は何においても大事に、丁寧に扱うものであり、最恵待遇を与えてしかるべきなのだ。故にここでも、いや、いかなる場合においても、雑に扱うことなど許されないのである。

「ねえねえねえねえー！！ ゆっきいはあ、ゆっきいはあ！！ どこにい、いつくのっかなあ？ どっこ、いつく、のおく？」

「きやははははははははは！！ 幸久くん、あのねえ？ これ、このジュースがねえ、あのねえ？ おいしいんだよお？ すっごくおいしいからねえ、あのねえ？ 幸久くんにも、一口わけてあげるねえ？」

志穂は、ついさっきまで足にしがみついていたと思ったのに、今はすごい勢いで俺自身を登攀しており、すでに背中に貼りつくところ



？」

「いい！　いらない！　俺は、いらないから！！」

「これは、いらないのお？　じゃあこれ？　それとも、これなのお？　どの缶がいいのか、にゆく、分からないよお」

「どの缶とかじゃないの！　俺はそれ全部、いらないんだって！　俺は飲まないし、霧子ももう飲まないの！！」

「きゃはははははははは！！　幸久くんってば、変なお！！　変なこと言ってるう！！　きゃはははははははは！！」

「ゆっきいゆっきい！！　あたしもついてついていい？　ついていいの？　ついてついていいよね？　ね？」

「誰もついてこないの！　俺一人じゃないと平和じゃないじゃん！　平和じゃなくなるじゃん！！」

「へーわって、なあにいう？」

「おかしなことが起こらないってことだよ！！」

逃げようとしたものの、しかし一度足を止められてしまうともう一度走り出そうとするのはなかなか難しいことで、しかも志穂をくっつけたまま逃げては何の解決にもならないので、俺は足が解放されたにも関わらずここから逃げ出すことができずにいた。

志穂をはがして捨てることもできず、こんな霧子をここに放置していいとはいけない気もして、俺は逃げることができない。しかし逃げない以上ここにいないくたはならないわけで、正直それかなりイヤだったりする。

しかし、やばい、なんだ…、これは。本当にもう、この場にはまともな話ができそうな人は一人もないのだろうか。いや、そうだ、姐さんはどこだ？　未成年者が飲酒するというのは、当然法律で禁じられていることであり

、それによって校則がどうかこうとか言う以前に姐さんだりしない。姐さんは風紀委員として校則を守ることは当然として、同時に日本人として社会のルールを遵守している。アルコールなんて飲んでいないに決まっているのだ。

しかしそれならば、姐さんはどこにいるというのだろうか。酒を飲んでいないというのならば、俺と同じようにどうすることもできなくて立ち尽くしている可能性もあるのである。しかし姐さんならば、そんなもたつき方などはしていないのかもしれないわけで、もう解決に向かって動いているかもしれない。

「志穂、姐さんどこにいるか、分かるか？」

「りこたんが、どこにいるか？」

「そうだ、姐さんはもうとっくにここにはいないかもしれないけど、一応、な」

「りこたんはね、えっとね」

しかし、志穂に聞きながらも周囲を見回してみるのだが、それらしき人影はどこにも見えてこないのだった。ただ俺が見つけたのは、俺たちのシートの端のほうでしくしくと泣きながら、高見と同じような体勢で膝を抱えながらちびちびとでかい缶をあおっている少女だけだった。

まあ、これは姐さんではあるまい。この娘は、姐さんに似ているような気もするけど、雰囲気の違いすぎるし、きっと違う娘なんだろうな。

「んとね、そこ」

俺がいくらまさかな、と思っけても、しかし志穂が指差したのはその女の子だった。もしかして本当に、ここに座ってるのが、姐さんなんですか……？

それから俺は、とにかく確証とかはないわけなのだが、認めるのは怖い、その体育座りの女の子に、意を決して話しかけることにする。

「あ…、姐、さん…、なのかな？」

## 抵抗×飲酒×異変発生

「あ…、姐、さん…、なのか？」

俺は、そう尋ねずにはいられなかった。俺の目の前には、体育座りで小さく小さくなっている、一人の女の子がいた。

黒々とした艶めく緑の黒髪は肩口に届きそうなところでそろえられている。

目の辺りはかすかに赤くはれており、今こうしてしくしくと、さめざめと泣いているだけではなく、少し前からずっとそうであることが分かる。

膝を抱えている左手と逆の右手には、五百ミリリットルの大きな缶が握られている。握る手に力が込められているのか、缶に印刷されているロゴが微妙に歪んでいるのが分かる。

一目見て、弱々しいと思った。それは俺の中にある姐さんのイメージの対極であり、その様子から姐さんをイメージすることは難しいことだった。

「風間、紀子さん…、ですかあ……？」

しかしそこにいるのは、それでも姐さんなのである。いつでも凜としていて強いしっかり者、という一年かけて築かれた強固なイメージからかけ離れていても、それでもそこに座り込んでいるのは姐さんなのだ。

「ああ、三木…、か」

姐さんの首が、ぐりっ、と首に負担がかかりそうな少し無茶な挙動を見せる。そしてその視界に俺を捉えたようで、ぼんやりと空気に溶けるうわごとのような声で俺の名前を呼んだ。

見る限り、目が虚ろである。まるで暗闇にいる猫のように瞳孔が開いており、きつと死んだ魚のような目というのは、こういうものかことをいうのだろう、と俺はそのときふと理解した。

「大丈夫…、か？」

大丈夫でないことは、その様子を見ればすぐに分かるのだが、しかし俺はそう聞かずにいらなかった。少なくともそんな目をしている姐さんを見たのは、これが初めてのことだから。

「三木…、そうか、三木か…。」

ゆらりと、まるで幽鬼か陽炎のように立ち上がり、そして次の瞬間には俺の目前にいる。間合いを詰められる、と思ったときには、すでにそれどころか肩に手まで回されていた。

いつもだって俺なんかよりずっと動きのキレはいいのだが、しかし今は、そんな次元を超えている。俺の理解できる動きの速さを、一回りも二回りも上回っているような、そんな感じがした。

「ああ、私はダメだ…。まあ、座れ、三木」

そして、凄い力をもってしてその隣に座らせられるのだった。姐さんは変わらず体育座り、俺も同様に体育座りを強いられる。スラックスからはまだ洗濯したばかりのような匂いが、どこことなく漂っている気がする。

背中にはまだ志穂がくっついていているし、後ろには缶を持って今までにないほどに笑いながらプルトップと戦う霧子が立っているし、横ではしくしくと体育座りの姐さんが泣いている。

なんだ、この状況。なにか、いや、なんでか分からないんだけど、なんか怖いぞ…。

もう、さっきは逃げられなかったけど、今度こそメイを連れてきっちり逃げたいんだが…。

「いいか、三木。お前はよく分かってないみたいだから、もう一回だけ言うておくぞ…。」

そして姐さんは、涙をぬぐうところどころでしゃくりあげながら話を始めてしまった。姐さんの拘束から逃れて、志穂を俺の上から下ろして、それからメイをピックアップして逃げるというのは、さすがに無理な気がしてきた。まず最初の姐さんの拘束から逃れるっていうのが、そもそも無理だった。

「ゆっきい。あたし、ゆっきいん家に行きたーい」



「きやは、すぐだから、すぐに開くからね。ちょっと待ってねえ？  
きやはは」

志穂は頭上ではしゃいでいるし、霧子は後ろでまだかすっ！ かすっ！ とプルトップと戯れている。しかし俺はそんなことよりも姐さんの話に集中しなくてはならない。そうしなくては、何かが危ない気がするのだ。

「知っているか？ 私は女なんだぞ？」

「し、知ってる知ってる」

「本当に知っているのか？ 本当に分かっているのか？」

「姐さんが男だなんて思っていないって。どこからどうみても女の子だよ。絶対、間違いない」

「絶対…、間違いなく…、男だっていうのか…、そこまで言うことはないだろう！ あんまりだっ……！」

そして姐さんは、手に持った缶をひっくり返してその中身を喉の奥に流し込むと、ぶんっ！ と向こうの方に投げて膝に顔を埋めてわっ、と泣きだしてしまった。俺の言葉がどうしてそんな風に姐さんの中で変換されてしまったのか、俺にはさっぱり分らない。

なんだこれ、何が起こっている。この理不尽さ、まるで酔っ払いのようではないか。隣家の酔っ払いが家にやってくる時も、おおむねこのような理不尽な状況にさらされるので、こういうことにはどことなく覚えがあるのである。

姐さんが酒なんて飲むわけないだろう、と思いつと放り投げられた缶に目をやって、そしてそれが酒の缶であることに、いまさらながら気づく。酒だよ！ 姐さんも飲んでるよ！ じゃあ、あれか！ 酔っ払いか！

「姐さんは、女の子だって！ 自信持てって！」

「自信なんて持てるか！ どうしたら自信なんて持てるというんだ！」

「決めた！ あたし、もうおりないよ。ゆっきいの上でいきっていくよ！」

「にゅ〜？ おかしいなあ、開かないなあ……。にゅん、もうちょっと待ってね？ 幸久君？」

志穂も霧子も騒いでいるが、しかし姐さんがそれどころではない。どこかよくわからない、おかしいところに思考がハマりこんでいるようだった。

「私だってな、女らしくしようと頑張っているんだぞ！ それなのに男たちが風紀委員をやっている女は怖いなどと私を避けるから、女の子ばかりが寄ってくるではないか！ なんで私が女の子に告白されないといけないんだ！ そんなことされても、うれしくないんだぞっ！」

「姐さんは女の子らしいよ。かわいいよ！」

「嘘だあっ！ 三木が私に嘘を吐く！ あんまりだっ！」

そして再び泣きだしてしまふ。もうどうフオローしてもダメなのだろうが、酔っ払いなのだから仕方ない。だがしかし、いくらフオローしても無駄だとしても、ここで姐さんを放っておくこともできないのである。

「ゆっきい、ふつつかものですが、よろしくね！ これからは、ずうっといっしょだよ！」

「開・い・た〜♪ 幸久くん、お待たせ〜」

「どうしたらお前は私が女だと分かってくれるんだ……。三木…、教えてくれ……」

「いや、俺は姐さんが女の子だってことは分かってるって。男だなんて、全然思っただけからさ」

「なんで三木は私に嘘を吐くんだ！ 三木は、私のことが嫌いなんだあっ！！」

「あつ、でもトイレとかおふろとかどうしたらいいのかなあ。いっしょに入るのは、ちよつとはずかしいなあ」

「にゅ〜、ほら、幸久くん。手、放してくれないと飲ませてあげられないよお。手を放してよお」

「よせ、霧子、俺は飲まない。飲まないからそれを地面に置いて、

それからそこから三步離れなさい。姐さんも落ち着いて、泣かないでくれ。女の子に泣かれるのは、苦手なんだ。っていうか志穂、お前は下りろ！」

肩の上でわきわき動き回っている志穂を下ろそうとしながら、ようやくプルトップとの戦いに勝利した霧子が俺にそれを飲ませようとするのを左手で押さえながら、泣いてしまった姐さんを右手で慰める、という神業的な並列作業ぶりを見せる俺である。

どうしてこんなになんばっているのか、分かったものではない。

「にゆう…、幸久くんってば素直じゃないんだからあ……。しょうがないなあ、じゃあいつもみたいにしていあげるう」

「いつもってなんだ、俺は霧子と酒を酌み交したことはないぞ……。っていうかなんで自分で飲んでるんだよ、俺に飲ますんじゃないかったのかよ！」

霧子が酔いに任せてか、謎の行動に出ているのだが、しかしそこにはばかりかかずらっているほど、俺の状況は甘くなかった。霧子が勝手に自己完結してくれるのならば、それはそれで悪くない。その分だけ他のことに意識を割くことができる、というものだ。

話をしているようであり、しかしまともにそれが出来ているとはいえない。そういう通常の測りから逸脱したよく分からない存在こそが酔っ払いなのであり、そういうものは放っておくに限る。時折我が家に来襲する隣家の酔っ払い女も、よくそうやって対処しているのである。

「どうしても私が女ではない、とそう言い張るのなら、お前自身の手で確かめてくれ！ 何をしてもいいぞ！」

「姐さんが女じゃないなんて、俺がいつ言った。確かめないから脱ごうとするな！ 脱がないでっ！」

しかし、いかに霧子が脱落したことによって俺が両手を使うことができるようになったとはいえ、位置取りの関係で姐さんの脱衣を決定的に止めることはできないのである。唯一の救いは姐さんが俺の肩に手を回しているので右手一本で脱衣を行なっているのであり、

しかもその手つきはおぼつかないもので、スピード脱衣というわけにはいかない、というところだ。

急に話は変わるが、姐さんはスタイルがいい。霧子は、他の家族はみなスタイルがいいというのに、まるでなにかの呪いでもかけられたように胸がふくらまず、そのことを悩んでいるようである。志穂とメイは、身長相応というか、成長相応のスタイルで、詳しく言うのははばかれるが、慎ましやかな体型をしている。

しかし姐さんはそれとは一線を画するといってもいいだろう。風紀委員会で鍛えているのか、その体はとても引き絞られていて、それでいて出るところは出ているという、何だこれ、と言いたくなるようなプロポーションである。当然だが、胸も非常に女性的なふくらみを帯びているわけであり、具体的なカップ数で考えてもCとかDとか、いやそれ以上にありそうな感じである。

つまり、こうしてタイを外してボタンを一つ、二つと外していくと、見えてきてしまうのである。霧子ならばぺたっとブラ的なものが存在しているだけの場所に、下着を大いに押し上げてしまっている、その、真っ白い二つのふくらみが。それどころか、二つのふくらみがせめぎ合い、山と山がぶつかり合って谷ができるように、谷間とでも呼ぶしかない代物がそこには形成されているのである。

なんだこれえ……！　こんなの、雪美さんがやけに胸元の開いている洋服を着ていたときにしか見たことがない……！　あつ、いや、雑誌のグラビアとかでも、見たことがあるかもしれない。

そんなもの、男がいかに頑張ったところで、逆立ちしたってできるようなものではない。それはもう、女の子の女の子たる象徴であり、外見的看着て姐さんが男などではない最大の証拠なのである。それ以外にも姐さんの女の子らしいところなんていくらでもあるわけで、男だと思ふなど、ありえないのである。

「にゃ、ゆっきい、あたしなんかトイレいきたいかもお……」

「じゃあ下りて行ってこいよ！」

「だめえ、ゆっきいからおりたらおぼけにつれていかれちゃうよ、

おぼけの国に。だからいつしょにきょてよお〜！」

「お前ならお化けに襲われてもどこかに連れて行かれたりしない、  
っていうか勝てるよ！ 行ってこいよ！」

「や〜だ〜、ゆっきいも来るのお〜！」

「げほっ……！？ よせ、志穂、首を、絞めるなあ……！！！」

視界の端に映るのは志穂の紺のソックスに包まれている生足。器用なことに志穂は俺の背中の上で寝転がるようにしながら、巧みに左右の太ももで勁動脈を絞めてきたのである。酔っているからか、遠慮も呵責もあったものではなく、完全に極まっている。冗談抜きで、マジで苦しい。肉付きの薄い少女の太ももが、とか考えてる場合じゃない。

しかし困ったことに俺は少なくとも腕一本を姐さんに割いていなくてはならないので、志穂に回すことができるのは左手一本だけである。まさか、左手一本で志穂をどうにかしなくてはならないとは。だが、まさか本当に左手だけで志穂をどうにかできるなどと、思っ  
てはいないわけで、せめてもの足搔きにタップくらいはするのだった。

そして志穂は、俺のタップに気づいてくれたのか、腹筋だけで起き上がると、少しだけだがその足の締め付けを緩めるのだった。俺が助かった、とわずかに気を抜いて次の瞬間である、タップするため  
に首元にもっていつていた腕が、首を締めつける足に巻き込まれ、そのまま流れるように三角締めに移行したのである。

これも完全に極まっている。立ち状態のまま三角締めを極められる日  
が来るなんて、たいていの理不尽には馴れている俺といえど、まさか  
思いもしなかった。

これは…、まじで、ヤバイ……！！！！

「分かった、から…、後で、ついてってやるから！」

「うん、だからゆっきいすき〜」

俺が命の猶予と引き換えにそれだけ言うとすぐに志穂の三角締めが緩み、締めが解けたこともあって、ようやく息をすることができ

ようになった。辺りの空気はアルコール臭ただよう悪いものだが、それでも新鮮な空気を吸い込むことが出来るのは何事にも代えがたい喜びである。

そして、あやうく俺の意識を奪いかけた志穂だったが、三角締めを止めたと思うと、背中まで降りてきて、まるでおんぶをするような体勢になって俺の首にぎゅっ、と抱きついてくるのだった。こうして黙ってくっついていて分にはかわいいんだから、いつでもそうしていてくれればいいのに、と思う。

何事も、命には代えられないのだから。

しかし一つ問題を片づけたとしても、俺の前には問題が山積しているのである。一つを退けたからといってほんと一息つけるわけではないのだ。

志穂がおとなしくなって霧子が静かになっているからといって、同じように姐さんの脱衣までもが止まるわけではないのだ。しかし今は両手が空いているのでさっきよりも積極的に姐さんを止めることができるのが、今唯一の救いであろうか。

「姐さん、女の子がそうやすやすと脱いではいけない！ 俺は男だ！ 男の前で脱いではいけない！」

「脱いではいけないだと……！ 脱がずにどうしろというんだあ……！！」

「俺は姐さんが女だって知ってるから！ ちゃんと知ってるから！ 制服、女物だから！」

「女物を着ているのが、そんなにおかしいか！ やっぱり嘘を吐いているんだな、三木……！ そんなに私を貶めて楽しいのか……！」  
とりあえず止めるために姐さんの右手を両手で掴んでみたわけなのだが、しかし右手一本の腕力で俺は翻弄されていた。姐さんがぶんっ！ と右手を振るだけで俺はそれに振りまわされているのである。ばかな、と思うがしかしうちの風紀のエースは下手な力自慢よりも強い。そもそもからして、俺程度の力でどうこうできるほど温い相手ではないのだ。

そして振りまわされているうちに、右手を掴んでいたはずの俺の両手はいつの間にか振り払われており、逆に俺の両手が姐さんの右手一本に束ねるように掴まれていたのだ。何が起ったのかは分からないが、そうなってしまっているんだから、そうとしか言いようがない。

「触れば分かるだろう！ 胸でも腰でも尻でもどこでも、触れば私が女だと分かるだろう！ さあ、触るんだ！ 触って私が女だと分かってくれ！」

「ああ、手を放せ！ 触らせようとするな！ やめろってえ！ 触らなくても知ってるって！ そんな柔らかさそうなおっぱい、男に付いてるわけないって、知ってるからあ！！」

姐さんのパワーと握力は強すぎるので俺程度がそれを振り払うことはできないが、しかし姐さんの力に抗うことくらいはできる。俺は振り払うことではなく、両手を自分の方に引き寄せることに全力をつぎ込んだ。もはや全ての体重をかけるほどの抗いによって、俺は姐さんのパワーとなんとか拮抗することができていた。

ここで下手に触ってしまおうものならば、別に誰が見ているわけではないのだろうが、しかし心情的に明日からクラスでの居場所を失ってしまうことになる。

あるいは明日から姐さんの顔をまっすぐに見ることができなくなってしまう。それは俺の望むところではなく、そうならなかったためには諦めて触って、それから責任を取って姐さんと付き合うか、こうして抗い続けるかのどちらかなのである。

俺だって姐さんだって、こんな仕様もない理由で男と女として付き合うのは御免である。いや、姐さんと付き合うこと自体が御免というわけではないのが重要であり、いや、そんなことを考えてる余裕なんてない！

「ま、けるかあ！！」

「幸久くうん」

すると今まで静かにしていた霧子が、再びこちらに働きかけをみせ

る。さっきまでは俺に飲ませようとしていたのに、いつの間にか飲み始めていたそれを持ったまま、ひたっ…、ひたっ…、とこちらに這い寄ってくる。

目は完全に据わっている。晴子さんにそっくり。怖い。

「霧子…、あの、今はちょっと忙しいから、あとにしてほしいんだけど…。」

言葉も、自然と丁寧なものに変わる。

「幸久くんわぁ、あたしの方、見なきゃダメなお！ 最近あたしじゃない娘のこと、見過ぎい!!」

缶を持っていない方の手が、俺のあごに添えられる。何かを言う前に、遠慮のない力の込め方で首から上を霧子の方に向けさせられる。首の骨が、少しだけ嫌な音を立てたような気がした。

「かはっ!? 霧子!? どうした!!」

「あたしはぁ、幸久くんにも、ふつうにジュース分けてあげたいだけなのにい、幸久くんがあたしにいじわるばかりするからぁ……」

そう言って缶の天地を返し、ちゃぽちゃぽという程度に残っている中身をあおる霧子。しかしすぐに飲み込むことはなく、少しだけ頬をふくらませている。それを見て、昔は不満なことがあると、なんとも言わずにこうやって俺が気づくまで頬をふくらませてふてくされてたっけ、と懐かしいことを思い出した。

「俺が何をした、霧子。なあ、霧子、教えてくれ。そうすれば直せるところは直すように……」

そう言って俺が口を開いたところに、なんと霧子がキスをしてきた。おでことか頬とか、そういう間接的なところではなく、口に直接、である。

俺がそのことを、霧子にくちびるを奪われたということを確認して理解するまで、わずかに時間を要した。そしてその間を縫うように、その飲み物本来の冷たさと霧子の唾内の生温かさの混ざりあった液体を流し込まれる。



最初に感じたのは安っぽいレモンの香り。流し込まれたのはレモン味のチューハイというやつらしい。

霧子のしたことにしては、なかなかウィットが効いてると思う。フアーストキスはレモンの味…、ということだろうか。

そしてたったの一口で、俺の視界は揺らいだ。

たったの一口で、俺の思考は完全に停止していた。

姐さんの力に抗うために逆方向にかけていた力も、当然込めることができなくなり、俺は姐さんの腕力に振りまわされるように体を宙に浮かせることになり、今いるのとは、姐さんをはさんで逆の方に、どさっ！ とその身を投げ出すことになる。

痛みは感じない。痛みよりも、体が熱い。

まるで体の内側から湧き上がってくる熱に浮かされるように、頭の中がぼろ…っとして、もやがかかったようになってしまう。

「あれえー、ゆっつきい、どおしたのお」

「きやはは、幸久くうーん、寝ちゃったのお？」

「ほら、三木、確かめてみる！ 私はこれでも男か！」

外に向かったの感覚は、なにも役に立たなくなっている。ただ内側に向かったの感覚だけが、イヤに研ぎ澄まされていくことだけは分かった。

瞼が重い……。

体を起こすことができない……。

もう、無理だ……。

俺は、重すぎるまぶたを開いておくことができず、諦めて瞳を閉じた。

………

だいぶ昔のことだが、一回だけものは試し、ということで庄司のおじさんに酒を飲ませてもらったことがある。あのときはアルコールというものに少しだけ興味があって、おじさんに広太といっしょに

お願いしてみたのだ。

しかし、毒見的に最初に飲んだ広太はけっこう飲めたのだが、俺はほんの一口口に含んだだけで意識が揺らぎ、なんとか飲み下した次の瞬間にはブラックアウトするように意識が失った。

それ以降、おじさんは断固として俺に酒を飲ませなくなった。いや、それどころか、将来大人になっても絶対に飲んではいけませんと強く厳命されてしまったほどだ。

意識がないうちに何かしてしまったのか、と聞いても、おじさんもおばさんも、なに一つとして教えてはくれなかった。だから俺はそれ以降アルコールをアルコールとして口にしていない。料理で酒とかワインとかを使うことはあるけれど、それもきちんと熱で飛ばして使っている。

自分が何をしてしまうか分からないというのに、危険なアルコールを飲むような愚行は、今まで断固として犯さなかった。

だが今、霧子の不意打ちで飲んでしまった。

しかし、俺もまさか、あれから何年も経っているというのに、ほんの一口でこんなことになるとは思ひもしなかった。

もう、意識を保つことができない。

すいすいよと眠っているメイの寝息だけが、シートに倒れ伏した俺の耳に妙に響く。

身体中が熱い。体を廻る血液が沸騰するような感覚。

血の内側に眠っていた何かが首をもたげ絡みつき、そのまま内側から全身に染み込んでくる。そんな違和感も、しかし今となっては感じない。

裏側から、自分という意識が塗りかえられるような、そんな寒気を伴うような感覚。

大きなものに…、自分が…、意識が…、呑みこまれる……！

## 覚醒×一喝×万事解決

こうして外に出てくるのは、久方ぶりだ。

体はよく鍛えられているようで、思ったよりも軽い。

「っ…、はぁ…」

俺様は、地面にたたきつけられた体を起こす。

その程度のことと、痛みを感じることはない。

紀子に掴まれていた両手を、軽く振って振り払い、俺様はすくつ、と立ち上がる。

全身が、軽くこわばっているようだ。おそらく生来の気遣い屋な性質が高じてストレスがたまっているのだろう。

「ん…、っと…」

頭の上で指を組み、ぐっと背筋を伸ばしてやる。

全身に感じない程度の疲労が蓄積しているのか、それだけでぱきぱきと小さな音がそこかしこから聞こえる。

中から見ていて不摂生も不養生もないように思えたが、人の子というのは生きているだけでも消耗していくものなのである。

しかもその消耗を補填することができないのだから、自愛を尽くせ、と言い伝えてやりたい。

幸久の体は俺様の受け皿でもあるのだ。体にガタがきてしまっただけで困る。

「で、なぜ出てくることになったかといえば、だ…」

とりあえず、周囲を見渡す。

幸久は、この状況をなんとかしたかったようだ。

人の子というものは、なかなか難儀だな。望むと望まざると、すぐに悪い状況を生み出してしまう。

よい選択をし続けても必然として悪い状況が生じるのは、おそらくその身に積まれた業によるのだろう。

「となると、幸久は業深いということだ。俺様のようなものに憑か

れておきながら、皮肉な奴だ」

さて、それでは手早く状況を片づけるとするか。

目の前に広がっている状況を認識する。

多数の子女が酒を飲んで酩酊している。向こうでは教師と呼ばれる存在が同様に酒を飲んで酩酊している。

その中には、幸久と特に親しくしている天方霧子、皆藤志穂、風間紀子とあと持田芽依の姿も見受けられる。

「そうか、ここから逃げようとしていたということか」

眺めてはいたものの、生じている状況を全て明確に受け入れているわけではないので、いかに俺様といえど、少なからずそれを完全に理解するには時間を要する。

「逃げるだけならば、なんということはないではないか。何の難もないだろう」

しかし幸久は難儀にも他人を少しでも傷つけたがらないので、それもあるいは難しかったのかもしれない。

それに、ただ逃げるだけではわざわざ俺様が出張ってきた意味がない。

それならば、ここは場を収めるところまでを引き受けるとしよう。そうでなくては、俺様が幸久に憑いている必要性が失われてしまうからな。

「きゃはははは！ 幸久くん、だいじょうぶう？ もっとほしかったら、言ってねえ？」

「ゆっきい、きゅうにとんでったからびっくりしたよ、そらとぶゆっきいだね！」

「三木！ まだ分からないだろう！ きちんと触らないと分からないだろう！ お前だから、確かめさせているんだからな！ 分かっているな！」

「騒がしいな…、少し黙らないか……」

俺様がかすかに呟いた言葉で、しかし三人はぴたりとその言葉を止める。

言霊。

古来より、言葉には力が宿るとされている。

凡百が発する言葉にはほんのわずかの力しか宿らないが、しかし俺様のような高位の存在が発する言葉には必要以上の力が発現するものだ。

俺様が黙れといえ、それを聞いた者は軒並み黙ることだろう。なんとなく言うことを聞いてしまうという、無意識的な反応に干渉するのが言霊なのだ。

言霊とは、ある意味では言うことを聞かせる力なのである。

高位の術者になってしまえば、その対象は人間だけには限られない。たとえ相手が自然であっても、言うことを聞かせることができれば操ることができる、ということだ。

俺様が直接手を下すとなれば、通常ならある程度の詠唱を必要とするようなことであっても、ほんの一言で為すことができる。

故に、黙れといえ、それは必然だ。

「座れ」

たった一言の命令。投げ捨てるように、俺様は三人に向かって言葉を放る。

もしもこの場にいるすべてのものに対して力を振るうとなればこのよう投げやりな言葉では為し得ないだろうが、しかし今はただ目の前の三人に集中していればいいのだ。

当然、放つ言葉は少なくていいし、一つの言葉に込める力も小さくていい。

「ん、座ったな」

三人は俺様の言葉に従って一列に正座するが、しかし全員酒のせいで意識と姿勢が定まらないのか、上体をふらふらと揺らしている。

「正座と言ったはずだ。ふらふらするな」

俺様の言葉によって、少なくとも姿勢だけは三人ともピツ、と定まる。しかし、ほんの少し酒を飲んだだけでこうも騒ぐとは、落ち着きというものが感じられない。

だがまあ、どうやら最低限度の賤だけは行き届いているようだな。幸久の、ひいては俺様のそばにいるものが不法者とあっては、示しというものが付かない。

「とりあえず、だ。なぜ不法に騒いでいる」

急に怒られているような状態になり、冷や水を浴びせられた気分なのか、三人の目はさっきよりもしっかりしているようだった。

そもそもからして、酒宴を開きにぎやかにすることがおかしいのではない。

酒宴、しかも春を愛でる酒宴なのだ、少しくらいにぎやかなくらいで丁度いいのかもしれない。

しかし、だからといって、こうして不調法に騒ぎを起こしていい、ということでは決してない。

風流や風情というものを感じ入るための会であろうに、ただ騒ぎたいのであれば、少なくとも俺様の視界に入らないところでやってほしいものだ。

幸久も、おそらくそういうことを言おうとしていたに違いない。

「ええと……」

俺様の問いに、志穂の目がふいっ…と泳いだ。

「そうか…、志穂、お前が騒ぎの元凶か。ははは、『目は口ほどに物を言い』とは、古い人間も上手いことを言ったものだな」

顎に手を添えて顔を近づけ、視線を反らさせない。

「そうは思わないか？ 志穂」

「え…、ええっと」

「さあ、正直に、どうして俺様の前で不法を働いたか、教えるんだ。そして、俺様の前で不法を働くなど万死に値する行為だということも、分かっているだろう」

「あ…、あの、ね……」

「わざわざこうして出てくることになったのだ、足労を強いられて俺様は機嫌が悪いぞ。速やかに状況を説明し、然るべきことを為せ。お前が元凶なのだから、志穂、お前が説明するんだ」

「う、うん……」

志穂は、おそらく幸久の中に憑いている俺様の存在を無意識的に感づいている。それ故に、こうして幸久の姿を借りてはいるが、幸久とは違う俺様を見ているようだった。

「あやちゃんが、ね、ジュースだよってくれたのをね、みんなのんだの……。あたしが、のもう、って」

「そうか、やはりお前が引き金だったんだな。しかしどうやら元凶は別にいるようだ。よく素直に言うことが出来たな、偉いぞ、志穂」正座で俺様の前に座っている志穂の頭を、軽く撫でてやる。だが、ただ素直に打ち明ければいいという問題ではないのだ。

不調法を働いたという罪は、その程度で雪がれるものではない。

「しかし、お前は俺様と、三木の血を持つ者と近しいのだ。そうだというのに、俺様が見ていないからと、このようなことをしてもいいのか、志穂」

「あの、これ…、のんじゃダメだったの……？」

「確かにそれは酒だ。定められた法律とやらで、お前たちの年齢で飲むことは禁じられていることだろう。しかし俺様とて戯れを好む節はあるからな、何でもかんでも無下に禁止することには疑問がある」

「じゃあ……」

「だが、な……」

志穂の頭に置いた手に、ほんの軽く力を込める。

「だからといってどこまでもやりたい放題していいわけではない。

羽目を外すことは構わない、しかし、度を越したな、志穂。俺様が出てこなくてはならない状況は、許される範囲を逸脱している」

きりきりと、少しずつ加える力を強くしていく。おそらく頭を締め付けられる痛みはそれほどでもないが、少なからず重圧のようなものを感じているだろう。

「楽しく、風情を感じ、慎ましやかに楽しんでる分には、俺様が出てくることもなかった。悪乗りが過ぎたようだな、志穂」

志穂は、まるで怯えたように肩をビクツ、と震わせる。闘う術をいくら修め、いくら強くなったとしても、それが武術である限り支配者の駒にしかなりえず、その性質からして志穂は俺様に勝利することは愚か、同じ土俵に乗ることすら出来ない。

「与えられた枠の中で楽しめず逸脱するのなら、その先に待っているのは罪と罰だ。俺様を怒らせた罪、酒宴の興を削いだことへの罰さあ、贖ってもらおうか」

「ゆ、ゆっきい……」

「なんだ、志穂？ 言いたいことがあるのならば、一言だけ許そう」  
「あの、その…、ごめん、なさい……。やりすぎだなんて、おもわなかったから……」

「そうだな、まずは詫びることから始めないといけないな。いい心がけだ、志穂。まだ言いたいことはあるか？」

「あ…、あたしが…、みんなにのんでのんでって、いいました……」  
「そうか、そんなことをしたのか」

「みんなに…いっぱいめいわく、かけました……。ごめん、なさい……」

自分のしたことを告白して、志穂はぽろぽろと涙を流していた。おそらくそれは、怒られて怖かったから、という涙ではあるまい。それは後悔の涙だろう。俺に言われて、自分が友にしてしまったことを思い起こし、悔いているのだ。

志穂は、そうして自らを省み、そして涙を流すほど悔いるとができる強い心を持っている。それは間違いなく、人間として一つの長所だろう。

「よく、正直に言ったな。偉いぞ、志穂。それでこそ、俺様の側にいるにふさわしい」

鳴咽を噛み殺し肩を震わせるほどに、志穂は感情をあらわにしていた。俺様は、その純粹さに敬意を示し、その頭に手を乗せ、丁寧に乱れた髪を梳いてやる。

「俺様は、過ちを責めようとは思っていない。人間というのは、誤



る生き物なのだ。幸久も、誤ることはあるだろう。故に、俺様はお前の過ちを責め立てるつもりはない。責めるとすれば己の過ちを認めないことだが、志穂、お前はそうはしなかった」

俺様は静かに、志穂を諭すように語りかける。

「俺様は、お前のことを褒めたい」

「な、なんで……？」

「お前は、きちんと己の過ちを認め、悔いたではないか。己が何を間違ったのかを知らず、また認めることのできないような下賤な輩には、俺様の側にいる資格はない。お前はそれだけ立派にやっているんだ、誇れ」

「ゆっつきい……」

「お前は、教師たちがやったんだ、と責任を逃れることもできたはずだ。しかしきちんと、涙を流してまで自分が悪いということを認めたではないか。それでこそ幸久の認めた友よ。志穂、これから幸久の側にいることを許そう」

「うん…、わかった」

「ああ、分かればいい。紀子、霧子、お前たちはそうしてしばらく静かにしている。そうしていれば酔いも醒めるし頭も冷える」

「三木…、私は……」

冷静になって初めて、ようやく自分が飲んでいたものが酒だ気づいたのだろうか、紀子は不安そうな顔で俺様の顔を覗き込んでいた。大方、志穂にただのジュースだとも言われていたに違いない。

俺様は酒を飲むことがどうこう言ったつもりはないのだが、しかしこの者はそういったことをこそ重く見ているのだ。規律を守ることこそが、風間紀子の第一原理である。

「今日は、間違えてしまったな、紀子。だが、間違えることがいけないことではない、と言っただろう。してしまった間違いは、これから生きるための糧にすればいい。規律を重んじまっすぐ生きることは重要だが、お前の思っているものが本当にまっすぐかどうか、見極めるための物差しがなくてはならない。今日は、その物差しを

拾ったとも思っておけ」

「すまない…、私が…、私をもっとしつかりしていれば、こんなことには……！」

「自分を責めるか……。それもいいだろう。簡単に妥協や譲歩が出来る性質ではないことは知っている。だが、間違えた自分を責めるだけでなく、それも含めて認めてやれ。人の子は強くない。お前のような者は、高すぎる理想が絶望を導き、いずれはそれに殺されてしまう。己の思いに殉じるのもいいが、行きすぎるな」

「しかし私が法に背いたという事実が消えない…、他のものを止めることができなかったという事実もだ……」

「ふん、そのような些細なこと、囚われるに値せんな。酒でもなんでも飲めばいい。多少の無理で道理を引くのが宴というものだ。今日はただ、この舞い散る桜の美しさに酔ったということにしておけばいいではないか」

「……。お前は、本当に三木、三木幸久なのか？　いつもとはまるで別人だな。いつもの三木は、言っては悪いがもっとせせこましい男だぞ」

「はは、せせこましいか！　確かに、そうかもしれない。だが見た忘れるな、俺様は三木幸久、華の血族・七天星家が第三位、三ツ木家の嫡男にして現当主だ。『様』無しの無礼を許しているのはお前たちが側におくに値すると幸久が認めているが故だ、感謝しろ、我が友らよ」

「その豹変ぶり、まるで悪魔憑きだ…、貴様、三木に害を為すのか。二重人格などと、ごまかされる私ではないぞ」

「ふんっ、立ち直る手助けまでしてやったというのに、ずいぶんな言われようだな。しかしまあ、悪魔憑きね。それで理解が深まるというのならそれでもかまわん。あと、言っておくが、幸久に害を為すなどありえん」

「あのね、のりちゃん、幸久くんのお家はすんごいんだって。あたしはなにがすんごいかはよくわかんないんだけど、おかあさんは知

つてるみたいなの」

「天方の家には、三木の事情をそれなりに伝えてあるはずだ。まあ、霧子は深くは知らないようだがな…、っ……！！」

その瞬間、頭にずきり、という痛みが走る。ふむ、幸久の負担も考えると、そろそろ戻る頃合いか。

あまり幸久に負担をかけるわけにもいかない。ここは、概ね状況は解決したということはできそうだ、出来るだけ早く幸久に返してやらなくてはな。

「体を借りたぞ、幸久。今すぐ返すから、戻って来い」

幸久の意識はまだ戻りそうにないが、俺様は手の中にある意識の権利を手放した。わずかな間だけ肉体から主体が消え、その空いた所に幸久の意識を戻してやる。

そうすることで、幸久の肉体に幸久の主体が入り、そしてそれはまだ意識を取り戻していないので、結果的にもう一度気絶することになる。ぐらりと体が傾き、そのまま地面へと倒れ伏す。目を覚ますのは、もうしばらく先のことになるだろう。

『幸久、愛し我が子よ。目覚めの時まで静かに眠れ』

俺様は、古より三ツ木の血に宿る、古き系譜を受け継ぐ神々の一柱。本来的に、三ツ木の血族は俺様をその血に宿し、守り受け継ぐためだけに存在している。少し前まではその力をわずかながらに引き出し、占いを行ない、未来を読み、なんとか家を存続させてきたのだ。だが今は、時代が変わり、また事情も変わった。神々への信仰は失われ、三木の家は幸久一人を残してすべて死に絶えた。一昔前は立派だった三木の家も、今ではすっかり寂れ切っている。

しかしそれでも、氏子と氏神の関係は残されている。その関係は神と信徒である以前に、俺様にとってみれば親と子なのだ。幸久は我が子同然なのだ。

幸久が生きる限り、俺様はそれを守り続けよう。何かを願うならば叶えよう。そうすること以外、俺様が幸久にしてやれることはないのだから。

そして幸久が死ぬならば、そのときは俺様もともに生涯を閉じよう。  
愛する我が子とともに朽ちることは、決して悪いことではあるまい。

## 花見の終わりは目覚めとともに

俺が意識を取り戻したのは花見が終わり、その撤収作業が始まったころだった。昼間の陽光に温められた地面ももはや冷たくなっており、そこにずっと倒れていた俺の身体も、なかなか冷たくなっていた。

霧子に酒を飲まされた瞬間からすっぱりと記憶が途切れており、まったく、なにも覚えていない。おそらくだが、意識を失ってからすぐにこうして倒れ、今までずっとここに倒れ伏していたのだろう。硬いところにずっと倒れていたこともあって、全身がそこはかとなく痛い。

しかし、いったい俺が倒れてからどれだけ時間が経っているのだろう。何時何分に倒れたのか明確に確かめていたわけではないから分からないのだが、かなり夕焼けで真っ赤になっている空の様子から推測するに、おそらく一時間弱は倒れていたのではないだろうか。

「っ痛う……、頭、痛え……」

しかし動き出そうとして、頭がものすごく痛いことに気づく。まるで頭の内側からがんがんと殴りつけられているような、そんな痛みがずっと続いている。絶対アルコールのせいだ、もう絶対、飲まない。

俺は、これから一生涯酒と名のつくものには手を出さないことを誓った。なんでたった一口口にしただけで意識を失うはすさまじい頭痛に襲われるわけで、こんな辛い目を見なくてはならないというのだろうか。

酒は飲まない、死ぬまで飲まない、いや、死んでも飲まない。

だが、意識失っていたとしても、頭が痛くても、こうして目を覚ましたのだから片づけを手伝わないということはできないのだ。目の前でみんなが働いているのに、俺だけのうのと倒れているわけにはいかないのである。

「霧子、志穂。片付けやってるんなら手伝うぞ。どこまで片付いてるか分からないけど、まだやることはあるだろ。どこに行けばいいか教えてくれ」

「あつ、ゆっきい。おはよ」

「幸久くん、起きたの？ あ、平気？ 頭とか、痛くない？」

「ちょっと痛いだけだから、平気。別に気にしなくていいからな」

「ごめんね、幸久くん……。あたしが無理に飲ませちゃったから、ちよっとおかしくなっちゃったんだよね……。ごめんね……」

霧子は悪いことをしてしまったと思っているのか、しゅんとした顔でにゅんとしている。確かにあれば、霧子にあるまじき行動であり、あんなことをしたのを覚えているのならばしゅん、ともにゅん、ともなるといふものだ。

「だから平気だって、霧子は何にも悪くないよ」

そう、霧子はなにも悪くないのだ。すべては酒だ、あの飲み物がいけないんだ。あんなものが存在しているから、みんなに大変な災厄が降りかかったんだ。

くそっ……世界中の酒が爆発してなくなってしまえばいいのに……！！　そうすればきっと戦争もなくなつて、世界に平和がおとずれるに決まっているんだ！！

「ゆっきい、さっきたおれたけどへいき？」

「うおっ！？ あぶねえ！！」

そう言つて、志穂は丸めた巨大なブルーシートのロールのようなものを両脇に抱えながら俺の顔を覗き込んでくる。その動きに伴つてぶんっ！　と容赦のない速度で振られるロールを、俺は頭を振つて何とか回避するのであった。

もしあんなものがまともに頭を捉えたら、俺は再びこの地面に沈むことになるだろう。ようやっと目を覚ましたばかりだというのに、またすぐに気絶させられては敵わない。

「あつ、ごめんね」

「ああ、平気だ。まだ片付け終わってないよな。何かやること残っ

てるか？」

「あのね、ゆっきいはやすんでいいよ。おかたづけはね、あたしがみんなやっとかから。ゆっきいは、ゆっくりお休みしててね」

「はっ？ いや、意味分からんし…、ずっと休んでたんだから俺も手伝うけど……」

「いいの、ゆっきいは休んでるの。あたしがゆっきいのぶんまでぜんぶやるから。だいじょぶだよ、ちゃんとていねいに、なにもこわさないようにするよ」

「いや、いやいや、丁寧になにも壊さなきゃいいってもんじゃないっていうか。いや、だから、だからって俺がここでサボっていい理由にはならないだろ。っていうかなんだよその気遣い、怖いよ。もしかして実は俺の知らないところで大問題を起こしてて、それを隠してるとか？ お前、何かしたのか？」

「むう、なんにもしてないもん。あたしは、ゆっきいのかわりにがんばろうっておもったからそうするだけなのに……。みんなにっぱいごめいわくかけたから、すみほろぼしするの」

「そ、そうか、偉いな、いい子だぞ」

「ゆっきいがね、いけないんだぞ！ ってしかってくれたからね、なにがいけなかったかわかったの！ ありがと、ゆっきい、すきっ！」

「へ、へえ？ そうかあ？」

「うん！ あたし、ゆっきいのぶんまでがんばるからね。ゆっきいは、そこでメイメイといっしょにおやすみしててね。あとでオレنجジュースもってきてあげるね」

「あ、ああ…、わ、分かった。それじゃあ御言葉に甘えて、ちよつと休んでるわ……」

「うん！」

そして俺は、シートが積まれて一段高くなっているところに、両手が荷物でいっぱい志穂がぐりぐり頭で押してくるのに負けて、腰かけるのだった。なんかこう、みんなが働いてるのに一人休憩して

るのって慣れないな。

というか、俺がいつ志穂のことを叱ったというのだろうか。俺はさつきまでずっと倒れてて意識がなかったんだぞ。何かしたって、そんなことないだろう。

それとも、何かしたのか？　まずいな…、まったく身に覚えがないぞ。俺、何したっていうんだ。

「三木、もう平気なのか？」

俺が手持無沙汰に、しかしあれだけ志穂に座っててね！　と言われたわけだし勝手に働きに出るわけにもいかず困っていると、志穂と同じように両手に巨大なシートのロールを持った姐さんが通りかかった。

二人とも基本的にパワー系だから、回ってくる仕事が似たようなものなのだろう。きつと二人で、あれだけたくさん敷いてあったシートをみんな片づけてしまうくらいの働きを見せるに違いない。

「姐さんこそ平気か？　さっきはだいぶヤバそうな感じをひしひしと感じたけど」

「ああ、私はもう平気だ。三木、お前のおかげですっかり目が醒めた」

「俺のおかげ……？」

まただ、志穂も姐さんも何を言っているんだろう。何度も言うが、俺には何の覚えもない。

「ああ、そうだ。あのときは無様に取り乱したりして本当にすまなかった。お前にフォローしてもらって頭が冷えたし、少しだけ心も軽くなった。何をしているんだ、と頭ごなしに叱られるよりも、助けになったぞ」

「そ、そう？」

「しかし、先ほどの様子はまるで別人のようだったな。いつもの様子を見ていてもすっかりしているとは思いが、何かこう、さつきはレベルが違ったというか、何というか、ああ、自分でも何を言っているかよくわからないのだが、いつもとは様子が違っていったんだ」



「なあ、姐さん…、俺ってさっきまでずっとそのあたりで倒れてたんじゃないのか？ 俺、酒はほんとに全然飲めなくてさ、ほんのちよっと飲んだだけでも意識がなくなっちまって、さっきまでの記憶も全然ないんだ」

「いや、一度倒れた後すぐに起き上がって、皆藤を叱ったり私をフオロしたりして、それからまた倒れたんだ。本当に何も覚えていないのか？ あんなにはっきりとしゃべっていたのか……？」

「ごめん、ほんとに全然覚えてないんだ」

実は、前に酒を飲んでみたときにも似たようなことがあった。そしてあのとき以来一度も酒は飲んでいないから、こういうことがあるのは二回目、ということになるのだろう。

あのときは、俺が目を覚ましたときのおじさんたちの様子かなりおかしかった。なんというか、何かを恐れているような、あるいは畏れているような。

当然、そのときも俺はアルコールにやられてすぐに気を失っていて意識はなかったの、何が起こったのかは覚えていないわけで、事実関係はまったく分からない。ただ、全員がそろって、まるで口裏を合わせたように「なにもなかった」と言うから、なんとなく、といった程度の違和感を覚えたわけだ。

しかし、あるいは、おじさんたちの様子がおかしいと感じたのも、ただ俺が思い違いをしているだけなのかもしれないが。

だが、今度はどうやら違うようだった。姐さんはおじさんたちのように「なにもなかった」とは言わない。明らかに何かがあったらしいのだ。

「なあ、姐さん」

「なんだ、三木」

「俺さ、さっき何か言ってた？」

おじさんたちがまともに応えてくれなかった質問にも、姐さんならば応えてくれるかもしれない。まあ、ここで起こったことがあのとさきも起こっていたという保証はどこにもないのだが。

「そうだな、先ほども言ったが、いつもよりもよりしっかりしている印象を受けた。しかし、逆にいつもよりも大らかな感じもしたな」  
「大らか？ それ、どういうこと？」

「ん？ 厳格なのだが、しかしそれと同じようにいい意味で適當というかな」

「何か言ったから、そう感じたのか？」

「そうだな、細かいことに捕らわれないでポジティブに考えろ、みたいなことを言われたぞ。私がただ自分を責めていたときに、一つのミスに固執して後悔し続けるのではなく、それを次に生かせと言ってくれたのが、とても心に残っている。あとは間違えてしまったことが悪いのではなくて、間違えてしまったことを認めず悔いることをしないのが一番いけないとも、言っていたか」

「…、誰だ、それ……。ほんとに俺か……？」

あまり自分で言いたくないことだが、俺はそんな達観したようなことは言うことができない。そんな、まるで老境に入ったような、途方もないような経験に裏打ちされたようなことを言えるほど、俺は大人ではないのだ。

まだ目の前のことが気になってしまふし、失敗することを気にしてしまふし、間違えること自体を恥じることも多い。

そんな、自分では思いもしないことを言っているなんて、それも酒癖が悪いの一言で済みますことができるものなのだろうか。というか、そこまでいくとまるで別人が乗り移っているような、そんな気すらしてくる。

「あと、まるで別人のようだったのは、言っている内容だけのことではない。話し口や態度なども、いつものお前とはまったく違うものだったように思う。まるで悪魔憑きか何かのようで、立派だと思っ反面少しだけ不気味でもあった」

「そ、そんなにか……」

しかし、姐さんは悪魔憑きのようだったといったが、そんな非科学的なものは存在しないわけで、まあ、これも酒癖が悪いというやつ

なんだろう。だってそうだろう、幽霊とかお化けとか、精霊とか神とか、そんなものは存在しないんだ。いかに姐さんがそんな感じだったと思っただとしても、だからといってそういうものが存在していると認めるのはどうだろう。

人格が変わるほど乱れるなんて、なおさら酒は飲まない方がいいみたいだ。そんな、意識を失っている間の自分の発言にまで責任を持つことはできないからな。

「ま、まあ、変なことはしなかったみたいだし、よかったよ。うん、これからは絶対に酒の類は口にしないように気をつけます」

「それは、私もそうだな。今回、不意ながら不注意で酒を口にしてしまったが、その危険さがよく分かった。これからはもっと真摯に気をつけていくことにする」

「お互いに気をつけような、姐さん。姐さんも、かなりヤバかったからさ」

「それは、そうだな……。あんなにぼろぼろ泣いたことは、小学生に上がってから一度もなかった。あのように情けないところを見せることになるとは、恥じ入るばかりだ」

「ああ、…、そうだね」

俺としては、むしろその後の、執拗に自分が女だと俺に確認させようとしていたことの方を言いたいのだが、しかしそこをあえて姐さんが避けたのだ、わざわざ突っ込んでいくこともあるまい。というか、姐さんはあれを口に出したくないと思っているんだろう。それをあえて掘り返すなんて、乙女を辱めるようなことをしてはいけないのである。

「まあ、私がお前に迷惑をかけたことは確かだ。まだ頭が痛いだろうし、もう少しの間だけ休んでいる。三木は準備からなにかいろいろがんばったんだから、お前の分の片付けは私たちがやっておこう」

「ああ…、悪いな、姐さん」

「ただ休んでいるのも居心地が悪いだろう。まだ起きてこない持田

の介抱でもしていてくれ」

「分かった、そうするよ。悪いな」

「気にするな、私が好きでやることだ」

そうして、姐さんは花見の片づけ作業に戻っていくのだった。俺はその力強い後ろ姿を見送りながら、まだ敷かれているシートに横になっっているメイのそばに行き、その眠りが安らかであるように、ポンポンと軽く肩を叩いてやることにした。

枕になっている俺の上着は頭の下から抜き取って広げ、掛け布団の代わりにかけてやることにし、上着の代わりの枕には、多少寝にくいかもしれないが、俺の脚を貸してやることにした。残念ながら女の子のもののようになめらかくはないが、しかしまあ、地面よりはまだマシだろう。

「ゆっきい、はい、オレンジジュースだよ」

「ああ、さんきゅ」

「おかたづけ、いってきまーす」

「おお、行ってこーい」

それから間もなく、志穂は本当にオレンジジュースを持ってきたのだった。差しだされたので反射的に受け取ってしまい、受け取った手前、自分で飲めばいいよ、と返すのもおかしいわけで、俺はそれを一口含み、こくん、と飲み込んだ。

あっ、なんかこのオレンジジュース美味いぞ。志穂が遊びに来たときのために一本買い置きしとくか。

頭のメモ帳に、その商品名をメモする。なんとなく、意味もなくふと、平和だなあ、と思った。

## 働き者を眺めつつ

それから俺がちびちびと志穂から受け取ったオレンジジュースを飲んで、帰りながらも一本買って帰ろうかと思うくらいハマりかかっている、足元で横になっているメイがもぞつ、と身じろぎをした。

「あつ、メイ、起きたか？」

「……………」

すんなりと体を起こしたメイだったが俺を枕に眠っていたから寝覚めが悪いのか、ぼおとした目で虚空を見つめている。頭が痛いとかいうことは、パツと見た限りなさそうだし、単にまだ眠気が取れていないだけなのかもしれない。

そして、眠そうな目をぐしぐし擦りながら上着のポケットに手を突っ込み、中からケイタイを取り出すとパカッと開く。

『おきた』

起きぬけの言葉が液晶に浮かび、俺の目の前にずいつ、と差し込まれた。

「おはよう、メイ」

『おはよ』

しかし、いくらケイタイマスターのメイといえど寝起きでのケイタイ操作は難儀するのか、指の動きがいつもより数段悪い。なんとなくだが、起きたばかりの霧子がむにゅむにゅ言っているのを見ているようで、非常に微笑ましい。

「もう片付けも終わりみたいだしさ、ちょっとだけここで休んでようぜ」

『さぼり？』

「いや、準備がんばったし、休憩だって。サボりじゃないよ」

『きゅうけい、うん』

カコツカコツとキー一つずつを確かめるように押しているメイとい

うのも、なかなか珍しいなあ、と俺はふと思った。いつもの操作が達者すぎるだけに、こうしておぼつかない手つきで操作しているのを見ると、そのかわいさを再確認することになりそうだ。

いや、いつもみたいに流麗なタッチで、まるで楽器で音楽を奏でるようにケイタイを操作している様というのみなかなかっこいいと思うわけだが、しかしこういうギャップを見ることができるようのも乙なもの、いうことだ。

「そういえばさ、さっき、俺が姐さんにやられた後、服着せてくれたり膝枕してくれたり、いろいろ迷惑かけたな。悪かった」

『へいき』

「そうか？」

『きにしないでいい』

「ああ、分かった。それじゃ、お言葉に甘えて気にしないことにしよう」

目の前に突き出されるケイタイの液晶には、そのときの気持ちに合わせて様々な文字が並び、メイの言葉に代わって俺へと発せられる。しかしその文字はいつも同じ一定のフォントが用いられているわけで、元氣でも疲れていても悲しくても変わることはない。普通に喋っていれば感じるような語調や声の変化が、メイの場合は見られず、そういう意味で言葉を発さないというのは一つ大きな不利益を背負っているともいえる。

しかし、だからといってメイの様子の変化がなにも感じられないというわけでは、決してない。言葉は発さなくても表情からは、いつもだいたいほとんど動かないが、どことなく変化を感じることができるのだ。今だって、瞼は開き切らずしばしぱしているし、体はものすごくふらふらしているし、口元には欠伸が何度も浮かんでいる。というか、そもそも漢字の変換が行なわれていないことから、頭がまともに働いていないことがよく分かるだろう。メイは別に難しい漢字を無理に使いたい性質ではないが、自分の知っている常用漢字の範囲内ならばほぼ確実に変換するから、そう言ってもいいと思

う。

少し頭が働いていないときはいくつも誤変換をし、まったく頭が働いていないときは変換すら放棄するというのは、概ね万人に通じることではないだろうか。

「メイ、もしかしてまだ眠いか？」

『うん、まだちょっとねむい』

「やっぱりな、それならまだ寝ててもいいぞ。片付け終わったら起こしてやるからさ」

『そうする、ありがとう』

そう言ったメイは、さつき起き上がったのとはまったく逆の動きで、まるで録画した映像を逆回しするように、くてんと横になってしまふのだった。そしてまだよほど眠かったのか、再び俺の脚を枕にすいやすいよと寝息を立て始める。

まあ、そうだよな。初めてのお料理だっていうのに二時間近くもぶっ通しで調理させられるし、花見が始まってみればよく分からないうちに酒を飲まされてバタンキューだし、疲れもするってもんだ。しかもそれが午前中四時間の授業を受けた後にやってきたんだ、そりゃ眠くもなるだろうよ。

こんな小さな体でよくがんばったもんだ、メイは偉いなあ。同じように小さいが、志穂はバカみたいに元気がありあまつてるし、そもそも花見が始まってからの面倒を引き起こしたのはあいつだから、そう易々と同情してやることはできない。

「お疲れ様、だな」

メイが手に握ったままのケイタイを閉じてポケットにしまつてやってから、もう一度上着をかけてやる。こうして無防備に身を任せてくれるのは、さっきも思ったことだが、より親密な仲になることができるような気がしてなかなかうれしいものである。

しかし静かな時間が長く続くほど、俺の周囲には落ち着きにあふれた人間が多くはない。落ち着きのない友人の筆頭であり、一般的に見てもかなりの落ち着きのなさを誇る志穂が、再び俺たちの前を通

りかかる。

「あり？　メイメイ、まだねてるの？」

そして片付けの仕事を放棄して俺たちの方に駆けてくるのだった。俺が言えた義理ではないが、仕事をしろ。

「疲れてるんだよ、寝かせといてやれ」

「そっかあ、メイメイつかれたんだ」

お前は疲れていないだろう、と言いたいがそこはぐっところえて、俺は志穂が隣に座ってくるのを受け入れた。さっきから見ていた限り、かなりの枚数のシートを運んでいたみたいだし、お疲れさんとねぎらってやるには十分な働きだったといえるだろう。

己のしでかしたことへの罪滅ぼしという意味もあるかもしれないが、まあ、俺は真偽を確かめる前に気を失ったから本当に志穂が悪いのかどうかは知らないのだが。

「そういえば、霧子はどうした。志穂と姐さんが行ったり来たりしてるのは見えてたけど、霧子はさっき一回見てから全然見ないぞ」

「きりりんはね、あっちの方でおかたづけしてるの」

「ああ、そうか、違うところに配属になったのな。そりゃ見るわけないわな。っていうか、霧子がシートのロールなんて運べるわけないもん」

「あたし、ゆっきいの分まではこんでるよ、えらい？」

「ああ、偉い偉い。この残ったオレンジジュースを恵んでやろう」

「くれるの？　やったあ」

ちびちびと飲んでいたが故に、けっきょく全部は飲みきらなかった、コップになみなみ注がれていたオレンジジュースを志穂に手渡した。残りは半分ほどだが、まあ、志穂なら一息で飲み干すことだろう。

「志穂、これで片付けは終わりなのか？」

「ん、もうちょっとあるみたいだけど、きゅけゅけ」

「俺の分も働くんじやないのかよ。二人分の仕事をするんなら、休んでいる暇なんてないぞ」

「そうだぞ皆藤、片付けをしてくれ。人手が足りない」



勝手に休み始めた志穂を見かねた姐さんが、再び両脇にそれぞれ巨大なロールを抱えた状態でこちらに歩み寄ってくる。さっきから見えて、志穂もたくさん運んではいるのだが、やはり姐さんが一番積極的に、一番多くの量を運んでいるようだった。

そのバイタリティ、というかやる気はどこから湧いてくるのだろうか、と素直に不思議だった。普段から授業もがんばってるし、運動もがんばってるし、風紀委員もがんばってるし。いったいどうすればそんなにいろんなことをがんばることができるのだろうか。

俺はもはや襲い来る日常生活をなんとかこなしていくだけで精いっぱい、新しく何かを開拓していこう、なんて考えられない。あつ、いや、友だちを増やそう、くらいは考えてるけど。

「まだシートがあれだけ残っているんだ。ただでさえシートの片づけは一枚当たりの人数がかかる。私たちは一度に二枚運べる貴重な人材なんだぞ、しっかり働いてくれないと時間がかかって仕方がないだろう」

「だってさ、志穂。さっさと行ってこい」

「ええー、でももういっぱい運んだもん」

「それじゃあ、お前が行かないんなら俺が行く。俺はまだ一枚も運んでないからな、運ぶ元気はある」

まあ、姐さんたちのように一度に二枚運ぶなんてことはできないだろうが、一枚を一人で運ぶくらいはできるだろう。少なくとも、女の子たちのように一枚を二人や三人で運ぶよりは、効率よく仕事を進めることができる。

「志穂、ここで休んでるんだったらメイのこと頼んだぞ。寝てるんだから、静かにしてやれよ」

「ええー、ゆっきい、いっちゃうの？」

「行くに決まってるだろ。人手が足りないって言ってるのに、無視してこんなところのうのうとしてられるか」

「ゆっきいの分はあたしがやるんだから、ゆっきいはやすんでなきゃダメー」

「俺の分もやるって、全然やってないだろ。そこにいて出来るのは俺の代わりに休むことだけだ」

「ゆっきいはおやすみするの！　りこたん、あたしもおかたづけする」

「ああ、そうしてくれ。あっちの方にも残っているから行ってやってほしい」

「はーい」

「がんばってこいよ」

「いつてきまゝす！　ゆっきいはちゃんとおやすみしてないとダメだからねー！」

「ああ、任せろ」

そして志穂は、向こうの方でシートの片づけをしている一団に合流するべく駆けていくのだった。その速度は凄まじく、確かにあれだけ動く元気が残っているのなら俺の分まで片づけに奮闘することもできるだろう。いや、俺の分はおろか、きっとそれ以上に、三四人分くらいの働きをすることも夢ではあるまい。

姐さんのバイタリテイもすごいと思うが、志穂の、あの底なしの体力と元気もどこからわいてくるのか疑問でならない。

よく考えたら志穂がくたびれている様子とかへばっている様子とかは見たことがないかもしれない。一年以上付き合っているというのに一度もそういうことにならないって、いったいどんな体力をしているんだ、と言いたい。あと落ち込んでいるところとか感情がマイナス方向に行っているのも、あまり見たことがない。やっぱり体力があるとも思考もポジティブになるものなのだろうか。

一度でいいから、志穂を延々走らせてみて、どれだけ走ったら疲労の色を見せてネガティブな方向に感情を走らせるかを確かめる実験をしてみたい。なんとなく面白い結果になりそうな気がするから、

今度暇な休みの日にでもやってみようかと思う。

ちなみに、さっきは休憩と言っていたが、あれは疲れたからではなく片付けという作業に飽きてしまったからに他ならないのだ。一度

でいいから志穂のやつをへとへとに疲れさせて、もうダメゆるして、と言わせてみたいものだ。

まあ、そのためには俺が志穂以上の体力を身につけることが必要になってくるわけで、そんなことができるはずもないのだが。夢の実現のために、とりあえず明日からジョギングでも初めてみようかな、と少しだけ思った。

「三木、どうだ、休んで少しは楽になったか？」

志穂を再び片付けの現場に駆りだした姐さんは、両脇に抱えた巨大な二つのロールをもともしない顔で俺に声をかけてくれる。姐さんだってあれだけ大変だったというのに、俺のことまで気にかけてくれるなんて、姐さんはすごいなあ。

これ以上心配をかけないように、俺はしっかり休ませてもらって、できるだけ早く体調を良くしないといけない。あと、メイの面倒もちゃんと見てないとな。

「ああ、だいぶ楽になった。頭の痛さも少し引いてきたし、起きてすぐに比べればずっと元気だ」

「そうか、それはよかった。片付けももうすぐ終わる。大事をとって休んでいろよ」

「はーい、分かりました」

「うむ、いい返事だ」

「いってらっしゃい、姐さん」

「ああ、行ってくる」

それから姐さんは、抱えた荷物の負荷を感じさせないような確かな足取りでててくと片付けの任務を遂行していくのだった。姐さんはああやってひょいっと簡単に運んでいるが、きっとあれはかなり重いに違いない。

パワーキャラの持つ安定感には、少しだけ憧れている。

「まあ、一朝一夕でパワーキャラにはなれないんだけどな。なあ、メイ？」

しかしその問いかけに対する応えはなく、その代わりにメイはころ

ん、と寝がえりを打った。かけていた上着が落ちてしまったので、俺はそれをもう一度かけ直してやるのだった。

「ふふっ、よく寝てるな」

もによもによと何か寝言を言っているようにも聞こえるが、しかしそれは聴きとることができるとほど明瞭なものではなく、ただの音としてしか認識することしかできない。ふと、メイがどうしてケイタイで会話をするのだろうか、と思ったが、しかしそれはきっとメイにとって大事なことなんだろう、とも思った。

自分から話してくれるのを待つのが、きっとこの場合は正解に違いない。もし無理に聞き出そうとしたならば、おそらく今以上に固く口を閉ざしてしまう気がする。

「いつか、教えてくれるかな……」

俺は、すーすーと穏やかな寝息を漏らすメイの頭にぽんっと手を置き、なんとなく頭の横で二つ縛りにしているゴムを外してみた。ぱさり、とさらさらの髪が俺の腿の上に広がった。

なんとなくだが、髪を解いた今のメイが昔の霧子に似ているかもしれない、と思った。

## 実習室に戻るまで

「今日の晩飯……、なにつくろうかなあ……。調理実習で少し食べたけど足りないし、こつてりしててがつつり食える感じで揃えるか。餡かけチャーハンとか、焼肉丼とか……、ああ、カレーもいいなあ……」

目の前では花見の片付けがもはや終わろうとしており、けっきょく片付けにはまったく関与しなかった俺は、しかしそんな中、ぼんやりと晩飯をどうしたものか、と思いを巡らせていた。

みんなが片づけをしているというのに俺はなにもしない、という状況にもしばらくしたら慣れてきて、働いていないことへの罪悪感とか働かなくちゃいけないという義務感とか、いろんなものを感じなくなってきた。人間、常にある程度は緊張を張りつめていないとすぐにダメになってしまうということかもしれない。

「くあ……。なんか今さら眠くなってきた……」

しかし、ここでまた横になってしまうわけにはいけないのである。

片付けが終わったら一回調理実習室に全員で集まって、それからそのままそこで帰りのホームルームをして現地解散、というのが今日のこれからの流れになっているのだ。

それに俺は片付けが終わった時点でメイを起こしてやって、調理実習室まで間違いないで連れて行ってやるという約束をしている。故に、俺はここで寝てしまうわけにはいかないのである。

「しかし、よく寝てるよなあ……。起こすのかわいそうだし、どうしよう」

メイは、さっきまでと変わらず俺の脚を枕にすやすやと穏やかな寝息を漏らしており、まだ目を覚ましそうな感じはしない。俺の脚なんて硬くて寝心地が悪いだろうし、きつとまともに眠れないだろうと思っていたが、意外とそんなことはないのかもしれない。

「サラサラだよなあ……。メイの髪」

まるで猫のように体を丸くしたままころん、と転がっているメイの髪を一房だけ掬い上げる。俺と似たような少し硬い髪質だがずっと素直で、まるで掬いあげた水のようにさらさらと手の中から零れ落ちてしまう。

髪が硬いと、みんな問答無用で俺みたいな感じになるものだと思うっていたから、その感触はとても新鮮なものだった。硬めの毛質だけど素直だから、いつも変わらないきれいな二つ結びをつくることができるのだろう。髪質ゆえにいじくることを放棄せざるを得なかった俺とは違うのである、と言わざるを得ない。

「なんか気持ちいいな、この髪。なんでだろう」

それから少しの間だけメイの髪を撫で続けていたのだが、しかしいつまでもそんなことをしていてクラスの面々から置いてけぼりを喰らってしまうというのもバカらしいものがある。

とりあえず今はメイを起こすかどうか、ということについて考えよう。まだもう少し片付けに時間がかかるかもしれないが、それが終わったら実習室に行かなくてはならないのだ。決断しきれないまま、なにも決まらないままにタイムアウトになってしまおうというのはどうにも愚かしいではないか。

別にそれをきっちり決断していなかったからと言って誰に何を言われるわけではないが、なんとなく、な？

あっ、ちなみに、さっきすっかり勢いで解いてしまったヘアゴムは俺の手首につけられており、小さな可愛いチャームが自分に不釣り合いすぎてたまらない。やっぱりこういうものは女の子が身につけてなんぼのものであり、俺のような野郎が所持していいものではないのだ。

しかしまあ、だからといってこんな状態からうまく二つ結びを作り直してやることができるほど俺は器用ではないので、無理せずメイが起きてから返してやることにしようと思う。

「三木っ！ 片付けが終わったぞっ！ 実習室に戻るんだっ！」

そして向こうの方から、よく通る姐さんの声が俺の耳に届く。どう

やら俺がぼんやりしているうちに片づけ作業は終わってしまったよ  
うだ。

ああ、もう、早いよ！ 起こすの起こさないの考えてたら何もしない  
うちに時間になってしまったではないか。仕方ない、起こすのは  
かわいそうだから、起こさないまま実習室に連れて行ってやって、  
それからホームルームが始まるまでは寝かしておいて、始まったら  
起こすことにしよう。

「分かったあー！ すぐに行くからあー！」

おそらく最後の荷物と思われるシートのロールを小脇に抱えている  
姐さんに、俺は大きく手を振ってそう告げる。おそらく姐さんはあ  
の荷物を片づけてから、そのまま実習室に向かうだろうし、ここで  
待っていても仕方がないだろう。

それならば一足先になってしまいうだろうが、俺たちは俺たちで実習  
室に向かうのがいい。行き違いになったり待ちぼうけになったりす  
るよりはいいんじゃないかと思う。

「寝てる人を移動させるとき、一番楽なのはおんぶか」

まあ、当然だな。というか、むしろそれ以外の方法が思いつかない。  
眠った霧子を輸送するときだっていつもおんぶだし、今回もそうす  
るのがいいだろう。

おんぶは、実際のところ慣れたものだ。昔から幾度となく霧子を相  
手にやっているし、志穂は週に一回くらいは背中に飛びついてくる  
し、することへの恥ずかしさみたいなものはない。というか、ただ  
眠ってしまったているメイを実習室まで連れて行ってやるための手段  
としてそれを選択するわけで、恥ずかしさを覚えること自体がそも  
そも間違っているともいえるだろう。と、なんとか心に言い聞かせ  
る。

よし、それじゃあおぶるとするか。

「ん…、しょっと」

掛け布団代わりにかけていた上着を回収して羽織ってから、目を覚  
ましてしまわないように両脇に手を差し入れて体を起こしてやる。

首がガクッ！　となってしまうないように気をつけながら座らせて、それからさっき保健室に連れて行ってやろうとしたときと同じようにして背中にメイを乗せてやる。

しかし、改めて思うが、軽いな。まあ、この身長じゃこのくらいが普通なのかな？　志穂よりも軽いつて、本当に大丈夫なのだろうか、とお節介にも心配になってきた。

「志穂も、もう行ってるみたいだな。確か、霧子はこっちじゃないところで片付けしてるんだったか」

よし、それなら行くか。もうこの場に残っているのは数人しかないないし、俺たちも急がないといかんわけである。

しかし、歩き始めてから数歩して、俺の背中でごっすり眠っているはずのメイがもぞもぞと動く。っと、まだ起きそうもないと思っていたわけだが、しかしどうもあつという間に起きてしまったようだった。

「メイ、起きたか？」

「…、お、にい…、ちゃん？」

「えっ？」

「…あ、れ…：…？」

メイは背中で目を覚ましたので今どんな表情をしているのか俺は見ることが出来ないが、しかしその声だけは間違いなく耳が捉えた。メイが声を出すのを聞くのは始業式の日以来だから、大して日にちが経っているわけではないが、なんとなく懐かしいような気がしてしまう。

っていうか、いま何て言ったんだろうか？　メイが声を出したということに驚いてしまって、何を言ったのかなんてことにまで意識が回らなかった。

「ごめん、メイ、今、何て言った？　びっくりして聴き落としちゃった」

『幸久くん、あのね』

しかし俺が聞き返した言葉に応えたのは、メイ自身の言葉ではなく



ケイタイの液晶画面で、バックライトに照らされたその文字が俺の目の前に突き出されたのだった。やはりさっきのはちよつと言葉を発してしまったというだけで、ケイタイでのコミュニケーションという手段を放棄するという決断ではなかったらしい。

まあ、そもそもメイがケイタイでしゃべっているのは一時の気まぐれではなく、何らか意志を持って為されているもので、簡単に止めたの止めないのであるものではないのかもしれないが。果たして昔からそうしていたのかどうかは分からないが、今そうしているのは、やはり何か意味があるのだろう。

「ああ、どうした？」

『なんでもないの』

「そうなのか？ 何でもないのか……。分かった、それならいいんだけどさ」

メイが何でもないって言うんなら、本当に何でもないかどうかは別にして、そうして曖昧にしようというのだから、少なからず触れないでほしいと思っっている話題なのではないだろうか。それならば、触れないでほしいというところをわざわざ掘り返すことは、あまりすべきでないように思う。

『ちよつと、勘違いした』

「なるほどな、勘違いか。俺もよくする」

『ごめんね？』

「いいよ、別に。全然気にしてない」

寝起きの人間に勘違いされるのには、どちらかという慣れている方だ。霧子を起こすのも、始めてからもう五年を数えようとしているし、その間に何度雪美さんやら晴子さんやらに勘違いされたことだろうか。

まあ、最近ではもう勘違いされることもなくなってきたのも事実。おそらく、自分を起こしに来てくれる人間が俺以外にはもはや誰もいない、ということによりやく気付いてくれたに違いない。

「目、覚めたみたいだけど、もう降ろした方がいいか？」

『ちょっと頭痛いから、もうちょっとだけいい?』

「ああ、気にしないでいいぜ。おんぶするのは慣れてるからな」

『重くない?』

「どっちかというと、軽過ぎて心配だな」

『重くないなら、よかった』

「ご飯いっぱい食べておつきくなるんだぞ?」

『うん』

まだ高校二年生だ、もしかしたらまだ成長できるかもしれないし、メイには成長することを諦めないでほしいものだ。霧子だって、中二のころだが、何か変な成長剤的な薬品でも飲ませたのではないか、と思うほどの急成長を見せていたわけだし、メイにだって可能性は大いにある。

一夏開けてみたら別人、みたいなことだって、起こらないとは限らないではないか。まあ、こうして小さいままでもかわいいと思うし、無理に成長しなくちゃいけないとは思わないのだが。

「あつ、お〜い、幸久く〜ん」

「あれ、霧子?」

『うん、きりちゃん』

そして向こうの方から、なぜか霧子がやってくるのだった。志穂が向こうの方で片付けしてるよ、と言っていたと思うのだが、なんだろうか。

もしかしてわざわざ俺たちの様子を見に来たのだろうか。まったくさっさと実習室に行っていればいいものを、いらん気を回しおつてに。

「霧子、どうかしたのか? 先に実習室行ってるよ」

「にゅ、幸久君とメイちゃん、ちょっと心配になっちゃって。だいいじぶかな、って」

「心配しなくても平気だって。俺は、まあ、ちょっと頭痛いけど、もう平気だし、メイだって俺がちゃんと連れてくって」

「それならいいんだけど…、えと、いちおう、だよ」

「そうか、いちおうか。しかし、霧子が俺を心配するようになったんだな…、そりゃ、知らぬ間に時代も流れるってもんだぜ」

『きりちゃんやさしい』

「そうだな、心やさしいいい子に育ったもんだ」

「にゅ？ 何のこと？」

「いや、俺も歳を取るもんだな、ってさ」

「幸久君…、同い年なのに…」

「細かいことはいいんだよ、霧子」

細かいことばかり気にしていると俺みたいになるぞ、と言おうと思っ、その自虐ネタはあまりに俺自身を傷つけると気づき寸のところ言葉を止めた。何気ない日常会話で必要以上に己を傷つけることはあるまい。

そして、俺はメイがずり落ちてしまわないように背負いなおすと、霧子と並んで実習室を目指すのだった。

「んじゃ、霧子も迎えに来てくれたことだし、さっさと実習室に行くとすっか」

「うん、そうだね。メイちゃんは平気？ 頭痛くない？」

『平気、きりちゃんは？』

「あたしも、今は平気だよ。ちょっとふらふらするけど、平気」

『あたしすぐ寝ちゃったから、平気だったか心配だった』

「霧子は、エラい元気だったよな。いつもよりもずっと元気だった」

「あ、あれは…、あの、あのね…、あたしも、知らないもん……」

「そうだな、うんうん、知らない知らない」

霧子は平気だと言っているが、しかしおそらく平気ではないだろう。それはその様子を見ていれば、俺レベルの霧子観察歴を持てれば分かる。メイの前だからがんばって元気そうに振舞っているのかもしれないが、端々でもうダメだった。

俺と二人になったとたんにダメになるに決まっている。お友だちの前で強がってお姉さんぶってみたいお年頃なのかもしれない。

「そ、そうだ！ あ、あのね、幸久くん、おねえちゃんがね、今日

うちに来なさいって言ってたよ？　っていうか、メールが来てたの」

「ああ、そうなのか。分かった、それじゃあ家に荷物置いたらすぐ行くなって伝えといてくれ」

「今日は幸久君がご飯つくるって、メールに書いてあったんだけど……」

「分かった、了解。それじゃあ直接行った方がいいな。広太にも連絡しないと」

「あっ、あとね、お買い物もついでにできなさい、って」

「ん、了解。っていうかさ、なんで晴子さん、今日に限って俺に直接連絡してこなかったんだろ。わざわざ霧子を介さなくてもだろうにさ」

「あのね、こないだまちがって幸久君の携帯のメールアドレス消しちゃったんだって。で、面倒だからまだ登録し直してないんだって……」

「そうか…、じゃあ、今日行ったらまた登録させてもらうか。晴子さんでも間違うことはあるもんな、仕方ないって」

『幸久くん、たいへん？』

「ん？　いや、別に？　よくあることだから」

さて、晴子さんの指令によって今日のこれ以降の予定が完全に破たんしたわけだが、まあ、家で晩飯をつくるか天方家で晩飯をつくるかというだけの違いでしかないし、あるいはなにも変わらないのかもしれないが。

しかし買い物からしないといけないとはな、今日はちょっと厳しいぞ。手早く買い物をして、すばやく料理をつくらないと、晴子さんが機嫌を悪くしてしまうかもしれない。

というか、遅くとも八時には完成させないと晴子さんの機嫌が悪くなる以前に雪美さんの空腹が限界になってしまう。どちらにしても、今日の晩飯づくりは忙しくなりそうだった。

## 夕暮れの肉屋 with 肉屋のおっちゃん

帰りのホームルームはつつがなく終了し、様々な問題を発生させた花見だったわけだが、とりあえず閉幕の運びと相成ったのだった。正直に言ってしまうえば、来年以降のイベント開催についてはよく話し合っしてほしいと思う。いや、俺個人の意見としては開催しないことを進言させてほしい。

「まあ、終わったな」

それでもまあ、ちゃんと終わったのだから良しとしようじゃないか。具体的な被害者も、急患として保健室に担ぎ込まれたり救急車の出動を要請したりするレベルのものはなかったわけだし、目をつむってもいいのかもしれない。

「向こう三年くらいは、花見しなくてもいいなあ」

そして今、俺はてくてくと帰路についているところである。隣を歩いているのは霧子だけで、姐さんは風紀の見回りだかなんだかがあるといっ行ってしまったし、志穂は道場に行かなきゃいかん、とか言っってダッシュで彼方へと消えてしまい、メイはそもそもからして家の方角が違うので、今この布陣なのだ。

「幸久君、お買い物、どこ行くの？」

「商店街でがんばってまけてもらうしかないな」

「？ どうして？」

「所持金が、あんまりない」

俺の財布の中身は、今月のお小遣いの残りがかすかにあるだけである。いや、十分に学生生活を行なうことができる程度には入っているのだが、それでは買い物をするには心もとないというかなんというか。

「少なくともお札は一枚しかない。こんな所持金でスーパーに入ると、とても悲しい目に合う可能性がある」

具体的には、千円札が一枚、百円玉が二枚、五十円玉が二枚、十円

玉が五枚、一円玉が七枚で1357円。これが今の俺の全ての所持金である。帰りに軽ぐどこかで買い食い、とかちよつとゲーセン行ってみようかな、という分には十分な金だが、これで五人分の夕食をつくる食材の買い出しをするというのはいささか無謀の観がある。何をつくるかはまだ考えている途中だが、何をつくるにしてもやはりそれなりの金額になってしまうことが考えられ、下手に突入することはできないのだ。

「それなら、ちよつと時間かかるけど、商店街で拝み倒して安く済ませる方がいい」

「にゆう…、それなら広太君にお願いしたらいいんじゃないの？　そうすれば帰ってすぐにお料理始められるし、お金のことも気にしないで済むと思うんだけど……」

「広太には買い物なんかよりも重要な任務があるんだ。下手に狩りだすわけにはいかない」

「重要な任務って、なに？」

「はっ？　なに言ってるんだよ、晴子さんのご機嫌取りに決まってるだろ」

そもそも、俺が料理をつくる以前から晴子さんの機嫌が悪かったりしたらどうしようもないのだ。いや、俺の料理のせいで晴子さんの機嫌が悪くなったら、それは俺の不徳の致す限りのところなのだが、しかしそれ以前から機嫌が悪くては、俺にはなんともしがたいのだ。それ故に、なんとか料理が出来上がるまでは機嫌よくしていてもらわなくては困る。というわけで、そこで広太の出番がやってくるのである。

「晴子さんが機嫌悪くしてたら、俺は料理がつくれる気がしない。だから広太にはがんばって晴子さんのご機嫌をとっててもらわなくては困る。故に広太を買い出しに出させるわけにはいかない。分かるか？」

「わ、かった……？」

分かってないな、うん。霧子はどちらかというと晴子さんの不機嫌

に晒されることが少ないから、その恐ろしさを今一つ理解していないのかもしれない。

「まあ、ちょっと広太に電話するわ」

そして俺はポケットからkeitaiを取り出すと自宅の番号にコールする。この時間なら間違いなく広太は家にいるだろうし、それが一番手っ取り早い。

ピ・ポ・パ・ポと番号をプッシュして、二度三度と通信音が聞こえたのち、ガチャリと受話器が上げられた。

『はい、三木でございます。幸久様、どうなさいましたか？』

「なぜ分かる……」

電話を通して聞こえたのは、当然ながら広太の声だった。しかしなぜ俺と確信して通話を始めているんだ、こいつは。

ちなみにうちに備え付けられている電話は旧型で、発信者通知なんていうハイテク機構は積みこまれていないので、受話器を取った瞬間には誰から電話がかかってきているのかは分からない寸法なのだが、しかし広太は今、俺の名前を口にした。まだ俺は一言も口をきいていないというのに、どうして分かった、エスパーか？

「俺だ」

『はい、幸久様。どうかなさいましたか？ なにか、問題でも？』

「…、広太、頼みがある」

細かいことは気にしないことにした。きつとあれだよ、執事としての超感覚とか、研ぎ澄まされた感覚とか、そういう非科学的なあれだよ。

「今日、晴子さんから招集がかかって、俺は晩飯を天方さん家ですくることになった」

『分かりました、晴子様が御気分を害さないようにすればよろしいのですね？』

「ああ、頼んだぞ。俺は出来るだけ早く買い物を済ませて戻るから、なんとかしておいてくれ」

『了解いたしました。幸久様のご期待に背かぬよう、全力で事に当

らせていただきます』

「じゃあ、一時間もしないで戻るから、それまで頼む」

『はっ、仰せのままに』

広太との通話を終わらせると、俺はケイタイをポケットに押し込んでから財布を取り出し、いちおう中身を確認しておく。ふむ、やはり思った通りの金額しか入っていない。

仕方ないな、がんばって安く済ませるしかないよな。

「よし、霧子。商店街行くぞ」

「うん、そうだね」

「時に霧子、お前、今いくらもってる？」

「えっ？ えと……、二三千円くらい？」

「……、このお金持ちめが」

「え……、にゅ……、ごめんなさい……」

「買い物してて、もし足りなくなったら貸してくれな。すぐ返すから」

「うん、いいよ。貸すなんて言わないで、ふつうにつかってくれてもいいのに」

「いや、それはダメだ。そういうのはよくない。友だちだからって金が絡むやりとりを適当にしてはいけない」

「にゅ、なら、すぐ返してね？」

「ああ、そうするよ。まあ、そもそもなんとかしてきっちり所持金の中で買い物するのが腕の見せどころなんだけどな」

「おねえちゃんもお買い物が上手なんだよね。あたしはそんなに上手にはできないから、すごいと思うよ」

「そうか？ 別に大したことしてるわけじゃないんだけどなあ。確かに晴子さんは不思議なくらいだけど、俺はそこまでじゃないって」「そうかなあ……？」

「そうだって。それよりも、何をつくるかの方が問題だろ。霧子は、何か食いたいのがあるか？」

「食べたいものかあ……、なんだろ。あっ、おねえちゃんはカレーが



食べたいって言ってたよ、メールで」

「そうなのか？ それじゃあカレーに決定だな。霧子はそれでいいか？」

「うん、幸久君のつくってくれるカレー、好き」

「そうかそうか、よしよし。好き嫌いしないでなんでもいっぱい食べるんだぞ」

「うん」

「そうすれば、背…、は、もうでっかくななくていいから、スタイル良くなるぞ！」

「うん……」

「だいじょぶだって、きっとある朝目覚めたらボンキュッボンみたいなことになるからさ」

「なるかな……？」

「ほら、背だって、一夏開けたら雨後の筍的成長を遂げただろ？」

それと同じ感じで、いけるって」

「だと…、いいんだけどね……」

どうやらどこかしらで言葉の選択を間違えたらしく、ほんのわずかな間に霧子が真っ暗になってしまった。女の子は繊細な生き物だから気をつけて扱わなくてはならない、という晴子さんの教えは、まだ俺の中に浸透しきっていないのかもしれない。

いや、違うな。霧子が相手になると気が抜けて扱いへの配慮が途切れがちになるんだな。これは俺と霧子の間柄が友人を超えた家族の域に達していることを意味する事実であるが、しかしだからといって決して妥協してはならない。

晴子さんの教えは遂行しなくてはならず、それは相手が霧子だからと許されることではないのだ。それが弟子として俺に課された使命であり、同時に義務でもあるのだから。

……………

さて、そんなこんなで商店街である。

時間的には夕方の最大級の混雑のピークを少し外した感じで、お客の奥様方がそんなに多くなくて助かる。まあ、どれだけ奥様がいても負けるわけにはいかない戦いがそこにあるのだが、しかし混雑していないのならそれはそれで歓迎だった。

俺だって別に、夕方の混雑の熱気に巻き込まれたいと思っているわけじゃないし、同様に奥様方にもみくちにされたいとも思っていない。それに今日は霧子を連れているわけだし、そういう状況になられると非常に困る。

霧子を過密状態の人ごみに放りこむことは、出来ればしたくないのである。理由は：、まあ、いろいろあるのだ、少女には。

「さて、カレーつくるとなると肉だな。あと野菜か。ルーは、カレー食いたいとか言うからにはあるんだろう」

「じゃあ、お肉屋さん？」

「そうだな、ここからなら肉屋の方が近い。そのあと八百屋に行って帰る感じだ」

「にゅ、お肉はなににするの？」

「何がいい？」

「んと、さっき唐揚げ食べたから、鶏肉じゃないのがいいかも」

「そっか：、じゃあ合挽きでも買ってくか。ひき肉でカレーつくるぞ」

「おねえちゃんも、前につくってたかも。たしか、なすのカレーだったよね」

「そうだな、イヤか？」

「そんなことないよ。おいしかったし、また食べたい」

「そっか、じゃあ決まりだ」

商店街にある肉屋『肉のセキグチ』。

その名の通り関口さんがやっている肉屋であり、当然その売りは肉である。我が家の貴重な動物性たんぱく質の調達先であり、肉を買う、となると決まって広太が訪れるという、ある意味三木家に馴染

みの店なのである。

また、肉を売るだけではなくそれを使った総菜なども意外と充実していて、コロッケやトンカツ、メンチカツ辺りの定番どころを押さえつつ、野菜串やうずら卵串などの変わり種も提供しているという感じだったりする。

肉屋の総菜というのはなぜか美味しいもので、奥様方が夕食の一品のために買っていったり、部活帰りの学園の運動部どもが空きっ腹に突っ込んでいったりと、売り上げはなかなか好調なのだという。かくいう俺も、たまに気まぐれで学校帰りに買ってみたいするのだが。

ちなみに定休日は週の真ん中の水曜日と祝日で、それをすっかり忘れて水曜の学校帰りに肉を買いに来て立ち往生、という状況を俺は二度ほどやってしまっている。学習能力というものが、俺には欠如しているに違いない。

さらにちなみに、店主の関口さんの一人娘は俺たちの母校である中学の二年生らしく、来年はうちの学園を受験させようかと考えているらしい。店の手伝いなのか、奥のキッチンで揚げ物をしている姿を何度か見たことがあるが、なかなか器量のよさそうな、シユツとした美少女である。

「毎度、大将。今日も肉、買いに来たぜ」

「おお、ご主人！ 毎度ありがとうございます！ 今日、安くしとくよ！」

この威勢のいいおっちゃんが、店主である関口智信氏、当年とって37歳、脂の乗った働き盛りの好壮年である。俺とも広太とも、もはや顔馴染みの仲だ。

「おや、今日は坊やじゃなくてかわいいお嬢ちゃんといっしょなのかい？ いや、色男は辛いねえ！」

「いやはは、色男とかじゃねえって。あれだよ、娘だよ」

「娘かい！ ずいぶんとでっけえ娘さんがいるんだな、ご主人！」

「いや、冗談だよ。妹だよ」

「はは、残念だけど、その娘のことは知ってるんだなあ。あれだろ、晴子ちゃんの、妹の、なんつったかなあ…、おう、お名前なんつうんだい、お嬢ちゃん」

「にゅ、あの…、天方、霧子です」

「おお、そうだそうだ、霧子ちゃんだ。いやあ、晴子ちゃんからはでっかくてご主人といっしょにいるのがそうだって聞いてたけど、なるほどなあ…、たしかにでっかいなあ」

「でっかくてもかわいいだろ。手え出したらぶっ殺すぞ、大将」

「はっはっは！ ご主人は冗談がきつついなあ！ おっちゃんには女房も娘もいるからな！ 若い娘さんに手え出してる暇なんて、ないってわけよ！」

「見た目より賢明だな、大将。俺を殺人犯にしないでくれて助かるぜ」

「なになに、ご主人の妹分に手え出すことはしねえさ。ところでよ、今日はなにをお求めだい。ご主人にはいつも買ってもらってるからよ。気持ちくらいだけど、勉強させてもらうぜ？」

「いつも悪いね、大将。今日は合挽きを五人分な、カレーで使うんだよ。だから、どれくらいがいいかな…、どれくらいがいい？」

「そうだねえ、ああ…、どれくらいかねえ…。とりあえず200くらいいっとくかい？」

「もうちょい、いっとくか。250くらいで頼むわ」

「はいよ、ご主人。合挽き250ね」

「そういえば、大将。今日は娘さんはキッチンにいないんだな。新学期始まったばかりで忙しいのか？」

「ああ、おっちゃんにはよく分からんけど、なんか忙しいんだとき、なんていったかねえ、部活でレギュラーになれそうとかなんとか、言ってたと思うよ」

「へえ、すごいな。レギュラーなんてそうそうなれるもんじゃないんだろうに。そりゃ、大将も鼻高々だ」

「バスケットボールをやってるんだけどな、おっちゃんにはよく分

からなくてよ。手で玉をバウンドさせて、投げて輪っかを通すんだよな」

「ほんとに最低限のことしか知らないんだな。大将、娘のやってることくらい、ちゃんと知ってた方がいいんじゃないのか？」

「いや、おっちゃんは野球と相撲だけで精いっぱいだよ。他のスポーツは、難しくていけねえな！　はは！」

「娘と話すためだと思って、がんばったらいと思うけどな」

「そうしてみるよ、余裕があったらな。ほい、合挽き250な。100で155円で売ってるから、250は390円だけど、よし、350円でいいぞ」

「おう、大将、いつも悪いな」

「いいってことよ！　これからも御贔屓にな、ご主人！」

「あつ、大将、ところでこの店、どれだけ通えばあの娘がもらえるんだ？」

「うちの娘は、いかにご主人とはいえども、あげちまうわけにはいかねえなあ！　ははっ！　まあ、娘の方からどうしてもって言われたら、仕方ねえがな！　そんなときは、涙をのんで、ご主人にくれてやることにするよ！」

「おお、そういうことなら、考えとくわ」

「ほんじゃな、ご主人！」

「また寄らせてもらうぜ、大将」

そうして、袋詰めの場合肉250グラムを受け取って財布の中から350円をちょうど取り出し、支払いを済ませる。気さくなおっちゃんなので、どうしても来るたびにどうでもいいことをぺちゅくちゅとしゃべくってしまうわけなのだが、それでいい関係をつくれればこうしてわずかにでもまけてくれるのだから御の字だ。

そして次は野菜なのだが、しかし野菜は近年高騰しているので、買うのが毎度毎度恐ろしくてならない。今日も、気をつけていかないとすさまじい値段になってしまいうので十分に用心しなくては。

「幸久君は…、すごいね……」

「はっ？ 何が？」

そして三步ほど肉屋から離れたところで、霧子がポツリとそう言った。

「なにがって、あの、おしゃべりしてたから、お店の人と。あたしは、そんなことできないよ……」

「別にそんな大層なことじゃないだろ。近所のおっちゃんとしゃべくって、それでそのおっちゃんがたまたま肉屋だったっていうだけだよ」

「でも、すごいなあ……」

なぜだろう。どうしてか、霧子から尊敬のまなざしで見つめられてしまった。大したことはしていないというのに、どうしてだろう。

俺は、普通に買い物したただけだろ……？

## 一周回って落とし穴

「遅かったじゃない、何やってたのよ」

俺と霧子は商店街での買い物を、なんとか俺の財布の中身だけで済ませると、わき目も振らずに天方家へと急いだ。しかし、俺たちがいくら急いだつもりでも、晴子さんの中で主観的に遅いと判断されてしまえばそれまでである。

どれだけ俺が懸命に急いで帰ってきたとしても、晴子さんがそうだと思ってくれなければ話は別なのだ。晴子さんが遅いと言ったら俺がどれだけ急いだとしても、遅いことになってしまう。

天上天下唯我独尊。それが天方晴子、俺の師匠の定める師弟間のルールなのである。

「すいませんでした、精いっぱい急いだんですけど…、遅くなってしまうって」

晴子さんは玄関に、軽く髪をかき上げながら仁王立ちで俺たちのことを待ちかまえていた。それは決しておかえりなさい、などという優しい言葉をかけることを目的としているわけではなく、俺が到着次第口撃を加えるために待機してただけなのだ。

「あたしが来いって言ったら、すぐ来なきゃダメじゃない。ほんと使えない愚図ね」

「すいません、すぐに用意しますから」

「当然よ、なに言ってるの」

こんなところで立ち話をしている時間こそ、実際にはないのである。俺は急いで靴を脱いで、あきれた目で俺を見降ろしている晴子さんの横を通り抜けようとする。

したのだが、しかし、そうする瞬間に、俺は何かを感じ取った。だがそれはあまりにかすかすぎて、具体的に何を感じ取ったのかは、自分でもよく分からなかった。

「あの、晴子さん。今日、いつもと何か違います?」

だから聞いてみることにした。聞いたからといってなんでもかんでも解決するとは思っていないが、だがしかし皆目見当がつかないのだから聞いてみるしかない。

ここで変な意地を張っても、分からないものは分からないのだ。それならば、素直に晴子さんに何かあったのか聞いてみたほうがいい。何かあったのならばへえ、そうなんですか、で済むし、何もなかったならばいや、勘違いでしたね、で済む。

「あら、ようやく気付いたの？ 遅いわねえ、入ってきてすぐに気付きなさいよ。広太はすぐに気付いたのに、幸久はダメねえ」

「えっ、あっ、すいませんでした」

「で、具体的にはなにが違うのよ」

「それは、分からないですけど……」

「霧子は分かっているわよね？ 分かった顔してたから」

「にゅ、あの、美容院、行ったんだよね？ 少しカットが変わってるし、匂いがあるから」

「美容院…、あぁ、言われてみれば、ちょっと切ってますね。襟足をそろえてるんですか？」

「そうね、ちょっと揃えてもらったわ。ようやく、分かったのね、幸久」

「気づかないで、すいませんでした……」

「よくないわ。あんなに髪を触ってアピールしてたのに、どうして分からないのかしらね。女の子の変化にはすぐ気付いていつも言ってるでしょ」

「はい、これからはもっと気をつけます」

「どうして執事の広太に出来ることが主人のあんたにできないのか、ってことよね。それって許されることなの？ 執事と主人なのに」

「執事が主人よりも有能ということは、よくあることらしいですけどね。庄司のおじさんは、執事は何においても完璧でなくてはならないってよく言ってます」

「口答えしてんじゃないわよ、罰ゲーム！」



「えっ、そんなのあるんですか!？」

「あんたが口答えしたからよ。師匠に口答えとか、弟子のくせに舐めてんじゃないわよ」

「…、すいませんでした……」

「はい、正座」

「はい……」

そして俺は、冷たい玄関口の床に膝を突き、晴子さんの言いつけどおりに正座をするのだった。しかし食材を含めた荷物を床に置くわけにはいかず、霧子に手渡してからそうすることだけは、晴子さんも無言のうちに許してくれた。

正座した足からは床の冷たさと硬さが伝わってくるが、晴子さんの罰ゲームの前座として正座をさせられるのは比較的いつものことであり、その感覚にも慣れたものである。しかし、問題はここからなのだ。

当然だが、正座は罰ゲームではない。

「んふふ、罰ゲーム、何がいいかしら？」

「は、晴子さん、俺、これから晩飯つくらないといけないですから、今は罰ゲームとかはちよつと……」

「分かってるわよ。罰ゲームは後でごはん食べた後にするのよ、当然じゃない。今は、何をするか決めるだけだよ」

「そ、そうですか……」

何をするかを決めるだけ、ということとは、つまりもう罰ゲームはしない、という選択肢が晴子さんの中にないということだ。まあ、晴子さんから罰ゲームが宣告された時点で、それは確実に執行されるのであり、「やっぱりなし」なんてことにはならないのである。

しかし今回の罰ゲームの原因はそこまでのことではないこともあるし、そこまでハードな罰が与えられることはないだろう。あるとしてもダッシュさせられるとか筋トレ的なことをやらされるとか、あるいは繊細なところから責められるとしてもタバスコ一気飲みとか、わさびを一塊とか、そういうちよつと痛いレベルのものに過ぎない

と思われる。

「あんたが決めていいわよ、幸久。自分にふさわしい罰ゲームが何なのか、ってね」

「じ、自分で、ですか……?」

「そうよ? 自分の罪がどれほどのものは、あんた自身もよく分かっているでしょ? それなら自分で決めるのがいいとは思わない?」

「そ、それは、まあ…、それなりに……」

「それなり?」

「ばっちりです!」

「じゃあ、どうしたい? いや、どうされたい?」

正直に言おう、これはかなり新しい。

いつもなら、大体概ね晴子さんがスパツと罰ゲームを決めて、それを俺がさくつとこなす、という流れだというのに、どうしてここで新しいルートを開拓してしまったのだろうか。というか、これはいったいどういう意図を持ってして提案されたルートなんだろうか。これまでのように晴子さんが罰ゲームを決めるのであれば、それは当然晴子さんのしたいように俺を罰ゲームにかけることができるわけで、自分の思い通りに俺をいじりたい、という思いの表れだということとは分かる。それは晴子さんが師匠として俺よりも圧倒的上位に君臨していることを明確に示す方法であり、師弟の間に存在する埋めることも超えることもできないような絶対的で決定的な権力の差を誇示することを目的としているだろう。

思えば昔からそうだ。晴子さんが俺を弟子にすることを決めたときも、根本には俺をおもちゃにして楽しい生活を送ろうという思いがあったわけで、そのためにまず圧倒的な料理の腕の差で俺を精神的に屈服させたんだ。それ以降も、料理を教えてやるという名目で俺が晴子さんを絶対的に神聖視するように仕向けていたわけだし、無茶な特訓方法につき合わせることで俺がどうしても晴子さんに勝ち得ないということを骨の髄まで染み込ませたわけだし、度重なる罰ゲームと拷問ごっこによって植えつけた大量のトラウマと根源的な

恐怖感によって本能のレベルから俺が反逆することを抑止しているのだ。

こうして考えてみれば、少なくとも中学生とか高校生の発想じゃない。もっとうこう、人間を家畜に落とそうとか、奴隷をつくろうとか、そういうレベルの危険な着想からその行動が選択されているんじゃないのだ。

だというのに、そんな呪いの死神にして悪の総本山にして恐怖の代理表象にして、しかし俺の女神さまである晴子さんが、どうして俺に罰ゲームを選ばせる？ これはあれか？ あれなのか？ 俺の忠誠心を量っているのか？

俺がきちんと晴子さんが思うような量刑を自らに課すことができるか、試しているのか？

読めない…、読めないぞ…、晴子さん……。

「はやく決めなさいよ、うざいわね」

晴子さんは、俺がその意図を読めずに恐恐として思考を止めていると、それが気に入らなかったようで、正座している俺の脚の上に乗った。江戸時代の拷問に、こういうのがあったような気がする、と俺は余裕を持ってその思考に至ったが、しかしその余裕はすぐにすりつぶされた。意外と痛かった。

しかしそれほどでもない。膝の皿のあたりが圧迫されて軋むような音がしているが、しかしそこまでの痛みはないのが現実である。この程度で叫び声を上げるような温い調教は受けてきていないのだ。

「ほら、早く決めなさいよ」

だがそれ以上に、状況は非常にマズいものだ。晴子さんは俺の膝の上に立っているような状態なわけで、そうすると晴子さんの股下の長さ俺の座高の高さの関係によって俺の目線の高さに、ああ！ なんでもありません！！

エッチなこととか、全然考えてません！！

「晴子さん、降りてください！ そういうのはよくないと思います！！」

「この程度の痛みで音を上げるなんて、あたしの弟子の耐久性としては情けないわね、幸久。もっと鋼のように強くなりなさいよ、全体的に」

「がんばります！　がんばりますから、今は降りてください、おねがいします！」

「仕方ないわね、その分しっかり考えなさいよ」

「はい、がんばります！」

そうして俺の願いは聞き届けられ、晴子さんは俺の膝から下りてくれたのだった。精神衛生上よろしくないことになりそうだったな、危ない危ない。晴子さんは俺に対してある意味無防備というか、無頓着というか、まあ、弟子相手なんだから当然なのかもしれないが、気にしなさすぎだと思う。

俺も男なんだから、いくら気にするに値しない相手だとしても、乙女として慎むべきところはきっちり押さえてもらわないと困る。俺は強化型紳士として、そういうことで徒に情動を催したりはしないが、それとこれとは話が違うというものだろう。

「で、どうするのよ？　罰ゲーム、早く決めてくれないと晩ごはんの準備ができないじゃない」

「え、えっと、そう、ですね……」

話は一巡したが、根本のところでは何も進展していない。問題はどうして晴子さんが、師匠としての最大の権限の一つである罰ゲームの決定権を手放すのか、ということだ。それを行なうことが、晴子さんにとってどんなメリットを持っているのかを見極めなくてはならない。

考えられるのは、単に面倒になったからという線だが、それはない。もしそうだとしたら晴子さんはもうここにいない。

あとは俺の忠誠心を試しているという線か、あるいは俺がこうして悩み苦しむのを見たいだけという線か、それともそれ以外か。

「じゃ、じゃあ…、あの、町内ダッシュ一周……」

晴子さんの教えを徹底できなかった罪ならば、それくらいの罰ゲー

ムが適当だろう、と俺は考えた。

そして俺がそう言いかけて、しかし晴子さんの表情は納得のそれではなかった。どちらかというと驚きのような、俺の言おうとしている罰ゲームでは足りないんじゃないの？　とでも言いだしそうな、そんな表情。

その驚きは、おそらく失望に変わる。このままでは、ちゃんと出来るかな、という師匠からの試練をしっかり受け切ることが出来ないということになってしまいうじゃないか！

ま、マズい！　これじゃダメだ！　もっとキツいのじゃないと、晴子さんの期待を裏切ることになる！！

「じゃ、少ないんで！　十周！　行ってきます！！」

俺があわてて直前の言葉を打ち消し、差し当たって罰ゲームの強度を単純計算で十倍まで跳ね上げてみた。反省があるとすれば、いきなり発作的に勢いで十倍にするんじゃないかって、三倍とか五倍とかで探りを入れてみるべきだった、ということ。

少なくとも、一気に十倍はやりすぎだったと思う。思うが、しかしすべては今さらでもはや後悔をすることしか出来ない。人間、発してしまった言葉には常に責任が付きまとい、そう簡単に打ち消すことはできないのである。

「えー、そんなに？」

晴子さんの表情は、なんだろう、とても楽しそうだった。こんなにニコニコの晴子さんを見るのは、楽しそうにしているのを見ることは何度もあったがここまでとなると、初めて俺に罰ゲームをかけたとき以来かもしれない。

まるで、持っているおもちゃの新しい楽しみ方を見つけたような、そんな類の笑み。しかしそれは小さな子どもの純真なものではなく、どこか邪悪に満ちた、大人の笑みなのかもしれない、と俺は思わずにはいらなかった。

「あたしは、そんなにさせるつもりはなかったんだけど、まあ、幸久が自分でやるっていうんなら…、止めることはできないわよね

え？」

「お、おねえちゃん……？」

「霧子も、聞いたわよね？ 男が一度やるって言ったことを、まさか翻したりはしないわよねえ？」

それから俺は、晴子さんのねらいを即座に理解した。

それは、悩み苦しむのを見たいどころの話ではなかった。晴子さんは、俺がぐるぐると思考を巡らし、巡らせた結果悩み、そして苦しみ、最終的に追い詰められて、それから晴子さんへの忠誠心が高じて穴にはまるのが見たかっただけなのだ。

俺が勝手に自滅する様を見たかったからこそ、俺に罰ゲームの決定権を渡したのだ。本当に恐ろしい人だ、晴子さん。まるで俺の思考の一周外を走っているようではないか。

本当に、いい趣味をしている。さすがは師匠だ、としか言いようがない。

「じゃあ、さっさと料理つくって、それ食べたらずぐ罰ゲームだからね。早くしてちょうだい」

「…、了解です、師匠……」

言質は取られている。俺発案の一人町内十周ダッシュマラソン大会は、おそらく九時過ぎに開催である。

## おいしい カレーの つくりかた

とりあえず、食後の町内ダッシュ十周が決定してしまった俺は、もうすべてを忘れて料理をつくることにした。晴子さんから言いつけられた罰ゲームなら心中でこっそりとキツすぎるなあ、と思うことも許されるかもしれないが、しかしそれを言いだしたのは俺なのだ。そんな状況ではもはや、やってしまったなあ、と無言で後悔すること以外は許されないものであり、怨むならば晴子さんの思考を読み切れなかった俺自身の至らなさなのだ。まあ、おそらく俺が晴子さんの思考を読み切って五周くらいで抑えたとしても、「少ないわね」という一言で十周くらいまで叩き上げられるような気もするし、どちらにしても俺は今と同じ強度の罰ゲームをすることになっていたんだろうが。

つまりあれだ、諦めよう。

「料理をつくって、気分を晴らそう、うん」

「幸久、さっさとつくりなさいよね。ご飯炊き終わるのと同じくらいにつくり終わるようにしなさい」

そう俺に指示ともいえない指令を送るものの、しかし晴子さんは、もはや完全にくつろぎモードに移行しており晩飯の準備の支度を手伝おうというような気概は一切感じられない。テレビの前のソファーにごろん、とクッションを枕に仰向けになって、胸の前では大きなクジラをデフォルメしたぬいぐるみを抱きかかえている。

おそらく、下手に声をかけようものなら「テレビの声が聞こえないから黙れ」と言われるに違いないので、言われたことに対して最低限のことしか返答してはいけない。あと、大学生にもなってかわいぬいぐるみとか好きなんですネ、とか不用意なことを言ってしまう、処刑は免れないので言ってはならない。

というか、晴子さんの可愛い物好きは今に始まったことではないので、そんなことを思うのも今さら、といった感じが強いのだが

「はい」

「あと、あんまり辛くしたら殺すからね」

「分かってます」

晴子さんは、というか霧子もなのだが、基本的に辛い物を避ける傾向にあり、カレーも当然その例外ではない。天方家のカレーは、晴子さんと霧子の要望によって中辛と甘口を四対六くらいの割合で混ぜたちょっと甘めの、小学校の給食で出てくるような感じのカレーなのである。

しかし、だというのに晴子さんはカレーが好きだったりするから難しい。好きということは厳しいということ、俺が晴子さん好みのカレーをつくれてるか、という非常に主観的な判断基準によって俺のカレーは評価されるのだ。

「いつもどおりにつくらせてもらいますよ」

ちなみにだが、雪美さんは食べ物好き嫌い、まったくない。皆無と言ってもいいかもしれない。昔、好きなものはなんですか？と聞いたら「美味しいもの」と返答がきたことがある。そのとき俺は、雪美さんに出す料理は、もうただがんばってつくるしかないんだ、と思ったのをよく覚えている。

さらにちなみに、俺が家でつくるカレーはそれなりに辛いものである。中辛をベースに一欠片くらい辛口のルーを入れる感じでつくる。しかしいかにせんうちは二人暮らしなので、カレーのような、必然的に大人数で食べる以外にないほどの量が出来てしまう料理をつくることはかなり少ない。仮につくったならば、そこから向こう二日は朝晩カレーという事実を受け入れなくてはならない。

故に、俺がカレーをつくるのは晴子さんの指令によって天方家に呼ばれたとき以外には滅多にないのだ。

「幸久くん、今日はカレーつくるの？」

「ええ、晴子さんにそう言われたんで」

「何のカレーをつくるの？」

「ひき肉のカレーです。なすの入ってるやつですよ」



「えっと……、あっ、前に晴子ちゃんがつくってくれたのかしら？」

「はい、たぶんそうだと思います」

雪美さんは、向かい合わせに座った広太といっしょに何かをしている。何をしているかは分からない。

雪美さんは暇を見つけるといろいろな一人遊びに挑戦してみるのが趣味で、この間までは切り紙をやっていたのだが、もう飽きてしまったのだろうか。図書館から切り型の図鑑みたいなものをコピーしてきてまでやっていたから大層気に入っただろうと思っていたが、どうもそういうわけではなかったらしい。

雪美さんは器用で何でもそれなりに上手に出来てしまうのだが、飽きっぽいので長続きしない。一つの趣味が一週間持てばいい方で、二週間持ったとしたらそれはかなりハマっているといえるほどだ。

「さて、霧子、これからカレーをつくるわけなんだが、お前の役目は分かっているな？」

「にゅん、分かっているよ。ご飯を炊くんだよね」

「そうだな。あとはまあ、いろいろ切ったりな」

「にゅ？ 今日そんなことまでやっていいの？」

「ああ、場合が場合だからな。時間は節約できるほどいい」

「分かったよ」

「飯、四合な、四合」

「は〜い」

そして、俺と霧子はキッチンに立っていた。正直な話、霧子と並んでキッチンに立つのは嫌だったのだが、一秒でも早く料理を完成させないといけない手前、好き嫌いをしたりえり好みをしている場合ではないのだ。

使えるものは何でも使う。それがここで求められる状況判断なのである。

「さて、と俺は切るか。晴子さん、ニンニクとショウガは借りてもいいですね？」

「別にいいから、静かに料理しなさい。今始まるところだから」

「はい……」

俺は、これ以上晴子さんのテレビ鑑賞の邪魔をしてしまわないように声をひそめて返事をするのだった。

「五人だからな、頑張って切らないと……」

まずはニンニクを二片、一枚皮をむいてから縦半分に分り、まだ青い芽を取ってやる。この芽はしっかりと育っていれば食材なのだが、そんなことはないのでゴミ箱にポイだ。

それからショウガは適当な大きさに切り落してやり、包丁で皮をむいてから薄切りにする。皮は乾燥させたら漢方薬になると聞いたことがある気がするが、別にニーズがないのでそんなことは気にしない。ゴミ箱にポイ。

「ニンニクはみじん切り、ショウガは千切り、と」

中三の夏ころ、受験に向けてそろそろ動きださなくてはならないあのとき、俺は晴子さんから課された特訓によって完璧なみじん切りスキルを授かったのだ。しかし、そのために経た特訓の内容はあまり思い出したくない。

普通の人だったら、そんなことよりも数学の公式の一つでも覚えろ、というかもしれないが、しかし俺にしてみればそんなものよりも晴子さんの特訓の方が百倍くらい大事なのだ。

決して、勉強がしたくなかったというわけではない。

ニンニクを、二つに切り分けてしまわないようにしながら、もう一度縦に包丁を入れる。そしてそこからニンニクを90度回して、これまた切り分けてしまわないように包丁を細かく入れていく。それからそれを千切りするように包丁を入れれば、それだけでみじん切りが完成。

それを四度繰り返しているうちに、霧子はボールで米を砥ぎ終わり、炊飯器の釜に中身を移したようで、今は炊飯器のセット時間をどうしようか、と動きを止めている。

「早炊きでいいぞ、時間ないからな」

「いいの？ カレーできる？」

「つくるんだよ。霧子、玉ねぎむいとけ。二個な」

「はい」

後ろからはピッピッと炊飯器をセットする音がして、それにピーと炊飯開始の音が続く。早炊きの所要時間はおおよそ40分ほどであり、俺はそれまでにカレーを仕上げられるように心がけなくてはならない。なかなか厳しい戦いを強いられていることだけは間違いないだろう。

「急げ、俺」

みじん切りのニンニクをまな板の隅の方に寄せてから、薄切りのシヨウガを五六枚ずつ重ねて、ダダダと千切りにしていく。こんなところで時間を食っている暇はないので、最高速度で包丁を走らせる。

シヨウガの千切りが出来上がるころには霧子も一つ目の玉ねぎをむき終わっているわけで、すぐにシヨウガも同じように隅に寄せて玉ねぎの作業へとスライドする。

まずは頭、芽の方を落としてしまい、半分に切ってやる。根はまだ落とさない。

それからニンニクと同じように、包丁を横にして三回、切り離してしまわないようにしながら根の付近まで切り込み、今度はまた縦に何度も細かく包丁を入れる。

玉ねぎは層構造になっているので、横向きに切り込みを入れる必要はないかもしれないが、まあ、一応だ。

そしてそれを、繊維に対して直角に刻んでいく。普通だったらみじん切りじゃなくて薄切りくらいに切ったものを延々焦げ付かないように炒めて飴色にするのだが、今回に限ってそんなことをしている時間はない。

時間を大事に、細かく切ることによって火の通りをよくするのである。

そして刻み終わったら残っている根の部分は、ゴミ箱にポイ。

「霧子、肉の袋、開けといてくれ」

「ん、分かった。…、幸久くん、目、だいじょぶ……？」

「大丈夫だ、痛いだけだ」

必要な玉ねぎは一つ半くらいなので、これをあと二回やるだけいいのだが、半分終わった時点で目がしみ始めて、丸々一個を刻んだところで涙が止まらなくなった。男が涙を流していいのは親が死んだときだけだというが、玉ねぎを切るときもそれに足しておいてほしいと思う。

というか、こんな不可抗力的にぼろぼろと涙が出るところが玉ねぎのよくないところだと思う。農家の方々は早急に切っても涙の出ない玉ねぎを品種改良で開発してほしい。いや、そうすると玉ねぎ本来の味が損なわれたりするのだろうか……。よく分からないので気にしないことにした。

玉ねぎを切っているときは、手に付着した物質によってさらに涙の出が促進されるので、目をこすってはならない。故に流れる涙は無視して流れるままにしておくのが一番なのだ。

「ああ…、ちょっとタイム……」

涙を流しながらも必要量の玉ねぎを刻み切った俺は、とりあえずまずは手を洗って、それから包丁を洗って、そして最後に顔を流すのだった。というか、こんなに涙が流れるって、もしかして俺は特別玉ねぎに弱い体質なのだろうか……。いつもは玉ねぎをあらかじめ冷やしておく裏技使ってるから忘れてた……。

「幸久君、変わる……？」

「いや、平気」

実際、これで作業工程のほぼすべてが終わったと言っても過言ではない。あとはもう、ほとんど炒めるだけなのだ。

「さて、炒めるか」

水洗いによって目の周りをすっきりさせた俺は、勝手知ったる他人の家の感じに戸棚の中から深めのフライパンを取り出してコンロにかける。油を敷いて中火、フライパンが温まるまでは待機だ。

「霧子、俺がこれ炒めてる間になす切ってくれ」

「どれくらいに？」

「1センチ幅より少し狭いくらいの輪切り。切ったら水にさらしてアク抜きしろよ」

「うん、分かったよ」

「そろそろいいか。ニンニクとショウガから、と」

木べらを手に持って、温まったフライパンのちょうど油の辺りに刻んだニンニクとショウガを落とす。細かく刻まれたニンニクは揚げられるような感じに油の中で踊っている。刻みが少し大きなショウガはニンニクの上に乗るようにして、油からわずかに浮いている感じ。

木べらでわしゃわしゃと混ぜながら全体に油が回るようにしてやって、ショウガの香りが出てきたところで玉ねぎをバツと入れる。これも焦げ付かないようにささっと混ぜ、全体が透明になってくるまで炒め続ける。

ここでもな板は霧子に明け渡し、俺は袋から出されたひき肉を手にとった。別に下味とかをつける必要はないのでそのままフライパンの中に投入、ほぐすように手早く炒めていく。

肉汁が出てくるまで炒めたら軽く赤ワインを振って、またアルコールが飛ぶまで炒める。いい感じに炒まったら、水をいい感じに目分量で入れる。このあたりは適切な量を入れておけばいいから、俺は正確に計量したりはしない。

「ここにローリエ入れて、あとは軽くアクとって、ルー入れてか。

よし、あとはなすだな」

「にゅ、切れてるよ、幸久君」

「ありがとな、霧子。鍋のアク、とれるか？」

「うん、たぶん平気」

「やり方分かるな、はい、お玉」

「幸久くんはなすに何するの？」

「バターで軽く炒める。そうした方がおいしいからな」

今度は浅めのフライパンを取り出すと、それもコンロに掛けて、俺

は冷蔵庫からバターを取り出した。包丁でちょうどいいくらいの量を取り、温まったフライパンに落とす。そして少し溶けたところに、霧子に切ってもらったなすを、よく水を切ってからフライパンに投入、バターが全体に回るようにフライパンを軽く振って炒めていく。「霧子、カレールーに触るな。アクだけ取ってろ」

「にゅ……、ごめんなさい……」

「なぜ俺の目を盗んで蜚行に走ろうとする。味付けはまだ霧子には早いんだ、大人になってからな」

「大人になるまで……、お料理できない……」

「ほら、もう終わるからあっち行ってなさい。雪美さんに遊んでもらっておいで」

「にゅ……、まだお手伝いできるもん……」

「あととはよそうときに手伝ってもらうから。ほら、行った行った」

「にゅ……」

どこか不満げな霧子をリビングの方に放り出して、俺は最後の仕上げに取り掛かった。なすを炒めているのは、もう十分だろう。火を落として、これはこのまま放置しておく。霧子がアクを取っていたフライパンを見れば、十分処理はされているようで、これ以上俺がアクを取る必要はなさそうだ。

かすかに沸騰しているフライパンに、甘口を三欠片、中辛を二欠片、ルーを放りこんで溶かすようにぐるぐるかき混ぜる。まだ少し水っぽいし、もう少し煮つめてとろみを増させてからそこになすを合わせれば完成だ。

炊飯器を見れば、もうそろそろ飯が炊きあがるようで、ちょうどいいタイミングでそれぞれ出来上がりそうな感じだった。完成まではあと20分といったところだろう、テレビもちょうど切りよく終わりそうだし、いい感じじゃないか。

俺は、コンロの火を中火から弱火に弱める。あとはゆっくりと、底が焦げ付いたりしないように面倒を見てやるだけだ。少なくとも出来上がり時間のことで晴子さんの機嫌を損ねるようなことがなさそ

うで、とりあえず一安心だった。

## 姉妹喧嘩と後始末とカレー

俺は、鍋をぐつぐつと煮込みながら、炊飯器のタイマーと掛け時計を交互に睨みつけていた。時間はおおよそ八時ちょうど、そろそろ晴子さんの見ているドラマも終わってしまうし、雪美さんの空腹度合いも限界を迎えるに違いない、いわゆる一つのタイムリミットだった。

「…、もうちょい、煮詰めたいな」

ついさっき入れたなすもなじんできたし、もう出来たといえれば出来ているのだ。しかしまだ少し水っぽい感じがするので、出来ればもう少し時間がほしい。

しかし非情にも時間は過ぎていくわけで、それから少しして晴子さんはエンディングテーマの途中だというのにリモコンを手にとってテレビの電源を落とす。雪美さんも、なにをしていたのか結局最後まで分からなかったのだが、手を止めて片付けを始めてしまった。

「ああ、まだ終わってないのに！」

「別にいいじゃない、エンディングなんて毎回律儀に見なくなたって時間の無駄よ」

「で、でもお、最後まで見なきゃダメなんだもん」

「何のこだわりよ、それ。よく分からない子ねえ」

「最後まで見て、始めてドラマ見たことになるんだもん！」

「次回予告もなくて、スタッフロールとスチルが流れるだけのエンディングなんて、二回もみれば十分よ。あたしは見る意味と価値を感じないんだけど？」

「か、価値は、分かんないけど…、意味はあるもん！ えと、エンディングの曲がね、やっぱり大事だと思うの！」

「曲？ そんなに聴きたいならレンタルショップでCDでも借りてくればいいじゃない。そうしたらフルで聴けるわよ」

「そ、そうじゃなくてえ……。今週の分を観て、それからエンディ



ングの曲を聴くのがいいの！　そういう風に毎週するのが一セットなの！」

「じゃあその一セットを止めればいいじゃない。ドラマのお話の部分だけでも十分じゃないの？」

「だから、にゅ……。エンディングの曲を聴くまでがドラマなの！　エンディングを聴いて、今日はこんなのだったなあって思い出すのがいいの！」

「そんなの、部屋に帰ってからCD聴けばいいじゃない。わざわざリビングで聴くよりもよっぽど集中して思い出せるでしょ？　もしお小遣い足りないなら、シングル一枚借りるくらいのお金出してあげるわよ」

「お小遣いとか、そういう話じゃないの！　余韻とか、そういうのが大事だって言ってるの！」

「余韻なんて別にいらないわよ。ドラマなんて、所詮消費されるだけの娯楽なんだから、それなりに受け取っておけばいいじゃない。そんな本気で向き合う必要ないでしょ？」

「でも、せっかく観るならいっぱい楽しい方がいいでしょ！　それに、ちゃんと観てないと、お友だちとおしゃべりできないんだもん！」

「そんな友だちいらないわよ。なんで一生けんめいがんばってドラマ観ておしゃべりしてまで、お友だちでいなきやいけないのよ。めんどくさいし疲れるじゃない」

「そういうのじゃないもん！　なんでおねえちゃんはすぐになんでも「めんどくさい」っていうの！」

「だって面倒じゃない。友だちなんてもんは気づいたらなんだか分からなけいどいっしょにいる人のことでしょ？　どうしてそんなのためにがんばらなきゃいけないのよ。ドラマをちゃんと観てないくらいで友だちじゃなくなるようなの、最初から友だちじゃなかったのよ、いなくなっても痛くもかゆくもないわ。だから、別に霧子はがんばらなくてもいいのよ。がんばらなくていいんだから、別に

ドラマのエンディングも観なくていいの」

「それとこれとは話が違うもん！」

「いいじゃない、もう。あたしは観ないでいいんだから、わざわざリビングで観なくて」

「もお、別にここで聴いたっていいでしょ！ おねえちゃんのいじわる！」

なぜか晴子さんと霧子が、よく分からない理由で揉めている。そんなのどうでもいいだろう、と。俺なんてそもそもドラマとか見ないぞ。

そんなことで揉めること自体が不毛で無駄なことだとは思わないんだろうか。というか、別にドラマのエンディングがテレビから流れてたとしても、晴子さんの邪魔になるわけじゃないだろうし、晴子さんが観ないでいればいいんじゃないのか？

霧子が珍しく声を強くしてじたばたするほど主張しているんだ、好きにさせてやればいいじゃないか、たかが一分や二分のことだろうに。

「あの、晴子さん、できましたよ」

しかし、晴子さんと霧子が揉めている時間もたかが知れているわけで、けっきょく俺は諦めて晴子さんに出来ました宣言をするのだった。

「ああ、出来たの？ どれどれ……」

「……ふにゅっ!？」

俺がそう言うと、晴子さんはソファから起き上がると、抱きしめていた巨大なぬいぐるみと手に握っていたリモコンをポイっ！とソファの方へ投げ捨ててキッチンにやってくるのだった。偶然、ソファを枕にして座っていた霧子のおでこにリモコンが直撃するが、それを顧みすらない。

かつーん！ と思ってもみないほどいい音がしたんだが、大丈夫なのだろうか。

「にゅ………!！」

うわ、ほんとに痛かったんだろう、悶絶している。しかし晴子さんは見向きもしない。音と声は聞こえているだろうに振り返りもしないとは…、まさに外道の振る舞いである。

雪美さんはお片付けに夢中で周りが見えていないし、広太はこういう場合は俺が指示しない限り助けに行ったりはせず、雪美さんの片づけを補助している。となると、晴子さんが行かないなら、もはや俺が行くしかないのである。

しかし少しでも長く鍋を火にかけていたい手前、火を消してしまうわけにもいかない。だが、火をつけたまま鍋を放っておけば、たとえ弱火だとしても底が焦げ付いてしまい、カレーがダメな感じになってしまう。

晴子さんをなんとか説得して霧子の様子を見に行ってもらうか、それとも雪美さんの片づけを遅れさせてもいいから広太を行かせるか、あるいは晴子さんに鍋を託して俺が行くかで一瞬だけ迷うが、晴子さんに鍋を託すのが一番効率よく思えたのでそれを選択することにしました。

「晴子さん、鍋見ててください!」

「はいはい、さっさと霧子を助けに行きなさい」

「もう! 自分がやったんですから、自分で助けてくださいよね!」

「別にいいじゃない、結局最終的には幸久が行くことになるんですよ?」

「もうっ…、人非人!! 霧子、大丈夫か?」

そして霧子は、本当に痛いようで、両手で額を押さえてゴロゴロと転がっていて、うあうあうとめき声をあげているのだった。こんな姿、俺以外の男に見せたらドン引きされちゃうぞ…、霧子…。

「だいじょぶか、霧子。おでこ痛いのか?」

でも俺はそんな霧子でも大丈夫だ、問題ない。というか、こんな程度ならば、今まで見てきたもっと凄まじいのと比べてしまえば大したことではないので、一切動じることはない。

急いでごろごろ転がっている霧子に駆け寄って抱き起こしてやり、

リモコンの直撃奇襲攻撃を受けた爆心地であるおでこを優しくさすってやる。無造作に放られたリモコンは思ったよりも大きく弧を描いていたので、位置エネルギーが運動エネルギーに変換されて衝突時にかかりのダメージを発生させたに違いない。

その証拠に、霧子はひんひん言いながら半分涙目になっていた。あともう少しでもダメージを加算させるだけで、容易に涙の堰を決壊させることができるだろう、やらないけど。

「にゅー…、おねえちゃんに、やられたよお」

「見てた、見てたぞ。晴子さんの手からリモコンが離れて霧子のおでこにぶつかるまでの一部始終は俺が見てたからな。お、よしよし…、痛かったなあ…、だいじよぶか？ おでこ、たんこぶできてないか？」

「痛いよお…、おでこ、痛い…」

痛くしてしまわないようにゆっくりと、やさしく霧子のすべすべのおでこに手を這わせる。食事がきっちり整っているからか、それとも女の子としてしっかり洗願等を行っているからか、そのおでこは吹き出物もなくきれいなもので、また同様にたんこぶもないようだった。

軽く赤くなっている気もするが、元が白いので少しはれているだけだろう。これくらいだったら痛いだけだし、問題はないに違いない。「おねえちゃん、わざとだよ…、絶対わざとだもん…。あたしがドラマのエンディング観たいって言ったから、気に入らなくてリモコンぶつけたんだもん…」

「そんなことないって、偶然だって。偶然そこに霧子がいてさ、そこにリモコンが飛んじやっただけだって。いくら晴子さんでも、そんな露骨な攻撃しないって」

「するもん…、おねえちゃんはするもん…、幸久君だって知ってるはずだもん…」

「まあ、知ってるは知ってるけど…、でも今回は偶然だったよ。あれをわざとやってるんだったら、悪魔だよ。晴子さんは、悪魔だよ」

「じゃあ、悪魔なんだもん…、おねえちゃんの…、悪魔!！」

「はいはい、悪魔よ。お姉ちゃんは悪魔よ」

「よしよし…、落ち着け、落ち着くんだ、霧子。俺が撫でたら痛い  
の飛んでくからな、ちよつと我慢してろよ?」

「にゅん…、幸久君はこんなに優しいのに…、おねえちゃんは全然  
優しくないよお…。」

「それはあれだよ、俺が天使だからだよ」

「幸久君は、あたしの天使様だよお…。」

「そうだぞ、助けに来てやったからな。もう怖くないし痛くないぞ  
」

「にゅ…、にゅ…、ふえ…ん…。痛かったよ」

痛むであろうおでこを撫でてやって、それから軽く抱きしめてやる  
と、晴子さんと言ひ合いをしていたときから張っていた緊張が切れ  
てしまったのか、ぽろぽろと涙を流し始めてしまった。

基本的に霧子は平和主義者で、そもそもからして口論なんてする性  
質じゃないのだ。たまに晴子さんと口げんかにもならないような言  
ひ合いをただでこれなのだ、その弱々しさを理解していただい  
けるだろうか。

そして俺は霧子に泣かれるのに弱い。非常に弱い。昔から泣き虫の  
霧子を守ってきた記憶が、泣いている霧子という状態を拒絶するの  
だ。

「ああ…、泣くなつてば…。あの、晴子さん! 出来ればいい  
んですけど、霧子に謝っていただけないでしょうか!？」

だがこんなときでも、俺は晴子さんにだけは強気に出ることができ  
ない。だって師匠と弟子の間柄だから。霧子の耳元でこっそりと話  
すだけだったら、少しくらい晴子さんを悪く言うのも必要悪だと思  
うが、しかしおおっぴらに晴子さんに対して何かを言うときは上か  
らものを言っではいけないのだ。

そんなことを、霧子を落ち着かせるときに必要悪として行使する以  
外にしてしまったら、いつの間にか埋め込まれてしまった、師匠へ

の愛という名の小型爆弾が爆発して、不整脈とか起こしてしまうかもしれないじゃないか。晴子さんの調教は、もはやそのレベルまで至っているんだぞ。

いや、勘違いしないでほしいのだが俺だって、別に誰に対してもこんなに迎合的というわけではない。昔は今よりもずっとたくさん、霧子に意地悪をしたりからかったりして泣かすやつがいたわけで、そういう奴らがいるたびに広太を連れて片っ端から報復して回ったこともあったのだ。一時期は学校の番長的存在として君臨していたことだってある。

強かったんだぞ、俺と広太は。誰と喧嘩しても負けない最強の二人だったんだ。そして、俺たちの強さが校内に広まるにつれて、俺と一番の友だちである霧子にちょっかいを出そうとするやつもいなくなったのだった。

しかし、いくら霧子が泣かされたからといって、あれはやりすぎだったと思う。まあ、あのころは俺も子どもだったということなのだろう。

そういえば一回だけ、理由はきっと霧子がらみなんだろうが、六年生十人を一度に相手にしたことがあったが、そのときはさすがに俺もヤバかった。だが、なぜか分からないが、囲まれてボコられかかったところから意識がすっぱりとなく、気づいたら相手が全員意識を失って倒れていた。あれは、今でもどういふことなのかよく分かっていない。

もしあのとき、俺の中に眠った真の力が……！ とかいつて調子に乗って市内制覇に乗り出したりしたら、志穂とか姐さんとかと出会って逆にボコられることになったのだろうか？ なっていたかもしれないなあ。

なぜそうしなかったかといえば、霧子がもう喧嘩しちゃダメ、と言ったからなのだ。そもそものは霧子のためにしていた喧嘩だ、霧子にするなというのならば、するわけにはいかないだろう。それと広太に、そろそろ止めておくのがいい、と言われたのも大きい。

そのあと、俺が金輪際喧嘩をしないと決めたことは学校中に広まったが、しかし仕返しに来るやつは一人もいなかった。つまりは、それほどもでに圧倒的な強さだったということだ。

「なんであたしが謝らないといけないのよ。事故じゃない、いやよ」「事故を起こしたときはですね、原因になった人が誠心誠意謝って、それから妥協し合って示談とかするんですよ！ 謝ることは重要なことなんです！」

「じゃああたしの代わりに幸久が謝りなさいよ」

「はい！ じゃあ、そういうことで！」

それから俺は、抱き起こした霧子をソファーに座らせてやり、痛みが飛んでいくようにと念を込めつつおでこを撫でてやりながら、晴子さんの代わりに誠心誠意を込めて謝るのだった。

「霧子、ごめんな。今のは事故だったんだ。許してくれ。わざとじゃない」

「ん、だいじょぶだよ……。もう、泣かないよ……」

「今度からは、気をつけてもらうように、言っとくから」

「ありがと、幸久君……」

ポケットからハンカチを取り出して、霧子の涙をぬぐってやる。少し泣いて落ち着いたのか、涙はもう止まっているようで、何とかふにやっと笑ってくれた。

よかった、やっぱり霧子は笑っている方がいい。

「幸久、ご飯にするんだから、早くしなさいよ」

「あつ、はい、すぐに。じゃあ霧子、すぐ美味しいもん食わせてやるからな、待ってろよ」

「うん！」

「よし、いい返事だ」

霧子の髪を、くしゃっと撫でてやって、俺は急いでキッチンに向かう。さすがに自分が悪かったということは分かっているようで、晴子さんはきちんと鍋をかきまぜていてくれた。おかげでいい感じに煮詰まっている。

よかった、これであとはよそうだけでいい。ひき肉となすのカレー、無事に完成である。



## おつかれオムカレー

「まあ、カレーだし、見た目はこんなもんよね。味も、こんなものでしょ。うん、あとはきれいに盛りなさいよ、幸久」

自分が泣かせた霧子を放っておいて、晴子さんは俺のカレーの見分をしていた。確かにそれは俺がするべき作業ではないかもしれないが、だからといって泣いている霧子を放置していいということではあるまい。

あるいはあの一瞬で、自分が見分を、広太が雪美さんの手助けを、俺が霧子を助けに行く、ともっとも効率的な役割分担を導き出したのなら、それはなかなかすごい状況判断力だと思う。しかし、いささか人間味に欠けるのではないだろうか、とも思う。

だってそこに泣いている霧子がいるのに、それを見捨ててキッチンに来るんだぞ？ そんなことが、どうして出来るというんだろうか。それとも晴子さんは、その魂を合理性という悪魔に乗っ取られてしまったのだろうか。

「晴子さん、怠惰は悪徳ですよ」

「はっ？ 何の話よ、急に」

「いえ、別に何でもありません。晴子さんの分は、俺がよそうんですか？」

「当然じゃない。食べていただくうえに評価していただくのよ？ それくらいするのが当然っていうものじゃない。っていうか、師匠に尽くしなさいよ」

「はい、了解です。量は、いつもと同じくらいいいですよ？ それとも少し少なくなった方がいいですか？」

「気にしないでいいわ、いつもと同じよ」

「分かりました」

「じゃ、あたしはあっち行ってるから、出来たら持ってきてなさいよ」  
「はい、了解です」

それから俺は、食器棚の中から雪美さん用の大皿と、普通のカレー皿を四枚取り出した。

「まあ、普通に盛るか。わざわざ洗い物を増やすこともないな」

ちょうど炊けたところの炊飯器を開くと、中からはもわっと柔らかかな香りが立ち上る。この、炊きたてのコメの匂いをかぐと、自分が日本人なんだなと強く感じさせられる。きっと日本人でなくては、この香りに安らぎを覚えたりはしないだろうからな。

俺が、自分が日本人でよかった、と思う瞬間は、今みたいに炊きたてのコメの香りをかいだときと、朝飯でご飯

、味噌汁、漬物の組み合わせを目の前に並べたときと、畳に寝転がって日向ぼっこをするときだ。こういうのは、きっと日本人でないと分からないことだと思うから。

「晴子さんのほゝ、これくらいだな。形整えて、と」

プラスチックのしゃもじを引き出しの中から取り出して、軽く水をつけてから数度お釜の中をかきまぜる。このときコメの粒を潰してしまうといけないので、力加減と回数には気をつけないといけない。まあ、カレーのときは少し水を少なめにして炊くのが俺の好みだし、霧子にもそうするように言っておいたので、今日のコメは硬めで余り潰れないのでかなり混ぜやすいのだが。

「で、ルー多め、と」

皿の中央に小山にして盛ったご飯の周りに、ご飯が海の中の島のようになるよう丁寧なルーを流しこんでいく。このときお玉がご飯にかすったりして不必要にルーが付着したりすると、汚らしいわ！とかいってはっ倒されるので、そこには最大限注意を払わなくてはならない。

晴子さんにとって、料理の見た目というのはその味と同様に重要なポイントである。しかしそれは、決して派手に飾り立てればいい、というものではない。丁寧に丁寧に、食べる人の食欲が増すようにきれいに盛りつけることがそこでは求められる、と俺は昔からきつく言いつけられてきているのだ。

「乾燥パセリでも散らすか」

よし、これでいい。まずはこれを晴子さんの前に持って行ってしまおう。他の人は、勝手に自分でよそってもらうのがいいだろう。

というか店屋じゃないんだから、そもそも自分の分を自分でよそうのは当然で、そこまでをつくり手に要求するのは酷というものではないだろうか。それくらいはセルフサービスでお願いしたいところだ。

「広太、運んでくれ」

しかし、そう簡単に事は運ばないのが現実である。晴子さんは俺がいるときは絶対に自分でよそわないから諦めるしかなく、雪美さんはよそっていいとなるといつまでもどこまでも、それこそ鍋が空になるまでよそってしまうので自由にさせてあげることはできない。そして霧子はいえ、太っているわけでもないのにダイエットのつもりなのか、ぜんぜん盛らないのでこれもまたじゆうにさせてやることはできない。お腹いっぱいになっちゃうからなんていうが、そんなのはきつと嘘なのだ。

いっぱい食べないと大きく強くなれないというのに、そのあたりのことを霧子は分かっていないのだ。食事制限ダイエット、ダメ、絶対！

広太に晴子さんの分のカレーを託して、俺はさらに盛りつけ作業を進めていく。雪美さんの分は、とりあえずご飯をたくさん盛ってあげて、そこにルーを少なめにかけてあげるのがいらしい。ルーを多めにさらさらと食べたい晴子さんとは逆に、ご飯を食べてる感じがほしいんだと思う。

霧子は、いつもならば普通に盛ってやればいい。別に晴子さんや雪美さんのように要望もないわけだし、普通の量を普通に盛りつければいいのだ。

「いや、霧子の分は特別仕様にしてやろう、うん」

しかし、今日は霧子もいろいろがんばってたし、さっきはかわいそうに、運悪く痛い目を見て泣いていた。今日くらいは、特別な盛り

つけをしてやっていつもより甘やかしても罰は当たるまい。

「ご飯は、これくらい…、いや、もうちょっとか」

ご飯は丁寧な、皿の中央にだ円形のオムライスと同じ形にふわっと軽めに盛ってやる。

「広太、自分のは自分でよそってくれ」

ボールを出して卵を一つ割り、砂糖と牛乳をいれてから箸で空気を入れるように混ぜてやる。なすを炒めたフライパンをもう一度火にかけて、キッチンペーパーで一通り拭いてやってからもう一度バターを落とす。

バターを溶かしたところに卵を一気に注ぎ、フライパンをゆすつて端に寄せつつ形を整えてやり、キレイに成形されたところで柄を叩いて遠心力とかいろいろ使ってくるりと丸めてやる。火があまり通らないうちに丸めてしまうことで、周りからの余熱が入っても半熟の状態を保つことができるのだ。これでオムレツが完成。

そのオムレツを皿に盛ったご飯の上にゆっくりと乗せる。オムレツ自体がまだ柔らかいので、ご飯の形状に合わせて軽く変形してくれるから乗せやすいといえば乗せやすいかもしれない。

それから俺は包丁を手にとった。この包丁は、晴子さんが定期的に砥いでいるのでキレ味は抜群であり、刃こぼれ一つしていないすぐれものだ。その鋭い刃を、オムレツに軽く当てる。精神を集中し、薄皮一枚だけを斬るような絶妙な力を込めて、俺はそれを一息で振りぬいた。

ヒュン……！ とかすかな音がキッチンに残響する。

包丁が振りぬかれるのに一瞬遅れて、ご飯の上のオムレツにピツ、と一筋切れ目が走り、中からはどろっと半熟の卵がかすかに流れ出す。あとはその切れ目に包丁を当ててやり、オムレツ本体が自壊しないように開いてやればいい。これでオムライス状のものが完成。

あとはこの両脇にカレーを流してやれば、正式に何というのかは知らないが、オムカレーの出来上がりだ。サービスでなすを多めに入れてやり、晴子さんのものと同じようにパセリを振れば、黄色と緑

のコントラストがよく映える。我ながら、これは美しすぎると思う。  
「っし、完璧」

オムライスもカレーも霧子の好物だし、これならばきっと霧子もすごく喜んでくれるだろうし、いっぱい元気も出してくれることだろう。

「お見事です、幸久様」

「そうだろう、これはいいものだ」

「とても美味しそうですし、見栄えも素晴らしい。レストランで出されても、誰が文句など言いましょうか」

「別にレストランでは出さなくていいんだけどな。俺は、俺の食ってほしい人に食ってもらえればそれで満足だし。つつうか、急がねえと晴子さんがマズい」

「はい、幸久様の分は、僭越ながら私が盛りつけさせていただきますました」

「おお、さんきゅ。相変わらず盛りつけだけは得意だな、広太」

「お褒めに預かり、光栄です」

「それ二つ運んでくれ。俺はこれを霧子に運ぶからな」

「了解いたしました」

俺としては手早くやったつもりだったが、しかし晴子さんは俺のことを待っていてはくれなかった。俺が霧子のカレーを片手に持ってリビングに出たときにはもうスプーンを片手にティスティングの真っ最中だった。

「今日のカレーはね、シンプルでいいし時間がなかったのも知ってるけど、でもやっぱりもうちょっと工夫すべきよね。たとえばこの中にどんな具材だったら合わせられるかとか、カレールーといっしょにどんなものを入れたら味に深みが出るかとか、いろいろね」

「はい」

「ちゃんとあたしのために頭を絞りなさいね。師匠はいつまでもあなたの師匠なんだから、そこんとちゃんと意識しときなさい」

「はい、がんばります」

「まあ？ このなすは美味しいんじゃない？ ちょっとだけだけだね」

「あ、ありがとうございます！」

「っていうかさ、なんなの、その手に持ってるのは」

「えっ？ ああ、霧子の分です」

「何よ、なかなか出てこないと思ったらそういう小細工してたの？ 姑息ね」

「な、何の話でしょうか……？」

別に俺は何も姑息なこととはしていないのだが、晴子さんにそう断言されてしまうと、なんとなく自分が姑息なことをしてしまったのではないか、という疑心暗鬼に駆られてしまう。だ、大丈夫、別に姑息なことなんてしてないぞ、俺。

「俺はただ、今日は霧子がいろいろがんばってたから、労いの気持ちですね」

「そういうのが姑息だって言ってるのよ。ポイント稼ぎじゃない。」

霧子からポイント稼いでどうするのよ」

「いえ、別にどうもしませんけど……」

「ふーん、そ。別にどうでもいいけど」

「そ、そうですか……。ほら、霧子、お前の分な」

「にゅ？ ふわ、すごおい…、なにこれえ……」

「美味しそうだろ？」

「うん…、これ、食べていいの……？」

「いいに決まってんじゃない。美味しいもん食わせてやるって言っただろ」

「あ、ありがと、幸久君……」

「いや、ほんととはな、卵の上に名前書いてやろうと思ったんだけどさ、ケチャップでやるのは味が合わなそうだし、カレーでやるのもどうかと思ってやらなかったんだ。だからこれ、まだ未完成なんだよ」

「これで十分だよ、幸久君。こんなかわいいのつくってくれたんだ

から、ありがとう」

「そうか、それならよかったよ。いっぱい食べて、いっぱい元気出せよ」

「うん！ でもこれ、なんか食べちゃうのもったいないかも……」

「おいおい、そんなこと言わないでちゃんと食ってくれよ。せっかく食べるためにつくったんだからさ」

「じゃ、じゃあ、写真撮る。写真だったら、撮ってもいいよね？」

「別にいいけど、写真撮るほど大層なものか？」

「うん、だって、すごくうれしいもん。幸久君、やさしくって、うれしいの」

「そうか？」

こんなに喜んでくれるんなら、こちらとしてもつくった甲斐があるというものだ。これっぽちの手間でこんなに目をキラキラさせてくれるんだから、霧子はすごく純粋なんだよな。

そして霧子はケイタイを取りに自分の部屋まで走っていくのだった。もしかして明日誰かに言いふらしたりするつもりなんだろうか。だとしたら少し止めてほしい木もするが、まあ、霧子が喜んでくれている証拠だと思えばそれはそれでいいかもしれないが。

「霧子ちゃんのかわいいわ、ねえねえ、幸久くん、お母さんにもそれやってえ？」

「俺は別にいいですけど、晴子さん、いいですか？」

「ダメ。母さんの量であれをやるうとしたら卵二個必要になっちゃうじゃない。そんなことおかわりのたびにやられたら冷蔵庫の中の卵がすぐになくなっちゃうわよ」

「え、晴子ちゃんってバイジワル？」

「カレーだけでも十分いけるわよ。別に卵なんていらないわ」

「そうかしら？ お母さんはかわいいと思ったんだけど……」

「母さんは、目の前にあるのをちゃん食べてちょうだい。まあ、残すとは思ってないけど」

「は、いい。おかわりしてもいいかしら？」

「ダメって言ってもどうせするんでしょ。別にそんなこと訊かなくていいわよ」

晴子さんは、ため息とともにそう言って、それからまたカレーを一口分掬ってスプーンを口に含んだ。もうこれでこのカレーに対する評価は終わったようで、それ以上細かい言葉が晴子さんの口から出ることはなかった。

まあ、今回はけっこう褒めてもらえたし、これで十分といえは十分なのだが。っていうかあれだよ、晴子さんに正面から美味しいって言ってもらったのなんて、かなり久しぶりだよ。

おお、やっぱりうれしいぞ。晴子さんに褒められるのは、俺の中ではやっぱりうれしいことの中に入れられるみたいだ。俺、やっぱ晴子さんのこと好きなんだなあ……。



## 新緑萌え出づる季節に

時は過ぎ、桜舞う季節は終わりをづけ、新緑萌え出づる季節が訪れた。俺は、さすがに二週間もあれば周りが女子しかないという、傍から見れば最高な状況にも適応し始め、それなりにクラスの中のポジションみたいなものを見出すことが出来ているような気がしていた。

そもそもからして、「周りが女子ばかり」というのと「周りに女子しかない」というのとは、ほんのわずかな言葉の違いでしかないが、実質的に見て、その言葉の差異以上の困難と隔たりがそこにはある。

まず、当然のことだが、「周りに女子しかない」というのは、周りに男子がいないということと同義である。極端に言ってしまうと、現状で見たところ、俺の周りに広太以外一人も男という存在がいないのだ。部活、委員会、課外活動、バイト等々、そういったものに一切所属していない俺にとって、他者との触れ合いの場は学校のクラスしかなく、そこに女子しかないのだから、ある種それも当然なのかもしれないが。

そして周りに女子しかないということは、クラス内における一般的な生活様式が女子のそれに限りなく近づいていくということをも意味する。しよせん男子はクラスに一人という少数派でしかないわけで、その俺が男として激しく我を主張するということは、マジョリテイに対する反抗と似た意味を持つてくる。それは、冷静に考えて、あまり得策ではないのである、それくらいは簡単に分かることだ。

つまり、可能な限り女子の文化というものに適応していきながら、なおかつ男としてしっかり一線を引いて生活するという、どこことなく綱渡りのようにも思える仕方ですべて生きていくことを言外に要求されているのだ、と、あるとき俺は気づいたのだ。そしてそれを、今ま

で俺はそれなりに上手くこなせてきているように思うし、なんとなくこれからも問題なくこなしていけるような、そんな気がしていた。俺に要求されているのは、結局のところ女の子たちが「いっしょにいたくないなあ」と思わないような立ち居振る舞いをするということとで、女の子一般から好印象をもたれるような生活を送るということなのだ。というか、俺の今までの一生涯を考えてみたら、その多くの時期を霧子とともに過ごしているわけであり、また、周りにいた友人も、どちらかといえば女の子の方が多かったかもしれない。故に、俺はいつものような生活を送りながらも、常に女の子の目というものを気にして生きてきたのかもしれない、ということだ。だから、いつものように生きていればいい、のかもしれないが、その「いつものように生きる」ということを明確に意識しなくてはならないとなると、これがまた難しいのである。

「俺はどうしたらいいんだろうな、霧子」

「にゅ？」

「俺、クラスに馴染んでると思うか？」

「幸久君、みんなと仲良くしてると思うし、馴染んでるってどういうことかよく分かんないけど、いいんじゃないのかなあ？」

「そうか、それならいいか」

いつもしていることというのは、結局は習慣化していることなわけなのだ。それっていうのは、つまり呼吸ってどうやってするのか教えてください、といわれるのに近いように思えてならない。だからこそ、自分がそれを、いつもと同じようにすることができているのかが分からなくなってしまいうのだ。

ふと、自分の心臓がいつもと同じように動いているのか、ということが気になってしまったというか、まあ、分かりにくいがそんな感じだろう。

「ちよっと訊きたくなっただけだから、気にしないでいいぞ」

「にゅ？」

気になってしまったからこそこうして、てくてくと、季節特有の温

かい柔らかな風に背中を押される登校中に、霧子にそんなことを訊ねてしまったのだ。深い意図があるかと問われれば、そんなものは当然ないのだが。

「みんなやさしいし、かわいいし、いいクラスだよな、うちのクラスは」

「そうだね、みんなやさしいし、かわいいよ」

「霧子もかわいいぞ？」

「にゅ、そんなことないよ、あたし、おっきいから」

「背がでかくても、かわいいと思うけどなあ」

「ちっちゃい方がかわいいよ。おっきいのはあんまりかわいくないから」

「自分に対して否定的だな、いつものことながら。俺がかわいいって言ってるんだから、かわいいでいいじゃないかよ」

「しいちゃんとかメイちゃんの方がかわいいもん。あたしなんて、大したことないもん」

「なぜそこまで自分を否定するんだろうね、この娘は」

変なところを経由したが、結局は最終的にここに行きついてしまう。しかしまあ、これはやはりいつもの流れなのである。

昔は、確かそんなに自分に対して否定的じゃなかったはずなんだが、ふむ、どこでどうなっそうなっってしまったのだろう。俺はしばしばこんな感じで、霧子はかわいいんだぞ、と言いついて聞かせているというのに、いったい何がいけなかったのだろうか。

もつと強い自己肯定感を持たせてやるために、言葉だけじゃなくて「具体的にどこらへんがどうかわいいか」、みたいなもので押していった方がいいのかもしれない。それとも、身内票だから、みたいな考えで俺の言葉の信憑性を疑っているのだろうか。

「霧子はかわいいんだから、気をつけないといけないんだぞ？　かわいい女の子は、すべからく男に狙われてるんだから、ちゃんと意識を持ってないとダメだ」

「狙われてなんかないもん。身長170センチよりも高い女の子は、

そういうのはないんだもん」

「ダメだぞ、変なのに引かかったら。男っていうのは危ない存在なんだから、気を許しちゃいけない。もし霧子が何の気なしにしたことで、相手が勘違いしちゃったらどうするんだ」

「ど、どうなるの……?」

俺の深刻そうな物言いに、自分では己の可愛さを否定しつつも、その表情に心配そうな色をにじませる霧子。ようやく俺の話を真剣に聞く気になったらしい。

「それは、あれだよ。こんなにかわいい女の子が自分のことが好きなんて、って思うだろ。そうになったらあれだ、危ない目に合うかもしれないじゃないか」

「危ない目って…、なあに……?」

「危ない目っていうのは、危ない目だよ。口では言えないことだよ」「えっちなこと…、とか……?」

「かもしれないなあ。俺はな、霧子にそんなことになってほしくないから言ってるんだよ。自分は他人よりもかわいいんだ、ってことを分かってれば、そういうことにならないように注意できるだろ?」

「にゅ…、でも…、あたしは、別にかわいくないもん」

「話が一周しちゃったじゃん。どうしてそこに戻っちゃうのかなあ……」

どうも、今日もうまく話をいい方向に導くことができなかったらしい。霧子の中で「でかいこと」Ⅱ「かわいくない」が定式化されて前提条件になっているのが最大の難関なのかもしれない。

いったいそこを崩すにはどうすればいいのか、今の俺にはそれが分からなかった。霧子に変な男を勘違いさせてしまいイヤな目に合うのではないか、と憂慮しているのは本当なわけで、なんとか自分を正しく認識してほしいのだが、なかなかうまくいかないものである。

「霧子は、どうしてそんなに自分がかわいいことを認めたくないんだ。別にナルシストになってほしいってわけじゃないけどさ、自分

は人並み以上にはかわいくて、相手を惑わすこともあるってことは、

分かってくれ」

こんなこと、本当は俺だって心の内に秘めておきたいわけで、口に出して言いたくはない。でも、やっぱりお兄ちゃん心配なのだ。霧子に変な男にだまされて、いつの間にか変なことになってしまったら、と思うと、まだ見ぬそんな変な男への殺意と害意で心が満たされていくのを明確に感じる。

「なんでそんなにでかいのがダメなんだよ。背がでっかくてもいいだろう。かわいいんだよ、霧子は」

「だって…、にゅ…、だ、ダメなんだから、ダメなんだもん！」

「どうしてダメなのか、言ってみなさいな。ほら、俺は並大抵の奇抜な理由では動揺すらしないから、勇気を出して正直に言いなさい」

「な、ないしょだもん……」

「…、ないしょなら、仕方ないな、うん」

ああ、今日もけっきょく最後の最後で「ないしょ」のカードを使われてしまった。これを使われると、俺はそれ以上追及していくことができなくなってしまふ。それは霧子も知っているから、いつのころからか言いたくないことを訊かれたら「ないしょ」というようになってしまったのだ。

しかし霧子も、俺がそうすれば追求を止めることが分かっているからこそ、本当に言いたくないこと以外には「ないしょ」は使わないのであり、それは俺と霧子の間の無言の取り決めでもある。

故に、俺はそれを言われたときは追求を止めなくてはならないのであり、霧子は本当に訊かれたくないこと以外についてそれは使わないのだ。

「桜、もう散っちゃったね」

「そうだな、季節の移り変わりは早いからな。特に桜はパツと咲いてパツと散るから、なおさらだ」

今日のところは霧子に事実を認めさせるのを諦めて、俺は話を別のところへとスライドさせる。しかし俺は諦めない。いつの日か霧子に、自分は背がでかくてもかわいいんだ、ということを確認させ、

一生涯変な男にだまされないように気をつけます、と誓わせてやるのだ。

「四月も、いつの間にか終わりだからな、びっくりする早さだ」

「四月が終わったら、五月だね。お花見したのも、もう一週間も前なんだよ」

「ああ、ほんとだ。いつの間に、って感じだな」

あの花見からもう一週間も経ったなんて、にわかには信じがたいことだ。しかし、今日も家庭科の授業があるので、それは間違いのない事実だった。

あんなことがあったというのに、時間はいつもと変わらず進むのだ。なんというか、世界というのは俺たちの都合で動いているわけじゃないんだ、ということを確認した気分だった。

まあ、そもそも世界が俺の都合で動いているなら、俺にとって都合の悪い状況が生じるわけがないのであり、すべて事もなくつつがなく進んでいくはずなのだ。それはそれで、もしかしたら味気ない人生なのかもしれないなあ、と俺はふと思った。

そうだ、もしそうだったら俺はもっと普通の家に生まれていただろうし、普通に育って、普通に友だちをつくって、普通に生きて、普通に死んでいくんだ。それでは、確かにつまらない。少し面倒でもいいから、今みたいに時折どうしようもない状況に晒されながら生きていくのも、楽しいかもしれないな。

しかし、それもあまり多すぎると食傷になってしまうので、もっとそういうことに襲われる頻度を落としてくれるといいんだが、まあ、それすらも俺の都合どおりにはならないのだ。

そう、それが世界であり、あるいは生きるということなのかもしれない。

「五月はゴールデンウィークがあるから、楽しみだね。去年も旅行、楽しかったなあ」

「そうか、ゴールデンウィークか。忘れてたな」

「今年も、去年みたいにどこかに遊びに行ったりするの？ それと

も今年はやめとく？」

「別に止めておく必要はないけど、そうだな、とりあえずみんなに聞いてみないと分からないな。俺たちだけで決めても、どうにもならないだろ？」

「にゅう、そうだね。学校行ったら訊いてみるの？」

「ああ、何かするならそろそろ動かないと間に合わなくなる頃だからな。とりあえず訊くだけ訊いてみよう」

「にゅん、あたしは、どこかに旅行行きたいなあ。あんまりおねえちゃんは旅行とか好きじゃないみたいだから、うちでは行かないもん」

「ああ、晴子さんは家が好きだからな。休みは家でごろごろするのが晴子さんの主義だから仕方ないって」

「あたしは、たまにはお出かけしたいなあ。お家も、好きなんだけど」

「晴子さんはぬいぐるみがないと眠れないんだから、仕方ないだろ。旅行だからって持っていくわけにもいかないだろうしさ」

「おかあさんはね、おねえちゃんを一人残していくのはダメっていうから、うちは旅行には行けないの」

「∴、よし、今年も旅行行こう。霧子、俺がどこでも連れてってやるからな。旅行なら、俺がいくらでも付き合ってやる」

「ほんと？　でも、みんなが行くか分からないし……」

「それは、俺が絶対説得するから。もしダメでも、俺が付き合う。一人で行かせはしないからな、霧子」

「ふ、二人でも、いいの……？」

「ああ、いざというときは、それも辞さないぞ。まあでも、なんとか説得するんだけどな。霧子も協力してくれよ？」

「う、うん、あたしも、がんばる」

てくてくと歩きながら、俺たちは一週間と少し後に迫っているゴールデンウィークへと思いをはせるのだった。去年もなかなか楽しく過ごすことができたし、今年もまた同じように出来ればいいなあ、

と俺はそのときばくぜんと思っていた。

しかし、まさか楽しいゴールデンウィークにあんなことが起こるなんて、そのときの俺には知る由などなかったのである。



## 去年の休みのエトセトラ

「というわけで、ゴールデンウィークなんだよ」

朝のホームルームが終わり、一限が始まるまでの約十分間の休み時間。俺はじきに始まる数学の授業のための準備を放りだして窓側の席までやってきていた。

窓側の方には姐さん、志穂、霧子の三人の席があるので、みんなに話をするときはこちらに来る方が楽だったりする。

「そうだな、ゴールデンウィークだな」

「ゴールデンウィークだね。ながいお休みは、たのしみだなあ」  
もう宿題は終わっているし、特に黒板に書いておくように指名されているなんてこともないので、あえて準備というほどのことはなにもないのだが、それでもこの時間を狙ってここぞとばかりに出歩くのはあまりよろしくないことのようにも思う。しかしそれでも、姐さんたちには出来るだけ早く話は通しておきたいし、だからといって業務連絡的にメールで済ませるのもどうか、というものだ。

友人関係を築いていく上で重要なのはコミュニケーションであり、それは面と向かって行なわれることが好ましい。携帯電話のメールというツールが広く用いられているというのは、その利便性を表しているかもしれないが、しかしそれが対面して行なう会話よりも優れているかといえ、俺の中では否である。

やはり目と目を見あって話をしなければ、本当の意味で理解し合うことはできないのである。だからこそこうして時間を縫ってお話をしに来ているのである。

お行儀よく授業の準備をしながら廊下側にある自分の席に座っているメイ、俺の隣の席なのだが、にはまたあとであらためて話をしてみることにしよう。隣の席なのだから、わざわざ席を離れなくてもお話しできるわけだしな。

「姐さんは、風紀で何かあったりするのか？」

「そうだな…、最後の二日を使って校内での実践的な訓練が予定されているが、それ以外は特に用事はないと思うぞ」

「家は？ ご両親とどこか出掛けたりしないのか？」

「うちの両親は共に忙しくしているからな、いっしょに何かを、というのは無理だろう。どちらかと外食をするくらいなら出来るかもしれないが、日をまたいで遊びに出たりすることはできないんだ」

「そっか。志穂はどうだ？ どこかに出かけたりするのか？」

「うちはねー、えっと、ことしはパパさんがいそがしくなっちゃってお休みがとれなかったんだって。だからししょーとしゅぎょーするの」

「修行？ 山にでもこもるのか？」

「どーじょーにおとまり会して、ずっととっくんするんだって。たのしみだよー」

「それってゴールデンウィーク入ってからずっとか？」

「んーん、りこたんと同じで、さいごのふつかだって」

「特訓、二日だけでいいのか？」

「うん、ししょーがね、お休みのはじめのほうはおしごとがいそがしいんだっていった」

「道場主の仕事って、道場の運営じゃないのか？ まあ、別にいいんだけどさ」

「ししょーはバトルで金かせいでるんだって」

「バトルってなんだよ。もしかしてK-1とかそういうのか？ もしかしてそういうテレビとかに出てたりする人だったりするのか？」

「でてないとおもうよー。たぶんだけど」

「そうか…、まあ、それはいいんだけどさ」

どうも、二人とも休み中の予定がぎっしり入っている感じではないようだ。それならば、ゴールデンウィークに旅行に行かないか、と提案しても迷惑に思われることはないかもしれないな。

「それで、ゴールデンウィークがどうかしたのか、三木。何の意味もなくそんなことを言いはしないだろう、お前は」

「いや、そんなことないって。俺はどうでもいいことを意味もなく言ったりするって」

「そうか？ 私は、お前が急に何か話を始めるときは、基本的に何か本題があつて、それを切り出すための前振りとしてするんだろう。いつもだいたいそうだから、今回もそうではないのかと思ったのだが、もしかして今回は違うのか？」

「…、いや、まあ…、違うないんだけどさ…」

「いつも思うのだがな、お前のその持って回った話し方、どうにかならないのか？ その話し方がいけないとは決して思わないが、私とお前の仲なんだ、もっと率直に言いたいことを言ったらいいと思うぞ」

「別にそんなつもりはないんだけどなあ……。だって、話をするときって普通そうじゃないか？ 要件だけを言うっていうのはなんか急すぎる感じがするし、もし相手にとって応えにくい話だったら困らせちゃうことになるだろう」

「いや、だから、そんなことは気にしないでいいと言っているんだ。そうやって気を回されることの方が、私としては心外だぞ。それではまるで腹を探られているようではないか」

「そ、そうか……」

「今だってそうだ。私たちのゴールデンウィークの予定を訊くということは、その予定が空いているかどうかを訊きたいということなのだろう？ それならば、もう率直に『ゴールデンウィークの予定は空いているか』と訊けばいいではないか。別にそこでクツションを一つ挟む必要もあるまい」

「まあ、そういう考え方もある、よな」

「別に私は、そうやってまっすぐ来られて迷惑だとも思わないし、困ることもない。変な気を使ったり、余計な気を回したり、そんなことはしないでいいから私にはまっすぐ来い」

姐さんは、不満を述べるといふよりも注意をするように、俺にそう言った。姐さんの言うことは、確かに間違っていないように思うが、

しかしそうやって話するのは意外と難しいことのような気がする。だってそうじゃないか？ 確かに姐さんのいう通り、前振りなしの直球で用件を伝えることができる仲というのは、それはそれでいいかもしれないが、正直に言ってるそんなこと俺にはできそうもない。もちろん、姐さんと親しい仲だ、ということのを否定したくはないし、人と親しくすることなんて無理だ、とすべてを否定するつもりもない。ただ、いつでもそんな風に強くまっすぐでいることは、俺にはできそうもない、というだけなのだ。

無意識で話に前振りをしてしまうのは、結局のところまっすぐ行くのを避けるための回り道なのであり、ある意味で俺自身の弱さということもできる、かもしれない。もちろん、周り道などせずに直球で行ってしまうえば楽なのは間違いない、俺のしていることは無駄なことに違いはない。

「でもさ、やっぱりなあ……」

可能性として、お願いをすれば断られることは十分にありうることだ。それは「お願い」という行為に対して当然ついてくるリスクなのだから、あって当たり前のものだろう。

俺のしゃべり方は、それをなるだけ排除するためのものである。したいお願いや訊きたい事について、あらかじめ別の角度の質問を使って確かめておいて、それをしてもし断られにくそうならばそれをし断られてしまいそうならばそれをしない、ということ、つまりは予防線を張っているということもできるだろう。

また、「お願い」というのはただの質問とは違う性質を持っている、と俺は思う。質問ならば、それは単に相手に尋ね、相手はそれに応えるというだけのものだが、「お願い」になってしまうと、それは相手に何かを頼むのであって、自分のために手間を取ってもらってもいいかと訊くことに他ならない。

そしてもしそれを断るということになれば、たとえ頼まれたことがほんの些細なことであっても、少なからず断ったことへの負い目のようなものが相手に残ってしまうのではないだろうか。もしそれが

どうしようもないこと、たとえば外せない予定があるとか、調子が悪くて寝ていなくてはいけないとか、であっても、気になってしまっているのか、と思うのだ。

そうして気にならせてしまうのが、俺はイヤなのだ。だからこそ、相手に断らせるといふことを出来るだけやらせないで済ませるために、予防線を張っているわけだ。きっと姐さんは、そんなに気を遣いすぎるな、と言いたいのだろうけど、人に対して過度に気を遣ってしまうのは俺の病気であり、直すことのできない性質なのである。

「まあ、クセだよクセ。そんなに気にしないでくれよ」

観る人によっては、それを臆病だと捉える人もいるかもしれない。あるいは小賢しい立ち回りだと見なす人もいるとは思う。

しかしそうやって、出来るだけ相手にイヤな思いをさせないように、上手く関係を良く保っていくのが俺の人付き合いなのであり、それを根本から改善するのはとても難しいことなのだ。

「そうか？　クセだと言うのなら仕方ないとは思うが、まあ、私にはもっとまっすぐ来る方が好きだ、というだけの話だからな。三木もあまり気にしないでくれ」

「はは、直せるように、ちょっとは努力してみるよ」

俺には、残念ながら姐さんのような強さはない。自分を信じるということは、思われているよりもずっと難しいことなのだ。

姐さんが俺のように生きることができないのと同様に、俺も姐さんと同じように生きることとはできないのだろう。だからこそ、姐さんのように強くあることのできない俺は、軽く笑って見せたくない自分の弱さというものを隠すのだった。

「それで、三木、ゴールデンウィークになにかあるのか？　私にも教えてくれるとうれしいんだが？」

「ゆっきい、あたしもしりたい」

少し難しい話になっていたから話の最前線から離脱していた志穂だったが、話が元に戻ったのを察したのか、俺の腹に頭をぐりぐりと押しつけながら話に復帰してきた。かなり勢いよく来たので、軽く

せき込む。

「いや、あのな、ゴールデンウィークさ、みんなが暇だったら、去年みたいに何かしたいな、って霧子が言ってるな」

「きよねんは、あ、えと……、りょこう行ったよ、りょこう。すっごいたのしかったよ！」

「そうだな。去年のゴールデンウィークは三木が旅行に連れて行ってくれたんだったな。しかしそうか……、なるほどな、そういうことだったんだな」

「ああ、霧子は去年と同じで旅行に行きたいって言っててな、でも旅行ってやっぱ二泊三日くらいで組むからさ、行くだけでもかなり手間だろう？」

「ん、そうかな？ りょこうは、いろんなところに行けて、いろんなものたべられるからたのしいとおもうよ？」

「楽しいのと手間なのは別の話だろ。二日三日拘束されるってことは、他のことがそれだけできないってことなんだよ。七日休みがあって、そのうち三日っていったら半分だぞ、分かってんのか？」

「そうだけど、ん？ それがどうかしたの？」

「どうかしたのって……、いや、お前……」

「私も、皆藤と同じ考え方だな。私たちは友人なのだから、そんな細かいことは気にしなくていいんだぞ。七日間の休みがあって、友人のためにそのうちの三日を使うということが手間だとは、私は思わないな。そんなことを思い悩むくらいなら、どうしたら三日間を楽しく過ごすことができるか、と考えた方がいいではないか。そうした方が、お互いにとっていいだろう？」

「それは、確かにそうだな」

「しかし……」

しかしどうしてか、姐さんは顎に手を当てて少しだけ首をかしげると、目を細めて難しい顔をした。俺がどうしたのか、と訊ねようとすると、それを遮るように志穂が、椅子に座ったまま頭を俺の腹に沿わせるようにして腰に手を回して抱きついてきたのだった。

さっきまではひたすら腰に押しつけていた頭で俺をぐりぐりと押し  
ていただけだったので、非常にバランスが悪かったのだが、しかし  
今はずいぶんと安定感がよくなったように思う。というか、俺とし  
ては比較的まじめに話しているつもりなのだから、腰に頭をぐりぐ  
りさせるのは止めていてほしかったのだが。

「ゆっきいとあそぶのたのしいからすきだよ。ゴールデンウィー  
クのあいだ、ずっといっしょでもいいな」

「いや、それはねえよ」

「ええ、なんで？」

「なんでもかんでもあるか。ずっといっしょなんてダメだつうの。  
俺の気が休まらないわ」

「でも、ゆっきいといっしょにいと、すっごいおちつくよ？」

「お前が落ち付いても、俺が落ち付かないんだよ。お前は、常に何  
かを壊しそうな感じがしてるからな、周りのものが無事かどうか気  
になって仕方ないわ」

「そんなにこわれないよ？」

「やだよ、お前、握力でガラスのグラスとか壊しそうだし。我が家  
の備品を破壊されちゃ堪らんし、それを四六時中心配してなくちゃ  
いけないなんて、精神の方が先にまいる」

「それは、くしゃみしちゃったときだけだよ。あんまりしないも  
ん」

「普通は、くしゃみしたってグラスは割れないんだよ」

「ゆっきいは？」

「割れねえよ！」

「ええ、そうなの？」

残念だが、そんな芸当ができる人間はめったにいないわけであり、  
当然俺だってそんなことは出来ないに決まっている。

「っていうか、志穂はちょっと黙ってなさいな。姐さんが何か言お  
うとしてたのに、訊くタイミング逃しちゃったでしょ。こうなった  
ら…、ダークネスアタック！」

「うゆっ!? にゃゝ、暗いよゝ」

腰に抱きついている志穂に、俺はブレザーを脱いでふぁさっ! と被せ、志穂の視界をふさいだ。志穂は暗いところではおおむね静かになるので、これで黙らせることができるだろう。

「で、姐さん、なにを?」

姐さんは今もまだ、何かに悩んでいるか、あるいは何かを憂慮しているかのような難しい顔をしている。いったいどうしたというのか、それが俺には分からなかった。

「いや、なゝ、まあ、後にしよう。もう一限の授業が始まってしま  
うからな」

「あ、ああ、確かにそうだな。分かった、また後で訊きに来るから、  
今は戻るわ」

「そうしてくれ。私はそれまでに話すべきことをまとめておく」

「おゝ、おう」

俺は、姐さんがそういうならば、と志穂に被せたブレザーを回収して回せれた腕を外させてから、自分の席へと戻るのだった。姐さんの表情を見る限り、それはあまりいい話ではないように思うが、しかし聞かないというのも通りそうにない。

何の話をされるかは分からないが、心して聞こうと思う。だがまあ、今はとりあえず目先の授業を受けることにしよう。

そして、休み時間終了のチャイムが鳴り響き、がらりと教室の扉が開かれたのだった。



言いそびれたのはなんですか　――　それはあなたの……

「起立っ！　礼っ！」

「ありがとうございます」

それから50分間、俺たちは現代文の授業を受け、なんとか欠伸を噛み殺しながら姐さんの号令に合わせて頭を下げて腰を折った。

しかし毎回のことがながらあまり面白くない授業だ。テキストを読むことが重要なのは分かるし、教科書がそんなに面白くないのも仕方ないとは思うのだが、少なくとももう少し興味を持てるような授業をしてくれないだろうか。ただ読んで、ただまとめてという授業では興味も何もあったものではないだろうに。

あと担当の先生は、もう少しはきはきしゃべってほしい。綾先生みたいにしゅきつとなるような声音でしゃべってくれないと、眠くて眠くて困るのだ。

「やばいな…、すごいねむい」

『幸久君、ねむい？』

「ん？　ああ、ちよつとやばいかも……」

俺がふらふらと椅子に腰かけると、隣の席からメイのケイタイのディスプレイがにゅっ、と伸びてくる。メイは真面目なもので、あんな授業でも眠そうな顔一つ見せずにノートを取り続けていたのだ。俺が一時間起きていられたのも、メイにいつ真面目さの限界が訪れて欠伸の一つでも洩らすだろうか、という好奇心からなのだが。

ちなみに、けっきょく最後の最後までメイは黒板から目をそらすことも、教師の話から耳をそらすことも、テキストの文章から意識をそらすこともせず、むしろ俺の方が先に限界を迎えてしまったのだ。いや、寝たりはしなかったぞ、なんとかメイの欠伸を見るためにだけに気合で起きてたからな。

「メイは、だいじょぶなのか？」

『ねむくないよ？』

「すごいな、マジ。欠伸の一つもしないんだから、すごい集中力だ」  
『普通に授業受けてただけ』

「普通に受けることすら難しい授業だって、あると思うぜ？ 今の授業だって、俺は眠くて眠くて」

『でも寝なかったよね』

「ああ、がんばったからな。メイがいつか欠伸するんじゃないかと思っ  
て、ずっと待ちかまえてたんだぜ。まあ、最後までそんなこと  
なかったんだけどさ」

『欠伸は、恥ずかしいからしない』

「やっぱり恥ずかしいのか？ …、ああ、確かに俺もちょっと恥  
ずかしいかもしれないわ」

『おつきく口開けるの、恥ずかしい』

「そうだな、なんか間抜けな顔になるんだよな、欠伸するときっ  
て。無防備っていうか、なんていうかな？」

『じっと見ちゃダメ』

「分かった、これからは不用意に覗きこまないようにする。そうし  
たら俺に見られる可能性がだいぶ減るしさ、メイも欠伸して平気だ  
ぜ」

『誰に見られちゃうか分かんないから、しないようにする』

「せっかくするんだったらさ、俺の前にしてくれな。ちょっと見て  
みたいからさ」

『見せてあげない』

「だいじょぶだって、霧子と同じで、きっとメイの欠伸もかわいい  
から」

『きりちゃんの欠伸も、見ちゃダメ』

「えー、なんで。霧子の寝言とか欠伸とか、あと寝相とか、見て  
るとけっこうかわいいんだぜ？」

『かわいくても、見ちゃダメ。きりちゃん恥ずかしい』

「メイは、案外厳しいんだな」

『女の子は、そういうの男の子に見られたくない』

「でも、俺は霧子を毎朝起こさなきゃいけないからさ、どうしても見ることになっちゃうんだけどな」

『きりちゃん……』

「メイはしつかり者だからな、俺に欠伸してるとこ見られるようなことはないだろうな」

まあ、結局は妥協点の問題なのかもしれないが。霧子が俺に恥ずかしいところを見られることは、きっと霧子自身も少しは恥ずかしいと認識しているかもしれないが、それでも俺に対する羞恥心の設定が低くなりすぎていてそれを妥協によって受け入れてしまっているところに問題があるのだ。

きつと、妹にとってのお兄ちゃんという存在は、このような認識を持って扱われるのではないだろうか。お兄ちゃんは妹が恥ずかしいことをしても可愛いと思うだけだし、妹はお兄ちゃんに恥ずかしいことを見られたからといってそこまで恥ずかしがることはないのだ。「まあ、霧子が自分一人で起きられるようになったとしたら、俺が霧子の恥ずかしい姿を見ることがなくなるだろうな」

『きりちゃんに、自分で起きなきゃダメって言う』

「そっか、頼んだぜ、メイ」

『幸久君も、気をつけなきゃダメ』

「分かった、出来るだけ気をつけるようにするよ」

『そういえば』

「ん？ どうした？」

『さっき、ホームルームの後だけど、のりちゃんたちの方に行って何のお話ししてたの？ あたし、遠くて聞こえなかったから』

メイにしてみれば、それは何のことはないただの質問でしかなく、訊きたいと思ったことを単に文字にして俺に見せただけでしかないのだろう。しかし俺にとってみれば、それによって非常に重要なことを思い出す、行ってみればキーになるような質問だったのだ。

思い出したこと、それは一限の授業があまりに退屈で眠く、大変だったからすっかり忘れていたことで、一限目が終わったらホームル

ーム後の話の続きをする、と姐さんが言っていたという事実だった。

「あつ、そうだ、忘れてたじゃん。あぶねえ……」

『？　なにが？』

「あつ……と、メイには、あとで話すからさ、今はちよつとごめんな。きつと話すから、待っててな」

『うん、分かったよ』

「じゃ、俺、ちよつと姐さんところに行ってくるわ」

『いつてらっしゃい』

「おう、ちよつと行ってくる」

よく見たら、姐さんはさっきからずっとこっちを見ているようだった。なんだよ、別に声かけてくれたっていいだろうに、なんなんだ。それとも、もしかして俺がメイとおしゃべりしてたから気をつかって声をかけないでくれたのかもしれない。

俺が言うのもなんだけど、姐さんは氣い遣いしいだからな。そういうところで邪魔したりしないように配慮してくれたのだろう。やっぱり優しいぜ、姐さん。

「おーい、姐さーん」

メイに一時の別れを告げ、俺は自分の席を離れて再び窓際の席の方に訪れるのだった。果たして姐さんが俺に言おうとしていたことは何なんだろうか。

「おお、三木、忘れていなかったか」

「忘れないって。ちよつとメイとおしゃべってただけだぜ」

「ああ、それならいいんだけどな。私はてつきり、授業でぐったりした上に持田としやべるのに夢中になって私のことをすっかり忘れてしまっているのではないかと思ったが、違ったようで何よりだ」

「と、当然だろ？」

エスパーかと思った。

なんでそんなに詳細に俺の状態が見透かされているのだろう。もしかして、風紀委員会の新装備とかで、相手の心情とかを見通すバウリンガルの機械が開発されたりしたのだろうか。

「それで、さ。姐さんは、何か俺に言っときたいことがあったみたいなんだけどさ、それって何？」

「ああ、いや、こういうことは興を削ぐというか、水を差すことになるからあまり言いたくないんだが…、去年のように旅行をするのはあまり推奨したくない」

「？　なんでだ？」

「学生だけで旅行に行くというのは、今さらながら、やはりよくないと思ってな。子どもだけで遠くまで旅行するのは、確かに楽しいかもしれないが、しかしそれは同時に多くの危険をも発生させ得ることを意味しているだろう」

「…、そうだな、確かに」

「去年だって、危険が全くなかったわけではなかった、と私は思うのだが、それはもしかして間違いだろうか？　やはり責任ある大人が一人は絡んでいた方がいいと思うんだ」

姐さんの言わんとしていることはよく分かる。しかしそれをよく理解すると同時に、俺は猛烈な嫌な予感に襲われていた。それはなんというか、昔々地下深くに埋めたはずの危険物が大地を突き破ってその姿を現すような予感というか、おそらくそんなものだった。

というか、明確に一つ、姐さんの言うことについて思い当たる節があるのだが、もしかしてそのことを言っているのだろうか。だとしたら、そんな話を持ち出してこないでください、と懇願したい気分だった。

「私だってな、別に三木のことを信用していないわけではない。お前は優秀だし、人を思いやる優しい心も持っているように思う。しかし、私にも記憶というものが残っているのだ」

「そ、そうだよな、うん……」

俺の感じる嫌な予感というのは、実は意外と当たることが多かったりする。それこそ神憑りのように、イヤな予感がすると何かしらキツイことが起こったりするのだから、我がことながら恐ろしくすらある。

しかしそのキツイことを察知することができたとして、それを回避することができるといわけではないのだ。これからキツイことが降りかかってくるんじゃないか、という確信にも近い予測を持ちながらそれを受容するのだ。ある意味で、それはなかなか辛いものがある。

心構えができるんだからいいではないか、という考え方もできるかもしれないが、俺にはそんなポジティブな捉え方をすることはできない。俺にとってみれば、それはやはり「悪いことが起こることを知らせるもの」でしかなく、「これから起こる悪いことを受け入れる心構えをするための時間をくれるもの」ではないのだ。

「去年のゴールデンウィークに行った旅行で、あっただろう。私からあまり言いたくないことではないが、しかしそれをなかったことにすることは、やはりできない。お前も忘れてはいないだろう、三木？ それとも、忘れたと言うつもりではあるまいな」

そしてそれは、やはり感じたイヤな予感の通り、俺の掘り出してほしくない記憶をはっきりと浮き彫りにするものだった。それについては、もう通り過ぎた地点のはずであり、俺も姐さんも理解し合っただけの点のはずなのだ。

しかし姐さんは、どうして今さらになってそれを掘り起こそうとしているのだろうか。そんなこと、誰も望んでいないじゃないか。それは、誰も幸せにならないに決まっている。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、姐さん。それはあれじゃないのか？ 悲しい事故だったということで一応の解決を見たんじゃないのか？ もう解決で、示談ってことにしたんじゃないかったのか？」

「私も、当然そうだと思っていたのだが…、ああ、いかん、いかな。こうして話していたら、また疑惑の気持ちかわき上がってきてしまった…。三木、お前、本当にあれは事故だったのか？ 私はお前の言っていることを信じてもいいのか？」

「ほ、ほんとだよ！ 俺はウソ言っていないし、誤魔化してもいないよ！ 俺のこと、信じてくれるって言ったじゃないか、姐さん！」

「信じたい、ああ、出来ることならば信じたい。しかしお前がしてしまったことは、そんなに軽い問題ではないのだ。信じたいが信じることができない、そういう状況は確かにあるのだ」

「ま、待って！　ここではマズいつて！　ここでその話はちよつとまずいんだ！　あ、あとで…、昼休みにしよう、昼休みに！　昼休みに、人が来ないところで…、な？」

「そう、だな…、そうしようか。昼休みにきっちり、もう一度話をつけようか。そうした方が、お前も話をする事ができるだろう。」

なんなら、風紀委員会の部屋を貸してもらうこともできるが」

「そこまでじゃないから、もっと穏便に行こう。屋上、とか？」

「ああ、そうしよう、それがいい。こういう問題は、お互いに納得できるようにしないといけない。そうすることで、お互いが禍根なく関係を維持することができるとだ」

「そ、そうだな、うん」

実際の話、姐さんがこうして納得していないというのも理解はできる。姐さんの性格を考えれば、そうなるのは十分に分かることなのだ。

というか、あのとときだって結局のところ姐さんを納得させることはできなかったわけで、おそらく今回も納得させることはできないのではないかと思う。前回できなかったことが今回に限って上手いくなんで、そんな都合のいいことはありえないのだ。

今回もまた、ただ結論を先延ばしにするだけの不毛な戦いになるんだろうことは、今の時点で目に見えているのである。

「さあ、二限目の授業が始まるぞ、三木。自分の席に戻るんだ」

「分かった…、じゃあ、昼休みな」

「ああ、そうしよう」

「ゆっつきい、どうしてそんなにびくびくしてるの？」

「してないよ！？　別に動揺なんてしてないの！！」

志穂に変に突っ込まれ、それこそ動揺してしまう俺だった。そして俺の突っ込み返しと重なるようにチャイムが鳴り響くのであった。

休み時間は、そうして終了するのだった。チャイムは、というか時間  
間は、いつだって俺たちのことを待ってはくれないのである。



## 教室の喧騒、屋上の静寂 ―― さあ、検証を始めよう

「起立っ！ 礼っ！」

「ありがとうございます」

四時間目の授業の終わりを告げるチャイムを聞いてから、教師はチャークをかたんと置いて教壇の上の荷物をまとめる。そして姐さんのキレのある号令によってクラスの全員ががたん、と椅子を鳴らし、立ち、ぺこりと授業終わりの通過儀礼をこなした。

そうして四限目の授業が終わってしまったえば、その後には当然のごとく昼休みが始まるわけであり、教室の中は教師の退場を待たずしてざわざわと賑やかさを取り戻す。購買組と学食組は今日の昼食の確保のために急いで教室を後にし、弁当組は手近な机を動かして、自分たちの昼食グループが収まるだけの大きさの机のまとまりを各所で形成していく。

いつもならば、俺たちもそのように、だいたいいつも購買のパンを昼ごはんにしている志穂以外はみな弁当を持参しているので、五人が座れるだけの机を集めるのである。そして志穂は今日も同様に、授業が終わると同時に教室を飛び出していき、廊下を一陣の突風のように駆け抜けていくのだった。

それならば俺たちもいつものように、窓側の机を四つ集めて四倍の大きさの四角をつくって五つの椅子を寄せたりしているのかといえ、実はそんなことはなかった。

「メイ、俺、ちょっと今日は別のところで食うから。よかったら霧子といっしょに飯食ってやってくれ」

『うん、いいよ。幸久くんはどこ行くの？』

「ちよっと屋上に用事があって、行かないといけないんだ。大事な、用事があるんだ」

『そうなんだ、いつてらっしゃい』

「ああ、昼休みの終わりギリギリまで戻って来れないかもしれない

からさ。五限の移動は俺のこと待ってたりしないでいいからな」

『うん、分かった。でも出来るだけ待ってる』

「じゃあ出来るだけ早く戻って来れるようにするわ。それじゃ、ちよつといってくる」

『いってらっしゃい』

そして俺は、弁当を提げていない方の手を肩越しにメイに軽く振って、教室を後にするのだった。昼休みは、二限が始まる前に決めたように姐さんと徹底討論を行なう予定なのであり、それは他者の介入を差し挟まない俺と姐さんの一対一の戦いなのである。

というか、霧子とか志穂とかをその場に立ち合わせてしまえばめんどくさいことになるのは必定なのであり、ここは俺と姐さんの二人できっちり話をつけることが必要になるのである。いや、それ以前に、姐さんだけが去年のことについて疑念を持っているので、姐さんただけ話をつければいいのだから、霧子と志穂は必要ないのだ。

『あれ、のりちゃんもおでかけ？』

「ああ、ちよつと屋上に出なくてはいけない用事があったな。食事をともにできず残念なのだが、今日のところは天方と皆藤といっしょに食べてくれ」

『うん、そうする。幸久君もちよつと屋上に用事って言ってたけど、偶然だね』

「ああ、そうだな。くれぐれも天方と皆藤のことを頼むぞ。あと、屋上について来たりなどしないように、な」

『屋上、行っちゃダメなの？』

「そうだな、ああ、来てはいけないぞ。そうしたら昼休みの終わりにまで帰って来れなくなってしまうかもしれないからな」

『わかった。それじゃあ行かないようにするね』

「ああ、そうしてくれると助かる。五限目の移動教室も、遅れないように二人を連れて行ってくれ」

『うん、気をつけるよ』

「それでは、私はもう行く。また後でな、持田」

『いつてらっしゃい』

そして姐さんは、弁当を提げていない方の手を肩越しにメイに軽く振って、教室を後にするのだった。その行く先は、さっき自分で言ったように、俺と同様に屋上であり、その目的もちろん同様である。

同じ所に行くのだったらどうしていつしよに行かないのか、という話なのだが、それには差し当たって一つの理由がある。それは俺と姐さんが二人でどこかに行ったら、ほぼ間違いなくそれには霧子と志穂がついてきてしまうだろうし、もしかしたらメイもついてきてしまうかもしれないからだ。そうなってしまったら姐さん一人と話をするのよりも数十倍くらい大変なことになるだろうし、今回のお話はそんなことに気を取られながらすることができるほど生ぬるいものではないのだ。

というか、姐さんを説得するということは、そんなに簡単なことではないのだ。そのためには明確な証拠や信頼できる証言が必要であり、なかなかシビアな観点を要求されるのである。

また、ついてきてほしくない理由というのは、決して話し合いに要する手間だけではない。それは今回話をしなくてはならない議題そのものに関係することなのだが、それについてはまたあとで分かることであるが、とにかくあまり霧子たちには聞いてほしくない話なのだ。なんというか、俺のイメージの根幹にかかわる話というか、出来るだけ広まってほしくない話なのである。

志穂がそれを聞いたら、きつと適当にところどころをつなぎ合わせて、理解の及ばないまま悪気もなくうれしくない噂を広めてくれることだろうし、もし霧子に聞かれて幻滅でもされてしまえば、俺の心が殺害されるだろう。メイに聞かれてしまえば、せっかく今までいいイメージを持ってくれているようなのに、それがすっかり壊れてしまうかもしれないからだ。

いや、当然、その話は本当のことではないと俺は考えているし、本当ではないのだ、と姐さんに主張するつもりでもある。しかしそれ

でも、それに姐さんが疑問を持っているというだけでそれなり以上の公的な不信感が発生するのであり、あるいはそれが、俺が誤魔化しているんだと結論付けるための重要なファクターとなってしまう可能性すらあるのだ。

だからこそ、諸々の理由によって俺と姐さんは一対一での話し合いを行なうことが最も適切なものであり、知り合いがやってくる可能性の低い屋上でそれを行なうのが、おそらく一番いいだろう、という結論に到達するのだ。

そういうわけで、俺は姐さんよりも一足先に屋上へと向かうのである。姐さんは俺の出発からわずかに時間を開けて屋上へと訪れるのである。もちろん、俺と姐さんは道々言葉を交わすことはなかった。

.....

「いただきます……」

しかし口をきかずにいたのはけっきょく屋上にたどり着くまでで、俺の方が我慢できなくなったのだった。

俺と姐さんは一つのベンチに並んで座り、それからまずは弁当を食べてしまうことにした。包みを解きふたを開くと、そこには朝に自分でつくったおかずとごはんがふたを閉じたときのままに鎮座しているのだった。

朝早くに起きて弁当をつくることは、俺の感覚ではそこまで大変なことではない。というか、俺と広太の生活費は当然限られているわけであり、弁当をつくることで購買を毎日使うよりも少しでも節約することが出来るのなら、それは弁当をつくるだろう、と。

それと、料理をすることがまったく苦ではないというのも、一つの要素ということもできるのかもしれない。そりゃ、料理をつくるのが嫌なら弁当をつくるのも嫌になるだろうし、もちろんそのために早起きすることだって嫌になるに決まっているのだ。

将来、料理人になることはできないだろうから、主夫になって家事

だけをやって生きていくのも悪くないと思う程度には、俺は炊事洗濯等々の家事仕事が好きなのである。だから朝起きて弁当をつくることなど、特に苦でもないのだ。というか、昼飯の確保のためにどうしても必要なことなのだから、そもそも苦と思っている場合ではないのかもしれないが。

「いつも思うけど、姐さんの弁当、きれいだよな」

俺の弁当も、晴子さんの言いつけに従って、それなりに色合いとか盛りつけとかには気を配っているが、しかし姐さんのものは本当に丁寧に、きれいにつくられている。娘としてそれだけ大事にされているのだろう、ということが、その弁当を見るだけでもなんとなく伝わってくる感じがした。

「それ、お母さんがつくってくれてるのか？」

「ああ、母がな、早くに起きてつくってくれている。私は風紀で特に朝が早いときもあるから、迷惑をかけてしまっているんだ。出来れば自分でつくれるようになって、母に面倒をかけないようにしたいのだが、それもなかなか」

「別にお母さんは面倒だなんて思っていないんじゃないか？ 娘のために弁当つくるなんて親冥利に尽きるってもんじゃないか、と思うけど」

「しかし、三木は自分でつくっているのだろう？ それならば、私が自分でつくった方がいいのではないか、と思ったんだ。私は女なのだから、それくらいのことではできた方がいいだろう」

「姐さんって、意外とそういうところ気にするよな。なんていうか、女の子らしさ、みたいなのにさ。俺は必要に駆られてやってるだけなんだからさ、同じようにしないとなんて思う必要ないと思うけど」

「意外か？ もしかして、女なのだから、という風に考えるのは私に似合わないだろうか？」

「いや、似合わないなんて言わないけどさ、なんていうのかな……、時代と違っているのかさ、まあ、そんなこと気にしなくていいんじゃないかなって。女だから炊事洗濯が完璧じゃないといけないなん

て決まりはないんだしさ」

「しかし結婚して、妻になる相手が料理も出来ないようでは、三木は嫌ではないのか？」

「？ 料理なら、俺がつくるけど？」

「…、三木は、主夫にでもなるといい。エプロンもお玉も、似合っていると思うぞ、私は」

「そうか？ はは、ちょっとうれしいかも」

「そうか、うれしいのか…、私とは、やはり少し感性が違うのかもしれないな、三木は」

「まあ、それは仕方ないだろ。人間、そんなに簡単に分かりあえるものじゃないしさ」

「そうだな、お互いに分かり合うことはなかなか出来ることではない。それだからこそ人間は語り合い話し合わなくてはならないのだ」

「そうだよなあ。結局、腹を割って全部見せ合う以外にはお互いを理解するなんてできっこなさそうだし」

「まったくその通りだな。それでは三木、去年のゴールデンウィークのときのことについても、私のことを納得させてお互いに歩み寄り合おうではないか。自分が無実だと言うのならば、どのようにすればそれを証明することが出来るのか、私に教えてくれ」

パクパクと弁当の中身を口に運びながら、俺と姐さんはしゃべり続けているが、ついに話がそこに到達した。そもそもそれが、わざわざ昼休みに屋上まで飯を食いに来ている最大の理由なのであり、このままだけでも雑談に興じているわけにはいかないのである。

そしてそれは、奥深くに封じてしまいたいと思っている記憶を再び掘り起こす作業を意味するのであり、これから行なう姐さんの説得作業が、俺にとっても姐さんにとってもかなり厳しい戦いになることが予想される。

「お互いにあまり掘り起こしたくない過去であることは確かだが、しかしそれだからといってそれをみないようにしてはいけなと思うんだ。これは、きっと三木とこれからも友人でいるために通

らなくてはならない道だろう。もちろん、私はお前のことを信じていたい。しかしわずかにお前を疑おうとする自分がいるのも確かだ。三木、私を安心させてくれ、それだけが私からお前に頼みたいことだ」

「俺も、姐さんのことは人として尊敬してるし、これからもいい友達でいたい。そのためにこんなわだかまりがあっちゃいけないってこともよく分かってる。今度こそ分かり合おう、姐さん」

「ああ、そのつもりだ。この疑惑の念が私の勝手な思いこみだということを認めさせてくれ、三木。私も、お前の事は認めているんだ。素直に、おかしいことを言って済まなかった、と謝らせてほしい」

「大丈夫だ、今度こそ、姐さんを納得させてみせる。話が終わったら、安心して謝ってくれ」

そうして姐さんは、膝の上に乗せていた弁当箱を一度ベンチに置くと、体をこちらに向けて真剣な目でまっすぐに話を切り出した。

「それでは改めて問わせてもらう。三木、お前はなぜ去年のゴールデンウィーク、私、お前、天方、皆藤の四人で旅行に行ったとき、私たちの眠っているところに侵入して眠っていたんだ。私たちが眠っていたのはベッド、お前が眠っていたのはそこから二メートル以上離れたソファード、寝相が悪かったと言って通用する状況ではない、ということだけはきちんと理解してくれ」

「ああ、それは分かってる」

「素直に、正直に全てを告白してくれば、私はお前の言うことを受け入れる心の準備はできている。納得することができるかどうかを判断することも、おそらく客観的なスタンスから見つめることもできる。さあ、言うことがあるならば、あるだけすべて打ち明けてくれ」

「それじゃあ、話をさせてもらうぜ、姐さん。まずは、長くなるかもしれないけど、そのときの現状の確認からさせてもらおうか」

「そうだな、それがいいだろう。もしも忘れていたり見落としていることがあっては、確かな判断を下すことなど、到底できはし

ないだろうからな」

「まずは、そうだな、朝のことから思いだしていこう」

忘れもしない、あれは去年のゴールデンウィークの初日、よく晴れた金曜日のことだった。



## 波打ち際で、あったこと？

「朝は、特に問題なかった。志穂がちょっと寝過ごしたけど、電車を乗り過ごしたりしたわけじゃなかったし、電車が遅延したりすることもなかった」

去年のゴールデンウィーク、俺たちは四人で旅行に出かけた。

入学式からゴールデンウィークまでの一ヶ月の間に霧子を通じて仲良くなった俺たちは、詳しい経緯は忘れてしまったが、旅行に行こうということになったのだ。もしかしたら去年も、霧子が行きたいと言ったのが始まりだったかもしれない。

「そうだな、朝は確か、特に問題がなかったんだったな。そういえば、宿と電車の券はお前が手配したのか？」

「いや、手配したのは広太だ。広太が三木のツテをたどって予約をねじ込んでくれたんだ」

「そうか、そうだったのか、ふむ……。確かに旅行に行こうと決まったのが休みに入る三日前だったからな。そこからねじ込んだのであれば宿の側が十分な部屋を用意できないとしても仕方がないのかもしれない」

「男女四人で一部屋に押し込まれたのは、俺のせいでも広太のせいでもないんだ。少なくともそれだけは納得してくれ、姐さん。広太は優秀な奴で、そんなところでミスをする奴じゃないし、俺もそんなことをするように指示したわけじゃない」

「ああ、そこは納得できる、というか、納得するべきだろうな。時間的な制約があったという点、宿側にも無理を強いていたという点の二つを総合しても、ある意味起こるべくして起こったことだろう。そこについては、以前と変わらず納得することにする」

「そこに対処するために、今回は今から宿を取るように動くことにする。そうすればきつと、今度こそはちゃんと二部屋を確保することができたらうしな」

「計画的に、余裕を持って動くことを心掛ければ、あのようなことが再び起こることはないだろう。そういう前提から不安定な旅行は、やはりあまり良くないと思うからな」

「よし、それじゃあ次に行こう。ここは去年のうちにお互いに納得し合って許し合ったところだからな」

「そうだ、ここは本題ではない。話を先に進めてくれ、三木」

「ああ、分かった」

遅れてきた志穂をせき立てて電車に乗った俺たちは、予定の順路を予定通りに乗り継いでほぼ予定した通りの時間に向こうに到着した。ある意味で、その時点では何の問題も発生していなかった、ともいうことができるだろう。

そのあと旅館へのチェックインを済ませ、三木家の方が久々に泊まりに来てくれて当旅館としましても光栄の極みですだのなんだの、いろいろと歓待を受けたりした。あのとき、俺は初めて自分の生まれた家というのが常ならざる存在なのである、ということを明確に意識した。

正直、そのときに聞いたことでは、三木家とその旅館との関係の深さとか歴史とか、そんなことよりも、この旅館に泊まったときの三木の人間たちの、俺からしたらありえない、まさに金持ちといった感じの、テンプレ的行動の方が記憶に残っている。たとえば旅館をまるごと貸し切ってみる、とか、急に時期外れのブリが食べたくなって空輸してみる、とか、窓から見える景色が気に入ったからといって、その視界に入る土地が開発されたりしないように全部買ってみる、とか、そういうあれである。

俺がこんなに普通の生活を送っているというのに、ほんの三十年前にはそういうアホみたいな豪遊をしているのだ。きつとそんなことをしたからたくさんあった金がなくなったに違いない。顔も知らないが、金遣いが荒くてギャンブル狂いで色狂いだったと噂のくそじじいめ…、子孫のために金を残しておくとか、そういうところも考えろ、と言いたい。

まあ、その財産を築いたのもそのじいさんらしいし、あるいは自分のものをどう使ったって自由じゃないの、ということも出来るのだが。おそらく、悔しかったら自分でそれだけ金を稼いでみな、とその行動を通して言いたいのだろう。

「そういえば…、三木、確かあのとき湖で遊んだな」

「そうだな、とりあえずチェックインして、部屋に荷物を置いてから遊びに行ったんだよな。まだけっこう肌寒かったから、あんま遊べなかったけどさ」

「そのとき、皆藤に一発やられただろう。あれは、大丈夫だったのか？」

「えっ？ そんなことあったっけ？ 別に今なんの問題ないから、たぶん大丈夫だったんだと思うけどさ……」

「そうなのか？ それならばいいのだが……」

「っていうか、一発やられたって何を？ あんま覚えてないんだけど……」

「忘れてしまったのか？ そうか、私にしてみればかなり印象的だったからよく覚えているのだが、三木にしてみれば大したことでなかった、ということか」

「えっ、何があったの？ほんとに覚えてないんだけど」

「何があったかと言われれば、そうだな、何といえいいだろうか。湖に遊びに行ったこと自体は覚えているのだから、そこから思い出していった方が明確に状況を捉える事が出来るな」

「ああ、そうしてくれると助かる」

「部屋に荷物を置いた後、着替えを済ませて湖に向かったんだ」  
今までは俺の言葉によって思い起こしを進めていたわけだが、しかしここでは姐さんの記憶を頼ることにした。

俺自身、湖に行って遊んだこと自体は覚えているのだが、しかし何をしたのかはあまり覚えていない。ほんの一年前のことだというのに、どうしてこんなに覚えていないのだろう。

もしかして、俺が予想している以上にすごいことがあって、無意識

で記憶を封印しているのかも、と思うとどこことなく背筋が寒くなるような気がした。

.....

時は、おおそ一年前にさかのぼる。

「うわぁ、すごおい！」

「これはかなり大きな湖だな、立派なものだ」

「あつ、あっちの方、砂浜みたいになってるんだね、幸久君」

「そうみたいだな、俺も始めてきたけど、これなら十分に観光資源として人が呼べるな」

去年のゴールデンウィークの初日、俺たちは旅行に来た先で一番の名物らしい湖（日本で何番目に大きいとか、駅に置いてあったパンフレットに書いてあったかもしれないけど、そこまで印象的な数字ではなかったので覚えていない）のほとりにやってきていた。一度チェックインをするために宿に寄っているので、手に大きな荷物はもう持っていない。

今は五月の初旬であり、入って遊ぶことが出来るという触れ込みの湖だったのだが、辺りはまだ泳いで遊ぶような暖かさではなかったりする。旅行に来たノリと勢いで水着への着替えも済ませてしまったのだが、今から湖の中に入って本気で遊ぶとなるとどうしても躊躇を禁じ得ない。

「ゆっきいゆっきい、遊んできていい？ 遊んできていいよね？」

「えっ…、水に入るつもりか、お前…。たぶんけっこう寒いと思うぞ？」

「えー、入っちゃダメなの？」

「いや、ダメとは言わないけど、絶対に風邪ひいたりするなよ？もし具合悪くなっても面倒みてやらないぞ？」

「かぜのきんは気合でやつつけなさいって、ししょーが」

「お前の気合は煮沸消毒と同じレベルの殺菌効果でもあるのか？」

無理して面倒なことになるのだけはやめてくれよ？」

「だいじょぶだよ、あたし、かぜひきにくいから」

「わけのわからん自信に満ちた言葉だな、俺はどこに安心すればいいだよ」

「いつてきまゝす」

「あつ、ちよっ…、行っちゃうのかよ…」

俺がこれだけ言っているのに、志穂は水着の上に着ている服をポイポイと脱ぎ捨てると、わざわざ目の前の柵を乗り越えて、俺がかわい水着を着てるじゃないか、などと思う間もなく湖へと身を投じるのだった。飛び込んだ衝撃によってほんの小さな水柱が上がり、そしてすぐにそれは水面へと吸い込まれる。

向こうの方の砂浜みたいになっているあたりまで回ってから入れればいいのに、そんなに湖で泳ぐのが待ち切れなかったのだろうか。というか、この脱ぎ捨てられた洋服たちを俺が拾って運ぶというところまで考えは至らないのだろうか、いや、至らないだろう。あいつは志穂なのだから、そんなことを期待すること自体が間違っているのだ。

「ったく…、子どもじゃあるまいし、脱いだ服はたたみなさいよ、ほんとにもう…」

そして俺は、ぐちぐちと文句を言いながら、志穂が脱ぎ散らかした服を拾って畳んでいく。プリーツが大きめに取られた膝上丈のスカートにタイトな感じのキャミソールと白い鍵編みのニットポンチヨを合わせたかわいらしいコーディネートも、脱がれてしまえばもはやただの布でしかないな、などと思いつながら、ずぼらな娘の部屋から洗濯物を回収しているお母さんの気分になっていた。

「幸久君、それ持とつか？」

「いや、別に平気だ。っていうか、あれ？ 志穂の履いてたサンダル、どこいった？」

「…、まさか、履いたまま行ってしまったのか？」

「いや、まさか…、ん？ あれ？ 履いてたか？」

「にゅ、しいちゃんのサンダルが湖の底に沈んじやうよ……」

「し、志穂なら平気だ、きつと。な、姐さん？」

「まあ、沈めてしまったらおぶって宿まで戻ればいいだけだからな。普通のビーチサンダルだったようだし、金銭的にそこまでの痛手というわけではないだろう」

「そ、そうだよな！　よし、あっち行こうぜ。砂浜で志穂があがってくるまで待とう」

俺たちはそこからてくてくと、開けていて砂浜のようになっていくところまで歩く。足を踏み入れてみると、砂浜は意外と日光によって暖められていて、また一本の大きな木がちょうどよい木陰をつくっていた。

俺は履いてきたくつを脱いで、素足で足元の砂を撫でてみる。さらさらとしていて、それはなかなか心地いい感覚だった。

「しかし、ほんとにこの時期にも入れるのか、ここに。砂浜と同じで水も温かかったりするのかなあ……」

「にゅ、幸久君、入ってみるの？」

「そう、だな……、せっかく来たんだし、足をつけるくらいはしようかな、って。霧子はどうか？」

「あたしは……にゅ……、ちょっと休憩してるよ。電車にいっぱい乗って、ちよっと疲れちゃったから」

絶対に冷たい水に入るのがイヤなだけだ。間違いない。

「そっか、姐さんはどうする？」

「私も天方といっしょに荷物番をしていよう。冷たい水に入るのは、先日の風紀の新入隊員歓迎訓練を思い出すから、しばらくの間は止めておきたいんだ」

「新入隊員歓迎訓練？　なにかしたのか？」

「ん？　プールに水を張ってな、完全武装でその中をぐるぐると回るんだ。そしてその後、つくった流れに逆らうようにまたぐるぐる回る。完全武装だと重量がかなりあるから相当キツイぞ」

「え？　何それ？　下級生いじめじゃないの？」

「いじめではないぞ、伝統だ」

「それは伝統という名のいじめだよ」

「そうか？ まあ、そういうわけで私は湖に入るのは遠慮させてほしいんだ。三木、私のことは気にしないで楽しんでくれ」

「わ、分かった、お言葉に甘えてそうさせてもらうわ」

「にゅ…、幸久君、風邪引かないように気をつけてね？」

「いや、ちよっと足を浸すだけだって。風邪をひくまではいかなえよ」

そうやって俺は、木陰に置いた荷物のそばに座る霧子と姐さんの見ている前でジーンズの裾を捲くると、恐る恐る水に足を浸けてみた。ジーンズの替えは持ってきていないので、出来るだけそれを濡らしたくないのだ。

「おっ、意外と冷たくないぞ、この水」

ちゃぱちゃぱと、俺はくるぶしのあたりまでを湖に浸して、水をかき混ぜるように足を動かしてみる。水遊びというのは、それだけで意外と楽しいものであり、俺も水をぱちゃぱちゃ言わせているという事実だけで愉快的気分になりつつあった。

「霧子も来てみろよ！ 水、そんなに冷たくないぞ！」

「ほんと？ じゃ、じゃあ、ちよっとだけ…」

霧子はそう言うとおずおずとジップアップで薄手のパーカーの前を開き、下に穿いた七分丈で6ポケットのワークパンツ（おそらく晴子さんのお下がり）を脱いでこちらにやってくる。

「わ、ほんとだ、けっこうあったかいんだね」

「だろ？ 意外と入るもんだな、五月でも」

「でも…、泳いだりするには冷たいかも、これ」

「まあ、そうだな、うん」

二人してぱしゃぱしゃと水を蹴って遊ぶ。何の気なしに、霧子の足に向かって水を軽く蹴とばしてみる。

「にゅっ！ 幸久君、冷たいよ」

霧子も、同じように俺に向かって水を蹴飛ばしてくる。しかし狙い

が定まらず、蹴られた水の塊は俺から大きく外れて岸の方に飛んで行ってしまふのだった。

「下手っぴだなあ…、霧子。そんなんだと、俺にびちよびちよにされるぞ」

「にゅ…、びちよびちよは、ヤだよ」

「まあ、さすがにそこまではしないけどさ。足が濡れるくらいでやめといてやるよ」

「にゅ…、それもやめてよ」

「はは、ほらほら、逃げろ逃げろ」

霧子は俺の攻撃から逃れるために、俺に背を向けて走って逃げだした。俺は俺で、なんだか楽しくなってきたので霧子を追いかけて走る。当然だが、足元は波打ち際なのでそこまでのスピードは出ない。

それだというのに、なぜだろうか、波打ち際で追いかけっこをしているというだけなのに、不思議と楽しい。これが旅行補正というやつだろうか。

「ゆっきい…、なにしてんの？」

そして、ようやく湖の水面から顔を出した志穂が俺の視界に現れたのだった。まだ少し遠いが、向こうの方から泳いできているようで、ぷかぷかと顔だけが水に浮いているような、そんなシュールな光景だった。

「あたしもまぜて」

岸に向かって少し泳いで足のつくところまで来てしまったのか、立ち上がった志穂は、今度は走って岸に近づいてくる。水に足を浸した状態で走っているというのに、そこに水の抵抗などまったくないような、まるで水面を滑っているかのように軽快な足取りだった。

いや、志穂ならあるいは、本当に水面を走っているのかもしれない。右足が沈むよりも早く左足を出し、その左足が沈むよりも早く右足を出す。爬虫類にだって出来るのだ、きっと志穂にだってできるに違いない。



「水かけっこの二人プレイ？」

俺たちのところまでまたたく間に到達した志穂は、わくわくした様子でそう言った。少し考えてから、俺は志穂のその言葉に首をかしげる。

「二人プレイって、どういう意味だ？」

おそらくそれは、まっとうな疑問だと思う。普通に考えて二人でやるものである水かけっこという遊びに対して、二人プレイなどと、まるで一人プレイもあるよ、みたいな言い方をすることがあるだろうか。少なくとも俺の知る限りでは、ないように思うのだが。

## 波打ち際で、あったこと？

「あり？ ゆっきい、二人プレイしないの？」

「知らん。っていうか、意味が分からん。水かけっことは二人でやるものなのに、どうしてそれをわざわざ二人プレイなんて言い方をする必要がある」

「？ 一人プレイもしらない？」

志穂はまるで、「世界の常識を知らないなんて、こいつってやつはまったく物知らずだぜ」とでも言いたげな表情をしている。まさかこいつにこんな顔をされる日が来ようとは、ついぞ思ってもみなかった。

「あのね、いまゆっきいがやってるのはみずあそびの二人プレイなんだよ。でね、一人プレイもあるんだよ。せつかくだからおしえてあげるね」

「お前から教わることなどほとんどないわ。というか、そんなものはこの世界には存在しない」

「やってみせてあげるから、ちゃんと見ててね？」

「まあ、見るだけだったら見てやるよ」

水かけっこの一人プレイなど、存在しないのだ。そもそも「水かけっこ」というネーミングの時点で「水をかけ合う遊び」というニュアンスを感じ取れるわけで、複数人でのプレイが想定されていることが分かるだろう。

それをよもや一人でやろうなどと、意味不明にも程があるではないか。まさか仮想敵か？ そこに人がいるという風に想定して、水かけっこの練習みたいなことをするのだろうか。

それはイタいぞ。おそらくそれは楽しさとは無縁の遊戯に違いない。どうして志穂がそんなことをする必要がある。こいつは、友だちがいないという状況とは無縁の性格をしているんだぞ。

「あのね、まず、こうやって水をとばすの」

俺の横に立った志穂は、腰を折り両手を水に浸す。そしてそのまま、腕を前方に向かって振りぬく。当然、両手によってかき出された水の塊が前に向かって飛んでいき、そしてたいした距離を飛ぶこともなく水面へと着水した。

「それでね、こんどはこっちにきて、おんなじにするんだよ」

そしてじゃぶじゃぶと足元で水面をかき乱しつつ、志穂はさっきの水の塊が着弾したあたりまで歩いていき、同様に両手で水をかき出し、水の塊を飛ばす。もちろん、その水の塊は最初に志穂が立っていた辺りの水面に着弾し、消える。

「これを、なんかいもするんだよ。それが一人プレイだよ。でね、二人プレイは、ふたりでいまとおんなじことをするの」

「…、そうか…、なんて悲しい遊びだろうね……」

面白そうだな、とか、俺もちよつとやってみようかな、とか、そういうフオローの言葉すら出てこないほどの物悲しさが、俺の心の中を寒風のように吹き荒んでいた。

「けっこうおもしろいんだよ？ ゆっきいもやってみれば？」

「いや、俺はいい…、それはちよつと、俺には向いてないと思うんだ」

「あつ、わかった、ゆっきい、いまのじゃちよつとわかんなかったんだ。ほんとはね、いまのよりもずつとはやいんだよ」

「早い？ どういう意味だ、それ」

「あのね、はやくうごくんだよ。ゆっくりやったらあんまりおもしろくないの」

「いや、ゆっくりやっても速くやっても、別に変わらないと思うけど……」

動きが速いかとかゆっくりかとかは、今俺の目の前で展開された志穂の一人遊びの楽しさを増減させる要素にはなりえない、と思う。

いや、もしかしたら志穂にとってはそうなのかもしれないが、一般的に考えてそうだとは思えないのだ。

だってそうだろう？ 結局やっているのは誰もいないところに向か

って水を飛ばすことだけなんだ、それをする間隔が時間的に狭まったとしても、すること自体が変化するわけではない。どうせ一人で無為に水を飛ばすだけなのだから、それが面白い遊びに変化することはないのではないだろうか。

「はやくっていうのは、こうやって」

そして再び、志穂は水に両手を差し入れ、前に向かって振りぬく。指向性を持った水の塊が、中空を飛ぶ。

今度はさっきよりも速く動く、と言っていた志穂は、もちろんその通りにしていた。

「で、こう」

それから、志穂は逆向きから同じように水の塊を飛ばす。やっていること自体は、さっきのものと何も変わらないように思えた。しかしそこには、歴然たる何らかの違いがあつて、だが俺はそれを見ただけで理解することができなかった。

一つ分かったのは、それが尋常な速度ではなかったということ。どれくらいかといえば、おおよその移動距離が三メートルほどあるというのに、水の塊が着弾地点にたどり着くよりずっと早くにそこへと回り込むことが出来るくらい。

何が起こったのかは分かるが、思考がそれへの納得を拒んでいるような、そんな感覚だった。

「ね？ さっきよりもずっとおもしろくなったでしょ？」

「…、ごめん…、もう一回見せてくれ。ちょっと、一回じゃ理解できなかった…」

「うん、いいよ。こうやって、こう！」

志穂は、何ということのないような顔でもう一度、俺の目の前でそれをやって見せてくれる。やっていることは、さっきのものと寸分たがわぬもの。

水を両手でかき出し、飛ばし、回り込み、水を両手でかき出し、飛ばす。何も変わらぬ五つの動作からなる一つのサイクルが、寸分たがわず再現されている。

しかし志穂の動きは、異常を感じるほどの速度だった。この動きは、たとえるならば一人でキャッチボールをするようなものだろう。しかも高く投げ上げて時間を稼ぐようなことをせず、普通に投げて、それを自分でキャッチするような、そんな時間を置いてけぼりにするようなバカげた動きである。

そして、時間差を置いて飛ばされた二つの水の塊が空中で正面衝突し、混ざり合って落下し水面を叩く。

「わかった？ ゆっきい？」

志穂が、すごい速さで動いている。それは分かる。

どうして水に足を取られるはずなのにそんな速度で動けるのか、というのは、志穂だからと納得するしかないのだろうが、しかしそうだとすると、どこか納得がいかない俺がいる。

「分かったけど…、分からん…」

何が分からないのだろう、と自分に問いかける。少し首を捻って考えてから、俺は一つの疑問に行きついた。

それは、本当にその遊びがおもしろいのか、ということであり、また、それを本当に遊びと呼ぶべきなのか、ということだった。

俺の主観ではその志穂の動きは、何かの奥義を習得するために己に厳しい修行を課している武闘家の姿と被って仕方がないのである。楽しそうな要素が、残念ながらどこにも見つからない。

「志穂、それ、楽しいか？」

「うん、楽しいよ」

「どこらへんが？」

「んー、水で遊ぶところ？」

「他には？」

「あとは、いっぱいうごくところ」

つまり、志穂は水の中で動いているだけで楽しいのであって、特別にこの遊びが面白いというわけではないのかもしれない。というか、こんな誰にも出来ない異次元の遊びが面白いとは思えず、ただ辛く大変なだけのように思えてならないのだ。

しかしあるいは、できる人にとっては面白い遊びなのかもしれない。そうだ、さっきは俺もただ足を水に浸しているだけで楽しかったじゃないか。それと同じことを志穂は言いたいのかもしれない。それにあの動き、あの高速移動をするときに水面を切る感じ、あれが意外と気持ちいいとか、そういうあれかもしれない。

でも、それだけだったら普通に二人でやるのと比べて大きなメリツトがあるわけじゃないし、あんな大変そうなことをしないでいいじゃないか。みんな楽しんでるようにした方が、絶対楽しいに決まっているんだしさ。

しかし、それは出来ないものの考えでしかないのかもしれない。人よりも何か抜きんでている人というのはどこか独特の視界を持っている、身長の高い人の視界が低い人のそれとは異なるように、のである。だから出来るようになったらそのよさが見えてくるのかもしれない。

「……………」

あゝ、なんか頭痛くなってきた……。なんでこんなことをぐるぐる考えないといけないんだ……。

「…、俺、ちよつと木陰で休んでくる……」

「あれ、ゆっきい、やらないの？」

「後でにしてくれ、頼む……。霧子とでも遊んでろよ、二人プレイで」

「はゝい。これね、実は二人プレイの方が面白いんだよ、ゆっきい」

「そうか、それは知らなかったぜ」

もう、なんでもいいよ……。

俺は湖から抜け出すと、脱いだくつを拾って姐さんが休んでいる木陰まで退散するのだった。

「おや、どうした、三木」

姐さんは、木陰の草むらに自分の羽織っていたシャツを敷いて、優雅に寝転がっていた。まるでビーチパラソルの下で寝そべっているような、そんな風情が感じられる。

「隣、座っていいか？」

俺がそう聞くと、姐さんは何も言わずに体を起こして隣を空けてくれる。そこに俺はよいしょつ、と座らせてもらう、いや、寝転がるのだった。

「ああ、別に構わないぞ。天方も遊びに行ってしまったって、暇していたところだ」

「それじゃあちようどよかったな」

上着を脱いで座った姐さんは、なんというかとてもセクシーで、身につけている白にいろいろな原色の水玉が散らされたビキニが目にあぶしい感じだった。寝ころんで斜め下から見ると、そのセクシーさが特に際立っているの、妙にドキドキしてしまう。

「俺も、ちよつと休むわ」

「皆藤と楽しそうに遊んでいたようだったが、それはもういいのか？」

「いや、なんか、変に疲れちゃって……」

「そうか、それならばゆっくり休むといい。十分に休んだら、また遊びに行つてこい」

「ああ、そうするよ。…、なあ、姐さん」

「ん？ どうした？」

志穂のしていた一人プレイ水かけっことについて聞こうとして、少し躊躇。姐さんもけっこう身体能力高そうなので、もしかしたら志穂のしていたアレを知っている、というか出来るかもしれない。そうなるってしまうと知らなくて出来ない俺の方がダメみたいな雰囲気になりそうで、少しだけイヤだった。

いや、まあ、きっと志穂が一人で開発して一人でやっていることだろうし、姐さんがあんなアホっぽいことをしているとところなんて想像できないし。心配することもない、と思いたい。

「どうかしたのか、三木？ 何か聞きたいことでも？」

「あの、さ、さっき志穂がやってたやつなんだけど……」

「ああ、一人でやる水かけっことか」

「知ってるんだ……」

思っていたよりも、姐さんの返答は早かった。なんだろう、もしかして俺が知らないだけであの遊びは比較的ポピュラーなものなのだろうか。まさか、霧子も知ってるとか、ないよな……？

「あれ？　そういえば、霧子は？」

「天方なら、お前に追われるまま向こうの方に逃げて行ってしまったぞ」

「あっちって…、ああ、あの岩場か」

そこは、岩場というのもどこか不適切な感じのする、開発の途上で出ってしまった少し大きめの岩が置かれているような、そんなところだった。たぶん、魚が棲みつくからみたいな理由で置かれているに違いない。

というか、ちょっと追いかけられたからってそこまで逃げることはないだろうに、まったく、臆病な野生生物みたいなやつだ。

「探しに行くのか？」

「いや、じきに戻ってくるだろ。あれくらいなら、さすがに怪我することもないだろうし。そ、それよりも、あの遊びについてなんだけど……」

そういつて湖の方に目を向ければ、そこでは志穂が変わらず一人で水かけっこをして遊んでいた。その動きはさっきよりもだいぶキレていて、ちょっとした瞬間移動みたいな雰囲気すら漂っていた。

あまりに速く動くので、ちょうど円を描くように動いていることもあり、その中心では絶えず水の塊がぶつかりあっていて、何か一つの噴水を模した前衛芸術みたいな気配を感じる。

「ああ、あれか。私も昔な、たまにやったものだ。ふむ、懐かしいな」

「へえ…、あれを……」

派手に水しぶきを上げながら無為にぐるぐると回っている志穂の姿を見ていると、なんとなく自分の尻尾をおもちゃだと思ってぐるぐる回りながら追いかけてまわしている犬の姿を思い出した。遠目から



見ている分には非常に微笑ましいのだが、とても頭が悪そうに見える。

他の人の前ではしないように、後でひっそりと教えてやろうと思った。

「まあ、私は小学校の初めのころにはもうしないようになっていたから、あそこまでの速度でやったことはないのだがな」

「なんかさ、いろいろ鍛えられそうだよな。足腰とか、バランス感覚とか、三半規管の強度とか」

「そうだな、あれはなかなかきついんだぞ。特に速度を落とさずにずっと続けるのが大変なんだ」

「聞きたいんだけどさ、あれは遊びなのか？」

「遊び、だろうな、おそらく。小さいときは遊びに全力を尽くすだろう、それと同じような感覚だ」

「…、良く分からないんだけど……」

「まあ、分からなくても、皆藤が楽しく遊んでいるのだからいいではないか。誰かを危険な目にあわせているわけではないのだから」

「そうかもしれないけど…、いや、止めさせてくる。周囲の目と世間体が気になって仕方ない」

「そうか？ 三木がそうしたいならそうすればいいが、ただ遊びを取り上げるのではなく、何か別の遊びも与えてやるんだぞ」

「二人で水かけっこして遊ぶよ。それなら健全だろ」

「ああ、そうするのがいいな」

姐さんは、俺がもう一度志穂のところに行くからだろうか、再び横になるとひらひらと手を振って見送ってくれるのだった。世間体というのは、志穂がアホと思われてはかわいそう、というのもあるが、それと同じくらいに、志穂の友だち然としている俺たちまでもが同様にアホなのでは、と思われるのがイヤだというのもある。

ここは自分のためにも志穂のために、あの滑稽な一人遊びを止めさせるのがいいだろう。

「じゃ、行ってくるわ。おーい、志穂っ!!」

## 波打ち際で、あったこと？

「うゆ？ ゆっきい、もうおやすみはいいの？」

呼びかける俺の声を聞いて、志穂は一人水かけっこを止めてこちらを向いた。志穂が急に止まったことによって、出来てしまった小さな渦から一つ大きな波が砂浜へと打ち寄せる。

「志穂、その一人プレイを止める。見てるとバカっぽくてめっちゃ恥ずかしい」

「えー、おもしろいのにー」

「不満げな声を出すな。代わりに二人プレイでいっしょに遊んでやるから我慢しろよ。さっき自分でも二人プレイの方が面白いって言うてただろ」

「ゆっきいがいっしょに水かけっこしてくれるの？」

「ああ、霧子もじきに戻ってくるだろうし、みんなで遊ぼう。っていうかみんなで遊びに来てるのに、どうしてお前に一人でそんなことやらせなきゃいけないんだよ」

みんなで遊んでいて、それぞれが勝手に一人遊びをしているなんて、そんなの集まった意味がないではないか。せっかく集まるんだったら、みんなで出来ることをするのがいいだろう。

「ゆっきい、ほんとに二人プレイしてくれるの？」

「あ？ 別に大したことじゃないだろ。みんなで遊ぼうぜ、っていうだけのことだよ」

「よし、ひさしぶりだから、がんばるぞー」

「水かけっこ、久しぶりなのか？ まあ、志穂は泳ぐの方が好きそう感じるし、波打ち際で遊ぶなんてしないのかもしれないけど…、っていうか、なにをがんばるんだよ。水かけっこはがんばる遊びじゃねえよ」

「えっ？ 水かけっこはがんばらないとまけちゃうんだよ？ しんけんしようぶ、なんだから」

「水かけっこが勝負だったことは、俺は一度もないなあ……。まあ、がんばらないとびちよびちよにされるかもしれないけど、それも一つの楽しみだろ」

「ダメだよ、いっぱいぬれたほうがまけなんだから。がんばってかけて、がんばってよけないと」

「まあ、お前がそうしたいんだったらそうしろよ。俺は普通にやるから、多分お前が勝つんだろうけどさ」

「ゆっきいもがんばらないとだよ」

「そこそこがんばるよ、適当にな」

「むー、じゃああたしがかつちゃうからね!」

「別にいいよ、どっちでも。っていうか、俺はお前が一人プレイを止めれば何でもいいんだし」

「じゃあじゃあ、かったひとがまけたひとに1コおねがいしていいルールにしよう。そしたらゆっきいもまけたくないでしょ?」

「それは…、確かにイヤだな。志穂のお願いを聞くって言うのは、ちょっと怖いぜ」

「ゆっきい、まけないようにがんばる?」

「よし、いいだろう。しかし本気でやるとなったら簡単に負けてはやらないぞ」

「いいよ、よし、がんばるぞ!」

志穂は、俺が勝負を受けてやると、がぜんやる気が増したようで、肩とか足首とかをぐるぐる回し始め、かなり本気で準備を整えているようだった。どうして水かけっこごときでそこまでがんばれるのか聞きたい。

一つお願いを聞くと言っても、まあ、そこまで厳しいお願いをしてくるわけもないわけで、そして同様にこちらが勝ったとしてもそこまでのお願いをするつもりもない。俺にとってみれば、それはそんなにやる気を増大させる要因にならないのだが。

「ちなみに、志穂は勝ったら何をお願いするつもりなんだ?」

「えっとね、とりあえず初めはかんたんなので、むこうまでおよい

できてもらおっかなあ……」

志穂は、そう言って「向こう」を指差した。しかしその「向こう」とは「あそこ」とか「あっち」と表現するのが難しいほどに彼方だった。

この湖は、言っておくがかなりデカイ。志穂が指差しているのは、その距離がもっとも長くなる地点同士を結んだもので、つまりはこの湖をまっすぐ泳いで横切ったときに一番厳しいコースだ。

それが果たして具体的にどれだけの距離なのかは、残念ながら目算できないのだが、少なくとも、それが軽い罰ゲームで泳ぐ距離でないことは明らかだった。

どうして、そんな距離を、俺が泳がなくてはいけないというのだ。

「…、がぜんやる気出てきたぞ！ 絶対に負けねえ！！」

「ゆっきい、やる気でたんだ！ ようし、あたしもまけないぞ！」

「で、これってどうやって決着付けるんだよ」

「えっと、まけたなあ、っておもったらまけたよ」

「それ、逆に負けじゃないぞ、って思い続けてたらいつまでも負けにならないじゃないか？ お前、どんなになっても絶対に負けを認めようとしないだろ」

「そんなことしないよ、まけたときはまけたもん」

「ほんとか？ お前、負けず嫌いだからなあ……」

「ゆっきいだって負けずらいだよ」

「まあ、そうなんだけどな？」

まあ、基本的に俺も志穂も負けず嫌いなんだから、この戦いはきつと勝敗がつかないに違いない。たとえばお互いに一発ずつ殴り合って先に音をあげたほうが負け、とかいうルールだったりしたら最終的には根性の勝負になるのかもしれないけど、今回は別に水に濡れるだけなわけで根性すら必要ない我慢合戦になるのは目に見えてるのだ。

そうすると、間違いなく決着がつかない。少なくとも俺はそんな程度のことで負けを認めないし、おそらく志穂も負けを認めない。水

かけっこだが、泥仕合になる。

「よし、勝負だ、志穂。悪いけど、負けてやらないからな」

そして俺は、ジーンズを脱いでトランクスタイプの水着になり、上に来ていたＴシャツを脱いでいくら濡れても問題ないように身支度を整える。脱いだ服は砂浜に投げ捨て、濡れてしまわないようにしておけばいいだろう。

「そういえば、その水着、自分で選んだのか？」

「ちがうよ、きりりんがこれがいいんじゃない、って」

「ああ、霧子が選んだのか。けっこう似合ってるんじゃない？」

志穂の水着は、いわゆるビキニと呼ばれるもので、その中にも特にホルターネックというものがあった。柄は黄色とオレンジの太めのストライプで、なんとなくシュツとした感じがして、志穂のすばやい感じがより強調されているような気がした。

というか、さっき俺が拾った志穂の脱ぎ捨てたキャミソールと柄の感じとかが完全に一致しているんだが、これはうまく合わせたということなのだろうか。それとも、もしかしてあのキャミソールまで含めて一つの水着なのだろうか？

「志穂、さっきお前が脱ぎ散らかした服の中にその水着とまったく同じ感じのキャミソールをあったんだが、それは水着のパーツじゃないのか？」

「ん？ えっと、あつ、そうだった。服ぬいでるいきおいでぬいじやったんだった。ねえねえ、どこにあるの？」

「姐さんに訊けば出てくると思うけど？」

「じゃあ、ちよつととってくるね。ちよつと待っててね！」

「おお、行ってこい行ってこい」

志穂はシュパツと姐さんの方に走っていくと、身振り手振りを激しく交えながら事情を説明して姐さんにそのキャミソールを探してもらっているようだった。そして間もなく、俺の小さなバックのそばに積まれた洋服の中にそれがあることを発見する。

そしてそれをよいしょよいしょと着ると、再び俺の下へと戻ってく

るのだった。やはり、そのキャミソールは水着のパーツの一つだったらしく、さっきよりもどことなく全体的に整った感じがする。というか、こうしてキャミソールまで着た方が志穂には似合っているかもしれない。

「いや、それは当然か」

霧子を選んだのは、もちろんこうして全てのパーツがそろった状態のものであり、全て身につけたのが志穂に似合っているだろうと判断したのだ。それならばこそ、パーツが欠けている状態よりも完品になっている状態の方が似合っているに決まっているのかもしれない。

「ゆっきい、どう？ 似合う？」

「おお、かわいいかわいい。色合いが志穂に良く似合ってるぞ、元気な感じで」

「きりりんがね、あたしはたてじまの方がにあうよ、っておしえてくれたの」

「へえ、そうなのか。それならいいの選んでもらったんだな、志穂」  
「うん、これね、すっごくうごきやすいんだよ。水の中でおよいでもぜんぜんじゃまにならないの」

「えっ、そんな観点？ 普通にかわいいから、でいいじゃねえかよ」  
「このきりりんがえらんでくれた水着があれば、きっとサメにも勝てるとおもうんだよ」

「いや、サメは止めとけよ、水中は奴の独壇場だぞ」

「そうかな…、一回目のこうげきをよけて、きゅうしょにハッ、ってビームをうてば」

「はっ？ ビーム？ 人体からビームは出ないぞ？」

「えっと、ビームじゃなくって、なんてったっけ…、ししょははっけえっていったよ」

「はっけ？ 八卦っていうと占いのことか？」

「わかんない。えいっ！ ってやったらできちゃったし、ししょはくわしくおしえてくれなかったから」

「そんな良く分らん技を使って戦おうとするな。サメなんかと戦ったら食べられちゃうぞ。骨まで残らずおいしくいただくかれちまったら、俺はどうやって志穂を供養したらいいんだ」

「んゝ、ゆっきいがそういうなら、やめとくゝ」

「そうしろそうしろ。無理してもいいことないぞ。それよりも安全に水かけっこしようぜ」

「あつ、うん、するする。じゃ、いくよゝ」

志穂はさっきやっていた一人プレイのときと同じように、腰を折ってひざを軽く曲げて両手を水面に差し込んで構えるので、俺も同じようにして構える。

お互いの距離は、二メートルよりも少し広いくらい。この距離で水かけっこをしようというのだから、これは手数で押し切った方が勝ちということになるに違いない。

よし、やってや

「えいやゝ」

チューーーーーッ………！！

「……、はっ？」

思わず、声が出てしまった。

呆気にとられてしまって、反撃することができない。

「おっしい、もうちょつとだったのにゝ」

その楽しいな志穂の声から少し遅れて、俺の頬から、どうしてか一筋、赤く温かな血がつつ、と流れる。

頬が、どうしてか熱かった。なにが起こっているか、全く分からないかったが、何かが頬を掠めた感覚だけはあった。

「次ははずさないよゝ」

もう一度、今度こそはずさないように狙いを定めながら、志穂は両手を再び水の中へと浸す。

俺は、今なにが起こったのか、必死に考えた。

俺は志穂とほぼ変わらないタイミングで動作を始めたというのに、しかし結果はそうにはなっていなかった。志穂の腕の振りの速

度は、さっきの一人プレイのときとは比べものにならないものだった。

そういえば志穂は、さっきの一人プレイのことを二人プレイの練習のような言い方をしていたかもしれない。そうか、あれが練習いうことは、これが本番なのだ。

本番ということは、練習では出し切っていなかった全力の本気を見せてくれるということに他ならず、つまり今起こった不思議な状況こそが、志穂の本気なのである。それならば志穂の本気によってなにが起こったのだろうか。

ヒントは、耳元をかすめるように何かが飛んでいったかのようなさっきの残響音と、そして俺の頬に刻まれた不思議な擦過傷のような傷跡。一つ間違いないことは、志穂が水を手で掬ってこちらに向かって飛ばしているということ。

「えいや〜」

「っだあああああああ！！」

志穂が再び水面から手を振り抜こうとして瞬間、頭の中で全てのピースが合致した。考えてみれば、どこをどうこねくり回してもそこ以外の思考の終着点は考えられず、それが正しいのかどうか、というところまで思考を運ぶ前に、ショートカットして体を思い切り横に、志穂の振り手の斜線の外に向かって放り出す。

俺のさっきいたところを、何かが通り過ぎていくような音がした。

そう、まるで、弾丸か何かのように。

そして俺は、足首くらいまでしかない深さの水に、横滑りしながらその身を浸すことになった。

「あゝ、よけられちゃった〜」

それが何なのかといえば、水の塊に間違いあるまい。志穂の両手が振り抜かれることによってこちらに向かって飛ばされた水の塊が、その正体である。

その手があまりに高速で振り抜かれたため、本来ならそれなりにゆっくりと、一塊とその周囲のわずかな飛沫として



こちらにやってくるはずのそれが、今に限ってはものすごい速度で、とても細かく鋭い刃となって飛来しているのである。分かりやすいえば、本来ならスプラッシュするはずの水が、なぜかスプレッドして俺に襲いかかっているということだ。

そして、一撃目が頬の擦過傷程度ですんだのは、まさに奇跡の賜物というべきだろう。偶然過剰に散会したつぶてのちようと合間に俺がいて、偶然その攻撃が俺に当たらずに通り過ぎていった、ということでしかなく、おそらくあと一歩横にいたらあの散弾の餌食になっていたことだろう。

どれだけの速さで腕を振り抜けばこんなことになってしまうのか全く分からないが、なっているのだから受け入れるしかない。

「ゆっつきい、すごい本気だね！ あたしも負けてられないや！」

しかし志穂は自分のしていることが危険なことだと認識している様子はなく、続いて三度目の攻撃を行なうために次弾の装填を行なっているようだった。

これはマズいことになった。志穂が水かけっこは久しぶりと言っていたが、こんなことをしていたんだったら当然だ。知っていてキルゾーンにわざわざ足を踏み入れる人間など、いるはずがないのである。

そして今、おそらく背中を向けたらやられるだろうことから、逃げてしまうことはできないし、きつと待ったをかけても聞く耳を持たずに攻撃を続けることだろう。逃げることも止めることもできず、俺は打つ手を失いつつあった。

俺は、今この瞬間、明確に追いつめられている。

## 波打ち際で、あったこと？

人間という生物は死の直前に走馬灯を見るという。それがどういう仕組みで起こっているのかは、俺はまったく知らないのだが、そこにある意味はなんとなく分かる。

走馬灯を見ている時間というのは、つまりは人間に与えられた最後のチャンスタイムなのではないだろうか。何らかの外的な要因によって自分が死んでしまう、そんな状況に直面したときに、「ほら、なんとかあがいて状況から逃げ出してみろよ」と神様が面白半分に与えるのが、それなのではないかと思うのだ。

そして、そこで走馬灯を見るというのは、おそらく諦めているに違いないのだ。走馬灯というのは、過去の体験のフラッシュバックで、言ってしまうえば自分の生きてきた事実の再確認である。そんなものを見ているということは、もう自分の命がないと白旗を挙げているのと同じなのだ。

俺は、どんな理由で死ぬにせよ、絶対に走馬灯だけは見たくない。最後の一瞬まで、どのようなことがあっても、生き残ることを諦めたくはない。あがいて、もがいて、なんとかして生きるための道を拓きたい。

走馬灯をみる暇があったら、その一瞬にできるだけ考えたい。命絶える最期の瞬間まで、無様でも生き汚くてもなんでもいいから思考を止めることだけはしたくない。死ぬことを受け入れることだけは、どうしてもしたくなかった。

まあ、つまりはただ諦めが悪いだけの負けず嫌いなのであり、おそらくもっとスマートに状況を回避することは出来たに違いない。

どうでもいいことで負けたくないから変なところで突っ張って、そこで突っ張った分がどこかで出っ張って、その応報としてキツイ状況が俺の身に降りかかってくる。すべては身から出た錆であり、自己責任において生じている問題だということはよく理解しているし、

その一連の流れについても俺なりに重々承知しているつもり、ではある。

そもそのところ、どうでもいいことで妥協して折れるのが嫌で突っ張って、小学校と中学校合わせて数度、家の人を学校とか警察とかに呼び出されるレベルの巨大な抗争を起こしてきた事実があるわけで、よくよく理解するだけのことは経験してきているのだ。

小学三年生のとき、霧子のことををからかっていじめているやつに、かわいそうだからやめてやれ何が面白いんだ、と注意してやったら、五人がかりで子どもなりにかなりひどい罵倒を重ねてきたので、広太といっしょになって、そのうちの三人が一時期学校に来れなくなるくらい言葉で責め立ててやったことがあった。やりすぎだと学校におばさんが呼び出された。

小学五年生のとき、クラスの女子が六年の男に何かの理由で脅かされたとかいうことを訊いて、そっちの方が明らかに悪いんだぞということをしつかり論破するまで説いてやったら、逆ギレされて偶然落ちていたかなり太い木の枝で頭を殴られたのだが、額から血をだらだら流しながらそいつを立てなくなるまでボコボコにしたことがあった。正当防衛なのは状況的に分かるけど、やはりやりすぎだとおばさんが呼び出された。

中学二年生のとき、うっかり肩がぶつかってしまったのを謝ったら、ヤンキー的なバカに謝り方が足りねえんだよ！　みたいな言いがかりを、胸ぐらを掴まれながらされたうえ頬を一発殴られたので、広太と二人がかりで三人まとめて病院送りにしたことがあった。一人は顔が青あざでブルーマンのようになっていて、一人は早々に気絶してカニのように泡をぶくぶく吹いていたし、そして最後の俺を殴った一人は、広太の逆鱗に触れたらしく股間を全力で、合計で五回ぐらい蹴りあげられて大事なところをたたきつぶされていた。

そして俺が呼んだ救急車といっしょに、呼んでいないはずのパトカーまでやってきてなぜか俺たちが警察に連れて行かれた。事情と経緯をはっきり説明して、目撃者のしつかりした証言もいくつかあが

っていたようなのだが、過剰防衛だとおばさんが呼び出された。

中学三年生のとき、広太と霧子といっしょに電車に乗っていたら、二人で四人分くらいの席を占領してぎゃあぎゃあ騒いでいるバカそうな高校生風の男がいたので、前におばあさんが立っているんだから譲らなくてもいいから詰めて場所を空けてやったらどうですか？

と丁寧に言ってやった。何が気に入らなかったのかキレたらしく次の駅で降りた俺たちを追ってきたので、話を聞いてやると、舐めてっとボコるぞ的なことをわめき散らしつつ殴りかかってきて、あろうことか霧子に手をあげようとしたので返り討ちにしてやり、線路にたたき落として、土下座でこれから電車に乗るときはマナーを守るしおばあさんも大切にしますと謝るまで、ホームにあげてやらなかった。

二十分で次の電車がやってくることは彼らにも分かっていたようで、ホームに昇ろうとするたびに広太と俺に顔を足蹴にされるのも精神的かつ肉体的にきつかったのだろうし、十五分までは粘っていたのだが、とうとう地に額をこすりつけて謝ったので許してやろうと手を貸してやり、挙句の果てには鼻血の治療までしてやったというのに、俺たちとその高校生たちは鉄道警察に確保され、おばさんが呼び出された。

どこのヤンキーの抗争かと思ったと、そのとき俺たちを逮捕した鉄道警察のおじさんは笑っていたが、しかしやりすぎはいかんよ、とマジ顔で言った。俺たちの言い分の正当性と論理的な正しさには同調しつつも、いくらなんでもやりすぎだよ、と。そのときばかりは俺も自分がやりすぎだったと反省したものだ。とりあえず、これからはもうちょっと違う方法で物事を解決しよう、と思った。

ちなみに、線路の上では小便をチビるほどビビっていたが、警察には俺たちの正当性と自分たちが悪かったんだということをしきりにアピールしてくれたその高校生たちは、実際今でも知り合い程度には関係を保っていて、今年は大学受験で忙しいんだそう。なんでも俺たちのおかげで改心したとか何とか、この間送られてきたメー

ルに書かれていて、自分で勝手に悔悛しただけだろうに律儀な人だ、  
と思ったのを覚えている。

話が違う方に逸れてきた。つまり、俺が言いたいのは、俺自身自分の愚かさにはよく気づいているわけで、しかしそれを改善することができない程度には愚かで、負けることは、正しくないことと同様に嫌いであり、今回はまた少し違うかもしれないけど、同じようにまた愚かなことをしてしまったかもしれない、ということなのだ。自分で言っていて、なんだか分からなくなってきた。

だから、俺はやっぱバカだなあ、ということなのだ。危機に陥ったり喧嘩をすることになったとき、それが危険の強度として高ければ高いほど、決まって俺の思考は速く速く回る。今回も、バカげた状況には違いないが、しかしかつてない危機に直面している俺の思考は、かつてないほどの速度で巡り巡っていた。今までしてきたような思考をほぼ一瞬で行なっているのだ、さすがにここまでのことはこれまでにない。

「せえの…、そりゃ〜」

再び、志穂の手が俺に向かってシュツ、と振りぬかれ、悪気のない攻撃が俺にぶつかるために飛んでくる。二撃目の回避に全力を費やした俺だったが、すぐに立ち上がるとまたついさっきと同じように体を思い切り横に投げ出した。

さすがに横に逃げた俺をホーミングしてくるようなことはなかったので、水たちは猛スピードで俺がさっきいたところを通り抜けていき、だいぶ遠くにぱしゃぱしゃと着水しているようだった。ヒュンッ！ シュオン！ …、チャパチャパ…、と連続する音だけを認識することができる。

「ゆっつきい、すごいよける〜。なかなか当たらないなあ〜」

志穂はそうぼんやりと言いながら再度、容赦なく次弾の装填を行なっている。こうしていれば、なんとかかよけ続けることはできるかもしれないな。

しかしそれでは決着が着かない。負けを認めてギブアップするには、

相手の放った水を少なからずこの身に受けなくてはならず、自分が回避するためにびしょびしょになったのは、この水かけっこで濡れたうちには入れてもらえないだろう。

それならばどうするか。このまま横に跳んで跳んでびしょ濡れになりながら岸まで逃げるか、あるいは勇気を出して攻めるかのどちらかしかないように思う。どう攻めるかは、そのときになってから考えます。

というか、もうここまでびしょ濡れなんだから、上手く負けて泳ぐのがいいような気がしてきた。しかし負けるのはイヤだし、そもそもどうやったらうまく負けることができるのか分からなかった。

唯一つけ込むことができそうなのは、その攻撃の一撃一撃に溜めが必要なことくらいだが、もしそのタイミングを間違えれば文句なしで打ち込まれることになる。もう少し見ないとそのタイミングを確信することはできないし……。

「もっと速くしたらいいのかなあ？」

「……、うおおおおおおおおおおおおお！！！」

俺は、志穂の不穏当な発言を打ち消すように、その小さな体に向かって全力で水をかけ始めた。水に両手を差し込み、かき出す。その二つの動きを、肩の関節がおかしくなるのではないか、というほどに両手を動かしした。志穂ならばおそらく、それに耐えつつも攻撃を行なうことが出来るのだろうという予感がするが、しかしどうしてもそうせずにはいられなかった。

今のまま逃げていれば負けないなんて考えは、捨てよう。志穂はまだまだ力を残しているし、いくら速く動いても逃げられない攻撃がいつ襲ってようになるとも限らないのだ。

それならば、まだ反応することができる今、無駄かもしれないが攻めるべき。そう結論するしかない。

「やゝ！」

さっきよりも少しだけ気合を入れた声で、志穂が腕を振りぬこうとしているのが、自分の巻き上げている水のカーテンの向こう側に見

える。さっきとほぼ同じタイミングで、俺は攻撃を止めて横に跳んだ。

俺が全力を込めて張っていた水の弾幕は、しかし志穂の攻撃の前にはまるで無力だった。少しでも防御の役も為してくれるのでは、とうつすらと期待していたのだが、しかしそんなことなく、まるで何もないかのように、志穂の攻撃は貫通して飛んでいったらしい。それはさっきと同じように遠くでいくつもの着水音が聞こえたから分かったのであり、もちろんその攻撃の軌跡が見えたというわけではない。

そして二発が、右側に跳んだことで残ってしまった左足を掠めた。あくまでも掠めただけなのでまったく痛みはないのだが、しかし確かに擦った感触はあった。それは遠くない将来、その攻撃が避けようとしているはずの俺を捉えるということを意味しているように思えた。

タイミングを見なくては、などと日和っている場合ではない。俺はその瞬間、確信した。

右足が水面を突き破り、そう深くない湖底に着く。

滑らないように上手く力を込めて、俺は急激な方向転換によって進行方向を志穂の方へと強引に向け、思い切り一步を踏みこんだ。志穂は俺の動きの変化に気づいてすぐさま次弾の装填を急ぐが、しかしすぐそれを行なうことができるわけではない。

さっきまでで四回見て分かったことは、だいたい攻撃のリズムは一、二の、三！の三テンポということと、おおむね攻撃態勢に入ってから二秒は要するということ。

俺はその間に間合いを詰め、志穂を押し倒してタップを取る。そうすることでは、志穂に水をかけまくることでギブアップを取れそうにない今、この戦いを勝利することはできない。

卑怯？ 必要悪だ。

志穂は、急に俺が自分に向かってきたことに驚いているようで、手の動きは止まっている。これなら振りぬかれることはないだろう。

「志穂！ ごめん！！」

腰をかがめて重心を下に移している志穂の両肩を、どんっ！ と押すと、思ったよりも簡単にバランスを崩し、仰向けに倒れていく。これであとは、腕に膝を置いてやってタップするまで

「あっ」

志穂は、その身を湖底に沈める直前に、そんな間の抜けた声をあげた。そして、俺が何かを理解するよりも早く、全身から力が抜けるほどの痛みが、全身を駆け抜けた。

それは別に志穂としてもしようとした攻撃ではなく、突然飛びかかってきた俺に対する緊急の応戦策として手での水かけ攻撃を強行するよりも足での水かけ攻撃を選択し、そして実行したそれによるものだった。いや、その攻撃自体ではなく、そこから副次的に発生してしまったものというか。まあ、冷静になって考えると事故だったのだろう、ということはずぐに分かる。

志穂の、俺に水をかけようと振りぬいた足が、俺の股間をちょうど打った。しかもかなり思い切り。男なら一生涯に、事故であれ何であれ、一度くらいは経験することだ、それについてはそれなり以上に共感してくれることだろうから、あまり詳しく説明するのは省かせてもらおう。

そして俺は、広太に大事なところを蹴り潰されていたヤンキーの思いを理解すると同時に、まるで水死体のように湖面にこの身体を浮かべることになったのである。

.....



## 恥ずかしがり屋と髪フェチ野郎

「ああ、そうだったそうだった。思い出した」

姐さんの話を聞きながら、俺も途中からは記憶がかなり蘇ってきて、かなりスムーズにそれを思い出すことができた。そういえば、確かにそんなことがあったな。

きつと覚えていなかったのは、大したことがないから忘れてしまったわけではなく、あまりに鮮烈すぎる痛覚を記憶として記録しておくことを無意識に脳が拒んだに違いない。

「あれは、大丈夫だったのか？ 男性は、ああいうことをされてショック死することもあるのだろうか？」

「いや…、ショック死するかどうかは知らないけど、今こうして何事もなく生きてるし、たぶんだいじょぶなんじゃないのか？」

「しかし、近代以降のおそらく全ての格闘技において金的を打つことは禁止されているわけだし、やはり男性にとってそれは危険なことなのだろうことは分かるし、弱者が強者に勝利することに主眼を置いた中国拳法でも金的は一つの絶対的な攻撃として存在していることからそれが間違いなく一つの有効な攻撃手段だということが分かるぞ」

「そう言われると、心配になってくるな……。前に読んだ格闘マンガに、男は内臓を股間に無防備に付けている、って書いてあったっけ。普通は筋肉とか骨格とか、強靱なものに守られているはずの繊細な内臓がそんなところにあったら、そりゃ狙うだろ、ってさ」

「そうか、そう言われれば確かにそうだ。三木、今さらかもしれないが、一度医者に行っておいた方がいいのではないか？」

「い、いや、そこまでじゃないって……。ほら、今までちゃんと問題なく機能してるし、だいじょぶだって。機能障害とかもないし、な？」

何気なく俺がそういうと、しかし不意に姐さんは顔を赤くしてしま

って、顔をそらしてしまった。一体どうしたのかと思うが、目を合わせてくれないのでその真意を今一つ汲み取ることができない。

「ひ、卑猥なことを言うんじゃない…、バカ者め……。堂々とそういうことを、女子に対して言うな……」

「いや、別に、普通にトイレにも行けてるぜ、っていうだけなんだけど…、そういうことって…、あつ、もしかして…、姐さん……」

「あつ、いやっ、私が言ったのも、それだ！ まったく、女子に向かって、食事中に、トイレがどうなどという話をするんじゃない、三木！ 決して！ 私は自慰行為のことなど、考えていないぞ！」

「…、そうだね、姐さん」

姐さんが自爆しているので、俺はやさしく全てを受け入れることにした。大丈夫、俺はそんなこと気にしないさ。俺だって時折、ふいに性的な情動に襲われることがある。俺たちは健全な高校生なんだ、そういうところに思考が至ってしまうことだって、当然あるさ。

幸いにして今のところはないのだが、朝起こしに行ったところで霧子がそういうことをしていても、きっと見て見ぬふりしてやることができるだろう。大丈夫、それくらいのスルースキルはあるつもりだ。しかし、起こしに行つて霧子の隣に男が寝ていたら、俺は躊躇なくそいつのことを殴り殺すだろう。

「うう…、やめろ…、やさしい顔ではほ笑むんじゃない……！ お前が、機能障害などというからいけないんじゃないか……！」

「ああ、俺が悪かったよ、姐さん」

「やめろ、お前に責任を転嫁して誤魔化そうとしているんじゃない！ 勘違いをするな！ 私のことを、そういうことをよく考えている、とか誤解した目で見るんじゃない……！」

「考えない、考えないよ、姐さん。俺の言い方が悪かったんだよ。気に病むことはないんだ」

「嘘だ…、絶対に分かっていない……！ よせ、誤解したまま、すべてを受け入れるぞ、みたいな顔をするな！」

「誤解なんてしていないさ。俺は姐さんのことを勘違いなんてして

ないぜ」

「うう…、不覚だ…」

姐さんは、つい口走ってしまったことをひどく後悔しているようだった。しかし一度口を突いて出てしまったものは、メールの本文を削除するように引っ込めることはできないのだ。

しかし大丈夫、俺は姐さんが隠れエロキャラだったなんて勘違いはしない。思春期ってそういうもの、ということなんだ、きっと。

「さあ、そんなことよりも話を続けようぜ。一生けんめい話をしてれば、きつとすぐにそんな細かいこと忘れるって」

「頼むから…、今すぐに忘れてくれ…」

姐さんが、本気で恥ずかしいようで、顔を真っ赤にしてうつむきこちらを見ないようになってしまうた。

だから俺は姐さんがこちらを見る気になってくれるまで一人で思い起こしと検証を進めていくことにした。ひとりでしゃべっているところを言をずっと言っているみたいで気味悪く思われてしまうかもしれないが、しかしこえも姐さんが復活するまでの少しの間を我慢するだけでいいのだ。

屋上にはあまり人はいないし、別に少しくらいひとりでべらべらしゃべっていたとしても、気にされることすらないだろう。それっぽちのことならば、俺も気にせずしていくことができる。

「話を続けよう。三時前に湖で遊ぶのは止めにして、一回宿に戻って荷物をおいて服に着替え直した。そのあとはお茶を飲んだりお菓子を食べたり、霧子が疲れて寝ちゃったり姐さんが晩飯の前に温泉に行ったり志穂がベットでぼんぼん跳ねてたりしたけど、問題はなかったよな。そこは姐さんも別に突っ込んでなかったはずだと思うし、今になって突っ込むってこともないだろう？」

姐さんは、俺と目を合わせてくれないが、話は聞いてくれているようで小さく俺の問いかけにうなずいて意志表示をしてくれる。俺はそれを見て、話をさらに先へと進めていく。

「で、館内のレストランに晩飯を食いに行ったとき、飯を食った後

はそれぞれの部屋に分かれるはずなんだけど俺は戻る部屋がなくて、一部屋しか取れてないってことをみんなに言った。でもまあ、今さう言ってもしょうがないことだし、って諦めてくれたんだよな。さつき、姐さんが言っただけにな」

姐さんは、再び小さく頷いた。俺はそれを見てまたもう少しだけ話を先に進める。もちろん、こんな普通に通る過ぎることができるところが今回の話の肝ということではなく、この後、巨大な問題が俺たちの前に立ちふさがるのである。

「それから、またみんなで風呂に行って、俺は男湯に行くんだけどそれに志穂が素知らぬ顔で着いてきて服を脱ぎだしたから、なんとかそれを阻止して姐さんと二人がかりで女湯に押し込んだ。そのとき女湯の暖簾を二三歩超えたけど、それは姐さんも事が事だからって許してくれたんだよな」

そういえば、常々疑問なのは、どうして志穂が俺にあそこまで懐いているのか、ということだ。もちろん、それなり以上に仲良くしているつもりだし、友だちの中でも上位にランキングされるのは分らないでもないが、まるで俺につき従うようにするほど懐いているのかは、実際のところよく分からなかったりする。

しかも去年のゴールデンウィークでそこまですべてになっているのだから、間違いなく入学してからそれまでの一か月程度の間に何かがあったのだろうが、しかしそれが何だったか俺には思い当たる節がなかった。絶対に、何か印象に残るようなことをしたんだったら俺が覚えていると思うし、その記憶がないのだからきつと何も大したことはしていないんだと思う。

というか、志穂をここまで屈服させる方法なんて、戦って勝つくらいしか思いつかないのだが、少なくとも俺にはそんな武力はないわけだ（当然、志穂の武力は俺がそれまでに滅ぼした他人に迷惑をかけるヤンキーやらなんやらとは比べ物にならないほどの大きさである。もちろんその身体能力が特に目につくが、戦闘能力の方も相当のものらしいとは、姐さんの談である）、当然それに勝つなんてこ

と出来るはずがない。いや、そもそも俺は志穂と、ゲームで勝負とかいうのはこの間もしているのでくはないが、肉体言語的な意味で戦ったことは一度もないわけで、勝つも負けるもないのだが。

「そのあと、風呂から上がって髪を乾かしてから寝ることになったんだな、三木」

「姐さん、もう平気なのか？」

「今日はこの話をするためにここまで来たんだ。大丈夫とか大丈夫じゃないとか、言っている場合ではない。しかし、正直に言っただ大丈夫ではないから、こちらは見るな」

「ああ、分かった。志穂は髪が短いから拭いて軽くドライヤーをかけてやったらすぐに乾いたんだよな。あいつの髪は意外と素直で柔らかいから、寝癖がついてもけっこうすぐに直るんだ。だから朝に少し櫛を通せば簡単にいつもの髪型にすることが出来る」

「私はまっすぐな髪質なうえに外側に跳ねてしまうくせ毛でな。皆藤と同じで櫛を通せば簡単にセットすることが出来るんだ。まあ、私の場合はセットするといっても縛ったり結ったりしないで今のように伸ばしたままにしておくだけなのだがな」

「俺は別にいいと思うけどな、伸ばしたままにしてる髪型って。それって結局素の髪がキレイじゃないとできないものだしさ、すごい魅力的な要素だと思うけど」

「そ、そうか？　そう言われると、意外と悪い気はしないものだな……」

「霧子も別にポニテで結わなくてもいいんだけどな、俺としては。あれだけ長い髪がさ、こう背中にふわって広がっててさ、風に吹かれてさらさらって流れたりしてさ…、俺はすごく、いいと思うんだ……」

「三木は、女子の髪の手が好きなのか？」

「そうだなあ…、女の子の髪が好きっていうか、髪の手の手のきれいな女の子は、好きだな。この間、メイの髪に触ったんだけど、すごい気持ちよかった」

「変態じみたことを言うんじゃない、三木。もっと女の子の姿そのものを見てやれ」

「いや、髪の毛が好きなんじゃないよ？ 髪の毛も好きなんだよ？」

「どんな髪でもいいのか？」

「いやいや、個人的にはロングヘアがいい。長い髪がさらさらして  
いるのが、特に好きだ」

「…、まさか、三木、天方が長い髪をしているのは、お前が無理を  
強いているのではないか？」

「別に無理強いはいしないよ。確かに、前に髪は長い方が好きだって  
言ったことはあるけど、別に短くしたら怒ったりしてゐるわけじゃな  
いし、霧子の髪は霧子の好きなようにしてるだろ」

「あれだけ長い髪は、やはり維持するのは大変なのだぞ。旅行のと  
きも大変そうに洗っていたし、乾かすときも一生けんめいにやって  
いたし、もう少し天方の身になってやった方がいいのではないか？」

「いや、どうすればいいんだよ……。切ってやればいいのか……？」

「いや、特に何をしろというわけではないが……」

「あつ、でもあれだけ。冬とかはさ、首に巻いてマフラーの代わり  
になるし、たまに俺も巻かせてもらうんだけどさ、意外とあったか  
いんだ」

「それはまた…、すごいことをやっているな……」

「姐さんもやってもらうといいよ。なんていうか、こうやさしいぜ、  
いろいろと」

「わ、私は、遠慮する」

「そうか？ あんなに霧子のかわいさに包みこまれる瞬間はないの  
に、もったいないなあ」

女の子の髪に触るときは、きちんと断ってから触るとか嫌がったら  
すぐにやめるとか、常識的な範囲でいろいろと気をつけなくては  
いけないことが多くて、いろいろ大変なのだ。嫌がる娘は本当に嫌が  
るし、そうなってしまえばそれから避けられてしまうし、今後の関  
係を賭けているという意味で、思ったよりも危ない。

しかし霧子は、長年培ってきた関係によって、気軽に髪を触らせてくれる。頭を撫でさせてくれるし首に巻かせてくれるし抱きしめさせてくれるし。いや、髪フェチとかじゃないよ？

あと、最近は志穂も撫でさせてくれる、というか、むしろ俺に撫でさせてくる。あいつはあいつで撫でられるのがだいぶ好きだから、俺と志穂で撫でて撫でられてお互いに充足し合っているのかもしれない。

短い髪は短い髪で、長いそれとは違ってまた風情がある。短いとわしゃわしゃと思いきり撫でてやれるしキレがいいというか、さわり心地がいいし。いや、髪フェチとかじゃないよ？

何度もうが、髪が好きなのではなく、髪も好きなのだ。霧子はいつでもいっぱいかわいがってやりたいし、志穂はよく懐いてきてくれるのがうれしいし、姐さんだって凛々しくて素敵だと思うし、メイはこれからよさをたくさん知っていききたいし、つまり、問題は髪ではないのである。

髪というのは、その魅力の一つを表すものでしかないのだ。まあ、いいと思う娘は大抵髪がきれいな娘だけど、別に髪フェチというわけではないのだ。

## 停滞と思考実験と終着点

ふとポケットの中にしまっていたケイタイを開いて見れば、休み時間が終わってしまうまでそう時間がないことに気付いた。話をしながらちまちまと弁当はやつつけていたので、食事が終わらないということはないだろうが、しかしこのままでは話の方が終わらないという事態が発生してしまうではないか。

まあ、もう検証するべき内容もそう多くない、というか最後の一つにまで至っているわけで、手早くそこへと話を進めていこうと思う。しかしここで立ちをはだかる最大の問題は、今から突入しなくてはならない最後のお話こそが、今日わざわざ屋上までやってきて姐さんと去年のことを思い出すことになった原因のそれだ、ということなのだ。

「か、髪の話は別にここですする必要はないんだ。三木、そんなことよりも話を先に進めてくれ。休み時間の残りが思ったよりも少ない。五限は移動教室だし、あまりここにギリギリまでいることはできない」

「ああ、分かった。っていうか、もう話すことなんて一つしかないよな」

「そうか、ということは、ついに私たちが話し合うべき議題へと話が進んだ、ということだな。さあ、三木、話しておくことがあったら正直に、全てをあますことなく包み隠さず言ってくれ」

「ぜひ、そうさせてくれ」

俺が今から立ち向かわなくてはならないのは、去年の旅行のときに、間違いがあっただけではないから、という姐さんの提案によって、女の子三人はシングルベッド三つをくっつけてつくった即席巨大ベッドで、俺は同じ部屋の中はあるが少し離れているソファーに、とあえて寝るところを男女で別にしたというのに、朝になって目を覚ましたら俺が女子ゾーンで寝ていた、らしいという事実だった。



俺はその日、霧子も志穂も寝るのがイヤに早いので、仕方なくささと眠ってしまったってそのまま朝まで目を覚まさなかったのだから、そんなことをしているはずがないのだ。しかし、俺は目を覚ましたら確かに女子ゾーンのベッドに、具体的には姐さんの横に寄り添うようにして横になっていた、のだそうだ。姐さんの言い分を信じるならば、俺はあってはならぬ状況をつくってしまったことになるのだろうか。

少なくとも俺がそこにいたという姐さんの証言はあるわけで、おそらく俺はまずそれを認めたくて、そんなことはしていないんだ、ということを立て証しなくてはならない。クリアしなくてはならない状況のレベルが、常識で測ることができないほどに高かった。

だってそうだろう、起こってしまった状況を認めたくて、自分はそれをしていないと示さなくてはならないのだ。それはきつと、前提条件として「はい」といったものを「いいえ」と論理的に打ち消すのと同じようなものだと思う。

こういう考え方を矛盾というんだ、と示すためのお手本のような状況だった。

「とりあえずだな、俺は姐さんの言ってることは信じようと思うんだ」

ただ一つの突破口があるとすれば、その状況を直接確認したのが姐さんしかない、ということだ。霧子と志穂は早い時間に起きられるはずがないし、俺は高いところから床に落ちた衝撃で目を覚ましたのだから、事実を確認することは出来ないのだ。姐さんによると目を覚ましたら俺が横で眠っていて、あんまり驚いたのでっさに俺のことをベッドから蹴り落とした、ということらしかった。姐さんは三人の中でも一番俺の近く、ベッドのソファ側で寝ていたので、実は、姐さんの横で眠っていて蹴落とされた場合も、俺の寝相が悪くてソファから勝手に落下した場合も、結果として発生する状況は同一だったりする。だからこそ、姐さんの言っていることが実はウソだった、ということも、決してありえないことではな

いのだ。

しかし、これは去年から同じスタンスなのだが、俺はそうだとは考えないことにした。姐さんはそんなことでウソを吐いたりしないし、意味もなく他人を貶めたりはしない。姐さんがそう言うということは、それは姐さん視点という縛りはあるものの、事実ということであり、まったく事実無根のウソということはある得ないのだ。

というかそのとき、姐さんの蹴りを喰らったらしい腹が地味に痛んでいたので、きっと姐さんの言っていることが事実には違いない、と思うだけなのだが。

「俺はあの夜、どうやってかもどうしてかも分からないけど姐さんの隣で寝ていて、目を覚まして俺を見つけた姐さんが驚いて蹴落とした。それは、俺も認めることにするよ」

「信じてくれるのか？ 客観的な証拠があるわけではないのだぞ、私がウソを言っているとは思えないのか？ というか、お前にとって不利になる事実なんだぞ？」

「自分にとって不利になる事実だって、姐さんがそうだって言ったらほんとなんだよ。俺は、姐さんがそんなことでウソを吐くなんて思っていない」

そもそも、姐さんがここまでこだわるってことは本当のことなんだよ。大したことじゃなかったり、自分の記憶に不安なところがあったりしたら、姐さんはこんな、わざわざ去年の話を引っ張り出してきたりはしないのだ。去年、けっきょく妥協し合っただけで不完全な解決までしか行きつけなかったことを気にして引きずってしまうくらい、これは姐さんにとっては重大で深刻、かつ確信を持っているネタなのだ。

いかに自分にとって不利になるとはいえ、それを否定してしまうことはできないのである。

「で、姐さんの言っていることは全部まるごと受け入れるとして、だ。ここで考えなくちゃいけないのは俺がソファからベッドにどうやって移動したのか、ってことだ。まあ、何とかして移動したん

だろうけど、しかし俺は夢遊病みたいに寝ながら歩きまわったりしないし、トイレに行くために起きてもない。つまり、俺は一回も目を覚ましていないし、ソファから体を起こしていないんだ」

「三木は私の言い分を受け入れてくれたのだ、私もお前の言うことを認めよう。お前は夜に一度も目を覚ましていないし、歩きまわったりもしていない。しかしそうすると、状況が硬直するな……」

「ああ、そうだそうだと、去年もそこで話が止まったんだ。なあ、姐さん、俺はどうやって、目を覚まさず、ソファから体を起こさずに、姐さんたちの寝ているベッドまで移動したんだ？　姐さんがさっき自分でも言ってたことだけども、ソファからベッドへの移動は、寝相が悪いなんて言葉じゃ説明できないぜ？」

「確かにその通りだ。このままではまた分からないから保留という、不確定極まりない妥協をすることになってしまうぞ。新しい情報を入れるか、前提を変えるかしないと、二の轍を踏むだけでしかない」

「前提を変えるってことは…、もしかして、俺か姐さんのどっちかがウソを吐いてるってことにするのか……？」

「新しい情報を提示することができない以上、そうする以外に出来ることはないだろう。いや、もちろん、私は自分がウソを吐いているとは言わないし、お前がウソを吐いているとも思っていない。単に思考実験というだけだから、誤解しないでくれ」

「そりゃ、俺だって、もちろんそのつもりだけども…、でも…、いや、やろう。俺は他にいい方法を出せないし、姐さんの言う通りにするのがいいかもしれない」

俺たちは、けっきょく議論を並行線上からずらすことができず為す術がないわけで、かなり無茶な方法で話を先に進めてみることにした。これはお互いにただの思考実験だと納得づくでやっているはずなのに、どこことなく不安な感じがしてならない。

「たとえば、もしも私が勘違いをしていたとしたらだが、…、前提が完全に破壊されるな。三木は、おそらくソファから単に転げ落ちただけで、私は夢でも見ていたのだろう」

「それは…、円満な解決だな」

「しかし私は基本的に朝は強いし、あまり現実的な夢は見ない。そうであれば良かったのだが、しかしおそらく勘違いということはない」

「まあ、そうだよな。姐さんが日ごろどんな夢を見るのかってことは置いておいて、俺も姐さんの勘違いって線は薄いと思うんだ。ということとは、俺の方が違うのか……？」

「そう、だな…、やはりこう、寝ている間のことのほうが不確定要素が多いからな。もしかしたら忘れているだけでトイレに起きていたり、飲み物を飲みたくて置きだしたりしている可能性は、なくはないからな」

「ああ、そうだよな。俺も姐さんの勘違いよりも俺の記憶違いの方があり得る気がするし」

「それで、うっかり間違えてソファアではなくベッドの方に来てしまったというのも、ありえない話ではない」

「ということは、やっぱり俺が悪いんじゃない？ 寝ぼけてとはいえ乙女の寢床に入り込むなんて、許されることじゃないしな」

「ああ、よくないな。しっかり反省するんだぞ、三木」

「姐さん、ほんとにすいませんでした！」

「……………」

「……………」

俺と姐さんは、合図をし合ったわけでもないのに、寸分たがわぬタイミングで目線を反らし合った。

とりあえずの思考実験によって、一つの仮定としての解答へと到達し、それによって事態の收拾を図ったが、しかし二人揃って最終的に沈黙することになってしまった。ある意味で、それは当然のことでしかなく、俺たちがこの瞬間に抱いている思いは同じだろう。つまり「こんなところに着地するためにわざわざ過去を掘り起こしているわけじゃない」、と。

そもそも変な思考実験を始めてしまった時点で、方法というか進み

方として何かを間違えてしまっていたわけだ。確定要素を用いて確かなことを浮き彫りにしようと試みていたはずなのに、最終的な着地点が、共通了解としての確定要素をすっかり裏返してしまうことで、願望としてそこにある終着点へと強引に帰着させることによつて得られるというのでは、まったく意味がないではないか。

新しい情報を得ることもできていないのに、わざわざ過去を掘り返すんじゃないかった、ときっと姐さんは今思っていることだろう。俺も、何の理論構築もできていないのに勝負を受けて立つべきじゃなかった、と今思っている。こんなことならば、過去を掘り返したりするよりも普通に屋上でのランチタイムを、他愛のないおしゃべりでもして過ごしていればよかった。

「…、あの、さ……」

しかしだからといって、なんて無駄な話し合いをしたんだろうね、俺たちは、などと笑いあうことは、それなりに真面目に話していただけにしづらく、俺たちはしばらく目を反らし合って弁当の残りをつついていた。

だが俺はしばらくして、そんな停滞したような空気に負けずに、姐さんへと声をかける。

「姐さんってさ、普段どんな夢とか見る？　俺はさ、けっこうリアルっていうか、普通に学校行く夢とか、なんでもない街中をぶらつく夢とか、よく見るぜ」

もはやどうしようもなくなってしまったならば、もうどうでもいい話でもしておくしかない、と思う。逃げたいとは思わないが、しかし逃げるしかない。そんな状況は、間違いなく存在するし、今がまさにそれだった。

「そう、だな…、私はもう少しファンタジーな感じで、非現実的な感じの方が多いな。たとえばその日に読んだ小説のキャラクターが出てくるとか、そういうことはけっこうあるぞ」

「ファンタジーっていうと、魔法の国とかランプの精とか王子様のキスとか、そういうのが出てきたりするのか？　姐さん、乙女チッ

クでかわいいなあ。俺なんてつまなくてさ、たまに朝起きる夢と  
か見るんだぜ」

「朝起きる夢？ それはどういうものだ？」

「いや、まさにそのまんまだって。遅刻ギリギリとかの時間に目を  
覚まして、やばいぞ、ってあたふしてるうちに遅刻になっちゃった  
りするんだ、夢の中で。で、夢だからまた起きるんだ。つまり、一  
日に二回目を覚ますんだよ」

「それは…、リアルな夢だな…。こういうものにも、はたして個  
人差のようなものがあるのだろうか…。」

けっきょく議論をどうすることもできなかった俺たちだったが、し  
かしお互いにそのことについてそのあと一切触れようとしなかった。  
しかし、そうやって議論を過去同様に一歩たりとも進めることがで  
きなかった俺達だったが、しかしどうでもいい話に花を咲かせるこ  
とくらいはできそうだった。

「姐さんの見る夢にも興味あるんだけど。ファンタジーな夢ってさ、  
登場人物に自分は含まれたりする？」

「そういうことも、たまにあるな。いろいろなところを歩き回りな  
がら、いろいろな登場人物たちと出会って、遊んだりするんだ」

「へえ、なんか、アリスっぽくていいな。楽しそうな夢で、うらや  
ましいなあ…。俺のはさっき言ったみたいなのばかりで、ファ  
ンタジーっぽいなんて、たまにみる変なのくらいしかないぜ。な  
んか、古代日本みたいな感じのよくわからない夢でさ、いつも終わ  
りが曖昧になって、中途半端なんだよな」

「ほお…、夢というのは深層心理を映す鏡のようなものだというし、  
どこことなく興味深いな」

「それじゃ、姐さんの深層心理は、けっこう乙女チックなんだな。  
かわいくていいと思うぜ」

「さあ、どうだかな。それならば、女らしくていいとは思うが」  
そうして俺たちは、けっきょくどうでもいい話以外は何も進まない  
まま、屋上でのランチタイムを終え、それから五限目の移動教室へ

と向かうのだった。

去年どうにもならなかったものが、ほんの一年たっただけでどうにかなるなんて、思い上がりもはなはだしい、というやつだったのか  
もしれない。

## 弟子と師匠と、それからサクラ荘の住人達

「ただいま……」

「おかえりなさいませ、幸久様」

昼休みに姐さんと去年の旅行のときの問題点を話し合って、けっきよくどこにも辿るつくことができなかったという事実が、ひどく俺を疲労させていた。友人の疑念の解消をいつまでも行なうことができないのが、ここまで精神に負担をかけてくるとは思わなかった。しかもそれが、一度どうすることもできずに封印していたものをわざわざ掘り返して、というのだから、無力感もひとしおで、のしかかる疲労感もなかなかのものだった。

「ちよつと疲れたから、少し寝るわ……。一時間で起こしてくれ、晩飯はそれからつくるから……」

今日は騒がしい隣人も軒並みいないようだし、少しだけゆっくりしようと思った。いつもだったら日替わりで誰かが何かをしに来る、くらいの勢いで隣人どもがうちを訪れてくるので、こうして静かにできるのは比較的珍しいことだったりする。

まあ、というか、五部屋のうち、我が家を含めて四戸しか住んでいないアパートなのだから、そりゃ一年もいれば仲も良くなるうというものだが、しかしだからといってこちらの都合、というか蓄積疲労度を考えず毎日やってくるのは、少し遠慮してほしいなあ、と思う。一人を除いてみんな大人なんだから、見た感じで疲れてるかどうかくらい分かるだろうに、勘弁してほしいものだ。

このアパートの住人達は、みんなおおむねそれなりに面倒な人たちで、かまってほしがる人が多いのである。それ自体は別に構わないし、俺も人といっしょに楽しく時を過ごすことは嫌いじゃないし、遊びに来てくれること自体はイヤではない。しかし都合とか時間とか、そういう常識的に配慮すべきものに対するモラルが低い人たちばかりなのが問題なのだ。



うちの隣の部屋、つまりは201号室の住人は、その名を坂倉弥生<サクラ ヤヨイ>という。身分は大学院生、らしく、年齢はおそらく二十代の中ごろと思われる。どこの大学で何をしているのか、とかそういうことは、本人が話題にしないのでなにも知ることはできない。というか、日々大学に行っている様子があまり見られないので、もしかしたら不良大学生なのかもしれない、と思う日々である。しかし晴子さん今年で大学三年生になって、平日でありながら学校がない日があるようだし、もしかしたら大学生というのはこういう生活を送るものなのかもしれない、と最近は思い始めた。好きなものは酒で、毎日毎晩部屋で浴びるように飲んで俺の部屋にやってきたり俺を部屋に引きずり込んだり、つまみをつくってくれるようにねだってくるのである。少し面倒くさいながらも、かわいい人である。

髪は軽く脱色したような茶色のショートカットで、後ろ髪だけがシュツ、つと長い。大学に行くでもなく、意味もなく外をぶらぶらしていることが多い人なのだが、寒さを感じる感覚器官が死んでいるのか服装は一年中だいたい軽装で、夏でも冬でも関係なく下は膝丈よりもだいぶ上、上はペラペラの布地で袖が肩よりも先まで届かない服ばかりを着ていて、スタイルがいくせに下着姿で部屋の中を闊歩していることもままあることである。長そでとか七分袖の服はファッション以外で着る必要がないと豪語している人で、きつと北国、いや、北極とかの出身に違いない。

公園とか高架下とか、微妙に人がいないところでハトにえさをやったりして一日を過ごしている、社会性に乏しいようにしか見えない人なのであるが、騒ぐのは誰よりも好きで、住民を集めて食事会（飯をつくるのは俺）とかを主催（取りまとめたり管理したりするのは俺）したりもする。

管理人室のお隣にして俺たちの部屋の真下、101号室の住人は高階都<タカシナ ミヤコ>という。身分は、良く分からないのだが、社会人であることは間違いない。年齢は、おそらくの目算だが三十

路に足をかけるくらいだろうか。ほぼ毎日家に閉じこもっていて外では滅多にその姿を見ることは出来ず、時折部屋の前でスーツの男の人がドアを「先生！ 先生！ 開けてください！！ 原稿を！！」とかいいながらバンバン叩いているのを見かけるので、なにかをマンガとか小説とか、そういうものを創作する仕事をしているのだろうなあ、というふんわりとした認識しか持てていない。

仕事が大好きな人のようで、熱中しすぎて周囲の音が聞こえない、時間がどれだけ経ったか認識できない、今が何月何日なのか理解していない等々社会不適合振りをあますところなく発揮してその人生を送っている。その最たるものとして、仕事に熱中しているときは食事を取るのを忘れる、という性質があり修羅場を迎えたときは栄養失調で倒れるなんてことはよくあることである。また外見にもほとんど気を使っておらず、ハサミで適当に真一文字に切った前髪とざくざくと一掴みずつまとめて切ったような後ろ髪で、こう、少なくとも堂々と人前に出られるような髪型ではない、片眉を剃り落して超長期間の山籠りを敢行した某バカ一代のような感じであり、服も常に着古したジャージを適当に着ているようなありさまである。十年先まで部屋を借りているらしく、深夜、早朝、昼間と時間を問わず、突発的に奇声をあげたりする面倒な人なのだが、基本的には真面目ないい人で、金銭のからむ賃貸借契約的な意味でも人柄とか性格とか付き合いつかの人間関係的な意味でも追い出すことがやりにくい、社会的に難しい人である。

そしてその部屋のお隣、一階の最奥の部屋、つまりは102号室は二人暮らしであり、その住人の名前は後藤歌子<ゴトウ ウタコ>と後藤未来<ゴトウ ミク>という。歌子さんと未来ちゃんは親子らしく、その父親の姿を俺が入居してから一度もみていないので、いわゆる母子家庭というやつか、あるいは単身赴任のというやつかだろう。お母さんの歌子さんは年のころ三十路も半ば、おそらく35よりも少し若いくらい、娘の未来ちゃんは近所の小学校、つまりは俺とか霧子とかの母校なのだが、に通学中の小学五年生である。

歌子さんは柔らかかそうな肩口まである黒髪で内巻きのセミロングに、いつもだいたい長袖のカーディガンを羽織っているのでパツと見た感じはいいところのお嬢さんのようであり、実際、このひどく寂れているアパートの住人としてあまりふさわしくないような、少しちぐはぐな印象を一年経っても受けてしまう。昼間と夜は自分たちの住んでいる部屋で内職をして生活費を稼ぎ、夕方は商店街で買い物をしている姿をしばしば見ることが出来る。

娘の未来ちゃんは、小学五年生になっておしゃれに興味が始生えつつあるのか、いつもかわいい服を着てランドセルを背負って駆けていく姿で、毎朝俺を癒してくれる。髪も結い方やまとめ方を毎日いろいろ変えてみているらしく、いつも俺の目を楽しませてくれる。特にいいのは、偶然にも俺と同じ時間に家を出るときは、いつも決まって「三木のおにちゃん、いってきます」と朝の挨拶をしてくれる礼儀正しいところだろう。いや、礼儀が正しいのは歌子さんのしつけがいい、という意味であって、けっして小さな子から「おにちゃん」と呼ばれて喜んでるわけではない。

そんな二人はとても仲のよい家族であり、休日には二人で買い物に行ったり食事に行ったり遊びに行ったり、楽しそうに外に出かけていく様子をよく目にする。俺も、たまに「おでかけしたからおみやげ」といって、かわいらしさを重視するあまりその機能性を大きく犠牲にしてしまった皿とかコップとかキッチン用品とかをもらったりして、そのときにたくさん話を聞かせてくれるので、そのときは俺もいっしょに楽しませてもらっていたりする。

また歌子さんは結構な料理好きで、俺もたまにご相伴に預かったり、逆につくった料理を食べてもらったり、年は離れているがけっこう仲良くさせてもらっている。広太も、たまに後藤家の主たる収入源である内職を手伝ったりしているらしいのだが、しかしあまりに手際がよすぎていつもほとんど役に立つことができない、と落ち込んでいる。いつ広太が、歌子様の役に立つためにはもっと効率よく、歌子様以上動きが出来るようにならなくてはいいけません、とか言っ

て内職を始めてしまうか、恐ろしくてならない。広太の仕事はすでに我が家の家事全般を取り仕切るだけで十分すぎるほどであり、収入を得るための内職なんてする必要はないのだ。というか、そんなことをしていたのがおばさんにばれたら、幸久様の世話をおろそかにしてそんなことに現をぬかすとは、天誅！！とか言っただけで済まされかねない。もしそんなことをすると言いだしたときにはそっと、主として友として、止めてやることにしようと思う。

「幸久様、お疲れであることは重々承知の上なのですが、どうしてもお伝えしなくてはならないことが一つだけございます。お耳に入れさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「なんだ？　それ、どうしても今じゃないとダメか？　あとでいいんだったら、後にくれると助かるんだけど」

「はい、今すぐにお伝えしなければ、幸久様が甚大なる損害を被ることになりかねないのではないか、と思われます。もちろんそれは私がお引き受けするので、幸久様がその対象となることはありませんが」

「どうしてそっちに問題が飛んでったんだよ。分かった、なにがあったか言ってくれ」

滅私の心で俺に仕えてくれること自体はうれしいし非常に誇らしいのだが、さすがに俺が受けるべき損害まで引き受けてくれなくてもかまわない。というか、損害が発生すると言われているのに話を聞かないわけがないだろう。

「はい、了解いたしました。幸久様が帰っていらっしゃるほんの少し前ですので、つい先ほどのことなのですが、晴子様からお電話を承りました」

「晴子さんから電話？　もしかして、料理、つくりに来いって言うてたのか？」

時計を見れば、今の時間は俺がだいたい晩飯をつくり始める時間よりも少し早く、五時を少し回ったところで、料理をつくりに来い、という電話をするには少し遅いかもしれない。いつもだったら俺が

まだ学校にいる二時とか三時とかに連絡を回して、少なくとも心構えくらいはさせてくれるというのに、珍しいこともあるものだ。

「いえ、今日は晴子様の料理を食べにくるように、との仰せです」

「なんだ、今日は勉強か。それならただ行くだけでいいってことだな」

「はい、そういうことだ、とを考えても構わないと思われます。それと食材も持ってこなくていいと仰られていらっしやいました」

「そうか…、それなら手ぶらで行くか。味の勉強のついでに一食分浮いたってことでいいだろ」

正直に、晴子さんの料理は美味しい、と断言できる。自分の料理も年を経て成長を遂げているのではないか、と最近では思っているが、しかしそれが晴子さんの域まで達しているなどと、間違っても思うことはできない。

晴子さんに教わらなくてはならないことはまだまだたくさんあり、俺が晴子さんから免許皆伝をいただいて弟子を卒業することができるのはいつになるのか、今のところまったくその目処は立っておらず、まだまだ晴子さんにお世話になる日が続きそうだ。

「すぐに向かいますか？ それとも少しお休みしてから、ということでしたら、晴子様に一報入れさせていただきますが、どうなさいましょう？」

「いや、すぐに行こう。霧子が帰ってきたから俺も帰ってきたと思って電話してるんだろし、俺が家にいることは把握されてるんだ。それに、休むだけだったらあっちの家でもできるだろうからな。久しぶりに、霧子の髪を体にかけてもらって寝るか……」

「了解しました。それでは晴子様にはそのように電話をさせていただきます。そろそろ帰っていらっしやると思ってお茶を用意しておきましたので、それを一杯いただくまではごゆっくりなさってください」

「ああ、そうさせてもらう。今日は…、少しだけ疲れててな……」

「何か、大変なことがあったのでしょうか？」

広太は出掛けるための仕度をする、と見せかけて俺が休憩するための時間を稼いでいる。というか広太もいっしょに休めばいいものを、俺の目の前で休憩することが罰に当たる行為だとも思っているのか、せつせといろいろな作業を片づけているのだった。

しかし、休憩しなさいな、といっても申し訳ありませんがまだ仕事が残っておりますのでご容赦ください、とか言われるに決まっているので何も言わない。こういうときは作業が終わるまでは声をかけず、黙って待つてやるのが一番いい行動選択なのだ。

「まあ、少しだけな。大したことではないんだけど、難しいことで、ちよつとどうしようもない状況になって、なんて言うか、無力感…、みたいな？」

「人は誰でも無力感を抱えて生きているものです。自分ではどうすることもできない状況、何とかしたくても出来ない状況などは、誰にとっても存在しているのではないのでしょうか。ですから、それをなんとか自分なりに解決することができるよう、全力を尽くすことが重要なではありませんか？ 結果としてどうにもならなかったとして、それは今力不足だったというだけのことでしかありません。今度こそはなんとかしていけるよう、そのときに備えて力を溜めればいいのです」

「そういうもんかね……」

「ええ、今できなくても明日は出来るかもしれない。明日できなくても明後日はできるかもしれません。人間には無限の可能性が秘められているのです。自分を諦めてしまつては、そこですべてが終わってしまいます。幸久様は、今していらっしゃるように自分を信じてがんばっておられれば、何も問題はないのです」

「お前…、相変わらず褒めるの上手いよな…、なんかやる気出てきた」

「大したことではありません、全ては幸久様から学ばせていただいたことです。それをただ、お返ししているだけにすぎませんから」

「まあ、お前がそう言うんなら、何でもいいけどさ。よし、茶も飲

んだし、やる気出たし、行くか」

「はい、お供いたします」

そして俺たちは、晴子さんの言いつけに従って天方家へと移動を開始するのだった。今日は食べに行くだけとはいえ、しかし晴子さんの料理を食べて勉強するときは常に真剣勝負であり、一食浮いたぜラッキー、とか思っている場合ではないのだ。

気を引き締めていこうと思う。

## 天方家リビングにて、ぐるぐる

『どちら様ですか？』

我が家から徒歩で一分足らずの天方家のチャイムを鳴らすと、その軽快な音からわずかな間をおいて門扉の内側の扉が開かれ、そこから顔を出したのは霧子だった。

そしてそれから、チャイムの横のスピーカーから少しでも聞いた声が聞こえる。その声は、機械を通しているものの、すぐに雪美さんのものだと分かる、とても聞きなれたものである。

「幸久です、雪美さん。霧子がもう出てきたんで、入れてもらってもいいですか？」

『霧子ちゃん、もう行っちゃったの？ 今日はおかあさんが出ようと思ったのに』

「それじゃあ、お邪魔します」

『いらっしやうい、幸久くん』

雪美さんから許しをもらったので、俺は勝手に門扉を開いてその敷地の中へと足を踏み入れる。広太は俺の三歩くらい後ろを着かず離れずついてくるので、俺が入ったからといって門扉を閉めてしまうような意地悪なことをはしない。

そして後ろから、かちゃんと門扉を閉じた音が聞こえる。そして前からはサンダルをつっかけた霧子が、制服のまま足元をばたばた言わせ、長いポニーテールをはたはた言わせながら駆けてくる。

その揺れている尻尾は、まるで犬のそのようで、俺が家に遊びに来たことへの喜びをストレートに示してくれているようだった。そんな風にいつも霧子が迎えてくれることは、とにかくにも、俺にしてはうれしいことで、そうしてくれるたびに全力で頭を撫でてやりたい気分になるのだった。

「幸久君、広太君、いらっしやい！」

「ああ、遊びに来たぞ、霧子」



「霧子様、本日は晩の食卓にお邪魔させていただきます」

「今日は、幸久君がご飯をつくってくれるんじゃないんだね」

「まあ、たまにはな。晴子さんが、飯食わせてくれるから来いって言ったんだってさ」

「今日はね、和食をつくるんだって」

「へえ、和食か。ってことは、きっと俺の和食が今一つだから師匠のお手本を食べて一から勉強し直せ、ってことだな。なるほど」

「そ、そうなの…、かな…？　ただおねえちゃんが和食をつくって、幸久君をそれに呼んだだけのような気がするんだけど…」

「まあ、その可能性も大いにある」

しかし、晴子さんが意味もなく俺を食事に招くことは、あまりない。俺が食事に招かれるのは、晴子さんが新しく知った美味しそうなメニューをつくってみる実験パターンか、それとも新しく料理を俺に教えることによって俺のレパートリーを増やさせる教授パターンか、あるいは俺がつくった料理が今一つだったときにそれを矯正するためにお手本をつくってみせる再教育パターンかの三つがその大半である。

基本的に、晴子さんが俺に料理を教えているのは、将来的に自分の代わりに全ての料理を俺がつけることができるようにするための、つまりは自分が面倒なことから解き放たれるための手段にすぎないのである。そしてそれは、決して俺の勘が冴えて察してしまっているとかそういうのではなく、晴子さん自身が公言してはばからないことなのだ。

だから晴子さんは、自分の好きなものとか美味しいと思う味付けとかを俺に主に教えてくるので、俺のつくる料理は必然的に晴子さん好みのものに引っ張られてしまうのだ。というかそうであることこそが求められるのであり、もし晴子さんの好みに合わないものとかをつくったりしたときは、今日のように再教育のため呼び出されたりするのだ。

きつと、おそらくだが、先週あたりにつくった肉じゃがの味が気に

入らなかったに違いない。あの日は少し醤油が濃いめの味付けをしてしまったから、三角をつけられてしまったのである。だから今日の晴子さんのレシピは、たぶん醤油をベースにして味付けを行なう、肉じゃが以外のなにかしらで、俺にはそこから晴子さん好みの醤油の使い方をもう一度学び直すことが言外に要求されるだろうことは明らかだった。

まったく晴子さんは、ひどい面倒くさがりだというのに、自分が将来的に楽をするための努力だけは怠らないのだから……。」「努力と労力は先行投資するもの」、「若いうちの努力は未来に楽をするためのもの」という座右の銘はどうにかならないものだろうか。晴子さんの先行投資のせいで、俺は今から未来にかけて、ずっと努力し続けなくてはならないではないか。まあ、それが晴子さんのために払う努力や労力であるというのなら、そこまで苦というわけではないのだが。

「とりあえず、あがってあがって」

「ああ、おじゃまします」

「うん、いらっしゃい」

俺たちは各々くつを脱いで玄関に上がると、とりあえずリビングへと向かう。その途中で霧子は二階にある自分の部屋へと、制服から私服への着替えをするためだろう、階段を昇っていくのだった。広太の口車に乗って変にやる気が出てしまい、上着を脱ぐだけで制服から着替える間も惜しんでやってきてしまった俺とは違い、霧子はこれから着替えをするのだ。

正直に言うと、おそらく所要時間は十分にも満たないだろうから、俺も今からダッシュで部屋に戻って着替えをしてまた戻ってきたいところだ。しかし一度天方家に足を踏み入れてしまった以上、晴子さんが「家から出る」「逃げる」という判断を下してしまうので、引き返すことはできないのである。

というか、ワイシャツにスラックスの男と執事服の男が並んで歩いている様というのも、今思ってみればなかなか違和感を醸し出すも

のだったかもしれない。いや、まあ、違和感があるからといって、どうということはないのだが。広太の執事服はもはや周辺住民の方々にとって日常と化しているわけであり、今さら取り繕うことなど出来るはずがないのだ。

「晴子さん、来ました」

「知ってるわ。邪魔にならないようにその辺で座って待ってなさい。まだしばらく出来上がらないから、おとなしくしてなさいよ」

「はい、分かりました」

晴子さんは、まだ料理をつくり始めたばかりのようで、いろいろな食材を切ったり皮をむいたり処理をしているところのようだった。晴子さんは、俺と同じでとりあえず使うものは最初に全部切ってしまう方なのだが、そこに積みあげられている食材を見たところ、霧子の言った通り和食的なものをつくりそうな取り合わせだった。

つくるのは全部で二品…、いや三品くらいか？ けっこうな量の野菜やらなんやらが、キッチンのシンクにはあって、その中のいくらかはボールで水にさらしてあったりと、いったいいっぱいな感じがすごく感じられた。

これは、晴子さんの言うとおり黙って待っているのがいいだろう。この中に手伝いに行ってしまうはおそらく、結果的にはあるが、晴子さんの作業を邪魔することにもなってしまいかねない。

だから俺は、リビングのテーブルに座って何かをしている雪美さんとおしゃべりでもして待とうと思って

「雪美さんは何を、…、なにを、しているんでしょうか…:~?」

つい、その何をしているか分からない感に負けて、俺は雪美さんにそう訊いてしまった。しかし、はたしてそう聞かれたからといって、雪美さんがその質問に明確に回答することができるのか、微妙に疑問だった。

「ええっと、なんていったか忘れちゃったけど、晴子ちゃんから教えてもらったのよ。何も使わないでいい遊びなんだって、すごいわよね」

「確かに、自分の体以外は、何も必要なさそうですね」

「こうやってね、ぐるぐるしてるのが、けっこう楽しいの」

「へ、へえ…、そうなんですか……？」

「うん、朝からずっとやってるんだけどね、ぜんぜん飽きないのよ」  
「それは、すごい、ですね」

楽しげにそう語る雪美さんの瞳は、まるで小さな子どものようにきらきらと輝いていて、おそたくそれは俺が昔に忘れてしまった輝きだろう、と思う。

ところで、道具を何も必要としないシンプルな遊びが、実際のところ、雪美さんは好きだったりする。その証拠に、いろいろ道具を使ったりする遊びは熱中してもいつも長続きしないのだが、体一つで出来るものは意外と遊びとして長続きしたりするのだ。

雪美さんの中ですごくお気に入りになる遊びの条件として、単純であること、不毛であること、意味がないこと等々が挙げられる。過去に何度かブームが巡り巡っている右手と左手でそれぞれじゃんけんをするという一人じゃんけんが、単純かつ無意味で、不毛の極みであるということからも、それが良く分かるのではないだろうか。そして今、俺の目の前で行なわれている遊びも、遊びなのか苦行なのか区別がつかないところとか、どことなくそれに近いものを感じる。

何をしているのか、と端的に言ってしまうと、右手と左手の指の腹だけを、親指は親指と、人差し指は人差し指と、といった感じで掌は浮かせたままにくっつけ合わせるようにして、セット完了。いや、この時点ですでにうまく説明することはできていない感があるのだが、その状態から左右の親指を、ぶつかり合ってしまったくないようにぐるぐると回して、次は人差し指、次は中指と、どんどんぐるぐる回していき、小指まで回したらまた親指まで戻し、戻しきったらまた小指に、と無限ループである。

おそらくこれも、たいがい意味というものが感じられずぐるぐる回るといふ動作の外見的な面白さまで加わっているので、今後、一人

じゃんけんと同レベルの大好きな遊びに格上げされてランク付けされるだろうことは明らかだった。晴子さんも、雪美さんのことを、俺以上によく観察しているの、その扱いは完璧なのである。

「ぐるぐる回るのを見てると、頭もぐるぐるしてくるのよね」

「そんなにぐるぐるしてるんですか？」

「うん、今日は、ずっとぐるぐるしてるの」

「そんなにですか！？ 朝から、ずっとですか！？」

「なんだか、面白くなっちゃって。あと、なんだか止めどきが分からないのよね」

「たしかに、終わりっていうのがないですからね」

「いつ止めていいのか晴子ちゃんに訊いたんだけどね、飽きたらやめればいいって言って、教えてくれないのよ」

「俺も、飽きたら止めればいいと思いますけど……」

飽きたら止めたらいいと言われて、それでもまだ止めどきが分からないというのなら、それは雪美さんが相当にその遊びへと熱中しているのではないか、と思われる。

しかし、この遊びのどの要素が雪美さんにクリティカルヒットしたのか、俺には少し分からなかった。

「雪美様、私にもその遊び、教えていただいてもよろしいですか？」  
しかしそれにひるんだ俺とは対照的に、広太は即座に雪美さんに対してそう切り出した。それをずっとし続けるには、きっとかなりの精神力が必要だろうことは、どこことなく察知することが出来たのだ。少なくとも俺には今、それに付き合っていくことが出来るほど、心に余裕があるわけではなかった。

「いいわよう。あのね、まずはこうやって手と手を合わせるの。全部をぺたってくっつけちゃダメなの」

「なるほど、こうして双方の掌の間に空間をつくるようにそれぞれの指の腹を合わせるんですね」

「うん、そうよ。それでね、ぐるぐるするのよ」

「こうですか？」

「そうそう、広太くん、上手ね」

「お褒めにあずかり、光栄です、雪美様」

こうして雪美さんと広太は、けっきょく俺にはそれがどんな意味を持つているのかさっぱり分からなかったのだが、二人して指をぐるぐると回し始めてしまったのだった。傍から見ている分には雪美さんが楽しそうに遊んでいるんだからなんでもいいかなあ、と思うのだが、しかしそれを自分もやるとなると、それにはなんとなく抵抗があつて、そこに参加することはできそうになかった。

「晴子さん、雪美さんにまた変な遊びを……」

「別にいいじゃない、母さんが楽しそうにしてるんだから。それにあれなら無駄なお金もかからないし、問題ないでしょ」

「まあ、そうかもしれないけど、あれはさすがにバカにしすぎじゃないんですか？」

「別にバカにしてはいないわよ。あたしは母さんの暇つぶしになればいい、と思って遊びを教えてあげたんだし、それに母さんがたまハマっただけじゃない」

「そうかもしれないけど……」

「いいじゃない、無邪気でかわいくて。母さんはああやって楽しそうにしてるだけで十分なのよ。癒されるでしょ、見てるだけで」

「…、そうですね」

雪美さんは二児の母であり、まごうことなく大人と呼ばれる年齢である。どうやってかは知らないけど、天方家の食費も生活費も家の維持費も、晴子さんや霧子の授業料も稼ぎだしている、稼ぎ頭にして大黒柱なのだ。

「ほら、うっとうしいね。用もないのにこっち来るんじゃないわよ。適当にテレビでも観てればいいじゃない」

「す、すいませんでした……」

それなのに、この扱いでいいのだろうか。確かに雪美さんは、年からは考えられないくらいかわいいし、同様にきれいだし、正直、素敵だと思う。それなのに…、それなのに…、晴子さん、それでいい

ん  
で  
し  
よ  
う  
か  
…  
…  
。

## 髪を切るとか切らないとか

二人で指をぐるぐるさせている雪美さんと広太の肩越しにキッチンで動き回る晴子さんを観察しながら、俺はソファーに寝転がっている。

しばしば雪美さんがランポリンのように跳ねたり晴子さんが長時間寝転がったりしているので、若干スプリングがヘタってきている感があり、やけに体が沈みこんでいるような感じがするのだが、まあ、そこまで問題があるわけではない。

「ああ、寝そうだ……」

今日は姐さんとの、解決策のない不毛な議論によってやけに疲労しているわけで、さつき広太に励まされたこともあって精神的には少し持ち直したのだが、しかし肉体的な疲労がなくなるわけではない。晴子さんからも邪魔しないようにしていると云われたわけだし、少し寝てしまいたい気分だった。

「広太、俺は少し寝るぞ」

「はっ、承りました。それでは晴子さまの料理の仕度が整いましたら起こさせていただきます」

「頼んだ」

晴子さんのお気に入り、常にソファーの上で横たわっているデフォルトメされた大きな丸っぽいクジラのぬいぐるみを抱きしめて、俺はくるりと身を丸める。なんとなく晴子さんの香りがするような気がして、少し心が落ち着いてくる気分だったりする。

「おやすみ……」

「あれ、幸久君、寝ちゃうの？」

「ん…、ああ、霧子か……。どうした、着替えてきたのか？」

「ん、着替えてきたよ」

俺が目を閉じようとした次の瞬間、リビングの入口のあたりから、ぐるぐるぐるぐる言っている雪美さんの声に重なりながら霧子の声



が俺の耳に届いた。下ろそうとしたまぶたをなんとかあげると、そこにはやはり霧子が立っていた。

学校ではいつも高めに結っているポニーテールを今は解いているように、そのさらさらとした髪が背中一面に広がっているだろうことが分かる。服は、制服から軽い部屋着に着替えを済ませたようで、どこことなく涼しげな感じがしている。五月前とはいえ最近はどうもこう暖かくなってきたというわけであり、気候に合わせたら部屋着は初夏頃のもものが体感的にも外観的にもちょうどいいのかもしれない。

「今日もかわいいな、霧子。そのパーカー、新しく買ってきたのかな？」

「うん、この間おねえちゃんといっしょに買いに行ったんだよ。おねえちゃんが選んでくれたの」

「そうなのか、うん、よく似合ってるぞ」

「にゅ、そうかな？ 幸久君がそう言ってくれてよかった」

「別に俺じゃなくてもそう言うって、かわいいのはほんとのことだからな」

インナーの淡い青系の無地のTシャツに七分袖くらいの、表にはクリーム色の素地、裏には軽く白で柄の入っている薄いピンクの生地と、両面で異なる生地が使われているお洒落っぽいジップアップのパーカーを合わせて、ボトムスには膝よりも少し丈が長いくらいのショートパンツを穿いている。

格好だけ見たら、なんだか今からランニングにでも行きそうな感じなのだが、まあ、霧子はそんなことはしないだろう。

「それにしても、霧子はそういうパーカー好きだな。もう何着もそういうの持ってるだろ？」

「にゅ、そうかな？ そこまで持っていないと思うんだけど、いっぱい持ってるかな？」

「いや、いっぱい持ってるのがいけないとか言ってるんじゃないぞ。女の子が服をいろいろ持っているのは別に悪いことじゃないだろ」

確かに霧子は、買い物に行けば似たような服ばかりを買ってしまう傾向が強いので、洋服ダンスを開けば同じようなタイプの服がたくさん出てくるに違いない。特に霧子が気に入っていて何枚も持っている服は、今も話題に出たジップアップタイプのパーカーで俺の覚えていてだけで七枚くらいはあったはずだ。

あとそれ以外にも何種類かの服とかパンツとかスカートとかを何枚も何枚も、まるでコレクションするように買い集めている。俺はそういう買い方は絶対にしないのだが、まあ、女の子なんだし、似たような感じの服でいろいろ種類があった方がコーディネートに幅が出ていいんじゃないか？

「っていうか、今日はもう髪、解いたのか？」

「にゅ？ 髪？ うん、解いちゃったよ」

「そうか、…、うん、結ってないのもたまにはいいな」

「幸久君、もうポニーテールは飽きちゃった？ 別の髪型にしてみる？」

「いや、飽きたとかじゃないけどさ、たまに見ると結ってないのも新鮮だな、って。ほら、霧子が髪を結ってないのは、だいたい寝るときと風呂に入ってるときだけだろ？ だから、新鮮だな、って思っただけだよ」

風呂に入っているときは、さすがにどんな感じになってるかは分からないから、俺の中で髪を解いている霧子のイメージは朝眠そうにしているもの以外にはない。だから、髪を解いているのにねむそうじゃない、というのは、どこことなく不思議な感覚だった。

個人的にはポニーテールを結っているのもロングヘアをそのまま垂れさせているのもどちらも好きなので、半々くらいでローテーションさせてくれるとうれしいのだが、まあ自分の髪をどうするかなんて霧子が自分で決めるべきことだろう。

「にゅん、そっか。ねえ、髪型、たまには変えた方がいいかな？」

幸久君は、どんな髪型がいい？」

「そういうのは、霧子が自分の好きにしていいいんだぞ。別に俺に訊

かないで、好きな髪型にしたいんだ。俺がこういうのがいいって言うからするんじゃないかって、霧子がこういうのがいいって思うからするんだぞ」

「というか、俺はもはや、長い髪というだけでも十分に好きなので、結っていても垂らしていても縛っていてもまとめていても、もうなんでもうれしいのだ。俺が霧子にお願いしたいのは髪型をどうするか、ではなく「どうかその髪をばっさりとやったりしないでくれ」という他にはないのだ。

「どんなのに変えてみたいんだ？　今よりもきつめに、おでこが出る感じでまとめてみるか？　それとも横に流して結ってみるか？　それとも毛先をふわっとさせてカールさせてみるか？　ウェーブをかけてみるのも、イメージ変わるだろうな。きれいにストレートで流せるように整えてみるのもいいかもしれないぞ。何にせよ、変えたいんなら今度、美容院行かないとな。そのきれいなのに、うかつに素人がハサミは入れるわけにはいかないだろ」

霧子がここまで髪を伸ばし維持するのに、どれだけの労力と努力が費やされているかを知っているならば、よし、じゃあ週末にでもちよっと切ってやるよ、などということは言うことができるはずがなのだ。いくら俺が、昔から広太の髪を切ってやっていてそれなりのカットが出来るといっても、それはあくまでも素人芸でしかないのである。

俺だって、霧子の髪を軽くカットして整えてやりたい衝動にかられるときも、なくはない。しかし今もこうしてそれを我慢しているのは、その髪を霧子本人がそうする以上に大事に思っているからであり、ミスをして少しでもその外観を損ないたくないからなのである。

「予約入れるなら、スケジュール空けとかないとな」

何を隠そう、俺の料理以外の趣味は人の髪を切ってやることである。実は昔から庄司家のみんなの髪は大体俺が切っていてちよとした理髪師並には経験値を積んでいて、自分で言うのもなんだが、けっこううまかったりするのである。

本当は女の子の髪が切りたいのだが、しかしそんなことはさすがに霧子にだってお願いしづらいし、そもそもそんなに超絶的にうまいというわけではないので、下手にはさみを入れてダメにしてしまうのがなにより恐ろしいのだ。だから広太の髪を一ヶ月に一回カットしてやることによって、欲求を適度に満たしているということだ。

「ね、ねえ、幸久君？ ああ、ね？ 一つ聞きたいことがあるんだけど…、訊いてもいい？」

「ん？ なんだ？ 何でも訊いていいぞ」

女の子の髪を最後に切ったのは、確か三年前、広太の実の妹であり、俺のもう一人の妹分である庄司美佳子ちゃんが他の家にメイド修行の奉公に出ることになった日、「ゆうくん、これで切り納めです…」とカットさせてくれたときである。美佳子ちゃんは俺が唯一、霧子にすらできない、髪をカットさせておくれというお願いをすることができる女の子で、なおかつそれを嫌がるどころかむしろ喜んでくれる稀有な存在だった。

庄司の家を出て三年、手紙一枚電話一本よこすことなく修行に打ち込んでいるようで、彼女について庄司の家が把握していることは、どうやら死んではないらしい、という非常にふんわりとした認識だけだった。個人的には、美佳子ちゃんがまったく連絡をよこさないことに少なからず不安を感じているのだが、しかしだからといってこちらから連絡して修行に水を差すようなことはしたくない、という困った状況にあるのである。

「あ、ね？ これは、たとえばの話しなんだけど」

兄貴分であり将来仕える主人である俺には広太が専属としてつくから、妹であるお前は一人前になるまで家に帰って来なくていい、というおばさんからの冷酷な宣告がなされたのが、ちょうど三年前の10月、まるで真冬のような寒さが身にしみる、そんな夜だった。まさに誕生日の祝いの席で、やけに豪華なケーキのろうそくを吹き消してみんなからプレゼントをもらいとても楽しそうにしている美佳子ちゃんに渡されたおばさんからのプレゼントが、その言葉だっ

たのである。

そして、年が明けて三月、無事に小学校の卒業式を済ませた美佳子ちゃんは、そのまま中学校へと進学することなく奉公先へと旅立っていた。別れの言葉はなく、ただ「行ってくるです」とだけ言って、編上げブーツにシックなクラシックタイプのメイド服、真っ白な卸したてのエプロンを締め、切り納めといわれて調子に乗って俺が切りすぎたショートカットにヘッドドレスを飾り、小さなトランクに必要な最低限のものだけを詰めて庄司の家を後にした。

それから三年間、まったく音沙汰がないのだが、おばさんは報せがないのはいい報せとまったく気にしていないようだった。俺は、教えたら行ってしまうでしょう、とその奉公先の電話番号はおろか、なんという名前の家に送り込まれたのかすらも教えられていないありさまであり、まったくなにもできないのだった。

「あたしが髪、短くしたいって言ったら、どうする？」

おずおずと発せられた霧子のその言葉によって、俺の眠気は完全に吹き飛び、全身を軽く包んでいた疲労感すらも完全に消し飛んだ。

その代わりに、その言葉のあまりの衝撃に、俺はクジラのぬいぐるみを抱き抱えたままソファからゆっくりと転がって落ちた。

間違いなくその瞬間、俺の中の時間は停止していたように思う。

ぱくぱくと口が開いたり閉じたりするだけで、明確な言葉を発することはできなかった。いや、俺は、言葉を発するということがどういうことで、それはどのように行なわれることなのかを忘れてしまったのかもしれない。

「ゆ…、幸久君!？」

ドカツ!! という地味な音ともに、俺はフローリングの床へと倒れ伏した。目の焦点を合わすことすらできず、虚ろな目で口を半開きにして転がっている俺は、もしかしたら半死人といって過言ではないかもしれない。

「きり、こ、の…、すきに、すると、いいよ……」

そしてなんとか、俺はその言葉だけを絞り出すと、ふたたびぐった

りと、床にぶちまけられた泥のように倒れ伏したのだった。

「み、短くないよ！ 幸久君が短い方が良くなったんなら短くしようと思っただけで、ほんとに短くしたりしないよ！」

「…、ほんと……？」

「ほ、ほんと、だよ！」

「大変だろうけど、長いままでいてくれる？」

「あたしも、長い好きだよ」

「そうか…、切らないのか……」

そして俺は、心の底からホッとして、それからなんとか自力で起き上がると、再びソファの上へと這い上がって身体を丸めるのだった。

「マジ、心臓止まるかと思った」

「そんなに、びっくりしたの……？」

「すごいびっくりした…、こないだの花見のときの玉子焼きなんて目じゃなかった……」

「にゅ…、びっくりさせて、ごめんね？」

「いや、まあ、それ自体はいいんだけど…、もしも短くするときには、せめて俺に一声かけてからにしてくれ、な？ 急に切られたら、俺、きつと心臓止まって死ぬから」

「にゅん、そうするよ」

「ああ、ホッとしたら眠気が帰ってきた……。霧子、髪、かけさせてくれ」

「にゅ？ いいよ。あたしはこのへんに座ればいい？」

「ああ、そうそう、その辺な、その辺がちょうどいい」

そして俺は、クッションを抱えながらソファのシートを枕にして床にぺたんと座った霧子の髪を掛け布団の代わりにかけてもらって、もう一度ゆつくりとまぶたを閉じた。

すごい…、マジですっげえ落착着く……。

## 眠るといって、起すといふ

掛け布団代わりの霧子の髪に触ったり匂いを嗅いでいるうちに、なんだか分からないまま俺は眠気の波に吞まれていたようで、次に意識を取り戻したのはゆさゆさと広太にその身を揺すられてからだっ

た。

「幸久様、幸久様」

思ったよりも眠りが深かったのか、それとも睡眠の周期の問題か、俺は夢を見ることがなく遠くから聞こえてくるようにぼんやりとした広太の声に引かれて目を覚ます。うっすらと目を開けば、そこには俺の肩に手を置いてゆすっている広太がいるわけである。

いつの間にか顔にまでかかっていた髪の毛を、引っ張ってしまったりしまわないように気をつけてよけると、俺は霧子に軽くお礼を言ってから、ソファから起きあがるのだった。

「お目覚めですね、幸久様。晴子さまのお料理の支度が間もなく整いますので、もう目を覚まされた方がよろしいかと思われます」

「ああ…、ありがとな。あゝ、なんか疲れ取れたな、なんでだろ…」

「睡眠というものはそれだけで心を安らかにし、身体に休息を与えるものです。ずいぶん深い眠りについていらっしゃったようですよ、おそらく、その効果もひとしおだったのでしょう」

「そうか…、俺はそんなに寝てたか…」

「はい、それはもう、ぐっすりとお休みでした」

「やっぱり、霧子効果、かな？」

ありがたいな、ともう一度言おうとして、しかし俺は気づいたのだ。さっきの一度目のお礼から、霧子の反応がないということに。

「にゅ…、にゅ…」

「あれ、寝てるのか、霧子」

「はい、霧子様はすぐにテレビを点けられたのですが、幸久様がお

休みになってから数分もしないで、静かに寝息を立てていらっしやいました」

「そうか…、霧子も起こしてやらないといけないか。でもその前に…、もうちょっとだけ、目が覚めるまでタイムな…。」

大きな欠伸が、意図せずに俺の言葉の語尾を濁す。よく眠ることが出来た分だけ、そこからの復帰にはいつもよりもわずかではあるが時間を要するようだった。まったくベッドで寝るよりもソファで寝る方が寝心地がいいとは、まったくあきれ果てた身体だ。

いや、というか、ここまであからさまに睡眠の深さに効影響を与えたのは、やはり霧子の髪布団なのではないだろうか。スプリングのヘタったソファーという悪条件でありながら俺をあそこまで深い眠りにいざなうとは、やはり侮れない…。そしてもう一つ大きな要素は、やはりずっと顔をうずめるように抱きかかえていた晴子さん愛用ぬいぐるみだろう。ぬいぐるみへと染み込んだ深い晴子さんの香りが、きっと俺の眠りを深いものにしたに違いないのだ。

「幸久様、もしも晴子さまのぬいぐるみを抱いていた方がよく眠れるのならば、私から一人譲っていただけるとお願いさせていただけますが？」

「いや、そこまでじゃないって。別に、いつも家のベッドでは眠れてないってわけじゃないし」

「そうでしょうか？ それならば、いいのですが…。しかし、睡眠は一日を仕切り直すための重要な儀式です。きちんと取れるに越したことはありませんから、必要なものがあればすべて取りそろえるべきです」

それが、幸久様のために必要だと思っからこそ、と広太は無駄に熱く力説しているが、しかし俺の今の自宅の睡眠環境はそこまでひどいものではない。少なくともしっかりとしたベッドがあつて、二日に一回は広太が干しているふかふかした布団もあるし、枕だって綿が抜けてペラペラというわけではないのだ。

そこにはないものを、あえて挙げるというのなら、それは今まさに



俺の目の前にある霧子の髪と晴子さんのぬいぐるみなのだが、それはさすがに手に入れてはならない禁断のアイテムなのではないだろうか

「男が部屋にぬいぐるみ置いてるのってどうだよ。しかも枕元に鎮座してあるんだぞ。広太、お前は俺がそんなでもいいのか？」

「はい、問題はありません。そのような程度で幸久様のすばらしさが損なわれるということはありません。いえ、むしろそれくらいのかわいらしさも、一つのギャップとして魅力を際立たせる要素となるかもしれません」

「お前…、俺をどこに連れていきたいんだ…。そんなギャップは、ただの意味のないギャップだぞ」

「近頃、ギャップ萌えというものが流行っていると、なにかのテレビでやっておりました。きつとそれです」

「広太、情報収集欲が旺盛なのは一向に構わないんだが、しかし、変な言葉を覚えるんじゃない」

「はっ、以後気をつけさせていただきます」

「…、ところで、萌えってどういう意味なんだ、広太。何かが萌え出づるのか？」

「申し訳ございません、私では、それを明確に謝りなく、かつ的確に説明する言葉がございません。今度までに、必ずや幸久様のご期待に添うことができるよう情報収集に努めさせていただきますので、今しばらく私に猶予をお与えください」

「あっ、いや、そこまでその情報を二ードしてない。別にそんなにがんばって調べたりしないでもいいぞ。ちょっとした好奇心だから、気にするな」

「いえ、ちょっとした好奇心であれ、幸久様のご期待に添うことができないなど、許されることはありません。私はいかなる面で、幸久様の欲求を充足させるためにここにいますのです」

広太は本気の目でそう言うと、すぐにケイタイでネットに接続し、メイにも負けないほどの凄まじい速度でキーをタッチして検索を進

めていった。ネットの示す情報がどの程度安心して信じていることができるのかは分からないが、まあ、広太がひどいガセを掴まされることもないだろう。

「まあ、がんばれ、広太」

「お任せください、幸久様、この程度の調査、10分もかけません」  
広太は、いつものやる気満々で、非常によろしい。よろしいのだが、それが微妙に間違った方向に発揮されるのはどうにかならないだろうか。いや、まあ、滅多にそんなことはないのだが、下手にやる気に満ちている分それが外れてしまったときの惨事感がすさまじいだ。

今回はおそらくそこまでではないだろうが、きっとまた何かおかしいなことが起こるに違いないのだ。調査結果です、とかいって、寝る間を惜しんで仕事の合間を縫って書いたA4で百枚くらいのレポートが提出されたりしたら、おそらく俺は、意味もなく広太に無理を強いてしまったことへの罪悪感で潰されて死ぬだろう。

「適当にやれよ、適当に」

「はい、適切にやらせていただきます」

…、今、俺と広太の間で何かがすれ違った気がする。何がかは、分からないのだが。

「よし、霧子でも起こすか。広太は雪美さんの相手はもういいのか？」

「はい、雪美様は遊びへの熱がいったんクールダウンしたようで、今は晩の食事への楽しみの方が勝っているようです」

「ああ、ほんとだ、スタンバイ完了だな」

雪美さんは、広太の言った通りに指をぐるぐると回すのをいつの間にか止めており、雪美さんの仕事であるテーブルのセッティングを完璧に済ませて自分の席に座り、箸を一本ずつ両手に持って精神統一をしているようだった。この食事前の精神統一は、食事をより楽しむことが出来るようにするための儀式である、とか、食事の支度をする晴子さんの邪魔をしないように己を律するための行動である、

とか諸説あり、俺と晴子さんの間でしばしばその真意について議論が交わされ、そしてその論戦はいつも、結果的に最後は俺が晴子さんにシバかれて終わりという結末を迎えるのだ。

というかそもそも、別に雪美さんがいつもこうして精神統一をしているわけではなく、コップをチンチン叩いていたり手遊びしていたりもするわけで、実のところただの気まぐれなのではないか、という説が最近俺の中ではもっとも熱い。しかし、それも結局俺の想像でしかなく、もしかしたら説そのものが間違っている、という可能性も全くなはないのだが。

「よし、俺は霧子を起こすから、広太は晴子さんの手伝いをできる範囲でしてくれ。出来ることもしなかったら、仕方ないからまた雪美さんと遊んでくれ」

「はっ、了解しました。晴子様のお手伝いなど、ほとんど出来ないでしょうから、引き続き雪美様のお相手として雪美様の相手をさせていただきます」

「ああ、そうしてくれ、頼むぞ」

そうして俺は広太に雪美さんの相手を再び頼み込むと、おそらく今この瞬間、最も難関なこのミッションをクリアするためにゆゝにゆゝと寝息を立てる霧子の横に寄り添うように座るのだった。息を吐くのに合わせて方が小さく上下して、かなりぐっすりときていゝらしいことがよく分かった。

どうやって起こすのが一番楽だろうか、と考えて、今は可及的速やかに起こすところを求められるだろう、とひとりで納得して、俺は霧子の肩に軽く手を乗せるのだった。

「霧子、起きろよ」

とりあえず、広太がさっき俺にしたように肩を揺すってやり、まずはオーソドックスに起こしてみようと思うが、しかしそんなことで簡単に目を覚ましてくれるほど眠っている霧子は素直ないい子ではない。目を覚ましている霧子はあるに素直ないい子だ、というのに、眠っているだけでこんな風になるとは、おにいちゃん

は悲しいぞ、霧子。

まあ、霧子の寝起きの悪さはもはや特徴の一つ、というかむしろチャームポイントといっていいくらいのもので、俺はずっと昔から気にするのはやめているのだから。

「起きないとあれだぞ。アレするぞ」

「にゅー…、んゅー…」

ソファアの上にわしゃっ、と広がっている髪の毛のうちの一房を手にとって、形のいい鼻のあたりをこちょこちょとくすぐってみる。

「へ…、ぷしゅん！ …、にゅー…」

「くしゃみ程度ではびくともしないとは…、さすが霧子、やるな。」

さて、次は…」

鼻がむずがゆくなったのか、ぼんやりと緩慢にそのあたりを払うように手を振る霧子だったが、俺がすぐにそれを止めてしまったので、むずむずさせているものがなくなったことに安心してまた安らかな寝息を立て始めてしまう。

まあ、こんなことで起きるとは思っていないし、この程度で起こしてしまっただけでもないではないか。いつもならば、朝は出来るだけ早く霧子を起こさなくてはならないので効率だけを追い求めた味気のない起こし方をしなくてはならないが、しかし、今はそんなに時間的に切羽詰まっているわけではなく、余裕があるとすら言うてしまってもいい。

それならばこの機会に、いつもだったらできないようなことをしたくなるのが人情というものではないか。ゆっくりと時間をかけて、いつもならできないようなことをじっくりとやって眠る霧子を愛でると同時に、これからの霧子を起こす仕事をより効率的かつ芸術的にしていけるよう修練を積んでいかなくてはならないのだ。

さあ、いまこそ、時間をたっぷり使って、霧子で、いや、霧子と遊ぼうではないか。なお、だからといって直接的なボディタッチはよろしくないで、それ以外の何らかの方法を選択しなくてはならないのである。踊り子さんに触れることは、許されないということだ。

「さあて、何して遊ぼうかなあ……」

俺は、ぐるりと周囲を見渡す。何か、霧子を起こすのに使えるようなものはないか、と探すためだ。

おそらくだが、エッチないたずらをしてしまえば、霧子はあるという間に目を覚ますだろう。しかし一人の紳士としてそんなことはしてはならないのであり、だからこそ日常に紛れこんでいる穏便な得物を用いることでそういう展開に発展させず、霧子が無事に起こすことが俺には要求されている。

眠り姫的な意味で、キスでも目を覚ましそうな感じはするのだが、しかしそれとしてはならない。高校生になってしまえば、常識としてその意味を理解しているわけであり、一度してしまえば小さな子どものときのようにお遊びでした、と済ますことはできないのだ。霧子かわいいと思うのだが、しかしだからといってキスの責任を取って結婚する、という覚悟までは、残念ながら今の俺にはない。少なくとも、俺一人の力で養っていきえるようになって初めてそういうことが許されるのであって、軽はずみな行動をしてはならないのだ。

そういう軽はずみで衝動的な行動が多いから、学生結婚とかいつてのぼせあがって、ほんの少ししてから現実に直面して、そしてシングルマザーが生まれるのだ。若いから勢いに身を任せて、とかそういう考え方は、愚かという他にないのである。

「幸久！ 遊んでないでさっさと霧子を起こしなさいよ！ もうご飯できるって言うてるでしょ！」

「す、すいません…、すぐに起こします……」

もう少し眠っている霧子と遊んでいたかったのだが、晴子さんにそう言われてしまっただけは仕方ない。もっと効率よく起こすことができるよう努力しなくてはならないだろう。

まあ、テレビの前に座ってうたた寝している程度の眠りならば、朝ぐっすりと眠っている霧子を起こすよりもずっと楽だろうがな。長年霧子を起こし続けている職人の本気を見せてやることにしようじ

や  
ない  
か。

## ごちそうさまからお片付けまで

「ごちそうさまでした」

無事に霧子を瞬間起床させ、何事もなく食事の準備を進めた俺たちは、間もなく食事を開始することができたのだった。晴子さんのお手製晩御飯を久しぶりに食べさせていただいたわけなのだが、しかし、やはり俺のつくったものとは比べ物にならないレベルの美味しさだ。

師匠と己との力量差に絶望するというか、そのどうしても追いつけない感じがけっこうじわじわくるのだ。俺がアキレスのような超俊足で成長したとしても、晴子さんが亀のような速度でゆっくりと成長していればもう追いつくことなどできようはずがないのだ。

しかも、実際には晴子さんだって日に日にかんりの速度で成長を遂げているわけだし、もう俺が晴子さんのことを追いついたり追いついたりなど、出来はしないのだ。悲しいことだが、それはほぼ確実なこと、受け入れなくてはならないことなのだ。

「美味しい料理を食べさせていただき、今日は本当にありがとうございます。晴子さん」

「おいしかったと思うなら、今度からはちゃんとこんな感じで味付けを工夫しなさい。もっと味付けの機微に敏感になりなさいよ」

「はい、以後気をつけます」

「調味料のことをもっと、微に入り細に入り理解しなさい。調理器具だけじゃなくて、調味料ともちゃんと友だちになるの、分かった？」

「しょ、消耗品とは友だちになり難しいです！　というか、友だちを消費するなんて出来ません！」

「はあ、そんなんだから同性の友だちができないのよ、あんたは。こう、あれだからね、アレ」

「あ、アレ、ですか……？」

「そうよ、アレなのよ、あんたは」

アレ、アレといわれても、しかし残念ながら俺はそれが何なのかを捉えかねていた。きつと分かっている前提で晴子さんは話しているだろうし、それが何なのか教えてはくれないだろう。

もはやそれが何なのかを問う感じの空気でもないし、俺がそれについて知る機会は永久に失われたと言っているのではないだろうか。まあ、そんなに気にする程の意味はないのだろうか。

「なんでもいいから、調味料と友だちになりなさい。家に帰ったら醤油とか塩とかコショウとかのケースに名前書くのよ。全部に、苗字と名前のフルネームでね」

「つ、使いづらい……。そんなことしたら使いづらくなるじゃないですか！」

「友だちを犠牲にして生きているんだということを認識しながら料理をつくれば、きつともっと慎重に味付けできるようになるわ。となると、食材にも名前をつけた方がいいわね……」

「それだけは、勘弁してください！」

「じゃあ調味料だけでいいわよ。ちゃんと名前を書いて、写真撮ってメールしなさい。油性よ、油性」

「はい…、分かりました……」

どうしてこんなことになったかといえば、けっきょく俺の味付けがうかつだったというのが原因なわけで、自業自得でしかないのだが。とりあえず、晴子さんに言われたとおり調味料に名前を付けて、まずは友だちになるところから始めようと思う。

晴子さんの言うとおり、友だちを無駄にしたりしないよう、より丁寧に扱うようになるだろうし、俺の料理のために犠牲になる友だちのために一番いい味付けをつくりあげることが目指すようになるに違いない。デメリットがあるとしたら、料理をつくるたびに友だちを踏み台にして生きていることへの罪悪感にさいなまれそうところだろうか。

まあ、きつとその罪悪感にも一週間くらいで慣れてしまうだろうが、



その一週間を乗りきれんかがこの作戦の肝だと言えるだろう。

「醤油は…、様子ちゃんにします」

「塩は俊夫くんにしなさい。砂糖は佐藤さんでいいわね。あんたんとこのキッチンはやけに調味料がいろいろあるから、大変そうね」

「一週間中には、きつと」

「長いわね、三日よ」

「な、なんとか、やってみます」

うちのキッチンには、晴子さんも言っていたが、けっこう調味料がたくさんあったりする。それは俺が趣味で集めているというのもあるのだが、実は広太が何種類も何種類も買ってくるものがほとんどだった。

料理をしない広太がどうしてそんなものを買ってくるかといえば、それはもちろん俺が集めていると知っているからなのだ。俺にとつて蒐集趣味というのは、集める過程に楽しさがあるのではなく、最終的に並べて眺めて悦に入るという点に楽しみが集約されるので別に自分で買ってきたりする必要性はなくて、広太が俺の楽しみを奪っているとは考えない。

むしろ、広太が俺の楽しみのために尽力してくれるのはうれしい。労せずしてどんどん棚が調味料で埋め尽くされていくのは意外と壮観で、思ったよりも愉快なものだった。

「しかし、使いもしない得体のしれない調味料なんて買い集めて、なんの意味があるのよ。ああいうのは、使うことに意義があるんだろうに、理解不能ね」

「いいじゃないですか、調味料の蒐集が趣味でも。集めることに意味があるんですよ、俺にしたら。それに、もしかしたら将来使うことがあるかもしれないじゃないですか」

「使わないわよ、ナンプラーを何種類も持ってたって。それに、ほんとに調味料か怪しい木の枝みたいなのもいろいろあるじゃない。その辺で拾ったのじゃないでしょうね」

「そんなことありませんって。あれは、確かに何かに使えるんです

よ、何かしらに」

「いや、つまり、何がどういうシーンでどうやって使えるか分からないんじゃない。ほんと、あんたはよく分からないわね。まあ、何でもいいから、さっさと片づけを済ませてちょうだい」

「あつ、はい、分かりました」

いいのさ、趣味というものは、えてして他人から理解されないものなのだ。俺だって調味料集めを理解してもらいたいとは思ってないし、理解してもらえとも思っていない。理解せず理解されず、同志を見つければうれしくなる、というのが趣味を持つ人間の正しき姿だろう。

そして俺は、晴子さんの言いつけに従ってキッチンへと移動するのだった。晩飯を食わせてもらったのだから片づけくらいは俺がやるのが当然だろう。

「幸久様、お手伝いいたします」

「助かる。そっちのテーブルにある皿を、全部こっちに持ってきてくれ。で、俺はそれを洗うから、広太はどんどん片付けてくれ。拭くのは霧子がやってくれ」

「はい、了解しました」

「あたしもやるの？ うん、分かったよ」

片付けなんてものは、みんなで作ってしまえばすぐに終わらせることが出来るものなのだ。自分一人でやっていたらどうしても、作業工程がいくつにも分かれているから時間がかかってしまうが、手分けすれば決してそんなことはない。

「ほら、霧子、おいで。いっしょに洗い物しような」

「にゅ、はーい」

晩飯を食い終わってお腹がいっぱいになったからか、にゅー、とお行儀悪く机にうつ伏せにへばりついていた霧子だったが、俺が呼んだらにゅ、と顔を上げてにゅにゅ、とスリッパをぱたぱたいわせながらキッチンにやってくるのだった。

だんだん自分で何を言ってるのかよく分からなくなってきたが、き

っと大丈夫だ、説明できてるはず。というか、あんまりにゆ〜にゆ〜言ってると感染りそうで怖い。もし日常会話でにゅ、とか言っちゃったらどうしよう。

それは、あくまでも霧子がやっているからかわいいんであって、決して俺が使っただけじゃない飛び道具なのだ。

「洗ったら渡すからな。渡されたら布巾で拭いて、広太に渡すんだぞ。広太がいなかったら、その辺に置いてくんだ、いいか？」

「うん、平気だよ、幸久君」

「そうか、よし、さっさと片付けちゃおうな」

こんな感じで洗い物をすることは、実際のところかなりの頻度である。俺がこちらに飯を食いに来たとき、飯をつくりにきたとき、霧子を家に連れて行って飯を食わせてやるときとか、まあ、いろいろなシーンで使われる方法なのだ。

だから霧子は食器を拭くのがけっこう上手かったりするのである。洗うのは、洗剤の泡で手を滑らせて食器大破、というマンガみたいなことを平気でやってくるので任せることはできないが、拭くことに関してはかなり信頼を置いて任せることができる。

「ほい、霧子」

「にゅ、はい」

汚れがよく落ちるといふ触れ込みの、我が家でも重宝しているスポンジに洗剤を垂らして、軽く水を含ませてから泡立たせる。ご飯茶碗は少し水に浸してからの方がよく落ちるから、それ以外のものからどんどん洗っていいこう。

味噌汁のお碗に、全体に洗剤の泡が行き渡るようにこすってやってから水をかけて汚れと洗剤をまとめて流してしまふ。

「ねえ、幸久君」

「ん？ どうした？」

「あのね、ゴールデンウィークなんだけど、みんなどうだって言ってた？ 今日、のりちゃんらしいちゃんには訊いたんだよね？」

「ああ、いや、実はまだ訊けてないんだ。訊こうとは思ってたんだけど

ど、ちょっと問題があつて訊きそびれちゃったんだよ」

「にゅ、そうだったんだ。じゃあ、まだみんなの予定とかは分からないんだね」

「いや、予定だけは訊けたんだけどな、旅行に行くのがどうかっていうのは訊けてない。ゴールデンウィークの最初の方だったら二人とも暇らしい」

「そうなの？ それなら旅行、行けるかな？」

「それは…、どうかな……。志穂は全然問題ないんだけど、ちょっと姐さんが渋ってる感じだから、みんなですってというのは難しいかもしれない」

「のりちゃん、旅行イヤなのかな？」

「旅行がイヤっていうか…、あゝ、なんていうのか、こう、男女の混成チームがイヤというかだな……」

「にゅ？ どういうこと？」

霧子は俺から受け取った食器を拭きながら、分からん、という感じに首をかしげて、拭き終わった食器を広太に渡す。

俺がこんな持って回った言い方をするのは、俺と姐さんが今日の昼休みにどのような話し合いを持ったのかということを霧子が知らないからであり、また、そもそも霧子は去年の旅行で俺と姐さんの間にあつたことを知らないからなのだ。というか、俺は霧子にも志穂にもそのことを知られないように情報を止めているし、姐さんもそんなことがあつたと仲間内に情報が広まることで関係が悪化することを嫌って情報を止めてくれている。これはある意味で、俺と姐さんの連係プレイの結果ともいえるのだ。

「まあ、姐さんからはもしかしたらいい返事はもらえないかもしれないってことだ。残念だけど、姐さんが行けないってことになっても落ち込んだりするなよ？」

「にゅ、気をつけるよ」

「まあ、みんなが行けなくても、旅行自体には俺が連れてってやるから、楽しみにしてていいぞ」

「にゅー、そうだったら、幸久君と二人でお出かけだね。二人でお出かけするのは、けっこう久しぶりだから、そうだったらそれも楽しみかも」

「そうか？ …、ああ、確かにそうかもな。二人で遠くまで出掛けるのは、いつ以来だろう」

「えと、前に東京まで電車で遊びに行ったとき以来だと思うよ」

「ああ、あったあった。でもそれってけっこう前だよなあ…、よく覚えてるな、霧子」

「うん、すっごく楽しかったからよく覚えてるよ。幸久君がいろんなところ案内してくれて、びっくりしたし」

「あれは、予習だ、予習。事前準備がなきゃあんなに案内なんてできないって。まあ、それはいいとして、もし二人で旅行になったら、なにか楽しいことしようぜ。ずっと電車の鈍行に乗って関東中回るとか」

「それっておもしろいの？」

「なんか、おもしろそうじゃね？ ゆっくりできそうだし、のんびりしてていいじゃん」

「にゅー…、幸久君がそういうなら、それもいいかも」

「まあ、まだ日もあるし、もしそうだったらのんびり考えようぜ」

「にゅん、そうだね」

かちやかちやと食器を洗って拭きながら、俺と霧子はのんびりと旅行の計画をぼんやりと話し合うのだった。

雪美さんはまた指をぐるぐるし始めてしまっ、晴子さんはずっとテレビでドラマを観ているので誰も突っ込んでくれないのだが、俺と霧子が二人で泊まりの旅行に行くことはスルーされているのだろうか。まさに自分で言うっておいて、なのだが、男と女が二人で日を跨いで出掛けるなんて、はたして許されるのだろうか……。

まあ、霧子も疑問を呈してはいないようだし、俺も特に問題があるとは思わないし、天方家的にも大きな問題がありそうもないし、別に気にすることはないのかもしれないが。

「にゅゝ、早くお休みにならないかなあゝ」

「そうだな、ああ」

霧子がこんなに楽しみな顔をしているのだ、どんな問題があったとしても俺は霧子を旅行に連れて行ってやろうと思う。とにかく、問題になるのは霧子が楽しめるかどうかであって、どのような問題もその前にはかすむというものだ。

友人として、幼なじみとして、おにちゃんとして、俺に出来ることだったら何でもやってやりたい。その程度には、俺は霧子を溺愛している。

## Interlude 01 思えど遠く、あの日はすぎ去りぬ

てくてくと、天方家からの帰り道。

「なあ、広太」

俺は頭の後ろで手を組みながら、空にきらきらと瞬く星を眺めつつ徒歩一分強の我が家への道のりを進んでいた。晴子さんのおいしい料理をお腹いっぱい食べさせてもらって、霧子と思う存分戯れて、心も体も満足しきった俺だったが、一つ、やるべきことが残っていた。

それは、俺にしてみたら少し憂鬱なことで、できることならばしないでおきたいことだった。やらなくてはいけないこと、それは広太へお願いをすること、もとい、命令を言いつけることだった。

「一つ頼みがあるんだけどさ」

だらだらと歩いている俺の後ろには、三步離れて控えるようについてくる広太がいる。それは確かめるまでもないことで、その距離感とは物ごころついたときから変わらないものだ。

それ自体に俺が少なからず違和感を覚えるようになったのは、中学に入学したころだろうか。ずっと兄弟のようにいっしょに、それこそ何もかもいっしょの環境で育ってきた広太が、俺たち二人が違う世界を生きるなんて考えることすらなかった広太が、入学してすぐの実力試験で学年トップの点数、というか取れる限り最大限、つまりは全教科満点の点数を叩きだし、一位と横に冠されて順位表の一番上に名前を書き出された。

今まで、テストと名のつくものは百点を取れて当たり前とすら思っていた。広太と俺はいつもいつでも共に百点で、それ以外の点数を取ったことはなかった。だから俺と広太は同じなんだと思っていた。いつでもいっしょでいいんだと、当然のようにそう思っていた。

また、小学校のころはテストの点数によってここまで明確に格差が示されたことはなかった。それも俺の認識を閉じたものにしていた

のかもしれない。

「聞いてもらっても、いいか？」

俺は、決して悪い点数ではなかったが、それでも広太よりは明らかに低い点数で、順位表の下の方におまけ程度に名前が書かれた程度だった。しかしその差は明らかだった。俺と広太は確かに小学校のころはいっしょに百点だったが、しかしそこに秘められているポテンシャルは、点数の通りに同一というわけではなかったのだ。

それを見た瞬間に俺は、今ここにある状況が当然ではないということに、直感的に感づいたのかもしれない。

俺は、明確に広太よりも劣っている。それは、テストの点数だけの話ではない。種々鑑みるに、客観的な結果として、それは俺の目の前に降ってわいたのだ。いや、あるいは、ずっと前から違和感には気づいていて、それでもそれに気付きたくなくて、目を反らし続けていたのかもしれない。

言うておくが、広太にテストの点数で負けたのが悔しかったとか、そういうことを言っているわけではない。もちろん、まったく悔しなかったというわけではない。普通の兄弟の間でもあるような、対抗心みたいな一般的な感情がなかったと否定することはしたくないのだ。

しかしそれよりも強く思ったのは、広太はすごい、という、ただそれだけの純粋な思いだった。そう、広太はすごいのだ。俺などとは比べ物にならないほどのあらゆる可能性がその中には秘められている、宝石箱のような、そんなやつなのだ。

それまでの俺は、その表面に施された細工の巧妙さに心を奪われて、鍵を開くことをしようとしていなかったのだ。箱と鍵を、ともにその手に収めておきながら、戸棚の奥深くに鍵を押し込んで、今の今まで存在を忘却し続けていたのである。

広太の才能を、発揮させてやらなくてはならない。専属執事という名の、ただの俺の弟分で終わらせてはならない。俺はそのとき、気づいたときには自分に与えられていて、今の今まで疑うことを知ら



なかった、自分の世界というものに疑問を抱いたのだった。

「なんでしよう、幸久様」

それから俺は考えた。たかが中学生の浅知恵ではあるが、しかしそれでも精いっぱい考えた。

広太には、俺と同じ環境が与えられるだけではダメだ。それではその無限の可能性の一端をも開くことができないかもしれない。それを開花させるためには、やはり環境そのものを変えなくてはならないのだ。

いろいろ調べて回って、私立の中学校というものがあることを知った。そこでは今いる公立の中学校とは比べ物にならないほどの高度な教育が、より高密度に行なわれているらしい。小学校のころから塾などというものに通って鍛え抜かれ、テストによって選抜された頭のいいやつらばかりが集まった、高い水準の学習環境がそこにはあるというではないか。

俺は、そこに広太を転校させようと思った。広太には内緒で、おばさんとおじさんにもその話をして聞かせた。広太はすごいんだ、俺よりもずっとすごいんだ、そんな広太がこんなところでぐだぐだしいていいはずがない、もっといい環境で勉強させてやればあいつは何にでもなれるんだ、と、それまでにないほど熱弁をふるって俺はその案をおじさんたちに献上した。

しかし、それが聞き入れられることはなかった。命令だ、と言って、聞き入れてはもらえなかった。お願いだ、と言っても、聞き入れてはもらえなかった。

「なんでもおっしゃってください、必ずやそのご期待に応えてみせましょう」

俺では、おじさんもおばさんも説得することはできなかった。あれだけ有能な広太を従えておきながら、その程度のことすらできなかった。大事な友に、大好きな弟に、最高の配下に、自分の思いを伝えてやることすらできなかった。そのとき俺は、己の無力というものを、初めて明確に意識した。

それから三年間、俺はいろいろと考えたり、いろいろと画策したり、いろいろとたくらんだりしたが、けっきょくおじさんたちの首を縦に振らせることはできず、何も成し遂げずに中学時代を過ごしただけだった。楽しいだけの、何も前に進まない、考えようによっては無為な三年だったかもしれない。

「それが私がここに、幸久様のお傍に置いていただける意味、というものですから」

そして再び、俺たちの人生に大きな岐路が訪れた。三年前にはあることすら知らずに選びそびれた「受験」という選択肢が、ほぼ一択といった体で俺たちの前に現れたのだ。

普通なら、受験に対することを憂鬱に思ったりするかもしれないが、しかし俺は違っていた。俺は分かっていたのだ。これでおじさんたちも広太が俺とは違う、もっとレベルの高くて全国的に有名で立派な高校を受験することに同意せざるを得ない、ということ。だから俺は、受験シーズンの到来を今か今かと待ち続けた。

しかし、訪れたのは俺の合格という事実だけだった。

広太はしっかりと受験をしたはずだった。俺が用意した志願表は全てきっちり申し込み、受験の当日には俺が現地までいっしょに行つて、きっちり送り出してやった。当然、受ける高校受ける高校、万歳三唱で広太を迎え入れ、庄司の家には毎日毎日どこかしの高校から合格通知が舞い込んでいた。

広太は、全国各地の有名な高校を、上からなぞるように片っ端から申し込んだのに、こうして俺の期待通りの完璧な結果を出した。もちろんこのまま、俺の期待の通り、日本一の高校に送り出す、はずだった。少なくとも俺は、そうなるだろうと思っていた。

「そのためにこそ、私はここにこうして存在しているのです」

しかし、広太は最後の最後で俺の期待を裏切った。

小さな山のように積み上げられた十数通の合格通知を前において、その日広太は俺をリビングに呼んだ。どこに行くか決めたんだろうと高をくくって、俺はそこへと足を運んだ。

俺たちは、向かい合って座った。どこの高校も最高の奨学金を提示し、授業料から寮費から何から何まで学校が持つと言ってきた高校も片手では足りないほどだった。広太はこの高校に進むのだろうか、そこではどんな勉強をするのだろうか、広太の将来はどれほど輝かしいものになるだろうか。俺はそんな、心躍る気分でその場へと赴いたのだった。

『高校、決めたか？』

俺は、座布団二枚ほどの距離を置いて座る広太に、世間話のような気軽さでそう言った。

『選び放題だからな、ちゃんとよさそうなところを選んだぞ』

広太の表情の意味に、その瞬間はまだ気づいていなかったのだ。

不意に、広太はぺたっ、と両手を床に突いた。そして、それから、深々と頭を下げ、額を床に擦りつけて、きっぱりと言った。

『幸久様、御無礼、ご容赦ください』、と。

俺たちの間に積みあげられた合格通知たちが、広太の手元に引き寄せられた。広太が背中の後ろから何か大きな透明な箱を取り出して、その横に置いた。

それが何なのか、そしてこれから何が行なわれるのか、俺はとっさに把握することができなかった。把握することができなかったから、なにもせずにただ嘔然と、茫然とその様を見ていることしかできなかったのだ。

そして広太は一通、一番上の合格通知を手にとって、それからそれを箱の中に差し入れた。何かが高速回転するような音に続いて、紙が斬り刻まれる音がリビングに鳴り響き、透明な箱の中に、白い吹雪が舞った。

俺は、声を出すことができなかった。

それが何なのか、理解することすらできなかった。

広太は機械的な動作で、二通目、三通目と、続けざまに箱に合格通知を差し入れ、絶えることなく真っ白な雪を積もらせていった。

四通目の途中までが細切れになったとき、俺はようやく状況を理解

した。とつさに、広太を殴り飛ばした。俺が広太に手をあげたのは、それが初めてのことだった。

合格通知の山が崩れ、広太が床に仰向けに倒れ、そして合格通知はシュレッダーに飲み込まれていき、ただの紙くずへとその姿を変えたのだった。

そのとき俺が広太に何を言ったのか、明確には覚えていない。ただもう、思いつくまま悪しざまに、罵倒の言葉を投げつけただろうことしか、思いだせない。

そして、それに応えるように発せられた広太の言葉を、俺は一生忘れることができないだろう。

広太は、当然のように言った。

『こんなものは紙くずに過ぎません。私は、紙くずを紙くずに還しているだけであり、そこに悔恨はありません。ただあるのは、幸久様への裏切りを働くことへの悔やみのみであり、それ以外には何もありません。これが許されることではないと知ってはおりますが、こうすることではしか、幸久様へ私の覚悟と思いをお伝えすることはできないと考え、蛮行と知りながら、こうさせていただくことをお許しく下さい。幸久様への裏切りを、どれほどの報いを持ってすれば雪ぐことができるのか、私は知りません。あるいは、死を持ってしかそれを雪ぐことが出来ぬというのならば、今すぐここで腹を切りましょう。どうぞ、これを全て紙くずへと還したのち、如何様にも処罰の方、お決めになつてくださいます。私は、幸久様の下に存在する一個の家具に相違ありませんので』

すらすらと、まるで書いてある言葉を読むように。

広太は淀みも、躊躇もなく、そう言つてのけたのだ。

俺は、その瞬間にはもうキレていたと思う。

広太の手がすべての合格通知をシュレッダーに飲み込ませるのを見届けてから、俺は広太をその場に立たせた。俺は、シュレッダーを思い切り、八つ当たりで蹴り飛ばした。ふたがはじけ飛び、中に溜まった紙吹雪が派手に舞い散り、リビングの床を白く染めた。

そして俺は、直立不動の広太を殴った。何度も殴った。

『ふざけるな!』

『お前のために!』

『俺のためは、もういいんだよ!』

何度も何度も、言葉とともに、思いとともに、右も左も関係なく、全力を込めて広太の身体に拳を打ち込み続けた。三発目で口の中が切れたのか、口の端から赤い血が一筋垂れた。七発目のころには足にきたのか、床に膝を突いた。そのまま押し倒して馬乗りになって殴り続けた。

広太は、一切抵抗しなかった。ただ殴られるまま、罵られるまま、全てを受け入れていた。ちょうどシュレッダーにかけられた合格通知の枚数分だけ殴って、俺は広太を解放した。両拳からはうっすらと血がにじんでいた。

広太は言う。

ぼこぼこに打ちのめされたまま、しかし痛みには涙を流すことも、苦しみに呻きを上げることもせず、スッ、と立ち上がると、言ったのである。

『幸久様のお心遣い、痛み入ります。しかし私は、高校へは進みません。私はただ、庄司のものとして三木に尽くすのみです。それ以外に、生きる道など、訪れる未来など、ありはしないですし、望みもしないのです。私の望みは、幸久様のお傍にいてこのみです。それを果たすことができないならば、この命、それこそ紙くずと変わりません。どうか、どうかお願いいたします、私を遠くへやろうとなど、幸久様のお傍からいられなくしようなどと、お考えにならないでください……。どうか、それだけは、ご勘弁を願います。そして許されるならば、これからも広太として、幸久様のためにすべてを投げうち尽くすことを、お許しくださいませ……』

それから広太は、ようやく一粒だけ、涙を零した。

そして俺は、左の拳を壁に思い切り、力の限り打ち付けた。一瞬の後、小指に鋭い痛みが走り、俺はそれが折れたことを悟った。

それが、やりすぎたことへの謝罪の代わりなのか、広太へのいら立ちなのか、己への憤りなのか、今となっては思い出すことができない。

「今度さ、休みあるじゃん、休み」

血をだらだらと流しながら全身を腫らせた広太と左の小指を折った上に拳から血を流している俺が、シュレッダーを吹き飛ばしてリビング中を紙吹雪で埋め尽くしているのを発見したおばさんは、卒倒しそうになりながらもとりあえず救急車を呼んで俺たちをそろって病院に搬送したのだった。いったい何があったのかと医師に問われたが、二人揃って「兄弟喧嘩です」の一点張りで押し通した。たぶんあれは、兄弟喧嘩で間違いないだろうし、少なくともウソはついていないと思う。

あれが、俺と広太の、生涯唯一の兄弟喧嘩である。

「去年と同じでさ、旅行行くから宿、取ってほしいんだ。まだどこに行くかも何人で行くかも決まっていんだけど、頼めるか？」

しかし俺は、あれだけのことがあったのだが、まだ広太のことを諦めていない。広太は俺の下で専属執事などしていないで、もっとしっかりとした教育を受けて立派な人になるべきなのだ。

というか、もはや使用人と主とか、そういう関係自体が旧時代的なのだ。庄司の人たちが三木の家に縛られている必然性は、三木に主たる資質がなくなった以上、まったくと言っていいほど存在しないのであり、いつまでも滅私奉公なんてさせている方がおかしい。

それともあるいは、俺が知らないだけで、なにか庄司が三木についていなくてはならない理由があるのだろうか。永年のご恩返し、などという説明では、少なくとも俺は納得できない。

「はい、もちろんです。幸久様のご旅行が素晴らしきものになるよう、尽力させていただきます」

「助かるわ、広太。それで、今年は、庄司の家のゴールデンウィークはどうなってるんだ？」

「申し訳ございません、今年も本家で集まらなくてはならない用事

がございまして、幸久様にはご不便をおかけするとは承知の上なのですが、数日のお暇を頂戴したく存じ上げます」

「そうか、今年はいっしょに行ければ、って思っただけど、まあ、本家で集まれって言うなら仕方ないか」

「はい、本当に申し訳ございません、幸久様」

「別にいいって、気にすんな」

庄司の人たちが大好きだ。おじさんも、おばさんも、広太も、美佳ちゃんも、みんな好きだ。だからこそ、俺のことには囚われず、みんな自由に生きてほしい。自分の人生を歩んでほしい。だって俺は、みんなのことを使用人ではなく本当の家族だと思っているから。

家族の幸せを思うことが、願うことが、祈ることが、まさか罪悪であるとは言われまい。俺は、主でなくてもかまわない。幸久様でなくて、かまわないのだ。

「帰ったら、今日はさっさと寝るか」

「はい、それではすぐにお風呂を沸かさせていただきますので、ごゆっくりなさってください」

「…、広太、今日はお前、先に入っているぞ、風呂」

「いえ、私は幸久様の後にいただきますので」

「いいから、たまには俺の言うとおりにしろって。今日はそういう気分なんだよ」

「…、了解、いたしました。それでは、失礼ではありますが、そのようにさせていただきます」

「そうそう、たまにはさ、兄ちゃんの言う通りのしとくもんだぜ」

「はい、とくと心得ました、幸久様」

見上げれば、空にはきらきらと、星が光っている。

それはとても気楽なように見えて、きつとあんな高いところから地上を見たら、俺の悩みなんてちっぽけに見えるのかもしれない、と俺はぼんやり考えていた。

## 少し早く起きた朝に

一夜明けて、俺はいつもよりも少しだけ早く目を覚ました。

「広太、おはよう」

「おはようございます、幸久様。今日は少しだけ早くお目覚めになられたんですね」

「ああ、少しだけな。今日は、しなくちゃいけないことがあるからさ」

「そうなのですか、朝食は、簡単になれば私がご用意いたしますが、どうなさいますようか」

「お前が用意できるものって、焼いてない食パンにマーガリン塗るとか、レンジでチンするなにかとかだろ。朝はちゃんと俺が用意するから、お前は自分のすることをしてくれ」

「はっ、承知いたしました。それでは、テーブルの用意を整えさせていただきます」

「ああ、そうしてくれ」

もちろん、広太が準備するとかしないとか言っただって、今日の朝食のための仕度は昨日の夜から少なからずやっているのだ。だから基本的に何をつくるかは決まっているのであり、急転換することなどできるはずがないのである。

今日の朝食の主食は白い飯、それは昨日の夜に炊飯器をセットした瞬間から揺らぐことのない決定事項だ。

「飯に合わせられるもので、今冷蔵庫の中にあるものからすると……」

豆腐があるが、これは今日の晩飯で煮奴をつくるために必要だから使うことはできない。肉も、朝飯のためだけに調理している時間がありすぎるのであまり使いたい感じではない。あとは野菜がいろいろあるが、しかし野菜炒めを朝っぱらからつくるっていうのも若干重い感じがする。



いや、基本的には弁当をつくったついでの余りを食べればいいのだが、しかし。

「まあ、いいか、まずは弁当つくってから考えよう」

とりあえず弁当箱を二つ戸棚の中から取り出して、流水で軽く流す。べつに一晩置いておいただけだから、そんなすぐに汚れるはずはないのだが、気分だ気分。

「広太、今日も俺のといっしょに弁当作ってもいいだろ？ それとも昼は久しぶりに店屋物でも取りたいか？」

「いえ、幸久様の御手間でなければ、お弁当をつくっていただければ幸いです。幸久様のつくられるお料理が、何よりも私の好物です」

「そうか、安上がりなやつめ。金はお前の節約で少しくらいだったら余ってるんだから、別に週に一回くらい昼飯で贅沢したっていいんだぞ？」

「外食をするくらいならば、幸久様のお料理を食べたく思います。下手な飲食店で出されるものよりも、幸久様のものの方が健康的で、そして美味です」

「別に俺の飯なんて、普通だろ」

「いえ、私にとっては、それがなによりの御馳走ですので……」

「ふうん、まあ、それがいいっていうんなら、俺は別にいいんだけどさ」

とりあえず弁当箱に半分飯を詰めて、放置。もう半分に詰めるおかずの方をつくることにしよう。

「卵焼きと漬物入れて、あと…、ああ、シヨウガ焼きだ、シヨウガ焼きにしよう」

というわけで、今日の弁当はシヨウガ焼き弁当に決定したのである。シヨウガ焼き弁当は、正直、弁当に詰めるおかずがなにも思いつかなくて困ったときの対処策である。急きよ、弁当箱の面積の半分ほどに詰めた飯を三分の二辺りまでしゃもじで押し伸ばす。

この上に三枚くらい、あまりタレが入らないように気をつけながら

肉を並べて、それからいっしょに炒めたもやしとか玉ねぎとかの野菜を、肉を覆うように上に敷く。そうすると、野菜に絡んだタレが軽く肉に遮られて、昼のころにちょうどよく飯に染み込むのだ。

あと、タレがあまり流れないから、他のところをタレが侵食することもあまりないのだ。まあ、とはいっても、一応他のものの下には銀紙カップとか敷いておきはするのだが。

「となると、まずは野菜を切るか。ふむ」

冷蔵庫の中から玉ねぎを取り出して皮をむき、半分に切ってから芽と根を落とし薄切りにしていく。間もなく、まな板には玉ねぎ一つ分のスライスの小さな山がつくられる。冷やしておいたので涙がぼろぼろ流れることもなく楽な作業である。

個人的に、薄くスライスされている方が炒めた後に冷めた後にしんなりして好きだったりする。

「で、豚肉の処理と」

バットに豚肉のスライスを並べて片栗粉を薄く振りかけていく。それからパタパタと叩いてやり、肉の裏表に軽く片栗粉をまぶしてやればそれでよし。

「ここまでくればあとは炒めるだけ、と」

大きめのフライパンを出し、中火にかけてキッチンペーパーを使って油を薄く伸ばす。十分に熱せられたところで肉を一枚ずつ丁寧に広げながら並べていき、うっすらと脂が浮いてきたところで返し、そこにスライスした玉ねぎを加えていく。

少し待ってからフライパンを回してやり、混ぜつつ返してやると、もう全体に軽く焼き色がついているので市販されている普通のシヨウガ焼きのタレを少し多いくらい回し入れる。全体になじませながらももう少し炒めていくと、玉ねぎに火が通ってしんなりしてくるので、それでももう完成だ。

「ふう、簡単だな、シヨウガ焼き。肉の調理は時間かかるとか言っ  
てごめんな」

「もう出来たのですか？」

「ああ、もう食えるな。まあ、肉は弁当用だから食わないんだけどさ」

「お手伝いできることはございますか？ 幸久様」

「そうだな、俺はあと卵焼きをつくるだけだから、もうそれほど時間かからないし…、いいからいい子で座って待ってろ」

「はっ、了解いたしました」

「朝飯食えるようになったら呼ぶからな」

「それでは、お邪魔にならないように静かに待っております」

「ああ、そうしてくれ」

広太は大抵のことは器用にこなすのだが、どうしてか料理だけではできない。盛り付けなんかも絶望的で、どうして料理に関してだけこんなにできないの？ と聞きたくなるほどだ。

「卵焼き卵焼き、と」

そうだ、この間ネットで偶然見つけた味付けを試してみるとしよう。正直、いけるかどうか全く分からないから、失敗になるかもしれないが、まあ平気に違いない。もしダメでも、黙って全部食えば問題ない。

卵を三つ割り、そこに軽く三回、小さじ三杯より少し多いくらいポン酢を垂らしてやって、混ぜる。それだけでもう味付け完了ということなのだが、本当にこんなので大丈夫なのか、まったく確証がない。

「まあ、焼けば分かるだろ」

卵焼き用の四角いフライパンを取り出してコンロに中火でかけ、さつきと同様に油を敷く。フライパンがちょうどよく熱せられるまでに卵を溶いていく。

溶き卵を一滴垂らして、熱し具合を確かめてから、卵焼きを焼いて巻いてをし始める。そんなに時間をかけるのもバカらしいのだが、しかしここで適当にやっちゃってもし失敗でもしたら、きつと一日中ぐったりしてしまうのでここは気合を入れてやっておこう。

「こういう単純作業が、けっこう楽しいんだよねあ…、いや、料理

ってけっこう全体的に単純作業なのかもしれんなあ……」

そう考えると、料理というのは不思議なものだ。単純作業の積み重ねでありながら、全体でみるとかなり発展的な作業なのだからな。いや、あるいはあらゆるものが、単純作業の積み重ねによって発展的なものを組み上げていくのかもしれない。

単純作業というのは巨大な何かを組み上げるためのピースづくりのようなものなのかもしれない。そしてそれを使って何かを組み立てるのが発展的な作業なのだ。

「ああ、どうでもいいことを考えてるうちに、巻き終わってしまっただけ、牛乳パックの上に放置して冷ます、と」

卵焼きが完成したのでシヨウガ焼きの方に作業を戻そうと思う。適度に冷めてきた飯の上に、適度に冷めつつあるシヨウガ焼きを三枚乗せ、その上に玉ねぎたちをちよちよいと乗せていく。それから弁当箱の空いているところに銀紙カップを、小さいものと大きいものを二枚敷いて、小さい方には冷蔵庫から出した漬物をどさっと入れる。

こういう大ざっぱな弁当だと間違いなく箸休めがたくさんほしくなるのは、もう経験則でよく分かっているし、特にそれについて悩むことはない。むしろ悩むのは今日の卵焼きの味の出来栄であり、本当にポン酢を入れるだけでよかったのか、いまだに疑問でならない。

「卵焼きはもうちょっと冷ましてからの方がキレイに切れるし、先に朝飯だな……。広太、朝飯にするぞ」

「はい、テーブルの方の仕度は、既に」

「飯よそえ、それに弁当の残りのシヨウガ焼きのタレと玉ねぎをかける」

「今日は、ずいぶんと豪快な朝食ですね」

「これは手抜きというんだ、広太」

多めにタレを入れ多めに玉ねぎを刻んだので、弁当箱の中に収めた後であっても、まだけっこうな量がフライパンの中に残っていて、

これかけただけでも飯が二三杯食えるだろうことは明らかだった。そして炊飯器の中の飯はまだ案外残っているのです、どうやら今日の朝飯はご飯祭になりそうな感じである。

「卵焼きも、八個くらいには切れそうだし、端を一個ずつ食うか」

「いただいてもよろしいのですか？」

「別にいいんじゃない？　後で食うか今食うかっていうだけだし、今食ったからって気にすることじゃないだろ」

「そうですか、今日は新しい味付けをお試しになられたようですよ、とても楽しみです」

「？　なんでそんなこと知ってるんだ？」

「幸久様がおっしゃっていらっしやいましたことが、耳に届きましたので。幸久様はおひとりで料理をなさっていると、特に独り言が多くなられますので」

「マジ？　俺、そんなに独り言いってる？」

「そこまでということはありませんが、しかし確かに独り言は言っ  
てらっしゃいます。個人的な見解ですが、あまりそのような状態は  
好ましくないように思いますので、可能であるならば直されるのが  
よろしいかと思われます」

「うわ……、独り言とかめっちゃ恥ずかしい……」

広太は、俺の独り言は大したほどではないと言っているが、しかし  
こういうときは俺のショックが大きくならないようかなり手加減し  
つつ告げているはずだし、俺が独り言をすごい言っている、という  
ことはおそらく確かなことだろう。味付けのことなんて口に出した  
つもりはないし、きつとほかにも何かいろいろと思ったことを口に  
出したりしているに違いないのだ。

今までもそうして、気づかぬうちにぶつぶつと独り言を言っていた  
のではないかと思うと、もはや恥ずかしいを通り越してみっともな  
いのではないだろうか。ああ……、もし変なこと言ったら、どうし  
よう……。

「幸久様は、独り言を言っているという自覚はおありなのでしょう

か？」

「たまに言ってるなあ、くらいには思ってたけど…、ああ、もしも今まで、思ったことをみんな口に出してたりしたらどうしよう…」

「自覚がないのでしたら、それを自覚することから始めなくてはなりません。独り言を言ったら教えてくれるように、誰かに頼むのがよろしいのではないですか。たとえば、いつもいっしょにられる霧子様などをお願いするのがちょうどいいのではないのでしょうか」

「ん？ いや、いっしょにいたら独り言って聞けないんじゃないのか？ こう、一人でいるから独り言なんじゃないのか？」

「いえ、二人でいても独り言をおっしゃることはあるように思いますが。どちらにしても、どなたかに教えていただけるようにしておけば、きつとすぐにでもその問題は解決されるように、私は思います」

「そうだったのか…、っていうか、今もそうか。分かった、誰かに頼んでみるわ」

「そうするのがよろしいかと思われます。あとは、寝言と迷い箸も直されるとよろしいかと」

「…、それはもう…、いや、ま、迷い箸は、直せる、と思う、けど…、寝言は、無理じゃね…？」

「私としては幸久様の寝言など取るに足らぬことと思うのですが、しかしそうは思わない方もいらっしゃると思いますので、できることならば、直す方がよろしいかと」

「ど、努力は、する…」

実際、人間には直せる癖と直せない癖があると思う。直せるものは多少の努力を持ってすればなんとかなるのだろうが、しかし後者はもう努力云々ではどうにもならないに違いないのだ。というか、寝言って、直し方あるのか？ 病院に行けば、直ったりするのか？ そこらへんのところを調べてみるのも、あるいは一つの努力なのかもしれない。

「まあ、それは、今はいいとして、とりあえず、朝飯食うか。今日はちよっと早く出るしな」

「本日は、なにか朝早くに御用事があるのでしょいか？　いつもならば、もう少しだけゆっくりなさっておいですのに」

「ああ、ちよつとな」

俺が今日、ほんの少しだけ早くに学校へと向かう理由がなにかといえ、それは当然昨日から執着していることに大いに関係があるわけである。

「ちよつと、説得というか、報告というか、宣言というか…、まあ、アレだ」

「なるほど、幸久様には、私には推し量ることができないほど重要な何かがありになるということですね。高校というものは、なかなか楽しいところのようで、幸久様が御多幸ならばなによりです」

「別に、お前が高校行きたいなら、俺からおばさんに言っとくぞ？」

「いえ、私は、幸久様のためにすべてを捧げると決めた身ですので、これ以上の時をそれ以外のことに拘束されることは許されません。この家で、幸久様のためにすべての時を費やさせていただきます」

「…、そうか、気が変わったら言えよ？」

「はい、お心遣い、痛み入ります」

さりげなく言ったことは、やはりさりげなく受け流されてしまう。おそらく重々しく言えばそれなりの対応でもって受け流されてしまうのだろう。

しかし、俺は諦めないぞ。広太は、きっと高校に行かせて見せる。そして末は博士か大臣か、だ。

そして広太によって完璧にセットされた食卓に向かい合って座り、俺たちの朝食は始まるのだった。目の前には小振りのどんぶりによそわれた飯と、それにかけられたシヨウガ焼きのタレと玉ねぎ。あえて呼ぶなら、「シヨウガ焼きの付け合わせの玉ねぎ丼」だろうか。いや、実際、こういうのはけっこう美味かったりするのだ。手間をかけたものが美味しいというのはおおむね正しいのだが、しかし簡単

で適当につくれるものも意外と美味かったりするから油断ならないのである。



## スカートめくりとまじめ少女と破廉恥野郎と

いつもより早い時間に家を出た俺は、当然いつもより早い時間に霧子を叩き起こし、そしていつもよりも早い時間に学校へとたどり着く。

「にゅぅ…、ねむいよお……」

「なんだよ、いつもより10分くらい早く起きただけじゃねえか。」

昨日はよく眠ったんだろうに、ねむねむ言うんじゃないの」

「でも…、ねむいんだもん……」

「ったく…、もう学校着いてるんだから、ちよっとだけがんばれよ。教室ついたら、ホームルームが始まるまでちよっとだけ寝ればいいだろうが」

「うん…、そうするよ……。でも、どうして今日は早くきたの？」

「なんでって、そりゃ、あれだよ。霧子がゴールデンウィークに旅行行きたいって言うから、姐さんとかに行くよ、って伝えるために決まってるだろ」

「にゅ？ そうなの？ でも、なんで朝じゃないとダメなの……？」

「朝じゃなきゃいけないってわけじゃないけど、朝の方がなんとなく気合入る気がするじゃん。それだけだよ」

「それならお昼休みでもいいのに……」

「細かいこと言うんじゃないわよ、この子ってば」

「にゅぅ、だって、ねむいもん」

「ねむいねむいって言ってないで、さっさと階段登る！ 急がないとスカートめくるぞ！」

「にゅぅ……、幸久君、えっちだよお……」

「イヤだったらさっさと教室行きな。ほらほら、追いつき次第スカートめくるからな。もう追いつくぞ」

「にゅ…ん、助けてよ」

げた箱でふらふらしながらくつを履き換えつつグダグダ言っていた

霧子だったが、俺がそう言うと、眠気よりもスカートめくられるのがイヤな気持ちが勝ったのか、やけに機敏な動きでスカートの後ろを押さえながら階段を駆け上がった。そして俺は、それを追いかけるように、付かず離れずの距離を保ちながら階段を昇る。

「追いつくぞ、霧子。追いついたらめくらどころじゃ済まないね。奪うね、スカートを」

「にゅーん、幸久君のえっち」

そしてバタバタと階段を昇っていった霧子は俺よりも一足先に教室に駆け込み、それから俺も教室へと歩いて入るのだった。言ってしまえば、あんなに急いで階段を昇ったら、いくらスカートを押さえたとしても翻りまくって隠すという本来の目的を果たすことはほぼできない。

故に、俺の目にはそのスカートの中にある下着がちらちらと見えていたわけであり、まあ、無事に逃げきって安心した顔をしている霧子には悪いのだが、ちょっと見えていたのである。しかし俺は、それを言わないのも一つのやさしさなのではないかと思う。ただもう、こうやって霧子をせき立てるのはやめよう、と心の中に誓うだけで収めようと思う。

霧子は比較的恥ずかしがり屋のくせに、制服のスカートはかなり、それこそ風紀委員会の服装チェックなんかで注意されかねないくらいロールアップしているので、風に捲かれたり躓いてこけそうになったりしたときに、かなりの高確率で下着を見せてしまうのだ。

俺が、できるだけそうならないように注意してやっている甲斐もあって、他の男の前ではそんなことはないようになってきたのだが、どうしてか俺の前でだけは気が緩むらしい。まあ、長い付き合いだし、おにいちちゃんに対する羞恥心の薄れというか、そういうあれなのだろうがな。

「どうした、天方、また三木になにかされたのか？」

「にゅー、もう平気、だよお……」

そして教室に駆け込んだ霧子は、姐さんの下へと逃げ込んだようだ

った。こうやって姐さんに泣きつかれてしまった場合、俺が霧子のためを思っでしているいろいろなことが、どうしてかその真意が理解されることはなく、ただの霧子への意地悪として理解されてしまうのだ。

今日だって、霧子がねむいねむいとにゅんにゅん言っていたから仕方なく、教室まで行く気になるようにちよつと追い立ててやっただけだというのに、おそらく姐さんからは俺がまた何かくだらない意地悪をしたと思われるに違いない。

「三木、どうしてお前はそう、天方に何かしたがるんだ？」

「何かしたがるって、そんなことねえって。俺はただ、すみやかに霧子を教室に連れて行こうとだな」

「天方、今日は何をすると言われたんだ？ 正直に言ってもいいんだぞ」

「にゅ、幸久君に追いつかれたらスカートめくるって言われた」

「三木……、お前はまた……」

どうしようもないものを見下すような目で、姐さんは教室に入ってきた俺のことをみる。しかし俺はそんな冷たい目にも負けず、姐さんの胸に飛び込んだ霧子を捕まえたのだった。

まあ、捕まえたと言っても、別に姐さんに抱きついてる霧子を後ろから羽交い絞めにしたり抱きついたりしたわけではなく、後ろでふらふらしているポニテをつかんだだけなのだが。いや、本来ならばこんなところをつかむことは霧子の生態上あまりよろしいことではないのだが、しかし肩とかに手を置くよりも今の場合においては、安全である。

なぜならば今、霧子の肩は姐さんの胸のあたりにあるのであり、もしも霧子の肩に手を置きに行って、もしもうっかり手が滑って姐さんの胸に手が行ってしまったらどうするというのだ、ということだ。いや、そんなことありえないと思うかもしれないが、しかしどうしてそれが確実に起こり得ないと断言することができるだろうか。

俺は、そのもしもが起こってしまつて痛い目を見るのは御免だ。そ

れならば、最初からそれが起こる可能性を極限まで削り切ってしまう  
えばいいではないか。

「よし、霧子捕まえた、と」

「にゅー！？ わわ…、りこちゃん…、どうしよう…！」

「いや別に、教室に着いてから捕まえたからってスカートめくった  
りはしねえよ。あれだよ、あれ。さっきのは方便ってやつだよ」

俺は基本的にルールは守る方だ。だから自分で決めたルールを破る  
ことはめったにないし、相手の決めたルールもおかしなものでない  
限りはしたがっている。

だから今回も、教室に着くまでに俺に捕まったら霧子のスカートを  
めくる、あるいはスカートを奪うというルールだったのだから、教  
室に着いた後にそれをしようとは言うつもりはないのである。

「もうスカートめくったりしないよ、霧子」

「にゅ…、ほんとに、しない？」

「しないしない、教室の中では、しないよ。まあ、俺がこのまま霧  
子を教室の外まで引きずって行ったら、話は別かもしれないけどな」

「にゅ…、り、りこちゃん、助けてえ……」

霧子は、弱々しくも可愛らしい声で姐さんに助けを求める。それに  
よって、姐さんの瞳に正義の炎が燃え上がった。おそらくだが、俺  
は今の瞬間にこの場での悪役へと配されたに違いないわけで、この  
あと正義の味方に配された姐さんによって天誅が下されるに違いな  
い。

いたいけな少女の助けを求める声によって姐さんが正義の味方とし  
て覚醒してしまった今、それは避けようのない確定事項だろう。

「三木、天方から離れろ。その手を、ポニーテールから放すんだ」

「わ、分かった、姐さん、冷静になろう」

「言われるまでもなく冷静だ。三木、たまに早く来て感心だと思っ  
たら、いったい何をしているんだ……！」

姐さんの言葉の持っている静かな迫力と勢いに、俺は霧子が痛くな  
いように掴んでいたポニテから手を放し、そのまま両手を挙げた。

何かをされるまでもなく、その警告だけで白旗である。

というか、姐さんは俺の友人ではあるが風紀のエースでもあるのだ。そんな人と対立したって俺には勝ち目というものが最初からまるでないのだ。

「べ、弁解を聞いてくれ、姐さん。それと、もう一つ話があるんだが」

「よし、先にその話とやらを聞こう。弁解はその後に聞くことにする。大方、弁解を聞いた後にお前のことを打ち倒すことになるだろうからな」

「わ、分かった…、とりあえず、話だけはせめて、頼む。そのために、わざわざ少しだけ早く来たんだからな」

「よし、いいだろう。そういうことならば、聞かないわけにはいくまい。さあ、簡潔に話をやらを済ませるんだな」

「よ、よし！ 俺は、ゴールデンウィークに、霧子を連れて旅行に行くんだ！ 姐さんも、よかったらご一緒にいかがかしら！ 無理だったら、無理には言わないけど、友だちだし伝えるくらいはしても、いいよな！」

俺の今日少しだけ早く学校にやってきた目的、それは姐さんにそのこと、つまり俺が霧子をゴールデンウィークに旅行に連れていくということを報告することであり、姐さんが来なくても行っちゃうぞと宣言することであり、でもいっしょに行く気があったらいっしょに行こうと説得することである。

おそらくそのことで、今日の朝は大変になるだろうと思っていたのだが、しかしどうやらそれとはまったく違うところで俺は危機に瀕しているようだった。どうしてこうなったのだろうか、と問えば、まあ、おそらく俺が悪いのではないだろうか。

「分かった、お前がそのつもりだということは受け取った。行くかどうかを考える、それについては私に少しだけ時間をくれ。それでは弁解を聞かせてもらおうか」

「わ、分かった、それじゃあ、少なくとも俺の弁解が終わるまでは、

姐さんも拳をしまっておいてくれ」

「そうだな、ふむ、もちろんそのつもりだ」

この間も姐さんに、俺の自業自得とはいえ昏倒させられた身としては、またあの感覚を味わうことになるのはご遠慮願いたい。出来ることならば、穏便に事を済ませたいところなのだが、そのためのもつとも簡単な方法である「朝のホームルームが始まってうやむやになる」は時間的に使えそうにない。

しまったな…、こんなことならいつもどおりに時間ギリギリに来ておけばよかったじゃないか……。いや、時間通りに来てたら霧子がげた箱でぐずることもなかったし、俺が変なことをして霧子を追い立てることもなかったし、姐さんに弁解しなくてはならないような状況には陥らなかったはずなのだ。もしかして、俺が早くに学校にきたこと自体が失敗なのかもしれない、と思えてきた。

そもその目的である姐さんへの宣言も、実際のところ一言二言で済んだわけだし、まさか、この選択それ自体がもう失敗の第一歩だったということなのだろうか。

「俺は、霧子のためを思ってだな」

しかしそうだとしても、俺は姐さんに弁解しなくてはならないわけであり、なんとか説得して拳を収めてもらうところまでいかになくてはならないのだ。姐さんは、基本的に平和主義者なのだが、心の奥底は熱い闘魂原理主義者であり正義が好きで熱血漢である。

普段はやさしい女の子としても、いざとなったら拳で語り合うことをも辞さない漢の中の漢。それがわが校の風紀のエース、風間紀子なのである。

「天方のことを思って、どうしてスカートをめくるという思考に行きつくんだ」

「いや、それは、方便というかなんとかでさ。つかまったらスカートめくられるって思ったら、つかまってるものか！　ってなるだろ？」

「それはそうかもしれないが、しかし、始めたときは方便だと考え

ていたとしても、本当に捕まえてしまったらどうするつもりだったんだ。どうせ、ルールだから、とスカートをめくるつもりだったのだろう」

「まあ、そういうゲームだったからな。俺としては本気で追いつくつもりはなかったけど、霧子があんまりのろのろ昇ってたら捕まえちまったかもしれないし、ルールでそう決めたんだから、敗北条件満たしたら、そりゃ罰ゲームだろ」

「くっ…、破廉恥なやつめ……。そのように風紀を乱すものを野放しにしておくわけにはいかない、か……」

「あれ？　ちょっと待って、俺の有罪確定してない？」

「確定もなにも、制裁する必要がないとでも思うのか？　もしそうなのだとしたら、私とは真逆の考えを持っていると言わざるを得ないぞ」

「い、いや、話し合おう！　俺は、まだ何もしてないよ！　ほら、あれだって、推定無罪っていうか、疑わしきは被告人の利益にっていうか、未必の故意っていうか…、あっ、タイム！　最後のは違う！」

「言葉を繰り返してのらりくらりと、そういう心根がいけないと、私は思うぞ」

「なんていうかさ、あの、あれだよ、俺もちょっとは悪かったと思ってるし、さっきの発想っていうか、着想はなかったなあ、って思ってるからさ、今日のところは、勘弁してください」

「…、性根か？　やはり性根が曲がっているのか？　どうして三木はそういう、破廉恥な方向にしか思考が帰結しないんだ？」

「そんなことないよ！？」　別に破廉恥な方向以外にも思考は帰結してるよ！？」

「そうか？　私は、そうは思わないが……」

「どうやら、俺は姐さんの中では相当に破廉恥な存在になっているらしいのだが、しかし俺としてはそこまで姐さんに対して破廉恥なことをしているつもりはないわけで、おそらく見解の不一致に違いな

いんだ。姐さんは、破廉恥に対するハードルがかなり低いから、俺の行動が概ね破廉恥に見えるのかもしれないが、俺としてはそこまです破廉恥なことはやっていないのである。

…、今、俺、何回「破廉恥」って言った……？

いや、そんなことはどうでもいいわけで、俺が破廉恥ではないということを、そろそろ姐さんにしっかりと分かってもらわなくてはならないらしいな。弁解もしっかりするとして、そのことについても語り合う必要があるのかもしれない。

「あのな、姐さん…、俺はな」

どうやら、そろそろ俺も本気を出す時が来たらしい。



## 罪と罰ちゃん

「だからさ、俺はさ、別にさ、そんなエッチなことばかり考えて生きてるわけじゃないんだって。いやね？ 確かに俺だってそういうことをまったく考えないわけじゃないのよ？ でも、だからって年柄年中日がな一日そんなことを考えながら生きてるわけじゃないのよ。そういうことを考えるのも、なんていうのかな、健全？ っていうか、アレなわけじゃん？ そこらへんのところは、いくらなんでもそれなりに認めてもらわないと俺は生きていけなくなっちゃうわけ。姐さんだって、人間なんだから、そこらへんのところは分らないでもないでしょ？ だからさあ、なんていうのかなあ…、こう、今回は俺も悪かったと思ってるし、見逃してください」

「…、いや…、いや、無理だ」

「なんで〜！ 俺はこれからもうこんなことしないで約束するし、今回のことも自分が悪かったって認めるし、姐さんに破廉恥だと思われないように注意するって言うてるのに、なんでだって！」

朝のホームルームが始まるまでの時間をいっぱいに使って、俺は姐さんに対して、自分が特別に破廉恥な人間ではないということを伝え、そして今回のことについて水に流してくれるよう嘆願するというミッションに立ち向かっているのだが、しかしどうもその状況は改善されている様子が見えない。俺がこんなにがんばって説得しているというのに、解決の糸口さえも見えないとは、ミッションとしての難度が、あまりに高すぎるのではないか、と思う。

いや、そもそも難度が高すぎるのは姐さんを説得すること自体であり、その鋼鉄の意志をねじ曲げるということなのだ。それを成し遂げるためには超高熱を持ってして一度溶かしてしまうか、あるいは強引なほどの力を持ってして折り曲げるかのどちらかしかないであろう。

しかし俺は、姐さんの意思を強引に折り曲げる（ガチンコタイマン

バトルに勝利する）ことなどできようはずがないのだ。それならば、熱をもってして一度溶かしてしまう（言葉で言いくるめる、あるいは説得する）ことができているか、といえば、それも今はうまくできていない感じがする。なんというか、己の言論に切れ味が感じられないというか、押しきるだけの熱量が不足しているというか、きつと朝だからそこまで頭が回っていないとか、そういうあれに違いない。

どうも、軽く詰んでいるようなのだが、詰んでいるのなら詰んでいるなりに戦いようというものがある。ここはおそらく、遅延作戦を選択することこそが正しいというべきだろう。なんとか話を引き伸ばして引き伸ばして、朝のホームルームが始まってしまいう前に、姐さんがもうダメだと結論付けてしまいうことがないようにするしかないのだ。

「ダメだ、やはりこういうことは見逃しては、いや一度でも許してしまうといけなかったのだ。今までも、お前がそういうから、と何度か見逃してきたのだが、しかし一向に改善が見られないではないか。お前はもう破廉恥なことはいらないと言っているが、しかしそれが改善されているようには、私にはどうしても思えない」

「いや、それは、姐さんが厳しすぎるんだって」

「私は、誰よりも厳しくなくてはいけないんだ。風紀委員会に所属するということは、そういうことだろう。たとえ友であったとしても、そこでなんらか風紀上よくないことが行なわれていたらそれを諫めもするし、当然止めるに決まっている。いや、友であるからこそ、そのものの振る舞いを厳しい目線で見守らなくてはならないのだ。私は風紀委員であり、小隊長として一つの集団を治める立場にいる。もちろん必要以上に公明正大でなくてはならないし、当然、友だからと言って何かを見逃すようなことがあっては、示しというものが見つからないではないか。お前も、風紀委員の友だちがいるからやりたい放題しているなどと思われたくはないだろう」

「まあ、姐さんの言うことはその通りだと思うけどさ、でもそれっ

てけつきよく理想論でしかないわけじゃん。姐さんは細かなところまで気になっちゃうんだってことは分かるよ。だけどさ、そうだとしても、なんでもかんでも取り締まればいいってわけじゃないだろう？　もうちょっとフレキシブルにしてさ、一つの枠に全てを押し込めようとしちゃいけないと思うわけよ、俺は」

「確かに、そういう考え方もあるかもしれない。もちろん、すべてをすべて画一的に裁くべきではないというのは、間違っているとは、私も思わない」

「だったら、」

「しかし、だ。そうやって自由度を高く取り、決まりごとに必ずしも縛られずに判断を下す考え方が大切なのも同様に、拘束力を強く示し、決まりごとに忠実に裁きを下していく考え方も重要になるだろう。どちらがよいとか悪いとかではない、どちらも重要で、どちらも必要なのだ。お前は一つの枠に押し込んでしまうと自由な発想を阻害するでもいいいたいようだが、しかしそれは、逆に考えれば、言葉巧みに決まりの抜け穴を通り抜けることを暗に容認しているということにはならないか？　それでは、決まりを定める意味がないではないか。決まりをつくるというのは、かつちりと、外れることの許されない一つの枠を定めるということに他ならない。もちろん、その枠の中に収まっているのならば、どれだけのそのようなことをしても、許容されるべきだろう。しかし、だ、もしもそこから一歩でも踏み出してしまったらどうだ。そのような場合、お前の言うようなやり方ならば、『一歩くらいなら仕方ない』と許容するに違いがないが、そうだとしたら、そこにわざわざ一線を引いた意味はどこにある。踏み越えてはいけない、という意思を込めて引かれたはずの一線を、踏み越えたのにどうしてそれが許容されるのだ」

「そ、それは…、そうかもしれないけどさ。でも、それが許容されるかどうかは、その程度にもよるわけじゃん。その一歩がさ、許容している方向に向いているかどうか、ちゃんと話し合ったりすればいいじゃん」

「それでは、その話し合いには何の意義を持たせればいい。決まりの再画定か？ 例外的措置の策定か？ どちらにしても、それではいたちごっこではないか。それに、その話し合いをするときの基準はどこにおけばいい。三木、お前の言い分には、決まりというものを意図的に軽視しているきらいがある。すべての基礎にあるのは決まりに他ならないのだ。決まりから逸脱することも、決まりがあるからそこであることであり、決まりがなければ何かを始めることすらできないだろう。当然、決まりというものは破るために決めるものではなく、守るために決められているのだ。それを守ることが、集団に帰属するということであり、一個の人間として生きるということなのだ」

姐さんの言は、間違いなく正論であり、打ち倒すことなどできようもないほどに真つ当だった。俺の言っていることというのは、当然、俺自身の利を求めるが故のものであり、その意図を否定することはどうしたってできないが、姐さんは自分自身をも度外視しているという点で俺とはその客観性が異なる。

客観的に正しい言説は、主観的に正しいだけの言説では、そもそもぶつかり合うことすらできない、次元違いの強さを持っているのである。

「お前の言い分が、すべて間違っているなどとは、もちろん言うつもりはない。お前の考え方も、ある意味で今風のもののなのかもしれないし、それなり以上に受け入れられているものかもしれない。だが、私はそれを手放しに受け入れることは、出来ないのだ。私のことを堅物だと思うものは多いかもしれないし、実際のところ、自分でもそうであると自覚しているところも、なくはない。しかし、私はそれでいい、いや、それがいい。堅物であることを恥じるつもりも、変えなくてはと思うこともない。私のように、愚直と思われるように決まりに殉ずるものがいなくて、決まり自体が風化してしまうだろうから。人の通らなくなった道は、あつという間にダメになってしまふと言うことを知っているか。しかし逆に、誰か一人だ

けであつてもそこに思いを寄せている者がいれば、それがダメになつてしまふことはないのだ。守ろうとするものがある限り、それは決まりについても同様だ。私は、自分が決まりを守つて生きていくことによつて、周囲にそれを波及させていくことができると信じている。お前にも、そうすることができると信じているんだ」

「ぐっ…、つ、つまり、どういうことだい…?」

「つまり、私は、私自身の主張を、今のお前に理解してもらえないとしても、己の心の中の意思に基づいて、お前に裁きを与える必要があると言うのだ。お前は、それに納得することができないかもしれないが、それはあくまでも今だけの話であり、いつかお前の中で得心が行くときが来る、とも信じている」

「もっと、具体的に言うത്?」

「私は、お前に対して、断罪を行なう。もちろんそれは、今回のケースに対して適當であると思われる程度のものでしかないが、しかし罰は受けることに意味があるのであり、その大きさが全てというわけではない。ルールに照らして適切な罰を与えることも、ルールを遵守する上で重要なことだからな」

「た、たとえばだけど…、どれくらいの罰が適切だとお考えですか、姐さん…?」

「そう、だな…、今回は特に何をしたわけでもないが、しかしその性根をたたき直す意味も込めて…、天方に誠心誠意謝るくらいがちょうどいいのかもしれないな。それから、もう破廉恥なことはしない、という約束に背いた罰も必要だ。それについては、軽くしつぺをする程度で十分だろう、皆藤が」

「えっ!? 姐さんがやるんじゃないの!?!」

「以前、お前が一度目にその約束を破ったときは天方が、この間、二度目に破ったときは私がしつぺをしたのだ。懲りずに三度も約束を破ることがどういうことか、お前には心の底から理解してもらふ必要がある。そのために、今度のしつぺは皆藤にやつてもらふのが適當であろう、という結論に至つたのだ」

「ほえ？ りこたん、なんかいった？」

「志穂、今来たのか？」

「うん、だってもうちこくになっちゃうから」

「ああ、もうそんな時間か……」

「む、どうも私が話し過ぎてしまったようだ。よし、ちょうどよく皆藤もきたことだし、ホームルームが始まる前に罰を済ませてしまわなければいけないな。さあ、皆藤、三木にしっぺをしてやってくれ。また今日も三木は破廉恥なことをして、天方に意地悪なことをしたのだ」

「はれんちゅは、だめって、こないだりこたんがいったよ。ゆっきいはいつもだめなことばかりするんだから、もう」

「お前にだけは言われたくねえよ！」

「まあ、今回は軽くでいいのだぞ、皆藤。あまり強くやってしまっでは、過度な罰を与えたことになり、決まりに背くことになってしまいうからな」

「はーい」

「志穂の軽く、とか信用ならないよ！ こいつの一番苦手なことは、手加減だよ！ 姐さん！」

「なに、しっぺなど、軽く青あざが出来る程度だろう。そこまでの罰ではないのだから、文句ばかり言うな。お前がこれに懲りて、破廉恥なことをしないようにするための罰なのだから」

「志穂のしっぺなんて喰らったら、腕がもげるよ！」

「いっくよ……」

いつの間にか教室にやってきていて、いつの間にか俺たちのそばにいた志穂だったが、姐さんにやってくれと言われたしっぺに何の疑問も抱かず、訳も知らぬまま刑を執行しようとしている。俺の腕は志穂にがちり掴まれていて、志穂は握った拳から揃えて立てた人差し指と中指にはあゝ……、と息を吐きかけていて、準備万端といった体だった。

あんなことをしても、普通はダメージが増したりしない感じなのだ

が、しかし志穂がやったらそれがまるでなにかしら必殺技の前振り  
のようで、徒に恐怖感だけが高まっていくのだった。

「あ、姐さん！ ごめんなさい！ もうしません！ほんとに、もうしませんから！」

「ダメだ、お前には罰を与えなくてはならないのだ。私も、そのことには胸を痛めているのだが、しかし、これもお前のためだ」

「姐さんのお説教で改心したから！ マジで！！」

「皆藤、やれ」

「ほーい」

しかし必死の懇願も、姐さんには届かなかった。姐さんは一度決めたことは基本的に翻さないし、やるといったらやる人なのである。気軽い感じで、志穂は俺の前腕に向かって揃えた二本の指を振り下ろす構えに入った。逃げようとするのだが、しかしその握力の前にどうしても足がへたり込んでしまうので、振り払うことはおろか一歩でも逃げ出すこともできないのである。

「にやっ！」

[illegible]

そして、志穂の手が振り下ろされる風切り音と重なるように、俺の悲痛な叫びが、ホームルーム開始直前の教室にこだました。

## 旅の仲間を増やすのだ(1)

志穂のしっぺが俺の腕にさく裂し、教室の中を雷が駆け抜けたような轟音を響かせた数分後、しかしなにごともなかったかのよう朝のホームルームは取り行なわれているのだった。

まるでしっぺを喰らった部分が爆発し、俺の左手はもはや使い物にならないのだ、と絶望したのもつかの間、そこにあるのはただすごい痛みだけで、別に爆発もしていなければ、左手が失われるようなこともなかったようだ。まあ、たかがしっぺをくらっただけだというのに、ものすごく継続的に痛いわけで、その患部がどうなっているか、確認するのが恐ろしいのだが。

「ちくしょう…、痛ってえ……」

俺が机にうつ伏せになって呻いていてもつつがなくホームルームは進められていき、出欠をとり終わった今、まさに連絡事項が伝達されようとしている。しかし俺にしてみればそんなもの、確かに聞いていなくてはマズいことではあるのだが、を聞いている場合ではない。俺は息を深く吸い、深く吐きを繰り返すことによってなんとか痛みを鎮静化させる作業に忙しいわけであり、他のことに意識を割いている場合ではないのだ。

『幸久くん、だいじょぶ?』

「メイ…、俺の左腕が…、死んだ……」

『すごい音、してた』

「ああ、俺も…、まさかしっぺであんな音が出るなんて、と思わなかったさ……。よもや、それが、俺自身の身に降りかかろうとも、な……」

気軽な感じでぶちかまされた志穂のしっぺによって、俺の手の先の感覚が数秒間消し飛んだのは、確かな事実であり、俺の感じた真実として間違いなくあったことだ。この感覚を誰かに伝えることは、おそらく出来ないのではないか、と思うが、しかし言葉にせずには



いられないのである。

「あのな、メイ…、すっげえ、痛かったんだ。こう、腕がさ、爆発っていうかなんていうか…、吹っ飛んだ感じ？　ここから先が、もうなくなっただな、って感じだったんだよ」

『やっぱり、すごい、痛かった、の？』

「今はもうそんなでもないんだけどさ、いや、まだ痛い痛いんだけど、あの瞬間は、もう痛みじゃなかった。寂しさ？　いや、喪失感？　なんか、あって当然のものがなくなった心の痛みっていうか、悼みっていうか、そういう、アレだった。で、そのあと何秒かして、すっげえ痛みがきたんだよ。でも、痛みがきて、初めてまだそこに手があるって分かって、逆にその痛みが少しだけうれしかったりもしたんだよな……」

『今も、そう？』

「いや、今はもうただ痛いだけ。ぜんぜんうれしくない。もう、痛みどっか行け、って感じ」

『幸久くん、大変だね、いろいろ』

「まあ、いろいろあるけど、たいてい俺が悪いからさ、どうしようもないんだけどな。でも今回はほんとにやりすぎだと思う。だって、別に志穂がやることなかったじゃん。姐さんがちよつと強めにやればよかっただけで、手加減とか力加減できない志穂に、わざわざやらせることはないじゃん、な？」

『志穂ちゃんの、しっぺ…、こわい……』

「メイは、絶対にやられないようにするんだぞ。きっとメイがやられたら、爆発するからな」

『気をつける』

「うんうん、それがいい。あつ、そうだ、メイには、まだ言っけなかつたっけ」

『？　なにが？』

ゆり先生が今日の連絡事項をつらつらと派伝達している中、俺とメイは声をひそめて話をするのだった。うちのクラスは、まるで小学

校で見られる机の配置のように隣同士の席がくっつけられているので、少し身を寄せ合うだけでこうして気づかれないように話をすることもできるのだ。しかもそれに加えてメイはコミュニケーションに会話を用いないのでより簡単にひそひそ話をする事ができるのである。

唯一気をつけるべきことは携帯の操作音なのだが、メイのそれはデフォルトでオフになっているので問題となることはない。現に今までも、授業中にひそひそ話をしていたことは何度もあるのだが、しかしバレて注意されることはめったになかった。故に今回も、そこまであからさまにバレてしまうことは、おそらくないであろう。

「えっとな、ゴールデンウィークのこと。メイの予定がどうかはまだ聞いてないから分からないんだけどさ、ゴールデンウィークの最初の三日、旅行に行くんだ」

『旅行？ 行くの？』

「ああ、そうなんだよ。今のところ、俺と霧子の二人しか行くことが決まってるやつはいないんだけどさ、行けるってやつがいたら誘いたいんだよ。メイは休みの間の予定とか、どうなってるんだ？

予定が空いててさ、それで来てもいいなって思ったら、いっしょに行こうぜ。宿代は俺のコネで少し安くできるから、あんまり心配しなくていいし」

『お休みの間の予定は、えっと』

メイは、それからメールフォームをいったん閉じるとスケジュールを起動し、それをそのまま俺に渡した。受け取った俺は、機種が同じなので、勝手知ったるとばかりに操作して五月のカレンダーにたどり着くとゴールデンウィーク付近に登録されている予定を調べてみる。

一日目から四日目にかけてと、それから六日目に、どうやらなんらかの予定が登録されているようである。どんな用事なのか、少しだけ気になるが、しかしそれはメイのプライベート情報であり、勝手に閲覧してしまうわけにはいかないだろう。

「これ、何の予定があるか、見てもいいか？」

だから、とりあえず見てもいいかだけ確かめてみることにするのだった。もし見てもいいと言われれば軽く確かめて返すし、ダメと言われればこのままにも操作せずにケイタイを閉じて持ち主であるメイの手に戻すだけである。

「ダメだったら、それはそれでいいんだけど、見ていい？」  
こくり

「見ても、いいのか？」  
こくこく

俺の質問に、メイは首を縦に振って応える。それは俺がメイのゴールデンウィークの予定を知るところを許容してくれたということであり、メイを旅行に連れていくことができるかどうか、ということ自分の目で確かめる機会を与えられたということだった。

「じゃあ、ちよつとだけ失礼しまして……」

ぴ、ぴっ、と操作をして、登録されている予定を知りたい日へとカーソルを合わせると、そのまま決定キーを押し込んだ。

それによって、画面にはその日の、まずはゴールデンウィークの初日、の予定が携帯の小さな画面に映し出される。俺は、それを見て、その日のメイの動きを想像してみようと試みる。

「えっと…、『パパ、四日間海外出張』と、『ママ、現場責任者会議（遅くなる）』と、『おねえちゃん、旅行にお出かけ』の三つ、だな」

こくん

「メイは、別に何も用事はない…、のか？」

こくこく

それから、ゴールデンウィーク中の予定を順に確認していったのだが、しかしそこに書かれているのはメイの家族の用事ばかりであり、ようやくメイに関係する用事が出てきたのはゴールデンウィークも六日目に差し掛かってからだった。

「六日目に、家族でお出かけするんだな。『アウトレットでお買い

物』って、書いてあるから、これは家族全員で行くんだろ？」  
こくん

「で、七日目は特になし、と」  
こくこく

そして俺は、手の中にある携帯電話を折りたたむと、隣で俺の言葉にうなづくか首を振るかで返答するしかなくなってしまうているメイに、お返しするのだった。メイのスケジュールを見せてもらって分かったことは、メイの御両親は共働きで、この休みはそろってお忙しいようだ、ということと、どうやらメイにはおねえさんがいるらしく、休みはいろいろと遊びまわって大変そうだ、ということだけだった。

メイの予定は、六日目にアウトレットショップに買い物に出掛けることだけが決まっていて、他の日はまだほとんど決まっていないように、休みの大半は家で過ごすことになりそうな感じだ。

『お休みは、暇』

「見た感じ、そうだよな」

『旅行は、あたしが行っても、いいの？』

「ああ、もちろんだ。一日目から三日目まで、二泊三日で行くからな、来るんだったら、予定は入れちゃダメだからな」

『でも、行ってもいいのかな…、あたし、今まで、そうやってお友だちとお出かけしたこととか、ほとんどないし…、お泊まりに行ったことなんて、それこそ一回もないんだけど…』

「いいんじゃないのか？　だって、お姉さんは、この休みに旅行に行ったりするんだろ？　それなら、メイだって行ってもいいんじゃないのか？」

『でも、あたし、まだ高校生だし。おねえちゃんはまだもう社会人だからそれくらいしてもいいのかもしれないけど、あたしはダメって言われるかも』

「でもさ、一日目とか三日目とか、メイはずっと家で独りぼっちで過ごすんだろ？　せっかく長い休みだっていうのに、それじゃ寂し

いじゃないか。きっと親御さんも、お願いしたらいいって言うてるよ」

『そうかな…、どうだろ……』

「…、メイ、ケイタイ、貸して」

『？ わかった』

俺がそう言うのと、メイは小さく首を傾げながら、携帯電話をもう一度俺に手渡してくれる。俺はそれを受け取ると、さっき見たスケジューラーをもう一度起動すると、ゴールデンウィークの日にカーソルを合わせる。

「こういうのはさ、やるって先に決めちゃうのがいいんだよ。やること前提にしたら、説得にだって熱が入るってものだ。弱腰じゃ説得できないんだから、しっかり強気で行かないとダメなんだ」

スケジュールの新規登録を選択し、俺はゴールデンウィークの一日目の日に、メイの予定を書きこんでやった。

「ほら、できた。『メイ、みんなと旅行に出発』。これで、親御さんを説得するしかなかったぞ、メイ。二日目もみんなと旅行。三日目にみんなといっしょに帰ってきて、四日目からもとの予定に戻ればいい。これで、メイのゴールデンウィークの予定は、前半分埋まっちゃったな」

勝手にこういうことをするのは、あまり俺の好みではないのだが、しかしメイに対しては、少しくらいは強引に行ってやった方がいいのかもしれない。メイはけっこう引っ込み思案だし、自分のことを前に出して主張するのはあまり得意じゃなく、自己主張も当然強い方じゃない。こちらが黙って見ていただけだと、メイの方も同じように黙ってしまうのは、今まで一ヶ月くらいの様子を見ていて、なんとなくわかる。

だから、もちろん見て取って分かるメイの意思に沿ってではあるが、少しくらいはこちらから導くようにしてやることも必要なのかもしれない。今回も、メイは旅行に行きたがっているようだし、ただ親御さんから許しを得られるか分からないということを理由に、その

説得もしないうちから腰が引けてしまっているだけなのだ。

それならば、少なくともそれを説得する場に立つまでのことはこちらからセッティングしてやってもいいのかもしれない、と俺は思う。それに、メイももう高校生なんだ。親御さんだって、一人でずっと留守番させているよりも、友だちと泊まりで遊びに出掛けるんだ、という方がうれしいのではないだろうか。というか、メイは今までそんなに友だちがいた方ではないようだし、いっしょに泊まりで遊びに行ける友だちができたなんて、親にとってみれば朗報以外の何ものでもあるまい。

「メイといっしょに遊びに行けるの、楽しみにしてるからな。親御さん、がんばって説得してくれよ、メイ」

「……………」

「メイ？」

『パパとママ、がんばって説得してみる』

「そっか、よし、がんばれよ」

メイは、決心が固まったのか、きっぱりとした感じの目をしてそう書かれた画面を俺に見せるのだった。かわいい子には旅をさせろと言う。メイはかわいいのだし、もちろん旅をさせなくてはいけないのである。

『もしダメって言われたら、どうしよう？』

「そのときは、俺が責任もってメイのことを守るから、心配ありません、って俺が説得に行つてやるよ。二人でお願いしたら、きっと許してくれるだろ」

『幸久くんが、守ってくれるの？』

「まあ、守るって言っても、そんな危ないことなんてそうそう起こらないだろうけどな。でももし、そういうことが起こったら、俺がみんなを守ってやるから、安心していいからな」

『あたしのことも、守ってくれる？』

「当然だろ、友だちなんだからさ」

『友だちだから、守ってくれるの？』

「友だちは、守る。当然のことだ」

『じゃあ、あたしも、幸久くんのこと、守ってあげる。友だち、だから』

「マジで？ それは頼もしいな。メイが俺を守ってくれるなら、俺も安心してみんなのこと守れるってもんだ」

『友だち、だから、うん』

そう言ってメイは、携帯電話を閉じて、一度こくん、と小さくうなずいた。これでおそらく、いっしょに旅行に行く仲間がひとり増えることになるだろう。これで俺と霧子とメイで三人か。まだまだ少ないが、きっとまだもう少しくらいは増やせるに違いない。

## 旅の仲間を増やすのだ(2)

朝のホームルームの間、俺とメイはずっとのんびりおしゃべりをしていたのだが、どうやらそれが先生にバレた様子はなく、何事もなく連絡事項の伝達は終わったようだった。

「それでは、これで朝の連絡を終わります。チャイムにはまだ少し早いです。これでホームルームは終わりだと思いますわね。」

「そう、ね。今日は連絡事項も少なかったみたいだし、これ以上伝えなきゃいけないことがないのなら、もう終わりでもいいわね。それじゃ、これで朝のホームルームは終わり！」

「一時間目の授業まで、少しだけ間がありますが、みなさんは、きちんと授業の準備をして、待っていてくださいね。」

「一時間目は現国よ。まだ教科書が新しいからって、いたずら書きなんかしちゃダメだからね」

「そういえば、先輩の教科書は、いつでもたくさんさんの芸術に覆い尽くされていましたね。あれは、とても見ていて癒されました。」

「そうそう、あたしってけっこう絵心あってね、パツと描いたイラストとかが意外と上手って評判だったのよ、って、そういうことは言わないでいいの！」

「自分がやっていたことを、素知らぬ顔でやってはいけないということができる先輩は、やはり将来的に見て大物の器ではないかと。先生には、そのようなことは、できませぬ故」

「ああ！ もう！ ゆりのバカ！」

「あら、そういうことは、教師としていうべきではないかと、思われますよ、先輩。言うとしても、『おバカさん』くらいで、止めておくべきかと」

「…、それって何が違うのよ」



「違うも違う、大違いです。どこことなく、おバカさんの方が、雅な感じが、しませんか？」

「…、しないわ」

「そうですか、それならば、きっと、そうなのでしょう。先生も、今しがた思いついたことを、そのまま言ってみただけで、ですの」

「…、なんでこの娘は、そんなに適当に、適当なことを言えるのかしら……。発する言葉に対する誠実さとかは、教師として必要ないとか、思っていないわよね……？」

「発する言葉に誠実であることと、教師として誠実であることは、必ずしも一致しないのではないかと、先生は考えます。本当に、発せられる言葉すべてに対して誠実であることを望むのなら、本質的に教育というものを行なうことはできません」

「ど、どうしてよ…、ほんとのことを、生徒たちに間違いなく教えてあげることが、教育じゃない。教師として、持っている全ての知識をみんなに伝えることが、教師が持つべき言葉に対する誠実さ、もののじゃないのかしら」

「学問というものは、日進月歩、分進秒歩で発展していくものです。先輩のように、語学という、一つの体系として比較的安定しているものを教える分にはそう感じないかもしれませんが、教科書の内容が覆されるということも、あながちありえないことではありません。それ故、今日口にしたことが、あるいは明日にはもう、うそになっている可能性も、どうしたって否めないのです」

「そ、それは、そうかもしれないけど……」

「ですの、無知蒙昧なる一個の人として、『先生に教えられることで、間違いない真実と言い晴れることは一つありません』と、宣言してから授業をするのが、もっとも誠実な教師像である可能性も、否めませんね」

「そ、そんなことないわ！ 全力を尽くすことが誠実さなのよ！」

確かにゆりの言った通り、もしかしたら私たちはなにも知らないのかもしれないけど、でもだからって、教師としてのあるべき姿がねじ曲がるわけじゃないじゃない。自分に今教えられることを全力で教える、そして何か間違ったことを言ってしまったら包み隠さずそれを明かしてしっかり教え直す。それが教師として、私たちに来れることで、しなきゃいけないことじゃないの。そうやって、何もできないとか、何も知らないとか、ネガティブなスタンスから出発するのは、絶対間違っていると思うわ。それに、教師としての誠実さと、言葉に対する誠実さは、また違うものじゃないかしら」

「ほう、非常に興味深い御意見です。それでは先輩にとって、教師としての誠実さとは、言葉に対するそれ以外に、なにがあるのでしょうか」

「それは、あれよ。教師っていうのは、やっぱり生徒たちときっちり向き合ってこそ、その誠実さを果たすことができるのよ。だからね、言葉に対する誠実さも、もちろん持ってなきゃいけないんだけど、行動についても、生徒との向き合い方についても考えなきゃいけないの。一人一人の生徒と真摯に向き合って、それからいっしょに勉強していたり、悩み相談に乗ってあげたり、いけないことをしたら怒ったりもするかもしれないけど、でもそれはその子のことを思っただけでいるからなの。つまりね、教師にとっての誠実さっていうのは」

「あ、チャイムです」

「へっ？ なに？」

「それではみなさん、帰りのホームルームまで、ご機嫌よくです」

ゆり先生の、綾先生の言葉を止めるように発せられた不意の言葉によって、話に熱が入ってきた綾先生の話は強引に打ち切られることになった。そして、その言葉の通り、間もなく黒板の上に設置されているスピーカーからは電子音で構成された、ホームルームの時間が終わったことを告げるチャイムが鳴り響いた。

「ちょ…、ちょっと、ゆり！　話はまだ終わったないわよ！　待ちなさい！」

そしてすすすつ、足元を滑らせるように教室から去っていき、カラカラと扉を閉じたゆり先生を追うように、綾先生は教室から駆けだして行ってしまったのだった。いつものことながら、二人揃うと姦しいというか、なんというか、まじめにやっているのだろうか、完全にコントである。

綾先生は担任で、ゆり先生は副担任。間違いなく立場的には綾先生の方が強いはずなのに、どこことなくゆり先生が主導権を握っているような気もする。他人をあそこまで翻弄することができるというのも、あるいは一つの才能なのかもしれない。

「み…つ…き…ちゃん」

しかし、綾先生のせわしない足音が遠くに消えていくのを聞きながら、俺が息を抜こうとした次の瞬間、後ろの方から少し間延びしたような、ゆったりとした声が俺を呼ぶのが聞こえた。その声の主は、今しがた教室を去っていったばかりのゆり先生のものである。

あまりに不意を突かれたのでそれに振り向く動作に手間取って、膝を机の脚にぶつけてしまった。思ったよりも思い切りぶつけたこともあって涙が滲みそうになるのをこらえて振り向くと、ゆり先生は、細く開けた扉の隙間からその姿をわずかに見せているのみであり、しかし確かに俺に向かって小さく手招きをしているようだった。

「な、なんですか、先生？」

俺は、どうしてかは分からないが、呼ばれたのだから急いでそちらに向かう。廊下に出てゆり先生と向かい合うと、その後ろに綾先生の姿は見えず、どうやらあつという間にその追跡を振り切ったようだった。

どうやってそんなに簡単にあの速度の追跡を振り切ったのか、ということは若干気になるが、しかし今はそこよりも先生になぜ呼ばれたのか、ということの方が重要である。

「三木ちゃん、人がお話ししてるときは、お話を聞かないと、」

メ、ですよ？ 何についての、どういうお話しかは、三木ちゃん自身が一番知っていると、思いますが？」

「うぐ…、すいませんでした…」

「いい子ですね、ちゃんと、ごめんなさいできました。よしよし」

俺は、スリッパから踵を浮かせて、軽く背伸びをしながら俺の頭を撫でる先生の為すがままにされながら、少しだけしまったな、という気分になっていた。

どうやら、バレてはいないと思ったのだが、ゆり先生には俺がさっきのホームルームの間にメイとこっそりしゃべっていたのに気付かれていたようだった。他人にバレなければ何をしてもいいとは、さすがに思っていないが、しかし、しゃべるくらいだったら別にいいかな、と思ったのも事実である。少なくとも、ゆり先生の前でこっそりおしゃべりするのは、もう止めておいた方がいいのかもしれない。

「特に、先生がお話ししてるときは、先生の方を見てないと、メ、です」

「はい、これからは、気をつけます」

「他の先生のお話のときは、別におしゃべりしてもいいですが、先生のときだけは、メ、ですからね？」

「？ 他の先生の場合は、いいんですか？」

「他の人に迷惑をかけないようにするならば、かまいません」

「でも…、先生のときは、ダメなんですか？」

「メ、です。先生のことは、ちゃんと見てなきゃ、ダメですからね」

「わ、分かりました、先生のことは、ちゃんと見てるようにします」

「三木ちゃんは、やっぱり、先生の言うことをよく聞ける、いい子ですね。よしよし、です。それでは、先生はもう行かなくては、なので、失礼ですよ」

「あつ、はい」

もう一度俺の頭を軽く撫でると、先生は階段の方に向かってまた足音を立てずに去っていくのだった。俺は、どこか釈然としない心持ちになりながら、しかしいつまでも廊下で立っているのもおかしいわけで、心の中で首を傾げながら教室へと戻るのだった。

「ゆっきいゝ、どうしてろゝかにいたの？ トイレ？」

そして俺が教室に戻ると、俺がいないわずかな隙を突いて志穂が俺の席を陣取っていたのだった。いや、陣取っているというよりも、むしろ寝そべっているというか、なんとというか、占拠されていた。俺が廊下に出ていた時間は、ほんの数分にすらも満たないわけであり、志穂はホームルーム終了直後には既にこちらに向かってきていて、俺が廊下に出るのと入れ替わりで俺の席に座ったに違いない。そして、まるでそこが自分の席であるかのように異常なまでのくつろぎ度合いを見せており、これはもはや机の主である俺に対する挑戦なのではないか、とすら思うほどであった。

「いや、トイレじゃねえよ。ちよっとゆり先生に呼ばただけだよ」

「ゆりちゃんに？ なになに、ごはんもらったの？」

「ご飯もらったのって…、ゆり先生は食べ物配って歩いてる人じゃないんだから、そんなわけないだろ。っていうか、そういうよく分からない食い物は絶対食うなよ。知らない人からもらったりしたものは、特にだからな。…、いや、食べ物配ってる人って、そもそもなんだよ、意味分からん」

「んゝ、なんで、たべちゃダメなの？」

「それは、あれだよ、危ないだろ、やっぱり」

「あぶないの？」

「まあ、普通はな。いや、もしかしたらお前はなに食っても腹も壊さなければ体調も崩さないで、毒を食っても分解するような身体をしているとしても、もしかしたらってことがあるだろ、やっぱり」

「んゝ、じゃあ、きをつけるゝ」

「おお、そうしろそうしろ。で、俺は座る席がないんだが、さっさ

とそこから退いてくれないか？」

「えゝ、なんでゝ？」

「お前ゝ、人の話を聞きなさい！　そこは俺の席でしょ！　で、お前の席はあっちでしょ！　お前は俺にあっちの席に座れているのか！？」

「ダメなの？」

「ゝ、よし、分かった、いい度胸だゝゝ。これからあの席にあるものは全て俺のものだゝ、いいな！　財布もケイタイも、教科書もノートも弁当も、ぜんぶ俺のだからな！！」

「じゃあゝ、ゆっきいのつくえにあるのは、ぜんぶあたしの？」

「ゝ、まあ、そういうことになる、か、うん」

「じゃあ、きょうのお昼は、ゆっきいのごはんだ！　やったあ！」

「あれゝ、なんでゝゝ？　普通こういうときってゝ、『あたしのもをとっちゃダメゝ』ってなるもんじゃないのゝゝ？」

「ゆっきいのごはんたべられるなら、なんでもいいゝ」

志穂は、べたっと机に寝そべって、脇にかけられている俺のかばんに手を突っ込んで今にも弁当を取り出して食い始めそうな気配を醸し出している。このままでは、一時の選択ミスによって、せっかく今朝も早起きしてつくった俺の昼飯が奪われてしまうではないか。どうしたら、どうしたらいいゝゝ。俺の弁当を守るために最も適した方法はゝ、なんだ！！

「志穂！　ゴールデンウィークに旅行に連れてってやるから、今すぐその机を俺に明け渡せ！」

「りょこう？　あたしも行っているの？」

「今すぐに、その机から立ち退き、俺にその支配権を返したら、な」

「んゝゝ、どけば、いいの？」

「まあ、平たく言ったらそうだ」

「それじゃあ、わかったゝ」

「よしよし、さっさと自分の机に戻って、一時間目の準備でもしてるんだぞ。どうせ五分もしないうちに寝るんだろうけど、準備だけ

はしとけよ」

「は〜い」

そう言うのと、志穂は俺のかばんに突っ込んだ手を抜き出してぴよこん、と立ち上がり、自分の席に向かって軽い足取りで帰っていくのだった。こうして、俺の領土である俺の机は、無事に何事もなく俺の手へと返されたのである。まったく、俺の予想を裏切るんじゃないと、何度言えば分かるんだ、こいつは。

しかし、これで旅行に行くメンバーが四人になったということだ。

まあ、志穂は最初から乗り気だったみたいだし、端からあとで誘ってやるつもりだったわけで、別に何の問題もないのだが。いや、むしろ、普通に誘ってしまったら、ただ志穂が旅行に参加するという結果だけが残っただけなのだから、それをあえて交渉のカードのように用いることで志穂から平和的に領土を奪還するとともに、本来の目的である志穂の旅行への参加という結果まで引き出せたのだから、これは一つの一挙両得というもののなのかもしれない。だが、まあ…、はあ…、無事で何よりだ…、俺の弁当……。

## 静かな放課後

「ねえ、幸久君、どうしてまだ帰らないの？」

「ん〜？」

「さっき帰りのホームルーム終わったんだし、帰ってもいいんじゃないの？」

「そうだな〜」

「なにか用事があるの？」

「まあ、ちよつとな〜」

一日をのんびりと過ごし、いつの間にやら時は夕方、ホームルームも終わった教室に残っている人の数はそれほど多くなく、そしてその中の二人が、俺と霧子だった。

いつもだったら、ホームルームが終わったらすぐに帰路に着くわけであり、こうしていつまでものんびりとしているのはそこまで多いことではない。出来ることならばさっさと帰って、晩飯の仕込みとかいろいろ、やりたいこととかやらなくてはならないこととか、それなりの数のタスクが俺の手元にはあるのだ。

しかしそれでも、今日の俺はこうして教室でゆっくりと時を過ごすことを選択しているのである。実は今日は、一つ教室に残ってやらなくてはならないことがあるのだが、それはまだ時ではないので、今は何もしないをしているしかない。

というか、俺はすることがあるから残っているのだが、しかし霧子は決してそうではないわけで、帰りたいのならば先に帰ってもいいんだけどなあ、と思うばかりである。

「幸久君、帰らないの？」

「霧子、帰りたいなら、帰ってもいいんだぞ？　俺はやることあるから残ってるけど、霧子は別に用事ないんだからさ、無駄に残ってることないんだからな」

俺がただ机に突っ伏してぐてっ、としている横で、霧子は既にその



主が帰宅してしまったメイ（なにかしら用事があるようで、ホームルームの終了と同時に帰った）の席に座り、頬杖を突いてにゅ〜にゅ〜と言っている。俺は目的を持って残っているのだが、しかし今はやることなく意味なく突っ伏しているだけで、霧子に至ってはなぜこうしていつまでも教室に残っているのかも知らず、本当に無為ににゅ〜にゅ〜言っているのだ。

こんなところでにゅっ、とさせているくらいなら、家に帰らせて勉強をさせるか、ゆっくり休むかせておいた方がまだマシというものだ。ちなみに霧子をゆっくり休ませてやると、翌日の朝に俺がそれを起こすときの時間が少なからず軽減されるのだ。

「にゅ…、幸久君、あたしがいたら、じゃま…:…?」

「いや、邪魔とかじゃなくてさ、霧子は帰って自分の好きなように時間を使っているんだぞ、ってこと。無理して俺の用事に付き合わなくていいんだからさ」

「幸久君の用事って、今日じゃないとダメなの?」

「いや、そんなことないけど。今日なんじゃないかな、とは思うけど、確かに今日だっていう確信はないし。もしかしたら明日かもしれないし、明後日かもしれない。でも、たぶん今日だと思うんだ」

「んと…、どうということ…:…?」

「まあ、とりあえず待ってみて、今日じゃなかったら帰るってことだよ。だから今日待ってるのは無駄になるかもしれないし、もしかしたら無駄にならないかもしれない」

「じゃあ、その用事って、幸久君一人じゃないとダメなの?」

「いや、別に。霧子がいたって問題ないし、逆に霧子がいなくても出来ないことじゃない。だから霧子は残ってでもいいし、帰ってもいいんだぞ」

現に、俺がここに残っている理由は、言ってしまうえば用事があるような気がするから、という非常に曖昧な理由でしかないわけで、そんなもので霧子の時間を拘束してしまうのはあまりよくないと思うのだ。霧子が自分からそうしたいというのであれば話は別かもしれない

ないが、結局はだらだらと家に帰らずに教室に居座り続けているのだから。

「にゅ…、幸久君は…、あたしがいっしょに残ってたらうれしい？」

「まあ、そうだな、うん。もうじきにみんな帰っちゃうだろうし、一人が残ってるよりも誰か一緒にいてくれるやつがいた方がうれしいよ。霧子がいっしょに残ってってくれるって言うなら、うれしいぜ」  
「にゅう、そっかあ。じゃあ、あたしも幸久君といっしょに残ってるよ。それで用事を済ませて、いっしょに帰ろ？」

「いいのか？ 残ってて。なにかやることあったりしないのか？」

「うん、平気だよ。やることは帰ってからでも出来るし、宿題は今やっちゃえばいいんだもん」

「ああ…、そうだな、宿題でもやるか。…、宿題って、なにかあったっけか？」

「えと、今日は、なかったかも？」

「はい、やることなくった」

「にゅ…、なくなっちゃった」

そして霧子は俺にならって机にぐてえ、っと突っ伏したのだった。二人揃って、というか並んで突っ伏している姿は、教室内にわずかに残っている人の目にはさぞかしシニールに映るのではないだろうか。あるいは、みんな各々に目的を持って教室に残っているのだろうし、俺たちのことを注視しているやつなんていうのは、一人もいないかもしれないが。

「やることないから、帰ってもいいんだぞ？」

「いい、幸久君といっしょに帰るから」

「そうかい、物好きな娘ね、この娘ってば」

「いいんだもん、暇だから」

「おにいちゃん離れしような、霧子」

「にゅ…、幸久君、あたしのこと、イヤになっちゃったの…？？」

「ウソだよ、霧子大好きだよ」

机に突っ伏したまま、お互いにくぐもった声でバカみたいな会話を

展開していく。この光景、シュールを通り越して哀れを誘うのではないだろうか。

「それじゃあ、霧子がどうしたらおにちゃん離れすることができるか、話し合おうか、霧子」

そしていつまでも突っ伏しているわけにはいかん！　と心を意味もなく奮い立たせた俺は、机から身体を起こしキツ、と前を見据えた。時計は終業から一時間ほど経った時間を指している。

「あ、あたしのこと……？」

俺が身体を起こした気配を察してか、あるいはいつまでもメイの机に伏せているわけにはいかない、と思ったのか、霧子は俺に続いて机から身体を起こす。変な風に突っ伏してしまったのだろうか、その前髪が少しだけめくれ上がってしまっているようだった。

「そうだ、俺は霧子のことは好きだが、しかし霧子には立派に独り立ちできる女の子になってもraitai。そのためはどうしたらいいか、といえば、まずは俺の庇護の下から離れて、一人で自分の世話ができるようになることが必要なんだ、分かるな」

「わ、分かるよ！」

「決して霧子のことが嫌いになったとか、イヤになったとかじゃないから、俺の思いを勘違いしないようにな。まかり間違っても、自分は見捨てられたとか思って悲しい気持ちになったり、俺が霧子を捨てたんだとか言って俺のことを嫌いになったりしないように」

「にゅ、分かったよ！」

「いい子だなあ、霧子、よしよしよしよし！」

ポニテがブンツ、と振りまわされるくらい勢いよく頷いた霧子のいい返事に俺は感銘を受け、顔を軽く横に動かしてそのしなる鞭のような攻撃を回避してから、ポンツ、と頭に手を置いて思い切り撫でくり回してやるのだった。わしわしと撫でる俺の手の動きに合わせて、霧子の頭が前後にかかるく揺すられている。

「んあゝ、にゅゝ、幸久君ゝ、頭がゝ」

「おっと…、すまんすまん、可愛がり過ぎたみたいだな。気をつけ

ないと……」

気を取り直して、

「霧子がどうしたら独り立ちできるか、ってことだ」  
話を再開しようではないか。

「俺が思うに、やっぱり、自分で自分を管理するのが必要だと思うから、朝は自分で起きる、っていうのが、まず有効だと思うんだよな。霧子はどう思う？」

「朝は、えと、自分で起きるのは大変だから…、幸久君に起こしてほしい、かも……。幸久君、やさしく起こしてくれるから、いつも気持ちよく起きられるんだよ？」

「そう言ってくれるのはうれしいんだけど、今はどうしたら霧子を一人立ちさせられるかって話だ。朝起きるのは大変とか、そういう話をしてるんじゃないんだぞ。霧子も、独り立ちしなきゃ！ って気持ちで話に参加してくれないとダメじゃないか」

「にゅ…、ごめんなさい」

「やっぱり一人で起きるのは重要だよな。朝はしゃきつとしないと、ダメだろ」

「でも、どうやったら一人でも起きられるのかな……。目覚まし時計とかじゃ、寝ながら止めちゃうから、起きられないし」

「もっと気持ちが切迫するような目覚まし時計なら目が覚めるんじゃないか？」

「気持ちが、切迫？ にゅ？」

「たとえばさあ、そうだな…、時間に連動してベッドが起きていて目覚ましの時間になったら床に落とされるとか、目覚ましボイスに自分の誰にも知られたくない秘密を録音しといて時間になったら大音量で流れるようにしとくとか、時間がきたらアームが一枚ずつ服が脱がしていくとか、そういうアレだよ」

「それは、にゅ…、ちよつとヤかも」

「え〜？ じゃあ他にどうすれば一人で起きられるんだよ。俺は、もう思いつかないぞ」

「あたしも、思いつかないよお」

霧子がどうやったら一人で起きられるようになるか、という問題。それは過去に何度も立ち向かい、そして敗北してきた戦いである。並大抵のことだったら、大方試しているだろう、と自信を持って言うことができるくらいには、俺はその問題に対して長いこと向き合ってきた。

しかし、今のところそれに明確な解法が与えられたことはなく、「どうしようもない」という諦めのスタンスがその常である。今回出したアイデアも、実のところ過去に試そうとして、しかし仕掛けの複雑さの問題とか、大規模すぎるギミックだったとか、そもそも霧子が秘密を吹き込むことを拒んだとか、諸々の理由で挫折したもののなのである。

今は単なる思考実験でしかないのだから、普通に考えて実現することができないような非現実的な案を提出してもいいのかもしれないが、しかしもともと無理だろうなあ、と思っている手前、そんな斬新なアイデアがポンポンと湯水のように湧き出てくることはないのだ。

「っていうか、一つ聞きたいんだけど、俺に起こされるのって恥ずかしいのか？」

「恥ずかしく、なくはないけど、どうして？」

「そうだよな、寝起きが一番無防備なところを見られるわけだし、恥ずかしくないはずだよな。その恥ずかしさは、起きる原動力にならないのか？」

「にゅ…、でも、幸久君になら、見られてもいいし」

「そうやって俺のことを大好きでいてくれるのは、おにいちゃんとしてうれしいけどさ…、そうだ、俺以外の男に、そういうの见られるのは、イヤだよな？」

「うん、ヤダよ」

「それならさ、彼氏をつくってさ、そいつに起こしに来てもらえば、恥ずかしくて起きるようになるんじゃないか？ 見られたくないだ

ろ、そういう姿は、やっぱり」

「彼氏って、恋人ってこと？」

「そうそう、霧子に言いよってくるゴミは、相変わらずいるんだろ？　そういうやつで、俺が認めるくらいいい感じの、霧子にふさわしいのと付き合うことにして、朝は起こしに来てもらうんだ。そうすれば……」

そうすれば…、と、その光景を想像し、想像し…、想像、し……。

「幸久君？」

「…、駄目だ！　霧子に彼氏なんて早すぎる！！　っていうか、ゴミはどこまでいってもゴミで、ゴミに霧子をやることはできない！！」

「ゆ、幸久君！？」

その光景を頭の中に描こうとして、俺は手に持った絵筆を折り碎いた。その光景を頭の中に映し出そうとして、俺はそこに置かれたプロジェクターを破壊した。

霧子に彼氏を、なんてことを思いついた俺自身を抹殺するように、俺は机の天板にゴッ！　ゴッ！　と額を何度も、力の限り思い切り打ち付けた。静かな教室が、止むことなく何度も繰り返される俺の頭突き音によって一気に騒然としたものに変わる。各々がそれぞれに行なっていた何らかの作業も完全に止まり、教室に残っている全員があたふたと俺たちの下に集まってくるのが分かった。

五回から数えるのを止めたが、しばらくそれが続けていたら、ふと自分がずいぶんと落ち着いたことに気が付いた。きっと天板にかすかにじむ血液と引き換えにして、気の迷いが消え去ったのだろう。ついでに意識まで飛びそうだったが、そこはなんとか守りきることができたようだった。

「霧子は、一人立ちなんて、しなくていいから」

「だ、だい、じょぶ……？」

「ぜんぜん問題ない。それより、霧子は、一人立ちなんてしなくていいからな」

「で、でも…、幸久君にいっぱい迷惑かけて」

「迷惑じゃないから。気にしないでいいから、一人立ちはしなくていい。朝は毎日俺が起こしに行ってやるし、学校にも毎日連れてってやるし、帰りもいっしょに帰ってやる。だから、一人成ちは、しなくていい」

「にゅ…、にゅん……」

俺の言葉に鬼気迫るものを感じたのか、霧子はなにかに圧倒されるような感じで、コクコクと頷いた。霧子に彼氏なんて必要ないんだ。霧子のことは、おにいちゃんが一生守ってやるんだ。それでいいんだ。

やはり霧子に言いよってくるゴミは、きっちり始末した方がいいのかもしれないな、うん。もちろん、霧子には知られないように秘密裏に、だが。

## 誰もいない教室で、三人

俺が、霧子に彼氏をつくらせようなどと思いついてしまった精神的ダメージから復帰するために、霧子の髪はポニテがいいのか、あるいはツインテール：、それとも横に流すのがいいか……？　と思考錯誤しながら、実際にその髪をいじっていると、静かな教室に、がらっ、と扉が開く音が響いた。

「むっ、なんだ、三木、天方、残っていたのか？」

教室に現れたのは、風紀の用事でホームルームが終わってすぐに教室を出ていった姐さんだった。

「おお、姐さん、風紀お疲れ」

「りこちゃん、まだお仕事してたんだ、大変だね」

「なぜ二人ともこんな時間まで残っているんだ。部活も委員会もないのだから、完全下校時刻になる前に早く帰らなくてはならないぞ」

「ああ、もう帰るよ。ちょっとだらだらしてただけだから」

「にゅ？　だらだらしてただけだったの？」

「実際、だらだらしてただけだろ。まあ、もうそろそろ帰ることにするだろうけどさ」

俺が、別に誰と何を示し合わせたわけでもないのに、グダグダと居座っていたのには、当然意味がある。霧子をどうしたら自立させられるかを考えることも、霧子の将来の恋人のことを考えて死にそうな気分になることも、それから復活するために髪をいじらせてもらうことも、別にここでなくともできることだ。

だというのにわざわざ残っていたんだから、霧子には言っていないのだが、やはり意味があるのである。

「姐さんは、今日も風紀の仕事だよな？」

「なに、ただの巡回だ、大した仕事ではない」

「でもりこちゃん、お仕事えらいなあ。あたしは、風紀委員のお仕事なんて、大変すぎてできないもん」



「そんなことはないぞ、天方。風紀には、外勤だけでなく内勤もあるから、比較的楽なものもあるのだぞ。受付業務などだったら、天方も楽しんで出来るだろうと思うが」

「にゅ、受付って、いっぱい知らない人とお話ししないといけないんだよね…、や、やめとく」

「そうか、天方は可愛いから、受付に座っていてくれるだけで風紀の印象がよくなるのではないかと思ったのだが、しかし本人がそういうのならば無理強いはできない。すまなかったな、天方」

「えと、ごめんね、りこちゃん」

「姐さん、霧子をマスコットに使いたいのは分かるけど、そういうのは事務所通してもらわないと。駄目だよ、勝手にそういう話ししちゃ」

「むっ？ そうなのか、それはすまなかった」

「まあ、今回はいいけどな。で、姐さんは、どうして教室に戻ってきたんだ？ 姐さんの小隊の巡回ルートから外れてると思うんだけど」

「ああ、まあ、少しな」

「にゅ、りこちゃんも、何か用事があるの？」

「用事というか…、いや、そうだな、用事だろう。ちょうどよく三木もいることだし、少し話をさせてもらっていいか？」

「俺に用事か？」

「そうだな、お前にする話がある。ここに來たのも、もしかしたらお前が残っているのではないか、と思ったからだ」

「話ね、いいぜ、なんでも聞く」

「すまないな、手間を取らせて。あとで電話でもメールでも連絡は取れるのだが、やはり目の前に相對して話をしたいと思ったんだ」

「そうだよな、大事な話は顔を見ながらしないとダメだよな。電話とかメールとかは便利だけど、やっぱり目と目を合わせて話さないと真意が伝わらない」

「その点は、私も同じ考えだ。メールでは思いを装うことができる

が、目の前で話をしている人間の思いを捉え損なうことはないだろうからな」

「気があうな、姐さん。で、そうやってわざわざ俺に会いに来てくれたのは、何の話をするためなんだ？」

「ゴールデンウィークの旅行のことだ。お前が今朝言っていたからな、それについて私なりに一日、しっかりと考えて結論を出した。聞いてもらいたい」

「分かった、その話、聞くぜ」

姐さんがわざわざ俺にその話しをするために会いに来てくれたのと同じように、実は俺も、姐さんがその話をしに来るのではないかと考えて、こんな時間まで教室でぐだぐだと待っていたのだ。

本当だ、別に今になってちょうどよく姐さんが来たからそんなことを言っているわけじゃない。姐さんが来たらその話を聞こうと思っ  
たし、もしも来なかったら時間を見て帰ろうと思っていたんだ。

「しかし、考えるって言ったのに、相変わらず決断が早いんだな」

「当然だ、いつまでもぐるぐると同じことを思い悩むのは、私の性に合わないからな」

今日の朝、俺はゴールデンウィークの旅行についての話を切り出し、姐さんはそれを聞いて少しだけ考えさせてほしいと言った。おそらく姐さんのことだから、少し考えたいと言ったとして、今言ったように何日も意味もなく引っ張ったりしないのである。

だから、これまでと同じように今日のうちには何らかの結論を出してくれるだろう、と思って俺はわざわざ教室にいつまでも残って待機していたのだ。姐さんはいつでも迅速に思考し、行動するので、それに対するときは、俺も同様に迅速な予測と対応が求められるのだ。

「しかし偶然とはいえこうして三木に合うことができたのは運が良かった。もし会えなければ、また明日までこのことを心の中に詰め込んだままになってしまっただろうからな。いや、それとも、私が来ることを予見して、待っていてくれたのか？」

「まさか、そんなことないって。偶然だよ、偶然。なんとなく教室でゆっくりしてたら姐さんが来たってだけで、待ちうけていたとかじゃないし」

「まあ、そうか。そうだな、こうして会うことができた偶然に感謝して、話をさせてもらおう」

そして姐さんは、ハキハキとした口調で口を開く。

実際のところ、姐さんが今日の内に結論を出したとすれば、俺のところに話に来るのは放課後しかなかった。なぜかといえば、授業間の休み時間には数学や英語の予習や体育の着替えなんかで、昼休みは風紀委員の当番の仕事で忙しかった今日、姐さんがそうすることがするのは放課後の定時巡回の後か合間の空いた時間しかないのである。

そして案の定、俺の予測した通り、俺が席に座らせた霧子の髪をあてもないこうでもといじくりまわしている（という体で髪を触らせてもらっている）うちに姐さんは教室へと姿を現したのだ。これで、俺が今日こうして時間を無為に浪費していたことは、正式に姐さんと話をするという用事をクリアするために待っていた、という一つのタスクへと昇華したのだった。

そして姐さんは、どうやら定時巡回の途中で時間をとって戻ってきてくれたようで、よく見たらその腕には風紀委員会の腕章がまだつけられたままだった。おそらくこの後も、また巡回の続きに行かなくてはならないんだろうし、話の邪魔をして時間を取らせてしまっ  
ては悪い。

「さて、と……。旅行、どうするか決めた？」

俺は、姐さんと真剣に話をするために、名残惜しいが、霧子の髪から手を離し、椅子から立ち上がる。

「にゅ、幸久君、髪、もういいの？」

「ああ、やっぱり、今のところ霧子に一番似合うのはポニテだな。いつまでも変わらないかわいい霧子でいてくれよ……」

「にゅう…、かわいく、ないもん……」

「よしよし、拗ねない拗ねない。さて、と…、霧子、付き合わせて悪かったな、姐さんとちょっと話をするから、少しだけ待っててくれ」

「にゅん。…、あれ？ 幸久君、今までりこちゃんのこと待ってたの？」

「違うって、偶然だって。俺は用事があるような気がしたから残ってただけで、別に来るか来ないか分からない姐さんを待ってたわけじゃないぞ」

「そうなんだ…、じゃあ、幸久君の用事ってなに？」

「それは、ないしょだよ。男の子の秘密だよ」

「にゅ、ひみつなんだ…、うん、分かったよ」

「細かいことは気にしないでいいから、座って待ってろよ。あとで肉屋でコロッケ買ってやるからな」

「にゅ、いいの？」

「ああ、どれでも好きなもの食べていいからな、今から何がいいか考えとけよ」

「うん、考えとくね」

「で、姐さん、話っていうのは？」

それから、俺は姐さんと向き合うように立ち、その言葉を待ちうける。どのような解答が提出されるかはまだまったく分からないが、しかしそれがどのようなものであっても、俺は受け止めることが求められるだろう。

なぜなら、そうなるような問いを、俺の方から姐さんに対して投げかけたのだから、それはあくまでも当然のことではないのだ。姐さんがいっしょに行こうと言ったとしても、旅行にはいかないと言ったとしても、俺はどちらにしてもそれを納得とともに受容するのである。

「お前は、ゴールデンウィークに天方を連れて旅行にいくと言っていた。おそらく他にも皆藤や持田などを誘っていくんだろう。となると、少なくとも友だち四人連れで旅行に行くということになる。」

それは、去年と同じ状況だし、そのようなことを理由にそれを否定しては去年の己自身の行動を否定することになるからするつもりはない」

「そっか」

「つまり、お前たちが旅行に行くということを否定しようとするつもりも、邪魔をしようとするつもりもないのだ。確かに去年の旅行は楽しかったし、とてもいい思い出になっている。きっと今年の旅行もとても楽しい旅行になるだろうし、いい思い出になるだろうな」

「うん、そうなるといいなって思ってるよ」

「それで、な、つまり……」

「姐さんは、どうするんだ？ 行くか行かないか、どっちかだと思うけど？ 行くんなら、いっしょにどこに行くか決めようぜ。行かないなら、残念だけど今回は不参加ってことで」

「私は、…、うむ…、つまり、な」

「姐さんらしくスパツといこうぜ。こんなことで言い淀むなんて、姐さんらしくないぜ。もう悩んだんだから、姐さんの中で答えは出てるんだろ？」

「そ、そう急かすな、バカ者！ 言う、今言うから、少しだけ、待ってくれ」

「ご、ごめん……」

すう、はぁ、と姐さんは片手で俺を制しつつ二度ほど深呼吸をする、心が決まったのか俺の方へとまっすぐ向き直り、目線をバシッと合わせてきた。その不意に仕掛けられた眼力に、俺は少しだけひるんで軽く目をそらしてしまった。

「ゴールドデンウィークの旅行には、もう参加者が集まっているのか？」

「ああ、もう俺と霧子と、あと志穂とメイも加わって、四人はほぼ確定だな」

「どこに行くかは、まだ決まっていらないのか？」

「そうだな、まだどこに行くかまでは話が進んでない。これから行

くやつで決めてく感じだ」

「そうか、分かった。その話し合い、わ、私も…、参加させてもらっても、構わないだろうか…?」

姐さんは、ありったけ勇気を振り絞る感じで俺たちにそう告げた。つまりどういふことかといえ、

「もちろん、姐さんなら大歓迎だよ。霧子もいいだろ、姐さんも旅行行くってさ」

姐さんも旅行にいっしょに行くってことだ。それっていうことは、俺への疑惑も警戒心も姐さんの中で折り合いをつけてくれたということを示しているわけで、去年起こったあの問題も過ぎたこととして水に流してくれた、あるいは再び心の奥深くに封印してくれた、ということだろう。

「にゅ、ほんと? わぁ、うん、うれしいよ。去年とおんなじメンバーにメイちゃんもいっしょに行けるなんて、すごいね! 五人で旅行に行くのなんて、初めて!」

それから霧子は、姐さんの旅行への参加を聞いて、とてもうれしそうな顔で手を打った。そもそも霧子が旅行に行きたいという思いの根底には、みんなといっしょに楽しい時間を過ごしたいという願いがあるのだ。

これで、参加者に姐さんが加わったことにより、本当の意味で、霧子の思う「みんな」といっしょに、その望み通りの旅行に出かけることができる、ということになるのだろう。

「だってさ、姐さん」

「…、はぁ、最初から、ただこう言うっておけばよかったのかもしれないな。変なことを思い出して思い悩んで、それであげくにいっしょに行きたいと言い出しにくくなって、なんだかわざわざ遠回りをしてしまった気分だ」

「遠回りしても、別にいいじゃないか。最終的にここに来ることができたんだからさ、全部忘れて旅行を楽しめば、それでいいんだって」

「そういうものか？」

「そうだって、姐さんは難しく考えすぎなんだよ。もっと簡単に、適当にふんわり把握していけばいいじゃん」

「私から見たら、三木もかなり難しく考えているように思うが？」

何とは言わないが、いろいろとな」

「さあ？ 何の事だか？」

俺は、別に難しく考えているわけじゃないさ。他の人が難しく考えなくてすみ、出来るだけみんなが楽できるように、少しだけ場を整えているだけ。それだけなんだ。

そんなこと、別に当然のことだろう？ 友だちが大変な思いをしていたり、思い悩んでいたりする様子を見るのが俺はあまり好きではなく、そうなるくらいなら自分が少しだけ大変な思いをすればいい、というだけなのだ。

そのほんの少しする大変な思いだって、友だちが楽しそうな顔をしているのを見ればすぐに吹っ飛ぶわけだし、比較的に見て割にいい取引だとは思わないか？ 俺は、少なくともそう思うわけで、だからこそ自分が少しの労力を払うことを厭うことはないのだ。

女の子を笑顔に出来るなら、いかなる労力も惜しんではならない。それは、晴子さんの教えで、俺が一番好きな言葉の一つだ。

## 「第一回GWの旅行どうしようか会議」開催

「問題はさ、どこに行くかなんだよ」

姐さんの旅行への参加が決まった翌日の放課後、俺たち五人、つまり旅行の参加メンバーであるところの俺、霧子、メイ、志穂、姐さんは教室で黒板を占拠して喧々諤々の論戦を繰り広げようとしていた。

教卓前の机を四つばかりくっつけ、俺はチョークを持って黒板の前に立ち、それから女の子四人は机の方を陣取っている。俺はカツカツと黒板の中央上部に『GW旅行計画対策会議』と白墨で書き記した。

「にゅ、ポッキー、まんなかにおくね」

「トッポもってきたよ、まんなかおくよ」

『プリッツ持ってきた』

「本来ならば、このようなものを持つてくることは風紀的によくないことだが、しかし購買で売られているものだから、今回だけは目を瞑ることにしよう。私は芋けんぴだ、真ん中に置くから、好きに食べてくれ」

「あれ、いつの間にか机の上がおかしでいっぱいになってるんだけど、俺がほんのちょっと後ろ向いてる間に何があったの？　っていうか、なんか全部細くて長いおかしなんだけど、なにこれ、偶然？」  
喧々諤々の議論が繰り広げられようとは、してないかもしれないな

「いや、おかしは別に食っててもいいんだけどさ、ちゃんと話し合いには参加してくれよ？　してくれないと俺が勝手に一人で決めちゃうからな？」

「ああ、それはもちろんだ。こうしてせっかく五人が集まったのだ、少しでも建設的な話ができるように協力するつもりだ」

「にゅ、そうだよ。どこに行くか、ちゃんと決めないとだしね」



『話し合い、大事』

「そうだよ、ちゃんとおはなししないと、りょこくがうまくいかないからね」

「志穂、こっち、こっち向いて言え！ 少しおかしから目線を外して！ ぜんぜん説得力ないよ！？」

「幸久君、おかしに手、届く？」

「いや、俺はいい。これからチョコーク使うし、食うたびに手を拭うのもバカらしいし。俺にもくれるんなら、後で帰りながら食うから別のところに分けといてくれ。…まあ、いいや、始めましょ」  
机の上にお菓子が出てきてしまった時点で、もう話し合いがサクサクと進む見込みはなくなってしまったのだ、気を張って少しでも効率的に進めようと思えるのは止めておこう。きっと今日のうちに決まることはないだろうし、もうのんびりいくことにしよう。

しかし、いくらなのんびりいくとはいえ、俺は議長。みんながのんびりしているとしても、俺はテキパキ仕事をするのだ。お菓子など、食っている場合ではない。

「それで、あれだ、まずは海に行くか山に行くかなんだけど、どっちがいいですか」

「あたしは、バリバリ、やまあバリバリ、しゅぎよくというバリバリ、あら」

「芋けんぴうるせえ！！ さっそくバリバリいわせながら話すんじやねえ！ 志穂！！ 口の中をゴつくんしなさい、まず！！ それから、手に持つてるのを口に入れない！！」

「んくっ…、あたしは、みずのほうがいいよ。やまはね、しゅぎよくでいくからね、りょこくはやまじゃないほうがいいよ」

そうだ、志穂はゴールデンウィークの終わりに修行するとか言ってたな。山にこもるってことは、わざわざ遠くの山まで行ったりするのだろうか。富士の樹海でキャンプを張って、二日のうちに何度も富士山に登ったり降りたり、したりするのだろうか。そんなことをしたら、休み明けの志穂がまた一段と強くなってしまわないか。

これ以上強くなれたら、俺は志穂の相手をするのができなくなるぞ。いや、今でも多少持てあましている感じはあるのだから。

あっ、いや、違うか、休みは道場にお泊まり会って言ってたっけ。道場が山の近くにあるって言ってたから、道場に泊まり込んで、二日間山で過ごす、みたいな計画になっているんだろう。なにかやるなら道場でやればいいだろうに、わざわざ山まで行ってするなんて、武道家という人種は本質的に山籠りが好きなのだろうか。

どちらにしても、志穂をあまり強くされてしまうと、俺が相手をしてやるができなくなるから、あまりやりすぎないでほしいものである。

「食いながら話すなっていうのも言ってるだろ、こんにやろう…、志穂は水辺がいいのな、一票、と」

「私も同じ意見だ。今年の風紀の新生歓迎訓練は山中行軍訓練でな、もう半年分は山に登った気分なんだ」

「風紀委員会は、毎年毎年新生に対してなにをやってるんだろうな……」

「なにそこまでの訓練ではない。軽いハイキングのようなものだからな」

絶対ウソだ。何十キロも荷物を背負ってトレッキングとか、そういう訓練をしてきたに違いない。しかも一日のうちに何往復もしたに違いない。

そんなことばかりしてるから、風紀委員会の評判がおかしなことになるんだよ。もっと楽しそうでアットホームで絡みやすい感じにすれば、他の委員会と同じ程度には素直に新生も入ってくれるだろうに。

っていうか、普通の高校の風紀委員会がどうして、そんな特殊部隊の養成みたいなことをしてるんだ、ってことだよ。そんな、県下でも有名な不良校ってわけでもないというのに、なぜに対武器戦闘とか軍隊格闘術とかの個人技の訓練や、山中行軍とか渡河行軍とか重武装行軍とかの集団行動の訓練や、長期の休みを利用してフラッグ

ファイトとか要所制圧訓練とかしたりするんだ。まったく意味が分からん。

それとももしかして、風紀委員会は訓練とかじゃなくて、本当に武装化を進めているっていう噂は本当なのだろうか。近隣の高校の武力制圧から全国制覇を目的にしているとか、学校乗っ取って生徒会を廃止にしその代わりに風紀委員会が学校を仕切ることを目的にしているとか、いろいろ噂はあるが、本当だったらどうしよう。

「まあ、いや、姐さんは水辺に一票な。メイはどうだ。どっちに行ってみたい？」

『あたしは山の方がいいな。海とかは夏になってから行くだろうか』

「ふむ、メイは山か。山に一票、と」

そうか、なるほど、どうせ夏になったら海に行くだろうから、今の季節は新緑の山に行つて森林浴でも楽しもうっていう考え方もあるんだな。季節感というか、その季節に一番楽しめる場所っていうのは、やっぱりあるだろうから、そういうのを基準に考えるのも悪くないのかもしれない。

季節を楽しむとしたら、やっぱり春は花見がしたいし、夏は海に行きたい。秋は紅葉を見に行きたいし、冬は…、降っている雪を見ながら家の中でゆっくりしていたいから、出掛けるのはいいや。日本は四季の豊かな国だけど、それを一所にとどまって楽しみ尽くすことはできないわけで、やっぱり旅行には定期的に行きたいよなあ。

『幸久君、お菓子食べる？』

「いや、俺は手がチョコークの粉で汚れてるから。みんなで食っちゃっても、いいぜ？」

『汚れてても食べられる』

「い…、いや、食べられは…、するかも、ん？」

俺がその言葉に応えようとする、しかしメイが左手をパーにして俺の目の前にくつ、と出し、ちよつと待ったのポーズ。どうやら、何か間違えたのか、画面の文字を打ち直しているようである。

『汚れてても食べさせてあげられる』

「…、ああ、食べさせてくれるのか。そうか、それなら確かに今の俺でも食えるな」

『幸久くんにも、お菓子あげる』

よかった…、メイが急に「チョコークの粉もいっしょに食べよ」みたいな感じの、ロックな性格になっちゃったのかと思って、びっくりした…。晴子さんだったらそういうこと言うかもしれないけど、

メイは言いそうなイメージ全然ないから、  
すげえびっくりした…。

その人がしそうな行動のイメージっていうのは、俺の中ではすごく大切なことだ。それは、けっきょくその人が次にどんな行動を取るかっていうことを予測するときの一つの有力なサンプルになるわけで、基本的にその人の行動とか発言とかの先読みをしつつ自分の行動も選択する俺みたいな人間にとって、そういうサンプルから逸脱した行動を取られてしまうと、どうしても混乱してしまって、思考が止まってしまふのだ。

その人がしそうな言葉遣いとか、使いそうにない言い回しとか、取りそうもない行動とか、そういうのに出会ってしまうと、一瞬間まってしまうのである。最近はそれなりに対応することができるようになってきたけど、昔はかなり相手の行動予測に依存していたから、フリーズ時間もかなり長かったように思う。

「ありがとうな、メイ」

『あゝん』

「いただきます」

メイが一本摘んで差し出したプリッツを、俺はポリポリとかじっていく。口の中にはほのかな塩味が広がり、なんでか分からないけどめっちゃうまい。

こういうジャンクな味が、思った以上にうまいんだよなあ…。いや、人間の味覚がうまいと思うように科学的に味が調整されているんだから、基本的にはうまくないわけがないんだけどさ。でも、そ

う分かっていてもたまに食べたくなくなってしまいうから化学調味料は恐ろしいのである。

っていうか、プリッツのサラダ味って、別にサラダっぽい味しない、というかむしろ普通にうすしお味だと思うんだけど、どうしてサラダ味って言うんだろう…、いや、まあ、ぶっちゃけどうでもいいことなだけどさ。

「はあ、うまいな、ジャンクフード…」

『もう一本、食べる?』

「いや、一本でいいや。食い始めたらいつまでも食っちゃって、話が進まなくなるからさ」

『分かった』

「にゅう、あたしも一本あげる」

「えっ? まあ、一本だけだぞ?」

何本も食べないわ、といったばかりだというのに、どうして霧子がそう言い出したのかは分からないが、まあ、別にもう一本くらいだったら食ってもいいかな。あんまりジャンクフードに浸ってしまうのは、料理の腕が鈍ってしまいそうな気がしてイヤなのだが、しかしスナックを二本や三本食ったくらいでどうにかなくなってしまふことは、さすがにない、…、よな…?」

大丈夫、久しぶりに食うお菓子が美味しくて何本も食いたくなってるけど、少しくらいなら大丈夫だって。俺は意志が強いから、帰り道の道すがらポテチを三袋まとめ買いとか、したりしないって。

「にゅ、はい、幸久君、あくん」

「あくん」

「にゅん」

目の前に差し出されたポッキーが、俺の口元に寄せられるのをただ見守っている今の状況、考えようによっては相当危険なのではないか。もし霧子が心変わりして俺の喉に向かってポッキーを突きだしてきたら、俺はもしかしたらかなり痛い思いをするかもしれない。そうか、あくんというのは、お互いがお互いを信頼し合っているか

らこそできることであり、美しき友情の縮図ということなのだ。

なに、問題ない、霧子はそんなことしない。俺はそれを信じているし、逆にもし、霧子がそんなことをしてきたとしても、やさしい気持ちで受け止めてやることができるだろう。そもそもポツキーでは、そんなに大ダメージを与えることなどできないのだからな。

「チョコ、食ったの超久しぶり……」

「にゅ、そうなの？ 幸久君、チョコ好きなのに」

「チョコは、高いからな。っていうか、おかしは全般的に高いから、買えないんだ、家計的に。おかし買うくらいなら、いい食材買って美味しい料理つくりたいし」

「うちは、おねえちゃんがいっぱい買ってくるから、チョコとかいろいろあるよ？ 今度来たとき、食べる？」

「晴子さんのものに手えつけるとか、怖すぎてできねえよ。殺されても文句言えないんだぞ？」

「ゆっきい、ゆっきい、あたしもたべさせてあげる。あゝんってして、あゝんって！」

「えっ？ 志穂もか？ ったく、仕方ね」

「いもけんぴゝあげるね、いもけんぴゝ」

「…、いや、芋けんぴは、いいって。それは、あれじゃん、硬いし、すっげえ硬いし、先尖ってるし？」

「はい、どぞぞ！」

「っだあ！！ つぶねえ！！」

志穂は俺の目の前に芋けんぴを差し出し、そして俺がまだそれを受け入れる体勢も心構えもできていないのに、ひゅんっ！ と、まったく容赦のない勢いで突き出した。俺はなんとかその攻撃に反応して顔を横にずらす、ギリギリ間に合わず頬を芋けんぴが掠める。頬に一筋、何かが通り過ぎたような熱さだけが残った。

「ゆっきい、なんであたしのは食べてくれないの？」

「危ないから！ 芋けんぴは硬くて鋭いでしょ！ そんなので突かれたら無難に怪我するし、俺はお前のこと全然信用できないんだっ

て！ やられてからじゃ、遅いでしょ！！」

「怪我なんてしないよ、ゆっきいがうまく食べるから」

「今、それができそうにないから俺は顔を横に逃がしたの！ 芋けんぴで死んだ男なんて、ニュースになったら恥ずかしいだろう！」

「む、ぜったいゆっきいにいもけんぴくたべさせてあげるんだから！」

「あ、姐さん！ 助けて！」

「わ、私は、しないぞ。そういう軽微な破廉恥なことは、人がしている分には問題ではないが、私がすることはできない。そういうことは、きちんと交際をしているものがだな、誰も見ていないところであるべきなんだ。いかん、いかんぞ、そういうところから風紀の乱れは広まっていくんだ……」

あつ、ダメだ、姐さんはなんかどっかに行ってしまったている。このままでは、おそらく志穂の脅威（芋けんぴを俺に食わせようとする感じ）から助けしてくれるよう求めることはできないだろう。

志穂は、俺がメイと霧子の手からはお菓子を食べたのに自分の手からは食べてくれない、とへそを曲げてしまっているようだし、それを止めてくれと言っても通じまい。それに志穂の中で芋けんぴの危険性が確立されていない以上、芋けんぴを食べさせようとするのを止めてくれということも聞いてはくれないだろう。

逃げるにしても、志穂の機動力を振り切ることはできないし、その手の中に、まるで短刀のように芋けんぴを握ってじりじりと距離を凶っている気配から察するに、きっと回り込まれてしまうに違いない。

ど、どうしよう…、なんで俺、芋けんぴに追い詰められてるんだ。全然分からん……。

## 「第二回GWの旅行どうしよう会議」開催

「今日こそ、決めようぜ、どこに行くかを」

「にゅ、そうだね、うん」

昨日はけっきょく、あの後ずっと志穂から芋けんぴでの攻撃を受け続け、それから逃れるためだけに精神を摩耗させてしまって、会議は続行不能になってしまったので、全員に「行く先は山がいいか水辺がいいかアンケート」を取り切ることすらできなかった。今日こそは、少しくらい会議らしく旅行についての話を進めなくてはならないだろう。

「そうだな、昨日はまったく話が進まなかったからな。私がもう少し早く皆藤を止めに入っていたら、まだ少しは話し合いの体を取ることもできたかもしれないのだが……」

『のりちゃん、悪くないよ』

なので、今日も昨日と同じように黒板前を占拠して、五人で話し合いなのである。昨日進まなかった分まで取り戻さないといけないんだから、出来るだけ話が脇道にそれてしまわないように気をつけなくては！

そして昨日の二の舞になってしまわないように、今日は話し合いが始まる前からお菓子を出すのは禁止にしたので、机の上はすっきりしたものである。昨日の失敗の原因を、翌日にまで引き継いでしまうような愚を、俺は犯さないのである。

「そうだよ、りこたんわるくないよ。ゆっきいがいもけんぴくたべてくれないのがいけないんだもん」

「あれ？ ちょっと待って？　なんで今、俺が悪いみたいなこと言われたの？　しかもお前に？」

「よせ、三木。その話を掘り返してはいけない。それをもう一回やってしまっっては、今日の話し合いも話し合いにならなくなってしまうぞ」



「そ、そうか…、いや、でも、あれは絶対に志穂が悪かったんだって、それだけは譲らないぞ」

「あれは、ゆっきいがにげるからいけないんだよ。にげちゃったから、おいかけちゃっただけだもん」

「逃げたから追いかけるって、お前は犬かなにかなのかよ。つていうか、追いかけてきたのがいけないとか言ってるんじゃないよ。芋けんぴ振り回したら危ないって言ってるんだよ」

「いもけんぴ、おいしいのになにがあぶないの？」

「芋けんぴは硬くて鋭いだろ、突かれたら突き刺さるかもしれないだろ」

「そんなことならないよ。ゆっきい、じょうだんばかり」

「いや、お前の攻撃力が加わったら絶対に突き刺さるよ。俺の防御力では防ぎきれないくらいのだメージが飛んでくるよ」

「む、そんなことないもん！」

「なるって言うてるだろ！ 死んじやうだろ！」

「三木、そろそろいい加減にしておけ。ここは一つお前が大人になってだな、水に流してやればいいではないか。皆藤だってお前に怪我をさせたかったからあのようなことをしたわけではないのだから」

「いや、それは分かってるんだけどさ、でもやっぱりしつ的に教えとかないといけないんだって。やっていいことと悪いこととか、振り回したら危ないものとか、いろいろ教えていけばこいつはちゃんと、それなりに学習するんだからさ」

「うゆ、ゆっきい、なんのおはなし？」

「いや、こっちの話だ、気にするな、志穂」

「うん、ゆっきいがそういうなら、わかったよ」

いつの頃からだろうか、俺が「気にするな」と言えば、志穂が大抵のことは気にしなくなり、とりあえず「分かった」というようになったのは。そういう風に教育したのだから、まあ、当然といえば当然なのだが、少しやりすぎてしまったかもしれない、という感はない。

別に志穂のことを、俺を絶対的な何かとして崇めるよう洗脳するために教育をしているわけではないのだが、しかしいつの間にはこんな風になってしまっていたのである。やり方と程度に気をつけないと、人というものはこうも偏った育ち方をしてしまうということを如実に表しているようで、教育という行為が裏に秘めている恐ろしさのようなものを、俺はまさに体験しているのかもしれない。

まさに、教育とは洗脳と紙一重である、ということが今ここで明らかにになったわけだ。

「姐さんも、志穂の教育に協力してくれ。これは、もしかしたら旅行の行く先を決めるよりも大切なことかもしれないんだ」

「そうだよ、りこたん。ゆっきいのいうとおりだよ！」

「…、志穂、それはお前の言うことじゃない」

「うゆ？ そうなの？」

そしてそれを聞いた姐さんと言えば、数秒の間を置いて、ため息を一つ洩らしたあとに口を開いた。

「三木、皆藤の教育というのは、また今度するのではないのか？ 今は、せっかくみんなで時間をつくりあって集まっているのだろう。偶然、二日続けて五人そろって集まることができたというのに、そうしていつでもできることに時間を取られるべきではないと思うが」

「にゅ、そうだよ、幸久君。みんなでお話しできるのはそんなに多くないんだから、今日こそちゃんと話しないと。幸久君が、最初にそう言ったんだよ」

「むっ、正論だな…。志穂にいろいろ教え込むのはまた後でも今度でもいいのは、確かだ。それに、姐さんに無理言って風紀の巡回を休んでもらってるわけだし…、そうだな、ここはちゃんと話し合いをするのが先だよな。俺としたことが、優先順位を見失っちゃったぜ」

そう、今は出来ることをやるわけではない、やらなくてはならないことをやるべきなのだ。姐さんが風紀の定時巡回を休むということ

は、トップが不在のまままで小隊が業務を行なうということに他ならず、やはりそれは、他の委員会のメンバーたちの手前、よくないことではないだろうか。

志穂だって道場に通っているわけだし、メイも定期的に用事があるみたいだし、こうして五人が集まって話をできる時というのは、思ったよりも貴重な瞬間なのかもしれない。ああ、同じ高校に通って同じクラスにいるときでもこれなのに、もし卒業してしまったらどうなってしまうのだろうか。やはりみんながバラバラになって、なかなか会えなかったり、軽く遊んだりすることもできなくなったりしてしまうのだろうか。

それはやはり悲しいな。友だちというのはお互いの関係とつながりに寄るところが、どうしても大きいものだ。いかに仲が良くても何らかの理由で疎遠になってしまえば、その友好とは関係なくどころなく遠い存在になってしまう。遠くに引越してしまった親友と、いつの間にか連絡を取り合うことがなくなってしまうように、心の中では仲が良いと思っても、つながりの面から友情が保てなくなったりすることは、ままあることなのである。

「幸久君、どうかしたの？　なんだか、悲しい顔してるよ……？」  
「ああ、いや……、なんでもない。ちょっと悲しいことを考えちゃっただけだ。気にしないでいいから」

「にゅ……、ならいいんだけど……、あのね、幸久君、もし悲しくなったら、お話を聞くくらいなら、あたしでもできるからね？」

「うん……、そうだよな。それじゃあ……、今度、話でも聞いてもらうか」

「にゅん、よく分かんないけど、元気出して、幸久君！」

「ああ、ありがとうな、霧子」

『あたしも、お話聞ける』

「そっか、メイも聞いてくれるのか……、ありがとう。なんだよ、みんな、いいやつだなあ」

そうだ、悲しい気分になんて、今はならなくてもいいじゃないか。

将来俺と友だちの関係がどうなってしまうかはまだ分からないが、しかし少なくとも今、俺とみんなは仲良く過ごすことができている。だからこそこんな益体のないバカなことを言っているのだ。

この瞬間を忘れて、来るかわからない未来に悲しい思いで向かい合うなんて、愚かなことかもしれない。今楽しいんだから、今は少なくともそれでいいじゃないか！

「さあ、三木、今日の話を始めよう。すまないのだが、今日はあと30分ほどで抜けなくてはならないのだ。私がいる間に、出来るだけ話を進めてほしい」

「あつ、そうだったのか、ごめんごめん。よし、それじゃあ今度こそちゃんと話し合いするぞ。とりあえず昨日の続きからだから、アンケートの続きだ」

さてさて、昨日のことを思い出すに、霧子にだけ、山と水辺のどちらがいいかを聞いていなかったのではなかっただろうか。霧子は今回の旅行の言いだしっぺだから、その言い分はできるだけ聞いてやりたい。まあ、もちろんみんなに聞いた意見を参考として加味しながら、ということにはなるのだがな。

「霧子は山と水辺とどっちがいい？好きな方で言ってくれよ」

「にゅ…、えと、あたしは、あのね、今度の旅行は、山の方に、行きたいの」

「山の方がいいのか？山登りとかしたいってことか？」

「山登りは、んと、大変だからちよつとやなんだけど、でも森の中をお散歩するのとかは、したいかも。きつときもちいと思うし、緑がきれいだと思うの」

「なるほどな。霧子は山の方がいい、と。これで昨日と合わせて二対二だな」

アンケートを取って、もしその結果同数になってしまったとき、どのようにして白黒をつけるのが一番穏便かと言えば、それは間違いない話し合いに寄る場合だろう。自分たちの主張を存分にぶつけ合い、相手の真意を聞き、自分の本音を伝えたいうえで分かり合えれば、

おそらくどちらかの意見に必然的に集約されていくはずなのだ。

しかし、今回のようなアンケートにおいては、きっとそういう方法では決着をつけることができないに違いない。これはあくまでも自分がどうしたいか、という質問にすぎず、別に確固たる信念に基づいてそれを選択したわけでも、明白な主張を持って口に出したわけでもないからだ。つまり、こういう場合はそもそもからして議論にならないのだ。

なったとしても、「自分はこうしたいんだ」という一時の感情からくる思いを主張し合うだけの不毛な時間を過ごすことになってしまいうに違いない。それならばもっと、なんとかして建設的な感じに持っていくよう、議長ポジションの俺が上手く導いていくのが最もクレバーな解決策だろう。

「つつうことはさ、あれだろ、水場があって、なおかつ山があってみたいなところだったら、みんなの願望に上手く折り合いがつけられて、いい感じになるんだよな？　そういうところだったら、みんないいか？」

「そう、だな。ふむ、そういうところが挙げられるのならば、それに越したことはないだろう。皆の願望を取り入れられるのに、越したことはないからな」

「幸久君、どっちもあるとこなら、去年行ったところがいいんじゃないかな？　去年は湖しか行かなかったけど、すぐ近くに山とかもあったし、二泊三日ならどっちもいけるよ？」

「おお、どうした霧子、今日は冴えてるな。そうだな、確かあそこは、地形図とか見たわけじゃないから詳しくは分からないけど、山から川が出てる扇状地で、盆地状になったところに湖が上手く出来てる地形だから、山も湖もあるんだ。農業も盛んで地元でつくったブランド米とかあって、飯が美味いんだよな、あそこは」

「そうだな、それに今年は例年より少し暖かい気候らしいしな、上手くすれば去年よりも水に入って遊ぶことができるかもしれないぞ」「ほえ？　きょねんもみずくみであそべたよ？」

「遊べたは遊べたけど、けっこう外気は冷たかっただろ。びちよびちよになって、案外寒かったじゃねえか」

「え〜？ そうだっけ〜？」

「覚えてないのか…、まあ、別にいいんだけどさ。つまり、去年よりももっと楽しく遊べるぞ、ってことだよ」

「きよねんよりのたのしいの？ すっごいね！」

「ああ、きつとな。志穂がいい子にすれば、すっげえ楽しいだろうな、特に俺が」

「幸久君は、あそこでいい？」

「そうだな……。去年のよしみでまた宿は取れるだろうけど…、いや、今年はあることにならないようにこれだけ始動を早くしたんだ。大丈夫、去年の二の轍は踏まない！」

『去年、なにかあったの？』

「何でもないんだ、持田、気にしないでくれ」

「そうだぜ、メイ、心配なことなんて何もないんだ」

「ああ、そうだな、三木」

「そうだぜ、なっ、姐さん」

「そういうわけで、とりあえず目的地は去年と同じ宿、という認識をしておく、でいいんだな、三木」

「それで問題ないと思うぜ。まあ、他にここがいいよ、っていうのがあったりしたら、俺に言ってくれ。コネをたどって宿とれそうだったら候補にしとくからさ」

「なんか、ゆっきいのこねこねすごいね！」

「コネコネ…、なんか、そんなことないのに、何かを捏ねてる気分になってくるな……。いや、俺のコネがすごいんじゃないって、ずっと昔にうちの家の顔が広かったただけだろ。別に俺自身が何かすごいコネを持つてるとかじゃないし、俺がすごいわけじゃない」

「しかし三木の実家というのは、やはり名家なのだろうか。普通の家には、そのようなコネはないだろうし、そうなのではないのか？」

「そうだよ、普通のおうちには執事はいないと思うよ」

「ああ、それは、確かにな。なんか、あれらしいんだよ。昔、やんごとない金持ちだったみたいでさ。まあ、今はそんなときの金はほとんど残ってないみたいなんだけどな」

「ゆっきい、よくわからないけど、すごいね！」

「よく分からないのにすごいっていうなよ……」

まあ、そのことについては、俺自身も何も知らないといって過言ではない。だって、そういうことについての唯一の情報ソースになってくれそうなおじさんがほとんど何も教えてくれないんだから、仕方ないではないか。

おじさんが教えてくれるのは、三木の家が立派な、その大本は華族の出である家であり、自分たち庄司の人間はそれに仕えるべく存在しているということと、当代当主である俺は、別にそれらしく振る舞う必要はないが、そうであるという自覚だけは持っていてくれ、ということだけだ。

実は元華族なんだと言われても、俺は別に大金持ちでも社会的に地位があるわけでもないし、どうしたらいいか分からない。そうであるという自覚だって、どのポイントについて持てばいいのか、よく分からないのだ。

だから、自分がすごいなんて思うことはできないし、コネがあるといっても、それがそもそもどういう因果でそこに存在しているのかも何も知らないわけで、便利な道具を拾った、くらいの印象しかない。

「俺は、別にすごくなんてないよ」

俺はただ、なぜか便利な道具を持っているだけの三木幸久というだけで、別にすごくもなんともないのだ。

## サクラ荘祭り、開催のお知らせ

「ただいま」

「幸久様、おかえりなさいませ。今日も、いつもより少し遅かったようですが、なにか学校でのご用事でもおありだったのでしょうか？」

「ん？ ああ、ちょっとな。ゴールデンウィークに旅行に行くつもりでさ、それでどこに行こうかな、っていう話し合い、みたいなことしてきたんだ」

「ああ、そうでしたか。どこに行くかがお決まりになりましたら、私に言いつけてください。宿の方には、なんとしても、幸久様方のお泊りになる部屋を確保させてみせます」

「ああ、よろしく頼んだぞ、広太」

本日開催された第二回会議において、旅行の行く先はおそらく去年と同じ宿、というところまで話が進展したので、俺は家に帰り着いて、出迎えに出てくれた広太にそのことを簡単に伝達することにした。実際に旅行に行くのは俺たちだというのに、行きもしない広太に宿の確保を一任してしまうなんて間違っているかもしれないが、しかし広太がそうさせてほしいというわけだし、俺は宿の電話番号すら知らない始末なので、そうするしかないのである。

本当は広太もいっしょに連れて行ってやりたいのだが、しかしどうしてか毎年、ゴールデンウィークのころになると分家が全員強制参加の本家の方の集まりがあるらしく、庄司の家の人々は全員出払ってしまうのだ。しかし、その集まりに俺は呼ばれていない、とか連れてきてはいけない決まりになっているらしく、昔から俺はゴールデンウィークの間は家でお留守番、というのがお決まりになっていた。懐かしいなあ、俺と同じで連れて行ってもらえなかった美佳ちゃんと、二人ですっと留守番してたんだよなあ……。おぼさんがつくり置きしてってくれたカレーとか二人でチンして食べたり



したんだっけ……。初めのころは自分で料理もできなかったけど、でも晴子さんに弟子入りしてからは食事の支度は少しずつ出来るようになっていった、美佳ちゃんにいろいろ食べさせてあげて、めっちゃ喜んでくれたんだよな、美佳ちゃん……。懐かしい。

あー、もしかして、だからゴールデンウィークになると遠くに行きたく、っていうか、どこかに出掛けたいくなるのだろうか？ 心の中では、どこかに出かけていくおじさんたちが羨ましくて、いつかそれと同じようにしてやるんだ、とか思ってたしな。

「さて、今日も晩飯つくるかな」

「やほ、ゆき、おかえり」

「…、なんでまたいるんですか、弥生さん」

俺が軽く伸びをしながらリビングに入り、さて自分の部屋に荷物を置いてこようかな、と思ったそのとき、しかし俺の目の前には、想像もしていなかった人物が現れたのだった。あつ、いや、ウソだ、想像してなかったわけじゃない。

「なんでいるって、アレだよ。ゆきのご飯、食べたくなったから」

「弥生さんは、俺のご飯つくる機械が何かと勘違いしてませんか？」

リビングのテーブルに座って、広太が煎れたであろうお茶をずずずっ、と飲んでるのは、我が家の隣人である201号室の住人、坂倉弥生だった。いつものように薄手のシャツに短パンという軽装で、他人の家だというのにくつろぐことに躊躇がないというか、まるで我が家のような振る舞いというか、まさに自由人である。

「ご飯が食いたくなったとか、そんな適当な理由でうちに上がり込まないでください。っていうか、広太も弥生さんは入れなくていいって言うてるだろ。心を鬼にしてシャットアウトしなきゃダメだ、家計的に」

「ですが、幸久様、ドアスコップ越しにあのような目で見つめられては、お茶くらい飲ませてあげなくては、と思うのが人の情というものです。いけないと分かっているながらも、しかし今日も、扉を開

いてしまいました」

「まあ、広太は犬好きだからな。ああいう感じの、弱々しい感じ、  
っていうか腹空かせてるっぽいのは見逃せない性質だし」

「ひろは、やさしいいい子だよ。あたしがピンポンしてあゝけゝてゝ、ってお願いしたら開けてくれて、お茶を飲ませてくれるどころか食パンの白いところまで食べさせてくれたんだから。一週間ぶりのパンの白いところは、高級食材かと見紛う程だね」

「弥生さん、哀れすぎて涙出そうになりますから、それ以上言わないでください。っていうか、弥生さんは酒を買う金があるんなら食べ物を買ってください」

「何言ってるの、食べ物に恵んでももらえるけど、お酒は恵んでももらえないでしょ。だから食べ物にもらって、お酒は買うんだよ」

「偉そうに何をおかしなこと言ってるんですか。食べ物を恵んでもらうなんてみっともないことしないでください。もう…、晩飯くらいだったら、俺がつくってあげますから、そういうことしないでくださいよ」

「ほんと？ やったあゝ。ゆきのご飯、だいすき」

「はっ！？ しまった…、またつくってあげるって言ってしまった  
……」

弥生さんがうちにやってくることは、俺の知り合いの中では、間違  
いなく誰よりも多いだろう。

三日に一回くらいの頻度でフラツとやってきて、うちのチャイムを  
押し、そして雨にぬれた子犬のような弱々しい瞳でドアスコップを  
覗き込んでいる。それは、おそらく俺たちを籠絡するための弥生さ  
んの策略なのであろうことは明確に分かっているのだが、しかしそ  
れを無視することはとても難しい。

俺は困っている人を見ると、どうしても無条件で手を差し伸べたく  
なってしまう悪癖を持っていて、特にお腹を空かせている人に弱い  
のだ。そして広太は子犬とか子猫とかの庇護欲を誘う生物に弱く、  
近所の野良猫に餌付けをしている姿が住人たちによって幾度となく

目撃されている。

「そうとなったら、みんな呼んでこなきゃ！」

「えっ！？ みんな呼んでくるんですか！？」

「ゆきのご飯食べられるんならみんなで食べなきゃダメだよ。集まらないと、ね！」

「そ、そんなルールはありませんよ！ 別に弥生さんだけ食べたっていいじゃないですか！」

「都ちゅん！ うたちゅん！ みくちゅん！ ゆきがご飯つくってくれるってー！！」

弥生さんはがたんっ！ と椅子を蹴って立ち上がると、俺の言葉をまるで無視して部屋の外へと駆けだしていった。バタバタと大急ぎで階段を下りていくのがカンカンカン、と鳴る金属音で分かる。というかそれ以前

に、向こう三軒まで丸聞こえになるような大声で騒ぎ立てているのだから分かるも何もないのだが。

そしてそれだけ大騒ぎしているのだから当然なのだが、下の階ではバタン！ バタンッ！ と扉が開かれる音が連続し、102号室と103号室から都さんと未来ちゃんが飛び出してきたことを俺は知ることになるのだった。

「三木のおにちゃんがご飯つくってくれるの！」

「ご、ご飯！？ ご飯ってなんですか！！」

下の階からは、耳ざとくその騒ぎを聞きつけた未来ちゃんと、偶然耳に入っただろう、ただ「ご飯」という単語に反応しただけの都さんの声。後藤さん家はそろそろ食事の支度を始めていることだろうし、未来ちゃんの腹ペコもけっこうな水準まで達しているだろう。そして都さんに至っては、あの様子からして何日飯を食っていないかも分からない。というか、もしかしたら今日が何日なのかすらも把握していないかもしれない。

「…、なんで…、こんなことに……」

俺が力なくふらつくと、それを広太は、何も言わずに支えてくれた。

広太に導かれ、俺はリビングの椅子に座ると、弥生さんの飲んでいたものとは別に、広太が煎れてくれたお茶をゆっくりとすすむのだった。

ああ、今日もまた、なんでかよく分からないうちにみんなの晩飯をつくることになるかもしれない。俺だってそれなりに学校から疲れて帰ってきているというのに、どうしてこんなことに……。

「都ちん！ 今日ほゆきがご飯つくってくれるから、久しぶりのおいしいご飯だよ！」

「ご、ご飯……、ご飯というのは、あれでしょうか……？ あ、おいしいものかどうか……？」

「そうだよ！ 都ちん！ ないと死んじゃう、あれだよ！ っていうか口調が変」

「二階のおねえちゃん！ 三木のおにいちゃんがごはんつくってくれるって、ほんとですか！」

「ほんとだよ！ おねえちゃんをお願いしたら、つくってくれるって言ったんだよ！」

「すごいです！ おねえちゃん！」

「今度みくちゃんもお願いしてみるといいよ！ ゆきはロリコンだから、すぐに言うこと聞いてくれるよ！」

「ロリコンって、なんですか？」

「あのねえ、みくちゃん、ロリコンっていうのはね」

「やよちゃん！ 未来ちゃんになに教えようとしてるの！ 無垢な少女にそういうこと仕込もうとしないで！」

弥生さんが、事実無根のウソ情報を未来ちゃんに仕込もうとするのが許せなかったのか、都さんは弥生さんの言葉を大きな声で遮った。当然、狭いアパートなので、その声は、というか、そこで交わされている全ての言葉が俺にまで届いているので、俺は都さんに感謝しながら、自分自身でもその蛮行を防ぐために階下へと向かうのだった。

「そうだそうだ！ 都さんの言うとおりだ！ 未来ちゃんになに教

えようとしてるんですか、弥生さん！」

その前に、とりあえず二階からそう応戦しておく。

「何も知らない少女を彼が襲う、っていう方が、状況的に萌えます！」

「み、都さんも、待って！？ 二人して、なに考えてるんですか！」

ダメだ、このアパートの大人は誰一人として信用できない！

俺はっつけを足に引っ掛けると、急いで階段を下り、弥生さんに向かつてドロップキックをお見舞いした。腰から逆に向かつて折れた弥生さんは吹っ飛ぶが、しかし器用に身体を操作してきれいに転がって衝撃をうまく逃がしていたようなので、おそらくダメージはなかっただろう。

それからもう一人のダメな大人である都さんにも一撃見舞おうかと思っただが、その様子があまりにあんまりだったので、抜いた刀を納めることにした。都さんの格好はいつものようにジャージ上下であり、適当に切った髪はぼさぼさで顔には汚れが、なんの汚れかはまったく分からないが、ついていて、どれだけ風呂に入っていないのだろう、といった様相を呈している。さらに言ってしまうと、その顔色は妙に生気がなく、また寝食を忘れ、生命維持を放棄して仕事に打ち込んでいたに違いないことは、どう見たって明らかだった。

「都さん、ご飯、食べてますか？ ちゃんと、寝てますか？」

「雨戸閉め切って家から出ないから、今が何日か、分からないんだけど…、今日って、何日？」

「今日は、四月の24日です」

「24日？ …、今の仕事始めたのが18日だったはずだから…」

「もしかして、六日目ですか？ 飯食わないで寝ないで、六日目なんでしょうか？」

「そう、だと、思うけど、たぶん、うん」

「なんで生きてるんですか？ ふつう死にますよ、そんなに根詰めたら」

「好きなことしているから、死なないんだと思うけど」

「そうですか…、生命の神秘ですね……」

この人は、どうやら本格的にダメな人らしい。いや、まあ、それも去年の夏くらいにはもう気づいてただけだね。

「でも、仕事してたのによくこっちに気づきましたね。いつもだったら、大地震で日本滅亡しても気づきそうにないくらい集中しているのに」

「君の料理は、美味しいから。それに、仕事もひと段落つきかけていた頃だったしね」

「そうでしたか。まあ、そういうことだったら、お腹いっぱい飯を食べていってくださいよ。都さんが死んじゃったら、このアパートいわくつき物件になっちゃいますからね」

「どうして、人間っていうものは、物を食べないと生きていけないのかなあ。いっそ、永久機関を積み込んだ機械の身体になることができるば、永久に、何も考えずに仕事だけをし続けられるのに……。ああ、人間辞めたい……」

「そういう退廃的なことは、前途有望な子どもの前で言わないでくださいよ。未来ちゃんが聞いているですよ」

「三木のおにちゃん！ ご飯つくってくれるって、ほんとですか！？」

しかし、俺の心配をよそに、どうやら未来ちゃんは都さんの言葉にはそこまでの興味を持っていなかったようで、その心の大部分はさっきの弥生さんの言葉の時点で止まっていたようだった。よかった、都さんの「人間辞めたい」発言は、どうやら聞かれなかったようだ。そういうことを聞いて、もし未来ちゃんが「大人になったらあんな心持ちになるのか、大人になんてなりたくない」なんて思ったらどうしようって言うんだ。まったく、身近な大人というのは、子どもにとっては大人像を作り上げるもつとも重要なサンプルになるんだから、気をつけてくれないと困るぞ。

「おにちゃんのご飯はすっごくおいしいから好きです！ おかあさんのご飯も好きですけど、それと同じくらい好きです！」

「えっ、ほんと？」

「はい！ この前食べさせてくれたハンバーグも、すっごくおいしかったです！」

「そ、そう？ そんなに、おいしかった？」

「はい！ おにいちゃん、大好きです！」

「だ、大好きかあ…、照れるなあ……」

「がんばって、みくちゃん。押せ押せ」

「こう…、子どもの直球押しは、やっぱりいいわね。ちょっと、次号の参考にさせてほしいから、写真と録音をさせてもらっていい？」

「未来は、おにいちゃんのご飯が食べられるなんて幸せだと思います！ おかあさんとこのアパートに引っ越してきてよかったです！」

「ちょっと、未来？ 何を大きな声で騒いでいるんですか？」

未来ちゃんが大きな声で元気にしゃべっているのが部屋の中にも届いたのか、103号室からは、もう一人の住人である歌子さんが、パタパタとサンダルを鳴らして外に姿を現した。手には造花を持っているし、もしかしたら内職の最中だったのかもしれない。

しかし、歌子さんも作業に集中すると外の世界の情報をシャットアウトしてしまう性質だから、そんな歌子さんまで出てきてしまうとは、どうやらバカ騒ぎが過ぎたらしい。少しクールダウンした方がいいのかもしれない。

「あっ、おかあさん。あのね、三木のおにいちゃんが、ご飯をつくってくれるんだって。未来、おにいちゃんのご飯も食べたいの」

「ご飯？ ご飯は、今日も私がつくりますよ？ まだ用意は始めていませんけど、いつもと同じ時間には食べ始められます」

「そうじゃなくなっってね、三木のおにいちゃんがみんなにご飯つくってくれるって。だからね、未来もそれにこいっしょしたいの。ねえ、おかあさん、ダメ？」

「ああ、そういうことですか。三木さんが、みなさんにお食事を振る舞ってくださいる、ということですね」

「まあ、成り行きでそういうことになりました。歌子さんも、よろ

しかつたらご一緒にいかがですか？ 四人分でも六人分でも、言っ  
てしまえば、大して変わりませんからね」

「そうですか、そういうことでしたら、私も何か一品持っていきま  
しょう。これから肉じゃがでもつくろうかと思っていたところだ  
から、その食材を使って、なんとかかさ増しできるものをつくつて  
みます」

「歌ちゃんもつくってくれるの！？ 都ちん、すごいよ、パーティ  
だよ！ パーリーだよ！！」

「そ、そうなってくると、私たちも、何か持っていかなくてはなら  
ないのでは、ないかしら、や赤ちゃん……」 「ん？ あたしは秘蔵  
の日本酒を持ってくよ？ みんなで飲むのだ」

「そ、それなら、私は秘蔵の保存食を持っていくわ！ 干し芋とか、  
カロリーメイトとか！」

「都さん、それは持ってこなくていいですから。都さんは、ただ死  
なないように食べてくれればいいです」

「で、でも、それでは、面子というか、なんというか、大人として  
いけないと思うの！」

「大人だったら、まずは自己管理からしっかりしてください。一日  
三食お腹に入れて、毎日しっかり朝起きて夜寝られるようになって  
から言ってくださいね。あと、弥生さんはお酒持ってこないでくだ  
さいね。持ってくるなら他の人にむりやり飲ませるのはやめてくだ  
さい」

「そんなことしないよ」

「この前してたじゃないですか！ 都さんに無理やり飲ませて、大  
変だったじゃないですか！！」

「えー、そうだったけ？」

「なんで自分に都合の悪いことは何でもすぐに忘れるんですか。ち  
ゃんと自己反省してくださいよ」

「都合の悪いことは忘れていかないと、人間やってられなくなっ  
ちゃうんだよ、うん」



「開き直らないでくださいよ!？」

弥生さんは困ったらずぐに開き直るから、そういうのはあまりよくないと思う。人間の行動には必ず責任というものが付いて回るのであり、開き直すことによってそれを放棄することは許されない。

人間として、少なくとも自分のかけた迷惑くらいは覚えておいて、それについて可能な限り謝罪の意を示すくらいはしてもいいのではないかと思う。

「とりあえず! パーティだー!!」

「六日ぶりのご飯、楽しみだわ!!」

「三木のおにちゃんのご飯だー!!」

「…、飯つくるぞっしやあっ!!」

「それでは、また二時間後に集まりましょう」

「はい、じゃあ、解散ということだ」

「一杯飲んでから行こつと」

「とりあえず、入稿してからお風呂入って…、着替えようかしら」

「おかあさん、おかあさんはなにつくるの?」

「それは、今から考えます」

「俺は飯の支度でもするか、うん」

サクラ荘の住人達は、弥生さんの勢いによって集まり、そしてその勢いのままにパーティの開催が急きょ決定し、勢いをそのままに一時解散することに相成った。二時間後に現地、つまりはうち、へ再集合ということで、俺はこれから二時間で六人分の晩飯を用意しなくてはならないのである。

パーティというものは、参加者の楽しさと反比例して主催者は地獄をみることになる、というのが、俺の中では定説である。つまり、俺がどれだけ地獄を見ることができか、このパーティでみんなをどれだけ楽しませることができか、とトレードオフになっているのだ。

いや、主催者、というか、言いだしっぺは当然俺ではなく弥生さんなのだが…、まあ、それは言わないお約束、というものだ。

## 買い物に、出かけよう

「幸久様、あまりあのような場所で御騒ぎになるのは、感心しません」

「それは、俺も分かってる。でもなんていうか、アレだよ、勢いで。これから気をつける」

勢いのままに今日の夕飯がパーティになってしまってからわずかの間も置かずに、俺は自分の部屋へと帰ってきていた。これから二時間で六人分などという大量の料理をつくらなくてはならないのだから、あまり時間を悠長に使っているわけにもいかないので、テキパキと動かなくてはならないのだ。

「広太、なんだかよく分からない間に今夜、うちでパーティをすることになってしまった。うちを含めて六人分も食うものを用意しないといけない」

「はい、そのことでしたら、私の耳にも届いております。アパート中に皆様の声が響いておられましたから」

「しかし冷蔵庫にある分だけでは、二人分と少ししか買いこんでないから、絶対に食材が足りない。ということ、今から追加の買い物に行かなくちゃいけないんだが、…、俺の言いたいことは分かるな、広太」

「はい、お金ですね。五千円ほどでしたらすぐにお出しすることができます」

「助かる。っていうか、こういうことしてるから広太がせっかく節約した金も、いつの間になくなってしまっただろうなあ……」

「お気になさらないください、幸久様。私が節約して家計を切り詰めているのは、こういった緊急でお金が要り様のときに躊躇なくお金をお渡しすることができるようです。きちんと貯金にもお金を回しておりますので、たまの贅沢だと思ってお使いください」

「悪いな、広太。出来ればこれでお前の昼飯でも豪華にしてやられ

ばいいんだけど」

「先日も申し上げましたが、私にとっては幸久様のおつくりになった料理が一番の贅沢でございます。それ以上に私の口に合う料理などはないのです」

「分かった、今日の晩飯は、この金で精いっぱいいうまいものつくつてやるからな。楽しみにしてろよ、広太」

「はい、楽しみにさせていただきます。それでは私も買い物に同行しますので、手早く済ませてしまうことにしましょう。私は大家様に自転車を借りてまいりますので、幸久様はその間にお着替えを済ませてしまってくださいませ」

「ん？ ああ、まだ着替えてなかった。分かった、準備したら下で集合な」

「はい、承知いたしました」

広太は、そう言うのと外へと駆けだしていき、それから俺は広太に指摘されたとおり、まだ着たままだった制服から私服への着替えを済ませるために部屋へと駆けこんだのだった。

これから買い物に出るということは、部屋着に着替えるわけにはいかず、かといってどうせ行くのは馴染みの商店街なのだから、そこまでかつちりと着込む必要もあるまい。まあ、つまりは普通の外出着というか、適当に服を着ていけばいいだろう。

「荷物も部屋の中だつっうの」

置き忘れそうになった荷物を部屋の中に投げ込んで、とりあえずポイポイと服を脱ぎ散らかしていき、パンツ一丁になって着る服をたんすの中から引っ張り出していく。七分丈で軽めのミリタリーカーゴパンツと、丸首白無地の半袖シャツに黒地のベストを合わせて……

「ゆき〜、ここ〜？」

俺がたんすの中から服を引っ張り出していると、背中越しにきい…と扉が開く音が聞こえ、それに被せるように弥生さんののんきな声が聞こえた。

「えっ！？ ちょっと！！ なに開けてるんですか！！」

「いや、ここかなあ、って」

「ここかな、じゃないですよ！ 早く閉めてください！！ えっち！！」

「いいじゃんいいじゃん、別に減るもんじゃないし。ふんふん、ゆきってばかわいい顔していい身体してるよね」

「その言い方エロい！！ やめてください、弥生さん！ 見ないでください！！」

「やだよ、っていうか、見られたくないならさっさと服着ちゃえばいいじゃん。おねえさんが入ってきてるのに、いつまでも裸でいるなんて、ゆきこそエッチだよ」

「なんで俺がそんなこと言わないといけないんですか！ 弥生さんが入ってきたんですから、弥生さんの方がエッチに決まってるじゃないですか！ 入ってくるときはノック、っていうか、家に入るときはチャイムを鳴らしてくださいって、何度言ったらわかるんですか！！」

「ゆきこそ、別におねえさんの部屋に来るときチャイムもノックもいらないよ。だから、あたしがこっちに来るときだってチャイムもノックもいらないよね？」

「そういう問題じゃないです！ それじゃあ今度、弥生さんが着替えてるときに俺もその部屋に踏み込んで、ずっと居座って眺めてますよ！？」

「いいよ、おねえさんのぴちぴちボディで悩殺してあげるから」

「やっぱりしません！！」

俺がパンツ一丁のまま弥生さんと丁々発止の言葉の投げ合いをしていると、当然その間は俺の着替えは進展していないのだが、外からチリンチリンと自転車のベルが鳴らされた。どうやら大家のおっちゃんチャリを借りに行った広太が、あっという間にその仕事を終えて戻ってきたに違いないのである。

そうなってしまうと、俺は可及的速やかに着替えを済ませ、広太と合流して買い物へと出向くために部屋を出なくてはならない。つま

り、もう弥生さんに気を払っている場合ではない、ということである。

「弥生さん、どうしてもそこにいるならあっち向いててください。今、服着ちゃいますから」

「えー、見ててもいいじゃん。脱ぐんじゃないんだからさ」

「もうなんでもいいですよ!」

じろじろとこちらを眺めている弥生さんの視線を感じながら、しかしそれを出来るだけ気にしないようにしつつ、俺は手早く服を身にまとっていく。まったく、俺が服を着ているところなんて見ていて何が楽しいんだか…、居間でドラマでもニュースでも教育番組でも見ててくれよ。

そもそも、別に弥生さんは料理できない人じゃないんだから、みんなのために何かつくってみるとか、それがしたくないなら、少しでもみんなが心地よく過ごせるように掃除するとか、少し早いけどテーブルのセッティング始めるとか、いろいろ出来ることあるんだから、やってくれよ!

俺の着替えなんて見てるよりも、ずっと建設的な時間の使い方はできるはずなのに、どうしてあえてそっちの方を選んじゃうんだよ! 「ゆきは、身体を鍛えてるのかい? びっくりするくらい締まっているね、腹筋とか。あと背筋の筋とかもキレイに出てるし、なに者だいい」

「いや、別に特別鍛えてたりはしないんですけど、なんというか、自然に」

「自然にそんなになるとか、日常生活がおかしいと思えないよ。日常的に身体にどんな負荷をかけてるんだい、ゆきは」

「そういうつもりは、ないんですけどねえ……」

「今度その筋肉の不思議を、触診で調べさせてね。なんか気になるから」

「イヤですよ、弥生さんの触り方はイヤらしいんですから」

「そんなことないって、ただの学術的好奇心だよ。別にエッチなこ

とをしようってわけじゃないんだからね」

「それは、エッチなことをしようとする人のセリフですよ。絶対にやらせませんから。それじゃあ、俺は買い物行ってきますんで、ここにいらっしゃるちゃんと留守番してくださいね」

「お留守番ね、ほいほい」

「冷蔵庫の中の水だったら飲んでもいいですよ。おかしはないんで、探しても無駄ですからね」

「お菓子なんて食べないよ。おねえさんにはお酒があるからね」

「飲み過ぎてパーティのまえからぐったりとか、やめてくださいよ」  
「だいじょぶだいじょぶ、おねえさんは強い娘だから」

「はいはい、なんでもいいから自重してくださいよ、小さい子もいるんですから」

「小学生には、さすがに飲ませないよ、平気平気」

「飲ませないのは、未成年にしてくださいね。二十歳以下でお願いしますよ」

「はいはい」

その返事は非常に軽快であり、それだけを聴いている分には何の心配をする必要もなさそうに錯覚してしまうのだが、しかし弥生さんの日常的な態度を鑑みるに、その返事は逆に全く信用ならないというか、信用してはいけない類のものだった。そういういい返事をしたとき、弥生さんは必ずと言っていいほどこちらの話を聞いていないわけで、おそらく今回もまったく聞いていないか、そもそも聞くつもりがないかのどちらかだろうことは明らかだった。

「じゃあ、行ってきますね」

「行ってらっしゃい。おいしいご飯の素、買ってきてねえ」  
「そうします」

だから俺は、少なくとも今は一升瓶を持ってきていないことを確認してから、弥生さんの説得を諦めてテキパキと着替えを済ませて部屋を出ることにした。まあ、今持っていないなくても、隣の自分の部屋に戻れば、すぐにでも持ってくることはできるのだろうが。

そうさせないためにも、買い物之急いで済ませて、さっさと帰ってくるのが最も良い対応に違いないのだ。何においても時間を与えない、そうすればさしもの弥生さんであっても何もできないはずなのだから。

「広太！ 待たせた！」

「それではすぐに向かいましょう、幸久様。商店街とスーパーと、行く先はどちらになさいますか？」

「商店街だ。スーパーの方がいろいろまとまってるかもしれないけど、やっぱりいっぱい買うときは商店街の方がいい」

「了解いたしました。今回は、急ぎということを説明しましたら二台貸していただけましたので、一人一台、分乗して参りましょう」

「よし、すぐ行くぞ。時間もつたいないからな」

「それでは幸久様、こちらをどうぞ」

「おっしや！ 出発だ！！！」

「はっ！ 了解しました！！！」

「三木のおにちゃーん！ 待って待ってー！！！」

俺と広太は二人して全速力でこぎ出そうとして、しかしその一漕ぎ目を踏み込んだ直後、不意に後ろから聞こえた未来ちゃんの声を聴き、両手でブレーキを、全力を込めて握りしめた。進み出そうとした車輪を強引に停止させたので、前に進もうとする勢いを殺しきれず、後輪が軽く浮いてバランスを崩しかける。

しかしなんとか、二人揃ってバランスをうまく取って後輪を着地させると、それから一呼吸置いて自転車を降りて振り返るのだった。

「未来ちゃん、どうかしたの？」

「私たちはこれから買い出しに行ってます。未来様、何か御所望のものでもございましたか？」

「えと、あのね、おかあさんが、未来はお料理できないから、おにちゃんのお買い物のお手伝いをしてきなさい、って。だから、未来もいっしょにいい？」

「広太、この自転車、二人乗りって、出来るよな？」

「はい、後輪にまたがるようにしていただければ、二人乗りも可能かと存じます。未来さまは自転車をお持ちでないので、そうするのがもっともよろしいかと」

「そっちの自転車は荷台付いてるな」

「荷台に人を乗せることは、あまりお勧めできません。何か下に敷くものがあれば別ですが、そのまま座っては車体と車輪の振動が直接伝わってしまうので、少なからず痛いのではないかと思います」  
「ってことは、こっちに乗せる方がいいな？」

「はい、その通りです。私がそちらの運転をいたしましょうか？  
それとも、少し危険ですが、こちらの自転車の前方シャフトに乗っていただくこともできますが」

「いや、このままでいい。女の子の一人や二人、乗せてチャリを漕げないで、なにが男だ。未来ちゃん、このタイヤの横に出っ張っているとここに足かけて、立ち乗りできるかな？　それができたらいっしょに連れて行ってあげられるんだけど」

「はい、出来ます。未来、前におかあさんといっしょにお買い物行ったとき、そうやって自転車の後ろに乗ったことがあります」

「よし、それじゃ、そうやって乗ってくれる？　手は、俺の肩においてね」

「はい、わかりました、三木のおにいちゃん！」

「それじゃ、改めて、出発だ」

「はい、参りましょう」

「れっつ、ごー、です！」

そして俺たち三人は、パーティ用の食材を買いそろえるために商店街へと向かうのだった。未来ちゃんを乗せたことによって自転車の進むスピードは確実に落ちたのだが、しかしそれでも構わないと思った。

歌子さんが未来ちゃんに着いていくように言ったのは、決してただのお手伝いという名の社会勉強ではない。未来ちゃんは商店街のおっさんたちにいたく可愛がられているので、連れているだけで割引



率がいつもよりも、ほんの気持ちではあるが、上がるのだ。

きっと、急にみんなの分の飯をつくることになってしまった俺を哀れに思った歌子さんが、せめてかかる金くらいは少なくて済むように、と気をきかせてくれたのだろう。たとえば、歌子さんが料理を作っている間の未来ちゃんの相手をするのを、暗に、ついでに任されたとしても、それくらいのこと大したことではないのだ。

かわいい未来ちゃんといっしょに買い物にいけない、しかもお駄賃代わりにクーポン券をもらったようなものである。歌子さんは料理に集中できて、俺たちは一つも損はなくて、八方丸く収まる、最高の提案だということができるだろう。

## 一路、商店街へ

「三木のおにいちちゃん、お買い物ってどこにいくんですか？ 商店街ですか？ スーパーですか？」

「ん？ 商店街だよ。未来ちゃん、行ったことあるよね？」

「はいです。おかあさんとよくお買い物に行くので、商店街のお店の人たちはみんな知ってます」

「へえ、すごいなあ、未来ちゃんは。もう商店街の人たちと顔馴染みなんだね」

「未来がいくと、みんな『こんにちわ』っていつてくれるんです。商店街の人たちは、みんないい人たちです」

「そうだね、みんな気のいい人たちだからね。うちは、買い物の担当はだいたい広太だから、俺よりも広太の方が知られてるかな」

「そうなんですか？ それじゃあ、未来が三木のおにいちちゃんのことを商店街の人たちに紹介してあげるです。そうしたら、おにいちちゃんもみんなと仲良し仲良しです！」

「ほんと？ そうしてくれたら、うれしいな」

「未来にお任せ、です！ お買い物が終わることには、みんな三木のおにいちちゃんのことを知ってくれてるようになります」

「いやー、友だちいっぱいになっちゃうなあ。俺、友だち少ないから、うれしいなあ」

「あのあの、おにいちちゃんが一番のお友だちって、だれですか？ 未来、聞いたことなかったです」

「え？ 一番の友だちか…、んー、誰だろうなあ……」

商店街への最短ルートをチャリンコで走りながら、俺たちはそんな何でもない話をしてた。後ろに乗っている未来ちゃんの表情は見えませんが、しかし楽しそうに話す口調から、少なくとも退屈させてはいないことが、なんとなく分かる。

しかし、一番の友だちは誰？ というのは少し難しい質問のように

思えた。それは俺にとって誰が大切であるか、ということを確認することに違いないだろうし、数いる友人を比較し、相対的とはいえそれに優先順位をつけることになるだろうからだ。

俺にとって、友人に大事も大事じゃないもない、というか、すべての友人は等しく友人であり、誰が重要とか、誰はそこまででもないとか、そういう判断をすること自体が、ただ一個の人間としておこがましいように思う。

その議論は、押し広げれば「あれかこれか」の選択を突きつけられたときにどちらを選択するかということに直結するもので、極論、

「二人の友人が死にかけていて、そのうち一人しか助けることができないうきにどちらを助けますか」ということにも結び付くことなのだ。そういう、答えを出し得ない質問が、本当に簡単に、まるで今日の天気を訪ねるような、世間話や茶飲み話のような気軽さで投げかけられたのだ。

自転車に乗っている今、そういう意識の大半を割かなければ考えることすらも困難な質問を受けてしまったということは、非常に危険なことである。俺は以前、考え事をしながら自転車に乗っていて、それが思った以上に深刻な方向に向かって展開してしまい、考え事をする片手間で自転車に乗るような状況になってしまっただ道の電柱に衝突し、庄司家の自転車を一台お釈迦にしてしまったことがある。

今回もしそのようなことがあっては、乗っているのは人からの借り物の自転車なわけだし、絶対にいけないのだ。

「一番の、友だちかあ……」

しかしだからといって、未来ちゃんからの質問に対してまじめに向き合わないというのもおかしい話であり、ここは、その年齢の差が十年に満たないとしても、年長者としてきちんと真正面から対峙する必要があるだろう。そのような態度で向かってあげることが、どのようなことに対してであって真摯に取り組む大切さや何に對しても自分の考えをきっちり持つことの重要性を未来ちゃんに伝え

ることへとつながるに違いないのだ。

未来ちゃんは小学五年生でありながらかなりしっかりしているし、将来はきつとたいそう立派な人格を持った大人に成長するだろう。ほんの少しであっても、その手助けができるならば、俺は俺に出来ることは全てしなくてはならないのである。

「はい、未来はここにはまだ来たばかりですが、学校にもおうちにも、お友だちがいっぱいですごくうれいす。転校生なのにみんなやさしいし、おにちゃんもおねえちゃんもとってもいい人だし、未来はすごいすっごい幸せです！」

「それじゃあ、未来ちゃんの一番のお友だちって、だれ？」

「未来の一番のお友だちは、えっと、んと、みんなです！」

「みんな？」

「はいです、みんなみーんな、未来の一番だいすきなお友だちです！ おにちゃんも、おねえちゃんたちも、学校の人たちも、商店街の人たちも、みーんな、です！」

それとも未来ちゃんは、本当は他意なくその質問をただけなのだろうか。ただ単に俺にはどんな友だちがいるのか教えてほしいと思ったのを、「一番の友だち」を教えて、という質問に換言しただけなのかもしれない。あるいは、俺にとって大事な人が誰なのか、ということを知ろうとして、未来ちゃんの持っている語彙の中でそれに最も当てはまるのが「一番の友だち」という言い方だった、ということかもしれない。

あまり深刻に捉え過ぎて、深読みしすぎた応えを返すよりも、もしかしたら単に「俺にとって友だちはみんな大事だよ」と応えてあげればいいのかだろうか。…、そうだな、やっぱり、あんまり小難しく考えたことを言っは未来ちゃんが首を傾げてしまうかもしれないし、単純に、至ってシンプルに、俺の思いを伝えてあげればいいのかもな。

「おにちゃんは、一番だいすきなお友だちはだれですか？」

「俺が一番大好きなのも、みんな、かな……」

「おにいちちゃんも、みんな、ですか？」

「うん、やっぱり友だちはみんな大事だよ。誰が一番とか、誰よりも誰が大事とか、そういうことは言いたくないな。俺が友だちだと思っている人は誰であっても、困っていたら守りたいし、助けてやりたい。でも、それはやっぱり難しいことなんだよね。口で言うのは簡単だけど、易々と出来ることじゃないのは確かだ。だから俺は、そうすることが出来るくらい、強くなりたいな」

「三木のおにいちちゃんは、難しいことをいうですね」

「そうかな？ まあ、単に俺が欲張りなだけだ。手は二本しかないけど、でも守りたいものはいっぱいあるんだ。ただ、それだけ」

「それなら未来とおにいちちゃんは、欲張り仲間ですね。未来もみんなとずいっといっしょにいたいし、みんなのことがだういすきですから」

「ほんとだ、同じだね」

「はい、おんなじ、です！」

相変わらず未来ちゃんの表情をうかがうことはできないが、しかしそのコロコロと鳴る鈴のような笑い声を聞いていると、ニコニコとほほ笑んでいる様子が鮮明に頭の中に描き出される。未来ちゃんは、年相応によく笑い、そしてよく泣く。感情表現の幅が広いというか、あるいは逆に、感情のリミットが低いということもできる。

未来ちゃんが泣いている姿を見ると、心がひどく締めつけられるのだ。女の子が、俺の目の前で、どうしてかは分からないが、泣いている。その状況は、俺の中では許されるものではなく、なんとかして泣きやまそうとしたことも一度や二度のことではない。

まあ、泣く子をあやすのは霧子のおかげで慣れているというか、経験豊富なので、そこまで難儀することもないのだが。霧子は昔から泣き虫で、些細なきっかけであってもすぐに泣く娘だったからな。そういえば、そのことに関して俺自身成長したなあ、と思うことが一つある。それは、その原因となったものに対する感情の制御ができるようになったことだ。小学生のころは、霧子が泣かされたから、

という理由でわざわざその原因の何ものかに喧嘩をふっかけに行つたことも少なくなかったからな。

「幸久様、ご歓談中申し訳ないのですが、前を見て運転なさってください。意識が、まったく前に向いていないように思われるのですが、おそらく私の思いすごしということはないでしょう」

「わ、分かってるって。後ろに未来ちゃん乗ってるんだ、事故なんて起こすわけないだろ」

「しかし、危険であることに違いはありませんので。もし事故を起こした場合は、未来様に危害が及ばないように幸久様が身を捨ててしまいますのでしやし、ご自愛のためにも、お気をつけください」

「広太は心配性だよな、未来ちゃん？」

「はいです、三木のおにちゃんは事故を起こしたりしません。さつきは電柱スレスレを走ってましたけど、ぶつかりませんでしたし」

「えっ？ 電柱ギリギリ走ってた？」

「はい、上手によけていました。おにちゃんは自転車がお上手なんですわね！」

「ま、まあね！」

どうやら、危うくまた自転車を大破させるところだったらしい。気をつけなくてわ……。

こんな状況でもし電柱に正面衝突でもしようものなら、最悪、未来ちゃんが宙に舞うことになるかもしれない。それはあってはならないことなのだ。

「幸久様、ともかく、自転車に乗りながら様々なことに思案を巡らせるのはおやめになってください。そのように、状況を顧みずに考えにふけてしまうのは、決して悪癖であるとは申しませんが、危ないことであると言わざるを得ません」

「わ、分かってるって。ちょっと、未来ちゃんとおしゃべりしてただけなんだから、あんまり言うなよ」

「出過ぎた真似であることは重々承知の上です。ですがそれと分かりながらも、口を開かなくてはなりません。幸久様はご自分の身を

もう少し案じるべきではないかと存じます。自分よりも他人を思いやることができるということは、間違いなく幸久様の長所の一つではありますが、それは、ご自分を守り切ることを前提に置いたうえでなさっていたかなくては、困ります。あまりそのように滅私で他人に尽くすようなことを為されますと、私の身が、あまりにも幸久様を心配し過ぎてもちません。お医者様には、胃潰瘍になりかけているからストレスには気をつけるよう、以前より診断を受けているのです」

「そ、そうだったのか…、知らなかった…」

「ですから、事故などは、決して起こさないようにお願い致します。幸久様にもしものことがあっては、家の者すべて、いえ、一族すべてに対して申し訳が立ちませんので。三木という家にとって、庄司という家にとって、幸久様ご自身がどれだけ大切な存在であるか、お願いですので、御認識の方を、改めてくださいます」

「これから、気をつけるわ…」

とは言ったものの、しかし飛ばしている自転車を止めるわけにもいかないわけで、すべての会話、というかやりとりは、自転車で商店街に向かいながら、広太と並走しながら行なわれているのである。

終始、俺も広太も未来ちゃんも、お互いに前を向いたまま、顔も視線も合わせることなく、話をしているのだ。

それでもお互いの声の調子とか息の置き方とか、そういう細かいことで気持ちや思いや考えがなんとなくわかるし、表情なんかもはっきりと想像できる。こういう関係が、きつと友だちってことだと思うし、俺にとって理想的な関係なのだ。

「じきに商店街に到着いたします、幸久様。入口付近の有料駐輪場に自転車を止め、手早く買い物を済ませてしましましょう。30分の無料時間がありますので、その間に済ませることができれば、無用な金銭を浪費することありません」

「よし、分かった、そうしよう。未来ちゃん、いろいろ手分けして買って回るから大変かもしれないけど、俺たちに力を貸してくれる

かな？」

「はい、がんばります！ 重たい荷物とかはあんまり持てないですけど、未来もおにいちゃんのお役に立てるよういっぱいお買い物のお手伝いします！」

「未来ちゃんはいいい娘だねえ、まだ小学生なのにお買い物のお手伝いできるなんて偉いよ」

「未来は、もう五年生ですから、ちゃんとお手伝いもできます。お買い物も、食器のお片付けも、お洗濯ものをたたむのも、みんなできます！」

「霧子は中学生になってもまともに買い物行けなかったからなあ……。それを考えると、未来ちゃんはすごい大人だよ、えらいえらい」

「そうでしょうか？ えへへ、そういわれちゃうと、照れちゃいます！」

「あゝ、もう、未来ちゃん、かゝわゝいゝいゝ！！！」

「三木のおにいちゃんも、かわいいと思います！ 二階のおねえちゃんも、そういつてました」

「いや、未来ちゃんの方が文句なしでかわいいよ。あとでなでなでさせてもらってもいい？」

「はい、おにいちゃんになでなでしてもらえると、未来、とってもうれしいです！」

「あゝ、もう、かゝわゝいゝいゝ！！！」

「幸久様、そういったことは、公衆の面前では自重なさるのがよろしいかと存じます。徒に視線を集めておりますので」

「ああ、分かっている」

「それじゃあ未来がおにいちゃんをなでなでしてあげます。よしよし」

その瞬間、俺は一瞬ハンドル操作を誤り、転倒しそうになったがなんとかこらえた。あくまでもちよつとびっくりしただけで、別に小さな娘に、不意に頭を撫でられて、動揺したわけではない。



決してだ！！

## 商店街でなにぞする

近所に新しくできたスーパーに客を取られてしまっていることへの危機感からだろうか、商店街入り口付近に最近造られたばかりの有料駐輪場に自転車を置いて、俺たちは三人でそろって商店街へと足を踏み入れた。時間的に、夕飯の食材を求める奥様方でかなり混雑している商店街は、パツと見た限りでは何の問題もないように思えるが、しかし実際に買い物していると店の人たちはみんなどこか必死な感じを漂わせていて、スーパーの脅威というものがあるのかなあ、とぼんやり考える次第である。

「今日も、人がいっぱいです」

「スーパーの影響でヤバイのかとも思うけど、案外俺の思いすごしで、繁盛してるのか？」

「いえ、みなさま、口をそろえて大変だとおっしゃっていらっしやいます。やはりスーパーができたことは商店街の方々にとっては、それなり以上の痛手なのではないのでしょうか」

「大人って大変なんだな……。俺たちも、せめて商店街で毎日買い物して、少しでも貢献するようにしような。これからも買い物は商店街でしろよ、広太」

「はい、了解いたしました。これからもそのようにさせていただきます」

「未来も、おかあさんにスーパーよりも商店街で買い物してくれようおねがいしてみます」

「商店街のみんなのことまで考えられるなんて、未来ちゃんは本当にいい娘だなあ。偉い、ほんとに偉いよ」

「なでなでですか？」

「なでなでだよ、なでなで」

「三木のおにいちちゃんのだなではすつごくやさしいから、未来、だいすきです」

「もう、霧子と同じくらいかわいいなあ、未来ちゃんは……。いや、ダメ！　今ここで撫でちゃったら、もう撫でるだけじゃ終われない気がする……！！」

「なでなでじゃないですか？」

「なでなででは、家に帰って、料理づくり終わって、パーティしてるときにしようね。そうしたら誰の、何の邪魔も入らないからね」

「はいです」

「幸久様、息が荒くなっていらっしやいます。世間体というものがありますので、このような場所でそのような様子を披露することは控えた方がよろしいかと存じます。あと、あまり大きな声をお出しになりますと、先ほども申しましたが、どうしても周囲からの注目を集めてしまいますので、出来る限りこのような公衆の面前ではつましくお過ごしになるのがよろしいのではないかと考えます」

「あ、ああ…、気をつける」

口の端から垂れかけていたよだれを気づかれないように拭くと、俺は緩んでいた顔と気持ちを引き締めるのだった。危ない危ない、未来ちゃんは手放して俺のことを慕ってくれているから、どうしても気が緩んでしまうな。性格とか懐き方とか、いろいろなところが霧子に似ていると思うが、ここ最近は特にそう思うことが多くなってきた気がする。

別に年若の小さな女の子が特別好きというわけではないし、身長とかの身体的特徴によって相手のことを判断するようなこともないのだが、しかし未来ちゃんのちびっこいところとか、下から見上げてくる上目遣いとか、少女特有の少し舌っ足らずで、でも少し大人びた言葉遣いとか、いろいろなところが俺の心を捉えて離さないのがある。

弥生さんが未来ちゃんに「俺はロリコンだ」と言っていたが、しかしそれは決して真実を、的確な表現によって示しているというわけではないのだ。俺は小さな女の子が好きなんじゃない、小さな女の子のことも、一個の女性として尊重すべき存在であると理解してい

るというだけなのである。

「いえ、分を弁えぬ、差し出がましいことを申しました。しかしこれも、幸久様のことを思うが故のものであると、ご理解いただければ幸いです」

「俺がすっかりしてなかったから言ってくれただけだろ、分かっているって。お前のこと、差し出がましいとか、あんま思ったことねえって」

「はっ、寛大なる御言葉、ありがとうございます」

「まあ、まったく思わないわけではないけど、な？」

「しかし、たとえそのように思われたとしても、私は幸久様のご立派な人物となることができるよう最大限のことをさせていただきます。もしそれが癪に障るようなことがありましたら、執事長へとうお申し付けください。すぐに代わりの者を派遣させていただきます」

「お前は、俺がそういうこと絶対にしないの分かった上で、そういうこと言うからな。俺のこと信頼してくれるのはうれしいけど、もっと自分の身を案じろよ。もし俺が売り言葉に買い言葉で、お前なんてクビ！ とか言ったらどうするんだよ。お前、クビだぞ」

「それならば、私は幸久様に相応しい存在ではなかったということです。そのときは、私はそれを幸久様から頂く最後のご命令としてお請けさせていただきますし、専属としてのお付きの任から退かせていただくことといたします」

「いや、まあ、別に言わないけどさ」

「それでしたら、これまで通りにお傍でお仕えさせていただきます。末永くよろしくお願いいたします」

「どうせこっちの方が世話になるだろうけど…、まあ、それはいいか。よろしくな、広太」

まあ、俺が広太をクビにすることなんて、実際問題あり得ないことなのだが。そもそも、クビにするということは、そこに何らかの契約というか、雇用者／被雇用者のような関係が存在しているはずな

のだが、俺はそれまったく考えないのだから、クビになどする意味がないのだ。俺と広太の関係は、「主と執事」である以前に「三木幸久と庄司広太」なのであり、そこには雇うもクビにするもなく、ただ長い間を共に過ごした幼なじみであり、友人なのである。

友人関係にクビも何もない、ということだ。

「おにいちちゃんたちは、とっても仲良しさんです。ずっと昔からお友だちなんですか？」

「いえ、未来様。私と幸久様は、友人ではありません。私は幸久様の執事、言ってしまうえば家具です。幸久様の傍にお仕えさせていただくことは私の使命であり、仕事であり、宿願です。しかしそれは、友人という立場に立つということを必ずしも意味しません」

「いつもいっしょにいるのは、友だちじゃないですか？ 庄司のおにいちちゃんは、難しいことをいうですね」

「はい、少し難しいことかもしれませんが。未来様には、分からない思いかもしれませんので、完全に理解していただくとは思いませんし、それを求めることもありません。ただ、未来様は、テーブルと友人となることはないでしょう。つまりはそういうことです」

「でもでも、庄司のおにいちちゃんは、テーブルじゃありません。うゝゝ、未来にはよく分かりません……」

「分かりにくいことを言ってしまいましたね、もうしわけありません、未来様。しかし、幸久様にとって、私は友人であるべきではないのです」

「えと、庄司のおにいちちゃんは、三木のおにいちちゃんのこと、きらい、ですか？」

「いえ、まさか、そのようなことはありません。私は、何よりも幸久様を敬愛し、自分以上に大切に思っています。幸久様の為でしたら、私は喜んでこの命を差し出しましょう。それでも、私は友人と呼ばれるべきではないのです」

「三木のおにいちちゃんのこと、だいすき、ですか？」

「はい、何よりも」

にこりと、広太は不安そうな未来ちゃんの質問に微笑みを浮かべて応えた。それは幾度となく聞いたことだが、俺にとっては、いまだに納得することができないことだった。

俺は、目の前で生きている人間を家具として理解することなんてできないし、それが親友のことであるならば、なおさらなのだ。

「広太、照れるなよ。俺たちは親友だろ。友だち以上、だよな？」  
「幸久様、」

「未来ちゃん、こいつ照れ屋でさ、照れてんだよ」

「照れてる、ですか？」

「そうそう、さっきのは照れ隠しだから、気にしないでいいぜ」

「おにいちゃんがそういうなら、分かりました。やっぱり仲良しなのはいいことだと思います」

「仲良しなんてもんじゃないよ、俺たちは。なんてったって、生まれてからずっといっしょにいるんだからさ。それなのに親友じゃないなんて、ありえないっしょ」

「はい、お友だちは、うれしいです！」

「もちろん、未来ちゃんも友だちだよ」

「ほんとですか！ えへ、うれしいです！」

「広太も、そうだろ？」

「はい、未来様と友人であると私が言うことを、お許しいただけるならば」

「庄司のおにいちゃんも、お友だち、です！」

「ありがとうございます、未来様。そのようなことを言っていただけるなんて、光栄の極みです」

「仲良しはお友だちです。だから、庄司のおにいちゃんもは三木のおにいちゃんとお友だちです。未来はそうだと思います」

「広太、未来ちゃんがいいこと言ったぞ」

「はい、お聞きしました」

「庄司のおにいちゃんのいうことは、難しくてよく分からないですけど、でも仲良しなのにお友だちじゃないなんて、さみしいです…」

…」

「そういうことだ、広太。さっさと諦めて、俺と友だちです、って  
言え」

「…、それは、できません。できませんが、幸久様がそのように思  
ってくださっているということだけは、心に留め置かせていただき  
たく存じます。もったいない御言葉をいただきました」

「…、まあ、今日はそのくらいで勘弁してやるか。未来ちゃん、こ  
いつさ、自分では絶対に言わないんだけど、俺のことを親友だと思  
ってるんだよ。でも恥ずかしがってるだけなんだ。許してやってく  
れな」

「はい、未来には難しいことは分かりませんが、庄司のおにい  
ちゃんは三木のおにいちゃんのことですごく大好きだってことが、  
分かりましたので」

「よし、じゃあ、これで心起きはなくなったわけだ」

「はい、それでは未来のだいすきな二人がちゃんとお友だちで、ホ  
ッと安心です。三木のおにいちゃん、早くお買い物にいきましょう」

「そう、だね。いつまでも入口のあたりでうろうろしてるのは怪し  
いし、行こっか」

「それでは当初の予定通りに手分けしましょう、幸久様。どのよう  
なお料理をつくるおつもりなのかは分かりませんが、私はなにを買  
いにいけばいいでしょうか？」

「とりあえず、歌子さんが肉じゃがをつくるって言ってたし、こっち  
も和風でまとめるか。広太は、とりあえず魚の切り身でも買ってき  
てくれるか？」

「はい、了解しました。魚の種類は、どのようになさいましょう。  
切り身を焼くのでしたら、サケなどがよろしいですか？ それとも  
なんらか干物のようなものの方がよろしいでしょうか？」

「普通に切り身でいいよ。種類は、別に広太の好きなのでいいって。  
あんま細かいことは気にしないでさ、もっとフレキシブルに動くべ  
きっていうか、言うこと聞いているだけじゃなくて、したいことして

もいいんだぞ？」

「幸久様のお言いつけを聴くことが、私のしたいことですので、どうぞお気になさらないください。それでは、私は一人で行ってまいりますので、幸久様は未来様と二人でお買い物を進めてくださいませ」

「はい、未来、がんばります！ 三木のおにちゃん、いっしょにがんばりましょう！」

「そうだね、とりあえず、魚の切り身が買えたら一階戻ってこいよな。戻ってきたら次を買ってくるものの指令を出すから。俺たちは入口に近い店から順番にゆっくり買い物してるから、ちゃんと見つけれよ」

「はっ、了解しました。それではそのようにさせていただきます。お金はこの二千円をご利用になってください。私が残りの三千円を持っておりますので。もし足りなくなりそうなときはそう言うてくだされば、すぐに追加でお金をお渡しいたしますので」

「だいじよぶだって、二千円もあれば何の問題もないんだからさ。ほら、行ってこい、広太」

「はい、了解いたしました。それでは、買うことができましたらすぐに戻ってまいりますので、幸久様はごゆっくりお買い物をお楽しみください」

「まあ、俺もそんなにゆっくりと買い物はしないんだけどな？ あんまりちんたら買い物してると、肝心の飯をつくるための時間があるまじり残らなくなるからな、うん」

「それでは、失礼いたします、幸久様」

「おう、行ってこい」

そして、広太は歩行者でごった返す商店街の道を、器用に歩行者たちの間をすり抜けて行き、あっという間に俺たちの視界から消えたのだった。どうしてあんなに人がたくさんいるところをすばやく移動することができるのか、全く分かん。

「それじゃあ、未来ちゃん、俺たちも行こうか」



「はい、分かりました。どこから行くんですか？」

「まずは八百屋さんから行こうか。商店街の入口に近いし、広太も見つけやすいだろうしね」

「八百屋さんですね、分かりました。いっぱい買うんですか？」

「そうだね、弥生さんと都さんは基本的に野菜不足だから、そこらへんのところを考慮してつくってあげたいし、いろいろ買うことになると思うよ。未来ちゃんも、買ったのを持つの手伝ってくれるかな？」

「はい、もちろんです！ 一生けんめいがんばります！」

「よし、いい返事だ！ がんばろう！」

「おう、です！」

とりあえずまず目指すは八百屋ということに決まった。食卓を和食でまとめるとすると、さて、どんな料理をつくっていけばいいだろうか。広太にはとりあえず魚の切り身を買に行かせたし、それを焼いて焼き魚をつくることは確定だろう。となるとそれ以外に何をつくるかだが、ふむ、どうしたものだろうか……。

## 飲兵衛と漫画家、鎗を削る

両手に八百屋やら魚屋やらで買った荷物を提げながら、俺たちは今回の買い物のスタート地点である駐輪場まで無事に戻ってきたのだった。

「よし、これで買い物はもういいだろ」

「はい、いっぱい、買いました」

「未来様、お荷物は私がお持ちしますので、どうぞお渡しください」  
「平気です、未来も、お手伝いするって、おにいちゃんと、お約束しました、から」

「そうだぞ、広太。未来ちゃんはこんなにがんばって手伝ってくれてるんだ、うれしいじゃねえか。未来ちゃん、がんばってね」

「はい、がんばります！」

未来ちゃんは、八百屋で買ったニンジンが三本とジャガイモが四個、それに大根と長ネギが一本ずつ入っている袋を両手で提げて、えっちらおっちらと、少しおぼつかない足取りで俺たちの隣を歩いている。大きめのビニール袋はその内容物によってそれなりのふくらみを帯びていて、その重さがなんとなく見ているだけでも伝わってくる。握った手に食い込むビニールの持ち手が、その肌の白さをかすかに際立たせているようで、少しだけ痛々しく、それを持ってあげたくなるというか、広太が未来ちゃんの荷物を受け取ろうとしたことも分らないではない。いや、むしろ全面的に同意だ。

もちろん、未来ちゃんに荷物を大量に持たせて俺たちは楽をする、などということをしているわけではない。当然荷物の大半は俺と広太が分けて持っているわけで、未来ちゃんにお願いしている分なんて、全体の量から見たら、そこまでのものではないと言わざるを得ない。

しかしそうだとしても、未来ちゃんにとってはそれだけでもなかなかの量なのだから、大変であることに違いはないのだろうが。小学

五年生の女の子に持つことができる荷物の量と高校生男子の持つことができる荷物の量には大きな差があるのであり、それゆえ、持っている荷物の量の差が必ずしも労働の強度の差となり得ないのである。

だがしかし、だからといって、大変なことなどないように、とその荷物を取り上げてしまっただけとはいけない。確かに未来ちゃんの持っている分の荷物を追加で持つことくらいなら、俺でも広太でも不可能なことではないが、それをしてしまっただけは未来ちゃんの気持ちに納得しない決まっているのだ。

未来ちゃんは別に俺たちといっしょに行動するマスコットキャラというわけではなく、買い物のお手伝いをするんだ！　と意気込んで同行してくれている、ということをお忘れはならない。ここで未来ちゃんの荷物を取り上げてしまっただけは、せっかくのお手伝いをしようという未来ちゃんの心意気を蹴飛ばすことであり、この場における未来ちゃんの意味を貶める行為なのである。

未来ちゃんのことを大事に思うなら、ここで自己満足的にその労働を取り上げてしまうのではなく、しっかりお手伝いを完遂させてあげることができなのだ。そうしてこそ、未来ちゃんのことを遂げさせてあげることができのだし、未来ちゃんから見たら大人な存在である俺たちと自分を並べることができる、つまり自分がまた一つ大人になることができたぞ、と実感することができるのだ。

「おし、帰ったらご飯つくるぞ」

「三木のおにいちゃん、未来にも、お料理の、お手伝い、させてくれる、ですか？」

「んー、そうだなあ……。未来ちゃんは、お料理したことはあるのかな？」

「未来は、お料理は、家庭科の、授業で、少しだけ、やったことがあるです。うちでは、おかあさんが、ダメって、いうので、やってない、です」

「そっか……。経験しないと上手くならないのは当然なんだけど、今

日のキッチンはずっと忙しくなっちゃうだろうし、経験少ない未来ちゃんが立つには厳しいか？　なあ、広太、だいじょぶだ思うか？」

「私には料理のことは分からないのでなんとも言いかねますが、しかし幸久様は人にものを教えることがお上手ですので、未来様にとってはとても良い経験になるのではないかと存じますが。ですが、もし幸久様の調理作業の妨げになるのであれば、キッチンへお入れにならない方がよろしいのではないのでしょうか」

「いや、邪魔ってことは全然ないと思うんだけどさ、でもキッチンもあんまり広くないし、二人で入って、そのうち一人が不慣れな人っていう状況は、ちょっと危ないかなって。っていうか、やっぱり大人数の料理をつくるってことは忙しく動くことになるし、ぶつかったりして危ないかもしれないだろ？」

「そう、なのですか？　それならば、二人で調理は為さるのは、おやめになった方がよろしいのではありませんか？」

「そうなんだよなあ……。でも、未来ちゃんはやる気満々だし、ダメっていうのもかわいそうだし」

「三木のおにいちゃん、未来、お料理の、お手伝いは、出来ない、ですか？」

「んー…、出来ないわけじゃ、ないんだよなあ……」

俺の言葉では、どうにもうまく誤魔化し、もとい説明できそうになり。っていうか、やる気のある人にはチャンスを与えて然るべきだし、こういう自発的にやると言ったときこそ機会を与える機会に最適というか……。でもやっぱり危ないものは危ないし、もしそれで未来ちゃんが怪我でもしたら洒落にならないっていうか、歌子さんに申し訳が立たないというか。

広太、どうにかしてくれ、と、俺はバチッ！　とアイコンタクトを送った。そして広太はそれを理解したのか、未来ちゃんに悟られない程度に小さく頷いて、目線を当の未来ちゃんの方へと戻した。

「それでは、未来様はテーブルのセッティングを手伝っていただけ

ますか？ 私一人では、時間がかかってしまつて、間に合わなくては困りますので、お願いいたします」

「庄司のおにいちゃん、ピンチ、ですか？」

「はい、パーティのために、幸久様のつくつてくださった料理を並べるテーブルも飾らなくてはなりません。ですが、私一人では間に合うかどうか、未来様にお手伝いいただければ、きっと立派に飾り立てることができるでしょう。どうでしょう、お手伝いいただけませんか？ もちろん、幸久様がお料理をなさっている様子は、テーブルの仕度をしながらでもよくご覧になることができますよ」

「はい、です。そういうこと、だったら、未来は、庄司のおにいちゃんの、お手伝いを、します。もっと、三木のおにいちゃんの、お役に、立てるように、なったら、お料理の、お手伝いを、させてください！」

「うん、今日はテーブルセッティングの方をよろしくね、未来ちゃん。今度また、いろいろ教えてあげるから、そのときにいっしょにお料理しよう」

「はい、わかりました、です」

「とりあえず、今は帰ろう。広太、いい感じに荷物を二つに分けて、チャリの前かごと荷台に積んでくれ」

「はい、了解いたしました。未来様のお荷物も、お預かりします」

「はい、庄司のおにいちゃん、よろしくお願いします。ふう…、手がしびれちゃいました」

「荷物いっぱい持つてくれてありがとうね、未来ちゃん。さすが五年生、力持ちだ」

「えへ、はい、五年生ですから」  
せつせと荷を積み込んでいく広太を見ながら、俺はえへへと笑う未来ちゃんに軽く笑いかける。

買い物自体は、いいものを揃えることができて成功なうえに、未来ちゃんが愛想を振りまいてくれたことでいつもより、わずかにではあるが、安くあげることができると大成功だったのだ。せっかくだ、

この浮いたお金を使って功労者である未来ちゃんにジュースの一本でも買ってあげようじゃないか。

しかし、俺たちはこうして買い物に出てしまったわけだが、アパートに残っている弥生さんや都さんはなにをしているのだろう。パーティの支度を少しでもしてくれていればいいんだけど…、でもまあ、そんなこと期待する方が間違ってるのかもしれないなあ……。

……………

「おじやまするわよ、三木くん」

「おっ、都ちん、いらっしやいな」

俺たちが買い物に出てからしばらくして、手に小さなビニール袋を提げた都さんが我が家の扉を開く。鍵が開いていることは分かっていたようでチャイムに手を伸ばすことはまったくなく、軽くノックをしてからまっすぐにノブを捻り我が家へと足を踏み入れた。そしてそこで待っていたのは俺でも広太でもなく、テレビも音楽も付けることなく無音の中で静かに座っている弥生さんの姿だった。

「あれ、やよちゃん？ そんなところでなにしてるのかしら？」

「ん？ お酒ちゃんと語りあってた」

「またお酒？ お酒なんて飲んでも、百害あって一利なしよ、やよちゃん」

「またまた、お酒よりも身体にいいものなんてこの世に存在するわけじゃないじゃん。神の雫だよ、お酒は」

「イヤよ、お酒なんて。お酒を飲むと前後不覚に陥ってそのときの記憶を軒並み無くすものじゃない。怖いわ、眠る以外で全く記憶のないときがあるなんて。もし変なことを口走ったりしたらどうするのよ」

「それはそれだよ。そんなことよりも、今この瞬間に楽しければそれでいいじゃない」

「そういう刹那主義、あたしには合わないわね。確かに人生ってい

うのはあらゆる無数の瞬間の積み重ねによって作り上げられていくけど、その瞬間瞬間が楽しければいいってものじゃないでしょ」

「それは違う、違うわ、やよちゃん。楽しいからといって自分の好きなものばかり描いていてはいけないの。確かに自分の好きなものを描いている分には楽しいし、かけがえない時間を過ごすことができるものだよ。でもね、自分の好きなものが必ずしもいいものというわけではないし、仮にいいものが出来上がったとしても連載の役に立つものとは限らないの。楽しい瞬間を、無限に積み重ねることはできないわ。必ず、どこかで楽しさの積み重ねは現実という横殴りによって破壊されるのよ」

[illegible]

「はあ…、はあ…、ご、ごめんね…、三年前の、トラウマが、ちよ  
つとね……」

「深呼吸だよ、都ちん。これ、飲むかい？」

「イヤよ、それお酒じゃない。騙されないわよ、飲んだら最後、記憶を失っちゃうんだから」

「そんなことないって。こないだだって、少しは覚えてたじゃん」

「覚えてたのは、だれかにお酒を飲まされたってことだけで、それ以上は状況証拠から推理してたどり着いたのよ。あたしはもう騙さ

仲間に引き込もうとしているのよ、絶対そうだわ」

「そんなことないって、あたしはただいっしょにお酒を飲んでくれる人がほしただけなんだって」

「それが、刹那主義への耽溺だって言っているのよ。ダメ、絶対ダメよ。あたしはお酒なんて飲まないの。飲んだら夜にやる予定の原稿が出来なくなっちゃうじゃない」

「お酒飲んだって原稿は描けるよ、たぶん」

「描けないのよ！ いや、描けないというか、下手に描けちゃうから困るのよ！」

「描けるんじゃないじゃん」

「ダメなの！ あたしは原稿は全行程アナログ派だから、パソコンみたいに修正がきかないのよ！ 確かにホワイトで直すことはできるけど…、そんなことするよりもう一から描き直した方がいいんじゃない、みたいなことになっちゃうのよ！！ 一晩作業できないだけでもちよつとスケジュールきつくなるのに！ 昼間の分の原稿まで台無しにしちゃったら、もう無理なんだから！！ あたしの…、あたしの原稿が ああああああああああああああああああああああ ああああああああ！！！！ こんな魂の入ってないペン入れじゃ！！ 掲載できないじゃないの おおおおお おおおおお ああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

「でも、こないだは間に合ったんでしょ？」

「この間は運が良くて、どうしてか被害が原稿全体に拡散していたから全面リテイクにしないといけないページがなかったからよ!!」

もしあれが、何枚かに被害が集中してたりしたら……! 3ページか4ページが、全面リテイクになってたに違いないわ……!!」

「それって、やっぱキツいの？」

「当然じゃない!! あたしは、描くのは比較的早い方だけど、一枚一枚命を込めて描いてるから、一枚ダメにしちゃうと立ち直るの



にしばらくかかっちゃうのよ!!」

「問題はメンタル面ってことじゃん。ガラスのハートなんだから、都ちんは。お酒飲んだるときはあんなに強気発言連発してたのに」

「えっ…、なにそれ、それ知らないんだけど……」

「いや、お酒飲ませたらさ、急にケイタイで担当さんに電話し始めちゃってさ、元気いっぱいに次の連載の話とかしてたよ。『大傑作が描き上がる予感がするんです!!』とか、不自然なくらい自信満々に言ってたよ」

「…、あっ！ だからその次の打ち合わせで新作がどうこう言ってたのね!? あたしが知らないって言ったらうやむやになったけど!!」

「なあんだ、連載してるのに新連載とかかけえって思ったのに、やらないんだあ」

「こ、これ以上原稿抱えたら死ぬわ!!」

「一瞬のかっこよさに生きないと」

「だから！ 刹那主義はイヤだって言ってるじゃない！ 刹那主義的な生き方では安定した人生は歩めないのよ!!」

「やり始めちゃったら、なんとかなるもんじゃないの？ 気合とか、いろいろで」

「やよちゃん、この世の中には気合ではどうにもならないことがあるものなのよ。月刊連載を六本以上抱えることは、すなわち死を意味するの」

「今、何本？」

「六本……」

「…、都ちん、ファイト!」

「そうよ、あたしは現在進行形で死んでいるのよ……」

「売れっ子作家さんだよ、立派だよ、都ちん」

「売れてる…、のかしら……。あたしの漫画、売れてるのかしら…? あたし本屋さんにも行かないし、雑誌も読まないし、アンケートの結果も聞かないし、ネットで評判を知ることもしないし、フ

アンレターも基本的には受け取らないようにしてるし、なんにも分らないんだけど……」

「だいじょぶだって、大学でも読んでる人いるみたいだもん。評判もいいみたいだし、新刊出たら本屋さんには平積みだよ。売れてるって」

「そうだと…、いいんだけどね……」

「元気出してよ、都ちん。ほら、これ飲んでいいから」

「ありがと…、やよちゃん……」

そして都さんは、弥生さんの手からグラスを受け取ると、あおるように一気にそれを飲みほした。

俺たちが買い物から戻るまで、あとだいたい20分。

## ドッキリ 大成功 ☆

「ただいま。弥生さん、ちゃんと留守番してくれましたか？」  
「幸久様、お荷物をお持ちします。私が冷蔵庫にしまっておきますので」

「ああ、頼んだ。って、あれ…、弥生さん、どうしたんですか！」  
駐輪料金を払うことなく商店街を出てから十数分後、つつがなく買い物を終えた俺たちは、無事に自分たちの部屋へと帰宅を果たしたのだった。両手は荷物でふさがっているが、なんとか扉を開けると弥生さんに呼びかけながら我が家へと一步を踏み入れる。

後ろには俺と同様に両手に荷物を提げている広太がいて、またその隣には両手で荷物を提げている未来ちゃんの姿があった。未来ちゃんの提げている袋は商店街で持っていたのと同じものだが、広太がその中身をいくらか別の袋に移し替えていたので、未来ちゃんがそれを一生けんめい持っている感じは、さっきよりもずいぶんと薄らいでいるように見えた。

「三木のおにいちゃん、二階のおねえちゃんは、もうおにいちゃんの部屋にいますか？」

「うん、いる、はずなんだけど…、おかしいな。やけに静かだ……。いつもは一人でいてもうるさすぎるくらいなのに」

「二階のおねえちゃんも一階のおねえちゃんも、いつもにぎやかさんなのに、変ですね」

「あっ、そういうえば都さんも静かだな。もしかして寝ちゃったのか？　そうなると起こさないといけないんだけど…、ま、いっか。飯ができてから起こしたって別にかまわないだろうし……」

「幸久様、弥生様も、もしかしたらご自分の部屋に帰って寝てしまわれたのかもしれませんが。後で起こしに行つてさしあげれば問題ないでしょうし、今はお料理をつくられた方がよろしいのではないのでしょうか？」

「んー、そう、だな。まあ、弥生さんもたいがい気まぐれだし、別にきちんと留守番してくれてることも期待してたわけじゃないから、いいんだけどさ」

しかし、別に留守番してくれなくて良かったから、せめてうちから去るときはドアのカギを閉めてほしかった。こんな金のなさそうなボロアパートにわざわざ入る泥棒もないだろうけど、やはりそういうことはきっちりしてほしいのである。

防犯上のことも当然あるのだが、それ以上にそういう基本的なところからきっちり締めてしていないと、生活にメリハリというものが生まれないだろう。弥生さんには、いちおう鍵の隠し場所を教えておいてあるんだから、こういうときにこそそれを使ってもらわなくては困るのだ。

「弥生さんは自分の部屋のカギもちゃんと閉めなかったりするからな、人の家のカギをちゃんと閉めろっていうのも無理な話かもしれないけど」

「弥生様には、私からそれとなくお話しさせていただきますので、今はいいことにしましょう。それよりもパーティのための準備を進めなくては、始まりの時間になってしまいます」

「ああ、分かってるって。さて、料理料理っと。いろいろ買ってきたし、いっぱいいくるぞ」

「未来は庄司のおにちゃんのお手伝いをするです！ よろしくおねがいします！」

「はい、こちらこそ、よろしく願います、未来様。いっしょにきれいにテーブルのセッティングをしていきましょう」

「はい、わかったです！」

「とりあえず、俺はもうちょっと軽い服に着替えるか。時間はまだけっこうあるし、思ったよりも余裕あったな……」

がちやり、と自分の部屋の扉を開き、一步入って軽く伸びをした。これから六人前の料理をつくらなくてはならないのだ、いつも以上に気を引き締めてキッチンに立たなくては。

こうやって大人数で食べる料理をつくるときは、いつもとはまた少し勝手が違うからいろいろと気をつけなくてはいけないのだ。

「ゆき、おかえり！」

「おかえりなさい、三木くん！」

しかし気合を入れようと自分の方を軽く張ろうとした瞬間、横合いから不意打ち気味に、思い切り手加減なく突き飛ばされた。違うところに意識が行っていたため、身構えも心構えも出来ていなかった俺は、案外腰の入ったその一撃に、足をもつれさせ軽く体をよろめかせながらベッドに思い切り倒れ込んだ。

倒れ込んだ先がベッドだったので特に痛いということはないのだが、しかし、まったく気構えしていなかったところに一撃を加えられたので、その物理的な衝撃以上に精神的な衝撃を受け、いったい何が起こったのか、ということを理解するのに、俺はたっぷり30秒の時間を要した。その間、うれしそうに、年甲斐もなくぴよんぴよんと飛び跳ねて喜んでいる大の大人二人の姿をただ無為に眺めていたのだった。

「ドッキリ、大・成・功〜！」

「やったわね！ やよちゃん！」

その年甲斐もない大人二人たちとは弥生さんと都さんであり、そのテンションは異様に高く、飛び跳ねてイエーイと何度もハイタッチをしていたり、ガチガチと握った拳骨をぶつけあっていたりした。無防備に伸びをしていた俺に見事な不意打ちをかますという武士道に背く蛮行を決行した二人を振り返ると、なんかもう、そこにはノリと勢いしかない感じだった。こういうときはあれだ、間違いない酒だ。こういうどうしようもない雰囲気になるのは、酒を飲んでい

るからに違いないのである。

「弥生さん！ いるなら返事してください！ いないかと思ったじゃないですか！」

精神的なショックから立ち直り切っていないながらもなんとかベッドから起き上がると、俺は弥生さんに言わなくてはならないことの

一つ目を口にするのだった。いろいろ言わなくちゃいけないことはあるが、しかしまず第一歩はここからである。

「隠れてたんだよ！」

「俺の部屋に隠れないでくださいよ！　っていうか、家に入るのはいいですけど、部屋に入るのはやめてくださいってば！」

「なんで？」

「なんでって…、は…、恥ずかしい、じゃないですか…。」

「恥ずかしいの？」

「は、恥ずかしいですよ……。」

自室に勝手に入られるなんて、普通に考えて恥ずかしいことだろう。弥生さんには羞恥心という概念が欠如している感があるから分らないかもしれないが、俺にだって見られたくないものとかいろいろあるわけで、そういうものを見られたら恥ずかしいに決まっているのだ。

もちろん、そう簡単に見つかるようなところに隠してはいないし、酔っ払い程度に見つかるはずはないとすら思っているが、しかしそれでも、やはりプライベート空間に侵入されるということは恥ずかしいのである。弥生さんは俺が部屋に入ることに對して何も気にしていないようだが、だからといって俺もそれと同様、というわけではない。

「…、ねえねえ、都ちん？　あたし、行っても、いいかい？」

「あゝ、ちよっと待って、準備しちゃうから。頭の中にきっちりスケッチするから、少しだけ待ってちょうだい」

「えゝ、待ちきれないよゝ、はゝやゝゝ！」

「もう、ちよっとだけなんだから待ってよ。あたしも記憶力いい方だけど、でもさすがに心構えしてからじゃないと焼き付けられないのよ。三木くん、恥ずかしがってあんまりこういうこと、あたしの前じゃやってくれないんだから、やよちゃんがやる気になったこういうときこそチャンスは活かさないと……。」

「まだゝ？　まだゝ？」

「よし、いいわよ。いつてらっしゃい、やよちゃん！」

「よっしゃー！　いっくぞー！」

…、何の話をしているのかいまいちわからないが、しかし俺は料理をつくらなくてはならないわけであり、そんなにいっしょになっていつまでも遊んでいるわけにもいかなのである。弥生さんにも都さんにも、言わなくてはならないことはたくさんあるが、しかしだからといってそれに時間を費やしていいのかといえば、それは断じて否である。大人になれ、俺。

二人が何をするつもりなのかは知らないが、まあ、今日のところは俺の部屋に侵入したことについては多めに見てあげることにして、キッチンに向かうことにしようじゃないか。いや、別に、何か不穏な気配を感じたから逃げるとか、そういうわけじゃないぞ。俺は料理をしないといけないんだ、こんなところで油を売っているわけにはいかないのだ。

「きゃっほーい！！　ゆき、かーわーいーいー！！！」

「ぬあっ！？」

少しは動悸がおさまってきたのでさっさとキッチンに行ってしまったおうとベッドから立ち上がろうとしていた俺に、弥生さんは、ガバツと覆いかぶさるように飛びかかってきた。この場から逃げ出すことに対する理論武装に忙しくて弥生さんの方に意識をあまり割いていなかった俺は、それを避けるための身構えも出来ておらず、はたまた反撃して射ち落とすことも出来ず（弥生さんも、しかしあれでも女性であり、それに手をあげることは俺には出来ない）、状況が流れるままに任せる以外に出来ることはないのである。

そして俺は、上から降ってきた弥生さんによって、腹に座られたうえに手足をがちり押さえこまれ、見事にベッドに身体を縫いつけられたのだった。それは、強引にもがけば逃げ出すことができる程度の弱い拘束でしかなかったが、しかしどんなやり方をしたとしても弥生さんを振り払うことを必要とするわけで、それによってベッドの角に頭をぶつけてしまう可能性もあるのではないか、とかいろ

いろ可能性に関して考えを巡らせてしまうと、それをするのができない。

「いいわよ、やよちゃん！ ナイスアングル！！！」

「ゆき、かゝわゝいゝいゝ！」

「弥生さん！ やめて！ 頬ずりしないで！ っていうか、息が酒クサイ！！」

「おねえさんにお部屋に入られて恥ずかしがる思春期な感じ、かわい〜い〜い〜!」

「思春期じゃなくても恥ずかしいですよ!! 都さん、助けてくださいよ!!」

「やよちゃーん、もうちょつと身体をね、右側に向かって起こしてねー…、そう！ ナイス！ マーベラス！！」

「あれっ!?!? 助けてくれるんじゃないの!?!?」

「ちよつと三木くん黙つててね。これはね、今描いてる作品の中にいつか出てくる可能性があると思われれる構図なのよ。映像として記憶しておいて損はないの。あたしが生きていくために、もしかしたら必要になるかもしれないものなの。だから助けることはできないのよ。あつ、やよちゃん、もつとくちびる寄せて。そう、そうそう、もつと恋する少女の瞳に煌き…、エクセレンツ!!」

「ねえねえ、ゆき、ちゅうしていい？　かわいいからさ、ちゅうしていい？」

[illegible]

「幸久様、自宅だからといってあまり大きな声を出すことは感心しません。紳士たるもの常に冷静沈着であるべきです、たとえば自らがどのような状況にあったとしても、です」

「広太！ マジ！ マジで助けて、ヤバいんだって！！ 俺のくち  
びるが奪われるんだって！！」



「弥生様、女性というものは憤み深く振る舞うべきではないか、と私は思います」

「思想信条は個人の自由だよ。画一的な女性観の押し付けは、女性を狭い檻に閉じ込めることと同じだよ。いろんな男の人がいるのと同じで、いろんな女の人がいるんだよ。もっと視界を広く持たないとダメだよ、ひろ」

「おっしゃる通りでございます、弥生様。申し訳ございません、幸久様、私ではこれ以上の御助力をすることはできそうもありません……」

「諦めるの早いって!! 弥生さんを引きはがすとか、いろいろ出来ることあるって!!」

「ダメだよ、庄司くん。これは大事な資料収集作業なんだから。邪魔しないでね、やよちゃん、右手を三木くんの腰のあたりに回してみよっか。そうそう、で、上半身を密着させて…、いいわよ、その服のシワ、胸の歪み方、そっかあ…、こういうふうになるんだあ……」

「幸久様、申し訳ございません。都様の資料収集に関しては、幸久様に致命的な危機が迫る以外は止めてはならないことになっていますので、お助けすることはできません……」

「誰だ! そのルール決めたの!! 誰が決めたルールだ!!」

「ほかならぬ、私自身です。都様の窮状は痛いほど存じておりますので、それを出来る限りお助けしたい、という私の個人的なわがまにございます。なんなりと処罰をお願いいたします」

「そう言ったら俺が何もしないの知ってて言ってるだろ!! 確信犯なんだろ!!」

「ああ、三木のおにいちちゃんが二階のおねえちゃんと仲良くしてるです! 未来もごいっしょさせてください!!」

「未来ちゃん!? 来ちゃダメだよ!! こっちには危ないおねえさんがいるよ!! 乙女の純潔を散らされるよ!!」

「よく分からないので、未来も仲間にいれてください!!」

ダメだ！ 俺は料理を！ 料理をしないといけないのに！！  
テイの料理を、つくらないといけないのに！！ パー

## K i s s i s . . .

俺が弥生さんに抑え込まれてから数分して、都さんの「よしっ！」の一言と同時に広太が動き、俺の身に降りかかったその拘束は解消されたのだった。俺に覆いかぶさっていた弥生さんは広太によって平和的に除去され、弥生さんに少し遅れて参戦した未来ちゃんはいまだキャツキヤと俺の胴に腕を巻き付けていて楽しそうにしているのだが、とりあえず俺はその危険な拘束からは解放されたのだった。パーティ用の料理をつくる前にエラいくたびれてしまったが、しかし拘束からは解放されたのだから、ということでは俺はベッドから起き上がり、ひとまず大きく息を吐いた。

「助かった……」

「幸久様、御助けに入るのが遅くなってしまい、申し訳ございませんでした」

「悪いと思ったなら、さっさと助けてくれよ…、マジで……」

「もちろん、本当に幸久様の貞操が危うくなったならば私も速やかに間に入るつもりだったのですが、しかし幸久様は見事な体捌きをなさっておいででしたので、おそらくはまだ問題ないと、勝手ながら判断させていただきました。それならば都様に資料収集をさせてさしあげるのがよろしいと思いましたので、手出しは控えさせていただきますいたのです」

「実際なんとなかったからよかったけど、ほんとに俺のくちびるが奪われてたらどうするつもりだったんだ」

「そのときは、責任を取りまして私のくちびるで上書きをさせていただけとかと考えておりました」

「その責任の取り方どうなの！？　ほんとにそれ、責任取れてるの！？」

「しかし、それ以外に責任の取り方も思いつきませんので、おそろくそうさせてもらったのではないかと思います」

「それは、俺が許さないよ！　っていうか、別に広太にキスされてもうれしくないよ！！」

「じゃあ、そうだったら未来が三木のおにいちちゃんとちゅうするです」

「…、どこからそこにたどり着いたのか前線分かんなかったけど、そういう特典付きなら弥生さんとキスするのも悪くない…、か…」

「三木くん、キスは神聖なものよ、そう易々とするべきではないわ。しかし、小さな子と大人の男のキスシーンは、資料映像として少しだけほしいわ」

「っていうかさあ、おねえさんのこと、さすがに蔑ろにしすぎじゃないの？　確かにあたし、ゆきにキスしようとしたけどさあ、別に遊びってわけじゃないし、もっとありがたがってもいいんじゃないの？」

「やちゃんには感謝してるわ。女の子が男の子を押し倒してキスを迫っている構図は、リアルな映像としてほしかったからね。この経験は、いつかあたしの作品に反映されるから、安心してね」

「そういう話じゃないし。おねえさん、ぴちぴちの女子大生なのに、なんでこんな扱いされないといけないのよ。キスされてうれしくないわけじゃないじゃん」

「そういうことは、もう少し女子大生らしい姿を俺に見せてから言ってください。俺の中で弥生さんはぴちぴちの女子大生じゃなくて、隣の飲んだくれのぴちぴちですよ」

「ぴちぴちってことだけは認めてくれたってことは、別におねえさんにも脈がないってわけじゃないよね？」

「脈がなかったら死んでるじゃないですか。弥生さんの心臓は動いてないんですか？」

「ん？　あれ？　生きてるよ」

「じゃあ脈あるじゃないですか。よかったですね。っていうか、今気づきましたけど、都さん、お酒飲んでますね。顔に出ないから分

かりませんでしたけど、かなり飲んでますね？」

「お酒？ 飲んでないわよ。酒は飲んでも吞まれるなっていうでしょ？ 吞まれてないってことは飲んでないのよ。吞まれるってことは溺れるってことでしょ？ ほら、あたしピンピンしてるじゃない」「言ってることが完全に支離滅裂なんですけど…、そうやって思考がまとまってない時点で吞まれてるじゃないですか……」

「吞まれてないってば。や赤ちゃん、もう一杯ね、さっきの、アレ」「ほいほい…、あい」

「つとつと…、ありがと。んく…、んく…、っぱあ……！！ 美味しい水ね…、どこのメーカーかしら？」

「ん？ 新潟の蔵造りだよ」

「新潟の蔵造山？ 聞いたことないけど、やるじゃない、新潟！」

「ちよちよちよっ！！ それ一升瓶ですよ！ どっからどう見てもまごうことなく酒じゃないですか！ しかも弥生さんが飲んでるやつですから強いですよ！！」

「えっ？ 別に強くなってるじゃないよ。食前酒だよ」

「水に強いも弱いもないわよ、三木くん。しっかりしてよね、もう」

「なんで俺が呆れられてるみたいな感じになってるんですか！！ どう見ても明らかに酒って書いてあるじゃないですか！！ ちゃんと目を開いて見てください！！」

「これはね、酒と書いて『ソウル』と読むんだよ、ゆき、知らないのかい」

「ソウルっていうのね、この水。どおりで胸が熱くなると思ったわ」「それは酒のせいですよ。都さん、落ち着いてそのコップをこっちに渡してください。それで水を一杯飲みましょう。そうしないとアルコールが残っちゃっていつも大変じゃないですか。ほら、悪いことは言いません、あとで大変な思いをするのは都さんなんですから」「水だったら、今も飲んでるわよ？」

「思い出してください、水はそんな味じゃないでしょう？ いや、俺は飲まないから味なんて知らないんですけど、でも、きっと全然

違う味でしょう？」

「ゆきってばあゝ、けちけちしないの！　ちよつとくらい飲んでるくらいでちょうどいいの、大人は。こうしたほうがね、きつというろいいんだってば」

「いいわけないじゃないですかに言ってるんですかバカなんですか？　酒なんて、この世からなくなっていいいものの筆頭ですよ」

「お酒は！　命の！　ガソリンだよ！！　なくなったら、おねえさんが動けなくなっちゃうじゃない！！」

「ダメだこの大人どうしようもない……。行こう、未来ちゃん、ここにいたらダメ人間のダメさに中てられるよ……」

「はいです、おにいちゃん。おかあさんも、いつもお酒はよくないものって言ってるです」

「ほんとそうだよね、未来ちゃん。さすが歌子さんはいいこというなあ……」

「うちちゃんも酒豪だけどね。あれはザルを超えてるよ。ワクだよ、ワク。あんな人見たことない、あたしは。水と同じ感覚でお酒飲んでるんだもん、何かが間違ってるよ」

「ほんとに水の代わりに飲んでる人が、そういうこと言わないでください。きつと歌子さんは二人と違って飲んでも面倒なことにはならないんだろし、いっしょにしたら失礼ですよ。っていうか、もう弥生さんは水の代わりに酒を飲むくらいなら、酒の代わりに水飲んでくださいよ。そしたら俺が面倒じゃないですからね」

「失礼な。おねえさんはお酒を尊重して飲んでるよ。お酒よりも大切な飲食物は、この世にないと思ってるくらいだよ。酒造り名人とか、神だと思ってるよ」

「マジ顔でなに言ってるんですか……。広太、この二人は隣の部屋に封じ込めてきてくれ。飯ができたらケイタイ鳴らすから、それまで相手してやってくれ。まあ、勝手に泥になるまで飲んでるだろうから、飲み過ぎないとうに見張ってるだけでいいからな」

「はっ、了解いたしました。それでは弥生様、都様、参りましょう」

か」

「ん？ どこに？」

「幸久様がお料理をつくり終わるまで、弥生様のお部屋で私がお手します。幸久様から連絡があるまで、そちらで待機していきましょう。私たちが邪魔してしまつては、幸久様も心行くまでお料理に打ち込むことが出来ませんので」

「やちゃんのお部屋？ それならあたしの部屋に行きましょう。なんか、こう、今、Gペンの神があたしの腕に降りてきてる気がするから、いつもよりいい原稿が描ける気がするのよ。だからあたしの作業部屋に行きましょう」

「都様、たまにはお仕事を忘れてごゆっくりなさるのがよろしいかと存じます。常日頃あれだけお仕事に打ち込んでらっしゃるのですから、たまにはガス抜きをしなくては、いくら好きなことを仕事になさっているとはいえ、パンクしてしまいます」

「広太、あとは頼んだぞ。未来ちゃん、行こっか」

「はいです。未来は、庄司のおにちゃんのいなくなっちゃう分までテーブルのかざりつけをがんばらないとですから」

「俺もそろそろ料理しないとだし、さっさと逃げよう。じゃあ弥生さん、都さん、手伝ってくれないなら、せめて邪魔しないでくださいね」

「ゆきつてば、二人っきりでみくちゃんになにするつもりなの、えっちい。おねえさんとはちゆうしてくれなかったのに、みくちゃんとはちゆうするつもりなんでしょ」

「ダメよ、三木くん。あなたロリコンなんだから、キスだけで事が収まるわけがないわ。キスしちゃったら、若さにまかせて紙面ではお見せできないようなことになっちゃうに決まってるんだから。ほら、それに、あつらえたようにベッドもあるし、二人っきりだし、絶好のシチュエーションじゃない。ダメよ、キスなんてしちゃ。絶対にしちゃダメだからね」

「そこまで言われると、むしろしるって言われてる気がしてくるん

で、そろそろやめてください。しませんよ、キスなんて。未来ちゃんの大事なくちびるを奪うわけにはいかないじゃないですか。キスは大事なもののなんです。将来有望な少女のくちびるを奪うなんて、許されざる大罪ですよ」

「それじゃあさ、もし、みくちゃんがそのくちびるを捧げてきたら、ゆきはどうするんだい？ 将来有望な乙女が目と鼻の先で、つま先立ちで背伸びして、静かに瞳を閉じていたら、どうするんだい、ゆきは」

「…、据え膳食わぬは男の恥、などと人は言いますが、しかし俺はそんな無責任なこととはしません。早計なことはよすんだ、と未来ちゃんを見事説得してみせます」

「それでも、もしも本気の本気で、説得をきいてくれないときは？」  
「そのときは、相手の覚悟と思いをくみ取り、自分の心の中の気持ちをよく思い起こして、俺自身責任を取る覚悟ができるんだったら、その思いを受け入れます」

「ねえねえ、ゆき、おねえさんも、本気の本気だよ！」

「ごめんなさい、俺、酔っ払いはちょっと」

「まだ、今日はあんまり酔ってないもん！」

「今日のこの瞬間だけの話をしてるんじゃないですよ！ 恒常的な状態についての話をしてるんです！」

「おねえさんだって乙女なのに！ 少女の心を宿しているのに！」

「お…とめ……？」

「あーん！ ちょっと本気っぽい顔で首かしげられたー！！ ひろく、ゆきがいじわるするよー！！」

「弥生様、ご安心ください、弥生様は非常に魅力的にあらせられます。幸久様は照れ屋でいらっしゃるので、正面からそれを言うのが恥ずかしいに違いありません」

「そうよ、やよちゃん、あなたはスタイルいいし顔もいいし、諸々ばっちりなんだから、そんなことで凹むことないわ。それに比べてあたしは……」



「都様は、美しいお心をお持ちです。以前作品を拝見しましたが、心洗われるようなとても素晴らしい心地がいたしました。心がきれいな方は、どなたも素敵だと私は思いますよ」

「ありがとう、やさしいね、庄司くんは」

「いえ、あくまでも本当の事でしかありませんので。私ただありのまま、思ったままのことを言っているだけでしかありません」

「よし、行こう！ 意地悪なゆきはほつといて、うちに行こうよ！」  
「ほんとに、そうしてくださいよ。食事が用意できたら呼びますから、それまではおとなしくしてください」

「それでは幸久様、少々こちらから外させていただきます。何かご用がお有りのときはケイタイを鳴らしてくださいさればすぐに飛んでまいりますので」

「分かってるって、もしそのときはそうするよ。ほら三人とも、さつさと隣に行っててくださいよ」

「こんなに追い出そうとするなんて、怪しいわね。やっぱりあたしたちがいなくなったたらすぐに未来ちゃんを、そのままベッドに押し倒してやさしくキスをして、一枚一枚服を脱がせて身体中をゆつくりと愛撫して、少女の未発達な肢体に快樂の種を植え付けて少しずつその虜にしていって、最終的にはアレをナニしてにやんにやるつもりなんでしょ？ ダメよ、はしたないわ」

「そんな確信的に言われても…、しませんよ、そんなこと……」  
「しないの？」

「しませんってば！ もう、さつさと出てってくださいよ！ …、つたく…、なんなんだ、あの大人たちは……」

「三木のおにちゃん、一つ聞いてもいいですか？」

「ん？ なぁに？ 俺に応えられることだったら、何でも聞いてくれていいけど」

「未来のこと、好きです？」

「うん、好きだよ。未来ちゃんのこととは、すごい大事に思ってる」  
「そう、ですか。えへ、それだけです」

「心配しなくてもだいじよぶだよ。俺は未来ちゃんのことを嫌いだからさっきみたいに言ったんじゃないからね。むしろ未来ちゃんが大好きだから、わざわざお節介であんなことを言ったんだ」

「おにいちゃんが未来のことを大好きでいてくれてるって分かって、未来、とってもうれしいです！ それじゃあ、未来とちゅうしてくれませんか？」

「キスは、もうちょっと大人になってからね。大人になって、まだ俺のことを大事に思っていてくれて、キスしてもいいと思うなら、そう言ってね。俺もそのときは、真剣に考えるからさ」

「はい、分かりました。教えてくれてありがとうございます、三木のおにいちゃん」

「どういたしまして、未来ちゃん。それじゃあ、三人もいなくなっただことだし、さっきの続きをしてもらおっかな。テーブル周りには、みんな未来ちゃんにお願いしちゃっていい？」

「はい、任せてください。あたし、一生けんめいがんばります！」

「ん、いい返事だ。これなら任せちゃっても平気だね」

「はいです！」

それから俺たちは、まだ始まってすらいなかったパーティの仕度をはじめることにしたのだった。俺は料理を、未来ちゃんはテーブル周りのセッティングを、それぞれが思い思いにこなすことになる。なに、少し時間を見失ったとはいえ、まだ十分に時間は残っているのだ。広太の抜けてしまった二人であっても、きっときっちりやっつのけることができることだろう。

## パーティの、はじまり（1）

「っし、これで、だいじょぶだろ。完成だ」

一番最後に、大きな椀に盛った筑前煮の上に軽く湯がいたさやえんどうを飾って、パーティ用の六人前の料理たちは無事に完成したのだった。

歌子さんがつくってきってくれるのが肉じゃがということで、それとあわせるように全体を和食中心にまとめてしまったので、パーティというにはやや色彩や派手さを欠いたものになってしまっているかもしれないが、そもそもこのところ今回の会食の目的は、ともに飯を食っているように見えない弥生さんと都さんにちゃんとしたバランスのご飯を食べさせてあげるところにあるので、あるいはこれで正解なのかもしれないが。やはり和食は野菜を多く使えるから、栄養とか味とか、食事のバランスとしては抜群だと思う。

「三木のおにいちゃん、ごはんできましたか？」

「うん、出来たよ。未来ちゃんもテーブル、ちゃんとセットできた？」

「はいです。ちゃんとできました！」

「おお、ほんとだ。キレイに出来てる。すごいね」

「えへ、それほどでも、ないです！」

使った食器とか調理器具とかを手早く洗いながらリビングを覗き込んでみると、ダイニングテーブルはいつでも食事が始められるように仕度が整えられただけでなく、どこから持ってきたのか、その中央にはかわいらしい一輪刺しが飾られていた。刺さっているのは、よく見たら歌子さんの内職のバラの造花らしい。おそらくきつと、俺が料理をして目を離しているすきに自宅に戻り、それを取ってきてくれたのだろう。

うちには、基本的にそういう、華やかなものを飾ったりしようという感性を持った人間がいないので、花を飾ったりはしないのだ。だ

からもう、そこにそれが飾られているというだけで軽く違和感を覚えてしまうのだが、だがしかし、意外とそういうのも悪くないかもしれない、と思う俺もいるのだった。

決して自分でやろうとは思わないが、しかし飾られているそれにまで無関心を貫くほど俺の感性は死んでいないわけ。

「花を飾ってくれたんだね、ありがと。花が一輪置かれてるだけでも、けっこう印象は変わるもんだな。なんか、うちのテーブルじゃないみたいだ」

「このお花は、おかあさんのお花をこっそり借りてきました。内職のお仕事でつくったものですから、勝手に使ったら怒られちゃうかもしれませんけど、でもこうした方がきれいです。おにちゃんも、そう思うですよ？　ね？」

「そう、だね。うん、やっぱり花があると雰囲気華やぐよ。これを見たら、きつと歌子さんも未来ちゃんのこと怒ったりしないよ」未来ちゃんの軽く上向きの視線は、まるで俺に語りかけるようだった。その訴えは切々と俺の心に届き、響いてくる。

分かる、分かるよ。未来ちゃんはせっかく任された仕事を何とか立派にやり遂げようとしてくれたんだよね。後藤家の主財源である歌子さんの内職の造花――勝手に持ってきてしまったら間違いなく歌子さんに怒られるであろうそれを、こっそり取ってきてくれるほどにがんばってくれたんだ。

勝手にこっそり持ってきたのはあんまりよくないかもしれないけど、でも、それは未来ちゃんが持っている、自分に任された仕事に対する意気込みというか、それだけやる気を持って俺のお願いに応えてくれた、ということなのだ。それならば俺は、未来ちゃんにその仕事を頼んだ張本人として、なんとしてもそのケツを持ってやらなくてはならないのだ。

大丈夫だ、俺は最初から未来ちゃんがどんなことをしてもその責任を全てかぶさるつもりだったんだ。そもそもテーブルセッティングがまったくもってうまくいかず、（未来ちゃんにしてみれば失礼な

ことかもしれないが）パーティの開催時間の延長をすることになったときどう責任を取るか、ということまでいちおうは考えていたのだ。造花一本分くらいの責任、軽く取ってみせるというものだ。

「だいじょぶだよ、安心して。もし怒られるようなことがあったら、俺がどうしてもってお願いしたことにしていいから。未来ちゃんは良かれと思ってやってくれたんだから、未来ちゃんが怒られることは絶対にないから」

「ほんと、ですか？ 未来、おかあさんに怒られないですか？」

「ほんとだよ、怒られるときは、俺が代わりに怒られてあげるから。そうになったらまたお花つくる内職、いっしょにやろうね」

「はいです。未来、がんばってお花つくるです！」

「よし、じゃあ、未来ちゃんは歌子さん呼んできてくれるかな？ きつともうつくり終わって時間が来るまで待機してる頃だろうか」

「わかったです。もうパーティの始まるお時間になっちゃうですからね！ それじゃあおにいちちゃん、未来、おかあさん呼びに行ってきます！」

「はーい、行ってらっしゃーい」

そして未来ちゃんは、どこで覚えたのかビツ、と俺に向かって大きく敬礼をすると、タッタッタと足音を響かせながら玄関に向かい、置いてあったサンダルをつっかけてパタパタと部屋を出ていったのだった。なんというか、引越してきたばかりのころは（後藤さん家はうちよりも少し遅れて入居したので、このアパートでは、ほんの少しでしかないがうちの方が先輩なのである）、けっこう人見知りしている感じだったのだが、今やこんなに懐いてくれて、うれしい限りである。

やはり、小さい子に懐かれるというのは、同年代と仲良くなるのとは違う喜び、みたいのがあるよなあ……。いや、別にロリコンとかじゃない。ただ、こう、おにいちちゃんとしてだな、妹が増えたみたいでうれしいというか、なんというか、アレだ。

「さて、俺も弥生さんたちを呼びに行くか。っていうか、広太はあんな人たちの中にいて平気なんだろうか……。まさか潰されてたり、しないよな……？」

実際問題、俺が料理を始めてから、つまり広太が弥生さんと都さんを連れて隣に部屋に行ってしまっただけで一時間以上が経過しているわけだし、ある程度以上ダメになってしまっていることは覚悟しているのだが。…いや、ダメになっている広太っていうのも、ちょっと見てみたいかもしれない。広太はいつも完璧で、俺の前でダメになってしまうことなんて今まで一度としてなかったからな。

広太がダメになってしまいうこと、つまり俺の前で無様を晒すことはあってはならないと、おじさんとおばさんによってきつく、それこそほんの小さなときから言いつけられているとはいえ、しかし酒によって潰されてしまうのは不可抗力というものだろう。そうだな、俺の前では寝姿すら晒さない広太が、ダメになってしまっている様というのは、素直に見てみたいと思う。

「広太、寝てたりするのか……。それとも酔いつぶれてぐったりしてたりして……。おお……。見るの久しぶりすぎるだろ、広太が俺の前で横になってる姿とか」

広太は俺より早く寝ないし、俺より遅く起きないし、風邪もひかないし、だからだもろごろもしないしで、俺の前では決して横になつたりしないのだ。それこそ、俺の前で横になつてしまうことが法によって禁じられているとでも言わんとするかのように、だ。

久々に広太が横になっている姿を見れるとなると、なんだかやけにドキドキしてきたんだが……。別に広太が横になっているからってドキドキすることはないのかもしれないけど、でも久しぶりにそんなものを見ることができると思ったら、なんだかツチノコを見せてやるとか言われたみたいにな、変に楽しくなってきた。しまった。

「よし、いっちょ見に行ってみるか。ついでに弥生さんたちも呼んでこよう」

洗っていた雪平鍋を洗いかごに伏せて置き、俺はタオルで手を拭っ

てから腰に巻くタイプのシックなデザインのエプロン（おとしの誕生日プレゼントとして広太が手縫いで作ってくれた。店で売ってするような出来栄え）を外し、俺自身の戦場をあとにしたのだった。六人分の食事をつくるという一仕事をやり遂げた今、俺はそこはかとないうれしさと、何かよく分からない開放感のようなものに全身を包まれていた。そして俺はいい気分ですごく伸びをすると、未来ちゃんが走り去っていたのと同じ道のりを、ゆっくりと歩きながら進むのだった。

「あつ、サンダルは未来ちゃんがつかけていっちゃったのか。もう一足つかけて出すのもめんどいし、まあ、別にくつ履いてけばいいか」

フンフンと鼻歌なんて歌いながら、俺は軽い足取りで隣の部屋へと向かう。隣ではおそろく、なんだかよく分からないうちに弥生さんに酒を飲まされてぐったりしている広太と、それから楽しそうにギャギャアと酒盛りをしている弥生さんと都さんの姿がある、という光景はほぼ確かな確信として俺の心の中に浮かんでいた。

おじさんが言っていたことによれば、広太は俺よりも少しは飲めるということらしいのだが、しかしだからといって弥生さんに付き合うことができるほどではないだろう。倒れている姿を楽しむにしても、広太には悪いかもしれないのだが、しかしそれは、こいつが可愛げもなく完璧でいつづけるからであって、ある意味では自業自得のようなものだ。少しくらいは俺の前で弱っているところを見せていればこんな風に俺が不謹慎なワクワクを感じることもないのだから。

…いや、それは、さすがに少し暴論が過ぎるか。広太は誠実に俺に仕えてくれているだけなんだし、それを不用意に貶めるようなことは言うべきではないな。

「弥生さん、迎えに来ましたよ」

ピンポン、とベルを鳴らすも反応なく、ドンドンッ！ とドアを叩いても反応はない。仕方がないのでいつものようにドアノブをひ

ねると、案の定ガチャリとドアが開いた。カギをかけると何度も何度も言っているというのに、まったく学習する気がないに違いない。あるいは、料理ができ次第俺が迎えに来ると分かっている広太が、気をきかせてわざわざ開けておいたのかもしれない。そんな気は使わなくていいから、なんとか弥生さんに扉のカギをかけることの大切さを説き、出掛けるときも帰ってきたときもカギはかけます、と誓わせてくれた方が、俺としてはうれしいのだが。

いや、広太がいかに完璧な男であるとはいえ、しかしどうしても出来ないこともあるよな。それとも、そんなことを解く間もなく潰されてしまったのだろうか？ もしそうだとすると、さすがに少しだけ心配になってくるのだが……。だってそうだろう、少しずつ飲んで潰されると、一気に大量に飲んで潰されるのでは、そこにある問題の意味が根本的に異なってくるではないか。

「きゅ…、救急車呼ぶ場面とかじゃ…、ないよな…？ 別に呼ばなくても、いいよな…？」

俺は扉を開いてから、弥生さくん？ と声をかけながら部屋の中に入っていく。相変わらず掃除が行き届いていないというか、酒くさいというか、換気があまりされていないから空気が淀んでいるというか、絶望的な住環境である。きれいに使っている俺たちの生活空間から壁一枚隔てただけの隣がこんなありさまというのは、にわかには信じられないが、しかし真実である。

そして、なにを言っているのか分からないが奥から聞こえてくる大きな声の中に広太の声は聞こえてこない。もしかしたら本当に潰されていいるのだろうか？ おお…、本当に広太が横になってる姿がみれるのか？ っていうか、俺は本当にそんなことを悠長に楽しみにしていいのだろうか。

「今度また掃除しないとダメだな…、でも掃除するとそこかしこからエロ本とか出てきてやなんだよなあ……。弥生さんに、自分で掃除するようにちゃんとさせないとダメだな、やっぱり」

しかしキッチンだけは、俺がしばしば使うのでそれなりにきれいに



整頓されている。食材のあまり入っていない冷蔵庫から取り出された酒の缶と瓶（空である）がきちんとキッチンに片付けられているあたり、広太がこの場にいること、あるいはいたことを明らかにしている。果たして広太は無事でいるのだろうか。そして、そんなことを楽しんでいる場合なのだろうか。

「広太？」

「はい、どうなさいましたか、幸久様？」

リビングに入って、真っ先に俺に気付いたのは、上座に座って俺のことが一番よく見える位置にいる弥生さんではなく下座に座っていて一番見えないはずの広太だった。酒を飲まされても職務からブレないあたり、立派な奴だと思う。

「あれ？ 弥生さんに酒飲まされてないの？」

「いえ、少しではありますが、弥生様がどうしてもとお勧めしてくださるので、お酒をいただきました。ですが幸久様のお役に立つことは出来るのではないか、と思っております。何らか問題がありましたら、気やすく言いつけてくださいませ」

「いや、飯ができたから呼びに来ただけど…、っていうか、お前、平気なのか……？」

「？ 何がでしょうか？」

「いや、だから、酒。飲まされたんだろ？」

「はい、ほんの少しですが。ですが問題はありません」

「ゆき、ひろはね、めっちゃ酒に強いんだよ？ 知らなかったの？」 飲んで全然酔わないんだよ」

「違うわ、やよちゃん。庄司くんは酔わないんじゃないの。酔ってるんだけど、でもブレないのよ。酔っていてもいつもどおりに完璧に仕事をこなすなんて、素晴らしいことじゃない」

「都ちん、グラス持つ手が震えてるよ。そろそろ限界なんじゃないの？」

「まだまだ平気よ。あたしも強いんだから。まあ、あたしはこんなに酔ってない風に見えても、いつも完璧にスパッと記憶がなくなっ

ちゃうんだけどね。お酒を飲んだっている記憶しか残らないんだから、困るわよね」

「ゆきは、弱いんだよね。かわいいね」

「そうね、お酒弱い人には、どうしてもお酒を飲ませたくなってるわよね」

「やめてください、アルハラですよ」

「ゆき、難しい言葉を知ってるね」

「俺は絶対飲みませんから。とりあえず、飯できたんで、うちに来てください。広太、問題ないんだったら二人をうちの部屋まで連れてきてくれ」

「はっ、承知しました。弥生様、都様、参りましょう」

「うーい」

「ええ、分かったわ」

そうして、俺は広太以下三名を引き連れて隣の我が家へとんぼ返りするのだった。しかし、広太が酒に強いとはおじさんに聞いていたが、まさかこんなに強かったなんて……。

ちっ…、酒も広太の弱点にはならなかったってことか……。まったく、広太の弱点はいいどこなんだ……。

## パーティの、はじまり（2）

「広太、お前、酒飲んでるのか？」

四人連れで部屋に戻ってから、弥生さんと都さんは宴会の続きをすぐにダイニングテーブルで始めてしまったが、俺は広太を連れてキッチンに離脱し、事の顛末について問い詰めていた。

「幸久様、問題ありません。言うほどの量を飲んでいるわけでもありませんし、幸久様がご不便被るようなことはないように、いつでもどおりになんでも言いつけてくださってかまいません。あくまでもお付き合ひ程度にいただいただけに過ぎませんので」

「いや、そういうことを言ってるんじゃないくて、大丈夫かって聞いているんだよ。酒飲んだら気分悪くなったりするんだろ？俺は一口で意識が飛ぶからよく分からないけど、今はちよつと気分が良くても、でもあとできつくなるもんなだよな？それなら少し休んでの方がいいんじゃないのか？ほら、弥生さんたちの相手してろって言ったのは俺なんだしさ、俺のことは気にしないで休んでろって」「いえ、そういうわけにも参りません。たとえお酒をいただいたとしても、だからといってそれを理由に幸久様にご不便をかけることは許されないので。私のことこそお気になさらず、何なりと言いつけてくださいませ。私は少しくらいのアルコール摂取で動作に問題が出るような造りにはなっていないので」

「造りになっているって…、そういう言い方、止めろって前から言ってるだろ。お前は物じゃないんだから、その物言いはおかしいんだぞ。自分のことは大事にしろって、ずっと言ってることだ。俺の言うことなんでも聞くって言うんなら、そういうこともちゃんと聞けよ。お前は俺の専属執事ってことになってるかもしれないけど、それ以前に俺の弟で、友だちで、家族なんだからな」

「はっ、申し訳ございません、幸久様。ですが、しかし、幸久様が私を心安く思ってくださいるのは光栄ではあるのですが、しかしそれ

では私は執事として不適格になってしまいます。私を友と想ってくださるその御心はありがたく頂戴しますが、しかしそれと同時に執事としても見てくださらなければ、けじめというものがつきません。執事は、あくまでも家具なのですから」

「またそういうことを……！！　そういう発想そのものが俺はイヤだって言ってるんだよ。もう……、言っても言っても分からないやつだな、お前は……」

「申し訳ございません、幸久様。しかし私はあくまでも執事であり、幸久様は主なのです。その一線は固持されるべきであり、失礼を承知で申し上げますが、幸久様には主としての自覚がやや欠けているように思います。もちろん、それはメイド長の言を借りたのですが、的を射たものであると私には思われます。幸久様は、三木のご当主様なのです。それを鑑みればこそ、メイド長もそのようなことを申し上げているのではないでしょうか」

「そ、そんなこと言われてもな……、それよりも、もう庄司の人が三木に仕えるのを止めるっていうのはどうだ？　そうした方が俺は主の自覚とかいろいろ気にしなくてよくなるし、庄司のみんなも自由に三木の名前に縛られないで自由に生きていけるし、建設的っていうか、あれだ、八方丸く収まるんじゃないのか？」

「僭越ながら、庄司は古くの盟約により三木のお家にお仕えさせていただいております。それゆえに、庄司から三木のお家を捨てることはありえぬことです。また、我々もまた、幸久様に生涯仕えることを誓いを立てた故、命尽き果てるまでお傍にお仕えさせていただきます。しかしあるいは、幸久様が三木家当主として庄司との盟約を放棄なさるといふのでしたら、我々にはそれを停める術はございません。その新たな命、伏して拝するのみとさせていただきます」

「……、嘘だな。伏して拝するとか言ってるけど、俺がけつきよくはそんなことしないって分かってるから言ってるだけだし、もし言っただとしてもなんだかんだいろいろ理由をつけて俺に仕え続けるに決まってる。ちくしょう……、三木とか庄司とか、よくわかんねえ……」

なにが庄司の人を、そんなに突き動かしてるんだよ……」

「すべて、幸久様の仁の御心故でございます。我々は、その御心につけこんでご厄介をおかけしているだけなのですから、幸久様はなにも御心を痛める必要はないのです。堂々と、三木家のご当主として、悠々と生きておられれば、それだけでいいのです」

「はっ！ なにが仁の心だ。何も決断できないヘタレ心の間違いだろ。っていうか、厄介かけてるのは俺の方だっつうの……。ああ、もう、止め止め、ダメだ、意味ない。この議論、絶対何も生まない不毛の大地だぜ。今までにこんな感じの話を何度したかわかんねえけど、一度たりともまともな解決策出たことないし、今回も絶対途中で俺が投げる、っていうか今投げたし」

「それでは、パーティを始めることにしましょうか。つい先ほど未様と歌子さまもいらっしゃったようですし、時間としても頃合いかと思われます」

「そう、だな。よし、そうと決まればさっさと始めるか。広太、この辺にある料理、一回あっため直したらテーブルに運んでくれ。フライパンでやれるやつは俺がやるから、レンジでやるやつはお前がやってくれ」

「はっ、了解しました、幸久様。それでは私は、まずは皆様を席にご案内してまいります」

「おお、そうしてくれ、頼んだ」

「はい、仰せのままに」

「あゝ！ 三木のおにちゃん、お台所にいたんですね！ おねえちゃんたちがごはんはまだ、って言うてるですよ！」

そしてそのとき、話に熱中していて気づいていなかったのだが、いつの間にか部屋に戻ってきていたらしい未来ちゃんが、ぱたぱたと足音を響かせながらキッチンへと駆けこんできた。歌子さん呼びに行くという役を見事果たしての帰還だろうことは、その表情を見ればなんとなく察することができた。

「ああ、未来ちゃん、おかえり。戻ってたんだね」

「はいです。さっきもどってきたです。おかあさんもちゃんとつれてきたですよ」

「こんにちは、三木さん、お邪魔しています。一つ伺いたいのですが、持ってきた肉じゃがは、どちらに置いたらいいでしょうか？出来たばかりですので、温め直す必要はないのですが」

「いらっしやいませ、歌子さん。肉じゃがはダイニングテーブルに置いてもらってもいいですか？　すぐに他の料理もそっちに運んじやいますんで」

「歌子様、本日は幸久様が主賓として皆様をおもてなしいたしますので、どうぞお席についてごゆっくりなさってくださいませ。さあ、ご案内します、こちらへ」

「それでは、今日のところは御言葉に甘えさせていただきましよう。未来、行きますよ」

「はいです、おかあさん」

「…、さて、軽くあっため直すか」

すでに洗って拭いてを済ませ、所定の位置に吊るしてあったフライパンを手にとって、俺はフライパンで温め直せるものを選びすぐって順番に火を通し直していった。本当はこういうことはあまりやらない方がいいのだろうが、しかしやっているうちに品数が多くなっってしまったので最初の方につくったものは、少しではあるが、冷たくなってしまっているのだ。

少し冷めていても美味しいものはあるけど、でもやっぱり基本的にはあったかい方が美味いからな。いかに隣人たちとはいえ人様にお出しする料理だ、出来るだけの手間はかけて、最高の出来のものを提供しなくては晴子さんの弟子としての面子にかかわるというものだ。というかそれは、誰も知らないから別に何の問題もないのかもしれないが、師匠である晴子さん顔に泥を塗ることになりかねない行為だ、気をつけなくては。

「これはレンジでいいな。焼き魚はやったばかりだから平気だし…、これはフライパンで軽く回せばいい。よしよし、ちゃんと美味

しくなってから食われるんだぞ」

俺がキッチンにこもって料理の最終段階をこなしていると、ダイニングの方からは広太が四人をもてなしているのか、楽しそうな会話がかすかに漏れ聞こえてくる。そもそも俺はマジで集中していると周りの音が聞こえなくなる性質だから、けっこう盛り上がっているのかもしれないが、それを明確に把握することはできないのだが。少なくとも、弥生さんが愉快そうに笑っていることと、未来ちゃんがコロコロと声をあげていることと、広太が人数分のグラスを出していることは分かる。

俺としては、ただ、弥生さんが未来ちゃんに酒を飲ませていないかだけが心配である。まあ、その辺は広太がうまくコントロールしているだろうし、問題はないだろうが。というか、そんなことは歌子さんがさせないだろうし、心配するほどのことでもないのかもしれない。

しかし弥生さんは自由な人なので、それらすべてを無視して蛮行に及ぶことがなくはないので、どれだけ心配してもしすぎということはないのである。もしもバカなことをしようとしていたら遠慮呵責なく一撃をたたき込み、何としてもそれを阻止するようにしなくてはならない。

「広太は、ちょっとまだ離れられそうにないか…、まあいいや、俺が持つてけばいいだけだしな。そうとなったら、お盆お盆っと……」  
広太は器用に、それこそファミレスのウェイターかなにかのように、腕まで使って料理の盛りつけられた皿を運ぶのだが、さすがに俺はそんなことはできないので、無難にお盆を出してくるのだが。っていうか、そんなことに徒にチャレンジして、もしも失敗などとしてしまったら目も当てられないではないか。無難に晴子さんに、料理を無駄にした刑で抹殺されてしまう。

そういえば、広太はああいうことをどこで習得しているのだろうか。唯一学べそうなファミレスのバイトとかはしたことないはずだし、そもそも俺たちは庄司の家に住んでいるときから外食を減多にしな

いから直接見たこともほとんどないはずだし。もしかしておじさんとかお婆さんとかに仕込まれたのだろうか…、分からん……。

「お待たせしました。広太、俺は順次キッチンから持ってくるから、みんなに配膳してくれ。基本的にはどの料理も大皿で出すから、小皿によそってあげてくれ」

「はい、了解いたしました」

「都ちん、ご飯だって、ご飯。できたって」

「そうらしいわね。三木くんの料理はどれもおいしいから、外れがなくて安心して食べられるところがいいわ。店屋物って、たまに外れがあるじゃない、このメニューだけどうしてか口に合わない、とか」

「三木さんのお料理は、とても家庭的な味付けがされていますから。食べていると、なんだかホッとしてきますね」

「未来は、おにいちちゃんのお料理すきです。お味がおかあさんのお料理ににてるから、すっごくおいしいです」

「幸久様のお料理の飾らない味付けは、皆様に好かれるものです。幸久様のお人柄が、よく出た結果でしょう」

「俺のことなんて褒めてないでいいから、さっさと全員分配膳しちやってくれ。せっかく好評の料理も、冷めたらおいしくないからな。あっ、そうだ、みんな茶碗持ってきましたよね。よそってきますからください」

「こちらに、すでに集めておきました。どうぞ、幸久様、お持ちください」

「おお、さんきゅ。じゃあ、こっちは頼んだからな、広太」

「はい、了解いたしました、幸久様。終わり次第、キッチンのお手伝いに回らせていただきます」

「ああ、そうしてくれ」

お盆に満載に乗せた料理の皿たちをテーブルに置いて、俺はキッチンにとんぼ返りを果たす。ご飯もみそ汁もよそわないといけないし、あっためる作業もまだ終わり切っていないし、俺にはやることがま



だいくつも残っているのだ。

とりあえず、全員分の茶碗も回収してきたわけだし、ご飯からよそってしまおうとするか。これさえ持つて行ってしまえば、すでに出したいいくつかの料理をおかずに食事を始めてもらえらるだろうし、お客さんを待たせないという意味でも時間を稼ぐという意味でも、どちらにしてもそれが一番の上策のように思えた。

ちようどさっき、広太が昼のうちにセットしておいてくれたタイマー（昼飯で冷やご飯をチンして食べ、釜を洗って米をといで晩飯のためにタイマーをセットするのは広太の数少ない料理関係の仕事）で炊けた飯と対面するために炊飯器を開く。ふわり、と立ち上る炊きたての白米の匂いは、日本人という人種を幸せな気分にくれ、もつとも簡単に発生させられる香りの一つだと思う。

この匂いが好きで料理をしているというわけでは決してないが、しかし、それは俺が好きで好きな匂いの中でもかなりの上位に食い込むものだった。ちなみに一番好きな匂いは、…、なんだろうか。どういうものが好き、と漠然と述べることは比較的簡単なような気がするが、しかし一番を決めるとなると、それは難しい作業のように思う。

他を切り捨てて一つだけ取る、というのが一番を決定する作業である以上、取捨選択と決断がそこには必ず付きまとうわけであり、そしてそれは俺の一番苦手な作業なのだった。

だから、俺は優柔不断のヘタレだというのだ。

### パーティの、はじまり(3)

「いただきます」

いろいろつくった料理をすべて、広太の助力を得ながら机に運んで並べ終わってから、俺はようやくみんなの食事の席に加わるのだった。

そして俺が食卓に着くのについて、誰の視界も妨げないように、室内の陰になっているところで控えていた広太も食卓に着く。いつも、別に俺より先に食っていてもいいと言っているのに、自分の意に沿わないことに関しては、とことん相手の話を聞こうとしないやつである。

「ゆき、おそ〜い」

「三木さん、お先にいただいております」

「三木くんも庄司くんも、早く座って食事を始めた方がいいわ。やよちゃんがどんどん食べちゃってるから、まだ流石になくなるってことはないけど、減ってきてるわよ」

「二階のおねえちゃん、食べるの早いですね〜」

「ちよっと弥生さん、がつつの止めてくださいよ。まだいろいろいっぱいあるんですから。っていうか、筑前煮のとり肉だけ拾って食べるの止めてください」

「そ、そんなことしてないよ〜」

「めちやくちゃ目が泳いでるんですけど、どうしてそんな見ればわかるようなことに対して嘘つくんですか。それはみんなで分け合って食べるようにつくってるんですから、あんまり勝手なことはいでくださいよ。っていうか野菜食ってください、そのために今日は俺が晩飯つくったんですから」

「あんまりお母さんみたいなこと言わないでよ、ゆきってば。実家のこと思い出しちゃうじゃん」

「そういうことは、俺に何も言われなくらい生活をしっかりとき

せてから言ってくださいよ。掃除をする、洗たくをする、料理をする。お酒を飲み過ぎない、肉とか油もののばかり食べない、野菜をもっと食べる。常識ですよ、常識。人間として生きてるんだから、もっと人間らしい生活習慣をつくりあげてくださいよ。俺よりも年上なんですから、しっかりしてください、弥生さん」

「それじゃあ、ゆきとひろがおねえさんの面倒見てくればいいじゃない。別にイヤじゃないでしょ？」

「いや、イヤですよ。どうしてそんなことを、俺がしなくちゃいけないんですか。それに俺たちがやったら弥生さん、絶対に自分じゃやらなくなるじゃないですか」

「まあ、そうだけどね？」

「広太、弥生さんの代わりに家事とかもろやってやるんじゃないやねえぞ。手伝うのは別にいいけど、全部やっちゃだめだからな」

「はい、承知しております。先日もお洗濯のお手伝いをさせていただきましたが、きちんと弥生様も動いてくださいましたので、幸久様のお言いつけに逆らうようなことはありませんでした」

「そうか、洗たくか。今度は部屋の掃除とかゴミ捨てとかもしてくださいね、弥生さん。少しずつでいいんで、あの部屋を人間の住む部屋にしていってください」

「んー、がんばるよー」

そんなに頑張る気のなさそうな返事を発して、弥生さんの視線は再び、俺たちの方から食卓の方へと戻ってしまったのだった。仕方ないな、できれば自分でやる習慣を持つてほしいんだが、しかし俺などことで生活していたら具合が悪くなってしまいうだろうし、今度片付けに行つてあげた方がいいのかもいれないな。

いや、こうして、けっきょく最終的に俺がやってしまうから弥生さんが自分でやろうという意識をいつまで経っても持たないのであつて、俺が断固たる態度を取っていかないといけないのかもしれない。たとえば口は出すけど手は、なにがあっても絶対に出さないとか、そういう風に決めてしまった方がいいのだろうか。

「都さんは、六日ぶりの食事って言ってましたけど、いきなりこんなの食べても大丈夫でしたか？　もっとお腹に優しい感じのをつくった方が良かったですか？」

「そういうことは、あんまり気にしないでいいわよ、三木くん。あたしも別に六日間飲まず食わずだったわけじゃないんだから、食べることに自体に問題はないの。まあ、食べてたって言ってもパンをそのまま食べるとか、カロリーメイトかじるとか、そういう簡単なことしかしてなかったから、実質食べてないのとそんなに変わらないのかもしれないけど」

「そんなものばかり食べてると死んじゃいますよ、都さん。ちゃんと、しっかりしたものを時間を守って食べてください。それこそ店屋物とかでもいいんですから」

「店屋物はダメよ、あたし、あんまり脂っこいもの食べると具合悪くなっちゃうから。店屋物ってけっこうどれも油多めに使ってて、あんまり食べられないの。まあ、どうしてもってなったら頼んじゃうんだけど」

「都さんも、自分で料理したらいいじゃないですか。弥生さんと違って、やる気がないわけじゃないんですし」

「あたしは、やる気はくはないけど、どうしても時間がなくなつてね。つくり始めると、どうしても凝っちゃうって、いくら時間があっても足りなくなっちゃうのよ。だから基本的には原稿中はかんたんな携帯食かすっきりしてる店屋物しか食べないのよ」

「そうだったんですか…、まあ、何にしても、食事だけはちゃんとしてくださいね。いつか身体に無理が来て死んじゃいますからね」

「そのときは、きっと三木くんがご飯食べさせてくれるわよ。今日みたいに、ね」

「まあ、そうなるかもしれないですけど…、でも、あんまりそういうのに頼りきりになるのはよくないと思うんですよね……」

「でも三木くんは困っている人は放っておけないキャラじゃない。今日もやよちゃん困ってたからご飯つくってあげるって言っちゃ

ったんでしょ？」

「…、まあ、そうなんですけどね？　でも、そうならないで済むように、自分でもちゃんとしてくださいよ」

「そうね、努力は、まあ、するわ」

「ほんとにお願いしますからね、都さん」

でもまあ、おそらく手を出さずにはいられないだろう。そもそも手を出さずにいられるなら、俺は今日も、わざわざ六人分も食事をつくったりしていないだろうし、いろいろなことを気にしないで平穏な生活を過ごすことが出来ているだろうことは明らかなのだ。

我ながら難儀な性格というか、面倒な道ばかりを選んで生きてしまいう悪い癖というか、もはや直すことはできないであろう性質だ。自分ではどうすることもできない以上、仕方がないから、折り合いをつけてうまく付き合っていくしかないんだろうなあ……。

「三木のおにちゃん、これ、すごいおいしいです。この、おとうふの、たまごがふわふわでおいしいです」

「煮奴、おいしい？　未来ちゃんの口に合うのが、一つでもあったよよかったよ」

「はい、いろんなお味がしておいしいです」

「未来、偉そうなことをいうものではありません。出された料理は、なにも言わずに食べるものですよ。美味しかったと思うならば、ただそれだけを伝えるべきです」

「あつ、はいです。三木のおにちゃん、ごめんなさいでした。えと、とってもおいしいです」

「いや、あの、そんな、気にしないでください。どういふところが気にいったかとか言ってもらった方が今後の参考にもなりますし、好みが分かった方が今度つくってあげるときの指標になりますから」

「そうですか？　それは失礼しました、私は出した料理に意見を言われることが、それがいいものでも悪いものでも、あまり好きではないので、そう言ったのです。ですが三木さんはそうではないのですね」

「そう、ですね、はい。俺はそういう風に言われるのには慣れてるんで、ぜんぜん気にしないです」

というか、俺にとってみれば、料理をつくるということはすなわち評価されるということであり、それは完全に直結しているというか、一セットのもののなのである。もちろん批判、もとい評価してくれるのは常に師匠の晴子さんであり、どこがどう悪いか、ということを作業工程や食材選定の段階から明確に示してくれるので、俺はそれを道しるべにして次の料理をつくるときに様々な改善を行なっていくのだ。

というか、むしろいろいろ言ってもらった方が熱心に食べてもらった感じがするし、俺としてはうれしいのだ。口を出されたくない、という、自分の料理に深いこだわりを持っているであろう歌子さんの考え方も分からなくはない。しかし俺はそれよりも、自分は人からもらった言葉によって技術を向上させてきたわけだし、その成長させてもらっている、という姿勢を持ち続けていきたいのである。

「むしろ、よくないところがあったり、口に合わないところがあったりしたらどんどん言ってほしいです。いろいろ好みがあるでしょうし、教えてもらえば次からは出来るだけそれに合わせるようになりますので」

「三木さんはきっと、とても心が広いのでしょうね。私は狭量で、お料理に関して他の人の意見を聞くことはあまり出来ません。自分のつくったものは自分のつくったもので、こだわりの持つてつくっていますから、口に合わないなら食べてもらわなくて構いませんし、好意的なことを言われたとしても、知った風な口をきかれてしまうと胸が悪くなります」

「歌子さんは、すぐ料理にこだわりがあるんですね」

まあ、俺にとっては、料理を食べてもらうときはなにか言ってもらわないと不安になってくるほどだから、歌子さんとは真逆と言っていいかもしれない。晴子さんに料理を食べてもらったとき、もしも何も言わずに晴子さんが部屋に戻ってしまったとしたら、それは俺

の料理がヤバかったということに他ならず、なにがヤバかったかは自分で考える分からないなら死ね、ということの意味しているのである。

つまり、なにも言われないということは、もはやそれが食べるに値しないものであると烙印を押されたも同然なのだ。もう、俺からしてみれば、それは冷や汗が止まらないレベルの危機なのである。

「ですが、三木さんのお料理は本当に美味しいです。私にとっても、とても勉強になります」

「いえ、俺なんてまだまだです。勉強中の身ですから」

「それならば、よほど教えている人がいいのと、三木さんの飲み込みがいいのでしょう。私もいっしょにお勉強させていただきたいほ  
どです」

「近くに住んでいる人ですし、今度会いに行ってみますか？ きつ  
というろ教えてくれますよ」

「そうですか？ それではまた今度、都合が合ったときにでもお供  
させてもらってもよろしいですか？」

「ええ、ぜひ」

基本的におっとりしていてやさしい歌子さんであるが、しかし様々  
なところに関してピンポイントに深い、独特なこだわりをもっている  
ので、それについてだけはかなり厳しいのである。たとえば今も  
していた料理についてとか、未来ちゃんのしつけについてとか、や  
っている内職についてとか、まあ、いろいろだ。

「…、うん、まあ、今日もそこそこ上手く出来たな。全体的に塩気  
が濃い気がするから、次回は少し気をつけないとな……」

「そんなことないよ、ゆき、味はちょうどいいよ」

「酔ってる弥生さんの意見なんて、ぜんぜん参考になりませんよ。  
っていうか、野菜、食べてくださいってば。肉ばかり拾って食う  
のは止めてください」

「そんなことないよ、今は焼き魚食べてるよ」

「あっ、ほんとですね、勘違いしました。…、いや、野菜食べてく

ださいってば」

「野菜なんて食べないでだいじょぶだってば。ビタミンなんて身体の中でつくりだせるもん」

「ビタミンは体内では生成できませんからね、人間辞めないでください、弥生さん。肉だけ食ってビタミンまで取ろうなんて、肉食動物の考え方ですよ」

「じゃあ、ライオンになるよ、おねえさんは」

「はいはい、ライオンライオン。怖い」

「あゝ、ゆきがあたしのお皿に野菜ばかり乗せる」

「おいしいですから、食べてください」

「お母さんと同じこと言うし……」

「お母さんでも何でもいいですから、食べてください、弥生さん。肉ばかりだと太っちゃいますよ」

「うゝ、ゆきが言っではならぬことを……。おねえさんはあんまり太らない体質だから平気なんだもん」

「体重計持ってきてほしいんですか？　それがイヤだったら野菜です、はい、どうぞ」

「うゝ、いただきます……」

「ったく、野菜炒めは喜んで食べるのに、それ以外の野菜をこれだけ嫌がるって、どういうことなんですか。子どもじゃないんですから、好き嫌いはやめてくださいよ。ったく、未来ちゃんのことを見習ってください」

「みくちゃんは、野菜いっぱい食べて偉いねえ。まあ、おねえさんは、子どもでいいや」

「なんでそこで妥協するんですか！　しっかりしてください！　弥生さん！！」

「だって、野菜嫌いだもん」

「だもん、じゃありませんよ！　そうだとしても、弥生さんはちゃんと野菜食べるんですよ！　子どもじゃダメなんです、弥生さんは！」



「じゃあ、野菜食べるから、ゆきがちゅうして？」

「それはダメです。でも野菜食べてください。その皿の上が空になるまで次の料理は取っちゃダメですから」

「えー、いじわるー」

俺は、料理の味の確認をしつつ、弥生さんの皿に野菜をどんどん盛りつけていく。野菜を食べられない人に無理やり食べさせる気はないが、しかし食べられるのに食べない人にはどんどん食べさせなくてはいけない。大人として、アレルギー以外の理由で好き嫌いをすることは許されないのである。

そしてパーティというにはやや地味な食事は、にぎやかに進んでいくのだった。とりあえず、弥生さんと都さんにご飯を食べさせてあげるという当初の目的は達成されているように思うし、こういう食卓も、たまには悪くないだろう。

## 他人の携帯電話をいじくることの危険性について

パーティは、ずいぶん長いことそれに時間を費やしていたような気もするのだが、しかしそのようなことはなく、八時を少し回ったところでお開きになったのだった。酒を飲んでる都さんは広太が下の階まで送っていき、飲ませた張本人である弥生さんは俺が隣の部屋へと連行していく。

そして、これくらいは、といって洗い物を終わらせてくれた歌子さんにお礼を言い、二人で連れ立って帰っていくのを見送ってから、俺たちの夕食パーティは無事に終了の運びと相成ったのである。

そして騒がしい一夜が明けて、再び今日という日が訪れるのだった。今日も昨日と同様に平日であるため、当然のように学校があるわけであり、いかに昨日のパーティの準備で疲れているとかなんとか言ったところで無駄なことなのだ。

「って感じで、昨日はいろいろ大変だったんだ、霧子」

「にゅ…、そうだったんだ。幸久君、大変だったんだね……」

そして今何をしているかと言えば、今日も変わらず始まってしまう学校に向かって、ついさっき起こしたばかりの霧子を引き連れて歩いているところである。今日は珍しくそこまで眠気を引きずっている様子は見られず、比較的しつかりとした歩調と口調で俺についてきつつ返事を返してくるのだった。

「でも、お食事会したんなら、せっかくだしあたしも呼んでほしかったなあ……」

「イヤ、別に霧子を仲間はずれにしたわけじゃないんだぞ？　でも、霧子はアパートのみんなのことよく知らないし、それじゃあんまり楽しめないかと思って呼ばなかったんだよ。それとあと、霧子が来ると雪美さんと晴子さんも来るし、あと三人分もつくるのは流石に無理だったから、呼ばなかったんだ」

「にゅ、そっか。幸久君のお家にはよく行ってるけど、でもアパー

トに住んでる人にはあんまり会ったことないかも……。あのアパートって、幸久君たち以外には、どんな人が住んでるの？」

「どんな人が住んでるか？ そうだな…、変な作家の人と、変な酔っ払いと、五年生の女の子と、そのお母さん。それとあとは、隣の家に住んでる管理人のおっちゃんだな」

「にゅ……、変な人ばかり……」

「確かに、そうだな……。まあ、別に、変な人でも悪い人じゃないし、楽しい人たちだぜ。霧子も、遠目から見てる分には楽しめると思うぞ」

「あ、あたしは、うにゅ…、やっぱりいい……」

「そうか？ 霧子がそう言うんならいいんだけどさ。それなら俺からも、みんなにあんまり霧子に接触しないように言っとくわ」

「うん、おねがい……」

確かに、メンツとしてはかなり濃い感じはするし、霧子が絡んでいくには若干厳しいものがあるかもしれない。俺たちの友だちメンバーもけっこう濃いかもしれないが、あのアパートの住人たちはそれ以上だからな。年齢を経ている分だけ味が出ているというか煮詰まっているというか、かなり濃厚なキャラクターを持っているように思う。

まあ、別に年齢を経た人間がすべからず濃いキャラクターを持っているわけではないと思うので、ただあの人たちが濃いのだろう。そしてあの中に住んでいてそれなりに上手く馴染んでいけている俺も、負けじとキャラクターが濃いか、あるいは染まりきらないように立ち回っているだけか、どちらかだろう。

たぶん、俺のキャラクターがそこまで濃いとは思えないので、後者だろうが。

「あっ、幸久君、あのね、昨日メイちゃんからメールが来て、今日、旅行のためのお買い物にいこう、って」

「えっ？ 旅行のための買い物？ ああ…、いいんじゃないか。俺も買いたいものあるし、行こう行こう」

「幸久君は、なにをかうつもりなの？」

「なにつて、あれだよ。歯ブラシがちょっとボロくなってて、持つてくの恥ずかしいから新しいの買ったたりするんだよ」

「にゅ、そうなの？ もっとかうものないの？」

「えゝ？ もっとかうものつてなんだよ。女の子はいろいろかうものあるかもしれないけど、俺は男だからそんなにかう物なんてないぞ。あとかうものなんて、あえて挙げれば、おかしくらいのもんだろ」

「そ、そうなのかな…、でもでも、メイちゃんのメールには、『いろいろかうものがあるから』、つて書いてあったよ？」

「えっ？ そうなのか？ ちょっと、そのメール見してみ」

「にゅ、はい」

俺がそう言うと、霧子は素直にそのポケットからケイタイを取り出し、俺の前にすつ、つと差し出したのだった。こうしてすんなりケイタイを出してくれているうちは、霧子に変な虫が付いているかどうかなんてことを心配する必要はないだろう。さすがに彼氏が出来たら、ケイタイを見せてくれはしないだろうからな、を見せてくれるうちはそんなことは起こっていないと考えて間違いないのだ。

つていうか、もし霧子が男に興味を示すようになって、もしその男が俺の眼鏡にかなつて、もしそのまま彼氏彼女の関係になったりしたら、もうケイタイは見せてくれなくていい。もしも彼氏とのいちやいちゃを見せつけられたりしたら、俺の精神がぼろぼろになって死ぬ。かわいいかわいい霧子が、俺の庇護の下から離れて男のものになつてしまふというだけで耐えがたいというのに、それに加えてきやつきやうふふしているところを見せつけられたりしたら…、見せつけられたりしたら…！！ もう…！！

「ゆ、幸久君…、あたしのケイタイが…」

「ん？ ああ、ごめん、握りつぶそうとしてた…」

「にゅ、壊れちゃうから、気をつけてね？」

「悪い悪い、あんまよくないことを考えてたら、ちょっと力入りす

ぎちまった。まあ、さすがに握力だけでケイタイ破壊するほど俺のパワーは埒外じゃねえよ」

「でも、ちょっと前に変えたばかりだから」

「平気平気、本気で液晶に全体重かけたりすればダメにすること出来るかもしれないけど、そんなことしないからさ。霧子の大事なもんダメにしたりしないって」

心配し過ぎだつつの、とか言いながらケイタイをぱかつ、と開き、メールフォームを起動する。受信メールのフォルダを選択し、昨日の夜に届いたというメイからのメールを探す。上から一つ一つ差出人の名前をチェックしながら下がっていく。

「メール、けっこう遅い時間になっても来てるな。もしかして朝起きられないのって夜にいつまでもメールしてるから、とかじゃないよな？」

「夜は、もう十時前には眠くなっちゃうから、遅くにきたメールは起きてから返すんだよ。寝るときはマナーモードにしちゃうから、メール来ても起きれないし」

「…、そうだろうな、うん。霧子がマナーモードのメール着信なんかで目え覚ますんだったら、俺も毎朝こんなに苦労してない、って話だ」

もしそれが出来るんだとしたら、俺は毎朝家を出るちょっと前に霧子にメールを送るだけで、この毎朝の霧子を叩き起こす作業が終了するという奇跡が起こるのだ。そんなことが出来たら、…、出来たら…、寂しいから、出来なくていいわ。

霧子は俺がちゃんと毎朝起こしてやるんだから、別にケイタイの着信なんかで起きてくれなくていいのだ。

「なんか、メールいっぱい来てるなあ。友だちいっぱいであらやましい限りだね、と。しかし、女の子ばかりだな、メール来てるの。男から来てるのなんて、俺がなんとなく送ったメールくらい、ん？ あれ？」

「にゅ？ どうしたの、幸久君？」

「こ、これ…、送り主、男じゃね…?」

「にゅっ! ? ほえ…、うゆ、…、にゅ、見ないで! 」

「わあー霧子にー男の子からーメールがーきてるー」

4月23日 20..17

送信主..瀬戸くん

件名 .. 『昨日は……』

そのメールを視界に収めた瞬間、明らかに声が、感情が、真っ平らになっていく。自分の声がかすかにふるえているのが、我がことな  
がらよく分かってしまう。

霧子に男からメールが来ることくらい、そりや当然、ないことではないのだ。霧子だって、異性の友だちは俺しかつくらないという縛りの中で生活しているわけではないのだ。まあ？ 霧子のメールボックスの中に？ 男からのメールくらい？ あっても別に？ 動揺したりしないですけど？

にゆう、とケイタイを取り返そうとしてくる霧子を左手一本で押さえこんで、俺は自分の反射神経の限界に近い速度でそのメールを開いた。

4月23日 2017

送信主..瀬戸くん

件名：『昨日は……』

本文  
..

昨日はありがとね♪

霧子ちゃんが手伝ってくれて

すっごく助かったよ！

今度お礼させてね！  
( > | > )

「うわあーなつかよしー俺こいつのこと知らねー。つつうか顔文字

「多いーチャライー」

「にゅー、それは」

「っていうか、霧子ちゃんとか、呼び方が気安いな。何だこいつ、何様だ。っていうか、お礼ってなんだつつうの、霧子になに手伝わせたんだつつうの」

「瀬戸くんはね、えっと」

「瀬戸くんはーどこの誰ちゃんだー霧子ーおにいちゃんにー隠しごとしちゃうダメだろうー。そしてお礼って一体なんなのか、明確かつ明白な説明を要求します。今日は遅刻してもいい、遅刻するよりも重要なことが、今ここにあるんだから」

「瀬戸くんは、えと……」

「さ、さくつと言えないの！？ ちょちょちょ……、ま、待って、待って……。心構え、出来てないから！ 急にそういうこと言われると、俺、卒倒しちゃうから！」

霧子が言い淀んだのが、その後に続く爆弾発言を予感させたので、俺はその直前に霧子の言葉を止める。ちょ、ちょっと待ってくれ、急に「彼氏が出来たのです」とか言われてみる、死ぬぞ、俺。

深呼吸、深呼吸だ、俺。とりあえず心を平静に保つんだ。ダメージが飛んできても、少なくとも耐えることができるように、出来るだけ柔軟な心で待ちうけるんだ。

「よ、よし、俺が質問するから、霧子はそれにハイとイエエで応えるんだぞ？ いいか？ 正直に、ウソ吐いたりしないでな？」

「にゅん、わ、分かったよ」

「一つ目、瀬戸くんは男の子ですか？」

「ハイ」

「ふ、二つ目、瀬戸くんと知り合ったのは最近ですか？」

「ハイ」

「最近か…、二年になってから？」

「ハイ」

「その程度か。よし、三つ目、瀬戸くんは同級生ですか？」

「イエエ」

「じゃあ、後輩？」

「ハイ」

「なるほど、な……。一年生の、瀬戸くんね…、姐さんに聞いたらクラスが分かるか……。？　まあ、今はそれはいいか。じゃあ四つ目な、瀬戸くんとは友だちですか？」

「…、イエエ」

「まだそこまでじゃない、ってことか。つまり瀬戸くんが一方的に馴れ馴れしい、と。ちっ…！　クラス突きとめて追い込みかけるか……。？　ちよつと、一発シメといた方がいいかもな……。次、五つ目、瀬戸くんのが、ウザいですか？」

「い、イエエ？」

「そっちも、そこまでじゃないのか。それじゃあ、少し様子見だな、その瀬戸くんの動向を。中学突きとめて、同じとこの出身のやつに、話聞いてみるか……。それじゃ最後な、六つ目、瀬戸くんのことを、俺に紹介できますか？」

「えと、ハイ」

「俺が見ただけでしばき倒したくなる感じではないのか。それなら俺が直々に調査してもだいじょぶってことだな。よし、そういうことなら、俺がこの目でその瀬戸くんとやらを見極めてやる」

霧子に友だちが増えることは、非常に好ましいことである。しかし、それは相手が女の子である場合に限られる。女の子の友だちが増えることに對して、俺はどういうつもりは毛頭ないのだが、しかし、男の友だち——特に俺の知らない男——が出来てしまうと、そいつが霧子の友だちになっても大丈夫なのか、ということへの明確な判断を下すことができないのである。

男は、霧子を狙う。それは霧子がかわいいから、ある種仕方のないことなのかもしれないが、しかしだからといって、霧子に変な男に狙われていいはずがないのだ。そういう輩から霧子を守ること、晴子さんより託され、そして俺自身が課している俺の使命なのだ。



「瀬戸くんが霧子の友人としてふさわしくない場合は、悲しいことだが、二度と霧子に近づかないように『お約束』してもらうことになるだろうな。まあ、いつものことだが。で、メイのメールは、どれだ？　これか？」

「幸久君、いじわるだよ……」

「意地悪じゃないよ。霧子のことが大事だから、守ってやらなきゃならないんだよ。変な奴に付きまとわれたら、霧子だってやだろ？」

「それはそうだけど…、でもメール見ちゃうんだもん。恥ずかしいよ……」

「恥ずかしいのか、メール見られて……。あつ、これか、メイのメール」

俺にメールを見られて恥ずかしいということは、その瀬戸くんに対して、そこまで悪い印象は持っていない、というかむしろ好意的な感じの方が強いのだろう。霧子が異性を好意的に捉えるということとは、それ自体としてかなり稀有なことである。若干ではあるが、霧子は男という存在を怖いものとして捉えている傾向があるから、それを乗り越えるだけの何かが、瀬戸くんにはあるのだろう。

その何かがなんなのか、俺は早急に見極めなくてはならない。それが何なのかによって、俺が下す瀬戸くんへの処分も大いに変わってくるだろうからな。

そして俺は、霧子を守るのは俺なんだ、という決意を新たにしながら、ようやく見つけ出した、メイから霧子に送られたという例のメールを開封するのだった。ちなみにメイのメールは、めっちゃかわいく、そして上手い。

## お買いもの

「ああ、水着か」

『そう』

霧子の新お友だち、瀬戸くんについての情報を聞き出すことに躍起になっていたら、本当に遅刻しそうになってしまい、途中からはマジダッシュになって校門を駆け抜け、そして今、何とか始業時間前に教室にたどり着くことが出来たのだった。

さっきは遅刻するよりも大変な問題がここにあるんだ！　なんて言ったが、しかし本当に遅刻しては困る。具体的には姐さんの友人として遅刻とか早退とかサボりとか、そういう風紀的にマズいことは許されないというか、姐さんが許してくれないというか、普通なら注意されるくらいで済むはずのことであっても、姐さんが反省文を要求してきたりするから、気が抜けないのだ。姐さんと友だちでいることは、存外難しいことなのであるが、まあ、それ以上に楽しい思いをさせてもらってるし、イヤになる、ということはないのだが。「いろいろ買うものがあるってメールに書いてあったからさ、なかなかあ、って思ったんだよ。あつ、メールは、霧子に送られたのを見ただけどな？」

そして今、遅刻せずに席に着くことができた俺は、隣の席にすでに座っていたメイと（いつも俺よりも早くに席についていることから、メイは俺よりも数段まじめだということがよく分かる）おしゃべりをして朝のホームルームまでの時間を過ごしているのだが。当然、話のネタは今朝霧子のケイタイで見た、例のメールについてである。いや、瀬戸くんじゃないよ、メイからのメールだよ。放課後にお買い物はどうこうっていう、あのメールの方だよ。

『女の子だけで買いに行った方がいいと思ったから、幸久くんにはメールしなかった』

「まあ、そうだろうな。うん、それが賢明だろうな。っていうか、

俺なんて連れていったって何の役にも立たないし、むしろ邪魔なだけだよ。それにほら、女の子の水着が売ってるところに男がうろろしてたら、どことなく怪しいしな」

『そうかな？ 変？』

「そうだな…、俺は、変じゃないかと思うけど。だって、俺がそんなところにいたって何を買うわけでもないし、周りには買い物に来てる女の人しかいないわけだし、何ていうか、場違い？ やっぱ違和感あるじゃん。メイだって、そう思ったから俺にはメールしなかったんだろ？」

『違う』

「えっ？ 違うのか？」

『あたしは、幸久くんはいつしよに来てても買うものないし、無駄な時間使わせちゃうと思ったから送らなかった。別に、いつしよに来るのが変だと思ってるわけじゃない。来てくれるの？』

「あゝ、いや、でも、ついていったから何ができるってわけじゃない、っていうか、俺、別にセンスがいいとか、そういうスキルもないし、ついていっても邪魔になっちゃうだろうし。いや、もう普通に足手まといなんじゃないかなあ……」

『きつと、そんなことない』

「そんなことあるある。だからさ、今日は俺のことは気にしないで女の子四人でお買い物してらっしゃいな。俺は家帰って晩飯つくんなきゃだからさ」

『幸久くんも、絶対役に立つ。来てくれたら、みんなうれしい』

「いやいや、そんなことないって。それにアレだろ、やっぱり恥ずかしいもんじゃないのか？ 水着を選んではいるところなんて、やっぱり見られたいものじゃないだろ？」

『そんなことない。いろんな人がいた方が、意見を聞けて参考になる』

「そうかもしれないけど、でもそれもセンスのない、しかも男っていうんじゃ意味ないだろ。やっぱり連れてくんなら役に立ちそうな

やつじゃないとダメだ。足手まといがいると、行動全体の速度が下がるからな、迅速なお買い物をするためには、いらないやつを連れていっちゃいけないんだよ」

『じゃあ、いる人だったら連れて行っていいの？』

「そりゃ、まあな。必要なら連れて行かないわけにもいかないし、連れて行かないといけないからこそ必要なやつってことだろ」

『でもその人が、自分は役に立たないって思ってたらどうしよう……』

「そういうときはな、なんとかして説得するのが当然いいんだけど、でもどうしてもなら無理やりつれていっちゃうっていうのもありだろ。まあ、一般論だけだな」

『そっか。で、幸久くんは、お買い物いっしょに来るの？』

「いや、俺は、役に立たないから行かなくていいっていうか、まあ、他にやることがないわけじゃないし？ 無理について行って邪魔することもないんじゃないかな、って思ってるけど」

『うん、分かった』

「おお、分かってくれたか。うん、分かってくれたんなら、それでいいんだ。それじゃ、今日の放課後は、俺は帰って晩飯つくるから、四人で存分にお買い物を楽しんでくれ」

「みんな、おはよう！ 朝のホームルーム始めるから、席に座っちゃってね！」

「みなさん、おはようございます」

『先生たち、来た』

「やべえ、ちゃんと見てないと怒られちまう。ゆり先生のことだけは、ちゃんと見てないとダメって言われてるからな」

『そんなこと言われてるの？』

「ああ、こないだ言われたんだ。ホームルームの間、メイとしやべくってたら、その後にな」

『そうなんだ』

「ああ、だから少なくともゆり先生の話だけは熱心に聞かないとい

けないんだ」

『なんだか分かんないけど、幸久くんも大変』

「まあ、言うほどでもないけどな」

というわけで、俺は横を向くのを止めて前に向き直り、前に立って出欠を取っているゆり先生のことをじっと見つめるのだった。一言一句を聴き逃さぬ集中力というものは、こういうときにこそ発揮されてしかるべきなのである。

しかし、今日の先生の振り袖、いつもよりも色使いが華やかだな。刺繍のあしらい方も大胆だし、何かいいことでもあったのだろうか？ ふむ、後で聞いてみるか。

……………

「んー、はあ…、で、俺はなんでこんなところに？」

一日の授業を、特に問題もなくうまく切り抜けて、放課後の時間が訪れていた。

「それじゃ、お買い物しなきゃね」

「そうだな、せっかく来たのだから、きちんと揃えるものを揃えなくては」

「ねー、なんのおかいものにきたのー？」

『水着』

「ちよ、ちよっと待て！ なぜ、俺が、ここにいる！」

この時間、俺はさっさと家に帰って、冷蔵庫の中に入っている食材的に見て今日の晩飯なににしようかなあ、なんて思いを巡らせている頃のはずだった。そう、はずだったのである。

しかし、だというのに、俺がどこで何をしているかと言えば、

「なあ…、ここ、デパートじゃね…：…？」

デパートだった。隣駅の駅前の、このあたりでは一番大きなデパートの前に、どうしたのか、俺は立っていたのである。

「にゅ？ デパートだよ？」

「デパートに決まっているではないか、何を言っているんだ、三木。いっしょにバスにも乗ったではないか」

「ゆっきい、もしかしてずっとねてたの？」

『気にしないでいいと思う』

朝にメイと話をした限りにおいては、俺はこの買い物には付き合わず、女の子同士で旅行にもっていく新しい水着の選定に行くということになっていた、ような気がする。どこで何がどうねじくれてしまったのか、それをこの瞬間にここで、自問自答とはいえ、論じることがスマートではない。

今ここですべきことは、俺がいるはずのない場所にどうしてかいるというこの現象の原因を究明することではなく、この状況をいかに手早く正確に切りぬけるか、ということに他ならない。変に選択を間違えると、このまま女性用水着売り場に、女の子四人と連れだつて直行ということにもなってしまうかねないので、冷静沈着かつ大胆不敵な選択が求められるのだ。

まず第一に、経験則からして、どうして俺がここにいいのかとか、どういうからくりがあるのかとか、そういう細かいことを気にしてはいけないわけで、ここでそういうことを問い始めてはならない。そういうことを問い始めてしまうと、俺の思考がそちらにばかり偏ってしまい、もっとも肝心なこの場からどのようにして脱出するかということについての思考が疎かになってしまい、けっきょく脱出すること自体が上手くいかなかったりするのだ。

だからここは、とりあえず一も二もなく脱出し、無事に家に帰り着いてからゆっくりと思案を巡らせ、果たしてどのようにして自分があんなところまで——それこそ相当に歩いているはずだし、あまつさえ金を払ってバスにまで乗っているのだ——行ってしまったのか、ということに思う存分頭を悩ませればいいのだ。それこそ、料理をつくっている間ならば時間はいくらでもあるのだから。

「実は、俺には、晩飯をつくるという崇高な使命があるんだ。ここまで着いて来るとして悪いけど、ここで帰らせてもらうぜ」

「にゅ？ 幸久君、帰っちゃうの？」

「ああ、ちよっと今日は本気で料理つくりたい気分だったんだ。ここまで来といて、悪いな」

「なんだ三木、バス代まで払っておいで、何も買わずに帰るのか？ せっかくだ、何か買ってから帰ればいいだろうに」

「いや、ちよっと急いで帰らないと、せっかく降りてきたアイデアが飛んじまうんだ。買い物はいつでも出来るけど、料理のアイデアはこの瞬間の限定ものだぜ」

「かってないものとか、ないの？ あたしは、いろいろかっておいで、ってママさんからメモもらってきたよ」

「買ってないものはあんまりない。っていうか、そんなに買うものはない。だから今日じゃなくても全然かまわないんだ。ほら、歯ブラシなんてさ、いつでも変えるだろ？」

『幸久くんも、いっしょにいい？』

「いや、だから、俺は、今日は帰るんだ。悪いな、メイ。っていうか、メイは今朝の時点で分かってなかったっけ……？」

『細かいことは、あんまり気にしない方がいい』

「ああ、そうだな、その通りだ。細かいことは気にしないことにして、とりあえず俺は家に帰るぜ！」

そして俺は脱兎のごとく駆けだそうとして、しかしそれに失敗した。身体を反転しようとした一瞬のすきを突かれて、誰かに手を握られてしまったのだ。

無理やり腕を振りぬいて、それを振り払うことは不可能ではないだろう。しかしそれをやって、もしもその手をつかんだ人が転びでもしたらどうすればいい。そんなことをしてはならない。

俺は、その手を掴まれた感覚に、ほぼ無意識で身体の動きを停めたのだった。女の子に、仮にそれが意図的でないとしても、俺の動きが危害を加える可能性があるとしたらだいたい行動が強制停止するように、俺は晴子さんに仕込まれているのだ。ちなみに、同様に、俺の目の前で女の子に危機が迫ったときは無意識的に女の子を守る

方を選択するように仕込まれている。

晴子さんがなにを考えてそんな風に俺を仕込んだのかはよく分からないが、そのおかげで俺が女の子に怪我をさせるようなことはない。感謝はしている。だがしかし、無意識で女の子のために己の身を捨ててしまうことがあるのは、この身体を持ち主として少し怖いので、そこだけはもうちょっと緩めに仕込んでほしかったのだが、まあ、今さら後の祭りである。

「め、メイ……？　どうかした……？」

俺の手を握ったその手の小ささにイヤな予感を覚えながら、俺は首だけを回して振り返る。そしてその視界に映ったのは、メイだった。

「俺、もう、帰るぜ……？」

『いっしょに、いこ？』

「い、いやいや、帰るってば」

『いっしょに、いこ？』

笑顔だった。基本的に無愛想、いや、表面に示される感情の起伏の小さいメイが、ニコニコの笑顔で俺の手を握って、そこに立っていたのである。それはやはりどことなく違和感を覚えるものであり、確かにその笑顔は非常に魅力的なものであると認めることはやぶさかではないのだが、しかしそれでありながら違和感を禁じ得ない。ただ微笑んでいるだけではない。それは、その状況を見ればよく分かる。

メイは、俺を、その性質をよく見抜いたうえで、止めたのだ。手を握れば俺が止まると分かっている、その上で俺の手を握ったのだ。そしてこの笑顔である。どことなく、有無を言わせぬ何かを感じる。そうか、メイって、こんな表情も出来るんだな。友だちの新たな一面を、なんとびっくり、発見してしまったのである。

「め、メイさん？　俺は、みんなのお買い物には付き合えないですよ？　ほら、今日は水着を買いに来たんでしょ？　それならさ、俺なんて足手まといなただけだよ。俺なんか連れてったら邪魔なだけだつて、朝にもよく聞かせただろ？　メイだって、ほんととは分かって



るんじゃないの？ でもメイはやさしいからさ、俺を仲間外れにするなんて、って思ってくれてるのかな？ うれしいな、その気持ちでも、気持ちだけもらっとくからさ、うん、今日は、帰るよ。また今度、買うものが水着じゃないときに、誘ってな。じゃ！」

再び振り返って歩きだそうとして、しかしまだ、そこには俺を捕まえているメイが手を握っている感触があった。歩き出そうにも、放してくれなくては歩きだすことができないではないか。頼むから、俺の言ってることを分かってくれ、放してくれ。

『いっしょに、いこ？』

メイのケイタイの液晶の文字は、さっきからまったく変わらない。一貫して、俺をこの場にとどめようとするばかりである。

「帰っちゃ…、ダメ……？」

『ダメ♪』

俺がこの場から逃げ出すことは、たぶん無理だと思う。メイは、きつと俺をこの場から逃がしてくれない、そんな気がするから。

## 買い落とし物品回収隊

メイにきゅっ、と右手を掴まれたまま、俺はまるで引きずられるような状態になりながらデパートの中を右往左往していた。いろいろと買うものがあると言っていたがそれはどうやら本当だったようで、メインイベントの前に細かなフラグを片っ端から回収していくように、歯ブラシやらお菓子やら、買い残していたものなのかついでに買っているものなのかは分からないが、それこそいろいろと買いこんでいる。

俺も、ついでに新しい歯ブラシを二本と特売になっていた缶詰めになっっている紅茶を二つ（アッサムとイングリッシュ・ブレックファスト。前者は広太の、後者は俺のお気に入り）買ったのだった。そしてみんなも、別にどれも今でなければ買えないものというわけではないだろうが、こまごまと旅行に必要かもしれないものを買っているようだった。

「さて、いろいろ買うもの買ったし、俺は先に帰ろうかなあ。帰ろうかなあ」

「あとは、水着買いに行くの？　メイちゃん」  
『うん』

「それは、何階に行けば売っているものなんだ？　私はあまりこういうところに来ないから、分からないのだが」

『三階』

「はやくいこーいこー。かいだんでいこー」

「いや、エレベーターで行けよ、エレベーターで。俺は、帰るけど」  
「幸久君、さっきから帰る帰るって言うてるけど…、帰らないの？」

「いや、帰るよ。帰る帰る。帰りたいなあ」

「三木、帰る帰るというならばどうして帰らないんだ。いつまでもしつこいぞ。帰るなら帰る、帰らないなら帰らない。自分の意志はきっちり表明するべきだとは思わないのか？」

「思う、ああ、思うよ。思うから、有言実行させてほしいんだけどなあ……、な？」

『三階、いこ』

俺の右手を変わず握り続けているメイに、俺はさっきから何度も帰りたいぞ、という合図を送り続けているはずなのだが、しかしそれに気づいてくれる様子はない。というか、気づいていてわざと無視しているというか、そういう意地悪なことをされているような気がする始末である。

おそらくメイは、さっき入口で見た笑顔から察するに、俺のことを帰してくれるつもりはないのだろう。どうしてそこまで俺を水着購入の旅に同行させたいのかはさっぱりわからないのだが、しかしそれが分からずとも、メイが俺を解放するつもりがないということだけはよく分かるのだ。

「め、メイ、手を放してちょうだい。俺は帰るわ」

勇気を出してそう言ってみる。決して、それによって事態が劇的に好転するなんて調子のいいことを思っているわけでは、さすがにない。それでも、もしかしたらなにか変化くらいはあるかもしれないじゃないか、少なくともなんらかアクションを起こしているんだから。

『いこ？』

「……、はい……」

ケイタイの液晶を、輝くような笑顔とともに小さく首を傾げながら目の前にずいっ、と突き出され、俺は為す術を失った。ここまで強硬に俺を連行しようとしているということは、もう放してくれるつもりはまるでないのだろう。

もし、俺がその右手を穩便に引きはがすためには（当然、パワーで勝る俺がメイの手を引きはがすことができないということはない）指を一本ずつ、俺の左手で開かせていくしかないのだが、それをしている間に空いているメイの左手が俺のどこを掴んでくるか分かったものではない。

つまり両手に対して同時に対処しなくてはならないというわけであり、右手で右手に、左手で左手に向かわなくてはならない。するとやはり、どうしても右手を勢い任せに振り払うしか術がなくなるのだ。それが出来ていたら、そもそもこんなところまで引きづられてきていないのだ。つまり、詰み、である。

まず第一に、右手を取られてしまったことによつて、俺は一手先んじられているのである。そのほんの一手の遅れが、けっきょく最後の最後まで効いてくるのだ。俺は、俺の性質によつて、この場からの逃亡が叶わないのである。

「幸久君、帰らなくていいの？」

「ああ、もう、帰らなくていい。別に飯つくる以外の用事もないし、平気」

「三木、ぐったりしているようだが、大丈夫か？」

「大丈夫、つてことにしとく。気にしないでいいよ」

「ゆっきい、かいだんでいこ、かいだん」

「俺は、エレベーターで行くから、一人で行っておいで、志穂」

「は〜い」

『幸久くん、いこ？』

「はい…、そうしましょう…、メイお嬢様…」

どうしてか楽しそうに階段に向かって駆けていく志穂を見送って、俺はメイの後にしずしずとつき従って歩くのだった。どうしようもない状況に置かれてしまった以上、俺に出来ることなんて、こうしてすべてを諦め開き直って状況の流れに従うことくらいなのだ。

しかし、メイってけっこう強引なところもあるんだなあ。最初の印象からすると引っ込み思案で内気な女の子って感じだったけど、しかし今はそんな枠の中に収まる感じではない気がする。

まあ、それも馴染んでくれたからの行動だと思うし、仲のいい友だちだからこそ自由に振る舞うことができるというか、少しくらいだったら自分勝手に相対することが出来るということなのだろう。メイが、俺たちのことを深い友だちと思ってくれている証明がそこに

見出せるのなら、こういう感じも、たまになら悪くないかもしれない。

「それで、皆藤は一人で行ってしまったが、いいのか？ 携帯電話に連絡でも入れていた方がいいだろう」

「そうだな、とりあえず、どこで待ってるかくらいは連絡しといたほうがいいだろう。まあ、それを見た志穂がその通りにしてくれるかは分からないけどな」

「幸久君がメールすれば、きっといいちゃんもその通りにしてくれるよ。しいちゃん、幸久君のこと大好きだから」

「えー、そうか？ あいつ、俺の言うことときかないことだってあるんだぜ？ ぜんぜん信用ならねえって」

「なんでもいいから三木、早くメールを皆藤に送ってくれ。エスカレーターだったら各階に一つずつしかないだろうし、待ち合わせにもちょうどいいだろう」

『幸久くん、メールしてあげて。しほちゃん迷子になっちゃったらかわいそう』

「まあ、確かに迷子はかわいそうだよな、うん。よし、すぐにメールするから、メイ、今だけ右手を放しておくれ。もう帰ろうとしないうって約束するから」

迷子というワードから俺が真っ先に思い出すのは、小さなころの霧子の泣き顔だった。

霧子は昔、凄まじく迷子の常習犯だった。今は俺と歩幅が合うようになっってきたからそれほどのことはないんだが、遊びに出かければ毎度毎度、誇張ではなく毎回、いつの間にかどこかしらに行ってしまう、そしてどこかで泣いているのだ。それを見つけるのも俺の役目なら、それを泣きやませるのも俺の仕事であり、そんな霧子の手を引いていっしょに帰ってやるのも俺の仕事なのだった。

だから、出来るだけ誰かを迷子にさせたりすることはしたくない。泣いている霧子というのは、俺の中では最大級に見たくないものであり、そしてそれを思い出させるような、誰かが迷子になるなどと

いうことはなんとしても防がなくてはならないのだ。

一番確かなのは、俺がその手を握っていることなのだが、（霧子は俺が手を握っていても、一瞬の隙を突いて迷子になったりすることもあったから手に負えない）今回はそういうわけにもいかなかった。なので今から手を打つしかないのである。まあ、志穂は少しくらい迷子になったからといって泣きだすような細い神経はしていないように思うのだが、いちおうというか、とりあえずだ。

「ありがとな、メイ。さて、メールね、メール」

三十数分ぶりにその右手が解放された俺は、つかの間の自由を味わう暇もなくポケットからケイタイを取り出してメールを打ち始める。こんなメール一本で志穂の行動を縛れば、実際のところ何の苦労もないのだろうが、とりあえずやるだけやっておくか。

頼むから大人しく待っていてくれよ、志穂。

「さて、行くか。三階だっけか？ エスカレーターで待ってるってメールには書いたけど、エスカレーターってどこにあるんだ？」

「エスカレーターは、入口の方だよ。今は売り場の奥の方に来ちゃってるから戻らなきゃ」

「そうだな、皆藤をあまり待たせてしまうのも可哀そうだ。急いで三階に向かおう」

『幸久くん、手』

「え？ ああ、はいはい、お手をどうぞ、お嬢様」

『三階、いこ』

くっ、とそでを引かれて振り向くと、目の前にバックライト煌くメイのケイタイが突き出され、そんな要求が突きつけられたのだった。さっきもう逃げないって言ったばかりだというのに、メイは心配性だな。

しかしまあ、そういうのなら手を差し出そう。俺は軽く腰を落としてメイに、握っていたケイタイをポケットにしまいなおしてから、さっきまでずっと握られていた右手をもう一度差し伸べる。

メイは、それに満足そうににこりとうなずいて俺の右手を取ると、

左手に持ち替えたケイタイをかここと操ってそう言った。利き手じゃない方の手でも常人以上にケイタイを操れるって、こういう器用さなんだと聞きたいが、しかし右手でアレだけできるのだからおかしくはないか、と変に納得してしまうのだった。

利き手がどれだけ器用に動いても、それと同様に、あるいはそれに伴って逆の手まで器用に動く、というわけではないのだろうが。しかし現に、目の前でメイが器用に左手でケイタイを繰っているわけで、やはり器用な人というのはいるものなのである。

「メイちゃん、幸久君と手つないでいいなあ。幸久君、あたしとはもう手つないでくれないんだよ」

「つないだら恥ずかしいって言ったのはおまえだろ、霧子。中二の二学期に、もうつながないもん、って言ったじゃん」

「にゅ…、そ、そうだっけ…?」

「そうだよ、忘れちゃったのか？ だから俺は手はつながないようにしてるだろ。まあ、朝におぶったり肩貸したりはするけど、でも手はつないでないぞ」

「手は、つないでないんだ…」

「まあ、手をつなぐなんてちょっと子どもっぽいかもしれないし、別にしなくてもいいんじゃないか？ メイのは、手をつなぐっていても、子どもっぽくない方のアレっぽい感じだけだな」

「手をつなぐのはみんな子どもっぽいんじゃないの？」

「手をつなぐっていうか、もうエスコートって感じだよ、これは。

メイも、そんな感じだろ？」

『うん、そんな感じだと思っ』

「だろ？ これだったら別に恥ずかしくはないよな。レディだもんな」

『そう』

まあ、俺がエスコートしてるのか、俺がエスコートされてるのか、それが曖昧になっているのは少し困るのだが。しかしとりあえず、俺はこうして手を取ることに対して恥ずかしさは持ってないし、メ

イの方もそういうことはないようなので、手を取り合っていることに問題はないのだろうか。

「それじゃあ、あたしもそれだったら恥ずかしくないかな？」

「いや、どうだろうなあ……。ほら、霧子は、あんまりそういうキャラじゃないじゃん。お嬢様っていうか、お嬢ちゃんって感じだろう？」

「にゅ？ よくわかんないかも……」

「分からなくていいよ、気にすんな。まあ、どっちにしても心構えの問題だから、霧子が恥ずかしくないと思うんなら恥ずかしくないんだよ。手をつなぐのも手を取るのも、外見的にはおんなじようなことしてるんだから」

「にゅう、そうなのかな……？」

けつきよくは、それを恥ずかしいと思うかどうか、あるいは一つの様式として割り切ることができるかどうか、ということに違いないのだ。そうやって、俺を帰らせないようにするという目的のための手段として手をつなぐという行為を割り切れてる分、メイは霧子よりも精神的に大人ということなのかもしれない。

しかし、精神的に大人であることは確かにいいことかもしれないが、それが常に最善であるとは限らない。子どものように純粹無垢で無邪気なままでいられること、それはそれでいいことではないのだろうか。少なくとも、俺は霧子にそうであってほしいと思うし、もしもそうでなくなってしまうときどんな気持ちになるのか予想もつかない。

「霧子は、かわいければそれでいいんだよ。別に打算とか妥協とかしなくていいからさ、俺はそのままの霧子でいてくれればいいからな」

「にゅ？ でもそれじゃ、いつまでも大人になれないよ」

「大人になんてならなくていいの！ 霧子は永遠に俺の妹なんだから、そのままでいてくれよ！」

「にゅ、にゅん！ わ、分かったよ！」



霧子には、いつまでもかわいいままできてほしいのだ。それは俺のエゴでしかないが、しかしそうであってほしいのだ。いつか、霧子が大人になってしまふ、そんな日がくるだろうことは分かっているのだが、だがそれでも、少しでもそれが来ないように願うことくらいは許されるべきだろう。

いつか霧子が、俺の目をかいくぐって男とつきあったり、ウソを吐いてごまかしたり、そんな大人の行動をとるようになるかもしれないが、それは仕方ないと思う。思うが、認めようとは思わない、それだけだ。

霧子は、俺の、妹なのだから。

## 大乱闘めっちゃモテシスターズ

手をつなぐのどうのこうの言っている間に俺たちはエスカレーターへと乗り込み、三階を目指していた。エスカレーターというのは本来的には急ぐ人とそうでない人が左右に別れて乗るという決まりはなかったんだそう。その証拠に、関東では右側を急ぐ人用に開けて乗るが、関西では逆らしいし、そもそも別れて乗らないところもあると聞いたことがある。つまりそれは、せっかちな日本人がつくり出した新たなエスカレーター秩序ってことなのだろう。

「いや、別にエスカレーターのことはどうでもいいんだよ、うん」

「にゅ？ 幸久君、どうかしたの？」

「あつ…、いや、なんでもない、独り言」

「三木は独り言が多いな。考えていることが口から洩れているのならば、少し気をつけた方がいいぞ。というより、自分が独り言を言っているという自覚はあるのだな」

「いや、今はな」

『幸久くん、いつも授業中もいろいろ独り言いってるよ。ぶつぶつ言ってる』

「…、気をつけなきゃ！」

俺は昔から独り言が多い方だ。以前から、おじさんに独り言が多いから気を付けてくださいね、みたいなことを言われ続けてきたし、この前も広太に独り言多いよ、と言われたばかりだ。

ついこの間言われて、気をつけようと心に決めたばかりだというのに、また独り言を言うようになってるなんて根性が足りないのではないだろうか。独り言は恥ずかしいってこの間よく分かったはずなのに、それでも直せてないって…、俺の意志の弱さをあからさまに露呈したことになるだろう。

あまり、そういうことを思い切って注意してくれる人は多くないのだから、言われたときはきちんとその問題に向き合うことが大切な

のであり、それを心がけていれなくせなんて、基本的には向き合うことによって直すことができるものが多いのだから、直すことができるはずなのだ。

まあ、そんなもの、けっきょくは理想論でしかないんだけどな。

「あっ！ ゆっきいきたく！ ゆっきいゆっきい！！！」

そして二階から三階へ昇るエスカレーターを半分くらい来たところで、上の方から俺を呼ぶ大声が聞こえてきたのだった。何事かとそちらを見上げてみれば、何ということはない、そこには志穂が立っていたのだった。

俺がメールで指示した通り三階の昇りエスカレーターの降り口で待っていた志穂は、なにがそんなにうれしいのか、俺たちに向かってきらきらの笑顔でぶんぶん手を振っている。待てと言われた犬がぶんぶん尻尾を振っているようにしか見えない。

「なにあいつ、めっちゃ恥ずかしい…、っていうかこのまま合流したら確実に志穂の関係者だと思われて、俺も間接的に恥ずかしい思いうることになるんじゃない？」

「思われるも何も、友だち同士なのだから、間違はなく関係者だろう。それにお前があそこで待っているようメールをしたんだからな」  
「でもさ、あんなふうにされたら合流しづらいじゃん。友だちだからってあんなにされても困るっていうか、こんなところで騒ぎまくられても周りから白い目で見られるだけだし、恥ずかしいだろ？」

「恥ずかしくても、あれがお前の友人だ。無視して四階に昇って行ったりするんじゃないぞ」

「ぐっ…、読まれた…！！」

『幸久くん、三階で降りるんだからね？』

「お、降りるって、分かってるよ。逃げたりしないって、なにからもさ」

「しいちゃーん、おまたせ」

「きりりーん！！ おーいおーい！！」

「霧子！ 返事したらもっとさわぐでしょ！」

「にゅ…、そうだけど……」

「あと十秒もしないで三階に着くんだから我慢しろよな、霧子。…、あゝ！ 志穂！ 降りてくるな！ エスカレーターを逆走してダッシュで降りてこようとするんじゃない！！」

志穂は、基本的に落ち着きがない。今こうして、俺の言いつけ通りに待ち合わせ場所に待っていられたことは、志穂にとってみればけっこうすごいことなのだ。現在地から待ち合わせ場所に歩いてくる間にいろいろ気になるものに目移りしてしまっただけで待ち合わせ場所を忘れてしまったり、待ち合わせ場所についても待ち切れずにどこかに飛んで行ってしまったり、信じられないかもしれないが志穂にとって「合流するための待ち合わせ」というのは比較的難しいミッシヨンに当たるのである。

「つたくもう…、まあ、よく待ってられたな、志穂」

三階に到着し、ようやくとエスカレーターを降りると、俺はとりあえずため息を吐いて、それからいい子に待っていることのできた志穂を褒めてやるのだった。

「にゅ……」

とりあえず広いところまで連れて行ってからその頭を、メイとつないでいない方の左手で撫でてやることにした。志穂の髪の毛は一本一本が、それこそ志穂自身のように硬く強いので、霧子とは違った撫で心地である。その元気のよすぎる髪はぴょんぴょんと好きな方向に向いていて、自由すぎる、というか、ちゃんと髪をセットしてないのではないか、というか、まあ、明日も同じようなことになっていたら俺がセットしてやろうと思う。

志穂は、けっこう髪とか服とか、操作可能な外見的なポイントに対して無頓着なので、（基本的には親御さんが買い与えたりしているらしく、自分で選んだりすることはほぼないようだ）磨けばもっと光るはずなのだ。髪の毛のセットくらいちゃんやりなさいよ、と、俺は声を大にして言いたいのである。今は親御さんのセンスがいいからなんとかなってるかもしれないけど、いずれぜんぶ自分でやらな

くちやいけなくなるときがくるんだから、少しでもやるようにしないといけないだろう。

「志穂、言ってなかったけど、お前今日髪の設定してこなかっただろ」

「うん、しなかったよ。ママさんがねぼうしちゃってじかんがなかったんだって」

「なんで他人事なんだよ。お前の頭に乗っかってる髪だろうが。自分でも少しは気にするようにしろって。少し扱いづらい髪かもしれないけど、でも俺のより少しはマシなんだから」

「ん、でも、べつにきにならないし」

「気にしろ、って言ってるんだよ。いつまでも親御さんにおんぶに抱っこじゃいけないんだぞ。お洒落なんて、もらうものじゃなくて自分でやるものなんだからな」

「そうなの？」

「女の子なんだから、そうだぞ。女の子はかわいくなる努力を怠ってはいけないんだ。いつでもお洒落な服を着て、素敵に髪型をキメて、女の子力を高めにキープしないといけないんだ」

「おんなのこりよく？」

「そうだ、女の子がどれくらい女の子してるかっていうのを示すバロメーターだぞ。着ている服のお洒落度とか髪型のお洒落度とか、女の子がかわいくあるための努力を数値化して総合したものだ。それが高いとモテモテ、いや、めっちゃモテだな。志穂はみんな親御さんに任せ切りだから、女の子力かなり低いぜ、弱々しいな」

「え、あたしよわいの？」

「弱いな、弱すぎる。そもそも女の子としてお洒落に無頓着である時点で、最弱クラスであることは間違いないな。うちの近所の小学校五年生の女の子にすら、高校二年生のお前は劣っているぞ」

「よわいのはダメだよ。よわいのはダメって、ししゅがいったから。ゆっきい、それって、どうやったらつよくなれるの？ しゅぎょ？ とつくん？」

「そこらへんに発想が行きついちゃう時点で、女の子力低いよな。もっと自分の見た目とかに気を使ってみるといいぞ、たぶん。親御さんが服を買ってきてくれるのについて行ってみるとか、自分にどんな髪型が似合うか考えてみるとか」

「おようふくは、いっしょにかいにくよ!」

「動きやすさとか防御力とかそういう観点からじゃなくて、かわいさに注目しないといっしょに行ってる意味ないからな! そういうRPG思考は卒業しないと女の子力上がらないからな!!」

「えー、そうなの? でもぼーぎよりよくひくいとまけちゃうよ、ときに」

「日常的な生活を送ってる分には敵なんか出てこないよ! っていうか、出てきたことあるのかよ!」

「うん」

「あるの!? 敵、出てきたことあるの!?」

「さんにんくらいまとめてでてくるよ、てき。まちとか歩いてると、たまに」

「なんでお前の世界はランダムエンカウントシステムが採用されてるんだよ……。っていうか、しかもまとめて出てくるのかよ、ゴ布林みたいだな、おい……。ゴ布林A・B・Cみたいな感じか」

「ごぶりん? なに?」

「あー、気にすんな」

「うん、きにしない」

「で、出てきた敵は、倒すのか? 逃げるのか? いや、その敵って、やっつけても平気な類?」

「やっつけてもいいってししょーがいうから、やっつけていいとおもうよ。だからいつもやっつけるの。てきがでたらにげちゃダメ、ってししょーがいつもいつてるから。こうね、どかーん! ってやっつけるんだよ、いつも」

「どかーん!? お前…、殴っただけでそんな音がするのか……。そりゃ、敵もやられるよ……。っていうか塵になるよ……」

っていうか、敵ってけつきよくなんだろう。もしかして不良とかに絡まれるのだろうか。それとももしかして、俺たちの住んでいる世界とは違う次元から送られてくる世界の敵みたいなもの、人知れず戦ってたり…、しないわな、まあ、普通に考えて。

不良と戦うのなんて、中学生までで卒業しようぜ、志穂。高校生にもなってそんなことしてるなんて、ナンセンスだよ、まったく。高校生になったらワルの世界からは足を洗うのよ。

しかしまあ、志穂は強いし、それを知った不良が腕試し的に喧嘩を売ってくるのだろう。それにしても、志穂と真正面から戦おうとするなんて、勇気がありすぎると言わざるを得ないだろう。俺は絶対にしないぞ、そんなこと。死んじゃうじゃん、真正面から戦ったらだって、どか〜ん！　だぜ、どか〜ん！　それはムリだろ。爆発音じゃん、どか〜ん！　って。

「まあ、そういうことなら、防御力の方が大事かもな、うん。お前はお前なりに考えてたんだな、いろいろ」

「そうびはよくかんがえなさい、ってしし〜がいつてるからね！でもね、ど〜じよ〜のど〜ぎがいちばんつよいそうびなんだって！」

「なんだよ、鉄板でも仕込んであるのかよ」

「んとね、ぼ〜ぎよりよくがたかくて、しかもちからが3あがるんだって！　3もだよ！」

「そんなとこまできっちりRPG思考が染み込んでるの！？　っていうかお前のお師匠さんもそっちの方の住人なのか！？」

「け〜けんちがたまると、レベルもあがるんだよ！」

「筋金入りのRPG道場じゃねえか！　そこ、ほんとに大丈夫なのか！？」

「そういったほうが、あたしにはわかりやすいだろ、って」

「…。なんだ、配慮じゃん。やさしいお師匠さんじゃん」

びっくりした。もしかしてお師匠さんも志穂と同じレベルの思考回路を持っているのかと思ったよ。

「分かった、うん、分かった。お前は別に無理して女の子力とか上げなくていいよ、お前は敵に負けないようにリアルパワーを上げて強くななきゃいけないんだからな。現実世界はコンティニューもリセットも出来ないんだから」

「うん、わかった？」

分かってないな、分かってない。疑問形で頷かれても、全然理解が及んでないってことしか分からないんだよ。

「霧子は女の子力高いよな。お洒落さんだし、バーゲンに出陣しちゃうくらいだし。っていうか、今度のバーゲンっていつあるんだ？」

「にゅ？ えと、たぶん、夏前？」

「そうか…、…、今年も強制徴募かなあ……」

「？ 三木、どうした、遠い目をして」

「あつ、いや、なんでもない。なんでも、ないんだ」

『幸久くん、あっちだよ』

「んっ？ ああ、そっか、買い物な、買い物。そういえば、メイの私服姿って、見たことないな。いつも制服着てるよな、うん」

「メイちゃんとは、まだお休みの日に遊びに行ったことないからだよ、幸久君」

「いや、それは分かってるよ。そういう意味で言ったんじゃないって。まあ、旅行のときに見れるし、楽しみはそのときまで取っておくってことで」

『ちゃんとおしゃれしてくる』

「おお、ほんとか？ 楽しみにしてるよ。志穂は、親御さんにちゃんと服、選んでもらえよ。防御力と機動力高めだな」

「うん！ てきが出てきても、やっつけてあげるね。みんなのことまもってあげない！」

「心強いなあ、きつと姐さんもいっしょに戦ってくれるよ。戦ってやってくれな、よく分かん敵と」

「よく分からない敵とは戦えないぞ、三木。まずは敵を知るところから始めなくてはならないだろう。弱点や有効な攻撃を見極めなく



ては」

「志穂の拳は、たいていの存在に対して効果抜群だから、そんなこと気にしないで平気だよ」

「いや、そういうわけにはいかない。弱点を突き、効果的かつ低労力で闘わなくては、消耗戦になったときに潰されるのはこちらだ。いついかなる戦いであっても、長期的な視点で全体を俯瞰的に見なくてはな」

「姐さんも、けっこうそういうどうでもよくて細かいことに対してガチだよ……」

エスカレーター脇のちょっとしたスペースで、俺たちはどうでもいいことを話して時間を潰していた。実際のところ、別に時間を潰す必然性は全くないわけで、むしろさっさと買いに行けよ、といったいほどだ。

いや、別に遅延作戦をしているというわけではない。大丈夫、俺の心は、水着売り場（シーズン前の大博覧会みたいな感じの大規模展示をしてるらしい）に入ったくらいでは碎かれないのだ。ダイヤモンドは碎けない。碎けないのである。

## 論理と論理、力と力

「なあ、やっぱり、無理じゃね？」

「にゅ？ なにが？」

意を決してエスカレーター脇のスペースから一步を踏み出した俺だったが、しかし売り場の入口までやってきて、そこから発せられるよく分からないオーラのようなものに気圧され、その直前で足を止めていた。それはまるで、その場における男の場違い感を増幅しているような、あるいはその場への男の侵入を拒むような。

そしてそれを敏感に感じ取った俺の本能が、この場からの脱出を図ろうとし始めるのだが、しかしそのためには、今もぼっちりメイに握られている右手が邪魔をする。逃げたくても逃げられない。この状況を打開するにはメイを論理的にやつつけるしか方法がないのだろうが、お嬢様モードになっているメイは議論をともに受け付けてくれないだろうから、つまりは現状を打開する方法は俺の手にはないのである。

『幸久くん、いこ？』

「メイ、あんな」

しかし、かなり無理そうな感じがしているとしても、だからといって「はい、そうですか」と引き下がってしまうわけにはいかないのである。だって、女性用水着売り場なんて入れないもの。朝の女性専用車両、女性用下着売り場に次いで男が入りにくい場所が、そこじゃないか。無理だよ無理無理、入れないって。

『どしたの？』

「あんな、ここは女性用水着の展示販売場なんだよ、メイ。ここには女の子が買うものしかおいてないわけで、つまり男が買うべきものは一つも置いていないんだよ。要するに、男がこの場所に入っても、できることはなにもないんだ。ということは俺がここに入っていくことは、俺にとって何ももたらさない。故に俺にとって、

ここに買い物に入るとは意味がない。逆にメイたちにとってはどうか、考えてみよう。俺はここに入っていくことについてあまり乗り気じゃないから動きが悪いぞ。そういうやる気のない人間をいっしょに連れていくと集団全体の動きが悪くなる。集団全体の動きが悪くなると、もちろん買い物というミッション全体に対する遂行率が著しく低下するよな。もしかしたら買い物を満足にすることができなくなるかもしれない。そうしたらほしいものが見つからないうちに買い物が終わらせないといけない時間になっちゃうかもしれないぞ。よし、これで分かってくれたな、俺はここに置いていく方がいいぜ」

『うん、分かった』

「おお、そうか、功利主義的な観点から見て、俺を置いていく方が集団全体の幸福が高まるってことを、ようやく分かってくれたんだな。よかった、ほんとによかったよ、メイ」

最大多数の最大幸福を実現するためには、つまり各個がもつとも幸福になる選択をする必要があるのである。今のこの瞬間の場合、みんなは水着を選ぶために売り場に入ることがもつとも幸福な状態だろうが、しかし俺はここに入らずさっきの休憩所でコーヒーでも飲みながらみんなが戻ってくるのを待っているのが一番幸福な状態なのである。つまりここは別行動を取ることが、全体を見たときにもつとも幸福の度合いが高まるということがよくわかるだろう。

メイもそれを分かってくれたようなので、どうやら俺はここでようやく解放されるのだろう。別にメイに手を握られていることがイヤだったというわけではない、というかむしろちょっとうれしかったのだが、しかしだからといっていっしょに水着売り場に入っていくのはちょっとやっぱりなんというか、アレなのである。

「ゆっつきい、はやくいこうよ」

「行かないって言うてるじゃ、ぬあっ!?　ちょっ!?　うえっ!?」

売り場の前に立ち止まってメイを説得することに意識を費やしてい

た俺だったのだが、それに成功したことへの歓喜に浸っていると、不意に左手が思い切り引かれた。それはメイが手を握っていたことなどとは比べ物にならない力強さであり、意識をメイにだけ向けていた俺は、その姿勢を保つことができなくなってしまった。

それでも転ばないように、何とかたたらを踏んで姿勢を戻し、視線を前に向けると俺の左手を握っているのは志穂だった。志穂は、俺がついてくることに對してそんなに強い関心を持っている様子ではなかったというのに、いったいどうしたのだろうか。

志穂に手をひかれてしまつては、メイに對するときとは異なり、説得するための時間すら与えられず、また論理的なお話を通じることもないのである。せつかくメイを説得することに成功したというのに、どうして志穂がここにきて心変わりしたというのだ。

「ゆっきいもいっしょにくるんだから、はやくいこうよ。ね？」

「お、俺は行かないって、言ってるじゃない！ 人の話はちゃんと聞きなさいって、いつも言ってるでしょ！」

「えゝ、でも、いくんでしょう？」

ダメだこいつ、話が通じない。志穂の頭の中には、どうしてか俺が売り場の中までいっしょに行くとしつかりインプットされてしまっているようであり、それを覆すことはできないのである。つまりしれないが、即座にひっくり返すことはできないのである。つまりこの状況を打開するためには、さっきまでは論理的解決が望めていたのだが、そのパワーに對してパワーで抗うしかなくなっているわけで、しかし俺のパワーでは志穂に抗うことはできないのである。

「志穂、放せ」

「でも、いくんでしょう？」

「行かないもん！ そんなとこ、行かないもん！ 姐さん、助けてよ！」

「別に、それほど問題があるわけではないだろう、ただの付き添いなのだから。私だって、父の買い物に同行することくらいあるぞ」

「それとこれとは話が違ふんじゃね？ だって俺、お父さんじゃな

いじゃん？　っていうか、これってむしろお父さんが娘の買い物に同行してるっていう方が状況として近いっていうか、志穂！　俺が姐さんとおしゃべりしてるときくらいは引っ張るの止めて！　話に集中できないじゃない！」

「ほえ？　ごめんなさい？」

「とりあえず、俺が姐さんと話し終わるまでは引っ張らないでくれ。話し終わったら引っ張っていいから、今は少しだけ待ってくれな」

「うん、わかった」

「で、姐さん、この状況を『お父さんの買い物についていく娘』っていうのと構図的に同一視するのは違うんじゃないかって話なんだけど、やっぱり男としては、いや、男の子としては、こういうところに入るのには抵抗があるんですよ。なんていうかね、ほら、分らないかなあ、こういう男の子的に恥ずかしいものがいっぱいあるところには入りにくいとは思いませんか？　ほら、女の子もさ、あるでしょ、入りにくいところ。具体的にどういふところは分からないけどさ、あるでしょ？」

「水着が恥ずかしいのか？　確かに余り布面積の少ないものは恥ずかしいと思うかもしれないが、しかし誰が着ているわけでもあるまい。今はただの布ではないか。それに三木も、夏になれば海に行くだろう。海に行ったら、それこそ水着を着ている女性がたくさんいるではないか。それも恥ずかしいのか？」

「そう言われちゃうと、そうなんだけどさ。でもあの、着られていたらそれは一つの光景になるんだけど、でもこう、誰も着てないのだと、何ていうか、どういう人が着るか分からないから逆にエロいっていうかさ。なんか、変に想像力掻きたてられて恥ずかしいっていうか、そういう風に想像しちゃう自分が恥ずかしいっていうか、ああ…、なに言ってるか分からなくなってきた……」

「男子にとって、女子が水着を着ているのは、光景として無条件にうれしいものではないのか？　風紀の後輩がそう言っていたのだが」「そいついろいろ素直すぎない！？」

「三木も、少なからずうれしいのではないのか？」

「う、うれしいかうれしくないかで言ったら、うれしいですけど……」

「それならば、うれしいことだというのに、どうしてここに入ることをそこまで拒むんだ。男子が水着を着ている女子の存在がうれしいということを実とすると、論理的におかしいだろう」

「全ての事象を三段論法的に解決できると思わないで！ 仮定1が真で仮定2が真だからって、仮定3も真になるとは限らないのが人間ってものでしょ！」「男は女子の水着が好き」、「男は水着のあるところなら行きたい」、「俺は男」がみんな真でも、「俺は女性用水着売り場に行きたい」にはつながらないの！ 理論計算的にはつながるけど……でも行きたいわけじゃないの！」

「しかし、恥ずかしいから遠慮したいという気持ちはあるだろうが、しかし絶対に行きたくない、というわけでもないのだろう？」

「……まあ、興味は……、なくはない、みたいな……？ あ、あくまでも、学術的な好奇心、だけだね？」

「それならば入ればいいではないか、せっかくここまで来たのだから。私たちの付き添いという形で入れば、そこまで恥ずかしくはないだろう」

「確かに一人で突貫するのに比べたらマシかもしれないけど、でもやっぱりちょっと……」

「うじうじと男らしくないぞ、三木。来るなら来る、来ないなら来ない。男らしくスパツとはつきり決めないか」

「うう……、でも……」

「ゆっつきい、おはなしおわった？」

「うお！？ 応える前に引っ張るなよ！！」

「でもおわったっぽかったし」

「それは俺が決めることで、お前が決めることじゃないでしょ！ っていうか、確認終わるまで引っ張らないの！」

「えっ、でも」

「えゝ、でもゝ、じゃねえよ！　つつうか、なんで誰も止めてくれないの！　誰か一人くらい、そこで待っててね、とか言うポジションの人間はいないの！？　そのポジションは姐さんの係じゃなかったの！？」

「いや、私は、それくらいのことならば、別に問題行動というわけでもないだろうし、構わないのだが。いっしょに売り場に入ったからといって着替えをのぞかれるわけでもあるまい」

「あれゝ？　最近、少し恥ずかしがり屋方面でキャラ立ててくみたいなそぶり見せてなかったっけ……？　俺の勘違いだったの？」

「水着を買っているところを見られるのが恥ずかしいのか？　私はまったく気にしないのだが……。どうせ旅行に行ったら見られるものではないか。しかし、布面積の異常に少ない、破廉恥な水着を買わせようとしていたりするのならば……、私も動かざるを得ないだろうな」

「そんなことしないよ！　……、しないからね？」

「なぜ少し迷った。まさかそう言っておいて私を油断させ、私に破廉恥な水着を買わせるつもりなのか？　そういうことならば、三木にはそこで待っていてもらうことになるが……」

「やらないって、やらない、やりません。俺が行っても危険なことも破廉恥なことも、何にも起こらんわ」

「それならば何の問題もあるまい。来ればいい」

「……、行くよ！　行きますよ！　行けばいいんでしょ！　もう……、みんな嫌い……！」

そして俺は、観念して突っ張っていた足の力を抜いた。志穂の引っ張る力に身を任せて、俺はついにその売り場へと足を踏み入れたのだった。いや、踏み入れてしまったのだった。

「ゆ、幸久君……？」

「ああ、霧子……、さっき、みんなと俺の間に割って入って、止めてくれてもよかったんだぜ？」

「ご、ごめんね……、でも、あたし、あれはちょっと、ムリかも……。」

割って入るのは、ムリ……」

「だよな、分かったてた、分かったたよ、霧子。姐さんには口では勝てないし、志穂にはパワーでは勝てないし、無理だって、はは、無理無理」

「にゆう…、ごめんね、幸久君……」

困っている俺の手助けを出来なかったことがそんなに申し訳ないのか、霧子はしょんぼりとうなだれてしまった。髪を撫でて慰めてやりたいのは山々だが、しかし俺の両手は右をメイに、左を志穂に取られてしまっているの、今それをする事は出来ない。

くっ…、俺にもう一本手があったらよかったのに……。なんで俺の手は二本しかないんだ……。

「ゆっきい、やっぱりいくんだね、メイメイのいったとおり！」

「もう行くしかないじゃん、って話だよ……。…、っていうか、メイの、言った通りって……？」

『これ、見せただけ』

メイはにっこりとほほ笑んで、今まですっかり背けていた携帯の画面をくるりと俺に向けた。その文字列の下には、一行開けてこう書かれていた。

『>幸久くん、素直じゃないね』

「……………。男に、二言はない……」

つまり、メイはそれを志穂に見せたのだ。俺には素直に「うん、分かった」と言っておきながら、そのあとすぐに、俺がメイを説得することに成功した喜びに浸っている隙を突いて打ち込んだそれを、志穂にこっそりと見せたのだ。それこそ、まるでないしょ話でもするかのよう。

とんだ小悪魔がいたものだ。俺は天を仰ぎ、それから息を細く長く吐きだした。一本取られたわい！ とカラカラ笑うことができるほど、俺の男っぷりは凄まじくない。



## お買いもの、しましょ　・　霧子篇

息苦しい。数分して、俺はそう感じた。きっと酸素が足りないのだ、ここには女子素が充満しすぎている。

ここは俺の生息域ではない。そんな確固とした確信が俺に、この女性用水着大型展示販売場からの脱出を促してくるが、しかしそれをすることはできない。俺は買い物に付き合うとついさっき公言したばかりであり、それをそう易々と反転させることはできないのである。たとえメイの小悪魔的な策にはめられ、姐さんにすっかり論破され、志穂に力で引きずり込まれたからといって、そういうことを理由にして己を裏切れることは、俺には出来なかった。

男子たるもの、一度交わした約束は決して破らない心意気でいなくてはならないのだ。もちろん、いままで一度たりともそのようなことをしていません！　と胸を張って言うことはできないが、しかしそれでも、男子として恥ずかしくない生き方を心がけたいものである。

「幸久君、平気？」

「あ、ああ…、なんとか、生きてる……」

しかし、その息苦しさは意外とマジだったらしく、うっかり霧子に心配をかけてしまったようだった。女子素充満による酸素不足に加えて、辺りが無駄にカラフルなことによって眼精疲労が引き起こされ、それに加えてあまりに自分が場違いすぎることに自覚されているので軽い頭痛まで起こっているようである。

もしかしたら、ここに入ったことによって生じたダメージは、俺が思っているよりもずっと深刻なのかもしれない。でも大丈夫、俺はまだ戦える、買い物の付き合いを続けることは、まだ出来る。

「でも、まだいける、と思う」

「そ、そんなに？　やっぱり今からでも外出る？」

「ダメだ、男に二言はない。俺は買い物に付き合うって決めたんだ、

これくらいで簡単にリタイアするわけにはいかないんだ。そんなことより、霧子はどいうの買うつもりなんだ？ 俺は乙女のお洒落マスターじゃないからよく分からないけど、似合ってるかどうかくらいはたぶん分かると思うぞ」

実際、何かしらしていないと頭が痛くて仕方がなかった。そして、ここで俺に出来ることといったら、それはもう買い物の手伝いくらいしかないのである。そして、この売り場の問題として、自分のものを買うために頭を悩ませることができないならば、手近にいる霧子の買い物のために頭を悩ませる以外に道はない。

ちなみに、メイと志穂と姐さんはもはや勝手気ままに散り散りばらばらとなり、自分の買い物に行ってしまったのだった。俺をここに引きこんだ張本人であるメイが俺を放っておいて自分の買い物に行ってしまうとは、流石に思っていなかったのだが、しかしこうして霧子と二人残ったのだからいっしょに頭を悩ませてやろうではないか。

「にゅう、幸久君は、全然当てにならないから、聞いても参考にならないもん」

「えゝ？ そんなことないだろ。少しくらいは役に立つぞ、きっと。俺にだってかわいいものとかわいくないものの区別くらいはつくし、自分以外の視点っていうのも大事なものなんじゃないのか？」

「それはそうだけど…、でも、幸久君、あたしがなに選んでもだいたい『かわいい』とか『似合ってる』っていうんだもん。買ってきたのをかわいいよ、ってほめてくれるのはうれしいんだけど、でも買うときにそれ言われちゃうと、どれを選んだらいいかわかんなくなっちゃうよ」

「それはしょうがないだろ。霧子はもともとかわいいんだから、なに着たって基本的にはかわいいんだ。よっぽどおかしなものを選びでもない限りそのかわいさを妨げることはできないんだよ。大丈夫だ、俺は霧子のかわいさが損なわれていないかを確認することしかできないかもしれないけど、でもそれだけはちゃんとできる、安

心してくれ」

「…、だから参考にならないんだよ」

「？ よし、分かった、がんばる、俺、がんばるぞ。ちゃんと霧子に似合ってるかどうか判定するよ。ちゃんと判定出来たら、俺の言うことも参考になるってことが分かるだろう？」

「…、じゃあ、これはどうかな？ あたしに似合うかな？ 似合わないかな？」

釈然としないような表情をしている霧子が、近くのラックから無造作に水着を一着取り、そしてそれを俺の前に差し出した。俺はそれを受け取ると、前から見たとき、後ろから見たとき、横から見たとき、それぞれがどのようなものであるかを検証し、それが霧子に似合っているかどうかを判断することにするのだった。

それはどちらかというスクール水着に似ているものだったが、しかしそれとは異なり、よりシャープな印象を与えるものだった。全体的な色合いは地味なつや消しの黒だが、胸元にスポーツ会社のロゴが入られサイドには左右対称にブルーのラインが三本ずつ入れられており、なんとなく着ているだけで泳ぐのが速そうに見えるようだった。しかし、後ろ側はバツサリと開かれ、細い布地がクロスして支えているだけあり、ワンピースタイプの水着にしては少し肌の露出が多めのように感じる。本当に競泳の選手が着ているような水着、といえばそのイメージが伝わりやすいだろうか。

しかし遊びに行くのにその水着がいいかといえば、それは少し微妙な感じだった。そもそも霧子は背が高くモデル体型なのだから、ワンピースタイプの水着よりもセパレートタイプの水着の方があっていような気はする。というか、今までもセパレートが大人っぽくていい、と選ぶことが多かったように思うのだが、しかしここに来て「大人っぽいワンピースタイプ」という地点に回帰してくるとは思っていなかった。

しかし、だからといって霧子に似合っていないかといえばそれはまた違っている。生地の色を見てみれば、その良さが分かる。霧子は

特に色が白いので、黒っぽい水着の方がそれをよりよく引き立てくれそうである。さらにそのデザインは全体的にほっそりしているので、スラッとしている霧子の印象に合致している。それが霧子の魅力をさらに引き立ててくれることが期待できるだろう。

俺は、その水着ならば霧子のかawaiiさを妨げる心配がないのでなかなかいいように思うわけで、霧子がそれを気に入っているのならばそれを止める理由はない。

「うーん、そうだなあ…、かわいいと思うぞ？」

「…、じゃあ、こっちはどうかな？ 似合うかな？」

「ん？ こんどはそっちか？」

そして俺の手からその水着を回収すると、霧子はまたラックから水着を取り、俺に手渡した。今度は明るい色のセパレートタイプの水着である。

さっきのものをスポーツ用というならば、今度のものはバカンス用といった方がしっくりくるだろう。全体のカラーリングは暖色系のグラデーションで、プリントの真っ赤なハイビスカスはラインストーンでキラキラに縁どられている。それは言うなら南国調で、まさに夏といった感じであり、寒色系が基本的に好みの霧子がいつも選ぶものとはだいぶ印象が違うように思うが、しかしそれでもかわいらしくていいと思う。さらに、下にはパレオよりも短いカバースカートがついていて、少女らしさを高めているように思う。カバーなしのビキニタイプの水着もいいとは思うが、しかしスカートがついているのも同様にかわいくてよい。そのスカートがフリルではなくチューブ型なのも、霧子のスラッと感を強調していてよい。

つまりこの水着、総じて見るならば、非常によい。ビキニもかわいいのだが、しかし霧子のきれいな肌をあまり周囲の男に見せつけてしまうのも目に毒だろうし、このセレクトは少なからぬ少女としての恥じらいも感じられ非常によい、グッドである。

しかし…、いつもなら避けてしまう、元気で明るい感じの、霧子にとっては新しいものへと挑戦してみる心意気はとても素晴らしいも

のであり、それも一つの成長なのではないかと俺は思う。どうしても同系色ばかりになってしまいう霧子のたんすも、これを機にいろいろな色合いの服に挑戦する気持ちが芽生えれば、少しは色のバリエーションが生まれるのではないだろうか。そうして、いろいろ買ってきた服をいろいろ組み合わせ着て、休みの日に一人ファッションショーでもやってくれば、俺も楽しくてなおよいのだが。そういえば、最近はそういうこともしたがらなくなってしまっ、おにいちちゃん、少しさみしいなあ。おしゃれに目覚めた頃は、俺を観客にして頻繁にやってたのにな、一人ファッションショー。あつ、いや、それはいいとして、この水着がどうか、という話だ。そうだな、うん、やっぱりこれはよいものだ。ぜひとも霧子に購入を勧めることにしよう。

「うん、そうだな、すごくかわいいと思うぞ」

「…、これの方が、いいってこと、かな……？　にゅ、やっぱりあ

んまり参考にならないかも……」

「えっ！？　なんで!？」

「だって、やっぱりかわいいしか言ってくれないんだもん。どれ買えばいいかわかんないよ。っていうか、今、ちゃんと考えてから言った?」

「考えたよ！　すっげえ考えたよ、頭の中で！　それぞれ三段落くらい使って考えたよ！」

「？　三段落?」

「あつ、いや、こっちの話。ちゃんと考えてるから、その点については心配しないでくれ」

「でも、じゃあ、どうして考えてくれたのに『かわいい』としか言ってくれないの?」

「『かわいい』しか言っていないなんてウソばかりだ。さっきのは、かわいかったぞ。今のは、すごいかわいかったぞ。俺としては後の方がいいと思うけど、でも霧子がいいと思う方を買ってくれ。俺は俺の感想に順位をつけることしかできない、やっぱり一番大事な

のは霧子の気持ちだからな」

「にゅー、けっきよく自分で選ぶだもん。幸久君が決めてくれた方がいいのに」

「…、ああ、そういうことか。自分で決めるのは、なかなか決められなくてイヤってことだな。ダメダメ、ちゃんと自分で選ばなきゃ。俺は、俺の主観でいいと思うものを選ぶことはできるけど、霧子にとってそれが最善かどうかは分からない。やっぱり、どれだけ悩んでもいいから、っていうか今日決まらなくたっていいから、ちゃんと自分で決めなさい。おしやれは自分でするものなんだからな」

「にゅ、でも水着はいつものおしやれとはちがうもん。ちゃんと幸久君がうれしいのにしたいんだもん」

「はっ？　なんで俺がうれしいのにするんだよ。そんなことより自分が着ててうれしいのにしなさいよ。俺のことなんてどうでもいいから、自分のために選びなさい」

「にゅー…、幸久君の、バカッ！」

「なんでバカ！？　あっ、霧子！？　痛っ！？」

霧子はプイツ、と踵を返すとツーンとそっぽを向いてあっちの方に行ってしまった、そしてそのついでに振り向きざまのポニテが俺の頬を直撃した。去っていく霧子の背中に垂れ下がっているポニテがふりふりと振られており、その振れ幅が霧子の怒りバロメーターのゲージになっているような気もしたが、しかし今までの経験上これくらいのことでは怒ったことは一度もないし、そもそも霧子が怒るということが自体がひどくレアケースなわけで、今回も怒ったわけではないと思われる。

それならば、いったい霧子ちゃんはどうしちゃったというのだろうか。機嫌が悪くなったとしても、そのポイントがどこにあったのかを解析しなくてはそれを解決に導くことができない。というか、髪を撫でてしまっとうやむやにしている問題なのかどうか分からない、と、それを行使することができないのだ。

うやむやにしている問題ではないところで髪を撫でてしまうと、あ

とからその問題を振り返ることができなくなってしまい、霧子の不機嫌のツボを一つ見逃してしまうことになるのだ。

いや、あるいは、不機嫌というわけでもない、という可能性も捨てきれない。ぬあああああ！　いったい何が悪かったんだ！　っていうか、どういう心境の変化があったんだ！　霧子、戻ってきて解説してくれっ！！

でもまあ、俺がいいって言った方の水着はキープして持っていたみたいだし、別に俺のアドバイ스가マズかったというわけではないらしい。となると、どこだ？　どこが霧子ちゃんのお気に召さなかった？　いや、それ以前に、何かがお気に召さなかったからあっちに行っちゃったのか？　ヤバい、なにもわからなくなってきた。

「っていうか、もう見えねえ……。霧子お…、俺の何がいけなかったんだよお……」

「にゃー、ゆっきいー、なにしてるのー？」

「ん…？　志穂か？」

「うん、そうだよー」

「ってうおっ！？　なんでショートカットしてくるんだよ！　道を

通れよ、道を！！」

「えー、でもとおれるし」

「そういう話してるんじゃないんだよ！！」

そして、へそを曲げてしまったかもしれない霧子に置いてけぼりを食ってしまった俺が軽くへこんでいると、志穂がわき合いから、ラックに吊られている水着をかき分けて姿を現したのだった。

お買い物、しましょ ― 志穂篇

「そこは、人が通るためのところじゃないんだよ。たしかに通れはするかもしれないけど、でもだからってそれをしちゃダメだろ」

「できるのに、しちゃダメなの？」

「出来ることがしていいことじゃないだろ。していいことはしていいって決められてることだけで、それ以外はやったらルール違反になっちゃうんだからな。お店の人に怒られちゃっても、俺はかばってやれないからな」

「んー、むずかしいおはなしだね……」

「別に難しくないだろ。とりあえず、そこは通っちゃいけないところだからこれ以上通るんじゃないぞ。いきなり人が出てきたら、他のお買い物している人がびっくりするだろ？」

「いきなりでてきたら、うん、びっくりするね」

「よし、分かったらもうするなよ。ここはお前の家の庭じゃないんだからな」

「うん、わかったー」

まったく、いくら回り道するのが面倒だからって、商品ラックの中を通り抜けてくる奴がいるかってえの。どうしてそういう、常識的にピンときそうなところが抜けてるのかな。

「っていうか、なんでそんなところ通り抜けてきたんだよ。こっちに何かほしいものでもあったのか？」

「んーん、ゆっきいのこえがしたからきたの。きりりんとおはなししてたみたいだけど、でもきりりんいないね。どっかいったやつなの？」

「俺の声がしたから来たって、どんな理由だよ。俺のことなんて気にしないでいいから、自分のための買い物しなさいよ、もう」

「えー、でもゆっきいといっしょのほうがはやくきまるとおもったから。あたし、みずぎとかよくわかんないし、ゆっきいきめてよ」



「そんなこと言ったってお前、俺はそんなよく分かってないお前よりも分かってないぞ、きつと。だいたいな、こんなの適当に見て回って、よさそうなのを見つけたらそれを買えばいいだけだろ。気にいったやつを探すだけなんだから、俺が決められるわけねえだろ。…、さつき霧子にも同じこと言ったぞ。お前ら同レベルだな、ほんとに」

「きりりんのほうがおしゃれさんだよ、ゆっきい。だって、まえにりょこゝいったときも、きりりんがみずぎえらんでくれたんだもん」  
「あゝ、確かにそんなこと言ってたかもな。うん、そういえばそうだった。なあ、志穂、去年の水着はどう思ってたんだ？　なんか気に入ってるみたいなこと言ってたけど、あれみたいなやつじゃダメなのか？」

「きよねんのみずぎ…、どんなのだったかわすれちゃった」

「忘れたのか？　エラいうれしそうにしてたと思ったのに、薄情なやつだな。ほら、えっと、なんかあの、タンクトップのやつだよ。明るい色のさ、タンキニってやつ？」

「たんに？」

俺だって、別に霧子に聞いただけだから詳しく理解しているわけではないのだが、しかしそれだとしてもそれがまったく志穂に通じないというのはどうしたことだろうか。なんで、いちおう女の子のほずのお前に、女の子用ファッション用語がまったく通用しないんだよ。いくらおしゃれに興味ないからって、そこまでキャラクターに徹底して忠実でいなくてもいいじゃないか。

志穂には少し、女の子としての基礎知識みたいなものを霧子に仕込んでもらった方がいいかもしれない。おそらくそれは無駄に終わるだろうが、しかしそれでも、なんらか意識のようなものは残るだろうから、決して無意味というわけではあるまい。

しかし今は、なんでそんなことも知らないんだ！　と怒ってもどうしようもないので、そんなことはせずにさっさと話を先に進めてしまいうことが重要である。志穂の教育上、現状の志穂がすぐに修正で

きないことについて怒ってしまうことには意味がなく、どうして怒られたのがそもそも分からない可能性が高いので、怒った方の疲労度ばかりが高まり、正直な話、悪いことばかりである。

そのようなことをするくらいなら、今は気にせずその言葉を流してしまつて、話が全部終わった後にそれとなく、そのことに関する話題を少し提出してやるくらいでちょうどいいのだ。そうすれば話の進行が妨げられることもないし、志穂が、話の展開がどこにいつてしまったのか混乱することもなく、一挙兩得というものである。

そしてここでは、話をスムーズに展開させるために具体的なサンプルを目の前に出してやるのが最もいいに違いない。幸運にも周りにはたくさんの水着があるわけであり、去年志穂が身に着けていた水着と似たようなものを探すに困難はないだろうからな。

「あゝ、だからさあ、えっと……」

そして俺は、あたりをきよきよと見まわして、志穂の去年着ていた水着と似たようなものがないかと目を走らせる。実際に、何着もとつかえひつかえして出来るだけ似ているものがないかと精査に精査を重ねた結果、数分かけてほぼ完全にその形状が一致しているものを見つけ出すことに成功した。

うん、ホルターネックのビキニにタンクトップを合わせてる感じ、そうそう、こんな感じだった。しかし色は、確か去年のものは元氣っぽい色だったはずだが、涼しげなブルーで少し違っているが、それでも左の胸元にワンポイントで金色の小さな星が三つほどちりばめられている辺りとか、これはこれで志穂に合っていてかわいいと思う。

「こんな感じのだっただろ？ 覚えてないか？」

「んあゝ、えと、こんな感じだった、かも？」

「なんだよ、ほんとに覚えてないのかよ。せっかく人を選んでもらったのに、霧子が泣くぞ」

「えゝ、でもなつやすみのおわりにしまっちゃったから、もう一年くらいみてないもん」

「一年は経ってないけど、まあ、そうか、志穂の記憶容量じゃ、去年の夏にきた水着がどんなのだったかはさすがに覚えてられないか。まあ、それは仕方ないか」

「どこにしまったかは、おぼえてるよ!」

「どうせそれも、『このたんす』とか、そういうぼんやりした感じなんだろう?」

「あたしのへやのおしいれ!」

「もっとぼんやりしてる!? それ、もう見つからないレベルだろう……」

「ママさんがみつけてくれるから、へいき」

「全然平気じゃないじゃん。ほんと仕方ないな、お前」

「うゆ?」

「…、とりあえず、いっしょに選んでやるよ。かわいい水着、選ぶうな、志穂」

「うん!」

「どうなのがいい? ビキニがいいとか、ワンピースがいいとか、いろいろあるだろう? あとは色とか、柄とか、ほら、言ってみろよ、いっしょに探してやるから」

「つよそうなの! すばやさあがりそうなかんだと、もっといいかも!」

「…、そういうのは、いいんだよ。こういうときくらいは弱くてもいいだよ、志穂。水辺でお前に襲いかかってくるやつなんていないよ、たぶん」

というか、水辺で襲いかかってくる敵って、どういう存在だよ。志穂に襲いかかってくる敵っていうのは不良みたいなものらしいが、属性の違うヤンキーが出てくるのだろうか。陸地が出るのがただのヤンキーなら、水辺に出るのは水ヤンキーとか、そういうマイナーチェンジ感を出してくるのかもしれない。

果たして、水ヤンキーは属性攻撃をしてくるのだろうか。そして、志穂の拳属性攻撃に耐えることのできるヤンキーは存在するのだろうか

うか。というか、俺はこんなどうでもいいことを心配していて大丈夫だろうか。

「サメとかが」

「サメに襲われたらおしまいだからな。去年も言ったけど、人間はサメに襲われたら基本的には勝てないんだからな？　っていうか、行くのは湖だって言ってるだろ？　湖には淡水で、サメは出ない」

「でもでも！　ししよーがサメにかつやりかたおしえてくれたんだよ！　もうかてるよ！」

「サメに勝つやり方なんてねえよ、食われて死だよ」

「ちがうんだよ、ゆっきい！　あのね、サメがくるでしょ？　よけるでしょ？　せなかのあのでっぱりにつかまるでしょ？　で、ボカーン、ってやればいいんだって！　せなかにくつつくなんて、あたしおもしろいかなかった！」

「だから、まずそもそも、その避けるが出来ないんだって。気合ビームみたいなよく分からんものを使おうとしていない時点で去年よりはずっとマシになってるけど、でもその一回目の攻撃を避けて、っていうのが前提として間違ってるんだよ。どうして水中で、古代魚類であるサメの攻撃を避けられると思うんだ。お前は魚じゃないんだから、水中でそんなに機敏には動けないだろ」

常日頃ボカーンと志穂が言って表現しているものは、その口ぶりからして中国拳法における発勁のような理論に則ったものなのではないか、という発想に、俺はこの一年でようやくたどり着いた。となると、去年言っていた気合ビームはその発展形のようなものなのだろうし、今言ったそれはまさに発勁そのものに違いあるまい。昔、中国拳法の達人が遠く離れた場所に置いてあるろうそくの火を発勁で消す、とかいうのを、世界びっくり人間ショーみたいな番組で見たことがあるから、多分間違っていないように思う。

まあ、何にしても、そんなことをされてはあまりに心配なので、本当に発勁を飛ばすことができるほどの能力を持っているとしても、やらないでほしい、ということに違いはないのだが。というか、サ

メと戦わなくても、人間生きていけるのだから、そんなわざわざ危険を冒すようなことはしてほしくないのだ。

「そこは、がんばるんだよ、ゆっきい。それでね、ボカ〜ンてやるのとはべつのも教えてもらったんだよ」

「教えてもらうな、そして俺に教えようとするな。俺の人生に、その情報はまったく必要ない」

「あのね、せなかにのってからね、サメのめにゆびをブチュッ！  
つていれてね、そのままのうみそをグチュッ！ つてつぶすんだって！ しってた？ のうみそがつぶされると、どんないきものもしんじやうんだって！ びっくりだよね！ ゆっきいもしし〜も、しんじやう？」

「バイオレンスだよ！ ああ、もう…、なんだよそんな情報聞きたくねえよ……。たしかに脳を潰せば殺せるかもしれないけど、でもさすがにそんなエグい殺し方出来ないだろ、人間なら……。お前のお師匠さんは悪魔かなにかかよ……」

「しし〜は、わたしはかみですって、いつもいうよ」

「自称・神かよ…、ほんとにその道場通ってて、お前大丈夫なのかよ……」

「あつ、ゆっきい、このみずぎ、つよそう」

「…、話を急に戻すな、志穂。あんまり好き勝手にやると展開が分りにくくなるんだぞ。読者さんのことをちゃんと考えないとダメだ」

「？ ゆっきい、それ、どゆこと？」

「…、いや、なんでもない、気にしないでいい」

「うん？ わかった〜」

なんか最近、時たまおかしなことを口走るな…、いかなあ…、疲れて変な電波でも受信しているのだろうか……。もしかして、がんばりすぎなのかもしれない……。

昨日のパーティの疲労が思ったより残っているのかもしれないし、今日は早めに帰ってしっかり寝ることにしよう。というか、少し弥

生さんとか都さんの世話を焼きすぎなのかもしれない。

「で、どれがいいかもって？」

「えっとね、これ」

「…、うわぁ…、強そう……」

それは、なんというか、ウェットスーツタイプというかなんというか、全身フィットの水着だった。おそらく、世界最速を目指すアスリートの人々が選択するという意味で見れば、それは地球上でもっとも強い水着の一つかもしれないが、しかしそれをゴールドンウィークにみんなで旅行に行く先で着るというのだろうか。それはちよっと、遠慮してほしいというか、もう他人のふりをするレベルというか、常識的に考えて勘弁してほしい。

しかし志穂の発言はおおむね常に本気であり、きっと今のそれも、本当にこの水着が強いものであると本能的に見抜いているからの発言であることは明らかだ。故に、「それ実は弱いんだよ」とか「呪いの装備だぞ」とか、そういう志穂の直感に背くような説得には決して応じないだろう。だが、だからといって旅行先でそんなもの着られても困るわけで、俺はなんとかして志穂の意識をその水着から切り離さなくてはならない。

となると、そこはもう俺の創意工夫が問われるわけで、今までの経験を総動員して事に当たらなくてはならないであろう。

「…、それは、志穂、サイズが合わないだろ。やめときなさい」

「そうかな？　きれるとおもうけどな」

「俺は、そうは思わないな。ああ、思わないな。もっと別にかわいいやつを探してやるから、それはとりあえずラックに戻しなさい。俺が選ぶ係やるから、お前はそれがいいか悪いか決める係な。俺はがんばって志穂に似合いそうなの探してやるから、お前もがんばってそれが気に入るかどうか考えるよ」

「うん？　わかった」

「よし、じゃあ、これはどうだ？」

「ん、ちよっとよわそうかも……」

「じゃあ、これは？」

「すばやさあがりそうだけど、ぼうぎよがよわそう……」

「じゃあ、これは？」

「ん……」

志穂がどういう基準で水着を選ぼうと、言ってしまうえば、俺には関係ないことである。しかしだからといって、あまりに旅行にそぐわない水着を選ばれてしまうと、それはそれで困ってしまうのだ。だからこそ、俺はこうして志穂といっしょに水着を選ぶのであり、さっきのように気を紛らわすために手伝いをするのとは違って、マジである。

## お買いもの、しましょ　― 紀子篇

「こんなところで誰が騒いでいるのかと思えば、まったく、やはりお前たちだったのか。皆藤と三木がいつしょにいと、いつも賑やかすぎるぞ」

「あつ、りこたんだよ、ゆっきい。ちゃんとみちをあるいてくるね」

「当然だろう、姐さんはお前と違って道なき道を突き進んだりしないんだよ。よく見ておきなさい、あれが良識と常識ある大人の姿だ」「りょーしきと、じょーしき？」

「あれ！？ お前、それすらもワードとして認識してくれないの！？ 前は分かってくれなかったっけ！？」

「？　そうだったっけ？」

なんだこいつ、もしかしてどんどん知識が退行しているのだろうか。というか、常識知らずのバカ者め、と常々思っていたのは確かだが、だからといって本当の意味で常識知らずになってしまっているとは、まさか思っていなかった。

そしてそんなことより、俺が水着をとつかえひつかえしながら志穂の気に入るものを探していると、後ろの方から姐さんがやってきたのだった。姐さんもまだ買い物は済んでいないらしく、その手にシヨッパーが握られているということはなかった。

だが、姐さんのことだ、決めるとなったらあつという間に選んでしまうに違いないので、そう心配することもないだろう。

「三木、皆藤、ここは公共の場なのだから、あまり大きな声を出すものではない。特に三木、お前の声は売り場の端の方まで聞こえているぞ」

「えっ、マジ？　やべ、気をつけます」

「ああ、そうしてくれ。それから皆藤、お前も常々声が大きいと言っているだろう。元気なことは結構だが、それも時と場を弁えてくれ」



「はーい、わかりました」

「それで、三木、皆藤の水着は決まったのか？」

「いや、それがまだでして…、なかなかこう、ね？」

「そうだよ、まだなんだよ」

「そうだったのか。あれだけ騒いでいるから、もうずいぶん決まっているのかと思ったが、そうではなかったのだな。しかし、今すぐに決めるてはならないものではあるまいし、よく考えてからでもいいかもしれないな」

「そうそう、別にさ、今日決まらなくてもいいわけだしな。今日のところは保留にして、また後日ここまで来るっていうのも、悪いことじゃないと思うし」

「いや、そこまでの必要はあるまい。時間になるまでは大いに悩んで、そして時間になったらスパッと決めてしまえばいいのだ。また後日、などと変に持ちこする必要などないだろう」

「いや、でも霧子はどうかなあ…、もしかしたら、今日は決め切れなくてまた後日、っていうのが、けっこうリアルだからなあ、霧子の場合は。だから、志穂がそうだっていいし、姐さんがそうだっていいと思うぜ？」

「いや、私はもういくつか目星は付けている。あとはもうその中から選ぶだけだ。時間はそうかからないと思うぞ」

「えっ？ そうなの？ でも、手には何も持ってないみたいだけど？」

「ああ、それなら、問題はないぞ。目をつけておいたのは三つほどだし、それがどこにあるかということは覚えているからな」

「えっ、そんなことしてるの？ それ、ちょっとめんどくない？」

「ふむ…、私は、特にそういうことを思うことはないな。そもそも、かごを持っていくつかキープしていたとして、買うものはけっきょく一つなのだから、他の残りのものは元の場所に戻しに行かなくてはならないではないか。どうせ元あった場所を覚えておくのならば、持っていてなくても同じこと、それならば他の買い物客

が見ることができるようキープなどしていない方がいいに決まっている」

「確かにその通りかもしれないけど、でもそんなこと普通できないよね？　ちょっとした売り場の配置くらいなら覚えてられるかもしれないけど、でもここかなり広いし、そもそも全面的に水着しか売ってないし、覚えとくのめっちゃ大変だろ思うんだけど……」

「そうか？　そこまで言うほどのことでもないぞ」

「まあ、姐さんにとっては、そうなのかもね、うん。俺には多分できないわ」

確かに、売り場全体が完璧な整合性を持って、水着のタイプとか型とかで分けられていて、その上、それが明確に示されているところとかだったら、そういうことをしようという気になるかもしれないが、しかしこの売り場ではそんなことをしようという気にすらならない。季節ものの大型展示販売なので、店はそこまでの人員を割き切れていないのか、商品の陳列は明確な分類がなされていないし、それだから客はけっこう好き勝手なところに、自分がキープしていたけど買わなかったものをどんどん、ほとんど適当に戻して行ってしまうのだ。

だからこの場には、いろいろな水着が適当な並び方で陳列されているわけで、どんどんいろいろな種類の水着をランダムでとつかえひつかえしていく分には便利かもしれないが、しかしふつうに、たとえば水着の型とかで探していく分には不便極まりないのである。だからたとえば、ここでの買い物は、本当に適当に歩きまわって、そして運が良ければいいものにめぐり合うことが出来る、ということなのだろう。それこそ運が良ければ、ということに他ならないのである。

「あたしはおぼえてないよ。水着、どこにあったかな……。ゆっきい、どこだっけ？」

「そんなこと、俺が知ってると思うのかよ。知ってるわけないだろう。どこでお前が水着を見てたのかも知らないっていうのに」

「でも、ゆっきいならしってるかなあゝ、って」

「知らねえよ。とりあえず今、俺がどんどん目の前に出していつてる水着の中からさっくり選んでくれないか。俺はほら、早くお前の水着を決めちゃって、霧子を追いかけなくちゃいけないんだからな」

「きりりんのこと、おいかけの？ あたしのおかいものは、おてつだいしてくれないの？」

「手伝いは、してやるって言ってるだろ。いっしょに水着選んでやるって言ったじゃん」

「そうだっけ？」

「そうだよ。だいじょぶか、その記憶力。ほんのついさっきのことなのに、もう忘れたのか？」

「ゆっきいは、ずっとあたしといっしょにおかいものしてくれるっていつてたきがしたから。ちがうの？」

「違うよ、自分に都合のいいようになんでもかんでも勝手に改変するなよな。霧子の後を追うことは言ってなかったかもしれないけど、でもお前とずっといっしょに買い物するとも言っていないだろ」

「にやゝ、そうだったかも？」

志穂は、おそらくついさっきの俺との会話をまったく記憶していないのだろう、くいと小首を傾げると、ぽりぽりと頭をかいてそう言った。あるいは、記憶していたが、今しがた続けざまにいくつもの水着を見せられたので脳の一時メモリがフローして、会話のデータがあまり重要ではない記憶として消去されてしまったのかもしれない。

志穂は一時メモリが少ないうえに長期記憶への移行が遅いから、いっぺんにたくさん情報を与えすぎてしまうと、すぐにいっぱいになってしまって古い情報から上書きされてしまうから気をつけなくてはならないのだ。

というか、実際のところ、学校の授業ももっとゆっくりやってくれないと志穂がついていけないっていうか、現在進行形でついていけないというか、そもそももうついていく気がないというか。…、

いや、たしか、あいつは一年の一学期からもう既に授業時睡眠体制を維持してたはずだから、高校に入った時点でもはややる気をなくしてしまったということなのだろうか。

しかし、うちの高校、そこそこレベル高いはずなんだけど、志穂はどうやって入学したんだろうか。あの学力だと、入学試験で余裕ではじかれるだろうし、それ以外の方法があるかといえば、推薦くらいしかないし、でも推薦って中学のときの成績が良くないと取れないっていうし。志穂は、ほんとに不思議な娘だなあ……。

「とりあえず、さっさと選んじまおうぜ。姐さんも来てくれたことだし、いっしょに選んでもらおう」

「はーい」

「姐さんは、志穂にはどういう水着があうと思う？」

「そうだな…、皆藤に似合うものか……。私も、おしゃれとはどういうものなのか、よく分かっていないところがあるからな……」

「えっ、でも、自分のほう目星つけてるんだろ？ それなら志穂のも、パパツといい感じに選んじやってくれよ、姐さん」

「自分のものを選ぶことと、人のものを選ぶことは、やはり違うだろう。自分の物ならば、それこそ今まで生きてきて何着も服を着ているのだから、なんとなく分からないでもないが、しかし自分以外の人の服を選ぶとなると、やはり少し勝手が違うではないか。そう考えると、天方はすごいのだな。去年は皆藤に似合う水着を簡単に見つけ出していたのだぞ」

「でも霧子は、人を選ぶのは得意だけど、自分のを選ぶのが絶望的に苦手だからな」

「？ そうなのか？ 去年もかわいらしい、よく似合っているものを買っていたように思うのだが……」

「あっ、いや、センスが悪いとかじゃなくて、決められないんだ。人の分だとけっこうサクッと決めてくれるんだけど、自分のになると悩んで悩んでな。まあ、霧子の性格的に、自分の着るものだからこそ逆に悩むのかもしれないけど」

霧子は、他人の服を選ぶときは、純粹にその人にとって似合うものを探そう、っていうスタンスを取るのだが、しかし自分のものを選ぶときは、似合うものを選ぶのは当然なのだが、それを他の人が見たときどう思うかとか、そういう細かいところまで気にし始めてしまうのだ。そんなこと、絶対に分かるはずなのに考えてしまうから、基本的に悪い方に悪い方に思考が行ってしまつて、なかなか買う服を決められないのである。

もつと自分に自信を持ちなさい、と常日頃言い続けているわけなのだが、しかしなかなかその自意識は変えられないものなのだ。今後もしあるごとに、霧子が自分に自信を持つことができるように声をかけていってやらなくては、その性格をよい方向に引っ張ってやることはできないだろう。

「ふむ、そういうものなのか…、三木は、やはり天方のことをよく分かっているのだな。天方も三木のことがよく分かっているようにだし、付き合いが長いから、よく知りあっているということなのだろう」

「そうだな、うん。まあ、分かっているっていつでも、霧子は日々成長しているから好みとかも刻一刻と変わつて、なんでも知つてゐてわけじゃないんだけどな。言うなら、知つてゐることは知つてゐる、って感じだろ」

「しかし、相手が今なにを考えているかとか、なんとなく分かつたりするのか？ 私にはそういう、古くから今までずっと付き合いのある友人というのはいないものでな、分からないんだ、そういう感覚は」

「んー、なに考えているかは、だいたい分かるかな。まあ、全部分かるってわけじゃないけど、だいたい。あと、なにしているかもだいたい分かるな。霧子は昔からあんまり生活サイクルと行動パターンが変わつてないから。今は風呂入つてゐる、とかそろそろ晩飯食つてゐる、とかそろそろ電話かけてきそう、とか」

「思ったより分かるものなのだな、いろいろと。…、それは、まさ

か、天方の家に何か細工をして情報を得ている、というわけではないのだな？」

「姐さん、俺のこと疑り深い目で見過ぎだよ。俺はそんなことしないよ。隠しカメラでの盗撮も、超小型集音器での盗聴もしてないから、そんな目で俺を見ないでくれ、頼むから」

「いや、まさか、本当にそんなことをしているとは思っていないが、あまりに自信たっぷりになっちゃうことを言うから、まさかと思っただな。気を悪くしないでくれ、いちおう言ってみただけだ」

「それに、霧子はけっこう俺に電話かけてきたりするんだよ。それで、今なにしてたんだよ、とか言ってくるんだ。だからなんとなく、霧子の行動パターンが俺の知識の中に蓄積されていつて今に至るっていうか、そういうことなんだよ」

「天方が電話をしてくるのか？ しかも、よく？」

「？ ああ、よくかかってくるよ。三日に一回くらいは必ずくるかな。テンパってるときは毎日かかってくるよ。夜寝る前の30分とかに、遠慮しながらもずうずうしくかけてくるぜ。っていうか、たまに電話してる途中なのに寝たりするし、あいつは自由なやつだよ、みんなが思っている以上にな」

「そうなのか？、天方から電話がかかってきたことなど、私は数えるほどしかないのだがな。あまり電話は好きではないのかと思ったが、そうではないのか？」

「ああ、前に霧子のケイタイいじってたら発信履歴の名前、俺ばっかりだったつけ。そうか、あいつ、俺以外にはほとんど電話しないのか。俺のことなんだと思ってるんだ、あいつ」

「友人、いや、親友ではないのか？ あるいは、兄のように慕っているとも言えるかもしれない」

「それじゃあ、兄のように慕っている、で。俺は霧子のことを妹のように愛しているからな」

「二人は仲がいいからな、うらやまし限りだ」

「霧子はあげないからな？ 姐さんでも、霧子はあげないぞ？」

「まさか、三木から天方を奪いとうなど、そのようなこと考えてもない。しかし、そう考えると、昔馴染の友人というのはいいもののように思えるな。言葉にしなくても通じ合う事ができる間柄というのは、少しだけあこがれる」

「姐さんは、まだ俺とそんなにツーカーじゃないな。もっと姐さんのことも知らないところ、姐さんはどんな水着を買うことにするつもりなんだい？」

「私は、華やかな水着が似合うような女ではない。だから今年も地味なものにしておくつもりだ。私の買う水着など、知っても何の得にもなりはしないぞ。そんなことを気にしていないで、皆藤の水着をいっしょに探してやった方がいい」

「そうだよ、ゆっきい。みずぎ、えらんでくれるんじゃないの？」

「おお、そうだった、そうだったな。うっかり姐さんと話し込んでしまったぜ。よし、それじゃあさっきの続きするか」

「うん！」

「よし、私も、及ばずながら力になるぞ」

そうして、一時中断していた志穂の水着選びは、新戦力である姐さんを加えて再開される運びとなった。姐さんの選んだ水着は気になるものの、きつとまた後で見せてくれるだろうから、ここは意識を志穂に集中させるべきだろう。

というか、姐さんは自分の選ぶ水着を地味といっているが、あれは地味なのではなくシックなのであって、華がないなどとは嘘八百でありそもそもからして姐さん自身が華なのだ。

姐さんが水着を着て優雅にねそべっている様など、いけないと思いつつも妙な色気のようなものを感じてしまって、正直ドキドキするのを禁じ得ないのである。

お買いもの、しましょ　―　芽依篇

『買うの、決まった？』

俺と姐さんがうんうん唸りながら志穂の水着をとつかえひつかえいていると、よくわかんない、という顔をしている志穂の後ろのほうからテクテクとメイが歩いてくるのだった。その腕にはかごが提げられており、メイはもう買うものが決まっているのだろう、すでに水着が一着入れられている。

「メイは、もう決まったのか？」

『決まった』

「決めるの早いな、メイ。俺たちはまだ志穂の水着を選んでる途中なんだよ」

『しほちゃん、決まってないの？』

「んゝ、まだゝ」

「まだゝ、じゃねえよ。お前はもっと、自分のものを買ってるんだっていう意識をしっかりと持って、もう少し協力的な態度を示してくれよ」

「えゝ、でもあたしもがんばってえらんでるよ？　ゆっきいとりこたんがみせてくれるので、どれがつよそうかかんがえてるもん」

「あゝ、はいはい、そうだったね、志穂もがんばってくれてるよな。で、姐さん、よさそうなのあった？」

「いや、このあたりのものでよさそうなのは、だいたい見せたはずだ。それで皆藤が領いてくれるものがないとなると、場所を変えるしかないかもしれないな。隣のラックはまだ見ていないから、皆藤の気に入るものが置いてあるかもしれない」

「でも、そういつてラックを買いえるの三回目だぜ。もう、こいつに水着を着せるなんて無理なんだよ……」

「しかし去年は、天方の選んだものを着ていたではないか。大丈夫、去年だって気に入るものがきちんと見つかったているのだ、今年も見



つかるに違いない。諦めるのはまだ早いぞ、三木。さあ、次のラックに移るぞ」

「…、ああ、分かった。よし、次、いくか」

正直な話、俺は姐さんをこの作業に巻き込んだことを後悔し始めていた。当然、それは姐さんが役に立たなくて足を引っ張っているとか、そういうことを言っているわけではない。

姐さんは、例によって例のごとく優秀な働き手であり、おしゃれのことなどよく分からないと言っていたにも関わらずテキパキと志穂が気に行ってくれそうな水着をピックアップしていき、俺がラックに返そうとしている水着と引き換えに手渡してくれるのだ。だからもう、俺なんてただ水着を置いたための台になっているようなありさまであり、俺こそいらぬのではないか、という気すらしてくる。

だが優秀すぎるということとは、それは間違いなく長所なのだが、しかし行きすぎるとやはり一つの短所になってしまふのかもしれない。いわく、過ぎたるは及ばざるがごとし、というやつである。

「絶対に見つけるぞ、三木。絶対に、だ」

「が、がんばるぞ、お」

「どうした、三木、元気が足りないぞ。もっと私にお前の強い意気込みを見せてくれ」

「が、がんばるぞ！ お」

「よし、その意気だ。さあ、行こう」

我らが姐さん、風間紀子は、基本設定として完璧主義者である。勉強も風紀委員会も、運動も武道も、なんでもかんでも自分の関わるものは、可能な限り完璧に近づけることを目指すのだ。そしてここでも、その性質は当然のごとく顔を出してくる。

姐さんは、やる気がありすぎるのだ。志穂の水着を選ぶことなんて、正直に言えば、別に今どうしてもやりとげなくてはならないタスクということでもないわけで、もう少し適当なスタンスで関わって行ってもいいだろうに、そうすることができないのである。いつも肩に力が入ってしまっているというか、そうやって何にでも本気で向

かっていくことのできるところが姐さんの美点ではあるのだが、しかしそれでは疲れてしまうのではないか、と少し心配になってしま  
う。

そうやってがんばり切れてしまうのは、もちろんその優秀さによる  
のであり、優秀だからこそやり遂げられてしまうのである。そして  
やり遂げられてしまうからこそ、自らにそれを強迫的に課してしま  
うのだ。今日だって、別に志穂のために水着を選ぶミッションをこ  
なすためにここに来たのではなく、それぞれが好きなように（もち  
ろん俺は誰かといっしょにいることになるだろうが）思い思いに買  
い物をするはずだったのだ。それだというのに、俺がすっかり姐さ  
んを巻き込んだばかりに、楽しい姐さんの買い物一つの大変な  
ミッションになってしまったではないか。

ただでさえ日ごろ気を張っている姐さんが、せっかく息抜きできる  
場がここだったというのに、ああ、俺の勢い任せのうっかりミスに  
よってその姐さんの気の休めどころを奪ってしまったのだ。なんと  
いう愚かさであろうか、三木幸久。己の面倒の故に、よもや自分よ  
りも数倍、いや数十倍…、十数倍気を張って生きている姐さんの癒  
しを奪するとは、許されざる蛮行である。

「三木？　どうかしたのか？」

「えっ？　あっ…、いや、姐さん、ごめんなさい……」

「？　急に謝ったりしてどうしたのだ、まったく。また何か悪いこ  
とでも考えてしまったのか？　三木は、すぐに思考がネガティブな  
方に行ってしまうからな、困ったものだ。そういうときは、大抵  
お前の思いすごしなのだから、気に病むことはないのだぞ。三木は  
種々方々に気を回し過ぎなのだ、もう少し気楽に、肩の力を抜いて  
思考した方がいいのではないのか？」

「いや、姐さんにだけは、それは言われたくないかな」

「それは、どういう意味だ？」

「あっ、いや、なんでもない。気にしないで」

「いや、駄目だ。聞いてしまった以上気にしないわけにはいかない。

聞いたことを聞かなかったことにすることは出来ない性分でな、すまない」

「それは、知ってるけどさ……」

しまったな、マズいことになってしまった。このまま話を聞きだされてしまったら、おそらく、さっき頭の中で考えていたことをすべて姐さんに吐露することになってしまっただろうし、そうなのは俺が姐さんに対して、いらぬ気を回していたことも全て明るみに出してしまうではないか。

うう…、それはマズい。姐さんは裏で手を回されたり、自分の知らないところで変な気を使われたりすることが何よりも嫌いなのだ。そんなことをしていたのがばれてしまっただけ、イヤな顔をされることはないだろうが、また「まったくもう…」みたいな顔で見られてしまうのではないか。あの顔は、けっこう精神的に来るので出来るだけさせたくないのだ。なんとかして誤魔化さなくては……。

しかし、そう簡単に誤魔化すことができるほど姐さんは安い女ではない。並大抵の論理的な攻めでは絡め取ることはできず、それこそ反則すれすれの攻め方をしないと誤魔化すことすらできないのである。

『幸久くん、だいじょぶ?』

俺が微妙に現状に窮していると、袖が小さくクツ…、と引かれる。そちらに軽く視線を向けると、いつの間にか俺の後ろに回っていたメイの手がそこにあり、そして煌々と輝くケイタイの液晶画面がそこにあった。

なんとなく、そんな気配を感じたので声をひそめて、俺はそれに言葉返した。

「だ、だいじょぶ、だぜ?」

『うそ 助けてあげる』

「うぐ…、でも、大変だぜ?」

『平気、なんとかできる』

さっきまで、俺たちと合流してからずっと無口を貫いていたメイだ

ったが、しかしここにきてやけに自信満々にそう言い放ったのである。しかし、どんな秘策があるにせよ、姐さんと面と向かい合って言葉をぶつけあうことは賢いことではないだろう。そのことを、果たしてメイは知っているのだろうか。もし知らないのならば、今すぐにそれを教えてあげなくてはならないわけで、また知っているのであれば、友としてそれを止めてやらねばならないのである。

しかしなにやら秘策があるということだし、それはもしかしたら真正面からのぶつかり合いではないのかもしれない。そういうことなら、あるいは安全なのかもしれないし、変に心配などすることもないのかもしれない。でも、いやしかし、やっぱり…、あゝ、でも俺じゃきつとどうすることもできないし、俺は完全に裏のフォローに回って、ここはメイに任せるのがもっとも賢いのもかもしれない。

「悪い、じゃあ、頼む」

『任せて』

そして、メイが俺の脇からスツと前に出て、まるで俺をかばうように姐さんとの間に入った。自分の胸くらいまでしか身長のないメイなのだが、そのときはどうしてか、その後ろ姿は無性に頼もしく感じられた。

『のりちゃん、幸久くんの言ったこと、気になる？』

「おお、持田、そんなところにいたのか。なんだ、三木の言おうとしていたことが、お前には分かるのか？」

『分かる』

「そうなのか、それならば、ぜひ私にも教えてくれないか。気になっ

てしまうと、どうしても知りたくなってしまいう性分だな」

『うん、いいよ』

あれ？　メイさん？

『幸久くんは、のりちゃんも肩に力入ってるっていいたい』

ちよっと…、ちよっと、メイさん？

「そうなのか？　私としてはそのようなつもりはないのだが…、よければ、どこがそう感じられるか教えてもらってもいいか？」

『いい』

止めるべき？ 止めるべきだよな？ だって俺は、姐さんにその話をしないで済ませるにはどうするべきだろうか、と画策していたのだから、今の状況はそれにそぐわないではないか。それはやはり止めなくてはならないのではないだろうか。

いかにメイに秘策があるとしても、ここで止めなくては前提自体が破たんしてしまうのではないか？

「なあ、メ」

しかし俺が口を挟もうとしたところで、後ろ手に回したメイの左手が俺のシャツの裾を引いた。あの、これは、お前ちよつと黙っているよ、ということでしょうか、メイさん。だが、それをメイに確かめる術はない。そうするためには声をあげるか、メイのまえに回り込んで目を見るしかないわけで、そんなことをしたらメイの秘策自体を潰してしまいかねない。それではサポートメンバーに回った意味がないというか、サポートメンバーとしての存在意義を全うできないというか。

「……………」

口を挟もうとしてメイに止められた俺が、どうしたらいいか微妙に迷っているとメイの口元がかすかに動いたのが見えた。今のところ無口キャラを完璧に全うしているメイが言葉を口から出すことは今後もおそらくないように思うが、しかし声は出ていなくても、くちびるだけはまるで言葉を紡ぐように小さく動いている。

え、い、い。

もちろん口の形からは母音の配置しか分からないが、なんとなくその言おうとしていることは、前後の文脈から推測することは不可能ではない。そういうことに不慣れな俺でも短い単語一つや二つくらいなら出来る、気がする。

文脈からして、へいき、平気だろうか？

平気なのか？ 平気なんですか？ ほんとに平気なんですね、メイさん？

『楽しくお買い物してるはずなのに、のりちゃん、目が怖い。もつと笑って?』

「むっ…、そうか?」

『まゆげの間にしわが寄ってる』

「ああ、そんなにか? 参ったな…、いつの間にかそのような顔になっていたとは」

『のりちゃん、ちょっとかがんで?』

「ん? こうか?」

『もうちよつと』

「? これくらいでいいか?」

『いい』

そしてメイは、かがんで自分の顔と同じくらいの高さにある姐さんの顔に手を伸ばすと、眉間に寄ってしまったているしわをクイクイと小さな親指で伸ばしていく。

『これでいい』

「いいのか?」

『あとは、ニコツとして』

「…、これでいいか?」

『いい』

「よし、それでは買い物続けるか。皆藤、あちらのラックに行こう。持田、教えてくれてありがとうな」

『気にしない』

「ああ、そうさせてもらう。三木はどうする、こちらに来るか?」

「あつ、いや、えっと、メイとちよつと話があるから、あとで合流する」

「そうか。三木、あれくらいのことだったら言ってくればいいではないか。まったく、何を言い淀んでいるのかと勘ぐってしまったではないか」

「あ、ああ、ごめんごめん、変に気にしちゃうんじゃないかと思つて」

「私はそのくらいのことを気にしたりしない。むしろ言ってくれた方が改善できていいではないか」

「こ、これからはスパツと言うようにするよ、うん」

「ああ、そうしてくれ。それではまた後でな」

「…、なあ、メイ、なんで丸く収まったんだ？」

姐さんが志穂を連れて向こうの方に行ってしまったって、俺はメイにそう問いかけずにはいられなかった。俺が思った一番良くない状況は、しかしおそらく最もよい解決をもたらした。どうしてそうなったのか、正直見当もつかない。

「言わない方がいいと思ったんだけど、さっきの」

『幸久くんは、言わない方がいい』

「えっ？ どういうこと？」

『のりちゃんも、女の子ってこと』

「？ そりゃ、そうだな」

『そういうこと』

「…、どういうこと？」

『幸久くん、ちょっとかがんで』

「？ こう？」

『そう』

そしてメイは、ついさっき姐さんにやったように俺の顔に手を伸ばし、そしてさっきとは違って立てた人差し指で俺の額をつーん、と突いた。

『鈍感、ダメ』

メイは、かがんだまま額を突かれてバランスを崩し尻もちを突いた俺をしり目に、くるりと背を向けるとパチンとケイタイを閉じてポケットにしまいながら去っていくのだった。

「え…？ え？」

それがどういうことを意味するのかまったく分からなかった俺は、向こうの方にテクテクと歩いていくメイを見送るしかなかった。

鈍感って…、どういうこと……？

## 寄り道 のち 寄り道

「さて…、帰るか」

メイに額をつーんとされてから30分くらいが経って、けっこういい時間になってしまったので買い物はそこで打ち切りという運びになった。そして、さっきの時点ですでにかごを腕に提げていたメイは当然として、姐さんが全力を賭して取り組んだ志穂の水着選びミツションも無事に達成されたようで、さらに姐さんもいつの間にか自分の買うものを回収してきたらしく、どうやら三人分の買い物は無事に終了したらしいことが分かる。

「にゆう…、けっきよく、決まらなかった…」

「また今度いっしょに来てやるから、変なところで落ち込むなよ。」

元気出せ、霧子」

それならば霧子は？　　といえ、おそろくなるだろうなあ、とは思っていたのだが、本当に今日の買い物のうちには買う水着を決めることができず、三人が各々ショッパーを手に提げて帰宅する中、手ぶらで退散することを余儀なくされたのである。

まあ、霧子のことだから、極限状態に追い込まれない限り即断なんて出来るはずがないわけで、そんなことは長年の付き合いによってとっくに理解されていたことなのである。霧子が即決即断できる状況なんて、それこそ旅行の前日になってしまいました、とかバーゲンセールに来てしまいました、とか、そういうかなり追い込まれた状況にならなくてはいけないのだ。

だから、まあ、また後日に俺が買い物に付き合ってやるわけなのだが。霧子は、時間をたっぷりあげさえすれば最善解を導き出すことができるのだから、それをさせてやるための手間と時間を惜しんではいけないのだ。全ては、旅行のとき霧子にかわいい水着を着せてやるためなのであり、そのためならば、俺は何時間でも、いや何日でも霧子といっしょに水着売り場に足を運ぶだろう。



さつきは、女性用水着売り場になんて入りたくないよ！ とかたくなに主張していたわけだが、しかし霧子のためというのなら話は別である。万難を排して、何度でも足を運ぶことにしようではないか。

「ゆつきい、もうかえるの？」

しかし、俺がもうすつかり帰ろうかな、という気分になっているというのに、その空気をまるで感じ取ることなく、志穂がなにやら言いだしたのだった。そして俺は、直感的に、これから志穂の口から出されるであろうことの面倒くさそうな気配を感じ取った。だが、だからといって会話を放り投げてダッシュ逃げするわけにもいかず、来るぞ：、来るぞ：、みたいな感じになりながら、俺は志穂のその言葉に応えるのだった。

「：、帰るだろ。っていうか、帰らない理由ないだろ」

「ゆつきのうちでおちやのみた〜い」

来た：、どこからその発想が出てきて、その着想に落ち着いたのか、まったく読み解くことはできない（そもそも志穂の思考の経路を逆算することなんて往々にして不可能である。やつの思考においてワープやジャンプは常識であり、それがあつ以上、その不可能感が払しょくされることはない）が、しかしそれは志穂の口から出てきてしまった。おそらく根本にあるのは、せっかくお出かけたのだからもうちょっと寄り道していたい、という意識で、そこから「寄り道といったらお茶」になって、そしてすべての可能性をジャンプして三木家にたどりついた、のだろうか？

もしも最短距離で思考が行きついたとしたら、おそらくそれは比較的正解に近いかもしれないが、あるいはまったく的外れかもしれない。志穂の思考回路は不思議がいっぱいなので、そもそも予測しようとかいう考えそれ自体が間違っているのかもしれないが。

「：やだよ。なんでわざわざうちまで行ってお茶飲まなきゃいけないだよ。そんなにお茶飲みたいなら、どっか喫茶店でも入ればいいだろ」

「えゝ？ でもゆっきいのおちゃ、おいしいよ？」

「まあ、広太の淹れる紅茶が美味いことは認めるが、でもだからってここからわざわざうちまで行ってお茶にすることには同意できない。というか、俺は帰る。そろそろ夕食の支度し始めないと、間に合わなくなっちゃうかもしれないからな」

「ゆっきい、いかないの？ ゆっきいのおうちなのにな？」

「だから、俺のうちには行かないって言ってるんだよ。人の話を聞けよ。っていうか、うちに来て甘いものとか何もないからな。この間は偶然もらいものがあっただけど、今日は絶対ないからな」

「でも、ゆっきいならケーキやいてくれるんでしょ？」

「焼かねえよ！？ 俺は晩飯つくりに戻るって言ってるでしょ！？  
っていうか、うちに来ること前提で話進めるのやめろよ！？」

「えゝ？ じゃあ、ゆっきいはどうするの？」

「だから、俺は帰るって言ってるだろ！？ 話かみ合わねえなあ！  
！」

「ゆ、幸久君、落ち着いて……」

「あ、ああ…、落ち着こう……。とりあえず、志穂、一つ分かってくれ。たとえこのあとさらに寄り道したいとして、そしてその行き先がどこかお茶が飲めてゆっくりできるところだったとして、それはうちじゃない。うちは喫茶店じゃないんだから、来るんじゃない」  
「うゆ、そうなの？」

「そうなの。寄り道したいなら、どこか喫茶店に行きなさいよ。この辺だったら、霧子が知ってると思うから案内してもらえ、な？」

「うん、わかった、じゃあ、いこ、ゆっきい」

「だから…、俺は行かないんだって……」

「でも、幸久君、まだ少しくらいだったらだいじょぶなんじゃないの？」

「いや、まあ、少しくらいだったら平気かもしれないけどさ、でもだからってギリギリ限界までほっつき歩いてなくてもいいだろ？」

「でも、少しだけでもついていってあげればいいちゃんもきつと満

足してくれると思うし、すぐ帰るとしても、いっしょに行ってあげればいいんじゃない？」

「むっ、そうか。別に、すぐ帰ってもいいのか……」

「そうだ、寄り道に付き合ったからといって、最後の最後まで付き合いなくてもいいのだ。いっしょに喫茶店まで行って、少しだけそこにいてそれから先に帰ったっていいんじゃないか。それならきつと志穂も納得するだろうし、もしかしたらそれが一番きれいな結論の付け方かもしれない。」

「冴えてるな、霧子。買う水着は決められなくても、問題解決の方法に対するひらめきは、この瞬間完全に俺を超えているぞ。」

「…、よし、志穂、仕方ないから俺もいっしょに行ってやることにしたぞ」

「ほんと？ わーい、みんなでおちゃー」

「っていうか、お前、そんなにお茶するの好きだったのか。知らなかったな」

「ほえ？ そんなでもない？」

「えっ！？ そんなでもないの！？」

「しいちゃんは、みんなといっしょにいるのが好きなんだよね？ お茶じゃなくても、なんでも好きなんだよね？」

「うん、そう」

「ああ、そういうことか。…、じゃあ、いっしょに買い物したので満足して家に帰ってくれよ。なんでそれに加えてさらなる寄り道を要求してるんだよ」

「みんなといっしょにいるの、いっぱいほうがうれしい！」

「…、そうだね。うん、そうだ、まさにその通り」

まあ、少し付き合ってやればすんなり帰してくれるだろうし、もう少しだけいっしょにいてやるとするか。別に、志穂といっしょにすることが苦痛ってわけじゃないし、もうちょっとだけなら諦めてやろう。

「それじゃあ、いっしょに行く人」

「あたしは、もうちょっとだけだったら帰らなくても平気だよ。おねえちゃんもバイトで帰り少し遅れるって言ってたから、晩ご飯の時間がちよっと遅くなるし」

「ああ、今日はバイトの日か、晴子さん。ってことは、雪美さんがこの時間になっても一人ってことか…、腹減らして料理しようとして、火事にでもなっとなきゃいいんだけど…」

「それは…、だいじょぶだよ、たぶん、うん」

「はいはいはい、いくよ」

「分かってる、志穂は分かっているから言わなくていいからな。姐さんは、どうする？ 来ても平気そう？」

「そうだな…、あまり寄り道をするとはよくないことだし、遅い時間までうろついているのもよくないことだ。だが、うむ、たまにはそういうことがあってもいいかもしれないな。よし、私も同行しよう」

「そっか、姐さんは来るのな」

こういうこと、つまり学校からの帰り道に寄り道をするとか、買い食いをするとか、夜まで学生だけでうろろしてるとか、一般的に見てあまりよくないとされていることに対して、去年から今にかけて姐さんの態度はかなり軟化しているように思う。去年の初めの頃なんて、いろいろ細かなことに対してもダメ、ということが多かったように思うし、いい意味で碎けてきているということかもしれない。

ああ、そう考えると、学生だけで旅行に行くなんて、姐さんのアウトだったかもしれないのに、よく去年はついてきてくれたよな。それとももしかして、俺たちが変なことしたりしないように、監視する意味でついてきてくれたのだろうか？ まあ、姐さんは、やっぱり心配性だからな。

「メイはどうする？ 来るか？」

『あたしは』

俺の問いかけに、メイはそれだけが打たれている画面を俺の方に向

けた。書き切っていない文字の連なりは、まるでメイが言い淀んでいるのを表わしているかのようだった。

そしてケイタイの脇に添えた人差し指でその側面をコツコツと、まるで考えをまとめているぞ、と言うように一定のリズムを保ちながら叩いている。

コツコツと、何度叩いただろうか、メイの右手がふっ…、っと動きを再開する。ほんの一瞬、ケイタイのキーがいくつか叩かれ、未完成的の言葉が完成する。

『あたしも、行く』

「そっか、メイも行くか。っていうか、けっきょく全員で行くのか」「そう、だね」

「みんなでいったほうがたのしいよ!」

「全員でまとめて動いた方が、防犯上安全ではあるからな、いいのではないか? 私も皆藤もいる、おそらくバラバラに解散してしまうよりは安全だろう」

『幸久くん、喫茶店って行くあて、ある?』

「行くあて? 霧子、どっかいいところ知ってるか? 知ってるよな?」

「にゅ? ん…、いくつかあるけど、どこがいいんだろう……。それに、あんまり一人で行ったことないから、道とかはつきりは覚えてないし……」

「…、仕方ない、じゃあ、今日のところは何もなしで解散というところで……」

『あたし、いいところ知ってる』

「えっ? 知ってるのか、メイ?」

『家、こっちの方だから』

「ああ、そうだったのか…、っていうか、メイってバス使って通学してるのか?」

『うん』

「そうだったのか、そういえばどこに住んでるかってまだ聞いたこ

となかったつけ。しかし、毎朝こっちの方から通学して来るっていうのは、ちよっと大変だな」

『そんなことない。バス、早い』

「そうか、やるな、バス……。で、それってここから遠かったりするのか？」

『そんなことない。デパートからならすぐ』

「そうなのか、じゃあ、他のところも別に思いつかないし、そこに案内してもらうか。いいよな、霧子？」

「にゅ、あたしは、平気だよ」

「あたしも、いいよ。メイメイ、どんなとこなの、そこって？」

『静かなとこ。店員さんたちもやさしい』

「おお、それはいいところみたいだな。俺はあんまり喫茶店とか行かないし、あんまり知識もないからそうやっておすすめのところを教えてくれると助かるぜ」

『幸久くんも、きつと気に入ると思う』

「そうかそうか、楽しみだな。メイは、その喫茶店、けっこう行ったりするのかな？」

『うん、よく行くよ。すごい美人の店員さんがいて、今日はその人がいる曜日なんだよ』

「へえ、そんな人がいるのか。メイが美人っていう人なら、きつとすごいきれいな人なんだろうな」

『キレイな人だよ。ハルさんっていうの』

「ハルさん？　ハルさん…、ハルさん、ねえ……」

ハルさんといわれて、俺がその人のことを知っているはずがないのだが、しかしどうしてか脳裏に晴子さんの姿が浮かんだ。確かに、晴子さんの名前を縮めればハルさんになるかもしれないが、だからといってそれがどうしたというのだろうか。

霧子言うには、今日は晴子さんのバイトの日ということだが、それがどうしてここでつながるというのか。別に晴子さんのバイト先がその喫茶店というわけでもあるまいし。いや、まあ、俺はそのバ

イト先がどこなのかをまるで知らないのだが。

「にゅ？ 幸久君、その人のこと知ってるの？」

「いや、知らないんだけど…、なあ、霧子、突然で悪いんだけど、晴子さんのバイト先知ってるか？」

「にゅ…、えと…、あれ、そういえば聞いたことないかも…。」

「そうか、ならいいんだ」

まあ、晴子さんがその喫茶店で、ハルさんと呼ばれてバイトしているとして、それが何の問題があるというわけでもないだろう。喫茶店でバイトするなんて学生らしいというか、青春って感じでいいじゃないか。

…、だというのに、なんだろう、この背筋に走るイヤな予感。何を恐れているんだ、俺……？

## 喫茶 サザンクロス前にて

「考えてみたら俺達ってけっこう住んでるとこばらばらだよな」

メイの先導で、行きつけという喫茶店に向かいながら、俺はポツリと呟いた。それはついさっき、メイがこのあたりに住んでいるということを知ってから、ふと思いついたことだった。

「にゅ、そんなにバラバラかな？」

「いや、確かに俺と霧子は家が近すぎるくらいだけど、でも他はそうでもないだろ。だって、メイが住んでるのは隣の駅だし、志穂んちはたしか山向こうだし、姐さんの家は学園挟んで真逆にあるんだぜ？ けっこう遠いんじゃないの？」

「にゅ…、そう言われたら、そうかも」

てくてくと、俺たちを案内してくれているメイの後に続きつつ、隣を歩く霧子が小首を傾げてそう応える。そりゃ、霧子の家はうちから徒歩一分未満かもしれないし、庄司の家から見てもすぐ近くなのだが。

「ほえ？ ゆっきいのおうちもきりりんのおうちも、りこたんのおうちもメイメイのおうちも、みんなちかいんじゃないの？ みんな、うちからあるいて一じかんもかからないよ？」

「それは、お前の移動速度が 速すぎるんだろ。っていうか、歩いて一時間は遠いだろ。感性が違うんだよ、お前とは」

「うゅ？」

「あゝ、だから、俺たちにとっては、歩いて一時間っていうのは遠いんだよ。お前にとってはそんなでもないかもしれないけど、普通の人類から見たら一時間歩かないと辿りつかない場所は、けっこう遠いんだよ。っていうかお前は歩くの速いんだから、俺たちが歩いたらもったかかるだろ」

「ゆっきいだったら、10分もかからないよね？」

「かかるよ！！ お前が一時間かかるなら、俺は一時間半かかるよ」



！！ 志穂、お前はもうちょっと人の話を聞きなさいよ……」

「ほえ？」

「っていうか、そういえば俺、志穂の家が山の向こうにあるっていうのは知ってるけど、具体的にどこにあるのかって知らないな」

「あたしも、しいちゃんのお家は、知らないかも。行ったことないから」

「私も知らないな。名簿に書いてある住所は知っているが、しかし実際に行ったことはない。というよりも、私はあまり友人の家に招かれるということがなかったから、実際に訪れたことがある家は少ないな」

『あたしも行ったことない』

「っていうか、俺、志穂の家も姐さんの家もメイの家も行ったことないじゃん。みんながうちには来たことは何度かあるのに、俺が誰かのうちに行くっていうのは、一度もない気がするんだけど」

「幸久君、うちには何回も来てるよ？」

「あっ、霧子の家には何回も行ってるな。週二か週三くらいで遊びに行ってるし、そもそも毎日朝、起こしに行ってるし」

「そういえば、そうだな。私たちは、基本的に三木が中心になって全員を集めてしまうから、三木の家に行くことはあるが、しかし天方や皆藤の家には行くことがないように思うな」

「そういえばそうだ。俺がみんなをうちに連れて行って昼飯をつくって食わせて解散、みたいな流れが、みんなでうちに遊びに来るとき定番としてあるのだが、しかし逆に誰かがみんなを家に連れていくという展開はほばないように思う。」

「そうか、俺はこいつらと一年も友だちやっておきながら、誰の家にも行ったことがないのか。うむむ、これは一回行ってみた方がいい気がするきたな。今度行ってみようかなあ…、でも急に行ったら迷惑だろうし、お願いしてみるか。志穂だったら二つ返事で了承してくれそうだし、メイも、たぶんいいって言ってくれる気がする。姐さんは、どうかな、やっぱりダメって言われるかもしれないけど、

まあ、物は試しで聞いてみようか。

「ゆっきい、あたし、きりりんのおうち、いったことあるよ!」

「えっ? あるのか? 俺の知らないうちにそんなことあったのか?」

『あたしも行った。しほちゃんといっしょにつれてってもらった』

「えゝ、霧子が二人も家に連れてったのか? ほんとに? 俺抜きで?」

「うん、ほんとだよ。だってこないだもん、いったの」

『先週の木曜日』

「へえ、霧子がねえ……」

霧子が友だちを自分の部屋に呼ぶなんて、そんなこと今まで10年近い付き合いがあるが、そう何度もあったことではない。しかもそれを、俺抜きという状況にまで広げて考えると、おそらく一度もなかったのではないかと思う。

それがまさかねえ……。

「っていうか、俺はなに、ハブられたの?」

「にゅ…、違うよお…、幸久君は、漫画の続き読むからって帰っちゃって……」

「…、ああ、そうだった。木曜って、俺が霧子を置いて帰っちゃった日か。あの日に、三人でそんなことしてたのか。俺にも連絡してくれればいいのに、なんだよ、徒歩一分のところにいるんだから呼んでくれよ」

「で、でも、幸久君の邪魔したら悪いかと思って……」

「いや、まあ、別に女の子同士で仲良くおしゃべりしてたんだろうから、男の俺は呼ばなくてもいいんだけどさ。あれ、三人でって、姐さんは? 姐さんは、連れてってあげなかったのか……?」

「えっ? あっ、りこちゃんは……」

俺は別にいいよ、男だから呼ばなくても。女の子同士で弾ませる話もあるだろうから。なんていうか、男がいるとにくい話もあるだろうしな。ほら、なんていうのかな、こう、あるだろ、女の子特有

のきやつきやうふふな感じとか、ストロベリーな感じとか。そんなところに男が割り入っては、そりや空気も読めてねえってもんさ。それくらいは俺も心得てるよ。

でも、姐さんも女の子じゃん？　なんで呼んであげないの？　いじめ？　いじめなの？　俺はそういうの看過しないよ？　絶対許さないよ？

「霧子…、いじわるしてるのか……？　そういうのダメだぞ？　友だちなんだから、仲良くしないと……。いや、俺はそんなこと霧子にするなんて、信じないけど…、でも、いや、でもな……」

「いや、三木、それは違う。私は、その日は放課後に、比較的大きな風紀の会議が控えていたから遠慮させてもらったんだ。もちろん天方は、私にも声をかけてくれたんだぞ」

「あつ、そうなの？　そうか。そうかあ……。よかったあ……。霧子がそんな不良みたいなことしてるのかと思って、心臓止まるかと思った……」

「天方はそのようなことをする性質ではないだろう。それは、お前が一番知っていることだ、三木」

「いや、分かってたけど、でも、あれじゃん。俺の知らないところで成長してるわけじゃん、やっぱり。それもあるし、もしもって思ったらなんか、もう、ね？」

「にゅう…、そんなことしないもん……」

「変に疑って悪かったな、霧子。でもな、一番根っこのところでは信じてた。信じてたんだ。それだけは分かってくれ」

「うん、分かったけど、うん」

「天方、これに懲りず、また私のことも誘ってくれ。予定がなければ、きつと参加させてもらうからな」

「うん、そうするね、りこちゃん」

「女の子たちだけで楽しくするのはたいへんけっこうですが、次こそは、俺のことも誘ってくれな、霧子」

「幸久君は、ダメ……」

「なんで!? 今、変なこと言ったから!? それとも戦力外通告でもするつもり!?」

「女の子だけでおしゃべりするから。幸久君にはないしょの話だも  
ん」

「…、ないしょか、ないしょなら仕方ないか。ちえ…、せいぜい女の子だけで楽しくおしゃべりするといいよ。俺は部屋で漫画でも読  
んでるよ」

『着いた』

「えっ!? このタイミングで!?」

俺が、軽く集まりから取り除かれた感じにちよつとしょぼくれてみ  
ようかなあ、とか思ったのとはほぼ同時、メイがピタツと足を止め、  
そしてそんなことが書かれた液晶画面を俺たちの方に向けたのだっ  
た。こうして俺は完全にしょぼくれるタイミングを失ったわけだが、  
まあ、別にしょぼくれないわけではないわけではないし、どちらで  
もいいのだが。

というか、外に向かって発信するポーズですらなく、心の中でひっ  
そりとしょぼくれても誰にも伝わらないわけで、そろそろいい加減  
にそういう意味のないことをする癖は直したいものである。

「意外と、住宅街って感じだな……」

「このようなところに、喫茶店が本当にあるのか?」

『あそこ』

そしてメイが指差したのは、住宅街の一角の、それこそ一軒家と一  
軒家の間にあるような、こじんまりとした建物だった。それはなか  
なかにおしゃれな外装をしており、どことなく落ち着いた雰囲気  
を感じさせる。ドアの上に掲げられた看板には『cafeteria  
SouthernCross』と書かれており、なんかよく分か  
らないけどかっこいい感じがする。あれが、はたしてメイの言う喫  
茶店なのだろうか。

というか、こんな住宅街のど真ん中みたいなのところにあって、店の  
売り上げとかは大丈夫なのだろうか。こんなところじゃなくて、や

はり大きな道路に面している方がお客も入るだろうし、売上のにもその方がいいように思う。しかしここならそこまで土地代もかからないだろうし、いや、もともと家だったところを改築したのだとしたら、そもそもそういう諸経費はかなり軽減されるな。いや、実際はよく分からないのだがな。

「おお、本当だ、確かに喫茶店のようなものがあるらしいな。それに、思ったよりも客は入っているようだ」

「ほんとだ、中、けっこう人がいるみたいだな。磨りガラスになってるからあんまよく見えないけど」

『いつもあんな感じ。混んでも、マナーがいいから静か』

「メイメイくわしく、すごい」

「そうなのか。そういうことなら、心配はないんだけど。しかし、メイ、そんなに通い詰めてるのか……。お金、だいじよぶか？」

『平気。なんとかなってる』

「それならいいんだけど、でもあんまりつき込んじゃダメだぞ、メイ。おかねだいじに、だぞ」

『うん、気をつける』

「しかし、小奇麗な外装だな。こういう立派な店は、少しお茶を飲むだけでも高いのではないか？」

『無茶なことしなきゃ平気。ちよっとお茶を飲むだけだったら、そんなにからないから』

「無茶なこと？　喫茶店で、無茶なことなどあるのか？」

『ゲームとか』

「ゲーム？　この店にはゲームがあるのか？　ゲームセンターのよな店なのだな……」

「そういう趣向の店なんじゃないのか？　それか、店長の趣味とか、そういうやつだろ、たぶん」

「そうか、ふむ…、そうだな、個人経営の喫茶店のようだし、きっとそうなのだろうな」

「にゅ…、幸久君、このお店、あたしも入っていいのかな……？」

俺たちが、この喫茶店どうなんだろうなあ、と外観しか見えないというのに話し合っていると、なぜか俺の後ろに隠れて肩越しに眼だけ出して店の様子をうかがって息をひそめていた霧子が、細々とした声をあげた。どうしてそのようなことを唐突に言いだしたのか、それについてはよく分からないが、しかし言いだしからには何か理由があるように思う。

「はっ？　なんで霧子が入っちゃいけないんだよ。別にいいに決まってるだろ」

「でもなんか…、イヤな予感が、するんだけど……」

「イヤな予感……？」

イヤな予感といえば、それはおそらく、ついさっきデパートの前で俺が聞いたことのことだろうか。しかしあれは、そういう雰囲気はできるだけ出さないように、何気なく聞いたつもりだし、霧子がそこから不安を覚えるということはない、と、思うのだが……。

しかし、いかんせん晴子さん関連の話だ。俺の声が意図せずして不安じみたものになっていたとしても不思議ではない。俺は晴子さんのことを敬愛しているものの、それと同時に畏敬してもいるのだ。あくまでもしもの話でしかなく、ただの想像でしかないとしても、そこに晴子さんが絡んでくる可能性が少しでもあるとなると、それを考えただけでかすかに声が震えてしまう。

「幸久君も、さっきなにか言ってたでしょ？　それ聞いたら、なんかイヤな予感がすごいして……」

「いや、あれは、別にイヤな予感とかじゃ…、ないんだけど……。」

…、イヤな予感、かもしれない……」

「そ、そうだよな？　なんだか、イヤな予感するよね……？　にゅ…、なんだか、入るの怖いよ……」

「そ、そういうこと、言うなよ……。がぜん怖くなってきただろ……」

「やっぱり帰る……？　帰った方が、いいと思うんだけど……？」  
軽く引け腰で及び腰の霧子が、逃げ出すために後ずさりながら、ほ

んの軽くシャツの裾を引いている。おそらく、俺が一言逃げるぞ、  
と言えはあつという間に踵を返して家へと逃げ帰っていくだろう。

「いや、でも…、ここで帰るのは、さすがにちょっとムリだろ……。  
だって、少なくとも一杯は付き合う、みたいなこと言っちゃったし、  
それを翻すわけにも……」

だがここで俺たちが想定しているのは、ほんのわずかな、細いとい  
うのも難しいくらいに零細の、一本の絹糸のような可能性でしかな  
いのだ。その程度のことを理由に、果たして自分の発言を翻しても  
いいのだろうか。それで、確かな自分を持つことができていると、  
言うことができるのだろうか。

逃げていいのか、ただの可能性から。いや、それは可能性と呼ぶこ  
とすらおこがましい、言ってしまうえば誤差、ほんのわずかに見えた  
エラーのようなもの。そのようなものから逃げていて、俺は自らを  
男であると、自信を持って言うことができるだろうか。

君子危うきに近寄らず、とよく言うが、君子であるということと、  
リスクを完璧に避けるということが等号で結ばれてしまっているの  
だろうか。真の君子とは、どのような状況であっても完璧に事を収  
めることができる存在のことではないだろうか。

君子は、危うさに近づかないのではない。君子とは、危うさをねじ  
伏せられる存在でなくてはならない。危うさと対面したとき、それ  
に巻き込まれることを避けるのではなく、その危うさを解消するこ  
とができる男でなくてはならないのだ。故に、俺はここで逃げるべ  
きではない。避けるべきは危機ではない、危機を恐れる弱い心だ。

「で、でもでも、にゅ…、緊急事態、だし……」

「行くぞ、霧子」

「にゅ…、でもお……」

「困ったことになったら、俺が守ってやる。だから行く。行って、  
一杯お茶を飲んで、それで帰る。それだけだ。俺は自分の言ったこ  
とを翻さない。メイ、行こうぜ」

『うん』

「ゆ、幸久君、まってよおゝ……」

喫茶店に入るだけ。ただそれだけのことなのだ。

恐れることも怯むことも、それこそ逃げ出す必要なんて、どこにあるというのだろうか。



## Maid in Heaven

カランカランカラン！

どうしてか先頭に立ってしまった俺が、意を決して（俺と霧子以外はそんなに気負っていないのだが）喫茶店の扉を開くと、こういう店にはありがちなものかもしれないが、その動きに合わせて軽快なカウベルが鳴り響いた。

しかしそこには、そんなカウベルの音とそぐわないような、思ったよりも素敵な空間が広がっていた。素人がパッと見ただけで分かる、長い年月を経ているだろう立派なアンティーク調の家具たちは、しかしその経年を感じさせないほど丁寧に手入れが施されている。客に振る舞われている茶器や食器類もこだわって選ばれているらしく、おばさんに軽く仕込まれている程度の俺の知識であっても把握されるような有名メーカーのものばかりのように見えた。

なんだこの喫茶店、ヤバイぞ…、ほんとにこんな店、入ってもよかったのだろうか……？

「…、逃げていいか……？」

「ゆ、幸久君…、行くって言ったばかりなのに……」

「三木、早く入ってくれ、後がつかえているんだ」

「ゆっきい、はやく」

「わ、分かったよ！ い…、行けばいいんでしょ！」

とにかく、開けてしまった以上、俺はその先に一步を踏み出すしかなかった。今さらこの場から逃げることは、精神的にも物理的にも出来なかった。なぜなら、俺の後ろには四人も連れが控えているのである、それをかき分けて逃げるなんて、できっこないだろう。

しかし、まあ、俺が逃げようと思ったのは、なにもアンティークの家具や食器に気圧されたから、というわけではないのだ。そんな程度で圧倒されていたら、そもそも庄司の家に住むことができないのである。あの家は過去の三木家の栄光だか何だか知らないが、そう

いうアンティークみたいなのがいっぱいあって、外見からはそこま  
で連想できないだろうが、けっこう豪華な感じに仕上がっているの  
である。

それならば何に怯んでいるかって？ それはあれだ、あの…、……、  
冥土だ。あつ、いや、メイドだ。

「どうしよう…、メイドだ…、メイドがいる……。しかも、いっぱ  
い……」

「にゅ？ あつ、ほんとだ、メイドさんがいっぱいいる」

「メイド？ …、本当だな、いる。しかしメイドというのは、大き  
な屋敷に仕える女給のことだろう。なぜそんなものが、こんなところ  
にいるのだ？」

「それは、あれなんじゃないか……？ これが一昔前に世間で話題  
になった、あの、メイド喫茶ってやつだから、じゃないのか……？」

「メ、メイド喫茶……！ そうか、これがあの、メイド喫茶という  
ものか！」

「おかえりなさいませ、ご主人さま♪」

とかなんとかやっている、扉を開けて身体半分を店内に入れている  
割にいつまでも一歩踏み出してこない俺たちにしびれを切らした  
のか、カウベルの音を聞いて入口まで出迎えにやってきたメイドさ  
ん（エプロンの腰のあたりに付いている名札には『ミキ』と書かれ  
ている）が俺に向かってそう声をかけた。

様付で呼ばれることは庄司家の面々との長年の付き合いによって慣  
れたものだが、しかしここまであからさまに「ご主人さま」などと  
呼ばれたのは初めての経験だった。しかしそれは、思ったよりも心  
地よいもので、なんだろう、いつか美佳ちゃんが帰ってきたらそう  
呼んでもらおうかな、などと思ってしまう程度には、うれしい感じ  
を覚えたのだった。まあ、美佳ちゃんは今俺のことを様付で呼ばない  
唯一の、俺からしてみれば庄司家の良心なので、そのようなことを  
実際にはしないのだが。

「ご主人さま、本日お連れのお嬢さまは何名ですか？」

「よ、四人、です」

「はい、かしこまりました♪ それではこちらにどうぞ♪」

そういって、半身になって俺たちを先導するメイドさんが着ているのは、非常にクラシカルなタイプのメイド服である。ひざ下まである丈の長い紺地の、あまりサイドに膨らまないようにデザインされたロングドレスにまぶしいほどに真っ白なエプロンを合わせ、頭にはふわっとしたヘッドドレスが乗せられ、足元は編上げのブーツを身につけている、ヴィクトリアンメイドファッションの亜種みたいな恰好をしている。あまりテレビで取り上げられるようなメイド服（スカートの丈がやけに短かったり、いろいろな色をしていたりした、伝統からかけ離れたようなアレ）とは違って、清楚な感じが漂っていて非常に感じがいい。

メイド喫茶といっても、あまりオタクっぽい人たちをターゲットにしていないというか、普通の人でも入りやすい感じというか、全体的に狙っている年齢層は高めのように感じる。実際、入っている客も女性が中心であり、比較的年配の人もいるように見える。

「あら、おかえりなさいませ、メイお嬢さま♪ 本日はご主人さまとご一緒にお帰りなのですね♪」

『ただいまです』

「後ほど、ハルちゃんをお呼びしましょうか？」

『うん』

「はい♪ 承りました♪」

そして、こちらにどうぞ♪ と通された六人がけの大きな席に、俺たちは奥から順番に腰かけていったのだった。とうかなんだこの椅子、すげえ座り心地いいんだけど、アンティークってみんなこんなのか？ …いや、庄司の家にあった椅子も、確かにこんな感じだったのかもしれない。そういえば引っ越したばかりのことは椅子の座り心地が思ったよりも悪くて戸惑ったっけ……。

しかし、椅子に座って視点を下げてみて改めて気付いたが、この喫茶店は、本当にスペースをぜいたくに取っているように思う。ゆっ

たりと過ごせるというか、すごい優雅な気分になれるというか、確かにこれは、入り浸りたくなるのも分かるというものだ。いや、決して、メイドさんが目当てというわけではないのだが。

「しかし、メイ、メイドさんに名前覚えてくれるくらい通ってるのか？」

『けっこう名前覚えてくれる。たぶん、幸久くんも次きたら名前覚えてられると思う』

「マジか…、すげえな、この店……」

しかし、いったい何人のメイドさんを雇っているのかは知らないが、こういう店だとけっこう自給とか高いんじゃないだろうか。つまり、けっこうな値段を取らないと人件費をカバーしきれないのではないか、ということである。

だって、メイド服着てへりくだった態度で客に御奉仕しないといけないわけだし、あまりやりたがる人もいなさそうだし、時給を上げてもしない限りスタッフが集まらない気もするのだが。

「ねーねー、ゆっきい」

「ん？ どうした？」

「ゆっきいのおうちには、こうたんがいるけど、こうたんもメイドさん？」

「広太はメイドじゃない、執事だ。メイドさんは、みんな女の子だと思うぞ。いや、女の人、か、別に女の子だけがメイドってわけじゃないし」

「ゆっきいはメイドさん、みたことある？」

「メイドさんを見たことあるか？ あるよ、っていうか、庄司の家にいるよ」

「メイドさんいるの！？ すごーい！！」

「まあ、今はメイド長しかいないけどな……」

庄司家のメイド隊は、おばさんと美佳ちゃんの二人きりである。俺が家にいるときは、二人ともメイド服着用が義務付けられていたのだ、ある意味で、メイド服自体は見慣れている、と言うこともでき

るかもしれない。メイド服自体も、この店のものと同じようなロングドレスタイプのもので、おばさんが着てもキツイ感じは全くせず、むしろ似合っているくらいだった。逆にふわふわひらひらのお洋服を着たい年頃だった美佳ちゃんは、かわいくないそれがあまり気にいっていなかったらしく、おばさんがいないときはこっそりとミニスカートタイプのもを着ていたり、ひそかに製作した改造メイド服を俺に披露していたりと、意外とはっちゃけていたように思う。

そういえば、美佳ちゃんは今どこかの家でメイド修行しているんだよな。そこではちゃんと、もしかかわいくないとしても、支給されたメイド服を身につけているだろうか。気に入らないからと勝手に改造して、先輩メイドたちにいじめられてはいないだろうか。それとも、三木のメイドであることを態度に見せるよりも誇りに思っている子だから、どんな場所でも変わらずおばさんとおそろいのメイド服を身につけているのだろうか。ああ、美佳ちゃん、心配だなあ……。電話の一本でも、よこしてくれればいいのに……。

話が逸れたな。さて、それならば、見慣れているというのに、どうして俺がさつきメイド服に怯んでいたかという、それはメイド服がおばさんを想起させるからである。おばさんは非常に厳しい人で、俺の日々の日常生活から学校生活、勉強の成績から人としての在り方まで、あらゆる面において三木の当主としてふさわしい男に仕立てあげようと、厳しいしつけを課してきたのだ。それには、当然、勉強をいっぱいがんばることも含まれていたし、当主として身につけるべき教養だか何だか知らないが、いろいろよく分からない勉強をさせられそうになったり（当主権限命令を用いておおかた拒絶した）、いろいろ大変だったのだ。

ちなみにさっきの、アンティークの家具とか食器についての知識も、おばさんのしつけの一環として仕込まれたもので、軽く――さつきもそう言ったが、これはおばさん基準である――いろいろとねじ込まれたのだ。

「志穂は、メイドさん、見たことあるか？」

「ない」

「ですよね」

「お待たせしてしまってすみません、ご主人さま、お嬢さま♪ お冷とお手拭き、お持ちしました♪」

カラカラと、なんかお洒落っぽいカートに乗せられて、これまたお洒落っぽいグラスに注がれ氷を二つほど浮かべたお冷と、それからふわりと湯気を立てる熱おしぼりが人数分俺たちの座ったテーブルに届けられた。カートを押してきたのは、またさっきとは違うメイドさんで（さっきの人よりも少しだけ年上のように、名札には『ユリカ』と書かれている。果たして何人のメイドさんが控えているのだろうか）、しかしそれでもサービスの基本的なところは変わらないらしく、キラキラの声でそう言ったのだった。

「あつ、あり…、ありがとうございます」

「はい、どうぞ、ご主人さま♪」

基本的に、広太以外からこういうことをされるのに慣れていない俺としては、そう声をかけられるたびにオタオタしてしまって、非常に情けない塩梅である。くっ…、これだから外食は苦手なんだ、店員さんはみんなサービス精神に充ち溢れてるし、そうやってやさしくされるのは苦手なのに……。

しかし他のみんなは慣れたもので、特に動揺することもなくお冷とお手拭きを受け取っている。なんだろう、俺だけ外食弱者なのだろうか。

「それでは、本日は何をお持ちすればよろしいでしょうか？ 本日のこのお時間のおすすめは、ご用意したてのふわふわ紅茶シフォンになります♪」

『あたしは、それと紅茶。アッサムで』

「はい♪ メイお嬢さまは、『いつもの』ですね♪ お伺いしました♪ 他のお嬢さま方は、なにになさいましょうか？」

「えと……」

「横から失礼します。メイお嬢さま、申し訳ございません……。本日、ハルちゃんは厨房でお料理をご用意する役についておりまして、お連れするのに少々お時間がかかってしまうのですが、よろしいですか……?」

メイは常連らしくさっさと注文を決めてしまったのだが、しかし俺たちはなかなかそういうわけにもいかず、これから少し時間をもらって考えなくてはならないのだが、とか思っていたら、他のメイドさんに比べてやけに落ち着いた雰囲気のメイドさん（名札には『キョウコ』と書かれている）が、横から音もなく現れてメイにそう告げたのだった。

しかしこの人なんだか他のメイドさんよりも装備が豪華、というか、いろいろオプションがついているようである。耳から伸びた小さなマイク付きのヘッドセット（ヘッドドレスと同化している、おそらく特注か手作りの品）が特に特徴的であり、それ以外にも他のメイドさんが持っていないような小さな電子機器がそこかしこに装備されている。

この人は、きっと今日フロアにいる中で一番偉い人に違いない。つまり、メイド長、ってやつだ。メイド長だから、いろいろつけてるんだろう。たしかに庄司の家でも、美佳ちゃんが持たないいろいろなものをおばさんは持っていたし、おそらくそれがメイドの常識であることに疑いはない。

『平気、待ってるから』

「申し訳ございません。メイお嬢さまへの給仕は、いつもハルちゃんに任せておりましたのに……」

『気にしないで、キョウコさんも好き』

「もったいないお言葉です、メイお嬢さま。それでは、ユリカちゃん、しっかりご主人さまとお嬢さまにご奉仕してさしあげてね」

「はい、メイド長、お任せください♪」

そしてメイド長は深々と腰を折ると、スッと、再び音もなく下がっていくのだった。

「それでは、お決まりになりましたら、こちらのベルを鳴らしてくださいませ♪ メイお嬢さま、御所望の品は、皆様とごいっしょにお持ちしますか？ それとも、お先にお持ちしてしまった方が、よろしいですか？」

『いっしょにお願い』

「はい♪ かしこまりました♪」

そして注文を取りに来ていたメイドさんは、メイド長と同様に深々と腰を折ると、押してきたカートとともに裏へと下がっていくのだった。

「さて、注文決めるか」

「あたし、決まったよ」

「私ももう決まっているぞ」

「あたしも」

「あれ！？ 俺だけ！？ ちょ、ちょっと待ってな、すぐ決めちゃうから！！」

『急がなくていいよ、幸久くん』

一杯だけ飲んでいち早く退散すると決めていたはずなのに、しかしどうやら俺の方が置いてけぼりにされてしまったようである。マズいマズい、急いで決めてしまわなければ…、そして、イヤな予感の元凶であるハルさんと顔を合わせる前にさっさと帰ってしまわなければ……。



## ケーキとご対面

「おまたせいたしました♪ ご主人さま、お嬢さま♪」

さっさと注文を決めようと思えばそうすることは出来るわけだし、それから間もなく注文をした俺たちだったが、しかし五分もしないうちに全員分の注文したものが届けられ、机の上が一気ににぎやかになったのだった。

「わわ、すごおい……」

「ほお、きれいなものだな。ケーキの乗せられた皿にデコレーションをしてくれるのか」

俺たちの前に並べられたケーキが乗せられた皿には、ロイヤル・コペンハーゲン チョコソース

やフルーツジャム、クリームなんかを使って花やハートマークが華やかに描かれていた。種々の色をふんだんに用いて描かれたそれは、そもそもの食器としての美しさも相まって、まるで一つの作品のようだった。食器だけでもすでに完成されているように思えるのだが、しかしそれを邪魔しない、むしろ引き立たせるような絶妙なバランスが保たれている。

しかしこれ、どうやって描かれているんだろうか。スプーンを使うんだとしたら、どれだけ細身のものであっても茎の細さを表現できないだろうし、ナイフ？ いや、フォークを使うのだろうか……？

それとも特別ななにか、ペンのようなものがあつたりするのかもしれない。

「ねえねえ、ゆっきい、ゆっきいもこれできる？」

志穂の前に置かれている皿には八つ切りにされたイチゴのショートケーキが乗せられており、上等なレースのようなクリームのデコの中に、形のいいイチゴのルビーのような赤とその脇に添えられた表面をツヤ加工したハーブのさわやかな緑が色合いを整えている。側面はスポンジのふっくらした黄色、クリームの抜けるような白、それに埋もれたイチゴの華やかさがそれぞれ順繰りに二層になってお

り、見ているだけで心が躍る気分だ。

そしてその上から、まるで雪を降らすかのようにうつすらとパウダーシュガーが散らされており、乗せられている涼しげな青系の皿にもホワイトチョコレートソースでいくつも雪の結晶が描かれていて、少し季節はずれな感じはするが、しかし全体の統一感はずごくよかった。

ショートケーキっていうのは、シンプルでありながら色合い的な意味で最強のケーキである、というのは俺ではなく晴子さんの自論なのだが、それには俺もおおむね同意するところである。

というか、志穂がどうして、こんなところまで来てわざわざそれを選んだのかはよく分からないが、まあ、好きだったんだろうな。それとも、もしかしたら、志穂の中ではもはや「ケーキィイチゴのショート」みたいな公式があるのかもしれない。いや、別に何を選んでも問題はないし、しかもかなり美味そうなのだが。

「やろうと思えば出来るかもしれないけど、でもきれいに出来るようになるまでは時間かかるだろうな」

そして俺の前には、同様に八つ切りにされたガトーショコラが置かれる。ガトーショコラは、家に基本的に甘味の嗜好品を置かない俺が言うとおかしく聞こえるかもしれないが、一番好きなケーキだ。いや、というか、そもそもからしてチョコレートが、俺の一番好きな甘いものなのである。だから、ケーキだってチョコ味のものがあればそれを選ぶし、単に今回もそうしただけなのである。たまにはおすすめされたものでも食べればいいのに、と思うが、しかしこれが好きなんだからしょうがない。

しかし、ガトーショコラというのは、そもそもフランス語で「チョコレートケーキ」という意味でしかなく、ある意味で、チョコレートケーキはすべからくガトーショコラなのであるが、一般的にガトーショコラと言われている、チョコレートクリームとかを使わない焼き菓子っぽい感じを残しているものが、俺の好みである。表面はさくっとしているけど中はしっとりしていて、という絶妙なバランス

スが表現されていると最高である。というか、それは晴子さんのガトーショコラである。

目の前にあるそれは、まさにそんな感じであり、正直に言って、めっちゃ美味そうである。二等辺三角形の先の方を覆うようにかけられた、少し硬めにつくられたクリームと薄く散らされたパウダーシユガーでキレイにデコられているそれを乗せた皿には、チョコレートソースで描かれた小さな花が、パツと無数に散らされている。さらに、脇の添えられているミルクポットのようなものには、あっさりした味が予想されるフルーツジャムが三種類ほど用意されているし、味を変えて楽しむことも出来るよ、ということなのだろうか。なにこの隅々まで行きとどいた気遣い…、ここまでくると流石に怖いんだが……。

『いつものより細かいから、たぶんハルさんがやってくれたんだと思う』

「すごいんだな、その、持田の言うハルさんという人は。きっと長年の修行の成果なのだろう、素晴らしいことではないか」

「こんなこと、出来る人がいるんだねえ…、すごいなあ……」

あとの三人は、メイドさんの勧めに従っておすすめの紅茶のシフォンケーキを注文していた。そしてそれがおすすめされていた理由は、おそらく出来たてだからだろう。それは見るからにふわふわとしていて、出来てからそう時間が経っているようには思えないし、おそらく例のハルさんが裏で焼いているのだろう。

十個ほどにざっくりと切り分けられたであろうそれは、俺たちのものよりもカット角が小さいにも関わらず、むしろそちらの方が大きい気がするしてしまうほどだった。それも当然、志穂のスポンジケーキや俺の焼き菓子と比較的焼成時膨らまないのだが、しかしシフォンケーキはかなり膨らむので、中に素が多く入りそもその焼き上がりの大きさがまったく違うので、切ってもその大きさはそこまで損なわれない。普通のケーキとかだと、大きな素が入ってしまうと失敗、と言われることが多いが、だが素が入った方がシフォンケーキ

はふわふわ感が増すのでむしろ大成功である。逆に空気を取り込み切れていないシフォンは焼き上がりが軽くベタついてしまって、あまりいい出来とはいえない。

つまりこのシフォンケーキは大成功なのである。そしてそれが乗せられた皿には、おそらく俺のものよりも甘めに味付けされているであらうクリームがドサツと豪快に添えられ、そのまわりは、三人ともそれぞれ違う感じでデコレーションされていたのだった。

「なんか、すげえな…、全体的に……」

しかし、もし俺の予感が当たってしまったってハルさんが晴子さんだったりすると、つまりこのシフォンケーキを焼いたのは晴子さんということになるのだろうか。ちょっとだけ食べてみたいかもしれない。いや、それどころか、このガトーショコラも、このイチゴのショートも、もしかしたら晴子さんがつくっているかもしれない。…、ととりあえず、みんなからあとで一口ずつもらおうとするか……。

…、いや！ ハルさんがもし晴子さんだったら、なんて言ってる場合じゃないんだ！ 俺は、もしそうだとしてもそうでないとしても、どちらにしても関係なく、ハルさんと顔を合わせる前にこの場から立ち去らなくてはならないんだ！ だってなぜなら、すごいイヤな予感がするから！ 出会ってはいらないと、どうしてか分からないけど本能が告げているのだから！！

「さて、いただきます」

さくつと食って、さくつと飲んで、そしてさくつと店内から立ち去るのだ。それがベスト。間違いなくベストの選択。もしかしたら晴子さんがつくったケーキかもしれないけど、しかしそこに執着するよりも潔く帰った方が正解なのである。晴子さんのケーキなんて、次にいつ食べることができるか分かったものではないが、しかしそれでも、ここでしか食べられないものというわけではないのだ。着眼点を間違えてはいけない、俺にとっての最優先事項は、ここから帰ることなのである。

そして俺は手を合わせると、添えられているフォーク（シルバー）。

手に取るのが申し訳ないくらいピカピカ）を手に取り、それからガトーショコラにそれを突き立てた。まるでクッキーのようになった表面が、それによってわずかに崩れぼろぼろと皿に落ちていき、その層を抜けると次にフォークにあたったのはしっとりとした、口当たりの柔らかさがフォークから伝わってくるほどの生地だった。

一口大にきれいに切り取って、そしてそれを口に運ぶ。入れた瞬間、まさにふわりとほどこけ、そしてそれがサクサクの生地と絡み合い、口の中に何とも言えない食感が広がった。そして、鼻孔まで立ち昇ってくるような香り高いチョコレート、コリコリとしたわずかに違う食感を与えてくれるくるみの絶妙な配分比、かすかに柑橘系の混ぜ込まれたクリームと合わせたときの、不思議なくらいの味の変化、添えられているジャムは一口含んだだけでそんな濃厚なチョコレート、トの味をサツと吹き払い、口内をまたたく間に真新しくしてくれ、ケーキの味に飽きることがまったくない。そしてさらにこちらを驚かせてくるのが、紅茶との親和性である。紅茶自体の淹れ方も非常に丁寧で渋みをほとんど感じさせることがなく、ケーキの味を引き立たせているし、また同じようにケーキも紅茶の味わいを引きたてているし、相乗効果みたいな感じなのだろうか。ああ、それでもまだ広太の紅茶の方が美味い、けど、広太からこのケーキは出てこない。ヤバイ、何を言ってるか分からなくなってきた。

なんだこれは…、めっちゃ美味い……。っていうか、これつくったの絶対に晴子さんだよ。昔食べたのにそっくりだもん。味とか香りとか、食感とか食後感とかいろいろそっくりだもん。

ダメだ、ヤバイ、マジで美味い。ジャムと紅茶とケーキの三角食べが無限往復してしまう。マズい…、このままだとケーキをもう一つ頼んでしまう。そうさせるだけの魔力が、このケーキにはある。だって、500円だよ？ このケーキ、500円しかないんだよ？

財布の中にはまだそれなりに余裕があるし、別にケーキ自体が大きいわけじゃないし、食後感もすごいからまだ二つくらいだったら入ってしまう。

「幸久君、そのケーキ、そんなにおいしいの？　一口もらってもいい？」

「……………」

「…、幸久君…………？」

「えっ！？　あっ…、どうした…………？」

あまりにケーキに集中しすぎて、どうやら隣に座っている霧子から声をかけられたのに気付かなかったらしく、おずおずと肩を叩かれてしまった。ああ、帰ってこい、俺。もう一個頼んじゃおうかな、とか考えてるんじゃない。こんなことしてると逃げ遅れるぞ、今は厨房にいるらしい、でもこの後にメイお嬢さまのお呼び出しに応えてほぼ確実にこの席までやってきてしまう晴子さんと顔を合わせることになってしまうではないか。

俺は、大層もったいないことだが、このケーキはさっさとやっつけて、そして紅茶も飲み干して、この場から立ち去らなくてはならないのだ。…、ああ、もったいない…、こんな美味しいものを、さっさとやっつけなくてはならないという事実が、俺の心に重苦しくのしかかってくる。時間をかけて、研究しながら食いたいくらいの逸品だというのに……。

「えと、ケーキ、そんなにおいしいなら、一口ほしいな、って。あたしのも一口あげるから、ダメ？」

「ああ、一口ね、一口。別にいいよ」

「ありがと、幸久君。じゃあ、あたしのもあげるね、はい、あゝん」  
「あゝ…、ん。…、口当たりいいな、これ。紅茶の香りもすごいし、っかり残ってるし、すごい上手につくられてる。合わせてあるクリームもちょうどいい感じに味が調整されてるし、ばっちりだ。美味しい」

「だよね、すごいおいしいよね。あたし、また時間見つけて来ちゃうかもだよ」

「それじゃあ、俺のも一口やろう。これは、マジで美味いから心して食うように。紅茶で流し込んだりしたら、いくら霧子でも手が出

るかもしれないから、気をつけろよ」

「にゅ…、そ、そんなに、おいしいの？　楽しみだけど…、こわいよ……」

「まあ、霧子はそんなことしないって信じてるよ。はい、あ〜ん」

「あ〜…、ん。…、ふぁ…、すごいおいしい……」

「だろ？」

「うん、幸久君がおいしいっていうのはみんなおいしいけど、でもこれはほんとにおいしいよ」

「そうだろそうだろ、美味いだろ」

「うん、おいしい。でも、もう一個ケーキ食べるのはダメだから、それは今度来たときに食べよっかな」

「そうだな、そうした方がいいだろ。女の子はケーキいっぱい食べちゃダメなんだからな？」

「うん、気をつけないと」

「で、志穂は、いつもみたいにバクバク食わないのな。いいと思うけど、そんなに美味しいか？」

「うん、すごいおいしいよ！」

「そうか、…、俺の料理は、美味いか？」

「うん、すごいおいしいよ！」

「そうか……」

それならば、どうして俺の料理はそんな感じで大事に食べてくれないんだろうか。そのケーキにもつくった人の魂がこもってるかもしれないけど、でも、俺の料理にだって魂は存分にこもってるわけで、同じくらい丁寧に食べてもらいたいものだ。いや、元気に勢いよく食べてくれるのは、まあ、うれしいんだけどさ。

しかしどうしても、まるで宝物を扱うようにケーキを食べている志穂の姿に、いまいち納得できない俺がいた。

## 目を逸らして、見る世界

帰りたくない。でも、帰らなくていけない。

つまるところ俺は、今現在そういう板挟みの状況に置かれているのである。

「ごちそうさまでした。さて、霧子、帰るか」

「う、うん、そうだね。そろそろ帰ろうかなあ……」

それでも俺たちは、なんとか帰らなくてはならない、という現実の状況に即して考えたとき、当然選択しなくてはならない方を選択することができたのだった。そう、俺と霧子は、自分たちの注文したものを――堪能したとはお世辞にも言い難いが――やつつけた今、この場から可及的速やかに退避しなくてはならないのだ。

それもこれも、俺がこの場で晴子さんと顔を合わせないようにするためなのだ。もしかしたらこの喫茶店で晴子さんが働いているのではないか、という予感から始まって、ケーキの味で確信に変わった、この店の奥の厨房には、ほぼ間違いなく晴子さんがいる、という事実が俺たちの行動の根本にあるわけで、またこの後、おおよそ間違いなく晴子さんはここにやってくるわけであり、だからこそ、顔を合わせないためには今すぐ俺たちがこの場から逃亡することが必要になっているのだ。

そして、きっと俺がここで晴子さんと顔を合わせたとしたら、なにが起こるかは分からないが、非常に大変なことが起こってしまうに違いないのである。それくらいのことならば、経験から十分に予測可能である、いや、理解できてしまうのだ。

「じゃあ、俺は帰るから。また明日な。1000円置いてくから、足りてなかったら明日返すから言ってくれな。だれか少しの間だけ立て替えておいてくれ」

「あたしも、1000円おいてくね。えと、ばいばい、また明日ね？」



「ほえ？ ゆっきいときりりん、かえっちゃうの？」

「そういう話だっただろ」

「ばんごはん、つくるの？」

「ああ、そうだ。そんな感じだ」

「きりりんも、ばんごはんつくるの？」

「あたしは、晩ごはんはつくらないけど…、あの、えと、ちょっとやることあって…」

「そうなんだ、きりりんたいへんだね」

「そ、そうなの、うん。やることあるんだよ、うん」

「というわけだから、また明日な」

『幸久くん、ハルさん見ないで帰っちゃうの？』

「残念だけど、また今度にするわ、うん。楽しみは取っておいた方がいいだろ、やっぱり」

『そうなんだ…、ハルさんにあたしの友だち紹介できると思ったのに、残念』

「ほ、ほんとにごめんな、メイ。この埋め合わせは、また今度きつとするから、許してくれな」

『じゃあ、また今度いつしよにきて、ハルさんに会ってくれる？』

「…、心の準備ができたなら、いいぜ。でも今日はちよつと、急だったからさ、こう、心が折れると思うんだ、その、ハルさんに会っちゃったら」

『どういうこと？』

「気にしないでくれ、俺の個人的な葛藤だ」

「じゃあメイちゃん、また明日ね、ばいばい」

『きりちゃん、ばいばい』

「姐さんも、また明日な。あとよろしくな」

「ああ、持田と皆藤の二人は、私が責任もって駅まで送り届けよう。三木は心配しないで帰ってくれていい。それより、天方のことをしっかり送っていくのだぞ」

「ああ、それは任せてくれ。霧子を送り届けることに関しては、も

はやプロの領域だ。万難を排して家まで連れて行くことにするぜ」

「ふむ、頼もしい限りだな。まあ、私もそのことについては心配していないのだがな。家も近いし、それこそ本当にきっちりと家の前まで送ってやることもできるのだから、それ以上安心なこともない」

「ゆ、幸久君、そろそろ行かないと……」

「そ、そうだな、あんまり長居してると……」

「もうお出かけですか……？ ご主人さま……？」

「ひっ……！？」

不意に、ポンッと肩に手が置かれ、まるでうなじに息を吹きかけるようにそんな風に声をかけられてしまい、背筋を一直線に寒気が駆け昇ってきて、下から無理やり押し出されたような情けない声が、思わず出てしまった。

誰が俺の肩に手を置いたのか、それは振り向いて誰がそこにいるのかを確かめてしまえばあつという間に判明することである。しかしただそれだけのことが、なかなかすることができない。いや、そんなことをしなくても分かってしまうのだから、そんなことをする必要性自体がないのだ。

「せっかくお帰りになられたというのに、もうお出かけになるなんて忙しのないことはおっしゃらず、さあさ、お席におかけになってくださいませ？ さあ、お嬢さまもどうぞおかけください？」

肩に置かれた手は、まるで万力のように遠慮呵責のない強さで一切の躊躇なく俺の肉に食い込んできて、たぶんもう肩のあたりは血が通っていないくて真っ白になってしまっていることだろう。しかし、絶妙なパワーコントロールによって痛みのようなものは与えられていない。

だが、痛みはないが、しかしそれは晴子さんの精神攻撃の一環であり、特にやさしさや慈悲のようなものではなく、むしろこの状況は痛みが与えられる物理攻撃を晴子さんが選択するよりもマズいのである。怒っている。いや、いら立っている。いやあるいは、やる方ない憤りを感じていらっしやる。晴らすことのできないいらだちが

心を満たしたとき、晴子さんの攻撃の矛先は俺に向くのであり、そのとき俺への制裁手段として痛いことは選択されず、精神的に追い詰めるような方法が選ばれることが大半を占める。

そして霧子にも同様のことがされている——当然、俺に対するものと違い、かけられているその精神的圧迫感は百分の一にも満たないだろうが——今、霧子一人だけでも逃がす、ということすらもできなくなってしまうた。せめて霧子だけでも、思ったのだが、くっ…、無力なり、俺…。

『ハルさん、来てくれたの?』

「はい、メイお嬢さま。せっかくお嬢さまがお帰りになられたというのに、お出迎えをしないメイドなどいてよろしいでしょうか、いえ、いいはずがありません」

『今日はお友だちといっしょに来た』

「あら、そうでしたか。とても賑やかで、その周りだけ華やいで見えませんでしたわ」

穏やかな、聞くものの心を安らがせるような声音の女性が、俺の後ろに今、立っている。しかしその顔を、俺は確かめることができない。振り向いてはならぬと、本能が告げているのだ。

後ろにいるのは、晴子さんなのだ。それは気配やオーラ、軽くつけられた香水の下から漂う香りなどからも明らかであり、少し声色を使っている声からも分かってしまうことだった。いや、普通の人だったら晴子さんだと判断することはできないかもしれない。出来ないかもしれないが、しかし俺は、晴子さんと深くかわりすぎてしまっていて、晴子さんについてのあらゆることを頭に叩き込まれてしまっているが故に、それが分かってしまうのである。

「さあ、ご主人さま? お席にどうぞ?」

「…、あ、あの…、は、ハルさん…、ですか…?」

「はい、ええ、ハルでございます、ご主人さま」

「は…、ははっ、は、ハルさんは…、メイドさん…、なんですか…?」

「ええ、はい、メイドでございます。ご主人さま」

「き…、霧子…、座ろうか…」

「にゅ…、にゅん…」

「あれ…？ ゆっつきい、かえらなくていいの…？」

「じ、事情が、変わってな…、帰らなくてよくなった」

「きりりんも？」

「う、うん…、明日でも、出来ることだったから…」

「あら、ご主人さま、ケーキ、召し上がってくださったのですか？  
お紅茶も」

「え、ええ…、まあ、はい…」

「いかがでしたか？ お口に合いましたか？ 私がつくらせていた  
だいた、拙いものではありませんが」

「い、いえ、まさか、口に合わないなんて、そんなそんな…、美味  
しすぎて気絶するかと思いました」

「まあ、ご主人さま…、褒めすぎですわ、ふふ。そんなに気に入っ  
ていたけるなんて、光栄ですわ。もう一つ、召し上がりますか？  
今度は、シフォンケーキでも」

「…、は…、はい、いただきます…」

「はい、かしこまりました。あっ、そうなりますと、お紅茶もほし  
くなりますよね。なりますよね？」

「…、な、なっってきました！ がぜん、紅茶がほしくなっ  
てきました！」

「はい、それではすぐにお持ちしますね。お嬢さまは、どうなさい  
ますか？」

「み、みみ…、ミルクティー、くだ、さい、です…」

「はい、かしこまりました、お嬢さま。ああ…、自己紹介が遅れて  
しまい、申し訳ございません。わたくし、当館、サザンクロスのメ  
イドとキッチンリーダーを兼任させていただいております、ハルト  
申します。メイお嬢さまには、とてもご贔屓にしております、  
畏ろしくも専属担当の任に着かせてさせていただきます」

そう言つて、スツ、とロングスカートの裾を指でつまむと、ハルさんは深々と腰を折り、恭しく頭を下げたのだった。まあ、俺はまだハルさんの方に視線を向けるのが怖すぎてその顔を直視することは全くできていないので、声の発生位置の変化からその姿勢の変化を予想するしかないのだが。

しかしあからさまに目を伏せている俺とは違い、どうしてか強気な霧子はハルさんの方を直視しているわけであり、どこからそんな豪胆な部分が顔を見せたのか聞きたくなってしまうほどだ。そんなことしてないで、仲良くいっしょに現実から目をそらそうぜ、霧子。強いふりなんて、べつにしないでいいんだからさ。

「それでは、失礼いたします」

「…、霧子…、そっち向いてたら殺られるぞ……」

「ゆ、幸久君…、あれ…、ほんとにおねえちゃんかな……？」

「はっ？　俺が晴子さんの声を聞き間違えるわけないだろ。ちよつと声色使ってるかもしれないけど、でも確かに晴子さんだよ」

「で、でも…、あんまりそんな感じ、しないんだけど……。メイクとか、全然違うし…、髪型もぜんぜん……」

「霧子のバカ……！！　髪型なんて、セミロングくらいあればウィッグとかエクステンションでなんとでもなっちゃうんだから、信用ならないだろ……！！　メイクだって、変えようと思えばいくらでもやり方変えることできるだろうが……！！　それに晴子さんは器用なんだから、意識すれば声色だってばっちり使い分けられるし、立ち居振る舞いとかもどうとでもできるって、霧子もよく知ってるでしょ……！！」

「そ…、そうかもしれないけど……。でも幸久君も、見たら見方変わるかもしれないし…、おねえちゃんじゃないって気もするかも……」

「しないって。もう、声の抑揚の感じが完全に晴子さんだもんな。っていうか、そもそも普通の人間だったら初対面の人間、しかも店に來た客に対してあんな態度取るわけないだろうが」

「あんな態度……？」

「…、あれ…、こっただけだったの……？」

もしかして…、晴子さんは、俺は押さえつけて黙らせるつもりであることは間違いないとして、でも霧子のことは黙らせるつもりはないのか？　まさか本気で、霧子の言っている通り、自分は晴子さんじゃないって騙しにくつもりなのだろうか。

「あたし…、よく考えたらあの人、おねえちゃんじゃないような気がするんだけど……」

「なんでそう思うんだよ。なんかあるんだろ、理由みたいなのが」

「にゅ…、にゅん。あのね、おねえちゃんは、バイトしてるのはレストランのキッチンって言ってたような気がしてきたの。接客とかはやらないって言ってた気もするし、メイドさんなんてやってるわけないよ」

「バイト先、聞いてないんじゃないのか？」

「聞いてないような気がしてたんだけど…、でも、なんだか急に思い出したような気がして……」

「…そうか、そういうことなら、違うのかもしれないな、うん」

思い出したなんて、ウソだな。あれは思いだしたんじゃない、思いだしたと思ひ込むことにしただけだ。自分の姉ちゃんがまさかメイドをしているなんて、信じたくなかったんだろう、かわいそうに、霧子…、一番現実逃避していたのは俺じゃない、霧子だったんだ…。そう考えると、さっきぼんやりとハルさんの方を向いていたのも理由がなんとなくかえる。霧子はハルさんが晴子さんだと確認するためにそちらを向いていたのではなく、ハルさんが晴子さんではないと、自らの意識の中で確定させるためにあちらを向いていただけなのだ。

しかしだからといって、俺までハルさんが晴子さんじゃないなんて認めるわけにはいかないのだ。それがいかに自らを死地に置く行為か、ということは重々承知しているつもりだ。だが、だからといってそちらに傾いてしまうわけにはいかないのである。

もちろん表面上は、ハルさんが晴子さんである、ということ殊更に主張するつもりなんてないが、しかし心では、心だけは負けないようにするんだ。いくら屈しているように見えても心は折れない負けない挫けない！！俺は負けてはならないのだ。どうしてかは分からないけど、負けてはいけないのだ。

いや、どうしてかは分かる。それに負けてしまった瞬間、俺が晴子さんからひどい目にあわされるだろうことは目に見えているのだ。それを防ぐためにも、俺は、負けてはならないのだ。

いや、仮に負けなかったとしても、ひどい目にあわされることは間違いないのだろうがな。

## 呼び出し状、在中

「お待たせいたしました、ご主人さま、お嬢さま。シフォンケーキと紅茶をお持ちしました。カップを変えさせていただきます」

魂が半分以上抜けてしまったかのような霧子がいつこちらの世界に戻ってくるのかは分からないが、しかしとりあえず、カートを押しつつ再びキッチンから戻ってきたハルさんがテーブルの上を整理しつつ新しい紅茶とケーキを並べてくれるのだった。

「あ…、ありがとうございます…、ございます…」

「にゅ、ハルさん、ありがとうございます」

「どうぞごゆっくりなさってください」

霧子は、魂が抜けかかっているからか、なんとなくふわふわした気分のようで、ふにゅっと笑いながらそう言ったのだった。もうハルさんが晴子さんである、ということについては考えないことにしたのか、普通に抵抗なくハルさんと呼んでしまっている。

くっ…、俺は屈しないぞ…、あの人は晴子さんなんだ。そこらへんの意識をきっちり持ってないと、あとあとで巡り巡っているいろいろとダメージが降りかかってくるんだろうからな。それくらいのこと、今まで生きてきた経験からなんとなく推測することができるのだ。

まあ、俺の身に悪いことが降りかかることについてはなんとなく察知することができるのだが、それを防ぐことは全くと言っていいほど出来ないのだがな。

しかし、それならばどうして今こうして無駄に抗っているかといえ、俺だって出来れば辛い目に会いたくはないわけだし、もしかしたら今回は防げるのではないか、という希望的観測もある。それが見事に達成されることはめったにない、というか、ほぼないのだが、そういう夢を見るくらいは許されてしかるべきだろう。

「しかし三木、このような時間に二つもケーキを食べてしまって平気なのか？ 夕食も食べるだろうに、そんなにたくさん食べてしま



って」

「ゆっきい、ケーキ二こめいいなあ」

「いや、別に食べること自体は平気なんだけども、そんなに量が多いっていうわけでもないから」

「確かにそうかもしれないが、しかし二つはやはり多いのではないか？ 三木は男だから、そういうことはないのかもしれないが」

「まあ、晩飯つくるのは俺だし、盛り付けるのも俺だし、量を調整するのは簡単なんだけども。残すようなこともないし、だいじょぶだって。まあ、あんまり甘いもの食べすぎると、頭痛くなってくるんだけどさ」

「ゆっきい、ひとくちほしい」

「やだよ、お前に一口やるって、つまり半分以上食われるってことじゃん。どうして俺が金払うのに、お前に半分以上食わせてやらなきゃならないんだよ、絶対やだよ」

ここで頷いてしまうと、俺はすぐさま、皿の脇に添えられているフォークを奪われ、見る間に手元のシフォンケーキが食い荒らされる様を目の当たりにする羽目になってしまうので、気をつけなくてはならない。俺は俺のケーキを守らなくてはならないわけであり、まさに、自分の身は自分で守るというやつである。

俺は、とりあえずケーキとフォークを志穂の手の届かないところで遠ざけてやると、軽く身体でブロックしながらさっさと自分でフォークを握ってしまうのだった。ここまですれば、さすがの志穂も俺からフォークを奪い取ることは諦めてくれるだろう。まあ、ケーキを奪い取ることは、諦めてくれはしないだろうが。志穂の食い維持が張っていること自体はいつものことなわけであり、そこまで着目すべきところではないのだがな。

「でもまあ、一口くらいだったらずらなくもないか」

「ほんと!？」

「俺が食わせてやるから、そこから動くんじゃないぞ。席から立とうとしたら、一口もやらないからな」

「はい。ゆっきい、ありがとうございます」

志穂からケーキを、十分に距離をとって置くことに成功した俺は、志穂のケーキ食いたい欲求を少しだけでも緩和させるためにそう言った。志穂の一口は、確かに非人道的なほどに大きいのだが、しかし実際にそれだけのケーキが食べたいというわけではなく、一口取ろうとして結果的にそれだけ食べてしまうだけなのである。つまりほんの少しだけ、それこそ一般的に一口といわれるくらいの量であっても、それは志穂にとっては一口であることに違いはなく、それだけのことで案外あっさり引き下がってくれるのだ。

つまり、志穂にとって重要なのはケーキを一口食べるという事実なわけであり、その量自体は、実のところ、そこまで執着がないのである。そのあまりの一口の大きさに、勘違いされることが多いが、しかしそれは間違いのないことなのだ。

そして、机にベタッと突っ伏す、今できる最大の平伏低頭をやってみせたあと、まるで『待て』をしている犬のように、志穂は椅子に座ったままピタッとその動きを止めていた。いつもこれくらいお行儀よくしてくれれば文句は何一つないのだが、しかしこれをさせるためにはやはりケーキに匹敵するランクのご褒美を用意しないといけないわけであり、オレンジキャンディでそれをすることはできないのだ。百円均一のオレンジキャンディは、志穂にとって最高のご褒美ではあるのだが、さすがに、授業中ずっとこの状態を維持するように、という指令の代償にはなりえないだろう。

もしそれをさせようと思ったら、俺もそれなりの覚悟——たとえば毎日クッキーを焼いてくるとか毎日ケーキを焼いてくるとか——をしなくてはならず、さすがの俺も、そこまではがんばれない。というわけで、今のところ残念ながらその計画を実行に移すことはできず、また出来る目処も立っていない。

「はい、あゝん」

「はむっ!! んまい」

フォークできれいに一口大に切ったシフォンに添えられたクリーム

をたっぷり乗せて、俺はそれを潰してしまわないように気をつけながら志穂の口元まで運んでやった。そして志穂は、まるで目の前にエサが降ってきた魚のように、驚くほどの速度でそれを口の中へと収めたのだった。

傍から見て、おそらくこれは「あくん」というやつではなく、餌付けかなにかのように見えたことだろう。

「そうか、美味かったか。それじゃ、あとは自分の分を食べるんだぞ」

「はい」

「俺も、せっかくだし、食うか」

ここでこのケーキを食べることは、実際のところそこまでの痛手というわけではない。そもその目的であるところの、ハルさんと顔を合わさずにこの場から去る、ということができなかった以上、すでに俺は一つ失敗しているのだ。この失敗の故にここでもうしばらくの間滞在してはなくてはならなくなり、また少なからぬ出費を求められたのだが、しかしこの出費、実はそこまで痛くないのである。

それは値段にしてしまえばさらに1000円を支払うことに他ならず、俺の小遣的にはかなり厳しいのだが、しかしそれが晴子さんのケーキを食べるために使われるのなら話は別である。晴子さんの普通の料理は比較的簡単に食べることができののだが、お菓子となると話は別なのだ。お菓子はほんの少しだけつくるということができない性質があり、それがあるからこそ晴子さんは家でお菓子をあまりつくろうとしない。

それは、つくればつくっただけ食べてしまう雪美さんがいることが最大の理由である。たとえばケーキを一ホール焼いたとすると、雪美さんはそれをぺろりと平らげてしまう、のだそうだ。普通だったら三人で楽しむことができるはずのホールケーキを一人で食べてしまう雪美さんの存在が、晴子さんのお菓子製作意欲をひどく減衰させているらしいのである。

まあ、お菓子って、分量を精密に量らなくちゃいけなかったりしてけっこう神経すり減るし、仕方ないのかもしれないな。でもだからこそ、晴子さんのつくったお菓子を食べることができるこの瞬間は、非常に貴重なのである。それは、1000円でも2000円でも、それこそ3000円払ってでも安い、と思えるほどなのである。

「ああ、やっぱりうまいな、これ…、うん、幸せ」

ケーキをフォークで小さめに切って、ゆっくりと、その味を確かめるように、あるいは脳へと直接刻み込むように、丁寧にケーキを食していく。

美味い。どういう配分で、どういう生地づくり方をして、どういう焼き方で、いかにタイミングを見計らっているのか、すぐに完全に理解することは出来そうもなかった。やはり、金はかかってしまいが、これからしばらく、それこそ味を覚えることができるようになるまでここに通った方がいいのだろうか。

「どうやったらこんな味が出るんだ…、不思議だ…」

「幸久君、味、覚えるの？」

「ああ…、覚えられるもんなら覚えたいんだけど、でも今の俺の腕じゃ再現できる気がしない。お菓子づくりについては、まだまだ俺もヌルいところが多いからな」

『幸久くん、お菓子もつくるの？』

「まあ、たまにな。あんまり頻繁にはつくらないし、手の込んだものもあんまりやらないから、そんなに上手くないけど」

『すごい』

「そんなことないって。お菓子って、けっこうレシピの通りにつくればうまいくもんなんだぜ。まあ、最初はなかなかそうはいかないんだけどな」

「幸久君も、最初はあるより上手にできなかったもんね、お菓子」

「今でもそんなに上手くないけどな。もっと勉強しないとダメだ」

「そういえば、三木のつくったお菓子というものは、あまり見たことがないな。弁当はつくってくるのに、お菓子をつくってくるこ

はないようだが、そういうことはしないのか？」

「なんていうか、人前に出せるレベルじゃないっていうかさ…、あんまり出来のよくないものは人前にさらしたくないっていうか……。まあ、別に持ってきてもいいんだけど、ちょっと、な？」

「私は、お菓子をつくるなどという発想自体が浮かばなかったのだが」

「姐さんは、そのままの姐さんでいてくれて、いいと思うぜ？」

「がさつなままでもいいろ、ということか？ お菓子づくりなど、少女らしくていいと思うのだが、私にはそのようなものは似合わない、ということか？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ。でも、姐さんがチマチマお菓子なんかつくってる姿って、なんか想像つかないっていうか、ピンとこないんだよな。もっと豪快にかっこよくつくってるところの方が想像できる」

「それは、褒めているのか……？」

「褒めてる褒めてる。なんか、フランベとかして、火がバツ、とあがってる感じっていうかさ、そういうアレ」

「よく分からねが……」

「まあ、でも、姐さんがお菓子つくってるっていうのも、かわいくていいと思うけどな」

「くっ…、また、かわいいなどと、そのようなことを易々と……」

「？ 姐さん、なんかいった？」

「…、何でもない」

「そう？ ならいいんだけど……」

そして俺は、クリームの風味で軽くべたついた口内をすっきりさせるために紅茶の揺らめくカップを手を取った。口元に寄せると、ふわりと紅茶の香りが立ち上ってくる。なんとも幸せな気分だ。

しかしその次の瞬間、ふとソーサーに落とした視線が、四角く二つに折られた小さな紙（ソーサーとカップの間に挟まれていたと思われる）を捉えた。イヤな予感が、背筋を一息で駆け上った。

とりあえず俺は、なににも気付かなかった風を装いながら紅茶を一口含み、ソーサーにカップを戻しつつその紙を手の中に握り込んだ。そして急がず、しかし迅速にそれをテーブルの下に引き込み、気づかれないようにそっとその内容に目を落とす。

『トイレまで来い 一人で ハル』

戦慄した。

そこには、ほっそりとした丁寧そのものの筆致で、まるで不良同士の抗争への呼び出し状のようなものが書かれていたのだ。なんで俺がハルさんに呼び出されなくてはならないか、などということは、もはや考えるまでもないことだった。

晴子さんののだ。それはもう、疑う余地もなく。いや、そもそも俺は、もはや確信すら持っていたのだが。

「…、あそこか……」

再び楽しげに談笑している四人に感づかれないように、俺はこのフロアの隅に配されているトイレへと視線を走らせた。フロア全体の死角になるように配されたそれは、おそらく隠れて話をするにはうってつけの場所だった。あそこに呼び出すということは、何かしら話がある、ということなのだろう。俺は、どうやら、覚悟を決めなくてはならないらしい。

口の中が一気に乾いていくような、そんな気がした。ごくりと、唾を飲み込んだ。

あそこに行けば、メイドと化した晴子さんと、真正面から話をする事が求められるだろう。そんなことができるのだろうか…、いや、しなくてはならないのだろう。

「お…、俺、ちょっと、トイレ、行ってくる……」

「そうか、行ってくるがいい」

「ああ……」

「ゆっきい、いってらっしゃい」

「ああ……」

『場所、分かる?』

「平気……」

「幸久君…、どうかしたの……？」

「いや……」

そして俺は、手に晴子さんからの呼び出し状を握りしめながらとぼとぼとトイレに向かって歩を進めるのだった。さすがに命を取られることはないだろうが、何をされるのか、分かったものではない。

足は、自然重くなった。

どうしてこんなことに、なってしまったのだろうか。

## 今日の罰ゲーム

紅茶に添えられたハルさんこと、晴子さんからの謎の呼び出しに応じるため、ここそとトイレまでやってきた俺は、しかしそこで晴子さんの姿を見つけられずにいた。まあ、晴子さんのことだから、たとえ俺が呼び出された側だったとしても、少なからず待たされることは覚悟の上だったが、しかしこんなところに呼び出されてしまった手前、やることがない。

トイレのある一角までやってくると、どうも奥から男性用、女性用のトイレがあり、一番入口の側に掃除用具入れ（とてもそうは見えないくらいシックな扉がついている）があるようだった。ここに来ていと言われたのはいいが、はたして俺はここでどのようにして待っていればいいのか。こんなところでぼんやりとたたずんで待つ、というわけにもいかないだろう。

しかし、ここで男性用トイレに入ってしまうわけにもいかないのである。なぜならば俺は晴子さんを待たなくてはならないのであり、逆に晴子さんを待たせるなんてことはあってはならないのだ。つまり、晴子さんがきたことを察知することのできないトイレの中に入ってしまうことは許されない。

それならば、トイレの前でただ待っているのはどうかというと、それもやはりちょっとマズいような気がしてならない。どうしてかといえば、男性用トイレの隣には女性用トイレがあるからなのだ。俺は、もちろん、ただトイレの前に立っているだけで、女性用トイレにはまったく関わり合いを持つていないのだが、しかし傍から見てそれはどうなのだろうか。だって男性用トイレは空いているというのに、どうしてこんなところでぼんやり立っているんだ、という話になりかねないだろう。

待って待って、俺はそんなつもり全然ないのに、女性用トイレの前に立ってるとか思われたらヤバいんじゃないの？ やっぱり、世間



体的にあんまりよくないんじゃないの？　だって、なんか…、ねえ？

「こ、ここで…、待ってるのか…？」

や、やだなあ…、俺の人格とか疑われちゃうのかな……。いやいや、そんなことないって、ないない。だって、俺はそんなことしようとしてないって、だいじょぶだって、平気平気。見る人が見れば分かるんだって、俺がそんなことする人間じゃないって、分かってくれるよ。

…、あれ？　でも、それって勘違いする人はするってことだよな…。やっぱりこんなとこにいちやいけないのか？　で、でも晴子さんはここに来いって言ってたわけだし、それを無視することは絶対に出来ないわけで…、はっ！？　まさかここに俺を放置することが既に晴子さんからの罰ゲームということなのか！？　もてあそばれてるのか、俺！？

とりあえずトイレのあるスペースに少し入ったくらいのところ（だいたい女性用トイレと男性用トイレの中間くらいの一番中途半端な位置）で待機しているわけだが、俺はここからどうすればいい。誰も入っていないトイレの前で待つという行為は、さすがに頭が悪く見えすぎるから出来ないし、しかしだからといって女性用トイレの前で堂々と待ちかまえる豪胆さは、残念ながら俺にはない。もう、何でもいいから晴子さんが早く現れてくれることを願うのみである。

「いや、いつものことか…、落ち着け、俺」

『…、幸久……！！　ちよつと……！！』

「はっ！？　晴子さん……！？　どこにいるんですか……！？」

『後ろに三步下がちなさい…、ゆっくり、一歩ずつよ……』

「は…、はい……」

その声は、いい感じに拡散してしまつてどこから聞こえてくるかよく分からないのだが、しかしそれは確かに晴子さんの声だった。ハルさんの声色ではなく、晴子さんの地声だ、間違いない。この声には、なにがあっても従わなくてはならない。

「は…、晴子さん…、どこですか……？　どこにいるんですか……」

？」

言われたとおりに後ろ向きに一步また一步と、具体的にはホールの方に向かってゆっくりと一歩ずつ歩を進めていく。このままではせっかくこんな人から見えづらいところまでやってきたというのに、無駄になってしまうではないか。晴子さんは、俺に何をさせたいというのだろうか。というかそもそも今、どこにいるのだろうか。

「さ、下がりました、晴子さん……。つ、次は……。どうすれば……」

『入りなさい、扉に』

「はい……。いえ、いや……。イヤです……。！」

『はっ？ あたしが入れて言ってるのよ、入りなさいよ。逆らうとか、調子乗ってるんじゃないわよ』

「で、でも……。そこは俺の入っていい場所じゃありませんし……。っていうか、入ったらヤバイです……。！」

晴子さんにそう言われたからにはそうしなくてはならないのだが、しかし俺は、目の前にあるきれいに装飾された扉のノブをつかみかねていた。これを掴んでしまつては、下手を踏むと俺の人生が終わってしまいかねない。あるいは、終わらないとしても致命的で危機的な状況まで追いこまれるかもしれない。いや、かもしれないじゃない、追い込まれるんだ。

そしてさらに、掴むだけでなく、捻つて中に入ることすらも要求されているのだ。ノブを掴んでいるだけなら「間違えてしまいました」という言い訳も通じるかもしれないが、しかし捻つて開いてしまつては、その前に気づいて然るべきなのだから、言い訳をすることすらも許されないに違いない。

ダメだ、そんなことしたら俺は死ぬ。社会的に死なざるを得ない。

『いいから、入りなさいよ。あたしが中にいるのよ』

「そ、そうなんですか……。？ でも、さすがに……。女性用トイレには……。入れないです……。！」

『はっ？ ……そっじゃないわよ、用具入れよ。三步じゃ足りなかったわね、もっと下がちなさい。誰かに見られたりするんじゃないな』

いわよ。基本的にこういう裏には人は入れない決まりなんだから』

「あ…、ああ…、そっちですか……。それなら、はい、すぐに入ります……」

よ、よかった…、そういうことなら、問題はあるまい。しかし、晴子さんなら自分の都合を優先して女性用トイレの方で待機していたとしてもおかしくなかった、と考えるとこの状況は非常に喜ばしいものだった。

しかし、きつと用具入れなんて、トイレと比べてもなお悪い最低の住環境なのだろうから、そこに少しの間であっても晴子さんを滞在させているなんて、許されざる大罪だ。今すぐにでもそこから晴子さんを解放しなくてはならない。俺は急いで晴子さんの待つ用具入れの扉を開き、その中へと足を踏み入れるのだった。

「し、失礼します……」

「ちんたら入ってくるんじゃないわよ、さっさと入ってきなさい。

人に見られたら怒られるのは私なのよ」

「す、すいません……」

「で、さっそく本題だけど……」

そろりと足を踏み入れた用具入れは、どうやら倉庫と兼用されているようで、普通の店のトイレと同じくらいの広さがあり、さらに荷物が山積みということもないのでそこまで居心地は悪くない感じだった。しかしそこにいた晴子さんはそこはかとなく不機嫌であり、空氣的には居心地最悪と言わざるを得ないだろう。

晴子さんは、どうしてか設置されている椅子に浅く腰かけ背もたれにダラっともたれかかり、メイド服のロングスカートの裾が軽く乱れることもかまわずガッ！ と足を組んで剣呑な上目遣いで俺のことを睨みつけている。きつと俺がこの店にすることが気に入らないのだろう、口にせずともそれがビシバシと伝わってくるのではないか。だが、だからといって、逃げたいが逃げてはならない。俺はここで晴子さんからの御言葉を賜らなくてはならないのだから。

「なんで、あんたは、ここに、いるの」

「と、友だちが…、ここの喫茶店を紹介してくれたんです……」

「…、メイちゃんね」

「はい……」

「まあ、ちょっと前に霧子がメイちゃんをうちに連れてきたときにもしかしたらって思ってたけど…、でもわざわざ今日、あたしがいる曜日のいる時間狙ってこなくてもいいじゃない。そこらへんのところ、どういうつもりなの？ 偶然とか言うつもりなの？」

「ええと…、偶然とかではなくて…、メイが今日はハルさんがいるからって……。メイとしては、俺たちに晴子さんのことを紹介したかった、みたいな、アレでして……」

「…、そういうこと、ね……。この間うちに遊びに来たときも、私がハルだって気づいてなかったみたいだし…、ああ、なにこれ、ミス？ あたしがミスしたっていうの……？ カモフラージュ、やりすぎたってこと？」

「俺も、正直言いますけど、なんかよくない予感してたんです。すいません、直感に従って逃げてればこんな風に晴子さんに迷惑かけることもなかったのに……」

「…、まあ、別にいいわ、いつかこういうこともあるんじゃないかとは、思ってたし」

「いいんですか？」

「ほんとにただの偶然みたいだし、言っても仕方ないじゃない。別に偶然に対して怒ったりしないわよ」

「……………、ほんと、ですか？」

何が、というわけではない。だが、直感的に、何かがおかしいと感じた。

こういうとき、晴子さんは偶然を呪うということをしせず、リアリストとして（晴子さんの言）高確率で俺に対して八つ当たりをしてくるものである。それはこれまでの積み重ねから明らかなことであり、法則が崩されることはめったにない。

これくらいのことがあったら、俺を這いつくばらせて憂さが晴れる

まで踏みつけ続けるとか、中腰の姿勢をキープさせた俺の膝をいつまでも蹴り続けるとか、硬く丸めた新聞紙で俺のことを何度も何度も打ち据えるとか、それくらいのがされてもおかしくはないのだ。というかむしろ、それがされて初めてこの状況が解消されると言っても過言ではない。

本能が告げている、逃げるべきは今である、と。ここで逃げなくては、何かマズいことになる、と直感が叫んでいた。

「あんたがここに來たのも、まあ、何かの巡り合わせってことよ、運命ってやつね」

「晴子さん…、あの、運命とか…、リアリスト的にアウトな単語がこぼれてるんですけど…」

やばいやばい…、やばいって…。なにかヤバいって…、なにが起ころ？ 何が起ころんだ…？ 逃げたいのだが、しかし逃げることはできない。出来ないからには状況を受け入れるしかない。

しかし、その受け入れる状況が、まったく読めない。晴子さんが法則を崩して物理的な八つ当たりをしてこないのだから、それは何か俺にとってよくない、何らか別のことが起ころということの意味しているのではないだろうか？ 痛めつけられるよりもよくないことが、俺に降りかかるのではないか？

「許してくれるってことは…、もう戻っても…」

「はっ？ それとこれとは話が違うでしょ？」

…、それとこれって、どれとどれでしょうか…？

「あんた、金使っていきなさい。財布にあるだけ、全部ね。それから、これからも定期的に來てお小遣いを使っていきなさい。私の秘密を知った罪は、それで許してあげるわ。寛大な私に、感謝しなさい」

「…、えっ？」

「だから、店の売りに上げに貢献しなさい、ってことよ。私の専属、つまりメイちゃんだけど、の知り合いのお会計は私の功績になるのよ。功績が積み上がるとボーナスが出るのよね。だから、あたしの

ために、売上に貢献しなさい」

「…、えっ……？」

「今のところ、あんたは2000円も使っていないわよね。少なくとも、あと2000円は使って、全部で4000円は使っていきなさい。あんたが一人で4、5000円使ったとすれば、お会計全体が10000円近くなるし、最高ね」

「…、えっ？　ちょ…、えっ……？」

「ほら、分かっただらさっさと戻りなさいよ。あんまりトイレが長いと疑われるわよ。じゃ、あたしは戻るから」

「…、えっ……？　あの、えっ……？」

そして立ち上がった晴子さんは、スツと俺の横を通り過ぎると、扉を開けて何事もなかったかのように用具入れを出ていったのだった。つまり、ここがこの呼び出しの用件の終着点、ということなのだろうか。つか。これが、今回課された罰ゲームということなのだろうか。ついに晴子さんは、俺のことを殴る蹴る踏むだけでは飽き足りず、俺の財布にまでダメージを与えようというのだろうか。

ちよっと寄っただけの喫茶店で、どうして一度に4000円も使うことができるだろうか。この店は比較的リーズナブルな値段設定になっているわけで、ケーキをそんなに食うことはできないし、紅茶ばかりそんなに飲むわけにもいかない。というか、そんな使い方、俺の金銭感覚が許してはくれない。

だがしかし、だからといって晴子さんに逆らうことができるというわけではない。逆らえば、それはもう、財布の中の金を全部使っていけよ、みたいなカツアゲじみたこととは比べ物にならないほどの、何かが飛んでくると考えるのが妥当だ。

つまり、なんとかして使うしかない。仕方ない、と両手を挙げるしかないのである。

そういえばさっき、メイが「無茶をしなければ」そんなに金を使うこともないと言っていたっけか。ということは、「無茶をすれば」大枚をはたくこともできる、ということなのではないだろうか。仕

方ない、その「無茶」の仕方を、メイに教えてもらうしかないらしいな。

ただ一つ願うことがあるとすれば、その「無茶」が「いっぱいケーキを食べる」とかでないことのみである。

## デュエル・スタンバイ

「あつ、ゆっつきい、おかえり〜」

「…、ただいま……」

晴子さんに続いて、誰にも見つからないように掃除用具入れから出た俺は、よろよろとみんなの座っている席へと戻るのだった。これから空っぽになるだろう財布のことを思うと、悲しくて足元も覚束なくなるというものである。

「幸久君、トイレ行っただけなのに…、どうしたの……?」

「いや、なんでもないって……。それよりも、メイ、一つ聞きたいんだけど、いいか?」

『なに?』

「あのさ、さっき、この喫茶店はリーズナブルで、あんまり無茶なことしないとお金はそんなにかからないって言ってたよな?」

『…、言った』

「それってつまり、裏を返せば、無茶なことすればお金をいっぱい使うことになる、ってことだよな?」

『そう』

「その、お金がいっぱいかかるかもしれない無茶なことって、なんだ? それについて詳しく教えてほしいんだけど」

『ゲーム』

「…、ああ、そういえばさっき聞いたか、それ。でさ、そのゲームって、普通のゲーム? ケーキの大食い対決とか早食い対決とか、そういうのじゃなくて?」

『普通のゲームだよ』

そうか、なるほど、普通のゲームなのか。少なくとも、この店でお金をいっぱい使う方法が、俺の懸念していたようなケーキをいっぱい食べるとかじゃなかったというだけでも御の字である。ゲームならば、やってる間に熱が入って連コインし続けて散財、っていう流



れが自然だから、そうそう怪しまれることもあるまい。

しかし、普通のゲームというからには筐体がどこにあるはずなのだが、しかしそのようなものはこの店内には見当たらない。というか、そんなものがあつたら周囲の内装と不釣り合いすぎて違和感しか覚えないはずだ。

そういう大きなゲーム機のようなものがないとなると、ここ这个游戏というのはトランプとかのテーブルゲームのことを指すのだろうか？ 金を払ってトランプをするとなると、それはギャンブルみたいな感じになるのか？ しかしこんな店でギャンブルなんてやっているはずはないし…、どういうことだろうか？

「そのゲーム、メイはやったことある？」

『そんなにやったことない。二回くらい』

「二回？ それはまた、中途半端な……」

『二回やって、勝てたから』

「？ 二回目で、勝って、やめたのか？」

『勝って、満足』

「ふん…、そうなのか……」

普通、ゲームというものは勝ってやめるのが理想だから、メイの言い草におかしなところは見当たらないのだが、しかしそれはどこか、本当にただの勘でしかないが、俺に違和感をもたらした。たとえばそれがギャンブルのようなものだったら、一度の勝ちで手を畳むようなことはせず、勝ちの流れに乗ってもう一戦といってもおかしくはない。ギャンブルではないとしても、一回目に負けて二回目に勝って、となればようやくゲームに慣れてきたし一回勝って気分もいいしで、もう一回二回とやろうと思うものではないだろうか。

どちらにしても、たった二回では、手を引くには早すぎるではないだろうか。どういうことなのだろう…、そのゲームというのは、一度勝つたもう止めてしまっても惜しくないものなのだろうか。何度も勝って、という楽しさを感じるものではないということか？

…、ああ、そうか。ピンと来た。景品だ。

「メイ、それって、勝つと何かもらえたりするか？」

『もらえる』

「そうか、やっぱりな」

景品がもらえるという状況ならば、勝ったり負けたり、つまりゲームをすることそのものの愉快さを楽しむことよりも、勝って得ることのできる景品の価値にその重点が置かれることになる。つまり、景品を得る権利が生じる一勝をした時点での手仕舞いはおかしいことではなく、むしろ当然ということが出来るだろう。

というか、その景品っていうのは、はたしてなんなのだろうか、少し気になるな……。

「…、メイは、二連戦して、二回目に勝ったのか？」

『そう』

「あれ？ そのゲームって、一人でやるのか？ トランプとかにも一人用のパズルみたいなのあるけど、そういうの？」

『違う。メイドさんと対戦』

「なるほどな、対戦、か……」

対戦ということは、おそらく俺がそれをする場合、メイの専属である晴子さんが相手ということになるのだろうか。…、晴子さんと、直接対決するってことか……。

「そうか…、…、…、そうか！」

そして俺は、たどり着くべき場所へと思考を至らせることに成功した。必要なピースは、「金を使う」ということ、「景品付きゲーム」という遊び、そしてそのゲームは「客主導でのメイドさんとの対戦形式」という事実。この三つがそろえば、運が良ければ大して金を使わずにこの状況を切りぬけることができるかもしれない。

まず、晴子さんは俺が「金を使う」ためにそのゲームをすると思うだろう。まあ、実際そうなのだし、それは勘違いでも何でもないのだが。そして「景品付き」という遊びの形態から、客側の勝利がすなわちゲームの手仕舞いを意味する。つまりいくら金をたくさん使うためにこのゲームを始めたとしても、勝ってしまえばそれ以上の

継続は不自然であり、晴子さんとしてもそれは望まないとされる。そして客側にゲームを始める権利とやめる権利があるということは、店側には客の手仕舞いを止める権利はないということなのだ。

つまりゲームを始めて、二三戦して俺が勝ち、そして急いであるので帰ります的な体でさっさと帰ってしまえば俺が使うのはその二三戦分の代金だけであり、さらにリターンとしてその景品まで手に入るのだから決して無為な出費というわけでもない。

これならば、晴子さんのために金を使おうと思ったけど、しかしうっかり勝ってしまったって、晴子さんの体面のためにこれ以上ゲームを続けることはできず、迷惑かけないためにも景品だけもらって帰ります、みたいな流れを演出することができないではないか。これならたぶん晴子さんの機嫌も損ねないし、仕方ないと思ってもらうことも、できるかもしれない。

完璧なプランだ。そもそも俺が二三戦で勝てるのか、という問題はあるが、きつとそこは、ゲーム自体そんなに複雑な構造はしてなくて、ギャンブル性の高い一発勝負みたいなものだろうし、そのゲームに慣れていなくても勝ちと負けが五分五分みたいな運否天賦の戦いになるに違いないのだから、そこまで問題はあるまい。

「メイ、そのゲームって、一回いくら？」

『500円』

「ってことは、二戦で1000円か……」

よし、さくつと二戦くらいで勝ってしまえば、それだけの出費で済む、ということか。運を天に任せるような戦いはあまり好きではないのだが、まあ、ここではそれ以外に方法がないのだから仕方あるまい。ようは、勝てばいいのだ、勝てば。

「幸久君、ゲームするの？」

「ああ、景品がほしいからな。それが何だか知らないけど」

「何だか知らない景品がほしいの……？」

「何言ってるんだ、霧子！　そういう、ゲームに勝って何かもらうみたいなのが、俺は好きなんだ！」

「そ、そうだったっけ……?」

「そういう設定になったんだよ! 今ここだけは!」

「にゅ…、そ、そうだったんだ…、知らなかった……」

「それじゃあ、どういうゲームをするのか教えてくれ、メイ。それをあらかじめ知ってないと、勝てるものも勝てないからな」

『ゲームは、トランプだよ』

そこから展開されたメイの説明によると、それは思ったよりも単純なゲームのようだった。

まず、使うカードはトランプの中でも16枚だけ、スペード、クラブ、ハート、ダイヤのマークからそれぞれJ、Q、K、Aの四枚ずつを取り出して行なわれる。その16枚を黒と赤に分け、客側が黒、メイド側が赤をそれぞれ持つところからゲームは始まる。単純に言ってしまうえばその、それぞれ8枚ずつ持ったカードを使って戦うということなのである。

そして先攻後攻をジャンケンで決め、先攻側はまず自分の手の中から一枚を選び、両方から見えるように表向きに、テーブルの真ん中へとそのカードを置く。先攻側はカードを置いたら、次に後攻側が提示するカードから一枚を、そのカードの内容が見えないようにしている状態（これは机に伏せたまま並べていても扇状に手の中で広げて持っけていてもいいらしい）から選択する。わざわざ「提示したものから」という言葉が使われたのは、守り側は自分が今持っているカードの中から四枚を選んで攻め側に提示するからである。しかし第五戦以降の、手持ちのカードが四枚を切った状態になったときには、残ったカードを全て提示することになっているようだ。

選んだカードの模様が同じ種類のものだったなら、それはペアが成立したので、一ポイントが先攻側に加点され、その二枚のカードは破棄される。種類が違うものだった場合、それはペアが不成立ということになる、加点されないままカードは破棄される。

つまり、ペアが出来たとしても出来なかったとしても、両者の手札から一戦につき一枚ずつが捨てられることになるのだ。そして、先

攻の二度のカード選択が終了した時点で攻め手が交代され、次は後攻が、先攻側がしたのと同様に自分のカードから一枚を選び、続いて相手側のカードから一枚を選択し、ペアの成立不成立を確認しポイントの精算を行なう。

勝敗は単純に、成立させたペア数である獲得ポイントが高い方の勝ちということになる。もし獲得ポイントが同じになった場合は、引き分け再試合を行なうこととなっているらしい。言ってしまうえば、多少変則的な神経衰弱のようなものである。

ゲームというのは、それだけの非常に単純なものなのである。これならば、純粹に運の勝負であり、慣れや経験が差し挟まれることはないようだ。

守り側のカード選択について、メイの説明ではちょっと分からないところがあったので、これはあとで晴子さんに聞いてみることにしよう。メイドさんは、きっとこのゲームを何度もやっているだろうし、二度しかやっていないメイよりも、当然詳しいだろうからな。

『つていうこと』

「なるほどな、だいたい分かった」

『そんなに難しくない』

「確かに、そうだな。それで、今さらだけど、勝ったときの景品って何がもらえるんだ？ 粗品みたいな感じの、紅茶の茶葉とかか？」

『いっしょにゲームしたメイドさんと、ツーショット写真』

「……、ツーショット……!？」

突然だが、晴子さんは、写真がそんなに好きではない。いや、それは正しい言い方ではないか。晴子さんは、写真を撮られるのがあまり好きではない。撮る方は比較的好きなのだが、しかし撮られるとなると、遠慮することが多いのである。

なんでそんなに写真を撮られるのが嫌いなのか、と以前に聞いてみたことがあるが、どうも幼少期に雪美さんと陽介おじさんに写真を撮られ過ぎて、もう写真を撮られるということ自体に辟易しているのだそうだ。そう考えると、写真を撮るのが好きなのはその反動、

ということもできるかもしれない。

つまりここからどういうことが言いたいかといえば、晴子さんが写っている写真というものが、実は非常にレアなものだ、ということである。小学校くらいまでの写真はたくさんあるのだが、しかし中学校の入学式の記念撮影から先は、もう本当に節目節目の大きなイベントのときにしぶしぶ撮られたようなものしかなく、大学生になってからの写真など、もしかしたら天方家にすら一枚もないかもしれない。当然、俺がそんな貴重な写真のうち一枚を保有している、ということはないのである。

常日頃から、弟子として師匠の写っている写真を飾って朝夕に一度ずつ礼拝しなくてはならないのではないか、と思っていたところだ。もしここで晴子さんの写っている写真を手に入れることができるのであれば、長年やろうと思って出来なかったことができるようになるということだ。なるほど、これはいやがおうにもやる気が増すというものだ。

しかし、いきなりツーショットというのはどうだろうか。師匠に対して失礼にはあたらないだろうか。というか、普通に気恥かしい。もしそんな写真を持っているところを誰かに見られて、変なうわさされたりしたら恥ずかしいじゃないか。

…、いや、待て。ツーショットを撮るとき、晴子さんはハルさんとしてメイドのいでたちのままなのではないか？　つまり、外から見たら、俺はただメイドさんとのツーショット写真を後生大事に持っているだけであり、別に晴子さんとのツーショットだとは誰にも思われないのではないだろうか。おお、それなら変なうわさなんて、どうしたって立たないじゃないか！

「…、よし！　絶対勝つ！」

「ゆ、幸久君…、そんなにメイドさん、好きだったの……？」

「いや、そんなことないぞ。別にメイドさん、嫌いじゃないけど」

「それなのに…、そんなにやる気出たの……？」

「おお！　やる気出たぞ！」

「三木、あまり騒ぐんじゃない」

「ごめんなさい……」

おっと、いかんいかん、ちょっとテンションが上がりすぎてしまった。姐さんに怒られるなんて、いけないぞ。落ち着け落ち着け…、冷静になるんだ、三木幸久。そんなに浮足立っていると、勝てるものも勝てなくなるぞ！

## 装いの自信、偽りの慢心

「ご主人さま、ゲームをなさるんですか？ わたしと？」

「うわっ!？」 は、ハル…、さん……。え、ええ…、まあ、はい…」

俺が晴子さんとのツーショット写真、という言葉の響きに浮かれて気もそぞろになっているところに、音もなく、その当の晴子さんが俺の後ろに立っていた。おそらく俺に金を使わせるため、注文を取りに来たのだろうけど、明後日の方向に意識が飛ばしていた俺は、それこそやり過ぎなほどに驚いてしまい、椅子の上から転げ落ちるかと思った。

「でも、よろしいのですか？ ご主人さま…、わたし、強いですよ？ 負けたことは、メイお嬢さまにしかありませんし」

『そうだったの？』

「はい、メイお嬢さまは、とてもお上手でいらっしやいましたから。素晴らしいお手並みでしたので、流石のわたしでも、降参するしかありませんでしたもの」

「へえ…、メイはそんなにこのゲームが上手だったのか……。やるな…、メイ……」

でも、さっきはあんまりゲームの内容を詳しく覚えていたようでもなかったし（さっきのゲームの内容は、メイが曖昧にしか覚えていなかったものを俺が想像と合理性で埋めたものであり、メイから教えてもらったものは、もう少し大ざっぱだった）、もしかしたら単に運が良かっただけ、という可能性もある。しかしまあ、運も実力のうちっていうし、そういうここぞという場面でツキを呼び込むことができるというのは、ゲームについて熟知するよりもすごいことであり、勝負強いというのは間違いなく一つの才覚なのである。

そして、ここから分かることは、まさにこの勝負、勝敗を左右するのは運であり、時運を得ることが実力を持つことよりも重要である、



ということなのだ。つまり、俺もメイのように運を味方につけるとさえできれば、二度の対戦で勝利を収めたメイと同じ様に少ない回数で勝ちぬくこともできるということが証明されているのである。「それでは、御覚悟はよろしいですか？　ご主人さま？」

「は…、はい……」

しかし、運があれば勝つことができると分かり、自らのプランの第一歩を踏み出すことができたというのに、その晴子さんの何気なく発せられた一言に、俺の心中を鋭い悪寒が駆け抜けた。ふつう、こういうときに発せられるべき言葉は、「準備はいいか」とか「用意はいいか」とかであるべきだというのに、しかし晴子さんの選択した言葉は「御覚悟はよろしいか」である。これは、何に対する覚悟だ？

さつき行なわれた、俺と晴子さんがした約束——つまり俺がここでお金をたくさん使うという約束——に対して、金を使う覚悟はいいか、ということを行っていると考えたと、比較的自然的かもしれない。確かに晴子さんといえど、俺が財布を空にしてしまうことに少なからず哀れを覚えるだろうし、それに対する覚悟のほどを問うていると考えるのは妥当な線だ。

あるいは、この店で一番強いわたしに勝負を挑むなんていい度胸ね的な、他の対戦相手を選ばせてあげてもいいわよ、ということを裏に秘めた、俺に時間の猶予を与えてくれるための言葉と捉えることも出来るだろう。もしそれが真意だとしたら、そこには晴子さんのやさしさが込められているわけである。

それともただ単純に、何という意味もなく選ばれた言葉がそれだった、というだけなのだろうか。そうだとしたら、もちろん、それは俺の思いすごしでしかなく、過剰反応だった、というだけのことだ。しかしその違和感は、軽微というのともためらわれるほどの無味無臭。それよりも今は、目の前にあるゲームをきっちり勝ちぬける方が重要。脇目を振っている場合ではない。故に無視するのが上策だろう。

「ルールの方は、よろしいですか？ ご主人さまはこちらのゲームは初めてのようにお見受けしますので、よろしければわたしからご説明をさしあげますが」

「お願いします。さっきメイから聞いたけど、やっぱり一応聞いておいた方がいいですからね」

「はい。それでは説明させていただきます」

晴子さんから説明されたゲームのルールは、だいたいメイがしてくれたものと同じものであり、根本的なところでの違いはなかった。しかしそれでも、やはりかなり前にゲームをしたのだろう、いくつかの部分で違いはあった。

まず違うところは、守り側のカードの選択方法。メイは四枚に枚数を固定して選択し、四枚よりも少なくなったときは選ぶ行程は省き、もっているカード全てを出すと言っていたが、しかしカードは常に手持ちのカードの半分（奇数枚持っているときは半分から切り上げ）を選択するのだそうだ。つまりゲームが進み持っているカードが減ると、守り側の提示するカードも減っていくということだろう。これは、最後の最後まで守り側に選択の余地を残すという意味で、ゲームをより深くする意味があるだろう。

そして次に、攻め側から提出されたカードの扱いについて。これはメイの話では開いた状態で提示ということだったが、しかし本当は勝負の場に公平な立場の判定役が立ち合い、攻め側はカードを裏にした状態で提示し、判定役だけがその図柄を確認、ペアが成立した場合にのみ公開されるということだったらしい。これは情報が制限されるということを意味し、ゲームそのものの難度を跳ね上げるルールだ。あるいは、守り側が負けたときのメリットを増やすという意味（守り側から見れば、「相手がペアを揃える」ということが、ただ「相手にポイントが与えられる」というデメリットがあるだけではなく、「相手の使用したカードの情報を得る」というメリットが生じる、ということであり、ポイントを奪われることがただ不利になるだけではなくった）で、守り側のためのルールということ

もできる。

「これで、説明はよろしいですか？」

「あの、一つだけ聞きたいんですけど、いいですか？」

「はい、なんなりと」

「守り側がカードを選ぶときなんですけど、選び方に制限はあるんですか？ たとえば、…、えっと…、同じカードは二枚選べないとか、そういう制限みたいな…」

「ありません。手持ちのカードの中から、ご主人さまが好みに選んでくださって構いません。それこそ、一点集中で潰しに来てくださっても一向に問題はありません。他にご質問はございますか、ご主人さま？」

「他には…、連続でゲームをする場合、最初に決める先攻後攻は交代でしたりするんですか？ それとも、それぞれのゲームで、完全に仕切り直してことになるんですか？」

「各ゲームごとに仕切り直しになっています。そもそも連続という考え方が間違っていて、ゲームは終わった時点で終わり、連続でコインを投入してのコンティニュー、というわけではありません。毎回、負ければゲームオーバーになっております、ご主人さま」

「そうですか…、分かりました、もう質問はありません。さあ、ゲームを始めましょうか……」

「はい、承りました、ご主人さま。それではすぐにご用意させていただきますので、少々お待ちください」

「ええ…、そういうば、ハルさん」

「はい？ なんでしょうか、ご主人さま」

「勝ったときの景品…、ツーショット写真らしいですね？」

「ええ、その通りでございます、ご主人さま。ご主人さまがもし一勝を収められましたら、僭越ながらわたしが、ツーショットのポラロイド写真をさしあげております。あくまでも、もしも、ご主人さまが勝利を得られたならば、ということですが」

「勝ちますよ、ええ…、勝たせてもらいます。勝負の用意だけでな

く、カメラの用意も、しておいてもらって構わないですよ、ハルさん？」

「ご主人さまは、ご自分にかなり自信がお有りのようですね。ああ、恐ろしい、わたしも簡単に負けてしまわないように気をつけなくてはいいですね。メイお嬢さまには負けてしまいました、そのほかの方に負けるわけにはまいりませんから」

うふふあははと、俺と晴子さんは真正面から向き合って微笑みあっていた。いつもだったらこういう風に晴子さんに対して生意気な感じのする態度には出られないが、今だったら何をしても、今この瞬間この場で何かをされることはない。それならば、こうやって晴子さんが何もできないときを狙って、いつもなら出来ない、少し強気な態度をとってみるのもいいではないか。どうせ何にしても後で、晴子さんのバイト先にうっかり来てしまったことについて思い出し怒りされるわけだし、ただその理由がここでの生意気な態度に変換されるだけなのだからな。

「それでは、準備がありますので、失礼いたします」

そして晴子さんは、丁寧に深く腰を折るとエクステで長くしている髪をさらりとなびかせ、裏へとさがっていくのだった。

「ふう……、やばい…、心臓停まる……」

しかし、けっきょくは勝負の前に少しでも晴子さんにプレッシャーでも与えられればいい、と思ってやっていた生意気な態度なのだが、そんなものが晴子さんに通用するはずもなく、さらっと流されてしまった。というかむしろ、俺の方が変にくたびれてしまって緊張していたわけで、自殺点をゴールに叩きこんでいる気分だった。

まあ、まったく効果が見られなかったとしても、いつもはできない、晴子さんに強気な態度で接する、ということを出来ただけでもよしとしよう。これはこれで、いい経験をすることができたしな。

「三木、本当にゲームをするのか？」

「え？ ああ、するよ。ゲームして、写真撮って、それからさっさと帰ることにするよ」

「そうか、それならいいのだが……。お前は、こういう些細な勝負事に熱くなりやすいからな、あまりのめり込み過ぎないようにな」

「ああ、それは、気をつけるようにするよ。だいじょぶだいじょぶ、俺はそんな、デカイ金を動かすような勝負は出来ない性質だからさ」  
「そうだな、三木は、大きな危機の察知に関しては感度がいいからな。きっと、勝負が大きくなれば潔く身を引くこともできるだろう」  
「平気平気、姐さんってば、心配し過ぎだよ」

「三木、覚えておくんだ。一度ずつは小さな金銭しか動いていないとしても、それが積み重なれば、動く金銭の総体は大きなものになるということな。いいか、一度は500円でも、五度で2500円、十度で5000円だぞ」

「分かってるって、姐さん、心配ないって。でも、心配してくれてさんきゅな」

「まあ、お前がそういうならおそらく大丈夫なのだろうが、しかししっかり覚えておくんだぞ。引き際というものを見失わないようにな」

「引き際……。ね……。まあ、五回やって一回も勝てなかったら、潔く止めることにするよ」

「そうだな、そうやって自分でリミットを決めることは大事なことだ。私は、今回は声はかけるが、強引に止めたりはしないから、自分で止める決断をするんだぞ」

「ああ、気をつける」

「ゆっつきいゝ、ケーキ、たべないの？」

「ケーキ？ …、ああ、食べる食べる。勝手に食べるなよ、志穂。

俺のなんだからな」

「えゝ、でもひとくち」

「さつきあげただろ。そんなに食いたかったらもう一個注文でもすればいいだろ。とにかく、俺の分はやらん」

「うゝ、そうなの？」

「そうだよ」

そもそもからして、どうして俺が志穂に一口やらなきやいけなかったのか、ということからして疑問だ。さっきだって、正直、断固として拒絶し続けることだってできたのである。それだというのに、俺は志穂に一口ケーキを分けてやったのだ。それだけでも、もうすでに大サービスではないか。それ以上を求めようなんて、ただ志穂が欲張りなだけだぞ。

ここは心を鬼にして、絶対にこれ以上は分けてやらないようにしないと。ちゃんと人のものと自分のものを区別することのできるいい子に育ってくれないと困るというものだ。

強欲と暴食は悪徳である。慎ましやかに、おしとやかに。女性として恥ずかしくないようにいろいろと学んでほしいものである。そして最終的には、食事をするときにkachacha音をさせないテーブルマナーを身に付け、男といっしょに歩くときは三步後ろを静々と歩き、おかわりは一度までで抑えられ、それから擬音を口に出して言うてしまったりしない常識を身に付けた大和撫子に仕上がって、もとい成長してもらおうと思っている。

「まあ、また今度来たとき、食べろよ。楽しみは、何度にも分けた方がうれしいだろ。なにも一回で全部楽しんじゃわなくてもいいだろ」

「んー、そうかも」

「だから、とりあえず、お茶でも飲んでゆっくりしてな」

「はーい。おちゃ、おいしー」

「ご主人さま、お待たせいたしました。ゲームの御用意が整いました。判定役はこちらで用意させていただきましたが、よろしいでしょうか？」

「あつ、はい、平気です」

「ご主人さま、ハルちゃんは強いですよ、がんばってくださいね」

「ええ、まあ、負けませんよ」

「きゃっ♪ ご主人さま、心強いお言葉です♪」

「さあ、ご主人さま、それでは始めましょうか」

こうして、俺と晴子さんのゲーム対決は幕を開くことになる。とりあえず、一戦目は様子見だろう。ゲームそのものの勝手が分からないからな、いかな、まずは見だ。

そして一戦目でなんとか見切り、二戦目で勝つ。そして帰る。それでいいんだ。ただそれだけ、難しいことでは、おそらくないだろう。

## デュエル！ ？

「それではご主人さま、ゲームを始めましょう」

「はい、いつでもどうぞ、ハルさん」

ゲームを始めるにあたって、俺たちは店の真ん中の二人席（そういえば、どうしてか空席になっていて、ポツンと孤立している）へと移動するよう促され、そして俺と晴子さんが向かい合うようにそれぞれ座る。それからその横に、もう一脚椅子を寄せて判定役のメイドさん（俺たちが店に入ったときに応対した「ミキ」さん）がちよこんと座った。

しかしこのテーブル、なんか他のやつと感じが違うよな……。なんか机の脚も椅子の足も床に固定されてるし、ルールみたいなのがそれぞれのサイドに据えつけられてるし、どう考えても喫茶店で客がくつろぐことを目的として設置されてないだろ、これ。

「これは、特製の対戦台です、ご主人さま。このゲームはご主人さま方にたいへんご好評をいただいておりますので、より一層楽しんでいただけるようにとメイド長が腕をふるいました」

「へ、へえ…、メイド長は、日曜大工もたしなむものなんですね…」

「はい、メイドのたしなみでございます」

残念ながら、それは俺の知っているメイドのたしなみというものではないように思う。おぼさんや美佳ちゃんがたしなんでいたものは、音楽や絵画などの芸術鑑賞であったり、トランプやチェスなどのテーブルゲームであったり、少なくとも日曜大工ではなかった。そういうことは、男にでもやらせておけばいいのであって、メイドさんは室内遊戯をたしなむのがいいように思うのだが。

まあ、それはいいとして、つまりこのテーブルは、ゲームの対戦用に用意してある特別席ということなのだろう。どうしてそこまで店側がこのゲームに入れ込むのかはまったく分からないが、何か深い



理由でもあるのだろうか？　それとも、このゲームからの収入が、俺が思っているよりもずっと多いってことなのか？

確かにこのゲーム、それぞれの席でやられてしまうと、メイドさんが動きやすいように配されているテーブルを多少なりともずらす必要があるだろうし、そこかしこでいっぺんにやられてしまうと潤滑な営業に差し障るっていうことも、考えられないことじゃない。それともスタッフの人数の問題か？　このゲームにはスタッフ二人がかかりきりになってしまいうけだし、あまり同時多発的にゲームを始めてしまうとホール内のスタッフがほとんど動けない、という状況も考えられるわけだし、それを避けるためにゲームをするときは特別な場に移動して行なう、ということにして、同時に発生するゲームを特製テーブルの数までに収めるのだ。そうすれば、動けなくなってしまうスタッフの人数はあらかじめ予測できるわけだし、どれだけスタッフを配置しておけば店が回るか、ということも設定しやすいだろう。

「それではカードを配らせていただきます。カードを配りましたら、先攻後攻を決めるためにじゃんけんをいたしましょう」

「はい」

先攻後攻を決定するじゃんけんに勝ったのは晴子さん、逡巡なく先攻を選択。別に先でも後でも、どちらでも変わらないと思うし、俺としてはどちらでも構わないのだが。まあ、あえていうなら、やり方を一回実演してもらえる分、晴子さんが先に攻めてくれるのは助かる。

とりあえず、一回見せてもらおうとしよう。このゲームのやり方ってやつをな。

「それではご主人さま、まずは八枚の中から半分を選んでください。選び終わりましたら、そちらのレールの上に、こちらからは内容が確認することができないように立てて並べてください」

「半分ってことは、最初だから四枚ですよ。えっと……」

一回目は、当然一試合目なんだから手元のカードが八枚すべて残っ

ており、どのような組み合わせでも選び放題である。さて、この八枚の中からどのようにして選ぶのが一番いいのだろうか。

こういうカードが減っていくようなゲームの場合、通常気をつけなくてはいけないのはカードを如何にして残すか、ということである。最後に同じカードばかりが残ってしまい二進も三進もいなくなつて、というのは、とにかく一番やってはいけないことではないだろうか。

まあ、それがこのゲームの定石に当てはまるかは分からないのだが。一回目だ、深く考えても、休むに似たり、というやつだろう。ここはとりあえず、それぞれの種類から一枚ずつをピックアップして提出する手札を整えておこう。確率的に見て、晴子さんの選んだカードとペアが成立するのは四分の一だし、おそらくそこまで悪い数字ではあるまい。

「これを、ここに並べるのか」

「はい、そのようにしていただければ、問題ありません。次に、守り側の方が持ち札の半分をルールの上に並べられましたら、攻め側が一枚、カードを選びます。これも裏返しで、相手から内容を確認することができないようにこちらの枠の中に置きます」

「ああ、そのいくつかある枠は、カードを置く目安になるものだったんですね。何かと思ってました」

「ええ、この中央の二つの枠が、両者の勝負札を置くところ、こちらの脇の八つの枠がそれぞれのゲームで使用したカードを、それぞれ重ねて置く所になっています。ゲーム中に参照することができ、重要な情報になりますので、ご注意ください」

晴子さんはそう言いながら、言葉を止めることなく自分の持ち札の中から一枚を選択し、スツと今言った枠の中に置くのだった。一枚目はどうしたって運任せになってしまいうし、そう選択に時間がかからないのもうなづくことができるだろう。

「そして次に、攻め側が守り側の提示したカードの中から一枚を選択します。このとき、相手側のカードには触れず、指差しと発声を

用いて選択するカードを明確に宣言してください。宣言されたカードは判定役が取り、守り側の枠の中に裏向きのまま置きます。宣言はこのように行ないます。こちらの、一番左側のカードを、お願いします」

「これですか？ ハルちゃん？」

「はい、そうです」

晴子さんはなおも説明を続け、そして俺がレーンに乗せた四枚のカードの中で、俺から見ても一番右側のカードを、迷うことなくスツと指差した。脇に座った判定役のメイドさんは、晴子さんに一度確認をしてから選択したカードを中央の空いている枠の中に裏向きで置く。

ちなみにそのカードはクラブのQで、つまり晴子さんの選んだカードがQだったら晴子さんにペアが成立し、ポイントが一点入るということなのだろう。

「枠の中に二枚が置かれた時点でセッティング完了となり、それ以降の変更は、それが何についてのものであっても一切認められません。逆に、セッティングが完了する前でしたらある程度の変更をすることが出来ます」

「あの、攻め側が守り側のカードを選択するとき、守り側は選択確定直前に自分の手から提示したカードを変更することはできるんですか？ イヤな予感がしたから変える、とか」

「それは認められていません。守り側からの提示カードの変更については、攻め側が勝負札を選択したところで×切となっておりますので。ですが、それまではご自由にカードを交換してくださいって構いません」

そして、メイドさんの手によって晴子さんの側のカードが表に返される。そのカードはハートのA、中央に伏せられたクラブのQとは柄の一致しないカードである。

「わたしは、いつもだいたい、よほどのことがない限り、一枚目はハートのAなんです。いえ、別に、意味があるというわけではない

のですが」

「ペア、不成立です♪」

メイドさんは続いて俺の側の伏せられたカードに手をかけ、自分だけが見えるようにその内容を確認する。そしてペアの成否を宣言すると、そのカードを再び伏せ晴子さんのハートのAと重ねる（重ねると言っても両方のカードの内容をみることができるようにはあるが）と、脇にある枠の中へそれを置くのだった。

なるほどな、ペアが成立しないときは、こうやって置かれるのか。実際にこうして目にしないと、やはり分からないものだな。この場合は、攻め手にポイントが入らないだけでなく、守り手がどのカードを使ったのかも分からないわけだ。なるほどな…、これは厳しい。ペアをつくることができないと、一方的に自分の手を晒すことになってしまうのだから情報戦として、相手に一步譲ることになってしまうということだ。

これは、終盤戦がなかなか厳しくなることが予想される。カードの選択ができなくなってしまえば――たとえば序盤で何かの種類を使いきってしまったらとか――、それを知られた時点でかなりのビハインドが発生してしまう。しかし使いきっているという事実を隠し通すことができれば、それは相手にとってイヤなことというか、こちらにしてみれば大きなリードを得ていると言えるだろう。

つまりこのゲームにおける焦点は、ポイントを得ることのできる攻め手ではなく、伏せたままカードを消費することができる守り手ということだろう。ポイントは、終盤戦であっても稼ぐことはできるが、そこで重要になってくる情報は、序盤にきっちり守りきらなくてはならないのである。

つまり序盤の四戦で公開される可能性のあるカードは八枚で、そのうち確定的に公開されるのが四枚。それ以外のそれぞれ二枚ずつのカードは、自分のものを晒さず、相手のものを見ることが出来さえすればいいのである。情報で一步だけでも差をつけることができれば、それは後半戦で大きな一歩となるだろうからな。

序盤戦の目標は、スコアレスの0対0、あるいは一点リードの1対0が理想的。まあ、2対0なんてものができさえすれば、望むべくもないのだが。

問題は2対2の乱打戦になってしまった場合だが、まあ、それについてはおいおい考えていけばいい。きつとこのゲーム、そんなに得点の取り合いになることはないだろうからな。

「残念、ペアができませんでした。この場合はこのように、ご主人さまがお使いになったカードがわからないように伏せたまま、私の使ったカードと重ねるようにしておくわけです。ペアができた場合は言わずもがな、それが確認できるように守り側のカードも表に返してから二枚を重ねて置きます。こうやって置くことによって、どちらがどれだけのポイントを重ねたか、ということも一目瞭然です」

「なるほど、よくわかりました」

「あら、ご主人さま、何かにお気づきになられたのでしょうか？」

なかなかご聡明でいらっしゃいますね」

「い、いや、そんな…、気づいたなんてこと、ありませんよ。は、ははは……」

しかしこの気づき、おそらくはこのゲームの定石である。つまりふつうの人間がふつうにたどり着く、最初の終着点であり、この程度だったら幾度となくこのゲームを経験しているメイドさんたちにとってみれば常識のようなものなのだろう。それだからこそ、俺の表情を読みとった晴子さんはわざわざあんな皮肉を言ったのだ。

そこから考えるに、このゲーム、そんな地点よりもっと深い。メイドさんに強いと言わしめる晴子さんのことだ、心の底では何やら難しいことをいろいろ考えているに違いないのだ。

それとさっきのカマのような、一番最初にはハートのAをいつも出すだのなんだの言うのは、ただのカマだ。晴子さんはけっきよのところリァリストであり、願掛けとか験担ぎとか、そういう非科学的なところに準拠して行動を選択するということは、それこそ滅多にないのである。故にそれをあまり信用しすぎてはならず、話半分

くらいに聞いておいた方がいいのだ。

そもそも晴子さんの話を聞き流すようなことは許されないのだが、しかし勝負の場とあっては話は別であり、バカ正直に駆け引きに乗ってあげることはないのだ。あるいは、逆に晴子の話を信じたふりをして、それを逆手に取るのが上策だろうか。

「いえ、第一戦の第一試合からそこまでたどり着くなんて、普通の方に比べればずっとご聡明ですよ。普通の方は、第一戦が終わるころにそのことにお気づきになるものですから」

「そ、そうなんですかあ……」

しかし、どうして晴子さんは俺の考えていることをそこまで詳細に見てとることができるんだろうか。だって、俺、一言も言っていないんだぜ、何かに気付いたとか、こういうやり方があるんですね、とか。

よく思うことだけどそれって、俺が考えてること顔に出し過ぎなのか、それともあるいは晴子さんが本当にエスパーなのか、そしてもう一つの可能性としては晴子さんのカマのかけ方が神がかったのかのどれなんだろうか。確かめようにも晴子さんがまともに応えてくれるわけないし、まあ、どうしようもないんだけどな。

「それでは、次はご主人さまの番です。さあ、どうぞ、カードをお選びになってくださいませ」

そう言った晴子さんは、すでに自分の前にあるレールに四枚のカードを並べて待っているのだった。やっぱり早いな…、迷いが無いというか、なんとというか……。それとも早く自分の動きを済ませることで、俺のことを暗に急かしているのだろうか……。

デュエル！ ？

とりあえず俺は、さきほどの晴子さんの動きをなぞるように自分の持ち札の中から一枚を選択するのだった。一戦目でクラブのQが使われてしまったので、俺の手はQ一枚を欠いた七枚となっている。

さて、問題はここから一枚、なにを選んで提出するか、ということだが…、やっぱりQを選ぶべきではないと思う。だってもしそうしたら、手の中にQが一枚もなくなってしまわないか。一枚目のQは一戦目で伏せたまま使われたから存在が隠されているけど、でもだからといって、手の中から早々に一種を消してしまうのは危ないのではないだろうか。

もちろん、一枚を伏せた状態のまま一種を使いきるというのは、いい迷彩になってくれることだろうが、しかしまだ一戦目、そういうコンバットプレーに走るのは少なくとも一試合をこなしてからがいいのではないか。焦ることはない、一試合目は馴らしと決めていたではないか。勝手も分らないの飛び道具を多用するほど、俺の勝負度胸は太くない。

となるとQ以外の三種から一種を選択するってことになるのか。もし晴子さんが俺と同じような思考をたどるとしたら、あの手の中にAはないということになるだろう。もし俺にそれを選らばれてしまえば、手の中からAが姿を消す——しかもその両方が公開情報として晒されてしまう可能性すらある——のだから、さすがにそれはないだろう。故にその思考を辿るならば、俺もAを選ぶことはできない。

となると、俺の選ぶことができるのは、JかKということになる。そして、ここで問題になってくるのは、晴子さんの提示している四枚のカードのうちJKQのうちどれを一枚多く配しているか、ということになるのだが、しかし俺にはそれを確かめるすべはない。こればかりは運任せ、ということになってしまいうだろう。

JかKか。どちらを選んでも、おそらく大きな差はないはずだ。となれば、もうここは、単に指運で選択するしかないな。

「じゃあ、これで」

「あら、スツと出しましたね。もっと悩むタイプかと思っていましたが、意外と思い切りがいいようですね、ご主人さま？」

「いえ、まあ、なにを選んでも同じですよ、はは」

「そうやって無策を装って、意地の悪いご主人さまですね。頭の中ではぐるぐると、思考を何周もさせていたでしょうに、何でもない顔をするんですから」

「そんな、まだ初めても同然の、ど素人以前の状況です。無策もいいところですよ」

「謙虚なのか、策士なのか。さあ、はたしてどちらなのでしょうかね？ さあ、ご主人さま、今度は私のこのカードの中から一枚を選んでくださいませ。果たしてペアが出来るでしょうか？」

「どうですかね…、何しろ俺には、まだルールしか分からない有様ですから、本当に文字通り運が良ければ、ってところですよ」

それから、俺は晴子さんの四枚のカードの中で左から二番目を選択。それがメイドさんの手によって、裏返しのまま俺のスペードのJの横に並べられる。

もし偶然、俺の選んだJが膨らんでいれば当たる確率は二分の一。そうでなければ四分の一。必然で生じる確率ではあるが、空の可能性は極めて低いだろうし、まあ、そこまでひどい状況ではないのだろう。

「ペア、不成立です♪」

「残念ですね、ご主人さま。さあ、三戦目に移りましょう」

「けっこうサクサク進みますね…、なんていうか、予想外っていうか……」

「痺れるのは、中盤からですよ、ご主人さま。序盤はどうしても、ポイントが左右しませんからね」

「そ、そうなんですか……？ そ、そういうことなら…、た、楽し



みにしてます」

「それでは、わたしはこれを選びましょうか。ご主人さまは、手のカードは決まりましたか？」

「あつ、は、はい……！　ちょ、ちょっと待ってください！　すぐに、決めますんで！」

晴子さんは、また迷うことなく一枚のカードを手に取り、俺の前でひらひらと振った。どうやら、晴子さんの動きの徹底ぶりから考えるに、俺のことを急かしているのは間違いないようだ。普通の客にはこんなことしないだろうに、くそお……、相手が俺だからってこんな詰め方してくるなんて、非道だぜ、晴子さん……。

しかしいくら晴子さんに急かされたとしても、俺はけっきょくのところ初心者なわけだし、反射的に最善解を導くことなど出来もしないのだ。勝つためには何があっても考えなくてはならないのだ。たとえそれにどれだけ時間がかかっても、思考を回す続けなくてはならない。

「えっと……、手が六枚になったから、選ぶのは三枚なんだよな……」  
残りの手札はJが一枚、Qが一枚、Kが二枚、Aが二枚になっている。ここからそれぞれをへこませることなく選ぶとなるとKとAを優先的に使っていくことになるだろう。そして晒している情報としてJがあるので、もしここで晒すことになってしまえば、空になったところをねらい打たれるかもしれない。いや、そんなことができるかは分からないけど、でも晴子さんなら、俺の知らない裏道みたいな方法を使って何かしてくるに決まっているのだ。俺程度が容易に推し量ることができるほど、晴子さんのやりくちは浅いものではないのだ。

つまり、ここは場に出ているながら公開情報になっていないQこそ選択するべきだろう。もし当てられて公開することになったとしても、それは一枚目のQなんだし、情報としての重要度は二枚目のJが晒されるよりは低くなるだろう。そして当てられずに伏せて場に残ることになれば、二枚のQを伏せることができるわけだし、晴子さん

の目からQの行方を完全に消し去ることができる。それはおそらく、初心者の俺から見ても有効な迷彩だろう、ということが分かる。

「そうですね、そこで引っかかってしまいますよね、ご主人さま。ええ、少し頭の切れる方は、どなたもそこで悩んでしまうものから」

「べ、別に、悩んでなんかないですよ……？ ほら、バカの考え休むに似たりっていうじゃないですか？ 初心者が何を考えても、無駄なんですから、俺も適当によさそうなのを選んでるだけなんですよ？」

「どうでしょうか？ 人間、考えないで何かをするということは非常に勇気を伴うものです。自分にとって初めてのものと対面するとき、どのような人であっても自分なりの理論を持って向かうものでしょう。自分の理を持つということは、ある意味で物事と対面する心構えのようなものです。初心者であればあるほど、よく分からないからこそ、行動の推進力や保険として理を持つとうとする。もちろん、時折自らの直感のみを信じて、本当にあてずっぽうで立ち向かう人もいますが、しかしそのような人はやはり少数でしかありません。そうやって無茶なことをすることができるとも、ある意味では勇気ということもできるのではないのでしょうか。さて、その勇気、ご主人さまはお持ちでしょうか？ お持ちですか？」

「…、そ、そんなのは、勇気ではありません……」

「ご主人さま、勇気について論じること、それはわたしとしてもやぶさかではございませんが、後に回すことにしましょう。今は、ご主人さまが手をお決めになることが先のように思いますから」

「う…、そ、そうですね……。まあ、これでいいか……」

小賢しく理に走っていることを晴子さんに看破されればその裏を取られることは必定なので、俺はできるだけ無策なアホを装って勝負を進めていかなくはならない。そこにどれだけの意味があるか分からないし、そもそももう俺の考えなんて読み取られている可能性は濃厚だが、でもだからといって何もしないでおめおめと死ぬこ

とはできないのだ。

第一戦は最初から捨て石のつもりではあるが、だからといってただ晴子さんに弄ばれて負けてしまっただけは何も次につながらないではないか。俺は二戦で勝ちぬけなくてはならないのだ、一戦で情報を集め有効な策を立案し、晴子さんの裏をかいて出しぬかなくてはならないのだ。この第一戦にはそれだけの意味があるのである、少しでもあっても無駄にすることはできないのだ。

「わたしのカードは、これです。さあ、ご主人さまの手の中から、どれを選ばせていただきますでしょうか……」

晴子さんの出した札は、ダイヤのK。俺の手の中にはクラブのKが入っている。選ばれてしまえば、ペアが成立しポイントが奪われるカードである。ここできっちりKを選んでくるあたり、晴子さんには俺が特定のカードをへこませないようにカードを消費していく作戦は見透かされているのだろう。いや、見透かされているのはさっき言っていたから明らかだ、晴子さんは、俺が見透かされた上でその思考に則ったカード選択をしていると見抜いているのだ。なんて恐ろしい人だ、晴子さん……。

しかし、俺はこのやり方で第一戦をやり抜き、実践においてこの理論がどれだけ通用するのかということを確認しなくてはならないのだ。そうすることによって次戦の戦略の基本方針を確定しなくてはならないわけで、またゲーム自体の深度を量るということも兼ねているのである。

「それでは、これを選ばせていただきます」

「この真ん中でいいですか？ ハルちゃん？」

「ええ、お願いします」

そして、晴子さんによって選ばれたカードはメイドさんの手で取り上げられ、その内容を確認された後、

「ペア成立です♪ 1ポイントが、ハルちゃんに入ります♪」

パサッと、テーブルの中央へと置かれた。晴子さんが選んだカードは、クラブのK。ペアが成立したので俺のカードも表に返され、晴

子さんのカードに重ねられる。

「あら、ご主人さま、失礼しました。ペアが出来てしまいましたね」  
「ペアができたなら、このカードは、両方表にしてこっちに置くんですよね。…、これで1対0ですか……」

「ええ、まだほんの一点だけ差がついただけですわ、ご主人さま。まだご主人さまの攻め側は三度も残っているのです、逆転も容易に可能でしょう」

「はは、そうですね？」

「ええ、なんということはありませんわ。三回のうち、ご主人さまが二回ペアを揃え、わたしが一度も揃えないように守り切れば、それだけでご主人さまの勝利ですから」

「…、簡単そうですね」

「がんばってくださいませ、ご主人さま。そろそろ、ご主人さまもこのゲームのことが分かってきたところでしょう？」

「い、いや、ははは、さっぱりですよ！ 何にも考えてないですからね、アホですからね！」

「ふふ、どうでしょうかねえ？ どうでしょうかねえ？」

「どうもこうもないですよ！ アホですから！」

「ゆ、幸久君…、恥ずかしいから、あんまり大きな声出しちゃダメだよ……」

「恥ずかしいとか言ったら、勝てないだろ！」

「か、勝てるとか勝てないとかじゃなくて、恥ずかしいのはよくないと思うよ……。みんな、こっち見るよ……」

「みんなに見られても、勝たなきゃ意味ないだろ！ 恥ずかしがって負けてたら、それこそバカだ！」

「にゅう…、幸久君がはなし聞いてくれないよお……」

「天方、諦めろ。三木は、勝負事となったら勝つこと以外目に入らないほど負けず嫌いだからな。外野が何を言っても無駄だろう」

「きりりん、ゆっきいががんばってるのじゃましちゃダメだよ」

『お茶、飲む』

「にゅ…、そうだね……」

「さあ、ご主人さま、今度はご主人さまが攻める番ですわ。わたしの手は、この三枚です。ご主人さまの手から一枚、お選びくださいませ」

「ええ、取られたら取り返していかないといけませんからね。まず、一点ですよね…、どれがいいかなあ……」

一点取られたら、一点取り返す。俺が勝つためには、これから二点を取らなくてはならないのだから、どんどんやる気出していかないといけないんだ。まあ、俺はこの一戦目は捨てているからそこまで気合を突っ込んでいく必要はないのだが、しかし晴子さんを少しでも惑わせるために行く気があるように見せなくては。

…、意味ないかもしれないけどな！

## デュエル！ ？

さあ、負けるにしてもいろいろして負けないと意味がないぞ、ということで、俺の二度目の攻め側である。ここまでで三戦が行なわれ、手札の約半数である六枚が場に置かれており、そのうち四枚が公開されている。

今までの基本戦略の通りにいくとして、今までの三戦にJ、Q、Kの三枚を使ったのだから手のバランスを整えていくとすると、ここで俺が選ぶのはAということになるだろう。

「……………」

しかし、ここでAは上策だろうか。晴子さんに、バランスをとって闘う俺の基本戦略を看破されているにしてもされていないにしても、ここはむしろAよりもQの方がいいのではないだろうか……。攻め側のカードは公開情報として提示することが確定しているのだ。ここで表に晒すならば、一枚を裏に伏せているQの方がいいかもしれない。あるいは、それ以外にもJなんかも有効なカードかもしれない。

どうしてQかといえば、晴子さんが俺の戦略を、もっとも一般的なものであるバランス戦法と思っていてくれるのであれば、俺がここでQを出すことによって、伏せられているカードがAだと勘違いしてくれる可能性があるからだ。まあ、それによって、俺の手の中のQが空になってしまうというリスクはあるのだが、それはある意味で仕方のないことではないだろうか。

俺が今まで公開情報で出していないQは、同様のAと同じく、俺がここで選択してくる可能性のあるカードとして晴子さんは理解しているだろうし、それへの対策は取ってくるかもしれないが、後半戦のことを考えると、AよりもQの方が有効な気がするのである。伏せたカードをより不明なものへと変えるために、ここはQだろうか？ Jについては、晴子さんのカードは公開情報としてAが一枚、Kが

一枚。非公開情報の伏せカードが一枚（これは消去法でJ以外のどれか、ということになる）。玄人である晴子さんがバランスを取ってカードを使っているかはなはだ疑問だが、もしバランスを取っているとすると、伏せカードはQということになるだろう。あるいはバランスを取っていないとなると、Aか、あるいはKがすでに潰れている可能性もある。まあ、これについては憶測することしかできないわけで、あまり建設的な議論ではない。

しかしまあ、確実な話として、晴子さんの手の中にはJが二枚残っているということだ。晴子さんが提示した三枚の中に一枚は入っているだろうし、もしかしたら二枚入っている可能性すらある。なぜなら俺はバランスをとってカードを使っているのだから、ついさっき公開情報で出したばかりのJを連続して使ってくるとは、晴子さんが思わないかもしれないからだ。つまり提示する手をセーフティで埋めてしまうことで俺の得点を防ぐことをもくろんだ晴子さんの裏を取る形だな。

バランスを取ることを目指す俺、という姿自体を崩してしまうことで、晴子さんの中の戦略に少しでも風穴を開けられれば、ということとで、ここはJだろうか？

「……………」

いや、こんなところで戦略をブレさせてしまうわけにはいかない。第一試合は、試しなのだ。そしてその最たるものがバランスを取りつつ手を進めていくことの有用性についての試行なのだから、崩してしまつてはその実験の意味がなくなってしまうじゃないか。誰もが用いる王道的な戦略というのは、使い古されたものかもしれないが、しかしそこには王道たり得るだけの安定感と信頼感があるのであり、それを完全に無視して邪道的な戦略に走ることは危険極まりない。

邪道とは、つまるところ王道の影の道なのであり、王道の裏を取ることとほぼ同義なのである。王道を知らずして、邪道を知ることはない。だから俺がしなくてはならないのは、この第一試合を捨て試

合と決めたからには、徹底して王道にひた走ることなのだ。そうして王道を走ったあとに、ようやく邪道の影の端を捉えることができるのだから。

そうすることさえできれば、この第一試合は無駄ではなくなる。勝利のための布石、必要経費としての捨て試合として、上手く昇華してくれるだろう。

「じゃあ、これにしましょうか」

「クラブのAですか…、さあ、どうぞ、今度はこちらから一枚をお選びくださいませ。Aが入っていて、それを引き当てれば同点ですからね、ご主人さま、直感を研ぎ澄ましてくださいませ」

「ええ、そうですね、はい……」

晴子さん側の手には、おそらくAが一枚は入っている、はず、だと思う。少なくとも一枚がJだとすると、あと二枚がどうやって選ばれるかを考えよう。Jを二枚重ねない限り、残りの二枚のうち一枚はKが入るはずだ。そしてもう一枚は、おそらくA、だと思う。確証は、ない。

いや、晴子さんに俺の思考を読まれているとしたら、むしろあの手の中にAは入っていない可能性もある。俺の一枚目——つまり伏せられたカード——をなんだと思っているか…、ん？

「あっ……？」

晴子さんの出した一枚目は、ハートのA。つまり、俺の伏せカードは、A以外のJ、Q、Kのどれか。そのあとに俺が使ったカードは、JとK。今しがた出したカードは、A。そして俺は、バランスをとって闘っている。

自然と、俺の伏せカードがQの可能性が高いということが浮かび上がって来ないか……？

「どうなさいましたか？ ご主人さま？」

「っ…、いえ…、なんでも。さあ、どれにしようかな」

「なにか、見落としたことでもございましたか？」

「見落とし？ はは、まさか。なにも考えてないのに、見落としも



何もあるわけじゃないですか、はは」

見落とし…、そう、見落とした。俺の側から相手の伏せカードを解析することはしたけど、それに満足して晴子さんの側から俺の伏せカードの解析をするのを忘れていた。晴子さんが俺の伏せカードを、俺がしたのと同じように解析したとすると、十中八九俺と同じ地点に着地したはずであり、伏せカードをQと決め打ちしていてもおかしくはない。そしてそうすると、晴子さんの提示した手の中に、Aはない。空だ。

なぜならば、そこまで至れば俺の思考をトレースすることはたやすく、また俺の次の手をAと推測することもそこまで難しいことではない。相手は晴子さんなのだ、それくらいの地点、易々とクリアしてくるに決まっている。

「じゃあ…、これにします、この真ん中のを」

そして、晴子さんの手が空だとすると、俺がここで考えなくてはならないのは、どのカードを引き当てるのがもっとも今後のためにいか、ということだ。晴子さんのことだ、来るカードをAと決めたからにはもう手の中はそこ以外に固めてきていると考えるのが妥当だ。さらにその後のことも考えて、おそらくJを二枚重ねてきているはずで、また二枚連続で同じカードを晒したくない心理を逆読みされているとすれば、残りの一枚はKに間違いない。

つまり、晴子さんの手は、J、J、Kの三枚でほぼ確定される。俺がここで引きたいのは、やはりKだろう。それを引くことができるけれど、晴子さんの手の中のバランスを崩すことができるわけだし、この上ないことだ。

「ふふ、ご主人さま、そんなにKを引ききたいのですか？ それほどまでに熱烈に願われては、心の声が聞こえてしまうようですわ。ですが、出されたカードがAだというのに…、おかしいですわね？」

「え…？ いや…、そんなことないですよ？ もちろん、Aがきてほしい、ですよ…？」

「そうでしょうか？ ふふ、わたしの勘違いだったかもしれません

ね。勘違い、でしょうか？」

「か、勘違い、ですね、はい」

くっ…、読まれている、ということか……。しかし、どうしてそこまで俺の思考を読み取ることができるんだ……。？　いくら晴子さんといっても、超能力者というわけではないのだから、俺の考えていることを微に入り細に入り読み取ることなんてできないはず、なのだ。

しかしそれができているのである。ただのカマかけにしては言い分が明確すぎるし…、玄人というだけでここまで相手の思考を読み解くことができる、ということなのだろうか、このゲームは……。

「それでは、こちらの真ん中のカードを選ばせていただきますね、ご主人さま♪」

「はい、お願いします」

「こちらのカード…、ペア不成立です♪」

「残念ですわね、ご主人さま…、ですが、まだ攻撃の機会は二度残されています。諦めず、頑張ってくださいませ、ご主人さま」

「ええ、そう、ですね…、はい……」

ペアができなかったためカードの情報が公開されなかったので、いったい何が晴子さんの手の中から選り出されたのかを知ることにはできないが、しかしとりあえず、これで前半の四戦が終わったことになる。

場にある八枚のカードのうち、公開されているカードは五枚で、そのうち三枚が俺のカード。ポイントの面でも情報の面でも一歩譲る形になっているが、しかしここからなんとか捲き返せるようにがんばるしかないな……。とにかく、まずは次の晴子さんの攻め手を防がなくては話にならない。

「二枚、ですよ…、ここから二枚……」

バランスを取って闘ってきたからこそなのだが、俺はここに来てもまだ手の中に四種類すべてのカードを収めている。さあ、この中からどの二枚を選び出せば、晴子さんの攻め手を防ぎきることができ

るだろうか。やはり、有力な候補として挙がるのは公開されているカードだろうか。すでに公開されているカードは、やはり公開情報として晒してしまうことに少なからず抵抗があるだろうし、ある意味で安全ということができるだろう。となると…、出すのはAとK、ということになるのか？　ここに至って手の中からその種類のカードがなくなる、なんてことを言う必要、というか意味はないが…、さて、それが正しいだろうか。

それとも、逆に公開情報になっているカードを外していくのが効果的だろうか？　公開情報から手を決めていくなんて王道の中の王道のようなものだろうし、一度くらいは裏を取る、っていうことをやってみるのも悪くはないかもしれない。それに、そのとき選ばれるQは、俺の唯一の伏せカード——まあ、おそらくその内容は看破されているだろうが——なのだから、少なからずカモフラージュになる、可能性はある。

「ずいぶんとお悩みのようですね、ご主人さま？」

「いや、まさか！　きまぐれです！　ただの、気まぐれ！　たまには悩んでるふりでもどうかなって、ね！」

「ふふ、ご主人さまは、ウソを吐くのが苦手なのですね。かわいらしくて、わたしはいいと思いますよ？」

「うぐ…、そ、そんなことない、です……」

うう…、話しかけてこないでくれ…、晴子さん……。集中力が切れる……。考えろ、考えるんだ……。

とりあえず、選ぶカードは二枚、それは間違いないことなんだ。集中しろ、効率的なカード選択のパターンを見極めなくちゃいけないんだ、一回だって無駄にできる回はないんだぞ。

晴子さんが手に残しているカードは、場に公開されて出ているカードがA一枚にK一枚なのだから、Jが一枚以上、Qが一枚以上、Aが零か一、Kが零か一ということで確定される。また非公開情報も、消去法で考えると、一枚はJ以外、もう一枚がA以外の何かということになってくるわけだ。

さあ、ここから出来るだけ多くの枚数の確定条件を検索することを目指すのだが、さて、どうだろうか。もっとも極端な例を出せば、晴子さんの手の中には既に二種類（JとQ）しか残っていない、という筋もなくはないが、それはさすがに細いように思える。出ているカードから、バランス良く使われていると仮定すると、全種類が手に残っている可能性も残っているが、それもまた細いように思えてならない。晴子さんが、そんなまっすぐな戦い方をするとはいえ、考え難い。

となると、一種類が空になっていて、一種類が二枚残っているというパターンが一番想定されるだろう。そしてその手の中に一種が二枚残っているパターンは六通りあり、そのうちの四通りでJが残っている。なぜならば、俺の伏せカードからくる縛りによって、晴子さんの伏せカードが二枚ともJという可能性がないからだ。空になっているカードは分からないが、しかし二枚残っているカードは、Jである確率が高い。いや、六つのうちの四つがそうだというならば、それはかなり高いと言ってもいいかもしれない。

つまり、晴子さんの手に残っているカードの半分は、J。提示する手の中にJは入れない方がいいだろう。

となると、三枚の中から二枚を選ぶことになるが、除外される一枚はQで決まりなので、必然、手のカードはKとAということになる。なぜならばAが使われたとしたら二戦目ということになり、つまり二枚連続で使われたということになってしまい、それはできるだけ避けるようにするのではないだろうか。次にKは、二戦目と四戦目の両方で使うことができるが、しかしどちらにしても連続で使うことになってしまうので、同じく避けられるのではないだろうか。

つまり、晴子さんが出したカードは、連続で同じカードを出すことを避けたい心理から見ると、A、Q、K、Aの順である可能性が、わずかに高く、次の攻め手でJの次に出そうなのが、おそらくQなのである。だから、手として提出するのは、AとKでいい。これで晴子さんがJかQを出してくれれば、次の俺の攻め手で俺が得点で

きる可能性は大いに上がるだろう。

「……、それじゃ、これとこれで……」

ふむ、やはり思考を重ねると最初に思った結論に回帰するパターンが多いようだ。今回も、けっきょく一周思考を回してみた結果、一番最初の発想に行きついたわけだし、それはもう明らかだ。

さて、この一周分の思考、吉と出るか、凶と出るか……。

## デュエル！ ？

「…、それでは…、わたしのカードはこちらにいたしましょう」

晴子さんは、ここにきて初めて悩むようなしぐさを見せてから、手の中からカードを一枚取りだしてテーブルの中央に伏せて置く。俺の手はAとKなのだから、JかQのどちらかを出してくれればペアが成立することはあり得ないわけで、そもそも晴子さんにポイントが入る可能性がありえないのだから。

というか、もしもAかKを出されてしまえばペアを作られてしまう可能性は五分五分なのだ。そんな高い確率だったら、晴子さんなら引いてしまうのではないか。もしここで引き当てられてしまったら、俺には攻め側をする機会はたった二回しか残っていないのだから、逆転することそのものが不可能になってしまう。

同点引き分けの場合はやり直しという取り決めになっているのだから、ここは一つ、勝てないにしても引き分けくらいには持ち込みたいところである。そうすれば一度の代金で二度目の戦いをすることもできるのだから。上手くすれば金を積まずに勝つこともできるのだから、二度三度の出費を覚悟していた身としては、これほど喜ばしいことはないのである。

「ご主人さまがどこをどう予想なさってそのカードをお決めになったのかは分かりませんが、ですが上手くわたしの選択を回避することができているでしょうか？ もし回避することができていなければ、二回に一度はペアが成立してしまう計算ですからね」

「まあ、運が良ければ避けられますよね、うん。俺はもう完全に適当ですから、運が悪かったら当たっちゃいますけど」

「そうですね…、守り側は最終的な判断を下すことができる立場にないですから。いかにがんばって選択しても、それをすべてカードに伝えることができませんもの」

「最後に守り側のカードを決めるのは、あくまでも攻め側ですから

ね。守り側は、その攻め側が選ぶための選択肢を用意することしかできないんですから」

「ですがそのもどかしさ、意外とおもしろいでしょう？　ご主人さま？　最後の最後まで、不確定要素を排除しきることができないなんて、斬新だとは思いませんか？」

「たしかに、斬新は斬新ですよ、お互いがお互いの全力をぶつけあうものですから、こういうゲームっていうのは」

「ご主人さまは、そうはおっしゃっていらっしゃいますが、ずいぶんと熱心にカードを選ばれていましたよね？　何か、お考えでもありませんのでしょうか？」

「いやそんな…、そんなまさか。考えなんてあるわけないじゃないですか。なんせ適当にやってますからね！」

「本当に適当でしょうかね？　そうでしたらもう、徹頭徹尾運任せということになりますから、それはそれで、とても勇気のいることだとは思いませんか？」

「もちろん、勇気いっぱいです！」

「だったら、ふふ、よろしいのですけれど」

晴子さんは、伏せた自分のカードに手をかけ、それをスツと表に返す。現れた図柄はQ。俺の手の中に入っていない、Q。

これで、今回の晴子さんの攻め手が実を結ぶことはない、ということになる。なんとかその攻撃をしのぎきることができたという事実によって、俺の心に重くのしかかった重しが一つ取り去られた気分だった。

「ご主人さまの手からは、こちらの右側のカードを選ばせていただきます。これが、わたしのカードとペアになってくれるものならばよろしいのですが……」

しかし残念ながら、晴子さんのカードがペアを成立させることはない。あとは、俺の予想では晴子さんの手の中ではAが空になっているのだから、Aを引いてくれればいい。相手の手の中で空になっているカードは、防御の面では絶対的な守備力を持っているが、しか

し攻撃の面ではまるで役に立ってくれないのだから。となるとここは、一点を取りに行かなくてはいけない手前、少しでも攻撃に役立つカードを手の中に残したいものである。

そして晴子さんが選択したカードは、晴子さんから見ても右側に置かれたカード、K。悔しそうなそぶりは、決して見せてはならない。へらへらと、状況が無策を装い受け入れるのだ。いや、むしろ晴子さんにペアができなかったことを喜ぶ風にしてもいい。目先のことだけを考えているように見せかけなくては。

「…ん？」

晴子さんの場に出されているカードの中に、Aが二枚入っている、のか？

一枚目と三枚目にAとKが出され、そして五枚目にQが出されたということは確かなのだが、それ以外のところで本当にAが使われているのか？

「……………」

ちょっと待てよ…、考えろ…、さっきの結論では、晴子さんの場のカードはA、Q、K、Aの順に四枚ということになったのだが、本当にそれであっているのか？

…、俺が四枚目に出したカードは、Aなのだから、そもそも四枚目にAがあることはありえないのではないか……？ ……、うお…、危ない……。根本的なところを勘違いしていた……。晴子さんの場のカードの構成を勘違いするなんて、負け以外の何物をも呼び寄せないではないか。やばいぞ…、思考を回していく過程で、いろいろ見落としているかもしれない。

いけないいけない、もう一度考えるんだ。

晴子さんの場には、一枚目にA、三枚目にK、五枚目にQが公開されている。そして俺の場のカードから、二枚目はJ以外、四枚目はA以外の何かということ。その条件から、晴子さんの場のカードに再検索をかけていこう。

少なくとも、五枚目にQが出てきたということは、非公開情報の力



ードの両方がQだったという筋はなくなったということだが、やはり考えなくてはならないのは、さっきの晴子さんの言葉だ。そう、守り側のカードに関しては、相手が最終的な選択をするのだから、完全にコントロールすることができない、というアレだ。

つまり、いくら晴子さんが思考を尽くしてカードを提示しても、しかし最後に俺の選択が入るのだから、そこはある程度の不均一が生じる可能性がある、ということだ。俺の場のカードが、あまりにキレイに均一に揃ってしまったので、そのあたりのことを見落としてしまっていた。

となると、二枚目に出された非公開情報については、おそらく高い精度で見極めることはできないだろう。なぜならば、七枚の中から晴子さんが考えて四枚を選び、その中からさらに俺が一枚を選んでるんだ、これはもう分からない。ただ、Jではない何か、とすることしかできない。

となると重要になるのが四枚目だ。これは、五枚の中から三枚を選んで、その中から一枚を俺が選んでいる。まだ少しは見えてくる可能性もある、というものだ。晴子さんが四枚目に出したカードは、現時点で見えている公開情報から逆算することが、おそらく出来るはずなのだ。

もし晴子さんが二枚目にAを出していたら、四枚目の選択の時点でそれは残っていない。いや、そもそも俺のカードがAなのだから、Aは出せないか。もし二枚目にQを出していたら、四枚目か五枚目のどちらかでしか出すことができなくなってしまう。二枚目でKを出しているとしたら、これもまた三枚目で公開されているのだから四枚目では出すことがなくなる。

…、もしも晴子さんが俺の戦略を、最初からバランス戦略だと決め打ちしていたとしたら、二戦目に俺に提示した四枚の中に何が入っているだろうか。

一枚目に俺の手の中から選ばれたカードは、晴子さんの視点から見たらA以外の何か、ということになるだろう。となると、俺が選ぶ

カードは、その何か以外のものということになるが、それを確定させることは不可能だ。なぜなら不確定要素が多すぎるから、そこに身を任せることがあまりに危険だからだ。いくら晴子さんでも、さすがにそんなことはするはずがない。

となると、やはり一極集中は避けるように考えるだろうか。どこかを膨らませるのが危険と考えたならば、やはり手はフラットにするはずだ。つまり、晴子さんの提示した最初の四枚は、全種入りのフラットなもの。とすれば、あの即決振りもそこまでの不自然さは感じさせない。

つまり、俺はそもそもありえないと思いこんでいたが、一戦二戦でAが連続して使われていることも、可能性としてまったくありえない、というわけではないのだ。

ということは、三戦目で晴子さんがKを出した時点で、晴子さんが一枚目に公開したAが、不可抗力的に空になってしまった可能性は大いにある。そこから広げると、晴子さんが三枚目にKを出したのは、二枚目がAになってしまったからの指運か、あるいはQになってしまったからのバランスかのどちらかしかない。つまり、二枚目はKではない可能性が高い。

そして、となると、五枚目の時点で、Aか、あるいはQが空になっている。

さらに四枚目のことを考えよう。四戦目、晴子さんが提示した三枚の中には、おそらく一枚以上Jが含まれているということは、ついさっきも考えたことだが、これについては間違っていないと思う。そしてAは入っていない、これもおそらく正しい。

そう考えると、どうなる？　晴子さんがその三枚を選択するにあたって、そこに発生する制限は、おれがほぼ間違いないと出すであろうA以外の何かを選ぶ、という非常に軽いものである。ということならば、やはり一つ膨らんでしまっているJを出来るだけ使いたい意識を持つのではないだろうか。つまり、Jを二枚手に入れようと考えるのではないだろうか？

「ご主人さま？」

やはりあのときの手は、Jが二枚と、あと何かという形に違いないのだ。そして俺は、おそらくJを引いているのだ。となると、あそこに伏せられている四枚目のカードは、ほぼ間違いなくJである。そして五枚目に出されたカードは、Q。つまり、晴子さんの手の中に残っている三枚のカードは、JとKと、QかA。QかAのどちらかは、確実に空になっている。これ以上は、もう詰めることはできないだろう。

「ご主人さま、カードを公開させてもらっても、よろしいですか？」  
「…、えっ！？ あっ、はい、お願いします！」

「はい、承りました♪」

マズいな…、意識がどこかに飛んでしまっていた。もう、無策を装うとか、無理なんじゃないのか？ ここまで考え込んでいるんだから……。

「残念です。ペア、不成立です♪」

「あら、そうですか…、残念です」

晴子さんが選んだカードは、Aである。晴子さんの手の中で空になっている可能性の高い二種のうちの一つ、Aが、この時点で俺の手の中でも空になった。

「それでは、今度はご主人さまの攻め手ですわね。あと二度のチャンス、両方ともペアをつくることができれば、ご主人さまの勝ちですわ、がんばってくださいませ」

「ええ、…、そうですね……」

さあ、次だ。そろそろ一点取らないといかんぞ。

「私の手は、それでは、この二枚にさせていただきます。さあ、ご主人さまも一枚をお選びになってくださいませ」

「ええ、はい、そうさせてもらいます」

晴子さんのカードの中で一番不気味なのは、やはり一枚も公開されていないJだ。これは、一枚残っているのは確定なのだが、問題は可能性として二枚残っている、ということもなくてはならない、というこ

となのだ。

：、いや、まさか、晴子さんは四戦目の時点でJを一枚使ってしまったと思って二枚重ねてきているはずだし、俺もおそらくそのJを引いているはずなのだ。誰だって、終盤に至ってまでカードを二枚かぶらせていたとは思わないはずなのだ。最後の残りカードが、両方ともJなんて、誰も望まないはずなのだ。それならばこの俺はこの手の中のJ、使ってしまうのがいいのではないだろうか？ だってそうだろう。Jは、あまりにも怪しすぎるのだ。そんな怪しすぎるカード、現に俺だってかなり怪しんでいるんだから、誰だって警戒するに決まっている。

一枚も公開されていない種類のカードを最後まで持っていました、なんて、おそらくこのゲームにおける最大のベタ戦略なのだ。姿を消しているからこそ不明なのであり、確かにこれ以上ないほどにその存在が不明瞭である。しかしそんなところで、はたして晴子さんが待つだろうか？

しかしその戦略、姿を消し過ぎているからこそ、あまりに臭すぎる。そんな見え見えのトラップに果たしてだれが踏み込んでいくだろうか。小さな子どもが造った落とし穴のように、穴が見えてしまっているのだ。落ちてあげるのは、よほどお人よしか、あるいはよほどのバカだけだ。

そして残念ながら俺は、そこまでのお人よしというわけではないのである。

「じゃあ、俺はこれで」

見え見えの罠は、見せ餌なのだ。晴子さんはすでに一点リードしているのだから、そんなところで、見破られない方が不思議なほどの単純なトラップを張るという危険を冒す必要はない。ブロックだけに意識を割けばいいのだから、こんなところで危険な道を通る必要はないのだ。

ということは、俺はここでJを使ってしまうのがいいのである。晴子さんがJを残していたらおそらく使うのはここ。Jを不明なまま

で消し去り、最終戦への伏線に変えることができるのは、もうここ一点、ここだけなのだ。ならば、使う。Jを使うに決まっている。五分五分の確率ならば、引く。引くしかない。

「Jですか。どこを通ってその思考に至ったのか、とても興味があります。が、ご主人さま、わたしの手から一枚を選んでくださいませ」

「はい…、じゃあ、その、左を」

いける、引ける。俺はここでJを引き、ペアを揃え、一点を獲得するのだ。

そうしてスコアを同点にして、最終戦へと挑むのだ。ここは勝てる、いや、勝つべきところなのだ。

## デュエル！ ？

「それではこちらのカードでよろしいですか？ ご主人さま？ それでは、こちら、失礼します♪」

「ええ、お願いします」

「ご主人さま、本当に、こちらのカードでよろしいですか？ よろしいのですか？」

俺が晴子さんの手の中からカードを選ぶと、どうしてか晴子さんから俺を止めるような、そんな声上がる。

「え…、ええ…、お願いします」

「そうですか…、こちらでよろしいですね……」

「…っ、ちょちょ、ちょっと待ってくださいね……」

「待つのですか？ ミキちゃん、ちょっと待ってくださいね。ご主人さまは少し悩んでらっしゃるようですから」

「はい、了解しました、ハルちゃん♪」

ちよっと待ってくれ…、どうして晴子さん、そんなことを急に言い出したんだ……。さっきまで一度も言わなかったじゃないか……。なんだ、何かあるのか…、もしかしてそっちの左側のカード、選んだら爆発するとか、そういう何かがあるのだろうか……。まさか止められるなんて思ってたから、動揺してメイドさんの動きにストップをかけてしまったではないか……。

「こ…、こっちじゃなくて、右……？ いや、左……？ ま、待って！ 待ってくださいよ！？」

「ええ、ご主人さま、ごゆっくり選んでくださって構わないんですよ。ご主人さまを邪魔をする者は、誰もいないのですから」

なに？ なんなの？ 晴子さんは、何の意味があって俺が左側のカードを選ぶのに念を押したの？ ああ…、ぜんぜん意味が分からない……。だってそんなことする必要ないじゃん、そんなことする意味ないじゃん。そんなことしたって、俺がそれに従うとは限らない

だろう。無視するかもしれないだろう。

っていうか、俺がそのカードを何なのか知っているわけじゃないんだから、止めたって意味ないじゃないか。それが俺にとっての正解かどうかなんて晴子さんに分らないし、そもそもそんな止め方したらそれが正解だって言っているようなものじゃないか。

…、カマか！？ そんなところでもカマかけてくるのか！？ 晴子さん、徹底しすぎじゃないのか、そんなことまでしてくるなんて…。

となると、俺が選んだ方がJなのかもしれないし、むしろ逆の方がJなのかもしれない。ああ…、全然意味ないじゃん…、今の晴子さんの…。俺のことをただ悩ませてるだけで、晴子さんには何のメリットもないじゃないか、けっきょく俺が何も見えていない中で左右のどちらかを選ぶっていう状況は何も変わらないんだから。

「じゃ…、じゃあ…！！ い、いや…、こっち…！！ つく…、それとも…！！」

「こちらでも、こちらでも、どちらでも構わないですよ、ご主人さま。先ほどは単に念を押しただけです、どちらを選んでも特に問題はないのですよ？」

「み、右…！？ ひ、左…！？」

そう、どちらを選んだところで、なにも変わりはない。それは確かに、そうなのである。もちろん晴子さんが提示しているカードは二種類で構成されているだろうからどちらを選ぶかということには大きな意味がある、と言えるだろう。しかし確率的にはどちらを選んだとしても当たる確率が変わることはないのである。なぜならば俺は、晴子さんのカードとして何が提示されているかを知らないわけだしな。

しかし、だからといってただ俺に嫌がらせをしているだけとは考えにくい。晴子さんがそんな意味のないことを、こんな土壇場で急にやるなんて、それこそ考えにくいではないか。晴子さんは、やるとなったら最初からやるのだ。そんなところで決して容赦などしない、

やるとなったら徹底的にやってくるはずなのだ。

なんだ？ 何の意味がある……？

はっ……！？ まさか…、ここであえて唐突に揺さぶりをかけることで俺を動揺させ時間を使わせることによって、ただでさえあまりの緊張と思考の連続によって乾きつつある喉を、紅茶を注文することによって潤わせようという腹積もりなのではないか！？ そんな…、ゲームで金を使わせるだけでは飽き足らず、さらに搾取を行なおうなんて、非道にも程がある！！ いったい俺の財布からいくら奪い去ろうという心づもりなんだ！！

「…、いや、変えません。左です」

「ご決断なされたようですね、ご主人さま。押しに弱く流れに流されるが多そうな顔をしている割に、きっぱりとしていらっしやる」

「まあ、たまにはきっぱりいかないといけませんよね。人生、流されてばかりってわけにもいきませんし、お金は大事ですしね」

「ちっ……、勘づいたのね……」

「？ ハルちゃん、なにか言いましたか？」

「いえ、なにも？ それよりもミキちゃん。ご主人さまは左になさるそうですよ。テーブルにお願いします」

「あっ、はい♪ それでは失礼しますね♪」

晴子さんに押されるがままに流されていてはいけない。それは常日頃思っていることであり、しかしいつでも上手くやることのできないことである。

師匠に齒向かうことはすなわち死を意味する。しかし今回ばかりは、そうとばかり言うてはいられない。というか、これは別に齒向かっているわけじゃないだろう。晴子さんが俺に金を使わせようとしてくるからといって、それに素直に、というか唯々諾々と従っていたら俺の財布の中身がどれだけあっても足りないではないか。そうだ、俺は晴子さんの財布じゃないんだ。広太から支給されるそこまで多くない小遣いを、こんなところで散らしてしまうわけにはいかない



のだ。

っていうか、そもそも晴子さんはバイトしてるんだし、俺なんかよりたくさん金を持っているのは明白な事実なのである。むしろ、師匠として俺に何かおごってくれるくらいのがあったもいいような気が…、しない。そんなこと、頭の中で思うことすら恐ろしい。やめよう、こんなこと考えるの。

今はただ、ここで勝つことだけを考えよう。きっと勝てる。そもそも、ここで勝たないと俺には勝ちの目がなくなるわけだし、引き分けにするために最終戦に向かわないといけないなんて、まったくモチベーションが上がらないではないか。

それにほら、五分五分だろ？ 引くって、今まで裏目を引いてきたんだから、ここ一番くらいは引けるに決まってる。神様っていうのは、どれだけ俺に不運を振りまくにしても、最後の最後は運をくれるものなんだよ。そうやって信じてないと、辛いだろ？

「ペア、不成立です♪」

「えっ……？」

嘘…、だろ……？ なに？ 神様は俺をどこまで追い詰めるつもりなの？ っていうか、なにがしたいの？ いじめたいの？ そもそも俺が神様信じてないのに、急にこんなこと言ったからへそ曲げたの？

…、ああ…、自業自得か……？ もういい、分かった、俺は金輪際、神様とか信じないことにする。信じないっていう態度を貫くことにするぞ、絶対だ！

「さあ、それでは、第七戦と参りましょうか」

しかし、まさか引けないとは思わなかった。五分五分であることがほぼ間違いない賭けに負けたのは、正直きつい。できればここは無難にペアを揃えて、ポイントを並べてから最終戦に挑みたかったというのに…、しかし仕方ない、こうなってしまったからには現実を受け止めるしかないのだ。

「ご主人さま、手の二枚の中から一枚をお選びくださいませ。最終

戦はお選ぴになったカードで直接勝負をしていただきますわ。選択肢は少ないですが、ご主人さまがこれ、と思われたカードで勝負なさることが出来る、最初で最後の機会ですからね」

しかし、となると、晴子さんの手の中にはなにが残っているんだ？とりあえず、晴子さんが見え見えのトラップを張って待ちかまえているという事はないと思われるから、一枚は俺が第六戦で引くことの出来なかったJで間違いない。それではもう一枚は？

俺の手の中に残っているのがKとQなのだから、晴子さんの手の中にもそのどちらかがおそらくは残っている、と思う。

だからここで晴子さんの攻めをうまくしのいで俺が一点を取り返すにはどちらのカードを……。

「…、ん？ おお……？」

「？ ご主人さま、どうかありませんでしたか？」

「いや、あの、あんまり当然すぎて思いつきもしなかったんですけど…、このゲーム、後攻の最終戦って、カードの選ぴようがないですよね？」

「ええ、もちろんですわ。双方に一枚ずつしかカードが残っていないのですから、必然的にその残りのカードが最終戦で使用されるカードということになります」

「そりゃ、そうですね……」

「ですから、この最後から一つ前の試合は、後攻の方にとってはとても大切なものですわ。消去法で、最終戦で使うカードも決まってしまうのですから」

「なるほど……」

まあ、今この場合においてはそこまでそれは気にすることはない。どちらにしても、ここをしのぐことが出来なければ俺はほぼ確実に負けるのだからな。

おそらく、晴子さんの持っているカードのうちで俺の持っているカードとペアになってくれるのは一枚だけ。つまり晴子さんから見ても、ポイントを重ねることが出来るカードはどちらか一方のみ、と

いうことなのである。晴子さんも、ここでペアを揃えなくては必然的に最終戦で俺に追いつかれることになるのだ、同じだけ追い込まれているのだ。

けっきょく、最終戦を待つまでもなく、この第七戦が事実上の最終戦。決着は、確実にこの第七戦で着くと考えて間違いはないだろう。故に、俺が勝負の力点を置くべきまさにここ。自動的に決まってしまう最終戦のカードなんか気にやるくらいだったら、ここで晴子さんの攻め手をしのぐことを考えろ、ということだ。

「問題は、わたしの手のカードとご主人さまの手のカードで、はたしてペアを作ることができるのか、ということですよ。この段階に至ると、カードの使い方によっては、すでにペアを作ることにもままならない、ということもありますので」

「まあ…、そういう可能性も、なくはないですよね」

「ええ、どちらか一方が極端に偏った使い方をしたりしなければ、そのようなことはあまり起こらないのですが、とにかく可能性としてはあるとおいてください」

「可能性としては、考慮していないわけじゃありませんよ。まあ、今回はそうならないと思いますが」

「ふふ、どうでしょうか？」

なに、なっていないさ。なっていたら、俺には引き分けの目すら残っていないことになってしまうわけだし、そんなことあっていいわけがない。

とにかく、晴子さんが次の攻め手で何を出してくるか、ということについて考えよう。おそらくだが、それはJではない方のなにか、ということ間違いあるまい。

…、あれ？　ということは、最後の晴子さんが守り側のときに出るカードは、J？　俺の手に、J、ないんだけど……。

あれ？　負け？　もう負け決定？

「じゃ、じゃあ…、こっちで……」

とりあえず、気づいてはならないことへの気づきによって大きな衝

撃を受けたわけだが、しかしカードを選ばないわけにはいかないのである。俺は手の中から、晴子さんが序盤で使ったので残っている可能性の高いように思われるKを外し、Qを選択。おそらくだが、さっきの公開情報のQ、あれが二枚目のQなのだ。

「それでは私は、これを出させていただきます」

俺がカードをレールの上に立てるのとほぼ同時に、晴子さんは手札の中から一枚をテーブルの上に滑らせた。その図柄は、J。最終戦で出されるはずの、J。

どうしてJが？ その思いが噴出する。

晴子さんがこんなところで意味のわからない、それこそ得るものはないでもない賭けに出るはずがない。だってそうだろう、最後にJを回せば、俺の手の中にJがないのは場の情報から分かっているのだから、確実に俺は得点できず、その勝利が確定される。しかしここでJを出してしまえば、もしも俺のカードと対になるカードが手に残っていた場合、文句なく俺に得点が入り、イーブン。引き分け再試合、という運びになってしまうではないか。

それとも、何か確信したうえで、最終戦にJを回す必要はない、と考えたのだろうか？ それだとするならば、そこにはどんな確信があるというのだろうか。

「混乱した顔をしていらっしますね、ご主人さま？ なにか、不思議なことでも、ございましたか？」

「ど、どうして、ここで…、Jを…？」

「わたしの手の中のどちらのカードを選んでも、わたしにとっては同じこと。同じだからこそ、ここでJを出すことは、わたしにとっては必然なのですよ、ご主人さま？ 聡明な方ですもの、どういう意味か、お分かりでしょう？」

「そ、そんな…、まさか、そんな残し方…、ありえないって……。そんなわけない…、どちらを選んでも同じなんて、そんなわけ、あるわけ……！」

「奇跡はありません。魔法はありません。ですが、トリックと、ペ

テンと、思い込みはありますわ、ご主人さま？」

そして晴子さんは、手に持っている最後のカードを、俺に向かってフワリと投じた。くるくると回り、ひらひらと舞い落ちる、一枚のトランプ。

それが机の中央、晴子さんのJが置かれた位置のちょうど隣に、スツと着地する。本来なら伏せられたままになるはずのカードが見せた図柄は、もともとテーブルにおかれていたものと同じ、J。

ダイヤのJと、ハートのJ。長斧と剣を携えた二人の衛兵が、勝利という扉へと歩み寄る俺の前に立ちはだかった。

「失礼しました、ご主人さま、今回のゲーム、わたしの勝利にございます。リトライなさいますか？ リタイヤなさいますか？」

晴子さんは、涼やかな笑顔で笑いかけながら、敗者であるところの俺に、そう声をかけた。そう、トリックと、ペテンと、思いこみ。けっきょくはそこ。問題は、そこなのだ。

しかしそれならば、たとえ相手が晴子さんであっても対抗し得る。晴子さんの武器がトリックとペテンと思いこみだというのなら、思考によってその裏を取ることも、出来ないことではない。けっきょくは思考ゲームなのだ。

トリックは打ち破りし、ペテンは塗り直し、思い込みは挿げ替えてやろう。俺の勝ちも、このゲームが魔法や奇跡で動かされているものではないのだから、零ではないのである。

「当然、リトライです」

「さすがはご主人さま、負けん気が強くていらっしゃる。それでは、さあ、第二回戦と参りましょうか」

「ええ、次は、勝たせてもらいます」  
勝てる。いや、勝つ。

次にゲームを掌握するのは、俺だ。

## 七転び八起きられない？

「失礼しました、ご主人さま。今回もわたしの勝利です。リトライなさいますか？ リタイアなさいますか？」

「な…、なんで、勝てないんだ…？」

第七戦を終えて、しかし俺は一度の勝ち星を奪うこともできないでいた。七戦が七戦とも、第一戦と同じように、ほんのわずかな点差によって勝利をこの手から逃していたのだった。

「どうして勝てないんだ…？」

「ご…、ご主人さま、そろそろおやめになられた方が、よろしいのではないでしょうか…？」

「ミキちゃん、そういうことは言うものではないわ。ご主人さまがやるとおっしゃるならば、わたしたちは手を引かせていただくだけなのよ」

「で、でも……。それでもご主人さま…、もうかなり使いこんでいらっしやいますし…。」

「わたしたちが口をはさむことではないの。当然、ご主人さまがやめるとおっしゃるならば、わたしたちは手を引かせていただくけれど、それでもご主人さまがそうおっしゃらない場合は、正面から受け止めなくてはならないわ」

晴子さんとメイドさんが何やら小声で言葉を交わしているが、もう俺の頭の中はどうして勝てないのか、ということではいっぱいになってしまっていた。常識的に考えてこういう思考ゲームは、その思考法に慣れている熟達者の方が勝利を収める、と相場が決まっている。しかしだからといって、ここまで勝てないとなると、どうということなのかと疑いたくなってくるではないか。

このゲームは、思考ゲームであると言ってもけっこう運の要素も強くあるわけで、比較的他の思考ゲームに比べれば初心者が勝利をおさめやすくなっている、ということができるだろう。しかしそれだ

というのに、どうしてか俺はこの七戦ですべて惜敗。図ったように惜敗を重ねているのだ。

そしてこの惜敗というのが不思議なところで、もちろん大きな点差をつけることが難しい遊びなのだから、当然惜敗、あるいは辛勝というケースが多くなってしまうのだが、だからといってこうも毎回焼きなおしたように1対0のスコアが並んでしまうと、変に勘繰りたくもなってしまうというものだ。こんな、まるで、俺の手の中をのぞきこまれているかのようなこと。

「ご主人さま、どうなさいますか？」

巧者だからといって、あそこまで手の中を読み解くことができるのだろうか？ それとも、イカサマ？ カードの背にガンを打って、俺の手のカードの状況を完全に掌握することができるといふことなのか？

晴子さんは、基本的には勝利のためならば手段を選ばず、看破されなければイカサマではない、という信条を持っている。そしてそれには俺も大いに同意するところであり、俺がそのイカサマの仕組みを見破ることができていない以上、声をあげて晴子さんを糾弾することは不可能なのである。そんなことをするくらいなら完璧に、それこそ説明をすることができるとその仕組みを理解しなくてはならないわけだし、むしろそれを逆用して討ち取るくらいのことをしろ、ということだ。

さて、もしそんなイカサマをしているとしたら、カードの裏面のほんのわずかな傷、折れ目の跡なんかを目印にしているんだろうが、それを詳細に見て取り、把握することは、今の俺には時間的に出来ない。このイカサマは、それこそ時間をかけてカードそれぞれへの理解を深めるしか方法がないわけであり、俺にはそこに至るほどの猶予は存在しないのである。

「リトライ、なさいますか？」

そしてさらに現実的な問題として、俺の財布の中身が、つい今しがた限界を迎えた。もう、次戦に向かうための金がないのだ。どうし

ようにも戦うための種銭が、俺には残されていないのである。

「くっ……」

どうする？ 借りるか？ 借りてまで、やることか？

貸してくれそうなのは、霧子か……。でもだからって借りていいのか？ 絶対間違ってるだろう、ここでわざわざ金を借りてまで次に行くのは。

でも引いていいのか？ 逃げていいのか？ 勝つって決めたんじゃないのか？ 七回も負けて、そのまま意味もなく引きさがっているのか？ 負けっぱなしのまま、逃げるなんて許されることじゃないだろう？

「き、…、霧子……？」

そのためにも、なんとか第八戦を行なわないわけにはいかないのがある。そろそろ勝てそうな気がするんだ、そろそろなっ！！

「にゅ？ どうしたの？ 幸久君、終わった？」

「…、ちよっと、お話があります」

「おはなし？」

しかしそれが明るみに出ると、非常によろしくない事態に発展する可能性が高い。具体的に言うと、姐さんの耳に入ったりすると、とても危険なのだ。ぶっちゃけ、俺の生存が危ぶまれるほどの危機にまで発展する可能性も、無きにしも非ず、といったところか。

おそらくだが、ちよっとした金銭の貸し借りとか、それくらいのことなら姐さんも、友人とのちよっとしたやりとりくらいに思ってくれることだろう。たとえば、昼飯買おうとして10円足りないとか、ジュース飲もうとしたら財布が空っぽだったとか、どうしても欲しい本が目のあるけど財布持っていないとか、そういうことだったら見逃してくれる、というか率先して貸してくれる。しかし今のうちに、お金のかかるゲームをやっていて入れ込み過ぎて金が足りなくなつて、連コインするために金が必要とかそういう場合、絶対貸してくれない。姐さん以外の人から借りようとするのも、おそらく阻止されるだろう。



もちろん霧子なら、お願いすればどのような状況であっても（当然犯罪とか、人様に迷惑をかけるような状況とかでなければだが）、500円くらいなら貸してくれる。もしゲーセンでやりこんでる格ゲーのラスボスに三連敗とかして財布の中の100円玉がなくなったりしたときは、両替に行ったらタイムアップになるかもしれないから、と財布から何も言わずに100円出してくれたりするのだ。霧子は、俺が霧子に対してそうであるのと同様に、俺がするおおむねのことに関しては寛容なのである。

だから、姐さんに聞かれることなく霧子に話を通すことが出来さえすれば、俺は第八戦に挑んでいくための種銭を調達することが出来るのだ。しかし、もしバレてしまうと非常にマズいことになる。慎重に、万難を排して霧子と二人っきりでお話しなければ……！！

「ちょ、ちょっと失礼しますね。ほんのちょっとだけですから。二人とも、そのまま、そのままここで待っててくださいね？」

「はい、お待ちしております」

「幸久君？」

「あっち、あっちの隅に行こう。あゝ、みんなは来なくていいからな、特に姐さんは」

「？　　どういうことだ、三木、どうかしたのか？」

「いや、あの、なんていうか…、非常に重要な話だから、俺と霧子の一対一で話をする必要があるのだよ、分かるかい？」

「ふむ、まあ、そういうことならば、特について行こうなどとは思わないが……。こういった類の話だ？　それともそれすら話すことはできないか？」

しかしどうしてだろうか、姐さんは俺たちが二人きりでここから離脱することに対してなにか思うところがあるようなのだ。何が引っかかってるんだ？　いつもだったら、そんなこと言わずに送りだしてくれるじゃないか。

いやもちろん、こんな風に送り出してくれないときもある。黙って送り出してくれないとき、それは姐さんが直感的に何かよろしくな

いことを察知しているときであり、その予感的中精度はなかなか冗談にならないものがある。ぶっちゃけ、めっちゃ当たる。現に今だって、姐さんの思うようなよろしくないことを俺がしようとしているわけだし、そうなってしまえば、もうその追求から逃げられっこないのだ。

ここに至って、もはや何も説明せずに力技で切り抜けるなんて出来るはずがない。そんなことをすれば、それこそ力技で口を割らされることになるのだから、黙って何らか申し開きをした方が得策なのだ。

しかしだからといって、本当のことを言うわけにはいかない。本当のことを正直に言ってしまうえば、姐さんの手によってこの場から強制退去させられることは間違いなく、勝負の続きをするなんて夢のまた夢に相違ないからな。

だからこそ、ここは何かクールな言い訳をして、見事に誤魔化して見せようではないか。それをするこさえできれば、俺は次戦に勝負を進めることができ、そして今度こそ晴子さんとの戦いに勝利を収めるのだ。

「なんていうか…、ちょっとしたお願いっていうか、近い将来の話？　うん、大事なお話だよ、うん」

姐さんを何かから誤魔化すとき、もっともやってはならないのは嘘を吐くことである。嘘を吐くと、どうしてかそれを察知されるからだ。嘘を察知されればその時点で俺のしている話の信ぴょう性が消滅し、今でいえばこの場からの強制退去が決定することだろう。

それゆえに、絶対に嘘を吐かず、しかしそれでいながら本当のことを話さないという器用な振る舞いが要求されるわけなのだが、そのとき大事なのは、話をバカみたいに大きくすることだ。

つまり、事実を大きな風呂敷で包んでしまつて、その全容が覆い隠してしまうのだ。そのとき、もちろん話自体が抽象的になることは避けられないが、そこはうまく具合にバランスを取っていけば、なんとかはなる。

「将来の話!?! いったい何の話をするつもりだ!?!」

「ん? いや、そんな大した話じゃないよ? 軽いタッチで出来るようなお話だよ」

「か、軽いタッチで、将来の話などするな!! つ...、というか、二人はそういう関係だったのか!?!」

なんとなくなのだが、俺の話が、どこか遠くの方に行ってしまったような気がする。こういうことがあるから、話を極端に抽象化するのはイヤなんだ。

というか、マズいな。話を大きくして姐さんの持っている関心を削ぐつもりだったのだが、しかしどこで広げ方を間違えたのか、姐さんはさっきよりもいっそう俺の話に食いついているように思う。ヤバイぞ、どうする、俺...。っていうか、こんなに食いついてくるってことは、もしかしてバレてる? バレてるんだったら、非常にまずいんだが....。

「俺と霧子は親友の上位系、マブダチの進化形、友人と書いてデスティニーと呼ぶ間柄だぜ。姐さんも、それはよく知っているだろう」

「ゆ、幸久君...、意味分からないよ....」

「三木...、どうした? 何かあったのか? 何か、言いにくいことでもあるのか? 誤魔化さなくてはならないことがあるのか?」

「べ、ベツニナニモナイヨ?」

「ゆっきい? なんかあせだくだよ?」

「そそそ、そんなことねえって!」

「三木、何かを隠しているな? 言え、言うんだ。お前は

何を隠している。目を反らすな、まっすぐ私の目を見て言うんだ」

「俺は、霧子とお話があるんです。姐さんは、ほら、椅子に座って紅茶をどうぞ」

「ダメだ。お前は何か隠している。これから天方となんの話をするつもりか分からないが、しかしその前に私にそれを話してからにするんだ。私に話すことができない用事ならば、それこそ家に帰って、私の介入することの叶わないところですからんだな」

「ぐっ…、いや、あのですね……」

話が、変な方向に派生したあと、一周回って元の位置に戻ってきてしまったような気がする。いや、むしろ状況は悪くなってるから一歩後退したのかもしれない。

しかし、ここはなんとか誤魔化さなくては。姐さんは何かがあって完全に感じてるみたいだし、もう過剰に話を拡張して誤魔化すことはできない。となると、何か別の話題を持ってして誤魔化さなくては。

「こ、今度、霧子ともう一回、水着買いに来るからさ、その打ち合わせ？　みたいな？　なんていうか、そんな感じ？」

「…、嘘ではないようだが、真実でもないようだな。…、もういい時間だ、そろそろ帰るとするか」

「ど、どうして、急に？」

「急ではない。そもそも三木はすぐに帰ると言っていたではないか。さあ、もう帰るんだ、仕度をしろ」

「お、俺は、もうちょっといるぜ。俺はゲームで勝たないといけないんだからな！」

「三木、今でそのゲーム、何度やった？」

「な、七回？」

「つまり、七連敗ではないか。今日のところは諦めるんだな。それにゲーム一つに何千円も使うものではないぞ。これは一般論だろう」

「そ、それはそうだけどさ……。で、でも、次くらいには勝てそうなんだって！　なんか、そろそろくる気がするっていうか、きっと来るんだって！」

「そうやった、今まで七連敗したのだろう？　優れた人間というのは、引き際を弁えているものだ。それに、今日なんとしても勝たなくてはならないというものでもないだろう。また今度、もう一度足を運べばいいだけで、意固地になることはないぞ」

「それも、そうかもしれないけど……」

「私は、お前のことを気遣って言っているんだ。ハルさん、すまな

いが今日のところはこいつと遊ぶのは勘弁してやってくれ。長い時間拘束してしまつて悪かったな」

「あら、そうですか？　ご主人さまも、それでよろしいのですか？」

「お、俺は……！」

「三木、財布がだいぶ軽いように思うが？」

「あっ！？　俺の財布……！」

「なんだ、もう入っていないではないか。これでは続きをすることもできないだろう。ほら、もうわがままを言うんじゃない、帰るぞ」

「い、いやだ！　帰らない！　勝つんだ！　俺は勝たなきゃいけないんだ……！」

「まったく、駄々をこねるんじゃない。三木、負けたときこそ紳士的でなくては、男を下げるぞ」

「そ、そうだよ、幸久君……、そろそろ帰らないと、広太君が心配するよ……？」

「でも……、でもだな……」

俺たちがもきもきと揉めていると、デュエルテーブルで座って俺のことを待っていてくれた晴子さんが、椅子を鳴らすこともなく静かに立ち上がった。

「……、ご主人さま、それでは、こうしましょう。ミキちゃん、わたしのことを、写真に写してください」

「？　はい、分かりました、ハルちゃん」

「キレイをお願いしますよ」

そして、もう一人のメイドさんも立たせると、清楚な雰囲気を漂わせるポーズ（軽く身体を斜めに向け、両手を前で揃えて右脚の踵をクツ、とわずかにあげるポーズ。晴子さんがするとことなく凛々しい）を取り、ポラロイドをかまえたメイドさんに写真を撮らせたのだった。シャッターが切られるのにわずかに遅れて、下についている排出口からスーッと写真が出てきた。

写真嫌いの晴子さんが、どうして写真を撮られたのか。それをすぐに把握することは出来なかったが、それはその直後の晴子さんの動

きによって間もなく明らかになった。

「これは、ご主人さまにさしあげます」

「えっ…、くれるんですか…?」

晴子さんの動きは、俺の考えていたものとは全く違うもので、というか、そんなことをまさかするとは考えていなかった。コツコツとブーツを鳴らして俺のそばまでやってきた晴子さんは、その手に持ったパラロイド写真を俺に向かってスツと差し出したのだ。俺はそれをどうしたらいいのか分からず、どうしたものかまごまごしてしまった。

「はい、ツーショットをさしあげることとはできませんが、ここまで頑張られたのはご主人さまが初めてです。ですのでこれは、頑張ったで賞ということで、お納めください」

「い…、いいんですか…?」

「ええ、特別、ですからね?」

しかし晴子さんの目は、そんないたわりの言葉とは裏腹に、毎度あり、と言っていた。つまり、そういうこと。晴子さんは俺に絶対勝てる公算があつて、俺が負け続けるほどに熱くなって闘い続けることを知っていて、つまりこれぐらいが金を搾り取るのの限界点だと判断したのだろう。

最初から、これを俺にくれるつもりはあつたに違いない。つまり俺は、七回分のプレイ料金を支払ったのではなく、3500円を支払って晴子さんのブロマイド（裏面にさらつとサインのようなものもしてくれているらしい）を一枚買った、ということなのだ。確かに、晴子さんの写っている写真のレアリティから考えれば、これくらいの値段は妥当かもしれないが、しかし…、いや、いいや! 過程はどうあれ、俺は晴子さんのブロマイドを手に入れることができたのだから!

晴子さんの目が、そろそろウザいから帰れ、って言ってるような気もするけど、そんなことないない!

「また今度、挑戦してください、ご主人さま。そのときこそは、ふ

ふ、ツーショットの写真をさしあげられるでしょうか？」

「そ、そうですね！　でもこれは、ありがたく頂戴します！！」

「はい、そんなに喜んでくださって光栄ですわ、ご主人さま。それではお帰りということですので、お会計を失礼します」

「はい、お願いします」

「よかったね、幸久君、写真もらえて」

「ああ、ツーショットよりもむしろこういうの方がほしかったし、めっちゃうれしい！」

「ゆっきいがそんなにニコニコしてるの、はじめてみるかも」

「そんなことねえって！」

『幸久くん、そんなにメイドさん好き？』

「そんなことねえって！」

「いってらっしゃいませ、ご主人さま、お嬢さま♪」

そんなわけで、俺は財布の中身が空っぽになるほどの金を使うことによって、めっちゃうまいケーキを味わい、メイド服の晴子さんのブロマイドを手に入れて、その喫茶店を後にしたのだった。こんなに派手に散財したのは生まれて初めてかもしれないが、しかしとても価値ある使い方をすることができたのではないか、と思う。

あっ、ちなみに、その手に入れた写真を広太に見せたところ、一目でそこに写っているのが晴子さんだと看破していた。やっぱりどれだけ姿を変えても、分かるやつが見れば分かるってことなんだろうな。

## おにぎり握り握り

新しい朝が来た、目覚めの朝だ。

しかし俺の朝はとっくに始まっているし、とうに目覚めているのである。とにもかくにも、俺は腕まくりをしてエプロン着用し、今日の昼飯であるところの弁当をこしらえるためにキッチンに立っているのだった。

そう、今日はゴールデンウィークの初日であり、俺たちが旅行に出かける当日なのである。今日から行く二泊三日の旅行については、とりあえず何事もなく準備を済ませることに成功し、何の憂いもなくこうして弁当をつくっていられるのはなんとも喜ばしいことであり、やはり去年と違って始動が早かったからだな、うんうん、と我がことながらあっぱれ、と言ったところだろうか。

「よし、これくらいいいか？」

光陰矢のごとし、とはよく言ったもので、準備が何もかも済んでしまえば旅行の当日までの時間はあっという間に過ぎていった。しかし、思いついてから準備が整うまでの日数と準備を済ませてから旅行の当日までの日数はほぼ同じであるにも関わらず、その体感時間にエライ差があるように感じた。

まあ、旅行は準備の段階が一番楽しいっていうし、準備の間はいろいろ俺もかけずり回って忙しかったからそう感じているのかもしれないし、あるいは時空の密度にひずみか何かが生じているのかもしれない。

「昼飯はお弁当だって言ったけど、はて、いったい何人がつくってくるだろうか……」

そして俺が今何をしているかといえば——もちろん弁当をつくっているのだが、キッチンでたくさん炊いた飯を三角形に成形しているところであり、つまり言ってしまうえばおにぎりを大量に握り握りしているところである。すでにその個数は二桁の半ばあたりに差し掛



かるか、というほどで、若干つくり過ぎている感は、どうしても否めない。

「まあ、別に志穂が食うだろうし、多すぎるってことはないんだろうけどさ。…、そろそろもういいか、うん」

さほど広くもない調理台の上を埋め尽くすのは、大量の白い三角形である。その中にはしゃけとかおかとか梅干とかの定番っぽいところから明太子とか唐揚げとかの若干御お高かったり色モノだったりするところが込められており、いろいろな味を楽しむことができるようになっていいる。だいたい種類は十種くらいだから、それぞれ四個ずつくらいで、いろいろな中身のものがそれなりに行きわたるのではないかと思う。

そしてそれに加えて、弁当なのだから当然おかずなんかもいろいろ持っていていくわけで、予想するにかなり巨大な重箱を手から提げて待ち合わせ場所に向かわなくてはならないように思われる。うちにあるもので一番デカイ重箱は、それこそ正月のおせち用だろ、と言いたくなるような理不尽なサイズの代物だ。それいっぱい内容物が詰まっている様はもはや壮観の域に達しており、それを手に提げて移動することは苦行といっても過言ではない。ぶっちゃけ、マジで重いのである。よくぞここまで量をつくったものだ、と呆れかえるほどに重いのである。

そもそも、どうして俺がこんなに大量のおにぎりを握り握りしているかといえば、それはまさに今日こそが旅行へと出発する当日であり、今日のお昼ご飯は電車での移動中に行なうことになっているからであり、とりあえず全員が自分の分を自分で用意することになっているからであり、若干名その義務を遂行しないのではないかと思われる者がいるからである。具体的に言うとな志穂とか霧子とか、志穂とか志穂である。

あいつは、自分が人三倍食うということを自覚しているにもかかわらず、おそらく今回のお弁当持参という約束を完全に忘却しているに違いない。となると必然的に昼飯抜きか、あるいは駅が行きかけ

かで弁当を買って済ませることになるだろうが、当然それでは足りないのが志穂であり、他の人の弁当に手を出すのが志穂である。

そんなことをされてしまつては俺たちの昼飯は安らかなものには決してなり得ず、志穂に昼飯を奪われるか否かという戦場へと変貌することは避けられない。それならば、先手を打って俺が志穂の分の昼飯まで用意してしまえばいいではないか。そうすれば仮に志穂が弁当を持って来なかったとしてもほかのみんなの昼飯が脅かされることはなく、平和な世界が実現するではないか。

「よし、詰めるか、重箱に」

「幸久様、お弁当箱に詰める作業は私が引き受けますので、どうぞお弁当づくりの続きをなさってください。待ち合わせのお時間には余裕を持って到着なさるのがよろしいかと思われます」

「心配すんなって、時間はまだいっぱいあるんだから遅れるなんてことにはならねえよ。それよりも広太、お前も今日から出るんだから、準備とか大丈夫なのかよ」

「はい、幸久様、私の方はすでにすべての支度が整っておりますので、ご心配には及びません。それより幸久様は、ご自分の朝食を取ってくださいませ」

「ああ、朝飯か、忘れてたな……。たくさんおにぎりつくってたらもうそれだけで満足してたかも。それじゃあ今日の朝飯は、とりあえず重箱に詰めてみて入り切らなかったおにぎりってことでいいな」

「はい、了解いたしました。しかし、この量でしたら、一つ一つの大きさも比較的小さめですし、詰めようによつてはすべて収めてしまうことも可能なのではないでしょうか」

「マジ？ それじゃあ残ってるご飯で。まだ茶碗に半分ずつくらいは残ってると思うし、それを中身の具とか余ったおかずとかで適当に食ってくれ。俺には、残念ながらこれ以上なにかをつくる気力がわかない」

「はい、了解いたしました。しかし、これほどまでの量が、どうし

て必要だったのでしょうか、幸久様。お一人で召し上がるには、いささか量が多すぎるように思われるのですが……」

「志穂だ」

「ああ、志穂様ですか。それならば、これくらいがちょうどいいのかもしれないね」

「そういうわけだ。ほれ、さっさと詰めて朝飯にするぞ。俺はこっちのおかずの方の仕上げやるから、広太はおにぎりをなんとかしてこの一段に詰めてくれ。無理そうだったら二段に分けてくれてもかまわないぞ」

「おそらく、ここにある量から見ても一段半ほど必要かと思われるます。どうなさいますか」

「あゝ、じゃあとりあえず一段半詰めちゃってくれ。あまったところにもなんかおかずを詰めちゃうから。っていうか、余ったところの大きさに合わせて卵焼きつくるから、気にしないで詰めろ」

「はい、了解いたしました。それでは詰めてまいりますね」

「おお、そうしろそうしろ」

それから、二人でせっせと巨大な重箱をおにぎりとおかずで埋めていく。俺が思っていたよりも重箱の容量はずっとデカく、入りきらないと思っていたおにぎりも案外すんなりと収められていき、広太の言った通り重箱一段半の中にすっかりとしまわれていたのだった。「おお、案外収まるもんだな。んじゃ、俺はこの微妙に空いたところを埋めるから、広太は自分の仕事に戻ってくれていいぞ」

「はい、それでは失礼いたします」

広太の仕事というのは、いつもと変わらずこの部屋の掃除である。しかし広太も、今日から一泊二日で庄司の本家におじさん、おばさんと連れだって出掛けてしまうので、いつもよりも念入りというか熱心というか、執念のようなものすら感じられそうなほどだった。まったく、一日二日家を空けるからってそんなに掃除をしなくてもいいだろうに、出掛ける前くらいゆっくりしている、と言いたい。まあ、広太がプライドを持ってやっている仕事に対して俺が適当に

口出しするのはよくないので、そんなことをしたりはしないのだが。ちなみにだが、俺はこの重箱を仕上げてしまえば出掛けるための支度は全て整うわけで、つまりこの作業が俺のお出かけ作業の最後の一つと言っている。これさえ終わってしまえば、あとは朝飯を食って歯を磨いて着替えを済ませて、それから荷物の最終チェックをしてお出かけるのだ。

「卵焼きはこれくらいで：、うん、いいな」

クルクルとちよいどいい太さまで巻いた卵焼きをまな板の上に下ろし、適当な厚さに切り分けると広太があけておいたスペースにひょひょいっと詰め込んでいく。とりあえずちよいどいいところまでスペースが埋まったので、俺はうんと軽く頷いてから重箱を三段重ねて最後にふたをした。

さて、それじゃあ朝飯をつくるとするか。今日は残り物を始末したいし、そんなに工夫することもないだろ。とりあえず、少しだけ残ってしまった溶き卵はもう一度油を薄く敷き直したフライパンに流し込み、カチャカチャとかき混ぜてそぼろ状にしてしまう。

あとはもう、弁当のおかずの残りを適当につまみながら、おにぎりとか残りのご飯とかを適当に食べればいいだろう。どうせ広太も昼にはうまいものを食べるんだろうし、朝飯で手を抜いたって問題はあるまい。まあ、そもそも弁当のおかずをつくる時点では手を抜いていないのだから、これからテーブルに並べるものたちは手抜き品のというわけではないのだが、いや、まあ、自分で手抜きだと思っているのだから、それはもう手抜きなのだろうな。

変に言い訳するのはやめにしよう。

「おい、広太、掃除の続きは飯食ってからにしろ」

「はい、了解いたしました。それでは盛ったお皿を運ばせていただきますね」

「ああ、あと飯も適当に盛ってしてくれ、頼む。俺はフライパンとかの大きいだけ洗っちゃうから」

「置いておいてくだされば私がやりますので、幸久様は席に着いて

ゆっくりなさってください」

「使った調理器具は自分で洗うもんだ」

「はい、承知いたしました」

それでは、ひとまず朝飯ということにしましょうかね。

.....

「それじゃ、俺は行ってくるからな。元栓とか鍵とか、いろいろよろしく頼んだぞ、広太」

朝飯を食ってから最後の仕度を整えて、俺はようやく家を出発するための準備を完了したのだった。もう後は、本当に出発するだけであり、今までの様々な苦労もこの瞬間のためだったのだ、と思うと少しではあるが感慨深いものがある。

「はい、お任せくださいませ、幸久様。万事抜きなく、幸久様が憂いなくお出かけになれますよう、気を配らせていただきます」

「あと、庄司の家の集まりか何か知らないけど、せっかく俺のそばから離れるんだ、ゆっくり羽休めしてこいよ」

「いた仕方ないこととはいえ、幸久様のおそばを離れねばならぬこと、心よりお詫び申し上げます。本来ならば幸久様を本家の方にお連れするのが筋なのですが、その方がむしろ危険を伴う可能性もありますので、ご不便をおかけします」

「別にいいって、気にするなよ。っていうか、そんなところにもし連れて行かれたら、めんどくさそうじゃん。連れて行かれなくて助かってるよ。まあ、去年もそうだったけど、美佳ちゃんがいなのは残念だよなあ……」

「美佳子も、幸久様にお会いすることが出来ず、きつと寂しくしていると思われます。一日千秋の思いで、奉公から帰ることが出来る日を待ちわびていることでしょう」

「はは、そうだとうれしいな。よし、行ってくる。くれぐれも頼んだぞ、広太。あっ、あと、鍵をいつものところに隠すのはやめろよ、

弥生さんが侵入するからな」

「弥生様も、そのようなことはなさらないと思いますが、幸久様がそうおっしゃるならば、鍵は隠さずに私が持つていくことにいたします」

「俺も自分の分は持つてくから、念のために、とかいつて隠していいよ、絶対だからな。弥生さんだったら二日くらいかけて隠した鍵を探し出すくらいのこと、しかねないからな」

「はい、了解いたしました。それでは幸久様、いつてらっしゃいませ」

「ああ、じゃあな」

そして俺は着替えなど諸々を入れた黒のキャリーケースをがらがらと引っ張りつつ、広太に見送られて家を後にするのだった。もちろん、さっき詰めた巨大な重箱も、風呂敷に包んで左手に提げている。「ゆき……？ どうしたの…、こんな早い時間に……」

しかし、そんな俺の行く手を阻むように、弥生さんの部屋の扉がゆっくりと開かれた。休みの日の、しかもこんな早い時間に弥生さんが起きてくるなんて本当に珍しいものだ。俺が出掛ける音を耳ざとく聞きつけでもしたのだろうか。あるいは、偶然目が覚めてしまっただけだろうか。

「弥生さんこそ、どうしたんですか、こんな早い時間に。今日は休みの日なんですからゆっくり寝ててもいいんですよ？」

「なんか、目、覚めちゃって……。それで、そんなおっきな荷物持つて、どこかにお出かけ……？」

「はい、ちょっと旅行行ってきます。二泊三日で」

「そうなんだ……。いつてらっしゃい…、おみやげ、よろしくね……」

「まあ、覚えてたら買ってきますよ」

「じゃあ買ってきてくれるんだね。ゆき、ありがと……」

「それじゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃい……」

今にも立ったまま二度寝を始めてしまいそうな弥生さんを取りあえず部屋の中に押し込んでから、俺はキャリーケースを持ち上げて階段を下る。すると今度はその階段を下りる音を聞きつけたのか、階下で元気に扉の開く音がする。

「あれ？ 三木のおにいちゃんです。おはようございますです」

そして俺が一階に辿りついてキャリーケースを地面に下ろすと、そこで待っていたのは未来ちゃんだった。

「未来ちゃん、おはよ。休みの日なのに、早起きだね」

「はいです。未来はいつも、休みの日でも早起きするようにおかあさんに言われてるです」

「そっか、いい子だね」

「えへへ、それほどでもないです！ それより、おにいちゃんはどこかにおでかけですか？ でっかい荷物を持っていますけど？」

「うん、ちよつと三日くらい旅行に行ってくるんだ。しばらく家を空けるけど、心配しないでね。あと、お土産は何がいいかな？ やっぱりお菓子がいいかな？」

「はい、分かりました。それとおみやげは、おにいちゃんが買ってきてくれたらなんでもうれしいです」

「そっか、よしじゃあ、一生けんめい考えて、一番よさそうなのを買ってくるよ」

「ほんとですか？ ありがとうございます、三木のおにいちゃん！」

「じゃ、行ってきます。お母さんにもよろしくね」

「はいです、いつてらっしゃい、おにいちゃん」

元気にいつてらっしゃいと、ぶんかぶんか手を振ってくれる未来ちゃんに見送られて、俺は待ち合わせ場所へと向かうのだった。あつ、いや、向かうのは待ち合わせ場所じゃない。霧子を起こしてこないとな、うん。

まあ、今日はどうせ起きてるだろうから、そこまで大変なことはないだろうけどな。

## 旅行の前に、一仕事

「おかしいな……」

さて霧子を起こすかな、と勇んで天方家の前まで来てチャイムを鳴らした俺だったが、かすかな違和感に首を傾げていた。チャイムを鳴らして数分が経ったのだが、しかしいまだなんの反応を得ることもできていないのだ。

「もしかして、誰も起きてない？」

基本的に、天方家の一日のスタートは晴子さんの起床によって切られる。とりあえず晴子さんが起きて、コーヒーを淹れて、顔を洗って、というところまでいって初めて活動開始ということが出来るのだ。逆に言うならば、晴子さんが目を覚まさない限りにも始まらないと言っても過言ではない。雪美さんは自力で目覚める気がないし、霧子は俺が起こさない限りいつまでも寝続けているし。そう、全ての鍵は晴子さんなのである。

しかしその晴子さんであっても、必ずしも勤勉で熱心というわけではないのだ。晴子さんは世話焼きでやさしい天使のような人だが、しかしどちらかというと面倒くさがりである。晴子さんが勤勉に見えるのは、その比較対象として、対極に自由人の雪美さんが置かれるからなのだ。

つまりどういふことかというところ、おそらく今日はゴールデンウィークの初日ということもあって、目覚ましを切って寝入っているに違いないのだ。ふむ、仕方ない、そういうことならば俺も勝手に家に入らせてもらうとするか。あんまりチャイムを連打して、晴子さんの機嫌を損ねてしまうのもなんだしな。

「おじやましまゝす」

諦めて鉄扉をくぐると、俺は室外機の裏側にセロハンテープで貼っつけられているカギをはがして扉の錠を開く。コロコロと転がしていたキャリーケースを、霧子のものであろうかわいらしいスカイブ



ルーのキャリアケースに並べて置いてから、俺はくつを脱いでリビングに向かう。もし晴子さんから何らかの伝言のようなものがあれば、いつでもだいたいリビングのテーブルの上に置かれているわけで、きつと今日も何か一言くらいは残されていることだろう。

「やっぱあったし。俺の行動なんて、読まれてるんだよなあ……」  
伝言を残すということは、つまり俺が晴子さんが起きてくるよりも早い時間に家に上がり込んでいくと読まれているわけであり、所詮俺の行動なんて晴子さんの掌の上でしかないということかもしれない。…、さすがにそれは言いすぎかもしれない。

「で、なにになに？」

『来たら、八時にあたしを起こすこと』

単純明快である。

「八時っていうと、あと30分もあるじゃん。んー、まあ、待ち合わせは九時だし、八時まで待機して晴子さんを起こしても問題はなあってことか……。うん、待機だな、待機」

晴子さんが待機と言ったら待機なのだ。俺ごときではそれに逆らうことなどできようはずもないのである。それにたったの30分ではないか、コーヒーの用意やら朝飯の用意やらなんやらしている間に、それくらいの時間は経ってしまうことだろう、問題はない。

そういうわけで、とりあえず日ごろいろいろとお疲れの晴子さんの手間を少しでも減らすために、出来ることをしようではないか。俺に出来ることなんてわずかでしかないが、しかし少なからずあるのだからそこへの尽力を惜しんではならない。だって、俺は弟子で晴子さんは師匠なのだから、それくらい当然だろう？

よしやるぞ、と軽く腕まくりをしてキッチンに入ると、俺はその動きを停止させざるを得なかった。キッチンのシンクの中には昨日の夕食で使われたであろうたくさんの食器たちが、鎮座ましましていたのである。積み重ねられた食器、調理器具その他もろもろが、俺を待ちうけていたのだった。

「なんで晴子さん…、晩飯の時点で洗ってないのん……？ どうし

てこんなに…、はっ!？」

俺が次の日の朝に來ると知っていて（次の日は休み）、となればそりゃ当然洗わないわ。晴子さんなんだもの、洗わないで俺に押し付けるさ。

「まずは、ここを洗うところからか…」

とりあえず袖をさっきよりも強くまくって、俺はシンクにたまったたくさん洗いの物と相對することにした。と、その前にコーヒーを抽出しておかなくては。とりあえずフィルターをセットしてから、冷蔵庫の中から豆を保存している真空瓶を取りだして、そして手挽きのミルも戸棚の中から取り出してくる。

適当に三杯分くらいの豆を手近なカップの中にとると、とりあえず保存瓶はさっさと蓋を閉じて冷蔵庫に戻す。そして、さて、ここからこの豆をひたすらこの手挽きミルで挽いていくわけなのだが、しかしこれが非常に時間を食うのである。美味しいものに対してこだわる晴子さんですら、いつもはコーヒーマーカーにくつついている電動ミルでガーガーとやるにとどまっているのだから、その面倒くさは折り紙つきだ。

しかし今日は、まあ、暇なのだからやってみようと思う。たしかこれ、いっぺんにたくさん豆を挽くことはできなかったはずだから少ずつ、具合を確かめながらやっていこう。とりあえず、晴子さんは朝は濃いめがいいそうなので中くらいの挽き具合でいいだろう。からからとコーヒー豆をミルの中に少し入れてみて、それからゆっくりとハンドルを回していく。晴子さんによると、あんまり早く回し過ぎるのはよくないそうなので、ゆっくりと回していく。少ずつ、最初は重かったハンドルがスムーズに回るようになっていき、なるほど、少ずつ豆が細断されていっているということだろう。これなら、次はもう少し豆を入れてもいいかもしれない。

さっきよりも少しだけ多く、豆をミルに入れる。がりがりと豆がカッティングされていているようで、これは案外楽しいかもしれない。もし美味しかったら、これから時間があるときはこのやり方で

淹れてみることにしよう。俺は、こういう手間をかけている感じが、案外好きだったりするのだ。

「しかしこれ、先に霧子を起こしてくるとかはどうなんだろう……。別に晴子さんを一番最初に起こさないといけないっていう法律はないんだし……」

しかし、そんなことをしていると晴子さんを起こす時間まで（あと20分くらい）かかってしまう可能性もあるわけだし、そうになると晴子さんが起きてきたときに何の準備も片付けも出来ていないという状況が待っているわけで、それこそ許されざる、というものだ。となると、やっぱり諸々の準備やら仕度やらをこなしつつ指定の時間まで待って、それから晴子さんを起こして雪美さんを起こして霧子を起こしてとしていった方がいいだろうな。というか、少なくともシンクの中の洗い物だけでも片付けておかないと寝起きの晴子さんが何をするか分からないからな。

「でも、今はとりあえずこの豆たちをやっつけないとな。楽しいけど、あんまり悠長にもしてられないし、少しスピード上げるか」

まあ、コーヒー豆を挽くのは、言ってしまうえば機械任せにもできるわけで、いざとなったらいつも晴子さんがやっているように機械でガーーーーーっとやってしまうのも手かもしれないが。しかし、これはこれで楽しいから出来るだけやってみようと思う。

「……………」

それから5分ほど、豆を入れ、ハンドルを回し、ハンドルを回し、下にたまった粉をコーヒーメーカーにセットしたフィルターに入れて、という行程を繰り返していたのだが、しかし如何せん、この作業の終わりが見えないことに気づいてしまった。もしかしてこれ、本当に、めっちゃくちゃ、冗談にならないほど時間がかかるのではないだろうか。もうこれは、ハンドル回すの楽しいからって執着している場合ではないのかもしれない。

というわけで、いまやっている分だけは最後まで回し切ってからそれをフィルターの中に収めてしまうと、俺は残りの豆をコーヒーメ

カーに付随している電動ミルの中に全部ざらざらと流し込んだ。ふたをして、スイッチオン。容器の中で、段違いに設置されている二枚のブレードが高速回転し、中でたくさん豆がよいように弄ばれ、舞い踊っている。こうしてみると、やはり機械に比べてしまうと人間のなんと無力なこと。俺がちんたらやっていた細断をまたたく間にこなしてしまうのだから、もう目を見張るというものだ。

まあ、機械っていうのはけっきょく人間のつくりだしたものであり、人間の様々な器官の持っている能力を拡大・拡張するのがその存在目的なのである。だからそこになんらかコンプレックスのようなものを抱くのは根本的に何かをはき違えているわけで、間違っているのかもしれない。つまり、便利なんだからなんでもいいじゃん、ってことだ。別に、数年中に意思を持ったAIが人間に対して宣戦布告をするとかいうわけでもあるまいし、今は黙ってこの便利さを教授していればいいではないか。現に今、こうして俺の為さなくてはならない作業の一つが飛躍的な速度で完了しつつあるのだから。

「おお…、もうできた……」

手で挽いたものと同じくらいの荒さになるまで挽いてから、ずいぶんサラサラになってしまった中身の粉末をフィルターの中の粉に混ぜ込んでいき、なんとなく均一な感じになったらすぐに抽出を開始する。これで、おおよそ10分もしないうちにコーヒーができ上げることだろう。

そして俺は、次の作業であるシンクの中の洗い物のお片付けに取りかかるのだった。だいたいたくさんあるけど、気合を入れてさっさと終わらせないと朝飯をつくる時間がなくなってしまうからな、がんばらないと。これを終わらせたら次は朝飯の仕度だ、ちんたらやっている時間はないぞ、しっかりしろ、俺。

「しかし、この洗い物から見ると、昨日はなにか丼ものだな。何食ったんだろ、気になる」

それを裏付けるのは、シンクの中に積まれている大きめの丼と、それからかすかに卵と玉ねぎの付着したフライパン、そして生ごみ袋

の中に入っている三つ葉の根とか玉ねぎの芽と根とかだ。むっ!?

鶏皮っぱいのも生ごみ袋の中に捨てられているぞ!?

とはあれだ、昨日は親子丼だったってことだな!!

親子丼か…、ってことは、今日の朝飯は卵系は避けた方がいいかな。晴子さんのためにつくる朝飯は、けっこうフレンチトーストが多いからそれでもいいかと思っただけど、そういうことなら別のものを考えないといかん。あゝ、ありもので間に合わせるときは、フレンチトーストが一番楽で美味いし、晴子さんが満足してくれるっていうのに。卵溶いて軽く味付けして、適当にあるパンをスライスして、浸して焼くだけっていうシンプルさでありながら、不思議と美味いからな、あれは。それに、そのパンがドライフルーツの入ってるよなやつだったら、その味まで加わってまた深い味わいになるから楽しいし、あゝ、フレンチトーストで済ませたい……。

しかし、まあ、仕方ないか、晴子さんが昨日の夜に親子丼を食べたんだから。女の子として人並みにはカロリーとかを気にする晴子さんのことだ、卵系が続くのは、やっぱり気になるだろう。そういうところまで気を使わなくてはならないのは、やはり少なからず面倒だが、だが、晴子さんの朝飯をつくることができるというのはそれを補って余りある栄誉なのだ。享受することのできる喜びを、強く強く噛みしめなくてはな。

「…、我がことながら、立派な奴隷根性だな」

かちやかちやと手早く食器を洗い、フライパンを洗い、箸を洗って最後に一晚洗い物が放置されていたシンクをキレイに洗って、ようやく洗い物たちを始末することに成功した。そして時間は晴子さんの指定した時間まで残りおおよそ三分弱、朝食をつくる時間は、まったく残されていない。

くっ…、仕方ない、こうなったら朝起きたばかりの晴子さんがぼんやりと過ごすわずかな時間を使って用意するしかないようだな。本当は起こしに行く前にぼつちり用意しておいて晴子さんをびっくりさせちゃうぞ! と思ったのだが、なかなか人生はままならないも

のである。

「さて、まずは晴子さんからだ。すっきりばっちり起こしちゃうぞ！」

というわけで、晴子さんを起こすため、俺は洗い物を終えて濡れてしまった手を拭ってからキッチンを後にしたのだった。目指すは二階、いつもの霧子の部屋の向こう正面、晴子さんの部屋である。入るのは久しぶりのことだが、まあ、霧子の部屋への訪問機会に対しての「久しぶり」だから実際前回入ったのは二週間くらい前のことでしかないのだがな。

何にしても、とにかく今は晴子さんに無事お目覚めいただくことがそれが至上命題なわけで、それ以外のことに現をぬかしているわけにはいかないのだ。しかし晴子さんは霧子ほど寝起きが悪くない——普通に比べたら悪いかもしれないが——ので、それは俺の日常的なお仕事に比べたら比較的楽な仕事ということができるかもしれないが、しかし霧子を起こすときと違って奇想天外な方法を用いてスパッと起こす、という技を使うことができないので、難易度自体は、むしろこちらの方が高いかもしれない。

まあ、なんというか、どちらにしても、天方家の人間を起こすのは大変ということなのかもしれないが。

## お目覚めの時間

昇りなれた階段を軋ませて昇り、二つある扉のうち一方——一つには「きりこちゃんのへや」、もう一つには「はるこちゃんのへや」と、間違いなく雪美さんが書いたであろう丸っぽい字で書かれているネームプレートが吊るされている——の前に立って軽く深呼吸をする。

「すう……、はあ……、すう……、はあ……」

とにもかくにも、晴子さんの部屋に足を踏み入れるのは緊張するのである。そもそも晴子さんは、俺にとっては神に等しい存在なのであり、ようするにこの部屋は神のおわす神域なのであり、本来ならば脚を踏み入れるべからざる聖域なのだ。そこに、主である晴子さんの許可を得ているとはいえ、侵入するのだから緊張してやむなしといった具合なのだ。

晴子さんにとってみれば、所詮俺なんてただの弟子でしかなく、俺に起こされることなんて別に気にするようなことではないのかもしれないが、俺にとってみれば晴子さんを起こすのはかなりの精神的労力が必要としているのだ。寝起きの晴子さんというのは、正直に言って寝起きの霧子とは比べ物にならないほどのダメージがあるというか、世界に誇るべき宝というか、俺なんか直視するには畏れ多いというか、生きているのが辛くなるというか、俺が死ぬべきというか、うん、辛い。

しかしまあ、晴子さんと霧子の何をもって比較するかといえば、そのかわいさとか可憐さとか乙女感とか、まあ、いろいろもろもろを数値化して闘わせるわけなのだが。そうやって考えると霧子はいい属性で晴子さんは神属性なのだから、ある意味で勝負にならないのかもしれない。いや、霧子はいいんだぞ！でもそれ以上に晴子さんが神なのだ！神には、いかなる存在も、勝てないだろう？

「落ち着け…、俺……。晴子さんに起こしてくれって言われたんだから、動揺するんじゃない……」

しかし今、そんなことをぐちぐち言っている場合ではない。晴子さんがいかに神であっても、俺は言われたとおりにきっちり晴子さんにお目覚めいただくことが求められているのだ。落ち着け、俺……。もう一度だけ吸って、吐いて、それから俺は目の前の扉に手をかける。軽く力を入れてノブを捻ると、勇気を出して扉を開いた。

「晴子さ……ん……。起きてますか……?」

おそらく起きていないであろう晴子さんに向かって、俺は勇気を出して声をかける。晴子さんの眠りを妨げるということはかなりの覚悟を必要とするわけで、気恥ずかしさも相まって精神がヤバイ。

「うお…、いつもどおりだけど、やっぱすげえ……」

そして晴子さんの部屋は、比較的キレイに片付けられている霧子の部屋とは違って、モノが多すぎる感が凄まじい。晴子さんの部屋には、大量のぬいぐるみがところ狭しとひしめいているのだ。

「しかし…、これは喘息の人には地獄だろうな…、いつも思うけど……。晴子さんが喘息じゃなくてよかったよ、ほんと」

部屋の中の空間のおおよそ三割ほどが、毛の固まりであるぬいぐるみに支配されているこの部屋は、きつと喘息の人が生きていくには辛すぎる空間に違いない。まあ、俺は喘息じゃないからそのあたりのことについてはよく分からないけど、大変なんだろうな、たぶん。っていうか、俺の周りに喘息の人っていないなあ、そういえば。俺の周りの人たちはみんな元気だからな。病氣知らずというか、学校を休むことも滅多にないように思うし。…、霧子もああ見えてけっこう風邪ひいたりはないし、志穂なんて風邪の菌を倒して回りそうな感じもする。姐さんも自己管理とか怠りない感じだし、メイも…、メイは、まだよく分からないか。

でも俺はたまに風邪ひくんだよな。去年も冬に一回寝込んだし、インフルエンザにもかかったし、弱いんだよなあ、なんか。広太がいるからなんとかなってるけど、一人暮らしでこんなことになったら、



きつと死ぬぞ、俺。いかなあ、病気に負けるなんてなあ。

「晴子さんも病気になったりしないんだよな、元気でなによりだぜ」  
とりあえず、晴子さんの眠っているベッドへの進路を確保するため  
に床に並んでいるたくさんのぬいぐるみたちを踏んだりしないよう  
に横に避けて道を切り拓いていく。ちなみに、この大量のぬいぐる  
みたちには晴子さんによって一体一体しつかりと名前が付けられて  
いるわけで、その名前を完全に暗記するまで仕込まれた俺は、なん  
となくそいつらをぞんざいに扱うことができないのである。

っていうか、こいつらは一体一体が晴子さんの友だちなわけで、つ  
まり、もしかしたら立場的には弟子の俺よりも上にいるのではない  
か、と邪推してしまう今日この頃である。ほら、やっぱり友だちっ  
て弟子よりも上だと思うんだよ、いや、ぬいぐるみよりも立場が下  
なんて人としてどうかと思うけどさ。

…、そういえば、晴子さんが俺の調味料たちに名前をつけろって言  
ったのも、けっきょくはこれと同じことなのかもしれない。ああ、  
俺も晴子さんから名前をもらいたいなく。晴子さんから名前もらえ  
たら、きつと弟子でありながら友だちであるということになるんじ  
ゃないか……？俺でも、晴子さんの友だちにしてもらえるんじや  
……！

やっぱり名前を与えるっていうのは、その人に所属するというか、  
その人を所有するというか、晴子さんに所属したいというか、所有  
されたいというか。いや、もはや俺は晴子さんの弟子であり、弟子  
であるということは奴隷であるということであり、所属も所有も超  
えた、隷属の関係にある、ということでは……？

「いや、落ち着け、俺。そこまで行くと、さすがに気持ち悪いんじ  
ゃないか…、俺……？」

危ない危ない、危うく危険な領域に足を踏み込んでしまうところだ  
った。俺は変態じゃないんだ、そんなところに行っちゃダメじゃな  
いか。気をつけろよ、俺。

「しかし、ぬいぐるみを退けようにもどこに退ければいいんだよ、

これ。退ける先にもぬいぐるみがあるじゃないか。こんなところじや日常生活を営むのに支障が出るじゃないか」

お行儀よく座って俺の行く手を遮っているクマやらウサギやらの種々多様な動物たちを、丁寧に退かしてはまた座らせてやる。しかし、晴子さんはよくもこれだけたくさんいるぬいぐるみに名前をつけるなあ、と思うが、だが俺もよくその名前を律儀にみんな覚えていたよな。こいつら、もう30とか40とか数いるはずだし、ほんとに冗談にならない人数だ。

そして何体ものぬいぐるみを退かして道を拓き、ようやく俺は晴子さんのもとへとたどり着く。ベッドに横になり安らかな寝息を立てる晴子さんの表情からは何の憂いも感じられず、いかに穏やかな眠りにについているか、ということがよく分かる。

「晴子さん、起きてください。朝ですよ」

ゆさゆさと、床や棚、机の上とは違ってほんの二体しかないベッドの上で横になっている晴子さんの肩に手をかけると、俺はゆっくりとその体を前後に揺する。しかし、さすがにこれだけで起きてくれるとは思っていなかったが、案の定無理だったらしく軽く俺の手を払うように、晴子さんはコロッと寝返りを打った。そして、その寝返りによって晴子さんの右側を陣取っていた古参の白クマのぬいぐるみ（丸つとしたボディはクリーム色の短い毛に覆われ、首元には真っ赤なりボンが巻かれている。目には黒々と光を返すボタンがつけられている）がコロッとベッドの上から転がり落ちる。

「つと…、危なかったな、ロイド。気をつけろよ」

しかし床に落下してしまいう前に、その軽く柔らかな身体を俺の手が受け止めた。こいつは晴子さんのぬいぐるみ軍団の中でも随一のお気にいりなのだ、下手にぞんざいな扱いをすれば晴子さんからの鉄拳制裁もありうるという非常に難しい奴である。お気に入り証拠に、晴子さんはベッドにぬいぐるみを二体しか連れていけないという自分ルールを敷いていて、そのうちの一体はいつもこいつで、つまり選拔選手ということだろう。

そもそもこいつは、あくまでも俺の知る限りだが、晴子さんがぬいぐるみを収集するようになるよりも前から晴子さんといっしょにいるわけで、もしかしたら俺よりも晴子さんとの付き合いが長いかもしれないのだ。晴子さんがこいつを気に入っているということとは、軽く薄汚れながらもキレイに手入れされているその様子から見てもよく分かることで、間違いなく俺よりも大事にされているに違いない。

「ほれ、ロイド、晴子さんのところに戻れ」

それから俺は、とりあえず手の中の白クマを晴子さんの枕元に戻してやって、もう一度晴子さんを起こすための努力を再開することにした。

「ん？　なんかでっけえカピバラさんがいる……？」

再び晴子さんの肩に手をかけようと身を乗り出した俺の目に、ロイドがいるのとは逆のサイドを固めているぬいぐるみが映り、そして俺はそいつの名前も知らなければ見覚えもないことに気がついた。どうやら、俺が来なかった二週間の間にまた新入りが入ったようだ。しかし、こいつはデカイな。ダルツと横たわるその茶色の毛並みの齧歯目はまるで抱き枕のような大きさであり、現に晴子さんは抱き枕の代わりにそれに両手両足を絡めているようだった。まったく、こんな巨大なものをいっただこで買ってきたのだろうか。それとも、ゲームセンターのクレイニングゲームか何かで取ってきたのだろうか。いや、でも、晴子さんはそういうことがあまり好きじゃないし、やっぱりどこかの店で買ってきたのだろう。

「ん……」

巨大なカピバラさんを抱きかかえたまま、晴子さんは再びコロツと寝返りをうち、一度は背を向けた俺の方にもう一度顔を向けてくれたのだった。しかしその顔のところにちょうど俺がさっき戻したロイドがいて、まさに晴子さんの顔はその腹によって完全に覆われる形になる。これは、はたして苦しいものなのだろうか。もちろん息が苦しいのならばお助けしなくてはならぬわけなのだが、実はお腹

がもふもふで気持ち良かったりするとそれを邪魔することになってしまふし、ううむ、どうしたものだろうか。

というか、あまりに巨大すぎるカピバラさんを抱えたまま寝返りなど打つものだから掛け布団がすっかり巻き込まれてしまつて、すっかり跳ねのけられてしまつたではないか。なるほど、今日の晴子さんのパジャマはデイベアの図柄がたくさん散らされたやつか。

外では基本的にクールなかつこいい系の人間として生活している晴子さんだが、この部屋を見れば分かるように、家の中では霧子よりも乙女チックであり、雪美さんよりも少女チックなのである。そういう、身内しか知らないようなギャップっていうのか？　が、俺はすごいかわいいと思うんだよな。晴子さんに直接は言わないけど。っていうか、言ったらなめんじゃねえぞつて殺されるかもしれないし、言えるはずないんだけどさ。

しかしそんなことよりも、カピバラさんをギュッと抱きしめているせいで晴子さんの魅惑のバストが軽く押しつぶされて形を変え、非常に目に毒というか役得というか、俺を意味もなくドキドキさせるような事態が発生しているのだが、だからといって俺が何かをするでもないしそもそもそんなことを意識することは許されていないから考えることすらも罪である。とても難しいことではあるが、見なかったことにしよう。

「晴子さん晴子さん、起きてください」

そういうわけで、俺はなにも気にせず晴子さんを起こすことだけに集中することにして、とにかく肩に手を当てて揺すつて声をかけ続けるという、霧子が相手だったら絶対に効果を為さないような行動を繰り返しているのだった。しかしそこは晴子さん、霧子とは違ってそれだけでも目を覚ましてくれるから大助かりだ。

「ん……、ゆき、ひさ……？」

もふもふの白クマの腹に顔を埋めたまま目を覚ましたことなど意にも介さず、晴子さんは寝起きにしては冷静に目の前をふさいでいる白クマを退けると、俺のことを視界に収め、それから少し考えて俺

を俺と認識してくれたようだった。

「はい、俺です。朝ですから起きてください」

「きょう…、やすみ……？」

「ゴールデンウィークの、初日ですよ。やっぱり寝てますか？」

「…、おきる。おきなきや……」

「晴子さん、その巨大なカピバラさんは、置いてきてくださいね。下まで持ってきたら、邪魔ですから」

「わかってるわよ……」

「それじゃあ俺、霧子のこと起こしに行きますけど、晴子さんは一人で下までいけますよね？」

「…、おんぶ」

「ダメです、おんぶはダメです。そういうことは、出来ません」

「きりこには、やってるでしょ……。なら、あたしにしたって、もんだいない……」

「問題はあります」

「るさい…、しないと、もういいかい、ねる……」

「ね、寝ないでください！ この時間に起こせてことは、何か用事があるんですよね！ 寝ちゃダメです！」

「じゃあ、おんぶ……」

「だからそれは……」

どうしてか、今日の晴子さんはおんぶを所望のようで、しかしそんなこと、弟子と師匠の間柄で出来るはずがないではないか。そもそも霧子相手でも最近は少し恥ずかしいかなあ、とか思い始めてるのに、晴子さんが相手なんて恥ずかしすぎて死ぬわ！ 誰も見てなくても、恥ずかしすぎて死ぬわ！

それに、恥ずかしいっていうのもあるけど、霧子と晴子さんだと体格が違うからな。背は晴子さんの方が少しだけ低いし、体重はそんなに変わらないはずだけど、でも決定的に一カ所、特におんぶなんてことをするにあたって着目しなくてはならないところが大きく異なっているからな。密着体勢なんて、無理無理。無理に決まってる

じゃん。  
…、無理だからね？

## サンドイッチング

「幸久、朝ご飯」

「はい、今すぐに」

目を覚ましてすぐ、どうしてか俺におんぶを所望する晴子さんに負けた俺は、心を落ち着けてその言うとおりになっておんぶで晴子さんをリビングまで運ぶと、激しく乱れる動悸を気にするまもなく朝食の支度に追われるのだった。とりあえず晴子さんの朝飯を用意したら次は雪美さんを起こさないといけないわけで、さらにその後には最大のボスである霧子が待ちかまえていることと、旅行の待ち合わせ時間が刻一刻と迫っていることを考えると、実はそんなにのんびりしている余裕はないのである。

「とりあえず、あるものでなんとかしないと。買いに行ってる暇は、マジでないから……」

ちなみに、さっきまでは寝起きという状態に相応のかわいらしいむにやむにや状態だった晴子さんも、今はもうすっかり覚醒しているわけであり、リビングのテーブルで優雅にコーヒーなどをたしなんている。そしてその視線は完全にテレビでやっている朝のニュースに注がれているわけで、俺にそれが向けられることはない。

いいんだいいんだ、別に晴子さんが構ってくれなくても。俺は逐一ご褒美がもらえないと働かない弟子ではない、少しくらい無視されたって、気にしないぞ。

「幸久、卵は使うんじゃないわよ。昨日、親子丼だったんだから」

「はい、分かりました。卵は使いません」

とりあえず晴子さんの朝ご飯をつくって雪美さんと霧子を起こしに行かなくてはならない俺なのだが、しかし料理に手を抜くことは許されない。晴子さんに食べていただく料理に対しては、常に全力で立ち向かうことが求められるわけで、それが比較的簡素につくられることが多い朝食であっても例外ではないのだ。

朝食をつくるときに要求されるのは、簡単で、しかしそれでありながら美味しい料理である。つまりそれがどのようなものかといえば、手間をかけず、高価な材料を使わず、寝ぼけ眼でつくっても美味しく仕上げられるようなメニューなのだ。

そしてそれに加えて、今日の晴子さんは昨日の晩飯のカロリーを気にしているようなので、その辺にも配慮してつくらなければならぬ。日々突きつけられる様々な状況に、即興で対応するものをつくるという高度な課題、と言いかえることもできるかもしれない。

「まあ、普通においしいものつくればいいだけなんだけどさ。しかし…、カロリー控えめってなると難しいなあ……」

カロリーを控えめにするとなると、やはり使える食材が限られてくるからな。バターとかの油脂系はやっぱりできるだけ控えた方がいいし、チーズなんかの乳製品もできるだけ控えた方がいいかもしれない。むう…、ほんとに、なにつくればいいんだろう。

「晴子さん、どんなのがいいとかリクエストないですか？ ご飯は炊けてないみたいなので、パンっぽいものしかつくれないですけど」

「食パンがあるでしょ。適当にサンドイッチみたいなのでもつくりなさいよ」

「サンドイッチですか？ 分かりました」

そうかなるほど、サンドイッチか。サンドイッチなら野菜も多く使えるし、マヨネーズの大量投入に気をつけてさえいればカロリーもかなり抑えられる。よし、そういうことならさっそくサンドイッチをつくっていいじゃないか。

まずは、晴子さんの好みに合わせて、パンの耳をすっかりキレイに落としてしまうことにしよう。晴子さんは、サンドイッチを食べるときは耳の部分がウザったいそうで、毎度毎度律儀に耳を落とすのだ。もし他の人がつくったものに耳がついていれば逐一剥がしてしまふほどの徹底ぶりで、よく嫌がられているものだ。

とりあえず八枚切りの食パンを袋の中から全て取り出して、パン切り包丁でサクサクと耳を落としていく。残った耳は、きつと晴子さ



んはいらないから処分しておくように言うだろうからうちに持って帰るとしよう。…、いや、俺は今日はこれから旅行に行くんだから、家には戻らないだろ。うん、広太にメールして後で取りに来るように言って、…、いや、広太もこれから出掛けるんだって、呼んじゃダメだろ。

しかたない、今日のところはこのパンの耳は諦めることにしよう。まあ、言えば雪美さんが残らず食べてしまうだろうから捨てるようなことにはならないだろうけど。これ、油で軽く揚げて砂糖をまぶすとすげえおいしいお菓子になるんだよな。たまらんですよ。まあ、俺はそんなに甘いもの食べないから、未来ちゃんとか弥生さんのためにつくってあげることがほとんどなんだけだな。

「晴子さん、パンの耳、捨てないでくださいね」

「捨てないわよ。食べ物をごみとして捨てるなんて、そいつがゴミよ」

「…、それを聞いて安心しました」

「どうせ、母さんが全部食べちゃうでしょ」

「晴子さん、雪美さんは生ごみ処理機じゃありませんよ。ちゃんと調理してあげてください」

「調理する前に母さんが食べちゃうんだからしょうがないじゃない。手を加えるための仕度をしているうちに、母さんがむしゃむしゃ食べちゃうんだから」

「ゆ、雪美さんだって、さすがにそこまで無分別じゃありませんって。食べていいものと食べちゃいけないものの区別くらいつきますよ」

「それは本能的に、でしょ。食べたらお腹壊すようなものは絶対食べないけど、でもパンの耳は食べてもお腹壊さないでしょ。それに、母さんの頭の中にはパンの耳は調理用の食材としてインプットされてないのよ」

「ああ、たしかに普通はパンにくっついて分離されてないですからね。情報として入ってなかったとしても、おかしくはないです」

「まあ、情報として入ってなかったとしても、料理している人の手元にあるものを、つまみ食いの範囲を超えて食べるのはなんとかしてほしいんだけどね」

「それは…、俺からはなんとも言えないです……」

そんな話をしながらも、俺は野菜室の中から野菜をいろいろ出してきて、それをどんどんパンの間に挟むことができるように処理していく。レタスは数枚剥いて水にさらし、トマトは手早く薄切りにして種を取り、玉ねぎは荒みじんにしてからよく油を切ったツナ缶とマヨネーズで和えてしまい、きゅうりは厚さを揃えた薄い斜め切りにして用意完了。そしてチルドからハムとベーコンを取り出して準備は完了だ。

一つ目はサラダサンド。パンに薄くマスタードを軽く混ぜ込んだマヨネーズを塗りつけ、野菜をてきぱきと挟んでいく。水にさらしたレタスはキッチンペーパーでしっかり水気を取ってから三枚ばかり、トマトは一面に敷き詰めるようにいっぱい、きゅうりも同様に敷き詰めるようにいっぱい。そして上から、同じくマスタードマヨを塗ったもう一枚のパンを乗せて、少しでも上から押して潰して、完成。二つ目はツナサンド。パンには何も塗らず、とりあえずきゅうりをたくさん敷き詰める。それからその上にたっぷりの玉ねぎ入りツナマヨを乗せていく。ツナサンドはこれ以上出来ることがないから、もう完成だ。簡単で非常によろしい。

次は三つ目、と、その前に四つ目の分のパンをトースターに突っ込んでおこう。少し焼け目がつくくらいでいいから、時間はそんなにかからないことだろう。

気を取り直して、三つ目はハムサンド。パンにバターを塗るとハムを一枚真ん中に置き、もう一枚を四つに切り、四隅に配する。こうすることによって、どこから食べてもとれあえず一口目にハムが口に入るわけで、ハムが丸いことから必然的に生じる、パンしかない部分がなくなって、損した感じがなくていい。

そして四つ目のためのパンをトースターから取り出す。きれいなき

つね色の焼き目と、ほのかな香ばしい香りがたまらん。さて、ここから何をつくるかといえば、具がたっぷり雪美さん用サンドイッチである。パンが温かいうちにマーガリンを塗ってしまい、出しておいたベーコンをカリツとするまで焼いて乗せ、手早く潰し気味のオムレツをつくって乗せ、マヨネーズとケチャップを格子状にかけ、しっかりと水気を取ったレタスを乗せ、もう一度カリカリに焼いたベーコンを乗せ、それからマーガリンを塗ったパンを上から乗せ、軽く押してからつまようじを四隅に刺して固定する。

「よし、これでいいか」

「なに、できたの？」

「はい、仕度が整いましたよ」

「そう、それじゃあさっさと持ってきてなさい」

「あと切るだけなんで、もう少しだけ待ってください」

「さっさとしなさいよ、ほんと鈍いわね」

「すいません、今すぐに」

とりあえず先につくった三つをスパスパと三等分してしまうと、出してきた長皿に盛りつけてリビングへ出してしまおう。雪美さんのホットサンドはもう少ししてからの方が切りやすいだろうから、まだ切らなくてもいいだろう。

「晴子さん、どうぞです」

「なんか、けっこうあるわね」

「まあ、三人分ですから。あつ、雪美さんの分はもう少しあつちにあるんで、晴子さんは好きなだけ食べていいですからね」

「そんなに食べるわけないでしょ。母さん以外の人間は食べたらずばた分だけ太るように体がつくられてるものなのよ」

「まあ、それはそうですけど、でも朝はきちんと食べないと体に良くないですよ？」

「知ってるわよ。あたしはほどほどに食べるから、あんたは早く母さんと霧子を起こしてきなさいよ」

「はい、分かりました。せめて三切れは食べてくださいね、晴子さ

ん」

「二つでいいわよ、二つで。別に外に出かける用事があるわけでもないし、家でゆっくりしている分にはそれで十分だわ」

「それなら、外に出かければいいじゃないですか。せっかく休みなんですし」

「休みの日に、どうして外に出なくちゃいけないのよ。平日は毎日学校だなんだって外に出てるのに、休みの日くらい家でのおんびりさせなさいよ」

「で、でも、外に行くのは楽しいですよ。俺たちも今日から二泊三日で旅行ですし」

「ああ、そういえばそうね。霧子もそんなこと言ってたかしら。旅行はいいわよね、旅行は。外に出かけるのも、旅行くらいスケールが大きくなれば楽しいわ」

「それなら、晴子さんだって旅行行けばいいじゃないですか。せっかくバイトしてお金もあるんですし」

「あたしが旅行に行ったとして、その間、誰が母さんの面倒をみるのよ。母さんは絶対旅行なんて行きたがらないから、どこかの誰かが面倒みてくれないとダメなのよ、分かって言ってるの？」

「わ、分かってはいるつもりですけど…、いや、大丈夫です、晴子さんが旅行に行ったときは、雪美さんの面倒は俺が見ます！」

「そういう無責任なこと言うのが、あたしは一番嫌いなよねえ…：。どうせあんた、いざそうなったら『やっぱ無理です！』とか平気で言うじゃない。だからあたしは旅行なんかにいけないのよ」

「俺、今までそんなこと言ったことないような…：」

「なにか言った？」

「いえまさかめっそうもない、なにも言ってますん」

「それでいいのよ」

晴子さんが旅行に行かないのは、別に俺のせいでも雪美さんのせいでもなく、晴子さん自身がお出かけ嫌いであるところに由来する事柄である。晴子さんはどちらかといえばインドア派なのだ。いや、

インドア派というか、嫌アウトドア派なのだ。どうしてかお外が嫌らしいのだ。

そういう、ややもすれば引きこもり予備軍と勘違いされそうなことを言っているの、そもそも旅行なんて行こうとすら思っていないはずなわけで、でもその理由が外が嫌いなんていうのでは格好がつかないから俺とか雪美さんに責任を転嫁しているだけである。別に家が好きだからって誰も晴子さんのことをかっこ悪いと思わないだろうに、なかなか難儀なところだ。

「…、じゃあ、俺は雪美さんを起こしてきます」

「はいはい、さっさと行ってきなさい。母さんは起こしてあげればすぐに起きるから、そんなに大変じゃないわよ」

「ええ、知ってます。晴子さんも、起こすのぜんぜん大変じゃないありませんから」

「よく分かってるじゃない。そういうことよ」

まあ、晴子さんの言うとおり、雪美さんを起こすことはそんなに大変なことではない。しかしそれは、あくまでもこの家の中で起こすことが一番大変な霧子と比べて、ということになるから、ふつうの人と比べたら起こすのはそこそこ大変なのだ。だが、人の眠りを覚ますことについて一言言っている俺にかかれればそれも大して生涯にはなりえないのだから。

言うならば、このミッション最大の障害であるところの霧子の前に現れる中ボス、といったところだ。レベルを十分に上げていけば難しく対処することができるのは、ゲームでも現実でもそう変わらない。

「早くしないと待ち合わせに間に合わなくなるわよ」

「それも、分かってますよ」

晴子さんを起こしてから朝食の支度をしていたら何だかんだと時間がかかってしまったので、けっきょく実のところ待ち合わせまでの時間があまり残っていなかったりするのだが、いや、まだ平気だ。まだ、雪美さんを起こして、霧子を起こして、朝ご飯を食わせて、

とするくらいの時間は残されているはずなのだから。

霧子が少しくらいグズっても、まだおそらく間に合わせることはでき、はずなのだ。大丈夫、待ち合わせの時間まで、あと40分。

## 早歩きでおしゃべりすると、意外と疲れる

霧子とのかを起こしに來たついでに天方家の始動に一役買つて、旅行に出かける前から一仕事成し遂げてしまった俺は、霧子と連れ立って待ち合わせ場所であるところの駅前へと急いでいた。

「霧子、急げ！　ギリギリだぞ！」

「にゅ…、ま、待つてよお……！」

「俺があんなにがんばつて起こしたのに、お前がさつさと起きないのがいけないんだぞ！　霧子が俺のがんばりに応えてすぐに目を覚ましていてくれれば、こんなことにはなつてなかつたのに……！」

「にゅ…、ご、ごめんね……」

「俺があんなに、恥ずかしいことまでしたつていうのに……！　それをこの娘つてば、なにも知らずにすやすやとかわいい顔して眠りこけちゃつて、もお……！！」

「ゆ、幸久君…、なにしたの……？」

「今となつては言うこともできない、恥ずかしいことさ。あつ、霧子に直接何かしたわけじゃないから安心しろよ。えっちなこととか、したわけじゃないから」

「ちよつと氣になるけど…、でも聞いちゃダメな氣が……」

「聞かれても話さないからな、ほんとに恥ずかしいことしたんだから。つていうか、ほんとのところあの瞬間に霧子が目え覚まさなくてよかったつて思つてゐる俺もいる。やっぱり、突発的に意味もなく無茶しちゃうのつて、若さだよな……」

「ご、ごめんね…、無理させちゃつて、ごめんね……」

「氣にすんな、いいてことよ！」

正直、いくら焦つたからつてあんなことしちゃいけないよなあ、と今では後悔している。しかし後悔はするが、反省はしていない。

「…、つていうか、ごめん、俺の時間計算も怪しかった。霧子だけが悪いわけじゃないよな、うん」

ガラガラとキャリケースの車輪を激しく鳴らして引っぱりながら、俺たちは出来得る限りの早足で道程を進んでいく。そもそも、よく考えたら、待ち合わせ時間の九時には駅に着いていなくてはいけなかったわけで、家から駅まで行くための時間も考えていなくてはならなかったのだ。俺の目の前にあるミッションが、「九時までに霧子を起こせばいい」というものではなく、「霧子を起こした上で、九時までに駅にたどり着く」というものだと思いついたときの衝撃ときたらなかったぜ。

実際のところ、俺はせっかく七時半に天方家に辿りついておきながら、晴子さんを起こすために八時まで待機し——片づけ諸々をやっていたのだが——、それから朝飯を用意して——その前に、とりあえず霧子を起こしておけばよかった、と今さらながら後悔——、なんてしていたのだから、もう少しその行動に改善の余地はあったのではないだろうか。少なくとも、いくら晴子さんの指示だったとはいえ、晴子さんを起こす前に霧子を起こしたってよかったわけだし、八時まで黙って待機したのはマズかったな。それから晴子さんを起こしたあとに雪美さんを起こしたのも間違이었다かもしれない。そもそも今日、雪美さんは無理に起こさなくてもよかったのだ、そっとしておいてあげて、自分のセットした目覚まし（大音響、超振動でめっちゃ近所迷惑）で起きてもらえばよかったのだ。

「このペースならきつと間に合う……、はず……!!」

「幸久君、間に合わないよ……、りこちゃんにメールしようよ……」  
「ダメだ! 間に合わせるんだ! 今回の旅行の言いだしっぺが遅刻するなんてダメなんだ! だいじょぶだって、気合で間に合うって!!」

そんなわけで、俺たちはけっこうな危機に瀕していたりするのだが、しかしだからといって諦めてしまうわけにはいかないのだ。霧子と言うように、姐さんに遅刻しますメールを送ってしまうのは簡単だ。電車の時間だって、もしもに備えて一本遅くしたものに乘っていく予定になっているから大した問題はない。しかしだからといって、



諦めてしまうのは間違っている。

そもそも俺は今回の企画者なんだから誰よりも先に待ち合わせ場所に行って、旅行の行程の確認なんかをしながら全員の到着を待ちわびるくらいのことをしていてもおかしくはない、というかそれが正しい姿なのだ。それを俺は、家を出発する時点ですでに遅刻ギリギリが確定しているなんてもう、どうかと思う。いや、確かに霧子を起こしに行ったりしているから時間のロスはあるかもしれないけど、だからってそれは言い訳にならないんだよなあ。だって俺が進んでやっтерることだから、霧子の遅刻は俺の遅刻なんだから。

「燃えろ、霧子！ 炎になれ！」

「ほ、炎？」

「勇気を、燃やせー！！ 勇者なら、出来る！！」

「あ、あたし、勇者さんじゃないから……」

「じゃあ、俺がやる！ 俺の勇気が臨界突破だっ！！」

「幸久君が勇者さんなら、あたしは仲間の白魔法使いがいいなあ。みんなを回復させてあげるの」

「そういえば、白魔法ってさ、実はけっこう相手の身体に無理させてるんじゃないかって、最近思うんだよな。霧子はどう思う？」

「？ 回復させてあげてるんだから、やさしいんじゃないの？」

「いや、回復させるんだったらさ、戦線から下げて治療してやるのが筋だろ？ でも白魔法って、傷ついた身体を魔法の力で強引に治癒させてるじゃん」

「ん…、そうかも」

「っていうことはさ、人間本来の治癒能力を超えた治癒が発生してるわけじゃん」

「そう、だね」

「不思議な力でけがを治しました、なんて謎じゃん。っていうことは白魔法っていうのは人間の持っている自然治癒能力を強引に促進させる何かだろ。そう考えないと、不自然じゃないか？」

「不自然じゃないか？ って言われても……」

「つまり、人間が普通に治癒するためにしている細胞分裂とかを、強引に促進させてるんだ。これって、命を削る行為じゃないのか？

なんだ…、白魔法使い、やさしいと見せかけて意外とやることやってるな……。勇者パーティの影の支配者はサディスティックな不思議魔術で構成員の寿命を削って馬車馬のごとく闘わせ続ける白魔法使いだったってことだな……。霧子も、そうなりたいてってことか…、隠れ腹黒だな、霧子……」

「そ、そんなこと、考えたこともなかったよ！　で、でもそれは、魔法だから。不思議は不思議でいいんじゃないの？　というか、魔法に自然も何もないよ……。魔法なんだから、不思議なパワーで回復しました、でいいんだよ。細胞分裂とか、関係ないんだよ」

「…、まあ、それはそうかもな」

「それに、それを言ったら、どうして勇者さんはHPが1しか残ってないときでも満タンのときと同じ動きができるの？」

「たしかに…、HP1なんていったら、そりやもう死寸前じゃん。要看護対象になってるやつが、まともに動けるわけないよな。立つだけでも精いっぱいとかになっててもおかしくない。何が彼らをあそこまで突き動かしているんだろうなあ……」

「でも、幸久君、勇者さんが負けたら魔王が世界を滅ぼしちゃうんだよ。だからがんばるんだよ、たぶん」

「やっぱり勇気か。いや、それとも使命感か？　あるいは、けっきよくは自分が死にたくないから、みたいなエゴイスティックな……」

「ゆ、勇者さんは、魔王と戦うのがお仕事なんだよ、幸久君。魔王が現れたら、勇者さんはがんばるものなんだよ」

「…、それじゃあ、魔王がいなくなった後、勇者はなにをしてるんだ。失業か？」

「し…、失業…、だね……。でもでも、魔王を倒した勇者さんは、きっと一生遊んで暮らせるくらいの褒章が……」

「金目当てだったのか？　勇者っていうのは、バウティハンターみたいなものなのか？」

「にゆう……、そんなこと、ないよ、たぶん……。」

「魔王という打倒すべき敵も、食っていくための職も失って、生きていく術を失った勇者か。悲惨だな……。」

「で、でも、王様が助けてくれるんじゃないの？」

「いや、基本的に王さまっていうのは勇者を雇ってるんだろ。魔王討伐をしているときはオーナーとして援助もするかもしれないけど、でもそれが終わったら援助は当然打ち切る。勇者は、他の何かをして生きていかざるを得ないってわけだ」

「にゅ、王様、冷たいかも……。」

「王さまも、遊びでやってるわけじゃないからな。そもそも魔王討伐っていうのも一つの治安維持だから、王の責務なんだ。つまり王さまと勇者の関係は、あくまでも仕事の間柄で、それ以上でもそれ以下でもない。だから『おお、勇者よ、死んでしまうとは情けない』なんて薄情なことが平気で言えるんだよ。これはつまり、『こっちは仕事で援助してやってるんだから、お前もちゃんと魔物退治の責務を果たせよ』っていう深層心理が表わされてるんだ」

「王様…、ひどい……。勇者さんはあんなにがんばってるのに……。」  
「まあ、現場の辛さは上に伝わりにくいっていうしな。現場主義の王さまでもない限り、きっと勇者の苦悩は誰にも知られることはないんだろう」

「で、でも、街の人は、やさしくしてくれるよ」

「街には、王城からお達しが出てるんだよ。『この男が今の勇者だから、来たら歓待すること。保証は国が持つ』くらいのことが言われててもおかしくない。つまり、王さまは金をばらまくことによって勇者の援助をしてくれるんだ。そうでもないど、見知らぬ男が家に不法侵入してきて、あまつさえタンスの中やらベッドの下やらを探って小銭とかアイテムとかをパクっていくのを見逃してくれるわけがない。ここまで徹底した補助をしてくれるんだ、王様はちゃんと仕事してる。これなら、勇者が死んだことを詰るくらいはさせてあげた方がいいのかもしれないぞ。そうでもないど、王さまがス

トレスで死ぬかもしれない」

「…、幸久君は、そんなこと考えながらゲームして、楽しい？」

「俺はそもそもゲームをしない派だ」

「そうだったね……。それじゃあ、今度いっしょにやる？ やった  
ら、きつと楽しいって分かるよ」

「まあ、楽しいって分かってても、うちにはゲームを買うような余裕  
はないんだけどな。それよりもほしいものがいろいろあるから、切  
れ味のいい包丁とか、軽くて振りやすい中華鍋とか、熱伝導率のい  
い雪平鍋とか」

「幸久君は、便利なキッチン用品と珍しい調味料買うの好きだもん  
ね」

「ああ、あれは、ライフワークといっているかもしれない。まあし  
かし…、そんなのよりも、霧子の方が好きだけだな」

「にゆう…、またそういうこというんだから……」

「霧子は俺の大事な妹分だからな。可能な限り甘やかさない」と

「あんまり甘やかすのは、よくないよ、うん」

「まあ、そんなこと言われても甘やかすんだけどな？ っていうか、

ちよつと速度落ちてきてるぞ、霧子」

「にゅ、にゅん！ がんばるよ！」

「がんばれ、霧子！ 俺もがんばる！」

そうして、益体のないことについて意味もなくだらだらとおしゃべ  
りすることを得意とする俺と霧子は、早歩きの状態を維持したまま  
そんなことを話し合っていたりするのだった。ぶっちゃけると、地  
味に息苦しかったりする。

実際のところ、こんなことを話しているくらいだったらもつと脚を  
早く動かして、一分一秒、いやもう一瞬でも早く、待ち合わせ場所  
で待ちぼうけを食っているであろうみんなのところへと急ぐべきな  
のは確かである。

でも俺たちは、隣り合って歩いているがらずつと無言でいるなんて  
ことはできないのだ。確かに俺と霧子は以心伝心なほどの関係を持

っているかもしれないが、だからといって常時無言でいるような関係でもない。なんていうか、間が持たないとかじゃなくて、隙があればおしゃべりしたいっていうか、お互いがお互いを好きすぎるのが問題なのだろう。

当然俺は霧子のことが好きだし、霧子は俺のことが好きなのだ。こればかりは、こういうことについて断言するのは俺としてもあまり好ましいことではないのだが、断言できる。っていうか、霧子に嫌われてたら、俺は今すぐ塩の柱になって死んでしまうかもしれない。

「もうすぐだ、がんばれ霧子！」

「時間はだいじょぶ？」

「まだセーフだ、ギリギリ間に合ったっぼいぞ！」

「にゆう……、よかったよ……」

そうしてようやく見えてきた駅前の全景に、俺はひとまずホッと胸をなでおろす。時間は待ち合わせ時刻であるところの九時の二分前とりあえず、なんとか遅刻だけはしないで済んだ、ということだ。

とにかく遅刻さえしなければ問題ない、立案者としての体面もギリギリ保たれるというものだ。

そして、待ち合わせ場所に指定した改札前の大きな銅像の前には、もうすでに三人分の姿が見える。どうやら俺たち以外の参加者は既に集合を完了しているようで、やはり俺と霧子がみんなを待たせちゃった的な体であることは間違いないらしい。

くそお……、マズいなあ……。問題は、第一声でなんと声をかけて合流するか、ということだ。

## 急いで合流、旅行に出発

「姐さん、ギリギリになってごめん！」

小細工を弄して言い訳をしてもどうせ木っ端みじんに打ち碎かれるんだから、ここは素直にごめんなさいと謝ることにしようと思う。そもそもからして姐さんは言い訳をされることが嫌いで、それがどれくらいかといえば「そんな漢らしくないことをするやつは友だちじゃない！」とか言い出しそうなほどののだ。

「おお、三木、ようやく来たか。待ち合わせには、もう少し時間の余裕を持って到着しておくべきだぞ」

「おっしゃるとおりです……」

「しかしまあ、けっきょく遅刻はしていないのだから、問題はないだろう。これから気をつけろよ」

「ああ、今度から女の子と待ち合わせするときは、ちゃんと本読みながら待ち合わせ場所に待機して、『ごめくん、まった？』って聞かれて、『今来たところだよ』って返せるようにするから」

「そのテンプレートに従わなくてはならないとは思わないが、お前がそれを目指すというのならば止めはしない」

「姐さんとの待ち合わせでもちゃんとやるから、姐さんもちゃんと诺ってくれよな」

「その必要はないだろう。そもそも、私がお前よりも待ち合わせに遅れて来ることはないのだからな」

「そんなの分からないぜ、もし俺が待ち合わせの一時前から待機していたとしたら、さしもの姐さんであっても俺より遅れて来ざるを得ないはずだぜ」

「それならば、私は一時間半前から待機するまでだ。その程度の時間を待機して過ごすなど、造作もないことだ」

「じゃあ、俺と姐さんの役を逆にしよう。そうすれば万事解決だ」

「それではそもそもの、お前が時間の余裕を持って待ち合わせに来

るということが達成されないだろう。むしろなにも解決されていないではないか」

「じゃあ、俺はどうすればいいんだい！」

「どうもしない。ただ時間に余裕を持って待ち合わせに来ればいい、それだけだ」

「……、霧子……、姐さんが冷たいよ……」

「幸久君、やっぱり遅く来たからりこちゃんの機嫌が悪くなっちゃったんだよ」

「霧子ちゃん、どうしてそんなに他人事っぽい言い草なの？ 遅れてきたのは霧子もいっしょなんだよ？」

「それはそうかもしれないけど、でもそれはそれだよ」

「いつから霧子はそんな、大人みたいなこと言う娘になっちゃったのかねえ……。昔はいつでもいっしょの以心伝心一心同体な仲だったんだけどなあ……」

「い、今だって、以心伝心だよ！」

「ほんとに？」

「ほ、ほんとだよ？」

「じゃあ、どうして毎朝スッキリ起きてくれないの？ 以心伝心なら、起きてほしいって気持ち、伝わってるよね？」

「にゅ……、にゅ……。これからは、がんばって起きるよ……」

「……、まあ、意地悪はこれくらいにして……」

「意地悪だったの……？」

「俺は定期的に霧子に意地悪しないと肺の持病が悪くなるんだ」

「そ、そうだったの!？」

「ウソだよ」

「……、いじわる……」

「よしよし、今日も霧子はかわいいな。しかしそれにしても、志穂、なんでお前、時間に間に合ってるんだよ」

「ほえ？」

「お前は遅刻してくる係じゃなかったのか？ 実際、去年も遅刻し

てきただろ。それ以外にもいろいろ遅刻してるし、てっきりそういう係としてがんばってるのかと思ったけど、違ったんだな」

「ふふーん、すごいでしょ。あたしはこれからちこくはしないってきめたんだよ」

「急にどういいう心変わりだよ。もはや遅刻するのにポリシー持つてるのかと思ってたよ。…でもまあ、学校には遅刻してないわけだし、やろうと思えばできるってことか……？」

「がっこうのときはね、ママさんがおこしてくれるんだよ。でもおやすみのときはママさんもおつかれだから、ずっとねてるの。だからあたしもずっとねてて、ちこくしちゃうんだよ」

「なんで自分が起きられないことをしれっとお母さんのせいにしてるんだ。自分のせいだろ。ちゃんと自分で目覚ましをかけて、自分で起きなさい。っていうか、志穂のところは共働きだったんだな」

「ともばたらき？」

「あー、お母さんもお父さんも、どっちも外に働きに出てるんだな、ってこと」

「ママさんは、おそとに出てはたらいてるわけじゃないよ？」

「？　そうなのか？」

「うん、ママさんは、あみものきょうしつをしてるんだよ。週に4かいくらいひとがくるよ」

「へえ、繁盛してるんだな。しかし週四回っていうのは大変だな、忙しい」

「だからママさんはおやすみの日はあたしをおこしてくれないんだよ！　ふふん！」

「なんでそんなところで誇らしげなんだよ。お母さんがいっぱいがんばってるんだぞ、ってところで誇らしげになってくれよ。っていうか、そんなこととは関係なく自分で起きろよ。…いや、それじゃあ今日は、どうやって遅刻しないように起きたんだ？」

「きょうはねー、えっと、メイメイがね、メールでおこしてくれたんだよ」



「そうなのか？　メイはやさしいなあ……」

「メイメイにはなんにもいってなかったんだけど、あさにメールがきたの。びっくりしたんだよ」

「メイが気をきかせてくれたんだな。メイはやさしいなあ……。俺は弁当つくるのに手いっぱい、そんなことまで気が回らなかったよ」

『ちよっと早く目が覚めちゃっただけ』

「それでもいいんだよ。起こしてあげたっていう事実が大事なんだよ、ここでは」

「そ、それなら、幸久君はあたしを起こしてくれたよ！」

「ああ、確かにそうだな。でも、俺たちがギリギリに來たっていう事実には変わりはない。それもまた真理だ」

「私は、三木のそういう潔いところはとても評価しているぞ。あとは、そのスタンスを常に崩さないようにすることさえできれば最高なのだな」

「言い訳したくなるときもあるよ、男の子だもん」

「男ならば、やはり常に潔くなければならない。日本男児の武士の心を思い出すんだ、三木」

「姐さんの理想の男になるためには、いざというときはスパツと腹をかつ捌かないといけないっばいな……。それは現代人としてかなり厳しいものがあるぜ……」

「別に腹を切れなどと言うつもりはない。ただ、女々しい真似をするのは、男として如何なものか、というだけだ」

「姐さんの女々しいの基準はかなり厳しいから……。…、料理をするのは、女々しい？」

「まさか、そのようなことがあるか。私がしたいのは心構えと心意気の話だ。別に何をしたといって女々しいなどは言わない。しかし、自分のしたことに對して言い訳をしたり言い逃れをするようなことがあれば、どうしてもその性根が女々しいと言いたくなってしまいうのだ」

「きっと、姐さんから見たら俺なんか、っていうかこの時代の男そのものがもはや女々しいんだろうな。まあ、そういう男らしい男になれるように、努力はするぜ」

「今は多様化の時代というが、しかしそれでも一つ通すべき道のようなものがあると、私は考えているがな」

「きっと姐さんの言うことは間違っていないんだろうな。でも、間違っていない、正しいかどうかは俺には分からないけど」

「そうだな、誰にも分からないだろうな、そのようなことは」

「ねえねえゆっきいゆっきい」

「ん？ どうした、志穂」

「しゅっぱつしないでもいいの？ でんしゃは？」

「ああ、電車な。電車は、あと五分くらいだ」

「もういく？ いく？」

「そう、だな。わざわざこんなところでしゃべってなくてもいいか。

別にホームに行っちゃべってても同じなわけだし」

「きょうは、どうやっていくの？ でんしゃ？」

「電車だ。新幹線で行ったら早いけど、どうしても足が出ちゃうからな、鈍行を乗りついで行くぞ」

「どんこゝって、ゆっきりのやつ？ ってことは、でんしゃにいったいのってられる？」

「ああ、まあ、去年と同じ電車なわけだし、去年と同じくらいと思うてくれ。行く場所同じだから、同じ乗り方するんだ」

「ってことは、いったいだね」

「志穂は、電車長く乗るのいやか？」

「でんしゃ、すきだよ」

「電車好きなのか？」

「はやいから、すき」

「早いからか……。じゃあ、実は新幹線の方が良かったりしたのか？」

「しんかんせんだと、はやいけど、ぴゅーってすぐついちゃうから

つままない」

「難しいお年頃だな、お前は」

「そうなの？」

「まあ、それは別にいいや。それより、ホームに行く前に聞いとくんだけど、実は弁当持ってきてません、って人。いたら手を挙げろ」

「あれ？ お弁当は、みんな持ってくるって話じゃなかったの？」

「ああ、そうだぞ。持ってくるという話になっていたのだから、持ってきていない者などいるはずがないではないか」

「ゆっきいってば、へんなこときく」

『実は、幸久くんが忘れちゃったの？』

「いや、俺は持ってるよ。持ってきてるよ。手に提げてるだろ、これだよ」

「うわー、でっかい」

「三木、これは少し大きすぎはしないか？ それだけの量、どうしたって一人では食べきれないだろう？」

『それ、何人分あるの？』

「こ、これは、誰かしら弁当持ってこないで人の弁当あてにしてるやつがいるんじゃないかって思った俺が、気をきかせてつくってきたお弁当であって、決して俺が一人でこんなに食べるわけではない！」

「幸久君、お弁当、みんな持ってきてるよ……？」

「えっ！？ マジで!？」

「当然だろう。そういう決まりだ」

「あたしもつくったよ」

『お母さんに手伝ってもらって、つくった』

「あたしも、昨日の夜にがんばったよ」

「…、あのさ、一つ聞いていい？」

「なんだ、三木」

「気のきかせどころ間違えて、あてが外れた俺は、この大量のお弁当をどうすればいいでしょうか？」

「食べるしかないだろう」

「…、無理だよ、こんなにいっぱい。食べきれないよ」

「何を言っている。食べ物を粗末にするなど許さないぞ、常識だろう」

「その常識は、痛いほど知ってる！ でも、無理！」

「ゆっきい、あたしがいっしょにたべてあげるよ！」

「ほんとか！？ 志穂、ほんとか！？」

「ほんと」

「なんていい奴！ 大好き！」

「あたしもゆっきいすき」

『あたしも、お手伝いする』

「メイも手伝ってくれるのか！ ありがとうございます！」

『あたしも、好き？』

「大好きだ！ 今すぐここで抱きしめたいくらいだ！」

『そう』

「ま、まあ、私も、手伝わないとは言っていない。か、勘違いするな、私はただ、食べ物を粗末にするのが許せないだけだからな」

「それでもありがとう！ 姐さん、ありがとう！」

「それに、友だちだからな。友だちというものは、困ったときに助け合うものというではないか」

「どうして聞き伝え調なのかはよく分からんけど、そうだよな！

ビバ、友だち！ ビバ、姐さん！」

「…、私には、好きと言わないのか…」

「？ なんか言った？」

「言わない。言っていない」

「そう？」

「ねえ、幸久君。みんなのお弁当を分けっこすれば、いいんじゃない？」

「分けっこか。そうか、それがいいな」

「そうしたら、みんな幸久君のお手伝いできるし、幸久君もみんな

のが食べられるよ」

「いや、俺は別にみんなのを食べなくてもいいんだ。それよりも俺自身の弁当が大変なことになってるんだから」

「そうだな、分け合うというのはいいい考えだ。こちらだけが一方的にものをもらうというのは、性に合わないからな」

「1かいパンチされたら2かいパンチしかえしなさいってししょもいってるし、おべんとうもそうだよね？」

「お前の師匠は過激派だな……。っていうか、お前は食った分の二倍の量を俺に食わせようって言うのか？」

「いっばいたべてね！」

「いや、いっばいは食べねえよ」

『幸久君に食べてもらえるの？』

「そうだよ、メイメイ。ゆっきいがたべてくれるんだよ」

『がんばってつくって、よかった』

「いや、っていうか、ちょっと待って！俺は自分の分の弁当が、いくらみんなに手伝ってもらったからって、めっちゃあるんだから、もらってる余裕とかないよ！？」

「幸久君、あたしたちのお弁当、食べたくない……？」

「あゝ！そういう目で見ないで！！なんとかして食べてあげたくなっちゃうから！！食べてる余裕なくても、食べちゃいそうだから！！！」

「…、ダメ？」

「あゝ！！霧子、わざわざかがんで、斜め下から上目遣いで見つめないで！！そんなキラキラした視線を、俺に向けないで！！！」

「ゆっきい、ダメ？」

『ダメなの？』

「志穂とメイも、ダメって言われてるのにしないの！俺は、他の人に弁当分けてもらってる余裕なんてないの！余裕なんて…、ないよ！！！」

「わ、私はやらないぞ、そんなこと！ちらちらとこちらをうかが

うのは止せ、三木！」

「姐さんがやってくれたら、俺も折れる」

「私は、やらない！」

「やってくれないと、折れるに折れられない！」

「折れるんだ、三木！」

「あっ、じかん」

「あゝ！！ 電車来る時間！！ 姐さんからの上目遣いのお願い光線は後でやってもらおうとして、今はパパッとでホームに行くぞ！」

「やらないと言っているだろうが！！」

正直、弁当を全員がきっちり持ってきている可能性をまったく考慮していなかったかといえば、まあ、零ではないといったところだ。俺の方も、実は最初からみんなで分け合うのがいいんじゃないかと思っていた。思っていたよ？

まあ、俺が少しくらい食べすぎることになったとしても、それくらいのこと、霧子のお願い光線を浴びることができた代償と思えば安いものだ。

しかしそれよりも、今は電車に乗り遅れないことの方が大事だ。急げ急げ、だ。

## がたごと電車にゆれつつ

「ほえ、はしってる」

「まあ、電車だからな」

俺と霧子がギリギリになって来たから、というわけではないのだが、俺たちは滑り込むように乗る予定だった電車に乗り込んだ。そしてそこから三つ行ったハブ駅で私鉄へと乗り換えを行ない、今日の目的地を目指すのであった。まあ、この乗り換えさえ済ませてしまえばあとはただ乗っているだけで目的地まで到着するわけで、唯一の面倒な部分をクリアしたと言ってもいいのかもしれないのだが。

しかし実際問題、この電車の乗り換えという作業が非常に困難なわけ、なんとなく、本来ならばする必要のない疲労を強いられていくような気分である。具体的に言えば、志穂がどこかに行ってしまうおうとするのを止めるのが手間なのだ。というか、志穂はどうしてそんなに様々なことに對して興味しんしんしていることができるのだろうか。高校二年生ともなれば、まだ人生の序盤かもしれないが、少なからぬ知識を有しているはずで、小さな子どもの頃のように無邪気になんでもかんでも興味深い視線を向けることはできなくなるものなのではないだろうか。

だってまったくの無知ではないんだから少しくらい冷めた視線を持ち合わせていてもおかしくはないではないか。目に入る全てのものが新鮮な、田舎からのぼってきたばかりの小さな娘じゃないんだ、もっと落ち着いてくれたって罰は当たらないはずではないか。電車の乗り換えくらいで手を煩わせないでくれ、といいたい。

「ゆっつきいゆっつきい、あれなあに？」

「あれか？ あれはビルだろ」

「じゃあ、あれはあれは！」

「カプセルホテルってやつだ。看板に書いてあるだろ」

「なにそれ？」

「ホテルだよ、泊まるどころ」

「へえ、そうなんだ。きょうはあそこにとまるの？」

「なんでだよ。去年と同じとこに行くって言ってるだろ。何を聞いて、なにを思ってお前はここにいるんだよ」

「ゆっきがいるから、あたしもいるんだよ」

「なにその一蓮托生みたいな感じ。お前と一蓮托生は怖いわ」

「いちれん、たくしよ？」

「…、お前が死んだら俺も死ぬ、みたいな感じ」

「ゆっきいしんじゃ、ヤ」

「いや、死なねえよ。もののたとえだよ」

とりあえず、大型連休の初日でありながらかなり静か、というか閑散としている車内には俺たち以外には数人しか乗っていないわけで、席はスカスカでガラガラで、どこにでも好きなように座り放題といった体だった。これから向かうのは、確かにキレイな場所かもしれないが、特別に有名な観光地というわけでもないから仕方のないことなのかもしれないが。

そして俺たちは、二つ並びの四人がけのボックス席に三人と二人で分かれて座ることにしたのだった。やはり四人がけなのだから一つのボックス席に対して四人が座るべきなのかもしれないが、しかしそれでは一人が余ってしまうわけで、それでは余ってしまった一人が独りぼっちでつまらないというか、疎外感というか、せっかくみんなで来たのに寂しいではないか。だから、間を取って三人と二人に分かれるのである。そうすれば席を広々と使うことができるし、ふと思いついたときに一方から一方へと移動することも比較的容易ではないか。

そして今現在、俺は志穂と二人でかけているわけで、しかし志穂がずっと、くつを脱いで座席の上に膝立ちになって窓の外を眺める子ども座りをしているので会話が弾むわけでもなく、ほええとなっている志穂を眺めながら特に何もしないでぼお…っとして時間を過ごしているのである。まだ住み慣れた街を遠く離れたわけでもないの



でそんなに珍しいものがあるわけでもないのに、どうしてそこまで熱心に車窓に貼りついていられるのか、俺にはなかなか分からないのだが、まあ、志穂には志穂のなにかがあるんだろう。分からないことについては、言及しないのが一番だ。

しかし、隣のボックスでは女子三人がにぎやかにおしゃべりに興じているわけであり、そういう感じも少し羨ましかったりする。でも、わざわざ志穂を窓から引っぺがしてまでそんなことをするのもどうかと思うし、そもそもこうしてのんびりしているのだって嫌いじゃないし、別にこのままでもいいのかもしれない。

「ゆっきい、あれみてあれ！」

「？ どれだ？」

「あれあれ！ あのみどりのあれ！」

「緑？ 緑って、車か？」

「あれ、なんのくるま？ なんのくるま？」

「…、タクシー！」

「タクシー！」

「いや、さすがにお前、タクシーは知ってるだろ。なんにも知らないキャラを定着させようとししないでくれ」

「でも、タクシーのったことないよ！」

「タクシーは大人の乗り物だからな。大人になったら乗りなさい。俺たちはまだ子どもなんだから移動手段は歩きか走りかチャリでいいんだよ。あつ、あと電車とバスもありな。あんまり遠い場所だと行けなくなっちゃうから」

「ほえ、そうなんだ…。いつかのれるようになったらいいな」

「いつかな、いつか」

のんびりとした空気が、頭上を流れていく。ああ、穏やかだ。たまにはこういう感じもいい。いつもこれだと逆に疲れてしまうかもしれないが、しかし時たまであるならばいい。これは癒しだな。

「ゆっきい、しりとりしよ」

「え？ しりとり？ いや、別にいいんだけどさ、急だな、おい」  
「だってひま〜」

「なんだ、電車の外見てるのは飽きたのか？」

「あきちゃった〜」

「一分前まであんなに熱心に見てたのに、なにがあっただよ……。まあいいや、で、しりとりか？」

「そう。あのね、あたしが一つことをいったらね、そのさいこの「いや、しりとりは知ってるよ。ルールの説明とか別にいらねえって」

「しってるの？」

「知ってる知ってる。ポピュラーなゲームだろ。別にお前が考え出したゲームってわけでもないんだしさ」

「じゃあ、やろ！」

「別にいいけど、お前出来るのかよ、しりとりなんて。お前の知ってる言葉、めっちゃ少なそうんだけど、きちんと勝負になるのか？」

「なるより。あたし、いっぱいしってるもん」

「ほんとかよ。まあいつか、それじゃあ最初は」

「さいしよは、『ちよ〜ちよ〜はっし』の『し』！」

「なんで最初が丁々発止なの！？ 最初はしり通りの『り』とかでいいんだよ！ どうして最初でそういうの使っちゃおうとするかな！！ せっかくなにかっこいい言葉知ってるんだから、ちゃんとゲームの中で使いなさいよ！！」

「え〜、じゃあ、さいしよは『り』？」

「いや、別に不満なら丁々発止の『し』からでもいいんだけどさ……。でもお前、それじゃせっかくな知ってる言葉を一つ無駄に使っちゃうことにならね？」

「ん〜、じゃあ、ゆっきいがなにかかっこいいのからはじめてよ」

「かっこいいのから？ 俺は別にしり通りの『り』から始めてくれても一向に構わないんだけど……。でもまあ、そういうことなら…、

えっと、呉越同舟の『う』から始めるか」

「なにそれ、しらなくい」

「いや、あるからな。お前の知ってる言葉を基準にしたらしりとりが盛り上がらないんだよ。ちゃんと高校生のしりとりしようぜ」

「むずかしいことばしかつかっちゃダメなの？」

「いや、まあ、ちよいちよい挟んでいくくらいでいいんだけどさ。なんか簡単な言葉ばかりだとつまらないだろ、やっぱ」

「うん」

「じゃあ『う』な。ほれ、『う』から始まる言葉」

「えっとねえ、う、う…、『うどん』！」

「…、志穂、あのな、しりとりっていうのは、言葉の最後に『ん』がついたら負けなんだよ。今のは聞かなかったことにしてやるから、もう少し考えろ、な？」

「うゆ？ 『うどん』はダメなの？」

「とりあえず、他のにしとけ。悪いことは言わないから」

「えっと、じゃあ『うま』」

「そう、それならいいんだよ。気をつけろよ、最後に『ん』がついた言葉を言った方の負けなんだからな？」

「わかった」

「次は『ま』だよな…、『孫』」

「『まご』だから、『ご』？ てんてんは？」

「あ、『ご』でもいいよ」

「んとね、こ、こ…、『こま』」

「おっ、『ま』を続けてきたな。やるな、志穂。『マツモトキヨシ』」

「えっと、『しま』」

「まだ続くか。『祭』」

「『り』…、『リマ』」

「ペ、ペルーの首都か……。渋いところ攻めてくるな…、高校生っぽいぜ……。『マリンスノー』」

「? なにそれ」

「あるんだよ、そういう現象が。なんつうか、海の中でプランクトンが雪みたいに降る感じになるんだってさ。俺も実際に見たわけじゃないからよくは分からないんだけど」

「うみのなかでゆきふるの? すごい!」

「まあ、気になるんなら帰ってからネットでも調べてみればいいだろ。検索すれば動画でも画像でも出てくるんだろうし」

「あたしの知らないことが、いっぱいあるんだね!」

「世界はお前の知らないことばかりだよ。いや、それは俺もたださ」

「いろいろおしえてもらうと、びっくりするよね」

「お前は特に知らないことがいっぱいあるから、教えてる方もびっくりするけどな。っていうか、お前けっこう生きていく上で基本的なこと知らなかったりするんだよなあ……。今までどうやって生きてきたんだよ」

「? ものしらずでゆっきいをびっくりさせたことなんて、ないよ?」

「∴、お前は、そうやってなんでもかんでもどんどん忘れていくから、知識が蓄積されないんじゃないのか? っていうかお前、いろいろ覚えてるか?」

「おぼえてるよ?」

「それならいいんだけどさ……」

こいつは、もしかして脳の持っている記憶容量が極端に少なかったりするのだろうか。通ってる道場で脳の魔改造とかされてるのかもしれない。

「じゃあ、『の』だよ。えと、『のま』」

「『のま』!? なにその言葉!? 苗字!?!」

「え、わかんない」

「自分でも分からない言葉使ってるの、お前! それはなしだろ! 少なくとも自分は知ってて、ちょっとくらいなら説明できる言

葉使いなさいよ!!」

「でも、あたしがしらなくても、ゆっきいがしってるかなあ、って」  
「適当だな、おい……。しりとりってそんなふわっとしたゲームじゃねえぞ!! それぞれが持っている語彙の数を競い合いつつ、相手を巧妙に追い詰めていく思考ゲームのはずだろ! それを、相手の知識に頼っちゃダメだって!!」

「えー、でもむずかしいことはゆっきいにまかせたほうがうまくいくし」

「お前はいつからそういう打算的な思考ができる娘になったの! もっとバカでいなさいよ! 何も考えてないバカでいなさいよ!!」

「じゃあ、『のま』はダメなの?」

「お前がその『のま』について何か説明、というか弁解できるんなら別に構わないけど、出来ないんならダメだ。別の言葉にしなさい、っていうか、もしかしてさっきまでも今と同じように考えて、本当にその言葉があるかどうかは度外視して言葉を出していたのだろうか。二文字で、最初が俺の出した言葉の最後の文字で最後が『ま』になるように組み合わせる。」

「…、なあ、志穂、『リマ』ってなんだ?」

「ほえ? えとー、りま、りま…、どうぶつ?」

「それはリヤマだ」

「じゃあ、たべもの」

「じゃあ、ってなんだよ! ほんとに適当に文字並べてただけじゃん!! 俺がお前の使った言葉の意味を考えてやるって、どういう遊びだよ!!」

「えー、じゃあどうすればいいの?」

「お前の知ってる言葉を使えばいいんだよ。それが正しいしりとり遊び方だろ」

「じゃあねー、『り』だから、…『龍虎双牙滅殺掌波』!」

「なにそのかっこいい名前!! 技!? っていうか、お前、会話の中で漢字使わないキャラじゃなかったのかよ!」

「えっとね、こうやって、こうやって、はっ！　ってやるわざだよ」

「あゝ！！　やってみせなくていい！！　俺で試しにやってみようとかするな！！」

「ししよがやるとね、ビームみたいなのでるんだよ！　あたしはまだだせないけど！」

「一生出せなくていいからな。女の子は別に生身からビームとか打てなくてもいいんだから、変なことばかり出来るようにならないようにな」

「でも、ビームうてないと、とおくにいるてきをたおせないってししよが」

「別にお前を遠距離から狙撃してくるやつなんていねえよ！！　そんなことよりも、もっと出来るようになるべきことがあるだろうが！！」

「あっ！　バリア！」

「違うわ！！　バトル関連の系列から視点を外して！？」

「ゆっきい、つぎは『は』だよ」

「なんで話流そうとするの！？　今、けっこう大事なこと話してるよね！？　…、これについては、後でいっぱい言うことがあるからな、覚えとけよ！　『ハッキング』」

「『グミ』」

「『ミッキー・マウス』」

「『す』、は、えっと、『澄み渡る水面を揺らす一陣の突風波』！」

「なにその長くて詩的で情景描写調の名前の技！！　ウソだ！　そんな技はさすがにないだろ！！　このウソツキ！！」

「ウソじゃないもん！　ししよがいったもん！」

「っていうか、お前がそんな長い名前のものを暗記してるなんて信じられん！　今、適当に即興でつくったんだろ！」

「そんなことそでないもん！」

「…、たしかに。えー、じゃあそんな名前の技が、ほんとにあるっていうのかよ……。信じられねえよ……」

「ししょのオリジナルわざなんだって」

「オリジナルか……。お前のお師匠さんは、すげえセンスしてるんだな……」

「ししょにでんわできいてみる？」

「いや、お前がそんなにいうってことは、ほんとにあるんだろう。」

ここは納得してやる。『原敬』

「『し』…、『ジェノサイド昇竜ギャラクティックマグナム烈波掌』！」

「技名長えよっ！！　っていうか横文字iiiiiiii！！　なんなんだお前の通ってる道場はあああああああああ！！」  
俺たちのしりとりはまだ始まったばかりだが、しかしどうやら、志穂がその気らしいわけで、ノーガードの殴り合いになりそうな予感がする。俺としては、引く理由はないわけで、勝つまでやるだけなのだが。

まあ、いくら歴史ある流派であってもその技の数には限界が来るわけで、志穂は早々に種切れになることは目に見ているのだ。俺が、負けるわけがないではないか。

## 食べるか食べざるか、それが問題だ

「ゆっきい、お腹すいた」

「？　なんだよ、急だな……。まだそんなに時間経ってないんだし、もうちょつと我慢しなさいよ」

それから二十分ばかり俺と志穂はしりとりをしていたわけなのだが、そろそろゲームとしての体をなしていない感じになりつつある。それというのも、志穂は俺の使った言葉がしばしば分からないようにだし、俺は志穂の言った言葉のほぼ大半が分からないからだ。

いや、分からないと言っても、決して俺が志穂よりも圧倒的に無知というわけではない。俺はそこそこまともな言葉を基本的に使っているのだが、志穂はもはや普通の言葉を使うことを諦めて道場で仕込まれているらしい技名らしきものを連発するばかりで、俺の理解を拒むのである。しかもその技名は、やはり技名とは思えないようなもののばかりであり、しかしそれが本当にあるのかということについて確証を持てないのと同様に、それが絶対にならないということについても言うことができず非常にもどかしい思いを強いられるのだ。

「つていうかしりとりお前の番だよ」

「あきちゃった」

「えー、飽きたってお前……。ここまでやりたい放題自分勝手にやってきたのに、最後の最後まで勝手だな……」

「おなかすいちゃったからあきちゃった」

「飽きた理由が、お腹空いたから！？　お前、勝手すぎるだろ！！」

「でもおなかぺこぺこだもーん」

「ま、まあ……。そんなにお腹ぺこぺこだって言うんなら、別に俺もそんなしりとりで未練ないからいいんだけどさ……。でも昼飯はまだだからな、とりあえずおかしでも食べとけ」

いくらお腹が減ったと言われても時間はまだ十時半を少し回ったくらいで、昼飯の時間にしてしまうには少々早すぎる。こんな時間に



昼飯を食べさせてしまつては、確かに今この瞬間は志穂の空腹を収めることはできるかもしれないが、しかしまた晩飯の二時間前くらいに腹が減つたと騒ぐに決まっている。それならば今はもう少しの間我慢させて時間通りに昼飯を食わせた方がいい。

志穂は食い始めたら無尽蔵だからな、昼飯を始めてしまえば全部食うまで止まらないわけで。でもそのわりに食い溜めみたいなことができるわけでもないのだ。一日の食事のリズムがずれてしまうと、非常にめんどろなことになる。志穂の食事のタイミングは朝は七時、昼は十二時、夜は二十時の三回なのだ。それを忠実に守ることが志穂の面倒をみる上では一つ、重要なことになってくる。だから今は少しおかしを食べさせて空腹を誤魔化すにとどめるべきだろう。

「おかしたべていいの？ ごはんのまえに、おかしたべていいの？」

「ああ、別にいいぞ。今日は特別だからな。っていうか、みんなも食べてるんだから、気にしないでもいいんじゃないか？」

ご飯の前にお菓子を食べるのはダメ。それは俺と志穂とのお約束の一つだ。しかし普通の人のようにお菓子を食べた分ご飯が食べられなくなってしまうからではない。こと志穂に限って、お菓子を少し食べたくらいで食事がしつかり取れなくなるなんてことはないのだ。それならばどうしてお菓子を食べちゃダメなんて言っているかといえ、もちろん意地悪などでは決してなく、少しでも俺が目放すとお腹がいっぱいになるまでお菓子を食べてしまうのだ。志穂のお腹がいっぱいになるまでという、その量も相当のもので、あつという間に信じられないような量を平らげてしまう。そのお菓子消費はもちろん志穂の財布から出されるのだが、しかしときおり俺が出してやっていることもあって、つまり、あまり志穂にお菓子を食べさせてしまうと俺の財布の中身が削られてしまうのだ。

だからこそ、志穂にはあまりお菓子を食べさせてはいけないのである。俺はお財布の中身が大事だからな、出来れば志穂のお菓子代なんかで使ってしまったくはないのだ。

しかし今はそんなことを心配する必要もない。なぜならばここは電車の中で存在しているお菓子の量そのものに大きな制限がかかっているし、新しく買いこんでくることはできない。さらに志穂は俺の目の前にいるわけで、さすがにこの状況から俺の視線を振り切ってお菓子をありったけむさぼり食うこともできはしないだろうからな。「ほれ、このポッキーをやろう。一袋を、ゆっくり大事に丁寧に、一時間くらいかけて食うんだぞ。一時間経ったらもう一袋やるからな」

「わーい、ゆっきいありが、…、うゅ……」

「? どうした? いらなのか?」

俺がキャリーケースの中から取り出したポッキー（なんか細いやつ。旅行だから奮発して買った）の箱を開けると、その中から二つに小分けにされているうちの一つを引っ張り出して志穂に差し出した。これ一つでどれだけの時間を持たせることができるかが分からないが、今言った一時間は持たせてほしいところだ。とか思っていたのだ、しかしどうも様子がおかしい。素直に受け取ろうと手を伸ばしてきたと思ったのだが、しかしどうしてか袋に手を触れそうになったところでビタッ! と動きを止め、小分けの袋を俺の手の中に残したままスツと手を引いたのだった。

「チョコの気分じゃなかったか? 悪いけどあとはおせんべいしかないぞ?」

「そうじゃなくてね、あのね、えと、みんながしてたら、してもいいの?」

「みんながしてるんだから、いいじゃないか。別に気にしなくていいんだぞ、みんな食ってるんだから」

「みんながしてるからっておんなじようにしていいってわけじゃないって、ゆっきいまえにいった。…、いった?」

「なんで疑問形なんだよ。確かにそんなこと言ったような気がするよ。おぼろげにしか覚えてねえじゃん。っていうかお前、せっかく俺がいいこと言ったみたい流れになりそうなのに、それじゃ台無

しじゃねえかよ」

「でもあんましおぼえてないから」

「覚えてないなら無理して俺の言葉を引用するんじゃない。他人の言葉をわざわざ引用するのは自信を持って言えるときだけにしろ」

「はい。でも、みんながたべてるからってたべちゃダメでしょ？  
がまんしてえらい？ えらい？」

「あゝ、偉いぞ、えらいえらい」

「おなかすいたけど、ゆっきいがまだっていったから、まだおひる  
ごはんもがまんするよ。えらい？ いい子？」

「そうだな、我慢強くてわがまま言わないのはいい子だぞ」

「いい子だったら、なでなで？ なでなで？」

「…、ああ、そういうことか」

キラキラとまばゆい視線を、向かい合わせで椅子に座っているので  
いつもの上目遣いではなく、真正面から俺にぶつけてくる志穂。目  
力で負けることはないが、しかしいつもよりも強いキラキラが俺の  
目を貫いていく。はてさていったいどうしたのだろうか、と  
思ったが、しかし解答は至極簡単なものでしかない。

なんということはない。いい子でいることを殊更にアピールするこ  
とによって、俺に自分の頭を撫でさせようとしているのだ。こいつ、  
頭撫でられるの好きだなあ、くらいには思っていたが、まさかそん  
な姑息な手を使ってまで撫でられようとしてくるとは、俺が思っ  
ている以上に俺に撫でられることが好きなのかもしれない。まったく、  
別に誰が撫でても同じだろうに、かわいいやつめ。

だがどうしてか、そんな志穂の態度が俺の心に一陣、冷たい風を吹  
かせたのだった。志穂に懷かれてうれしくないわけではないが、何  
かが満たされない、どこか物足りない。どうしてしまったというの  
だろうか、と自分に問いかければ、その答えもつい先ほどと同様に  
すぐ見つかるのだった。

「お前、なんか最近とみに賢くなってきたな。いや、賢いっていう  
か、小狡いっていうか…、小賢しくなってきた。ああ…、ぴゅあ

ぴゅあだったころの志穂はどこに行っちゃったんだろうな……」

「ぴゅあぴゅあ？」

「そうだよ、なんにも考えてなくてさ、意味もなくバカみたいなことをしてさ……。そうやって頭撫でてほしいからって打算的にアピールしたりしないんだよ。いや、別に頭撫でてやるのはいいんだけどさ、でもそうやって明け透けにアピールされるとさ、なんか冷めるよな」

「えー、じゃあなでなでしてくれないの？」

そうやってかわいいアピールをすれば俺がすぐに引かかってホイホイ頭を撫でてくれると思っていたのだろう、志穂は若干不満げな声をあげるとプウと頬を小さく膨らませた。そして俺は、頭を撫でるのではなくその膨らませた頬に一本立てた人差し指を軽く突き刺し、志穂の頬に具律と指の先をめり込ませる。

まったく、俺のことをどれほどまでに安い男だと思っているんだか。俺のなでなでは、高いぜ？

「なんていうのかなあ、男心を分かってないっていうかさあ、こう、ね？ もっとズバツと男心くすぐってくれないと、いい気分で頭撫でてやれねえよ。霧子はそこらへんのところよく分かってるんだよな、こう、かわいいっていうかさ、庇護欲誘うっていうかさ」

「ひごよく？ ひごよくってなあに？」

「庇護欲っていうのはさ、あれだよ、守ってあげたい感じだよ。あと、可愛がりたいなって感じだよ」

「あたしもかわいいよ？ まもってあげたいよ？」

「そういうこと自分で言っちゃうのがダメなんだよ。分かってねえ、分かってねえなあ……」

「でもゆっきいはあたしのことかわいいうっていうよ？ ゆっきいがそういうんだから、そうなんだよ」

「俺がそうやって言うとしても、だよ。確かに志穂はかわいいかもしれないけどさ、でもだからってそこで『あたしはかわいいもの』とか言われたらさ、軽く気持ちがいちゃうんだよ。おしとやかさ

とか慎重深さが足りないんだって。そういうとき霧子だったら、『あたし、かわいくなんてないもん』って一步引くんだよな。そうやってうまく硬軟使い分けていかないと、厳しい女の子界で生き残っていけないぞ！　なあ、霧子？」

「にゅ？　幸久君、どうしたの？」

「霧子はかわいいな、ってこと」

「にゅう…、あたしはかわいくなんてないもん。しいちゃんの方がすっごいかわいいもん」

「聞いたか、志穂。あれがあるべき姿なんだよ。うまくバランス取っていかないとダメなんだよ。まあ、志穂にはちよつと難しいかもしれないけどなあ」

「むう…、むずかしくないもん！」

「なんだと！　お前でもそんな高等技術を使いこなすことが出来るっていうのか！？」

「できるもん！　たぶんできるもん！」

「ふむ…、しかし難しいぞ。霧子はあれでも、長年の修練によってあの立ち居振る舞いを身につけたんだ。あれは一朝一夕で手に入るものじゃないぜ」

「あたし、がんばるのとくいだもん！　がんばればできるもん！」

「よし、その心意気だけは認めてやる。まあ、志穂はかわいいし、きつと才能もある。いっぱいがんばって、立派な美少女戦士になるんだぞ」

「うん！　がんばるよ！」

「よし、いい返事だ！　よしよしよしよし！！」

「にゃー、ゆっきいー」

とか言って、けっきょく撫でてるし。いや、いいんだ。俺のスタンスは基本的に信賞必罰、いいことをしたい子にはちゃんとごほうびをあげなくてはならない。志穂はあざとい感じで俺のことを舐めてかかったかもしれないが、しかしそれでもいい子になろうと懸命な姿に偽りはないのである。それならば、きちんとごほうびをあげ

るべきなのだ。ポッキーとなでなでをあげてしかるべきなのである。決して、ぐちぐちといういろいろ講釈を述べてみたけどけっきょく志穂の頭をなでてやるのを我慢できなかったというわけではない、誤解してはいけない。

「…、三木、いったいなにをやっているんだ」

「幸久君、しいちゃんの髪がぐちゃぐちゃだよ？」

『二人とも、電車の中では静かにしないとダメ』

「姐さん、霧子、メイ。勘違いしてはいけない。これは必要な行為なんだ」

「三木、あまりこういうことは言いたくないのだが、お前が女子の髪に触れるのが好きということは承知しているつもりだ。しかしこういうった公衆の面前で、そうやって撫でまわすのはよくないことだとは思わないか？」

「んゝ、そんなにでも？」

『幸久くん、あんまりこういうところでなでするのはよくないと思う』

「えゝ、そうなのか？ 俺は別に撫でるなんて恥ずかしいことじゃないと思ってるから、特に構わないんだけどなあ……」

「ゆっつきいになでなでしてもらうのはきもちいよ」

「き、気持ちいい、だと……？」

「りこたんもやってもらえばわかるとおもうよ！」

「いや、私はいい。い、異性に髪を撫でられるなど、恥ずかしいではないか……」

「ほえ？ はずかしいの？」

「私にしてみれば、お前たちがどうしてそれを恥ずかしいと思っていないか、ということの方が不思議でならない。そういうことは小さな子どもがするようなことで、この年になってやることではないと、私は思うのだ」

「そんなことないよ、りこたん。なでなではいくつになってもいいものだよ！」

「そうなのか……？ と、とにかく私は遠慮しておく」

「そうなんだ、さんねんだね」

しかし、疑問なのはどうして志穂がそこまで俺に撫でられることを喜びとしているか、ということだ。確かに俺は長年霧子の頭を撫でてきているから、なでなでのキャリアだけ見たら相当のものかもしれないが、しかしそこに着実なテクニックが伴っているかといえば、それは俺自身には分からない、というのが現状だ。

つまり、俺は自分のことを自分で撫でることはできないから何とも言えないのだ。そんなにいいものなのだろうか。まったく、とんだテクニシャンだな、俺。

## 『Prism Hearts』第百話更新記念のお知らせ（クリック推奨）

拝啓 読者様

日頃、当方のオリジナル小説『Prism Hearts』にお読みくださり、作者のバカにお付き合いただき、誠にありがとうございます。作者の霧原です。今回は、本来ならば小説の続きを書くはずのこの場をジャックしまして、作者より深く御礼申し上げます。さて、本日の投稿で、ついにこの作品も第100話を迎えてしまうわけですが、相変わらず話の進みがゆったりもったりしており、読者様におかれましてはいらいらを募らせていらっしゃることではないかと存じますが、ご容赦のほどよろしくお願いいたします。しかし、登場人物たちは作品の中で生きているのです。彼らがどうしても動きたくてたまらない、ということであれば、作者としては、それがたとえどうでもいいことであっても書かざるを得ず、つまり話が進まないのは作者である私のせいではなく、登場人物たちの存在を尊重するが故の仕方のないことなのです。（最悪のいいわけですね）

さて今回、作者である私がわざわざ出張ってきたのには理由があります。まして、さっそくそれについてお話させていただこうと思います。第100話の更新にあたって、霧原は考えました。だらだらと続くこの作品世界に粘り強く辛抱強くお付き合いくださっている読者様に、せっかく切りのいい話数まできたのだから、何かしらお返ししていくことはできないものか、と。しかしお返しといってもネットを介してのつながりでしかないわけで、できることは必然的に非常に限られてきます。それに、作品を介してのつながりなのですから、作品に関することではなくてはおかしいとも思います。それでは何をするのが一番いいのでしょうか、と考え、結論として作品をよりよくしていくことが最大のお返しだろうなあ、という、案の定という



しかない地点に軟着陸いたしました。というわけで、作品をよりよくしていくために五問ほどアンケートにお答えいただければな、と思います。しかしそれだけでは何も読者様にいいところがない（というか、こちらとしても面白みがない）ので、キャラの人気投票も併せて実施させていただきたいと思います。お手数かと思いますがアンケートにご協力いただきまして、人気投票の方もよろしければ誰かに一票投じてくだされば幸いです。

日々是精進の心を忘れず、読者様には良質のバカ話をこれからも提供していくことができるよう頑張らせていただこうかと思っています。これからも『Prism Hearts』をよろしく願っています。

拝 霧原真

以下、アンケートになっております。基本的に選択方式になっていきますので、アンケート番号と回答を列挙して書いていただけると読みやすくてよいです。アンケートの下に模範解答例を書きますので、コピペして自分の回答に書きかえていただければ楽なのではないでしょうか。なお回答方法は、「小説家になろう」から本作に対して直接メッセージを送っていただくか、Twitterで@PrismHeartsに#Phtouhouとハッシュタグをつけてメッセージを送っていただくか、件名に「PH人気投票」と明記の上、song.of.crazy@hotmail.co.jpまでメールを送信していただければ一票として受付させていただきます。また、最後に必ずお名前（ハンドルネームでも可）を書いてください。人気投票の一人一票の原則を守るためなので、別に悪用するということはありません、そこまで気にしないでくださいね。

アンケート始まり

？話をもっとさくさく展開　した方がいい・しない方がいい・今のままでいい

？もっとラブコメっぽいことを　したほうがいい・しなくていい・その他（その他を選択なさる場合は具体的にどのような方向に行ってほしいかを書いてください）

？一回の更新文量が　多い・少ない・ちょうどいい

？毎日更新されると付いて行くのが大変　はい・いいえ

？好きなエピソード、シリーズがありましたらお願いします

？好きなキャラクターをお願いします（一位と二位で二人）

一位のキャラに二点、二位のキャラの一点をつけて集計させていただきます

？なにか一言メッセージでもございましたら……

模範解答例（メールの場合）

件名…PH人気投票

宛先…song.of.crazy@hotmail.co.jp  
本文…

？した方がいい

？しなくていい

？少ない

？はい

？「じゃんけん」シリーズ

？一位　天方霧子　二位　坂倉弥生

？頭悪いのも大概にすべき

HN 霧原真

模範解答例（Twitterの場合）

@PrismHearts ？した方がいい？しなくていい？少ない？はい？「じゃんけん」シリーズ？一位 天方霧子 二位 坂倉弥生？頭悪いのも大概にすべき #Phtouhyou HN 霧原真

それでは、ひとりでも多くの方のご参加、お待ちしております。  
アンケートの募集期間は三月一杯、結果発表は漸次ということにさせていただきます。アンケートでトップのポイントを獲得したキャラについては、なんらかボーナスのようなものも考えておりますので、みなさんのお力でお気にのキャラをスターダムに押し上げてくださいませ。たぶん作品内で出番が増えるか、絵師の友人に頼んで絵にしてもらうかのどちらかになると思います。

重ね重ねになりますが、『Prism Hearts』を今後ともよろしく願います。作者は、読者様の応援を糧に書いています。

## 駅に着いてもかしましく

「ようやく着いたか……。あー、電車長いな、やっぱ……。まあ、分かってたことだけど」

そして俺たちは、ちょうど午後一時を回ったところ、当の目的地である駅へとたどり着いたのだった。電車からいの一歩に飛び出していた志穂に続いてホームへと降り立った俺は、頭の上で手を組んでクツ、と座りっぱなしで凝ってしまった背筋を伸ばす。

陽差しはポカポカと暖かく、なんとなくこの地も俺たちのことを歓迎してくれているような気分だ。この旅行の間もずっと、こんな風にいい天気が続いてくれればいいなあ。

「まったくだな。しかし、長く乗っていたからこそちょうどいい時間に昼食を済ますことができたのだ、悪いことばかりではないだろう」

「でも、みんなといっぱいおしゃべりできて楽しかったよ。幸久君も楽しそうだったよね」

そしてそれについて姐さん、霧子、メイの三人もホームへと続々と降り立っていく。長時間電車に乗っていたが調子悪そうにしているやつはいないし、ホッと一安心といったところだろうか。去年は、心構えが足りなかったからか、霧子が少し調子悪そうにしてたし、少し心配だったのだが、よかったよかった。最初から体調悪くなっていたりしたら、せつかくの楽しい旅行にも暗雲立ちこめるというものだ。

「まあ、俺はずっと志穂と遊んでただけだな」

『そういえば、あだし、ご飯のとき以外幸久くんとあんまりおしゃべりできなかった』

「確かにそうだな。三木は皆藤と遊んでばかりだった。何人でも旅行に来ているのに、一人とばかり遊んでいるというのはあまり感心しないな。…、い、いや、決して私の相手をしなかったからこのよ

うなことを言っているわけではないぞ、勘違いするな」

「いや、俺だってずっと志穂とばかり遊んでるのもどうかなあ、とは思ってたんだ。でもまあ、なんつうか結局ずっと志穂と遊んじやったんだよな。悪かったとは思ってる。でもさ、別に三人とも混ざってきてくれても全然よかったんだぜ？　っていうか、みんなはみんなですっとおしゃべりしてたじゃん。俺にも絡んでくれよ」

「私たちは、三木と皆藤がずっと遊んでいたからずっとしゃべっていたのだ。なあ、持田」

『幸久くんがかまってくれないから、みんなですねてた。いじけてたの』

「め、メイちゃん…、その言い方は変だよ……」

「そ、そうだ、私は拗ねてなどいない。そ、そもそも、どうして私が拗ねなくてはならないというのだ。それにいじけてなどいない。

私は天方と持田としやべるのはとても楽しかったし、とても有意義な時間だったと思っているぞ」

「そ、そうだよ、メイちゃん。メイちゃんとおしゃべりするのめすっごい楽しかったよ。幸久君とおしゃべりするよりも楽しかったよ」

「そうだぞ、持田。三木などと遊ぶよりも、遥かにずっと楽しかった。三木とは一年のときからの付き合いだが、先ほどの時間よりも楽しかったことは一度もなかったぞ」

「姐さん、そこまで言うことはない。っていうか、そんなに俺といっしょにいて楽しくなかったってアピールするのはやめて…、心が碎けるから……」

「み、三木は、自分勝手な男だ。気が向いたときだけこちらを向き、それ以外のときは見向きもしない。そうやってこちらに気を持たせて、何人もの女子を手玉に取る悪い男だ」

「りこちゃん…、さすがにそこまで言うことはないよ……。幸久君にも、いいところ、いっぱいあるよ」

「たまに思うんだけど、姐さんは、俺のこと嫌いなのか？　たまに言うこと厳しすぎるよね……？　俺だって、けっこうがんばって生き

てるんだぜ……?」

「じ、事実だ。お前は将来、きっと女に刺されて死ぬ」

「なにそれ予言!? 怖いこと言わないで、姐さん!」

「三木、お前は異性に対する立ち居振る舞いが玉虫色過ぎる。いつか刺される、絶対だ」

「それは、あの、姐さんが刺すんですか……?」

「わ、私はそのようなことはしない! そのような法に反するようなこと、出来るはずがないだろう!」

「…、それって、俺を刺すのが法に反してなかったら実行することも辞さないっていう……?」

「ち、違うぞ、そういうことではない! 邪推をするんじゃない! 私がお前を刺して、どうするっていうのだ。というか、私は刃物など使わない!」

「拳でくるの!? 殴殺するの!? 怖い!」

「きよ、距離を取るな! 刃物を使わないというのは、ただ主義主張の話だ! つまり、わ、私はお前のことなど、なんとも思っていないが、そうでないものが将来現れたならば、そうなるとも限らない、というだけだ。お前は、ただでさえ誤解させるようなことを平気で口走るのだから、気をつけねばいけない、ということを行っている」

「誤解させるようなことなんて言わないって。俺はいつだって公明正大、ウソも誤魔化しもそんなには言わないぜ」

「…、そういうまっすぐすぎるところが、誤解させると言っているのだ……!!」

「…、姐さん、怒ってる……?」

「怒ってなどいない! 私はお前のことを心配してだな……!!」  
そんなこと言われても、どう見ても怒ってるか、あるいはいら立っているようにしか見えないわけで。うう…、こう強い語調で異性に物を言われると晴子さんのことを思い出してしまうから、どうしても萎縮してしまう……。なんか、口答えしちゃいけないような気が

してくるんだよな…、どうしてか……。そう考えると、晴子さんの調教の成果っていうのは凄まじいものがあるよな。ここまで俺の無意識を縛ってくるんだから、並大抵のものじゃないと断言できるだろう。

しかし姐さんはどうしてそんなに怖いことを言ってくるのだろうか。女に刺されるなんて、そんなのは何人もの女の人を弄ぶような男が言われるようなことであって、俺には当てはまらないではないか。現に俺には彼女の一人もいたことがないし、そもそも俺にもてあそばれている女の子なんて一人もない。俺なんて、女に刺されることから是最も遠い男の一人といっても過言ではないではないか。…、それは流石に言いすぎかもしれないが、でも、俺が女に刺されるなんて、そんなことあるまいて。

もし本当に刺されるようなことがあるとすれば、それはきつと、俺に対して何らか我慢の限界を迎えた晴子さんのいら立ちによるだろう。ぶっちゃけ、それなら俺が完全に悪いに決まってるんだから、特に後悔はない。というか、晴子さんに刺されるなら、それは師匠からの愛の鞭の延長のようなものである可能性が高いわけで、口答えすることすら間違っているのだ。そもそもそんなことをされる時点で俺が悪いのだから、晴子さんを責めるなんてありえないのである。

「り、りこちゃん…、落ち着いて、ね……？」

「あ、ああ…、すまない。とにかく、お前は少し己の行動を立ち返ってみるべきだ。分かったな、三木」

「わ、わかった。とりあえずよく分からないけど、いろいろ気をつけてみる」

「でも、しいちゃんはいっしょに遊んでいて楽しいもん、しょうがないよ。あたしたちもしいちゃんみたいに楽しい子になれば、もっと幸久君が遊んでくれるのかなあ……」

『しほちゃんみたいになるのは、大変。全然計算してないから』  
「っていうか、なんだよ。ちよつと俺が志穂と遊んだだけでそんな

こと言うなよ。俺は、霧子とだってメイとだって姐さんとだっていつも遊んでるだろ。今日はたまたまそれが志穂の番だったってだけだ」

むう、いったいどうしたというのだろうか。今日に限って、みんなやけに絡むじゃないか。確かに俺は電車の中で志穂との遊び――しりとりに始まり、あっち向いてほい、叩いてかぶってじゃんけんポン等々を経て弁当を食った後は以心伝心ゲーム（相手が今なにを考えているかを推理して当てるという不毛極まりない遊び）に興じていたりした――にのみ集中していたかもしれないが、しかしそれは、確かに俺が悪いのかもしれないけど、別に他の人とそうしていたことだって以前になかったわけではなく、そのときはなにも言わなかったじゃないか。今回だけ。どうしてそんな意地悪を言うんだい。

「霧子とは常日頃遊んでるし、姐さんには風紀の用事がないときは付き合わせてもらってるし、メイとは学校にいる間はけっこうつるんでるじゃん。そのときはなにも言わないのに、どうして今回だけはそんなこと言うの」

『幸久くん、しほちゃんといちゃいちゃしてた』

「してないよ！？」 さっきの状況を見て、どこからそんな言葉を引っ張り出してきたの！？」

「いや、確かにそうだな。私たちが入り込みづらい感じは、間違いないで出していた。それが具体的にどのような行動によって感じさせられていたのかは言うことができないが、しかし確かにそう感じた。故に私たちはこのように口を出しているのだ。いつも私たちに対しているときは、何かが違う」

「違うくないよ！？ ほぼだいたい同じ感じに接してた、っていうかむしろ雑だよ！ 志穂の扱いなんて、霧子の扱いに比べれば10倍くらい雑だよ！！」

「そして私の扱いは、皆藤の10倍雑だろう。つまり、私の扱いは、天方の扱いの100倍雑だろう」

「そんなことないよね！？ 俺、姐さんのことすっげえ大事に思っ



てるよ!?! 霧子の100倍も雑に扱ってないよ!?!」

「そうやって、無理に言葉を重ねると、誤魔化している感じがより強まって、とても信用ならない」

「俺は、なにも誤魔化してないよ! 俺を信じてくれよ、姐さん!」

「お前の言う『信じろ』という言葉。お前が言うと、どうしてかそうしようという気が起きない。そうか、これが人を信じられないという感情か……」

「姐さんの中で、俺の評価が地に落ちてる!?! 俺はこんなに姐さんのことが大好きなのに!?!、どうして信じてくれないの!?!」

「そ!?!、そのようなことを言われても私は騙されないぞ!?!……!?!」

「そうやって、言葉巧みに人を騙すのがお前のやり口なのは、もうとつくに分かっている!?! 気やすく、好きとかいうんじゃない!?!」

「えっ!?!、あつ、ご、ごめんなさい……」

「異性に対して、そうやって安い言葉をかけるのは、止めるんだ」

「き、気をつけます……」

「なんか、怒られちゃった……。これから口をきくときは気をつけなくては……」

「!?!、じゃあ、俺はどうすればよろしいでしょうか!?!……? 何がいなかったのかはいまだによく分かっているんですが、なんとか、なんでもいいから挽回のチャンスを与えてはくれませんか?」

「何がいけないのかは分からない。でもなにかがいけないらしい。それなら何とかして何かするしかない。でも何をすればいい? 分からないならば聞くしかない。教えてくれるかは分からないけど、ここは勇気を持って聞いてみるべきなのだ。」

「まずは、なにがいかなかったのかを理解することが先決だと思うが? なんでもかんでも、人から聞けばいいというものではない。自分のよくないところは自分で気づかなくてはまったく身にならない。つまり、今までの己を省みて、なにがいけないかを理解するんだ」

「!?!、がんばります……」

それが分からないから聞いてみたのだが、しかしどうやら今回姐さんは俺にそれを教えてくれる気はないらしい。他人に聞いてばかりではなく少しは自分の頭を使え、という意見にはまったくもって同感なのだが、しかし自分が言われるとこれほど辛いこともないな。考えても分からないから聞いているのに、考えろって切り捨てられるのはけっこうキツイ。これから志穂に同じこと言うの、控えるようにした方がいいかもしれない。

とりあえず、今までの自分について少し考え直してみるか。そうしたら姐さんが言っていることも分かるかもしれないし、何か俺自身も見落としている俺の欠陥みたいなものも見つかるかもしれない。というか、見つけられないと姐さんに顔向けできないから、とにかく何かしら見つけられるようにがんばることにしよう。

「それで三木、私たちはこの後はどうしたらいい。確か去年は歩いて直接旅館まで向かう、ということとはなかったように思うが」

「ああ、えっと、去年と同じで車回してくれることになってるから。駅前のロータリーまで出れば、たぶん見つかると思う」

「そうか、それではそこに向かうことにしよう。いくらこちらが客とはいえ、迎えに車を回してくれた人を待たせてしまうわけにはいかないからな」

「りこたん、でんしゃのつぎは、くるま？」

「ああ、そうらしい。去年も乗っただろう、白のミニバンだ。覚えていないか？」

「んー、あんまおぼえてないー」

「メイちゃん、車酔ったりしない？」

『平気。乗り物酔いはしないから』

「そっか、よかったよ。気持ち悪くなっちゃう人は、ちょっと乗っただけでもダメっていうから」

『きりちゃんは平気？』

「うん、平気だよ。あんまり長い時間乗っているとダメなんだけど、少しの間だったら全然へっちゃら」

「霧子は、車の中に三時間以上拘束されるとダメなんだよな。小学校のバス遠足とか悲惨だったの、よく覚えてるぞ。顔、真っ青にしてさ、うわ言みたいにきもちわるいきもちわるいつて呻いてるんだ。あれは、傍から見てるだけでも心が折れそうだった」

「にゅ…、それは、ないしょだよ、幸久君…」

「そうだっけ？ あゝ、ごめん、じゃあ、聞かなかったことにしてくれ」

「車酔いは体質のようなものだ、仕方があるまい。まあ、それが分かっているのなら無理をすることもないだろうし、しっかり気をつけていれば問題あるまい」

「車だけダメなんだよ。飛行機は乗ったことないから分かんないけど、他はみんな平気」

「そうか、それならば車だけ避けていれば問題ないのだな。よかったな、天方」

「うん、これで電車にも乗れなかったら、遠くにいけなくなっちゃうもん」

「霧子は、いろんなものがピンポイントでダメだからなあ……。乗り物は車だけダメだし、フルーツはブドウだけダメだし…、つと、あれか。あの車だな、たぶん。去年見たのと同じやつだ」

そして俺たちは、駅の構内から一步を踏み出し、ようやく真の意味で目的地へと到着したのだった。向こうのロータリーの入口あたりに、どうやら俺たちがこれから乗るであろうミニバンが停車しているのが見える。

時間的には、こちらが指定した到着時間から五分とずれていないから、おそらくそこまで待たせたりはしていないだろう。さて、これでこの旅行、いろいろ考えたりするのはおしまいだ。あとはもう右から左からやってくる接客をただ受けているだけでいい。何も考えずにゆっくりすることができる時間の、なんと喜ばしいことか。今回の旅行でも、おそらくそれを存分に満喫することになるだろう。

## 七人がけに、七人乗る

「三木様、心よりお待ち申し上げておりました！ このたびも、当館をご宿泊にご利用いただき、真にありがとうございます！ 昨年はどうしてもお部屋をお一つしか用意できずご迷惑をおかけいたしました、今回はしっかりご要望いただきましたように二部屋ご用意させていただきました。皆様のご滞在が最高のものとなるよう、心づくしさせていただきますので、ごゆるりとなさってくださいませ」

「ど、どうもです。今年もよろしく願います」

改札を出て見覚えのある白のミニバンに向かってテクテクと進んでいくと、少し小柄で中肉の男性（俺よりもだいたい10センチくらい背が低い）がその中から切れのいい動きでシュバツと飛び出してくいて、早口でまくし立てるように歓迎の意を表明したのだった。この人は、確かこれから泊まりに行く旅館の支配人みたいな人で、家と家とのつながりをとても大切にする古き良き思想の持ち主であり、昔、三木の家に世話になったとかで俺たちの宿泊に関してもなにかと口をきいてくれた人なのだ。

というか、そうやって口をきいてくれないければこの忙しい時期に二部屋も確保はしてくれないだろうし、今回ばかりは自分がこの家に生を受けたということに感謝をするべきなのかもしれない。まあ、こんなときでもなければ生まれを生かすことなんてできるはずがな。いんだから、少しくらいは利用してもいいのかもしれないが。考えようによっては幸運も才能であり、生まれも才能なのかもしれない。だったら使ってもいいじゃん！ 利用したって、別にいいだろう！

別に誰に迷惑をかけるわけでもあるまいし。

しかしよく考えれば、もっと普通の家に生まれていたとすれば、もっと普通に波乱も何もない平穏な人生を送ってきていたのだろうし、そちらの方が楽だったのかもしれない。もちろん三木の家に生まれ

たからこそ出会えた人もいるし、三木の家に生まれなければ出来なかったこともあるには違いない。でもそれよりも、三木の家に生まれたからこそ背負いこんだ問題とか、因縁とか、面倒事の方がはるかに多いわけで、こうやってたまに便利にその名前を利用するくらいじゃないと割に合わないというか、あからさまに損をしている気すらしてくるのだ。

「それではさっそくご案内いたしますので、どうぞこちらの車に乗りになってくださいませ。七人がけですので少々手狭に感じられるかもしれませんが、10分少々ですのでご容赦いただきますようお願いいたします」

「ええ、平気ですから気にしないでください。それよりも、あの、こちらの方は……？ 迎えの車を回してくれるだけでよかったのに、わざわざ仲居さんまで連れてきてくれた、んですか……？」

「あつ、はい、彼女は、本日より三日間、皆様方のお部屋付きの世話係をさせていただきます者です。一刻も早く自分の専属の方にお目通りしておきたいと言いましたので、失礼とは思いますが連れて参りました。まだ当館に入って二ヶ月少々しか経っていませんがベテランの仲居衆にも引けを取らない仕事ぶりで、なによりも仕事熱心なところがすばらしい若手のホープでございます。今回は三木様方のお部屋係に熱烈に立候補をしましたので、異例ではありますが、先代よりの大切なお客様である三木様のお部屋係に抜擢させていただきました。何かと至らぬところもあるかと思われませんが、当館の全力を挙げてフォローさせていただきますので、どうかご容赦くださいいますよう伏してお願いたします」

「そんな、気にしないでください。こっちとしては部屋を二部屋ねじ込んでくれただけでも感謝しているんです。お部屋付きが誰かなんてことで何か言ったりはしませんよ。というか、去年来たときも、隅から隅まで最高のサービスをしてくれたじゃないですか。こちらで働いている方であるということは、そういう最高のサービスをすることが出来る人であるってことでしょう。そうすることが出来る

からこそ、この人をあえて拔擢したんだ。謙遜も、過ぎると相手を貶めることになりますよ」

「はい、まったくおっしゃる通りです。いやいや、三木様は、お若いのにしっかりしていらっしゃる。私などもう頭も禿げあがる年だというのに、お恥ずかしい限りです」

「それに、少しくらいドジったとしても、こんな美人の仲居さんにされるんなら、男としては悪い気はしないですよ、はは」

「本当に、三木様はお若いのに分かっていらっしゃいますなあ。しかしご期待に添えず申し訳ありませんが、彼女はするようにドジをすることはありません。仕事はもちろん、立ち居振る舞いも完璧です。仲居としての能力は、私も認めておりますので」

「だから先代からの上客の専属につけることもできる、ってことですか。まったく素晴らしいですね、どこでそんな完璧な仲居さんを見つけてきたんだか」

「それは、よろしければ本人からお聞きになってくださいませ。お恥ずかしながらこちらにも詳しいところは把握していません。飛び込みで、なにも言わずに働かせてほしいとのことでしたので」

「それで、本当に何も聞かずに働かせてるんですか？ それでいいんですか？」

「いえ、もちろん、ただそれだけでしたらお引き取りいただくところなのですが、当館の古くよりのお客様の縁者であるらしく、そちらの方からのご連絡をいただいてしましまして、仕方なく、といったところです。しかし、彼女自身非常に有能ですので、働き手が増えて助かっているのは確かなのです」

「なんか、大変そうですね、いろいろ」

「いえいえ、ご心配いただくようなことはございません。三木様がごゆるりとお過ごしいただけますよう心を尽くさせていただきますので、お気軽にお声をおかけくださいませ。それでは当館までご案内いたします。三枝くん、ご乗車のお手伝いを」

「はい、それではお荷物を後ろのトランクにどうぞ」

「まえにすわってもいいですか？」

「ええ、皆藤様、どうぞお座りください。ですが、申し訳ありませんがシートベルトだけはお願いしますね」

「はい」

「これは二列目に三人、三列目に二人が乗るということなのでいいのでしょうか」

「はい、風間様、そのようにお願いいたします。その際、私も二列目か三列目かのどちらかにお邪魔させていただいても、よろしいでしょうか？」

「三枝さんは、俺と三列目に座ってください。ちよつと聞きたいことがあるんで」

「よ、よろしい、のですか……？ お隣に失礼して…、よろしいのですか……？」

「？ は、はい。少し聞きたいことがあるんで、よかったらお願いします」

「それでしたら、はしたないですが、お隣に失礼させていただきます。本来なら、控えている存在であるべきではありますが、ですがお誘いくださるならば……」

三枝さんは、どうしてかそんなことを言ってもじもじしているのだった。でもまあ、別に俺の隣に座ることに対して否定的っていうわけじゃなさそうだし、気にしなくてもいいのかもしれない。…、たぶん恥ずかしがり屋なんだろう、うん。

「じゃあ、あたしたちが三人で二列目に座ればいいのかな？」

『幸久くん、聞きたいことってなに？』

「べ、別に大したことじゃないって。メイもほれ、二列目に座った座った」

『あやしい』

「怪しくはない、まったく怪しくなんてない」

『二回言った。怪しい』

「大事なことから二回言ったんだよ。怪しくなんてないぜ。ほら

ほら、姐さんも霧子も乗った乗った」

「三木、私が目の前に座っているということを忘れるんじゃないぞ。振り向かなくても音を聴くことも気配を察知することもできるんだからな」

「姐さんは何を警戒してるの!? 何もしないよ!」

「なに、転ばぬ先の杖、というだろう。私はただ事実を口にしたいだけ」

「どうしてここでその事実を再確認するのか、ってことが知りたいんだよ。いったい、俺は何に転ぶんだい」

「それは、お前が一番知っているのではないか? 三木」

「姐さんが考えているであろうことはなんとなくわからないでもないけど、でもそれは違う。違うと思う。…、違うんじゃないかなあ……?」

「分かっているならいいんだ。まあ、流石のお前であつても友人の同乗している車の中でおかしなことをしようとはしないと信じているがな」

「俺は、何をすると思われてるんだ……」

しかし、姐さんにいかに疑われたとしても、俺だって徒歩で旅館まで向かうわけにはいかないわけで、この仲居さんに聞いておきたいこともあるわけだし、この車に乗り込まないわけにはいかないのがある。というか、そもそも姐さんが心配しているようなことはしないわけで、心配無用の一言に尽きるのだ。いや、姐さんが何を心配してるかってことは、けっきょく俺が想像しているだけなのだから、正確に何を指しているかは分からないのだが。

でもたぶん、そんなことはしない。俺はただ少しおしゃべりさせてもらうだけでしかなく、姐さんの心配事に抵触することはないと思う。姐さんの心配事はきつと、俺がこの仲居さんにセクシャルなことをするのではないか、とかに違いないし、そんなことするはずない。確かにこの仲居さん、かなり美人でスタイルもいいかもしれないけど、でもだからって危険な行為に及ぶなんてことはないのだ。



そんな理由で俺が女性に手を出す男だったら、晴子さんとか雪美さんとか弥生さんとか歌子さんとか百合先生とかに、もうすでに手を出しているに決まってる。俺は、己の欲望に簡単にすべてを委ねてしまうことができるほど勢いに充ち溢れた人間ではない。勢いなんて言うものは、俺にもっとも足りていないものの一つではないか。

「それでは、出発させていただきます」

「しゅっぱーっ！ おー！」

そして積載人数ギリギリまで乗客を乗せたミニバンは、運転席に座った支配人の合図に続いて、ちよつと厳しいツスとでも言いたげなエンジン音を響かせながらその車体を前へと進めたのだった。エンジンがかなり音を重苦しかったりするところとか、エンジンの回転音の大きさとか、特にそのがんばりを如実に感じることもできるだろう。無責任にがんばれということしかできないが、車ががんばれ。

「私は、三枝弓子>さえぐさ ゆみこくと申します。ふつつか者ですが、本日よりよろしくお願いいたします」

「は、はい、えっと…、三木幸久です」

「はい、よく存じ上げております……。こうしてお姿を直接拝見することができるよう、長らくお待ちしておりますか？ ……」

「…、三枝さん、俺のこと、知ってるんですか？ その、今いったこと、そんな風に聞こえたんですけど……」

「はい、よく、存じ上げております……。ああ…、三木様、お会いしたかった……」

「ぬあ！？ 三枝さん！？」

「えっ……？」

「三木！ 貴様！ 何をした！」

「姐さん、察知するの早いよ！？」

どうしてか、三枝さんは、ぽろぽろと涙をこぼしていた。まだ、ただ名前を教えただけだというのに、不意にこぼれた感情の雫はとめどなく、頬に描かれた一筋の軌跡をなぞり続ける。どこのポイ

ントで感情が高ぶってしまったのか、俺には把握することができなかったので、ろくにフォローを入れることもままならない。

「三木！ どうしてこんな、一言二言交わただけで女性に涙を流させているんだ！　なんでそんなことにばかり才能を発揮するんだ！！」

「そんな才能いらないよ！？　女を泣かす才能があるなんて、そんな人間のゴミだろ！？」

「あ…、も、申し訳、ございません…！！　あの、目に、ゴミが入ってしまったて！　すぐに流れてしまうと思いますので…！！」

「へ？　…、ああ、目にゴミがね！　そりゃ涙も流れるわな！　姐さん、目にゴミ入っちゃったんだって！」

「そうか、それならばお前が悪いというわけではないようだな。早とちりをした、済まない」

「でも、そういうことなら大変だ。姐さん、目薬持ってる？　さしてあげたら早く流れるだろ」

「目薬か…、私は持っていないが、持田は持っているか？」  
『持ってる。ちょっと待って』

「な、泣かないでください、三枝さん。よく分からないけど、泣かないで」

「す、すみません…、申し訳ございません…！」

三枝さんが突然泣き出してしまったことについては、とりあえず目にゴミが入ってしまったということらしいが、本当にそうなのだろうか。なんか、涙をこぼしているときも痛がっている感じはしなかったし、もしかして何かあるのか？　でも俺、この人に会ったことないし、俺に関連する何かが原因ってことは、さすがにないと思うんだけど……。

現に、この人がどうして泣いてしまったのか、まったく心当たりがない。んー、やっぱり何かあると思ったのは俺の勘違いで、目にゴミが入っちゃったのかなあ……。そう考えるのが、やっぱり一番しっくりくるんだよなあ……。

どうやら、俺が彼女に聞かなくてはいけないことが、もう一つ増えてしまったらしい。

### 三木くんの家庭の事情

「先ほどは、本当にお騒がせしました……」

メイの目薬を借りて三枝さんにさしてあげると、間もなく流れる涙は収まったようで、三枝さんは目元を軽く拭いながら申し訳なさそうにそう言った。

「まあ、仕方ないですよ、目にゴミが入ったら誰だって涙が出るものですから。それよりも、もう目はだいじょぶですか？ 必要だったらもう一回目薬をさした方がいいですよ」

「いえ、もう平気です。ご迷惑をおかけいたしました」

「気にしないでください、困ったときはお互い様ですよ。っていうか、俺、女の人が涙流してるのを見るの苦手なんで、それを見ないで済むならなんでもしますよ」

「本当にお優しいのですね、三木様」

「いえ、ただの習慣ですよ。メイ、目薬さんきゅな」

『別にいい、平気』

「にゅ、仲居さん、目、痛くないですか……？ 目にゴミ入ると、ほんとに痛いから……」

「ええ、平気です。ご心配をおかけしまして、申し訳ございません」

「ほら霧子、ちゃんと前向いてないと気持ち悪くなるぞ。お前はただでさえ自動車にだけは弱いんだから」

「にゅう、平気だもん。ちょっと後ろ向いたくらいで気持ち悪くならないもん」

「こっちは見てないでいいから、志穂を見習って前に注目してなさいよ。あんまり見られたら恥ずかしいでしょ。あつ、キレイな教会があるぞ、霧子」

「えっ、ほんと？ どこどこ？」

「前の、ほら向こうの、左側」

「ほんとだ……、去年は気付かなかったなあ……。ねえねえ、あと

で見に来てもいいかな？」

「別にいいぞ。街の中をぶらぶらするとき、ついでに寄ればいいだろ。気に入ったんなら、ずっといてもいいからな、しばらくしたら迎えに来てやる」

「うん、幸久君、ありがと……」

「…、姐さん、シートベルトしてるのにそんな風に体をこっちに向けてると、具合悪くなるぜ？」

「心配するな、私の三半規管はそうにやわではない。むしろこれくらいの方が鍛えられてちょうどいいくらいだ。三木こそ、気持ち悪くなつてはいけない、黙って前を向いていくべきだ」

「姐さん、さっきは俺が何かしたから泣いてしまったわけではないんですよ。つまり、俺が泣かしてしまったわけではないのです。です、そんな風に姐さんに監視をされていなくても、心配はないんです」

「私は、別にお前の様子を監視しているわけではない。ただ後ろの風景を眺めているだけだ、気にするな。しかし、見られているわけでもないのに見られている気がするとは、三木の方こそ自意識過剰なのではないか？」

「ウソだよ、姐さんめっちゃ見てるじゃん……。目が怖いよ、マジで……。完全にロックオンしてるよ、俺に……」

「なにか言ったか、三木。後ろめたいところがあるならば、お前こそ手を膝に置き、微動だにせず前を向いて座っている。車が急に揺れて舌を噛んでしまったのは危険だ、口を開くのも可能な限り慎んだ方がいいと思うが」

「風間様、本当に目にゴミが入ってしまっただけで、三木様が何かをなさったというわけではないのです。お心配りをしてくださるのはとてもうれしいのですが、お友だちどうしてそのようにギスギスしてしまったてはせつかくのご旅行が台無しになってしまいます。こは、私に免じて仲直りをなさってくださいませ」

「…、まあ、被害者がそういうならば、こちらとしてはこれ以上追

及することはできないのですが……。ですが、本当に何かをされたときは声をあげてください。私の耳はそれを聴き逃しはしません」

「姐さん、俺はなんもしないよ……。信じてくれよ、ちょっと三枝さんに話を聞いただけなんだからさ……」

「私は、私自身がこの目で見えたものしか信用しない。そして私はお前が何かをしたという場面を見てはいないが、しかし同じように何もしていないと確信することができるような場面も目にしていない。それならば悪い方を想定しておくのが適切な判断だ。ここは引き下がるが、しかしまた同じようなことが起こった場合は強硬手段に出るしかなくなるかもしれない。そのところ、ゆめゆめ忘れるな、

三木」

「姐さんの脅し文句、素直に怖いよ。論理的に追い詰められてる感じがすごいよ」

メイはそもそも俺が後ろの様子にそれほど興味を持っていないみたいだし、霧子はキレイな教会に目を奪われているし、姐さんには何とか納得してもらって前を向いてもらった。これで一応のところ、ようやく俺は三枝さんと落ち着いて話をするができるというものだ。

まあ、別にみんなに聞かれて困るようなことを聞こうとしているわけじゃないし、そもそも話に聞き耳を立てられていたら聞かれてしまう距離なわけで、こうして注目されるのを避けたのは単に俺の羞恥心によるところである。こんなことを気にしている、というか、警戒しているということを、みんなに知られてしまうのが恥ずかしいのである。やっぱり、身内の事情というか、お家の事情というか、そういうプライベートな部分の話というのはどうしても気になってしまうのだ。それに、昨日の夜におじさんからかかってきた電話も気になるし……。

「で、あのですね、三枝さん」

「はい、なんでしょうか？ お伺いします」

「さっきは、あの、本当に大丈夫でしたか？ 目にゴミが入るのは、

ほんとにキツイですから」

「ええ、平気です。三木様にはたいへんご迷惑を」

「それは、別にいいんですけど、まあ、気にしないでください。なんとなく、あんまり痛がってる感じがしなかったんですけど、でも目にゴミが入ったんですね？」

「…、はい、ええ、目に、ゴミが」

「そうですか、分かりました」

とりあえず、ゴミが入ってしまったと言い張られてしまったらそれが本当かを確かめるすべはないわけで、俺はただその言葉を受け入れるしかないのだが。まあ、流石の俺も、今まで一度も会ったことのない人のことを、ほんの一言二言で泣かせてしまう才能はなかったということだろうか。…、でも、やっぱりあんまり痛がってなかったよなあ…。そんなこと疑ってかかっても意味はないんだけど、でもどうしても気になる。昨日のおじさんからの意味深な電話も、それに関連してやっぱり気になってくるし…。

ちなみに、昨日おじさんからかかってきた電話というのは、実際なんでもない内容のものでしかなかった。かかってきたのは夜の十時ごろで、おじさん的には電話をかけてくる時間ギリギリの滑り込みのような電話だった。その内容も、明日からの旅行を楽しんできてください、だとか、広太をつけられずご迷惑をおかけします、だとか、旅行前あるあるとも言えるべき、珍しくもない定番の内容だった。

しかし最後の一言、かすかに言い淀むようにしながら、わずかに間を置いて言った一言だけが、俺の心の奥でほんの少しだけ引っかかっていたのだった。それは『がんばってくださいませ』という、文脈もつながりも、すべてを無視した今までの話とは関連性ゼロの、謎の言葉。どうしてそのタイミングでそれが言われたのかも、どういう意図を持って言われたのかも、まったく分からない代物である。おじさんは、基本的に誰に対してもスパッと物を言う人で、物事を言い淀むようなことは滅多にない。きっと、ノープランのまま

話し始めるといことがないんだろなあ、と俺は思っているのだが、まあ、とにかく頭の中で言いたいことを完全に整理しきっている、と考えていいのではないだろうか。そんなおじさんだというのに、しかしその日のその電話のその一言だけは、間違いなく言い淀んでいた。あるいは、言うことを躊躇していた。つまりその一言は、間違いなくおじさんを躊躇させるだけの何らか意味があったと考えるのが妥当なのだ。

その一言にいったい何の意味があるのか、それを俺が推測することは非常に難しいが、しかしある一点から逆算してアプローチを行なえば、なんとなく分からないでもない。

その一点とは、おじさんが唯一勝てない相手、おばさんの存在である。おばさんはおじさん以上に言葉を発することに躊躇のない人で、主である俺に対しても——まあ、そんなことを振りかざすことはないのだが——一切の躊躇なく言葉の刃を振りかざし、一刀のもとに斬殺することも少なくない。というか、俺が言われたくないことを異常なほど正確に見つけ出し、それをもっとも言われたくない的確なタイミングで放り投げてくるのだ。おばさんの一言は日本刀の一振りと同じで切れ味であり、おばさんの説教は東京大空襲の絨毯爆撃と同じ殺傷力なのである。本気で説教された日には、俺の心にはペンペン草の一本生き残りはしないのである。

そんなおばさんの中で、今もっともホットな俺に対するお説教ポイントとは、学校の成績のことでも、日々の暮らし向きのことでも、偏執的な調味料蒐集のことでも、三木の当主としてのあり方についてでも……俺、おばさんに説教されすぎだろ……。あつ、いや、それはいいんだよ。おばさんの中で今もっともホットなお説教ポイントは、俺に彼女の一人もいないことについてだ。三木の当主として、当然求められる責務として世継ぎをつくることがあって、彼女の一人もいないと将来妻をめとることもできない↓そうすると世継ぎをつくることができない↓三木家滅亡、というおばさんの最悪のシナリオが、もうすでにその頭の中にはある、らしいのだ。



別に彼女がいなのは俺に責任があるわけではない、と思いたいのだが、まあ、事実なので反論のしようもなく唯々諾々とその紡がれるお説教を受け入れるしかないのである。っていうか、いくら俺に彼女がいらないのが気になるからって、霧子とか志穂とか姐さんとか俺の親友たちと結婚しなさいとか言ってくるのは止めてください、といたい。霧子は可愛いけど妹だし、志穂はかわいいけどペットだし、姐さんはかわいいけど姐さんだし、そういう目で見ちゃダメなんだよ。

…と、まあ、そういう事情があるわけで、おじさんの一言も、深読みするとこの件に深くかわっている可能性もあるのである。つまり、この旅行、おばさんが何か仕掛けてきているかもしれないということだ。もちろん、それが何かということは分からないし、そもそも何かを仕掛けているのではないか、という疑惑自体が俺の杞憂である可能性も大いにある。しかしそれを警戒するに越したことはない。俺はやっぱり恋愛結婚したいわけで、おばさんの思惑の通りにお見合い結婚なんてしてたまらないうんだ。いや、別にお見合い結婚自体がイヤとかではなく、そういうことを押しつけられるのがイヤなだけで、お見合い結婚自体を否定しようってわけじゃないんだけどさ。

「あの、もう一ついいですか？」

「はい、いくつでも」

「あの旅館、知る人ぞ知るみたいな、比較的名所なところなんですけど、そこに飛び込みで行って、働くことを了承させた三枝さんの縁者ってどなたですか？　もしかして、すごい権力者とか…、ですか？　それとも旧家のどこか、とか…？」

「ええと…、遠縁の、本当に遠い親戚が、小さな旧家の出でして、そこから偶然に大きな旧家の方とつながりを持つことができて、その方をお願いをしたところ後見人になってくださいまして…」

「やっぱり…。ということは、俺のことも、実は聞いたことくらいはある、とか…？」

「は、はい…、存じ上げております…。」

「それもやっぱり、その大きな旧家の人から聞いて？」

「はい、そ、その通りです…。」

「なるほどね…。」

昔、三木を統べるものの基礎教養とかいっておじさんに聞かされたことがある。日の本の國には、神話の昔より続く神に連なる系譜が七つあるという、まるで冗談のような、おとぎ話のような話。それが、七天星家＞しちてんせいけく。その伝説を集めたものが、七天星家通史伝＞しちてんせいけつうしでんく。その七つの家は、表から裏から日本をつくり、支え、守っていて、豪族、公家、華族とその存在形態を少しずつ変えながらも、間違いなく常にあり続けているのだとか。そして三木は、その三の星である、という。

俺もそんなに興味を持たなかったから詳しくは知らないのだが、正直、一笑に付されてもおかしくはないレベルのものだ。現に、それは非常に狭いコミュニティの中でしか通用しない地方伝承のようなものでしかなく、全国区的に受け入れられているものではない。

しかし、そのような伝承、というか伝説があるということは確からしいこと。そしてその伝説からつながって、本当に旧華族の中で、今でもつながりがあるというのも確からしい。（これは、美佳ちゃんがつながりで他家に修行に行けているので疑いようがない）だから、この人が旧華族のつながりの中に何らかの形で参入しているとしたら、その中から三木の家の情報を引き出すことも不可能ではなく、あるいはお婆さんの工作員になっている可能性もありえないことではない。

つまり、この人、やはり要注意人物だ。お婆さんの工作員である可能性を考慮すると、いくら気をつけて接したとしても警戒のしすぎということはあるまい。お婆さんの策略による結婚の押しつけを回避するためにも、この人から注意を切らない方がいいだろう。

俺は、庄司の人たちには悪いが、家に縛られるのは、まっぴらごめんだ。

## お部屋まで、ご案内

「さあ、三木様方、到着いたしました。順に車から降りてくださいませ」

終始安全運転で車に揺られること十数分、特に何の問題もなく俺たちを乗せたミニバンは目的地であるところの旅館へと到着するのだった。

「三枝くん、降りたら皆様のお荷物をお持ちしてね。わたしは車を裏に回してくるから、失礼のないようにご案内を」

「はい、承りました」

「ついたー!!」

そして車が完全に停止しサイドブレーキが引かれた瞬間、助手席に座っていた志穂が扉をバンッ！と開いて一人、俺たちを待たずにどこかへ走って行ってしまった。旅館の入口からは少し外れた方向に行っていたように思うが、あいつはいったいどこに行くつもりなんだろうか。

まあ、どうせ呼んだら戻ってくるだろうし、少しくらい自由に走らせてやってもいいのかもしれないけど。けっこうな時間を静かに座って過ごすことを強いていたわけだし、そろそろ我慢の限界だったのかもしれない。

志穂は基本的に集団行動が苦手で、みんなとペースを合わせて動くということがあまり得意ではなく、そうしていると何だかうずうずしてくる（志穂談）んだそうだ。おそらく、元気に動きまわっていない、という事実そのものがストレスサーになっているのだろう。そして、長い間静かに動きを停めていると死んでしまうという、泳ぎ続けなくては死んでしまうというマグロと同じような生態をしているようで、なんというか、元気が有り余っているというのがもったも適切な表現なのではないかと思われる。

「にゅー…、しいちゃんが……」

「志穂は、まあ、飽きたら戻ってくるだろ。少し自由に動かせてやろうぜ。あいつはあいつで、いろいろ思うところがあるんだろうからな」

「そうだな。皆藤は、力が余っているからあのようにして発散させなくては暴発するかもしれない。少し走り回るくらいで溜まっている気を散らすことができるのならさそうさせてやればいい」

「姐さん、氣っていうのは、あれですか。タオパワーの氣ですか。そんな曖昧な概念を、こっそり出してきちゃうんですか」

「皆藤はどうやら、生来的に氣の脈が太いらしい。だからこそ、いつも見せているような瞬発的で爆発的な力の発露を行なうことができるんだ。拳法では氣を練って全身に回して強化を行なうのは、ある程度以上の強さまで到達してしまえば当然のことだ。皆藤も道場に通っているらしいし、おそらくそこでそのような術を学んでいるのだろう」

「えー、あいつが何かを教わって何かを学ぶなんて信じられないなあー」

「まあ、あるいはもともと氣脈が太いとなると、生まれながらに氣の巡りがいいのかもしれない。もしそうだとしたら、皆藤は生まれながらにして強い素質を持っていたということになるのだろうが」

「でも、それなら暴発なんてしないんじゃないのか？ 俺は詳しいことはなにも分からないんだけどさ、生まれながらのことなら、呼吸をするのと同じでやり方を無意識で捉えてるから失敗なんてしないと思うんだけど」

「そうだな。しかし、それは一定の、本来流れるべき氣の量をきちんと保っている場合だけだ。もし何らかの修養によって氣の量をその一定量以上に増やしているとしたら、必ずしもその限りではない。そうだな…、常に一定量を排出する貯水槽を想像してくれ。その貯水槽にはコックがついていて、それを捻えることによって排出量を変えられることができる。そしてその貯水槽には、常に一定量の水が流入している。さて、流入量と排出量が同じ場合、どうなる？」

「あゝ、入ってくる量と同じだけ常に出ていくんだから、理論的には、状況は時間的変化はしないな」

「そうだ、この入ってくる量というのが気の流通量、出ていく量というのが気脈の太さ、貯水槽が身体だ。皆藤は気脈が太いから、排出量の操作の幅が広い。かなりの量の気を流しても、しっかり排出することができるのだ。しかし、もし無理なやり方をして気の量を爆発的に増やしているとしたら、皆藤の気脈の太さをもってしても排出しきれない量の気が流れ込んでいくかもしれない。となると、気が貯水槽である身体からあふれ出し、暴発することもありえるだろう」

「…、そう言われると、なんだか納得しそうになる。でもその議論は、気っていうよくわからん概念存在を許容することを前提にしているから、黙って受け入れるのは、俺には少し難しいぞ」

「なに、そのように理解して身体操作を行なっている者もいる、というだけだ。三木が無理をしてそのコミュニティに参画する必要もない」

「まあ、俺は気を練る必要のない平和な世界で生きていくことにするわ。気をもむことはあるかもしれないけど、練ることはきつくない」

「そうだな、闘う必要がない人間が、無理に手を出す必要もあるまい」

「ところで、姐さんは気を練れるのかい？」

「ああ、多少だがな。私はそういった才能に乏しいらしく、気の流通量そのものがかなり少ないんだそうだ。皆藤とは、対照的だ」

「大丈夫、姐さんは努力の天才だよ」

「ははっ、そうだいいんだがな。まあ、闘いというモノは、往々にして才能が全てというわけではない。気脈の太さがそのまま強さを示しているわけではないからな。逆に、努力するものがその努力の分だけきっかり強くなれる、というものでもないのだが」

「ゲームじゃないからな、戦闘して経験値を稼いでレベルを上げて、

で強くなれるわけじゃない」

「そういうわけだ。ということだから、皆藤は定期的に気を発散させなくてはいけないということだな」

「俺にはその感じ、あんまりよくわからないけどな。まあいいや、とりあえず荷物を……」

「三木様、こちらへどうぞ」

「三枝さん、あの、別に全部を一人で持たなくても、いいんですよ……？ 俺も、自分のくらいは自分で持ちますし……」

車から降りて、よく分からん気の話なんかをしながら軽く伸びをしたりしていた俺たちだったが、さて荷物でもトランクから取り出するか、と思って振り向くと、そこにはすでに五人分の荷物を持った――一番デカイ志穂の荷物を背負い、右肩に姐さんのボストンバック、左肩にメイのリュックとポーチと手提げを担ぎ、二本の手で俺と霧子のキャリーケースを転がしている――三枝さんの姿があった。いくらなんでも荷物を持ちすぎというかなんというか、重そうですね、というものはばかられるほどの量が積載されている。

というか、いつの間にこんなに荷物を抱えていたのだろうか。一声かけてくれれば俺だって、荷物持ちの手伝いをしてくれるように他の仲居さん呼びにいくくらいはするぞ。いくらこの人が仲居さんで、これが仕事だとしても、無理のしすぎと言わざるを得ない。

「いえ、お気になさらないでください。これくらいでしたら、言うほどの量ではありませんので」

「五人分の荷物は、普通に考えて重いと思いますよ……？」

「大丈夫です、さあ、あちらへどうぞ」

「だ…、大丈夫というならば…、よ、よろしくお願いします……」

「ゆ、幸久君…、お手伝いしないで、いいの……？」

「い…、いいんだ。仕事っていうのは、基本的に誇りを持ってしているもの。ここで、客である俺たちが、仲居さんの手伝いなんてしようものなら、それはこの人の誇りを汚すことになるし、それ以上に、俺たちが単に善意で手伝ったとしても他の仲居さんは三枝さん

が客に荷物を運ばせていると思うかもしれない。そうしたら、俺たちのせいでこの人に不当な評価がされるかもしれない。そうなる可能性を考えたら、手伝っちゃダメなんだ」

「で、でも……、あんなに持ったら、重いよ……？」

「三枝さんは、力持ちなんだ！　ほんとに無理だったら、他の仲居さんに助けを求める！　俺たちは、手伝っちゃダメなの！」

この、人の仕事を奪っちゃダメという考え方は、おばさんに叩き込まれた考え方である。庄司の家の人々は俺の執事であり、メイドであり、俺に従属する立場の人間である、とおばさんは頑なに主張する。従属する者の仕事というのは、基本的に主の身の回りの世話であり、それをする事によって自らの存在意義を確立している、らしい。

それに、従属する者がいかに評価されるかといえば、もちろん自らの仕事をどれだけ有能に為しているかということに他ならない。たとえば、俺は広太が非常に有能な人間で、どれだけの確に仕事をしていて、俺の生活上の不便をどれだけ確実に取り去ってくれているか、ということを知っていて、もちろん、十分すぎるほどに評価している。しかし人間というものはお互い完全に通じ合うことの出来ない生物である。

もし俺が広太の代わりに家の掃除をしてしまったら、どうなるだろうか。広太は、俺から自分のしている仕事について信頼を得られていないと思いきやに違いない。さらに、それをおばさんに見られてもしたら、広太が主である俺に掃除を押しつけてのうのとサボっていると思われるかもしれない。

俺のちょっとした気まぐれが、それだけの波及効果をもたらす可能性を持っているのだ、行動に慎重を期する気にもなろうというものだ。

そして今回、仲居さんの仕事を手伝うことは、それが純然たる善意から出た行為であっても、結果的にこの人に迷惑をかけてしまうかもしれないのだ。今この瞬間、確かに人助けをしたい気持ちに浸れ

るかもしれないが、その先で起こり得ることについても思案を至らせる必要があるのだ。

旅館にやってきた客というのは、旅館側から提供されるサービスのんびりと受け入れる義務があるのだ。それを手伝おうなどとは考えず、ありがとうと言って受動態でいることが求められるのである。「手伝うよりも、さっさと部屋まで案内されて荷物を降ろさせてあげよう。その方が、三枝さんのためだ」

「にゅ…、にゅん…」

「三木、天方、そんなところで立ち止まってどうした。早く案内してもらおうぞ」

「お、おう！ 今行く！」

「あ、あたしも！」

仕事を奪うことをしてはいけないと言われているが、しかし仕事をしやすいように手助けをするくらいはしてもいいだろう。俺だって、滅多に行かないが、ファミレスに飯を食いに行ったときは、食べ終わった後の皿をまとめて置いて下げやすいようにするくらいの気遣いはする。まあ、おばさんはそれすらもするなと言うんだろうが。

『おっきい旅館。すごい』

そしてそんな俺達は置いておいて、メイが変わらずケイタイの画面を使って、三枝さんとおしゃべりをしているようだった。三枝さんは三枝さんで適応力があるようで、その状況にさしたる疑問も抱いてはいないようである。

「当館は、もともとはこれほどまでに大きな宿ではありませんでした。ですが今から52年前、当時帝大に通っていらっしゃったという三木様が——今の三木様から見ると、おじい様にあたられる方ですが——偶然当館にご宿泊くださり、お部屋からの眺めをいたくお気に入りになられたらしく、当館を丸ごとお買い上げになったんだそうです。そしてその後、ご自分が宿泊するに足る宿にするため私財を投げ打ちここまでの増改築をなさったのだとか。その証拠に、今でも当館のオーナーは三木様のお名前をお借りしている次第です」



「へえ、そうだったんですか、知らなかった」

「本日ご用意させていただいた部屋は、当時三木様がお泊りになられた部屋と同じ位置にあります。眺めも変わっておりませんので、おじい様が気に入られた景色もご覧いただけますよ」

「それは楽しみです。じいさんが気に入った、大金を放るだけの価値がある景色っていうのがどんなものか、見てみたい」

「とても素晴らしいものです。きっと、三木様も気に入られることでしょう」

「っていうか、三木の家がオーナーなんです、この旅館。そんなこと、俺は何にも聞いてないんだけどなあ……」

「ええ、間違いございません。代が変わられても所有権が失われることはありませんので、オーナーのお名前は三木幸久様になります」

「そうか…、これ、俺のだったのか……。そんなこと急に言われても、全然実感ないなあ……。あつ、もしかして、経営面とかに口出した方がいいの？ 俺、そういうこと全然分らないんだけど」

「いえ、そのようなお手間はかけません。ただ、当館にはいついかなる時に三木様がいらっしゃっててもいいように、常に一部屋、最高の部屋を空けてお待ちしておりますので、よろしければそのことだけでも覚えておいていただければ、それでオーナー様の義務は果たされるかと思われます」

「そんなことしないでいいから、その部屋も普通の客に開放しちゃっていいよ。もしも来るときは、今回みたいに普通に予約して、金払って来させてもらいますから」

「そんな、まさか、三木様からお金などいただけません。最高の接待をサービスさせていただくことが、三木様へのご恩返しであると先代さまがおっしゃっていたそうですので、どのようなことでもなんなりとお申し付けくださいませ」

「え？ でも、ここって先払いで、もう金は払ってあるって、広太が……」

「お勘定は、お客様がご出発なさる直前にさせていただいておりますが……？ 半分ほどを先払いでいただくこともございますが、全額を先払いでいただくということは、ないはずですよ」

「…、あいつ、俺にウソ吐きやがったな……。帰ったら、お仕置き決定だ……！」

「三木様…、どうかなさいましたか……？」

「あっ、いえ、なんでも」

どうせ広太のことだから、こんな立派なところに、しかもよくわからん理由によってただで泊まるなんてことになったら俺の神経がもたないとも思っただろう。よく分かってる、というしかないが、でもだからといってウソを吐いてまで隠すほどのことではないだろう。変な気を回し過ぎるのは、いかに主と執事の間柄といっても、やはりあまりよくないと思う。

確かにこんないいところにただで泊まるなんて心苦しいが、でも向こうがどうしてもというのだ、もらってあげるのが心意気というものではないか。心苦しくても、もらってあげるのだ、がんばれ、俺。

## 男部屋、女部屋

「こちらが女性様方のお部屋になります。三木様のお部屋は、あちらのもう少々奥になります」

「わあ…、大きな部屋だね……。こんな部屋に泊まっているの……？」

「霧子、この部屋、去年取った部屋と大きさ自体はそんなに変わらないからな」

「えっ、そうなの？」

「そうだよ。まあ、去年は洋室タイプだったから大きいベッドとかあって本来よりも手狭に見えたかもしれないけど、大きさ自体は同じだ。まあ、確かに、和室は洋室よりも多少広く感じるかもしれないけどな」

「うん、やっぱり床が広いから、すっごい広く感じるかも。にゅ…、そう考えると、こないとお部屋に泊まれるなんてラッキーなんだなあ……。幸久君、ありがとうございます」

「別にいいって、気にすんなよ。っていうか、交渉してくれたのは広太で、この部屋を用意してくれたのは旅館側なんだから、俺は別に感謝されるようなことはないんだけどな。まあ、どういう交渉の末にこの部屋を用意してもらったのか、その経緯はまったく知らないんだけどな」

「にゅ、それだとやっぱり、広太君が来れないのは残念だね。こない部屋をがんばって取ってくれたのに、自分は来れないんだもん。それに、広太君が来たら幸久君もお部屋で一人ぼっちじゃないし、夜も寂しくないのに」

「ああ、あいつも来れたらいいのっていうのは、俺もずっと思っていることなんだよな。残念ながら広太は、のっぴきならない事情によって今年も不参加だ。家の用事だから、仕方ないと言えば仕方ないんだけどさ」

「お家の、事情？ 庄司のお家の？」

「そう、らしい。なんか、庄司の本家で総会みたいなことがあるんだってさ。俺は今まで一回も連れてってもらったことないからよくわからないんだけどな」

「そういえば幸久君、昔からゴールデンウィークはお留守番ばかりでつまらないって言ってたね。そんな理由があったんだ、知らなかったなあ」

「昔から、そうやって留守番するときは霧子ん家で世話になることが多かったよな。美佳ちゃんもいっしょに泊めてもらって、あのときはマジで助かった」

「そうだね、うん、幸久君が泊まりに来るのも、たまにあったよね。そういえば、美佳ちゃんって、どうしたの？ ぜんぜん見ないんだけど…、うちの学園にはいないし、やっぱり学校が別になっちゃうとなかなか会えなくなっちゃうってことなのかな…。…、あれ？」

美佳ちゃんって今、高校一年生、だよな？ 中学は、あたしたちと同じとこ、行ってたんだけ？ 中学校の制服着てるの、そういうえ見たことない、かも……。？」

「美佳ちゃんは、中学校に行っていないぞ。三年前にメイド修行の旅に出たっきりだ。実は俺も三年くらい見てないんだよな。美佳ちゃん、今はどこで何をしてるんだろうなあ。いや、メイドしてるんだろうけどさ」

「にゅ、どこ行ったか、分らないの？」

「いや、俺が知らないってだけ。お婆さんたちは知ってるんだろうけどさ、俺には教えてくれないんだよ」

「…、いじわる？」

「いじわるでは、たぶんないだろ。俺が美佳ちゃんのこと甘やかすと思ってるんじゃないかなあ、お婆さんは厳しい人だから。それに美佳ちゃんもけっこう俺に甘えちゃうところあるからさ、こう、俺から隔離することで精神的成長をさせようとしてる、とかじゃないのか？ まあ、さすがに三年も音信不通で所在不明ってなると、俺も

心配でたまらなくなってくるんだけどな」

「あたしも、久しぶりに美佳ちゃんに会いたいなあ。どこで、なにしているのかなあ、美佳ちゃん。三年も経ったし、もうすっかり大人になってるのかなあ……」

「三年経っても、美佳ちゃんは俺たちの一個下であることは変わらないからな、霧子。まあ、美佳ちゃんは昔から精神的に大人なところあったから、三年のメイド修行でさらに磨かれて帰ってくるのかもしれないけど」

「そうだね、美佳ちゃん、昔からしつかりしてたから。にゅう…、あたしもしつかりしないと」

「大丈夫、霧子もあのころに比べたらずいぶんしつかりしてきたぞ。自信持てって」

「皆様、お茶のご用意ができました。どうぞごゆっくりおくつろぎください」

「あつ、すいません。なんか、やらせちゃって」

「いえ、お茶をご用意するのも大事なおもてなしです。それに私、お茶を入れるのは、得意なんです」

そして俺と霧子が部屋の入り口あたりで昔話に花を咲かせていると、いつの間にかメイは部屋の中で腹ばいにぺたっ、と横になっていて、姐さんは机の周りにあらかじめセットされていた座布団にピシッ、と背筋を伸ばして座っているのだった。さらに三枝さんは、備え付けのポットから茶碗を一度経由したお湯を急須の中に注ぎ、お茶を用意してくれていた。

確か、緑茶の適正抽出温度は80度くらいだったように思うし、ああすることでお湯の温度をちょうどいいくらいまで下げ、そのついでに茶碗を温めることもできるのだから一石二鳥なのだろう。まあ、自分でやるときはめんどくさいからどばっと直接急須に入れちゃうんだけどな。いや、そもそも俺が自分でお茶をいれることなんて滅多にないというか、大抵の場合は広太が入れちゃうからな、仕方ない。

こうして手間暇を惜しまないのが、つまりはおもてなしというもののだろう。この尽くす心、どこことなく広太の動きをほうふつとさせる。なるほど、確かに執事も仲居も、基本的には人に尽くす職業なわけだし、二位通うモノなのかもしれないが。

「三枝さん、案内、ありがとうございます。それでは私たちはこの部屋にいる。三木も、荷物を置いて落ち着いたらこちらに合流してくるといい」

とりあえず、どこかにかっ飛んで行ってしまった志穂は、どうせ放っておいてもじきに勝手に帰ってくるだろうから放置しておくとして、俺たちは部屋に案内してもらって一息つくことにした。ずいぶんと電車で揺られてきたのだ、走り回りたくなってしまった志穂とはまた少し違うだろうが、お茶でも飲んでゆっくりしたくなるのが人情というものだろう。

きつと一息ついたらすぐに遊びにいくんだろうが、それまでの間はのんびり過ごしたいじゃないか。なに、旅行は二泊三日、時間だけはたくさんあるんだから少しくらい無駄遣いしてもいいではないか。こうして時間を無為に、そしてぜいたくに使うことができるのが、こうして旅行にくることの醍醐味でもあるんじゃないか、と俺は思う。

「ああ、そうすることにする。じゃあ、またあとでこっち来ることにするわ」

「うん、あとでね、幸久君。あつ、しいちゃん、ここ、分かるかな？ 入り口で、待ってた方がいいかな？」

「皆藤様が戻っていらしたらすぐにこちらまで案内させていただきますので、皆様方はお部屋でごゆっくりなさってらしてください。あと、御用のときはこちらのボタンを押してくださいませ。すぐに私が飛んでいきますので」

「へえ、そんなナースコールみたいな仕組みになってるんですね。ふつう、内線電話とかで連絡するんじゃないんですか？ たしか去年はついてたと思いますけど」

「和室には、内装にそぐわないからと内線電話を設置していないんです。ご不便をおかけしないよう心づくしさせていただきますので、どうかご容赦ください」

「いえ、そんな、容赦なんて、全然ですよ。俺たちのことなんて後回しにしてくれて構いませんから、他のお客さんにサービスしてあげてください」

「どのようなお客様にも最高のおもてなしをさしあげるのが、よい仲居というものです。お客様を差別するなど、あってはならぬことです。それでは、三木様のお部屋へご案内させていただきます。皆様方、どうぞごゆるりとお過ごしくださいませ」

「幸久君、またあとでね」

『来るの待ってる』

「三木、一人部屋だからといってなんでも好き勝手にしていいわけではないからな。弁えるべきところはしっかりとし、他人から見ても恥ずかしくない過ごし方をするんだぞ」

「分かってるって。変なことはしないよ」

「それならいいんだ」

そうして、俺は三枝さんの後について、もう少しだけ奥の方にあるという自分の部屋に案内してもらった。その部屋は、半世紀ほど前に顔も知らないじいさんが泊まって旅館まるごと買い取る決意をしたという部屋らしいので、楽しみといえば楽しみだったりする。

景色が気に入ったからってそれだけのことをするじいさんがあまりに豪胆なのか、そう思わせてしまうほどに景色が素晴らしいのか、それともあるいは、そんなことをしてしまおうと気軽に思えるほど当時の三木家には金があったのか。どれかは分からないが、しかしまあ、きつと景色はそれなり以上に素敵なんだろうなあ。

うん、やっぱり楽しみだ。

「五人でいらしたのに、お部屋はお一人でよろしかったのですか、三木様？　せっかくお友だち同士でいらっしゃったのですから、夜

もご一緒の方が楽しくてよろしいでしょうに」

「いやあ、でも女の子四人に男一人ですからねえ。夜に同じ所で寝るわけにもいかないですよ。ほら、たとえば恋人同士で二人で来て、とかならそうする方がいいかもしれないですけど、やっぱり友だちですから。一線引くところは引かないといけませんよ」

「そう、ですね。それならば夜になる前にたくさんお友だちと過ごしておかなくてはいいけませんね。夜は、どうしてもお一人になってしまいますからね」

「まあ、そうですね。出来るだけ遊べるときに遊んでおかないと、夜に一人なるのはどうしようもないことですから」

「…、よ、夜に、お一人が寂しいならば……」

「えっ？　なんですか？」

「夜に、お一人でいらっしゃるのが寂しいならば、…、わ、私が、お休みになるまで、ご一緒いたしましょうか……？」

「…、もう一回、言ってもらっても、いいですか？」

「で、ですから、三木様がよろしければ、三木様がお休みになるまでの間、お付き合いたします」

一度目はあまりにぼそぼそというものだから聞き取れなかったのので聞き返し、そして二度目はその言っている内容を瞬字に理解することができなかった故に聞き返してしまった。期せずして、同じことを三度も言わせてしまうことになったわけだが、しかし仕方あるまい、俺にはそれがまるで外国語のように、耳には入っているが頭には入っていない感じになってしまっていたのだから。

しかも、さらにマズいことに、三度言われてもその言葉があまりピンと来ていなかった。なんだろう、頭の中で歯車がかみ合わない感じとか、脳が理解することを拒んでいる感じとか、なんだかよくわからんが、よくわからん状況になっているぞ。

「そ、そういうサービスを、この旅館ではやってるんです、か……？　一人で泊まって寂しかろうと夜をいっしょにすごしてやろうなんて、男前というかなんというか……」



「当館のサービスでは、ありません……。こ、個人的に、です……」  
「へ、部屋付きだからって、そんなことまでしてくれなくても大丈夫ですよ？」

「お、お気になさらないください。本日の夜は夜勤ではありませんので、時間は空いていますから。も、もちろん、三木様が御迷惑でなければ、ですが……」

「ご迷惑では、確かにありませんけど……、いや、でも、……いやあ……、やっぱりダメ、だと思えますよ。なんというか、若い男女が、夜に二人きりになるべきではないと思うんですよ。というか、そうならないために俺は一人部屋なんですから本末転倒というか、よくないと思います」

「そう……、でしょうか……？ どうしても、いけませんか……？ やはり、ご迷惑、ですか……？」

「いや、迷惑ではない、んですけどね？ でも、ほら、やっぱりよくないと思うんですよ、そういうのは」

「そう……、ですよ……。やはり、ご迷惑ですよ……」

「ああ……！ どうして泣きそうになってるんですか！？ 俺、女の人に泣かれるのはダメなんですって！ な、泣かないでくださいってば！」

「申し訳ございません……。おかしなことを言ってしまったって、申し訳ございません……。な、泣きません……、これ以上、三木様にご迷惑を、おかけするわけには……！」

「来てもいいですから！ 迷惑じゃありませんから！ 泣くのはやめてください！ 泣かれると、頭痛が……！ 頭痛がしてくるんです！ だから、笑って……、笑ってください……！」

「お邪魔しても、よろしいのですか……？ お休みになるまで、お話をさせていただいてもよろしいのですか……？ 気持ちよくお休みいただけるようにハーブティーをお入れしてもよろしいのですか……？」

「いくらでもサービスしてくれてかまいませんから！ これで、涙

を拭いてください！」

「…、はいっ！」

この人が、どうしてこんなに俺にサービスしたいのかはまったく分からない。そんなサービス、何の得にもならないし、そもそもする必要があるとはどうしても思えない。それこそ、遠慮されたからといって、泣くほどのことではないだろう。

それならば、どうしてそこまでそれにこだわるというのだろうか。男に対する最終手段である、女の涙という武器まで使って、だ。なんとなく、上手く掌の上で転がされているというか、そういう感じがしてならない。

もしかしたら、この人は本当におばさんの遣わせたエージェントか何かなのかもしれないなあ、とどうしても邪推してしまう俺が、心の奥にひっそりというのだった。おばさんがこの旅行に対して、俺の結婚問題についてなんらか策を打っているのではないか、という俺の心配は、現実のものになってしまいうというのだろうか。

まあ、三枝さんの涙に押されて、という形ではあるが、もう来てもいいと言ってしまったのだから後戻りはできないのだがな。

## 知っていること、知らないこと

「どうぞ、お茶になります」

「あつ、ありがとうございます」

くつを脱いで、これから二泊三日の間俺の住まいになる部屋へと足を踏み入れて、荷物はとりあえず部屋の端の方に置いておいて、何はともあれお茶でも飲んで一服入れることにした。そして、そのためにもお茶の用意でもしよう、と思っっているいろ入ってる容器に手を伸ばしたのだが、一步早く三枝さんに奪い取られてしまい、今まさにお茶を入れてもらい、やや苦い気分で飲んでいるのである。

しかし、苦い気分で飲んでいと言ってもお茶自体が苦いとか渋いとかそういうことはなく、ぶっちゃけ美味しい。緑茶なんて、いかに適正温度とかなんとか言ったって、入れちゃえばそんなこと関係あるまい、と思っっていたのだが、やはり何かが違うように感じる。

紅茶については、広太が毎日のように美味しいものを入れてくれるから何か違うんだろうなあ、と思っっていたが、しかしどうやらそれは緑茶にも当てはまるらしい。

まあ、広太はあんまり緑茶はいれてくれないからなあ。三木家は基本的に昔から西洋かぶれだったらしく、その名残として庄司の家は使用人・女中ではなく執事・メイドのスタイルを昔からとっているらしいし、庄司の家は三木の遺産——庄司の人々は、遺産とは決して呼ばない。名残という——として西洋のクラシック家具とか食器とかが満ち溢れているし、日本生まれ日本育ち、白米の炊きあがりの香りと出来たてのみそ汁の香りを愛し、風呂といえば湯船につかること、を信条とする純和風青年（過言である）の俺としては、もう少しくらい和に傾倒してもいいんじゃないのかなあ、とかたまに思う。

だってほら、けっきょく俺たちは日本人でしかないわけだし、いかに西洋かぶれたとしても西洋人にはなれないしさ。西洋風の生活っ

ていうのは、ヨーロッパで生きていくのにふさわしい生活であり、日本の風土にはどうしたってそぐわないところが出てきてしまうのが必然ではないか。

いや、まあ、そんなにそぐわないなあ、とか思ったことはないんだけどさ。俺もベッドで寝てるし、フローリングで生活してるし、和とは遠い生活をしてるんだけどさ。俺の中で和の部分なんて、日本人だってことと白米が好きってことくらいしかないんだけどさ。

「はあ…、すごいおいしいです。ありがとうございました」

「いえ、ご満足いただけたなら、光栄です」

「それで、じいさんが気に入った景色っていうのは、あっちのどっかい窓の景色ですか？ 確かにキレイだけど、別にそこまでじゃないように思うんですけど……。なんて言うか、ちょっと色合いが物足りないっていうか…、山の緑の色しか見えなくて、感動が足りないですね。ああ、もしかして、季節かな？ 秋になると、紅葉がすごくきれい、とか？」

「いえ、そちらの大窓は、あとになって大きなものを張りなおしたもののらしいので、おじい様をご覧になった景色はそちらではございません。こちらの、丸窓の方です」

「こっち？ えっ、でも、これってふつう障子がはめ込み式になってて、開かないようになってるんじゃないか？」

そう言って三枝さんが指したのは、部屋の北側の違い棚と天袋の間の小さな丸窓だった。北向きってことは、明り取りのための窓ではないことは明らかで、つまりこれは内装としての窓であり、開く必要のない窓なのではないだろうか。

それに、なんか、天袋の襖に描かれている絵、すごい中途半端でひどく違和感を覚える。どうやら滝の落ち始めの部分が描かれているようなのだが、落ちている途中も落ちた先も描かれていなくて、とても半端だ。これならむしろ描かない方がいいのではないか、と思ってしまうほどに物足りない。

というか、そもそもこういう窓は開く構造になっていないんじゃないかな

いのか？ いや、詳しいことは知らないんだけどさ、なんか、配置的にそんな感じが。

「この窓の周りの違い棚と天袋は、おじい様のご指示で増設されたのだそうです。あと、こちらの床の間もそうだそうで、この部屋はもともととても簡素な造りをしていたそうです」

「そうなんですか…、でもこの窓から見える景色って、かなり狭いんじゃない？」

「ご覧になれば、分かります。とても素敵な風景ですから」

そして三枝さんは、スツと立ち上がるとその丸窓にはめられた障子に手をかける。すると障子は、一般的なそれと変わらずシュツと敷居に乗って、横向きに加えられた力に従って横へと滑っていく。

「さあ、三木様、こちらからご覧ください」

「こっち、ですか？」

それから三枝さんは、俺の手を取って立たせると窓の真正面へと導いた。こうしてみると、この光景は丸窓を中心にして書院造のキレイな構図を取っている。なんというか、違い棚に飾られている漆器や床の間に飾られている梅花空木の小さな鉢、山水を描いた水墨の掛け軸も詫び寂びつとしていい感じのように思える。そしてそこにほのかに光をともしるのがその丸窓であり、それはある意味で、障子をかけられたままでこそ完成というか、障子を外してしまうのは蛇足というか、バランスを崩す行為なんじゃないかなあ、とか、素人ながら思ってしまうのだった。

いや、でも、それ以前に、この書院造的な部屋構造そのものが後付けで造られたって言うてたか。ということは、逆なのだろうか。あの窓は障子が外れていることが前提で、外れていなかった今までよりもさらに素敵なものが出現されるということなのかもしれない。

「うわ…、すご…」

「素晴らしいでしょう、とても。この眺めは、当館の至宝です。三木様のおじい様も、すべてこの景観のためだけに莫大な私財を投じてくださったのです。だからこそ、半世紀前と同じ眺めが、こうし

てここに切り取られているのです」

そこに切り取られていたのは、俺が今まで観たこともない眺めだった。それこそまるで、完成された一幅の絵画のようで、俺は知らずゴクリと喉を鳴らしていた。

「確かにこれは、素晴らしいですね……。金でこれが入るならば、それに必要なだけの額を持っているならば、出してしまってもいい……。これを、自分のものに出来るなら、あるいは……」

「大変、お気に入りいただけただようでなによりです」

それは、滝の流れ落ちる風景だった。しかしそれでありながら、どこか幻想的だった。少なくとも、どこに行っても見られるような、そんな安い景色ではなかった。

ほんの小さな丸窓に切り取られているというのに、それを感じさせないほどの無限の広がりがある。いや、切り取られているからこそその範囲の外に広がる景色が想像の中で無限に広がるのかもしれない。

「ですが、ご安心ください。この風景は、もうあなた様のものです。おじい様が築きあげられた、三木の遺産なのですから」

「…、はは…、俺、今初めて、俺であることに感謝したかもしれない……。三木の家なんて、面倒なことばかりでろくなことないと思っただけ、そればかりじゃ、ないのかも……」

「三木の遺産は莫大です。三木様がご存じないものも、あるいは何らか残されているかもしれません」

「遺産の管理は親族に任せてるから、俺はぜんぜん、なにが残されてるかなんて知りませんよ。俺が知ってるのは、少なくとも俺たちが細々と生きていくことができるだけの金と、それと家族だけからです」

「三木は、先代当主がすでに亡くなられていらつしやるそうですね。ですから、三木様がすでに当主を継いでらつしやると、聞き及んでいます」

「俺を生んだ両親が、っていうか肉親が全員まとめて死んだのは、

自動車事故のせいらしいですよ。俺は生まれたばかりだったんで、何にも知らないんですけどね」

「ご両親は、『三ツ木』でいらっしゃったんですか？」

「？ ええ、まあ、俺の親ですから、三木ですよ。確か父が母を嫁に向かえたって聞いてますから、間違いないと思います」

「…、そうですか…、…、ご存じない、のですか？」

「なにが、でしょうか？ 知らないことはありません、何について言われているのか分からないんですが」

「いえ、申し訳ございません。今の言葉、お忘れください。それより、お茶のおかわりはいかがですか？」

「あつ、はい…、じゃあお願いします」

おそらく、おじさんたちだけは知っているけど俺が知らないこと、というのがいろいろあるんだろう。もしかしたら、俺には知らないことが多すぎる、のかもしれない。三木という家の、しかも当主という立場にいるにも関わらず、もしかしたら、それではいけないのかもしれない。

でも、おじさんたちが俺にそれを教えないのは、別に意地悪をするためとか、俺に対する嫌がらせとかではないんだと思う。どのようなことであっても、おじさんたちが俺に害を為すということはない、と俺は信じている。おじさんたちが何か隠し事をしているならば、それはおじさんたちが俺の耳には入れない方がいいと判断しているからか、あるいは耳に入れるにはまだ早いと思っているからなのだ。そして、そういうときの庄司の人たちの判断は、おおむね正しいのである。

俺の両親についての話も、きちんと俺がその事実を受け入れられるように成長するまで打ち明けるのを待ってくれたし、三木の家の話も、俺が理解することができるようになるまで説明するのを控えてくれた。だから俺は、おじさんたちが何か隠し事をしているにしても、その話を庄司の側からしてくれるまで待つのが正しいんだと思う。

間違いない言うことができるのは、庄司の人間はいつでも三木の味方でいてくれる、ということだけだ。たとえどのような状況になっ  
てしまったとしても、おじさんも、おばさんも、広太も、美佳ちゃんも、みんないつでも俺の味方でいてくれる。それが家族というものだ、と俺に教えてくれたのは庄司の人たちで、その言葉は偽らざるものだ、俺は信じている。

「まあ、細かいことは、気にしない方向で、ってことかなあ……」

「なにか、おっしゃいましたか、三木様？ はい、お茶をどうぞ」

「あゝ、いえ、何でもありません。それにしても、なんだかいろいろと詳しそうですね、三枝さん」

「そのようなこと、ありません。当館のことについてでしたら、少し歴史を学ばせていただいただけですし、それ以外のことについてはわずかに聞きかじっただけですから」

「そうですかゝ、あつ、お茶、いただきます」

「はい、どうぞ召し上がってくださいませ」

「それより、こうして引きとめてるのは俺かもしれないけど、いつまでもここにいていいんですか？ ほら、なんていうか、他に仕事もあるんじゃないですかね？ 一人の客に付きっ切りってわけにも  
いかないでしょ？」

「いえ、私は三木様に付きっ切りでいいのです」

「いや、でも他の仕事」

「ありません、他に仕事は。今日から三日間、私の仕事は三木様に付きっ切りでお世話をすることです。もちろん、もしご迷惑でしたら、お呼びいただいたときにすぐ応えられるよう別室で控えさせていただきます」

「…、それは、仕事は全部サボる、ってことでは、ないんですよね？」

「はい、もちろん。番頭より、そのように申し付かっておりますし、私も可能な限り三木様のお傍でお世話をさせていただきたいと思っています。もちろん、三木様のお連れの方々も同様のおもてなしを



するように、と」

「人手は、足りているのですか？　ほら、一人足りなくなっちゃうわけだし、みんな困るんじゃないですか？」

「私のような若輩者、一人いないくらいで皆様にご迷惑はかかりません。ですから、そのようなことはご心配なさらないでください」

「三枝さんは、嫌でしょう。ほら、よく知らない男の世話をずつとするなんて息も詰まるだろうし、疲れるだろうし。ほら、それならどうしても必要なときだけ呼ぶって方が、合理的、っていうか？」

「そのようなこと、ありません。三木様のお世話を、こうしてさせていただけるなんて、それこそ夢のようなことです。こうして…、目の前で、お話をさせていただいているだけで…、う、な、泣きません！　平気です！」

「ど…、どうして、そこまで？　俺は、失礼ですけど、今まであなたにお会いしたことはない。まったくの初対面だ。それだから、そんな風に、意味深なことを言われても、どう返したらいいかわかりません」

「困らせてしまっているのは、分かっています。ご迷惑だということも、分かっています。でも…、今は、まだ何も聞かないで…、お願いです…」

「…、そんなこと…、言われても…」

そのように切に願われてしまっただけは、俺はこれ以上質問を重ねることはできなかった。

正直、俺は戸惑っている。この人は、おそらく、俺のことをずっと前から知っている。始めましてと言っていたが、俺のことを知っているんだろう。

でも俺は、この人のことを知らない。今まで出会った人間の顔を全て正確に覚えているということは流石にないが、でも会ったことはないと思う。

そしてこの人は、何らか事情を抱えている。それは、その様子を見ればなんとなくわかる。この旅館に飛び込みで、なにも言わず

に働かせてくれなどといったのも、おそらくその事情に関わっている。

その事情が何なのか、俺には知る術がない。残念ながら、それについてはこの人が話してくれるまでまったく分からず、また見当もつかない。そして、聞かないでくれなどと言われてしまつては、あえて問うこともできなくなってしまう。

「…、二つだけ、教えてください。あなたは、過去に俺と会ったことは、本当にありませんか？」

「…、ありません。この名に誓つて、真実です」

「もう一つだけ。あなたがここで働くことを番頭に認めさせた縁者つていうのは、どなたですか。これは、一つ目と違って番頭に聞いたでせは嘘かどうかわかりますので、正直に答えてください」

「…、二見…、二見、啓蔵氏、です」

「ありがとうございます、ございます。…、すいません、10分だけ、外してもらつていいですか。10分だけでいいので」

「はい、承りました…。失礼いたします…」

三枝さんは、俺のお願いを聞いてくれたようで、スツと立ち上がつて部屋を出ると、戸口で深く礼をして去つていった。彼女には悪いが、少し調べさせてもらうことにしようと思う。まあ、こんなところで調べると言つても、おじさんに電話して話を聞くくらいしか出来ないだろうけど。

それにしても、二見啓蔵…。どこかで聞き覚えのある名前だけど…、いったいどこで？　もしかして有名人か？　だとしたら、知つていてもおかしくはないけど…。…、それについても、一応聞いてみた方がいいかもしれない。

## 俺の現状、三木の実情、庄司の思惑

『もしもし、庄司でございます。幸久様、どうなさいましたか？』

「ええ、あの、少しおじさんと話をしたいことがあります。今、時間大丈夫ですか？」

三枝さんを部屋から出してしまってから、俺は一つ大きく息を吐いて、それから上着のポケットの中から携帯電話を取り出した。時間的にそろそろギリギリかもしれないけどきつとまだ家にいるんじゃないか、ということ、電話帳の中から庄司の実家の番号を呼び出し、コールする。

コール音をきっかり二つ鳴らしてから受話器が取られ、聞こえてきたのはお婆さんの声。電話を取るのは基本的にお婆さんの役目だから当然なのだが、今日はそこで用件を伝えて終わり、というわけにはいかない。これはおじさんに直接聞かなくてはならない用事なわけであって、お婆さんを通じて用件だけを伝達すればいい、という類のものではない。

「おじさん、出してください」

『はい、承りました。それではただいま呼んでまいりますので、少々お待ちくださいませ』

それから、通話を保留したときの音楽（『エリーゼのために』）がしばらく流れる。おそらく最終確認の見回りか、あるいはその途中でやり残しとも言えないようなやり残しをやっている最中に違いなわけで、それほどの時間を置かずに再び受話器があげられるだろう。

『お待たせしました、幸久様。何か問題が発生しましたか？』

「どうも、おじさん、そろそろ家を出るってところに電話しちゃってすいません。少しでいいんで、時間もらってもいいですか？」

『もちろんでございます。それで、なにがありましたでしょうか？』

「おじさん、昨日俺に電話してきましたよね。『がんばれ』とか、

なんか。あれって、どういう意味ですか？ おじさんは、何か知ってるんですね。俺の知らないことを何か知ってるんですね。どうしてもいえないっていうんなら聞きませんが、言えるんなら言ってください。俺の状況は、もしかしたら切迫してるかもしれないんです」

『切迫……？ ……切迫するような何かが、幸久様の身に、起こってらっしゃるということで、よろしいですか？ 何か問題が発生しているということで、よろしいですか？』

「まあ、そうですね。ちょっと、変な気配は感じてます。まだ具体的に何が起こったっていうわけではないですけど、何か起こるかもしれない、みたいな感じは。」

『まだ、起こってはいらっしゃらない？ 幸久様、今、どちらから電話をしてくださっているのでしょうか。携帯電話からの着信ですので、現在位置をお教えくださると助かるのですが』

「今、旅館の部屋です。通してもらって、部屋付きの仲居にも出てもらいました。それが、どうかしたんですか？」

『いえ……、お部屋には、入られたんですね？』

「はい、すごい景色でした。で、それよりも……」

『そのこと、です』

「はっ？ どのことですか？」

『ですから、私が先日お電話にて申し上げたのは、そのことについてです』

「そのことって……、部屋のこと？」

『先々代様が残されたそのお部屋、旅館、土地等々、幸久様がそうと知って触れるのは初めてのことで、お心構えをしていただければ、とお電話をさせていただきました。今まで、三木に残されている名残、幸久様の受け継がれた財産については、明言すること避けていましたので、急に言われては驚かれると思いましたので』

「……、全然、分かりませんでしたよ」

『私も、メイド長から言ってはならないと止められていたので、電

話で詳しくお話することは出来ませんでした。その点については、申し訳なく思っております。結果的に困惑させることになってしまい、こうしてお電話をさせることになってしまったことも、幸久様にお手間を……」

「いや、そうじゃなくて、ですね」

『そう、ではない……?』

「だから、俺が電話したのは、じいさんの遺産についてじゃなくて、ですね」

『先々代様の話では、ないのですか……?』

「確かに、じいさんの遺産にはびっくりしたし、すごいとも思いましたけど、でもそんなことよりも……、え? ちょっと待ってください」

おじさんが俺にがんばれと言ったのは、じいさんの遺産について。となると、俺が今聞きたい彼女、三枝弓子については、おじさんたちはどう関わってるんだ? まさか、なにも知らないなんてことはないだろうけど、俺への警告は必要ないレベルということなのか?

それとも、本当に何も知らないのか?

「あの、おじさんは、俺がこの旅行で大変なことがあるとしたら、そのじいさんの遺産についてだけだと思っている、ってことでいいですか? じいさんの遺産を目の当たりにして俺があまりに驚いて心臓発作で死ぬとか、そういう危険しか考慮されていないってことですか?」

『そう、ですね。こちらとしては一応、幸久様が現実を受け入れることができるのでは、という年齢までお話するのを控えさせていたできましたので、まさか幸久様が心臓発作を起こすほどに驚かれるとは思っていませんでしたが、そのことについては考慮していません。もちろん、先日のお電話はもちろんですが、こちらの余計な口出しになるだろうことは分かっていたので、一応の処置です。ですがそれ以外というと、私にはわかりかねます。メイド長もそれ以外の件については動いていなかったと思われるので、庄司の管轄

内で、私の知らないところで何かが動いているということはないのではないでしょうか。もちろん、庄司の管轄の外に出てしまえば、何かが起こっていたとしても把握することは難しくなると思いますが』

「わ、わかりました。つまり、おじさんはなにも知らないってことでいいですね？ 俺に隠れて何かこそそやってるってことはないんですね？」

『もちろんでございます。幸久様に利することならば、どのようなことであってもしますが、そうでないならばすることはありません。それが幸久様に隠れてこそそと、というならばなおさらです』

確かに、おじさんは昔からそういう人だ。基本的に俺に対して、俺が不利益を被るようなウソはつかないし、そういう類の隠しごともしない。恐妻家ではあるけれど、庄司の家をしつかりと管理しているし、俺の父親代わりとして厳しくもやさしく、執事としての領分を守りながらもまるで本当の父親のように接してくれた。そういう実直なおじさんのことを、俺は誰よりも信頼しているし、だからこそまだ見ぬ財産の管理とか諸々を丸投げすることができるのだ。

あえて言うならば、おじさんの行動理念は忠義にある。庄司の家と三木の家は、かなり昔からの古い付き合いで、その間ずっと主と従者という関係を保ってきたんだという。だから我々もそうするべきである、という考えがおじさんの中にはあるんだそうだ。そんなこと、俺に言わせれば気にしないでいいことでしかなく、律儀といえかなんというか、おじさんは俺を主と定め、自分を従者という立場に置くことを止めようとしらない。

これまでの先祖の忠義を自分が引き継ぐというのは、なかなか大変なことだろうし、少なくとも俺には分からない世界だなあ、とどうしても思ってしまう。

『それでは幸久様、いったい何があったというのでしょうか。私どもが考えていることは、どうやら違う何かが起こっていらっしやるように、私には感じられたのですが、間違っていたでしょうか？』

「いえ、間違っ、て、いません」

『それでは、どのようなことが起こっているか、お話しくださいますか？ 状況を知ることができれば何らか対処を行なうこともできるかもしれませんが。それとも、何も起こってはいないけれど、漠然とした不安があるということでしょうか』

「一応、まだ何も起こっていません。それに、危害を加えられるとか、誘拐されるとか、そういう不穏なことではないです」

『それならば、どのようなことでしょうか？』

「…、女の人が…」

『？ 女性、ですか？』

「は、はい…、旅館の仲居で、部屋付きの女の人です、どうも俺のことを知っているらしいんです。しかも、仲居として、仕事として宿泊客のことを把握しておくとか、そういうレベルではなく、知っているらしいんですよ」

『それは、なんというか…、恐ろしいですね…』

「それでその人、三枝弓子って名乗ってるんです。まあ、それが本名かどうかは分からないんですけど。この旅館にも飛び込みで働かせてもらってるってことらしいですし」

『飛び込みで？ それはおかしいですね…、そういうことはしないように、決まっているはずなのですが。もしそういうことがあったときは、よほど信頼できる後見人が確認できる場合を除いては断るはずですよ』

「つまり、本当に飛び込みだとすれば、その後見人はかなり信頼できると判断されたということですよ」

『そういうことに、なると思われます。しかし、そのようなことはない前提で決まりでしょうから、どのような人物が後見人として付いているときは認める、という決まりはありません。本当に信頼できる人間が後見人についているかは、わかりません。幸久様、その後見人の名前は、分かっていますか？ おそらく、番頭に尋ねれば分かると思いますが』

「本人から聞きました。二見啓蔵、だそうです。この名前、どこかで聞いたことはありませんか？　俺は、なんかどこかで聞いたような気がするんですけど」

『二見啓蔵氏！？　それは、間違いありませんか！？』

「え、ええ…、間違っていないです。ついさっき聞いたばかりですから、忘れてないですし、聞きちがえてもいないかと」

『その女性とは、二見氏とはどのような関係でしょうか』

「いえ、そこまでは。縁者ということですので、単に知り合いっていうわけではないと思いますけど。たぶん、親戚、じゃないですかね……。あつ、確か旅館の上客だとか言っていました」

『となると、おそらく間違いありません……。二見啓蔵氏は、フタミグループの先代総帥であらせられます。現在は引退なされて、当代に総帥の座をお譲りしたようですが、いまだ会長として最前線にとどまっていらつしやると聞きます』

「…、フタミグループって、あれですか？　あの、テレビCMとかバンバン流してる、フタミとか二見重工とかの、フタミグループ、ですか？」

『はい、その通りです。日本最大のコングロマリッドであり、重化学工業で世界にその名を轟かせ、今なお成長を続ける、フタミグループです』

「世界シェア何十パーセント、とかいろんな製品について言っちゃう、あれ……？」

『あれ、です。特に氏は、その発展の基礎を築きあげた創設者です』  
「い、いわゆる金持ちって、やつですか……？」

『単純な資産力で言ったら、おそらく日本国内に比肩する者はほとんどいないかと思われます。なにしろ、世界的企業ですので』

「っていうことは、その、三枝さんも、お金持ちってことでしょうか？」

『いえ、それは分かりませんが。フタミグループは家族企業ですので、幹部は氏の肉親で固められているそうですので、その方のご家



族がどれだけ氏に近しいかを知ることができなければ、知ることはできないでしょう。いえ、それよりも、フタミグループは、いえ、二見という家は、三木と同じく七天星家に属する家です。二の星といえ、幸久様でもお分かりになるでしょうか」

「み、三木は、三の星、ですからね、確か」

『その通りでございます』

「つていうことは、二見啓蔵って人も、うちと同じ旧華族ってこと？」

『左様でございます。しかも、二見は三木と隣り合う星です。先々代も、氏とは深い親交を持っていたと記憶しております。あるいは、後見人を引き受けるほどの関係を持っている方ならば、幸久様についてお話になっていてもおかしくはないかと。幸久様は、お嫌かもしれません、この界限ではそれなり以上に名の知れたお方ですので』

「それは、嫌ですけど、まあ、今はいいです。とにかく、もう一つだけ聞かせてください」

『はい、何なりと』

「庄司の家は、この女の人のことは、知らないんですね？ 関係ないんですね？ 俺への刺客として差し向けたりはしていないんですね？」

『全てに対して、はい、と返答申し上げます。庄司の一同は、その方について存じ上げません。それにしても、刺客とは、どういう意味でしょうか？』

「…、なんか最近、おばさんが、俺の将来の結婚がどうか、いろいろ言うじゃないですか。それです……」

『そのことについては、単にメイド長の小言とを考えてください。私たちとしては、特に何をしようというわけではありませんので。とにかく、今回のご旅行では三木の財産の一端に触れていただくことだけを、庄司では計画しておりましたので、それ以外のことで手を出そうとは考えておりません』

「それなら、いいんですけど……。…、それじゃあ、聞きたいことは聞いたんで、切りますね。忙しい時間に長々と、すいませんでした」

『幸久様のお聞きになりたいことに、適切にお答えすることができたならばよかったのですが。それでは、ご旅行をお楽しみくださいませ』

そして、通話を終えた俺はパタッとケータイを閉じて、それをポケットに滑り込ませる。とりあえず、知りたい情報は手に入ったし、そのことにおじさんたちが関わっていないことがよく分かった。それらが分かっただけで、おじさんたちにわざわざ電話をかけた意味があったいうものだ。

しかし、どうやらあの人、俺が思っていたよりも厄介そうだ。後ろについてる背景は考えていたよりもこの国の重鎮っぽいし、俺の知らない何らかの入り組んだ事情もありそうで、なんとなくいろいろと大変なことになりそうな予感がビシバシ伝わってくる。なんというか、俺のセンサーが、そこはかとなく反応しているのである。

## 森忍者発生注意報

「とりあえず、俺はどうすればいいんだろなあ……」

おじさんとの通話を終えて、自分の今現在置かれている状況が思ったよりも大変なものではないか、と思い至るわけなのだが、しかしだからといってなにができるというわけでもないなあ、ということにも気づいてしまったのだった。いや、そもそも、俺の置かれている状況っていうのは、本当に大変なのだろうか。すべては俺の想像でしかなく、もしかしたら俺はただ一人で焦っているだけなのかもしれない。

「あゝ、俺に何ができるっていうんだ……」

おじさんと電話をして分かったことは、彼女――三枝弓子の存在は庄司の家の差し金ではないということと、彼女のバックには日本という国の単位で見ても大きな存在が付いているらしい、ということだけ。具体的に彼女が何者なのかということや、彼女の思惑がどこにあるのかということや、俺とはどういう関係になる可能性があるのかということまで、何一つとして詳細なところは判然としなかった。

となると、俺が彼女に対して抱いている軽い不安感はどこからくるのだろうか。俺は彼女と会ったこともなければ、見たこともない。それは確かなことで、また彼女も俺と直接の面識はないと言っていた。ということは、俺と彼女には何のつながりもないではないか。どうして彼女は俺に執着を持っているというのだろうか。

もしかして、三木の財産が狙い？ もしそうだとしたら、俺のことを誘拐したりしておじさんたちに身代金を要求したりするのだろうか。本当にそうだとしたら、俺はこんなところにいるべきではないし、さっさと逃げ出して安全なところに隠れるべきなのかもしれない。

「…、いや、誘拐なんて、ないか」

可能性として誘拐があり得るにしろあり得ないにしろ、どちらにしても俺が置かれている状況は、それがどのような性質のものかは定かではないが、ある程度以上に面倒なものに違いない。面倒なものからは、可能ならば逃げてしまいたい。

しかし、みんなで旅行に来ている以上、俺一人でみんなを置いてこの場から逃げ出してしまいうわけにはいかない。そうすれば必ず姐さんあたりから事情の説明を要求されるわけで、今、俺が置かれている状況を事細かに解説しなくてはいけないだろう。そしてその理由が、よく分からないけど面倒そうだから逃げる、などという全く意味の分からないものであるならば、姐さんが納得などしてくれるはずがないのである。

というか、旅行初日から俺が帰るなんて言い出したら、それこそ面倒なことになってしまわないか。もしかしたら霧子とか志穂とかも帰ると言い出すかもしれないし、姐さんからは冷たい目で見られることだろう。メイは、どういう反応をするか分からないが、だが休み明けに顔を合わせづらいのは間違いない。それは、ちよつとイヤだ。

「っていうか、何にも分かってないんだから、どうのこうのってジタバタする方がおかしいのかなあ……。こういうときどうやって対処するのがスマートなんだろう……。年上の女の人をどうやって扱うのが正しいかなんて、俺は知らないぞ……」

『三木様、お部屋に入らせていただいても、よろしいでしょうか……？ お連れ様が、いらしていただけますが……』

「あつ、はい。開いてるんで、入ってください」

『それでは、失礼いたします』

「幸久君、おじゃまします」

「あつ、ゆっきい、いた〜！ ゆっきいゆっきい〜！」

「…、なんか、騒がしいのがいっしょだな、霧子。いつの間に戻ってきたんだ、こいつ。ついさっきまでどっかに走って行っていなかったじゃねえか」

「えと、しいちゃんは、さつき戻ってきたよ。戻ってきたばかりなの」

「あのねあのね！　もりがあつたの！　それでねそれでね！　かわおさかな！　ザバザバって！　ザバ〜ンって！」

「何が言いたいのかまったく伝わってこないな。森があつて、川があつたのか？　川なんてあつたのか」

「あとたき！　みず、いっぱい！　いっぱいおちてきて！　たき！　すごい！」

「そうか、すごかったか。すごかったってことはよく伝わってくる。だからとりあえず、いいから落ち着け。ほれ、水を飲め」

「おみず、のんだ！　かわで！」

「川で飲んだの！？　魚がいっぱいいてテンションあがつたのは分らないでもないけど、水まで飲んだの！？」

「おいしかったよ！　ゆっきいもあとで！」

「飲まない。俺は飲まない。お前はこのコップの水を飲んで、とりあえず落ち着きなさい。話は聞いてやるから、あんまり大きな声で騒ぐな」

「うん！　んくんく……、おいしい！」

「そうか、それはよかった」

どこかに走って行ってしまったから二時間くらいは帰ってこないだろう、と思っていた志穂だったが、俺の予想に反してすぐに戻ってきたらしかった。まあ、言っているように森に分け入ったら川があつて、そこに魚がいっぱいいたからテンションがあがつて、そのことを報告するために戻ってきたんだろうから、別に志穂の冒険自体が終わった、というわけではないんだろうが。

それに、森の中に大きな川があるのは、山があつて滝があつて湖があるこの土地の地形なら当然のことで、山からでた水が滝と川を通じて湖まで流れているという、ごく一般的な構図である。

「で、お前は今までいったいどこに行ってたんだ。別に心配はしてなかったけど」

「んとね、もりのなか！」

「なるほど、この旅館の裏の、森みたいになってるところってことだな。なにか面白いものでもあったか？」

「えっとね、き！」

「木か、木の、どのへんが面白かった？　ちよつと、それは俺には難しい感性だから、教えてくれると助かる」

「きはね、しゅっ！　とするとここがおもしろいよ！」

「シュツとしてるとこ……、か……。それは、俺たちの住んでる町の本とは違うのか？　俺から見ると、大して変わらないように見えるんだが、お前には違うように見えてるのか？」

「きは、きだよ！」

「だよな。そうだよな、やっぱり」

「あとね、へんなひとがいたよ。へんなひと」

「変な人？　もしかして不審者か？　どんな人だった？」

「えっとね……、にんじゃ？」

「……、忍者、いたのか……？」

忍者なんて、今のご時世に存在しているはずがない。おそらく、それは志穂が忍者と思っただけで、実際は忍者とは違う何かなんじゃないかと思う。というか、忍者というのは基本的に誰か偉い人だったり金持ちだったりの下に着いている隠密なわけだし、そんな易々と見つけられるものではあるまい。

まあ、志穂の直感にかかればそういうものまで見つけちゃったりするのかもしれないけど、でも忍者はないって。きっとそれっぽい木の枝があったんだよ。幽霊の、正体見たり、枯れ尾花だよ。

「うん、いた。にんじゃがね、シュシュッ！　てしてた」

「どうして、それが忍者だって分かったんだ？　なんか、そんな感じがした、みたいなの？　もしかして、木の上にいたから、とか？」

シュシュってしてること、もしかして実際に動いてたのか？

となるともしかしたら本当に不審者がいたのかもしれない。うん……、不審者を発見したんなら退治してくれればよかったのに。ま

あ、志穂にとっさにそういう対応をすることを期待するのは間違ってるのかもしれないけどな。

志穂はそもそもからして異次元的な強さを持ってるんだけど、戦うこと自体は指示されないといけない。いや、出来ないのかもしれない。道場の先生に、不用意に戦ってはいけない！とか言われてるのかもしれない。そうだな、やっぱり危なすぎるもんな、こいつは。うっかり手が滑っただけで人とか破壊できそうだもんな。

「まっくろなふくでね、まっくろなのかぶっててね、こしにけんがついてた」

「クラシックタイプ！？ クラシックタイプ忍者！？ そんな忍者が、この情報化社会で生きてるっていうの！？ ここはどここの幻想戦国絵巻なの！？」

「しゅりけん、みせてくれた」

「…、投げられたんじゃない？ 姿を見られてしまったからには殺さねば、的なあれでは？」

「ちがうよ。おしゃべりしてたらみせてくれたんだよ。いろいろもっててすごかったよ！」

「なんで忍者と談笑してるんだよ。しかも得物を見せてくれるなんて、どんだけ打ち解けてるんだよ。っていうか、その忍者、全然警戒心とかないのな」

「おちやのんでおやすみしてたから、あたしもまぜてもらったの。おちやものませてくれたし、すっごくいいひと！ …、いいにんじや！」

「そうか、いい忍者だったのか…。でもその忍者、休憩とか何とか言っても、けっきょくサボってるだけなんじゃね？ やっぱり休憩なら、もっと人に見つからないところするだろ。まあ、裏の森だって、普通に考えたら誰も来ない場所なんだろうけどさ」

「えー、せんりがんのじゅつでみはってるからへいきだっていったよ？ 1キロくらいさきなら、ぜんぜんみえちゃうんだって、すごいよね。」

「千里眼の術って、なんやねん……。っていうか、知らない人からモノをもらっちゃダメっていつも言ってるでしょ！ 相手は忍者なんだから、毒を盛るくらい平気でやってくるんだぞ！ 毒なんて盛られたら、いくらお前でも死んじゃうんだからな！」

「えー、でもあたしにどくはきかないって、ししよーが」

「毒が効かない人間なんているわけないでしょ！ 毒飲んだら、死ぬの！ みんな死ぬんだよ！」

「でも、いつもちよつとずつのんでると『たいせー』っていうのができてきなくなるんだって、ししよーがいった」

「お前の通ってる道場…、毒の耐性とかつけさせられてるのか……？ そこ、通ってて大丈夫なのか……？ お前はどこの特殊部隊に放り込まれる予定なんだ……？ いや、それこそ忍者だろ。もしかしてお前、忍者になる修行とかしてるのか……？」

「にんじやはもりにいたよ？」

「そうか…、っていうことはやっぱり特殊部隊送りか……。くっ…、戦場は過酷かもしれないけど、死ぬなよ、志穂……！」

「うん！ あたし、がんばるよ！」

「で、だ。その忍者は、今はどうしてる？」

「？ もりにいるよ？」

「だから、森で、何してるんだって話だよ。森にいるのは、お前の話聞いてれば分かるんだよ。何してるって言ってた？ それとも、それはやっぱり教えてくれなかったか？」

まあ、いくら志穂と打ち解けたからと言って、忍者が自分の任務の内容を漏らすとは思えないがな。現代まで生き残っている貴重なエンシエント忍者だ、きつと任務の失敗は死をもって償いまするっ！  
！ みたいな性質の人に違いない。

っていうか、与えられた任務の内容みたいな貴重な情報を、易々と漏らすようでは忍者として失格のような気がする。そう、情報は忍者にとって何よりも大事なものに違いないんだ、たぶん。

「えっとねー、なんか、おじょーさまがピンチにならないかみはっ



てるんだって。おじよーさまってだれかなあ、もしかして、してるひとかな？」

「いや、たぶん知らない人だと思うけどな。っていうか、今この旅館にどこぞのお嬢様が泊まってるのか…、どこの部屋に泊まってるか分かったらちよつと見に行きたいな……」

忍者を引き連れたお嬢様となると、きっと家が大金持ちで、常に豪華な和服を身にまとっていて、控えめな性格で、腰まである黒髪ロングの大和撫子に違いあるまい。うん、きっとそうだ、そうに違いない。ドレスみたいな服を着ていて、高飛車そうな感じで、金髪ドルルの西洋風お嬢様は、きっとこういうところ来ないし、そうに違いない。

「…、いや、別にいいか、見に行かなくて……。お嬢様はいないけど、俺にはいっしょにきた女の子がいっぱいいるし。霧子のことも、忘れちゃダメだよな？」

「う、うん、あたしも、ここにいるよ、幸久君」

「あたしもあたしも！ ゆっきい、あたしもいるよ！」

「分かってるって。きつとそのお嬢様っていうのも、霧子よりかわいいなんてことはないから、心配ないな。…、そういえば、霧子はどうしてここに来たんだ？ いや、別に用がないと来ちゃダメってわけじゃないけどさ」

「そ、そうだった。あのね、りこちゃんが、しいちゃんも帰ってきたし、一回外に出ないかって」

「そう、だな。ちよつと外出るのもいいかもな。よし、じゃあちよつと外行ってみるか。準備したらそっちの部屋に行くから、先に戻っててくれ」

「うん、わかったよ。しいちゃん、先にもどろ」

「はっい、ゆっきい、また後でね」

「お、いい子で待ってるよ。五分もしないで行くからな」

「はっい！ まってるっ！」

そして、いきなりやってきて嵐のように騒がしさだけをもたらした

志穂が霧子とつれだつて部屋へと帰っていくのを見送った俺は、とりあえず出掛けられる軽めの服に着替えるべく自分の荷物へと手をかけるのだった。

「三木様、お出かけをなさるのですか？」

「はい、ちよつと、街の方に出てきます。軽く見て回るだけなので、そんなに遅くはないと思いますよ。まあ、連れに異常に元気なのがいるんで、きっと帰ってきた後にもう一回出掛けることになると思いますけど」

「そうですか。それではどうぞごゆっくりなさってらしてください。私は、お部屋とお荷物の整理をさせていただこうと思いますが、そうさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「荷物の整理なんて、しないでいいですよ。手間でしょうし」

「いえ、三木様の御迷惑でなければ、ぜひやらせていただきたく存じます。ご迷惑、でしょうか……？」

「…、それじゃあ、お願いします」

「あ…、はい！ 精いっぱいさせていただきます！」

客の荷物の整理なんて、そんなの部屋付きの仲居としての領分を完全に逸脱している。断つたつて別に不自然なことじゃないし、っていうかむしろその方が自然だ。

でも俺は、やっぱりそれを拒むことはしなかった。出来なかった、と言った方がいいかもしれない。

あの目で覗き込まれると、どうしてかお願いを聞いてしまう。まあ、別に変な術を使つてるとかじゃなくて、俺が女の人の押しに弱いっただけなんだろうけどさ。

## これからどこ行こう？

「しかし、いい天気だな、無駄に……」

動き回りやすい軽めの服に着替えて、俺は四人と合流して旅館を出た。この旅館は市街地から少し離れたところにあるので、もしそちらに行ってみようというなら、さっき車で走ってきた道を逆向きに少し歩かなくてはならない。

「で、外に出るって言ってたけど、どこに行くんだ？　ちよつと、湖の方に行くにしては全員軽装備過ぎると思うんだけど」

俺が出掛けるために軽装に着替えたのと同じように、みんなの着ている服もさっきとは少し違うモノだった。

「私は、少し市街の方に出ようと思っている。家族への土産物を先に調達してしまった方が、あとで焦らなくて済むだろうからな。湖の方にはまた後で、一度旅館に戻ってから仕切り直して行くつもりだ」

「あたしは、さっき車で見た教会に行ってみようかな……。すごいきれいだったし、ゆっくり見たいかも。湖は、えと、どうしよう……、明日でもいいかな」

「あたしはみずうみいく！　いってきます！　ゆっきいもいっしょにいこ！」

『あたしもしほちゃんについてく。どんなところかちよつと見てみたい』

「ってことは、二人ずつで二手に分かれる感じなのか？　志穂は、

みんなといっしょに行動しなくて大丈夫なのか？」

「そういうことになるだろうな。なに、皆藤は持田といっしょに行動するんだ。問題はないだろう」

「俺は心配だな……。だって俺は霧子をさっきの教会まで連れてってやるって約束だし、志穂といっしょに動くことはできないじゃん」

「？ ゆっきいも、いっしょにくればいいのに」

「いや、だから、俺は霧子を教会まで連れてってやるの。体は一つしかないし、二つに分かれることはできないんだから、お前とはいっしょに行けないの」

「ゆっきいなら、ふたつくらいならなれるよ」

「どうしてそんなわけのわからんことを堂々と自信を持って言うことができるのか、俺にはまったく分からないんだが。俺は、プラナリアじゃないんだから二つには別れられないんだよ。真ん中から二つに切っても、二人分の俺が再生されるわけじゃないの」

「えゝ、そうなんだゝ…、そうだったんだゝ…」

「頼むから、そんなところで変にがっかりしないでくれよ……。お前は俺に何を期待してるんだ……」

『じゃあ、幸久くんはきりちゃんとのりちゃんといっしょに行くの？』

「ああ、そうだな。うん、そういうことになるかな。っていうか、どうせあとでみんなで行くんだし、二人こそ今はこっちといっしょに動けばいいんじゃない？ そうすれば志穂も俺の目の届くところに置いておけるし、無駄に心配する必要もない」

「えゝ、でもみずうみいきたいゝ」

「だから、行かないとは言っていないだろ。ただ、今はとりあえず街の方に行って、それからあとで、飯を食った後にでもみんなでいっしょに湖に行けばいいじゃん、ってことだよ」

「やゝ！ すぐいきたいゝ！ ゆっきいもいっしょにいきゝよゝ」

「俺は、霧子といっしょに教会に行く約束なの。無茶なこと言うんじゃないの」

「ゆ、幸久君…、あたしは一人でも平気だよ。だからしいちゃんといっしょに行ってあげてよ」

「ダメだ、霧子は俺が教会に連れていく約束だろ。っていうか、どうせ霧子は道に迷うだろ。こういう慣れない土地で一人にしたら、あっという間に道に迷うだろ」

「にゅ…、ま、迷わないもん……」

「霧子は困ったときに人に聞けないんだもんなあ……。迷ったら、どこにそれがあるかいまいち分からないまま動いちゃうんだもんなあ……。むしろ率先して、攻めの姿勢で迷いに行くからなあ……」

「にゅ…、む、昔のことだもん……」

「ウソ吐け、中三の修学旅行で京都行ったとき、霧子が班からはぐれてどっか行ったとき、俺が死ぬ思いで探しまわったの覚えてないとは言わせないぞ。あのときは、三時間くらいずっと全力疾走で探し続けたんだからな」

「あ、あのときは…、がんばって帰らないと思って……」

「そういうときは、はぐれたことに気づいたらそこから動かないで、って言うただろ。どうしてそこでがんばっちゃうんだ、って話だよ。いつもはそんなに攻めの姿勢じゃないってのに、ピンチになったときだけは変に攻めるんだよな、お前……」

「にゅ…、ごめんなさい……」

「だから今日も、俺が霧子を教会まで無事に送り届ける、これは決定。京都と違ってナンパみたいなことはされなと思うけど、迷われたら大変だからな」

「…、はあい……」

「あのときはたいへんだったからあ……。俺がなんとか見つけ出したときは、別の中学のやつにナンパされてたんだからな。広太に止められなかったら俺、そいつのこと再起不能にするところだったぜ……」

「あ、あれは、ナンパされてたんじゃなくて、あたしが困ってたから声をかけてくれただけで……」

「世間一般ではそういうのをナンパっていうんだ。まあ、修学旅行に行った先で地元の中学のやつをボコったら、たぶん大軍勢が押し寄せるだろうからな。あのときばかりは広太が止めてくれて助かった」

「で、でも、幸久君、その人たちのことぶってたよ……？　だ、だ

いじよぶだったかな…、幸久君が本気でぶっいたらすごい痛いし……」  
「えっ？ 本気でなんか殴ってないって。めっちゃ手加減したって、たぶん。まあ、俺が殴ったやつは霧子の手を握ろうとしてたし、うつかり力がこもりすぎてたとしてもおかしくはないけどな」

「う、動かなくなってたよね？ 助けてくれたのはうれしかったけど…、でも、動かなくなってたよね？」

「平気だって、そいつを一発で動かなくしたおかげで、他のやつらもみんなビビって逃げてっただろ？ あれは最小限の被害で済ませるために必要なことだったんだよ」

「にゆう…、ああいうことは、もうしないって約束してたのに……」

「いくら霧子との約束でも、どうしてもそれをする必要があるなら俺はする。殴らなきゃいけないときは殴る。拳を振るうべきときに振るえないで、大事な人が傷つくのは嫌だからな」

「幸久君、かつこいいっぽく言っても、暴力はダメなんだよ。りこちゃんも言ってるよ」

「いや、私は三木の考えに賛成だな」

「え…、そんなこと言わないで、暴力はダメって言うてよく……」  
「もちろん、暴力はいけないことだ。力を暴れさせてはいけないというのは、それこそ天方の言うとおりに違いない。しかし、力を振るうこと自体が全て悪というわけではあるまい。誰かを守るために振るわれる力を、私は暴力だとは思わない。確かに力を振るっているのだから暴力ではないか、と言われてしまえばそうなのかもしれないが、私は違うと思っているんだ」

「やゝ、姐さんはやっぱりいいこと言うな。さすがだぜ！」

「現に私も、風紀に所属することで力を振るわざるを得ない場面に遭遇することもないことではない。そういうときにやむを得ず力を使用することもある。私としてももちろん、そのようなことをせずに場を収めることができるに越したことはないと思っているが、そうすることでよりよく事態を収束することができることもある。それも一つの事実だ」

「霧子、これで分かったな…、男にはな、やらなきゃいけないとき、  
つていうのがあるんだ…。どうしても拳を振るわなきゃいけない  
ときっていうのが、あるものなんだ…。！」

「にゅ…、分からないもん…。！」

「ふう、まったく…、霧子もたいがい強情だな。志穂も分かってく  
れるよな。人間、拳骨で解決するしかないときだってある、よな？」

「『いけんのちがいの、たいりつもあらそいも、たいていのことは  
こぶしでかたがつく』って、ししょーがいったよ、ゆっきい。そ  
ういうこと、だよね！」

「いや…、同意しづらいな…。俺は流石にそこまでは言っていない  
んだけどな。だって、その言い草だと何でも拳骨で解決すればいい  
じゃん、みたいな投げやりな感じが漂ってくるが、俺はそんなこと  
言おうとしてない」

「それでゆっきい、『たいりつ』ってなあに？」

「そういう、常識のある人なら普通に知っていて然るべきな基礎的  
なワードの意味を俺に尋ねないでくれ。どうやって応えたものか、  
若干分からなくなっちゃうから」

「ひとことというところ？」

「…、喧嘩すること、じゃね…。？ 確かにお前、口げんかも拳骨  
で解決しようとするからな、たまに。軽く言い合いしてるだけで、  
急に手が出たりするから油断ならねえよな、お前」

「えー、でもゆっきい、いつもよけるし」

「がんばってるんだよ！？ いつもめっちゃがんばってよけてるん  
だよ！？」

「じゃあ、みずうみいこ、ゆっきい」

「話を流さないで！？ 今、けっこう大事な話してるところだから  
ね！？ つていうか、俺は霧子といっしょに行くからお前とはいけ  
ないって、今言ったところだよ！？」

「ゆっきいといっしょにいっしょの！ いっしょじゃなきゃ、や  
ー！！」

「駄々こねるんじゃないの。湖には、あとでいっしょに行つてやるから」

「いまいきたい〜！」

「わがままな娘だよ！ こいつは！」

『しほちゃん、幸久君はどうしてもきりちゃんといっしょに行っちゃうんだよ。諦めた方がいいよ』

「え〜、でも〜……」

『幸久君、今からきりちゃんといっしょにお出かけしたとして、どれくらいで戻ってくるつもり？ 一時間くらい？ それとも二時間くらい？』

「そうだな…、時間的に昼飯食ってから戻ってくることになるだろうから、二時間くらいかな。二人も、もし別行動するんなら自分たちでなんとか飯を食ってもらうことになるからな」

『しほちゃん、幸久くんといっしょに行かないとお昼ごはん食べられないんだって』

「ほえ？ ゆっきいといっしょじゃないと、おひるぬきなの？ おなかぺこぺこになっちゃうの？」

『そうみたい。幸久くんといっしょに行った方がいいんじゃない？ あたし、お腹ぺこぺこになっちゃうの、ちよつとイヤかも』

「うゅ〜…、あたしも、おなかぺこぺこはやだな〜……。でも、あたしみずうみいきたいもん」

『でも、確かにすぐに行くっていうのは無理みたいだけど、幸久くん、今日はなにがあっても後で絶対に行かないってわけじゃないと思うの。だから、お昼ごはんを幸久くんたちといっしょに食べてから、それから行くのがいいよ』

「にゃ〜…、すぐいっていっぱいあそぼうとおもったのに……」

『だいいじょうぶ、湖は逃げない』

どうやら、まだ少し不満はあるようだが、しかし志穂はメイの説得に応じてくれそうな雰囲気である。まあ、志穂が少しくらいのわがままを言うのは、いわば仕様のようなものであり、ある意味でどう



しようもないことなのかもしれないが。

志穂はどうしても自分が思ったことに一直線になってしまふところがあるので、今みたいなことになるのはよくあることなのだ。遊ぶことや楽しいことが真っ先に入ってそれ以外のことが視界から抜けおちてしまうなんて、やっぱるまだまだ子どもっぽいところが抜けきらないな、こいつは。

まったく、どうせ腹が減ったと真っ先に、そして一番騒ぐのは志穂だというのに、仕方ないやつだ。

## 教会探して路地に行く

「…、幸久君、こっちでいいの?」

「…、いいんだよ、こっちで」

「ゆっきいゆっきい、まよった? まよった? みちにまよった?」

「迷ってないよ!?! け、計算通りだよ!?!」

俺たちは、メイの強力な協力によって志穂の説得に成功したので、五人そろって街の方にてくくと降りていったのだった。

「やっぱり、りちゃんにもいっしょに来てもらった方がよかったんじゃないかな……。りちゃん、方向感覚すごくいいし」

「いや、俺もな、別に霧子ほど方向音痴ってわけじゃないんだわ。むしろ並以上と言っても過言ではないね。ああ、道に迷うなんて、ありえんね」

「で、でも…、教会、ないよ……?」

「車から見たときはけっこう小さくしか見えなかったけど、きっとあれは距離が遠かったからで、実際はかなりでかいはずだからそろそろ見えてくるはずなんだけどな。まあ、でかいかどうかは、俺の勘でしかないんだけどな」

「もお、ゆっきいがてきとうなみちにいっちゃうから、まよっちゃったねえ、きりりん?」

「適当な道なんて行ってねえよ!?! 教会はこっちですって、路地の入口に書いてあったよね!?! 二人とも、それは見たよね!?!」  
とりあえず、街まで降りてきた俺たちは、お土産を見に行く姐さんチームと行きにちらっと遠目に見かけた教会を探すための旅に出る霧子チームに分かれることにした。霧子チームには、探すのを手伝ってやるという事前契約に基づいて俺と、それから俺の目の届かないところにやってしまうのが甚だ危険な志穂が加入し、姐さんチームには別に教会は見なくていいかも、とメイが加入し、無事に二つのチームが出来あがったのだった。

そして、「お土産横町」とでも呼ぶべきなのだろうか、何軒もの土産ものの屋や特産品の店が立ち並ぶ観光客をそのメインターゲットにした商店街のようなところの入口で姐さんチームと分かれた俺達、特攻野郎霧子チームは、さっそく結成以来最大の危機に見舞われているのだった。

いや、別に俺が変な路地を変な風に曲がったりして変な道に迷いこんでしまったわけではない。路地の入口に、「聖フランチェスコ教会↓こちら」みたいなことが書いてあったからサクッと曲がっただけなのだ。

「お、落ち着け、二人とも……！　まだ俺たちが迷ったと決まったわけじゃない。とりあえず、さっきのところに教会はこっちって書いてあったのは間違いないんだ！　それでまだ着いてないってことはそりゃ、まだそこまで至ってないってだけだろ？　つまり、もう少し行けば案内の通りに、必然として教会にたどり着くってことだ！」

「ほんと？　ほんとにつくの？　ゆっきい、だいじょぶなの？」

「志穂！　ネガティブに物事を捉えるな！　元氣に行くぞ！」

「は〜い」

「霧子、匂いとかしないのか？　教会の匂い」

「にゅ…、教会の匂いは…、ちよつと分からないかも……」

「そんなことないって、教会っていうのは聖域だ。聖なる空間からは、そりゃなんとなく聖なる空気が漏れだしてて、聖なる匂いがしてくるもんだろ。そういうアレを、嗅ぎ分けてくれ、霧子！」

「む、無理だよお……」

「むむっ！？　ゆっきいたいちょう！　あっちからいいにおいがします！」

「お前の言ういい匂いっていうのは美味しそうな匂いのこと、それは商店街の方から漂ってくるたい焼きの匂いとかだろ。腹減ったのは分かったから、お前は少し黙ってろ、志穂」

「はーい……」

とにかく、こっちにあるよと言われた以上、進行方向に教会があるのは間違いないわけで、俺たちがいまだそこにたどり着けていないということは、つまり、まだ俺たちの進み方が甘いということに他ならないのだ。こんなところで立ち止まっている暇があったら、少しでも先に足を進めるべきで、そうしなければ目的地である教会へとたどり着くことは叶わぬ夢と散るだろう。

それにそもそも、まだ歩き始めてから数分も経っていないわけで、いくら案内の標識が出ていたからといって、それっぽっち歩くだけでたどり着けるはずがないではないか。そんなに簡単に目的地に着いてしまうようでは、旅というものの楽しみを満喫することができない。

旅というものは、困難な道程そのものを楽しむという側面があるのではないだろうか。そうだよ、簡単に目的地に着いてしまつては、本当にこっちであつてののかなあ…、とかこの道は間違つてないよね…、とかのハラハラ感を味わうことができないじゃないか。つまり、今の俺たちの現状は、まさしく旅を満喫してる！ 正しい旅人の姿がそこにあるんだ！

「って、んなわけあるか！」

「幸久君、どうしたの……？ 急にびっくりしたよ……」

「すまん、進った」

「な、ならいいんだけど…、でも、なかなか着かないのはほんとだよね」

「ほんとだよな、困ったな。せめてあとどれくらいで着くよ、みたいな看板があれば」

「あつ、ゆっきいみてみて、あそこになにかかいてあるよ！」

「なに！？ よし！ 志穂、でかした！！ なになに……？」

次のチェックポイントまだかよ…、と俺がぶつくさ言っていると、なんと間もなく志穂が次のチェックポイントと思しき何かを発見したらしい。そこはワイ字路になっていて、確かに何もなければどち

らに行つたものか立ち往生してしまうだろうところだった。こうして所要所にポイントになるものを置いておいてくれれば、俺たちは迷ふことなく目的地であるところの教会へとたどり着くことができるだろう。

しかし、一つ目から二つ目までの間が長すぎたんだよなあ……。これじゃ今の俺たちみたいに、意味もなく不安になつてしまう人が出てしまうではないか。やっぱり、こういうところでは目的地まで50メートル毎に一つくらいは目印になるものを置いてほしい。

ただでさえここはかなり狭い路地で、ようやくすれ違ふことができないかどうか、というくらい道なんだからな。まあ、教会なんて基本的には観光客がたくさん来ることを目的にしてないから、こういう少し分かりづらいところに建つていても問題はないのかもしれないけどさ。

でもこの土地自体が観光によつてかなりの恩恵を得ているんだから、少しくらいは流れに迎合してもいいんじゃないか、とは思ふけどな。

『聖フランチェスコ教会↓こちら』

「……………」

「さつきと同じこと、書いてあるね……」

「こっちだよ！ ゆっきい！」

「それは、分かつてる……」

いや、別にさ、ワイ字路でどっちに曲がったらいいかを教えてくれるんだからありがたいんだけどさ。確かにこのワイ字路を逆に向かつちゃったら全然違ふ方に行つちゃつただろうから大助かりなんだけどさ。

でもなんだろう、この全然ありがたくない感じ。これは、なんというか、すごい徒労感を覚える。時間的には十分も歩いてないからこんなこと言うのはおかしいかもしれないけど、すげえ疲れた。この看板を見た瞬間、すげえ疲れた。

「ちよつと、休憩していいか……？」

「あたしも、ちよつと、休みたいかも……」

「えー、あたしは？」

「じゃあ、志穂はちよつとこの先まで行って、ほんとにこの先に教会があるのか見てきてくれ……。俺と霧子はここで待ってるから、ひとつ走り頼むわ……」

「はーい！ まかせて、ゆっきい！」

「がんばれ、志穂。そして頼んだ……」

「しいちゃん…、ごめんね、よろしく……」

「まかされたー！！」

志穂は、この二つ目の看板のせいで力の抜けてしまった俺たちを置いて、教会があるらしい方へと走っていくのだった。しかし、この看板を見ても力がまったく抜けないあたり、俺たちの中ではあいつのメンタルが一番強いんだろうなあ。姐さんもメンタル強いように見えるけど、中身はけっこう乙女だから細かなところで気付かれないくらいこっそりと、ささやかに傷ついているんじゃないかと思う。その点、志穂は基本的に深く物事を考えないからな。今回の看板も、きつと文字通りこっちの方に目的地の教会があるんだと思っているだけだろうし、俺たちが感じているような変な疲労感を覚えることもないんだろう。

「幸久君…、なんだかあたし、疲れちゃった……」

「俺もだ、霧子…、気が合うな……」

「その看板見たら、力抜けちゃったかも……」

「俺もだ、霧子…、気が合うな……」

たとえば、なんというか俺と霧子は二人とも、「目的地まであと五百メートルだよ！」と言われて、それからしばらく歩いたっていうのにまた「目的地まであと五百メートルだよ！」と言われたような、そんな感じだった。今までしばらく歩いてきたんだけど、どうして目的地までの距離が全然減ってないの？ みたいな、そういう疑問が頭の中を歩き駆っているのだが、おそらく霧子の頭の中も同じような状況なんじゃないかと思う。

「別にたくさん歩いたってわけじゃないのに、不思議だな……」

「そう、だね…、足が疲れたっていうより、心が疲れちゃったんだよ、たぶん……」

「心は、だいぶ疲れてる…、この旅行に来てから、だいぶ疲れてる……」

「そう、だったんだ……。…、ね、ねえ、幸久君…、一つ聞いてもいい、かな……？」

「ん？ どうした？ 別になに聞いてもいいぞ？」

「う、うん…、あの、ね？ さっきの仲居さん、も、もしかして、幸久君、知ってる人？」

「？ どうしてそんなことを聞く？」

「え、えと…、にゅ…、あの人、去年はいなかったはずなのに、幸久君、お話したいからって車の後ろの席に二人で座ってたし……。それに車の中でしてたのも、なにか大事なお話だったみたいだったから……。にゅ、そ、そういうことじゃなかったら、いいんだけど……」

「なんだよ、霧子、ヤキモチか？ この…、可愛いやつめ。だいじょぶだって、俺は霧子のことが一番かわいいからな、心配すんなって。まあ、俺の知り合いの中で霧子の知らない人っていうのは少ないからな。自分の知らない人が俺といっしょにいたから不安になっちゃったか？」

「にゅ…、ヤキモチじゃ、ないもん……。ちよつと、あれ、って思っただけだもん……」

「まったく、かわいいんだから、この娘ってば。ん…、なんて言ったらいいか分からないんだけどさ、とりあえず、俺はあの人のこととは知らないんだよな」

「知らない、の？」

「ああ、会ったことない。おじさんにも聞いてみたけど、俺が覚えてないだけってこともないだろうって。とにかく、霧子が心配するようなことはないから、安心してくれていいぞ」

「にゅ…、し、心配なんて、してないもん……」

「まあ、あの人は俺のこと知ってるみたいだから、よく分からないんだけどなあ」

「？ 幸久君はあの人のこと知らないのに、あの人は幸久君のこと知ってるの？ にゅ、どういうこと？」

「そのまんまだよ。俺は知らないけど、あの人は知ってるんだ」

「会ったことないのに？」

「それについては俺もよく分からない。おじさんが言うには、三枝さんの後見人してる人っていうのが、どうも三木の家とつながってる人だったみたいだ。だから、そのつながりを通して俺のことを人づてに聞いたんじゃないか、っておじさんは言ってたよ」

「にゅ、うわさ、みたいな感じかな……？ 幸久君、うわさになってるの？」

「らしいぜ。イヤだな、自分の全然知らないところで自分がうわさになってるのって。俺、これから人のうわさ話するの、控えることにするわ。自分がされて初めて分かる、ってもんだな」

「でも、幸久君、うわさになるって、何かしっちゃっての？」

「いや、分からん。別に何をしたつもりはないんだけど……」

でもまあ、うわさって何がきっかけで始まるか分かったもんじゃないからな」

「それは、そうかも。でも、びっくりだよね、こういうところで自分のこと知ってる人に会うなんて。すごい偶然かも」

「偶然……、なのかな……」

「？ 偶然じゃないの？」

「いや、なんていうか、……、出来すぎてるっていうか、つながり過ぎてるっていうか……、いや、俺の気のせいだと思っただけだよ」

「にゅ……、ね、ねえ、幸久君、あの、三枝さんの後見人の人って、誰だったの？ 幸久君のこと、知ってる人だったんだよね？」

「ん？ ああ、うちのじいさんと、なんか仲良かった人らしい。だからうちのこともよく知ってるんだとさ。まあ、俺は知らないんだけどな」



「幸久君のお家は、昔はすごいおっきい家だったんだよね。その人のお家も、すごい家なの？」

「霧子も知ってると思うぞ、たぶん。いや、その人を、っていうか、その人の会社を、だけどさ」

「会社？　どこかの会社の、偉い人？」

「フタミ、知ってるだろ？　フタミグループ」

「フタミって、あの？　フタミ化成の親会社？」

「フタミ化成…、ああ、そうそう、それも系列会社かも。あの人さ、その会長の、二見啓蔵って人の知り合いなんだってさ」

「ふえ…、すごいね…。うちのキッチンにフタミ化成のスポンジとかラップとかあるもん…、びっくりしちゃったよ…。」

「ああ、あの、水で流しながら擦るだけで汚れが落ちるっていう、意味の分からんスポンジな。晴子さんが洗剤代からなくていいとか言ってたかも」

「あの人…、もしかしたらすごい人なのかもしれないねえ…。」

「そうなのかも、しれないな、うん…。」

「ゆっきい！　むこうにきょかいあった！　ほんとにあったよ！」

「おお、そうか。っていうか、おかえり、志穂」

「ただいま！　ゆっきい、きょかい、あった！」

「よしよし、それじゃ、志穂が見つけてきてくれたことだし、霧子、行くか」

「うん、そうだね」

「っていうか、早かったな、志穂」

「はした！」

「そうか、走ったか。お前、走るのめっちゃ早いからな」

「がんばった！」

「よしよし、えらいえらい」

三枝さんについては、霧子が心配してくれるのはうれしいのだが、残念ながら俺にも今言った以上のことは分かっているのが現状で、言ってしまうえば何も分かっているに等しいだろう。とりあえず今

は、何も分かっていないのだから、霧子を心配させることがないように気をつけるべきだろう。今のままでは霧子を安心させるために話をする、ということもできないのだ。見せるべき情報と隠しておくべき情報を、もったときっちり見極めるようにしていけないといかないな。

まあ、とにかく今は、ダッシュでこの先に本当に教会があるのかを探ってきてくれた志穂のおかげで行くべき道も定まったことだし、教会に向かって進むとしようではないか。

## 強さっていうものは

「おお、ほんとにあった……」

「あったでしょ？」

「にゅ…、路地にあったにしては、けっこうおっきなところだね」

「まあ、他の所に比べたら別に大きくない、っていうか、むしろ小さいくらいかもしれないけどな」

志穂がひとつ走りして斥候してくれたおかげで、俺と霧子はある程度落ち付いた心持ちで教会への道を進むことができた。やっぱり、この先に目指しているものが確かにあるっていう安心を持って進むことができるようになったく焦ったりしないな。

まあ、志穂が見つ付けてきたものが本当に俺たちの目指しているものだったっていう確証はなにもなかったわけで、ある意味では少なからず不安に思う気持ちはあったんだけどな。

「じゃあ、入ってみるか。俺はこういうところの良し悪しみたいなのはよく分らないんだけど、まあ、そのへんは霧子が判定してくれるんだろうしな。志穂、俺たちはのんびり見てればいいぞ」

「なかに、なにがあるの？」

「何がある、ってわけじゃないんだよなあ。霧子は別に中身が大切だからここにきたわけじゃないんだ。この建物が見たかったんだよ」

「？　じゃあ、このなかにはなにもいないの？」

「んー、教会の中には、神様がいるんだろうから何もいないってわけじゃないだろうけど…、まあ、入ってみれば分かるんじゃないか？」

「かみさまいるの？」

「いる、と思う。俺は神様って見たことないからよく分からないけど、たぶんいるんだと思う」

「かみさまって、どんなの？　じんじやにいるのとおなじ？」

「神社の神様は、日本の神様だからな…、同じかどうかは……。っていうか、日本には八百万の神様がいるって言ってな、ほぼ無限の

神様がいろんなものの中にいるって言われてるんだ。だからそもそも、日本中の神社にはそれぞれいろんな神様が祀られてるんだ」

「かみさま、そんなにいっぱいいるの！　すごい！」

「でな、今ここにある教会っていうのは、ヨーロッパの方に強い力を持つてるキリスト教の神社みたいなもんだ。ここには、キリスト教の神様がいるんだな」

「きりすときょう？」

「えー、全部説明するの？　キリスト教のこと、一から十まで全部説明しないとダメなのか？」

「じゃあ、10だけ」

「世界各地に教会があつてな、キリスト教を信じてる人はそこに行つてお祈りするんだ。分かったか？」

「んー…、よくわかんない！」

「だろうな、最終的結論だけ話されても、何にも分からないに決まつてるよな。それは分かってたよ。とか言ってるうちに霧子が一人で中に行っちゃったよ」

「ゆっきいー、よくわかんないよー」

「ああ、もう、つまりな、キリスト教っていうのは、神様が一人いて、その神様を信じましょー、って宗教なの、大ざっぱに言うのと、分かった？」

「かみさま、いっぱいいるのにひとりしかないのー？　…、どっち？」

「日本の宗教の人はいっぱいいると思ってるし、キリスト教の人は一人しかいないと思ってるの。考え方が違うんだよ。俺は果物はりんごが一番好きだけど、志穂はスイカが一番好きだろ？　それと似たようなもんだって」

「えー、へんなのー」

「宗教っていうのは、外から見たら少なからず変に見えるものなんだよ。でもそれ、信じてる人の前で言っちゃダメだからな、約束」

「？　はーい？」

「戦争になっちゃうからな、戦争」

「みんなとあたしがたたかうの？　かつよ！」

「どうしてそんなに無駄に自信満々なの！？　負けるよ！　っていうか負けるよ！　一回負けてこいよ、お前は！」

「でもししょが、あたしのでしはぜったいまけちゃいけない、っていった」

「もう、お前は俺が倒す！　今じゃないけど、いつか絶対に倒すからな！」

「えゝゝゝ、ゆっきいにはかてないよゝ。まけちゃうよゝ」

「ここでひくの！？　戦争になっても勝つって言ったお前が、どうして俺に勝つのは無理みたいなこと言っちゃうの！？　俺はどれだけ強いの！？」

「ゆっきいならきつと、みんなにかてるよ！」

「誰にも勝てないよ！　俺なんて！　きつとお前にも負けるよ！」

あつ、いや、お前には、勝つ！！！」

「ゆっきいにはまけちゃうよゝ……」

「もゝ！　変なところで弱気になっちゃうんだからゝ！」

「あつ、あと、ししょゝにもかてないかもゝ」

「ゝゝ、とにかく、戦争禁止！　もしそういうことになっちゃたら、まあ、友だちのよしみで少しくらいなら手を貸してやってもいいけど、でも絶対にダメ！」

「ゆっきいがおてつだいしてくれたら、せかいせゝふくできるよ！」

ねゝ、やろうよ、ゆっきいゝ」

「なんでそんな、近所のコンビニ行くから付き合って、みたいなノリで世界征服しようとしてるの！？　俺は世界征服なんてしないでいいよ！　王の力はお前を孤独にするよ！？」

「おうさまはゆっきいね。でねゝ、あたしはたいちよゝでゝ、りこたんはだいじんでゝ、きりりとメイメイはメイドさんでゝ、こうたんはしつじゝでゝ」

「支配した後のことまで考えてるぞ、こいつ！？　しかも自分のこ

とはさりげなく隊長にしているし、意外と計算高いな、お前!?  
っていうか、王女様は? 俺に奥さんいないの?」

「せかいじゅうのおんなのこが、みんなゆっきいのおよめさんだよ!  
! おうさまだからね!」

「お、王は王でも…、とんだ鬼畜王だああああああああああああああああああ!?!? そんなこと、しねえよ!? そんなことしたらあつという間にクーデターで王権打倒されちゃうわ!」

「でも、ゆっきいのことはたいちよりのあたしがまもるから、へいき!」

「隊長は守ってくれるかもしれないけど、軍隊が守ってくれないだろ…。あゝ、ダメだ、やっぱりダメだ。やっぱり戦争なんてしちゃダメだわ」

「やるまえからあきらめちゃうの!」

「そもそも戦争なんて、起こそうと考えることすらおこがましいわ!? そういうのは、人型決戦兵器とか超合金スーパードロボットの開発でもない限り、考えるべきじゃないことなんだよ!」

「じゃあ、それができたらせんそうだね! だれがつくってくれるかなあ」

「戦争したいのか、お前!? 俺はしたくないぞ! 絶対したくないからな、戦争なんて!」

「えゝ、でもあたしとししょとみゅうみゅうだけだとたいへんだよ、かてるけど。ゆっきいもおてつだいでくれないと。ゆっきいがね、後ろからドカーンってビーム撃ってくれないと」

「三人で世界を相手取って戦争しようなんてバカだよ!? 死んでしまえ! 死んでから後悔しろ!! っていうか、俺はそんなロボットには乗らない! 絶対乗らない!」

「? ゆっきいはロボット乗らないよ? ロボットはねゝ、メイメイにあげる」

「? ロボット乗らないのに、ビームなんて撃てるわけないだろ?」  
「ゆっきいは、ロボット乗らないでもビーム撃てるでしょ? こう、

てから、ビーーーーー！！　　って」

「出ない！？　出ないよ！？　手からビームなんて出ないよ！！  
そんなこと出来ない！！」

「ゆっきいってば、じょうだんばかり。できるでしょ、それくらい」

「冗談ばかりなのはそっちだろ！？　普通の人間は手からビームなんて出ません！！」

「ゆっきいは、とくべつなにんげんだよ！」

「うれしくない！？　そんな特別、全然うれしくない！？」

「でも、ゆっきいってなんだかとかべつってかんじ」

「特別って、どこらへんがだよ。言っとくけど、俺の手からはビームも毒霧も出ないからな」

「にゃ、あたしじゃうまくいえないんだけど、なんかもやもやうってしてる。なかからそとに、もやもやうって」

「もやもやって、どういう意味だよ。中から何か出てんのかよ、俺」

「うん、なんだかわからないけど、なにかでてるかんじ、する」。

「オーラ、みたいな、もやもやが？」

「うん、お前自身まったく何も分からないで話してるってことだけはよく分かった。出てるオーラが見えるって、お前何者だよ。サイヤ人かなにかなのか」

「ん、オーラじゃないかも…、でも、なんだかつよそうなかんじはするもん。わからないけど、ぴりぴりするかんじ」

「俺からピリピリする何かが出てるのか……？　無意識で空気中に何を放出してるんだ、俺の身体は……」

「だからね、ゆっきいはボスだとおもうの」

「ボス？　俺はなにも従えてないけど？」

「にゃ、でも、ボスってかんじなの。ゆっきいはつよいかんじなんだもん」

「俺が強いんだったら、うちの学園の生徒は大体強いことになっちゃうだろうが。俺なんて雑魚だよ、雑魚。もし強いとしてもボスじ

やない、中ボスくらいが限界だ」

そもそもからして、志穂が強いのだ。そんな常識外れに強い志穂に、お前は強いぞ！　なんて言われても、なんのこっちゃとなるに決まっている。俺が志穂よりも強いなんてありえないのだ。だってもしそうなってしまったら、志穂唯一の優位点である「学園で三指に入るほどの強さ」というポイントが損なわれてしまうではないか。

ちなみに、学園最強の三人というのは、志穂が三番くらいらしく、その上には剣道部の部長と風紀委員会最強がいる、らしい。そういうランキングを誰が作っているのかはよく分からないが、もっぱらそういう評判になっているのだ。つまり、志穂に勝てるということとは学園の天辺が射程圏内に入るという意味であり、文字通り学園のボスとして君臨することも不可能でない、という意味なのだ。そして、俺は志穂に勝てないのでそんなことはできないのである。

「つていうか、前から少し聞きたかったんだけど、お前は どうして俺がそんなに強いと思ってるわけ？　だって俺、きつとお前にあつという間に負けるぜ？　そんなやつが、強いはずないだろう？」

「そんなことないよ、ゆっきいつよいもん。もやもやがすごいもん。ほかのひとには、そんなにかんじたことないもん」

「またもやもやか。なにがそんなにもやもやしてるんだつつうの」

「にゃゝゝ、だからあ、なにかいるかんじっていうか、えと、けはい、つていうんだったかなあゝ、なにかかんじるんだもん」

「気配？　俺の中に、何かいるっていうのか？　それこそありえないって話だろ。俺の中に何がいるっていうんだ。俺は俺だ」

「ゆっきいはゆっきいだよね、うん。でも、ゆっきい、なにかがいのるんだよ。だからつよいの」

「何かいるって、気味悪い言い方するなよな。お前が行ってるのは、守護霊みたいな何か、って感じなのか？」

「んゝ、そうじゃないんだけどゝ、そうかも？」

「じゃああれだ、きつと俺の親父とお袋だ。俺がちっちゃいときに死んじゃったからさ、俺のこと心配で見えてくるんだよ。きつと



「そうだよ」

「えー、そうなのかなあ……？　でも、あんまりゆっきいとなてないよ？」

「似てるかどうかは分からないな…、俺はどっちの顔も全然覚えてないし、写真も全然残ってないから見たこともないんだよな」

「にやー、わかんないよー。よくわかんないけど、でもゆっきいといっしょにだれかいるのだもん。だからゆっきいはつよいんだもん、たぶん！」

「じゃあ、そういうことにしとくよ。志穂の行ってることは信じがたいけど、でもそれがほんとじゃないって証拠もないしな。疑ってばかりじゃダメだもん。志穂がそう言うからには、きっと何かいるんだよな」

「うん、そうだよー。ゆっきいはつよいんだから、ね！　いちばんつよいんだから！」

「いや、一番かどうかは、どうだろうな……。まあ、志穂より強いってことで、三番くらいにしといてくれ」

「えー、いちばんっていつちゃえばいいのにー。ししーがね、そういうのはいったもんがちだって、いつてたよ」

「まあ、俺は出来ればそういうことは言いたくないんだけどな」

確かに志穂がそういう他人の強さを見極める眼力みたいなものを持っている、ということは認めた方がいいことかもしれないが、でもだからって俺が言われたとおりに強いなんて認めることはできない。俺が強いなんて、そんなことはないのだ。

強さというのは、修練と鍛錬によって磨かれるものなのであって、俺のように何もしていない人間が身につけているはずがないのだ。もしかしたらそこらへんの木端の不良くらいにだったら勝てるかもしれないけど、でも本格的に積み重ねている人には敵うべくもない。志穂だって、確かにあんなほえほえだけど、昔から道場に通っているというし、才能やそもその身体能力も相まってその強さは半端なものではない。俺なんかが対抗できるかといえば、無難に無理と

言わざるを得ないのだ。

しかしそうだというのに、志穂は頑なに俺が強いと主張しているのだ。どうしてかは、何度かこうして問うているもののよく分からないままだ。何がどうなって、志穂の中でそういう意識が生じてしまっているのかはよく分からないが、でも執拗にそう言い続けるということはきつと何かが引つかかっているのだろう。今日言っていたところで考えると、あのなんだか見えるという「もやもや」だろう。「まあ、なんでもいいや。とりあえず、霧子のこと追いかけるぞ」「あつ、うん！」

俺が強いなんて、そんなことあるものか。

俺は小市民でいい。変な力なんて、別にいらないんだから。

## 教会より脱出せよ！

「霧子、昼飯食うから姐さんたちと合流するぞ」

「にゅん」

「……、聞いてないな」

教会に入ってから30分と少しして、俺は姐さんからお土産の買い物が終わったから合流しよう、という電話を受けた。そして、時間的にもちょうどいいから昼飯にしようか、ということなのである。そんなわけで俺たちは今から、まさに俺たちがいるところの教会から一步を踏み出さなくてはならないのだが、しかしその第一步を踏み出そうにも踏み出せずに手をこまねいている、いや、足をこまねいているのであった。

「霧子ちゃん、ご飯にしようと思うんだけど」

「にゅん」

「……、聞いてくれよ」

「ゆっきい、きりりん、どうしちゃったの？」

「霧子はどこかに行っちゃったんだよ」

「？ きりりん、ここにいるよ？」

「魂だよ、魂がどこかに行っちゃったんだよ……」

「ほえ、きりりんってば、どこかにいっちゃったんだなあ？」

「お前、語尾にハテナつけながら、よく分かってないのに分かったみたいに返事するのはやめろよな。ったく…、俺の言ったことに対して適当に相槌打つのだけ、どんどん得意になっていくな、お前は」  
「えー、そうかなあー、えへー。にやはー、ゆっきいにほめられちゃったー」

「いや…、褒めてないんだよなあ……」

そんなくねくねしながら喜ばれても、正直困ってしまうのである。というか、俺としては褒めているつもりは全くなくて、むしろ氣をつけなさいよ、と注意しているつもりなのだが、まあ、人間はそう

易々と思いを言葉で伝えることはできないということなのではないだろうか。

まあ、そもそも志穂に対して皮肉を込めて何かを言ったとしても、その皮肉の部分が理解されることは九割五分あり得ないわけで、俺の言葉選びも悪かったと言わざるを得ないだろう。志穂に何かを物申すときは真正面からまっすぐに、野球で言うならど真ん中ストレートで攻めないといけないわけで、基本的に変化球中心で低めに集めたい俺みたいな技巧派タイプが相手取るにはなかなか厳しい相手なのである。

「まあ、いいんだけどさ、それは。それより霧子ちゃん、さつき姐さんから電話があつてな、あっちは買物終わったからこっちに合流したいんだってさ。それでな、時間的にもちょうどいいから一回ここから出て昼飯にしようかって話になったんだ。というわけで、霧子、ここからいったん退散する準備をしてくれ」

「にゅーん」

「おい、さつきよりも返事がぞんざいになってるぞ、霧子。もっとかまってくれないと、俺、泣くぞ」

しかしどうやら、この教会は霧子のハートをがっちりつかんで放さないらしかった。俺は霧子と違って教会とかの良し悪しみたいなものはよく分からないから、どこら辺のポイントが霧子のハートをクリティカルでぶちぬいたのかということは判断できないが、しかしどうも、この空間をいたくお気に入りしてしまったということだけは確からしい。

まあ、確かにこの場所がいい場所らしいということくらいだったら、俺にでも分かるというものだ。地元の人にはあまり人気がないのだろうか、あまりに静かすぎるがらんだこの聖堂は大きなステンドグラスを通して差し込んでくる陽光によってほのかに照らされ、キラキラとした色とりどりの光たちがキレイに磨き上げられたタイル張りの床を彩っている。

そして、無数の色ガラスを組み合わせて造られているそのステンド

グラスには、幼子の姿をした神の子イエスとそれを抱く聖母マリアの姿がモザイク調で描かれている。信徒ではない俺にはそれがどういった宗教的意義を持っているのかは分からないが、その存在感には少なからず圧倒されるし、それに素直にキレイだと思う。

そしてなによりこの、ピンと張りつめたような、どうしてか少し寒気すら覚えるような空気の感じがいいのだろう。これは聖域と呼ばれる空間に特有のもので、神社なんかでも感じるのだが、きっと神様に見られてるのってこんな感じなんじゃないだろうか。

「霧子、そんなにここが気に入ったんならあとでもう一回来てもいいから、今はとりあえず出よう。さっき、姐さんにもすぐにそっちに行くって言っちゃったんだって。だから早くいかないよ」

「にゅう……」

「霧子！ 頼むから俺の話を聞いて！ 俺、姐さんに遅い！ って怒られるの嫌な！ だから、お願いだから、いっしょにここを出て、姐さんたちのいるところにいこう！ な！？」

「にゅん……」

「…、もう聞く気ないんだなあ、この娘ってば。それとも、昼飯いらないってことなのかなあ……？ 俺のことを無視することで遠まわしにそう言ってる、とか？」

「にゅ」

「ゆっきい、きりりんはここがだいすきなんだね。もうでたくないんだね」

「そうなのかもなあ…、霧子って基本よわよわに見えるんだけど、微妙に頑固だったりもするんだよな。それに集中しちゃうと周りが見えなくなっちゃうし。まあ、そういうところもかわいいんだけどな」

「あたしもがんこ？」

「志穂よりも姐さんの方が頑固だろ」

「えー、そうかなあ？」

「…、志穂、言っとくけど、頑固って別に褒め言葉じゃないからな

？ お前はきつと頑固って言葉の意味を分かってないだろうからいちおう言っとくけど、そんなに誉めてないからな？」

「そうなの？　かわいいとおんなじようなことばじゃないの？」

「えゝゝ、いや、確かに俺は頑固な霧子もかわいいって言ったけど、それは頑固とかわいいが同じ意味ってことじゃねえよ。お前は、もう少しいろいろと考えて生きていった方がいいと思うぞ、志穂……」  
「にゃゝ、ことばってむずかしゝ」

「そうか、言葉は難しいか……。俺にしたら、お前にとって難しいこととしてどんなことが挙げられるのが疑問でならないよ」

「むずかしくないのは、たいく？」

「体躯？　ゝ、ああ、体育な。確かに体育は、お前に取っちゃ難しいことじゃないだろうな。でもな、志穂、身体を動かすだけじゃ生きていけないんだぞ。頭もいっぱい働かせないとダメなんだ。なんというか、反射で生きてちゃいけないんだよ」

「はんしゃ？」

「そうだ、ちゃんと脳を通していかない。脊髓で止めてちゃいけないんだよ」

「？　わかったゝ？」

「ああゝ、分かってくれなかったか……。ちよつと難しいこと言いすぎたな……」

「ゆっきい、どんまい！」

「今、この瞬間、お前にだけは言われたくなかったな、その慰めの言葉」

しかし、さて、どうやら言葉だけで霧子をここから連れ出すのは無理っぽいと判断した俺は、とりあえず何としてでも昼飯に連れて行かないといけないわけで、仕方がないから何らか直接的手段を取ることによつて霧子の魂をここに呼びもどすことにした。まあ、別に直接的手段と言っても暴力的に危害を加えていたり、破廉恥なボディタッチによつて強制的に意識を取り戻させるわけにもいかないわけで、取ることができる方法は非常に制限されてしまうわけなの

だが。

「志穂、霧子の後ろに立って」

「？ はい」

「じゃあ、俺が合図したら手で目隠しするんだぞ。分かったか？」

「はい」

「よし、やるぞ」

「うゅ？ やるって、なにを？」

「ん？ 霧子のことをここから連れ出すんだよ。これから昼飯だからな。志穂だっておなか減っただろ？」

「うん、おなかへった」

「それじゃあ、さっさと霧子を連れて姐さんと合流するからな。志穂は何があっても霧子にしてる目隠しを外すんじゃないぞ」

「うん、がんばる！」

「よし、じゃあ目隠ししてくれ」

「はい。えい！」

「…、にゅ？ 暗い？」

「霧子、大変だ！ 妖怪だ！」

「よ、妖怪！？ きよ、教会に、妖怪はいないよ！？」

「それは霧子の思い込みだ！ やつらはどこにだっているんだ！  
っていうか今、霧子の目の前が真っ暗なのはそいつのせいなんだぞ  
！」

「ふえ…、ゆ、幸久君…、どうしよう…！」

「とりあえず、立ち上がったるなよ。座ったままだ、座ったま  
ま」

「う、うん……」

実は、俺は長年の付き合いによって霧子の生態をよく理解しているから、さっきみたいに魂をどこかに飛ばしてしまった霧子がどういう風にしたら意識を取り戻すか分かっているのだ。それに意識を何とか取り戻させた後、どうしたら再びどこかに魂を飛ばさせてしま  
うことなくその場から霧子を連れだすことができるかも分かっている

るのである。

具体的にどうするかといえば、何はともあれ視界を奪うのだ。霧子がどこかに魂を飛ばしてしまうのは、基本的に何かキレイなものとかキレイな景色とか、そういう目で見る類のものであることが多い。だからそれを奪ってしまえば必然意識も帰ってくる。

しかし気をつけなくてはならないのは、意識が戻って来たからと視界を返してあげると、再び瞬く間に意識をどこかにやってしまうというやっかいな性質があるという点だ。だから絶対に視界を返してあげてはいけない。その点だけを守れば、霧子は意識を取り戻した状態をキープしてくれる。

しかし、最近霧子もとみに賢くなってきた、真っ暗になっている状況を解決するためには目をふさいでいる俺の手をどけてしまえばいい、ということに気づいてしまったのだ。それに気づかれてからというものの、目を覆っているものから俺の手の感触を感じ取るといそいそと外しにかかる、という困ったことになってしまっているのである。だから霧子の目を覆うのは俺の手であってはならないわけで、第三者の協力を得なくては太刀打ちすることもできなくなってしまっている。

「久しぶりに出てきたな、妖怪『空目隠し鬼』」

「にゅう…、どど、どうしよう……」

「とにかく、いつもと同じに対処するぞ」

「う、うん！ 妖怪『空目隠し鬼』は、立ち上がると目隠ししてる人を食べちゃうんだよね……」

「そうだ、だから立ち上がるなよ」

さて、どうやって霧子に目隠しをしたままその場から立ち去るかと言えば、そこで出てくるのが妖怪『目隠し鬼』なのだ。

視界を閉じたまま霧子に動きまわられると、その天性のドジスキルによってほぼ確実にコケる。コケられてしまうと、ほぼ間違いなく目隠しが外れる。『目隠し鬼』というのは、その手間を完全に取り去るべく中学生のころに俺が考えだした架空の存在である。



設定としては、『空目隠し鬼』は空に住んでいて、いつもは見えない。しかしぼおっと座っているとその隙について目隠しをしてくる。びっくりしてその人が立ち上がると、待ってましたとばかりに頭をバリバリかじるという恐ろしい存在である。

それを導入することによって、霧子をビビらせることがより容易になり、また急に真っ暗になったことに驚いて暴れられて手が外れるということもなくなった。本当に、『空目隠し鬼』様様だ。

ちなみに、『空目隠し鬼』は霧子が座った状態でどこかに行ってしまった時用の妖怪で、そのほかには立ったままどこかに行ってしまった時用の、動いたら脚をバリバリとかじられてしまう『土目隠し鬼』などなど、いろいろなシチュエーションに対応したバリエーションを取りそろえております。

「よし、頭は上げるなよ。俺は霧子の前にかがむから、そのまま前に手を伸ばして背中におぶさるんだ」

「にゅ、にゅん！」

『空目隠し鬼』のご都合主義なところは、目隠しをされた本人が立ち上がったときはかじるくせに、その人が誰かにおんぶされて頭が上にあがったときはかじらないところだ。それは、なんというか、霧子に変に動いて手が外れてしまうことのないようにするために俺がおんぶして移動するための設定なのだが、まあ、妖怪だし、これくらいのご都合主義は許されるべきだろう。

というわけで、俺は霧子の前にかがんで、おんぶの体勢に入るのだった。あとは、このまま霧子をおんぶしてこの場から逃走してしまえばいいだけだ。おんぶという軽度のスキンシップを伴うやり方だが、まあ、仕方ないだろ、うん。

「ゆっつきい、きりりんのことおんぶするの？」

「仕方ないだろ、そういうルールなんだから」

「あたしはどうすればいいの？」

「え？　引き続きがんばってくれば…、ん？」

俺が霧子をおんぶして立ち上がるってことは、それはつまり霧子の

頭は俺の頭と同じ高さに来るわけで、それって志穂の手は届くのか、  
っていうことにならないか？

「うん、がんばる」

しかしそれに気づいたからといって、立ち上がり始めてしまった体を止めることはできないわけで、つまりこのままでは志穂の手は霧子の目から離れてしまうってことに。

「んゝゝ、にゃっ!!」

「つく……!!」

「ゆ、幸久君!? な、なにか背中に乗ってきたよ!? 今まではこんなことなかったのに、なんか変だよ!」

「し、心配するなゝゝ、今回ののはちょっとレベル高いやつだってだけで、基本的に対処は変わらないから……」

「だ、だいじょぶ……? 頭から食べられちゃわない……?」

「心配するな、そんなことはないから……」

志穂は、どうやら俺が想像していた以上にがんばってくれたらしく、  
どうやら俺が霧子をおぶって立ち上がるのに合わせて跳び上がり、  
俺におんぶされた霧子の上から器用に覆いかぶさったようだ。言う  
なら二人まとめておんぶした状態という感じだ。

まず、二人分の重みが、合わせて80キロもないくらいだろうが、  
のしかかってきて思ったよりも重い。いつものように一人ずつおん  
ぶする分には大した重みではないのだが、しかし二人の重さが合わ  
さると流石にけっこうくるものがあるな……。

そして、志穂の脚が脇腹に激しく食いこんできて若干痛い。まあ、  
脚が脇腹に食い込んでくるのは、本来なら首に巻き付けているはず  
の両手を霧子の目を隠すので使ってしまったている志穂ががんばって  
いる結果なので仕方ないのかもしれないが。というか、両足で俺の  
胴をクリップのように挟んで体勢を維持するなんて、どんな筋力し  
てるんだ、って感じである。

「ゆ、幸久君、平気? なんだか苦しそうだけど……」

「平気だゝゝ、平気だから動かないで……」

「う、うん……」

そして俺は、よろよろと聖堂の中から、霧子と志穂を二人まとめておぶった状態のまま脱出することに成功したのだった。重かったのと痛かったのは予想外だったが、まあ、状況を打開するための必要経費みたいなものだろう。

しかし、あと何回この手が霧子に通用するのだろうか。今はまだすっかり俺のオリジナル妖怪の存在を信じ込んでいるから大丈夫だろうけど、でもしばらくしたらそんなものは本当はいないって気づいてしまうのだろうか。

…、それは少しさみしいなあ……。でもまあ、今回は何とか耐え、別に気にしないでいいっちゃいいんだけどな。

## 隣は何を知る人ぞ

「…、という、一大スペクタクルが、さっきあったんですよ」

「まあ、そうなんですか、くすくす」

あの後、二人を背負ったまま教会の外に脱出した俺は、来た道を逆向きに戻って商店街のメインストリートへと出ると、ちょうど最初の「教会こちら」の看板のところで待っていてくれた、手には別れたときには持っていなかったビニール袋を提げた姐さんとメイと無事に合流を果たしたのだった。

そしてそれから、そこらへんにあったそば屋に入って手早く昼飯を済ませると、店頭販売をしていた蒸したて温泉まんじゅうを買ったり、商店街の中央広場みたいなところにあった脚湯に入ったりと、軽くぶらぶら当て所なく放浪してからいったん旅館に戻ることにした。

時間的には二時間にも満たないぶらぶらだったが、しかしそれなりに充実した時間を過ごせたように思う。何より、昼飯を食ったことによって物理的に充実したのが要因としては一番大きいだろうけどな。

そして今、自分の部屋に戻ってきた俺は、本当に部屋の掃除と荷物の整理を済ませてくれていた上に、タイミングまで見計らってお茶を淹れて待ってくれていた三枝さんとおしゃべっている真っ最中であり、とりあえずさっきの教会脱出の一幕を適当に脚色して笑い話に仕立て上げ話し終え、その小喃が滑ったりしなかったことに若干の安堵をおぼえているところである。

「それで、皆藤様は、どうして三木様の上に？」

「えっ？ ああ、習性、みたいなものです。そんなに気にしないでいいですよ」

「うん、きにしないきにしない！」

「お前は気にしろ」

旅館に戻ってきて、みんなは一回一息つくために部屋に入っ  
てのんびりしているというのに、しかし俺と志穂だけは、みんなといっ  
しょにその女子部屋で休憩するということをしていなかった。俺は、  
もちろん男子部屋（という名の一人部屋）があるんだからそちらに  
一度寄ってから、というのが正しいわけで、とりあえずそちらに戻  
った。そして志穂は、どうしてか、もうそうしている必要などない  
というのにいまだに俺の上に乗っかっているのだった。つまり、い  
わゆるところの肩車、というやつなのである。

確かに、霧子を教会から連れ出すためには志穂を背中にくっつけて  
いる必要があったわけで、それをその時点でやめなさいというのは  
おかしかったかもしれない。だがしかし、その作戦は今もう終了  
しているわけで、志穂が俺の上に乗っかっている必要はどこにもな  
いのだ。

そもそもどうして志穂が今もって俺の上に乗っかっているかといえ  
ば、それは霧子を『空目隠し鬼』の恐怖から解き放った後にまで話  
をさかのぼる。

教会から出て少しして、『空目隠し鬼』は諦めて帰りました、とい  
う体で志穂に霧子の目隠しを止めさせたあと、間違いなく志穂は俺  
の背中からは降り、そして霧子も同様におんぶ状態を解除した、は  
ずだった。それから姐さんたちと合流し、そば屋に入って飯を食っ  
たときも、確かに志穂は俺の目の届くところで椅子に座ってちるち  
るとそばをすすっていた。食事中に箸の持ち方がなっていない、と注  
意したのだからそれは間違いない。

しかし、それからだ。飯を食い終わって、会計を済ませて店の外に  
出て、もう少しここをうろついてみようかと話し合って、としてい  
る間に、いつの間にか志穂は俺の背中によじ登っていて、あまつさ  
え肩に乗っかっていたのである。俺自身も、明確にどの瞬間に肩に  
乗られた、と断言することはできないのだが、きつとその間のどこ  
かで乗られたはずなのだ。

きつとその埒外の跳躍力を使って一息で、背中を経由せずに肩まで

跳び上がったに違いない。そしてさらに、なにかよく分からない技を使って気配と体重を消したに違いない。そうでなくては、いくら俺がのんびりして気を抜いていたからといって、志穂が肩までよじ登ってくるのに気付かない、というはずはないのだ。だってそうだろう。人間一人が俺の上に乗ったというのに、しかし俺がそれに気づいたのはすでに登りきられてからだだったのだから。

いや、俺だって何が起こっているのか分からなかったさ。さっきまでそこにいたと思っていたはずの志穂が、しかし今この瞬間には俺の肩の上に乗っかっていたんだからな。超高速移動とかチャチなものじゃない、もっと恐ろしい何らかな片鱗を、俺は確かに感じたのだ。

「皆藤様、お茶をどうぞ」

「ありがとうございます！」

「おい、絶対こぼすなよ。絶対だからな」

「…、こぼしたほうがいい？」

「いや、だから、こぼすなって。熱いお茶なんかこぼされたら、熱いだろうが。こぼさないように気をつけつつ、ゆっくりと飲むんだぞ」

「はい」

「とにかく、志穂がこうしているのは、気にしないでください。じきに飽きて降りますから」

「そ、そうですか。はい、了解いたしました」

「ゆっきい、さっきのおまんじゅうほし。おまんじゅうおまんじゅう」

「え？ あの温泉まんじゅうはご両親へのお土産にするって話だったんじゃないのかよ。いいのかよ、食っちゃって」

ちなみに、姐さんたちと合流した後、商店街を見て回るついでに、俺たちも少しお土産を買ったのだった。そして志穂は、家へのお土産用と言ってでっかい箱に入った温泉まんじゅうを買っていたのである。こいつ、まさかそれをここで開けようというのだろうか？

「やめとけよ、ここで開けるのは。お土産なんだから家帰ってからしなさい」

「えー、でもおまんじゅうたべたいー。おちゃといったらおまんじゅうなのー」

「お前はいつからそんな、お茶といっしょに食べるべきものがどんなものかを理解するようになったんだよ。ちよつと風情が分かってきちゃったのかよ」

「てれびでいってた」

「ああ、なるほどな。っていうか、お前の情報源は八割くらいテレビだな。家でどんだけテレビ見てるんだよ、このテレビっ娘めが」

「おまんじゅうでしたら、こちらをどうぞお召し上がりください」  
そしてそんな俺たちのやりとりを見てか、三枝さんは急須や湯のみと同じ入れものに入っていた小さな小箱を取りだすと、それをスツと俺たちの前に出した。ふたが開かれたその中身を見てみると、その中にはお茶請けになりそうなお菓子的なものが細々と入っているのだった。旅館からのサービス、みたいなものだろうか。

「あつ、すいません。ほれ、志穂、ちゃんとありがとうしてからもらいなさいよ」

「はーい、ありがとうございます！」

「はい、どうぞお召し上がりください」

「志穂、茶をこぼさないのは当然だけど、それとあと、まんじゅうのかすも落とすんじゃないぞ。頭にまんじゅうのかすつけてるなんて、全然笑えないからな」

「はーい、んぐ」

「うん、全然聞いてないな、お前」

これで、おそらく俺の頭の上にまんじゅうのかすとお茶のしぶきが舞い落ちることはほぼ確定した。仕方ないな、あとで洗面台で払っておかないと。

「三木様は、皆藤様ととても仲がよろしいのですね」

「そう、ですかね？」

「はい、私は、そのようにお見受けしましたが」

「…、まあ、確かに懐かれてはいますよね、うん。でも仲がいいって言うっても、なんか主人とペットみたいな感じなんですよ、感覚的に。いや、別に俺がこいつのことをペットのように扱ってるわけじゃないんですけど、でっかい仔犬みたいな感じなんですよ。今もこうして、なんか分からないけど上に乗ってきますし」

「なるほど……」

「ほら、仔犬と違って、基本的にどうやって手加減をしたらいいかとか知らないじゃないですか。こいつも、だいたいそんな感じなんですよ。今までどういう育てられ方をしてきたのかは知りませんが、なんか、この年齢の人間が知ってなきゃいけないこととかをあんまり知らないですよ。まあ、そもそもこいつ自身の学習能力にもかなり問題があるんですけど、でもやっぱり知らないと困ることってあるじゃないですか。だからいろいろ仕込まないと、ってことですよ」

「お友だちのことを心配して思いやることができるのは、すばらしいことだと思います」

「そうですね？　俺としては、そんなこと考えたこともありませんでしたけど」

「意識せずともご友人のために尽力することができると、お優しいですね」

「…、三枝さんは、人のことを褒めるのが上手いんですね。いいところを探すのが、上手いんですね」

「そんなことはありません。私は、ただ思った通りのことを言っているだけで、上手いことをしようというわけではありませんので」

「その言い草、俺の知り合いにそっくりですよ」

「そうなのですか？　その方は、どのようなお知り合いなのでしょうか？」

「俺の、…、弟ですよ」

「あら、そうですね。誰かに似ているなどと言われたのは初めてで



すから、なんだか照れてしまいます」

「そうなんですか？ 三枝さんは美人なんですから、学校で芸能人では誰に似てるとかいう話になったりしなかったんですか？」

「そ、そう、ですね…、そういう経験は、ありません」

「へえ、まあ、別にないとおかしいって話でもないですし、問題があるってわけじゃないですけど」

「ゆっきい、おまんじゅうおかわり」

「ん？ ほれ、食え」

「にゃ、ありがと」

「そういえば、三枝さんはどうしてここで働いてるんですか？ 後見人の、二見啓蔵さんに勧められたりしたんですか？」

「いえ、そういうわけでは。二見氏には、私の方から後見人をお願いしましたので、ここを選んだのは私です」

「ああ、そうだったんですか。でもその人、二見グループのすごい偉い人なんですよね。そんな人とつながり持ってるなんてすごいですね」

「いえ、そんな特別なつながりというわけでは……」

「あつ、遠い親戚なんですっけ。でも遠い知り合いでもすごいですよ。俺なんて、そういうすごい親戚は、だれも生きてませんから」

「三木は、立派なお家ではございませんか。遥か昔より栄えているお家なのですから」

「でも、今は落ち目も落ち目ですよ。いくら昔はすごかったとしても、今は一族は俺一人なんですから、あとは滅びるだけです。でもその点、二見の家は今もまだ成長を続ける二見グループを家族企業として抱えているんだから何の陰りも見えてとれません。夜更け寸前の三木と比べたら、…いや、比べることすらおこがましいですね」

「そのようなことはございません。三木こそ、どのような状況になったとしても沈むことのない太陽のような存在です。二見は、今この瞬間にいくら繁栄をしていたとしても、それは所詮陽炎のようなもの。本当に立派なのは三木なのです」

「そ、そうなんですか……？ どうして二見の繁栄が陽炎なのかは分かりませんが、でもきつと、そこまで言い切るってことは何か思うところがあるってことなんですよ？ 三木がすごいっていうのも、俺にはよく分からないんですけど、やっぱり何かあるんですよ？」

「はい、三木の家は、王の家でございますから」

「王……？ 急に大層な単語が出てきましたね……」

「三木様はご存じないかもしれませんが、七天星家の主の星は三の星なのです。一の星ではないのですよ」

「え？ そうなんですか？ ええ…、そうだったんだ……。あんまり興味なかったから、ぜんぜんそんな細かいところまで話聞いてなかったんだけど……。っていうか、あれ？ そういう七天星家絡みの話って、秘伝みたいな感じで伝わってるんじゃないの？ 俺は、本家の嫡男にしか話してないからあんまり他言しないように、とか言われたんだけど。いや、うちの場合は本家も何もなく、俺しかないんですけどね」

「…、あつ……！ あの、いえ、あの……」

「ゆつきいゝ、おちや、おかわりゝ」

「ん？ ああ、飲め」

「にゃゝ、ありがとゝ」

「志穂、俺たち少し大事っぽい話とかしてるから、少し部屋に戻ってなさい。このまんじゅう、持って帰っていいから」

「えゝ、ほんとゝ！ ゆつきいふとっばらゝ」

「ああ、太っ腹だから部屋に帰ってなさい」

「はゝい！」

「ゆ、幸久くゝん？ おじゃましまゝす……」

「失礼するぞ、三木」

『おじゃまします』

「ほえ？ みんなきたのゝ？」

しかし、俺からさらに追加のまんじゅうを受け取ってから喜び勇ん

で俺から飛び降り、るんたったるんたったとこの部屋から志穂が出ていこうとした瞬間、俺の予想を裏切って霧子たちが扉を開いて現れたのだ。こんなにたくさん来てしまっっては、追い返して三枝さんから詳しい話を聞き出そうとしたというのに、追い返すにしてもやりにくいではないか。

「あの、この話は、また後でってことで」

「そ、そうですね、はい。それでは、後ほどまた」

秘密の話っていうのは、こういうところでおおっぴらにするものではないのである、みんなに聞かれたり知られたりしないようにこっそりやってこそ、ひみつというものではないか。

## キミの見ル、セカイ

「あのね、さっきしいちゃん湖の方に行きたいって言ったから、幸久君もいっしょに行かないかなあって思ってた誘いに来たんだよ」

「ああ、あったな、そんな話も。そうか、そうだな、志穂、湖に行くかい？」

「ん？ んゝ…、…、ほあ！？　いく！！」

「なぜ溜めた……。さては忘れてたな、こいつ。自分で行きたいって言ってたくせに、どんだけだよ……」

霧子たちが不意に女子部屋から押し寄せてきたから何かと思ったら、なんとすることは無い、さっき俺の一身上の都合で中止してもらった湖行きの話だった。しかし、そうか、確かにそんな話もあったな、うん。霧子を教会から連れ出すお仕事がたいへんすぎてすっかり忘れ去っていたじゃないか。

「っていうか、一番行きたがってたのは志穂だったのに、当のお前が忘れちゃってるってどうなの？」

「わすれてないもん！　いまは、えと、それよりだいじなことがあっただけ！」

「なんだお前、言い訳をするなんてことを覚えたのか。いつの間にそんな、こまっしゃくれたことをするようになったのかしら、この娘ってば」

「そんなことよりも、三木、お前は どうするんだ。私たちは湖まで足を伸ばすつもりだ。皆藤も、おそらく行くつもりだろうからいっしょに連れていくぞ。皆藤、お前は行くだろう」

「うん、いく」

「天方と持田も行くということだ」

「あたしも、いっしょに行くよ」

『行く』

「お前は どうする。先ほどまで出ていたのだから、疲れているとい

うならば無理強いすることでもないからな、無理に来いと言うつもりはないぞ」

「いや、行くよ、行く行く。みんな行くんだろ、俺も行くって」  
みんなで行くと言っているというのに、あえてその流れに逆らって、一人で自室待機をしている意味も必要もないだろう。部屋で一人、のんびりゆっくり悠々と余暇を過ごすことも、個人的には嫌いじゃないけど、しかしわざわざそんなことをするために俺はこんなところまで遊びに来ているわけではないのだ。

ただ無為に時間を浪費することを楽しむんだったら、そんなもの自宅で行っている、というものだ。それこそベッドに寝転がって何をするでもなく一時間でも二時間でもいて、喉が乾いたら水を飲んで、腹が減ったら飯を食って、眠くなったら寝て、という退廃的な生活がしたいなら、こんなところまでわざわざ出てくるのが、そもそもからして必要ないのである。

こうしてあえて家から出て、あえて旅行に来ているのだから、それこそ家にいては出来ないことを積極的にやっていくべきではないか。たとえば買い物とか、たとえば教会の見物だとか、たとえば湖で水遊びだとか。自宅にこもっているのは出来ないことを、探してでもやらなくてはもったいないではないか。

まあ、それも、「こんなところまで旅行に来たんだから何かをして遊ばなくては」とかいう、よく分からない貧乏性じみた使命感がこの身の内を渦巻いているからなのであって、けっきょくはこんなところに来てもせこせこ動いていて情けない、と言ってしまえばその通りなのだが。真のセレブであったならば、バカンスに出かけたら「何もしないをする」くらいの意気込みでいるものらしいのだが、そういうわけにいかないのが日本人の日本人たるゆえんなのである。世界中を見渡しても、休暇でバカンスに来ているというのに、あそこまでせっせと観光やら何やらやっているのは日本人くらいなんだとか、昔どこかで聞いたことがあったような気が、しないでもない。正直、あんまり覚えてない。

「みんな行くんなら、俺も行くよ。いや、みんなが行くからっていか、俺も行くって。遠まわしに置いてけぼりにしようとしなくてくれよ、姐さん」

「何を言っている、私はそのようなことをしようとは思っていないぞ。だが、お前が疲れたような顔をしているように思ったからそういう選択もあるぞ、と示しただけではないか。私がお前のことを爪弾きにしようとしているように言うのは止めてくれ、心外だ」

「いや、あの、そこまで考えての発言じゃありませんでした…、ごめんなさい……。あ、姐さんが、そういうことしようとしてるなんて、思っていないからさ、なんていうか、ジョークだよ、うん、ジョーク。そうだよ、俺の知ってる姐さんは、そういうことをする人じゃないよ、ああ、しないしない、するはずない」

「そう思っているならば、いいのだがな。しかし覚えておけ、私は友人を裏切るようなことはしないし、しようと思うこともない。裏切るのは、いつも友人の方だ」

「お、俺も裏切らないから！ 俺も、姐さんのことは裏切らないから！ 絶対！ だからそういうこと悲しいことは、もう言わないで！ っていうか、なに？ なにが姐さんを不安にしたの？ 俺たちに裏切られると思うようなことが、なにかあったの？」

「いや、そういうわけではない。ただ、経験則だ。私は今まで、友人のことを悪意から、裏切ろうと裏切ったことはないが、その逆は経験したことがあるというだけだ」

「そ、そっか…、びっくりしたよ、もう……」

姐さんは、けっこうこうやってなんでもマジで取っちゃうところがあるから、うかつにジョークじみたことを言うのも気をつけなくてはならない。でも俺は、基本的に口から出る言葉の半分くらいは軽口で出来ているから、細心の注意を払ってなお、こうしていらんことを言ってしまうことがあるのだ。

ううむ…、今度もまたいらんことを言ってしまったか……。いかな、気をつけなくては…、友人を不安な気持ちにさせるなんて、よ

くないことではないか。しかもそれが、裏切られるのではないか、なんていう悲しい気持ちを伴うんならなおさらだ。

「それでは、私たちはこれから着替えを済ませるために、部屋に戻ろうと思う。三木も行くな、ここで着替えを済ませてしまうのがいいだろう。去年もそうしたからな、今年もそうするのがいい」

「ああ、確かにそうだったな。そういえば水着に着替えて、それからその上に一枚羽織って行ったんだった。覚えてる覚えてる」

『幸久くんは、ここで着替える？』

「そうだな、うん、もちろんそうだ」

『あたしたちは、向こうで着替える？』

「そうだな、うん、もちろんそうだ」

『いっしょに、着替える？』

「そうだな、うん、それだけはしちゃいけないな」

『そう』

「メイ、そんな勢いだけの誘導には、さすがの俺でもノらないぞ？」

『なんの話か分からない』

「白々しいわよ、この娘ってば」

「それじゃ幸久君、着替え終わったらもう一回こっちに来るね。また後でね」

「ああ、また後でな。っていうか、ほんとに俺にそのこと聞きに来てただけだったんだな。それくらいのことだったら、別にメール一本飛ばすだけでもよかったろうに、ご苦労なこって」

「にゅ、でも、そんなに部屋が離れてるわけじゃないし、メール打つ間にここまで来ちゃった方が早いかな、ってことになったから」

「メイが打ったら一瞬だろ、そんなの。メイはケイタイ・マエストロだよ、霧子」

「で、でも、メイちゃんがそうするのがいいって……」

「えっ？ そうなのか？」

「にゅん」

『そうするのがいいと思った』

「…、まあ、メイがそうするのがいいって言ったんなら、そうなのかもしれないけどさ。いや、でもメイならそれくらいの用件を伝えるだけのメール、打つのあつという間じゃん。いつもの調子でカタカタやったらマッハだろ、マッハ」

「三木、どうでもいいではないか、そんな方法など。それとも、私たちがこうしてここまで来ては不味いようなわけでもあるというのか？　まさか、なにか見られたくないようなことでもしていたというのか？」

「し、してないしてない、してないよな、志穂？」

「んゆ？　あたし、おまんじゅゝたべてたから」

「お前、そんなに集中してまんじゅゝ食ってたの！？　周りの状況が全部見えなくなるくらい集中してたなんてこと、さすがにないだろ！？」

「えゝ、でもおまんじゅゝもおちやもおいしかったしゝ」

「それはそれ！　これはこれ！　俺が何してたかくらいは分かるだろ！」

「んゝ…、ゆっきいが、ここにいたことくらいなら……」

「それは、ほぼ何も分からないっていうんだよ！！　っていうか、俺がここにいなかったなんてこと、あるわけないだろ！！　お前、さっきからずっと俺の肩の上に乗ってたじゃねえか！！」

『肩に乗って…、なにしてたの……？』

「なにその聞き方！？　肩に乗って、肩車してたんだよ！？　メイもそれは見たよね！？」

『なにかあるのかと思った』

「ないよ！！　肩に乗っかられたままで起こる何か変なことなんて俺には想像することもできないよ！！　っていうか、さっきからメイ、話に割り込んでくる仕方が若干強引だよ！？」

『最近、あんまり出番なかったから。出来るだけ前に出ていかないと、忘れられちゃう』

「出番？　前に入る？　な、何を言ってるのか分からないんだけど



……？　メイ、それは、どの視点からの発言なの……？」

『最近、あたし影薄い』

「そんなことないよ！？」　影薄くないよ！？　俺はメイのこと忘れ  
たりしないよ！？　っていうかむしろキャラ濃いよ！！　常にケイ  
タイで会話してるなんてキャラ濃すぎて印象に残りまくるよ！！」

『ほんと？』

「ほんとほんと。この中の誰よりもキャラ濃いよ。無口キャラとか  
いう次元は、すでに超えてるって」

『でも、どうしてかあたしのセリフ、少なかった』

「セリフ？　いや、別に、しゃべってたと思うぞ？　あつ、しゃべ  
ってはないけどさ、でも、会話には参加してたよ」

『それでも少なかった、その場面はカットされてる』

「カット……？　そんな、テレビ番組じゃないんだから、カットな  
んでされてないよ。俺は確かに、間違いなくメイとおしゃべりした  
よ。ほら、飯食ってるときもしただろ、おしゃべり。姐さんに、食  
事中はケイタイいじるなって怒られたじゃん」

『そこもカットされてる』

「ちょ…、メイの目には何が見えてるの……？　俺たちには見えて  
ない何かが見えてるの……？」

『面白い展開にならないと、記録に残らないから』

「お笑い芸人じゃないんだから、そんなこと気にしながら生きなく  
てもいいのよ！？　っていうか、記録ってなに！？　俺たちの生活  
が記録されてるの！？　誰によって！？」

『部屋に戻らないと』

「急！　話の転換が不自然な上に、急すぎる！！　っていうか、変  
な疑惑だけ残してどこかに行かないで！？　メイ！　ちゃんと詳し  
く話してから部屋に戻って！！」

『早く着替えないと』

「そうだな、それではまたあとでな」

「あとでね、幸久君」

「んしょ…っ」と

「皆藤、ここで脱ぎ始めるんじゃない。お前も向こうの部屋で着替えるんだ」

「え、でもすぐきがえないと」

「よく考えろ、ここにはお前の着替えはないぞ。それにそもそも、いくら相手が気を許している三木だからと言って、異性の前で易々と肌を晒すんじゃない。慎重深さを持っていないくては、女性として恥ずかしいぞ」

「つつしみぶかさ？」

「あとで、むこうの部屋で説明してやる。だから今は部屋に戻るぞ」  
「う」

「霧子！？ 姐さん！？ 二人はメイの話を聞いてもなにも感じなかったの！？ 違和感はないの！？」

「持田はそう思っているというだけだろう。生き方は人それぞれということだ」

「そういう流れじゃなかった！ 絶対そういう流れじゃなかった！」

「それでは、私たちはこれで失礼する」

「に…、ゆっきい…」

「う、ウソや…」

そうして、メイの謎の発言によって激しく心乱された俺だったのだが、しかしそうだったのはどうやら俺だけだったらしく霧子は特に何も思わなかったようでサクッと部屋に戻って行ってしまい、俺を激しく動揺させた当の本人であるメイはそんなことは知らんとかばかりにプイッと踵を返してしまい、そして姐さんはおもむろに俺の目の前で着替えを始めようとした志穂の首根っこを掴むと独自の理論を展開するだけしてさっさと帰って行ってしまった。まるで、そんなことを気にしているお前の方がおかしいんだぞ、とでも言わんばかりの扱いだった。

しかしメイの発言、まるでこの世界を上から覗き込んでいると言わ

んばかりの不思議さを秘めていた。メイは、無口という自分の特性を強調するかのように、あまり必要でないことは表明しない。逆に、こうしておおっぴらに物を言うということは、何か思うところがあ  
るのかもしれない。まあ、それも、あくまでも、俺の見るメイの姿  
という一面的な認識でしかないのかもしれないけど。

そしてあとにはただ、状況に置いてけぼりにされてしまった三枝さ  
んと、それから完全に放置プレイをぶちかまされた俺が残されるの  
みである。正直、なにも聞かなかったことにすることは難しい発言  
だったと思うのだが、どうやら俺の感性がこの場にそぐわなかった、  
というのが世界の選択らしい。

## ひとり温泉タイム

「ああ……、生き返るわ……」

夜、俺は食事を済ませて少ししてから、露天風呂に入っていた。

「なんでだろうなあ……、温泉と家風呂って、違うの大きさだけのような気がするけど……、どうしてかきくんだよなあ……」

空には無限にも思える無数の星々が輝き、そしてそのやわらかな光は、宵の暗闇によって覆い隠された地上をぼんやりと照らしている。今の季節にどんな星座があるかなんて、そんな詳しいことはなにも知らないけど、それでもその星の煌きを眺めているだけで、どうしてか感動してくるんだから、なんとも不思議なものだ。

「しかし、まさかこんな風呂に一人で入ることがあるなんてな。こういうのも、奇跡っていうのかなあ……。こういう奇跡なら、ほんと大歓迎だぜ、と……」

女四人に男一人の俺達が風呂に入るとなったら、もちろん部屋が別なんだから、風呂だって別々に入るに決まっている。この旅館の露天は混浴というわけではないので、女湯と男湯に分かれるのが必定なのである。

さらにどうしてか、露天には俺以外の人間が一人としていなかったりする。まあ、時間的には少し遅めの食事をしているか、あるいは食休みを取ってゆっくりしているか、という頃なので、しばらくしたら誰かしら入ってくるだろうことは分かっているのだが、しかしこの瞬間の偶然に感謝してのんびりするのがここでの正しい姿に違いないあるまい。

そんなわけで、俺はこの瞬間、この旅行が始まってから初めて一人っきりで時間を過ごしているのだった。よく考えたら電車に乗るまでは霧子と、電車の中ではずっとみんなといっしょだったし、旅館に来てからは一人部屋のはずだったのに部屋付き仲居の三枝さんが常に部屋に留まっていた一人になることは結局なかった。別に俺は

一人でいることを好む人間ではないのだが、しかし一日の間の少しくらいは一人になりたいというか、ただのわがままに違いないのだろうか、「みんなといたいけど、一人になる時間もほしい」という感じなのだ。

霧子なんかは、「いつでもどこでもみんなといたい」みたいなところがあるから、基本的にどんなときも一人つきりになることはないようにしているみたいだ。家の中でも部屋の中にこもっているということはほとんどなくて、生活拠点は主にリビングだ。学校でも休み時間、移動教室、昼食、トイレ等々、あらゆる行動を誰かと共に行なっているらしく、霧子が一人でポツンとしているところはあまり見ない。いや、まあ、霧子の隣にいる確率が一番高いのは、数えたことがないから確実とは言えないが、ほぼ間違いなく俺なんだけどさ。

逆にメイなんかは、ケイタイで会話する不思議な感じがあるからか、むしろ一人でいる方が多いみたいで、文字通り静かに学園生活を営んでいるようだ。しかしそれでも、こうしていっしょに旅行に行こうと誘えばいっしょに来てくれるわけで、たぶんみんなといること自体はそんなに嫌いじゃないんだと思う。たぶんメイは、これは俺の想像でしかないのだが、積極的に他人と関わっていいこうとしないだけで求められればそれに応えようとする気概は持っているんだろう、と思う。とりあえず、今のところ俺はメイに接近を拒まれたことは一度もないわけで、きっと俺たちの存在を迷惑がってはいないんだらうと思う。

…、話が広がっちゃったな。まあ、そんなわけで、なんというか俺は、風呂とかトイレとかなんていうものは一人でするものなのであって、そういう局面においては誰かといっしょというのはあまり好ましくない。確かに裸の付き合いとかいう言葉もあるので、そういう状況を全面的に否定するわけではないのだが、まあ、一意見としてそういうプライベートな時間を誰かと共有するのはちょっとね、と考えているというわけで。

「まあ、とりあえずラッキーってことだ、うん……。あ……。しかし、きくわあ……。温泉につかってここまで癒されるって、ほんと日本人でよかったって思うわ、こういうときは……」

しかし、こうして一人でのんびりと湯につかっていることができるのは、もちろん偶然誰もいない時間にここに来ることができた幸運も大きいのだが、それと同じくらいに志穂の侵入をシャットダウンすることができた、という事実があるだろう。

去年もそうだったのが、志穂はどうしてか女湯ではなく男湯の方に入ろうとしてくる。女の子は女湯、男の子は男湯だぞ、と何度説明しても、よく分からなかったのか素知らぬ顔で俺の後について男湯に入ろうとしてくるのだ。志穂が何を考えてそんなことをするのかは、正直俺では推し量ることができないのだが、しかし入ろうとしてくるからといって「はいそうですか」と入らせてしまうわけにはいかないのである。

男湯と女湯で入浴する場所を分けているのは、もちろんそれなり以上の意味を持ってそうされているわけで、そのルールは、小さくて一人で入浴することが困難だったり、親の監視の目から放してしまうにはまだ早い子どもみたいなケースを除いて、たやすく破ってもいいことではない。いや、確かに、志穂は年齢の割には危なっかしいところがあるからどこであっても可能な限り監視の目は切りたくないのだが、しかしだからといって、高校生の女の子が男湯に堂々と侵入するなんてことはあってはならないのだ。

そもそも、どうしてあいつはそういうことに対する躊躇がまったくもっていないのだろうか。普通だったら、第二次性徴のあたりから男女の身体つきに少しずつ違いが生じてきて、それに伴うように異性を異性として認識するようになっていき、羞恥心という感情が発生していくはずなのだが、なんでこいつにはそれが無いのだろう。ほら、一般家庭では、女の子は自分の父親に対してすら羞恥の感情を持つようになるというではないか。いわく、「お父さんの洗濯物といっしょにあたしのは洗わないで」とか、「最近お父さんの視線に

性的なものを感じる」とか、「お父さんとはもういつしょにお風呂入らないから」とか、「お父さんはあたしの部屋に入って来ないで」とか、いろいろあるんだろう？ 俺はよく知らないんだけど。

いや、俺は男だし、そもそも父親も母親もとっくの昔に死んでいないわけで、そんな感情を芽生えさせる機会すら与えられていないのだ。それに身近な女の子である霧子もお父さんは死んでしまってもういないし、美佳ちゃんはおじさんに対してそういう感じのそぶりを見せ始める前にどこかヘメイド修行という名の奉公に出てしまったからな。だからそういう女の子の生態について俺が実地で直接的な知識を得ることはできないわけで、すべてはテレビドラマとかマンガとかから得た微妙な情報でしかないんだけどな。

とにかく、志穂がどうして俺に対してまったく恥ずかしいという感覚を持ち合わせていないのかは分からない。っていうか、志穂が堂々と俺の後ろについて男湯に入ろうとしてくるのを必死に押し返す俺の姿というのは、滑稽としか言い表しようのない醜態なのではないだろうか。なんていうか、男としての器が小さいというか、漢じゃない、みたいな感じのアレで。

「姐さんが手伝ってくれなかったら、今頃は志穂もここにいたのかなあ……。あいつの突撃は、俺一人の力じゃ止められない威力だからな、マジで。…まあ、志穂の身体じゃ、見甲斐がないってもんだけどな、うん。俺は、ロリコンじゃ、ないしな、うん」

俺だって、女性の女性的な体つきには、男としていいなあと思うことはある。胸は適度にあるのがいいし、腰回りは適度にすっきりしている方がいい。アメリカンでボンッキュッボンッみたいな、不自然さすら感じるナイスバディなスタイルよりも、もっと日本的風情のある美しさが感じられるスタイルがよくて、幼いかわいさみたいなものよりも瑞々しいフレッシュさみたいなものの方がいい。

具体的に言うと、同年代並に成長を遂げている感じがいいのである。そういう意味で言うと、姐さんのスタイルくらいの感じ、いいよなあ。風紀で体を鍛えてるから全体的にシュッとしてるし、でもだか

らって女性的な柔らかさみたいなものが損なわれているわけでもないし。全身にバランス良くついた機能的な筋肉がしなやかさを感じさせるし、それを包むように薄くついている肉が柔らかさを感じさせるし。胸もけっこう成長しているようで、しかも胴回りは健康的に細いからトップとアンダーの差でDカップくらいありそうだし、時折視線を引かれてしまうことがある。しかしそれに反して小尻だし、全体的に締まった印象を与えるんだ。

俺にとってみれば、周りにスタイルのいい人がけっこういるわけで、そういう意味では美女・美少女と同様に見慣れているということもできるかもしれないが、しかし姐さんはそれであっても何か目を引くものがある。言い方を変えれば、何か光るものをその内に感じるのだ。最強にスタイルのいい雪美さんを引き合いに出してしまっっては太刀打ちできないように感じられるが、しかしそれでも姐さんには姐さんの魅力があるわけで、やっぱり心惹かれる何かがあるように思う。

それに、身近なところで言うところの晴子さんとか、弥生さんとか、歌子さんとか、そういう人たちと比べても遜色ないというか、むしろ部分部分で見たら勝っているところすらあるのではないか、と思うこともしばしばだ。やっぱり、姐さんはいい身体をしているんだよね。非常に魅力的だ。

「…、いや、違う。これは、あの、そういうんじゃないだって…、別に姐さんのことを異性として特別に意識してるとかそういうのじゃなくてさ…」。違うんだよ!! 違うんだっ! 姐さんっ!!」

『何を言っている! 三木! 大きな声を出すんじゃない!!』

「誤解しないでくれ!! 俺は…、俺はそういうんじゃないから!!」

『何を言っているか、まったく要領を得ん! あとで聞いてやるから、こんなところで大きな声を出すんじゃない!! 他の人に迷惑をかけることは、許さん!!』

「…、ごめんなさい!」



『分かればいい！ 静かに入るんだ！』

「はーい……」

怒られてしまった。しまったな…、温泉につかって何かが緩んだのか、うっかりでかい声を出してしまったではないか。っていうか、そうだよ、姐さんの言うとおりだよ。ここでわざわざでかい声出して間仕切り越しに話をする必要はないんだよ。それに向こうにはどんな人がいるか分からないんだから、そんな状況でこういう大事な話はするべきじゃない。

危ない危ない、どうもリラックスしすぎて頭のネジまで緩んできてしまっているようだ。気をつけなくては。

「ふう…、落ち着け、俺……」

とりあえず、一度気持ちに区切りを入れるために温泉からあがり、俺はカランのコックを捻って手桶に冷たい水を溜めると、一気に頭からそれをかぶった。全身を包んでいた暖かな感じは一息で吹き飛び、感覚的にも物理的にもあつという間に涼やかな気分になり、そして頭もすっきりとした。

「っはあ…、グツと来たぜ……」

そしてもう一度湯船へと向かう。手桶一杯の水垢離によって引きしまった気持ちが、温泉の暖かさに再び緩んでいくのが、明確な感覚として把握された。なるほど、これはいいな。ずっとのんびりと湯につかっているよりも、しばらくつかったら一度出て水をかぶり気持ちを切り替えて、そしてもう一度つかるというのを繰り返ししていれば、きつとのぼせてしまうことなくずっと温泉にすることができるとじゃないか。

「いいことを学んでしまったな。これは、これからの俺の温泉ライフに革新をもたらすぜ」

というか、すぐに湯の中に戻ってきてしまったが、せっかく一度上がったのだから水を浴びるだけでなくパッと体と頭を洗ってきてしまえばよかった。あー、またしばらくは湯の中から出たくないかな、これはマズったな……。どうしよう、せっかくまた入ったの

に、洗いに出るか……？

でも、さっきみたいにつきりあったまるまでつかっていないと、お湯から出たときに少し寒いではないか。たぶん、今この瞬間に湯からあがるのは、きっと一番寒いに違いない。となってくると、まだしばらくはつかっていて、それからまた洗いに出た方がいいんだろうな、たぶん。

いや、しかし、思い立ったときに洗いに出ないと、またずるずると引っ張ってしまつて、本当にいつまでも温泉に滞在することになってしまうのではないか。というか、あんまりお湯につかってばかりいると、せっかく風呂に入っているというのに、頭とか体とかを洗うこと自体が面倒になってきてしまうかもしれない。それでは風呂に入っている意味がないではないか、それはいけない、それは。

「うーん、どうしたらいいかなあ……ん？ 誰か来た？」

そして、俺が肩まですっきりお湯につかつて満天の星空を眺めながらそんな、若干どうでもいいことに頭を使っていると、俺の一人温泉タイムの終焉を告げる音が、浴場の熱気がこもった空気を伝って俺の耳に届くのだった。はっきり言うと、露天と脱衣所を仕切る引き戸が開かれたのである。

そうか、とうとう誰か他のお客が来ちゃったか。まあ、いつまでも一人で入っていられるとは思ってなかったし、それはそれでいいんだけどさ。あつ、そうだ。もし、今しがた入ってきた人が先に体を洗ったら俺も湯から出て体と頭を洗おう。もし、先に温泉につかりにきたら、俺ももう少しつかっていよう。

決め難い何かを決定しなくてはならないときは、そうやって自分ではどうすることもできない何かに決断要素を委ねてみるのも、少なからずありだろう。

## 温泉戦線異状アリ

俺は、温泉からとめどなくもうもうと立ち上る湯気によって、まるで俺の生きている世界全てがポカポカの樂園に変わってしまったような、そんないい感じの気分になっていた。そう、温泉につかっているという事実だけでもう底なしにいい気分というか、他には何もいららないな、とか思っていたのである。

しかし今、俺の頭の中を支配しているのは、樂園のようなこの空間から如何にして、かつ迅速に退避するかということにほかならなかった。いや、別に、あつという間の心変わりですべて温泉が大嫌いになっちゃった、というわけではないのだ。温泉は今でも変わらず大好きだし、何も問題がなかったらいつまでだって温泉につかっていたという気持ちには、今だって偽りは無い。何も、問題がなかったら、な。

「ふんふん♪」

何を隠そう、今、俺にかつてない未曾有の危機が訪れているのである。これほどまでの危機は、当然今までに訪れたような危機では比肩するものなどあるはずがないのだが、おとし中学校を卒業するとき、十数人の不良グループから「卒業式が終わったら、校舎裏で待ってるぞ☆絶対きてね☆」というようなニュアンス（脳内改変済み）のラブレターみたいな呼び出し状をもらって以来のものではないかと思われる。ちなみにそのときは、霧子の涙に誓った不殺の約束に従って、呼び出し通りの時間に校舎裏へと赴き、そして一撃も喰らわず、一撃も喰らわせず、見事に逃げ切った。あのときの不良たちは今も元気になっているだろうか。それとも不良なんてバカなこととは止めてしまったのだろうか。

…、現実逃避に過去回想を始めそうになってしまったではないか。危ない危ない、落ち着け、俺。今この瞬間の現実を見つめないといけないぞ。そう、問題が発生してしまっているのだ。よし、まずは

落ち着いて状況を整理しよう。きちんと現状認識をしないと、現実を見つめることなんてできないからな、うん。

まず、俺は温泉に入っていた。しかも一人で。これは幸運だった。他の客が一人もいなかったんだからな。こういう偶然だったら、いつでも歓迎だ。俺は、風呂は一人で入りたい派だからな、うん。

それから、少しのぼせてきたから頭をすっきりさせるために水を手桶一杯かぶったんだったな。あれはよかった。温泉につかっていて火照った身体がスツとするようで、今までにない感覚だった。あれはこれからの温泉ライフをより快適にする発見であって、偶然にもそんな発見をすることができるなんてなかなか幸運だったと言っていいだろう。

それで、せっかくなかったって温泉から出たというのに、俺は温泉が好きすぎてすぐに戻ってしまったんだ。しかし、それは仕方ない。やっぱり、温泉は俺の心を引きつけてならないのだ。それもこれも、火照った体を水で回復させてしまったのがいけなかったんだ。いや、確かにアレはいい発見だったけど、でもより一層温泉から抜け出すことを難しくする、開けてはならぬパンドラの箱だったのかもしれない。いい発見だったからこそ、使いどころを誤らないようにしないでほしいな。温泉はとても良いものだけど、しかし温泉の中で生きていくことは出来ないのだ。けじめというものを、きちんと持たなくてはいけないだろう。

そして、けっきょく俺は、せっかく一区切りつけて温泉からあがったというのに身体や頭を洗うことなく戻ってしまったんだよな。それから、いつかは洗いに出不いといけないんだけど、どうしようかと考えていたら、他の宿泊客が温泉に入ってきたんだ。だから俺は、その人が洗い場にいったら洗い場に、その人が温泉につかりに来たらもう少し温泉の中に、とその人がどう行動するかによって自分の身の振り様を考えよう、と決めたんだったな。そういう風に、たまには全然知らない人の行動に自分の決断を委ねてみようかなあ、なんて思ったわけだ。まあ、ちょっとしたギャンブル気分だったよ。

なんというか、温泉につかってたわけだし、間違いなく気は抜いたね。まさか、ねえ、そんな、おかしいことが起こるなんて思わないじゃない？　だって温泉だよ？　こんな平和の象徴みたいな世界で、問題が生じるわけがないじゃない、ねえ？

「…、早く、逃げないと…」

問題というのは、その入ってきた人にあった。そう、問題があったのはその人であって、俺には何の問題もなかったんだ。だから、ある意味で俺はこの状況に何も関わっていないと言うことができるかもしれない。そうだ、俺はなにも悪くないんだ、悪いのは俺じゃなくて状況なんだ。まあ、そんなことを言ったからといって、何が解決されるわけでもないんだけどさ。

「ふんふん♪」

問題というのは何かと言うと、その入ってきた人が、男ではなかったのだ。ニューハーフなお方だったというオチでも、けっしてない。男でなかった、つまり、より状況を正確かつ明確な言葉によって明白なものにするならば、女の人が、どうしてかはまったく分からないのだが、男湯であるところのこの空間にやってきたのである。ほら、異常事態だろ？　そんなこと、常識的に考えてありえないだろう？　仮に、あくまでも仮に、女の人が何の疑問も持たずに男湯の入口にかけられている『男湯』と染め抜かれた青い暖簾をくぐって、女湯と寸分たがわぬ脱衣所（見たことはないが、脱衣所のデザインをわざわざ変えることはないんじゃないかと思う）で服を脱ぎ、タオル片手にその扉をくぐって来てしまったとして、…、あれ？　最初の暖簾をくぐっちゃえば、他にそこが男湯か女湯かを判断する材料が、ない……？　い、いや！　そんなこと関係ない！　そもそも女の人は男湯の暖簾をくぐらないんだから！

「と、とりあえず、俺が男湯と女湯を間違えてるって線は、ないんだよね……。だって向こうから志穂とか霧子とかの声が聞こえるし……。だいじょぶだ、落ち着け、俺。俺はなにも間違えてない。俺はなにも悪くないんだ。間違えてるのはあの女の人で、おかしいの

はあの女の人なんだ。だ、だから、堂々とするんだ……」

無理だった。堂々とするのは、無理だった。こういう場面で、男って弱いよな。やっぱり、こういう場面を誰かに見られたら、男である俺の方が悪いってことになるだろうし、っていかそもそも俺はきつとこの人のことをとっさにかばって悪者になろうとするんだろ  
うな。晴子さんの調教は、それほどまでに俺の無意識の奥深くまで根を張っているのだから、おそらく逆らうことはできないんだろう  
と思う。

「それにしても、俺はどうしたらいいんだろう……。逃げるにした  
って、あの人は引き戸のそばのシャワーのところに座ってるから絶  
対にばれずに抜けだすのは無理だし、ドア以外のところから抜けだ  
すにしても、そんなことしたら絶対見つかるだろうし。なんでこん  
なに詰んでるだよ、俺が何か悪いことしたのかよ……！」

いや、こんなところで憤慨しても何も始まらないぞ、落ち着くん  
だ、俺。とにかく今はなにをするべきなのかと言えば、おそらくあの  
人は自分以外に誰かが入っていること自体には既に気付いているだ  
ろうけど、それがどんな人なのかまでは気付いていないだろう。き  
つと、俺が男だってことには気づいてないんだと思う。だってそう  
だろ。気付いてたらすぐさま脱衣所の方に逃げてくれるはずじゃな  
い。か。というか、そうだったら、自分が間違えて男湯の方に入っ  
てしまったんだと気づいてくれるはずだし、そんなところで、鼻歌  
交じりの悠長さで艶やかな黒髪を洗っているはずがないのである。  
俺が男だと気づいていないということは、つまり素知らぬ顔でスッ  
とここから立ち去ってしまえば問題はないのではないか、と思われ  
るだろうが、しかし物事はそう単純ではない。言っておくが、俺は  
女の人  
が裸になっている横を素知らぬ顔でスツと通り過ぎることが  
出来るほど肝が据わってはいないぞ。絶対挙動不審になる。これは  
まちがいない。断言する。しようと思っていなくても絶対に不審な  
動きをしてあの人の目を引いてしまい、それから俺が男だとい  
うこ  
と  
がバレル。バレて大声を上げられて、そして隣の女湯で絶賛入浴

中の姐さんがまず飛んできて、それから志穂がわざわざ壁を超えてやってきて、そして霧子とメイがやってきて、そうしてすったもんだのごたごたがあったあと、俺は温泉にどざえもんのように浮かべられる。俺にはその未来が、明確なビジョンとして見えているのだ。絶対だ、これは間違いなく起きる。だから「素知らぬ顔でスツと脱出大作戦」は、ダメ。絶対ダメ。やってはいけない。となると、俺はどうするべき？

「ま、まだ、動くべき時じゃないってことだ、うん。いや、別に日和ってるわけじゃない。今は冷静になって、時が訪れるのを待つべきなんだ。俺だって、何も好き好んで姐さんにボコられたいわけじゃないんだからな、うんうん……」

そうだ、まずは冷静になろう。冷静になって、状況を見極めるんだ。そうすればおのずと突破口は見えてくるはずなんだ。

あっ、隣にいる姐さんたちに助けを求めるのはどうだ？　そうすれば、ほら、状況が変わるじゃないか。どっちに向かってどんなふうになるかはさっぱり分からないけど、でもマズい状況で停滞してしまうよりは、たぶんずっとマシ、なはず。でもどうやって？　と

いうか、姐さんに状況を知られたらダメなんだって。それはつまり姐さんに事情を説明しないといけないってことで、ということは今の男湯の現状を知られるわけで、それじゃあの人に声を上げられたのと何も変わらないじゃないか。姐さんは、自供したからと情状酌量するような、そんな司法取引みたいなことには決して応じない。

そういう人なんだ、姐さんは。

ということは、その作戦はダメ。それ以外に何か道を考えなくては……。

それじゃあ、何か投げて——たとえば手桶みたいなものだけど、明後日の方向で大きな音をさせて注意をそちらに向けておいて、そして俺がその隙に横を駆け抜ける、というのはどうだろうか。おっ？

もしかして、それって名案なんじゃないか？　ほら、人間って不意に大きな音がしたらそっちに注意を向けちゃう生き物だろ。そう

だそうだ、そうしたら姐さんにこちらの状況を知らせる必要も別がないし、何か男湯で大きな音がした、くらいの認識しか与えないことができないではないか。

よし、しかも都合のいいことに、誰が片づけ忘れたのか、手桶が一つ湯船に浮いているじゃないか。それに、ドアとは対称の方向に手桶が山と積まれているところがあるじゃないか。あそこの、ちょうど重心のところにこの手桶を投げつければ、いい感じに全部崩れてかなりの音が発生するだろう。そうすれば間違はなくあの人はそちらに10秒くらい、いや、そんなケチなことを言わず分単位で注意を向けてくれることだろう。そうしたら俺はその隙に悠々と脱出することが出来るじゃないか。しかも足音は手桶の崩れる音が消してくれるだろうし、ばれてしまう可能性は極限まで削られることに違いない。

俺は、出来るだけ音をたてないように温泉の中を移動し、そして神様からの贈り物のように水面に浮かんでいる手桶を手中に収める。狙うのは、ピラミッド状に六段も積み上げられている手桶の山の中心よりも少し下。下から二段目と三段目の境目の、ちょうど真ん中のところ。おそらく、あのあたりにぶちかますことができれば、あたかもボーリングでストライクを取るときのように、スカッと全てが崩れ落ちることだろう。うん、そうに違いない。間違はなく全て崩れ落ちる。

問題は投擲点から目標点までの距離と、それから俺自身の命中精度である。俺は、ボールを投げるような競技が特別苦手ということはないが、しかし実は、こういう風に手桶を投げるのは初めてのことで、正直狙ったところに百発百中で当てることができると断言できるか、といえは断言できない。目標点にピタリと当たる確率は、よくて五分五分と言ったところだろう。

でもまあ、おそらく少なくとも的外れな方向にすっぱ抜けることはないだろう。少なくとも、あの山のどこかしらには当たる、はずなのだ。そうすれば多少なりとも音がするだろうし、どうにかあの人



の関心を引くことはできる、はずなのだ。だいじょぶだ、落ち着けば当てられる。あれだけ大きな的を、この程度の距離から狙うんだ、当てられないはずがない。

よし、いけるいける。この作戦ならいける。これならば何の波風もたてずに全てを穏便なままで片付けることができる。しっかり狙えよ…、二つ投げることができる余裕は、残弾的にも状況的にもないんだ。一発できっちり山を崩して、そして一気に走り抜ける。それですべてが解決するはずなんだ。欲を言えばもう少し温泉につかっていたかったけど、なに、また後で、あの人が出たころにもう一回来ればいいだけだ。

とにかく、今はただ狙って崩すだけを考えろ…、頼むぞ、俺…、しっかり、きっちりだ……！

## いつも危機、今日も危機

（前回までのPrism Hearts）

温泉に入ってたらいつの間にかピンチ。例によって例のごとく、いつも通りのピンチ。

―閑話休題―

例によって例のごとく、日常茶飯事と言って差し支えないほどに、どうしてかピンチな状況に置かれてしまう俺だったが、今日の危機はそんなじょそらの危機とは比べ物にならないものだった。今回はいつも以上に、特にヤバイ。なにせ俺の社会的な生死がかかっているのだ、これを未曾有の危機と呼ばず何と呼ぶか。

そして今、俺は幸運にもその危機的状况から脱出するための方法を発見し、まさに今、それを実行に移さんとしているところなのである。さて、ということはつまり、この作戦が成功するかどうかに俺の社会的な生死がかかっているわけなのだが、おそらくこの作戦、八割から九割の確率で成功するに違いない。当初の想定通り完璧に事が進むのは難しいかもしれないが、少なくともとりあえずの成功はすると思われる。

だってとりあえずあそこに山と積み上がっている手桶のどこかしらに、ちょうどいま手に持っている手桶をぶつけるだけでいいのだ。

これを、スイートスポットに直撃させて山を完璧に瓦解させることを最低条件の目標にしてしまっただけで、その難易度は跳ねあがるだろうが、俺にはそんな大成功は必要ないのだ。いうならば、ほんの小さな成功でいい。ボーリングで言うなら、「とにかくストライクを出せ」と言われるのと、「なんでもいいから一本倒せ」と言われるのとを比べるくらいに難易度に関きがあるのではないだろうか。

呼吸を整えて、意識を研ぎ澄ます。周囲の音が、徐々に消えていく。

手の中にある手桶を確認、手の中で滑らせてしまわないように掴んでいる感覚を確かめる。

「集中だ……」

吸って吐いて、吸って吐いて。空気を吸い込み、そしてそれを循環させ吐きだす。その二つの行程を何度か繰り返し、緊張と弛緩のバランスを最高の地点まで持っていく。

吸って吐いて、吸って吐いて。目標地点までの距離は、おおよそで七メートルといったところ。この距離ならば外さない。投擲種目が特別得意ではない俺であってもそんな確信を持つことができるような、そう、これは簡単なミッションに他ならないのだ。

水音をさせてしまわないように気をつけながら振りかぶり、そして水面を乱してしまわないように気をつけながら腰を回転させる。下半身をそこまで動かすことができない今、何らか物を投げるとすると、そこで求められるのは腰より上、上半身の回転力である。この投げ方は野球で言うなら捕手から投手への返球を座ったまま行なう場合によく似ている。腰を回して肩を引き、そして腰を戻す勢いで肩、肘、手を引き、結果的に手の中にあるボールを押しだすような、そんな投げ方。今この瞬間、俺はその投げ方によって、手桶を投げることによって必然的に発生してしまう音を最小限に収めようとしているのである。

そして投擲距離はたったの七メートルほどなのだから、全力を手桶の速度と威力に込める必要はない。ここで求められるのは、ともかく手桶をあのかくにぶつけることであり、ともかくあちらの方にあのかくの注意を向けることなのだ。何はともあれ当てること、それが俺が今しなくてはならないことだ。

「せえの……！」

そして、放つ。引き絞った弦を放すように、振りかぶった力を前方へと押し出していく。放たれた手桶は、まっすぐに目標点へと飛んでいく。だいじょうぶ、手が滑ったり、指が引っかけたりはしていない。そう、このまま何の問題も起こらず一直線に飛んでくれ

ばいい。そうすればあの山が崩れる。そうすれば俺はここから脱出  
することができる。それで全て、万事解決だろう。

手桶がまっすぐに空を切っていた時間は、正味で一秒か二秒と言っ  
たところだろう。ほんのわずかな間を置いて、手桶は俺の願いを乗  
せたまま山へと衝突。しかもかなりいい位置に当たったようで山は  
瞬く間に瓦解、それなりに大きな音を立てていくつもの手桶が浴室  
の床を叩く。これだけの音がすれば、どう考えたって注意を引かれ  
てしまうに決まっているではないか。これで、あの人が崩れる手桶  
から俺の方に意識を向けるまでの時間を使ってこの場から脱出する  
ことができる。

俺は、急いで頭の上に乗せていたタオルを広げて腰に巻きつつ浴槽  
から出ると、体重をうまく移動させて足を滑らせることなく一歩目  
を踏み出す。湯船を出てから脱衣所にたどり着くまで、およそ五歩。  
女の人は驚いたように崩れゆく手桶の山へと目を取られてしまっ  
ている。おそらく俺の動きには気づいていない。いや、気付いている  
としても、俺の動きなんかよりも手桶山の崩落の方が気になってし  
まって仕方ないはずだ。

二歩、三歩。急いで急いで足を進める。濡れた床に滑りそうになる  
脚を操作して、なんとか転ばずに進んでいく。そして四歩目、五歩  
目を踏もうとして、ゴールである脱衣所へと足の指がかからんとす  
る五歩目を踏もうとした瞬間、どうしてか右手にスッ…、と手が添  
えられた。添えられた手は、まるで絡め取るように右の手、上腕、  
二の腕、肩まで一息で通って左の肩へと到達した。そしてその腕は  
俺の進行方向を遮り、それからまるで抱きすくめるようにもう片方  
の腕も回され、俺は見事に拘束された。

「三木様、もうお出になるのですか……?」

耳の間近で、その人は隣の女湯に聞こえてしまわないようにひそめ  
られた声で、小さく囁いた。そう、その人は、俺はそちらの方をあ  
まり見ないようにしていたから気付かなかったのだが、どうやら三  
枝さんだったらしいのである。

「まだ、湯につかっただけなのでしょう……？ それならば、きちんと身体を洗うまでは、出てはいけないのではありませんか……？」  
ここに居るのがこの旅館の従業員である三枝さんということは、それはつまり女の人が間違えて男湯に入ってきてしまったというわけではないのだ。だってそうだろう、従業員がそんな間違いをするなんて、そもそもからしてありえないことではないか。ということは、何か考えがあつてここに入ってきたということになる。しかも俺が入っているということも把握しているということは、その疑惑はほぼ間違いない確信へと変わる。

「さあ、こちらに座ってくださいませ。お背中を、お流しします」  
「け、けけ、けっこうです……」

「そんな、遠慮などなさらないでください。言いましたでしょう？ 私はこれから三日、三木様のお世話をさせていただきます、と。だからこれも、その一環だと思ってくださいませ」

「さ、サービス過剰、なのでは……？」

「サービスでしたら、過剰であつてはいけないかもしれませんが、ご奉仕でしたら過剰はむしろ正しいでしょう？ 私は三木様にご奉仕するためにここに居るのですから、これくらいのことは何の問題でもありません」

「ご、ご奉仕っていつでも、仕事じゃないですか。仕事なんですから、そんなに無理をしなくてもいいんですよ……。俺、別にチクつたりしませんから、別に無理してこんなことしなくてもいいんですよ……？」

「仕事では、ありません。仕事で、こんなことは出来ません。仕事としてやれと言われただけでは、このようなことは出来ませんもの。これは、私の意思、ですから。さあ、こちらにお座りを」

「は…、はい……」

その場からの脱出に失敗して三枝さんの腕の中に捕えられてしまった俺は、その意思の力に気圧されるように、三枝さんの言うままについさつきまで三枝さん自身が座っていた丸椅子に座らせられて

いた。いったい何の思いが、あるいは思惑があってこの人がこんなことをしているのか、そのことは俺にはまったくもって分からないわけなのだが、しかしとにかくこの状況がよろしくないということだけははっきりと分かっている。

しかし再びここから逃亡しようにも、この人、パツと見た感じではまったく分からなかったが、かなり鍛えているか、あるいは極めている。少なくとも、俺が力づくで押し通ろうとしても上手いかない程度には力か技か、何かを持っている。そういう人たちには、真正面から何をしても無駄である。俺はそのことを友人たちから嫌というほど学んでいるのだ。この人のことは、これから姐さんと同程度の力量を持っている人だと思うことにしよう。それくらいの使い手だと思っただけかからないと、きっと簡単にやり込められてしまうだろうからな。

「ずいぶんと長くお湯につかってらっしゃったんですね…、身体がこんなに熱いです…。」

「温泉…、好きなんで…。」

「そうでしたか…、だからずっと入っていらっしゃったんですね…。」

「温泉…、好きなんで…。」

しかし、ここから抜け出すといって、いったい何をすればいいというのだろうか。今の状況を表現するとすれば、それはおそらく座っている後ろから抱きすくめられている、というのがもつとも的確なものに違いあるまい。果たしてこんな状況から、如何にして脱出するのだろうか。ただでさえ温泉でのぼせかかっている頭がはつきりしていないというのに、それに加えて今、背中の肩甲骨のあたりに彼女の豊かなバストが押しあてられて集中力がどっかに行ってしまったと言っているのに。

「それでは、まず頭からお流しますね…。」

「あ、あの、他のお客さんが」

「入ってきませんので、安心してください……。それよりも、あま

り声をあげられると不審に思った隣のご友人方がこちらにやってきてしまいますよ……」

「うぐ…、それは、そうなんですけど……」

くそお…、あとは逃げるだけだからと、さっき手桶を投げるときに集中力を使いすぎた。ダメだ、頭が回らない。ただここから逃げることにだけにすべてを費やしていればよかったさっきとは、状況があまりに激変している。マズい、何をどうすればいいのかが、だんだん分からなくなってきた。俺は、今、とりあえず、何をすればいい？　ここから逃げることは大前提だけど、そのための前準備として、俺はなにをすればいいんだ？

うう…、考えなくちゃいけないのに、思考を止めちゃいけないっていうのに、温泉からわき上がり俺の全身を包んでくる熱気がしきりに思考停止を勧めてくる……。もうどうしようもない、現状は打開できない、状況に流されてしまえと、絶え間なく耳元でささやかれ続けているような、そんな気分だ。

とりあえず、立ち上げればいいのか、それとも横に転がればいいのか、あるいはなんとか口で丸めこむことをそれら以前にするべきなのか、もう何も分からない。考えがまとまってくれない。まるで丸太でできた簡素ないかだか、それとも小さなゴムボートのように、思考が意識の海原にもみくちゃにされている。思考の目的地は定まっている。出発点である現状も理解しているつもりだ。しかしそれでも、その間を埋める方法へと思考が届かない。いつもなら無意識的にやっている、取るべき方法のルートの取捨選択が、まったくもってうまくいかない。

「シャワーを、かけますね……」

いつそのこと、頭から大量の冷水でもぶっかけてくれれば、少しは今よりもまともに頭も回ることだろう。しかしかけられるのはちようどいい温度に設定された温かいシャワーであり、それが俺の思考を研ぎ澄ます手助けをしてくれることはない。相変わらず、俺の意識はどこかぼやけたまま。今のままではいけないと、ただぼんやり

と方法を持たない危機感だけが無限に、そして無為に生産されている。

「熱くは、ありませんか……」

「…、ちょうどいい、です……」

さっきまでちょうどいい塩梅に調整していた緊張と弛緩のバランスが、熱気と、温水と、それから優しい声音によって崩されていく。まるで、なんとか保っていた緊張が溶かされていくように、ただ全てを弛緩した感覚が支配していく。何も明確に捉えられず、徐々に唯一確かだった現状への危機感すらも薄らいできてしまう。

マズい…、このままでは現状に迎合してしまう……。受け入れてはならない状況を、諦めとともに受容してしまう。ヤバイヤバイ……。どうにか、何かを展開させないと。このままだと、じきにあらゆる全てのことがどうでもよくなってきてしまうのではないか。そうなら、もうただ、これから訪れるであろう何らかの刺激に対して、ただ漠然とそれを受け入れるだけの不確かなスタンスしか取れない存在になってしまう。そうってはいけない。それでは、俺の意思はどうなる。この状況を漠然と受け入れるなんていけないと考えている、俺自身の今この瞬間の意思はどこに溶けてしまうというのだ。動かさなくては、思考と状況を。

諦めたら終わりだ。

思考停止してはいけない。

なんとかして抗わないと…、現状に、状況に……。



## 曰く、バカの考え休むに似たり、と

今現在、いったい俺がどういう状況に置かれているかというところ、と  
りあえず一言に全てを集約させて言ってしまうとすれば、たぶんピ  
ンチだった。いや、状況的に見ればあまり危機という感じはしない、  
というかむしろこの上なく極楽じみた何かしらに見えるのではない  
か、と思う。もちろん俺としてはそれが危機であると声高に主張し  
たいところなのだが、しかし声を高くしてしまつては隣の女湯で絶  
賛入浴中の姐さん以下四名、俺の友人たちに俺が置かれている状況  
がバレてしまう可能性が生じてしまうわけであり、そんなことはど  
うしたって出来はしないのだが。

「かゆいところはありませんか？」

「…、左の耳の、裏のあたりが少し…」

「このあたりですか？ このくらいの強さでいいですか？」

「…、いいです…」

具体的に何をされているかと言えば、どうしてかは分からないが頭  
を洗われていた。ぼんやりしている間にどういう展開が発生したの  
かはよく分からないが、しかしとにかく、シャンプーは俺の頭の上  
であわあわと泡を発生させているわけで、髪の中でわしゃわしゃと、  
ほっそりとした十本の指が動きまわっているのはどことなくこそば  
ゆく、自分で頭を洗っているときには感じない感覚がそこにはあっ  
た。

俺は基本的に床屋とか美容院とか、そういうところには未だかつて  
行ったことがないわけで、こんな風に誰かに頭を洗ってもらうなん  
て、物心つく前に生きている両親か、あるいは庄司のおじさんおば  
さんあたりにやってもらって以来の経験かもしれない。自分でやっ  
ている分には、もちろん全ての動きが俺の思いのままに為されるの  
であって、不意打ちみたいなことはどうしたって発生するはずがな  
いのだが、しかし自分以外の人によってもらうとなると、そういう

のがしばしば発生して微妙にびっくりさせられたりする。

ちなみに、俺が髪を切ってもらいにお店に行ったりしないのは、以前はおばさんが見事にカッティングしてくれていたからであり、また今は俺が自分で見事にカッティングしているからなのだ。以前に人の髪を切るのはけっこう上手いといったが、それと同じくらいに自分の髪を切るのが上手いのだ。少なくとも、上手く出来なかったからやっぱり床屋に行かないと、とかいう状況になったことは一度もなく、ミスらしいミスも、実はしたことがなかったりする。

「そういえば、三木様は、トリートメントはなさるのですか？」

「ええ、まあ…、あんまりする意味はないんですけど。それにトリートメントっていうか、シャンプーした後のついででリンスをするくらいで」

「そうですか、それでは後ほどそれもさせていただきますね。これはトリートメントですので、リンスとは違ってすぐに洗い流さないものなのですよ」

「へえ、そうなんですか……」

「はい、トリートメントは毛髪の中に成分が浸透するので、そのための時間が必要なのだそうです。ですので、トリートメントを馴染ませている間に身体を洗ってしましましょう」

「…、そうですね」

しかし我がことながら、どうしてこんなことになっているのかさっぱり分らない。だって、なんだこれ。こんなの、完全に俺の理解の範疇の外側だ。意味が分らない、と言い捨てるしかないような気がする。

果たして、この状況はどうしたら理解することができのだろうか。少なくとも、俺が通常の思考で思いつくようなんらかでは、ないだろう。俺のたどり着くことのできない何かが、少なくとも一本、この状況の裏側に屋台骨として建てられている。それが何かということは、もちろん、俺の知らない何かだろうし、俺の思いつきもしない何かに違いない。だからこそ、今ここでそれにたどり着くことは

出来っこないのである。

つまり、俺は論理的かつスマートな方法でこの状況を解決、あるいは解消へと導くことは出来ない。だってよく考えたら前提条件が分からないのだ、そんなことが出来るはずはないじゃないか。いつてしまえば、俺にはそもそもその一步目が見えないのだ。さっきは現状を捉えているつもりなんて思ったけど、俺がようやく捉えることができていたのは現状ではなく、ただの事実認識でしかなかったのだ。ただ目の前にある事実を事実として見ることは、そこまで難しいことではない。しかしその一步前、その具体的事実がどういうことを前提にして発生しているのかが分かっていない。事実という建物は見えているが、前提という土台が見えていない。今はつまりそういうことなんじゃないだろうか。

「それでは流しますね。目を閉じてください」

「はい……」

くっ、とコックが捻られ、シャワーヘッドからちよいどいい温度のお湯があふれ出す。泡だらけの頭に当たったそれは、その水流によって髪についた泡を洗い流していき、流れ落ちる泡は水の流れに乗って排水溝へと流されていく。そしてやわやわと、髪に差し込まれた指がゆっくりと動き、髪の毛に乗っている泡を流す手助けをしている。自分で髪を洗うときは、こんなに丁寧にやらないわけで、そのゆっくりゆったりとした動きがくすぐったくて、やっぱりどこかこそばゆい。

うーん…、よく考えたら、物心ついてから今まで、こんな風に他人にいいように弄ばれたことはなかったかもしれない。だからこここんな風に、どうとも言えないような違和感のようなものを感じているのかもしれないな。まあ、頭を人に洗われているくらいのことでもここまで言うのも、もしかしたらおかしいことなのかもしれないけど。とにかく、なんかもう、変な気持ちなのだ。別に人にやさしくされることに慣れていない、とまで言うつもりはないが、しかし身の回りの世話を過剰にされるような環境で生きてきたわけで、だか

らこそ逆に、今まで出来るだけ人に迷惑をかけたりしないようにと  
気をつけて生きているつもりなのだ。いきなりこんな風にされたら、  
どうしたらいいか分からなくなるじゃないか。具体的には、どうや  
ってここから脱出すればいいのか、分からなくなるだろう。

「目には沁みませんか？」

「だいじょぶ、です……」

「それではきれいに洗い流せましたので、トリートメントをします  
ね」

「…、お願いします……」

「それにしても三木様の髪は、とても芯がしっかりしていらっしゃ  
るんですね。ですが、だというのに柔らかくて、髪型のつくりやす  
い髪です」

「そうなんですか？ 俺は、あんまりそういうおしゃれな感じでは  
ないんで、髪質とかぜんぜん気にしたことないんですけど」

「素敵だと思います」

「そうですか……」

しかし、どうやってここから脱出するかといってもそんなことは思  
いつかないわけである。とにかく、少なくともこんなところで、こ  
んな風にシャワーをかぶっている場合ではない、ということだけは  
確かなのだが、だからといってここからどう動いていけばいいのか  
は、さっぱりわからない。

たぶん一番分かりやすいのは声をあげて仲間を呼ぶことなんだが、  
しかしそんなことをしてしまえば、当然真っ先にやってくるのは姐  
さんなのだから、大惨事は免れない。きっと姐さんは、俺が困って  
いるとなれば真っ先に飛んできてくれる。そういういい友人なのだ。  
いい友人なのだが、しかしこの俺の置かれている状況を目にしてし  
まえば俺が困っているという危機はとりあえず置いておいて、俺が  
また破廉恥なことをしているとお怒りになるに決まっているのだ。  
姐さんにとってみれば、俺が危機に置かれていることよりも、風紀  
的によりしくない事態が発生していることのほうがより重大な危機

として重視される。そして、男の危機よりも女の危機の方がより重大な危機として認識されるのである。つまり、姐さんがここにきてしまうと、意味も分からず三枝さんに頭を洗われている俺よりも、裸で、男湯で、俺の頭を洗わさせられている三枝さんの方がより危機的状況に置かれていると判断され、それによってその危機の元凶である俺が始末されてしまうに違いないのだ。

いや、ここでは俺が助けを求めたこととか、三枝さんが声を上げようとしなかったこととか、まず何が起こって次に何が起こってここまで状況が進展しているのかとかいう事実の前後関係とか、そういう細かいことが想定に置かれることはない。ただここ、この瞬間に、今までどういう経緯をたどってきたのか、とかは関係なく、姐さんの目に映る光景が是か非かという判断が生じるのみなのである。そしておそらくこの光景、姐さん的にはアウト、超アウト。どう考えてもセーフになど、なりようがあるまい。

姐さんが見たらこの光景、俺が部屋付き世話係である三枝さんに、客としての立場を笠に着て無茶な要求をして風呂場まで連れてきて、辱めると同時に奉仕まで強要していると思われるに決まっている。そうになったら俺はやられる。ボコられるに決まっている。だって、そうにしか見えない。姐さんが見たからそう判断されるんじゃない、誰が見たってそう見られる。俺が鬼畜プレイをしていると思われるに決まっているじゃないか。

だから、バレてはならないのだ。姐さんたちにバレたら終わり、仲間内での俺の評価に大打撃が与えられるに違いないのである。つまり、ここから逃げるとしたら一人で全てを打開しなくてはならない、ということだ。

「お背中、お流しします」

「…、はい……」

「痛くはありませんか？」

「だいじょぶ、です……」

しかし、いったい何の目的があってこの人はこんなことをしている

んだろうなあ。だってこんなの、全然この人にとってメリットがない。恥ずかしいだけじゃないか、こんなことしてても。別にこうしてくれたからといって俺が彼女に対して何か有益なことをしてあげられるわけではない、ということは三枝さん自身分かっていることだと思う。

いや、むしろ逆に考えるんだ。これをすることによって三枝さんが何かを得られるとしたら、どうだろう？　しかし、それならば何が？　俺はタオル一枚で財布を身につけてないから泥棒ということはなし……。もしかして、色仕掛け？　…、何のために？　そりゃ、色仕掛けっていう意味でいうなら効果は抜群かもしれないけど、でもその必要性も必然性も見えない。行きの車の中で、俺のことはあらかじめ知っていたと言っていたから、それってことはつまり三木の現状も知っているわけで、俺なんかに色仕掛けをしたって金を引っ張り出すことができないことも知っているはずなのだ。あと、マングとかでは色仕掛けの定番である玉の輿狙いも線としてなくはないけど、それも同様の理由によってなさそうだ。金を持っていない相手の玉の輿に乗ろうなんて、そもそもからして玉の輿という言葉の意味をはき違えているとしか思えない。故に、却下だ。

あるいは、目的は金じゃないのかもしれない。となると、名誉か？　俺の背中を流して、いったい何の名誉を得ることができると言うのだろうか。それとも、隙を窺っているのか？　何のために…、命か……？　ほら、うちは、実は伴ってないけど、家の名前だけはすごいらしいから、そこらへんを狙った殺し屋とか？　別に俺が今まで命を狙われたことがある、とかいう事実はないんだけど、でもそういう可能性がないとは限らない。まあ、あくまでも可能性というだけで、無限に存在する可能性の中の毛一本ほどの瑣末なものの一つでしかないけど。だって当然だ。現に、完全に後ろを取っている今なら殺し放題だというのに、しかし殺さないじゃないか。プロならもうとっくに殺してる。でも殺されてない。だからその可能性は考慮に値しないほどの些細なものではない。

…、うん、意味が分からなくなってきたぞ。しかし、この行動には何か意味があるに違いないんだ。人間はおおむね意思と意味を持って行動するものなのだ。もちろんその限りではないこともあるが、そういうときはもつと無難な、見るからに意味のなさそうな行動を取るはずなのだ。だからこそ、ここには何か裏がある。あるに決まっているのだ。そうでなかったら、納得できない。何の意思も、意味もなく、こういうことをされては困るのだ。何でもいい、俺の納得できるような理由をつけてくれないと、腑に落ちなくて気持ち悪いじゃないか。

「……………」

「どうか、なさいましたか？」

「いえ……………」

「もう少し、強くした方がよろしかったですか？」

「いえ…、あつ、前は自分でやるんで」

「？ 前も後ろも、もう終わりましたが……………」

「えっ？ でも今、もう少し強くとか何とか」

「明日のためです。よりよくするために、教えて頂いた方がいいと思いますして」

「…、ああ、ちょうどよかったです」

「そうでしたか、それでは明日も今くらいの強さで洗わせていただきます」

「……、明日は、別にやってくれなくても」

「明日も、やらせていただきます」

「…、はい……………」

なんなんだ、この押しの強さ。俺が押しに弱いと知っていて、こうも強気の姿勢で来ているというのだろうか。まったく、女の人に強く出られると反抗する気概をまったく失ってしまう俺もどうかと思うが、しかしこう、もう少し押しの弱い女の人がいたっていいではないか。というか、俺の周りの女子は押しが強すぎるんだ。環境だ、環境がいけないんだ、俺が悪いんじゃない。

「それでは流しますね」

そうして、三枝さんは俺の頭からザバツと手桶にためた湯を三度ほどかけると、もう一度シャワーで髪についたトリートメントを丁寧に洗い流してから、本当に俺の髪を洗って背中を流しただけで、風呂場を出て行ってしまったのだった。本当に、何のためにここにやってきたのか分からないまま状況が終わってしまったではないか。

何なんだ、本当に。俺を動揺させるのが目的なのか？

「ああ…、ほんとに分からん……。何がしたかったのかだけでも教えて言ってくれればいいのに……」

それから俺は、自分で勝手にこんがらがったのだが、混乱した頭を抱えたままもう一度湯船につき直し、一時間ほど、もういっすすべてがどうでもよくなってしまうまで、その場にとどまっていたのだった。



## ポツチの夜

「あゝ…、なんで風呂入ったのに疲れてるんだ……」

俺の人生の中でも最長記録に達しないほどの入浴時間を経て、今こうして部屋に戻ってきたのだった。

「っていうか、みんなとつくに風呂からあがってたなんて、ばれちゃいけねえってがんばってた俺のなんたる道化振りか……」

現在時刻は、かばんにつっこんでいたケイタイを取りだして確認するに、今まさに十時になろうかという、だいたいそんな感じ。そろそろ時間的に霧子と志穂はお眠だろうなあ、なんてことに思いをはせブツブツと独り言を漏らしているのだが、しかし今現在俺は部屋に一人きりなわけで、そんな独り言に返事が返ってくるようなことはないのである。

ああ、いつの間にかこんな時間になってしまつて…、これじゃあもう部屋でのんびりしている以外にやることがないじゃないか。布団の中でごろごろしながら夜が更けるまでおしゃべりしたりするのが旅行の夜の過ごし方の定番なのだから、やっぱり不手際として姐さんにシバかれる可能性があったとしても去年と同じで一つの部屋でみんな雑魚寝状態が良かったのかなあ、なんて今となっては完全に手遅れすぎることを思ったりするくらいには、暇な状態が極限に達していた。

「もう、寝ちゃおうかなあ……」

きつと、そんなこと思ってるならみんなが眠くなるまで女子部屋に遊びに行けばいいじゃん、別にいっしょの部屋で寝るわけじゃないんだし問題ないんじゃない？ とか軽いことを考えている人が多いのではないかと思うが、しかしそんなことをしてみろ、その先に待っているのは明確に命の危機だ。我らが風紀乙女、姐さんの貞操観念を甘く見ても舐めてもいけないのである。

そもそも去年、あんな感じ（第35〜45話付近を参照）に俺が部

屋の中で睡眠することを許されるに至るまで、それはもう筆舌に尽くしがたい苦労があったのだ。あの瞬間、間違いなく俺の人権は存在せず、少なくとも日本人として最低限保証されるべき生存権と社会権がはく奪される一步手前であることは疑いようもなかった。

実はあのとき、最初の時点では、俺には廊下で寝るかあるいは完全に目張りした戸棚の中で寝るかとの二択が突きつけられていたのだ。間違いなく人間として扱われていなかったが、まあ、姐さんの潔癖性と鉄壁の貞操観念を考えれば、それもまた致し方なしと言うしかないのかもしれないが。実際のところはなんとか俺の説得に応じてくれて、俺がソファで寝るといところで妥協してくれたわけで、同じ部屋で夜に男女が空間を共有して寝るところについてはしぶしぶ、本当にしぶしぶ認めてくれた。そんなわけで、去年は俺が毛布一枚かついで部屋から出て、廊下でミノムシのように寝るという事態に陥らなかったのである。

そして、そんなこんなですったもんだがあったのが去年。その労苦を二度と味わってなるものか、と徹底した管理によって去年と同じようなミスが犯すことがないように広太には厳命し、俺自身もそんな不手際が生じていないかを自分の目で確かめるといった二重チェックの体勢を築いてまで迎えた旅行が、これなのである。俺のためめ努力によって、確かに去年のような大変な事態は訪れなかったが、しかしまさかこんなことが副作用的に発生しようなどと、誰が予想することができただろうか。

「いいんだいいんだ…、今年は暇だけで、大ピンチが発生したりはしてないんだし…。暇なくらいで、むしろちょどいいんだし…。男一人なんだから、仕方ないんだもん…。不可抗力だもん…。」

ちなみに、すでに部屋係の三枝さんが、俺が風呂に行っている間にパリッとノリのきいたシーツを被せた布団を敷いてくれていて、部屋はすでに完全に睡眠可能領域と化しているわけである。ここまできていれば、もはや俺が思い立った瞬間に布団へとダイブすること

ができ、眠るための準備は完璧なのだ。

しかし、見るほどに気持ちよさそうな布団である。真っ白く洗い上げられたシーツに包まれた、よく太陽の光を浴びているだろう布団は、どうしてか今なお暖かそうであり、寝転がれば優しい太陽のぬくもりに包まれてあつという間に眠りの世界へといざなわれるだろうことは明白だった。おそらく、大して眠くない今でも、布団に入ってしまったが最後、数十分の後には、すやすやと寝息を立ててしまっている俺がいるに違いない。

…、実は一つ気になることはあるけど、ここはあえて触れないのが吉！ ほら、触れちゃうと、俺が気付いたってことでそれに関する話が展開しちゃうかもしれないじゃん？ 気付かなきゃいいんだよ、こんなの。うん、俺はなにも見てない。見てないんだから、ここには気になるものなんて何もないんだ。何もないんだから俺はなにも気になってなんかいないぞ！

「あゝ…、もう寝ちゃおうかなあ……。ぶっちゃけ、ぜんぜん眠くないんだけど、することもないし。メールでもしながら布団に寝っ転がってたら、じきに眠くなってくるんじゃない？」

というわけで、風呂上りということできちんと着ていた浴衣から寝巻用のジャージへと着替えようかな、と思い立った俺は、とにかく着替えるためには脱衣だよな、というわけで適当に結っていた腰の帯——なんか名前があったように思うけど、俺は覚えていない。だから帯としか言いようがない——を解く。和装というのは便利なもので、基本的には一枚の布で全てが構成されているわけで、洋服に比べてこんなに脱ぎやすいのだ。いやはや、洋服の複雑さに比べてこの簡素な感じ、たまりませんな。

はっ！？ 脱ぎやすいということは……。逆に言うと、脱がせやすい……。！？ ど、どっちだ……。？ 昔の日本人は横着だったのか……。？ それとも、エロかったのか……。？ どちらにしても、昔の日本人ってばもう……。？ という結論になりそうだからどっちでもいいのかもしれないけど、これは和装という存在自体の意義に深くかか

わかることのような気がしてならないぞ！

…、少なくともこの話題、言葉に出さず頭の中で考えているだけだとしても、ビックリマークをいくつも使ってするような話題じゃなかったね。いかなあ…、やっぱり一人でいると、どうにも変な方に思考が流れていつっちゃうなあ……。

「バカなこと考えてないで、健康的に寝るか。しかし…、いつもは十二時ごろに寝て六時に起きてるんだから、十時に寝たら明日起きるの四時だよなあ、睡眠時間的に……。それこそ、そんな時間に起きてもすることねえよ……。今なら姐さんとか起きてるかもだけど、でも朝のそんな時間じゃ確実に誰も起きてないって。ああ、もう、姐さんにシバかれるの覚悟であっちの部屋行こうかなあ。ほぼ間違いない一発はもらうけど、でもけっきょくなんだかんだって姐さんは俺にかまってくれるからなあ。それに、寝起き特攻かますよりも、寝入る前の時間潰しでちよっとお邪魔する方が許されそうない気もするし。うん、やっぱりそうしたほうがいいんじゃないかな？」

浴衣はどうせ明日も着るだろうからしわにならないようにハンガーにかけて、それから俺はトランクス一丁の状態からTシャツを着て、そしてジャージの上下を見につける。いや、別に浴衣のまま寝たつていいのかもしれないけど、でも何が起こるか分からない世の中だ、寝るときもキチッと服を着ていた方がいいだろう。何が起こるかなんて、知らんけどな。

白と黒の、いかにもスポーツします、みたいなジャージを身にまとい、しっかり首元までジップアップして完全防備となった俺は、いままさに、いつでも睡眠可能な睡眠戦士にクラスチェンジしたといつて過言でないだろう。きつと、今ならあつという間に眠れる。ぜんぜん眠くないけど、でもたぶん眠れる。眠れるに、違いないんだ！！

「それじゃあ…、おやすみなさい！！」

『三木様、失礼いたします……』

俺が、いつもよりもずいぶんと早いが、睡眠への決意を固くし、今

まさに布団の中に入るぞ！！　　と思いを新たにしたところで、コツコツと扉がノックされ、そんな声がかけられたのだった。身体を敷き布団と掛け布団の間の隙間に滑り込ませようと、掛け布団の角に手をかけようと手を伸ばした瞬間の出来事だ、言うならば、俺の睡眠への決意は出鼻をくじかれたようなものであり、第一步を踏み出し損ねたのであった。

「…、どうぞ…。」

「夜分遅くに失礼いたします。お約束の通り、参上いたしました」そして、開かれた引き戸の向こうに立っていたのは、他でもない、三枝さんだった。その格好は昼に見た仲居の制服ではなく、かといってさっき露天で見たあられもない格好でもなく、なんというか、浴衣というか、長襦袢というか、俺はその辺の分類が詳しく分からないから口をつぐむしかないが、そういう和装の中でも薄着って感じの格好をしていた。

っていうか、そうだな、こういうところで仕事するってことは常に和装を強要されるんだな。イメージって大事だもんな、やっぱり。従業員がジャージとかパジャマでうろついてる旅館って、なんかやだもんな。

「…、あゝ、そういえばそんな話があったようななかったような…。」

「ありました」

「ありましたね、はい。あったあった、十五回くらい前にありましたよね、そんな会話、うんうん」

「ですので、こうして遅いお時間ですがお邪魔させていただきます。ですが、本当にお邪魔でしたら下がらせていただきますので、どうか正直におっしゃってください。三木様のお邪魔をするのは、私の本意ではありませんので…。」

「邪魔では、別にいいですよ。確かに、ちょうど暇していたところですし、いてくれたって別に一向にかまいません。でも、せっかくのお休みの時間に、こんなところにいるもいいんですか？　こんな

ところにいたら仕事の延長みたいに気が休まらなくて、疲れませんか？」

「いえ、そのようなことはありません。確かにこうして三木様のお傍にいらしていただくのは、お仕事としての時間とそう変わらない状況であるかもしれませんが、ですが苦痛などではありませんから。そもそも、こうして三木様とともに時間を過ごさせていただくために、今まで二ヶ月ほどですが、ここで働いてきたようなものですから、お気になさらないでください」

「？ それってどういう……？」

「あつ、えと、それは、ないしょ、です……。失言です、忘れてください……」

「いや、別に、それはいいんですけど……。…、まあ、いいか。それじゃあ、何しますか？ 俺、トランプくらいだったら持ってますけど、何ができます？」

「と、とらんぷ……？」

「あれ、トランプ苦手ですか？ まあ、二人でやるトランプゲームなんてたいがいそんなに面白くないし、違うのがいいっていうなら別のがいいか。うーん…、それ以外で遊びっていうと……」

「お、おしゃべりなど、どうでしょうか……？ こうして旅行に出られたとき、若い方は夜は眠くなるまでおしゃべりをしてお過ごしになるものなのでしょう？」

「まあ、そうですね。っていうか、三枝さんも若い人のカテゴリですよね？」

「部屋を暗くして布団を寄せ合って、好きな人のことなどを打ち明け合う様子は、学生の方が行くという『修学旅行』ではよく見られるものだとか」

「一昔前の学園青春物とかだと、もはや定番みたいな光景ですよ、それは。いや、今でも定番なのかな。実際、俺も向こうの部屋に行つてそれに近いことをしようかと思つてたくらいだし」

「ですからそのように、おしゃべりをして時を過ごすのがよろしい

のではないかと、私は思いました」

「…、そうですね、それじゃあ、少しおしゃべりでもしましょうか。とりあえず今、お茶いれますね」

「あつ、いえ、ですがお布団に入っただけのことですので、お茶は……。こぼしてしまっただけは大変ですので……」

「いや、おしゃべりは座ってですよ、はは、なに言ってるんだか。ちよっともう机はしまわれちゃってるんで、向こうの板張りのテーブルの方で、ね？」

「ですがこうして、準備も整えておきましたのに……」

「やっぱりあなただったんですねこれやったの！？ 一つの布団に枕二つ並べるとか、そういうことやっちゃダメですよね！？ ああっ！？ 思わず突っ込んでしまった！？ なにがあっても触れるもんかって思ってたのに！？」

「こうしておけば、お布団が一つでも二人でいられます。いい考えだとは、思いませんか？」

「どうかなあ……。こういうの、どうかなあ……」

「それでは、失礼します」

「早い！？ 決断早い！？」

「さあ、三木様もいらしてください。布団を暖めておく機械を使いましたので、もう暖かいです」

「ちよ、ちよっと心の準備するから、待っててくださいね！？」

パパッと、着ている着物を一枚脱いでより薄着になった三枝さんは、俺が動くよりも先に布団をめくってその間に身体を入れた。そして左側の枕にポスツと頭を置くと、ここまで状況を強引に進めてきた人とは思えない、少し恥ずかしがるような仕草で掛け布団を口元まで引っ張り上げて、目と指先だけを出して俺を無言のまま呼ぶのだった。

なんだこれは、いったい俺はなにを試されている。こういう状況においてどう動くのがよりよいのか、俺にはよく分からないのだが、しかし据え膳食わぬは男の恥とも言わけてありまして、ここは男

らしくスパッと決断するのがよろしいだろうことは明らかなのであります。

ええ…、とりあえず、まずは深呼吸でもすることに、いたしましうか。



## ジョーク・イン・USA

「暗い場所を、俺たちは二人で歩いていたんだ。二人っていうのは俺と、それから子どもころからの親友のジャックさ。あいつとはいつでもどこでも、どんなときもいっしょだった。いっしょじゃなかったのは、それこそ生まれたとき入ってたおかあさんの腹の中くらしいものさ。それでね、長いトンネルみたいなところを抜けた後、パッと開けた場所に出たんだ。そこでね、ジャックは言うんですよ、『急に懐かしい場所に出たぞ。ほら、昔、いっしょに遊んだあの場所じゃないかい？』って。それでですね、そこで俺は言ったんです。『おいおい、ジャック。お前が言ってるのは、そりゃ故郷のミシガン川のことかい？』ってね」

そしてけっきょく、俺は今日の前にある状況をどうすることもできなかったわけで、三枝さんが当初思い描いていたであろうプランと同じように、一つの布団で身を寄せ合うようにして二人並んで横になっっているのであった。いや、確かに、こんな結果以外にも何らか他の解決策があったのではないかと言えば、逃げるとか逃げるとか逃げるとか、まあ、いろいろあったのではないか、と思うわけなのだが、しかしいったい、ここからどこに逃げればいいというのだろうか。

仮にこの場所が、俺の家まで徒歩圏内に位置しているとして、それならば俺だってここから駆け出して我が家へと滑り込むことだろう。しかしここから自宅までは、電車ですら数時間を要する遠く離れた場所であり、自宅へと逃げ帰ることは出来ないのである。それならばこそ、俺はどこへも逃げる事ができないのだ。

それに、この場所におけるもう一か所、俺が逃げ込めるシェルターとでも言うべき場所は、しかしこの時間は営業時間外であり、おそらく入れてもらうことは出来ないだろう。くそおゝ、きつと姐さんがいなかったら何の問題もなく逃げ込めるだろうに、げに難しきは

友情というもののかもしれない。

「『そういえば久しぶりにマミーに会いに行くのも悪くない。ミシガン川を渡ってすぐのところに家があったのは、お前も覚えてるだろう？』なんてジャックが思いついて言いました。しかし俺は『いやいや、ジャック、やめておこう。ここはよくないぜ』と返します。それでもジャックが、どうしてもとゴネるんですよ。まあ、やつも強がってるやつですけど、ニューヨークに出て五年も家に帰ってないですから、なんだかんだとやっぱ寂しかったんじゃないですかね、お母さんに顔を見せて行くんだって聞きませんよ。困ったもんだからね、俺はすかさず、冗談めかしてこう返した。『落ち着けジャック、この川を渡っても、会えるのは天国のグランマだけだぜ』ってね」

「そのようなことをおっしゃったのですか……？　くくっ、おかしいです……」

俺の、俺自身もどこがおもしろいのか若干分からなくなってきた。似非アメリカンジョークが、どうしてかツボにはまってしまったのか、三枝さんは布団の中で、身もだえするのを必死にこらえるようにぶるぶると小刻みに震えていた。彼我の距離、おおよそ20センチほどか。手を伸ばせば届く距離どころではない、ただこうしておしゃべりしているだけで互いの息遣いを感じるほどの、少なくとも気心知れた相手でなくてはやりたくない、というか出来っこない、超至近距離。

この超至近距離で、もう30分。まるで単独お笑いライブのように、俺はずっと小喃のようなものを延々と披露し続けているのだった。俺としては、おしゃべりなどと言われても実際のところ、この密接距離でするような話はあまり思いつかないわけで、すぐにネタ切れを起こした。そして仕方ないから、もう最後の手段としてお笑い方向に走ったのである。つまり、今の俺はもうすでにいっぱいいっぱい。なんというか、すぐにでも寝てしまいたい感じでいっぱいだった。

「『この川を渡るとグランマに会えるのかい?』なんてジャックは言ったさ。ああ、俺は忘れてたんだ、あいつがひどいおばあちゃん子だったってことをね。『グランマに会うなんて10年ぶりだよ』なんてやつはうれしそうに言った。そしてジャケットとバッシュを脱ぐと喜び勇んでその川に飛び込んだんだ。そのときは、何ていうか、文字通りやつとは永遠のお別れだと思ったよ。だからぼそっと、こんな風につぶやいた。『おいおい、そっちはジャパンだぜ、ジャック』ってね」

しかし如何せん、さっきに比べたらまだマシかもしれないけど、俺はあまり眠くない。眠ってしまうまで、ぽかぽかの布団にくるまれているからそこまでかどうかは分からないが、きっとまだ数十分を要するのではないか、と思われる。この状態を、まだ数十分続けなくてはならないと考えると、それはおそらく思ったよりもだいぶ辛いのではないだろうか。

もちろん辛いと言っても、状況そのものが苦痛というわけではない。それはむしろ、苦痛というよりも天国なのだろう。どういう流れかは分からないが、こんな美人のお姉さんと床を同じくしているのだ、男として、これが苦痛でそのあろうはずがない。しかし辛い、やはり辛い。ここまで状況がキレイに整えられているというのに、しかしそれらすべてを見て見ぬふりをして我慢一徹、心を無にして過ごすことのなんと辛いことか。おそらく、これが真の苦行。苦行なのである。きつとこの先に、何らかの悟りが待っているのではないか、と思わせるほどの苦行ぶりなのである。

「でもね、ザバザバと見事なクロールでその川を渡っていくジャックだったんだけどね、しかしその川を渡りきることはなかったんだ。いや、やつの泳ぎがマズかったわけじゃないよ。あいつは、何と言ってもこと水泳に関してはエキスパートさ。なんたってやつはハイスクール時代、州代表に選ばれるまでの腕前だったんだからね。じゃあどうして渡り切れなかったかって? ポリスさ、ボートに乗ったポリスが、ジャックの首根っこを捕まえてこっちの岸まで連れて

きてくれたんだ。『悪いが、外人は管轄外だ』なんて言ってね。まったく、ジャックを連れ戻してくれたのはよかったんだけど、ひどいお役所仕事さ。拳銃の代わりに物騒なデカイ鎌を持ったその男は、ジャックをこっちに放り投げるついでに『隣の窓口に行け』なんていうんだから」

しかし、俺はどうしてこんなわけのわからない話をしているんだろうか。焦っているからといって、なにもこんな話をするのではないじゃないか。もう少し建設的な、ばかばかしい話をするにしてももう少し分かりやすいようなジャパニーズジョークがあるだろう？

「『おかえり、ジャック』と俺は、預かっていたジャケットとバツシュをジャックに手渡しながら言ったさ。だってあいつ、砂浜に打ち上げられた海月みたいになっていたんだからね。せめてお氣に入りのジャケットとバツシュを返してやって、元氣を出してもらいたかったんだ。『ただいま、ジュード』って、ジャックはぐったりしながら応えた。きつと、会えると思ったおばあちゃんに会えなかったのが心にでっかいダメージを与えたんだと思って、俺は慰めてやろうと思って言ったよ、『ジャック、グランマに会えなくて残念だったな。でも元氣出せよ、俺たちが行くのは向こう側で、あっちにはお前のグランマの若いころにそっくりの、美人のおねえちゃんがいっぱいいるみたいだぜ』ってね。でもなんとか自力で立ち上がったジャックは、そんな俺の言葉にそっけなくため息を吐くだけだった。なんでかって？ 俺はすっかり忘れてたんだけど、やつはゲイだったんだよ。グランマとマミー以外の女には興味がないんだ」

しかし、どうにもこうにも、話し始めてしまったんだからしょうがない。ここはきっちりオチをつけるところまで持っていかなくては、芸人としての名折れだ。もちろん、俺は別に芸人というわけではないのだから。

「そして、すっかりぬれ鼠になったジャックを連れて、俺は自分たちの進むべき道を進むことにしたよ。そうしたらその先に何が見えてきたと思う？ それは何と言うか、大きな門さ。そしてその前に

は長机が置かれてて、二人のおっさんが座っていた。『ジュード、なんかでっかい門だな。まるでパリの凱旋門だ』なんて、バカなやつには珍しくまともなことを言ったわけだが、しかしそこはもちろん凱旋門なんかじゃないのさ。『ご新規でしたらこちらで登録をおねがいしま〜す』なんて声が、俺たちにかけられた。声をあげたのは長机に座ってる男のうちの一人だ。どうもこの中に進むには登録が必要らしく、仕方ないから俺とジャックは二人して会員登録をしたよ。『それでは、週末までのご宿泊になりますので、ごゆっくりなさってください』と、長机の男は言った。『宿泊？　ところで、いったいここはどこなんだ？　週末まで泊まってたら、俺の仕事はどうなるんだ？』と、ジャックは心配そうに言った。そして長机の男は応えたね、『楽園へようこそ。全てを忘れてお休みください』なんて。ジャックはその言葉に、働きすぎの自分に上司が有給でもくれたんだらうって納得してたよ。そこで思わず、俺は男に言ってしまった『自分はキリストを裏切ったユダの名を持った男だ、ここには入れない』と。しかしそれを聞いたジャックは言った。『なにを言ってるんだ、お前は裏切りのユダじゃないだろう、親友。お前は俺の親友じゃないか。今までずっといっしょだった、そんな親友だ。お前がいけないなら俺もいけない。お前が誰も裏切ったりしないし、ウソだって吐いたりしないってことは俺がよく知ってる。それでも行けないっていうならしかたない、有給は上司に返上しようぜ』なんて言うんだ。『死ぬまで、いや、死んでもいっしょだぜ、相棒』なんて、いいやがったんだ。もちろんうれしかったさ、言いながら、俺に熱っぽい視線を向けさえしなければ、それは最高の言葉だったさ。でも、最高の相棒からそんなうれしい言葉をかけてもらっても、俺はやっぱ裏切り者だったんだよ。だって、なぜなら俺たちがこれからくぐるこの門の先は本当に文字通りの楽園で、それから俺たちの宿泊は週末までじゃなくて、『終末』までだから。つまり俺はジャックに言えなかったんだ、俺たちがもう死んでいるってことを。あいつはまだ気づいてないけど、俺たちがもう死んで

るんだってことを。『相棒、俺、お前といっしょでよかった。こうして、死んでもいっしょで、よかったよ』俺は、ただぼつりとそう言うことしかできなかった。きつとキリストを裏切ったときのユダも、こんな気持ちだったんじゃないかって、俺は思ったよ……」

よく分からない不条理オチをつけて、一通り満足した俺だったが、しかし話し終えて息を吐いた瞬間に、どうしようも抗いがたい猛烈な睡魔に襲われた。まるで睡眠薬を嗅がされたドラマの登場人物のような勢いで、俺の意識はスパッと刈り取られてしまうのだった。眠気、来い！　とと思っていたのは確かかもしれないが、なにもこんなに急速な眠気が襲ってくるとは思わなかった。まあ、これはこれでいい。とにかくにもさっさと眠ってしまいたいと思っていたのは確かなんだから……。

……………

「さて、幸久は知らないだろうが、しかし俺様は、お前のことを知っているぞ、女」

幸久を強制的に眠りにつかせ、その意識の支配権を俺様が奪い取った。これで幸久は、俺様が権利を返すまで目を覚ますことはないし、何よりもその間は、この俺様が主人格になるのだ、この女にどのような手を使われようと流れに流されることはあり得ない。

「ふむ、驚かんか。さては女、すでにあの伝承を聞かされているな。まったく、星家の嫡男にのみ伝承せよという教えを守らんとは、やはり今も昔も変わらず二の星は問題児のようだな。仕方ない、教育してやる必要があるらしい」

とにかく、我が息子同然である幸久に、おかしなちょっかいを出させるわけにはいかない。幸久の両親は死んだが、しかしまだ俺様がついているのだ。俺様の目が届くところでおかしなことをさせるわけにはいかない。

「…、あなた様は、平穏という安定を破壊する凶兆の星、我らが星

家の守り神」

「左様、その通りだ。まあ、それはお前が知っていていい話ではないのだが、な。さて、このようなことを幸久にすると、なにが望みだ、女。いや、ここは二見の小娘、と言っておいた方がいいかなどのような目的があるにせよ、幸久に手を出させるわけにはいかないのだ。こいつは、生まれたときからずっと俺様のものなのだから、どうして他の女が手を出すことを許すことができるだろう。」

このまま、この女の思うままに幸久が手籠めにされてしまう様など、どうして俺様が手をこまねいて見ていることができるだろうか。悪いが俺様は、俺様のものが奪われていこうとするのを黙って見ていられるほど、温厚には出来ていないぞ。

## 女二人、言葉のやりとり

ここからは、俺の知らない物語。

すっかりと深い眠りに落ちてしまった俺の身体を、誰かが俺に代わって動かしている。その光景を、俺の意識が認識することはない。なぜなら俺の意識は深い深い底に追いやられてしまっているのだから。

しかしこの感覚、以前に味わったことがある。この、意識を強制的にシャットダウンされたような、違和感を感じる暇も与えられずに瞬く間に閉じられてしまうようなそんな感覚。

いや、知っているわけではないのだ。むしろ知らない。俺はその感覚が訪れたときにはすでに意識を失っているのだから。だから知っているのはそういうふうになった事後の感覚でしかなく、今のこの感覚は知っているはずがないのだ。

それでもとにかく、こういう状況になったことはある、ということだけは確かだ。これが初めてのこと、というわけではない。以前にも何度か、こうして俺は意識の主導権を奪われている。だから今回も、きっとそういうこと。目を覚ましたら、たぶんそのことについて、この不思議な感覚以外なにも覚えていないのだろう。

「俺様は知っているぞ。貴様、三枝弓子などという名ではないな。ふんっ、三枝などと、ふざけた名前、よくぞ考えたものだな、二の星の分際で、三などとな。恥知らずだ、まったく。貴様と血を同じくする者がしたことを忘れたとでも言うつもりなのか？ ん？」

「お、お初にお目にかかります。このような場で非常に恐縮ですが、どうか名乗りを受けていただければ、幸いです」

「まあ、いいだろう。神たるものとして、寛容に努めなくてはならないからな。受けよう、述べよ」

「はい、私、二の星、二見に生を受け、当年経まして二十年、名はかりんと申します。今はこうして当館におきまして働いております



が、これもすべては幸久様と、一目でいいのでお会いしたく思いましたからでございます」

「そうだったな。貴様の名は、二見かりん。呪われた二の名を持つ女だ。己が立場、努々忘れるでないぞ」

とにかく、俺の隣で布団の中に入って横になっていた三枝さんは、さっきまでとはまったく違う、楽しそうに肩を震わせていたとさっきまでとは違う顔になっている。そして布団から出ると畳に直接正座して、深々と腰を折り最敬礼として額を床に擦りつける。

そして俺は——あくまでも俺の身体ではあるが、しかし俺ではない——同じく布団から出ているが、しかし偉そうに胡坐をかくと、ダルそうに肘を突いて、まるで見下すように三枝さんに視線を向ける。

「言っておくが、俺様は全能に限りなく近い神格だ。貴様の考え、貴様の思惑、どちらもほぼ完全に理解している。命が惜しくば、嘘を吐くなどして俺様の機嫌を損ねることがないようにしろよ、娘。俺様にかかれば、貴様をくびり殺すことなど、造作もないことなのだからな」

「ぞ、存じ上げて、おります……」

「それで、貴様、なにゆえこのように、わざわざ偽名などを用い幸久の泊まるであろう宿に潜入するなどという、どうにも遠回りで面倒なことをした。そのようなことをせずとも、娘、やろうと思えば正々堂々と正面から会うことも出来るだろう。そうだというのにこのような、まるで騙し打ちのような手を取るとは、いったい、何をたくらんでいると言うのだ。正直に全てを申せ」

「その前に、伏してお願ひ申し上げます。なにとぞ、幸久様には私のことは内密に……、内密をお願いいたします……」

「ふん、それは貴様の態度によるな。黙っていてほしかったら、それらしく、相応の態度を取って見せろ。俺様の機嫌を損ねるということは、幸久にお前の言ったことを知らせることと同義であると心得よ。いや、それで済むかどうかは分からんな、明言は避けよう。俺様とて手が滑ることもある」

「はい、存じ上げております」

「それでは話せ。もう一度言うが、貴様が嘘を吐いたときはすぐに分かるということを忘れるな」

「はい……」

そして、三枝さんは顔を上げると話を始めたのだった。それは俺という主観がないからこそ語られる真実で、俺という主観がまだ知り得ぬ、しかしほんの近い将来どうしようもなく知ることになる物語。俺にはまだ知らないそういう直面し、対面することを強いられるような案件があるのだと、そんな将来を決定づける、そういうお話。

「私も、出来ることならばこのような手段、取りたくはありませんでした。しかしこれはあくまでもすべて、私が幸久様に一目お会いしたかった、という思いのみによって行なったことであり、それ以外の企みや企てがあつてのことではないと、そのことについてだけは、あなた様にも納得とご理解をいただければ幸いです」

「どうやら、嘘では…、どうやらないらしいな……。まあ、いいだろう。そのことについてのみ、俺様も貴様に理解と納得を示そう。貴様は幸久に会いたい一念でここにきて、ここで働き、そしてここできているということについては、私も了承してやることにしよう」

「御理解いただきました、ありがとうございます。話を続けさせていただけます、よろしいでしょうか？」

「許す」

「ありがとうございます。それでは続けさせていただきます。私は、先ほども名乗りました通り二見の生まれでございます。二見に生まれた女は、分家筋まですべて含めて例外なく、二見本家の後宮に入る事になっています。私も、二見の本家の長女として生を受けましたが当然例外としては認められることはなく、後宮に入り、そして今まで生きてきました。後宮というものは、あなた様はご存じでしょうか、牢獄ではございません。言うならば、籠。二見に生を受

けた乙女を閉じ込めて、監視するためのものには違いありませんが、しかしあくまでも鳥かごのようなものなのです。監獄のように耐えがたい労苦が与えられるというわけではありません。与えら得るのは豪華な食事、無数の付き人を従えた何不自由ない優雅な生活、そして無限とも無為とも思える、永遠にも等しい時間。許されないことはただ一つ、後宮から外に出るという自由だけ。私、いえ、私たち二見に生まれた女たちは、生まれてから嫁ぐまでを後宮という限られた、狭い狭い世界の中で生きていくことを強要されるのです」

「そうか、だがそれがどうした。それはただ、貴様に与えられた人生の前提条件がそうだったというだけだ。それはあくまでも、ただの前提条件でしかない。前提条件に吞まれ、なにもしない自分のヒロイックを嘆くというのか？ 生まれの不幸を呪うか？ 自分にはもつと違う人生があったのに、と嘆くか？ そのようなもの、戯言だ。自分のあり方を知りながら、しかし何もせぬ愚鈍な人間の、哀れな恨み節でしかない。そのようなものを聞くために、俺様がここにいるとでも思っているのか、貴様。自己満足の自分語りの俺様を巻き込むつもりならば、その先に確実に待つ死だけ、それだけは覚悟しておくんだな」

「もちろん、そのようなことはございません。こうして事実をお話することが必要だと思われましたので、お耳汚しですが、今のようにお話させていただいたまでです」

「ふん、これからされる話も、おそらくすべて耳汚しなのだろうがな。しかしまあ、仕方ない、幸久のためと思い聞いてやることにしよう」

「ありがとうございます。そうして二見の女は後宮で生きることになるわけですが、私も当然それと同様でした。二見に生まれた者の宿命なのですから、もちろんそうなるのが当たり前なのですが、やはりそれはおかしいと考えていらっしゃる方もいます。私の祖父で先代二見家当主である二見啓蔵様です」

「ああ、あの坊主か。俺様は奴のことも知っているぞ。よく知って

いると言ってもいいかもしれない。なにせ、あの坊主は幸久の祖父と親友だったからな、俺様が目にすることも多かった。夢のようなことを夢のように語る、愚かな餓鬼だった。口だけは達者な坊主だったと記憶している。まあ、言ったことの半分ほどは成し遂げたようだから、案外口だけというわけではないのかもしれないがな」

「祖父は二見の誇りです、そのような言い方は」

「黙れ、俺様に楯突くな。楯突こうという意思を見せるな。娘、分かっていないようだから言うが、調子に乗るな。物言わぬ死体になりたくなければ、俺様の望むものだけを口から出せ。卑賤な存在が、神格たる俺様と対等に口をきこうなどと、思いあがったことを考えるな」

「…、もうしわけ、ごさいません……」

「これから言う俺様の言葉を忘れるな、逐一思い出せ。この場で貴様がまだ命を持った存在でいることができるのは、まだ俺様が手を下していないからだということを、常に考えておけ。言っておくが、俺様は機嫌が悪いのだ。お前のような者が、俺様のかわいいかわい幸久に近づこうとしているんだ。本当は、今すぐ貴様を肉塊に変えてやってもいいと思っているのを我慢しているんだ。銃口が貴様のこめかみに突きつけられているのだ、進んで引き金を引かせようとする自殺志願者は、さすがに救えないな」

「迂闊な発言でした、お許しくださいませ」

「ふん、気の強い女だ。誤るといふことは、もう少し誠意をこめて行なうものだろうに、まったく神に対して不遜なことこの上ないな。仕方ない、話を続けよ」

「ありがとうございます。おじいさまは、後宮を廃しようとして尽力なされたお方で、その思いは当主となられてからも変わりませんでした。しかし、けっきょく当主でいらっしゃる間に後宮を廃することはできず、今でもそれは二見本家の奥の間にあります。おじいさまほどの方でも、あれをなくしてしまうことはできなかったのです。おそらく今後、あれをなくすことは出来ないでしょう。ですがな

んとか一人くらいは、と当代の長子である私を、当主を引退なさったおじいさまの世話係という名目で、後宮の中ではありますが限りなく外に近いところに置いてくださったのです。それが、おおよそ15年前です。私が五つのときです。そうしておじいさまは、外からたくさん先生を呼んでくださり、私に様々な教育を受けさせてくださいました。ですので私は、外で生きていらっしゃる方と変わらぬ勉強を行なうことが出来、そのことについておじいさまにはとても感謝しております。それで長々と前置きを失礼しましたが、本題に入らせていただきます。私が三木様にお会いするために、こうしてわざわざ回りくどい方法を取らせていただいたのはなぜか、ということですが、先ほどもしてお話しておりましたような事情によります。二見の女は易々とは後宮から出ることが叶わないのです。ですから今回は、おじいさまの世話係としてさらなる研鑽を積むため、という名目で、口利きをしていただいてここへと入り込むことで、なんとか三木様のことを一目だけでも、と」

「そうか、そういうことか。なるほど、最初は嘘を吐いているのだろうと思っていたが、しかしどうやら嘘ではないらしい。いいだろう、そういう事情があるのならば、そういうことと納得してやることにする。感謝しろ」

「はい、ありがとうございます」

「ということは、外に忍を伏せているのは二見ということだな」

「はい、ご察しの通りでございます。私がこうして外に出るのならば、とおじいさまが護衛としてつけてくださったのです。しかし、護衛というよりもむしろ監視と言った意味合いの方が強いでしょう。ですが、幸久様に危害を加えるために伏せられているものではございません、その点に関してはご安心くださいませ」

「ふん、信じてやることにしよう。しかし覚えておけ、幸久の身は、常に俺様が見守っている。危害を加えようとすることも、手を出そうとすることも許さない。特に貴様はそうだ、小娘。このままここに留まっていたくば、ただ黙って横になっている。二見の女が幸久

に手を出すことは、俺様が絶対に許さん」

「ここにいても、よろしいのですか？」

「いたいのならば、勝手にしろ。しかし絶対に二人きりにはしない。分相応にあるよう心掛けよ」

「は…、はい、了解いたしました…」

「俺様も、元は女だ。貴様の思いもまったく分からないというわけではない。だが幸久には手を出せん。だから間を取ることにした。ここにいることは許すが、しかしそれ以上のことは許さない。これが俺様の妥協点だ。不服ならば、仕方ない、俺様に殺されるんだな」

「身に余る光栄でございます。ありがとうございます」

「ふん、それならば近こう寄れ。幸久はこちら側で寝る。貴様は中央よりこちらに入ってくるな。意図を持って入ってきたときは、覚悟してもらおう」

「はい、気をつけさせていただきます」

「寝る、灯りを落とせ」

「はい、おやすみなさいませ」

そして、俺の知るよしのないお話は、こうして幕を閉じたのだった。俺の中にいる何かは、それから俺に意識のハンドルを返すと、俺と入れ替わるように意識の奥底へと沈んでいったようである。しかし意識を返されたと言っても俺が目覚めるのは翌日の朝になってからであり、今この時点で意識を取り戻すことはないのだが。

## 目覚め、最終日の朝

「……、おはようございます……」

はてさて、いったい今日は何日かと言えば、それ的確に返答するならば旅行の最終日だよ、といった具合に応えるのが最も分かりやすい感じなのではないだろうか。

「おはようございます、三木様」

おそらくこういうことを他意なく、立て板に流す水のごとくサラツと言ってしまうと諸兄にあらぬ誤解を与えてしまいそうで非常に遺憾なのだが、しかし言っておかなくてはならないと思われるので、ここはあらん限りの勇気を振り絞って言っておこうと思う。

「…、おはようございます、三枝さん」

いつもの起床時間を迎え、身体に染み込んだ習慣に従って布団の中で緩やかに覚醒した俺の隣には今日も、昨日目を覚ましたときと同じように三枝さんが横になっていたのだった。けっきょく、これで俺は二日連続で三枝さんと寢所を共にしたということになるのだが、しかし心配しないほしい、もちろん何もしていない。

というか昨日の夜は、正直に言ってしまうと、まともに眠ることが出来なかった。一昨日の夜は、俺に降りかかっている状況と俺の精神力を考えれば、それこそ信じられないくらいスパツと眠りの世界に落ちていったのだが、しかし昨日は俺のそもそもの想像を裏切ることなく、まったく眠ることができなかった。まあ、本来の俺の心の力なんていうものはそんなものでしかなく、一つの布団で美女と同衾などということになればやたらと緊張して目が冴えてしまい、眠ることなどままならないというのが一つの着地点としては妥当なのかもしれないのだが。

それゆえに、昨日はそのようなことは全くなかったのだが、しかし今はどうしようもなく極限的に、眠い。そりゃそうだ、俺がようやくどうにかこうにか眠ることができたのは、体力的にどうしようも

ない限界が訪れてしまった深夜三時過ぎ。そして今は、身体に染み込んだ習性というのは恐ろしいもので、朝の六時。睡眠時間は、正味で三時間にも満たないのである、そりゃ眠いに決まっているではないか。

窓から差し込む朝の日差しが、寝不足で弱っている俺の身体を貫いていく。今までに徹夜を一度もしたことがない、というわけではないし、徹夜明けの身体が朝日によって大ダメージを与えられるということも、それなりに知っているつもりだ。いや、知っているつもりだった。

情け容赦のない日差しが、窓から差し込んでくる。いつもだったら爽やかな朝だなあ、なんてことをうすばんやりと考えたりするのだろうが、今日は流石にそんなことを考えている余裕すらないのが現実である。おそらく、それだけの果てしない心労がたった一晩で俺の身にのしかかったということであり、また俺が思っている以上にその心労は俺の肉体と精神を蝕んでいる、ということなのではないだろうか。

「お茶を入れましたので、どうぞ」

「…、ありがとうございます……」

「飲みましたら、お召し変えのお手伝いをさせていただきます。今日も昨日と同じように、朝食の前にお洋服に着替えますでしょう」

「ええ、そうですね、そうします……」

昨日は、一日目に行った湖とは逆方向にある山の方に、ちょっとしたトレーニングみたいなことをしにいたりした。やっぱり身体を動かすのは楽しくて、たまにはこういうのもいいなあ、なんて思ったりしたものだ。

「三木様、本日で、当館へのご宿泊はおしまいですね」

「そう、ですね。二泊三日って、長いようで短いですよね」

「本当に、あっという間の三日間でした。これほどまでに充実した日々を過ごしたのは、今までの人生で初めてです。これもひとえに、三木様のお世話をさせていただいたからにほかなりません。本当に、



快くおもてなしを受けてくださり、ありがとうございました」

「いえ、こちらこそ、何だかいろいろとお世話になりました。本当ににからなにまで、ありがとうございました。それに俺にだけじゃなくて、女の子たちの世話も何かと焼いてくれて、ほんと助かりました」

「いえ、そのような言葉を賜るほどのことは、出来ていません。どうにも至らぬ点ばかりで、恥じ入るばかりです」

「そんな、恥じ入るだなんて。俺はすごいと思います。ここにきてまだ間がないっていうのに、他の仲居さんと変わらず、いや、それ以上にしっかりとやってくれていたじゃないですか。見劣りするなんてこと、ぜんぜんありませんでしたから、自信持ってください」

「三木様……」

「百点満点ですよ、三枝さん。また来たときも、部屋付きをお願いしたいくらいです」

「本当、ですか……？」

「はい、あとで番頭に言っておきます。今度来るときも、あなたを部屋付きにするよう頼む、って」

「そう言っていただければ、幸いです…、これで、心残りはございません……。この三カ月は、無駄じゃなかったと思うことができます……」

「？ それって、どういう……？」

「あっ…、いけませんね、こんなことを話している暇はありません。早く着替えて、まだ朝食の時間には早いですが、向こうの方々と合流しなくてはいけませんからね。本日の朝食も、あちらのお部屋に五人分ご用意させていただく、という形でよろしいでしょうか？」

「あっ、えと、はい、そうしてください。部屋は別でも食事はいっしょに、って決めてたので」

「はい、承りました」

そういうわけで、一人で着替えられるから少しの間部屋から出ていただくとい何度言っても分かってくれなかった三枝さんとうと

う折れてしまった俺は、昨日の朝もそうだったのだが、三枝さんに着替えの手伝いをお願いすることになってしまったのだ。まあ、着替えの手伝いとか言ったって俺が着るのは普通の庶民的な服でしかないのです、そもそもからして手伝いをしてもらうところなんてほばないわけで、なんというか、けっきょくは手伝いをしてもらっている体でしかないのだ。

そうして、三枝さんに微妙に手伝ってもらいながらパパッと着替えを済ませた俺は、しかしすぐに部屋から出るような愚は犯さず、引き戸の陰から外の様子をうかがって誰かがこの部屋の様子をうかがっていないかどうかを確認する。もし朝早くのこんな時間に、俺が部屋から三枝さんを連れて出てくるところなんて姐さんに見られようものならば、それこそまさに危機以外の何ものでもなく、きつといい感じにしばかれてしまうに違いないのだ。もちろん、俺は三枝さんに対して姐さんが危惧しているようなことはしていないのだが、しかしそれをしていましてと明確に証明することは出来ない。なぜなら、俺が何かをしていないと証明するための証拠が、実際のところ、なに一つとして俺の手元にはないのだ。そんな空手の状態で姐さんを説得、もとい論破することが出来るほど、俺は弁舌に長けていない。

まったく、姐さんもああ見えてむっつりだからな、ちょっとしたことですぐに俺が口に出すのがはばかれる猥褻行為を行なっていると思いこむんだ。俺はそういうことはしない、という出来ない性質だから、そういう可能性が零ではない、という状況が発生するたびに逐一制裁を加えようとしなくてもいいと言うのに、本当に律儀なんだからなあ、姐さんは。

それとも、あるいは俺のことを心配してくれているのだろうか。…いや、そういうわけではないか。姐さんが心配しているとしたら、それは俺の毒牙にかかる可能性があった女の子なのであり、俺によって被害をこうむったのではないかと姐さんが危惧する相手の方なのだ。本当に、姐さんはいつになったら俺がそんなことをするやつ

じゃないってわかってくれるのだろう。…、まあ、俺が三枝さんと同じ布団で寝ていたという事実を姐さんが知ったとしたら、それは間違いなくアウトなのであり、俺が何らか秘密な感じの行為に及んでいるとか、そういうことは全て抜きにしても、即座に処断対象にされるだろうことは疑いようもないのだが。

「よし…、いける…！」

「あっ、ゆっきい。ゆっきい！」

「んっ？ ああ、志穂か。昨日は朝飯の直前まで眠りこけてたってのに、どうした、今日は早いな」

姐さんの視線を感じなかったので勇気を持って部屋を出ようとした俺だったが、しかし驚いたことに、さっきまでいなかったはずの志穂が、どうしてかこっちの部屋に向かって歩いて来ていた。志穂のことだから気配を断って壁に張り付いて擬態していたとか、気配を断って天井に張り付いて擬態していたとか、そういうわけの分からんことをしていた可能性もあるが、まあ、とりあえず、今この瞬間にこっちに向かって来ていることだけは確かなのである。

とりあえず俺は、心中穏やかというわけにはいかないのだが、まったく狼狽していない風を装って志穂の呼びかけにこたえる。姐さん相手なら確実に通用しないだろうが、しかし志穂にだったらこういう演技は通用する。ここはとりあえず志穂を穏便に部屋へと戻らせ、完全に人目がなくなってからこっそり部屋を出るのが適策だ。

大丈夫、基本的に志穂は俺が問題ないと言えば引き下がるし、俺の言葉の裏に何かがあるのではないかと勘繰ったりもしない。あいつのいいところは、なによりもその素直さにあるのだから。

「えっとねー、おきちゃった」

「ああ、そういうことってあるある。別に起きようと思ってないのに早い時間に目が覚めちゃうのな。っていうか、どうしてこっちの部屋に向かってきてたんだ？ 起こしに来てくれたのか？」

「うんそうだよ。りこたんがねー、ゆっきいおこしてきてー、って」

「そうか、姐さんが」

おそらく、直感的に何か起こっていると勘づいた姐さんが、斥候として志穂を送ってきたに違いない。ふふん、読めてる読めてる。姐さんの思考なんて読めてるぞ。志穂が相手なら俺が油断して尻尾を出すと思ってるんだな。ところがどっこい、そうはいかない。俺だって学習するんだ、いつでも無為無策で姐さんにシバかれてるわけにはいかないからな。

なあに、こんなところに来てまで姐さんにボコられる俺ではないさ。とりあえず、志穂にはサクッと帰ってもらおうとするか。

「でも俺はもう起きてるからな、起こしてくれなくてもいいぞ。ほら、志穂はもうお部屋にお帰り、俺もすぐそっち行くからな」

「ほえ？ いっしょにいかないの？ ゆっきい、なんでおへやからでてきたの？」

「…、それは、あれだよ。ちょっと朝飯の前に散歩でも行こうかなって、思ったんだよ」

「おさんぽ？ やままでいく？」

「行かないよ？ 散歩なんだから、裏の林とかをちょっと歩いてくるだけだよ」

「そうなんだ。うん…、じゃあゆっきい、まだいっしょにこれないね」

「なんだ、姐さんには起こすだけじゃなくて、連れてくるように言われてたのか。それを先に言いなさいよ。連れて来たってことは、何か用事があるってことだろ。ほら、そういうことなら、さっさと行くぞ」

「うゅ？ ゆっきい、おさんぽは？」

「散歩よりも姐さんが呼んでる方が優先だ。メールしてこないってことは急ぎの用事じゃないんだろうけど、用事があるっていうなら早く行った方がいいだろうからな。散歩なんて、そのあとでも出来るだろ」

「そうなんだ」

「…、まあ、別に納得してくれたんなら何でもいいけどな。あつ、忘れ物した。志穂、すぐに行くから先に行っててくれ」

「うん、わかった。ゆっきい、またあとでね」

「おお、またあとでなく。…、ふん、ちょろいな」

そして志穂は、特に深く何かを考えることもなく部屋へと、すたこらさつさと帰っていったのだった。しかし、志穂相手だから理由自体は適当でいいといえ、忘れ物をしたっていうのはどうだろうなあ…。そもそも俺は朝飯を食いにあちらの部屋の面子と合流するわけであり、持っていないかなくてはならないものなど何もないではないか。まったく、志穂は本当に何も考えていないな。ここまで頭の中身空っぽでは、一人で生きていかなくてはならなくなったとき、本当にそうすることができののだろうか。

いや、俺の目が届く間はいいんだよ、俺が面倒みてやるから。でもいつかは、いつまでもこのままで、というわけにはいかないのだから必ず俺の目が届かなくなるときは来てしまうわけで。なんかほら、志穂ってすぐに騙されるからさ、心配なんだよ。悪いやつに騙されて食い物にされてたりしたらと思うと、すっげえ不安になるんだよなあ。

そういえば、こういう心配は、志穂以外に対してはあまりしないんだよな。基本的に全般が心配な霧子には、俺よりも近い家族の位置に晴子さんがいるんだから、実のところ一番心配する必要がなかったりするし。メイは、まだあまり知らないけど、でもそんな心配をする必要はない気がする。なんとなくだけど、そういう悪党から狙われなさそうとか、狙いづらそうとか、なんとなく大丈夫そうな気がする。そして姐さんは、もはや俺ごときでは心配するという行為自体が、そもそもからしておこがましいだろう。むしろ、俺が姐さんに心配されたいくらいだ。

「三木様…、お部屋から出ても、よろしいでしょうか…?」

「はい、だいじょうぶですよ、志穂のやつは追ひましたから」  
「そうですか…、それでは、私もここで失礼いたします。また、朝

食を準備させていただくときに」

「ええ、また」

よし、これで波風立てずに三枝さんを部屋から出すことができたわけだ。まったく、俺はなんにも悪いことはしていないと言うのに、いろいろと難儀だよな、本当に。まあ、大事な友人との間に面倒は起こしたくないという俺の気持ち、分かってくれる人は多いと思う。：、いや、確かに俺が流れに流されないで、現状を回避することができれば最高だろうけどさ、でもそれは出来なかったんだから。出来なかったことをいつまでもぐちぐち言ってちゃダメだよ、前向きに行かないと、前向きに。

## 起きない娘

なんとか三枝さんを部屋から脱出させることに成功した俺は、とりあえず何の用事があるのかは分からないが、姐さんの呼び出しに応じて女子部屋へと足を向けたのだった。その用事を済ませたら、まだ朝飯までは時間が少しあるわけだし、それこそさっき言ったように、誰かを連れて散歩に行くのだって悪くないだろう。

「姐さ〜ん、入っていいか〜？」

『三木か、入ってくれ』

「はいよ〜」

そして俺はコンコンと扉をノックすると、すぐに中から返ってきた姐さんの言葉を確かめて、それから引き戸を開くのだった。こうやってノックとかの確認をしつかりしないと姐さんに怒られるからな、気をつけないと。前にノックなしで部屋に入ったときは、いくらただの不注意だといいわけても信じてもらえず、覗こうとしたに違いないと断定されて制裁を加えられたからな。二の轍を踏まないためにも、注意はいくらしてもしすぎということはないのだ。

まあ、とりあえず今回は、こうしてすぐに入っていいと返事が来たのだから入ってしまったって問題がないわけで、迷う必要もないのである。許可が出た以上こんなところでぼんやりと待っているのは不自然なわけで、さっさと入ってしまわなくては。

「姐さん、来てって言ってたみたいだけど、どうかした？　もしかして、何か問題でもあった？」

「いや、問題があるというわけではないのだが、何と言うか、少なからず困っている」

「困ってるのは、そりゃ問題があるってことじゃね？」

「いや、問題というほどではないのだ。ただ少し、心配事とでも言えばいいのだろうか、そういうものがあってな」

「心配事？　それだけじゃなにが言いたいのか分からないんだけど

……。せめて、もう少し分かりやすくヒントみたいな感じのものをくれると助かる」

「…、あの、だな。これは私の杞憂でしかないのだが、天方がだな……」

「霧子？ 霧子がどうかした？」

「ぐっすりと、眠っているんだ」

「ぐっすり寝てるんなら、いいんじゃない？ 昨日は少し眠りが浅かったみたいで早起きしてたし、ぐっすり寝てしっかり睡眠時間を確保してくれたら、むしろ一日しゃきつと過ごしてくれるし、俺としてはそっちの方が数段助かるんだけど？」

「いや、ぐっすりと眠っていて、目を覚ましそうな気配が、まったくないのだが……」

「…、たった一日で適応したのか……。徐々に凶太ようになってきているな、霧子……」

自分の部屋からつつかけてきたスリッパを脱いで部屋に上がると、中には布団が四つ、几帳面に角が揃えられた状態で並べられていた。そしてすでに目を覚ましていたらしく、昨日寝る間際まで着ていた浴衣から洋服に着替えを済ませた志穂と姐さんが、窓のそばに置かれた籐の椅子に、机を挟んで向かい合わせに座っていたのだった。すでに目を覚ましていて二人がそうするというならば、それ以外の二人はどうしているかという、もちろんまだ布団にくるまってぬくぬくと眠っている。それは四つ敷かれた布団のうち二つがいまだもこつと人の形に膨らんでいるのを明らかにだった。一つは小さく、一つは縦に長く大きい。当然それはメイと霧子なのである。

「昨日の様子を見る限りメイはもう少し寝てるのが普通っぽいし、まだ起きてこないのは分かるとして、霧子はちよつとマズいな。霧子は、眠りが浅かったり眠れてなかったりするときはこのくらいの時間に目を覚ますのが普通だから、ここで起きてないとする完全熟睡してるのかもしれないぞ」

「私が言いたいのは、つまりそういうことだ。三木、お前は天方を



目覚めさせることに關してはプロなのだろう。私たちではどうしたらいいのか分からないが、しかしお前ならその術を心得ているのではないか？ 朝食まで時間があると言っても、しかしそれまでに私たちだけで起こすことができるかと言えば疑問だ。頼む、お前以外に出来る人間はいないんだ、天方を起こしてくれ」

「いや、俺もそんなに大層なことをするわけじゃないんだけど……。普通に起こせば普通に起きてくれると思うけど。まあ、確かに少し他の人よりも起こすのが大変かもしれないけど、眠りの呪いをかけられているわけでもあるまいし、起きてくれるって」

「去年の旅行では二日とも簡単に起きていたから、こうなることは予想していなかったんだ。私もお前からの伝え聞きでしかないからはっきりしたことが分かっているわけではないが、しかし少なくとも、聞く限り私たち素人が易々と起こすことは出来ない、私は判断した。頼む、三木、簡単だと言うならば私たちに代わって天方を起こしてくれ」

「まあ、そういうことなら、別にいいんだけどさ。じゃあ、少し早いけどとりあえず起こしちゃうか」

「あつ、メイメイおきた」

「ん？ ああ、メイ、起きちゃったか。うるさくしちゃってごめんな」

『おはよ』

「おはよう、メイ」

そして俺たちがこれだけ普通の声量でしゃべり合っていると云うのに微動だにしない霧子とは対照的に、眠っている人間にとってみればやはりこれくらいの物音も気になるものなのか、メイはもともと布団の中で数度身もだえした後、スッと目を覚ましたのだった。

霧子もこんな風にすっきりと目を覚ましてくれれば、俺が霧子を起こす手間も少しは軽減されるわけで、すこし見習ってほしいところだ。まあ、俺が日々霧子を起こしているのはある意味で趣味みたいなものだし、もはやライフワークの域に達している、と言うことす

らできるかもしれないほど俺の生活に密着した日常的イベントである。もしこれが、何の前触れもなくある日突然なくなってしまったならば、それは少なからず寂しさを伴って俺へと打撃を与えるのではないか、と思う。

まあ、霧子が俺の手を借りることなく毎日自分の力で目を覚ますことができるようになるということは、ある意味で一番分かりやすい自立の形であり、霧子が俺の庇護下から飛び立つための第一歩であると言いかえることもできるかもしれない。確かにもしそんなことになれば、ある日突然大切なものを失ってしまった俺の心にぽっかりと大きな穴が開くことにもなりかねないが、霧子が自立への第一歩を踏み出すという意味では喜んでしかるべきことなのだろう。

でも、確かに霧子が俺から自立して己の力で世間の荒波を渡っているようになるというのは非常に理想的ですばらしいことではあるだろうが、しかしそれとこれとは話が別だ。そういう机上の空論的な理想論を抜きにして話をするとすれば、霧子は自立なんてしなくてよろしい。俺がいつまでも、それこそ必要のあるなしにかかわらず半永久的に、霧子の面倒は見なのだ。考えてもみろ、霧子みたいなかわいいのが、誰の庇護下にもない状態で一人でほっつき歩いてみる。どうしたって目を引いてしまうに決まっているし、ややもすれば不逞の輩が声をかけてくるかもしれないではないか。そんなことがあっては、霧子が危ない目にあってしまう可能性が、あるうことか飛躍的に上昇してしまうのではないか。それはいけない、ダメ、許すことは出来ない。だから霧子は俺が守る、いや、守らないといけないんだ。

『みんな、今日もはやい』

「俺はこれくらいがいつもどおりだ」

『はやおき、えらい』

「まあ、いつも朝飯と弁当をつくるために早起してるだけだからな。別に偉いつてわけでもない」

「私もこれくらいに起きるのが普通だな。まあ、私の場合は朝食も

弁当も母がこしらえてくれるので、することといったら早朝訓練く  
らいのものがな」

「あたしは、おきちゃっただけ」

「姐さん、気になったんだけど、早朝訓練って何をするんだい？」

「ジョギングとか？」

「ん？ 朝の訓練に何をするかだ？ それはもちろんジョギング  
もするぞ、朝は10キロほどだがな」

「10キロ？ 朝っぱらから10キロも走るの？」

「10キロしか走らないのだ」

「…、まあ、単位は人それぞれだよな、うん。しかし、朝から10  
キロも走ったら、俺なんかへとになって何もやる気しないけど  
なあ…、そのあとちゃんと学校に来てる姐さんは偉いよ」

「そして10キロ走った後は、シャワーをして朝食を済ませ、学校  
に行って武道場で型稽古だ」

「えっ？ 10キロ走った後に、そんな余裕あるの？」

「そうだな…、ジョギングはほんの20分ほどだから。起きてすぐ  
に着替えて、ジョギングをして、シャワーをして、朝食を済ませて、  
というところで一時間とかからない。となると、家を出るのはいつ  
も六時前だ。始業時間まではもちろん、風紀委員会の朝の任務にも  
余裕を持って間に合わせることができるぞ」

「…、ジョギング10キロを20分って、それどんなスピードなの  
？ 単純に時速換算すると時速30キロだよな。ってことは…、1  
00メートル走なら12秒で走り切るペースなんだけど、えっ？  
全力疾走じゃね？」

「全力疾走で100メートルならば私は、わずかではあるが、11  
秒を切るぞ」

「女子の世界記録は、確か10秒49だったし、えっ、ワールドク  
ラスじゃん。っていうか、全力疾走よりは確かに遅いかもしれない  
けど、でもそんなスピードで10キロも走り続けられるなんて、人  
間のやることじゃないよ。姐さんもたいがいだよ。実は志穂よりも

姐さんの方が身体スペックヤバいんじゃないの？」

「皆藤の100メートルは、あくまでも上手に走ることができればなのだが、世界記録よりも早いぞ。きちんとした大会に出て、きちんと申請をすれば今すぐにでも世界を塗り替えることができる」

「何者だ、お前!？」

「? かいどくしほ、です!」

「うん、知ってる。まあ、お前は、そうやってボケっとして生きてればいいよ、うん。それで世界は平和を保たれるよ。っていうかさ、姐さんはそうやってサラツと言うけどさ、よく考えたら10000メートルの世界記録って、姐さんの記録よりも遅いんじゃない?」

「詳しい数字は私も知らないな。まあ、特にそういう名誉がほしいとは思わないし、言う必要もないのだろうがな。私には学園の風紀を守るという使命がある」

「学園の風紀を守るよりも、学園の名を高める方が使命としては高等だと思うけど…、まあ、姐さんがそれでいいっていうならいいか。それで、姐さんはそんな早い時間に来て型稽古をしてるってことなのかい?」

「そうだな、無心で稽古をしていると、それこそ光陰矢のごとしという言葉の通り、時が矢のように過ぎ去っていく。気付いたときにはいつも風紀委員会の集合時間の間際になってしまっていて、よくあわててシャワーを浴びることになるぞ」

「そうなのか…、姐さんもいろいろ大変なんだな……。それで、メイはいつもこれくらいの時間に起きるのか?」

『いつもは、もう少し寝てる。今日は起きちゃった』

「そうか、ゆっくり寝るのはいいよな。寝る子は育つって言うし、メイもまだまだ成長するかもしれないぞ」

『だいたい』

「志穂は、これ以上寝てもきつと成長しないから授業中の居眠りはほどほどにしろな」

「? ねてないよ?」

「寝てるよ!! お前は どう見ても寝てるよ!! むしろお前が寝てないときの方が珍しいよ!!」

「それには賛成だ。皆藤、お前は授業が始まるといつも眠ってしまうが、しかし授業というのは睡眠を取るべき時間では、本来ないのだぞ。それはしっかりと理解すべきだと、私は考えている」

「ん、でも、ねむいからねちゃうの」

「本能に忠実なのも考え物だな、ほんと。暇だからって遊びだすし、腹減ったからって飯食うし、眠くなったから眠るし、ほんと家猫みたいに自由なやつだよ。お前には世界の常識ってやつを、やっぱり一から学び直してもらわないといけないのかもしれないなあ……」

「確かに、それには私も同意させてもらおう。皆藤には、やはり学ぶべき常識が足りていないように思えてならないからな」

「だよなあ、やっぱりそう思うよなあ」

「ああ、そのとおりだ。こうして一日でも二日でも、いっしょに生活してみるとよく分かるものだ。皆藤、お前は常識を学び直す必要があるぞ」

「え、そうなの？」

「でもまあ、今はそれも後でいい。今はとりあえず、霧子のこと起こしちゃうわ。こうしてぐっすり眠ってるのを叩き起こすのは罪悪感なんだけど、まあ、いつものことだからな。そこまでの精神的ダメージはない」

「プロである三木の目から見て、この後天方が自力で目を覚ますことができると判断できるようならば、今むりに起こすことはない。もう少しの間だけでも、ゆっくりと眠らせておいてやってもいい。しかしそれが出来ないと判断されるようならば、今ここで起こしてやってくれ。起こすのに手間取って朝食に間に合わないというのは、様々な方に面倒と迷惑をかけることになってしまうからな」

「だいじょぶだいじょぶ、この息遣いからして、自分では絶対に自分一人じゃ起きられないから。俺がここで、サクッと起こしてやるって。確かに、慣れてない人がやるには少し面倒だからな、霧子を

起こすっていうのは」

そういうわけで俺は、これだけ騒いでもまったく起きそうな気配を見せない霧子のことを、とりあえずさっさと起こしてしまうことにして行動を開始するのだった。

霧子は起きないとなったらそう易々とは起きないやつだから、ここはプロであるところの俺が出張っていくのが適切な対処に違いあるまい。俺にかかれば、それはもう立ちどころに、眠り姫を目覚めさせる王子のように見事に、霧子の目を覚まさせることができるだろうからな。

## ごろごろする、しかない

「あれ？　なあ、姐さん、チェックアウトの時間って、何時だったっけ？」

「チェックアウトの時間は11時だ。あと一時間ほどで時間になってしまふな。出発直前にあわただしくならないように荷物の整理はもう済ませてしまえよ」

「ああ、俺の荷物はもう片付いてるだろうから、気にしないでいいよ。っていうか、そういうことは志穂にこそ言うべきであって、俺じゃない」

まるで魔術師のように、瞬く間に霧子を目覚めさせた俺は、その後朝飯までの時間をのんびりと散歩して過ごし、平和に朝食を済ませて今この時間に至る。時間はおおよそ10時ころ、無駄に豪華な朝食の腹ごなしもちょうど済むころで、あとはもうチェックアウトまでただひたすらにのんびりするくらいしかやることがない、という状況であった。

現に今、俺はただただ床にゴロゴロと転がっているだけであり、姐さんはピツと背筋を伸ばして座椅子に座り淹れたての番茶をシバいている真っ最中である。ちなみに志穂と霧子とメイはどこかに行ってしまったって、部屋の中には俺と姐さんの二人きりなのだが、まあ、だからと言って何があるわけでもない。部屋には風情を守るためテレビも設置されておらず、出来ることと言ったら本当におしゃべりをするくらいしかないのだからな。

「っていうか、その志穂はどこいった？　あいつの荷物がそこかしこに散乱してて目も当てられぬ惨状が展開されているんだけど。…、姐さん、あれ、あの下着だけはなんとか俺の目の届かないところに追放してください、お願いします。脱ぎ散らかされた服の上に乗ってる、あの白と水色のストライプのやつを、どうかお願いですから山の中に埋めてしまってください」

「…、まったく…、あいつはどういう神経をしているんだ……。服を脱ぎ散らかすのは、万歩譲って見逃してやることはできるが、しかし下着は…、デリカシーというものが、あいつにはないというのか……？」

「か、片付いた……？ もう目を反らしてなくてもいい……？」

「少し待て、とりあえずここに山積している洋服は私が畳んでしまおう。…、いや、皆藤の荷物は、私がまとめてしまうから、三木はしばらくの間部屋を出ている。20分ほどかかるだろうから、また散歩に行ってもいいし、向こうの部屋に戻っていてもいい。とにかく、少しこの部屋から出ろ」

「おっけ、了解。で、志穂はどこ行ってるの？ またお土産コーナーか？ それとも地下の遊技場で卓球でもしてるのか？」

「いや、裏の森に散歩らしい。なんでもまた忍者に会いに行くとか何とか言っていたぞ。まったく、またそういうわけのわからないことを…、三木、お前がしっかりと皆藤を人間としての正道へと導いてくれないと困るのだぞ」

「いや、俺は志穂のお母さんでもお父さんでもないんだよ、姐さん。そういう根本的なしつけに関しては、学校でしか関わり合いにならない俺ではなかなかすることは出来ないだよ。むしろ、そういう女の子の有りようみたいなことについては同性の姐さんから頼む」

「む…、確かに言われてみれば、その方が効率的で効果的かもしれないな。よし、分かった、皆藤には私からも一言言っておくことにしよう」

「マジで頼むわ。女の子として、そういう恥じらいのない態度はやっぱマズいと思うからさ。っていうか今マズいっていうよりも、将来的にマズい。やっぱさ、こういうことは異性が言うよりも同性に注意された方が気にすると思うし、そういうことは俺も流石に言いつらいんだよ」

「ああ、分かった、それではそのことについては私から二三注意をしておくことにしよう。実際のところ、私としても少なからず…、



多分に、気になってはいたのだ、任せておけ」

「マジ助かるわ。いっしょに志穂をしつかりとした新人類に更生させような、姐さん」

「その物言いはどうかと思うが…、言わんとすることは理解した、共に力を合わせよう。それでは私は皆藤の荷づくりの作業に入ることにする。またしばらくしたら戻ってこい、三木」

「ああ、それじゃ俺は、邪魔しないように外出てるわ。終わったころに戻ってくるからさ、また後で」

「残り少ない時間だ、有意義に使うことができるように気をつけろ。お前は常日頃でさえ変な時間の使い方をしているんだ。こういういつもと違う状況に置かれているときは、特にそういうことがないように気をつけろよ。今という時は、今しかないのだからな」

「ははっ、はい、気をつけます」

そういうわけで、俺は志穂の荷物の片づけを始めた姐さんの邪魔をしてしまわないように部屋を出ると、とりあえず一度大きく伸びをして、それから考えを巡らせるのだった。それはつまりこれからどこに行こうか、とかこれから何をしようか、といったようなことであるのだが、しかし今のところプランはまったくもって何もなくて、とりあえず言われるまま部屋を出てみた、という状況でしかないのだ。

「と、言われても、有益な時間の使い方なんて思いつかないっつうの。まあ、とりあえず部屋に帰るか」

まあ、何も考えていなかったというのに、そんなやることなんてすぐには思いつかないわけで、ここで「とにかく自分の部屋に帰ってから」という保留と何も変わらない結論にたどりつくのは、ある意味で自明の理的なものかもしれない。

「荷物の片付けも、きつともう済んじゃってるだろうしなあ……。部屋に帰ってもやることはないのは間違いないんだよなあ……。あっ、こういうのが、前から姐さんの言ってた無駄な時間の使い方かなるほど、ようやく分かったぞ」

テクテクと、そしてぼんやりと部屋に戻ると、すでにキレイに片付けられたそこには三枝さんがお茶の準備をして俺のことを待ち受けていた。どうしてこのタイミングで俺が戻ってくるのが分かったのかは知らないが、しかしまあ、こうしてちょうどいいタイミングでお茶を用意してくれるなんてうれしいではないか。この人は、俺にはその基準がよく分かっているからきちんと言うことは出来ないのだが、おそらく本当に有能な仲居さんなんだろう。

「おかえりなさいませ、三木様。お茶の用意がととのっておりますので、よろしければどうぞお召し上がりください。あと、勝手に申し訳ないのですが、お荷物の整理はしておきましたのでご確認くださいませ」

「ありがとうございます。ほんとに何から何までやらせちゃって、すいませんね」

「いえ、そのようなことは。全て私が勝手にやらせていただいたことですので、むしろ私の方が申し訳ありません。いまさらですが、ご迷惑でしたらはっきりと言ってくださいませ」

「いや、迷惑だなんて、そんな。まあ、この旅行の間いろいろとしてくれて、…、い、いろいろと、ですね、してくれたのは、とにかく、迷惑なんかじゃありませんでしたから。そりゃ、いくらか驚いたりはしましたが、迷惑ではありませんでしたんで、誤解のないように」

「そう、ですか…、それならば、よかったです……。御迷惑でないなら、それで……」

「迷惑なんかじゃありませんよ、どれも三枝さんが、俺たちのことを思ってくれたことばかりじゃないですか。それを迷惑だなんて、思うはずありませんって。むしろありがたかったですよ、あんなに世話を焼いてもらって。あんなにしてもらって、それを迷惑だなんていうやつがいるようなら、そんなやつ、俺がぶつとばしますよ」

「そのように言っていたただけるならば、幸いです……」

「あぁっ！ だから泣かないでくださいってば！　ほんとに涙もろいんですから……」

「すいません…、もうしわけございません……」

「いや、別に涙もろいこと自体は悪いことじゃないんで、気にしなくてもいいと思うんですけどね。でもほら、俺の前で泣かれちゃうと、それはそれで、ね？」

「うう…、すいません……」

しかし、今日が旅行の最終日で家に帰る日だということは、それってつまりこの人とも今日でお別れってことなんだよなあ。飛び込みでここに働きに入ったっていうし、来年までここで働き続けてる保証もないよな。んー、そうなると、なんとなく名残惜しかったり？　っていうかこの人、なんでか分からんけどいろいろ俺のこと知ってたし、いろいろ聞かなきゃいけないことがいっぱいあるような気がしてたけど、けっきょく何も聞いてないし。おいおい、どうするんだよ…、もしかしてここを逃したらそういう諸々は全部闇の中みたいな、そういうトラップ？　でもだからって、今ここで尋問を始めるわけにもいかないし…、えー、どうしたらいいの？

どういう流れで話を切りだして、不自然じゃないように話を展開させて、どういうタッチで深いところに話題を持っていけばいいっていうんだい。おいおい、俺にはそんな高等な会話術のストックはないぜ？

「三木様……？　難しい顔をして、どうなさいましたか……？」

「…、いえ、なんでもありませんよ？」

というわけで、諸々諦めることにした。

そりゃ、そうだろう。人間には様々な知識、あるいは経験を得る機会が人生の中でポツリポツリと存在しているものだが、しかし全ての知識を得ることは出来ないし、ありとあらゆる経験を積むことも出来はしない。つまり、知ることができることや経験できることがあるのと同様に、知ることができないことや経験することができないことも存在しているのだ。

いや、確かに、ここで強引に一步を踏み出せば何らか核心に近いことに触れることができるかもしれないが、だからといってそれがどうしたというのだ。その強引な振る舞いによって、もしも誰かを傷つけたりしたら、そんなことを俺は望まない。具体的に言ってしまう、当然俺はここで彼女、三枝弓子に詰問することはできる。胸倉をつかみ、壁に縫い付け、知っていることを全て吐き出せと、暴力を笠に着た脅迫を、することが出来ないわけではない。そういうことを今まで一度もしたことがないというわけではないから、適切で効果的なやり口も知っている。おそらく、彼女の握っている何らかを聞きだすだけにはとどまらず、彼女についてのあらゆる情報を聞き出すことは、そこまで難しいことではないだろう。

しかし、そんなことをして何になる。そんなことをしてしまえば、彼女は傷つくだろう。俺が、傷つけるのだ。そんなことをするため、俺はここにいるんじゃない。

知らないことを知るためにそんなことをしないといけないなら、俺はなにも知らなくていい。言ってしまうえば、そんなことをしないと知ることができないことならば、それは俺が知る必要のないことなのだ。

そもそものんだ、たった一つのことを知らなかったからといって、俺が俺でなくなるわけでもあるまいし。女の人を傷つけないと知ることのできない、知らなくていいことなんて、知ろうとも知りたいとも思わないつつうの。

「三枝さん、この後暇なら、ちょっと散歩でも行きませんか？ 友だちみんなに振られちゃって、これからしばらく暇なんですよ。あっ、もちろん、忙しいっていうなら、強要は出来ませんけど」

だから俺は、ここで出来ることのうち、一番良さそうに見えることをするべきなんだ。さっき考えたみたいのはランクで言ったら下だ。そんなこと、する必要なし、時間の無駄だ。それならば今はこっち、出来るだけ楽しい時間を、残りわずかな旅行の一時を出来るだけ楽しんで過ごすこと、これに尽きる。しかもそこするのが美人のお

姉さんとの散歩というなら、それはもう言うことなしだ。

「裏の森に、忍者が出るらしいんですよ。忍者ですよ、忍者。バカらし過ぎて、ちょっと見に行きたくなっちゃいまして。でも一人で行くのもマジっぼくてアホらしいでしょ？　だから出来ればいっしょに来てくれないかなって。どうです？」

いっしょに散歩をするにしても、誘いだすための理由なんて、それこそどうでもいい。大真面目に真面目な理由で真面目くさって誘われて、女の人がどうして楽しんでくれるだろうか。こういう真面目そうな人が相手なら、特にそうだ。出来る限りバカらしくて、可能だけアホっぽくて、誰が考えても下らない。そんなどうしようもない理由であればあるほどいい。

むしろ、俺がバカだと思われるくらいでちょうどいい。人間、なかなか本気でバカになれるものではないのだから。人に楽しんでもらおうっていうとき、そういう風に思ってもらえるってことが、その人に楽しんでもらえてるってことの証明みたいなもんだろ。

一番下らなくて、一番バカらしくて、それから一番楽しいこと。そういうどうでもいいことこそ、今この瞬間に追い求めている。人間、いつかは真面目にならないといけない時が来るものなのだ。バカでいてもいい時くらいは、精いっぱいバカでいたいではないか。

## 俺たちの帰還

「はい、それじゃここで解散ってことで」

のんびりだらだらと過ごしていると時間が経つのが遅く感じると言うが、しかしだからといってすっかり時間が止まってしまおうというわけではないのだ。だからもちろん俺たちにはチェックアウトの時間が訪れるわけであり、また帰りの電車の時間もやってきてしまうわけなのである。

そして今、意外とあっさりとした三枝さんに別れを告げ電車に揺られること数時間、何事もなく我らがホームタウンへと帰り着いた俺たちは、そのままの流れで解散という運びに相成った。とりあえず、旅行中に誰かがけがをしたり体調を崩すようなこともなかったので、平穩無事ないい旅行だったということができるだろう。こうやった平和にイベントを終えることができるのは、責任を持つ立場である幹事としては喜ばしいことこの上ない。

「ゆっきい、りょこくおしまい？」

「ん？ ああ、そうだな。二泊三日も、長いようで短かったよな。」

どうだ、志穂、楽しかったか？」

「たのしかった」

「そうかそうか、それはよかった。でもまだ気を引き締めているよ。旅行は家に帰るまでが旅行だからな。家に帰り着くまでの間に事故にでもあったら、それこそせっかく楽しい旅行が最後の最後で台無しになっちゃうからな」

「はい」

「まあ、お前だと事故って怪我して病院行きで台無しっていうよりも、事故って相手の車をふっ飛ばして警察に連行されて台無しって感じの方がしっくりくるけどな。とにかく、そういうことにだけはならないように気をつけろよ」

「でっかいトラックはよけたほうがいいってししょーが言ってたか

ら、きをつけるよ!」

「でっかいトラックは、ってなんでそこで微妙に限定したんだろう……。もしかして乗用車とかバイクとかなら打ち返せてことなのかなあ……」

「ししよゝなら、ちっちゃいのなら5ふんでたいらにできるって」

「軽自動車を五分でスクラップって…、本当に化物だな、お前のお師匠さんは……。まあ、ストリートファイターのボーナスゲームじゃないんだから、ほんとに車をボコボコにするってことはないんだろうけどさ……」

「おきゃくさんにウケルから、いまでもたまにやるっていったよ」

「お客さんに見せるのか……? お前のお師匠さんは何をやってる人なんだよ。もしかしてサーカスみたいな感じのに出演してるとか?」

「とゝぎじよゝでね、バトルのまえにくるまをぼこぼこにしてぼくはつさせるんだって、かつこいゝよねゝ」

「闘技場……? おい、志穂、日本に闘技場はないぞ。いったい何と勘違いしてるんだよ。っていうか、やっぱ総合格闘技とかなのかな? 車をふっ飛ばすなんてちょっと過激なパフォーマンスだけど、最近そういうの流行ってるみたいだし」

「んゝ…、わかんないゝ」

「そうか、まあ、別にな、俺がお前のお師匠さんとながらないといけないってわけじゃないし、分からないままでも一向に構わないんだけどな。それよりも、お前はそういう危ない道には進んじやダメだぞ。女の子なんだから、ケガするようなことは出来るだけしない方がいいんだ」

「ししよゝがけがしてるの、みたことないよ?」

「いや、それはきつと隠してるんだよ。格闘技のリングに立って怪我しないなんてありえないんだから。とにかく、格闘技は趣味の域にとどめておかないとダメだ。かわいい顔に傷がついたらどうするんだよ。お嫁さんになれなくなっちゃったらどうするの」

「ゆっきいのおよめさんになるからだいじょぶ」

「志穂と結婚するのは、正直勘弁だな。なんか、四六時中疲れてることになりそうだし」

「そんなことないよ。かわいいおよめさんになるよ」

「どうだかなあ…、まあ、とにかく俺はお前とは結婚しないから」

「うに…、きりりん、ゆっきいにふられちゃったよ…」

「し、しいちゃんがダメならあたしはもっとダメだから、だいじょぶだよ！　しいちゃんの方がかわいいし、しいちゃんの方がいい子だもん。あたしも幸久君のお嫁さんにはなれないよ！」

「？　なんだ霧子、将来に何か不安でもあるのか？　霧子のこととは、結婚云々抜きにして俺が一生涯にわたって世話していくから心配しなくていいぞ。霧子は好きなように、思うまま自由に生きていいんだからな」

「三木、そうやって天方を過度に甘やかすのはどうなんだ？　そのように過保護にしているのは、いざ世間の荒波と対峙することになったとき大変な目にあうのは当の天方本人なのだぞ」

「まあ、そうかもしれないけどさ……」

「適度に厳しくすることも、相手のことを思えばこそ、とても大切なことだと私は思うぞ。ただ甘やかすだけではそこに成長がないではないか。友人というものは互いに依存し合うだけではなく、共に成長し合い、伸ばし合っていくところにその意味があるとは思わないか」

「確かに、そうかもしれないけど……」

「天方も強くならなくてはならないのだぞ。それに、いつまでも守られるままでもいいと思っているわけではあるまい。守り守られ、支え支えられ、友人関係というのはそういう対等なものなのではないのか？」

「…、でも、俺は霧子を守るんだ！　俺が守ってないと、ろくでもない男が寄ってきて、きつと大変なことになっちゃうんだ！」

「いつでも天方の横にお前がいることは出来ないんだぞ。天方が自



分で自分を守ることができるよう、心を尽くすのが、それこそ本当の思いやりというものではないのか」

「…、ダメだ、惑わされるな、俺……！ 霧子を守るために俺はこの世界に生まれてきたんだ……！ しっかりするんだ、俺……！！」

「ゆ、幸久君…、あたしはだいじょぶだよ……！ あたしもがんばって生きていくから、心配しないで……！」

「でもきりんあんまりつよくないからしんぱい。てきがきたら、まけちゃうよ？」

「て、敵はこないから平気だよ、しいちゃん」

「いや、人間生きている以上、いつ何時危機に陥ることになるか分からないものだ。だからこそ常在戦場、常に心には緊張の糸を張り巡らせておかなくてはならない。いつどのタイミングで無頼漢に襲われることになるか、分からないのだからな」

「…、いや、さすがに霧子はそういう死と隣り合わせの生活は送ってないし、これから送ることもないと俺は思うんだ……、俺は。っていうか、姐さんもさすがにそんなデッド・オア・アライブな日常を過ごしてるってわけじゃないと思うんだけど……」

「そういう心持で日々を過ごすことが肝要だと、そう言っているだけだ。実際にそんな危険な生活を送らなくてはならないと言っているわけではない」

「なるほどね…、まあ、そういうことにしとくわ……」

「そういうわけだから、私は天方を甘やかすだけではないけど、そう思うわけだ。ただ、私の言うことがどうしても間違っているとお前が言うならば、残念だがそれ以上私は何も言うことは出来ないがな」

「間違っではないし理解もするよ、納得はしないけど」

「聞く耳もたぬか。ふむ、まあ、お前がどうしてもそうしたいというならば、私はそれをなんとかしても、無理をしてまで止めようとは思わないのだがな」

「まあ、姐さんからそういう注意をされたってことは覚えておくこ

とにするよ。何と言っても姐さんの貴重なお言葉だからな」

「まったく、その素直さをもってして私のいうことにも納得してくれればいいんだがな」

「それは出来ないな。霧子は一生涯俺が出来得る限り甘やかして世話していくって決めちゃったものでね」

「…、私は、ずっと天方が三木から親離れ出来ないんだとばかり思っていたのだが、しかし三木の方が天方から子離れ出来ていなかったのだな。そのことが今日この瞬間、はっきりと分かったぞ」

「姐さんもついに気付いちやっただねえ、そのことに。そうさ、俺は過保護上等の子離れできないお父さんだよ！　あるいは妹離れ出来ないおにいちやんだよ！」

「そうやって恥ずかしげもなく開き直るのは、どうかと思うがな。まあ、天方も嫌がつているというわけではなさそうだし、もしかしたら私が口をはさむようなことではないのかもしれないがな」

「実際、口をはさんだからってどうなる話でもないだろうしね。けつきよくは俺の意識の問題ってことだ」

「そうやって問題点を理解しながら修正する気がないというのは、ある意味でもっとも厄介なタイプの人間なのかもしれない。問題を発見する聡さを持っていながら、それを修正する方向で頭脳を働かせようという意思の持ち合わせがないのだからな」

「まあ、どうしようもなくヤバイ状況だったら、仕方ないからどうにかしようとするだろうから、俺もまだまだプロじゃないよ。本物のプロだったら、たとえそれが、それこそどんな状況であつたとして、上手に何事もなく収めることができるはずだからな」

「何をもってして己をプロであると認定するのかは分からないが、お前の言うことも分からないではない。まあ、三木、天方だけでなくお前も、まだまだ成長する必要があるということだな」

「成長しないといけないっていうところについては、前向きに善処します」

『みんな、幸久くんといっぱい仲良しでうらやましい。あたしも』

つとなかよしになりたい』

「ん？ おいおい、メイも仲良しだぜ。会ってからそんなに間もないけど、俺はけっこう仲良くしてると思ってるんだが？」

『でも、なかなか話に入っていきづらい』

「それは、仲良し度の問題じゃなくて、メイがケイタイで話そうとしてるからだろうな。音声でやりとりしている中に、文字情報で参入しようっていうのが、そもそもからして難しいんだと思うぞ」

『そうなのかなあ……』

「それに、音声としての言葉を理解するのと文字としての言葉を理解するのは、別の意識を使ってる気がするからな、なかなか並行して発揮するのは難しい」

『うーん……』

「まあ、メイとおしゃべりするためにそれが必要だっていうなら、俺はがんばるけどな。だってメイは、ケイタイ使っておしゃべりするの自分ルールなんだもんな」

『…、うん、そう』

「だったらしょうがないじゃん。俺だってメイとおしゃべりしたいし、それならがんばるしかないだろう？」

『でも、大変じゃない？』

「メイとおしゃべりするためにそれが必要なら、しょうがないな、がんばるしかない。それよりも、メイも話に混ざりたいならもっとガンガン来ないとダメだぞ。ただでさえ不利なんだから、もっと分かりやすくこれから発現するぞ、ってアピールしていかないと」

『たとえば？』

「たとえば？ ん…、服の裾を引っ張ってみるとか、肩を叩いてみるとかでもいいんじゃない？ 気付いてもらえればいいんだし」

『そうなのかな……？』

「あつ、痛いのは、ちょっとなしな。蹴るのとか」

『そんなこと、しない』

「ま、だろうな。分かってたけど、いちおう言ったただけだ。とりあ

えず、俺はメイががんばって話してくれるなら、いくらでも付き合うからな」

『うん、分かった』

「よしよし、がんばってくれよ。あつ、そうだ、メイは旅行楽しかったか？」

『楽しかった』

「おお、そうかそうか、楽しんでくれたんならよかった。俺たちはこうやっておっきな休みとかに遊びに行ったりするからさ、メイも来たかったら言うてくれな。メイだったら歓迎だから」

『誘って』

「ん？　…、ああ、俺から声かけろってことか。分かった、イベント情報はメールか口頭でどんどん流して行くようにするから、来たかったら返事してくれ」

『分かった』

「よし、じゃあ今度こそ、今日はお開きってことで。みんな、残りの休みも楽しんでくれ。姐さんは風紀の合宿だよな、無理しすぎないでくれ。志穂は山籠りだな、無事に帰ってくるように。メイと霧子は残りの休みはゆっくりだったけ。体調崩したりしないように気をつけろよ。じゃ、そういうことなので、解散！」

「それでは、また休み明けにな。三木、休みにかまけてだらだらと過ごしてはいかんぞ」

「おっけおっけ、気をつける」

「ゆっきい、ばいばい。またね」

「おお、またな。あんまり強くなるなよ」

『あたしも帰るね。休み中に暇だったらメールしてもいい？』

「メールなんてどんどん送ってくればいいよ」

『じゃあ、メールする。ばいばい』

「おお、ばいばい」

といった具合に、俺は三々五々に散っていく友人たちを見送って、ああ、ようやく旅行が終わったなあ、とちよっとだけ感慨深くなっ

ていたりするのであった。なんというか、重責を果たしたというか、大きなことを一つやり遂げた気分だった。

「幸久君、帰る？」

「そうだな、帰るか」

そして、最後までいっしょにみんなを見送っていた霧子と顔を合わせると、俺は一つ大きく伸びをして、それからいっしょに家路につくことにしたのだった。こうして旅行は終わったのだが、しかしまだゴールデンウィークが終わってしまったというわけではない。俺たちの長期休暇は、まだハーフタイムだ！

## ゴールデンウィークの過ごし方 高階都の場合？

「おお、二日ぶりの我が家か…、なんかちょっと、ようやく帰ってきたって感じになったな……」

霧子とはついさっき別れを告げ、ようやく本当にお開きとなった俺の今回の旅行は、今こうして我が家であるところのサクラ荘へとたどり着いたことによって、文字通り終着と相成った。しかし、こうして帰ってくるだけでなんとなくホッとするっていうのは、この場所が俺にとってホームになっているということなのだろう。そういうのって、なんかうれしいよな。

「ま、一年も住んでれば馴染むよな、やっぱ。さってと、さっさと帰って広太のことでも安心させてやるか。どうせなかなか帰ってこないとか言ってヤキモキしてるんだろうし」

駅からここまでの帰り道にある庄司の家をちら見したところ、雨戸とカーテンが開いていたみたいだしどうやらすでに本家から帰ってきているみたいだったし、ほぼ間違いないく広太もいっしょに帰ってきているだろう。そして帰ってきているということは、庄司の家に長居することができない以上、広太はサクラ荘の部屋に戻っているのである。

しかし、まったく、お婆さんもおじさんも筋金入りの頑固者だよな、とこういう状況になると毎度毎度思わずにはいられない。我が子が久しぶりに実家にやってきたというのに、どうしても上がらせようとしないのでからな。

「っていうか、なんでこれだけ近くにある自分の実家を、不審者よろしく外から垣根越しにちら見しないといけないんだ、って話だよ」  
そもそも何がその原因かといえば、俺たちが家を出てサクラ荘に越してくる羽目になったあたりの、俺とおじさんのやりとりがそれにあたるだろう。まあ、細かく思い出していると時間がかかってしまうので割愛して今度に譲るが、とりあえず庄司の家的には俺の家は

もはやこのサクラ荘の部屋なのであり、自立と自律の精神をもって一国一城の主としての心意気を学んでください、みたいなよく分からない理由なのである。

今思い出してみても、けっきょくよく分からないな。どうして一国一城の主は実家に戻ってはいけないんだろう……。いや、まあ、きっと俺がふんわりとしか理解していないのが問題なのであって、しっかりした理由みたいなものが、おそらくあったに違いないのだ。とにかく、俺と広太は庄司の家に入ることが基本的に許されておらず、天変地異か何かでサクラ荘が焼失、あるいは消失でもない限りは戻ってきてはいけないと厳命されているのだ。

「まあ、だからこそ広太がどこにいたかが特定されるんだし、今だけはラッキーなのかもしれないけどな。でもあいつ、今はきつと二日分の掃除を俺が帰ってくるまでに済ませないとして躍起になって掃除してるんだらうなあ……」

となると、だ、ここはもしかするとまっすぐに帰らない方がいいのかもしれないな。広太がいつ帰ってかは分からないが、もしもそんなに時間が経っていないくて掃除が終わっていないかったら、俺が帰ってくることにによって広太はエライ焦るだろう。それはちょっとかわいそうというか、大変なんじゃないか？

ほら、きつと昼飯をおじさんたちといっしょに食って帰ってきたんだろうし、時間的に考えると、今は二時少し前なんだから昼の時間から二時間も経っていない。ということは掃除を始めてから一時間と経っていない可能性すらあるのだ。いくらあいつが有能とはいえ、あの家の二日分の汚れを一時間足らずで片づけられるかどうかは疑問だ。

それだったら、少し帰りが遅くなってあいつを心配させるかもしれないが、二時間くらい潰してから帰るのが適策なのかもしれない。たとえば、旅行みやげを渡したついでに少し上がり込んで話し込んで、それを二軒も三軒もやってしまった、とかいうのはどうだろうか。いや、っていうかそれがいい、それでいこう。かなり妥当な理

由だし、実際のところ、どうせあとでやらなくちゃいけないこともあるんだからな。

「それじゃ、まあ、とりあえず一階から行くか……」

というわけで、俺は広太が掃除を終わらせるための時間稼ぎのためにサクラ荘の住人たちをそれぞれ訪ねていくことにしたのだった。ここにはうちを除いて三戸あるから、一軒ごとに40分くらい長居すれば済むわけだ。うん、迷惑だろうな、きっと。でもだいじょぶだって、みんな優しいし、きっと少しくらいだらだらと長居されたって大目に見て許してくれるよ。

「まずは都さんか。一番最初からさっさと追い出されそうな感じするなあ……。まあ、修羅場じゃなかったらだいじょぶだろうけど……」

とりあえず、何はともあれ、勇気を出してピンポンするしかないのである。ピンポンしないうちは都さんが修羅場っているかどうかは観測不可能なわけで、未確定だということができるかもしれない、だからこそ今この段階で俺がお部屋に上がり込むことができるかどうかは不確定だと言えるだろう。いや、本当に、だからどうっていう話ではないんだけどな。

いつまでもドアの前でだらだらとしているのはやっぱりおかしいな。ここはさっさとピンポンして、さっさと上がってもいいかを確認するのが俺のあるべき正しい姿だ。躊躇とかしている場面じゃないんだから、ガツといかないとな、ガツと。

「みーやーこーさーん！ あーそびーましょー！」

ピンポン、と101号室のドアベルを鳴らしつつ、俺は大きな声で元気よく――それはもちろん中で都さんがヘッドホンをして作業をしているかもしれないという可能性を考慮しての行動選択であり、あるいは都さんが部屋の中で感覚器官が弱るまでに衰弱しきってしまったという可能性までももんぱかった思慮に満ちた行動選択である――声をかける。しかし中から返事はない。もしかしてヘッドホンの音量を大きくして作業しているか、あるいは本当に衰弱し



て客人の応対に出ることすらできない状況になっているというのだろうか。

いや、さすがに俺が目を離したほんの二泊三日のうちにぼろぼろになるまで衰弱するなんてことはないと思うんだけど、でもそれがまったくありえないことである、と断言できないのが都さんであり、それこそが都さんが非常にめんどくさい人である所以の一つなのである。

逆に言ってしまうえば、ここですっきりと『はいはい』と威勢よく応対に出てきてしまっただけは、それは都さんではないのだ。いつもなんだか社会不適合気味で、常にジャージ女で、髪は自分カットでざんばらで、料理やらないし、家事やらないし、でもなんかマンガか何かを描いてるっぽくてがんばって生きてるっぽい。そういうのが都さんなんだよ、たぶん（自分でも何言ってるか分からなくなってきた）！

「でも、あんまり面倒なもの、ちょっとねえ……」

言うておくが、俺は別に面倒な女性に対して特別な、強いて言うならばフェチ的な感情、というか嗜好を持っているわけではない。確かに霧子とか（一人で生きられそうな気がしない、面倒）志穂とか（常識という枠にとらわれない、面倒）メイとか（コミュニケーションが困難、面倒）、あと弥生さんとか（積極的に手間をかけてくる、面倒）都さんとか（面倒の一言では語りにくい）とか、あとまあいろいろだけど、そういう面倒っぽい女性が俺の周りには多いかもしれないけど、でも俺は、世間一般の男性の持っている常識的な嗜好と同じように、しっかりしている女性の方が好みだったりする。いや、そういう異性が好みっていう人もいるだろうしその嗜好を否定しようとも思わないよ、っていうかむしろその嗜好も分からないでもないよ。それが分からなかったら、霧子の世話とか十年も見続けられないからな。でも、でもな、俺はしっかりしてる子がいいんだよ。確かに霧子のこと大好きだし、志穂のことも可愛いと思うし、メイのこともすごい気になるし、弥生さんなんて俺がいないとダメ

なんじゃないかとすら思うし、都さんに至っては放っておいたら死ぬかもしれないと思ってるよ。でも、やっぱりしっかりしてる方がいい、いいんだよ。

ダメっ娘には、きっちりダメっ娘卒業してほしいと思ってるんだ。俺は、少しでもそのお手伝いができればいいと思ってるんだ。決して、ダメっ娘はいつまでもダメっ娘でいてほしいとか、そういうことは思っていないんだ。

「…、あれ？　ほんとに出てこないな……。仕方ない、正攻法は諦めよう」

都さんがいつまで待っても出てこないの、仕方がないから俺は諦めてベランダの方に回ることにした。都さんは、生活リズムだけはきっちりしているので、昼はちゃんと起きている。なんでも、昔からの習慣で、何時に寝ても朝の八時に目が覚めてしまうんだそう。朝の五時に寝てもその時間には目が覚めるらしいから驚きだ。

つまり、今も起きているはずなのだ。そして起きている都さんがすることといえば、仕事をしているか、あるいは何もしないでぼっとしているかのどちらかで、そのどちらにしても机に向かっている。

都さんの部屋の中は、ベランダからしか見たことはないが、机が窓のすぐ近くにあるので窓越しに合図をすれば気付いてくれる可能性が高いのだ。

「むっ？　カーテンが完全に閉まって？　おかしいな…、だいたいいつも明かり取りのためにほんの少しだけ開けてるのに……」

なんとなく、イヤな予感がする。この時間になるまでカーテンを開けてないなんて、もしかして何かあった？　もしかして、これってヤバいんじゃない？

「ちよっと、待ってな、ちよっとタイム。とりあえず玄関に戻ろう。話はそれからだ」

そうだ、カーテンが閉まってるってだけで、中で都さんが死んでるなんて思わなきゃない。そういうのは、考えるだけでも失礼ってものではないか。…、とりあえず、ドアが開くかどうかだけ確かめ

よう。開かなかったら、ちょっと大家さんに相談だ。

「っていうか、ドアが空いたら開いたで困るんだけどね」  
とにかく、もう一度ピンポン。

「都さ〜ん。三木です。幸久で〜す」

「は〜い？」

「あれ？ 都さん？」

「？ 都さんよ？」

「…、二日ぶりに、旅行から帰ってきました！」

「ああ、へえ…、二日…、ぶり…？ 三木くんが旅行に行ったのは知ってたけど、…、二日？ 一泊二日？」

「いえ、あの、二泊三日なんで、俺は二日間ここにいませんでしたけど…？」

「…、ゴールデンウィークって、今日で何日目？」

「…、三日目です」

「もう半分…？」

「そう、ですね」

「…、ほんとに…？」

「はい…、あの、もしかして都さん…」

「なんだかよく分からないうちに、二日も経ってしまったわ…。  
どうでしょう…」

「あの、どうかしたんですか？ もしかして、何か困ったことでも…？」

「いや、あのね、実は三木くんが出掛けて行った日の早朝に脱稿してね、だから今まで何にもしないでぼんやりしてたのよ。本当に二日間、何にもしないで、ただぼおっとしてたの」

「…、はあ…、それで？」

「それでね、さっき、三木くんの声がしたじゃない。だからびっくりしちゃって」

「な、なるほど」

「それで、がんばって玄関まで行こうとしてるうちにもう一回三木

くんの声がするんだもの、もう一回驚いちゃったわ」

…つまり、都さんは俺からの一回目の呼びかけに気付いていて、でも玄関まで出てくるのにどうしてか難儀して、俺が玄関前とベランダを往復するくらいにかかったってこと？　そういうこと？

「ぼんやりと何もしないで、二日間も使っちゃったのねえ……」

「とりあえず、何事もなかったんなら、よかったです」

「？　　どういうこと？」

「いや、あの、都さんがなかなか出てこないんでベランダの方まで回ってみたんですけど、カーテンしまってたから中で倒れてるんじゃないかって思って、ちよっと心配に思っちゃって」

「ああ、カーテンね。ちよっと先月やってた月刊誌の原稿がどうしてもヤバくて、全然予定通りに終わらなかったから、だいたい90時間くらい連続でライトボックスの光を見続けたのよ。だからしばらく光を見たくなくて閉めてたの」

「90時間も連続で仕事してたんですか？　不眠不休不食で？　死にますよ？」

「いやあ…、本当に危なかったのよ。ほら、一週間前くらいから、編集さん、うちのドアの前に来てたでしょ？　待たせてたのよ、原稿」

「…、ああ、確かにいましたね、入れ替わり立ち替わり何人か」

「というわけで、何ともないわ、心配しないでもいいわよ。まあ、あえて問題を言うなら、今、思い出したように空腹が襲ってきたことくらいかしら。うん、おなか減り過ぎて、おなか痛いわ」

「…、90時間仕事して、二日間何もしないでいたってことは、えっと、六日？　六日間、一食も食ってないんですか？　なんで死なないですか……？」

「あゝ、きつと体重がすごい減ってるわよ。体重計乗るの怖いわ…。五キロとか減ってたなら、どうしましょ……」

「とりあえず、あの、お土産に温泉まんじゅう買ってきたんで、お腹に入れてください。その間に俺、何かつくっちゃいますから」

「ほんと？ 助かるわ。こんな状態で店屋物入れたら確実に戻すし、ブロック食も絶対に入ってくれないしで困ってたのよ」

「料理つくってくださいよ、自分で」

「そんなの無理よ、そんなに動けないわ。冷凍食品もないし、やるなら本気でつくらないといけないんだから。そんな気力と体力、今の私には残ってないわ」

「…、まあ、そうですね。分かりました、俺がつくります。これ温泉まんじゅうですんで、食ってください」

「ほんとにありがとう、三木くん。おかげで死なないで済んだわ」

「いえ、気にしないで…、気にしてください。仕事好きなのは分かりましたから、もう少し人間らしく生きてください」

「とりあえず、連載の本数が一本でも減ったら考えることにするわ。今の本数抱えてたら、そんなこと考えてる余裕ないもの」

「そう言われると思ってました」

とりあえず、こんな状態でこんなところで議論してもどうしようもないので、部屋にあげてもらうことにしよう。そういえば、都さんの部屋にあげてもらうのはいつ以来だろうか。いつもだいたい、都さんが弥生さんの部屋にいるか、あるいは都さんがうちの部屋に来るかだったから、ここに入る機会ってめったにないんだよね。

まあ、今はとにかく、この部屋のキッチンがなんとか利用可能な状態であることを祈るのみなのだが。

## ゴールドデンウィークの過ごし方 高階都の場合？

「冷蔵庫の中空っぽかと思ってましたが、意外と食材はありましたね。まあ、俺は中に入ってるのはほとんど使わなかったんで、きっちり使ってやってくださいね、賞味期限とかいろいろ気をつけて」とりあえず、急速に腹痛を伴うほどの空腹に襲われて幽鬼のようになっている都さんに温泉まんじゅうを渡してリビングルームの方に押し込んでしまうと、俺はキッチンに立って都さんの六日ぶりの食事をこしらえることにしたのだった。都さんは、見て分からないかもしれないが、そんなに胃腸が強い方ではないので、これだけの間飲まず食わずでいたあとにいきなりガバツとお腹に物を入れたら大変なことになってしまう。

いや、まあ、普通の胃腸をしている普通の人間でもそうなるか。六日間の絶食絶飲なんて、普通の人間はやらないことだろうからな。でも都さんのお腹が弱いのはほんとだ、脂っこいものを受け付けないんだから、そのこと自体は嘘じゃない。

とにかく、俺はぼろぼろになっている都さんが食べても平気なものをつくらないといけないわけであり、しかも油とかをあまり使わないという食材使用の制限までついているのだから面倒なことこのうえない。でもこれ、俺が「そんなことやりたくないんだあっ!!」と都さんを放置して帰ってしまったとして、その後都さんが自分で料理をするかといえば、それこそありえなさそうではないか。

きっと都さんにはそんな気力はない。なんといっても、今回の絶食はマジらしいのだ。以前のように、携帯食とか食パンとかをもそもそかじっていただけで、まともな食事をしていないから絶食していたも同然、とかいう生ぬるいものではなく、本当に何も食べていないらしい。つまり、都さんが最後に口にしたのは、六日前に広太が「都さんがなんかヤバいっぽい」と言っているのを聞いて差し入れた晩飯（うちでつくったものの余りものをパパッと弁当箱に詰め

て持っていった。見栄えよりも量）なのだそうだ。だから、エネルギーが本当に足りていないようなのだ。生きているだけで精いっぱいの人に、どうして料理をしろなんて言うことができるだろうか。それってきつと、かなり酷なことを言っているに違いないのだ。いいよ、俺がつくるよ、飯は俺がつくるから。

「まんじゅう、ゆっくり食べてくださいね。急いで食ったら吐きますよ」

「分かってるわ、長らく空っぽのお腹に物を淹れることに関しては、間違いないく三木くんよりも一言あるわ」

「それ、ぜんぜん自慢になってないですよ？ 別に自慢してるわけじゃないですよ？」

「それに自分の身体だしね、そういうことをしたらどうなっちゃうか、少なくとも分かってるわ」

「そうですか、それならいいんですけど。っていうか、自分の身体の事だから分かってる、という前にその身体のために食事を取ってください」

「大人にはね、食事よりもしないといけないことが、しばしばあるもののよ、三木くん。空腹でお腹痛くても、やらなきゃいけないことがあるの」

「それは人間として最低限の営みである食事を差し置いてもやらなきゃいけないことなんですか？ っていうか、それ仕事ですよ？」

俺は仕事も大事だと思いますけど、人間として人間らしく生理活動を行なうことも、大事だと思いますけど」

「正直に言うとな、そういう常識的にしないといけないことをしている暇がないくらい、先月の進行はやばかったってことなのよ。間違いないく先月末の24日が原因なんだけど」

「ああ、やっぱりあの日、酒飲んでたんですね。だから何度も言っただけじゃないですか、都さんお酒飲んでますよね、って」

「うん、そもそもそのこと自体をはっきりとは覚えてないわ。間違いないのは、あの日三木くんのおうちでお食事会をする予定になっ

ていたことだけだもの」

「それって、ほぼ何も覚えてないってことですよね」

「そんなことないわ。頭の中に画像イメージとしてやよちゃんが三木くんを押し倒してキスを迫っている映像とかいろいろが焼き付いているもの」

「ああ、それは覚えてたんですね。身体張らされた甲斐がありましたよ」

「まあ、その代わりなのか分からないけど、なんとか編集のチェックを通した完成ネームと下描き20ページがどこかに消えてたんだけどね。ネームは編集部にコピーがあったからいいけど、下描きが消えたのはどうにもならないのよねえ……。こういうときデジタルで創ってる人なら何とかできるのかもしれないけど、私はアナログ派だからねえ……。物がなくなっちゃうと、文字通り一から描き直しだから」

「それで、けっきょくそれ見つかったんですか？」

「ええ、おかげさまでなんとか見つかったわ。八つ裂きになって、ゴミ箱の中に……」

「や……。八つ裂き……？」

「そうなのよ、きれいに八つに破かれてたわ」

「だ、誰がそんなひどいことを……？」

「私、らしいわ。やよちゃんの部屋で飲んでいたわたしが、おもむろに『こんなんじゃないダメだわ!』とか言って部屋まで走って行って、机の上に広げてた下描きとネームを八つに裁断し始めたらしいの。全然覚えてないんだけど……」

「……、都さんは、もうお酒飲んじゃダメですよ」

「分かっている、分かっているの。私はお酒飲んじゃダメなのよ、それは分かっているの。でもやよちゃんが! やよちゃんがあるときは巧みに、あるときは姑息に、あらゆる手段を用いて私にお酒を飲まそうとしてくるの!! 私には飲みたくないって言うのに!!」

「きつと、下手に飲みちゃうのがいけないんでしょうね。俺なんか



だと、一口飲んだだけで意識と記憶飛んで、ノックアウトですから」

「三木くん、お酒飲んだことあるの？」

「ええ、まあ、経験って言われて飲んだのと、事故みたいに飲まされたものの二回だけですけど」

「つていうことは、やよちゃんには飲まされてないの？　すごいわね、三木くん……」

「いや、まだ未成年ですから、弥生さんも俺にはそんな飲ませようとしませんって。まあ、弥生さんに見てみたら愛情表現みたいなものなんでしょうけどね、きっと都さんのことを大好きだからお酒を飲ませるんですよ」

「そうだとすると、お酒を飲まされるのは困るわ！　私には描かなきゃいけない原稿があって、お酒を飲まれたらちゃんと描けないんだから！」

「その点については、自分で折り合いをつけていただくしか……。流石に俺の力でどうにか出来ることじゃないんで……。つていうか、弥生さんが言うにはお酒飲んでもかなり上手いらしいんですけど、それはやっぱり素人目ってことなんですか？」

「確かに、私はお酒を飲んでもそんなに線はブレないし、上手に描くだけだったらお酒を飲んでいてもそんなに問題はないのよね。なんて言ったら三木くんみたいに馴染みの薄い人にも分かってもらえるかは分からないけど、線が腕に染み込んでるのよ。こういうところでこういう線を、つていう思想が身体に染みついているから、もう本能レベルでマンガを描くことはできるってこと。きっと普通の人が見たらこれでいいって思うくらいには描けるはずだわ」

「普通の人は、つてことは、都さんが見たらダメってことですか？　上手に描けてるつていうのは大事なことだって、俺なんかだと安易に思っちゃいますけど、そういうわけではないと？」

「うーん、そのあたりはひとそれぞれの感性だから一概には言えないのよね。他の作家さんがどう考えてるかは分からないし、それでいいって思う編集さんもあると思うのよ。でも、私はそうじゃな

いわ」

「と、いいますと？」

「私は絵描きじゃない、ってこと。えっとね、私はマンガ家であって、絵描きじゃないの。私が描いているのはマンガであって絵画じゃない。私が受けたいたいの絵が上手いっていう評価じゃなくて、マンガが面白いっていう評価なのよ。分かりにくい話で悪いんだけど、絵を描くときに込める魂とマンガを描くときに込める魂って、私は違うものだと思うてるの。だからね、マンガを描くぞ！　って全身全霊を傾けたもののしか、私のマンガだとは認めたくないのよ。そんな風に考えちゃう人間だからね、お酒を飲んだときに想いを込めずに描いたものも、当然認められないってことだわ」

「はあ…、すごいんですね、よく分からないですけど……。なんとかいうか、プロって感じですよね……」

「まさにプロってところなのよね、一応。まあ、自分が有名なマンガ家になれているのかどうかは、全然分かってないんだけど、とにかくなんとか生きていくくらいは出来てるわ」

「まあ、そうですね。俺、都さんが他の仕事してるところ見たことありませんもん」

「本当に、駆け出しのころはひどかったわ。なかなか芽が出なくてね、諦めた方がいいって思ったのも、一度や二度じゃなかったわ。でも三年前に初めて連載物を描かせてもらってね、あのときはうれしかったなあ。今でも封を切らずにとつてあるのよ、勢い余って本屋さんで買っちゃった自分の本。買わなくても何冊か献本でもらえるっていうのに、ほんとにうれしかったのね」

「まあ、いろいろ興味深い過去があるんでしょうけど、こんなところでペラペラっと簡単に話しちゃうんじゃないですか、またの機会にってことで。それよりも出来ましたよ、食べるもの。まずは鶏のささ身と大根の雑炊です。卵でとじずに汁を多めにしたからサラッと食べられるんで、けっこう食べやすいと思います。あとはもう一品、絹ごし豆腐の卵とじです。卵と豆腐でたんぱく質取

ってください。あと少ないですけど上から三つ葉散らしてるんで、緑物も取れますよ。夕食も野菜中心でつくってくださいね、変に偏ったエネルギーの取り方するのはよくないですから」

「あら、もう出来たの？ ご飯なんて炊いてなかったと思ったけど」「冷凍庫にご飯があったんで使わせてもらいました。軽めの食事なんで、夕飯でまたしっかり食べてくださいよ。それで明日からはちゃんと規則正しく食事を取る。それは約束ですからね」

「そうね、そうすることにするわ。明日からはまた違う原稿に取り掛かり始めないといけないけど、生活のテンポを戻して行かないとダメだからね」

「そうしてください、本当に。身体壊したら、マンガも描けなくなっちゃうんですから。あ、そういえば、都さんはなんていうペンネームでマンガ描いてるんですか？ 俺はそんなにマンガとか買わないんですけど、もしかしたら友だちが知ってるかもしれないんで」

「ペンネーム？ ああ、そういえば言ったことなかったかもしれないわね。私のペンネームはmiyakottoっていうのよ。名前そのまをローマ字表記にして、miyakotto。分かりやすいでしょ？」

「なるほど、今度友だちに聞いてみますね。それでそいつが本を持つてたら借りてみます」

「サインくらいだったらさせてもらうわ、もし持つてたらその子を連れて来てね。できるだけ小綺麗にしてサインさせてもらうわ」

「マンガとか好きな奴なんで、きつと持ってますよ。おもしろかったら俺も買いますよ」

「そうね、義理で買ってもらうてもうれしくないわ。本当に面白かって思って、お金出してもいいって思ってくれるなら買ってほしいわ」

「うーん、どうですかねえ……。俺はあんまりマンガ読まないんで、しっかりした評価とかはできませんよ」

「いいのよ評価なんてどうでも。けっさくマンガって、読者がどれだけ楽しんでくれたかってことしかないもん。だから三木くんが面

白いと思ってくれれば、それは三木くんにとって面白いものなんだから」

「つまり、とりあえず読んでみろってことですね。読んでみれば分かる、と」

「まあ、言っちゃえばそういうことね。…、この雑炊、美味しいわね。すごい食べやすいし、というか美味しいわ。なんて表現したらいいか分からないけど、とにかくおいしい」

「そうですか、それはよかったです。ゆっくり食べてください、おかわりはまだつくれますからね」

「これくらいの量で平気よ。一度にいっぱい食べすぎるとお腹壊すから」

「あとは、片づけはしっかりしてくださいね。これくらいきれいなキッチンを保ってください」

「掃除は嫌いじゃないわ。ただやる時間の確保が難しいだけよ」

「それだったらいいんですけど」

「あつ、そういうえばやちゃんが三木くんがなかなか帰って来ないってぶつくさ言ってたわよ。私なんていいから早く会いに行つてあげなさい。やよちゃん、三木くんのことすごい気に入ってるみたいだから、二泊三日ぽっちでもないのが寂しかったのよ」

「弥生さんのところにも、この後に行きますと。とりあえずお土産だけ先に渡しちゃおうと思ひまして、一階から廻らせてもらってるんですよ」

「ああ、そうだったの。じゃあうちが一番最初ってことね、101号だし」

「ええ、そうですよ。弥生さんは201だから最後ですけどね」

「三木くんも意地悪ねえ。早く会いに行つてあげればいいのに、焦らすんだから」

「いや、別にそういうつもりはないんですけどね……。まあいいや、それじゃ、俺は次に行きます」

「そう？ それじゃまた今度ね。またご飯御馳走してね、三木くん」

「それは、本当にまた今度で」  
というわけで、都さんの食事も出来あがったことだし、次の家に脚を伸ばすことにしようではないか。次は、同じ一階の歌子さんの家だな。どうだろう、旅行とかに行ってなければいると思うんだけど……。

## ゴールデンウィークの過ごし方 五島親子の場合？

「あつ、歌子さん、ただいまです」

都さんのために食事を用意していたらそれなりに時間が経ってしまったので、ゆっくり食べてもらうためにもさっさと退散することにして、俺はお隣の五島さんのお宅を訪ねることにしたのだった。そしてお土産の温泉まんじゅう一箱分だけ軽くなったキャリーケースをゴロゴロと転がしつつ都さんの部屋から失礼したところ、偶然だろうが、ちょうど部屋から出てくる歌子さんに遭遇したのである。

「あら、三木さん、確かご旅行に行ってらしたのでしたっけ。おかえりなさい」

「はい、二泊三日でちよつと出かけてきました。これ、お土産の温泉まんじゅうです。未来ちゃんといっしょに食べてください」

「これはこれは、ありがたくちょうだいしますね。私たちはなかなか旅行など行けないものですから、未来も喜びます」

部屋から出てきたところの歌子さんは、どうしてか大きな段ボール箱を一箱抱えていて、一体これから何をしようとしているのかまったく分からなかった。いや、一箱じゃない。扉の奥にそれと同じ段ボールが何個も何個も積まれている。全部で…、八個？　もしかして、これを全部運ぶのか？

歌子さんは、見た感じはどちらかというと線の細い、細腕という言葉がしっくりくるような容姿をしている。つまり、段ボールをひよいひよいと軽々運ぶようなキャラではないのだ。実際のところ、段ボールはけっこう重そうで、一つ運ぶのもそこそこ大変そうだった。

「あの、歌子さん、その箱、よかったら俺も運びましょうか？」

「いえ、大丈夫です。そこまで重くありませんので。それにすぐそこにトラックをつけてもらっているのです、距離を運ぶというわけでもありません」

「でも、数は運ぶんですよね？」

「…、まあ、そうですね。まだあと十箱ほど」

「…、手伝います」

「いえ、お手数ですのでそのようなこと、お願いできません」

「人助けは、俺の趣味です。それに、女の人が必要な荷物を運んで困っているのを見て、それを素通りするのは男じゃありません。任せてください、少なくとも歌子さんよりは力がありますから」

「…、おそらく、今までの経験からいって、三木さんはどのようにお断りしても遠慮しても、最終的には何らか私のことを丸めこんで荷物を運んでくださるのでしょうか」

「まあ、そうですね。困っている女性がいたら、どのような状況であつてもそれを助けるように仕込まれてますんで。力仕事絡みなら、なおさらです」

「ということは、私はここで懸命にお断りするよりも素直にお願いをした方がいいのでしょうか。その方がお互いの体力と労力を無駄にしないで済む、というものでしょうから」

「そう、ですね。潔く諦めて手伝わせてくれると、俺も説得するために無駄な時間を使わないで済みますし、そうした分だけ作業も早く終わりますから」

「それでは、お手数をおかけして申し訳ありませんが、お願いしましょう。運び終わったら、お茶を入れますので飲んで一休みしていただく。そうしなければ私の気が済みませんので、労うことはさせてもらいますので、受けてください」

「分かりました、借りをつくったなんて思われるのも嫌ですからね、歌子さんのしたいようにしてください」

「ええ、そうさせてもらいます。それでは、そのドアのところにある箱を、こちらまで運んでもらってもよろしいですか？ 玄関にあるものだけでいいので」

「はい、分かりました」

とりあえず、転がしていた荷物はドアストップで開いたままにしている扉の裏に置いておいて、俺はそこに積みあげられた段ボール箱

を運ぶ労働に従事することにしたのだった。まあ、たったこれだけの段ボール箱をアパートの前まで運ぶだけだ、そこまでの強度の労働というわけではあるまい。これだったら俺たちが一年半前にした引越の方が大変だったわけで、キツイというほどでもないだろう。「つていうかこれ、何が入ってるんだろう。箱の大きさの割にはそんなに重くないんだけど、でもこれいっぱいまで入ってるっばいしゝ、なんだこれ？」

その箱の重さがどれくらいかといえば、だいたい二つ積みにしてもまだ少し余裕があるくらいだ。二箱で、だいたい10キロもないくらいか？

しかしこの箱はデカイ。横幅はだいたいいっぱい手を広げてようやくというところ、縦幅は二つ積んだら視界の下半分が遮られるくらい。これだけの箱にいっぱいまでものを突っ込んで、それだというのにこの軽さ。しかも中でなんかカサカサいってるし。本当に、一体何が入っているというのだろうか。

「二つも持てるなんて、流石は男の子ですね。私は一つで精いっぱいですよ」

「そうなんですか？ でもこれくらいの重さだったら、ちよつと買いた物したらなっちゃいませんか？ 米を袋とかで買ったそれだけでもこれより重い気がしますけど」

「お買いものは、いつも庄司くんが手伝ってくれますので、私はそこまで重い荷物を持たないですんでいるんです。本当に、三木さんのところの執事は有能なんですね。いいものをお持ちです」

「ゝ、ええ、まあ、広太は出来るやつですよ。それにしても、あいつも隅に置けないですね。いつも歌子さんの買い物の手伝いをするなんて」

「そうですか？ 彼は執事として三木さんの代わりをしているだけのように思いましたが？ 三木さんならば私が重い物を買に行くのと知ったらお手伝いしてくださるでしょう。彼はそれを代わって行なっているだけなのではありませんか？」



「いえ、分かりませんよ。気を付けてください、あいつは基本的に年上好きですからね。もしかしたら、歌子さんは美人ですから、あいつも狙ってるかもしれませんよ」

「そんなことはありませんよ。私などただのおばさんですから。もはや異性などからは見向きもされませんよ」

「いや、そんなことありませんって。歌子さんはまだまだきれいですよ。一児の母には、とても見えません」

「ふふ、まったく、年長の者をからかうものではありません。おだてても何も出ませんよ」

「いや、別にからかつてるつもりはないんですけどねえ……」

「あつ、三木のおにいちゃんです！」

「ん？ あつ、未来ちゃん、ただいま」

「おかえりなさいです！ 二日もどこ行ってたですか？ おにいちやんがいなかったから未来、つまんなかったです！」

「つかはあ！？ 未来ちゃん、俺今、おっきい荷物持ってるから、タックルしたら危ないんだ……」

「ほあ！？ ごめんなさいです……。三木のおにいちゃんが帰ってきてくれたからうれしくて、つい」

「う、うん、いいよ、気にしないで。未来ちゃんがそう言ってくれて、俺もうれしいから」

「未来、せっかく御厚意でお手伝いしてくださっている三木さんになんてことをするのです。罰として自分の部屋に入っていないさい。

せっかく三木さんが買ってきてくださった温泉まんじゅうもありますが、ですが自業自得です。未来の分はないものと思いなさい」

「イヤです！ せっかくおにいちゃんが帰ってきてくれたのに、お部屋で一人でいるのはヤ、です！ それに美味しいおかしを一人占めもメ、です！」

「それならば、あなたも荷物を運びなさい。一つだったら持てるでしょう。三木さんにしたことがそれで許されることではありませんが、罪滅ぼしのつもりでしっかりやりなさい」

「はい、がんばるです！」

「重いでしょから、ゆっくり運びなさい。急いで転んだりしないように気をつけて」

「はい！ お任せです！」

そういうわけで、パパッと謎の荷物の運搬作業を済ませていくと、その途中で俺の存在に気付いた未来ちゃんが部屋から飛び出してきて後ろから俺の腰にいいタックルをぶちかました。しかし俺も男子高校生であり、小学五年生女子のタックルで倒されるのは、いかにそれが不意打ちであったとしても、プライドが許さないわけで、手の中に段ボールを落とさないようにバランスを取りつつなんとかしてこらえた。

そしてそれを歌子さんが許すわけもなく、自室謹慎を申しつけたわけなのだが、しかし未来ちゃんはそれを断固拒否。歌子さんが妥協して荷物運びの手伝いをする事で許すことになった。ここまで、そういう流れである。

「ふう…、三木さんのおかげであつという間に運び終わりました。手伝っていただいて、本当にありがとうございます」

「いえ、お安いご用です。そこまで大変じゃありませんでしたから、そんなに気にしないでください。あつ、一つ聞きたいんですけ、あの箱の中って何が入ってたんですか？」

「箱の中身ですか？ ああ、あれは内職の造花です」

「造花？ あんな量の造花を、歌子さんが量産してるんですか？ あれで、だいたい何本くらいなんですか？」

「そうですね…、一箱で300本ほど入りまして、全部で15箱ありましたから、4500本でしょうか」

「4500本…、それを、ひと月で？」

「いえ、二週間です。二週間ごとに納品がありますので」

「…、二週間ってことは14日ってことで、休みなしでやり続けてだいたい一日に300本か。一日に六時間くらい造るとして、一時間50本。一本に、一分ちよいってこと、ですよね……？」

「計算すると、そういうことになりますね。他の方と比較したことがないので、私の作業速度が速いのかどうかは分かりませんが」

「いやあ、早いんじゃないですかね……？」

「造花の内職は長らくやっていますからね、慣れたのでしよう。今では機械のように動くことができます」

「…、あつ、そういうえばたまに広太が手伝わせてもらってるみたいですね、役に立ってますか？」

「ええ、庄司くんはとても物覚えが良く、それに器用に何でも人並み以上にこなしますね。私の半分ほどの速度ですが、とてもがんばってくださいっています」

「そうですか、それならよかった。歌子さんの手際がそんなにいいのなら、もしかしてかえって邪魔になってるんじゃないかと思いましたが」

「そのようなことはありません。人手はいくらあっても、もちろんやる気と向上心を持っていることは前提ですが、無駄ということはありませんからね。その点、庄司くんは非常に有能な人手と言えるでしょう」

「でも、すごいですよね、そんなにいっぱい造花を造れるなんて。俺なんか、どれだけやってもそんなには出来ない気がしますよ」

「やらなくては、生きていけないのです。私は無学な女です。かといって力もなく、体力もない。好きになった男性と駆け落ち同然に家を飛び出してしまい、それから狭い借家での生活を守ることだけを考えずとその人に頼って生きてきました。しかし、未来が生まれてすぐにその人は事故にあって殺されて…、いえ、死んでしまいました。それからもう、私がしっかりしなくては生きていけなかったのですよ。あの人ががんばって築いてくれた貯金を少しずつ切り崩しながら、なんとか私でもすることができるとお金の稼ぎ方を探して、なんとか見つけることが出来たのがいろいろな単純作業系の内職だったんです。ただそれだけです。それなりに出来るようになったのは、どうしてもそうならなくてはならない必要があったか

らです。最初は小さな赤ん坊だった未来も、しかしいつまでもそのままといいわけではありません。当然、必要なお金の額もどんどん増えていきます。未来には片親ということで不自由な思いをさせたくはありませんでしたからお金が、私にはどうしてもお金が必要だったんです。ほら、何もすごいことはないでしょう？ それとも、守銭奴のようど軽蔑したでしょうか？」

「…、そんなことはありません。歌子さんは、俺なんかが言うのはおこがましいですけど、すごい大変な人生を歩んでるってことじゃないですか。尊敬はしますけど、軽蔑はしません」

「社交辞令とはいえそう言ってくださると、少し心が軽くなりますよ、ありがとうございます。さあ、私の話などはもういいですから、手伝ってくださいったお礼です、お茶にしましょう。未来、手を洗ってください」

「はーい、分かったです。三木のおにいちゃん、洗面所はこっちですよ」

「うん、よし！ 手、洗っちゃおっか！」

「はい、そうするです！ おにいちゃんの買ってきてくれたおかし、楽しみですよ！」

「うん、買うときにちょっと味見させてもらったけど、美味しかったよ。楽しみにしててね」

「おいしいおかしを買ってきてくれるなんて、やっぱり三木のおにいちゃんはやさしいです。未来、やさしい人は大好きです！」

「そう言ってもらえてうれしいよ。買ってきた甲斐があったかな」

「未来もおかあさんも、すごいうれしいです！」

「そんなに喜んでもらえたら、俺もすごいうれしいな」

「それじゃあ、三木のおにいちゃんのおかげでみんなすっごくうれしくなれたんですね！」

「だったら、そのことこそうれしい、かな」

いま歌子さんがしてくれた昔の話は、きっと俺が深く触れるべきではないことなのだろう。長く生きるってことは、たぶん人に触れら

れたくない話を抱え込むことと同じことだと思うから。現に俺だつて、あまり人に深く触れてほしくないことは少なからずある。

自分がされて嫌なことは、当然人にもするべきではない。だから俺は、歌子さんの昔の話に、本人があえてもつと深く話してくれるのなら別かもしれないけど、触れていこうとはあまり思わない。

俺は、歌子さんと未来ちゃんがそんなことを忘れていられるように、せめてこの瞬間だけでも楽しく過ごしてもらえるように考えを巡らせることくらいしか、出来ることがない。いや、むしろ、そういうことこそやっていくべき、なのかもしれないのだが。

「さあ、手を洗っちゃおうか」

「はいです！」

他人に対して俺がすることの出来ることは、当然だが、非常に限られている。それならば、出来ることが何らかあるのなら、俺はそれをしていきたい。何もしないでいるよりは、何かをしたい貧乏性だからな。

## ゴールデンウィークの過ごし方 五島親子の場合？

「おまんじゅう、おいしいです、おにいちゃん」

「そっかあ、それはよかった」

「お茶のおかわりはいかがですか、三木さん」

「あっ、ありがとうございます、いただきます」

大量の段ボールを運搬するお手伝いをしたことによって五島さん家にお招きいただいた俺は、旅行のお土産で買ってきた温泉まんじゅうをはむはむとつまみながら歌子さんのいれてくれた緑茶をずずつとすすっているのだった。ちょうど俺の向かいに座っている歌子さんは、甘いものがそんなに好きではないのか、あるいは娘である未来ちゃんにいっぱい食べさせてあげるために遠慮しているのかは分からないが、食品庫の中から出してきた堅焼きせんべいをバリバリとかじりつつ緑茶をお上品に喉に流している。そして俺の隣に座っている未来ちゃんは、ニコニコの満面笑顔でまんじゅうを両手持ちして、口の端にあんこを少しつけてしまうくらいの勢いでもぐもぐとほおばっている。そして合わせている飲み物は猫舌だからか、あるいは単に好きだからか、緑茶ではなく牛乳である。

たかがまんじゅうでここまで喜んでもらえるなんて、まったく買ってきた甲斐があるというものではないか。というかむしろ、こんなに喜んでもらえるとは思っていなかった。ああ、こんなに喜んでくれるんならもう三箱くらい買ってきてもよかったかもしれないなあ。：、いや、そんなに買ってきてプレゼントすると、逆に歌子さんが困るか。

お土産というのは難しいもので、安すぎてもよくないし、高すぎてもよくない。また少なすぎてもよくないし、多すぎてもよくない。あんまり安っちいものだったり少なかったりすると、もらった方が「あれ……？」と微妙にむなしい気分になるだけではなく、あげた方もむしろ申し訳ないというか後悔というか、非常に微妙な気分になる。

なってしまう。逆にあんまり高いものだったり量が多かったりすると、もらった方が「ええ……？」と微妙に申し訳ない気分になるだけではなく、あげた方も喜んでもらおうと思っていたことは確かなのだが、申し訳ない気分になんてしてしまったことを感じて逆に申し訳ないというか後悔というか、非常に微妙な気分になってしまう。

つまりお土産を買うっていうのは、相手の好みとかをいろいろと見極めつつ、適切な量・価格・内容物を選定するという総合格闘技的なお買いものと言っているだろう。なんというか、俺は贈り物をして相手を微妙な気分になんてさせるなんて生理的に耐えられないので、実はお土産を買うことに関してはマジなのだ。買ってきたお土産はみんな同じ温泉まんじゅうなのだが、しかしそれもいろいろと悩んだ結果としてそこにたどり着いたのであり、様々な思想的転換を果たした先の最終的結論が、温泉まんじゅう四箱でファイナルアンサーだったというわけなのである。

決して適当にそこらへんに置いてある温泉まんじゅうをめんどくさいから四箱まとめ買いたというわけではないので、そこらへんのところを誤解しないでいただきたい。俺は全力で考えて、全力で結論を引っ張り出したところそこにたどり着いたというだけなのだから。

「そういえば歌子さんは、ゴールデンウィークにお出かけしたりはしないですか？　旅行に行ったり、テーマパークに遊びに行ったりとか？」

「そうですね…、今のところ、そういう予定は立てていません。私は遊び方や羽目の外し方といったものを、あまり知りませんので、こういうときにこういう風にして遊んだものか、よく分からないのですよ」

「えー、でも子どものときにいろいろお出かけしたんじゃないんですか？　そのまねをしていればいいと思うんですけど。いや、俺は親がそういうの好きじゃなかったから、あんまり旅行に行くとかしなかったんですけど、でも普通は家族旅行とかで思い出をいろいろ

ろつくるものなんじゃないですか？」

「残念ながら、私もそうだったんですよ。両親とも家にこもりがちで、あまり遠出をして遊んだりすることはなかったんです。その分、家の中であるような遊びは得意になりましたがね」

「そうだったんですか…、でも、どういう風に遊んだらいいかわからないっていうんなら、そういうガイドブックみたいなのを一冊買ってみたらいいんじゃないですか？ 旅行雑誌とか、観光地の紹介本とか、探してみたらいろいろあると思いますよ」

「そうなのですか？ それは知りませんでした」

「たぶん、本屋とかに行ったらそういう本のコーナーみたいなものがあるんじゃないですか？ 俺はあんまり見ないんでわからないんですけど」

「それでは、今度見に行ってみることにします。助言いただき、ありがとうございます、三木さん。たまの長い休みには未来をどこかに連れて行ってやりたいと常々思っていたのですが、どうしたらいいかわからないので困っていたんです。ですが、これでどうしたらいいかは、少なくとも分かりました。さっそく動いてみることにします。ゴールデンウィークもまだ半分残っていますし、何かしらすることができるといいですね」

「よかったね、未来ちゃん。おかあさんとどこかに遊びにいけるかもしれないよ」

「ほえ？ おかあさん、どこかに遊びに行くですか？ おにいやんと難しいおはなしをしてると思って、未来、おはなし聞いてなかったですけど？」

「せっかくお休みだから、未来ちゃんとどこかに行きたいな、って歌子さんがね。長い休みじゃないと、なかなか遊びに行く予定なんて立てられないもんね、せっかくだから遊びに行くのもいいかなって」

「そうなんですか？ おかあさん？」

「ええ、今までは遠くに遊びに行くという事は出来ずにいました」



からね。しかし、やはり遠くに遊びに行くのも、たまにはいいのではないかと思えますから。未来は、急に言われても困るかもしれないが、どこかに遊びに行くならば、どこで何をしてみたいですか？」

「ディズニールランド！」

「でずにーらんど？ 私はよく知らないのですが、未来、それはどのようなところですか？」

「とっても楽しいところです！ とっても楽しいところだって、おともだちが言っていました！」

「…、夢の国です、歌子さん」

「夢の国？ それはどういう意味ですか？ 眠ると行くことができます、想像上の場所ということでしょうか？」

「遊園地ですよ、大きな遊園地。大きなアトラクションがたくさんあって、人がたくさんいて、老若男女を問わず人気があるという、あの世界で一番有名な遊園地の日本支社みたいな、アレです」

「ほお…、そのようなものがあるのですか？ 私は見たことも聞いたことも行ったこともないのでよく分からないのですが、未来、それは楽しいのですか？」

「はい、そうみたいです」

「行ってみたいのですか？」

「はい、行ってみたいです」

「行くことができましたら、うれしいですか？」

「はい、幸せだと思います」

「ゴールデンウィークのいい思い出に、なりますか？」

「はい、なります！ おともだちに、おかあさんとディズニールランドに行ったよ、ってじまんします！」

「そうですね、それはいいですね。いつもは聞くばかりでしょうが、今回ばかりは堂々と言ってやりなさい。未来、明日、いえ、明後日、そのでずにーらんどとやらに行きましよう」

「ほんとですか！？ ほんとにディズニールランド、行くですか！？」

「本当です、母に二言はありません。行くと云ったら行くのです。明日一日かけて、それがどのような場所なのかを調べましょう。まあ、未来が楽しいというのですから、おそらく楽しい場所なのでしょうが、しかし敵を知り己を知れば百戦危うからずといえます。下調べを入念に行なうことは、少なくとも無駄にはなりません」

「おにいちゃん、デイズニーランドです！」

「そうみたいだね。明後日、楽しみにしてない」と

「はい、すごい楽しみです！」

「三木さんは、残りの休みはなにをして過ごされるのですか？　よろしければ明後日、私たちがその、ですにーらんどというものに出掛ける際、案内などしてもらえると助かるのですが。なにぶん出掛けるということそのものに慣れていないもので、お助けいただけると大変助かるのです」

「案内ですか？　いや、でも、ぶっちゃけた話、俺もデイズニーランドは行ったことないんで、どんなふうに遊ぶのがいいとか、どういうことをするのがお勧めとか、あんまり案内的なことはできないですよ……。すいません、俺がデイズニーランドの達人みたいなやつだったらよかったんですけど……」

「そうでしたか…、いえ、謝る必要などありませんよ。このお願い自体が、そもそも三木さんのことを省みない自分勝手なものでしたので。それに、三木さんは私たちの相手などしている場合ではないでしょうし、無理なことを言ってしまいましたね」

「いえそんな、これ以降のゴールデンウィークの予定なんてあつてないようなものですから、お出かけに誘ってもらえたのはすごいうれしいですよ。でも、せっかくの家族水入らずのお出かけに、別に案内も出来ないやつがついて行ってもお邪魔でしょうし、悪いです」

「それこそ、お気になさらず。私は、このアパートの皆さんを一つの家族のようなものだと思いますので、邪魔などということは思いません。未来だって、おにいちゃんがいっしょに来てくだされ

「喜びますよ」

「？ おにちゃんもディズニールランド、いつしよに来るですか？」

「いえ、三木さんは今のところ、いらっしやいません。今のところは私と未来の二人で遊びに行く予定です」

「そうですか、残念です」

「そういうことです、三木さん、明後日までに行くことができますということになりましたらお伝えください。ご一緒してくださいならば、私たちとしては歓迎です。三木さんだけでなく、庄司さんと、あの方も」

「…、あの方？ あの方って、誰です？」

「さあ、私もよくは存じ上げません」

「？ 知らないんですか？」

「はい、三時間ほど前に庄司さんといっしょに三木さんのお部屋に入っていくのを、ちらりと見ただけです。詳しいことはなにも後ろ姿でしたので、髪のとて長い、おそらくは女性だったかと」

「…、え？ あの方…？」

歌子さんが言っているあの方というのは、いったい誰のことだろうか。俺の留守中に俺の部屋に入っていたことは、少なくとも俺の知り合いに違いないだろう。しかも広太といっしょに入っていたということは、広太も知っている人ということだ。となると、それはかなり限られた人間ということになるのではないだろうか。

広太は基本的に、俺の留守中に部屋に誰かをあげることがはしない。それをするのは、その人を俺が招待していることをあらかじめ知っているときか、その人のことを俺もよく知っていて帰って来たときに俺が動揺しないことが明らかなきか、あるいは庄司の家の人間がやってきたときかのいずれかだけだ。ということは、今誰かが部屋にいて、それは俺がよく知っている人か、あるいは庄司の家族の誰かということになるだろう。もちろん、俺が誰かを招待しているということはないのだから、そういうことになるしかない。

となると、それは誰なのだろうか。広太が躊躇なく家に招き入れるような深い仲で、しかもとても髪の毛の長い知り合いといえば、正直、霧子くらいしか思いつかない。しかし霧子は、三時間前といえば電車の中で安らかな寝息をにゅうにゅうともらしていたところであって、こんなところで広太に招き入れられることはできない。となると、髪の毛の長さが足りないかもしれないが、晴子さん？　しかし晴子さんが何をしにくるというのだ。あの人は、わざわざ弟子の家に訪ねてくるような人じゃない。それがほんの徒歩二分にも満たない距離であつても、俺の家まで歩いて来るくらいなら、大したことのない用事であつても電話で呼び出す人なのだ。そんな人がわざわざ俺の留守が明らかな今、やってくるはずがない。

だとすると、庄司の家の方だろうか。でも、お婆さんはかなりショートカットにしちゃってるから、どう間違つても髪が長いといわれることはありえない。もしかして、可能性は低いけど、美佳ちゃん？　美佳ちゃんが、三年に及ぶメイド修行から帰ってきたのだろうか？　まあ、これはそんなにありえないことではない。修行中にまったく連絡させてもらえなかったんだ、帰ってくる時も連絡なし、という可能性は十分に考えられる。外見的特徴については、俺は彼女の姿を三年間――しかも成長期まった中の三年間である――も見えていないのだ。俺の中の彼女の像と多少食い違ふところがあつたとしても、そこまで不思議なことではあるまい。

ふむ、どうも、美佳ちゃんがサプライズ帰宅をキメた、というのが説としてもっとも有力な気がしていた。なるほど、ということは今、部屋には広太だけじゃなくて美佳ちゃんもいるのか。そうかそうか、懐かしいな、久しぶりに会うけど、元気にしてたかな。三年も見なかったわけだし、もうすっかり大きくなったのかなあ……。

まあ、ということは掃除も二人がかりなわけだし、もうすっかり終わってるかもしれないな。でもとにかく、こうしてお土産を渡してアパートをめぐるんだ、最後の一部屋をきっちりまわってから部屋に戻るとしよう。やり始めたことを最後までやるのは大事なこ

とだからな。

「三木さん？」

「あっ、いえ、何でもないです。それじゃあ、お茶もいただいて一服させてもらったんで、俺は弥生さんのところに行ってから帰ります。どうも、長居しちゃってすいませんでした」

「いえ、そのようなこと、お気になさらず。またどうぞ、いらしてください」

「ええ、また、期を見て来させてもらいます。未来ちゃん、またね」

「はいです、おにいちちゃん。またです」

「それじゃあ、いい休みを」

「ええ、三木さんも、残りの休みをどうぞ楽しまれてくださいね」  
まあ、こうして俺が知ってしまった以上、美佳ちゃんのサプライズ帰宅ももはやサプライズではない。美佳ちゃんには悪いが、逆ドッキリを仕掛けるくらいの勢いで帰ることにしようじゃないか。でもその前に弥生さんだ。弥生さんにお土産を渡して、今行なっているこのミッションを完遂させなくては。

## ゴールデンウィークの過ごし方 坂下弥生の場合？

明後日、急に行くことになったテーマパークへのお出かけに心躍らせている未来ちゃん、そのうれしそうな姿を見ることが自体がうれしそうな歌子さんに別れを告げて部屋を出た後、俺はまたお土産一箱分だけ軽くなったキャリーケースを持ち上げて少し錆びた階段を上っていく。しかし、俺が向かっているのは真ん中の扉である我が家ではない。その一つ手前の扉、つまり階段にいちばん近い扉である弥生さんに部屋である。

万年是長期休暇みたいな締まりのない自堕落な生活を送っている弥生さんのことだ、今日も特に何をするでもなく、起きてはいるけど目覚めていない感じに部屋でぼおっとしていることだろう。つまりいつもと何も変わらない生活を送っているはずなのだから、旅行に行っちゃってるかもしれないとか心配することも、男連れ込んでいるかもしれないとか心配することも、俺のいない二泊三日のうちに変死体が変わってしまったているとか心配することもないのである。どうせ今日も限りなく昼に近い朝と昼の狭間で目を覚まし、晩酌で重くなってしまった頭を覚ますために迎え酒を流し込み、朝食とも昼食ともおやつとも判断できない中途半端な食事をして、そして酒を飲んでいるに違いないのだ。しかし、こうして言うてしまうと本当にダメな人にしか思えない。というかむしろ、ダメというか、ゴミか。

だが、本当にどうしようもない人だなあ、と思いつながらも心の片隅で少なからず心配してしまう俺がいるのも事実。なんというか、放っておけないんだらうな。今までもこうして生きてきて現にこうして生きているんだからそんなことは全然ないんだらうけど、でも、俺がいなくなったら死にそうな人は放っておけないんだよなあ……。なんというか、得な人だ。

「弥生さくん？ いるんでしょう？ いないんですか？」

どうせ部屋の中にいるに決まっていると決めつけて、俺は弥生さんの部屋の扉をドンドンと数度叩く。というかむしろ、部屋の中に弥生さんがいないとしたらどういう要因によってその状況が発生しているのか教えてほしいくらいだ。そもそもからして、弥生さんは長期休暇だから出掛けようかしら、なんてことを考える思考回路を持ち合わせてはいない。むしろ、長期休暇が訪れたならばその間はずっと部屋から出ずに飲み明かしてくれよう、とかいう方向に思考を結び付けるような残念なありさまなのだから。

しかし、俺はそんなことはないと思い込んでいたのだが、俺からの問いかけに対する返事は全くない。ふむ、部屋の中にいるのは間違いないとして、どうして応対に出てこないというのだろうか。なんだろう、もしかして都さんのときと同じで、何もしないをしているばかりに応対に時間がかかっているのだろうか？　というかここは、むしろ酔っ払って眠っているといった方がリアリティがあるだろうか？

「…、まあ、どうせ開いてるだろ」

都さんのときの二の轍は踏まない。ダメ人間たちの居城に訪れたとき、ほんの一欠片であっても遠慮をしてはいけないのだ。どうせ弥生さんは部屋の中で不用心に、ドアのかぎを開けっぱなしにしてぐーたらしてるに違いないのだ。それならば、どうして扉を開くことに、一抹であっても躊躇を感じる必要があるだろうか。

だいいち、そもそも俺はもう既にきちんと――まあ、作法に則っているお上品なそれであるかは別にしてだ――ノックもしてるし、開けてしまったとしても理論上は問題ないはずなのだ。いや、確かにノックをした後は中からの返事を待って扉を開くというのがお定まりというものかもしれないが、しかしそんなものを待っていたら、この人の場合は半永久的に扉を開くことができなくなってしまうに違いないのだ。

というか、弥生さんが自分で「俺がこっちの部屋に来るときはノックもチャイムもいらない」と言っていた（第59話参照）ではない

か。俺は、こうして礼儀正しくノックをして声までかけているのだから、既にそのなすべき儀礼の全てを行なったといっても過言ではないのである。故に、俺にあと残されているのは扉を開くという行程のみであり、これ以上なにをする必要もないと言ってしまったても、決して間違いではない。

「ほら見ろ、どうせ開いてると思ったぜ」

家主が自主的に出て来てくれないからには、受身であることを宿命づけられた来客サイドはもう何をどうすることもできないわけで、それならばもういっそ、ここは勇気を出して常識破りの攻めに転ずるが吉。女性の邸宅に家主の赦しを得ることなく踏み込むというのは、多少、というワードでオブラートに包むには厳しすぎる、ぶっちゃけあり得ない行為である。しかしだからといって、弥生さんが応対に出てくるのを律儀に待ち続けていたら、俺は日が暮れるまでこの扉の前で立ち尽くすことになるであろうことは目に見えている。それはさすがにいやだ！　ということで仕方あるまい。俺はノブを捻っただけで簡単に開いてしまった、防犯性とか危機意識とかの観点から普通に考えて行なわれているであろう施錠という防御が、どういうわけか為されていない目の前の扉をぐり抜ける。それはノーガード戦法をモットウとしている、というかむしろ泥棒でも不審者でも片っ端からかかってこい！　と公言しているかのような感じであろうか。そして、ほぼ間をおかずに扉の外に二歩後ずさった。…、一歩進んで二歩下がってしまった。これでは累計で一歩退いてしまっているではないか。いかにぞ、俺、そういう逃げ腰の弱腰ではないけないぞ、まったく。

「…、ちよつと、深呼吸する時間をくれ……」

誰に言うでもなくぼんやりと懇願してしまった俺は、その言葉の通り、とりあえず吸って吐いての深呼吸を行なった。まあ、待て。ほんの少し落ち着いてからでも遅くはない。

ついさっき、具体的には鉤括弧一つと句点三つ前、一歩後ずさってしまったことに対して逃げ腰はいかんと言っただけなのだが、し



かしそれについて少し言い訳をさせてくれ。そういう、なんというか、俺の中の理想像みたいなものについて言及したのを理想俺とすると、現実を生きる現実俺であるこの「俺」から、言い訳をしたい。させてほしい。…、させてください。

まずは、この扉の先に広がる世界を見ていただきたい。荒れている。いや、乱れている。…、荒らされている？

どれがもっとも正しい表現なのか俺には分からないが、しかしだ、どの言葉が一番正しいとしても共通して言うことができるのは、部屋の中が非常に雑多な感じになってしまっているということである。少なくとも、人間が社会的かつ文化的な生活を営むにじゅうぶんでない様相の空間が、俺の目の前には展開されているのである。

「一週間くらい前は、こんなに汚くなかったはずんだけどなあ…」

一言で言うならば、汚い。よく分からん分厚い本やらく分からん段ボール箱やらが床に散乱していて、非常に雑多な印象を受ける。そして、うちの部屋と同じ間取りのはずなのに、物の詰め込み過ぎとそれ自体の量の多さが原因だろうが、どうしてか狭く感じてしまう。

そして臭い。非常に独特の、弥生さんの匂いと言っても言うしかない匂いが、扉が開かれたことによって流れ出てきたのである。まるで俺の入室を拒んでいるかのようにではないか。

「そんなバカな…、なんで一週間でこんなことになるっていうんだ…」

というか、一週間前にドアが開いているのをチラ見した限り、さすがにここまで乱れてはいなかったと思うのだが、たった一週間のうちにいったい何があったというのだろうか。いや、そもそも、どうやったらこんな、あたかも嵐が通り過ぎたかのような有様をつくりだすことができるのだろうか。

「や、弥生さくん……？」

考えうる最悪の事態としては、実は弥生さんがこの雪崩を起こし

てしまっているたぐさんの荷物の下敷きになっていて、息も絶え絶えで半死半生の状態に追い込まれているとかがあるだろうが、まあ、そんなことは流石にないだろう。どうせ奥のリビングに布団を敷いて、寝ているのか酒を飲んでいるのか分からない、正体不明な感じになっているに違いないのだ。

となると、俺はまずそんなあり様の弥生さんを起こさないといけないのだろうか。うゝむ、ぶっちゃけ、それはさすがに面倒だなあ……。正体不明になっててもいいから、せめて起きてくれると助かるんだけど、これだけ静かってことはそれもあんまり期待できないんだよな。

「起きてますか、弥生さん？」

とりあえず、こんなところで立ち止まっただけではなにも進まないわけで、仕方あるまい、ここは勇気を出して一步を踏み出さなくてはならないだろう。実際のところ、こんなところに入っていくのはあんまり気が進まないのだが、しかしこんなところが弥生さんの住まないわけであり、行かないことには温泉まんじゅうを渡せないではないか。お土産っていうのは、その場に相手がいなかったり入って行きたくない部屋だったとしても、郵便ポストに突っ込んで終わりにしてしまうわけにはいかないものである。

なんというか、お土産のグッズそのものだけでなくそれ付随するおしやべりまで含めて、全部まとめてお土産なのではないだろうか、と俺は思っている。いや、確かに、さっきまで廻ってきた二軒ではそういう土産話的なことはあまりしなかったけど、でもそう思っているのだ。

「弥生さ……、おう……」

そして、足の踏み場もない玄関から伸びた廊下を、出来るだけ散らかっている荷物たちを踏まないように気をつけながら進んでいくと、なんとかたどりで着いたリビングにそれはいた。……、その人は、いた。「ったく……、なんて格好で寝てるんだ……、この人……」

リビングルームには、一組の布団が敷かれていた。それは、適當す

ぎる扱いによって薄くなってしまった敷き布団と、これまた適当すぎる扱いによって軽く綿がへたってしまった掛け布団のセットであり、少なくとも快適な睡眠が約束されるものではないように思われた。

そして空気が淀んでいる。おそらくずっと換気が行なわれていないのだろう、埃っぽいうえに酒の匂いがこもっている。これは、扉を開いた瞬間に感じた不快な空気を三倍くらいに濃縮した感じのもので、そんなことでそれから逃れることができないのは分かっていたのだが、俺は思わず顔を反らしてしまった。

「…、起きる前に逃げるか、うん」

だが、俺にとっての最大の問題は、しかしながらそんな部屋のあまりにあんまりな惨憺たる惨状ではなく、そこでまるで泥のように眠っている弥生さん本人だったのである。いや、弥生さん本人というか、弥生さんのしている格好というか、寝姿というか、…、全部である。

とりあえず、まずは格好。弥生さんは寝るときにわざわざ寝巻に着替えるような律儀な人ではなく、とりあえずその身を拘束しているものを脱ぎ捨てて自由になってしまいう人なのだ。しかも、自由になった後にシャネルの七番をまとうようなこともなく、極限の優雅とエロチシズムが融合を果たした最終進化形を体現している、というわけでもけっしてない。

つまり、分かりやすく言うところの人は野蛮人なので寝るときに服を脱ぎ捨てるのである。確かに、自分の部屋で一人で眠っていることに違いはないんだから、そこで弥生さんがどんな格好をしているようと俺が口をはさむべきところではないのかもしれないが、慎重深さという言葉だけは知っていた方がいいのではないかと思う。

しかも悪いことに今は、いつもだったら最後の良心として下着だけは身につけているのだが、それが無い。正真正銘の意味で全裸である。しかもこちらにむかって脚を開いている。あまり言葉にしたいののだが丸見えであり、女性として最も取るべきでない格好の一

つを俺の目の前に晒しているということが出来るだろう。思わず顔を反らしたのは、臭いよりもむしろこちらの方が原因として大きいのもかもしれない。

「俺はなにも見てない、見てないぞ」

弥生さんとしては俺がこうして入ってくるなんて想定していなかったのかもしれないけど、でもまさか、俺だって弥生さんが全裸で、しかもこんなあられもない格好で眠っているなんて思わなかったのだ。俺が悪いのか弥生さんが悪いのか、なんてことを言いたくはないが、しかし少なくとも、俺が他意を持ってこの状況に臨んだわけではないということ、ここで明確に言っておきたい。

言うておくが、ここで俺に出来ることはなにもない。都さんのところでも歌子さんのところでも、俺に出来ることがあったからやってみたさ。料理をつくることは出来た、荷物を運ぶこともできた。でもここで、全裸で眠っている弥生さんに対して俺ができることはなにもない。いや、下着を着ていてくれたらば布団をかけ直すくらいはしてあげられるかもしれないけど、でも今は全裸だ。もうこれ以上は顔を向けることも、近寄ることすら出来ない。

というわけで、俺は逃げ出した。

「お邪魔しました……」

「んあっ!? ゆきっ!?」

「なんで起きたの!?!」

しかし、回り込まれてしまった。

## ゴールデンウィークの過ごし方 坂下弥生の場合？

「つまりね、おねえさんは二日間もゆきがいなくてさみしかったということなんだよ、分かるかい？」

酔い覚ましのため、水道水に氷を浮かべただけの冷水を弥生さんに何杯も飲ませている最中、ふと思いついたかのように弥生さんはそう呟いた。

「はあ、そうでしたか。そんなこといわれても、俺にはどうしようもないんですけど」

俺が二日間旅行に出掛けてしまっていたから寂しかったんだぞ、などと言われても、確かに少なからずうれしいと思うことはあるかもしれないが、だからといっていったい俺にどうしろというのだ。俺は俺個人として思うままに生きていこうと志向しているわけであり、そりゃ、気が向いたら旅行にだって行くさ。それだというのに、そんな「勝手にされたら困るぞ」みたいな目を向けられても対処のしようがないというものではないか。

「というか、別に俺がいなくなっただっていつでも、それは二泊三日の旅行が終わったら帰ってくるって分かったことなんですから、深刻に考えるほどのことでもないじゃないですか。ただ二日、その間だけ俺がいなくていいだけのことなんですから」

とりあえず、どういうわけか人間としての尊厳を放棄して全裸で睡眠していた弥生さんには、今一度衣服をまもっていた方がいいのである。今はきちんと下着を身につけ——とはいってもノーブラなのだが——、黒のハーフパンツにノースリーブシャツという極めて軽装ながら、少なくともその獣性を和らげることに成功したのではないか、と思っている。

まあ、やおら目を覚ましましたと思ったらそのまま、生まれた姿のまま俺の脚にすがりついてベーベー泣きだしてしまった弥生さんに服を着せるのは並大抵の労苦ではなかったのだが、しかしそれはまた

こことは関係のない別のお話である。

「とりあえず、俺がいない二日間で極めて自堕落な生活を送っていたのは分かりますから、今この瞬間にそのサイクルから脱してください。まずは、そうですね、部屋の換気から始めましょうか。あとその布団、まだ太陽が出てますし、少しの間だけでも陽に当てておいたほうがいいですね。あつ、干す前にシーツはがしてください、洗たくしちやいますから」

「やっぱりおねえさんは、ゆきがいてくれた方がうれしいな。だって、こうやっておねえさんのお世話を焼いてくれるからねえ」

「は？　なに言ってるんですか、全部自分でやるんですよ。ほら、さっさと立ち上がってください、まずは全部の部屋の窓を開けてきてください。その間に俺は部屋の中に散らかってるいろんなゴミをまとめておきますから。それからシーツをはがして布団を干してください。台所の洗いものは俺がしておきますから。最後にたまっている洗たく物を、シーツも含めて洗たく機に入れて回しちやってください」

「洗たく物はとくにないよ」

「ああ、洗たくだけはちゃんとしてたんですか？」

「いや、この二日はずっと裸だったから、洗たくするべき服を着てないのだ」

「…、服は着てくださいね」

人外め…、と心中で吐き捨てるように毒づきながら、しかし俺はにこやかな笑顔を張りつけたままでなんとか穏やかを装ってそう言った。風邪をひいてこじらせて肺炎になって死ね！　と思ったが、しかし当然そんなことを口に出したりはしないわけで、そうやって適度に本心を隠していくのが正しい人付き合いの形なんだろう、と俺はしみじみ思ったのだった。

「まあ、見られて恥ずかしい、締まりのない身体をしているつもりはないから、別に構わないんだけどねえ」

「いや、そういう話をしてるんじゃないですよ？」

「えゝ？　でもおねえさん、おっぱいもおっきいし形いいし、ウェストもけっこうくびれてるし、脚もスツとしてるし、情けない身体はしてないよ？」

「知りませんよ、そんなこと」

「ゆきだって、おねえさんに迫られたらグツとくるでしょ？　下半身の一部分が、こう、ね？　若さ的なものが、せり上がってくるよね？」

「…、きません」

「ほんとにゝ？　おねえさんがこうして、おっぱいを強調するようなポーズをしても？　左右から上腕に押されたおっぱいが、せめぎあって隆起するように谷間をつくっていても、ぜんぜん？」

「…、ぜんぜん、ですね」

「触ってもいいよ？　顔をうずめたいなら、してもいいよ？　谷間に手を差し入れたいとか、マニアックな要求にも応えてあげるけど？　あつ、もちろん、手じゃなくてゆきの大事な村雨蘭丸でもいいんだけどね？」

「…、全体的に、謹んで辞退させていただきます」

「知っているかい、ゆき。本来ならば赤ん坊への授乳を為すための器官でしかないおっぱいは、女性の性感帯の一つなんだから、それを刺激することによって女性が自らの性欲を解放するために用いるっていうのは普通のことだと思うけど、でもそれを、逆転の発想で男性の発散のために用いようと考えたのは、長い人類の歴史上でも、比較的最近のことなんだっていう説があつてね。考えてみれば単純なことではないのかもしれないし、今となつてはそんなの別に特別なことっていうほどでもないのかもしれないけど、でも当時はきつと驚異的な発想だったに違いないよ、それはあたかも卵を立てて見せたコロンブスのような、あるいは天動説から地動説への転換を果たしたコペルニクスのような、大転回だったに違いないんだ。そもそもこの、おっぱいの間に男性のソレをナニするという単純極まりない構図を発明したのはルイ15世の愛人であるポンパドゥール

夫人であると言われているんだよね。彼女が生きたのは1700年代なんだから、つまりそれが発明されたのはたったの300年ちょっと前ってことになるんだよ。通常の性行為が人類誕生の時点から行なわれていたとすると、それはとても新しい技術なんだ」

「それ、聞かないといけない話ですか？」

「いや、別に。それにしてもさ、ノースリーブのシャツって女の子が着るとやたらにえっちいと思わないかい？ ほら、横からは横乳が揺れてるのが楽しめるし、も前からギョツと押し込められたおっぱいに見えるか見えないかの先っぽと強調された谷間が楽しめし、おっぱいに押し上げられておへそがちらっと見える感じまで楽しめるよね？」

「普通に考えてそうだね？ みたいな問いかけは止めてくださいよ。返答しにくいじゃないですか、いろんな意味で」

「ちなみに、このハーフパンツの下はなにもはいてません」

「バカなっ！？ さっきはいてたじゃないですか！！ 横目でちらっとですけど、はいてるところは見ましたからね！！」

「えー、見たのー？ ゆきのえっちー」

「エッチは弥生さんの方ですよ！ 存在がエッチじゃないですか！」

「否定はしないよ。でも、はいてるかはいてないか、それは現状のゆきでは確かめようがないよ。それこそ、おねえさんを押し倒してこれを脱がせる以外に術はないもの。さあ、ゆき、おねえさんでエッチな妄想をして、むらむらっとくるがいいよ！ 別にこれくらいの妄想、男の子なら当然のことだし、気にしないでいいよ！！ おねえさんは、ゆきの妄想の中で強姦凌辱されようと、性奴隷にされようと、あんまり気にしないからね！！」

「そ、そんなことしませんよ！ ほ、ほら、さっさと部屋を片づけちゃいますよ！」

「…、ゆき、つまんなあゝいの」

「っ、つまなくて、おおいにけっこう！ 弥生さんなんて、ただの酔っ払いなんですから、意識することなんて絶対ありません！」



「もう、強がっちゃって、かゝわいいんだから。別に、おねえさんがいいって言ってるんだから、ラッキーって思っておっぱい触るくらいしちやえばいいのに。据え膳食わぬはなんとやら、っついうんだしさ」

「そういう、無責任なことは出来ない性分なんです」

「むゝゝ、じゃあ今度襲っちゃうから、いいもゝんだ」

「勘弁してくださいよ、そういうのは。広太が黙ってませんし、ほんとに実行されたらさすがに俺だって抗いますからね」

「もゝ、ゆきったら貞操観念ガチガチに堅いんだから、おねえさんつまんなゝい」

「誰かとそういう爛れた関係になりたいんなら、俺はその相手としては不向きですよ。頭の堅い、堅物ですからね」

「ま、ゆきのそういうところも、かわいっていえばかわいいんだけどね。んゝゝ、ほんじゃ、いつまでもゆきをかわいがってても話が進まないから、お片付け始めちゃおうかなあ」

「そうしてください。そうしてくれた方が俺も楽です」

「窓開けて、お布団干して」

「ちゃんと片づけできたらお土産あげますからね」

「やった、やっぱゆきはおみやげ買ってくれたんだね。ありがとう、ゆき」

「ついでですよ、みんなに買ってくるついで」

「ウソだ、ついでなんかじゃないよね。みんなにちゃんと買ってきてくれたんだよね」

「そんなわけないじゃないですか、ついでです」

「んふふ、ま、なんでもいいけど。んじゃ、せっかくゆきがついでに買ってきてくれたおみやげもほしいし、お片付けしようっかな」

そして弥生さんは、よっこらしよと立ち上がると家中の窓――まあ、二つか三つかしかないのだが――を開くためによく動き出してくれたのだった。さて、それじゃあ俺も出来る範囲の片づけを手伝

うとするか。

「しかし…、どうしてたったの二日でこれだけ汚すことができるんだ。いや、まあ、ゴミの大半が酒の缶だから片づけ自体は楽なんだけど、でも、こんなに酒ばっかり飲んでたら、誰かとの人間関係の前に胃粘膜が爛れるぞ……。弥生さん、酒ばっかり飲んでると消化器系が死にますよ」

「え…？ おねえさんの胃粘膜は強い子だから、お酒なんかには負けないのだ」

「酒を飲むな、と言いたところなんですけど、それは無理でしょうからせめて、酒といっしょに何か食べてください。そうするだけで消化器系への負担が減るらしいですから」

「へえ…、じゃあゆき、今日はひさしぶりに何かおつまみつくって」

「…、まあ、それくらいだったら、いいですけど」

「ん…、そういつてくれるから、ゆき好き」

「弥生さんの『好き』は、安っちいからそんなにうれしくないです」

「むむっ、おねえさんの『好き』は安っちくなんてないのだ。5500円くらいなのだ」

「リアルな値段設定来ましたね……」

「ちなみに、シチュエーション課金がいろいろあるよ」

「商売でもやってるんですか？」

「さらにちなみに、デートは三万、手をつないでデートは四万、らぶらぶデートは六万、ちゅーは七万、それ以上は…、お金じゃ売れないなあ」

「ということはつまり、キスまでは売ってるってことじゃないですか。本来非売品であるものに値がついてる時点で安いですよ」

「ゆきにだったら、どれもタダだよ？」

「うわ、別にうれしくねえ……」

「なんで…！ おねえさんがなんでもしてあげるっていつてるのに」

「でも弥生さん、なんか全体的に酒くさそうで……」

「…、否定はしない!」

「してくださいよ」

「ゆきが大人になったら、いっしょにお酒飲もうね。大人になってなくてもいいけどね」

「よくないですよ。っていうか、俺は酒は飲まないって言ってるでしょ。どうなっても知りませんよ」

「それはつまり、ゆきにお酒飲ませたらおねえさんの貞操の保証は出来ない、と」

「俺が意識を保てる保証がないんですよ。弥生さんがどうなるかなんて、知りません」

「それじゃあ、ゆきにお酒飲ませておねえさんがその貞操をいただいちゃうのだ。いただきます」

「だから、酒なんて飲みませんって。っていうか、それ、立証されたら警察沙汰ですからね?」

「ゆきはそんなことしないよ。そんなことしたら、えっちしてる時の写真をばらまいちゃうからね。恥ずかしくて、警察にいうなんて出来ないでしょ?」

「それは、少女をレイプする強姦魔の発想ですよ、弥生さん。ダメですよ、そんなところに留まっちゃ」

「そもそもおねえさんは和姦主義者だから、そういうことはしないのだ!」

「別に自慢げに語るところじゃねえ!?!」

そうやって、アホなことを言い合っているうちに、あまりにあんなりだった坂下家は多少なりともその姿を取り戻し、まあ足の踏み場くらいはあるかな、というくらいにはキレイになったのだった。

とりあえず、最初にやろうとしていたことは出来たはずなので、最低限ではあるが掃除は終わりということにしてもいいのではないだろうか。

まだ掃除機をかけたり拭き掃除をしたりしないといけないのだろう

が、それはまた今度、広太の気が向いたときにでもしてくれるのではないかと思う。基本的に広太も俺と同じ世話焼きで、そして俺以上に部屋の清潔というモノに対してこだわりを持っている。おそらく俺が妥協したこの部屋を見ても、まだダメだなと思うところがあるに違いないのだ。

「はい、弥生さん、お土産です」

「きゃっほーい、温泉まんじゅうだ」

そして土産物の贈呈も無事に済んだことだし、さて、今度こそ部屋に帰るとするか。広太も美佳ちゃんも、おそらく首を長くして待っているだろうしな。そもそも掃除を終わらせるまでの時間稼ぎと思っていたのだが、しかし、あんまり長く待たせるのも悪いよな。

さあ、帰ろう。二泊三日ぶりの帰宅だ。

## ただいまの、そのときに

「ふう、ようやくみんなにお土産配り終わったぜ……」

最初は広太が掃除を終わらせるための時間稼ぎのつもりでし始めたお土産配りなのだが、しかし実際にやってみたら思ったよりも時間がかかってしまって、もしかしたら広太と美佳ちゃんを無用に心配させてしまったかもしれない。まあ、心配しているとしても事情を説明すれば納得してくれるだろうし、問題があるかと言えばそうでもないのだが。

「しかし、ちょっとみんなの世話焼きすぎたな……」

もともとはお土産を渡して少しおしゃべりして、というのをやるだけのつもりだったのだが、しかしなかなか事は上手く運ばないわけで、けっきょく都さんのところでは料理を一食、歌子さんのところでは大量の段ボールの運搬、弥生さんのところでは散らかりきった部屋のお片付けと、旅行帰りとは思えないほどの仕事をこなしてしまった。骨休めの旅行だったのだからへとへとふらふらで帰ってきたというわけではないのだが、しかしだからといって疲労感が全くないかと言え、それはウソだ。二泊三日も家を離れていたのだ、いくらい旅館だったとはいえ、少なからず疲労感はある。

普通に考えると、俺がこんなにみんなのために身体を動かしたりしないといけない道理はないわけで、別に知らんぷりしてしまってもいいに違いない。社会が冷たく冷え切った近年だ、ちょっと困っている困った隣人たちから目を反らしたって、とやかくなを言われるわけではあるまい。でもそれが出来ない。出来たらきつととても楽に違いないが、しかしそれはとても悲しくさみしいことだから。

困っている人がその困っている状態から解放されて楽な気分になることができるというのは、それはもちろんいいことだ。そしてそれの手助けをすることができるというのは、それ以上にいいことだと俺は思う。つまり、困っている人を助けるのはいいことなのだから、

どうしてやらない理由があるか、ということだ。そりゃもちろん、それを助けることによって俺が何らかの負担を負うことになるのは当然のことだ。労力を割くということは、つまるところそういうことなのだから。

でも、俺が思うに、その労力っていうのは心地よいものなのだ。自分が誰かの助けになっている、いや、自分は自分が思ういい行ないをすることができている、という感覚は、俺にとっては何よりも喜ばしい感情だった。まあ、それも晴子さんにすり込まれた感覚の一つであり、持って生まれたものではない。

しかし晴子さんがそういう考え方を俺に与えてくれたのには、本心で言って感謝している。：、しかし、よく考えると俺の考え方ってかなり晴子さんに矯正されてるんだよな。それは基本的に晴子さんが自分に利するためにしたことで、別に晴子さんとしては俺がフェミニスティックで博愛主義的な性格になることを望んでいたわけではない。そういう風になったのは、けっきょくのところ晴子さんの望みを過度に拡大解釈した幼き日の俺の考えに因るのであり、ある意味では晴子さんはただの根本原因でしかないのかもしれないが、でもそうだとすると、やっぱり今の自分の一番底のところをつくってくれた晴子さんには感謝なのだ。

「：、いや、晴子さんはそういうのウザがるし、あんまあからさまにはしない方がいいか。感謝を示すとかよりも、きちんと役に立った方が喜んでくれるしな、これからも精いっぱいがんばらせてもらうことにしよう」

そして、それはとても大事なことなのだが、しかしようやく二日ぶりの我が家の扉の前だ。家の中に広太がいることはほぼ間違いない——もちろん俺が三軒の家を廻っているうちに入れ違いで外に出てしまっていないければの話ではあるが——ことなので、ここはさっさと帰って安心させてやるのがいいだろう。広太は心配性だからな、今もきつと俺がなかなか帰って来ないとか、表情に出すことは決してないのだが、心配しているに違いないんだ。

あつ、それに、今日は美佳ちゃんも帰ってるのか。まったく、美佳ちゃんに会うのは三年ぶりくらいなわけで、まったくの別人ってくらいに成長していてもおかしくない。実は、美佳ちゃんがこういう感じに成長してるのかっていうのはけっこう楽しみだったりする。だって霧子は一夏で筍のようににょきにょきとあれだけの上背まで成長したのだ、美佳ちゃんにだってそれと同じ現象が起こってもおかしくないではないか。美佳ちゃんは普通の子に比べてちびっこい方だったが、しかし霧子だって、もともとは背の順で並べばクラスでもかなり前の方になるくらいおチビだったのだ。ということは、美佳ちゃんが霧子ばりの巨大化を遂げていてもおかしい話ではないだろう。

まあ、あんまり別人になれちゃうと、俺の中で昔の美佳ちゃんとながらなくなつて寂しいから、あんまり変わってないといいなあ、というのが偽らざる本音だったりするのだが。

「まあ、いいか。部屋に入っちゃえば分かることだし」

そしてピンポンとチャイムを押す。広太が部屋の中に入ることが明らかの場合、俺は必ずチャイムを鳴らすようにしているのだ。

別鍵を持っているんだから扉を開けてしまえばいいではないか、とも思うのだが、しかしなんというか、俺が自分で鍵を開けて入ると広太がものすごく焦るのだ。別に大仰に出迎えなんてしなくていいと常日頃言っているのだが、広太はそれを聞こうとは思わないわけで、どうしても俺が帰ってきたときには玄関で控えていたらしいのである。

というわけなので、俺がチャイムを鳴らさずに部屋に入った場合、広太は気配か何かを察知すると、コンマ一秒でも早く玄関へと俺を迎えに出なくてはいけないという強迫観念に駆られるらしく、手に持っているものを放り投げてでも全速力で玄関に走ってくる。

そんな感じに急いで来てくれるのは、ある意味で俺への親愛の情みたいなものなのかもしれないからうれしいはうれしいのだが、しかし手に持っているものが壊れものだったりするとめんどくさいこと

になる。どんな風になるか、などというまでもないことなのだが、広太は手の中のものが壊れものか否かなど関係なく投げ出してしまうので、壊れものを持っていたら必然的に壊れるのだ。

うっかりチャイムを鳴らさず入ってしまい、広太が出迎えを急いだばかりに俺の愛用の湯のみが粉碎されるという悲しい事件が、以前発生したことがある。あのときは、とても大変なことになったので詳細を思い出したくもないのだが、まあ、簡単に言ってしまうば広太が腹を切って詫びようとして――広太がそうしようとしただけであり、俺は当然阻止したのだが――、それを俺が種々多様の手練手管を駆使してなんとか収めたのだ。この事件を受けて、俺はそれ以降、自宅であるにもかかわらず帰宅すると必ず一回チャイムを鳴らすという習慣を自らに課したのである。

待つこと数秒、中からパタパタとスリッパを鳴らす音が聞こえる。おや、これは異なこと。広太は、部屋の中でスリッパを鳴らすような歩き方をしない。こう言うてしまうと気味が悪いかもしれないが、広太は、というか庄司の人たちはみんな一様にまるで空中を滑るような謎の歩法を用いて移動するので、歩いていてもまったく音がしないのだ。気配を完全に断ったままそれをやられてしまうと、長年いっしょに育ってきた俺であっても姿を見失ったり、気付いたときには後ろを取られていたりすることがたまにある。

「ってことは、美佳ちゃんかな。よっぽど俺に会えるのがうれしいと見える。くう…、うれしいじゃねえの、久しぶりに再会を、こんなに喜んでくれるなんてよお…！」

そして中から鍵が開かれ、扉が開かれた。開かれた扉の裏から間をおかずに飛び出してきたのは、当然俺の思った通り広太ではなく、

「おかえりなさいませ、幸久様！」

どうやら美佳ちゃんでもないようだった。

「えっ！？ あれ！？ 美佳ちゃん…、じゃない！？」

「幸久様、お待ちしております！ こうしてまたお会いすることができて、とてもうれしいです！」



中から飛び出してきた人は、そりゃ美佳ちゃんのこととは三年間見えないんだから断言はできないんだけど、でもなんとなく美佳ちゃんじゃないような気がした。それは、その身体が、いくら成長期の真ただ中だとしても三年程度でつくりあげることができるそれではなかったことと、それから身にまとっている服が和服だったことによる。美佳ちゃんは常にポリシーを持ってメイド服を着ているのだから、いくら久しぶりに俺に会うことになったからといって和服を着るなんてありえないのだ。

そしてそれ以上にひとつ、フツと鼻を掠めたその香りを最近、いや、ついこの間、…、ついさっき、数時間前に嗅いだような気がしたのだ。それはもちろん気のせいかもしれないし、あるいは勘違いかもしれない。でもなんとなく、直感的に、俺はこの人が美佳ちゃんではないと確信していて、そして同時に、この人があの人だと確信していた。

「…、三枝さん？」

数時間前、時間になったため旅館からチェックアウトした俺たちが別れを告げたはずの部屋付き仲居、三枝弓子が、どういうわけかそこにいて、部屋から飛び出してきて俺に抱きついていた。

「…、三枝さん、ですよね？」

「いえ、三枝弓子ではありません！　ですが、幸久様のおっしゃっろうとしている人間で、間違いございません！」

「…、広太。ちょっと、広太？」

「おかえりなさいませ、幸久様。長旅お疲れさまでした。お荷物を、お預かりします」

「その前に、ちょっと待て。この人、誰だ」

「この方は、二見かりん様でございます。本日より、こちらにいらっしやいました」

「二見、かりん……？　この人は、三枝弓子だ」

「恐れながら、二見かりん様で間違いございません。七天星家の紋を許されるのは各家の本家筋の人間だけにございますれば」

「へえ、そうなんだ…、…、じゃなくて！ この人は、えっと、仲居で……！」

「幸久様、三枝弓子というのは、あの旅館で働くための偽名なのです。私は二見かりんで間違ひありません。ですが、一時とはいえ幸久様を欺くような真似をしてしまったことは、どのような言葉によっても償うことのできないことだとわかっております。ですが、どうしてもそうせねばならぬ事情があったのです。平にご容赦くださいませ……」

「えっ？ 偽名？ ってことは…、どういうこと？」

「改めて、ご挨拶を申し上げます」

そして、ドアから飛び出てきてからずっと、ひしと俺を抱きしめていた三枝さん——いや、二見、かりんさん、か？——はその腕を放すと、脚に引っ掛けていたつかかけを脱いで玄関へと上がって流れるような所作で膝を折ると、シュツと伸ばした背筋の美しさをそのままに三つ指を突いて深々と頭を下げた。

「七天星家が二の星、二見家当代当主、二見周蔵の娘でございます、二見かりんと申しあげます。当年取りまして21歳、不束で無学な女でございますが、三木幸久様、あなた様の妻となるべくこちらに馳せ参じました。どうぞお見知りおきを、よろしくお願い申し上げます」

「…、広太、俺、頭悪いから状況つかめないんだけどさ、手短に今俺がどういう感じになってるのか教えてもらっていいか？」

「一言で端的に、かつ簡潔に申し上げますと、こちらの方は幸久様の許嫁でございます」

「へえ、いいなづけ、…、いいなづけ？ なあ、いいなづけってなんだっけ？ ど忘れした」

「許嫁とは、親同士が婚姻の約束を交わした二人のことを指します。この場に即して言いますれば、二見のお家と三木のお家が過去に、幸久様とこの方の婚姻の約束を交わしたということになりましか」

「俺、それ、初めて聞いた」

「ご安心ください、幸久様、私もつい先ほど執事長から連絡を受けたばかりです。それまで、そのような話があるということは欠片も聞いたことはありませんでした」

「だよなあ？ あっ、あの、二見さん、でいいんですよ、頭をあげてください。いつまでもそうやって這いつくばっていられると、非常に申し訳ない気持ちになってきますんで」

「はい、それでは失礼いたします」

「…、広太、俺、今、どうしたらいいと思う？」

「…、いま思われていることを、素直に言葉になさるのがよろしかと存じます。何をおっしゃりたいかは、私もおおむね分かっておりますので」

「そうか、そうだよな…、そうだよな？」

というわけで、広太に促されたこともあって、俺は今、心の中で強く思い描いている言葉を声に乗せてみることを決意したのだった。それはおそらくありふれたリアクションで、特に珍しいものでもなく、あるいは言葉として発声する必要なんてないものかもしれない。でも、言おうと思う。言わないとダメなような気がするから、言おうと思う。

息を吸い込んで、一度大きく吐き、そしてもう一度大きく吸い込んだ。

「どないやね〜んっ!!」

その声は、アパート中に響き渡り、軽い近所迷惑だったという。

## 身の振りよう、とは

『急に許嫁などと言われても、幸久様はお困りになられるかもしれません、いちおう本当のことなのです』

彼女――部屋付き仲居三枝弓子改めいいところのお嬢様二見かりんは、あまりに衝撃的な話の展開を受けて軽い虚脱状態になっている俺に、苦笑しながらそう言った。そして、きれいに掃除されたソファ―に腰を落ち着けると、ぽつりぽつりと、まったく何も分かっていない俺のために事情を説明してくれた。

『ですが、幸久様にとっては寝耳に水の話だとしても、私にとっては大事な、とても大切なことなんです』

そもそものところ、俺とこの人との許嫁の約束っていうのは俺のじいさんであるところの三木幸信とこの人の祖父であるところの二見啓蔵の間で交わされたものであるらしい。なんでも二人は、俺も以前おじさんから聞かされたことがあるからぼんやりと記憶していたのだが、無二の親友で竹馬の友で、まあ、マブダチだったんだそうで、おそらく『孫同士、許嫁にしちゃう？ しちゃう？』『あゝ、それも面白いかもねえ』くらいの軽いタッチで交わされてしまったものなのではないだろうか、と俺は思っている。

二人がどれくらい親友だったかという、それはもう一言二言で語り尽くすことは出来ないほどのものらしいのでここでは割愛するが、しかしたとえそうだったとしても、彼らが駆け抜けた過去の時ならいざ知らず、現状だけを考えれば三木の家と二見の家は釣り合うものではない。というか、釣り合うかなあ、と考えることすらおこがましいほどの広大な差が、両者の存在としての価値の間には、厳然たる事実として横たわっているのである。いくらじいじい同士の仲が良かったとしても、それはあくまでも昔々に交わされた約束であって今現在のことにまでは当然考えは至っていない、至っているはずがない。

ぶっちゃけていうと、金だ。けっきょくそういうことに話がたどり着いてしまうのは、つまりは世界は金を中心に回っているということの証明なのであるが、しかし現実問題として両家が保有してる金の高が、あまりにも違いすぎるのだ。許嫁という契約は、基本的にその結婚をすることによって双方——ここでは家だろうが——が何らかのメリットを得ることを前提とされているものはずだ。つまり、もし俺とこの人がその約束の通りに結婚をすることになったとすれば、その結果として三木の家と二見の家に同等程度と思われる利潤が発生しなくてはおかしいのだ。

しかし、順当に考えて、三木の家は二見の家と直接的なつながりができるわけだから家としての存在価値とそこから派生的に発生する莫大な金を得ることができるのだが、それでは二見の家はなにを得る？ 答えは簡単極まりない。何も手に入らないのだ。冷静に考えるまでもなく、三木の家生き残りはただ唯一俺のみであり、滅亡のカウントダウンももう残り一桁くらいまで来ているに違いない、と思わずにはいられないほどである。金だって、当然そんなに持っていないだろう。

そんなあり様の、有体に言っしまえばもう滅びという終着点に指がかかっているようなカビが生えかけの三木の家と、飛ぶ鳥落とす勢いで年々成長を続けていて日本国内はおろか世界に目を向けても数えるほどしか比肩する者のいないような大企業である二見の家を、どうして比較してみようかなあ、などと思うことができるだろうか。そしてそれは、金以外にもいろいろ理由は挙げられるに違いないが、俺でもパツと思いつくことなんだから二見の家の人たちが気付いていないわけがない。それならばこそ、はて、この人はどうしてここにいるのだろうか。いや、どうしてと言っしまえばそれは許嫁という約束を果たすために違いないのだろうが、そんな身のない結婚がどうして許されるだろうか。二見の家の人たちにとってこの人は大事な大事な娘なのだろうし、こんなわけのわからない許嫁の約束を娘に押しつけることなんてできるはずがないし、やろうとするは

ずがない。どれだけ隠居しているじいさんが恐ろしいとしても、そんな若かりし日の過ち的な戯言をこり押しさせるとは思えないのである。

しかし、現にこの人はここにいる。許嫁として、じいじいどもの間で交わされた理由がないうえに意味も分らない（いくらなんでも、さっき言ったこととは真逆だが、かわいい孫をポイ捨てするじいさんはいないだろう、と俺は思う）その約束を履行すると言っている。俺の聞き間違いの可能性を大いに考慮して何度も聞きなおしたのでそれは間違いのない事実であって、そしてそれと同時に夢ではない現実らしいのだ。

『なぜ？ 難しいことをお聴きになるのですね。どうしてこうしているのか、というのを一言で言うことは、無理です。だって、それは私のこれまで生きてきた年月の全てを語るようなものですから。私は、こうしてあなたの下に嫁ぐために今まで生きてきた。理由があります、想いもあります。でもそれは、幸久様が相手であっても、いえ、あなたが相手だからこそ、簡単に口に出すことは出来ません』彼女は、少し困ったように笑うと、申し訳ございませんと本当に申し訳なさそうに言った。

というか、俺が親だったら間違いなくこんなことは止めさせる。止めて、相手の家に『この件はなかったことに』とか連絡を取るはずだ。だって、それじゃ娘が幸せにならない。政略結婚みたいなことをさせるっていうのに、でも家に利益は生まれません、なんてまったく意味が分からないではないか。家のため、と娘に涙を飲ませるのが政略結婚のそもその定番であり、それがないと政略結婚ではない、と言ってもいいくらいのお約束のようなものだ。そういうお約束がないのに、どうして娘を放り投げるようなことをするだろうか。あり得ないではないか。

いや、この人によれば、どうもほぼすべての家の人間が賛成してくれなかったらしいのだ。つまり、この人のこの行動はほとんど誰にも祝福されていないということなのではないだろうか。家族から

祝福されない結婚——俺はそもそも、まだ受けるとも受けないとも言っていないのだが——は上手くないかないもの、というのがドラマとかの定番だ。けっきょくそういうのは、駆け落ちとかの一瞬の勢いに任せた、現実にはやってしまえばバッドエンド直行の結果を導くことが多いらしい（テレビっ娘の霧子がそう言うのだから間違いあるまい）。

だから、俺は冷静でいることが求められている、そう感じた。当事者そのものでありながら、しかし第三者でいるような、そういう立ち位置こそが俺のいるべき位置なのだ、となんとなく感じたのだ。

『知っています、あなたの思い遣りを。知っています、あなたの慈悲深さを。知っています、あなたのやさしさを。だからこそ私は、あなたに惹かれたのですから。あなたの知らないあなたを、きっと私は知っている。あなたは私を知らないでしょうが、ですが私はあなたのことを知っているのです。気味が悪いでしょうが、本当のことなのです。幸久様、あなたが私からこんな話を聞いて混乱なさるのは当然のこと。ですが、これだけは信じてください。私はあなたの味方です、何が起ころうと裏切ることはありません。だって、私はあなたを、愛しているのだから』

彼女は、二見かりんは、あまりにまっすぐだった。それは俺にはないものであり、また俺には荷が重すぎる生き方だった。俺が重責から逃れるために、無意識のうちに性格と生き方を傾斜させていったのとは真逆だろう。彼女はすべてを負って、たわむことも折れることも厭わずにまっすぐに、誰よりもまっすぐに生きている。

強いんだろなあ、きつと。というか、許嫁がいるなんて言われて動揺してたけど、でも動揺したのが俺だけってことは絶対ないんだ。彼女も、もはやこの段階に至っては動揺も何もなかっただろうけど、その話を聞かされたときにはきつと今の俺と同じように動揺したに違いない。そりゃそうだ、自分の人生が自分の知らないところで決定的に決められていたなんて、驚かないわけがないじゃないか。でも彼女はそれを受け入れている。まったく、俺だけがオタオタして

いるなんて、みつともないったらありゃしないぜ。

俺がしないといけないのはそういうことじゃない。状況を適切に判断したうえで、どういう風に受け入れていくのが最も上策かを判断しないといけないのだ。一番初めのところで、こんな風にみつともなく狼狽している余裕なんて、まったくないのである。

『幸久様が落ち着かれましたら、すべてお話いたします。今は、あまりに唐突なことに驚いていらっしゃいますが、落ち着かれれば適切な判断をなさることが出来る方ですからね、幸久様は。ですので、待ちます、すべてをお話できる時を』

どうしてか分からないが、そこまで信頼されているんだ、それにきっちり応えるのが男ってものだろう。少なくとも、俺はそういうことに関してだけはまっすぐであるように、晴子さんによって矯正されているんだから。

.....

とか思っていたのが、今日でちょうど一か月前。

「…、朝か……」

ゴールデンウィークが終わってからちょうど一ヶ月が経過した、梅雨の予兆を感じさせる六月初頭。けっきょく俺は、『しっかりしないと……!』とか思っていたあの時の気持ちはウソではないが、しかしだからといってどうすればいいのかは分からないわけで、なんだかんだと何もせずに、あるいは何もできずに無為に一ヶ月という時を浪費してしまった。

「あっ、おはようございます、幸久様。今朝は大根と豆腐のお味噌汁と、牛蒡と大根の皮の金平と、新巻鮭の切り身です」

「…、おはよう、かりんさん……」

「コーヒーをご用意しましたので、眠気覚ましにどうぞお召し上がりください。ミルクは一つ、砂糖はさじ半分だけ入れておきましたので、そのまま召し上がってください。あっ、その前に、顔を洗っ



てらしてくださいね」

「…、はい…」

一ヶ月、三十日の間、俺はなにも出来ないでいた。むしろ、逆に何ができるのか聞きたいくらいだ。いや、今の俺の状況が男らしくないってことくらいは分かっている。分かっているんだ。分かっているんだが…、でも、だからって何ができるのだ。

「幸久様、おはようございます。制服はこちらに用意しておきましたので、顔を洗われましたらお着替えください」

「ああ、広太、おはよう。今日もかりんさんに仕事取られたのか？」

「いえ、取られたなどとは。かりん様は本来家事などをなさる必要はないのですが、ですがどうしてもとおっしゃられますので」

「うん、知ってる。いい感じに分担しろよ」

「はい、気をつけます」

「俺も、料理の機会を取られっぱなしってわけにもいかないしな、きっちり分担していかないと」

しかし一ヶ月という時がもたらしてくれたものも、ないわけではない。少なくとも、別に状況を展開させる手立てとかを思いつくことはなかったけど、この状況には馴染んだ。少なくとも、別に行動を起こすきっかけみたいなのはつかめなかったけどこの環境には慣れた。慣れたことによって、一歩だけ前に進む勇気を得られた。…、一歩じゃなくて、半歩かもしれないけど。

「広太、かりんさんのこと、晴子さんに紹介する」

「…、そうですか、それがよろしいかと存じます」

「いつまでも止まったままは、ダメだよな」

「はい、そのように、わずかずつでも進んでいくのが肝要なのではないでしょうか」

「まあ、一ヶ月かかったけどな」

「一歩一歩です、幸久様。それに今日の一歩は、とても大きな一歩になるのではないのでしょうか」

「…、そうだな。かりんさんをアパートの外に連れ出すのは、初め

てだからな」

「はい、一步一步です」

とりあえず、俺は一つの決断をすることにした。かりんさんを許嫁として認め、結婚するかどうかという最大の問題はまだ触れることすらできないが、だがしかし、とにかくかりんさんの存在くらいはしっかりと認めなくてはいけないのだ。俺にとって、晴子さんに紹介するということは、つまりそういうこと。少なくとも、問題をまっすぐ見る決意だけはするという決意を、しようと思う。

「一步が、ちっちゃんだけどな……」

そんな些細な決意をした俺だったが、しかしその前に学校に行かなくてはならないわけであり、そしてかりんさんを紹介するためではなく霧子を叩き起こすために天方家を訪れなくてはならないのだ。しかし…、ああ、そうか、晴子さんに紹介するってことは霧子にも会わせないといけないのか。あいつ、実は俺に許嫁がいたんです、とか言われて、どんな顔するだろう。ショックを受けるだろうか？

それともこの世の終わりみたいな顔をするだろうか？

まあ、霧子がどんな顔をするにしても、俺はそれをしないといけないわけで、もはや口に出して言ってしまったことに対して違えるということをするつもりはない。あとはただ、霧子のショックが出来るだけ少なくなるように気をつけるだけなのだが。

## 天方家、朝のひと時

「おはよう、霧子」

「にゅ…、おあよう、ごじやいましゅ……」

いつものようにチャイムを鳴らして雪美さんの元気な声を聞いて元気をもらって、家の中に入れてもらって二階への階段を上って、霧子の部屋に入ってベッドで安らかな寝息を立てる霧子を見つけて、いつものようにサクツと目を覚まさせる。長年やっているだけあって、遊びを入れずにマジで起こしにかかるると本当に機械的に手早く起こすことができるんだなあ、と我がことながら感心してしまうほどだ。

最近はパツと見るだけで眠りの深さまでなんとなく察することができようになってきたのだが、本当に霧子を起こす以外に使い道のない能力で、ちょっと虚しくなってきた。もうここまできると、もしも『霧子の目を覚まさせる選手権』があったら、きっと世界一になることができる自信がある。

「なんか、今日はいつもに増して眠そうだな、霧子。昨日の夜に何かあったのか？」

「えと…、おもしろいドラマが、11時までやってて……。スペシヤルだったから、長くって……」

「そんなの録画して今日の夕方にでも見ればよかっただろ。お前は夜起きてられないんだから、無理せずさっさと寝るようにしないとダメだろ」

「にゅ…、わかってたけど、でもおもしろかったんだもん……」

「しかし、霧子が11時まで起きてられるほど面白いドラマっていうのも気になるな。お前、ほんとに10時になったら舟こぎ始めるのに」

「んとね、好きな俳優さんが出ててね、好きなマンガのドラマ化だったからどうしても観たくって……」

「まあ、理由は何でもいいんだけどさ。何にせよ、無理はしないでくれな、起こすのが大変になるから」

「にゅん…、ごめんね、幸久君…」

「…、まあ、別に気にしなくていいよ。ほれ、顔洗ってこい。晴子さんが朝飯用意して待ってくれてるぞ」

「はあい…」

パジャマを身にまといところどころ髪を跳ねさせている、というまさにザ・寝起きといった風情の霧子を後ろに引き連れて洗面所まで連れていくと、とにかく残っている眠気を晴らしてもらうために顔を洗わせる。前かがみになったときに髪がバサツと前に行ってしまうように、とりあえず髪を一掴みにして後ろでまとめてしまい、それを洗面台の脇に落ちていたシュシュで止める。なにも、あえて朝っぱらから毛先を水浸しにすることもあるまい。

しかし、こうして触ってみると霧子の髪は本当にまっすぐなんだということがよく分かる。俺とは違うんだなあ、なんてことを考えながらさわわしているとザバザバと出しまくっていた水の音が止まる。タオルを探して手をパタパタとさせているので、俺はそれに手渡すようにタオルを取ってやり、ついでにブラシをとってまとめた髪に軽く通していく。

「まったく、ほんとにきれいに手入れしてあるな。さわり心地がいいっतरらないぜ」

「そう？　自分じゃよく分からないんだけど…」

「俺はキレイだと思うぞ。だってこんなに触り心地がいいんだ、キレイじゃないわけがないだろ。ブラシだって、こんなにスツと通るんだしな。さぞかし大変な手入れの日々なんだろうな、関心関心」

「にゅー、昔からずっとやってるから、慣れちゃってあんまり大変って感じじゃなくなっちゃったよ。もうずっと前からいつものこと、って感じだし」

「そうかそうか、そのおかげで俺はこうして霧子のきれいな髪をいつでも堪能することができてわけた。あー、さらさらだしつや

つやだしきらきらだし、霧子の髪、大好き」

「あ、あたしは……？」

「霧子のことも好きだぞ、髪も霧子も好きだ。かわいいかわい妹妹分だからなあ」

「にゅ、妹分」

「でも、妹分っていうと美佳ちゃんもそうなんだよなあ……霧子と美佳ちゃんは比べられないし、どっちも大事だぜ？」

「そっかあ……にゅ……」

「どうした？ 悩みごとか？」

「にゅん、あのね、妹って、どうなのかなあって思っ」

「妹はいいものだぞ。俺は大好きだ」

「？ 幸久君は妹が好きなの？」

「ん、妹も好きだ。霧子も好きだ。つまり、妹な霧子だと、より好きだ」

「にゅ……よく分からないかも……？」

「まあ、そこらへんは分からなくてよろしい。ちなみに俺は長い髪も好きだ。ということは、霧子は霧子で、妹で、髪長くて、俺の好きなもの三拍子そろってることだ。霧子・妹・髪長い。最高だな！」

「……うん！」

どうやら霧子が思考を放棄したらしい。まあ、そのあたりは俺の趣味の領域に深く根ざした問題になるのだから、そんなに大らかに理解を示されても困ってしまうのだが。俺は無邪気に生きている霧子が好きなわけで、変に計算とかされちゃうと少し引いてしまうのだ。「あつ、ねえねえ、幸久君、今日ってロング・ホームルームあるけど、何やるか聞いている？ あたし、覚えてなくて、用意するものとかあったら教えてほしいんだけど……」

「いや、特に用意するものはなかった気がするんだけど。なんか体育祭の話でもするんじゃないかなかったっけ？ まだ少し遠いけど、しばらくしたら体育祭じゃん」

「あつ、そっか。体育祭が、えと、あと二週間くらい、だっけ？

近いもんね」

「まあ、それよりも今は朝飯だ。あんまり待たせると晴子さんが機嫌悪くなっちゃうからな。もうそろそろ行かないとだ」

「にゅ、そうだね。今日はパンの日だよ」

「ああ、そっか、今日はパンの日か。晴子さんはパンも好きだからな。っていうか、今日はけっこう時間あるからゆっくりしっかり食えよ。いつも急いでパパッと食べてるけど、やっぱりゆっくり食った方が身体にいいはずだからな」

「にゅん、わかったよ」

「あつ、やっと来たわね。はやく座りなさい、母さんがそろそろお腹空いたってうるさくなるころよ」

無事に顔を洗い終わってリビングに入ると、そこでは晴子さんと、そして雪美さんがお待ちかねだった。朝食の支度は晴子さんの手によつてすでに整えられていて、あとはもう霧子が席に着きさえすればいつでもスタートといったところだった。

そして今日の天方家の朝食は、バターを薄く塗ったトーストにハムエッグ、コンソメスープ、グリーンサラダの洋食モーニングセットで、雪美さんは無駄に大盛りなのだが、霧子と晴子さんはワンプレートでまとめているからか全体的にこじんまりとしている印象を受けた。というか、雪美さんは二人の倍くらいの量があるわけで、それって多すぎるんじゃないか、と思うが、しかし雪美さんにしてみれば少し少なめくらいの塩梅なのだ。

「今日はちよつと急ぐから簡単になっちゃったけど、まあ、パパッと食べてさっさと学校行ってきたさい」

「晴子さん、用事ですか？」

「ちよつと大学で野暮用よ。帰りもちよつと遅くなっちゃうから、晩はあんたがつくつときなさい、幸久」

「あつ、はい、分かりました」

ちなみに晴子さんはほんとに時間がないようで、ハムエッグをトー

ストに乗せて食べて、ほんの少しだけでも食事の時間を短縮しようとしていた。いったいどんな用事が大学で待っているのかは分からないが、とにかくめっちゃ急いでいるということだけは分かった。この様子だと出掛ける前にいつもやっている諸々の家事をする暇すらないかもしれないな。あとで広太に連絡して、こっちの家の家事もやっておくように言っておくか。

「昨日の晩は精進料理みたいになっちゃったから、今日は肉がいいわ、肉。肉っぽいのがつくりなさい」

「わかりました、なにつくるか考えときます」

「和洋中はなんでもいいから、とにかく肉よ。今日はきつと疲れて帰ってくるから、元気出るの頼むわ」

「了解です、任せてください。いや、でもちようどよかったです」「ちようどよかったって何がよ」

「いえ、あの、実は今日、ちよつとこっちに遊びに来てもいいかって聞こうと思って。だから晴子さんからくるように言ってくれたのは、ちようどいいかなって」

「ふくん、まあ、なんでもいいわ。なにか用事があるっていうなら、そのときに聞くわ」

「はい。あつ、晴子さん、帰りは何時くらいに？」

「七時半の、少し前くらいかしら。大学出るのが五限終わったあとだから、それくらいになっちゃうのよ」

「なるほど、分かりました。そのくらいの時間に合わせて出来あがるように調整します」

「ほんと、あんたは便利で役に立つわね。それでこそ私も、がんばって仕込んだ甲斐があるってものよ。これからもきちんとあたしのために役に立つのよ、幸久」

「はい、がんばります」

「別にがんばらなくていいわ。きっちり役に立って、結果を見せなさい。結果の伴わない努力はウザいわ」

「分かりました、きっちりやっておきます」

「それでいいわ、それでこそあたしの弟子よ」

「もちろんです」

「ねえねえ、晴子ちゃん、おかあさんお腹空いたんだけど、ごはん食べてもいいかしら？」

「つと、こんなところで悠長に話なんかしてる場合じゃないわ。あと、あたしはこれ食べたらずぐに出るから、洗い物済ませてから学校行くのよ」

「はい、分かりました」

「あたしのお手伝いするね、幸久君」

「ああ、そうしてくれると助かる。実際、そんなに時間はないからな」

「おかあさんは何をしたらいいかしら？」

「母さん、トースト食べるの下手なんだから食べながらしゃべらないで。もう…、パン屑がいつぱい下に落ちてるじゃない」

「晴子ちゃんも食べながらおしゃべりしてるのに」

「あたしは母さんとは違うからいいのよ。っていうか、ほんとに急いでるんだから、あんまり手間かけさせないでよね」

「うー、晴子ちゃん、反抗期……」

「反抗期なんて、来てる暇なかったし、今も来てないわよ。っていうか、反抗期だったらこんないろいろな家事なんてしないでしょ」

「じゃあ、晴子ちゃんは、何期？」

「さあ、青年期じゃない？ ごちそうさま、片づけ、あたしがいなくともちゃんとやりなさいよ」

「分かってます、晴子さん」

「おねえちゃん、いつてらっしゃい」

「霧子、今日も気をつけて学校行くのよ」

「うん、気をつけるね」

「晴子ちゃん、いつてらっしゃい」

「母さんは、きちんとお仕事してよね。最近サボりがちなんだから」  
「はーい、わかってまーす。今日は久しぶりにがんばっちゃうわよ」



」

「そういえば、雪美さんの仕事ってなんなんですか？」

「なに、あんた、知らなかったの？」

「あつ、はい。なんか聞きそびれちゃったっていうか、聞かないままここまできちゃったっていうかで」

「ふうん、まあ、別に知らなくても問題はないんじゃないの？　どうしても知りたいうて言うんなら、母さんに直接聞いてちょうだい」

「幸久くんは、おかあさんのお仕事知らなかったのね。むかし教えてあげた気がしたけど、気のせいだったのね」

「単に俺が忘れてるだけって可能性もありますけど。っていうか、聞いたとしたらきつとかなり前ですし、忘れちゃったんでしょね」

「うーん、それじゃあねえ、直接見せてあげるわ。でも今はちょっと時間ないし、また今度ね」

「はい、じゃあ、そういうことで。で、霧子、そろそろお食事を終えてくれないか」

「にゅ？　あつ！　幸久君、もう食べ終わってる！」

「分かっていると思うけどな、俺たちも時間に追われる存在なんだ。

洗いのこととか考えたらそろそろ食い終わってくれないと困るぜ。なんせ霧子はまだ着替えも終わってないわけだしな」

「で、でも、さっきは時間いっぱいあるって……」

「それはただ飯だけ食って学校に行けばいい場合の時間な。俺たちはこれから晴子さんの代わりに洗いの物とかしないといけないんだから、さっきまでと同じ時間の捉え方じゃないかんぞ」

「にゅ……、でもお……」

「まあ、時間ないって言ってもそこまでじゃないけどな。霧子はまだ食っててもいいよ。洗いのものは俺が全部やとくから、ゆっくり食え。そして食ったらしっかり着替えてくれ」

「う、うん」

「この間みたいに、寝ぼけてスカートのロールアップすぎて太もも見せまくりのセクシーモードで登校とか、そういうことはしないで

くれ。あれは、さすがの俺もフォローできない」

「あ、あれは…、ぼんやりしてたらやりすぎちゃっただけだもん…」

「まあ、遅刻ギリギリでスクランブル登校になるところまで長期的な視点で見ればまだまだ余裕だから、気にしないでいいからな」

「…、ちよつと、急ぐ」

「雪美さん、その食器、洗っちゃうんでもらってもいいですか？」

「うん、いいわよ。はい、幸久くん」

「ありがとうございます」

「幸久くんはとってもしつかりしてるし、おかあさんよりもおかあさんみたいね」

「それ、自分で言ったらおしまいですよ、雪美さん」

霧子の食事が特別遅いというわけではない。俺はすでに自宅で一食食ってるからそもそもの量が少なく、雪美さんは言わずもがな超速で食い、晴子さんは急いでいたからか高速モードで食事をして、つまりみんなが早く食べ終わり過ぎたのだ。しかし相対的にみて遅いというのもまた事実。とりあえず、霧子には遅刻しない程度に急いで食事を終わらせてもらうことにしよう。

そして俺はと言えば、遅刻しないように手早く食器を洗い↓拭き↓片付けの三連携を決めなくてはならないのだ。どちらかが間に合わないければ、俺たちは遅刻することになるだろう。どちらが間に合わないにしても、それはおそらく間違いない。

## 遅刻の瀬戸際

「今日もギリギリながら、間に合いはしたな、うん」

「そう、だね。今日も、いちおう遅刻ではなかったね」

霧子がいくら急ぐといってもそこに限界はあるわけで、俺たちはけつきよくいつものようにギリギリの時間で滑り込むように校門をくぐったのだった。こうしてギリギリの時間に登校するのは、俺としては出来るだけ避けたいのだが、まあ、霧子のことを起こしてやる以上、それは無理なんだろうなあ、と思わざるを得ない。

「今日は姐さんが門の当番じゃなかったから、ちよっと危なかったな。いつもみたいにお目こぼしがもらえなかったから、いつもよりもヤバかった」

「にゅ…、門で挟まれるかと思ったよ……」

「それは絵面としてかなり面白いけど、たぶんけっこう痛いだろうから止めとけな」

「別にそれがやりたいってわけじゃないもん。でも幸久くん、今日って、りこちゃんの当番の曜日じゃなかったっけ？」

「俺もそうだったと思う。思うけど、まあ、実際はいないんだし、なにか用事でもあったんじゃないか？ 門の見張りやるよりも大事な用事が、何かしらさ」

「そっか、そうだね。りこちゃん、なにか用事だったのかなあ？」

「姐さんはいろいろと忙しい人だからなあ。俺にはどんな用事なのか予想もつかないぜ」

「あたしも、わかんないや。風紀委員のお仕事かなあ？ それとも、風邪でお休み、とか？」

「休みってことは、ないんじゃないか？ 姐さんって休みそんな感じじゃないし、きつと風紀か何かの用事があったんだよ。まあ、それは後で姐さんにでも聞けばいいとして、ほれ、さっさと教室行くだ。ただでさえ遅刻ストレスなんだ、一秒でも早く教室行かねえと

マジで遅刻になるぞ」

「あっ、うん、そうだよね。急がないと」

靴箱で上履きに履き替えながらそんなことを話しつつ、俺たちは出来るだけ急いで教室へ向かう。どのような状況であっても、自分たちが遅刻ギリギリで登校してきた存在であるという事実から目を反らしてはならないのだ。俺たちに来るのは可及的速やかに教室へと向かうために全ての行動を迅速に行なうことであり、逆に言うならば、それ以外のことをしている場合ではないのである。

「あら、三木ちゃん、いま来たですか？」

とかやっていると、出席簿を小脇に抱えて振り袖振り振りと職員室から出てくるゆり先生に行きあったのだった。いつも思うのだが、この人は何着の振り袖を保有しているのだろうか。あんまり同じ柄のものを着ているのは見たことがないのだが、ふむ、まあ、俺の見る目がないだけで実のところは同じものを着ていたりするのかもしれないけど。

しかし、今日はどうしたのだろう、いつも隣にいるはずの綾先生の姿が見えない。二人は、もちろん同じクラスの担任と副担任の関係なのだから仲がいいのかもしれないが、本当にいつもいっしょにいるような気がする。それが今日は、どうしてかいっしょではないよ、うなのだ。もしかして綾先生、風邪でもひいてお休みなのだろうか？ということとは、副担任のゆり先生が今日のところは担任代理になるのだろうか。いつも綾先生の隣でホームルームの様子とかの担任業務を見ていたりするからその手順なんかは問題ないだろうが、ゆり先生はけっこう腹黒い感じだからな、これを機と見てクラスの乗っ取りに着手しないとも限らない。

そうなった場合、はて、俺はどちらに着くべきだろうか。そういう謀反に加担するのは、やっぱりよくないんだろうけど、でも俺って案外ゆり先生に気に入られてるから、もしも乗っ取りが成功した場合、俺のことを重用してくれるかもしれない。ということはきちんと謀反の段階で着いておく方がいいかもしれない。

でも、もしそうするとすれば、俺は間違いなく現政権側に着く姐さんと対立することになるだろう。姐さんと真正面から対立するのは賢くない。姐さんには、とりあえず志穂を当てておこう。そして二人が武力的に拮抗している間に外堀を埋めてしまえばいい。そうして志穂と姐さんの二人を反乱側に引き入れてしまえば、あとは武力を背景に水面下の交渉を続けていけば乗っ取りの成功は時間の問題だ。

そう考えれば、神聖ゆりちゃん帝国の樹立はそう難しい話ではない。しかしそれをする意味がどこにあるかといえば、どこにもない。そしておそらく、ゆり先生にその意思がない。まあ、ただの思考ゲームでしかない、ってわけだ。時間を無駄にしたな、マジで。

「あつ、ゆり先生。おはようございます。今日も素敵な振り袖ですね」

「うふふ、今日の振り袖は、かわいい系ですからね。三木ちゃんは、こういうの方が、好みですか？」

「いえ、好みというか、単にいいなあ、と思っただけでして」

「そうでしたか、いいと思ってくださったなら、いいのですわ」

「あつ、はい。そういえば、今日は綾先生はいないんですね。お休みですか？」

「いえ、今日は先輩は、先に教室に行っているのですよ。ちょっと野暮用、らしいです」

「野暮用？」

「はい、先生も、それが何かは知っていますが、でもここではないんですよ。教室に行けば、分かることですからね」

「は、はあ、なるほど」

「あの、ゆりちゃん、おはようございます」

「あら、天方ちゃん、おはようございます。今日も三木ちゃんとごいっしょに登校ですか？ なかよしこよしで、羨ましい限りです」

「にゅ、そんなこと、ないです……」

「うふふ、恥ずかしがっちゃって、天方ちゃんはおまゝせさん、ですな」

「にゅ……」

霧子は先生におでこをつゝんとされて黙ってしまった。どこらへんがどうおまゝせさんなのかは俺には分からないが、きっとゆり先生がそう言うのだからそうなのだろう。俺には分からないなにかが、おそらくおまゝせさんだったに違いないのだ。

「先生も高校生だったら、三木ちゃんと並んで登校したいですな」  
高校生ではないので、そういうことも出来ませんがね」

「また先生、そんなこといって、冗談ばかり」

「先生は、本気ですよ？」

「…、どこらへんが、どんなふうに本気なのでしょうか、先生」

「どこらへんを、どんなふうに本気なのでしょうかね？ うふふ、ないですよ」

「そ、そうですか……」

「それよりも、先生よりも先に教室に入らないと、遅刻にしちゃいますからね」

「それは、ちょっと勘弁ですね」

「三木ちゃんだけじゃありませんからね、天方ちゃんも急がないと、遅刻にしちゃいますからね」

「にゅ、それは、ヤです……」

「やなら二人とも、いそげいそげ、ですよ」

「はーい」

実際のところ、まだ予鈴が鳴って間もないわけで、先生よりも後に教室に入ったからといって遅刻になるわけではあるまいが、しかし先生がこう言うのだ、言われたとおりに急ぐのがいいだろう。俺と霧子はパタパタとスリッパを鳴らして後ろから歩いてくる先生よりも少しだけ早く教室へ向かう階段を上っていくのだった。おそらく今の速度を維持していれば、先生が急に本気で走りだしたりしない

限り、追い抜かれるようなことはないだろう。

まあ、先生も別に俺たちに意地悪したくてそんなことを言ったわけではないわけで、意地になって俺たちを追い抜こうとは思わない、と思う。あくまでもいつもどおりに、着物の裾は揃えたままで静かに静かに、それこそスリッパをかすかにパタパタ言わせている以外には音もなく歩いている。

「しかし、いつも姐さんに言われることだけど、やっぱりギリギリでくるのはよくないんだよね」

「にゅ？ 幸久君、急にどうしたの？」

「いや、やっぱさ、毎日ギリギリっていうのはスマートじゃないだろ、って話。いつもある程度は余裕を持って行動したもんだよね」

「それは、うん、そうだよ」

「でもそのためには霧子の世話の速度を早くしないといけないんだ。今日は、比較的手間取らなかったとはいえ、けっきょくこの時間なわけじゃん。いや、今日は洗い物もあったからか」

「幸久君は、起こすの上手だよ」

「ん？ それはただ、もう慣れただけだ」

「でも、おねえちゃんもおかあさんも、あんな風に起こしてくれなかったもん」

「それは二人とも諦めたってことだろ。雪美さんは基本的に寝る子は育つてきな立場からそもそも起こそうっていう気がないし、晴子さんはだいぶ前に霧子を起こすことは諦めて俺に委任してるんだぞ。そのこと自体はおまえも分かってるんだろ？」

「にゅう、やっぱりそうなのかなあ……。なんとなくは分かったことだけど、改めて言われるとちよっとショックかも……」

「まあ、別に心配しなくていいぜ、俺はまだ諦めてないし、そもそも諦めるつもりはない。誰もが諦めても俺が諦めないからな」

「…、幸久君、ほんとにありがとうございます……」

「なんだよ、くすぐったいな、急にありがとうございますとかやめろよ。霧子は妹なんだから、おにいちやんが世話焼いてやるのは当

然だろ？」

「でも、ありがと。おねえちゃんは諦めてるのに、幸久君は諦めないでいてくれるもん。やっぱりうれしいかも」

「そんなにか？　っていうか、俺に面倒みられてくれるのは、俺的にはむしろうれしいんだけど、霧子的には問題ないのか？」

「にゅ、その話、前もしたかも」

「…、したな。同じ話は、二回しなくていいか」

「そう、だね。また幸久君が血を出すまで机に頭突きすることになっちゃうかもしれないからね」

「そんなことしたっけ？」

「にゅ…、血は、出てなかったかも」

「頭突きはしたかもしれないけど…、血は、たぶん出てないだろうん」

「お二人は…、やっぱり、昔馴染みなのですか？　とても仲良しで、見ていて心があったかくなるですね」

「えっ？　あっ、はい、そうですね」

「えと、家が近くて、ずっとお友だち、です」

「そうですか、そうですか。それはとてもよろしいですね。実は先生と先輩も、幼なじみなのですよ。小学校のときから、ずっといっしょなのです」

「へえ、やっぱりそうだったんですか。二人ともとても仲良しみたいでしたから、そうなのかなあとは思ってたんですよ」

「うん、そういうええみんなもそうなのかなあ、って言ってたかも。息とか、すごいあってると思うし」

「先生が二人に教えちゃったのは、先輩にはないしですよ？」

先輩は、みんなに知られちゃうと教師としての尊厳にかかわると思ひ込んでおりますので」

「別にそんなことで教師の威厳はなくならないと思いますけどね」

「でも綾ちゃんって、そういうこと気にしそうだし」

「そうなのですよ、先輩は小物ですからねえ」



「小物って……」

「事実なのですよ。いえ、小心者の方が正しいでしょうか？」

「どちらにしても、ほめてはいませんよね」

「ほめてはいませんが、事実です。ですが、それ以外のいいところもたくさん知っていますので、問題はないかと」

「そう、なんですかね……？」

「そうですね。それにですね、長い付き合いになるということは、弱みを握りあうのと同じことです。先生は、先輩の弱みは、致命的なものだけでも両手にあまる数把握していますよ」

「…、それは、言わないであげてくださいね」

「うふふ、それは先輩の態度次第です」  
「あたしは、幸久君の弱みは分からないけど、いろいろ幸久君のことは知ってるよ」

「俺は霧子の弱みなんて数十個単位で知ってるけどな。俺が本気になれば霧子を破滅させることなんて容易いぜ」

「先生が言いたかったのは、つまりそこなのです」

「えっ？ どこですか？ 霧子を破滅させることですか？」

「いえ、天方ちゃんが三木ちゃんのことをよくよく御存じ、ということです。…、さて、天方ちゃん、大事な大事な話がありますので、お昼休みに家庭科準備室に来てくださいね」

「？ は、はい……」

「いろいろ、ええ、いろいろとお話がございますので」

「なんだよ、霧子、なにやっただよ」

「な、なんにもしてないよ？」

「じゃあなんで先生に呼び出されるんだよ」

「わ、わかんない……」

「うふ、うふふ」

ゆり先生がなんで霧子を呼びだすのかはよく分からないが、まあ、霧子がかしたとかではないようなので、おそらくそんなに心配することはないのだろう。

「とか言ってるうちに、おいついちゃったですね」

「あれ、あっ、追いつかれちゃいましたね」

「にゅ、ゆりちゃん、追いついちゃったね」

「はい、追いついちゃったですね」

「……………」

「……………」

「……………」

そして、おもむろにゆり先生がその進行速度を一気に上げた。

「あれ！？ 先生、なんで急に走ってるんですか！？」

「うゝふゝふゝ、走ってはいないのですよ。走っているというのは、つまり、瞬間的に両足が地から離れることが絶対条件ですので、先生の脚が地面に触れている以上、走っているとは言えないのですね。これを人は、競歩と呼びます」

「走ってないのに速いよ、幸久君！」

「やばいぞ、霧子！ このままだと遅刻にされる！！」

「い、急がないと……………」

「は、走れ！ 霧子！！」

「にゅ、にゅん！」

まるで滑るように高速移動するゆり先生は、あっという間に俺たちを追い抜いて教室の扉への距離をぐんぐん縮めていく。一方俺たちは、あまりに唐突な先生の動きに驚いて一瞬止まってしまったこともあって、小さくないリードを先生に許してしまっている。このままではマズい、本当に遅刻にされてしまうではないか。もう、廊下を走ってはいけませんとか、そういうことを言っている場合ではない。廊下を走ってはいけませんが、しかし緊急事態においてはその限りではないのである。

## 出席を取る・取られる

「っだあ!!」

「にゅあ!!」

予鈴と本鈴の狭間、俺と霧子は全速力のダッシュで前方を高速移動しているゆり先生を追い抜くと、目の前に迫った教室の扉をガラッ!! バンッ!! と開き、無事にゆり先生よりも早く教室にたどり着くことに成功したのだった。しかし、ゆり先生がスピードを上げたときは驚いたが、よく考えたら俺たちが全力で走ればきっちり追いぬける速度に加減してくれていた辺り、先生のやさしさがほんのりと感じられた。

「三木ちゃんも天方ちゃんも、遅刻にならなくてよかったですね」

「ちよつとゆり、なに生徒といっしょになって騒いでるのよ。いくら授業中じゃないからって、廊下では静かにしなさいよね」

「はいはゝい、すいませんですよ」

「にゅゝ、綾ちゃん、ごめんなさい……」

「天方さんも三木くんも、あんまり廊下では騒がしくしないこと。遅刻ギリギリでくるのもよくないんだから、二重でよくないわよ」

「はい、気をつけます……」

俺たちがギリギリの時間にきたのだから当然なのかもしれないが、教室の中にはすでにクラスの全員が揃っていて、俺たちは案の定最後に登校してきた二人というわけなのであった。まあ、別に遅刻にならなければ一分前に来ようが十分前に来ようが一時間前に来ようが変わらないのだから、特に問題という問題はないのだろうが。

「まあ、遅刻じゃないんだし、今日のところはいいってことにしてあげるわ。二人とも、早く自分の席に着くこと。それじゃあ、ショートホームルーム始めるわよ。まずは全員揃ったところで出席から取りましようか。ゆり、よろしく」

「はゝい、了解です。相葉ちゃん」

「ほゝい」

「天方ちゃゝん」

「にゅ、はゝい」

ゆり先生が出席を取るのを聞きながら、俺は机の間を縫うように通って自分の席へと向かうのだった。俺と霧子はこうしてギリギリの時間に来ることが多いので、先生から今みたいな注意を受けることも決して珍しいことというわけではない。できればそれを避けたいと思う気持ちはあるのだが、しかしなかなかそうすることができていないのが現状である。

生活そのものを大きく変えない限りそれは難しいんだろうなあ、と思うが、その生活を変えらるというのがなかなか出来ないわけだ。つまりそれってというのは、今まで長い時間をかけて造り上げた一つのサイクルを崩すということとで、「やるぞ」と思ったからといって出来ることではないだろう。

というか、変えないといけないのは俺の生活サイクルではなく霧子の生活サイクルなわけで、俺がいくらやる気になったところで意味がないのである。ここは霧子にやる気を出してもらって、なんとか生活改善に取り掛かってもらうしかあるまい。いや、でもなあ…、霧子って基本的に十時睡眠だしなあ…。実はこれ以上ないほどに、それこそ俺なんか目じゃなくくらいに健康優良児な生活サイクルなんだよなあ。今以上に早く寝るとなると、九時睡眠か？ いや、それはダメだろ。さすがに、いくらなんでもそれは早すぎるんじゃないか？ 霧子にだってやらなくちゃいけないことがいろいろあるはずなんだし、九時なんか寝てたらそれが出来なくなってしまうではないか。

…、ということはつまり、今の状況から脱しようと思ったら俺が今以上に頑張って霧子をすばやく起こさないといけないってことなのだろうか。さすがに、いくらなんでも今よりも早く起こすっていうのは厳しいぞ。うゝん、やっぱりどうしようもないのかなあ。俺が霧子にかまひ続ける限り、俺は遅刻スレスレに登校する定めなのか

もしれない。

「よっ、メイ、おはよ」

『おはよ』

「今日も何とか間に合ったわ」

『遅刻、ギリ』

「まあ、いつものことよ」

『たしかに』

「俺たちは真っ当に生きてるはずなのに、どうしてか不思議と遅刻しそうになるんだよな。何がいけないのかは、さっぱりわからないんだ」

『起きるの遅い？』

「いや、弁当つくってるし、きっと誰よりも早起きだぜ」

『寝るの遅い？』

「んー、確かに寝るのは早くないな。だいたい十二時回るころだ」

『朝の準備の、手際が悪い？』

「あー、それはある。霧子の動きがな、悪すぎるんだ。そうか、動きか。そこを改善することができれば、起きる時間も寝る時間も問題なくなるしな」

『でも、起きる時間と寝る時間は直せるかもだけど、寝ボケちゃうのは直せない』

「…、だよなあ。っていうか、霧子が朝起きてすぐにしゃきしゃき動き出したら怖いって。十年來の前提条件覆されたら、俺の動きが悪くなるわ」

『じゃあ、無理』

「やっぱムリか。俺もな、薄々は無理じゃないかと思ってたんだ」

『だってきりちゃん、寝てるの十時』

「それ以上は、さすがに早寝させられないよな」

『テレビもあるし、きつときりちゃん寝ない』

「ああ、テレビか。そうか、ドラマがあるもんな、さすがに何があっても九時には寝ないか」

『幸久くんが、もっと早く起きるのは？』

「おいおい、俺が起きてるのっておおむね六時、ときどき五時だぜ？」

『早起き』

「まあ、弁当つくるのにもそれなりに時間かかるからな。あつ、そういうばメイは最近料理してるか？　なんか前に練習してみるとか言ってただろ？」

『お母さんのお手伝いから』

「そうか、まあ、そうだよな。そのお手伝いの成果、ぜひ今度の実習で披露してくれな。期待してるぜ、メイ」

『そんなに期待されても、大したこと出来ない。まだあんまり包丁とか触らしてくれない』

「おかあさんも心配性だなあ。かわいい子には旅させよ、って言葉を知らないらしい」

『基本的に、混ぜるのが多い』

「んー、でも混ぜるのってなにかと大事だったりするし、それはそれでいいのか？　とりあえず、これまでの実習を見る限り、少しは出来るようになってるみたいだし、俺は心配はしてないぜ」

『とにかく、がんばる』

「おお、とりあえずがんばるのはすっげえ大事だからな。よく分かんなくても、とにかく何かしらを頑張っていればいいんだよ」

『そういうもの？』

「そういうものだ」

『じゃあ、とりあえずがんばる』

「みんなでフォローし合うのがチームってもんだ」

『今回も、幸久くんと同じチーム？』

「んっ？　ああ、メイがよかったらな」

『いい』

「そうか、それじゃ同じチームだな」

「三木ちゃん」

「はい」

「持田ちゃん」

すっ…（メイが手を挙げた音）

『そういえば、幸久くん、よかったの？』

「？ よかったって、何が？ 実習のチームなら、全然問題ないけど？」

『そうじゃなくて、今日来なかったけど、よかったの？』

「学校、来てるぜ？」

『えと、そうじゃなくて、これの前』

「ああ、もしかして前って、シヨートホームルームの前ってことか？ シヨートホームルームの前に、なにかやってたのか？」

『…、知らないの？』

「知らないって、何を？ 俺はもはや、何を知らないかを知らないんだけど？」

『昨日、連絡網廻って来なかったの？ 夜の八時くらいに電話が綾ちゃんから電話が廻ってたんだけど……』

「いや、かかってきてないな、電話なんて」

『きりちゃんにも、かかってないのかな？』

「それは、どうだろう…、ちょっと分からないな」

『そうなんだ……』

「それで、その電話ってどんな内容だったんだ？ なにか、急ぎで廻さないといけない用事があるから、綾先生もわざわざ連絡網なんて使ったんだろうし」

『内容は、今日の朝、八時に教室に来てください、みたいな感じだったみたい。あたしが出たわけじゃないから一言一句間違いないかは分からないんだけど』

「まあ、メイは電話出ないよな。…、それとも電話したら、メイは言葉を発してくれるのか？」

『…、たぶん、お母さんに代わると思う』

「…、そう、だろうな。そうだと思った」

『あんまり、おしゃべりは得意じゃない、かも』

「得意じゃない、って一言で言うには、少し言葉をはっしなさすぎるけどな、メイは。まあ、それはいいんだけどさ、そういう内容の電話なら、霧子にはかかってきてないな。霧子にそういう電話がかかってきたらそのままの流れで俺にその内容を伝える電話がかかってくる。朝早く行くためには霧子を早く起こさないといけないし、そのためには俺が早くに霧子を起こしに行かないといけないからな」

『そんな流れがあるんだ……』

「で、先生は何をするか言ってなかったのか？ いや、今日の朝にここに集まるってことはさっきだし、もうなにかやったのか？」

『やった。きりちゃんと幸久くんはいなかった』

「まあ、八時って言ったら、ちょうどそのころ家を出るころだからな。教室にいるはずがないんだけどな。っていうか、今朝姐さんが校門にいなかったのはそれが原因か。なんだよ、風紀の用事でも風邪で休みでもなんでもないじゃねえか」

『のりちゃんは、今日も元気』

「たしかに、さっきも出席取られてるとき、めっちゃ元気に返事してたしな。きつと姐さんは風邪とかとは無縁の人種なんだだよ。まあ、俺もあんまりひかないけどな、風邪」

『あたしはたまにひく』

「そうなのか、風邪には気をつけろよ、メイ」

『気をつける』

「風邪なんかで学校休んだりしたら、つまらないからな。それで、けっきょくさっきまで何してたんだ、クラス皆で集まって、俺と霧子をハブにして」

『二人にいじわるしたかったんじゃない』

「えっ？ そうなのか？」

『二人がいたら、上手く話が進まなかったと思う』

「つまり、俺たちには聞かせられない話、的な？」

『でもたぶん、後で聞かされると思う』



「聞かせられるのに、そのときは聞かせられなかったのか？」

『なんていうか、事後承諾、みたいな』

「事後承諾？ 急に怖い単語が出てきたな……。それはどういう関連の話なんだ？」

『体育祭関連』

「出来れば、どんな話だったか説明してほしいんだけど、メイ、お願いしてもいいか？」

『あたしじゃ、たぶんうまく説明できない。あとでのりちゃんが教えに来てくれると思うから、そのときに聞いた方が効率いいと思う』

「まあ、姐さんは説明上手だからな」

『あたしはケイタイだから、きっと説明しても分かりにくいし、変に時間がかかる』

「それは、仕方ないことだろ。だってメイはデフォだろ、その状態が。今さらそんなこと言うつもりないって」

『幸久くんは、あんまり追及して来ない、やさしい』

「いや、だって、言いたくないこと聞かれても困るだろ、メイだって。どんなのかは分からないけど、何かしら理由があるんだろうし、なんでもかんでも根掘り葉掘り掘り返せばいいってもんでもないじゃん」

『言いたくないことを、察して聞かなくてくれるのはいい人。普通の人はとりあえず聞いてくるから』

「俺はただ、友だちのイヤがることしたくないだけだ。っていうか、友だちってそういうもんじゃないのか？」

『それじゃあ、あたし、今まで友だちいなかったかも』

「…、そういうこと言わない」

『冗談』

「…、だったらいいんだけど」

『でも、いちばんやさしいのは幸久くん』

『どうだろうな、それは』

『あたしは、そう思うから』

「俺もメイのこと、歴代友人トップ10くらいには入ってると思ってるぜ。まだ付き合いが短いから五指に入るとは言えないけどな」  
『一番は、きりちゃん?』

「ん〜、霧子は友人っていうか妹だから、カウントしてないかも。なんていうか、永久欠番みたいな、あれ」

『あたしも、そうなれる?』

「妹梓と姉梓と姐梓と従者梓とペット梓はもう埋まってるから、それ以外ってことになるけどな」

『よかった。まだ、一番大事なのが空席』

「? 一番大事? なんだろ……」

『ないしょ』

「なんだよ〜、教えてくれよ〜」

『言ったら、幸久くんが気にしちゃうから言わない。ヒントもなし、自分で分かって』

「難しいな、おい。なんだろう、一番大事な永久欠番って……」

「三木ちゃん、お話聞いてるですか〜」

「…、聞いてませんでした!」

「素直でよろしいですね〜。お隣の持田ちゃんとおしゃべりばかりしてたらダメですよ。気を抜かずに先生のお話に耳を傾けてくださいね〜」

「はい、気をつけます!」

「いい返事ですな〜。それではお話を続けますね〜」

『怒られちゃった』

「気をつけないとな」

とりあえず、俺と霧子の知らないところでなにかがあったらしいということだけは分かった。しかし残念ながら、それが何であるかというところまでは分からないが、まあ、姐さんがあとで説明してくれるってことだし、別に今無理に、問い詰めるように情報を集める必要もあるまい。

今はとにかく、メイとのおしゃべりに熱中したことによって聞き落

とってしまった先生のお話——いつの間にか出席は取り終わっていた——を、せめて今からでも聞かなくてはならないのだ。まったく、ゆり先生のことだけはしっかりと見ていなくてはいけないと言われているというのに、集中しろよ、俺。

## 姐さんの詫び入れ

「三木、すまない……」

「…、あの、姐さん、俺は風紀に逮捕拘束されるようなことは何もしていないつもりなんですけど、いったい何事でしょうか……?」

朝のショートホームルームが終わった、一時間目が始まるまでのわずかな時間を見計らって、姐さんは授業準備のためにかばんの中をガサゴソとしている俺の肩を叩いた。姐さんは謎の武道を極めているらしく、経脈秘孔を突いてこちらの動きを封じてきたりするので、こうして肩に手を置かれたりしたらおしまいというか、行動を制圧された挙げ句に易々と拘束されてしまうのだ。

ちなみに、高校生になったら不良適行動は、それがどのような軽微なことであっても封印すると霧子と約束している俺は、学校の中で大規模な問題を発生させることはないわけで、風紀委員会に逮捕されたり拘束されたり尋問されたりするような状況に陥ったことはなく、姐さんの手を煩わせたことは一度もない。もちろんそれは、一度もないことが前提みたいなものなのだろうが、しかし確かに間違はなく、そんなことをされたことはないのである。

「お、俺を逮捕するなら…、弁護士、通してもらわないと困るぜ……?」

「いや、私は別にお前を逮捕してきたわけではないのだ。それよりもむしろ、お前に謝りにきたんだ」

「あ、謝る? そ、それは、どういう……?」

「今日の朝、ショートホームルームの前の時間、お前たちがいなかったことと、私はお前に謝らなくてはならないのだ。今ここに来たのは、つまりそういうことであって、お前が何か問題を起こしたというわけではない。心配することはない、すぐに解放する」

「そ、そうなんだ……。でもさ、姐さん、別にこうして俺のことを拘束する必要はないよね? っていうかさ、なんか姐さんに手が置

かれてる方の手がさ、ぜんぜん動かないんだけど、これは何……？  
「痛いのか？」

「いや、痛くなさすぎて、むしろ逆に不安なんだけど……。ふつうさ、こういうのってもっと痛いものだよね。なんていうか、痛いから従わざるを得ないみたいなの？ でもさ、なんか、まったく痛くないの。ほんとにポンって置いてるだけ。でもそれなのに、手を置かれてるだけなのに、どうしてかそこから先がぴくりとも動かないの」「大したことをしているわけではないからな、問題はないぞ」

「問題なくても、心配だぜ？」

動かないと言って、果たしてどんな状況になっているかといえば、俺はいすに座っていて、姐さんは俺の斜め後ろのあたりに立っていて、姐さんは俺の肩にほんの軽く手を置いている。そしてたったそれだけのことだというのに、俺は手一本、いやそれどころか指一本動かすことができないのだった。

姐さんの手には、力が入っている様子はない。触れるだけでしかないと言っても、おそらく表現として間違っていない。たったそれだけだというのに、俺は動けない。このまま風紀委員会の本部に連行されるとしても、俺はその事実を疑わないだろう。

「っていうかさ、別に逃げないから放してくれないか？ っていう系の話かはぜんぜん分からないんだけどさ、ちゃんと聞くから。解放された瞬間に走り出したりしないから。どうせ全速力で走ったって姐さんからは逃げられないんだし」

「…、確かに、それはそうだな。短距離走なら分からないが、逃走者を捕獲するための追走ならば、私は絶対に負けないからな」

「姐さん、長距離走でもスピード落ちないんだもん。絶対体の構造がおかしいんだよ」

「私は体の構造がおかしいのではない、体力があるのだ」

「いや、あれは絶対に体力がどうこうってレベルの話じゃないね。きつと姐さんは身体の中に高エネルギー発生炉とか内蔵してるんだよ、そうに違いないよ」

「失礼なことを言うな。私はただ体力が人よりあるだけの、ただの女子だ」

「姐さんのことをただの女子っていうのは、なんていうか言葉上はまったくもってその通りなんだけど、納得しかねるよな。少なくとも、ただの女子ではないって」

「それではどのような女子だというのだ」

「…、すごい、女子じゃね？」

「具体的にどこがどうすごいのだ」

「全体的に、すごいと思うぜ？」

「まったく要領を得んな」

「俺自身も、どうやって言ったものか分からなくなってるんだけどね。それで、えっと、なんだっけ、朝に何があったかの話だったっけか？」

「ああ、そうだ。三木のせいで話が脱線してしまったではないか。一時間目が始まるまでの時間は五分少々しかないんだぞ、有効に使わなくてはならないのだ。意味もなく話を脱線させている暇はないぞ」

「それは、確かに。それじゃ、さっそく頼むぜ。メイに聞いても、あんまよく分かんないんだよな」

そういえば、メイは今この瞬間、俺の隣の席に座ってはいない。どこに行ってしまったのかは分からないが、しかし先生たちが教室から去っていったすぐ後にそそくさと教室を出て行ってしまったのだ。アレだけ急いでいたってことは、けっこう急ぎの用事か、あるいはトイレを我慢していたかのどちらかだろう。

いや、別にそれをメイに直で聞いたりはいしないぞ？ そんなことするわけないじゃん。どうして女の子に「トイレ行ってたのか？」なんてデリカシーのないことを聞けるっていうんだ。紳士たるもの、そういうことにはあえて触れずすっ呆けた感じを演出しつつ帰ってくるメイを出迎えばいいだけなのだ。むしろ逆に、それ以外に俺に出来ることなんてないのかもしれないが。

「持田では、少し説明するのに難があるかもしれないからな。なにしろ持田は携帯電話だからな」

「そういうことらしくてさ、きつとあとで姐さんが来るだろうしそっちに聞いてくれて言われたんだ」

「それが賢明だろうな。まあ、私の至らなさが原因のようなことだ。私が責任を持ってお前に説明するのが筋というものだろう」

「えっ、なにになに？　姐さんのせいで俺がヤバいの？」

「なぜ少し楽しそうに言う」

「楽しいっていうか、姐さんが俺に迷惑かけるなんて珍しいことだし、ちよつとうれしくて」

「迷惑をかけられて、うれしいのか？　それは少し、悪趣味が過ぎるというか、己の性癖には素直すぎるのではないかと思うぞ……？」

「いや、性癖とか、そういうのじゃないって。…いや、俺はおそらくMなんだろうけどさ。そうじゃなくてさ、見れば分かると思うんだけど、俺って人の面倒に首を突っ込みたいというか、むしろ面倒かけられたいというか、世話焼きだと思うんだよ。ほら、霧子の面倒とか長年見てるし、あえて志穂と友達だったり、いろいろ面倒な感じにさらされていたいっていう感じなんだって。そこらへんは、分かってくれるだろ？」

「分からなくはない。お前は、そういう性質だ」

「すぐに分かってくれてうれしいよ、姐さん。こうやって察しがない人が話し相手だと、いろいろ楽でいいよなあ」

「私は特に察しがいいということはないぞ」

「いや、姐さんは察しいいよ。霧子だったらなかなかそうはいかないって」

「そうなのか？　天方だって、そう鈍いわけではあるまい。むしろ、三木との付き合いは長いのだから察しもよくなるのではないか？」

「んー、まあ、霧子は霧子だからな。あんまり出来ないことを要求しすぎるのも酷ってmondと思うぜ？」

「そのようなことはないと思うのだがな……」

「いやいや、そういうもんだって。それでさ、姐さんって基本的に自分で何でも出来ちゃうからさ、俺になかなか迷惑かけてくれないじゃん。だから俺はさ、こう、姐さんが俺に迷惑かけてくれるか、姐さんの行動のせいで俺がピンチになるのを待ってたんだよ」

「それは、別に待つものではないと思うのだが、まあ、お前がそういうからには、お前にとってはそうなのだろうな」

「そうそう、そうなんだよ。俺さ、俺に対して多かれ少なかれ迷惑かけてくれるようになって、初めてその人は俺の深い友だちになったとか思うんだよな。やっぱ、親友じゃないと迷惑かけづらいと思うんだよ、俺は」

「私は、基本的に他人に迷惑をかけるのが嫌いだ。なんというか、申し訳なくなってしまう」

「申し訳なくなってるんだって。もっと積極的に俺に迷惑かけてくれて、姐さん」

「私は、他人に迷惑をかけるのは、不本意だ」

「まあ、姐さんがそう言うんなら、俺としては無理強いのなことはできないんだけどさ。でも今回は、姐さん自身も認めるほどに明らかに、俺に迷惑かかってるんだろ？ それはそれでうれしいわ」

「…、あまり、迷惑をかけられてうれしいと連呼するんじゃない。それよりも話をしよう。時間は有限だと、ついさきほと言ったばかりではないか」

「ん？ ああ、あんま脱線ばっかってわけにもいかないか」

「そういうことだ。それではまず、今朝なにをしていたかという話なのだが、体育祭についての話を先生がしていた」

「なるほど、ってことは、出場種目とかの話か」

「いや、そうではない」

「違うのか……。じゃあ、どういう感じの話？」

「…、先生は、体育祭でうちのクラスが最下位を取るのが嫌なのだそう」

「最下位がイヤ？ そんなの俺だってイヤだぜ。っていうか、みんな



なだってイヤだろ」

「しかし私たちは家庭科専攻クラスだ、男子の数が少なすぎるではないか。最下位というのも、ある意味では仕方のないことだとは思わないか？」

「まあ、そう言われちゃうと仕方ないかもしれないけど、でもなにもしないうちから仕方ないねって諦めるのもなあ……」

「先生は…、絶対にあきらめないのだそうだ。だからこそ、体育祭で活躍した者には景品を出すらしい。頑張ったら対価として景品をプレゼントするからがんばれ、ということらしいのだ」

「へえ、対価で景品ねえ…、いったい先生、何をくれるつもりなんだか」

「獲得得点の上位三名までが対象らしい」

「そうなのか、先生、かなり攻めてるな……。三人分って、思ってるよりもずいぶん多いぜ？ そんなに負けたくないってことなのかな……」

「それはそうなのだろうな。話の端々から、そういった雰囲気は感じられた」

「そうか、先生、そんなにやる気なのか。これは俺もいっちょ頑張るしかないな。景品もそうだけど、負けるのがそもそもイヤだからな。で、景品って何なんだ？」

「…、その件について、私はまずお前に謝っておかなくてはならない。この通りだ、すまなかった」

「姐さん、なんで謝られてるのかさっぱり分らないんだけどさ、とりあえず顔あげてくれよ。話聞いちゃっても、謝るのは遅くないだろ。とにかく、何があったのかをまず教えてくれよ」

「…、分かった、話をする。その後、私のことは三木がいいように罰してくれ。何でも、お前がいいと思うように罰をくれればいい」

「姐さん、そういうのはよくないと思うんだ。なんでも好きなようにしてくれっていうのは、男の前では言ってはならないことだと思うんだ」

「私はお前に迷惑をかけた、しかも半端なものではない。これくらい言わなければ、私の気が済まんだ」

「…、まあ、そういうことなら…、いや、別に何もしないからね？ 罰を与えるとか言ってナニをするとか、そういうオチには持っていかないからね？」

「？ 何を言っているのだ、お前は？」

「いや、気にしないで。それより、話を」

「？ 分かった。先生によるとだな、二位と三位の景品は、木原先生と八坂先生のそれぞれが用意するらしい。その内容については、これから決めることにしているのだそうだ」

「へえ、そうなんだ」

「それで、一位の景品なのだが…、非常に言いにくいのだが、…、三木、お前との、…、一日デート券なるものを、一枚発行するらしい……」

「へえ、そうな、んだ…？？」

「本当に、済まなかった！」

「…、姐さん、二つ聞いてもいい？」

「ああ、聞いてくれ」

「一つ目は、俺はそのデート券？ のことについて何も聞かされていないんだけど、ってこと。二つ目は、そのどこらへんが姐さんのせいなのが分からないんだけど、ってこと」

「一つ目について、お前の承諾はこれから何としても取りつけると言っていた。間違いなく事後承諾ということになるだろうな」

「マジか…。なんで俺、知らないうちに景品になってるの…」

「二つ目については、私は先生がそれを実行に移すことを止めることができなかった。私はそれをしなくてはならなかったというのに、出来なかったのだ。それは私の責任ということだろう」

「…、それはどうだろう…？ なんでもかんでも自分の責任にすればいいってもんでもないよ、姐さん。誰にもどうしようもないってことは、あると思うよ」

「いや、しかし…、私の責任なのだ。反対する者がいたら言ってくれと聞かれたのだから、そこできちんと反対と手を挙げておけば…！」

「？　ってことは、姐さんとしてはそのことを、パツと聞いた時点では反対じゃなかったってこと？」

「…、いや、その、だな……。…、そのようなことを、婦女子に聞くものではないだろうが！」

「っかはっ！？　なぜに！？　でもとりあえず、すいませんでした！？」

なぜか、殴られた。果たして姐さんにとって、今の俺の発言のどこら辺が気に食わなかったのかは分からないが、まあ、きっと何かがいけなかったのだろう。

「と、とにかく、私の力及ばずお前に迷惑をかけてしまった、済まない」

「ぜ、ぜんぜん気にしないでいいぜ……。迷惑なんかじゃないからさ……」

しかしまあ、よく分からない状況になっているらしいのだが、一日デート券？　くらいなら、別に大した問題もあるまい。どうせ一番活躍するのは志穂なのだ。志穂と一日デートというのは少なからぬ胃痛を伴うのだが、辛いというほどではない。

というか、今はそんなことよりも、姐さんの拳がめり込んだ頬の方が気になるのだが。っていうか、やっぱ姐さんのパンチとか冗談にならないな……。

「ああ、そうだ。あとな、八坂先生が昼休みに家庭科準備室に来るように言っていたぞ。体育祭の景品のことについて話があるのだそうだ。しっかりと抗議して、デート券など止めてくださいというのだぞ」

「姐さんは、俺のデート券が発行されるのかイヤだったりするの？」

「わ、私は…、…、そのような恥ずかしいことを聞くんじゃない！」

「えっ？ 恥ずかしいの？ 姐さんが恥ずかしがるってことは、つまり」

「黙れ！！」

「すいませんでしたっ！？」

姐さんのことをからかうのは、何にしてもやっぱりよくないと思う。

## ポジティブ・シンキング

姐さんからいただいた、頬と腹への二発の拳骨のダメージを抱えたまま半日を過ごし、なんとか四時間目までやり過ごした俺は、とりあえず姐さんに言われたとおりに家庭科準備室へと訪れていた。家庭科準備室とは、つまり家庭科の授業を準備するところであり、それっていうことはつまり家庭科教師の根城である。というか、うちの学園にはゆり先生以外の家庭科専門の教師がいないわけで、家庭科準備室とは名ばかりに、もはやゆり先生の私室といってもいいような有り様である。

「呼ばれてきたとはいえ、若干入りにくいんだよな、ここって……」この教室が、学園の中に存在する一室でありながらゆり先生の私室のようである、と言わしめる最大の要因は、その扉にある。

「いつも思うけどこれ、完全に表札じゃん」

家庭科準備室の扉には、「八坂ゆり」と彫り込まれた表札然とした木彫りの板が貼りつけられているのだ。そんなこととしてどうして学校側から怒られたりしないのかは分からないのだが、実際にそうしているのだから仕方ない。事実事実として受け入れるしかないのである。

「まあ、別に、俺としては違和感無いし、いいんだけどさ」

とりあえず、いつまでも家庭科準備室の前でぼつとしているわけにはいかないわけで、さっさと用事を済ましてしまうのがいいだろう。っていうか、急がないとせっかく今日も用意した昼飯を食えなくなっちゃうしな。あつ、いや、ウソ、用意したの俺じゃない。

かりんさんがうちに来てからというものの、俺が自分で食事を用意する機会は、その以前に比べておおよそ半分まで減っている。それはかりんさんが自分にもなにか家事の手伝いをさせてほしいと言いだしたことに端を発した事態である。しかし実際の話、我が家における家事分担は、一年以上の生活を通して俺と広太の二人で回すよう

に出来あがってしまったって、そこにかりんさんを新規参入させるということには少なからぬ苦労があったのだ。

まあ、大変だったのは俺ではなくむしろ広太だったのだが、しかしそれは俺にとっても、何も関係のないこと、と言うわけではなかった。俺は俺で、かりんさんと折り合いをつけるために言葉を戦わせたりしたわけなのである。

俺がその戦いの中に身を投じるようになったのは、けっきょくのところ、我が家で行なわれる調理活動のすべてを請け負う、とかりんさんが主張したことにあるのだ。それにはもちろん理由があり――広太とかりんさんの間で交わされた家事労働の割り振りに納得しなかったかりんさんが、それならばせめて料理くらいはやります、みたいな感じになったのだ――、それにも納得するはするのだが、しかしだからといって俺が料理する機会を奪われるのは「ちょっと待って」なのだ。

俺だって、別に今まで義務感だけで料理をしていたわけではないし、少なからず我が家の台所を守ってきたプライドもある。それだっていうのに、いきなり明日から料理の機会を全部奪われてしまうのは受け入れられない。別に料理する機会の独占をしたいとは思わないが、せめて半分くらいにしたいんだ！　と思っただのである。

その話し合いはおおよそ半日にわたって行なわれ、最終的な結論としては朝と夜は一日交替、昼はかりんさんがつくるということになった。正直に言えば、俺は昼も一日交替にしたいなあ、と思っただのだが、しかしかりんさんが頑としてそこを譲ってくれなかった。俺が折れた形である。だから結果的に、全体的に見たときの俺の料理回数がかりんさんの料理回数よりも少なくなってしまうのだが、まあ、それくらいのことと目くじらを立てるような狭量はしていないつもりだ。

いいじゃんいいじゃん。昼はかりんさんがつくってくれたおいしいものが毎日食えるわけだし。…いや、俺のつくったものだって美味しい。晴子さんの下で学んだ十年弱が、かりんさんの積み重ねた

年月に劣っているとは、俺は思わないがな。でもだからって、それを強硬に主張してかりんさんと意見を交換してはそれ以降の關係が気まづくなってしまう——どうせ俺のことだから、自分の主張を強く出したら意固地になってムキになるに決まっている——だろうし、いいところで妥協することが必要だろう。まあ、半日かかったことから分かるけど、俺もかなりムキになりつつあったわけで、そのまま交渉決裂みたいなことにもなりかねなかったのが本当のところなのだが。

「先生、三木です」

『はいはーい、三木ちゃんですねー。待ってましたよー、入ってくださいーい』

「失礼しまーす」

ガララッ、と扉をスライドさせて、俺は家庭科準備室の中へと足を踏み入れた。そこは、なんというか全体的にファンシーな感じで、常に振り袖着用なゆり先生の和風イメージからかけ離れた空間だった。確かに、磨りガラスの窓を通して見える部屋の中はそこはかとなくピンク色で、あー、けっこうピンクなんだろうなあと思ってはいたが、まさかこんなにピンクだとは思わなかった。

まあ、先生はこういう感じが好きそうだし、いいんじゃないかね？ 確かに学園の一室であるこの部屋を、ここまで自由気ままに改造してしまっているのかは分からないが、でもそれって結局あれだろ。賃貸した部屋をいくら改造しても、出ていくとききれいにすれば敷金も礼金も帰ってくるみたいなの、あれに違いあるまい。

「三木ちゃん、いらっしやーい」

「早かったわね、三木くん。お昼食べてからくると思ってたけど」

「あつ、綾先生もいたんですね。はい、きっと教室からここまで往復してたら食ってる時間なくなると思ったんで、持ってきたんです。戻るついでに学食にでも寄って食べてこうかなって」

「そうですねー、でもそれだと、一人で食べるってことですよー？ それはちよっと、さみしいですねー」

「そうよねえ、いつもはみんなといっしょに食べてるのに、今日に限って一人で食べるなんて、わびしいわよね。あゝ、そうだわ、三木くんもここで食べてけば？　椅子は余ってるし、別にゆりもそれでいいでしょ？　それとも三木くんに食べてるところ見られるのはイヤ？」

「まさかゝ、そのようなことはゝ。というよりも、むしろ先生がそれを言おうと思っていたところなのでゝ、先輩に対して若干の憎しみが沸き上がりますねゝ」

「に、憎しみなんてわきあがらせないでよ！　別にいいじゃない、あたしが言ってもゆりが言っても、三木くんがいつて言えばここでいっしょにごはん食べるって事実は変わらないんだから」

「それとこれとは話が別、ってやつですよ。先生が、三木ちゃんを、直接、お昼御飯に誘って、それでいっしょに食べる、というのが重要なですよ。ただなりゆきでいっしょに食べるのでは、70点くらいですねゝ」

「あっ、でも70点くらいはいくのね」

「三木ちゃんといっしょにご飯するだけで、80点はいきますからねゝ。先輩が勝手に誘っちゃったのでゝ、10点減点ですゝ」

「そうだったのねゝ、まあ、あたしとしては何でもいいんだけど。それより、食事の前にまずはお話をしましょう。三木くんにも、そのためにわざわざこんな辺鄙なところまできてもらったんだしね」

「むむむゝ、先生のお部屋を辺鄙だなんて、いくら先輩の言であっても許せんゝ」

「そんなところに食いつかないでよ、話が進まなくなるじゃない。ごほん、話っているのはほかでもない、体育祭のことよ。風間さんから少しは聞いてると思うけど、三木くんには、君にしかできない重大かつ重要な使命を申しつけたと思っているの」

「はあ、確か、一日デート券がどうか……？」

「ええ、そうよ。やっぱり風間さんに言伝を頼んだのは正解だったわね、あたしが話をするまでもなくきちんと話が通ってるじゃない。



じゃあ確認、三木くんは、風間さんからどこまで話を聞いているの？  
「えっと、体育祭で一番活躍した人が俺との一日デート券をもらえ  
るらしいってことだけです」

「そう、それ以上の細かいことについては先生に任せるってことね、  
任せてちょうだい。風間さん、あなたからのタスキは、先生確かに  
受け取ったわ！」

「先輩はそういう、生徒さんとのつながりの熱血的なことがお好  
きですからね。三木ちゃんも、気をつけた方がいいですよ」

「ゆり、口出さない！ それじゃあ風間さんの話の続きからさせて  
もらうわね。とりあえず、三木くんには体育祭で一番得点とった人  
に一日デート券を提供してもらおうわ。これはあたしの考えた、みん  
なをがんばらせるために一番いい餌だから、イヤだとは言わせない  
わよ。どうしてもイヤだっていうなら、それよりもっとみんなを  
喜ばせられるものを考えてね。あつ、お金は使わないんだからね」

「…、すいません、パツとは思いつかないです…」

「それなら諦めて誰かとデートしてね」

「はい……」

姐さんにきちんと断ってこいと言われた手前、とにかくイヤですと  
言ってみるつもりではいたのだが、先生に先手を打たれてしまった。  
これではただイヤですとは言えないじゃないか。イヤですというた  
めには何かしらの代案を出さないといけないわけであって、そんな  
ものが簡単に思いつくわけが……。

「ん？ でも先生、俺とのデート券なんて、誰が喜ぶっていうんで  
す？」

「えっ？ 誰が喜ぶって、みんなよ」

「えっ？ 俺とのデート券でみんなが喜ぶんですか？」

「あたしの見立てでは、そうよ」

「でも俺、モテないですよ？ 非モテ男子ですよ？」

「はっ？ 非モテ男子？」

「えっ？ 違うんですか？ 俺、今まで彼女とかいたことないです

し、モテとは対照的な位置にいるような気がしてるんですけど……？」

「むしろ逆に聞きたいんだけど、非モテ男子の周りに、どうして女の子が集まってくるの？」

「いや、みんな友だちですよ」

「真の非モテ男子は、女の子の友達すら出来なくて困っているというのに、それは贅沢つものよ、三木くん。あたしもね、学生時代は男の子の友だちとかできなくてねえ…、いや、通ってたのが女子校だったってのも多分に影響してるんだけど」

「先輩は、同性にモテモテでしたね。異性には、さっぱりでしたか」

「異性にはさっぱりとか言わないで！？ あたしもね、いろいろ頑張ってるのよ！！」

「徒労とならぬことを、心よりお祈りしております」

「くっ……！ 自分はけっこうモテるからって…、調子乗ってるんじゃないわよ……！！」

「せ、先生、落ち着いてください」

「お、落ち着くわ、分かってる、落ち着くわよ……。ふう…、というわけだから、みんなうれしい三木くんのデート券は、景品に決定です。あと、細かい話だけど」

「先輩、先生は飽きちゃったので、お先にご飯をいただきます」

「もうちょつと待ちなさいよ！！ あと五分もかからないわよ！！」

「ですが、時間は有限ですので、同時並行でお話するのもありかと。三木ちゃんが五時間目に遅刻してしまったら、大変ではないですか」

「む…、それは、まあ、そうね……。仕方ないわね、それじゃあそういうことにするわよ。三木くん、続きは食べながらね」

「あっ、先生、あの、その前にひとつ。一番活躍するのって、志穂じゃないですか。結果が分かり切ってる勝負で、みんなやる気出るんですか？」

「えっ？ 優勝は誰か分からないじゃない」

「いや、でも、身体能力的に志穂が圧倒的に有利というか……」

「皆藤ちゃんは、点数半分ですの〜」

「えっ？ 半分？」

「そうよ。皆藤さんは半分なの」

「皆藤ちゃんだけではありませんよ〜。三木ちゃんのファミリーは〜、みなさんマイナススタートですの〜」

「それは、嫌がらせ、的なの……？」

「違うわよ、そういうのじゃないわ。いつもいっしょにいる人たちがデート券取っちゃったら、他の人はいい気がしないでしょ。バランス取ってるって思ってたでしょうだい」

「三木ちゃんとお話したいけど〜、いつもいっしょにいる人がいて割り込めない〜、なんてことを考えてる内気ちゃんも、いると思いますよ〜、先生は〜」

「は、はあ…、なるほど……」

「そういうことだから、誰とデートになるかなんてわからないってこと。おわかり？」

「はい、それはまあ、なんとなく」

「で、デート券の代わりのアイデアは、なにか思いついた？」

「いえ、それはまあ、まだですけど」

「じゃあ、デート券で決定ね。それじゃ、これから細かい話を詰めるから、三木くんもお弁当食べながら話に参加してね」

「…、分かりました」

「ん、素直でよろしい」

とりあえず、どうしようもないらしいということだけはよくよく理解できた。まあ、あれだ。別にクラスのやつらはみんなそれなり以上にかわいいし、デートに付き合うなんてマジ勘弁！ みたいなことにはならないだろう。先生も、その辺は配慮してくれた上での決断に違いあるまい。

うん、ポジティブに考えよう、ポジティブに。前を向いていれば、

大抵のことは納得できるもんだ。

## 昼飯をつまみつつ

「いただきます」

俺とゆり先生と綾先生の三人は、それぞれ自分の分の昼飯を目の前に広げて声を合わせて食事を開始したのだった。ここは家庭科準備室、俺は体育祭のことで軽く呼び出されて先生たちを訪ねてきたのだが、今はどうしてかいっしょに昼飯を食うことになっている。

まあ、俺が五時間目に遅刻してはいけないから、というゆり先生の言葉によってこの状況は生じているのだが、実際のところ、おそらくだが遅刻の憂き目にあうことはないのではないだろうか、と俺は思っている。いくら家庭科準備室が、俺たちの教室がある校舎から離れているといっても歩いて10分とかかかるわけではないのだ。本当にギリギリまでかからない限り遅刻などということにはならないだろう。

というか、綾先生はあと5分もかからないと言っていたのだから、その言葉を信じるとするならばもう間もなく話は終わっていたはずであり、昼飯に尋常ならざる時間を割かない限りはちこくなんてことにはなりようがないと言っても過言ではないのである。

「へえ、お二人のお弁当の中身はだいたい同じなんですネ」

まあ、ゆり先生がどういう意図を持って俺をここで食事させようとあんなことを言ったのかは分からないが、とにかく俺は結果的にここで弁当を開いているわけであり、今日の俺の昼飯の相手は先生二人ということだ。ああ、しかし、ゆり先生と食事するっていうのは家庭科の授業みたいでなんだな……。実習と同様に、つくった料理の提出を求められそうでなんとなく怖いぞ……。

「このお弁当は、先生がつくっている故く、中身は同じなですよ。まあ、先輩は好き嫌が多いので、全部同じというわけには参りませんが」

「なによ、別にいいじゃない。少し嫌いなものがあるだけなんだか

ら、そんなこと言われたくないわね。っていうか、ゆりだって嫌いなものあるじゃない、人のこと言えないわよ」

「先生が嫌いなのは、ジャンクな食べ物全般ですのよ、先輩の好き嫌いとは一線を画するものではないかと。先生は、基本的健康志向ですのよ」

「…、いや、それが何に対してであつても、好き嫌いというのはよくないと思うわ」

「先生は、嫌いなのではなく避けているのです。健康によろしくないものは食べないようにしているのですよ。食べられるものを、食べないようにしているだけです、やはり先輩のそれとは異なるものかと」

「…、ジャンクフード以外にも食べないものがあるじゃない。コーヒーとか、炭酸飲料とか」

「そういうものは、少し先生には刺激が強すぎるものですのよ。そもそも先生は、コーヒーのカフェインに含まれている覚醒作用に頼らなくてもお仕事をすることができなのです、先輩と違って」

「う、うるさいわね！ あたしだってコーヒー飲まなくても仕事くらいできるわよ！ でもなんか、コーヒー飲むと頭がすっきりした気がして、仕事がいともより出来る気がして、あと…、あと……」

「先輩、そんなにカフェインがほしいなら、先生としては緑茶がおすすめですよ？ カフェイン含有量的には、コーヒーよりも緑茶の方が多いと聞いたことがあります故」

「いや、でも、緑茶にはあのパンチがないから…、コーヒーじゃなきゃダメなのよ……。ブラックコーヒーをガバツと飲んだときの、あのガツン！ っていうのがないとダメなのよ……」

「難儀ですね、まあ、先生はあんな苦いものはいりませんですけどね。先生は、お茶とおまんじゅうがあればお仕事出来ますのよ」

「お茶にはカフェインが多いんじゃないの？」

「誰もが先輩のようにカフェイン目当てで行動していると思ったら、大間違いなのですよ。先生はただ喉を潤すためにお茶を飲むだけなのです。あと、頭を使ったら甘いものが食べたくなるので、おまんじゅうですね。ですが、今は先輩の好き嫌いのお話ですよ、先輩の嫌いなものは、ピーマンやたまねぎ等々のお子様がお嫌いなお野菜全般ですよ。まったく、コーヒーが飲めるからって大人ぶっても、所詮は子ども舌ですね、うふふ、情けないですね」

「や、止めなさい！　そういうことはばらさないの！！」

「好きなものはジャンクフードですね。先生が見てないと三食ファストフードのハンバーグとかしやがりますからね。絶対許せないですね。というかそもそも、食物アレルギーでもないのに好き嫌い言って食べないなんて、大人のすることではないですよ。そんな人間が教師として学生を指導するだなんて、ちゃんちゃらおかしいといえますか、笑わせますね」

「た、食べるもん！　あたしだって野菜くらい食べられるもん！　べ、別に情けなくなってるじゃないもん！　先生なんでもん！！」

「先輩先輩、口調が恥ずかしい感じです。素に戻ってますよ」

「はっ！？　ゆ、ゆり！　あたしのことからかってるんじゃないわよ！　そんなことより、早くご飯食べるわよ！！　あつ、話もするわよ！！」

「あらあら、自分に都合の悪い話になったら先生のせいにして終わらせようとするなんて、外道ですね。ですが、三木ちゃんを遅刻させないためにもお話はさっさとする必要がありますので、今回は先輩の考えに賛成ですよ。でもその前に、三木ちゃんのお弁当を見せていただきますよね。特別授業ですよ」

「えっ？　あつ、ええとですね……」

「はい、包みを開きましょうね」

「あれ！？　いつの間に！？」

この部屋に入って席に座ってからずっと手元においていたはずの弁

当の包みが、どうしてか今この瞬間、いつの間にかゆり先生の手の中にあった。もちろん、先生の行動の一挙一動をつぶさに観察していたわけではないから見落としてはあるかもしれないが、しかし自分の手元から弁当の包みを持っていくような動きは、さすがに見落とさない。見落とすわけがない。

いったい先生はどんな動きをもつてして俺の手元から弁当の包みを奪取したというのだろうか。というか、それも気になるのだがそれよりも、あの弁当は俺のつくったものではないのだ。おそらくだが、先生はそのことに弁当箱の中身をパッと見ただけで気付くだろう。いや、別に俺の弁当が俺製じゃないというのは大した問題じゃないし、先生に怒られるようなことでもないだろうけど、でもなんとなく微妙な気分だった。

なんというか、サボってるのがバレて気まずいというか、俺がつくったと信じて疑わない先生の期待を裏切るのが辛いというか……。先生、気付かないでくれないかなあ……。いや、それは無理だろうけどさ……。

「あら〜？　これ、三木ちゃんって感じじゃないですね〜？　誰かにつくってもらったですか〜？」

「あっ、いえ、あのですね……」

「三木ちゃんは、自分のお弁当は自分でつくる派でしたよね〜？　今日はたまたまですか〜？　それとも、どなたかい方でも、できましたか〜？」

ここで先生に、「ゴールデンウィークに旅行に行ったら許嫁がいることが発覚しまして、その人と今いっしょに住んでます」なんてことを説明し出したら、俺の平和な日常生活が大変なことになってしまいかねない。というかそんなこと、俺の口からは上手く説明できる気がしない。そもそも俺自身、まだ自分の中でその事実を消化できていないんだ。どうしてそれだというのにしっかりと説明することができるといふのだ。

ここは迷うことなく誤魔化そう。きっちり誤魔化せば、察しのいい



ゆり先生のことだ、それが誤魔化しだということを看破しても俺が誤魔化そうとしているという事実から「俺がこのことについて話したくない」と考えていることを読み取ってくれるに違いない。上手く話せないことを無理に説明しようとすれば、それは何らか話を破たんさせかねない齟齬を発生させることと同義である。なに、こんなところで罪悪感を感じる必要はない。これはただ、変化球で先生に俺の真意を伝えるだけなのだから。

「た、たまたまです」

「んゝゝ、ウソですねゝ」

「う、ウソじゃ、ないですよゝ？」

やっぱり一瞬で察知された。これは俺のウソの吐き方が決定的に下手なのか、それともあるいは、先生の察知能力自体が異常なのか。どちらにしても、ここから先は俺の思った通りになることだろう。

つまり、先生が俺の苦境を察して質問を遠慮してくれ

「それではゝ、たまたまどなたにつくっていただいたのですかゝ？」  
なかった。

「……………」

「三木ちゃんがそれについて言いたくないってことはゝ、わざわざ誤魔化すようなことを言ったので分かりますゝ。ですがゝ、それであつても聞かなくてはならないことというのはあるのですねゝ。そしてこれが、まさしくそれなのですよゝ。さあ、どなたにつくっていただいたのですかゝ？」

「…、母です」

「三木ちゃんの御母堂様はゝ、三木ちゃんが物どころつく前に亡くなられたと聞いておりますゝ。その『母』というのはゝ、三木ちゃんの育ての親の『母』ということで、よろしいですかゝ？」

「…、くわしいですね、細かい設定に」

「ええ、まあゝ、三木ちゃんのことですからゝ。天方ちゃんからいろいろ聞きだした甲斐あつてゝ、今では一端の三木ちゃん博士ですよゝ」

「…、霧子め…、ペラペラ何でもかんでもしゃべりやがって…、あとでお仕置きだな…！」

「ちなみに、三木ちゃんがその育ての御両親と別の家に住んでいるということも、存じております。つくってくださったのは御母堂様というのは、少々苦しい逃げでしたねえ。まあ、三木ちゃんが話したくないことを無理に聞きだそうとは思いませんので、ご安心を」

「助かります……」

「ゆり、あんまり立ち入ったことをしちゃダメよ。いくら教師だって、学生のプライベートを荒らす権利はないんだからね」

「分かっていますよ、先輩は心配性ちゃんなんですから」

「あんまり信用ならないのよねえ、あんたのそういう関連の言葉は。あんたの恋愛って、いつも偏執的じゃない」

「あらまあ、失礼な。先生は三木ちゃんのことを縛るつもりなどありませんよ。両者合意の上での、健全な関係を望んでおりますので」

「あんた、いつもそう言うのよね」

「あらあら、そのようなこと、恋人の一人もできたことのない先輩に言われたくはないですね」

「一人もいなかったわけじゃないわよ！」

「知っていると思いますぐ、お試してデートしただけの同性は、恋人にカウントしませんからね？」

「そんなこと分かってるわよ！　いくらなんでもそんなことを言いたいわけじゃないわ！　って、そんな話をしてるときじゃないのよ、今は」

「ええ、その通りですね。先輩、早く必要なお話をしてしまってくださいね」

「分かっているわよ。あつ、ゆり、お茶入れといて」

「はいはい、分かっていますよ」

「それでね、三木くん、分かっていると思うけど、もう三木くんの

一日デート券が体育祭の景品になったことは動かない事実として受け入れてね。それで、そのデートのときに三木くんには負担がないようにあたしたちで金銭的なフォローはするわ。とりあえず一万円ずつ、二万円は出すし、足が出た分は言ってくれれば出すって思っ  
ておいて。でも、あんまりお高いことばかりするのは止めてね。あと、ウソ吐いてお金だけもらうのとかも止めてちょうだい。まあ、三木くんはそう言うこと出来ない子だと思うから、心配はしてないけどね」

「分かりました」

「あと、もし三木くんが一位になったときは、二位の子に景品が繰り下げになるわ。もちろん、そのときはなにか景品を用意させてもらうから安心して活躍してね。期待してるわよ、クラスで唯一の男の子なんだから、ぜひ一番得点を稼いでちょうだい」

「はい、分かりました」

「なにか分からないこととか聞きたいこととかが出てきたら遠慮しないで聞いてね。あと、最後にひとつ言っとくけど、あたしたちはなにも三木くんには罰ゲームをさせたくてこういうことしてるんじゃないからね。出来ることなら三木くんもデートを楽しんでくれればって思ってるの。そのことだけは忘れないで」

「それは、あの、分かってるつもりです。：、あっ、さっそく一つ聞きたいんですけど、いいですか？」

「？ なにかしら？」

「先生たちは、どうしてそんなに最下位になりたくないんですか？」

「こんな、わざわざ俺たちへの餌まで用意して」

「ああ、そっか、学生は知らないのよね。ゆり、教えてあげなさい」「はい、うちの学園では、体育祭の教職員打ち上げで最下位クラス  
の担任副担任が、支払いを持つという悪しき因習が蔓延っているのですよ」

「：、ああ、なるほどです……」

「分かってくれたわね、三木くん！ 何も、あたしたちのためにが

んばれとは言わないわ！　ただ、景品のために！　お願いだから、がんばってちょうだい！！」

「精いっぱい、がんばらせてもらいます」

「さすがは三木くん！　頼りになるわ！」

「やっぱり先生の見込んだ子ですね、は、はい、いい子いい子ですよ」

先生たちの置かれている危機的状況を知ってしまった俺は、事態を収拾することが出来ないのは明らかなのだが、なんとか体育祭で活躍することによって間接的にでもそれを回避する一因になることを目指すしかなくなってしまった。もう、俺のデート券がどうかじやない。ピンチの先生を、いかにその状況の中から救いだすかということが重要なのである。

## 昼休み、ロスタイム突入

「姐さん、ただいま」

先生たちの呼び出しに応じて昼休みを家庭科準備室で過ごした俺だったが、先生たちの窮状を聞いてしまえばけっきょくデート券の件を断っている場合ではなく、当初の目的に関してはとん挫したと断ずるに相違ない。

「おお、戻ったか、三木。で、どうだった？　きちんとお断りしてきましたか？」

しかしまあ、といった具合に期待して待っている姐さんがいるのは分かっていただけで、こうして断ることをしなかった身としては微妙に顔を合わせづらかったりする。だが顔を合わせづらいといってもどうせ教室に戻れば会ってしまうし、教室に行かないなんて選択肢はないのだからこうして対面するしか道はないのである。

だが、これはどう切りだしたものでしょうか。全てを正直に打ち明けるのが適策だろうことは明らかなのだが、先生たちのことまで含めて言ってしまうていいのだろうか。先生たちがしたことは、姐さんの言葉遣いをするとして、端的に言ってしまうえば「己の都合によって俺に重い荷を押しつける」ことであり、しかも悪いことに「教師と学生という立場の差を利用して」いる。

これは、あんまり正直にまっすぐ行きすぎると、先生の行動が姐さんの逆鱗に触れることになりかねない。今のところ姐さんは、先生たちの横暴を防ぐことのできなかつた自分への悔恨と被害者たる俺への申し訳なさという感情が最も強いようだが、しかしそれを聞いたとすれば、おそらく全ての感情が先生たちへの義憤として噴出する。これは間違いない。先生たちは、もうすでに今の時点でもかなりピンチなのだ。これ以上、それこそ仲間であるはずの姐さんからの攻撃で、ピンチの強度を増させる必要などないのである。

「あゝ、えっと……」

ここは先生たちに姐さんからの攻撃が行かないようにうまく矛先を反らしつつ、それでいて姐さんの気持ちを発散させてあげることが重要である。姐さんは非常に強い正義への思いを持っているので、それを心の中でくすぶらせてしまっただけなのではないのだ。不完全燃焼でくすぶったそれは、けっきょくのところ心の内側に堆積し、いつかくる大爆発に備えて蓄積されていくのだ。そしてそれを向けられるのは、おそらく俺。つまり、俺、大ダメージなのである。

これは俺自身の身のためにも、姐さんの精神的な均衡のためにもとても大事なことなのだ。ここはきっちり小さく発散させて、いずれくる大爆発を未然に防いでいくことが寛容なのである。

「昼休みいっぱい使って、私の言った通りしっかりと交渉をしてきたのだろうか？ 先生方は、多少強引なところもあるがあれで話の分かる方々だ。これだけ熱心に三木が話し合えば必ずや真意は伝わると思っていたぞ、うん」

…、しかしなんとも、これは話を切り出しづらい状況である。そうか、姐さんはそんなに俺のデート券がイヤだったのか。これほどまでに「断ってきたな？」と詰められている現状から、推測するまでもなく姐さんは俺の「断ってきました」という言葉を要求している。あるいは、それ以外の言葉を求めている。

「それがですね、姐さん……」

だが、言いづらいからと言って言わずに済ますことは出来ないし、ここから脱出することもできはしない。五時間目が始まるまでもう数分もないわけであり、さっさと話を済ませてしまおうのがいい。というか、早くしないとロングホームルームをやり先生二人がやってきてしまうのだ。

「非常に申し上げにくいのですが、抗議はしませんでした」

「なに？ 抗議をしなかったのか？ なぜだ？ 私はしっかりと抗議して来いと言ったではないか」

「ええと……」

姐さんは、この様子を見る限り、先生たちの窮状を知らない。ある

いは、仮に知っているとしても、そんなことよりも先生たちのやり方が目についてしまって思考の方向転換が効かなくなっている。つまりすべてを正直に打ち明けてもダメ、「先生たちはピンチなのかもしれないけど、でもこんなやり方間違ってる」で結論付けられるに決まっている。いや、「大人なのだからそれくらい、自分たちの力だけで解決すべきだろうに……！」とさらなる怒りを呼んでしまう可能性すらあるだろう。

だからここは、仕方ない、やっぱりいつも通り俺がすべてを引き受けよう。なんということはない、もはやテンプレート気味になりつつある自己犠牲を、俺は選択するしかないようだった。俺だって、他のよりよい選択肢が思い浮かぶなら、当然それを選択したい。でもそれが思い浮かばないのだからしょうがない。俺の思考は晴子さんのハードな調教によってそういう風に働くよう組み立て直されているのだから、何よりも先に、もちろん「自分を犠牲にしなくていい選択肢」なんて都合のいいものが現れるよりも先に、最優先的にそれが浮かび上がってきてしまうのだから仕方ない。

まあ、いつものことだし、それにそれが女性を守るためなのだから悔いはない。これも全部晴子さん仕込みの思考回路なのだから、すべては晴子さんの掌の上なのかもしれないけどね！

「抗議は、しなくていいかなあ、と思いましたが。いや、もちろん、姐さんの言ってくれたことを聞かなかったわけじゃなくてね？ まあ、結果的には聞いてないんだけど。そういうのも、アリなんじゃないかと、思ってたね？」

「それはつまり、デート券が発行されるのを承諾したということか？ 私があれだけ言ったというのに、それをすべて無視して承諾したということか？」

「…、そういうことに、なるね、うん」

「そ、そうか…、そうだったのか……」

「？ 姐さん、なんでちょっとうれしそうなの？」

「はっ！？ う、うれしそうなのじゃないだろう！」

「えっ、でも、なんか口元にやけてるし」

「馬鹿を言うな、私はお前のデート券が発行されるのには反対だぞ。当然反対だ。しかし、お前がそれをいいということにしたのならば……いや、反対ではあるのだ」

「そっか、まあ、姐さんがそういうならそうなんだろうけどさ。でもさ、姐さんが反対するのは、それって俺が理不尽な上からの圧力によってデートを強要されるってことが気に食わないからなんだよね？」

「そ、そうだな。その通りだ。お前が誰かとデートをするのが気に食わない、というわけではない」

「うん、そうだな。姐さんはそういう人だよ。だからさ、なんていうか、姐さんが救ってくれよ、俺を」

「？ どういうことだ？」

「だからさ、俺はデート券のせいで一位になった人とデートしないといけないわけじゃん。で、それを姐さんはあんまりよく思っていないわけだ。ってことはさ、姐さんが一位になってデート券をゲットして、使わないで捨てちゃえばいいんだよ。ってことだから姐さんがんばって一位になって俺を危機的状況から救ってくれ！ っていうのをしたかったから俺は断らなかったのだ」

「……なるほどな。なるほど、分かった。そういうことか。そうだ、他の人間が手に入れるのがいけないのならば、私が手に入れてしまえばよかったのだ。私がそれを手に入れてしまえば、ふふ、そうか、ふふふ……」

「姐さん？」

「いや、なんでもないぞ、ああ、なんでもないんだ」

「？ 姐さん、なにかいいことでもあった？」

「いや、何でもない。何でもないぞ。ときに三木、私は体育祭でがんばることにした。風紀の仕事もあるが、しかしそれはそれ、これはこれだ。出来るだけ競技に出るし、出来るだけ得点を稼ぐぞ」

「おお、さすがは姐さん」



「もちろん、お前のデート券がほしいのではない、ただクラスが最下位になるのがイヤなだけだからな」

「分かってるって！ 頼んだぜ、姐さん！」

「ああ、任せておけ、私がお前を守ってやる。何の心配もいらなからな、三木」

「俺を守ってくれ、姐さん！ 俺、意外とか弱いから守ってくれないと死ぬぜ！ 頼んだぜ！」

「私を守るからには心配いらないぞ、どこの馬の骨ともしれぬ輩とデートにやったりはしないからな！」

「どこの馬の骨って、クラスメイトだけだな！」

何だかわからないけど、姐さんが復活した。どっちに向かってどんなふうに復活したのかはよく分からないけど、でもとりあえず元気になるってくれたからよかった。っていうか、はっ倒されるのくらいは覚悟してたけど、なんか無傷だし。何だかよく分からないけど、いろいろ上手く行ったみたいだな！

「にゅ、幸久君、おかえり」

「おお、霧子か！ 万事解決した！」

「？ なにが？」

「あっ、霧子はなにも聞いてないのか。姐さん、霧子に説明しておいてくれ」

「ああ、任せておけ。よし、それでは天方、説明するから席に座るんだ」

「にゅ、にゅん……？」

「それじゃ俺は席に戻るぜ！」

「それではまた後でな、三木」

「にゅう、幸久君、またあとでね」

「霧子、姐さんの話をちゃんと聞くんだぞ」

「にゅん、わかった」

「ゆっきいゆっきい、おひるいなかったけど、どこいったの？」  
「ん？ どうした志穂、俺がいない間になにかあったのか？」

「なんにもないよ。えっとねえ、ごはんたべて、みんなでおしやべりしただけ」

「そうか、それはよかった。そういえばお前、体育祭で俺のデート券が一位の景品になるんだけど、そのこと知ってるか？」

「しってる、あたしがゆっきいとデートするんだよ」

「すげえな、その自信。どこから湧いてくるかっていえばその身体能力なんだろうけど、でもお前、今回ばかりはさすがに厳しいんじゃないか？ そりゃな、平らな状態で勝負したらお前が一番点数稼ぐのは分かり切ってるけど、今回はビハインド戦だからな、ちょっと、いや、かなりきついだろ」

「びはいんど？ なにそれ？」

「だから、ハンデだよ、ハンデ。お前、点数半分なんだろう？ みんなの二倍点数取らないといけないんだぜ？ さすがのお前でもきついんじゃないか？」

「…、にばいってことは、どれくらいいっぱいてんとればいいの？」

「どれくらいかは分からないな、二倍だけに。まあ、とにかくいっぱいだろうな。たぶん、いっぱい取ってもお前は一位になれないだろうけどさ」

「え？ にばいだから？」

「俺としては、お前が一位になるとお前とデート行かなくちゃいけなくなるから御免なんだけどな」

「ゆっきいはあたしとデートはヤなの？」

「イヤっていうか、疲れる」

「なんで？」

「そこでなんでって聞けるのは、つまりお前が自分自信をどういう存在か認識してないってことなんだろうな。頼むからもう少し自覚的であってくれよ」

「うゆ？」

「…、まあ、別にいいよ。お前がもしも、俺の予想を裏切って一位になったりしたらデートしてやるよ。それこそ朝から晩まで一日中

付き合っでやる。どうせ無理だろうけどな」

「そんなことないもん、あたしがデートだもん」

「とりあえず、この後のロングホームルームでまずがんばれよ。出場する種目を勝ち取らなくちゃ点数を稼ぐもくそもないからな」

「だいじょぶだよ、ゆっきい。あたし、じゃんけん強いから!」

「それは、本当に根拠のない自信だな。っていうか、むしろお前はじゃんけん弱いだろ。じゃんけん強いぶってるんじゃないよ、まったく。負けてしまえ、ぼろ負けしてほとんど競技に出れなくなってしまえ」

「むゝ、ゆっきいいじわる! そんなこというならみんなかつもん! ぜんぶあたしがひとりではしるもん!」

「確かにお前なら全部一人で走って、しかも全部勝ちそうだけどな。でもそんなことできるわけねえだろ。言っとくけどプログラムの関係で連続で競技には出れないからな。入場と退場は同時にするんだから、二か所に同時に存在することは、さすがのお前でも出来ないだろうからな」

「できるもん!」

「質量のある残像!? できないよ、そんなこと!」

「はい! 三木くん騒がない! 席に座る!」

しかし俺が志穂との対話にエキサイトし始めそうになったところで、ちょうど扉をガラツと開いて綾先生とゆり先生が揃って姿を現した。どうやら、チャイムまでは少し間があるのだが、もう教室に来てしまったようだった。先生たち、勝つ気満々なのはけっこうなのだが、チャイムすら無視するのは止めていただきたいところだ。いや、確かにあと二分もしないでチャイムは鳴るんだけどさ。

「先生、チャイムまで少し間がありますが、もう始めるのですか?」

「はい、始めます! 風間さん、号令!」

「起立! 礼! 着席!」

「それじゃ、少し早いけどロングホームルームを始めましょう。今日の議題は、体育祭の出場競技をどうするかです。ゆり、例のアレ

をみんなに配ってちょうだい」

「合点承知」

前から廻ってきた紙を後ろに回そうとして、俺はその紙の肩の部分に「女の子用」と書いてあることに気がついた。女の子用ってことは俺は取らないのか、と素直に紙を取らず、右から左に受け流す形で後ろに回してしまうのだった。

「はい、それでは三木ちゃんはこれですよ」

「あつ、ありがとうございます。これは、プログラム……？　男子用、プログラム……？」

いったいこれから何をするというのだろうか。いや、なにをするかといえば、そりゃ体育祭の出場競技決めなのだろうが。

## 体育祭参加競技決定会議、開催

ロングホームルームの始まり際、配られたプログラムを手に持ったまま首を傾げていた俺を見かねたのか、ゆり先生は俺の脇に少しかがんで耳打ちをする。かすかに吹きかかる息がくすぐった。

「男の子用というよりも、三木ちゃん用ですよ」

「俺用？」

「…、ふ☆」

「うひゃあっ!？」

「? 三木くん、どうかしたの? 急に変な声出して」

「いえ、あの、ゆり先生が耳に息を……」

「ゆり、変なことしないでちょうだい」

「変なことではありませんよ、かわいいいたずらですよ」

「つまりは変なことじゃない」

「そんなことはありませんよ、ね、三木ちゃん？」

「いや、俺は、エラいびっくりしましたけどね……」

「だそうです、先輩」

「何が『だそうです』よ。意味分かんないことしてないの」

とにかく…、俺用って、別に普通に体育祭のプログラムが並べられているだけのようだし、特別何かおかしいところはないように思える。あえて言うなら、競技名の肩のところにいくつか、…、たくさん、丸が描かれていることくらいか。いったいなにを意味している丸なのかはさっぱり分からないが、まあ、おそらくそんなに意味がある丸ではないだろう。

しかしその丸、やけにキツそうな競技の横にばかり描かれている。もしかして、これって俺が出場する競技なんじゃないだろうな。これに全部出ろってことなら、それはつまり死ねってことだろう。まあ、まさかな。だって出場する競技はこれからみんなで話し合っ、それこそまさに民主的手段に則って決めるんだ。俺の出る種目だけ

あらかじめ決められているということは、さすがにあるまいて。

ほら、これ、この丸。よく見たらなんとなく白玉団子っぽいし、きつとゆり先生が白玉団子食べたいなあ、とか思いながら手癖で落書きでもしちゃったに違いないのである。赤ペンだけど。もう、先生ってば困った人だな、これから生徒に配るプリントに落書きなんてしちやいかんというのに、まったくもう。

「それでは三木ちゃん、細かいことについては先輩がお話してくださるので、それを聞いてくださいね」

「あつ、はい、分かりました」

「いいお返事ですな。いい子いい子」

とりあえず、俺はどの種目に出るかということを考えなくてはいいかん。ほら、こういうのって楽そうな競技からどんどん埋まっていくからさ、あらかじめいくつかの競技に目をつけとかなないと手を挙げそびれたら大変だ。全体種目とかの避けられないものは仕方ないかもしれないけど、でもそれ以外の厳しい種目は出来るだけ避けていきたいところだ。何と言っても俺は基本的に文系男だからな、運動が苦手とは言わないが、そこまで大得意というわけでもないのだから。

こういう運動メインの行事は、それこそ志穂とか姐さんとかを筆頭に、運動部の面々でがちり固めて勝ちに行つてほしいところである。俺が男だという理由だけで大量の競技に参加する必要はないのだ。つまり、俺はそれなりに体育祭に参加させてくれればそれでいいんであって、無茶苦茶に無茶なことをさせてほしいわけではない。：、まあ、俺がそうしなくちゃ立ちゆかないっていうんなら、やらないわけにはいかないと思うけどな。

「ゆり！ 配ったら寄り道しないで戻ってくる！」

「はいはい。そんなこと言われなくても、今ちようど戻るところでしたよ」

「はい、屁理屈言わない！ みんな、プログラムはもらったかしら。もらってない人は言つてね、あげるから。：、よし、じゃあ始める

わね。今日のロングホームルームは、みんな分かってると思うけど、体育祭の参加種目を決めちゃうわよ。五時間目と六時間目の二時間を使ってきっちり決めちゃいたいと思うから、次回に持ち越しとか残って話し合いの続きとかならないように気をつけてちょうだい。部活とか用事のある娘もいるだろうし、時間遵守でお願いね。それじゃ、あとは議長に任せるわ、いのように話し合いを進めてちょうだい」

「議長さんは日直さんですから、今日は高見ちゃんと滝本ちゃんですね。お二人とも、上手な進行をお願いしますよ」

「はい、分かりました。滝本さん、行こうか」

「うう…、運悪いツスう……。自分、こういうのあんまり得意じゃないツスのに……」

「当たってしまったんだから仕方ないよ、とにかく気にしないでがんばろう」

「ロングが明日だったら、ちいちゃんが議長だったのに……。その方がぜったい話し合いとかうまくいくじゃないツスカあ……」

「だいじょうぶ、滝本さんだってうまくやれるよ。僕も出来るだけがんばるから、いっしょにやりきろう」

「ありがとツスう…、じゅんじゅんはやさしいツスよお……。でも、自分にはムリツスう……」

「それじゃあ、僕が議長をしよう。滝本さんは書記をお願いするよ。それだったら、だいじょうぶかな？」

「いえ、むしろ、書記はムリツス。自分、字きたないツスから、それに加えて黒板に書くことはいつもよりも書きにくいってことじゃないツスカ、無理ツス。じゅんじゅんの方が字がうまいんツスから、書記をお願いしたいツス。あの字をみんなの目に晒すっていうのは、思ったよりもストレスキツイツス」

「そんなことないよ、滝本さんの字はかわいいと僕は思うよ。でも、そうだね、滝本さんがそういうなら、僕が書記をしよう。議長はお願いしていいかな？」

「はいッス、任せてくださいッス。正直キツイッスけど、なんとかやってみるッス」

「僕も後ろから出来るだけフォローするから、がんばってね」

「やっぱりじゅんじゅんは頼りになるッス！」

…、あつ、今前に出ていこうとしているのは高見と滝本です。高見は前にも出てきたことあるからその辺を見返してくればだいたい分かるから（15話参照）。

滝本祐実<タキモト ユウミ>。出席番号19番で背は姐さんよりも少し小さいくらい、平均を軽く割る程度。全体的にこじんまりとした感じだが、それは志穂ほどのこじんまり感というわけでもなく、やはり平均的なサイズということなのかもしれない。

髪型は外に軽く跳ねた耳に軽くなるくらいのスウィングボブ。軽く日焼けの残った肌の、少し丸っこい輪郭線にクリッとした瞳が印象的な、いわゆる元気でかわいい系の顔立ちをしている。

俺は接点がなくあまり話をしたことはないのだが、数少ない会話機会に得た情報と、それから風に聞こえてくる情報を統合すれば、ある程度以上にその人物像みたいなものを捉えることはできる。とりあえず、今入っている部活動は軽音楽部で、クラスメイトの宇多田花音<ウタダ カノン>、栗田美波<クリタ ミナミ>、千原広海<チハラ ヒロミ>の三人とバンドを組んでドラムを叩いているんだそう。中学校のときの部活は陸上部で、長距離走を専門でやっていたんだそうだが、正直あまり成績は良くなかったらしい。だが、軽く焼けた肌と体育会系っぽい「ッス」というしゃべりがそれに起因していることは明らかだろう。

なんで中学校で陸上をやっていた人間が軽音楽部に入ったのかはよく分からないが、まあ、なにか込み入った事情があるのかもしれないから深くは聞かないでおいた。しかし、バリバリの体育会系が急に音楽系に行って何とかなるものなのかと聞いてみたら、長距離をやったからリズムを取ることは慣れてるし体力もある、それに音楽ゲームが好きだから動きにも着いていけはするし、なんとかな



ってるッス、とのことだった。正直、マジかとしか言いようがないが、本人がそう言っているんだからそうなんだろう。

俺は、音楽ゲームが得意だからって音楽が出来るとは思わない。だってそれって、野球ゲームが得意だから野球も得意だぜ、って言うてるのと同じじゃないのか？ 信じがたいとしか言いようがないではない。

ちなみに、こういう話し合い系のことをロングホームルームするときは、うちのクラスでは生徒から議長を選出して進行することになっている。誰かがやりたいと申し出た場合は別だけど、基本的にはその日の日直が議長と書記をすることになっているのだ。日直は一番と二番、三番と四番みたいに出席番号で最初の方から二人ずつでやっていくことになっていて、今日は出席番号19番と20番の高見と滝本がそれにあたっている。

というか、出席番号といえば、俺たちの席の順番も出席番号順になっているわけで、日直をいっしょにやるやつ同士が隣り合うように席が配置されていて、まるで小学校のときっぽい感じに席同士がくっついてる感じだ。だから当然、出席番号25番の俺は日直を26番のメイといっしょにやるわけである。あと、出席番号2番の霧子は1番の相葉京香<アイバ キョウカ>と席が隣だし、姐さんと志穂は出席番号7番と8番で席が隣だったりする。クラスの人数が28人でちょうど偶数なので、隣がいなくて余ったりするやつもおらず、日直も毎回メイといっしょなのだ。

「…、なあ、メイ、滝本って面白いよな」

『そう思う』

「なんか、おいしいポジションだよな」

『そう思う』

「でも、あれで軽音部なんだろう。人は見かけによらねえよなあ、マジで」

『幸久くんが軽音部をどういう目で見てるか分からないけど、ゆうちゃんはすごいんだ、ってうわさしてるのが前に聞こえてきたこと

ある』

「メイ、そういうときは別に話に入って行ってもいいと思うぞ、俺は」

『女の子同士の噂話は、ちょっとスピード早くて入りにくいかも』

「…、そうか。まあ、俺もそう思うわ」

『幸久くんは、待ってくれるからやさしい』

「んー、まあ、別にメイじゃなくても言葉が出てくるまでに時間のかかるやつっているし、待ってるって感じはしないけどな。霧子とか、今ではそんなでもないかもしれないけど、昔はそりやもうひどかったんだからな。そんな言葉が発するのがもったいないか！みたいなくらい言葉が出てこなくてなあ……」

『きりちゃん、口下手？』

「口下手っていうか、単にビビりだったんじゃないか？ 自分が言葉を発することで流れを遮るのが怖かったとか、そういうところだろ、たぶん」

『きりちゃんも大変』

「俺の涙ぐましい努力によって、今はあんなに立派になったんだよ。霧子の社会的な面については、俺が育てたって言っても過言じゃないぜ」

『幸久くん、すごいかも』

「まあな、もっとほめてもいいんだぜ？」

『それは、あとでね』

「おっと、焦らすね」

『競技決め、始まっちゃうから』

「ああ、競技ね。俺も参加しないとな」

体育祭参加競技決定会議は議長であるところの滝本の、懸命の進行によってなんとか開始することができ、今ようやく参加競技の決定方法が基本的には挙手制で、被ったらジャンケン、あるいは譲り合うこと、必要によっては先生からの任命が行なわれることもあるということが宣言されたところだった。…、任命？

「任命されるのは、基本的に三木くんよ」

「先生、任命しちゃうんスカ？」

「任命するわよ。勝つためだもの」

「…、先生、一つ聞きたいんですけど、いいですか？」

「なにかしら、三木くん。これに関しては、悪いけど拒否は許さないわ。だいじょうぶ、物理的に無理な競技の入れ方はしないから」

「いえ、それもそうなんですけど、この俺用プログラムに描いてある丸って」

「そうよ、三木くんの参加競技よ。そこに描いてあるのは、まあ、基本的には決定んだけど、走るのは短距離系から一つ、長距離系から一つ選んでもらうわ。時間的にそれしか走れないだろうからね」

「…、お気づかい、ありがとうございます」

「いえいえ、それほどでもないわ。あとは男子に出てもらわないと困る種目もいくつかあるし、そこら辺はがんばってちょうだい」

「…、がんばります」

「じゃあ、まず三木くんの走る距離の希望を聞こうかしら。みんなのを決めるのはそれからだからね」

「はい」

「…、短距離は200メートル、長距離は800メートルで、おねがいします…」

正直なところ、俺はそんなにたくさん競技に出場して大量得点を狙っていいこうなんてことは考えていなかった。どちらかというと慎重まじやかに、競技に出ている時間よりも休んでいる時間が多いような、一般的な文系男子っぽい過ごし方を望んでいたのだ。

しかしその願いがかなうことは、もうないだろう。このプログラムを見る限り、どうも俺は、体育祭当日には競技から競技へとかけずり回ることになりそうだからだ。

のんびりと物見遊山の気分でみんなのがんばりを見守っているというわけには、どうにもいかないらしい。見る限り大量の、物理的に参加可能な競技すべてに丸をつけたぞ、と言わんばかりに振るわれ

た赤ペンの猛威によって、俺のプログラム表の左端は赤丸の乱舞なのである。

というか、物理的な無理はしていないと言っていたが、間違いなく体力的には無理をすることになるだろう。ああ、キツいなあ、今年の体育祭。もう、始まる前から目に見えてキツいよ、絶対……。

## ぼんやり席に、座ってるだけ

体育祭の参加競技を決めるための話し合いはなかなか白熱しており、ロングホームルームの時間の前半はすでに経過してしまい、今はもう六時間目の中ほどに差し掛かろうとしているところだった。一つ一つの種目に、それぞれ10人ずつくらいが挙手するのでじゃんけんに時間がかかっているのも一つの要因であろうが、しかしそれ以上に、それぞれの競技の参加者がそれにふさわしいかを先生が判断している時間があったくない。普通だったらそんなことをする必要もないだろうに、先生が勝つことに真剣すぎるばかりに、全ての得点に関わる競技についてその判断をしようというのだから、時間がいくらあっても足りないというものだ。

というかそれ以前に、競技に参加するにふさわしいかどうかの判断ってどういう意味なんだよ。それだったら何のためにじゃんけんして出場者の選定をするというんだ。そんなことするんだったら、それこそ全部の競技について先生が出場選手を決めてしまえばいいではないか。

「はい、じゃあ、学年別リレーの選手決めるッス」

とかいうことを考えながらぼんやりしていると、いつの間にかリレーの選手決めに会議の内容が移行したようだった。議長である滝本の発言に続くように書記の高見が黒板に「リレー…？」と書く。チヨークの音が止まるのを待って、バババツと15人もの子の手が挙がる。当然俺は挙げない。学年別リレーにはあらかじめ参加が決定しているから。

普通のロングホームルームでは考えられないほどの活発な会議のさなか、俺がいったい何をして過ごしているかといえば、あえて言うなら何もしていない。出場する競技があらかじめ先生たちによって決められてしまっている俺には、この会議に参加する意味も価値もなく、もはやぼんやりと時を浪費するくらいしか出来ることはない

のである。

本来なら俺もこういうところで手を挙げちゃったり、じゃんけんで勝っちゃったり負けちゃったり、参加競技を勝ち取ったり勝ち取れなかったりのやりとりに参加したりしているはずだったのだ。しかしどうにも、俺自身が状況を観測する傍観者の立場にいるからか、まったく事態の展開に気持ちを焦らせることがない。

俺はただ、事の成り行きを見守りつついっしょにリレーを走るのが誰なのかということを確認すればそれでいいのである。それ以外のことに心を割く必要はないし、それこそみんなのじゃんけんの結果に一喜一憂する必要もまったくないのだ。

っていうか、さっきまではマジでばんやりしてたから他の人が何の競技に出るのかまったく把握していなかったりする。まあ、仕方ない、後で姐さんに教えてもらうことにしよう。

「学年別リレーに出たい人は手を挙げてくださいッス。ほんで、希望者が出切ったら前に出てきてじゃんけんで走る人を決めちゃってほしいッス」

「学年別リレーの参加者は、本来は四人だけど三木くんが予約で入ってるから三人よ。しっかり決めてちょうだいね」

しかし、先生がまどろっこしいことをしているからなかなか参加競技が決まらないでいるとは言ったが、しかし決まらないといっても普通にやっているよりもずっと早く決まっていくわけで、話し合いが始まる前に先生の言っていた通り、きっちり時間内にすべてを決め切ってしまうことができるかもしれない。

その理由として考えられるのは、異常なまでのクラスの面々のやる気だった。普通だったらすんなり希望者が出てくるのは楽そうな種目だけであり、それ以外の面倒そうな種目にはなかなか人が集まらないものだが、どうしてかこの話し合いではそれが無い。つまり、なにかの競技——たとえば1500メートル走の参加者は前に出てくださいッス、と滝本が言えば、すぐさま間髪を入れずに10人ほどの手がババッと挙がり前に集結、じゃんけんをして勝者を先生が

認定、そして参加者が決定という一連の行程が、ほぼ淀みなく行なわれているのである。

そしてそれが、すべての競技に対して差別なく行なわれているのだから、参加者の枠が手早く埋まっていくに決まっているのだ。事実、今までプログラムの頭から行なわれてきた参加者決定の話し合いは、参加希望者が多すぎてじゃんけんの勝敗がもつれて時間を取られてしまうことはあったものの、参加者が集まらなくて決定が保留されるようなことはなかった。それは、黒板に書かれたそれぞれの競技の参加者枠が隙間なく埋められていることから分かることである。

「はいはいはい！ リレーでたい！！」

「私も出るぞ！ リレーの時間は風紀のシフトが空く貴重な時間なのだ！」

ぶんぶんっ！（メイが手を挙げて振っている音）

「…、なんか、みんな楽しそうだなあ……」

しかし、そんな教室中を渦巻く熱気から一步引いた位置からつぶやくのは、俺。話し合いが始まる前からすでに出場競技がいっぱい決まっている俺は、周りで激しく行なわれている体育祭出場枠の争奪戦から爪弾きにされてしまっているのと同じであり、もはやさつきまでの「何もしないをする」状態から「机に突っ伏して睡眠する」状態の予備姿勢に入ってしまったていた。ぶっちゃけると、居眠りでもしようとしていた。

いや、だって、ほんとにすることないんだもん。がんばって起きてたって出来ることはなにもなく、周りの熱狂的な空気から隔離された自分を冷静に捉え直してしまい虚しい気分になってくるのだ。俺だって、もし競技が決まっていなければみんなといっしょになって盛り上がったかもしれない。でも、その機会と権利はすでに先生たちによって取り上げられてしまっている。

それだったらもう現実逃避で眠りの世界に落ちていくくらいしか有効な行動選択手段がないではないか。幸い綾先生は俺が寝ようとしていることに対して咎めはしないようだし、というかそんなことに

意識を割いている余裕はなさそうだし、問題ない。そしてゆり先生はといえば、今日もいつものように教室の窓際最高列のさらに後ろの、この教室の中で一番ぼかぼかな陽だまりを陣取って俺よりも先にすすうと穏やかな寝息を立てて眠っている。俺を叱るとか、そういうこと以前の状態にいるのだから、まさかそこから俺が眠りに着いた瞬間に目を覚まして注意をしてくるなんて奇跡は起こらないだろう。

「ああ、俺もあそこにいききたいなあ……。あったかいんだろうなあ、あそこ……」

窓の外から燦々と降り注ぐ太陽の光は、まるでスポットライトのようにゆり先生を照らし、そして柔らかく包み込んでいる。頭の上には、つややかな黒髪に跳ね返された陽光がぼんやりと集められて、まるで天使の輪がふわふわと浮かんでいるように見える。すやすやと寝息を立てる無垢な振り袖の天使が、そこに座っているようだった。

「…、やべえ、先生、かわいいかも……」

まったく意識せずに、俺はそんなことをぼつりとつぶやいていた。自分の口からそんな言葉が出るとは、正直思っていなかった。自分はあまり年上の女性のことをそんな風に思うことはなかったからというのもあるが、先生に対してそんなことを思うなんて無礼だなあという意識もあったと思う。しかしゆり先生を見ていたら、そういうことは全部置いておいて、かわいいなと思ってしまったのだ。

俺にとって年上の女性を象徴しているのは、つまり晴子さんである。どのような場合においても、晴子さんに対してかわいいなんて思うべきではないという意識が俺の心の中であつたと思う。もし思ってしまったとしても、それを口に出したりするべきではないと思う。しかしゆり先生を見てかわいいと思い、かわいいと言ってしまった。ふむ、それってつまり、俺も大人になって晴子さんの威光に畏れ平伏すだけではなくなったということなのだろうか？

「まあ、よく分からん……。ふわ…、なんか寝ようって思うと急に



眠くなってくるよな……」

『幸久くん、眠いの？』

「ああ、メイ……、なんかやることないから眠くてさ……。ゆり先生のこと見てたらめっちゃ眠りたくなってきた……」

『幸久くん、ゆりちゃんの方ばかり見て、えっち』

「えっちじゃないよ、俺は……、メイ、勘違いしちゃいけないよ……」  
『どうだか』

「なんか手厳しいな、メイ。機嫌悪い？」

『リレー取ったから、機嫌悪くはない』

「そっか、そりゃよかった。っていうか、それならむしろ機嫌よくしておくれ」

『リレーは取れたけど、それ以外があんまりだから』

「そうだったのか、それなら俺といくつか変わってくれてもいいんだぜ？」

『幸久くんが出るのはあたしにはキツすぎるから、ムリかも。代わってくれたらたくさん点が取れるかもしれないからうれしいけど、その競技じゃそもそも点が取れない』

「……、まあ、そうだろうな。メイにはキツい競技だよ、こいつらは……。こいつらは俺が引き受けるから、みんなは平和に体育祭をやっつけてくれ……。死ぬのは、俺一人だけでいい……」

『さっきちょっとだけ見えたけど、幸久くんが出る種目多すぎ。時間的には可能だし物理的にも可能かもしれないけど、幸久くんの身体と体力がもたない』

「でもやるしかないんだよ、メイ。これはそもそもの人数が少ないうちのクラスの宿命なんだ。それに、みんなが均等にキツイよりも俺が全部を一手に引き受けて死ぬ方がいい。大丈夫、本当に死ぬわけじゃないし、けがだってしないように全力で気をつけるからさ、心配すんなって」

『でもやっぱり心配』

「んー、じゃあ、メイは心配してくれよ。それで俺がヤバそうだ

ったら止めてくれ。そしたら少しだけ休憩することにするから。俺、けっこうやり始めたらヤバくてもやり続けちゃうからさ、どうしても止めてくれる人が必要なんだ」

『ストップパー?』

「いや、むしろブレーキだな」

中学までは、広太がいつでもいっしょにいたからブレーキ役は広太の役割だったのだが、あいつは高校に行かなかったからな、今までは必要なかったブレーキを自分でかけないといけないのだ。しかし、なかなか今までやっていなかったことを簡単にできるかといえば、決してそんなことはないのだ。

でもまあ、広太がいない学校生活っていうのも一年以上が経過しているわけで、いつまでもそんなことを言っていてはいけないのだ。今は、なんとか無茶をして倒れる瞬間みたいなのが分かるようになってきたところだ。もう少しすれば、その倒れる瞬間が訪れる前に休憩をはさむことができるようになるだろう。

「俺はエンジン特化型だからさ、外部パーツでブレーキが必要なんだよ」

『幸久くんは、大変だね』

「まあな、なかなか不器用だろ？」

『あたしが、がんばってブレーキになる』

「おお、そうしてくれ、頼りにしてるぜ、メイ？」

『がんばる』

「ほんじゃまあ、今はとりあえず寝るわ。もういろいろ終わりそうになってるっばいけど、だからってやることあるわけじゃないし。終わったたら起こしてくれ」

『きつと寝付く前に終わる』

「…、だろな」

「やったあ! かった〜!!」

「にゅう…、負けちゃったよお……」

総計15人が参加した学年別リレーの参加枠争奪戦は、とりあえず

やった15人全員参加のじゃんけんを、メイが奇跡の一人勝ちで一抜けした後は混戦となったらしく、今の今まで長々とかかっていたようだった。そして最後の一枠を勝ちとったのは教卓によじ昇ってぴよんぴよこ跳ねている志穂。そうか、志穂が勝ったか、でもあいっ、走るの早いんだけどリレーは致命的にへたくそなんだよな。ほんとに大丈夫なのか？

まあ、どうしても無理だったらメンバーチェンジも可能だろうし、とりあえず試して使ってみてもいいだろう。去年の体育祭から一年経ってるんだ、少しくらいはマシになってるかもしれないじゃないか。信じよう、志穂の成長ってやつを。

っていうか霧子、なんでお前はリレーなんかに出ようとしてるんだ。お前、別に脚速くないだろ、無理すんなつつうの。霧子は霧子に出来ることをやってればいいんだよ。ポンポンもって席で応援するか、障害物競争で網に絡まってみるとか、…、あと…、えと…、いろいろあるだろ！

「それじゃあ次は、スウェーデンリレーを決めるッス。これも学年別リレーと同じで四人ッスから、出たい人は挙手してくださいッス」  
「スウェーデンも三木くんが予約入ってるから三人よ。ほとんど立て続けになっちゃうから、学年別リレーに出ることになった人は出来るだけ止めておいた方がいいと思うわ」

「リレーでるでる！！でたいでたい！！！」

「学年別リレーはダメだったのだ、こちらには出させてもらおうぞ！」

「あれ、メイはいいのか？」

『脚が壊れる』

「そうか、それはやめといた方がいいな」

『あんまりムリしないことにしてる』

「それが賢明だ。女の子はムリしすぎて身体壊すようなことはしないほうがいいぞ」

『今回はそうする』

しかし、あれだけヤダヤダ言ってたのに、滝本ノリノリだな。やた

ら楽しそうにやっ  
てるじゃねえか。

## 飛んで飛んで、地に落ちて

五時間目に行なわれた体育祭出場種目争奪戦の熱気冷めやらぬ教室で、しかしそれに参加することができずにふてくされて居眠りをしていた俺は、眠気にぼんやりとしている頭を抱えて軽く寝崩れた髪をかきかき自分の席に座っていたのだが、そんなふんわりした状態だったが故に、興奮状態がまだ継続しているらしい志穂が爛々と目を輝かせながら俺の席に特攻をかけてきたことに対して満足に対処することもできず、その勢いに押されるように軽く吹き飛ばされた感じになっていた。具体的にどれくらい吹き飛ばされたかといえば、俺の後ろの席の弓倉楓の机をなぎ倒し、ゴロゴロと転がったついでに掃除用具入れのロッカーに派手な音をさせて叩きつけられるくらいだ。

『驚いた』というのがまず最初に来てしまって痛みがなかなか訪れてこないのだが、とりあえずその大きな音のせいですやすやと寝息を立てていたゆり先生を起こしてしまったので、そのことについてのひどい罪悪感が心へと大挙して訪れたのだが。

「…、三木君、大丈夫かしら？」

「…、なにがどうなっとうなったのか、というか今、何がどうなってるのか分からのだが、とりあえず弓倉、机が大変なことになっってしまったているぞ……。すまなかった……」

まず最初に、掃除用具入れにぐったりともたれかかっている俺に手を貸してくれたのは、俺がなぎ倒してしまった机のオーナーであるところの弓倉楓本人だった。教室の前方に設置されているゴミ箱になにかを捨てに行く、というわずかな時間の間に——その実、正味でも行っ帰るのに一分もかからない——自分の机が思い切りなぎ倒され、その中に入れられていた教科書ノート筆箱等々の勉強用具から、その脇にかけられたかばんの中にしまわれていたエプロン三角巾レシピ帳等々の家政部の部活用品まで、ありとあらゆるものが

周囲にまき散らされるという惨状の最中であってなお、俺が立ち上がるために手を貸してくれるという選択をしてくれたと考えると、こいつはなんていい奴なんだろう。あるいは、さっさと立ってこの状況を解決する手伝いをしろよお前が元凶なんだから、ということとを暗に言いたいのもかもしれない。というか、それが普通の感性か。「別にいいわ、気にしないで。ちょっと机の中身が軒並み吹き飛んで、ちょっとかばんの中身が軒並み吹き飛んだだけじゃない。大した問題じゃないわ」

「…、とりあえず、片づけは手伝うわ……」

「そう？　そうしてくれると助かるわ」

弓倉の手を借りてどうにか立ち上がった俺は、まず軽く体中に付着したちりのなものを払い、それから全身の関節駆動部に違和感がないかを軽く動かしてみても確かめ、ついでに拳をぐーぱーぐーぱーとにぎにぎして、最後にグッと握って固めると肩をぐるぐると回すのだった。

「志穂！　そういうことはしちゃダメって、いつも言ってるだろうがぁ！！」

ドカドカと床を踏み鳴らし、俺は全身から怒っているぞオーラを噴出させながら志穂に向かって歩を進めると、その目の前でピタッと歩みを止める。ほんの目前に、小さな志穂の頭がある。俺と志穂の身長差によって、この距離まで近づいてしまうと志穂が見上げない限り、いくら俺が目線を下に向けたところで俺たちの目線は交わらない。そして今、俺と志穂の視線はまったくもって交わっていない。「聞いているなら俺の目を見ろ、志穂！　俺は久しぶりに怒ってるぞ！」

ちなみに言っておくが、怒っているといってもそれは志穂のあまりに唐突すぎる不意打ちによって全身くまなく痛めつけられたことに対する私憤などではなく、社会的な生物であるところの人間としてそういう行動を取っちゃうのはどうなのかなあ、という教育的観点から見た公憤なのである。志穂にいろいろな学ぶべき事物を教えて

いく上で、絶対に外してはいけない叱りポイントというモノが存在しているということを忘れてはならず、今こそその瞬間なのだ。

志穂は基本的に脳の構造が単純なので、悪いことをしたときは即座に叱り、自分が悪いことをしてしまったのだということを自覚させるところから始めなくてはならないのだ。後になって思い出したように怒ってしまうと、自分が何について怒られているのか分からないという状況をつくってしまうことになる。そうなってしまくと、自分はなにも悪いことをしていないのに、どうしてか分からないけど俺に叱られたと思ってしまうことになり、けっきょく悪いことは何なのかという学びも生まれなければ、やっちゃいけないことをやってしまったという反省も生まれないのである。

「こら、志穂！ こっち見なさいって言ううあああああああ  
ああああああああああっ！」

しかしこの場合においては、そんなことはどうでもいいから黙って散乱してしまった弓倉の荷物の片づけを手伝っているべきだったのかもしれない。

俺がいくら言っても目線を上げようとしない志穂にいら立って拳骨を振りかぶった気配を感じ取ったのか、ターゲットイングされた頭を射程圏外へと逃がすべく小動物のように機敏な動きでしゃがんだ志穂だったが、しかしそれはとっさの予防的な回避行動などでは決してなく、むしろ攻撃の前動作だったらしい。そして、そんな志穂の動きを読み違えた俺は構わず一気に拳を振りおろしたのだが、もっと志穂の反撃を警戒して拳を止めて防御動作に移るべきだったなあ、と今では軽く後悔している。

振り下ろされ頭頂部に迫る俺の拳を恐れることなく、勢いよく、まるで伸びあがるように立ち上がった志穂は、しかし紙一重のところを拳を回避すると、そのままカウンター気味のヘッドバッドを俺のみぞおちのあたりに叩きこんだ。志穂の脚のバネの強さを考えれば当然のことなのかもしれないが、斜め下からの強攻撃を見舞われた俺は再びかすかに宙を舞い、今度は弓倉の席の隣にある脇本結花く

ワキモト ユイカ>の机を吹き飛ばし、教室の扉へと思い切り衝突したのだった。そして当然のことだが、吹き飛ばされた机からは先ほどの再現のように荷物が飛び散り、すでにまかれている弓倉の荷物の上に降りかかるようにまき散らされるのだった。

ちなみに、カウンターヘッドバッドをみぞおちにブチかまされた俺がどうなったかといえば、ひどい呼吸困難に陥りのうち回ることにしかできなくなっていて、志穂に対して怒っている場合ではなくなくなってしまっていた。人間、けっきょくは他人より自分であり、自分がこの上なく危機に陥っている状況では他人に対する怒りも消えうせるのだということを、俺は今、身をもって久しぶりに味わっていた。

いったいこの娘っ子、なんの恨みがあって俺にここまでの仕打ちをするというのだろうか。

「…、三木君、だいじょうぶかしら？」

「弓倉…、すまん……」

「別にいいわ。あなたも大変ね」

そして、俺は再び弓倉の手を借りて立ち上がると、折れかかった心をなんとか持ち直して、いまだ整わない呼吸を強引に整えると、三度志穂の前へと立ち、大魔王的悪と対峙するのだった。

「分かった、とりあえず話を聞こう。お前だって、別にやりたくてこんなことしてるわけじゃないんだよな。なにか言いたいこととか聞いてほしいこととか、そういうのがあって、それに加えてちょっとテンションが上がっちゃったからこういう感じになっちゃってるだけなんだろう？ 分かる分かる、お前の気持ちはよく分かるぞ。そういうときってやっぱあるよな、人間だもんしょうがない。でもそれだけじゃダメだ。いくらテンションが上がっても手を出す前に言葉で交流しないとダメなんだ。俺達は文明種族、人間だからな。なんでもかんでも拳で伝えあえると思ったら大間違いなんだ、肉体言語種族よ。分かったら、とりあえず言ってみろ。お前はいったい何が言いたくて、いったい何を伝えたいんだ。俺が聞いてやるから、



安心して話してみっ……!?!? ……つかは……」

おそらく、志穂は獣に還ってしまったのだろう。野生のハンターの血が、別段流れてはいないだろうに、騒いでしまったに違いないのだ。だからもう、俺のことも分かっているだけのだろう。ただ目の前にいる獲物を、ただただ狩っているだけなのだ。

だからいつもならないようなこともできるし、実際にやる。志穂は、三度対峙した俺に対していささかの躊躇も感じられない勢いで拳を叩きこみ、そしてあまりのダメージに膝を突いた俺の腕を取ると、ガジガジと、それこそ捕らえた獲物のテイスティングをするようにカジカジと、何とも言えない表情でそれをかじり始めたのだった。

こいつが何をしたいのか、悪いがまったく分からなかった。なんとなくか、行動に論理性が感じられないというか——それはいつものことなのかもしれないが、いつも以上に意味不明である——、何の目的でそんなことをしているのかがまったく分からず、どうして俺が今、激しくせき込みながら腕を取られ、志穂の歯固めのための材木の代わりにされているのかなんて分かったらうはずがなかった。

「し…、しいちゃん！ 目を覚まして！」

「はにゃ!?!? ほあ…、あり? ゆっきいどうしたの?」

「それは、俺のセリフだよ……?」

しかし、俺がいくら何を言っても反応しなかったというのに、どうやら霧子の一声で我に返ったらしい。もしかしてこいつ、俺のことなめてる? いや、かじってる?

『しほちゃん、幸久くんのこと食べようとしてた』

「えー、そんなことしないよー」

「いや、してたよな? お前、してたよな? 俺の腕に、お前の歯型がくつきりついてるんだから、言い逃れとか出来ないからな?」

「えー?」

「そんな『なに言われてるか全然分かりません』みたいな顔するなよ。俺がおかしなこと言ってるみたいだろ。まあ、クラス全体が証

人だから逃げようはないんだけどな」

「そんなことより、ゆっきい」

「『そんなこと』じゃないよ!？」　なに上手い具合に話そらそうと  
してるんだよ!」

「でも、ゆっきい、おいしかった」

「えっ?　ああ、それは、なんというか、よかったな」

「それでね、ゆっきい」

「だからさ!　なんで話そらそうとするんだって!　終わってない  
からな、今の話!　っていうか、問題は俺のことをかじったことじ  
やねえんだって!　お前、その前に俺のこと二回ふっ飛ばして、一  
回膝突かしてるんだからな!　意味もなく勢いで暴力を振るうんじ  
やないの!」

「?　そんなことしてないよ?」

「やっぱり無意識!?　なにこの娘こわい!」

「しいちゃん、幸久君は確かに頑丈だけど、でもやっぱり痛いと思  
うんだ。もししいちゃんが覚えてなくても、やっぱりごめんねって  
しないとダメだと思うよ」

『しほちゃんが幸久くんを吹き飛ばして、二人の机がこんなことに』  
「そうだぞ、別に俺に謝らなくていいから、弓倉と脇本には謝つと  
け。お前のせいで机ふっ飛ばされたんだからな」

「ほあ、にもつが、たいへんだ……」

「お前が大変にしたんだからな?　分かってるよな?」

「えと、はっ!　そうだった!　かえっち、ゆいにゃん、ごめん  
なさい……」

「そうそう、悪いことしたときはちゃんとごめんなさいしないとダ  
メなんだぞ。ほら、片付けの手伝いをして、なんとか許してもらえ  
るように誠意を見せてくるんだ」

「別にいいわ、もう片付けも終わるし。それよりも、わたしは三木  
くんの方が心配だけど?」

「俺の身体は、まあ、頑丈だからだいじょうぶだ、心配ないぜ。で

も、心配してくれてさんきゅな、弓倉」

「そう、心配ないっていうなら、別に心配しないわ」

「ああ、そうしてくれ。とにかく身体が頑丈なのが、俺の数少ない取得みたいなもんだからな」

「そうなの。そういうことならなおさら心配することはなかったわね。変に心配なんてされて迷惑だったでしょう、ごめんなさいね」

「いや、心配してくれたっていうのは素直にうれしい。心配してくれるやつってのは、友だちだからな」

「わたしと友だちになったって、いいことなんて一つもないわよ、三木くん」

「見返りがほしいから友だちになるわけじゃないだろ」

「…、まあ、別になんでもいいわ。とりあえず、これからこういうことがないように気をつけてくれるかしら。事あるごとに机の中身をひっくり返されたりしたらたまらないわ」

「ああ、志穂もきつとよく分かってるはずだと思う。俺からもまたちゃんと言っとくからさ、今日のところは勘弁してやってくれ」

「次から気をつけてくれればいいわ。とりあえず、教室の中で暴れ回るのだけは、なんとしても止めさせて」

「それが一番難しいんだけど…、いや、分かった、何としても教育してみせる。大丈夫だ、俺が本気出せば志穂がしっかりした子どもになる日も遠くない、はずだ」

「うん、あたしもがんばるよ！」

「そうしてちょうだい。ほら、皆藤さん、席に戻るといいわ」

「はーい、じゃあゆっきい、あとでねー」

「ああ、後でな」

そう言って、志穂はテクテクと自分の席に戻っていったのだった。いったい何をしに俺の席まで着たのかということは、残念ながらまったく分からなかったのだが。

まあ、こうしてスパッと忘れられてしまうようなことなのだから、別に大事というわけではないのだろう。というか、また思い出した

か。ら言いに来るだろうし、そんなに俺が気にするほどのことではない

## 俺が鈍い？ そんなバカな

「で、霧子はどうしたんだ？」

「ふえ？」

「いや、別にわざわざ志穂を止めるためだけにここまで来たって言うんなら、それはそれでいいんだけどさ」

けっきょくのところ何をしにきたのかまったくわからなかった志穂を、全身の疲労感とダメージと引き換えに追い払って、俺はとりあえずホッと一息ついていた。しかし、ホッと一息ついたところで席に座ろうかな、と思った俺を、世界が拒んだ。

さっき見事なタイミングで現状に介入し志穂に正気を取り戻させた霧子が、どうしてか俺の座るべき席を占拠していたのである。実際問題、別にこのまま素知らぬ顔で霧子の膝に座ってしまうこともできるかもしれないが、しかしそんなことをしたからといって何が解決されるわけでもあるまいし、ただいたずらに状況を混乱に落とすだけなのは明らかだった。

だからこそ、ここではどうしようもないことをするべきではないわけで、速やかに席を奪還するべく霧子の説得に乗り出すべきなのだ。というか、どうせなにか用があるけどなかなか言い出せなくて、でも言いだせないからって言わずに帰るわけにはいなくて、二進も三進も行かなくて、とりあえずそこにある俺の席に座ってみて俺を困らせることによって俺の注意を自分に引き付け、俺の口から『どうしたんだい』と言わせて自分が話をするのに都合のいいフィールドをつくらせようという、まあ、他力本願以外の何ものでもないのだろう。

「えと…、用がないってわけじゃ、ないんだけど……」

「じゃあ言いなさいよ、そんなところでもじもじしてないで」

まあ、霧子がこうやって遠回りに主張をしてくるのは昔からのことだし、別に今さら文句を言ったりするつもりはない。というか、今

さら霧子の他力本願なやり方を更生させようと努力するのはいささかズレていると言わざるを得ないだろう。霧子のそれはもはや一つの個性といって過言でないほどに根付いてしまっており、直させるには人格の矯正までも行なう覚悟が必要になってくるだろう。

もしそれを本気で矯正したかったら、もっと幼少のころから手を打っていないければならなかったのだ。ぶっちゃけ、今さら更生させようなんて手遅れというか、大事な個性を潰してまですることではないだろう。

というか、霧子がこうまで他力本願な性格になってしまったことの一端には俺の極度の甘やかしがあったわけであり、ある意味でそれは俺の罪業ということもできるだろう。そう、霧子の他力本願を修正しようなどと、そうなるように仕向けた俺が言うのはまごうことなきエゴなのであり、どうしても今になってそんなことをすることができのだろうか。俺に出来ることはそれを直させようと努力することなどでは決してなく、共にその十字架を背負い共に罪を負うことだけなのである。

いや、まあ、別にそんな大層なことじゃないかもしれないけど。霧子が極度の他力本願なら、それをフォローするのが俺であり、カバーするのが俺なのだ。そうすることが、霧子をそんな風に育ててしまった俺の責任ということができるだろう。

「…、あのね、幸久君、残念なお知らせがあります……」

「残念なお知らせ？」

「うん…、とっても残念なお知らせ……」

「霧子から残念なお知らせを聞くのは慣れてる。そんなに言い淀まなくていいからサクッと言ってくれ」

しかし、霧子が誰かになにかを『言いなさい』と言われてすぐに『あのね』と話し始めてくれるようになったのは、信じられないかもしれないが、中学校に上がってしばらく経ってからだったりする。

霧子は基本的に、口に出す言葉をよくよく頭の中で吟味してからでないと話しだすことのできない性質で、頭の回転速度があまり早く

ない霧子は一般的な人たちの会話速度になかなかついていくことができない娘だったのだ。

まあ、別にだからといって俺がフォローするから何の問題もないのだが、いちおう霧子も一人の人間なのだから自分の言いたいことは自分で言いたいだろうし、こうして成長してくれる分には俺としてもうれしい限りなのだが。

「にゅ…、あのね、あたし、ぜんぜんジャンケン勝てなくて、あんまり競技に出れなかったの……」

「ふ…ん…、まあ、霧子はある運動得意じゃないからな。あんまりたくさん競技に出られるとクラス自体が勝てなくなるから、それはそれで自然な淘汰なんじゃないか？　なんていうか…、神の配剤っていうか、世界の意思っていうか、まあ、そういう風に出てくるってことだろ」

「にゅ…、そうかもしれないけどお……」

「別に一個も出れなかったってわけじゃないんだろ？　それならいいじゃん、いっぱい競技に出ないといけないって法律があるわけでもあるまいし。体育祭の霧子っていうと、応援席で応援する姿が定番だろ」

「にゅ…、そうなんだけどお……」

「それともなにか？　どうしてもいっぱい競技に出たい理由でもあるのか？　もしかして景品か？　先生たちがくれるっていう景品がほしいのか？　止めとけ止めとけ、ああいうのはな、運動が得意な奴がもうもんって相場が決まってるんだって。霧子がいくらがんばったって、そうそうもらえるもんじゃない。っていうか、ほしいもんがあるなら俺が買ってやるから言えって。服でもアクセでも、買える範囲のなら買ってやるから」

「ほ、ほしいものは、自分で買うもん」

「そうか？　まあ、別にそういうことなら自分で買ってくれ。…、じゃあ、何のためにそんなにいっぱい競技に出たいんだよ。別になにか、分不相応なほしいものがあるってわけでもないみたいだし、

競技なんていっぱい出る必要ないだろ」

「んにいう……」

まあ、確かに霧子はこういうみんなでがんばる系の行事が好きだ。でも、だからって自分がたくさん競技に出ちゃうぞ！　みたいなことを言うことは今まで一度もなかった。霧子はときどき子どもっぽいところもあるけど、でもけっこう適材適所とかの考えを理解して受け入れる度量も持っていたりする。そんなわけで、運動の得意な人が競技をがんばって苦手な人は応援をがんばるっていうこと自体は、しっかり理解できているはずなのだ。

しかし、どうして今回に限ってはこんなことを言っているのだろうか。せっかく成長した思考回路が一気に退化してしまったということがないのであれば、そこには必ず何かしらの理由的なものがあった。然るべきなのだが。

『幸久くん、にぶ』

「えっ？　なにが？」

『ふつう、そこまでいったら気付くんじゃないの？』

「…、なにに？」

『にぶ過ぎるから、罰ゲーム！』

「罰ゲーム！？」　六時間目もう始まっちゃうのに、罰ゲームするの！？」

『きりちゃんがなに言いたいかわかったら、罰ゲームなし』

「め、めいちゃん…、べ、別にそんなこと、しなくていいんだよ…」

『きりちゃん、やるときはやらないと、ダメ。それに、あんまりにぶ過ぎるのはよくないと思うし』

「霧子が言いたいことを、考えるのか……？　ま、まあ、俺くらいの霧子博士になれば、それくらいのこと特に難しいということないだろうけど……」

『でも今、分かってない。幸久くんは、大事なところが抜けてるか、ダメ』



「ダメって言われると、そこはかとなくへこむな……。い、いや、負けないぞ！ 俺は霧子の言いたいことをここでばっちり思いついて、理不尽な罰ゲームなんて受けないんだ！」

『でも幸久くん、にぶいから。たぶんムリ。罰ゲームの準備しとくね』

「正解するんだから、準備なんていらないよ！」

『解答権は一回だけだから』

「急に難易度高くなったし……」

『正解すればいいだけ』

「…、よし、分かった。それじゃあちよつと考えるから、少し待ってくれ」

『ちなみに罰ゲームは、幸久くんがないしよにしてる今までにしちやったえっちなことに、尾ひれをつけてのりちゃんに話す刑』

「それは俺に死ねってこと！？」

『幸久くんは正解するんだから問題ないかも。正解、するんでしょ？』

「お、おう！ もちろん正解するぜ！ ちなみに、ヒントはもらえるのか？ それとも、ノーヒントで頭を早く働かせて想像しないとイケないのかな？」

『自分で大丈夫って言ったんだから、ヒントなんてない。人生は、そんなに甘くないと思う』

「…、もしかしてメイ、怒ってる？」

『怒ってない、呆れてる。幸久くん、あんまりにぶすぎるから』

「え…、俺、そんなににぶいかなあ……」

『普通だったら、ピンとくるはず。それが全然なんだから、つまりにぶいってこと。自分のことは、自分が一番分かってないといけなと思う』

「ピンとくるって、霧子何が言いたかったこと？」

『そう』

「でもさ、ふつうの人だってさ、人がなに考えてるかわからなくな

ること、あるんじゃないか」

『幸久くんは、いつもはだいたい分かってるんだと思う。というか、むしろ分かってなくていいことまで分かってるなと思う』

「それだったら、別に俺ってにぶくないんじゃないか？ どっちかというと、鋭いっていかさ」

「確かに幸久君、すごい鋭いときもあるよね。なんにも言っていないのに、いろいろやっておいてくれたりすることもあったりするし」

「なるほどな、ふむ、そう言われてみれば、私も心当たりがなくてもない」

「あれ、姐さん、どうしてここに？」

「む、いてはいけないのか？」

「いや、別にいちゃいけないってことはないけどさ、もう次の時間が始まりそうな時間だっていうのにこんなところに来て、珍しいなっと思っただけ。姐さんは、授業が始まる三分前には席に座って授業の準備と最後の見直しやってる感じがあったから」

「確かにそうだな。そうするのが学生としてのあるべき姿だとも思っている」

「まあ、俺もそれが学生のあるべき姿だとは思ってる。激しく実態には沿っていないけど」

『のりちゃんは、あたしが呼んできてもらいました』

「メイは、いったいいつの間に姐さんにメールを打ったんだろうねえ……」

「つい今しがただ。一分も経ってはいない」

「姐さんも何気に、かなりフットワーク軽いよね。別に今に限った話じゃないけどさ、決めたら迷わない感じするわ」

「兵は神速を貴ぶというだろう、何事も動くと決めたらすぐに動くべきなのだ。考えて動くという結論に至ったのなら、その後は何を考える必要があるというのだ」

「おっしゃる通りです」

「にゅ…、でも、やるって決めたあとでも、悩んじゃうときとかあ

るよね……。テスト前に、勉強するぞ！　って思ってもテレビ見ちゃったりするし……」

「それは、本当に心に決めることができていないからそうやってしまうのだろうな。あるいは、やらなくてはいけないと分かっているけど出来ないというのは、頭では分かっているが最適の選択をできないということであり、人間の持つ弱さのようなものなのかもしれない」

「最適の選択しか出来なかったら、そんな人間じゃないぜ、姐さん。そういう不確定要素の何もない存在は、機械っていうんだ。一人殺すか五人殺すかっていう選択で、それじゃあ一人殺す方を選ぶうって出来るやつは、少なくとも人間的じゃない」

「まあ、それはまた違う話だろうが、私だって当然、常に最善の選択を出来るわけではない。失敗をすることもあれば、勘違いをすることだってある」

「へえ、そういうのは、あんまり想像つかないな。たとえば姐さんのする失敗って、どんな感じ？」

「そうだな…、テストで常に満点を取ることができないというのも、その一つだろう」

「…、もう少し、生活に密着した感じのがいいんだけど、他にはなんかないの？」

「他のものか？　…、そ、そうだな…、たとえば、言葉にして伝えてしまうのが一番いいのは分かっているのだが、それをなかなか言うことができない、とかだな……」

「？　ごめん、抽象的すぎて分からないんだけど、もう少し具体的に言ってくれない？　誰に何を伝えるの？」

「ば…、バカ者！　そのようなことが言えるわけがないだろう！　というか…、それを言うことができないから、私はだな……！！」

「？　姐さん？」

「黙れ、この痴れ者めが！！　だからお前は鈍感だというのだ！！　まったくもって持田の言うとおりだ！！　これより貴様に制裁を

加える!!」

「あれ!？　なんでそんな結論が出てきたの!？　た、タイム!!　俺はまだ霧子の考えていることが何なのかっていうことに応えてすらない!!」

「一体何の話をしているのか分らん!!　私は私の正義によってのみ行動する!!　貴様の鈍感さはもはや、悪!!　したがって制裁する!!」

「ちょ、め、メイ!　姐さんにぜんぶ説明して!!」

『うん、こうなると思った』

「さ、策士だああああ!？」

こうして俺は、なんだかよく分からない展開によって姐さんからの制裁を受けることになってしまったのだった。いったい何がどうなっただったのかは分からないが、まあ、姐さんは意味もなくキレるような人じゃないわけで、きっと俺が悪いんだと思う。

しかし、状況を理解することができても納得できないときというのはやっぱりあるもので、それが今なんだと思う。つまりこういうのを、理不尽と呼ぶのではないだろうか。

## 六時間目は、はじまっている

姐さんからの軽い折檻（姐さん基準に準拠）を受けた俺は、ぐったりと机にうつぶせに突っ伏していた。とりあえず、眠気とか疲労感とか、そういうもののせいでそうなっているわけではない、ということをお断りしておきたいと思う。

『幸久くん、元氣ない』

「うん…、ちょっと姐さんにお仕置きされたからな……。っていうかメイはそこにいたでしょ……」

『いた』

「うん、いたんなら状況分かってるでしょ……。っていうか、こうなるように仕向けたのメイじゃん……」

『仕向けたなんて人聞きが悪い』

「そんな人聞きの悪いことをやったのよ、あなたってば……」

『もっと、かわいい言葉で表現して』

「…、萌え萌え策士持田メイのデストラップが、華麗に発動したにやん……」

『かわいい……。ん…、もっと耳触り良く』

「…、……。地雷のメインとひっかけてまして、メイン」

『ダジャレ……。？ それは、耳触りいいの？』

「…、俺の中の『耳触りがいい』っていう概念が、ゲシユタルト崩壊した……。ついでに『ゲシユタルト崩壊』っていう概念も崩壊してる……。もうなにも分からん……」

『むう…、とにかく、幸久くん、これに懲りたらちゃんとしないと、ダメだよ』

「何をどうしたらいいのか、俺には見当もつかないよ…、メイ……。とりあえず、何もしなきゃいいのか……？」

『女の子の気持ちに、ちゃんと気付いてあげなきゃダメってこと。にぶい男の子は、嫌われちゃうんだよ』

「メイにも、嫌われちゃうわけ？」

『そういうことになる、仕方ない』

「…、せっかく友だちになったのに、それはイヤだな……。まあ、出来るだけ気をつけるように善処します……」

『それでいい』

「お許しいただき、ありがとうございます、お代官様あ……」

姐さんからの折檻は、実のところ本気で怒っているそれではなく、怒りの度合いで考えるとレベル3といったところだろうが、しかし姐さんの身体能力のレベルを考えるとレベル3であっても俺にしてみれば大ダメージなのである。

それではそもそも具体的にレベル3がどれくらいの怒りであり、そこから発生する攻撃がどの程度の強度を持ったものなのかというところに視点を移してみよう。だいたいレベル1の怒りっていうのが「買い物をするときに小銭が一円足りなくてお札を出す羽目になったときのいら立ち」くらいとすると、レベル3っていうのはその三倍くらいの怒りなんだから、姐さんの感じに合わせるとおおむね「道路の向こうでゴミがポイ捨てされるのを現行犯で目撃して、しかもそれを誰も拾わないとき」くらいだと定義することができだろう。いや、これ、大したことない些細なことと思うかもしれないけど、姐さんにしてみたらけっこうな怒りなんだよ。まあ、そういう細かいことは置いておいてだな…、とりあえずそれくらいの怒りがそこにはあったんだ、ということにしよう。

少なくとも、ゴミのポイ捨てもその見逃しも、ここはシンガポールではないんだから、刑事罰の対象になるようなことはなく、迷惑防止条例違反に当たること、まあ、その捨てたものが歩きタバコの末の吸い殻だったりしない限り、ないだろう。しかし刑事罰としてなんらかの罰が下されないとしても、姐さんにとってみればその行動はそれなり以上に罪であり、心にはすごいストレスが発生することになるのだ。もちろんそのポイ捨てをしたやつが俺だったり、あるいは知り合いの誰かだったりしたらすぐさまダッシュで確保拘束

してからポイ捨てしたものを拾わせるために連行して、それからどこかで腰を据えてじつくりとお説教タイムが始まることになるだろうが。

しかしまあ、それくらいのことならば別に即手が出ることはない。姐さんは別に暴力礼賛主義者ではないわけで、なんでもかんでも暴力で解決しようなんて志穂みたいなことは考えないのである。というかむしろ、姐さんが手を出すのは話し合いではどうしようもないと判断したときか、状況が切迫しすぎて話し合いをしている場合ではないと判断したときか、あるいはついっかかり手が出てしまったときの三つしかないのだ。つまり、姐さんが自分から積極的に手を出していくことは滅多にないということもできるかもしれないのである。

でもあえてその怒りレベルで手を出していくとなると、本当に軽く罰を与えるくらいにとどまることだろう。実際今回もそこまで厳しい罰を与えられたわけではなく、普通の人がやれば「いたた」となるくらいで済んだであろうことしかされてはいなかったりする。しかしそこがそれで済まないのが姐さんが姐さんである所以であり、姐さんの身体能力が普通の枠の中に収まりきらないということを明確に白日のもとに晒す状況証拠だったりするのだ。まあ、姐さん的には根本のところに『自分は普通』という認識が潜んでいるから、そんな感覚に基づいた状況証拠だけではその事実を承認してはくれないのだけれども。

話が逸れそうになってるな、少し戻そう。今回、具体的に俺への折檻として姐さんが何をしたかといえば、チョップだった。チョップ、平手の側面で打突する、あれだ。本来、俺は普通の女子にチョップされたくらいで音を上げるようなやわな男ではないが、姐さんのそれは普通の女子のチョップとは一線を画するものだった。

なんというか、俺の思う女子のチョップっていうのは、けっきょくのところ霧子のへろへろチョップなわけであって、やった霧子の方がむしろより大きなダメージを受けるような代物である。具体的に

どんなものかというと、すごいへっぴり腰で、力の込め具合がすごい探り探りで、腕の筋力が足りないばかりに振り下ろす手に振り回されちゃうような、そんなアレなのである。正直くらったからといって何の問題もないというか、むしろやられたこっちがやった霧子を心配してしまうというか、どっちが被害者でどっちが加害者か分からなくなる感じなのだ。

しかし姐さんのチョップはそんなアレでは、まったくもってなかったのである。まず違うのは腰の入り方だった。姐さんは空手だかなんだかの格闘技をやっているのでその応用みたいな感じなんだと思うけど、チョップのキレがすごい。空手家が何枚も重ねた瓦をチョップで割るみたいな、例えるならばあんな感じのチョップなのだ。少なくとも、それをまともに真正面から頭にブチかまされて、すぐさま起き上がったり反撃したりすることができる心理状態を保つことは出来ないほどの威力が、どうやらそこにはあるようだった。実際のところ、それが姐さんにとってどれだけの全力を込めて放ったものなのかは分からないのだが、とりあえず俺の受けたダメージとしてはかなりのものだった。昔のプロレスで「脳天唐竹割り」なんていう言葉があったように思うけど、本当に頭が割られたかと思っただけのチョップを放つことのできる姐さんが、普通の女の子であるというのは、少し難しいのではないかと思う。

まあ、マックス最大限の怒りがどれくらいかっているのはけっきょく人それぞれだろうし、姐さんがどれだけの力と怒りを込めてチョップしたのかも分からないし、こんなの俺の思った勝手な言い草でしかないのかもしれないけど。でもとりあえず、俺が痛い目にあったということがお分かりいただけただろうか。…、分かってくれたよね？

「それでさ、俺はなんとか椅子に座ることが出来たわけだけど、少なくとも六時間目を元気に過ごすことはできないわけだよ」

『そんな感じに見える』

「だろ？俺もさ、自分ってけっこう頑丈に出来てると思ってるわ



けよ。でもそんな俺をもつてしてもこの大ダメージだよ。これってさ、俺が雑魚いんじゃないって姐さんが強すぎてことで認識間違ってたんじゃない？」

『幸久くんが真っ二つになったかと思った』

「やっぱり？　そうか、ただ俺の体感でそうなたただけかと思ったけど、そういうわけじゃなかったのか……。っていうか、第三者として見てるだけの人間にまでそう思わせるだけの威力ってなんなんだよ。怖いよ」

『のりちゃん、さすがに強い』

「まあ、これくらい強くないと風紀委員でもやっていけないのかもしれないけどな。なんか最近は小隊長もやってるみたいだし、やっぱこう、威厳を保つ的なことが必要なんだろうぜ」

『そうなのかも。のりちゃんも大変』

「あゝ、それには全面的に同意だわ。まあ、そんな大変な姐さんのチョップを喰らって俺もそれなり以上に大変なんだけどな」

『ところで、そんな大変な幸久くんにお手紙です』

「お手紙？　どこの郵政公社から届いたの？」

『持田メイ支局に投かんされたお手紙だよ。後ろの弓倉さんと脇本さんから』

「ああ、前々回志穂の攻撃を受けた俺が机を吹き飛ばしてしまうことになった弓倉と脇本ね。目の前で机をふっ飛ばされて啞然としていた弓倉と、全てが片付いた後にも戻ってきて話だけ聞いて啞然としてた脇本ね。手紙ねえ、手紙…、そうか、お手紙か」

『女の子から手紙とか、モテモテみたいな気がする』

「それは気のせいだ。きつと机を吹き飛ばされて荷物をまき散らされしまったことによってできた心の傷に対する賠償金の請求に違いない」

『それはどういうネガティブシンキング？』

「いやいや、冷静に現実を捉えた理性的な判断だ。そういうことがあったら、きつとそういうのがくるはずなんだ」

『それだったら、あたしも幸久くんに賠償要求のお手紙を書かないと』

「あれ？ 俺はメイに何をしたのかしら？」

『何もしないから、よくない』

「何もしてないのに賠償請求？ なにそれどういう意味？」

『そういうのに気付いてないのが、にぶいんだと思う』

「あれ？ 何が何やら？」

『とりあえず、はい』

「ああ、ありがとう、メイ」

メイがそう言って俺に手渡した手紙――ノートから切り取ったであろう小さな紙をなにやらこまごまと折り込んで、軽乗用車的な形をとっている――には、それぞれ確かに『三木くんへ』と書かれていて、それが俺にあてられたものであることは間違いないらしい。しかし女子というのは、どうしてこう細かいテクを持っているのだろう。別に手紙なんて四つ折りくらいにすれば十分だろうに、そんなに中に書かれていることを読まれたくないのだろうか。

そしてここまできれいに折られていると、なんとなく開くのがはばかられるというか、開くために形を崩してしまうのがもったいないような気分になってしまう。少なくとも、俺は折り目だけを見て完成形を復元できるほどの折り紙テクは持っていないわけで、開いてしまえばこれはただの紙に逆戻りしてしまう。

「……まあ、開くんだけだな」

なんとか紙の端を見つけ出し、きれいに折り込まれた乗用車を開いていくとそれはけっこう簡単に一枚の紙に戻り、そしてその中に書かれた手紙の文面へと俺は目を落とす。それは弓倉が書いたもののように、几帳面そうな文字で三行だけ黒いボールペンの文字が書きつけられていた。

『机の件』

心配無用

弓倉』

簡潔な文章は、ただそれだけを告げていた。こういう細かいところに性格って出るんだな。

「…、了解、すまなかった、と」

とりあえず俺も、ノートの切れ端にそう書きつけると、メッセージに返信することにした。

「メイ、弓倉に渡してくれ」

『わかった』

「んで、もう一個が脇本か」

先ほどと同じように、もう一通の手紙も開いてしまう。まったく同じ折られ方をしていることから、もしかしたら弓倉か脇本のどちらかが両方を折ったのではないだろうか。弓倉はこういう細かいこととか得意そうだし、きつと弓倉が脇本の分も折ってやったに違いなし。まあ、そんなのどっちでもいいんだけど。

『よく分からないけど』

どんまい！

ゆいか

「…、机ふっ飛ばして、すまんかった、と。メイ、これは脇本に頼む」

『がってんしうち』

「ふう…、これにて返信終了なり。しかし、郵便屋さんも大変だな、メイ」

『そうでもない。たまになら楽しい』

「そうか、まあ、たまにならな。仕事としてやるのと遊びでやるのとの間には、大きな隔たりがあるからな」

『クラスの中で飛び交うお手紙を司る配達員になるのは、けっこう大変だと思う。仕事には出来そうもない。それにうちのクラスは女の子が多いからお手紙の数も多いと思う』

「ああ、確かにそうかも。さすがに授業中にメールするわけにもいかなしな、手紙を回すしかないもんな」

『とりあえず、今のところあたしの廊下側後ろ支局に回ってきたお』

手紙はこれで全部』

「えっ、教室の中に支局がいくつもあるの？」

『廊下側と窓側、前と後ろで四分割。廊下側前は幸久くんの前のすみちゃん、窓側前はひろちゃん、窓側後ろはみなちゃんがやってる』

「…、みんなけっこう暇なのな」

『暇ってことは、平和ってこと』

「そういうことなら、いいことなのかもなあ……」

とりあえずまた一つ、俺の知らないことを知ることができたようだった。そうか、教室中で飛び交うお手紙が秩序をもって回されていたのには、こんな隠れた努力があったからなんだなあ。

まあ、そうやってがんばらなくていいところをがんばれるのは学生時代の特権だと思うし、いいんじゃないかと思うけどな。

## 放課後の時間の過ごし方

「そうじゃあ、これでみんな決まりッスね」

「そうね、まあ、これでいちおうぜんぶ枠が埋まりはしたわね。みんながやる気満々になってくれたから、こういう細かいことに時間がかからなくてよかったわ。滝本さんと高見さんはご苦労さま、席に戻っていいわよ」

「はい、それでは席に戻ります」

「はあ…、なんとか無事に終わったッス……」

「滝本さん、議長お疲れ様。あなたはこういうの得意だと思ってたけど、やっぱり得意だったわね。自分でも気づいてない能力っていうのは、やっぱりあるものよね」

「いや、もうこういうのはごめんッス。慣れないこととして、なんか肩こっちゃったッスから……」

「最初はなんでもそんなものよ。これから慣れていけばいいってだけなんだからね」

「はあ、そんなもんスカね……？」

「ドラムだって、最初は変に力が入ってるから変なところが疲れたりしたでしょ？ でも今は、けっこう疲れるべくして疲れてる。何事もそんな感じなのよ」

「そのたとえ、よく分かんねッス」

「あれ？ 分からなかった？ まあ、いいわ、とにかく、慣れないことを慣れないからってなんでも敬遠しちゃダメってことよ。自分がどんな能力に秀でてるかなんて、試してみないと分からないんだからね」

「なるほどお…、さすが綾ちゃん、言うことの端々が先生っぽいッス！」

「うん、まあ、あたしは頭先从足先まで純然たる教師だから端々と言わず発言の全体が先生っぽいんだけどね。というか、先生

っぽいってどういうこと？ みんな、あたしのこと先生とってないの？ ねえ、みんな、どうして目を反らすの？ あたし、みんなの友だちじゃないわよ？ 先生なのよ？」

「先輩は、そういう細かいことにかかずらってるから、いつまでも小者なのですよ。もっと先生のように、泰然とすべてを受け入れる度量を、持つべきなのではないでしょうか」

「ちょ、ちょっと！ ゆり、やめなさい！ あたしのことを小者なんて言うのはやめなさい！ 生徒が誤解するじゃない、あたしは小者じゃないわ！」

「そうやって、小者って言葉に過剰反応するあたり、小者ですよ。でもだいじょぶ、です。先生はそんな先輩も大好きですよ。先輩はいつまでも、イジりがいのある小動物系小者でいてくださいね」

「み、認めないわ！ あたしはあんたにバカにされるような人間じゃないもの！ そんなこと、みんなに聞いてみればすぐにはつきりするわ！ 滝本さん！ 戻ってらっしゃい！ 緊急議会を招集するわ！ 議長はあなたよ！」

「え、勘弁してほしいッス。やっと役目を終えて、ホッと一息ついてるとこなんスよ？」

「お黙り！ 先生があらぬ小者疑惑をかけられてピンチなんだから、助けてちょうだい！」

「先生、よろしいですか」

「なにかしら、風間さん。発言を許可します」

「はい、六時限目のロングホームルームは間もなく終了しますが、帰りのホームルームはどうなさるのでしょうか。私は放課後すぐに風紀委員会の会合に出席しなくてはならないので、出来ましたら時間通りに終わらせていただけると助かるのですが」

「ああ、用事があるのね、そういう人はムリに参加なくていいわ、用事を優先しなさい。放課後少しだったら暇で、あたしの危機に馳せ参じる気概のある人だけ残ってくれればいいわ」

「先生…、一つよろしいですか……？」

「はい、栗田さん。風邪じゃないならマスクしない！　っていうのは、もういいわ。なにかしら？」

「いえ…、これは喉を守るために…、必要なことなので……。理事長先生にも…、許可をいただいています……。で、ですね…、私たちのバンドは…、次のライブに向けて…、練習時間を可能な限り…、確保しなくてはならないのです……。ですので…、ドラムを取られでは…、困ります……」

「美波、ムリに長くしゃべろうとするな。言いたいことは分かっているから、わたしが代わりにしゃべる」

「すいません…、広海……。それでは…、代わりにお願いします…。先生…、広海の話…、聞いてください……」

「いいでしょう、聞きます。千原さん、手短にチャキチャキとお願いしますよ」

「はい。先生、わたしたちのバンドは来週末に月例ライブを控えています。ですので、可能な限り練習をする時間を取りたいと思っています。また、滝本はまだドラムを始めたばかりで、特に練習を必要としています。確かに滝本は器用でなんとなく叩くことができているのですが、しかしそれでもメンバーと音を合わせるとなるといま一つなところがあるので、出来る限り練習をしなくてはならないのです。さらに今度のライブでは、滝本のソロパートが入る曲があるため、その練習をする必要があります。つまり、わたしたちには時間がないのです。貴重な時間を、お願いですから奪わないでいただけませんか？」

「なるほど…、千原さんはけっこう物申す性質なのね……。そういうことなら分かったわ、滝本さんを拘束するのはやめましょう。あなたたちのバンドは人気あるっていうし、そういう生徒の可能性を潰すようなことはしたくないものね」

「御理解いただき、ありがとうございます、先生」

「本当に…、ありがとうございます……。先生方のチケットは…、

最前列の関係者席に…、とっておきます……」

「えっ、ほんとに？ やった、ラッキー。あなたたちの月例ライブのチケット、なかなか手に入らなくてプラチナチケット化してるっていうし、ほんと役得だわ」

「先輩は、そういうところが教師になりきれてないっていうか、お子様気分が抜けないっていうか、総じて言うと、小者ですねえ」

「ちょっとゆり！ 小者っていわないでって言ってるじゃないの！ 帰りのホームルームの連絡は特にないわ！ そんなことよりも、このあと先生が小者ではないってことを証明する大事な緊急議会を招集するから、用事がない子はみんな残ってね！ それじゃ、解散！」

「「さようなら」」

「…、あれ？ みんな帰っちゃうの？ みんなそんなに忙しいの？ ちょっと…、十人くらい残ってくれても…、いや、五人、ふ、二人でも一人でもいいから…、みんな、先生のことなんてどうでもいいの！？」

「先輩、みんながいなくなっても、先生がいるですよ。先生はいつだって、先輩の味方ですから」

「ゆ、ゆり…、やっぱりあたしには…、あんたしかいないのよ……」

「はいはい、そうやっためんどうくさいことをするからみんなに愛想を尽かされるですよ」

「う、別に、みんな忙しかったただけだもん……」

「はいはい、そうですね」

というわけで、そんな感じに茶番って感じで、今日の学校は終了したのだった。新学年が始まって二ヶ月くらい経った今だから分かるけど、あの場面はああするのが正しい。綾先生には少しかわいそうなことをしている気がしないでもないが、まあ、そこらへんのフォローをするあたりまでも含めてゆり先生の演出なのだから心配するべきことではない。



まあ、今日のところは本当に用事があるから帰るのだが、仮に用事がなかったとしてもあそこは帰るべきところだ。なんというか、お決まりというかお約束というか、鉄板ネタ的にあそこはみんなで一斉に帰るっていう感じになっているのである。

「そういえば幸久君、今日はうちに来てご飯つくってくれるんだよね？」

そして俺と霧子は、どこに寄り道するでもなくまっすぐに家路を急ぐのであった。今日は晴子さんが大学の用事で遅い帰りらしいので、天方家の分まで含めて晩飯を用意するという決めごとになっている。しかしだからといって天方家にまっすぐ向かうかと言えば、そういうわけではない。とりあえず俺は家で待機している広太とかりんさんをピックアップしてから向かわなくてはならないわけであり、おそらく天方家の玄関のところで行ったん別れることになる。

だが、別れると言ってても家同士は徒歩で五分も離れていないのだからそれは大した問題ではない。ここでの問題は、むしろ霧子ではなく家で待っているかりんさんにある。今日は天方家に料理をつくりに行く日であり、そして同時にかりんさんを初めて晴子さんの前に差し出す日でもある、ということのを忘れてはならない。

そして、晴子さんに紹介するということは霧子と雪美さんにも紹介するということであり、つまりうちと天方家の家族ぐるみの関わり合いの中にかりんさんを参入させるということである。今までこういうことはなかったからどんな化学反応が起こるのかはまったく分からないが、まあ、とにかくわずかにでも前に進むと決めたのだからもう迷っている場合ではないのだ。

というか、晴子さんからどんなリアクションが返ってくるのかまったく予測がつかないのが、特に怖い。まあ、とりあえず一も二もなく怒るんだろうが、どの程度の深さの怒りが飛んでくるかが分からない。それが分からないと、心の対策の立てようがないのだ。こういうときは、とにかく過去最悪のものを想定しておけばいいのだろうか。…、過去最悪のものは、あまり想定したくないな……。

「ん？ ああ、そうそう。霧子は晩飯、何が食べたい」

まあ、細かいことを考えていてもしょうがないわけだし、とりあえず後で飯でもつくりながら考えるところか。今は、保留にしておくことにしよう。

「えと、あたしはなんでもいいよ。幸久君のつくってくれるご飯は、みんなおいしいからどれでも」

「そういう『食べたいものはおいしいもの』みたいなさ、なんかグルメっぽくね？ うまいもんつくってみろよ、みたいな感じ？」

「にゅう、そういうつもりじゃないんけど……」

「まあ、分かってるって。しかし、なんでもいいか……、まったく参考にならない意見だよな、それって。これがいいとかあれがいいとか、もっと具体的な意見出してくれればいいのに」

「そんなこといわれても、すぐに思いつかないもん」

「だと思っただぜ。とりあえず、晩飯はうまいものだ。それだけは間違いないから心配すんな」

「にゅん、わかったよ。幸久君、がんばってね！」

「おお、任せろ。晴子さんいないけど、俺だってやればできるんだってこと見せつけてやるぜ」

「あたしは今日も、おねえちゃんがいてもいなくても何にも出来ないってことを見せることになっちゃうね……。幸久君のお手伝いは、してもたぶんいつも通り役に立たないだろうから……」

「あんま気にしないでいいぞ霧子。それになにも、キッチンに立つだけがお手伝いじゃない。皿の用意とかテーブルのセッティングなんかも、いちおう晩飯の手伝いだと思うしな。いつも広太も、料理できないからそういうことの手伝いしてくれるし」

「そっかあ、広太君もそうやってお手伝いしてるんだね

。お掃除とかお洗濯とか、他の家事もいろいろやってるのにえらいなあ……」

「まあ、広太はそれが仕事みたいに思ってるそこあるから……。別に俺と分担してもいいと思うんだけど、学校から帰るといつも全

部終わってるから分担もないんだよ。いっしょに暮らしてるんだから、協力し合うのが筋ってもんだろうに、どうして全部やりゃうかなあ…、空気読めよ」

「幸久君、いない人の悪口はダメだよ」

「悪口じゃねえって、思ったことを言っただけだ」

「にゅう、ヘリクツだもん」

「きつと、広太が優秀すぎるのがいけないんだろうな。あいつは、ほんとに料理以外だったらなんでもできるからな。料理が苦手なもの、せめてなにか一つくらいは出来ないようにしないと、って神様が必死になった結果なのかもしれないし」

「広太君はお勉強も全教科できるし、すごいよね。にゅう、広太君は、高校行かなくてよかったのかな？」

「…、いいんだよ、あいつは。まあ、行きたくなったら言うだろ。あいつの学力なら編入試験に苦勞するなんてこともないだろうし、俺は別に心配してねえよ」

「そっか…、幸久君が心配してないことを、あたしが心配するのも変だよ。うん、あたしも心配しないことにする」

「とりあえず、今は広太じゃなくて今晚の晩飯をなににするかだよな。晴子さんは肉っぽいのがいいって言ってたし、肉を使うのは確定だ。ん…、まあ、肉料理中心に付け合わせを二品くらいだろうな」

「にゅう、幸久君、がんばってね」

「任せとけ、おいしいもんつくってやるからな。霧子は楽しみに待っててくれればいいぞ」

「うん、あたし、待ってるのは得意だよ」

「そうか、それは頼もしい限りだな」

とりあえず、いろいろやらなくちゃいけないことはあるわけだが、今は晩飯の仕度のことを考えることにしようと思う。少なくとも、晩飯に何をつくるかということで悩むだけだったら、誰に何の影響も与えはしないだろうからな。というか、最近俺の周りで発生する

問題が徐々に重いものになってきている気がするんだけど、気のせいだろうか？

## 説明の前に、出かける支度を

「ただいま」

今日も、無事かどうかは分からないが、なんとか学校をやり過ごした俺は、いつものように霧子を家まで送り届けてから自宅へとたどり着いたのだった。そして今日はこの後、大学での何らかの用事によって帰りが遅いらしい晴子さんの代わりに夕食を用意すべく天方家へと再び赴かなくてはならないわけであり、実際のところ今現在、あまり余裕がなかったりするのだが。

「お帰りなさいませ、幸久様。本日もお勤め、ご苦労様でした。これからちょうど、広太さんがお夕食の買い物に出てくださいるところなのですが、幸久様は何が食べたいでしょうか？」

「あゝ、かりんさん、今日は晩飯つくらなくていいから買い物行かなくていいんだよ」

そしてもう一つ、忘れてはいけない用事がある。というか、本来はこっちの用事の方が先にあったというか、晴子さんからの夕食作成命令と同じくらい大事な用事だったりするのだ。それは、端的に言ってしまうえば『かりんさんのことを晴子さんに紹介する』というミツシヨンだった。パツと聞いた感じだと、かりんさんを連れて徒歩五分圏内にある天方家まで行くだけのなんてことないミツシヨンのように思えるかもしれないが、しかしその実これはそんな簡単に単純なものではないのである。

かりんさんのことを晴子さんに紹介するということは、つまり天方家の人々に対してかりんさんの存在をつまびらかにするということであり、かりんさんがどんな人でどうしてここにいてどうしてうちで暮らしてるのか、みたいな細かいことをすべて包み隠さず、告白しなくてはならないということなのである。

そしてそれに加えて、俺がどれだけうまく的確に状況を説明したとしても、晴子さんは間違いなくどこかに難癖をつけ（愛の鞭）、理

不尽にも何らかを要求する（愛の鞭）ことだろう。そこで何が求められるかは分からないが、まあ、今までの経験からいって罰ゲーム的な、身体的あるいは精神的なダメージが見込まれる何らかが求められる（愛の鞭）ことだろう。それを思うと、今から心がうきうきしてきてしょうがないではないか。

「幸久様、おかえりなさいませ。お荷物を部屋までお運びいたしますのでお預かりします。それと、晴子様を訪ねられるのは今すぐのことでしょうか、それともしばらくしてから向かわれるのでしょうか。あるいは、もうすぐで行ってらっしゃったのでしょうか」

「一つ目だ」

「了解いたしました」

「広太、かりんさんにはまだ何も言ってないのか？」

「はい、もちろんでございます。これは幸久様から直接かりん様にお伝えすべきことだと思いましたが、何もお伝えしておりません」

「そうか。まあ、そうだと思った」

「あの、幸久様、お夕飯をつくらなくていいというのは、どう……？」

「えっと、とりあえず、説明するからリビングで待ってて。俺は着替えてきちゃうから」

「は、はい、了解いたしました」

まあ、説明するなんて言っても何を言うことができるわけでもないのが現状だったりする。というか、俺がなにか言わなくちゃいけないのはかりんさんに対してじゃなくて晴子さんとか霧子とか雪美さんに対してであって、弁論力はきたるべき大戦争の瞬間のために温存しておかないといけないのである。かりんさんには悪いが、ここは事実連絡をするだけで勘弁してもらおう。いや、かりんさんなら俺の言うことはパツと受け入れてくれることだろうし、問題はなにもないかもしれないが。

「ゆき、おかえり」

「なぜいる」

「？ それは哲学的な問いだね、ゆき。人間という概念が存在している意味についての発問だね」

「いえ、そうでなく」

「じゃあ、自分という主体から見て、他者がどうして存在しているのか、っていう問いかな。うん、それもなかなか深い問題だね」

「いえ、そうでなく」

「ということは、自分という存在がどうしてこの瞬間という時間軸に存在しているか、っていう問いかな。運命論は危ういよ、ゆき」

「いえ、そうでなく」

「それじゃああれかな。『なぜ』っていうセンテンスにとらわれるのが間違いで、意味的にはむしろ『どうして』って言いたかったのか。『どうしている』ね、なるほど、反語的だね。省略したところまで全部言うと『どうしているだろうか、いや、いない』。つまり、それをあたしに向かって言ったということは、あたしは存在してないってことだ。ということはゆきの観測している世界は、あたしの存在を認識しながら、同時に認証していないってことじゃないか。ゆきの中には独我論的な世界解釈に基づく自他間の存在認証のモデルが構築されている感じなのかい？　ところでゆきの好みはマトリックス系？　水槽に浮かぶ脳系？　どっちも状況的には似たようなものだけど、でもどっちかというと前者の方が厨二病的だね」

「いえ、そうでなく」

「違うの？　ゆきは厨二病だからそうだと思ったのに……。それじゃ、『何故居る』じゃなくて『ナゼイル』っていう新しい言葉が」

「そろそろしつこいですよ、弥生さん。弁を弄して、いったい誰を煙に巻こうっていうんですか」

「いやいや、あたしは純粹にゆきが何を言おうとしているのかを考えていただけであってだね、誰を煙に巻こうっていうつもりもないのだよ」

「それは、純粹にめんどくさい人ですね」

「うん、よく言われる」

「なんでスポットスポットでめんどくさいんですか、あなたっていう人は。どの瞬間もいつもどおり、適当にやり過ぎるように生きていてくださいよ」

「お酒が入ってないと、いろいろ考えちゃうんだよね。おねえさん、大人だからさ」

「大人だから、っていう言葉がそんなに説得力をもたなかったのを、俺は初めて見ましたよ」

「じゃあ、セクシーだからね。いろいろ考えちゃうんだよ」

「セクシーだからって、より意味の分からない方向に話を展開させましたね。それだったらまだ『大人だから』の方が説得力ありましたよ」

「まあ、そんなことはどうでもよくってだね」

「あれ？ 弥生さんが始めた話だったはずなのに、どうして俺が分からんことを言ってるみたいないな感じになったんですか？ 納得できないんですけど」

というわけで、リビングのソファでぐてつと寝転がっている弥生さんだった。この人はなにかと理由をつけてここにすることが多いので、別にいること自体は珍しいことではないのだけど、でも俺の知らない間に来るとその理由を聞きたくなくなってしまったというか、『何してやがる』と思ってしまふのだ。もはやそんなことを聞く間柄でもないと思うのだが、どうしても聞いてしまふのだ。きっと俺も、自分が思っているよりも弥生さんのことが気に入っていて、チャンスを見つけて会話したいと思っているに違いない。

…、違うかもしれない。

「今ね、ちょっと大学の関係でやらなきゃいけないでっかいプロジェクトがあつてね。それに本気で取り掛からないといけないから断酒してて、ついさっき禁断症状が出そうになったからりんちゃんにお茶飲ませてもらいに來たの」

「…、弥生さん、あなたが行くべきなのはここじゃなくて病院ですよ」



「まあ、禁断症状っていうのは冗談だけど。でもここ三日くらいお酒飲んでないのはほんとだよ」

「まあ、そういうことなら別にいいんですけど。俺はてっきり、昼飯をたかりにきた流れで今までずっとここにいる、的な感じかと思っただけ」

「今日は、寂しいけどお昼は一人で食べたのだ」

「そうでしたか、それじゃあ夕食もそんな感じでがんばってくださいね」

「えー、どうということ？」

「俺たちは今日はここで夕食食わないってことですよ。まあ、どうしてもっていうなら時間遅くなっちゃいますけど、帰ってきてからなにかつくりに行つてあげますから」

「おお、ゆき、さすがー。じゃあ、ゆきが帰ってくるまでご飯食えないで待つてるよ」

「まあ、九時過ぎには帰ってくると思いますから、待っていてください」

「都ちゃんも誘つとくからね、楽しみにしてるよ」

「えっ、二人分ですか？ いや、別にいいですけど…、あつ、買い物はしといてくださいね。あと、何が食べたいかも考えといてください」

「うん、任せて、おねえさんはお買い物は得意だよ」

「出来れば料理も得意になってくれると助かるんですけどね」

「出来ない努力はしない主義だよ、合理主義者だからね、おねえさんは」

「そういうことしておきます。それじゃあ、俺は着替えてくるから広太とかりんさんは出掛ける準備しといてな。弥生さんは帰る準備してくださいね」

「私は、いつでも出ることが出来ます。幸久様の仕度が整いましたらお声をかけてください」

「お、お出かけするのですか？」

「とりあえず、外着に着替えちゃってくれるかな、かりんさん。俺が着替えたら、説明するから」

「は、はい、分かりました。弥生さん、お手数ですけどお手伝いしてもらってもいいでしょうか？」

「ん？ いいよ。っていうか、なにすればいいの？」

「ええと、色合いとかを、見てください」

「おねえさん、別におしゃれさんじゃないよ？ あと、詫び寂びとかもよくわかんないよ？」

「そ、それでも構いません。一人で選ぶよりも二人で選んだほうがいいですから」

「そういうもんかねえ、そういうもんなんだろうねえ。っていうか、もしかしてりんちゃん、一人で着物着れなかったりするの？」

「いえ、着付けでしたら幼いころから仕込まれているので問題はありませんが」

「そっかあ…、いや、ちょっと、もし一人で着れないならゆきがお手伝いしてるのかなあ、とか思ってたね。着物の下はなににもつけないっていうし、とんだエロっ娘だなあって思っただけ。っていうかりんちゃん、さすがのゆきも、毎朝それだけ濃密なアタックかけられたら落ちるんじゃない？」

「そ、そんなことしません！」

「かりんさん、どうかした？」

「どうもいません、問題ありません」

「っていうか、着替えるっていうのに弥生さんを部屋に入れない方がいいですよ、かりんさん。なにされるか分かったもんじゃないですから」

「イヤだな、何もしないよ、何も。しないしない、何にもしないに決まってるのに。逆に、何するっていうのか聞きたいくらいだよ」

「まず見るでしょ。舐めまわすように見るでしょ。それから触ろうとするでしょ。手とか足とか脇腹とか、一見問題なさそうなところ

から徐々に攻めていくでしょ」

「…、しないしない」

「一瞬の沈黙が怪しすぎる、かりんさん入れちゃダメだ。淫魔の侵入を許してはダメですよ」

「残念、もう入っちゃいました。さあ、りんちゃん、お着替えしましょうねえ。まずはぬぎぬぎしましょうねえ。それから選ぼうねえ」

「逆だろ、おい逆だろ！ 脱ぐ前に探せよ！」

「いや、おねえさんはいつもそうしてるし」

「変態の意見は聞いてないよ！ 露出狂の裸族は黙ってろよ！」

「まあ、その点については否定はしないけどね」

「否定して!？」

「とか言ってる間にりんちゃんは脱ぎ始めちゃってるけどね！ わあ！ ナイスバディ！ 見れないゆきの代わりに、おねえさんが網膜に焼きつけとくよ！ あっ、実況してあげよっか!？」

「しなくていいよ！ っていうかもう帰れよ！」

「おねえさんにはね、りんちゃんの着るものをいっしょに選ぶという崇高な使命があっただね」

「そんなの俺が代わりに……！ 出来ないよね！ それは俺じゃ出来ないことだよ！ 弥生さん、しっかり仕事してくださいね！」

「あっ、なんだ、着物着ても下着つけてるんだねえ」

「かりんさん！ その変態、殴っていいよ！ 三発くらいならいいよ！ 俺が許す！」

「弥生さん、誰も覗かないからっていつまでもドアを開けておかないでください。恥ずかしいです」

「うん、そうだよねえ。おねえさん、うっかりしてたよ。ドア閉めないで、ね！」

「あー！！ こんなとき手からでも目からでもビームが撃てればいいのに！！ そうすればあの変態を誅殺することができるっていうのに！！」

「うふふ、女に生まれ変わって出直しておいで、ゆき」

「くう……！　力が、ほしい……！！」

そんな感じで、今日も俺は無力だった。まあ、いくらあの人が弥生さんといっても、そこまでのことはしないだろうし、そんなに言うほどのことではないのかもしれないけどな。実際に俺の着替えを見に部屋へ侵入してきたときもノータッチを貫いてたし、今回もお触りはなしの方向に違いあるまい。

でもなあ…、あの目なあ…、きっとあれが『目で犯す』というやつに違いない、と確信できるだけの力を持っているからな。あれだけ変態力を視線に集中させることができるっていうのも、ある意味一つの才能なのかもしれない。…、俺はいらないけどな、そんな才能。

## さあ、おでかけしよう

「というわけで、今日は俺の師匠にかりんさんを紹介するためにお出かけして、その先で晩ごはんも食べてこようっていう計画になつてゐるんです」

「なるほど、そういうことだったのですね。突然外着に着替えるようにと言われて、驚いてしまいました」

制服から私服、さらに言うなら部屋着ではなく外着に着替えを済ませた俺は、同じくさっきまでの着物よりも少しだけしつかりとした着物――着物の分類には明るくないので、どれがどれなのか分からないが――に着替えたかりんさんとリビングの机で向かい合わせに座り、先ほど省略した諸々の連絡事項の伝達を行なったのだった。

まあ、当初の予測通り、かりんさんは一も二もなく俺の言うことを納得すべき事実として受け入れてくれたので、俺の貴重な弁論力を無駄遣いすることなく事を為すことができたのは重畳と言って然るべきだろう。

そしてどうしてか、弥生さんはまだ自分の部屋に戻っていない。さっき俺が『帰ってくださいね』と確かに言ったにもかかわらずいまだソファ―に寝転がってぐてっとしてゐるこの人は、本当に帰る気があるのだろうか、いや、ないのだろう。もうめんどくさいからこのまま放っておいて行ってしまうでもいいかもしれない。だって、どうせこの人をここに放っていったとしても俺たちがここを出てゐるのはほんの四五時間であって――確かに盗人が部屋を荒らして金目のものを奪い去っていくには十分な時間かもしれないが、しかしここに寝転がっているのは弥生さんである――、特に問題はないのかもしれない。まあ、かりんさんの貴重な甘味が食い荒らされたりするくらいの被害は出るかもしれないけど、でもそれくらいだったらまた今度買ってあげればいいだけのこと。なんつうか、もう勝手にさせておけばいい気がしてきた。

「その、幸久様のお師匠様という方は、どちらにお住まいなのでしょうか？ お夕飯を食べるというのにこの時間から出られるということはかなり遠くにお住まいなのでは……？」

しかしまあ、いかにかりんさんが俺の言うことをそのまま受け入れてくれたとしても聞きたいことが何もない、というわけではないよ。うで、ここからは俺の事実連絡タイミングではなくかりんさん主導の質疑応答タイミングになるのだった。だが、かりんさんが相手じゃなかったら高確率でその前に反論タイミングがやってくることを考えれば、事実の伝達効率だけを見れば非常に優秀というのが正しいだろう。

というか、なにか物を言ったらそれについての質問に受け応えるのは話者の義務なわけであって、当然の対応ではあるのだから。

「師匠の家は、この部屋から徒歩五分圏内だよ」

「五分、で着くのですか……？ それならば、もう少しお夕飯の時間に近い、遅い時間までお待ちしてからお伺いしたよろしいのではないのでしょうか？ お夕飯を召し上がりながらということでしたら、あまり早い時間に押しかけてしまうのはご迷惑にあたるのではないのでしょうか？」

「夕飯は、俺がつくるんだよ。師匠は、今日はちょっと帰りが遅いらしいから、俺が用意しておくんだ」

「ああ、なるほど、そういうことでしたか。それならばこの時間から行くのも納得です。ところで、そのお師匠様というのは、幸久様に何を教えてくださっているのでしょうか？」

「なにを、教えてるか？ えっと、基本的には料理、かな。あと、いろいろ生きていく上での振る舞い方とか、生き方そのものとか、じゃないかな……？」

「お料理のお師匠様だったのですね。それでは本日つくられる料理は、幸久様がどれだけその教えを身につけられたかの確認も兼ねているということでしょうか？」

「ん？ あっ、いや、別にそういうのはないかな。今日は、師匠は

ちょっと他の用事があつて自分で晩飯つくってる余裕がないっていうからさ、なんていうか、晩飯づくりの仕事を引き受けたというか、肩代わったというか、まあ、そういう感じ」

しかし、実際のところ、別にテストと明言されていないとしても、晴子さんのために俺がつくる料理はいつだって採点されているのだ。つまり晴子さんが言いたいのは、料理の世界は常在戦場、いつでもどこでもどんなコンディションでも、常に己の持つ最高のポテンシャルを発揮することができてこそその料理人である、ということなのだろうと思う。

とにかく、晴子さんにお出しする料理を適當につくるなんて、俺の持っているスキルレベルでは不可能なことなわけであり、いつでも全力であたらなければダメなのだ。というか、全力であたってもダメなときがある、…、いや、いつでもだいたいダメ出しされるのだから、俺なんてまだまだである。料理神、というか神であるところの晴子さんがただただ領いて納得してくれる料理をつくることができるようになるまで、俺の修行は終わらないのである。

そもそも、俺ごとき弟子畜生が師匠神であるところの晴子さんの重厚にして深遠なる思慮を読み解こうということからして不敬にあたるのであつて、俺はただ可能な限り命令に忠実に、神の箴言に従つていればいいのである。どうせ、晴子さんの言わんとすることはそう理解できることじゃないんだし、黙って従っているのが一番いい。低次の存在が高次の存在の思惑を、その前提とする世界の差異によって理解することができないように、晴子さんの高尚な思考は俺の卑賤な思考では理解不可能なのだ。まあ、なんというか、『ベストキッド』みたいな感じで、ただのペンキ塗りだと思っていたんだけど実はカンフーの修行だったんだぞ！ ほっほっほ、身体が動くじゃろう！ みたいなアレなのだ、と思う。思いたい。

「とりあえず、今日はあつちで晩飯だからってことが言いたいわけ。分かってくれた？」

「はい、そのことでしたら、よく分かりました。しかし、幸久様の

お師匠様にお会いするということでしたら、着ていく服はもう少し落ち着いた色の方がよろしかったですか？」

「別に気にしないでいいよ、かりんさんがいいと思うものを着てつてくれれば。師匠はあんまり堅苦しいこととか言わないし、それにその服、言うほど派手じゃないと思うよ」

「そうでしょうか…、少し、この袖のあたりの刺繍が目立ちはしませんか？」

「平気平気、目立っっていうか、かわいいよ。よく似合ってると思うし、センスいいと思う」

「そ、そうですか…：？」

「それを選んだのは、おねえさんだからね！ おねえさんの功績ってことを忘れないでね！」

「はいはい、どうでもいいですね。それじゃあ、そういうことなんで、そろそろ出ましようか。向こうで食材の感じを見て買い物にも行かないといけないわけだし、時間をもったいないし」

「幸久様、なにかお持ちするものはございますか。先日購入したばかりの、使い込むほど味が出るという鉄の中華鍋を持って行かれますか」

「ああ、あれな、使うほどにいろいろ吸って味が出るっていう、あれな。あれは、別に持っていかなくていい。向こうのキッチンも、もう俺のキッチンみたいなんだし、わざわざ持っていくほどのものでもないだろ。っていうか、あれデカイんだよ。持っていくのダルい」

「左様でございますか、了解いたしました」

「ゆ、幸久様、私は、なにか持っていた方がいいでしょうか。お近づきの品に、なにか」

「あゝ、気にしないでいいよ、そんなこと。師匠はそういうの借りだと思っちゃう人だから、むしろ持っていくとイヤな顔されると思うし」

「そ、そうですか…、そういうことならば、お気持ちだけさしあげ



ることにします」

「うん、それがいいと思うよ。うし、じゃあ、そろそろ行くか。弥生さん、別にここにいてもいいですけど、いるんだったらきちんと留守番しててくださいよ。カギ開けっぱなしのまままでどっかにでかけました、とかやめてくださいね」

「うい、まかせて、おねえさんはノートパソコンを持ち込んでお仕事しつつお留守番してるからね」

「わざわざそんなことするくらいだったら、自分の部屋に帰ればいいのに……」

「とりあえず、三人ともいつてらっしゃい」

「はいはい、行ってきますよ」

「おねえさんは、ゆきが帰ってくるのを首を長くして待ってるよ。ゆきが帰ってきて、晩ご飯をつくってくれるのをね」

「はいはい、分かってますよ」

というわけで、俺たちはようやく目指す先であるところの天方家へと向かうために部屋を出ることができたのだった。実際問題、これから五分弱かけて天方家に赴き、それなりに時間をかけて雪美さんと霧子を説き伏せて、冷蔵庫の中身をチェックしてから晩飯のメニューを決めて不足分の買い物に行き、それからいっぱいまで時間を使って晩飯をつくり、おそらく晩飯を食う前に晴子さんにギリギリと絞られ、そしてぼろぼろの身体を持てあましながら晩飯を食べて、とこれからの予定を想像してみると、そこまで無茶苦茶な感じではないなあ、と想着してしまう俺がいる。普通だったらキツいなあ、と思うところなのかもしれないけど、これまでの人生的にこれ以上にキツかったことはないくらいでもあるわけで、これくらいなんでもないぜ、と想着してしまうのだ。

あるいは俺がふつうの人よりも危機に鈍感なのかもしれないが、それはおそらくこれまでのハードな人生によって感覚がマヒしてしまっているからに違いない。だって、どうしてもこれまでの人生と比較して『あのときに比べればマシじゃね?』と考えてしまうのだから

らしようがない。なんというか、俺は小中学生の時分にムリな時を送り過ぎていたのかもしれない。いや、かもしれないなんて言葉はそぐわない、確実にムリしすぎていたのだ。

「…、なあ、広太、俺って、今は大人しくしてるか？」

「それは、どういった意味合いをもっているの御言葉でしょうか。」

「概にお答えすることができると質問ではない、と愚考いたします」

「つまり、俺って、昔に比べたら丸くなったよな、ってこと」

「昔というのは、小学生の時分や中学生の時分のことを指すのでしょうか」

「ああ、そのあたりの、俺が一番ハツちゃけてたって言われる頃と比較してな」

「そう、ですね…、私としては、幸久様はそうお変わりになっていないのではないかと存じます。もちろん年月を経ることで心身ともに成長はなさっておりますが、しかし根本の性根といえますか、一番根元の部分でお持ちになっている考え方は、変わっていません。今も昔も、幸久様は幸久様です」

「それってつまり、どういうことだ？ 根本的なところは何にも成長してないってことか？」

「幸久様が幼いころよりお持ちになっている素晴らしいところは、過ごされた年月によって色あせていないということです。ご心配なさらなくても、幸久様は今も昔も最高に輝いております」

「…、お前にそう言われると、なんかそんな気がしてくるから困るな。ダメだ、広太の意見は参考にならない。かりんさんはどう思う？ …、いや、かりんさんはそんなこと聞かれても困るか」

「幸久様は、今も昔も変わらず素敵だと思います。だって私は、小生のときの幸久様も、中学生のときの幸久様も、今の幸久様も、変わらず好きですもの」

「あれ、かりんさんは、昔の俺のことも知ってるの？ 直接に会ったことはないって言ってたけど」

「直接に会ったことは、ありません。ですが、幸久様のことはずっと

と見ていました。三木のお家から、幸久様を映したビデオがよく届けられていましたから」

「なにそれ、俺そんなの知らないんだけど」

「私もそれについてはなにも知りません。おそらく隠し撮りでもしていたのではないでしょうか」

「隠し撮りって、怖いな、おい。でもおじさんとかがそんなことしてる感じじゃなかったし、誰が隠し撮りなんてしてたっていうんだよ」

「…、私には、申し訳ありませんが、よく分かりませんのでお答えすることは出来ません」

「そうか、まあ、お前にも分からないことくらいあるよな。とりあえず、それはいいや、もう過ぎたことだ。それにしても、そっか、だからかりんさんは俺に会ったことなく俺のこと知ってたんだ」

「はい、習い事ばかりで面白いこともない毎日を、幸久様だけが癒してくださいました。幸久様がいらっしやらなかったら、私がここでこうしていることもなかったと思います。本当に、幸久様には感謝してもしることができません」

「いや、それは、俺はなにもしてないつつうか、ここでこうしてるのはかりんさんが自分でがんばったからつつうか、…、俺なんかに感謝なんてしないでいいんだって」

「息が詰まってしまいそうな二見の後宮で、私の心を支えてくださったのは幸久様なのです。あなた様がそれを御存じなくても、でもそれは紛れもない事実なのです。ですから、幸久様にとってはおかしな話かもしれないですが、感謝だけでもさせてください」

「なんか、何にもしてないのに感謝されるなんて、変にくすぐったいな……。でもそれって、かりんさんにとっては大事なことで、ってことだよな。そういうことなら、まあ、感謝されるくらいだったら、いくらでも」

「私は、これから一生かけて幸久様にご恩返ししていきたいと思えます。ですから、末永く、よろしくお願いいたします」

「…、よろしく、って、気軽に言っているのかどうか分からないけ

ど…、言うよ。よろしくね、かりんさん」

「はい！ 不束者ですが、よろしく願いします！」

実際のところ、今の場合その言葉は気易く口にしてはいけないものだ。そのことはよく分かっている。でも俺は、ここではそう応えるべきだと思った。

もしかしたらそれは、ある意味で、かりんさんとのこれからのことについて本気で向き合っている、という決意の代わりだったのかもしれない。

## 門扉の前で待ちぼうけ

「霧子、俺だ。開けてくれ」

『にゅ、うん、幸久君、今開けるから待っててね』

さあ、おでかけだ！ と勢い込んでみたところで、しかしながら結局のところも目的地はほんの徒歩五分未満のところにある天方家なのだから、そもそもからしてそんな『おでかけ』って感じになるわけではないのだ。まあ、別に俺自身はおでかけ感を求めているわけではないのだから、それが無いからといって何の問題があるわけでもないのだが。

しかし、俺とか広太にしてみれば何のことはない五分弱だったかもしれないが、まさしく一ヶ月ぶりに外を出歩いたかりんさんにとってはちよつとした冒険のような感覚を味わっているのではないか、などと俺は勝手に思っていたりする。実際のところ、さすがに部屋に監禁していたわけではないから一ヶ月の間そこから一度も出ることはなかったとは言わないが、だがそれでもかりんさんは俺の、出来るだけ部屋から出ないようにしてください、というお願いによく聞いて守ってくれた――広太によると、かりんさんはこの一ヶ月の間ほとんどの時間を俺たちの部屋の中で過ごし、部屋の外に出るとしてもアパートの敷地の外には絶対に出なかったんだそうだ――らしい。

だから、こうして久しぶりに部屋の外で自由に歩き回るというのが、かりんさんにとっては俺が思っているよりもずつとうれしいことなのではないだろうか。まあ、一ヶ月の間そんな風に部屋に閉じ込めていたのは、ひとえに俺の覚悟と根性が足りなかったのが問題なのであり、責められるべきは俺一人であるということをごここで明確にしておこうと思う。

懺悔の代わりに、いったいどういう事情だったのかということの説明すると、それはもしかかりんさんが何の憂いもなくアパートの外を

テクテクと歩いているとして、そのときに発生するリスクが俺のコントロール下に置き切れる大きさのものではなかったということなのである。そこで発生するリスク、つまり我が家から出てくる、あるいは我が家へと帰っていきかりんさんの姿を偶然目撃したどこかの奥様が御近所の噂ネットワークを介して晴子さんに情報を流してしまいう危険性がそれにあたる。かりんさんのことが晴子さんに知られるというのは、偶然に起こってしまったはいけないことで、俺が自分で報告しなくてはいけないことなのだ。それは俺自身がきっちりとつけるべきけじめという意味でも、自分の知らないところで俺がよく分らんことになっているということをも自分よりも先に知っている人がいたということに対して晴子さんの怒りが発生しないようにする未然の措置という意味でも、非常に重要な選択であるようにそのときは思われたし、今でもかりんさんにかけてしまった負担を度外視すれば正しかつたと思っている。

「ここに来たときはあたりを見て回ることができませんでしたので、こうして少し歩いただけでもいろいろな発見があって楽しいものですね、幸久様」

「…、ごめんね、かりんさん、一ヶ月も家の外に出れないようにしちゃってさ。ほんとだったら俺もそんなことしなくなかったんだけど、ちよっと事情があったからね、結果的にはそうすることにしちゃったんだ。全然罪滅ぼしにならないと思うけどさ、もしなにかしてほしいこととかあったら言ってよ。俺に出来る範囲で叶えるようにするからさ」

「そんな、罪滅ぼしだなんて、滅相ありません。私はただ、今のように幸久様のおそばにいたことができるだけで幸せなのです。むしろ私の方が、何も言わずにお部屋においてくださる幸久様にご恩返しをしなくてはならないと思うくらいで、幸久様が負い目を感じる必要などないのです。幸久様こそ、私にできることがあったらなんなりと言ってください。一個人の私に出来ることなどたかが知れています。ですが、それでも出来るだけのことをさせていただきたいと思

っています」

「いや、けっきょくかりんさんのことを宙ぶらりん扱っちゃって俺が言うのもなんだけど、かりんさんはもう少しいろいろ要求してもいいと思うんだよね。だって、不便でしょ、生活がいろいろと」「そのようなことはありません。幸久様と同じ時を過ごすことができるというだけで、どれほど私が幸福か。それがきつと、幸久様はまだよくお分かりになっていないのだと思います。私は幸久様と共にあることができるのならば、どのようなところでどのような生活を送ることができると問題ないのです。それをこのような素敵な生活を送ることができているのです、これで文句など言おうものならば、それは私がどれほど貪欲で素晴らしい人間なのかということをお見せすることになってしまいます」

「でもきつとさ、俺も広太も男だから、女の子のかりんさんが何を求めているのかってことを完全に理解することって出来ないと思うんだ。だから、いかにかりんさんが今の状況で満足です、って言うとしても、実は困っていることがあったりすると思うんだよ」

「そんな、困っていることなどありません。幸久様も広太さんもよくしてくださいまし、アパートの方々もやさしくしてくださいます。これ以上、望むことなどありません」

「そこまで言われちゃうと、まあ、俺もこれ以上はいえないんだけどさ…、でも、困ったことがあったらいつでも言って。汗臭い男の後に湯船に浸かるのはイヤだから一番風呂がいいとか、そういうのも何でもいいから、かりんさんが気持ちよく暮らせるようにしたいんだ」

「幸久様…、ありがとうございます。そうして気遣ってくださいるだけで、感無量です。やっぱり、幸久様のことを好きになってよかった……」

「かりんさん……」

「お二人とも、あまり往来で盛り上がるのはよろしくないのではな  
いか、と愚考いたします故、その旨進言させていただきます。ここ

はあくまでも公共の場所なのですから、そういったプライベートな  
用件を大きな声で話されるべきではないかと存じます。他人の目も、  
他人の耳も、まるでないというわけではないのですから、もしそう  
いったことを話すのならばもう少々抑えた声で話されるべきな  
のではないでしょうか」

「え？ そんなデカイ声でしゃべってないって。俺もかりんさんも  
静かなもんだろ」

「いえ、幸久様のいつもの在り様から考えるに、これから声が大き  
くなると思いますので、勝手ながら先回りで注意をさしあげまし  
た。しかし、必ずしもそうならなかった場合もあると考えられます  
ので、幸久様が罰を与える必要があるとお考えになられるのでした  
ら、存分に罰をお与えくださいませ。私は、その覚悟をした上でし  
た進言ですので、どうぞ御遠慮などなさらずに」

「…、まあ、お前がそう言うってことは、きつとそうなりそうだっ  
たんだろうな。心配すんな、そんなことくらいで罰なんてやらねえ  
つつうの。お前の言うことは、たいいていあってるから、きつと今回  
もほつといたらお前の言った通りになったに違いねえ。あつ、そう  
だ、そんなことより、今から霧子が出てくるんだよな。急にかりん  
さんのこと見たら壊れるかもしれないな…、とりあえず、かりんさ  
んは門柱の影に隠れてもらって」

「あの、幸久様、霧子、ちゃんが、いらっしゃるのですか？ 幸久  
様のお師匠様のお宅というのは、霧子ちゃんのお宅なのですか？」

「ん？ ああ、そうそう、言ってなかったっけ。俺の料理の師匠は、  
霧子のねえちゃんの晴子さんだよ。だからここには霧子がいるんだ  
よ」

「そうだったのですか……」

「あつ、そっか、かりんさん、昔の俺のこと、ビデオで観てたんだ  
ったよね。ってことは霧子のことも観てたんじゃない？ 今も昔も、  
霧子はたいいてい俺といっしょにいるから、俺のことビデオに撮った  
ら基本的に霧子も映り込んでるはずだよ」



「はい、実は私、霧子ちゃんのことでもビデオで何度も観たことがあるんです。幸久様の一番のお友だちのようだし、よく映り込んでいました」

「へえ、そっかあ…、霧子のことでも知ってたんだね、かりんさん。ってことは、この前のゴールデンウィークのときは、俺だけじゃなくて霧子のことでも初めて生で見たってことだね」

「はい、そういうことになります」

「でもあんまり、霧子のことには気にしてなかったように思うんだけど、俺の気のせい？俺のことはけっこう気にしてくれてたように思っただけ」

「そ、それは…、幸久様のことを気にしすぎてしまって、それ以外のことに意識を向ける余裕がなかったからであって、幸久様以外の方に向ける意識の猶予がなかったというだけです。霧子ちゃんのことだって、お会いすることができてとてもうれしかったんですよ。そのことに気づいたのはみなさんがお帰りになられて、少ししてからなのですけど」

「へえ、そっか、そうだったんだ……。じゃあかりんさん、あのときはすっげえ楽しかったんだろうね」

「はい、とても楽しかったです。いつもなら出来ないようなことも出来ましたし、仕事を任される責任感というのも意外と気持ちいいものでした」

「かりんさんは、意外と適応力高いっていうか、上手く順応できる人なんだろうね。旅館での仕事ぶりも、番台にほめられてたし、うちでの生活も一週間もしないで慣れてたみたいだし」

「そんな、私なんてただ一生懸命だけです」

「何に対しても、一生けんめいになることができる人は偉いんだよ。怠惰な人間ではないっていうのは、それだけで一つの人間としての価値だからね。まあ、その先の成果までつなげて初めて意味があるっていう人もいるだろうけど」

そういう成果至上主義の人は、まあ、俺とはちよつと価値観が違う

わけなんだけど、でもその考え方もなんとなくわからなくもない。っていうか、その一番身近にいる成果至上主義の人っていうのが晴子さんなわけで、その考えを理解していないとついていくことができないし、その価値観に基づいた指示のされ方もしばしばされるのだから、その指示を通じて俺に何が求められているのかを考える基準がどうしても必要なのだ。

「とりあえず、俺はがんばってる人が好きだよ」

「はい、それならば、私は幸久様により一層気に入っていただけのように、いろいろなことをがんばろうと思います」

「うん、それがいいと思うよ。とりあえずがんばるっていうのは、きつとすげえ大事だと思う。…、っていうか、霧子、遅くないか？」

「そうですね、いつもならばもっと早く扉を開けてくださると思うのですが、今日は少しゆっくりなさっているようです」

「どうしたんだろ、あいつはカギだけ開けて戻っちゃうようなやつじゃないし、絶対カギを開けたらドアも開けるのに。っていうか、まだカギが開いた音がしてないからな。ほんと、どうしたんだ？」

「もしかしましたら、晴子様が霧子様に、易々と扉を開けてはならないとお教えになったのかもしれませんが。霧子様は、昔から少々不用心なところがありますので、そういったことがないようにと晴子様が注意をなされたのではないでしょうか」

「ああ、そうか、なるほど、そういう可能性もなくはないな。まあ、ただちんたらしてるだけっていう可能性も、普通にあるけどな。とりあえず、もう一回鳴らしてみるか、チャイム」

「そうですね、本来ならばそのようなことをするのはマナーとしてよくないとは思いますが、しかしこうして霧子様が出ていらっしやらないのですから、もう一度くらいでしたら」

「ったく、何やってるんだかな、あいつ。サンダルをつっかけるのに手間取る歳でもあるまいに……」

『はーい、どちらさまですかー』

「あっ、雪美さん、俺です、幸久です」

『あつ、幸久くん、いらっしやうい。あれ？ さつききりこちゃんがいかなかった？』

「いや、なんか分からないんですけど、霧子が全然ドア開けてくれないんですよ。すいません、雪美さん、開けてもらってもいいですか？」

『きりこちゃん、どうしたのかなあ……？ それじゃあ、今開けるから待っててね』

「ありがとうございます、雪美さん」

『それじゃ、おかあさんがすぐ行くからね』

そうして、雪美さんとの交渉はつつがなく終了し、ガチャンと通話が切られるのだった。なんというか、さつき霧子とも同じやりとりをしたわけで、すぐ二度手間をしている感じがしてならない。まったくあの娘、来客に應對してドアのカギを開けることも満足にできないなんて、とんだ困ったちゃんだな。

最近、主に心の成長が、早すぎる身体の成長に追い付きつつあるように見えたからしっかりしてきてると思ったんだけど、でもやっぱりまだところどころでダメだったりするのだろうか。ううむ、難しいな…、この頃は霧子はもう平気だと思って志穂にばかりかかりきりなっていたから、ちょっと見落としていたのかも。そうか、霧子もまだ、もう少し俺が見守ってないといけないのかもしれないなあ……。

## 玄関で立ち話

「幸久く〜ん、開けたから入っていいわよ〜」

「ありがとうございます、雪美さん。それじゃあお邪魔します」

「は〜い、いらっしや〜い。晴子ちゃんはまだ帰ってきてないけど、ゆっくりしてね〜」

二度目のチャイムから十数秒、今度こそ門扉から数メートルのところにあるドアから解錠音が響き、家主である雪美さんから歓迎の意を表された俺たちはようやく待ちぼうけの状態から解放されたのだ。しかし、これも簡単に雪美さんがカギを開いたとなっては気になってしまうのは霧子ちゃんのことである。いったい霧子ちゃん、どうしてあんなにカギを開けるというワンアクションをこなすことができなかったというのだろうか、疑問である。

「雪美様、お邪魔いたします」

「広太くんも、いらっしや〜い。さいきんあんまり来てくれないから、おかあさんさみしいなあ〜」

「なかなか顔を出すことができず、申し訳ございません、雪美様。これからはもう少し頻繁に來させていたきたいと思いますので、ご容赦をお願いいたします」

「おかあさんもねえ、今日みたいにお仕事してるとき以外の日は、けっこうひまなのよ〜。だからね、お話する相手がほしかったりするの〜」

「それではそのようなときは、ぜひこちらに來させていただきます。雪美様、お話相手を御所望の際は、いつでも構いませんのでお電話をくださいませ。すぐにでも飛んで参ります」

「ほんと〜？ 広太くんはやさしいね〜、よしよし」

「おいこら広太、未亡人に色目を使うな」

「そのようなことはございません、幸久様、大いなる誤解です。ただ私は、雪美様に退屈な思いをさせたくないという一念でそう言っ

ただけですのぞ

「氣をつけてください、雪美さん。こいつは年上の女の人が好きなんです」

「えゝ、そうなのゝ？ 広太くんも変わってゐるわねゝ、やっぱり同じくらいの年の子の方がいいわよねゝ。幸久くんもそうでしょ？」

「まあ、おおむねそうですね」

「幸久君は、ちっちゃい女の子が好きなんだよねゝゝ。中学生とか、小学生とかの女の子が、好きなんだよねゝゝ。あたし知ってるよ、そういう人のことをね、ロリコンって言うんだって。おねえちゃんがつってたよゝゝゝ」

「うわ！？ 霧子！？ なんてそんな隅っこでうずくまりながら不穩なことを口走ってるの！？ 俺は別にちっちゃい女の子が好きなんじゃないよ！？ ただ純粹な母性でもってして、ちっちゃい女の子ってかわいいなつて思つてただだよ！？ ；、いや、そうじゃなくて、なんでそんなところでうずくまってるのっ！？」

門扉をくぐつてドアを通過つて、玄關で靴を脱ぎながら談笑する俺たちの会話の流れに幽鬼のような氣配を發しながら不穩な言葉を投げ込んで割り込んだのは、一度目のチャイムを受けてドアのカギを開きに來て、しかしなかなか開けてくれないで、もはや俺の中では「いったいどこに行つてしまつたんだろうゝゝ」みたいな感じになつていた霧子だった。まさか、ドアのカギを開きに來たというのにこんなところでうずくまつてゐるなんて思つていなかった俺は、軽く動揺して会話の順序を間違えてしまつたではないか。こういうときはまず霧子がここにいたんだなあ、びっくりしたなあ、というのを前に出して、それからその發言を否定していくのがよいのだ。何はともあれでその言葉を否定してしまつては、あまりに必死すぎる感じが出ているというか、むしろ逆にそうだと言つてしまつてゐるようなものではないか。いかん、いかんよ。俺はロリコンなんかじゃないつていうのに、まるで認めてしまつたようなものではないか。ここからなんとか取り返していかないと、俺がロリコンだというこ

とが公然の事実みたいな感じになってしまいうに違いない。気をつけろ、集中するんだ、俺。ここからのちよっとしたやりとりは、あくまでちよっとしたものでしかないけど、でもとても重要なものになってくるぞ……！

「おねえちゃんが言ってたの、幸久君はロリコンだって。でもよく考えたら幸久君って、しいちゃんとかメイちゃんとかと仲良しだよ  
ね」

「まあ、落ち着け、霧子。冷静になって話し合おう。晴子さんの言ったことがすべてってわけじゃないんだぞ。人の意見に乗っかるばかりじゃなくて自分自身の意見を持つのが大事だって、昔言っただろ。さあ、いっしょに真実を探求しようじゃないか」

「そういえば幸久君って、学校に行くときとかによく小学生の女の子の通学風景を眺めてるよね。信号で止まったりしたときとかに」

「…、いやいや、そんなことしてないって、気のせいだよ気のせい。別に小学生の女の子がかわいい服着てるとかかわいい髪のかき方してるとか、そんなこと全然考えてないって。そういうときはさ、小学生の女の子の方を見てるように見えるかもしれないけど、何かしらの考え事をしてるんだよ。小学生の女の子は視界に入っていないだよ」

「でも幸久君、たまにアパートの前でランドセル背負った女の子とおしゃべりしてるよ、すごく楽しそうに。あんなに幸せそうな幸久君、そんなに見たことないよ」

「いや、その子はだな、アパートの一階に住んでる女の子でね、ご近所づきあいの一環として仲良くさせてもらってるだけなんだよ。別にその子が小学五年生だから仲良くしてるわけじゃないのだよ。ただ隣人の一人が小学五年生の女の子だったただけでね、分かるだろ、霧子」

「うちの近所にも小学生の子が住んでるけど、あたしそんなにおしゃべりしたことないかも。別にご近所さん全員と仲良くしないといけないわけじゃないし、そんなの幸久君がちっちゃい女の子を好き

じゃないってことの証拠にならないもん」

「あんな、霧子、俺が住んでるのはあんな小さなアパートなんだよ。住んでる人全員を合わせても六人しかないんだよ。そんなところに住んでるのに、その小さなコミュニティの中でコミュニケーション不順があるとか、俺はイヤなんだよ。だからさ、そこに住んでる六人くらいは仲良くしたいって思うんだよ。分かってくれるだろ、なあ」

「でも、幸久君はロリコンだと思う」

「なんで断定!？」

「だって、あたしがおっきくなってからは、そんなにかわいがってくれないから。昔は、もっとかわいがってくれたもん、身長がちっちゃかったから」

「俺は別に、霧子のことかわいがってないなんてことはないぞ。俺はいつだって、霧子が一番かわいいぞ。身長が変わったくらいで俺の霧子へのかわいがりがブレたりはしない」

「でも、今はしいちゃんとかメイちゃんのこととかかわいがってるもん。あたしなんて、もうどうでもよくなっちゃったんだもん」

「…、それは、昔はほんとに霧子だけをかわいがってたから、確かに今に比べたらより長い時間のかわいがりをしてたかもしれないけど、でも今だって霧子のこと、感覚的には昔と変わらないかわいがりをしてる。なんていうか、濃度が高くなってるんだよ。時間自体は確かに減ってるかもしれないけど、でもその分かわいがりの濃度が上がってる。だから昔と変わらないぞ」

「幸久君は、そうやっていつもあたしのことを煙に巻くんだよ。幸久君は頭がよくて口げんかが強くて、よく分からない不思議なことを言ったり難しそうなことを言ってたあたしがうにゅってなってる間に、丸めこもうとしてるんだもん。それが幸久君のやり口だって、おねえちゃんが言ってた」

「そ、そんなことないぞ! 晴子さんはどうしてそんな悪意ある言い方をするんだ! 俺は霧子のことを丸めこんだことなんてないっ

ていうのに！　ただ少し、そのなんというか、かわいがっただけなのに！！　広太もなんとか言ってくれ！！」

「私は、発言を控えさせていただきます。ただ一つ、言えるがあるとするれば、幸久様は小さな女性が好きなのではありません、小さな女性も好きなのです」

「そ、そういうことだ！　霧子！！」

「じゃあ幸久君は、女の子なら誰でもいいってことなんだね」

「い、いや、そういうわけではないんだけどね！」

「ねえ、霧子ちゃん、そんなことより、おかあさん幸久くんに聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「聞きたいこと？　な、なんですか、雪美さん、なんでも聞いてください。なんでも、たちどころに応えます」

「うん、あのね、幸久くん、その娘、だあれ？」

「え？　…、えっと…、ああ！　はい！　そう！」

言っておくが、忘れていたわけではない。

「俺がロリコンかどうかなんて、どうでもいいよ！　いや、ロリコンじゃないけど！　っていうか、今日はそんな話をしに来たんじゃないよ！」

とりあえず、今日この場で為すべき目的の一つを、果たしてしまおうと思う。

「彼女はえっと、二見、かりんさんです」

そう、俺は己のロリコン疑惑を払しょくするためここにいるわけではないのだ。俺がここにいるのは、一に晴子さんからの晩飯製作依頼を果たすためであり、二にかりんさんを天方家の住人たちに紹介するためなのである。もう俺自身のことなんて後回しに決まっているではないか。

「えー、だれだれ？　幸久くんの彼女？」

「いえ、あの、違います」

「…、幸久君、なんでその人がここにいるの？　というかその人、この前行った旅館の仲居さんの三枝さんでしょ？　も、もしかして、



幸久君その人のこと気に入ってたみたいだったけど、連れてきちゃったの……？」

「ち、違う違う！ とりあえず、ちゃんと全部話すから、こんなところで立ち話じゃなくてリビングに行こう。広太、お茶いれろ」

「はい、かしこまりました」

「ふたみ、かりん、ちゃん、っていうのね。はじめまして、おかあさんは、天方、雪美っていいです。よろしくね」

「は、はい、ええと、お初にお目にかかります、二見かりんと申します」

「ほれ、霧子、いつまでもそんなところでうずくまってないで、ちゃんと全部説明するからさ、リビング行こうぜ」

「にゅ…、幸久君、ウソつかない？」

「俺が霧子にウソ吐いたことなんてあるか？」

「…、あるもん」

「…、まあ、あるけどな」

「でも、幸久君、よくウソつくけど、ほんとのこと言うって言ったときは、ウソだったことないよね。だから、にゅ…、ちゃんとほんとのこと言ってくれるよね」

「当然じゃん、こんな正直者つかまえて、なに言ってるんだか」

「…、幸久君、おんぶしてほしいかも」

「おんぶ？ なんだよ、急に。いや、別にいいけどさ」

「…、あたし、にゅ、幸久君が、急に女の人連れて来たから、すっごいびっくりしたんだよ」

「まあ、そういうこともあるって、生きてれば」

「幸久君、この前、あたしがもしも幸久君のところに男の子つれてきたらびっくりするって言ったよね」

「ん？ ああ…、言ったな」

「あのね、あたしも、びっくりしたよ。幸久君って、いつも誰か女の子といっしょにいるから、そんなことあってもびっくりしないと思うってたけど、すっごくびっくりして、ちょっと泣きそうだったよ」

「そっか、…、ごめんな、霧子、びっくりさせてさ」

「にゅ…、ねえ、あたし、変じゃないよね？」

「？ 変って、なにが？ びっくりすることくらい誰にでもあるだろ」

「…、じゃあ、いいや。変じゃないなら、いい」

「なんだよ、それ。急にそんなこと言いだして、それこそ変だったの。っしょ…、うし、じゃあ、リビング行くか」

「にゅん、ちゃんと幸久君の説明、聞くもん」

「しかし、霧子、お前は相も変わらず軽いな。ちゃんと飯食ってるのか？」

「た、食べてるけど、あんまり食べると太っちゃうから、ほどほどに食べてるよ、うん」

「そうか？ まあ、食ってるっていうならいいんだけどさ。あつ、リビング行く前に着替えてくるか？ まだ制服のままじゃん、お前」

「にゅ、えと、着替えるのは、お話聞いた後にするよ。今は、幸久君のお話聞く方が大事だと思うし」

「そっか…、じゃあ話はさっさと終わらせるとするか。あまり分からない話されても、霧子が眠くなっちゃうだろうからな」

「にゅう、そんなことないもん」

「っていうかさ、お前なんであんなところでうずくまっていたの？」

「…、えとね、にゅ、ドアのぞき穴から外見たら、幸久君がきれいな女の人といっしょにいて、なんか胸がにゅってなったから」

「？ …、そうか、そんなことがあったのか。にゅっとなったのか、そうか、にゅっとなあ。大変だったな、霧子」

「にゅん…、大変、だったかも……」

しかし、そうか、ドアのぞき穴か。俺は霧子がドアから出てきたときにびっくりさせないようにかりんさんを門柱の影に隠そうとしてたけど、でもそうか、それ以前のところだったわけだ。それはちよっと、俺の気づかいが足りなかったというか、不注意だったな。まあ、でも、泣きそうだったって言うてるわりには泣いてないし、

昔に比べたら格段にこらえ性がついて我慢強くなったよな、霧子は。  
：、俺が女の人をつれてきたら霧子は絶対に泣くと思ってたけど、  
そんなことなかったんだなあ……。。

## リビングで説明をば

「というわけなんです、分かってくれましたか？」

「…にゅ、よく分かんなかったかも」

「おかあさんも、よくわからなかったわ」

「あれ？ 分からなかった？」

かりんさんのことは俺自身いまだに消化し切れていないことだったが、しかし説明すると決めたからには全力で理解を得ることができるようにならねえと決めていた。しかし、事はそううまく運ばないというか、残念ながら俺の説明では霧子と雪美さんの理解を得ることは出来ないようだった。やっぱり、自分が完全には理解できていないことを他人に説明するというのは、とても難しいことなのだと思う。

だがしかし、だからといって『ムリでした』と諦めてしまうわけにもいかないわけであり、俺はもう一度の説明責任を有しているのだ。いや、もう一度などと言わず、霧子と雪美さんが分かってくれるまでは何度でも説明しなくてはならないだろう。まあ、これも俺に課せられた業の振り戻しだと思うことにしよう。因果応報、全てはつながっているのだ、ということにする。

「とりあえず、幸久君が今、二見さんと広太君と、三人でいっしょに住んでるってことは分かったよ」

「ああ、それしか分からなかったか」

「幸久様、今の説明では細かい説明を省きすぎてしまっていて、まったく伝わらないのではないかと存じます」

「よ、よし、じゃあ、もう一回な。もう一回説明するから、よく聞くんぞ、霧子」

「にゅん、がんばるよ」

「だからな、まず、かりんさんは三枝さんじゃないんだよ。かりんさんは二見かりんで、三枝弓子じゃないの。分かる？」

「えと、それは、なんとなく。でもどうしてそんなことしてたの？  
それが分からないんだけど」

「…、それは、俺もよく分からん」

「あの、それはですね、あの旅館の従業員の方々に私が二見の家の人間であるという先入観を持っていたきたくなかったのです。あくまでも一人の普通の家の人間として働かせていただくことになっていたので。それではなくては社会勉強にならない、とおじい様がおっしゃいましたので」

「ということだそうだ、分かったかね、霧子君」

「にゅん、分かったよ」

「よし、先に進むぞ。それでだな、二見の家っていうのは、霧子も聞いたことくらいはあると思うけど、フタミグループの二見さんなんだってよ。つまり、大金持ちの二見さん家のかりんさんなんだ」

「えと、そんなお金持ちの家の人が、どうしてわざわざあの旅館で働いてたの？」

「それは、あれだよ、社会勉強だよ。霧子だって中学生のときに職業体験やっただろ、あれみたいなんだよ」

「そう、なの……？」

「ねえねえ、おかあさんも、一つ聞いていい？」

「なんですか、雪美さん、何でも答えますよ」

「かりんちゃんわ、おいкуつ？」

「は、二十歳です、雪美様」

「はたちってことは…、晴子ちゃんよりも一つ下なのね。そうなのね」

それは、今聞かないといけないことでしょうか、雪美さん。…、まあ、別にいいか。

「…、それでだな、えっと、なんだっけ……。あつ、そうだ、かりんさんはお金持ちの家のお嬢さんなの。で、うちも、昔は金持ちだったんだよ。それで、金持ち同士だったから、じいさんたちが偶然仲が良かったんだよ。なんつうか、似た者同士だったんだってさ、

うちのじいさんとかりんさんのじい様は。で、だな、二人のじいさんは仲が良すぎて、自分たちの孫が男と女だったら結婚させちゃうぜ、みたいな感じでまだ生まれてもない孫を許嫁にしちゃったんだって。だから、俺とかりんさんは、一応許嫁関係らしい。分かるか、霧子？」

「にゅう…、幸久君、許嫁って、法律的に平気なの？」

「え？ 法律？ しらねえよ、そんなこと。まあ、でも、別に問題ないと思うぜ、法的には。だって、昔に結婚の約束をしたって言うだけで法的拘束力もないだろうし、結婚しなかったとしても両家の関係にひびが入るかもしれないけど、警察が出張ってきて逮捕ってこともないと思うぜ。」

「じゃ、じゃあ、幸久君は、二見さんと今すぐに結婚しちゃうってわけじゃないの……？」

「そう、だな…、今のところは、俺自身どうしたもんか分かってないから、結婚はしない。まあ、結婚するつもりでこっちに来たかりんさんには悪いけど、でも一応保留って感じた。っていうかさ、昔とは違って三木の家もかなり力を失ってるわけだし、二見の家とはどうしたって釣り合わないからさ、かりんさんのご両親はけっこう反対っていうか、まあ、けっこうじゃなくてマジで反対らしいんだけど、ほぼ家出同然でこっち来ちゃったんだって、かりんさん。だからさ、そんな状態で結婚してもダメだと思うんだよ、俺は」

「にゅ、幸久君は、二見さんと結婚するのはイヤじゃないの？」

「ん…、イヤかどうかって聞かれても、俺はまだかりんさんのことを全然知らないし、少なくとも今の状態じゃ結婚なんてムリだ、と、思う。なんつうか、気持ちの折り合いがつかないっていうか、そういうものなんだな、って受け入れることはまだ出来ないっていうか…、えっと、つまり、保留だ。まだなにも決められない」

「保留…、にゅう……」

「というわけで、俺の状況は分かったか？」

「分かった、気はする、かも」

「そうか、それならいいんだよ。とりあえず、これからかりんさんは、いつまでか分からないけど、うちで暮らすことになるからさ、霧子も仲良くしてあげてね。比較的年近いんだからさ」

「にゅ、えと…、はい…」

「腰引けてるぞ、霧子、しっかりしろ。雪美さんも、いろいろお世話になることもあると思うんで、よろしく願います」

「おかあさんは、ぜんぜんいいわよ。でも幸久くんも大変ねえ、いろんなことがあって」

「はは、まあ、なんというか、前世でなにか悪いことでもしたんでしょう。そうでもない、こんなにしばしばトラブルに見舞われる説明がつきませんし」

「色男も、いろいろ大変よねえ。モテモテも考え物ね」

「とりあえず、俺がどうするべきなのかは分かりませんが、みんな丸く収まるようにがんばってみますよ。まあ、そんなことできないかもしれないですけど、とりあえず考えてみます」

「うふふ、そうやってみんなのために、っていうことができるって、幸久くんのいいところだとかおかあさんは思うなあ。でもねえ、いつでもそれが正解ってわけじゃないと、おかあさんは思うの。でもね、幸久くんはとってもいい子だから、きつといろいろ考えて、いっちばんいいのがなんなのか見つけられると思うわ」

「えっと、まあ、とりあえず、がんばります」

「あつ、幸久くん、霧子ちゃんのことわすれちゃダメだからね？」  
「？ えと、はい、それは、だいじょぶだと思います。俺が霧子のことを忘れるなんて、ないですよ」

「幸久くんがそういうなら、きつとだいじょぶよね。おかあさんの言いたいこと、ちゃあんとわかってくれたと思うわ」

「それだといいですけど、もしかしたらちよつと分かってないかもしれないです」

「だいじょぶよお、幸久くんはいい子だから、分かってくれてるはずだもん」

「いやあ…、どうですかねえ……。あつ、霧子、ちょっとかりんさんが話あるみたいなんだけど、聞いてあげてな」

「お、お話って、なあに……？ あたしも、聞かないといけない話……？」

「霧子に話があるって言っただろ。霧子も聞かないといけないんじゃないんで、霧子が聞かないといけないんだよ。とんちんかんなこと言ってるんじゃないの」

「にゅ…、ゅ、幸久君、怖いからいっしょに聞いてくれる、よね……？」

「いや、俺はちよつと、晩飯の仕度のために冷蔵庫のチェックするからいっしょにはムリだ。っていうか、だいじょぶだって、別に取って食われるわけでもあるまいし。ったく、なににビビってるんだ、こいつは」

「霧子ちゃん、がんばってえ」

「お、おかあさんまでえ……」

「ゅ、幸久様、私はお話などありません……！」

「いや、あるでしょ。なに言ってるの、かりんさん。さっき自分で言ってたじゃん、霧子のことも昔からビデオで見てきたって。ってことは、かりんさんは霧子のことだって好きはずなんだよ。それだったら、直接かりんさんの口からよろしくの一言くらいあった方がいいと思う。なんつうか、まずは友だちからでしょ、やっば」

「で、ですが、それは私が霧子ちゃんのことを一方的にビデオで見ていて知っているとただで…、霧子ちゃんは急にそんなことを言われても困ってしまいます……！ ですから、私はこれからゆっくり霧子ちゃんとお友だちになっていければいいと思って……！」

「そんな遠回り、何年かかると思ってるの！ 霧子はそんじよそこのへタレじゃないんだよ！ 俺の許嫁なんて設定のかりんさん仲良くなるとかいう高難易度の試練、一朝一夕じゃ乗り越えられないんだからね！ だからここは、とりあえずかりんさんがぶっちゃけていくのが一番いいんだよ！ そうじゃないとずっと辛いままだ



よ、かりんさん！」

「で、ですが…、そのようなこと…、出来ません……」

「なんで出来ないの。俺にはやったでしょ、まさにそれを。しかも『友だちになってください』なんかよりも数段難易度高いはずの『私があなたの許嫁です』をやったのけたでしょ。それと同じだよ、かりんさん。せっかく霧子が目の前にいるってのに、このチャンスをふいにするつもりなの？」

「そ、それは…、そうですが……」

「だいじょぶだって、俺もついてるからさ。正直に話して、お友だちになってくださいって言えばいいだけなんだから」

「…、幸久様の、おっしゃる通りです。分かりました、もう一度、勇気を出そうと思います。ですが、あの、がんばるために、幸久様のお力を分けてください」

「力を分けるって、何すればいいの？」

「手を、握ってください……。そうすれば、幸久様を感じられます……」

「それでいいんなら、いいよ。…、どう？　これで、勇気出た？」

「はい、これで勇気百倍です。それでは幸久様、行って参ります」

「うん、がんばってね、かりんさん」

「にゅ…、幸久君……」

「霧子は話を聞くだけなんだからしゃっきりしなさい。これからかりんさんがすっげえ大事な話するんだから、霧子も真面目に聞きなさいよ」

「にゅん…、幸久君、きびしいよお……」

「霧子ちゃん、しっかりい」

「雪美様、お茶はご満足いただけましたでしょうか」

「広太くんのいれてくれるお茶はとってもおいしいから、もう一杯だけでもらおうかしら。いれてくれる？」

「はい、喜んで」

「さて、俺は冷蔵庫のチェックでもするか。とりあえず、広太は俺

の代わりにかりんさんと霧子を見守ってくれ。きっと俺は少し意識を集中することになるだろうから、二人の様子を見守ってることができなくなる」

「承りました。お二方の様子は、私が間違いなく見守らせていただきます。介入の必要はありませんでしょうか」

「いや、別にそんなことしなくていい。っていうか、かりんさんなら何かと上手くやれると思うし、それはいらない心配だ。それになんだかんだって霧子もこの話はパニくらずに聞けると思うし、とりあえずちよつと様子見してろ」

「はい、了解いたしました、幸久様。それではお二方の様子をよく見て、必要があるように感じられましたら幸久様の指示を仰ぐことにさせていただきます」

「ああ、そうしてくれ。でも出来るだけかりんさんと霧子のやるがままに任せるんだぞ。そうした方が、きっとすぐに友だちになれるだろうからな」

「そう、ですね。霧子様は感動屋でいらっしゃいますから、かりんさまのお話を聞かれればすぐにお友だちになれるよう心をお決めになることでしょう」

「まあ、そういうことだ。霧子博士の俺が平気って言うてるんだ、問題なんて起こるわけないだろ」

「おっしゃる通りにございます、幸久様。そのご慧眼にはいつもながら感服するばかりです」

「別に、ただ付き合いが長いだけだ」

「そういえば、幸久様、一つお伺いしたいことがございます、よろしいでしょうか」

「？　なんだ、言ってみろ」

「はい、先ほど、幸久様はかりん様が霧子様のことを好いていらっしゃるとおっしゃいましたが、しかしかりん様はご自分でそのことをおっしゃっていません。どうして幸久様はそのことを、あのよう

に確固たる確信を持って見抜かれたのでしょうか」

「？　そんなの、霧子がかawaiiからに決まってるだろ。逆に聞くけど、それ以外に何か理由があるとでも？」

「いえ、まさか、幸久様がそうおっしゃるのですから、それはもう、それが正しい答えなのでございましょう。私は、納得をもってそれを受け入れようと思います」

「まあ、当然の流れだな」

霧子がかawaii。この場合、すべてはそれで説明がつくのである。霧子のかawaiiさの前では、性別など些細な差でしかないのだから。

## 足りない食材をチェックしよう

「…、食材が、全然足りねえ!!」

かりんさんと俺の今のところの関係、ならびにこれからのことについての説明を一通り終えた俺は、とりあえずかりんさんと霧子のきやつきやうふふ——まだそこまでは打ち解けていないかもしれない——は置いておいて、冷蔵庫の中身のチェックと洒落こんだのであった。霧子と雪美さんの理解を得られたかどうかといえば、まあ、よくても半々くらいではないかと思うのだが、しかしだからといってまったく理解してもらえなかったというわけではないので、霧子と雪美さん相手なら及第点くらいなんじゃないかと自分では思っている。

そもそもからして、俺自身がよくよく理解していないことについて他人に説明を行なうということは非常に難しいわけであって、しかもそれが自分で納得することのできていないことならばなおさらであろう。まあ、相手が霧子と雪美さんなんだから、完全に理解してもらえることはあんまり期待してなかったけどな。

「左様でございますか、幸久様」

「ああ、どう見積もっても三人分しかねえ!!」

「それは、この家には三人の方がお住まいだからではないでしょうか」

「その通りだろうな。とりあえず、買い物行かねえと二進も三進もいかないな……」

「それでは幸久様、必要な食材のピックアップをお願いいたします。それをいただきましたら、私が可及的速やかに食材調達に向かいます」

「おし、ちょっと待ってろ。今メニュー考えて、なにが足りないか考えるから。とりあえず、五分したら戻ってこい」

「了解いたしました。それではしばらく消えています」

「いや、別に消えなくていいから、あっちに混ざってこいよ。なんか霧子とかりんさんが化学反応起こしてめっちゃ面白い感じになってるじゃねえか。っていうか、さっき自分で『俺が見てます』みたいなこと言ってただろ」

「はい、ですから、介入の必要は徹頭徹尾ないとの仰せでしたので、消えつつ見守ろうかと考えました。ただ見守るだけでしたら、私の気配はない方がいいかと存じます」

「それは、確かにいいかもしれないけど、でもだからってそうぼんぼん消えられても困るんだよな。急に気配がすると、お前だって分かっててもめっちゃびっくりするからさ」

「そうでしたか…、それは失礼いたしました。それでは今後は一切消えることはしないように致します」

「…、いや、だからな、別に俺は一切消えるなって言ってるわけじゃないのな。わかる？　そうやっていちいち両極端なのはお前の悪い癖だからな？」

「それでは、私はどのようなときに消えればいいのでしょうか。よろしければそれを教えていただけると幸いなのですが」

「どんなときに消えればいいっていうか、少なくとも俺がいるときは消えるな。っていうか、だれかがいっしょにいるときは消えるな。消えないで、出来るだけコミュニケーションを取れ。仲良くしろ。その消えるのって、つまり逃げてるんだろ」

「…、そのような一面が、まったくないとは言いませんが、ですがただそのためにしているというわけでもございません」

「知ってるよ。まあ、別にすぐに消えるのを全部やめろとは言わないから、ちよつとずつ止めてみる。中学までの孤高気取ってる感じは、普通の人間社会では通用しないからな」

「幸久様が、そう仰られるならば」

「よし、それでいい。あつ、そうだ、広太、そういえばお前ついてもどうやって消えてるんだ？　なんか難しい技だったりするのか？」

「いえ、難しいというほどのものではございません。ただ全身を脱力し呼吸を深いものにしてその速度を落とし、その上で周囲に満ちる大気と同化するのです。慣れてしまえば、難しいというほどのことではございません」

「そうか、難しいな、それ。俺はたぶんできないわ。大気と同化とか言われても全然ピンとこないし、呼吸のコントロールとか出来るほど修行積んでないから全然出来ないと思う」

「いえ、幸久様でしたらすぐに出来るようになるかと思います。幸久様はお器用ですし、気脈の流れも安定していращやいますので、すぐにでも」

「別に、俺は消えられるようにならなくていいんだけどな。なんつか、そうやって逃げてばっかじゃダメだぞ、広太」

「幸久様が、そう仰られるならば、努力いたします」

「俺が言ったからじゃなくて、自分で思ったからで動けるようになるよ。いつまでも俺によっかかってたら、いつまで経っても大人になれねえぞ。もっとこう…、自立しねえとき、ダメだろ、やっぱ。」

まずは友だちつくれ、俺絡みじゃない友だち。一人でも二人でも友だちつくって、それを俺に紹介する。宿題な、期限はないけど」

「いえ、私は幸久様がいらっしゃればそれだけで十分でございます」

「またそうやってお前はあ……。まあ、他のやつはお前のことあんまわかってくれないかもしれないけどさ、でもまず分かり合おうって気持ちをもたないと分かり合えるもんも分かり合えないんだって。お前ってさ、いろいろ完璧だし苦手なことないみたいに見えるけど、でも実は知らない人と話すのとか苦手なんだよな。俺は付き合い長いから知ってるよ。でもだからって、いつまでも俺とその周りだけの関係で完結するなって。もっと自分から友達つくってみろよ、な？ そしたら、いろいろ分かってくるんだよ、何がとは言わないけど」

「…、そういうものでしょうか……？」

「まあ、お前がどれだけがんばろうとしてもなかなか友だちできな

いっていうのは、中学までの感じで分かってることだ。じっくりやれ、とりあえず。まずは、友だち一人だ」

「……………」

「んだよ、ビビってんなよ、それくらいのことです！ そんなじゃ、俺はお前の連れてくる友だちがどんなのか、楽しみにしてるからな！」

「は、はい、了解いたしました」

「うし、じゃあちよつと向こう行つてろ。俺は足りない食材のピックアップをする」

「はい、承りました」

実際のところ、広太は友だちが少ない。あいつは基本的にイケメンだし、どこことなくクールっぽい雰囲気もあって女子からの人気とか高かったし、いろんな能力が一般的な秤では計れないほどに振り切れてたから、もう嫉妬とかいう次元からは一周回って男子からの憧れの的なものもすごいあったように思う。だからあいつは、俺なんかよりもよっぽど人気があつて、人望があつて、信頼があつて、でも友だちはほぼいなかった。

あいつが言うには、俺の世話をするためには友だちなんてつくつて場合じゃありません、とか主張するのだが、しかしそれはただ広太の言い訳、というか自己弁護、いや現実逃避でしかなく、事の本質はそんなところにはないのだ。

「あいつは、隠れヘタレだからな、うん。下手すると霧子よりもよっぽど俺に依存的だし、まったく困つたやつだ」

広太は、友だちをつくらうとしない。断固として自分からつくらうとしない。でもそれは、やっぱり友だちをつくることに対してビビっているだけなわけで、俺のことを言い訳にして為すべきことから逃亡していることに他ならないのだ。

それに、あいつが中学のときに山ほどあつた女子からの告白をすべて断つたのも、それに準ずるところがないわけではない。いや、むしろそれは、まさにその象徴のようなことだったのかもしれない。まったく、友だちをつくることの何に対してビビってるのか分から

んこと極まりない。そしてそれ以上に、けっこうかわいい娘から告白されることもあったっていうのに、どうしてそれを全部断ってしまうのか理解できない。いや、かわいいっていても間違いない霧子の方がかわいいわけで、そういう意味では霧子と比較してしまっただと考えれば全ての告白を断ったことについても説明がつく……？

「まさか広太、霧子のが好きなのか……？　だから今まで全部の告白を断っていたのか……？」

しかしそうなる、俺は広太を殺さなくてはならない。いや、そのことは広太もよくよく知っているはずだし……、知っているからこそ言いだせないのか……？　ふむ、しかし俺は、広太だからと言って霧子をくれてやるつもりはないわけであり、もし広太がそのような行為に及ぼうというのなら、他の男と同様に須らく抹殺しなくてはならないのである。

広太のことは弟も同然に思っているが、だからこそけじめはきつちりとしてなくてはならない。霧子をその毒牙にかけようなどと、そのようなことは考えるだけでも罪であり、広太だからといって恩赦が認められるようなものでもないのだ。一言で言うならば、許さざるなのだ。

「ま、まあ、まだ広太が直接的な行動に出たわけじゃないからな……、まだそれは推測の域を出ないことじゃないか……。落ち着け俺、この手を血に染めるな……」

「幸久様、首尾はいかがでしょう？」

「お、おう、問題ないぜ。豚肉と玉ねぎとジャガイモともやしが入らない。肉は豚バラで、三人分だから300グラムくらいだ」

「了解いたしました、それではそれだけ買ってまいりますので、少々お待ちくださいませ。商店街まで向かいますので、少々時間がかかってしまいますが、よろしいでしょうか」

「ああ、構わない。まだ時間はあるから、そんなに急がなくていいからな」



「はい、了解いたしました。それでは行って参ります」

「…、広太、ちょっと待て、その前にひとつ聞いておく必要があることがあるんだが」

「はい、なんでしょうか。なんなりとお申し付けくださいませ」

「お前、霧子のこと、好きか？」

「はい、実の兄妹のよう思っております」

「…、それじゃあ、俺と霧子だったら、どっちが好きだ？」

「？ それはもちろん、幸久様ですが、それがどうかなさいましたか？ 私が幸久様以上にお慕い申し上げている方はいらっしゃいません」

「だ、だよなあ、そうだと思ったよ」

「幸久様、よろしければ、どうしてそのようなことをお尋ねになられたのか、教えていただいてもよろしいでしょうか。今まであまり言われたことのない内容ですので、少し気になってしまいました」

「いや、別に大したことじゃないんだけどさ、お前って今まで何人もの女の子の告白を断ってきてるじゃん。でさ、その中には、霧子には及ばないまでもかわいい娘はいたわけじゃん。だからな、どうしてお前がそうも執拗に女の子の告白を拒んだのかと考えて、もしやお前が霧子のことを好きなのではという仮説に至ったんだ」

「私が、異性からの交際の申し出をお断りさせていただいていたのは、ひとえに幸久様のお世話の妨げになると考えていたからにほかありません」

「まあ、それは建前だろ。もうぶっちゃけろよ、誰にもバラさないなら」

「…、御婦人のおもてなしの仕方は、執事長やメイド長から教え込まれていますので、完璧にすることが出来る自信はあります。ですが、それはホスト側とゲスト側という立場に二人を当てはめた際の立ち居振る舞いです。ということは、私はそれ以外の場合におけるもっと碎けた間柄での女性との接し方が分かりません。ですので、私の何気ない振る舞いが、知らず相手の御婦人を傷つけてしまう可

能性もなくはありません。そういった行動は、私の中で体系化されていない行動体系だからです。ですから、そうして傷つけてしまうことがある可能性があるならば、私は異性と交際などしない方がいいと考え、いつもそれをしっかりとご説明して、お断りさせていただいております」

「…、なんだそれ、意味分からん。人付き合いの仕方がマニュアル化出来ないから友だちも恋人もつくれませんって、意味分からんぞ、お前。しかもそれを説明されたやつは、フラれたことをきちんと納得してんのか？」

「大抵の方は、軽く首を傾げながらあまり納得しない顔で帰って行きました」

「だろうな、そうに決まってるよ。だって、誰よりお前のことを理解しているはずの俺が納得できなかったんだもん。いくらお前でも、その理屈はどうかと思うぞ。っていうか、お前のことだからこれまでそんなよく分からん理由みたいなものを何回も説明してきたんだろうけど、一人くらいお前のこと殴ったやついないの？　それは、交際を断る理由としてはあんまりだぜ」

「そう、なのでしょうか？」

「そうだよ、別にお前と付き合いたいって思った娘はさ、お前にマニュアルで対応してほしくてそんなこと言ってるんじゃないんだぜ？　男と女が付き合うって、きつとそういうことじゃないと俺は思うんだけどさ、違うか？　俺だったら、勇気出して付き合いってくださいって告白して、それでそんな答えが返ってきたら相手のこと殴るぞ、絶対に。その答えは、目の前の娘のことを何も見てないし、見ようともしてない。見ようともしてないどころか、視界に入れようとすらしてない。確かに俺もお前がどんなふうになんかの告白断ってるか聞こうとしなかったし、修正してやろうとしなかったよ。俺も悪かった、かもしれない。でもお前は、もう少し自発的に動けるようにならないとダメだよ」

「この説明は、そんなによくなかったのでしょうか？」

「ん、まあ、確かにお前なりに誠意を込めて断ってるのかもしれないけど、でも誠意の込めどころを間違ってると思う。とりあえずこれからはもう少しその目の前の娘のことを考えてあげなさい、それしか言えない」

「はい、それでは、そのように気をつけてみることにします」

「はい、そうしなさい。で、いつてらっしゃい」

「行って参ります、幸久様」

…、まあ、あいつは大抵のことに対してはおおむね器用なんだけど、でも人間づきあいに関してだけは不器用なんだ。もしかしたらあいつが女の子からモテるのって、そういうギャップが時折見えたりするからなのかもしれない。俺も、ギャップとか狙っていったらモテたりするのかなあ……。

## おかあさんのお言葉

「なんか二人して楽しそうですね。俺がキッチンに閉じこもってる数分の間に何かあったんですか？」

「あら、幸久くん、おかえりなさい。今、広太くんが買いものに行ったわよ」

「ええ、ちよつと冷蔵庫見たら材料が少なかったんで、いろいろ買い足しに行かせました。広太が戻ってきたら晚饭つくっちゃいますんで、もう少し待っててくださいね、雪美さん。晴子さんが戻ってくる頃には出来あがると思いますから、まだ少しかかっちゃいますけど」

「そんなの気にしないでいいよ。おかあさんね、晩ごはんができるまで待つなんて、なんでもないんだから。いつも晴子ちゃんがお飯つくってくれるまでちゃんと待つんだからね」

「…、それは、すごいですね！ さすがは雪美さんです！ なかなか出来るもんじゃないですよ、それは！」

「そうでしょ、ふふん、おかあさんはすごいんだからね」

「いやあ、雪美さんはさすが、本当にすごいなあ。母は強いですね、やっぱり。晴子さんのおかあさんだけのことはあるなあ、うんうん」そんなわけで、キッチンで食材の足りなさにショックを受けたりいろいろしたりした俺は、しかし無事にその確認も終わって広太を買い物に送りだすこともできたわけであって、ひとまずひと段落と言ったところだろうか。とりあえず、俺は広太が買い物から帰ってくるまでは休憩時間なのであって、晩の支度にとりかかるのはそれからでも決して遅くはない。実際のところ、今日のメニューはそんなに時間がかかるものというわけでもなく、つくり始めてしまえば一時間強で仕上がりしてしまうという代物なのである。

いや、別に短い時間でできるからといって手抜きをしているというわけでは決してなく、俺なりの全力を尽くしたとしてもその料理は

それだけの時間でできてしまうと言うだけなのだ。だからそのあたりのことは、出来ることならば誤解しないでいただきたいところだが。

「雪美さんは、おかあさんの中のおかあさんですよ」

そしてもう一つ、これも決して誤解しないでほしいのだが、俺は別に雪美さんのことをバカにしているわけではない。雪美さんのことは身近な一人の大人として、また俺のことを小さいときからよく世話してくれた恩人としてかなり尊敬しているし、敬愛しているといっても間違っているとは思わない。だからこそ雪美さんがどのようなことをしたり言ったりからといってバカにすることなんてありえないのだ。確かに雪美さんは無邪気すぎる場所がなくてはならないし、そういうことをしようとする不埒な輩もいるかもしれないけれど、しかし俺はそんなやつらとは違うのである。

雪美さんは、もちろんいくら欠点はあるが、それでもその欠点を補ってあまりあるほどにいいところがたくさんある。そのちょっとした欠陥が、俺たちが思っている以上に俺たちの雪美さんへの理解を阻むのだが、しかしそれを乗り越えることさえできれば雪美さんのいいところなんていくらでも簡単に見つけることができるに違いない。

まあ、そのいいところっていうのはいっぱいありすぎてそうそう言いつくすことは出来ないわけで、ここでは特に何かを挙げることはしないけど、でも雪美さんは雪美さんで、確かに一般的な意味でのそれとは少し違うかもしれないけど、立派なおかあさんだということは疑いようのない事実なのである。

「それで、霧子はどうですか？　かりんさんと仲良くできそうですか？」

「うん、心配しなくてもだいじよぶよ、幸久くん。霧子ちゃんはい子だから、誰とでも仲良くなれるもの。それに、幸久くんの連れてきた子もいい子みたいだし、すぐに仲良しになるわよ」

「そうだと、いいんですけどねえ…、まあ、かりんさんは霧子に対

するジョーカー握ってるし、少なくとも仲良くはなれるだろうけど……」

「霧子ちゃんはお友だちつくるの得意だから、おかあさん心配してないわあ」

「そう、ですネ…、霧子は、いい子ですからね。…、そういえば雪美さん、今朝仕事がどうか言っていましたけど、今日は忙しかったですか？」

「そうね、おかあさんはおうちでお仕事する人だから、あんまり大忙し…って感じじゃないわよ」

「へえ、家で出来る仕事っていうと、内職とかですか？ でも、内職で家族三人養うのはムリですよネ？ 雪美さん、けっこう器用ですけど飽きっぽいですし、単純作業とかムリそうじゃないですか」「単純作業って、どんなの？」

「えっと、たとえば…、造花を黙々とつくったり、ダイレクトメールの宛名を黙々と貼ったり、ガチャガチャの景品の決められた部分に黙々と色を塗ったりっていうのを何千何万とやるんです」

「え、それってあんまりおもしろそうじゃないわねえ。おかあさん、それはムリ」

「ですよネ、だと思いました。それじゃあ雪美さんは、何してお金稼いでるんですか？」

「えっとお、おかあさんはねえ、ギャンブラー、なの」

「ギャンブラー？ えっ、雪美さん、ギャンブルしてるんですか？ プロのパチンカーとかスロットターとか、そういうあれですか？」

「ううん、おかあさん、パチンコもスロットもやらないわ。それにそういうのじゃ、おうちじゃ出来ないでしょう？」

「ああ、それは確かに……。それじゃあ、なにをやってるんですか？ 家で出来るギャンブルで、しかも家族三人養っていけるものって、俺には全然見当もつかないんですけど……」

「じゃあねえ、ヒントあげるね。おかあさんのお仕事は、パソコンを使います！」

「えっ、雪美さん、パソコン使えるんですか？」

「使えるわよお、パソコン。おかあさん、パソコンは剣道の次に得意なの」

「えっ!？」 雪美さん、剣道できるんですか!？ パソコン出来るっていうのよりも、そっちの方が普通にびっくりなんですけど!？」  
「昔ね、陽介さんにちょっと教えてもらったのよお。でもあんまりうまくできなくてねえ……」

「あれ？ 今の流れって、『意外に思われるかもしれないけど私、剣道とかできちゃうんですよ! それからパソコンとかも得意ですよ!』みたいな流れじゃなかったんですか？ っていうか、それじゃパソコンもそんなに得意ってわけじゃないんですか？」

「うん、ちよっと使えるだけ。でもね、インターネットとキーボードとクリックとダブルクリックは出来るのよ。おかあさんのお仕事は、それだけあればできることだからね」

「ますます分からなくなってきましたね…、困りました……。ヒント、もう一つお願いします」

「えっとお…、それじゃあねえ、おかあさんのお仕事はあ、陽介さんが教えてくれました!」

「ええ……？ それは、陽介さんが趣味でやってたことを雪美さんが仕事の域まで極めちゃった的なことですか？ それとも、陽介さんのお仕事を雪美さんが引き継いだ的な意味ですか？」

「ん…、陽介さんはねえ、昔からそれをやってね、おかあさんが教えてっていったら教えてくれたのよお。今でもおかあさんは、陽介さんみたいにはうまくできないの」

「ってことは、おじさんもそれを仕事にしてたんですか？ あんまりおじさんが家にいるイメージってないんですけど、俺の勘違いですかね？」

「陽介さんは市役所で働いてたのよ。それでね、定時で帰ってきて、それからごはんをつくってくれたの。おかあさんは、この家で陽介さんがお仕事に出かけるのをお見送りして、帰ってきたらお迎え

して、それからいっしょにごはんを食べて、夜はいっしょに寝るの。それが君の仕事だって、陽介さんは言ってくれたのよ」

「おじさん、雪美さんにべた惚れですね。というか、さすがに料理以外の家事は雪美さんがしてたんですよね？　そうじゃないとおじさんの身が持ちませんよ」

「もちろんよお、おかあさんはね、おせんたくものを取りこむのとおふろ掃除がお仕事だったの。いろいろ家事をやって、おかあさんの鏡でしょ？」

「…、そうですね、うん、はい、そうだと思います。おじさん、身体が丈夫だったんですね、よかったです」

「陽介さんはね、いっつもおいしいごはんつくってくれてね、おかあさんのこともすっごく大事にしてくれて、おかあさんやっぱり大好きだったのよお。幸久くんもねえ、きつと将来だれかと結婚することになると思うけど、やっぱり一番大好きな人と結婚した方がいいとおもうわあ。だって、もし本当に好きじゃない人と結婚したりして、離婚なんてすることになっちゃったら自分も相手も悲しいじゃない」

「それは、やっぱりそうですね」

「それとね、相手のことをよく知ってから結婚するのがいいと思うの。だからね、今のところは幸久くんはかりんちゃんと結婚するのは保留でいいんじゃないかなあって、おかあさんは思うなあ。だって、幸久くんはかりんちゃんのこと全然知らないんですよ？」

「まあ、そうですね、かりんさんのことは全然知らないです」

「だったらまだムリに決めることないわよお。もし本当に結婚するにしても、幸久くんはもつとかりんちゃんのことを知った方がいいし、かりんちゃんももつと幸久くんのことを知った方がいいはずだもの」

「やっぱり、結婚っていうのはそういうものですかね」

「んー、おかあさんは、やっぱりそう思うの。結婚って一生のものだし、簡単にするべきものじゃないと思うもん」



「さすが経験者の言うことは、どこことなく説得力が違いますね」

「もちろんよく、おかあさんは陽介さんといっしょに暮していたときがいっぱい幸せだったんだからね。大好きな人と、ずっといっしょにいられるのが、やっぱり一番幸せなことでしょ？」

「俺は…、今まで彼女とかいたことないんで、あんまりピンとこないんですけど、でもそうなんですよ」

「ピンとこないの？ それじゃあ幸久くんは、霧子ちゃんといっしょにいられたら幸せじゃないの？ 晴子ちゃんといっしょも、幸せじゃないの？」

「…、あつ、幸せですね。俺、霧子のことと晴子さんのことも大好きですから、きっとすげえ幸せです」

「そういえば、今まであんまり聞いたことなかったけど、幸久くんって霧子ちゃんと晴子ちゃんのだっちの方が好きなの？」

「どっちと言われると、それはちよつと難しいですね……。霧子は妹として誰よりも好きだし、晴子さんは師匠として誰よりも好きだし……。ちよつと、二人は俺の中でジャンルが違うんで、うまく比較することは出来ないですよ。あえていうなら、二人とも一位ですね。掲載されてるランキング表が違いますけど」

「もう、幸久くんってば、ほんとに女の子にダラしないわねえ。で、おかあさんは何ランキングの何位なの？ 教えて教えて」

「ゆ、雪美さんは、おかあさんランキングの一位ですよ。俺にとつては、雪美さんが理想のおかあさんです」

「えー、そうなの？ おかあさんは、愛人ランキングとかには載ってないの？ でもそっかあ、おかあさんもう歳だからねえ、幸久くんのストライクゾーンの外になっちゃうわよねえ……」

「そ、そうですね…、やっぱり、恋愛の対象って感じではないですね。おかあさんですから」

「霧子ちゃんと晴子ちゃんも、恋愛の対象じゃないでしょ？」

「まあ、そうですねえ。霧子は妹だし、晴子さんは神だし、あんまり恋愛って感じじゃないですよねえ」

「でも、いっしょにいたいんでしょ？」

「まあ、そうですねえ……」

「幸久くんはね、きつと将来ハーレムでもつくることになっちゃうわよお。そうやって、いろんな女の子と仲良くなって、みいんなどいっしょに暮らしてるの。うふふ、それって、なんだか楽しそうかもお。ほんとにそうになったら、おかあさんも仲間に入れてね？」

「いや、そんなことしませんよ。っていうか、俺はそんな、女の子と深い仲になったこともないんですし、そういうことに付き合ってくれる相手がいません」

「うーん、どうかしらねえ……。幸久くん、昔から女の子に人気あるみたいだし、今でもいろんな娘が幸久くんのこと好きなんじゃないの？」

「女子に人気があつたのは広太の方ですよ、俺なんて別に大したことないです」

「あら、そうなの？　でもまあ、幸久くんがうちに来てくれれば、おかあさんと晴子ちゃんと霧子ちゃんと幸久くんのハーレムができるわねえ。だから心配しなくてもいいんだからねえ？」

「いや、別に俺の人生設計の中にハーレムをつくる予定はありませんし、それが出来ないからって何の問題もないですからね？」

「そうなんだ、ざんねーん」

そして雪美さんは、本当に残念そうにふう……と一つ短くため息を吐いたのだった。そうだ、俺は別にハーレムとかつくりたいわけじゃないし、っていうかそもそもそんなのがつくれるはずもないし、つくってどうするの的なものすらある。ムリムリ、そんなことができる甲斐性は、少なくとも俺には備わっていないのだから。

俺はなんというか、もっと穏便に人生を送ってほしいのだから。だから普通の人がするのと同じような一般的な人生が送ればそれでいいのだ。それで十分なのである。

……あつ、けっきょく雪美さんの仕事について聞きそびれたし。……まあ、またの機会に教えてもらえばいいか、そんな火急で知らない

といけないうつてことでもないわけだし。

## 二人がかりで説得

「幸久様、ただいま食材調達より戻りました。買って来たものはすぐに冷蔵庫にしまっけてしまっけてよろしいでしょうか。それともすぐにお使いになられるということでしたら、冷蔵庫にはしまわず調理台の上に置いておきますが、どうなさいますしょう」

「おお、帰ってきたか、広太。買ってきたのは冷蔵庫にしまわないでキッチンに置いていてくれ。どれもすぐに使うものだからな」

「あら、広太くん、おかえりなさい。幸久くんはもうすぐにお料理始めるの？」

「はい、そうですね、すぐに始めちゃおうと思います。広太が急いでくれたんで時間的には余裕ありますけど、でも晴子さんがいつ帰ってくるかは分からないですからね。出来れば晴子さんが戻ってくるまでには完成させておきたいですから」

というわけで、買い物に出ていた広太がこうして戻ってきた以上、俺は晩飯づくりに取り掛からないといけないのである。いや、もちろんそれがイヤというわけではないのだ。料理は楽しいし、晴子さんに食べてもらうのもうれしいことだ。しかしそれでも、晴子さんからの評価を受けるといふか、採点を受けるといふか、酷評を受けるといふかは、若干憂鬱だったりする。

もちろん晴子さんのことは疑いようもなく大好きで、晴子さんのために食事をつくるのはこの上ない喜びだけど、でもやっぱり評価されるのは複雑だ。まあ、それもいつものことだ、と言ってしまえばそうでしかなく、それ以上の何ものでもないのかもしれないが、しかしやはり晴子さんの言葉の刃は非常に鋭く、この上ないほどにキツイエッジを描いているのだ。それに刺されてうれしいなんてこと……いや、決してなくはないのだが、でも心のどこかではそれがイヤだと思わないでもないのだ。

「とりあえず、俺は晩飯づくり始めますよ。広太、雪美さんのお相

手、任せたぞ」

「はい、承りました」

「うし、ほんじゃ、いっちょ飯つくりますか！」

「あっ…、ゆ、幸久様！」

「？ どうしたの、かりんさん。なにか困ったことでもあった？」

「い、いえ、そうではなく…、これから、お夕飯をつくられるのでしょうか？」

「うん、そうだよ。足りてなかった食材は広太がいま買い足しに行ってくれたし、下準備は整ったからね。すぐにつくっちゃうから、もう少しだけ待っててね」

「そうではなく、幸久様、よろしければそのお夕飯、私につくらせていただくことは出来ないでしょうか……」

「いや、いいっていいって、そんなこと気にしないでよ。かりんさんはもつと霧子と仲良くなってくれて全然構わないからさ、ゆっくりしててよ。うちじゃなかなかのんびり出来ないんだから、外に出たときくらいは羽伸ばしてね」

「…、幸久様、可能ならば、今夜ここでお夕飯をつくる役を、お譲りいただきたいのです。本日は、私のことを幸久様のお師匠様にご紹介いただくためにこちらまで来たのですから、私も自分にできることをさせていたきたいのです」

「いやあ、でも料理は俺がつくるって晴子さんに言っちゃったからなあ……。ちゃんと俺がつくった方がいいだろうし…、それにもしつくったとして、晴子さん、けっこうきついことも言いますよ？」

「厳しいことを言われるのには慣れています。それに、これからよろしく願いますという気持ちを込めて、お料理をおつくりしたいんです。私が、そうしたいんです」

「…、まあ、そういうことなら、かりんさんがしたいようにしてくれて構わないんだけど……」

「それでは、幸久様はお座りになってごゆっくりなさってください。霧子ちゃん、少しすいません、私はお夕飯をつくってまいります」

「にゅ、うん、えと、がんばってね」

「はい、がんばって美味しいものをつくりますから、楽しみにしていってくださいね」

「にゅん、待ってる」

「幸久様、本日はなにをおつくりになる予定だったのででしょうか。よろしければ教えてくださいませ」

「えっと、いちおう豚のしょうが焼きと、それにサラダみたいな付け合わせでもつくろうかなって思ってた。食材もそれをつくるために揃えさせたし。でもまあ、かりんさんがつくりやすいのをつくればいいと思うよ」

「いえ、それでは、私も豚の生姜焼きをつくらせていただきます。さあさあ、ここは私にお任せになって、幸久様は霧子ちゃんと遊んでらしてください」

「うーん…、まあ、かりんさんのことだから料理に関して俺が心配するようなことはないと思うけど、でも、困ったことがあったらすぐに言ってね」

「はい、そうさせていただきます。お気づかい、ありがとうございます」

「あつ、あと、かりんさん、霧子と仲良くできた？」

「はい、霧子ちゃんはとってもいい子で、私が思っていたよりもずっと素敵なお方でした。初めは少し戸惑っておいででしたけど、少しお話したらすぐに心を開いてくださいました」

「そっか、それはよかった。あいつけっこうビビリなところあるからさ、難しいんじゃないかと思ったけど、そういうことなら俺も安心だよ。よかったらこれからも仲良くしてやって、友だちとして、ね」

「はい、それこそ、こちらこそです。あんな素敵なお友だちができるなんて、とてもうれしいことですから」

「そういつてくれるとうれしいよ、自慢の妹だからね。じゃあ、晩飯はお願いしちゃうね、かりんさん。俺はリビングにいるからさ、なんか手伝うこととかあったら声かけてね」

「はい、そのときはすぐに声をおかけいたします」

「調理器具の場所が分からないとか、調味料の場所が分からないとか、そういうことでも全然声かけていいからね。勝手が分からなくてムリだったっていうなら、すぐにでも交換するからね」

「はい、もしそういうことがありましたら、すぐにでも声をおかけします。ですが、声をおかけしない限りは大丈夫ですので、御心配にならずにゆったりとお待ちください」

「う、うん、しつこく言って、ごめん……」

「いえ、そのようなことはお気になさらないでください。それよりも、霧子ちゃんが暇そうにしていちゃいますよ、幸久様。女の子を退屈な気持ちにさせるものではありません」

「…、やっぱり俺がつくる！ かりんさんは霧子と遊んでいいから、俺につくらせて！ 晴子さんに食べてもらうんだから、俺がつくらないといけないんだ！ かりんさんに代わりにつくってもらったら、そんなの晴子さんに食べてもらう意味がないよ！」

「ダメです、もう私がお台所に入ってしまったました。これからここでは、少なくとも私が料理長です」

「ああ、ズルい！？ 俺だって料理長になりたいのに！？ っていうか、最近なんだかんだ言っただけでかりんさんが料理することが多くなってきたくない！？ 前に決めたように俺にも料理するチャンスを与えないと困るよ！？」

「そのようなことは、決してありません。私は幸久様といっしょに決めたルールを守っていますし、どうしてもというとき以外は幸久様からお料理の順番を取ってしまうようなことはしたりしません」

「だから、最近そのどうしてもものハードルがどんどん下がってきてるんだって。前はどんなことがあっても俺がつくる番は俺がつくってたのに、でも最近はけっこうかりんさんがつくっちゃってることあるよね。いや、あれはかりんさんが俺のことを、学校で一日勉強してきて疲れてるんじゃないかなとかって思いやってくれていてその結果として俺の代わりに晩飯つくってくれてるっていうのはよく

分かってるつもりなんだけど、でもその頻度が最近かなり多くなってきたくない？」

「そのようなことはありません、幸久様、それは思いすごしです」

「そうかなあ…、なんか俺、先週は朝飯をつくるのも合わせて三四回しか料理してないような気がするんだけど……。朝飯は弁当つくるついでにかりんさんがほぼ毎日つくっちゃうし、晩飯もいつの間にかつくっちゃってるし、このままじゃ俺、うちにいたら料理出来なくなるんじゃないかね……。？」

「幸久様、一家の主は忙しく動き回ったりしないものです。料理を趣味になさるのはとても素敵なことだとは思いますが、でも日々の食材の繰りまわしなどの細かいことに忙しなくなさるのは、あまり堂々とした振る舞いではありません。ですから、日々のお料理は私が引き受けますので、幸久様は気が向いたときに好きなようにお料理をなさるのがいいのではないかと思うのです。ですから、私は幸久様からお料理を取り上げたりはしません、でも日々の煩わしさからはお救いしたいと思っています。なので、その毎日毎食料理をしなくてはならないという義務感から脱するところから始めるべきかと思えます」

「…、やべえ…、このままじゃうちが乗っ取られるわ……。広太、俺はどうしたらいい……。？」

「私としましては、かりん様のおっしゃることは正論であると存じます。幸久様は主夫ではないのですから、可能ならばその義務的なお料理から解放してさしあげたいと思っていますのです」

「まあ、お前は料理できないからな。俺とお前の二人暮らしで、俺が料理しないってなったらお前がするしかないわけだし」

「申し訳ございません、幸久様。私が至らぬばかりにご苦労をおかけいたします……。？」

「いや、別にそんなことどうでもいいんだけどさ、料理は俺が好きでやってることなんだし。っていうか、お前が料理できるようになったら、俺が家でやれることが何もうなくなるだろ。それはちょっと、



なんつか、何もしてない人みたいでイヤなんだけど。っていうかさ、おじさんとかはお前に料理できるようになれみたいなことはいわないのか？　いつもだったらなんか、庄司の執事に出来ないことがあっちゃいけないんだ！　とかいつてくるじゃん」

「…、執事長は、幸久様がなさりたくてなさっていることを邪魔してはいけないとおっしゃっていました。ですので、私としては日々のお料理を幸久様から取り上げてはならないと考えています」

「ふうん、そうなんだ…。おじさんも一応、俺に氣を使ってくれてるのか…。？　でもまあ、俺もお前のつくったもん食うのは正直勘弁だし、ムリに料理の練習とかはしなくてもいいけどな」

「幸久様がそう仰るならば、私もそうさせていただけこうと思います」  
「何事も助け合いだろ、助け合い。適材適所でそれぞれが出来ることをやるのが共同生活ってもんだ。…、いや、そういう話じゃなくてだな、かりんさんに俺の役目が全部取られちゃってどうしようって話なんだよ」

「かりん様は、決して幸久様からお料理を取り上げようと考えていらっしゃるわけではございません。幸久様の今現在のお料理への取り組みは、趣味の域を超えて義務的なものになってしまっています。それでは幸久様が本来感じていらっしゃった、お料理の楽しさのよいうなものが感じられないのではありませんか。ですからかりん様は、そのような義務的な要素を引き受けてくださると仰っていらっしゃるのです。幸久様はお料理をしたい、と思われたときだけお料理をしてくださいばいいのです。そうすれば、以前より言ってらした部活動に所属することもできるでしょうし、何でも好きなことに時間をご利用いただくことができますようになります」

「まあ、それはさ…、そう言ってくれてるんだってことは分かるし、理解もするけど、でも俺だって家の仕事をしたいっていうかさ、俺一人だけ何もしないでこのうと暮らしてるわけにはいかないうかさあ…。」

「幸久様、家周りの仕事は、使用人の仕事でございます。主様には

主様の、為すべき仕事というものがありません。幸久様の場合は、それは学校に通われてお勉強をなさり、それから限られた学生生活を楽しまれることなのです。それをバックアップするのが我々使用人の役目なのですから、幸久様がそうしてくださらないと私たちは己の役を為していないということになってしまふのです」

「…、それを言われると、弱る…」

「幸久様のお仕事は、学生としての本分を全うすることです。幸久様が家のことは顧みずとも、我々が守ります。家のことなどお気になさらず、学生としての生活を全うしてくださいませ」

「…、分かった…、とりあえず今は、そういうことにしとく。でも、俺は納得したわけじゃないからな！　また今度話し合いだからな！」

「はい、それで結構でございます。いずれ、存分に話し合いをさせていただきます」

「じゃあ、かりんさん、晩飯よろしく」

「はい！　お任せください！」

正直、俺の頭のつくりでは広太を言い負かすことは出来なかったりする。あいつは本当に正論を吐かせたら一級というか、理詰めで来られると俺では対処できない。

くそ…、学生の本分は勉強とか、分かってるんだよ、そんなこと！　ここでそれを持ってくるとか、卑怯以外の何ものでもないぞ！

## 霧子とおしゃべる

「にゅ？ 幸久君、晩ごはんつくるんじゃないの？」

さて、晩飯でもつくるかな、と腕まくりしつつ思ったところ、どうしてかかりんさんと広太の二人がかりでインターセプトされてしまった俺は、料理に向けるはずだったそのやる気をどこに向けたらいのか分からないまま、やる方ない熱を心に秘めてリビングに戻ってきたのだった。

そしてリビングにはもちろん雪美さんと霧子がいるわけであり、それからついでに広太が食器棚の陰になるところで消えている。しかし、消えている広太をわざわざ突っつきまわすのもなんだし、雪美さんはまた何だかよく分からないことを始めてしまっているし、仕方ない、ここは喜び勇んで霧子とおしゃべりでもしていることにしよう。

っていうか、広太め、消えるのはほどにしろって言ったところなのに、俺の話を聞く気があまりないと見える。まあ、あいつが家の中で恒常的に消えるようになったのは中学生のころからずっとなわけだし、いくら俺に注意されたからといってすぐにどうにかなるとは思ってないけどな。

いや、そんなことよりも、今は霧子とおしゃべりに集中しよう。

…霧子とおしゃべりは、集中しなくていいからいいんだよ。うん、霧子とのんびりおしゃべりでもしようかな、集中しないで。

「…まあ、いろいろあって、俺は今日はずくらないことになりました」

「そうなんだ。幸久君のご飯、久しぶりに食べたかったのになあ、残念かも」

「飯はまた今度つくってやるからな、今日のところはかりんさんのご飯だ。大丈夫、かりんさんのご飯も俺のと比べても遜色ないくらい美味いから」

「そうなの？ にゅ、それじゃそれも楽しみだよ」

「ああ、今日はせっかく晴子さんに食べてもらえる日だったのに……俺も残念だ……」

「幸久君、おねえちゃんにご飯食べてもらうの、うれしいの？」

「うれしいに決まってるだろ。そもそも俺が料理つくってるのは、基本的には晴子さんのためなんだから、晴子さんに食べてもらわないと意味ないだろ」

「そうだったんだ……知らなかったよ……。で、でも、じゃあ、今日は幸久君がつからないとダメなんじゃないの？」

「ダメなんだよ。でも、ダメだけど、いかんせん一回論破されちゃったからなあ……。ほら、負けたやつは潔く引かないとダメだろ？」

「それは、うん、そうだと思う」

「俺はそういうところについてはさっぱりした男だ、と自負しているからな。負けたときは潔く負けを認めて、もしやるなら再戦は後日だ」

「にゅ、たしかに幸久君は、そういうところけっこう気にするよねえ。でもたまにけっこうあがいてるよね。りこちゃんに言い負かされたときとか」

「それは、あれだ、姐さんに言い負かされたときって、たいていの場合はそのあとに肉体的なダメージが続いてくるじゃん。俺、痛いの嫌いだからさ」

「にゅ、あたしも痛いのはキライだよ」

「ああ、それに俺は女の子に手を上げることができないからな。もし姐さんから大きなダメージを与えられたとして、報復攻撃できないんだよな。やり返せばそれなりに心が晴れるから、少し痛いくらいは許容できるんだけど、こう姐さんにやられると全部を飲み込まないといけないからあがきたくもなるってことだ」

「そっかあ、幸久君も大変だね……」

「ほんとだよ、大変だよ。あんまり大変だから膝枕して、膝枕」

「ひ、膝枕？ べ、別にいいけど、どうして？」

「どうしてもこうしてもないよ！俺は霧子との約束で誰とも喧嘩しないんだから、これくらいの労いはあってもいいでしょ！霧子が誰とも喧嘩しちゃダメとか言わなかったら、俺は今頃学園のてっぺんにいて気配な生活を送ってるはずだったんだよ！」

「幸久君は、けんかしちゃダメなんだもん。不良はダメなんだもん」  
「まあ、不良がダメっていうのには賛成だけだな。でも、最近はあるまりないけど、街とかで不良に絡まれたときとか、大変なんだぜ？」

「にゅ…、幸久君、まだ街で不良に絡まれるの？不良やめたらそういうことなくなると思ったのに……」

「まあ、なんだかんだいって伝説だったからな、俺と広太は。喧嘩やらないって公言しても絡まれるっていうのも迷惑な話だけど」

「にゅう、不良やめれば危ないことなくなると思ったのに……」

「仕方ないって、俺と広太が強すぎたんだ。潰せば名があがると思ってる屑がまだいるってことだよ。平気だって、もうしばらくすれば俺たちが喧嘩しないっていうのがほんとのことだって広まるだろうから。喧嘩ふっかけても逃げ回るだけのやつなんて、潰しても名があがるわけないって、じきに気付くだろう」

「でも、それまでは幸久君、不良に絡まれるってことだよね……？ケガしたりしない？危なくない？」

「別に危ないことなんてねえって。余裕で逃げ切れる」

「そうなんだ…、だったらいいけど……。あっ、ねえ、幸久君、もしもなんだけどね」

「？もしも？もしも、なんだよ？」

「うん、もしもね、幸久君が今でも喧嘩とかするとしてね、学校で一番強くなってね、中学のときみたいに手下がいっぱいいるようになったとしてね」

「うん」

「そんなことになったら、りちゃんが幸久君をやっつけに来るんじゃないの？」

「…、ああ…、そうか…。うちの学校には、姐さんがいるのか…。  
…。うーん…、姐さんとガチでやりあったことないから確かなこと  
言えないけど、とりあえず試合じゃ絶対に勝てないことは間違いな  
いんだよな…。でも姐さんってけっこう型にハマってて不器用な  
ところあるし、ストリートならなんともかなるかもしれないな…、いや、  
でもやっぱりキツイことに代わりはないか…。」

「にゅう、幸久君、喧嘩しちゃダメだからね」

「喧嘩はしないっつうの。っていうか、今はちよつとどうやって戦  
えば姐さんに勝てるか考えてみるだけだよ。ほんとにやるわけじ  
ゃないし、間違いない楽な戦いにはならないから、ぶっちゃけやり  
たくない」

「幸久君もりこちゃんもあたしの大事なお友だちなんだから、喧嘩  
なんてしちゃダメなんだよ。ちゃんと仲良くしてね？」

「なに言ってるんだよ、めっちゃ仲良くしてるじゃん。俺が姐さん  
と仲たがいなんてするわけないだろ。でもやっぱり姐さんは強いか  
らな、なんでもありの喧嘩なら少しくらいは抵抗できるかもしれない  
けど、真正面からルールありでやったら俺なんかじゃ試合になら  
ねえ。あー、でも、志穂だったら少しくらい戦いになるんじゃない  
か？ あいつもアホみたいに強いだろ」

「しいちゃんもすごいんだよね…、にゅう、なんか、あたしのまわり  
ってすごい人が集まってるかも…。」

「そういうわれれば、そうかもな。しかし、これだけ強いやつが集ま  
ってるなら霧子は安心だな」

「あ、安心じゃないよ…、お友だちには危ないこととして欲しくない  
もん。りこちゃんが風紀委員でお仕事してるのだって、あたしはあ  
んまり賛成じゃないよ…。」

「いや、霧子に反対されたって姐さんは風紀辞めないだろ。ってい  
うか、なんだよそのおかあさんみたいな心配の仕方。霧子はむしろ  
心配される側だろ、俺に」

「そ、それはそうかもしれないけど、でも心配なのは心配なんだも

ん。うちの学園、あんまり不良って感じの人はいないけど、でもやっぱり問題が全然起きないってわけじゃないし、りこちゃんだっていつ危ない目に会うか分からないんだよ？」

「姐さんは志願兵なんだから、そこらへんの覚悟はちゃんと出来るんじゃないのか？　っていうか、姐さんが危ない目にあってるっていう状況が俺にはピンとこないんだけど、それってどんな感じだよ」

「えと、んと…、たとえば、悪い人たちに囲まれちゃったりとか、あと、暗い所で急に襲われちゃったりとか、あと…、風紀委員の人たちがりこちゃんのことを裏切ったりとか」

「…、霧子は、ほんとにドラマ脳だな。そんなことほんとに起こるわけないだろ。っていうか、姐さんならそれくらい普通に対処できるって。姐さんは霧子が思ってるよりも弱くないんだぞ。二年で小隊長やってるのなんて、姐さんくらいのもんらしいぜ？　そう易々となれるもんじゃないらしいぜ、小隊長っていうのは」

「それは分かっているもん…。にゅ、そうなんだよね、りこちゃんはずごいんだよね……」

「分かっているのかよ、分かっているんなら心配なんか何にもないじゃねえかよ。いったい姐さんが、なににやられるっていうんだよ。っていうか、何だったら姐さんのことを倒せるっていうんだよ。悪いけど、俺にはそもそも、誰かにやられる誰にやられるかっていう想像がつかねえよ」

「でも、いくら強くってもしりこちゃんだって女の子なんだよ。幸久君は心配じゃないの？」

「バカ、そりゃ内心では心配に決まってるんだろ。女の子が危ないこととしてたら心配でたまらなくなるに決まってるじゃねえか。でも、それってさ、つまりは弱い俺が強い姐さんのことを心配してるってことだし、なんか転倒してるよな」

「そ、そんなことないよ、幸久君。りこちゃんだって、きっと幸久君に心配してもらってうれしいと思うし、もしも幸久君が辞めてっ

て言ったら風紀委員だって辞めてくれるかもしれないよ。女の子が危ないことしちゃダメなんだよ、って言えば、分かってくれるよ」

「いや、そんなこと言わないって。風紀の仕事っていうのは姐さんがやりたくてやってることなんだしさ、それを俺が辞めろなんて言うのは間違ってる。それがちょっと危ないことだとしてもさ、まっすぐにやる気もってる人間を俺が止めることは出来ないんだよ。もしそういう人に対して俺が出来ることがあるとしたら、それってつまりそいつが本当にヤバイ目にあってるとき、すぐに助けてやれるように心構えだけしとくことなんだよな。っていうか、第三者にはそれくらいしか出来ることなんてないんだよ」

「にゆう、じゃあ、幸久君はりこちゃんがピンチになったら助けに行くの？」

「ああ、行く。それが友だちってものだ」

「りこちゃんがどんなピンチでも？」

「まあ、姐さんがひとりじゃどうしようもないピンチのときだけだな。そうじゃないときに助けに行くと、姐さんの場合は助けに行っただけの俺が邪魔することになりかねないからな」

「りこちゃんが十人くらいの不良に囲まれたりしたときとか？」

「そうだな、十人となるとさすがの姐さんもキツいだろうから急いで助けに行くぜ」

「りこちゃんが風紀委員の人たちみんなに裏切られて、その中で孤立しちゃっても？」

「それはもう、すぐに飛んでいかないといけないな。まあ、そもそもところで、そんなこと起こらないだろうけどな」

「りこちゃんが偶然、悪の組織に狙われることになっちゃっても？」  
「…、なんか、急に想定がファンタジーになっちゃったな……。分かってると思うけど、悪の組織なんて存在しないんだよ、霧子ちゃん。分かるよね？」

「あ、悪の組織はいるんだよ、幸久君。確かにあたしたちの見えるところにはいないかもしれないけど、でも見えないところにはいる



んだよ。現代になっても行方不明になったまま消息不明になっちゃう人っているでしょ。そういう人たちはね、実は神隠しにあって別の世界にいつちゃったり、悪の組織に殺されちゃって始末されちゃったり、タイムスリップしてたりするんだよ、実は」

「霧子、それは小説の中だけの話だぞ。確かに消息不明になっちゃってふっと消えちまう人もいるかもしれないけど、でもだからってそれが悪の組織の仕業ってわけじゃないだろ。きっと大自然の猛威に吞まれたとか、世を儚んで樹海とかで自ら命を絶ったとかであって、そういうファンタジーの餌食になったわけじゃないと、俺は思うんだよな、うん。まあ、でも、霧子がそう思うんならそうなのかもしれないな、霧子の中では」

「にゅ、あたしの中ではじゃなくて、ほんとにいるんだよ、悪の組織は」

「うんうん、そうだな、いるよ、悪の組織は。それにほら、悪の組織がいるんだから正義の味方もいるよな。そういうのがいないと、世界はあつという間に悪の組織に滅ぼされてるだろうしな。日夜戦ってるんだよな、うんうん」

「にゅん、幸久君は分かってくれると思ってたよ。だからね、風紀委員とかの正義の味方に入っていると狙われやすいと思うの。りこちやんだって、きっと正義の味方の一人だと思われて、影ながら狙われてると思うんだよ」

「ああ、そうだな、今度姐さんに気をつけてって言っとかないとダメだな。俺が責任もって言っとくから、霧子はなにも言うんじゃないぞ？」

「にゅん、分かったかも。幸久君にお願いするね」

「ああ、任せろ」

とりあえず、霧子ちゃんはいつまでも子どもの心を失わないところとかかわいいと思います。いや、霧子があるっていったら、きっとあるんだよな。悪の組織も神隠しも、うん、あるある。

ああ、世界はファンタジーに満ち溢れているに違いない。霧子がそ

う主張するんだから、きっとそうに違いないんだ。

## 晴子さんの帰還

『ただいまあ……。幸久、いるんでしょ……。荷物、持ちなさいよお……。』

「にゅ、おねえちゃん、帰ってきた？」

「つばいな。俺、ちよつと行ってくる」

「にゅう、あたしも行くよお」

やることもないからとテレビを適当につけたままおしゃべりなんぞに興じていた俺と霧子だったわけなのだが、しかし時間というものは経ってしまえば早いもので、気付けばもう晴子さんが帰ってくる時間になってしまったようだった。よく見るとキッチンのかりんさんも料理の盛り付けに入っているようだし、料理完成のタイミングもばっちりいい感じのようである。

そして、霧子とのおしゃべりが楽しかったせいで忘れていたのだが、俺はこれから晴子さんにかりんさんのことを紹介しないといけない。それはもう、最初から分かっていたことだけど、とても辛いことが起こるに違いあるまい。まあ、もちろん、何か起こるとしたら俺の身になるのであって、それ以外のところに何らかの飛び火を心配するような必要はないのだが。

…、言っておくが、晴子さんは怒りっぽくて乱暴なところもあるけど、でもそこから関係のない人に八つ当たりしていくようなことはない。もし俺が晴子さんを怒らせるようなことをしたら、晴子さんはその怒りの対象である俺に対してのみ怒りを向けてくれるのだ。だから俺が晴子さんを怒らせたからといって霧子が理不尽にぶたれたり雪美さんが理不尽にご飯抜きにされたりすることはないのである。

そういう意味で、晴子さんを怒らせるようなことをするためにする必要のある覚悟というのは、それ相応に晴子さんに痛めつけられることに対するそれだけでいいのであって、他のことに対する配慮の

ようなものは度外視してしまっている。まあ、晴子さんに自分がいたぶられるというだけでも、俺にしてみれば少々つらいところがないというわけではないのだが。

はっきり言っておくが俺は、別に晴子さんに痛めつけられて喜んでるわけではない。俺は痛いのが好きなわけでもないし、虐げられるのが好きなわけでもない。そしてそれは、おそらく晴子さんの側からしても同様に違いあるまい。晴子さんだって、別に俺のことを殴ったり蹴ったり罵ったり虐げたりして喜んでるわけではあるまい。というよりもむしろ、そんなことしないで済むならしたくないと思ってるに違いないのである。しかし、俺の未熟によって晴子さんはしたくもないことをしなくてはならないのだ、俺を修正するために。というわけで俺は晴子さんがそんなことをしなくて済むように早く一人前にならなくてはならないのである。

もちろん、晴子さんは俺の師匠なんだから弟子であるところの俺を如何様に扱ってもいいというのは当然のことなのだが、でもだからって俺を制裁するために晴子さんの手を煩わせるというのはまた違うと思うのだ。それってやっぱり晴子さんに手間をかけているってことだと思ふし、よくないことだろう。やっぱりもっと立派な弟子になって晴子さんに面倒をかけるようなことがないようにしなくちゃならないなあ……。とか言って、またこれから晴子さんに迷惑をかけようとしているわけなんだけど、まあ、それについては本当に申し訳ないと思ってるわけで、晴子さんから何らかの修正をいただくことになると思うけど、それについてはありがたくいただくことにしようと思ってる。

「お帰りなさい、晴子さん。荷物持ちます」

「幸久、料理出来てるんでしょね」

「はい、もう晩ごはんは出来てます」

まあ、俺がつくったわけではないのだが。

「そう、それならいいのよ。あたし、お腹空いたんだけど」

「はい、もうすぐにも晩飯にします。それじゃ、俺は荷物を部屋

まで持ってくんで、晴子さんは先にリビングにどうぞ」

「そうしなさいよ」

「はい、よろこんで！」

「おねえちゃん、おかえり〜」

「ただいま、霧子。幸久に今日もいじめられたでしょ？ いじめられたんでしょ？ うんっていいなさいよ」

「い、いじめられてないよ……？」

「そう、まあ、それならいいのよ、しょうがないわね。霧子、幸久にいじめられたらすぐおねえちゃんに言うのよ。いじめられてなくてもいじめられたって言うのよ？ そうしたらおねえちゃんがすぐに幸久のことをいじめ返してあげるから」

「だ、だいじょぶだよ、おねえちゃん、幸久君にいじめられてたりはしないよ」

「そうなの？ はあ、そう、いじめられてないの……。まあ、別にそれならそれでいいんだけど、まあ、なんでもいいわ」

「晴子さん、俺が霧子をいじめるなんてありません」

「そういうきれいごとは別にどうでもいいのよ。そんなことどうでもいいから、あんたはただあたしのためにだけ生きてればいいのよ。だから霧子のことをいじめて、あたしがあんたをシバくための大義名分づくりも、しっかりしときなさいよ」

「し、しませんよ、そんなこと！」

「しないんだったら、さっさと荷物をあたしの部屋に運んどきなさいよ」

「それだったらお任せを」

「あゝ、疲れたわ……。なんか今日一日でだいぶストレス溜まったわ……。幸久、あとであんた一発殴られなさい、分かったわね」

「それだったら、お任せを」

「で、あんたはいつまでここにいるのよ。さっさと荷物をあたしの部屋に持っていくなさいよ。それからさっさと晩の仕度をしなさいよ。あゝ、霧子、トマトジュース一杯持ってきて……」

「あつ、はい、すみません、今すぐに」

「幸久様、晴子様のお荷物は私がお持ちしますので、お先にリビングにお入りください。くれぐれも本日の目的を見誤ることのありませんようにお願いいたします」

「ん？ おお、広太、分かってるぜ」

「それでしたら、よろしいのですが。晴子様がリビングに入られたということは、間もなく晴子様はかりん様のことを認知なされます。晴子様とかりん様が遭遇なされた瞬間には、緩衝材として幸久様がいらっしゃった方がよろしいのではないかと、私は思います。私では、おそらくその役を全うするには役不足と恐われますので」

「…、そうだな！ 俺がいないとヤバいんじゃないか？」

「ですから、私が晴子様のお荷物をお部屋までお持ちします。幸久様はすぐにリビングに戻られるべきです」

「ちょ、ちょっとその荷物任せた！」

「はい、お任せくださいませ」

「あら、霧子ちゃん、何かお飲物ですか？」

「にゅん、おねえちゃんがジュース飲むって」

「そうですか、それではコップをどうぞ」

「は、晴子さん、まあ、座ってください！ お疲れみたいですし、俺、肩もみますね！」

「…、座ってるわよ」

「そ、そうでしたね！」

「幸久、ちょっとあんた、肩揉みとかどうでもいいから、いや、それはあとで全力でさせるけど、でもあれよ、ちょっとそこ座んなさいよ」

「…、はい……」

しかし俺が全力でリビングに取って返したときには晴子さんは既に椅子に座っていて、それから感情の振れ幅を零にした視線をキッチンの方に向けていたのだった。晴子さんがかりんさんを発見するのには、当然そんなに時間はかからないと思っていた。というか瞬く

間に発見されるだろうと思っていたが、なるほど、確かにそうならしい。

ヤバイ、どうしよう。最初は俺から晴子さんにかりんさんを紹介することで、ワンクッション置いてその存在を受容してもらおうと思っていたのに、しかしこれではダイレクトではないか。これではダメだ、晴子さんの感情が暴力に抵抗なしで変換されて、それが俺に直撃する。

「一つ聞きたいんだけど、あのキッチンにいる女は、あんたの知り合いかしら？」

「…、はい……」

「目え逸らしてんじゃないわよ？」

「…、はい……」

くっそお…、しょっぱなから滑ってしまった。これじゃあらかじめ考えといたプランが全部パアだ。

「まあ、あたしの知らない知り合いくらいいるわよね、あんたも人間として社会の中を生きてるんだし？ あたしにもあんたの知らない知り合いとかいるし、当然よね、それは、もちろん当然よ。うん、だから、そこじゃないわよね、そこが問題ってわけじゃないわよね。じゃあどこが問題か分かってるわよね、分かってないなんてことないわよね。あたしの言いたいこと、分かってるわよね？」

「わ、分かってる、つもりです……」

「分かったつもりになってるんじゃないわよ！！ 幸久のくせに調子乗ってるんじゃないわよ！！」

「す…、すいません…、もしかしたら、分かってないかもしれないです……」

「そうよ、謙虚じゃなきゃだめよ、幸久。あんまりふざけたこと言ってるよ、殴るわよ」

「気をつけます……」

まずいな…、晴子さん、かなり怒ってるぞ……。今までこういうこととしたことがないから晴子さんがどのあたりのポイントに対してキ

レてるのかよく分からないけど、でもとにかく、俺が当初予想していたよりもずっと怒っているってことだけは分かる。

とりあえず、晴子さんが俺を殴るときは、少なくとも殴るぞとか前振りすることはない。殴るときは何も言わずに殴るのが晴子さんののだ。前振りをするときっていうのは、たとえば実のところあまり怒っていないときとか、それかあるいは怒りが極まっていっているように軽くドツク（晴子さん基準）だけでは心が収まりそうもないときなのだ。今回は、間違いなく後者であろう。

…、心構えだけはしておこう。

「まあ、いいわ、そんなこと言ってもどうしようもないわけだし、それについてはまたあとでいいわよ。それよりも今は、もっとちゃんと話を聞かせてもらおうかしらね。言っとくけど、この期に及んで許されるところじゃないわよ。話はちゃんと聞いてあげるし、途中で邪魔もしないわ。でも許されるとは思わないことね。最期に懺悔だけさせてもらえと思っておきなさい」

「…、分かりました」

「それじゃあ、話さないよ。簡潔にね」

「が、がんばります…」

「じゃあ質問。あの女は、誰」

「ふ、二見、かりんさんと、言います」

「ふうん、二見かりん、ねえ。で、あんたとの関係は」

「い、許嫁、です」

「許嫁？ あんた、そんなのいたの？」

「いた、みたいです。俺もこの間まで知りませんでした。なんか、じいさん同士が決めたことらしくて」

「ってことはなに、あんた、あの女と結婚するつもりなの？ あたしよりもあの女のことを取るってこと？」

「ま、まだ結婚するかどうかとかは、分かりません…。俺はかりんさんのこと、全然知らないんで…」

「許嫁って、そういう選択の余地とかあるの？ 家と家の間で決め



られた結婚なんだから、するとかしないとか選ばないでしょ」

「かりんさんの実家が、すごすぎるんです。晴子さん、フタミグルーブ、知ってますよね。かりんさんは、そこのお嬢様です」

「…、金持ちじゃない」

「大金持ちなんです。それこそ、うちとは比較することもおこがましいくらいに。じいさんの時代はうちもそれなりに力があつたみたいで、二見の家は今ほど力がなかったみたいで、だからなんとなくバランスが良かったらしいんです。だからこそ出来た許嫁の約束なんです。でも今となつては両家の力に開きがあり過ぎる。だからこの許嫁の約束は、なかったことにした方がいいって話になってるらしいんです、二見の家では」

「まあ、そうでしょうね。そんなしょぼい家に、天下のフタミグルーブのお嬢様をくれてやるわけにもいかないだろうし。政略結婚をさせるにしても、もう少し実のあるものにするべきだわ」

「晴子さんなら分かってくれると思つてました。そういうことなんです」

「じゃあ、あの女はどうしてここにいるのよ。あんたと許嫁かもしれないけど、でもいえではそれはなかったことにしたいって話になつてるって言ったじゃない。今さっき」

「そうなんですけど、でもかりんさんは俺との許嫁関係を破棄する気がないそうでした、何と言いますか、お嫁さんになるためにここにいる、みたいな？」

「…、つまり、許嫁とか関係なしで、あんたに惚れてるっていうの？　だから許嫁とか関係なしで結婚したいと思つてて、わざわざここにいてるっていうの？」

「さすが晴子さん、まるで俺の頭の中を見透かしたかのようなご明察！　そういうことなんです！」

「ってことは、話はなにも変わらないってことね。あんたはあの女と結婚するつもりなの？」

「いえ、俺はまだかりんさんのことを全然知らないんで、結婚とか

分らないです」

「まあ、あんたならそういう話はみんな保留するわよね。言っとくけど、保留っていうのは決定を先延ばしにするってだけで、別に何かを決定的に決めているってことはないんだからね。分かってると思うけど」

「それは、分かってますけど…、でもだからって何かを決められるほど俺には決定要素がないです」

「あんたがそう言うからにはそうなんでしょうね、あんたの中ではまあ、いいわ、もっと細かいことはまた後で聞くとして、前提条件はそういうことってことで分かってあげるわ、感謝しなさい。…、そういえば、あの女はいつからあんたのところにいるのよ。昨日今日来たって感じではないけど、先週くらい？」

「…、あの、ゴールデンウィークくらいです……」

「…、一か月前じゃない。あんた、優柔不断もたいがいにしないと、人間としてどうかと思うわよ……」

「俺も、そう思います……」

「年々ひどくなってるわよね、あんたの優柔不断。しまいには背中から刺されるわよ。というか、一度刺されないと分からないじゃないの？」

「背中から刺されたら、いくら俺でも死にますよ」

「バカは、死ななきゃ治らないって言ってるのよ」

「…、なるほどです……」

「そんなの、俺だって分かってるもん……」。

## 家族三人で

俺の決死の説明によって晴子さんには話の一番初めの前提条件を納得してもらったわけなのだが、しかしだからといって晴子さんを完全に説得することができたわけではなく、俺の戦いはまだまだ始まったばかりなのだ。

だがその前に、せっかくかりんさんがつくってくれた料理を、つくりたての温かいうちにいただくのがいいだろう。ここから晴子さんの説得に取り掛かってしまうとまた膨大な時間を要するわけであり、せっかくの料理が冷めてしまうことになりかねない。せっかく心をこめてつくった料理も、一度冷めてしまっただけのおいしさのいくらかが失われてしまい、少なからぬ悲しみがこみ上げるといえるものだ。

「あの、幸久様、お食事をそちらに運んでしまってもよろしいでしょうか……？」

「あつ、はい、俺も今行きます。広太も運ぶの手伝え」

「はい、了解いたしました」

まあ、晴子さんを完全に説得することは、俺の弁論レベルを鑑みるに不可能なのだが、とりあえずの納得くらいは得られるようにがんばりたいところだ。逆に、それすら得られないとなると、俺の今後の平穏な生活が保障されないという事態も発生しかねない。俺は以前と同様の日常を享受したいだけなのであって、別にかりんさんがやってきたからといってそれに一石を投じて波紋を生じさせたいとかは思っていないのだ。

いや、確かに、俺の人生における新要素であるかりんさんの登場によって多かれ少なかれ俺の生活に波紋が生じていて、そしてその結果として俺は今こうして晴子さんと言論を交わし合わなくてはならないという事実が生じたと考えると、もうすでに大きな一石が投げられていると見るのが妥当なのかもしれないが、しかしだからとい

って自分からそれに追加で石を放り投げたいなどとは思っていないのだ。

そういう風に生活に刺激を求めるのは、昨今の若者にありがちな非日常への希求というもののなかもしれないが、そんなものを追い求めることはあまりに不毛が過ぎるというものだ。人生というのはまづからして、よくよく目を凝らして見てみれば波乱万丈なものなのであり、それを退屈と決めつけてよく分かりもしない刺激を求めるというのは、本末転倒も甚だしい。俺たち人間は、まず初めに己の生きている人生というものをよく見据え、その楽しさを存分に享受するべきなのだ。それだけのことで、きっと人間は己の分というものを感じ入り、その身の程にあった幸せと楽しさを追い求めることになるに違いないのだ。

行き過ぎた波乱への嗜好は、むしろ何気ない日常におけるちょっとした喜びやちょっとした楽しさを否定し、自分の意思を画一的な『驚くような出来ごと』という、むしろ使い古されたされた一つの感性の枠に押し込めるものだ。人間が真に求めるべきなのは今自分が有している人生がどれだけ素敵なものであるかをしっかりと認識することであり、そしてそれからそうしたささやかな幸せを享受して生きていることのできる喜びを感じ入ることなのである。

そう、つまり、生きてるだけで、ラッキーなのである。

「ねえ、霧子、聞いていい？」

「にゅ？ どうしたの、おねえちゃん」

「うん、あのさ、今日の料理って、けっきょく幸久がつくったわけじゃないのよね？ あの、二見かりん？ って女がつくったわけなのよね？」

「にゅん、そうだよ。最初は幸久君がつくるつもりだったみたいなんだけど、でもなんだかよく分からないうちにりんちゃんがつくることになったんだって。どういういきさつなのかはあたしもよく分からないけど」

「どうしてよく分かんないのよ、同じ部屋の中にいて、どういう状

況になつてゐるのかまで把握してゐるのなら、それってつまり話くらいは聞いてたつてことじゃない」

「だってあたし、そのときテレビ見てたんだもん。りんちゃんがお料理することになつたつていうのも幸久君に聞いて知つたことだし、お話なんて聞いてなかつたもん」

「ほんとに、あんたはテレビ好きよね。まあ、別にテレビ好きだからって何かダメなことがあるわけじゃないから問題はないと思うんだけど。それにしても、霧子、テレビを見ながらでもちゃんと周りにアンテナ張り巡らせてないとダメじゃない。テレビがいくら好きでも、それにばかり集中してたら今みたいに周りに置いて行かれちゃうわよ」

「そんなことないもん、あたしだってちゃんと人の話聞いてるよ。つていうか、人の話聞いてないのはおねえちゃんの方だよ、絶対」

「あたしは話を聞いてないんじゃないかって話を聞かないのよ。もつというなら、人の話を聞く気がないのよ。そこは全然違うんだから、間違えちゃダメよ」

「にゅ…、それは自分で言っちゃいけないことだと思うよ。分かつてるんなら直さないとダメだと思う…」

「霧子、癖つていうのはね、なんでもかんでも直せばいいものじゃないのよ。我慢して直さないでいけばいつかその癖もチャームポイントになるときが来るんだから、耐えないといけないのよ。もちろん癖なんて直しちゃうのは簡単だけど、でもそこをあえて我慢してチャームポイントになるまで待つ。そうすれば周りからはそういう人なんだと思われて、むしろ一つのキャラになるって寸法よ」

「にゅう、そういうこと言っちゃいけないんだもん……。人のお話はちゃんと聞かないといけないって、小学校のときに先生が言つたよ？」

「小学校のときのことなんて覚えてないわよ。クラスの支配者として悠々自適に生活してた記憶しかないわ」

「おねえちゃん、クラスの支配者だったの？」

「そうよ、すごいでしょ。みんなあたしの言いなりだったんだから、いい生活だったわ、あれはあれで。まあ、今でも幸久はあたしの言いなりだから、いい生活ってことに変わりはないのかもしれないけど。でもやっぱ、幸久はまだ高校生だから大学にいるとき言うのと聞かせられないのは億劫よね。あたしがやる必要のないことまであたしがやらないといけなくて、面倒でたまらないわよ」

「でも、幸久君だって学校あるんだから、そんなムリなこと言っちゃダメだよ。それに、おねえちゃんはずいんだから、自分で何でもできるよ」

「当然じゃない、あたしに出来ないことなんて滅多にないわよ。でもね、霧子、出来るからってやりたいわけじゃないの。面倒なことではできるだけやりたくはないし、やらないで済むならそれに越したことはないのよ。というか、せっかく幸久を弟子として抱えてるんだから、面倒なことは全部弟子にやらせてしかるべきなのよ。あゝ、幸久がもっと天才だったらとび級でも何でもさせてあたしと同じ学年に置いておくのに……」

「お、おねえちゃんは、そんな理由で幸久君のことを弟子にしてるの……？ あたし、師匠と弟子ってそういう関係じゃないと思うし、それにそういうのはあんまりよくないと思うんだけど……」

「え？ 別に最初の最初からこんなこと考えてたわけじゃないわよ。だって幸久があたしの弟子になったのってあたしが中一のときだから、もう七年とか八年とか前のことじゃない。ってことは幸久はそのとき小三ってことだし、そんなガキがあたしの代わりにあたしの何を肩代わりできるっていうのよ。そんなこと考えもしなかったわよ」

「そうなの……？ えと、じゃあ、おねえちゃんは どうして幸久君のことを弟子にしたの？ おねえちゃんが幸久君のことを便利な道具みたいに思ってたんじゃないかったら、どうして？」

「どうしてって、そりゃ……面白そうだからに決まってるじゃない。自分の言うことを絶対に聞く小学生なんて、なんか面白いと思った

からよ」

「晴子ちゃん晴子ちゃん、霧子ちゃんとなんのおはなししてるの？ おかあさんも仲間にいゝれゝて？」

「別に大した話なんてしてないわよ、母さん。もう晩ごはんができるから、もう少しだけいい子で待っててちょうだい」

「はゝい、おかあさん、ちゃんと待てるわよ、晴子ちゃん。こう見えてもおかあさん、いつも晴子ちゃんと霧子ちゃんが帰ってくるのを待ってるんだから、待つのは得意なんだからね」

「うん、そうね、さすがは母さんよ」

「そうでしょゝ、ふふゝん。それで霧子ちゃん、晴子ちゃん何のおはなししてたの？ 楽しいおはなし？」

「にゅ、楽しいかどうかは、ちよつと分からないかも」

「あら、そうなの？ それじゃあ、そのおはなしが楽しいかどうかわ、おかあさんが考えてあげる！ だから霧子ちゃん、そのおはなしをおかあさんに聞かせてね！」

「う、うん、えと、おねえちゃんがどうして幸久君のことを弟子にしたのかな、ってことを話してて、おねえちゃんは幸久君を弟子にしたらおもしろそうだったからっていつてるの。でもあたしは、おねえちゃんがほんとにそう思ってたのかなあって思って、よく分からないの」

「ふんふん…、なるほどねゝ。おかあさんは、晴子ちゃんに聞いたことないから、晴子ちゃんの言ってることがほんとかどうかは分からないなあ。でもねえ、晴子ちゃんもただおもしろそうってだけで幸久君を弟子にしたんじゃないと思うなあ。だって晴子ちゃん、ずっと前から弟がほしいうって言ったもの。だからね、晴子ちゃんが幸久君を弟子にしたのは、弟にしたかったからなのよお。だって『弟子』の中には『弟』が入ってるもん」

「ちよつと、やめてよ母さん、そう言うこというの。霧子が誤解するかもしれないじゃない。ほしかったのは、弟なんかじゃなくて玩具よ。ちよつと思ひ通りになる玩具がほしかっただけなんだから」

「でも晴子ちゃん、陽介さんが弟と妹どっちがいいかって聞いたとき、弟がいいって言ってたわよ？　おかあさん、覚えてるもの。それに幼稚園くらいのときにね、陽介さんにちよっとお料理教えてもらってね、そしたら晴子ちゃんったらよっぽど楽しかったのねえ、いつか弟が出来たら教えてあげたいって言ってたの。だからきつとお料理を教えてほしいって幸久くんが言ってくれたときは、すっごいうれしかったと思うの。そうよね、晴子ちゃん？」

「そんなこと言われても、あたしは覚えてないわ、そんなこと。母さんの記憶違いじゃないって保証もないし、勝手に言いふらしたりしないでよね」

「そう？　んゝゝ、おかあさんは言ったと思うんだけどなあ……。でも、晴子ちゃんが言わないでっていうなら、ないしょにしておくわね」

「そうしてちょうだい。それより、もうあたしのことはいいのよ」  
「もういいの？　晴子ちゃん？」

「別に構わないわよ。というか、そんなに言うなら母さんはどうなのよ。母さんは幸久のことどう思ってるのよ。人の分析する前に自分の思ってることを言ってみなさいよ」

「？　おかあさんはあ、幸久くんのことだいすきよ。幸久くんは霧子ちゃんのおにいちゃんだと思ってるもん。だから、幸久くんはおかあさんの子どもみたいなものなのよ」

「まあ、母さんはそうよね。そうとでも思っていないと、あのころの幸久の可愛がりっぷりはありえないでしょ。他人の家の子だっていうのに、霧子のお友だちとして以上の扱いだったもの」

「だって幸久くん、かわいかったじゃないの。だからね、おかあさん、幸久くんのこと初めて見たとき絶対うちの子にしたいって思ったのよ。あつ、昔はかわいかったっていうだけじゃなくても、今もとってもかわいと思うけどねえ」

「幸久が可愛い？　たとえばどこらへんがよ」

「幸久くんのかわいいところなんて、すっごいいっぱいあるじゃな



いのゝ。なんにでも一生けんめいなところもかわいいし、思ったら一直線なところもかわいいし。あつ、それにちよつと、幸久くんって陽介さんに似てるのよ。ただの偶然なんだけど、でも目元の感じがちよつと面影あるのよゝ」

「まさか母さん、幸久が父さんにちよつと似てるからって再婚したとか言いたいわけじゃないわよね。あたしは幸久のことを父親だと思ふなんて、絶対に嫌だからね。もしも母さんがそんなことしよふなんて考えてるなら、あたしは家を出るわ」

「幸久くんと結婚なんて考えてないわよゝ、晴子ちゃんったらおもしろいこというんだからゝ。幸久くんはとってもかわいいけど、でもおかあさんには陽介さんっていう心に決めた人がいるから、そんなこと出来ないわゝ」

「しないでいいって言ってるのよ。まあ、しないでいいならいいんだけど……」

「？ 三人とも何の話してるんですか？ だいぶ盛り上がってるみたいですけど」

「別に何でもないわよ。そんなことよりさっさと食事の仕度をしなさいよ」

「あつ、はい、もちろんです」

俺は晩飯の準備に従事していたから、もちろん三人が何の話をしているのかは分からないが、まあ、女性が楽しそうにおしゃべりをしている様というのはとてもいいものだと思うので、とりあえずは問題ないと思う。まあ、きっと俺にはそんなに関係のないことだろうし、あえて聞き出そうとする必要もないだろうけど

## しょうが焼きをもぐもぐと

「いただきます」

「どうぞみなさん、召し上がってくださいませ。お口に合えば幸いです」

晴子さんたちが女三人でいったい何の話をしているのかということ  
は、けっきょく俺にはよく分からないままだったわけなのだが、ま  
あ、しかしそれは置いておいて、食事の支度が済んだのだから晩飯  
なのである。晴子さんたちが何の話で盛り上がったのかという  
ことには少し興味があるが、でもだからといってそれをどうやって  
聞きだすかと言えば、そんな術はないのだからすっぱり諦めるのが  
妥協なところだろう。

まあ、きつとあれだ。なんか、今日学校であつた楽しかったことと  
か、そういう家族の会話の定番ネタみたいなので盛り上がったとい  
たに違いない。そうだと思ってないと、それが何なのか気になって  
仕方がないからな、ここは黙ってそうなんだ、と納得しておくことに  
しよう。

「それにしても、かりんさん、いつもつくってくれる他のもそうだ  
けど、豚のしょうが焼きとかの庶民的な料理も得意なんだね。実家  
の方ではもっと高級な食材とか使って高級じみたものとかつくって  
る感じなんだろうに、意外だよ」

「そんな、そのようなことはないのです、幸久様。私は花嫁修業と  
して、主にお料理のお勉強をさせていただいたのですから、その先  
生も高級料亭などからお呼びしたわけではなくて、家庭的なお料理  
の一般的な調理法を教えてくださいださる先生にお願いいたしました。も  
ちろん幸久様がおっしゃられたようなことを教えてくださいださる先生を  
お呼びしてお料理を習ったこともなくはありませんが、私にはそれ  
よりこういったお料理をお勉強する方がいいと思つたのです」

「えー？　むしろそれよりもさ、そういう高級料理とかのほうがや

ってみたいと思わない？ 家で普通につくれるようなものなんて、けつきよくは誰でもつくれるようなものなんだから、それよりももっと、なんかこう、すっげえのつくれるようになりたいっつか、普通の人の出来ないこと出来るようになりたくない？」

「私の料理は、ただ幸久様に召し上がっても飽きてしまわないようにいろいろな種類のお料理を勉強しましたし、幸久様が健康的に生活を送るためにお食事の面からお手伝いするにはどういったお料理をつくるのがいいのかということもお勉強しました。そうして分かったのは、けつきよく、高価な食材を使うことよりも、普通の人には出来ない特殊な技法を使うことよりも、誠意をもって料理をすることが大切なのだということなんです。大切な人のことを想ってお料理をすることが、なによりも大切なのです。そこには食材も技法も関係ありません。ただ大切な人の幸せを願ってお料理をして、にっこり笑って食べていただければ最高に幸せではありませんか。だから私は、幸久様に馴染みのあるお料理をたくさんお勉強したかったんです」

「へえ…、そうだったんだ……。かりんさんは、昔からいろいろ考えてて偉いんだなあ……」

「いえ、そのようなことはありません。私はただ、幸久様のために自分ができることは何なのかということをおもっていただけに過ぎません」

「俺は、それが考えてるってことだと思うけどね。まあ、かりんさんが違うっていうなら違うんだろうね」

「はい、私など、どうということはありません。幸久様の素敵さに比べたら、まるで取るに足らない女です」

「俺の素敵さなんてほぼないに等しいんだから、そんなのと比べても何の基準にもなりやしないよ、かりんさん。比べるんならもつと意味のあるものと比較した方がいいと思うよ、俺は」

「うふふ、幸久様はやはり謙虚でいらっしゃいますね。自分の素晴らしいさをひけらかさない慎ましやかなところも、幸久様の素敵なと

「そうです」

「慎重しやかにひけらかしてないんじゃないやなくて、悲しいけどひけらかすほどすごいところがないだよ、かりんさん。過大評価しても、俺が微妙な気分になるだけでないことなんてないよ」

「私は過大評価などしていません。これまで長い間幸久様のことを観てきて、これまで一ヶ月の間幸久様のことを見てきて、やはりそうだと思ったからそう言っているだけなのです。ありのまま、事実を捉えればそういう結論が必然として出てくるんです。ねえ、広太さんもそう思われますよね？」

「はい、もちろんでございます。幸久様は、かりん様が仰られたように、素晴らしいお方でございます。才覚に恵まれ、三木を治めるに足る器量をお持ちだと、私は考えています」

「勝手にそんなこと考えるなよ。っていうか、三木を治めるって、うちの一族はもう俺一人以外誰もいないんだから、治めるも何もないだろ。自分で自分のことを治めるなんて、ただの自己管理じゃん」  
「…、それはそうでございますが、ですが幸久様がそのために必要な様々な能力を備えているということが言いたいのです。幸久様ならば、組織の大小に関係なく、それを治め支配することが出来ましよう」

「いや、出来ねえよ、そんなこと。俺はこれまで学級委員も生徒会もやったことないんだぜ？ 組織の支配なんて出来るわけねえって」  
「やれば出来る、いえ、出来てしまうのです。幸久様は生まれながらにして、そういった才覚を秘めていらっしゃるのです」

「あゝ、もうなんでもかんでも褒めればいいと思ってんだろ、お前。雪美さん、助けてください」

「んぐんぐ…、っんく。りんちゃんは、お料理じょうずなのね、とってもおいしいわあ」

「ありがとうございます、雪美様。まだしょうが焼きも残っていますから、お口に合いましたらもっと食べてくださいね」

「うん、ありがとうございます、りんちゃん。おかあさん、あとでおかわりし

てくるわね、晴子ちゃん」

「母さん、残ってるからって別に今日中に食べきらなくてもいいのよ。さっきだって山盛りにして食べてたんだから、おかわりなんてしたら絶対に食べすぎだわ。おかわりしないで、明日の朝の楽しみに取っておいて」

「むう、そんなことって晴子ちゃんが食べちゃうつもりなんですよ。そんなずるっこダメなんだからね」

「なんであたしがそんなことしないといけないのよ。母さんじゃないんだからそんなことするわけじゃないじゃない。っていうか、あたしはもう一食分には十分な量を取ったから、おかわりとか全然いらないんだけど」

「そうなの？ それじゃあ残っちゃうし、おかあさんがおかわりしてもいいわよね？」

「食べすぎだからおかわりしちゃダメっていったでしょ？ 母さん、人の話聞きなさいよね。おかわりしたら明日の朝ご飯なしだからね」  
「も、そうやって晴子ちゃんはいつもおかあさんにいじわるするんだから！」

「はいはい、意地悪しますよ。でもそういうこと言うからには、もし母さんが食べすぎてお腹壊しても看病してあげないし、食べすぎて体重増えたって言ってもダイエット付き合ってあげないから」

「？ おかあさん、食べすぎでおなか痛くなったこないし、体重も十年くらい変わってないけど？」

「…、おかわりしたら、朝ご飯抜きだから」

「う、う、晴子ちゃんのいじわる……。幸久くん、晴子ちゃんがいじわるするの、たすけて」

「…、あれ？ 助けを求めたのは俺のはずなのに……？ いや、まあ、それはいいとして、晴子さん、別にいいじゃないですか、少しくらい食べたって。雪美さんが食べたって言ってるんですから、もう少しおかわりするくらい許してあげれば」

「は？ そういう無責任なこというんなら、これから母さんの面倒

は全部あんたが見なさいよ。母さんは子どもと同じなんだから、好き勝手放題にされたら面倒なのよ。あたしがいろいろ考えて世話してるのが気に入らないっていうなら、明日から母さんはそっちの家の子にしてちょうだい」

「えー、おかあさん、明日から幸久くんのおうちに暮らすの？」

「そうなんじゃない？ 幸久はあたしのやり方が気に入らないみたいだから。っていうか、弟子のくせに師匠に口答えとか調子に乗ってる以外のなにものでもないわよね。懲罰の対象なんじゃないの？」

「い、いや、俺は別に晴子さんのやり方に反抗したいとか、そういうあれじゃなくてですね、まあまあ、雪美さんもお腹空いてるみたいですねってことが言いたかっただけで、はい、違うんですよ、晴子さん。それに、雪美さんはやっぱりこの家の大黒柱なんですからこの家にいないといけない気がするんですよ。うん、やっぱりそうですよ、雪美さんはこの家にいないとダメですって、ね？」

「おかあさんは、明日からもうちにいるの？」

「そうですよ、この家が雪美さんの家じゃないですか。うちには、また遊びに来てくださいいね。っていうか、雪美さんも晴子さんもうちに来たことないですよ。今度遊びに来てくださいいね」

「逃げたわね、幸久。あんたは相変わらずビビりね、根本的なところで」

「ま、まあ…、なんでもかんでも真正面からぶつかることもないですよ、クレバーに生きていかないと……」

「そういうところがしよぼいって言うてるのよ、あたしは。そんなしよぼいあんたを、どうして広太がそこまで褒め千切るのか、まったくもって不思議極まりないわ」

「あつ、戻った……。じゃなくて、そうなんですよ、晴子さん。こいつ、俺のこと褒めればいいと思ってるんですよ、絶対に。俺はなんてことない普通の人間でしかないんだってことを、晴子さんからもきっちり説明してやってください」

「広太、こいつはクズよ。人間のクズ。あたしの弟子であること以

外には何のとりえもない、きつたない池の水に浮かんでるクラミドモナスみたいな男よ。尊敬する必要もなければ従う必要もないの。褒めるなんてもってのほかよ。むしろもっと見下して、罵って、踏みつけなさい」

「そ…、そうだと認めるのには、激しく葛藤があるが、その通りだぞ、広太。俺はダメだ。お前も褒めるのはやめろ。そんなことをしてもいいことは何にもない」

「幸久様がクラミドモナスだというならば、私はその中の葉緑素になりましょう。幸久様がどのようなものであったとしても、私はその生活の手助けをすることができればそれでいいのです」

「ダメだわ、幸久、あんたがクラミドモナスのような単細胞生物だという事実を打ち明けても、広太は負けなかったわ。もう諦めなさい、あるいは単細胞生物にふさわしく、光合成でもして一生を過ごしていきなさい」

「光合成は身体の構造上ムリなんで、諦めることにします。でも今少し諦めるだけで、根本的に諦めたわけじゃないからそこらへんのところ勘違いするんじゃないぞ」

「はい、そうして、何事にも前向きに取り組むことのできる場所は、幸久様の素晴らしいところの一つです」

「幸久様、ごはんのおかわりはよろしいですか？」

「あっ、お願いします。じゃなくて、自分で行くからかりんさんは座ってていいよ」

「霧子ちゃん、ほっぺにご飯粒がついてます。取ってあげますから動かないでくださいね」

「にゅ？ ついてる？」

「…、はい、取れました」

「ありがとうございます、りんちゃん」

「どういたしまして。おいしいですか？ 霧子ちゃん」

「えと、にゅん、すっごくおいしい。幸久君とおねえちゃんと同じくらい」

「そうでしたか、それはよかったです。幸久様のお料理はそのとてもお優しい心根が伝わってくる、温かな味がしますから、それと同じと言っていただけなんて光栄です」

「幸久、二見かりんさんがあんたのことを褒めてるわよ。この人にもあんたのクズっぷりを喧伝しておいていいのよね。懇切丁寧に時間をかけて伝えておくわよ」

「クズっぷりじゃなくて普通っぷりを伝えてくださいよ、晴子さん。悪意しか感じませんよ」

「失礼なこと言ってるんじゃないわよ。師匠の気づかいを悪意とか、調子乗るのもいい加減にしなさいよ」

「いや、別にそういう意味で言ってるんじゃないですよ。ただ、あんまりひどいことを広言するのはやめてくださいだけで、出来ることならばもう少し言葉を選んでほしいなあって思うだけです」

「まあ、考えとくわ、考えるだけだけど」

「もうそれでいいです」

残り少なくなってしまった自分の大皿の中のしょうが焼きを名残惜しそうに食べている雪美さんと、いつもはもう少ししゃべるというのにどうしてか黙々と食事をしている霧子を見ながら、俺も自分に取り分けられた食事をのんびりと進めていくのだった。かりんさんのつくったしょうが焼きは、晴子さんの教えてくれたものとは違って少し辛めの味付けがされていて、そういうのは初めてだったけど意外といいなあと思っていた。

料理の味付けというのは家によって違うんだということを、久しぶりに明確に感じたような気がする。



## 余暇の過ごし方

「ごちそうさまでした、かりんさん」

「はい、お粗末さまでした。今日の料理はお口に合いましたでしょうか、幸久様」

「今日も相変わらずおいしかったよ、かりんさん。やっぱり和食っぽい味付けをするのはかりんさんの方が俺よりもずっと上手いよ」

「そのようなことはありません。幸久様のなさる味付けにもいいところがたくさんあるように思います」

「そういつてくれるとうれしいよ、かりんさん」

とりあえず晩飯の時間は特に問題なく過ぎ去り、今は食べ終わったばかりなので食休みというか、ちよつとした休憩時間みたいな感じになっていた。もちろんこの後には晩飯の片付けとか晴子さんへの説明の第二回戦とか、いろいろやらなくちゃいけないことはあるのだが、しかしそれだからといって食後すぐに活動したいかと言えば断じて否である。

それだからこそ少し休憩なのである。もちろん、それは俺が休憩したいというのもあるのだが、それ以上に晴子さんが休憩したいというのがあるのだ。

これは今まで何度となく言ってきたことだが、晴子さんは基本的に面倒くさがりなので、面倒なことは可能な限りしたくない人なのである。いや、もちろん面倒くさがりではあるけれども有能な晴子さんは、いくら面倒でもやらなくちゃいけないこととかはばっちりこなしているのだが。

しかしそれほど優先度の高くない面倒なことは、極力しないようにするのが晴子さんなのであって、そういうことをするように強要したりするととても機嫌が悪くなったりするのである。これから、おそらく晴子さんの機嫌を悪くさせるに違いない話をする俺としては、話を始める以前の段階ですでに晴子さんの機嫌が悪いというのは、

可能ならば避けたいところなのである。

「幸久、あんた夕飯つくらなかったんだから、せめて食器洗いと片付けくらいはしなさいよ。それが、師匠との約束を反故にしたあんたに出来る唯一の罪滅ぼしよ」

「もちろんです、分かっていますよ」

「さっきの話の続きは、またあとで聞いてあげるから、今は黙ってやることやってなさい。あつ、あと風呂も洗ってお湯張るときなさい」

「了解です、やっときます」

そもそも、晴子さんに何かをさせようというスタンス自体が弟子としてはよろしくない思考回路なのであって、むしろ晴子さんのために全力でいろいろやらせてもらって、その後で晴子さんの気が向いたら俺のしてほしいと思ってることをしてくれるかも、くらいの塩梅でちょうどいいのだ。だからそういう用事みたいなことは、俺の口からではなくて晴子さんの口からするかしないか言ってもらうのがベストなのである。

もちろん、いくら俺と晴子さんが師弟で以心伝心だと言ってもすべての思いを共有することは出来ないのだから、俺から言いださなくてはいけないこともあるかもしれない。でも晴子さんがすでに了解していることについてはくどくどと俺が繰り返すべきではない。もしも晴子さんが分かってくれていないように見えても、それは分かっているけど面倒くさいと思っているだけで、分かっているわけではないので注意が必要だ。

「幸久様、食器は私がやっておきますので、お風呂の方をお願いいたします」

「おお、任せろ、風呂掃除は俺の得意分野だ」

「幸久様、お風呂は私がやりますので、ゆっくり休んでらしてください」

「かりんさんは、料理つくってくれたんだから休憩だよ。それに着物の裾が濡れちゃうかもしれないだし、風呂掃除なんて俺がやっ

とくよ」

「で、ですが、幸久様も広太さんも動いてらっしゃるのに、私だけ何もしないというわけには……」

「…、霧子、かりんさんにおもしろいドラマのことでも教えてあげてくれ。俺は女子の見るようなドラマをほとんど見ないから、かりんさんにいい暇つぶしを教えてあげることができないんだ」

「にゅ？ うん、いいけど。えと、りんちゃんは、どういのが好きなの？」

「かりんさんは、そもそもテレビ初心者だから、一番簡単などころからいつてあげてくれ」

「？ りんちゃん、あんまりテレビ観ないの？」

「て、テレビは、与えられていなかったので、観たことはほとんどありません。ビデオは、三木の家から送られてくるものを観るために与えられていました」

「ということだ。んじゃ、霧子、頼んだぞ。全力でかりんさんをテレビっ子にしてあげてくれ」

「にゅ、りんちゃん、テレビ観ないんだあ……。テレビ観てないなら、どうやって暇な時間を過ごしてるの？」

「ええと、お部屋のお掃除をしたり、お洗濯ものを畳んだり、アイロンをかけたり、たまに床の拭き掃除をしたり……」

「りんちゃん、それは家事っていうんだよ。家事をしている間は暇な時間じゃないと思うの」

「そうなのですか？ それでは、ええと…、…、暇な時間は、ありません」

「にゅ…、そうなんだ……。りんちゃんは一日中働き通しの辛い環境で生きてるんだね……。幸久君、りんちゃんがかわいそうだよお……」

「いや、別にそんなことないと思うんだけどなあ……。家事は広太と二人でやってるはずだし、一日中動き詰めの余暇ゼロになるようなことはないと思うんだけど…、それとももしかして広太が家事を

しないでかりんさんに全部押しつけてるってことは…、さすがにないと思うし……」

そもそも、広太が一人で家事をやっていたときでも、弥生さんのところに遊びに行ったり（家事の手伝い）歌子さんのところに遊びに行ったり（内職の手伝い）都さんのところに遊びに行ったり（原稿作業の手伝い）してけっこう余暇の時間はあったみたいだし、それを二人で分割してやってるんだからより一層の余暇が発生してしかるべきなのだ。

「かりんさん、別に暇な時間があるっていうのはサボってるってわけじゃないんだから、俺は怒ったりしないよ？　っていうか、もっと積極的に暇な時間をつくって、いろいろ遊びに行ったりしてくれた方が、俺としてはうれしいんだけど」

かりんさんは、もっと社会勉強をした方がいいんじゃないかなあ、と俺は思っていて、…、いや、社会勉強なんて言うって偉そうかもしれないか…、もっと、年相応に生きるってことを楽しんでほしいんだ。うーん…、視野を狭く持たないでほしいというか、自分なりのいろいろな楽しみを持ってほしいというか…、つまり、家事Ⅱ仕事Ⅱ趣味みたいな感じも悪いとは言わないけど、でもそれ以外にもなにか、楽しみに出来ることがあったらうれしくないかな、ってことだ。

ほら、俺だって、学校に毎日行っているという仕事があるけど、それ以外に料理も好きだし、霧子も好きだし、…、それ以外にはあんまりないけど、でも仕事以外にも好きなことがある。だからかりんさんにも、そうしていろいろ持っていてほしいと思うんだ。

「っていうか、かりんさん、さっき微妙に言い淀んだでしょ。何かあるんだよね、暇な時間にやっていること。それが何か教えてよ」

「…、空いてしまった時間には、弥生さんや歌子さんのお宅にお邪魔して、おしゃべりをさせてもらっています……」

「そっかあ、それでいいんだよ、かりんさん。弥生さんとか歌子さんとか、せっかくご近所さんなんだからいろいろおしゃべりしたり

さ、もっと仲良くなったらちょっとそこまでお出かけとかさ、そういうのでいいんだよ。他には？ 他にはなにかない？」

「ど、読書を、少々……」

「読書！ いいね、読書。俺はあんまり読まないけど、でも読書はいいものだよ。小説とか読んでの？」

「は、はい…、弥生さんにお借りして、何冊か……」

「それじゃあ、今度俺のも貸してあげるね、だいたいマンガだけど」

「あ、ありがとうございます」

「俺は面白いと思ったのしか買わないから、きつと面白いよ。まあ、かりんさんの趣味に合わないかもしれないから、一概にそうとは言えないけど」

「いえ、きつと幸久様のお好きなものですから、私も楽しめると思えます。私は、幸久様のお好きなものでしたらたいいのものは好きですので」

「そうだったんだ、それじゃあ俺の好きなものを勧めやすくいいね。調味料とかも、勧めていい？」

「ちょ、調味料ですか？」

「そうそう、俺が集めてるやつ。いやあ、いろいろあるんだけどね、ちゃんと初心者向けのやつから行くから、勧めていいかな？」

「そういえば、キッチンに『開けるな』と張り紙のしてある引き出しがあります、もしかしてその中に入っているのですか？ けっこう大きな引き出しのように思いますけど……」

「ああ、そうそう。そっか、かりんさん、あの引き出し開けてないのか。いろいろ調味料入ってるからさ、使いたいのがあったらほとんどに使っていいよ」

「えっ、でも、幸久様が集めていらっしやるものならば、やはり使わない方がいいのではないのでしょうか……？」

「いいよいいよ、使われてこそその調味料だし。使われなくて死蔵されるなんて、むしろその方が調味料がかわいそうだ。あつ、でも、かりんさんはそんなことしないとと思うけど、無駄に使っちゃダメだ

よ。それはそれでもつたいないし、かわいそうだから」

「それでしたら、はい、ぜひ使わせていただきます」

「まあ、どこで使えばいいのか分からないのとかもけっこう多いけど、行けそうなのあったら使っちゃってね。あと、かりんさんも新しい調味料見つけてきたら買ってきちゃっていいからね。調味料収集はハマるよ、きっと。だって、見たことない調味料を変な路地裏の店とかで見つけたときのテンションの上がり方ったらないもん」

「それが、幸久様のお好きなことだとおっしゃるならば…、本当に面白いのかもしれないね。私もいろいろ探してみます」

「あっ、でもかりんさん、あんまり危なそうなどころには行っちゃダメだよ？ 危なそうなどころには危なそうなやつがいて、危なそうなやつがいるところには危なそうなことがあるからね。危なそうに感じたら、すぐに俺か広太か、あとは警察に連絡してよね。すぐに飛んでいくからさ、学校なんて早退してもいいんだから」

「分かりました、危ないところにはいかないように特に気をつけます。幸久様に学校を早退させてしまうわけにはいきませんから」

「っていうか、かりんさんケイタイ持ってないか。よし、今度ケイタイ買いに行こう。そうしないと、いざってときに連絡取れなくて困るからね」

「そんな、携帯電話なんて、私には使いこなせません。あのようになさくてたくさんボタンのついている機械は私には難しいです」

「いや、かりんさん、電話は普通にかけられるでしょ？ ケイタイなんて、そののちよとした応用でしかないよ。別にメールとかネットとか出来なくても構わないんだし、ただ電話として通話することができればいいだけなんだから」

「りんちゃん、ケイタイ買うの？ にゅ、そしたら、あたしにもメールアドレス教えてね。メールの仕方、あたしが教えてあげるからね」  
「き、霧子ちゃんまで……。私は機械には疎いんですから、難しい機械はムリなんです」

「ダメだよ、かりんさん。出来ないことを出来ないって言っちゃっ

たら、そこでおしまいだ。出来ないことには、むしろ積極的に挑戦していかないと」

「それはそうですが…、でも、私が挑戦をするために無駄な金を使わせてしまうのは、忍びないです」

「そんなこと気にしないでもいいんだって、かりんさん。ケータイだって最新機種とか買わなかったそんなにお金かからないだし、ちよっと電話したりメールするくらいなら利用料もそんなかからないし、ちよっとかりんさんにお小遣い渡してるつもりになればなんてことないんだよ。っていうか、そもそもうちはかりんさんと広太の節約のおかげでおじさんからもらってる金はそこそ以上貯金してあるんだし、少しくらい気にすることないんだって」

「それは、いちおう存じ上げてはいますが…」

「まあ、今すぐに決めることじゃないし、今どうこう言うつもりはないよ。でも、遅かれ早かれケータイは持つてもらいたいな。別に監視するつもりはないんだけど、でもやっぱり連絡取れないっていうのは怖いからさ」

「…、はい、考えておきます」

「うん、そうしてくれるかな？」

「ちよっと幸久、いつまでそこでくっちゃべってるのよ！ あたしはお風呂に入りたいんだから、さっさとお風呂の支度しなさいよね！」

「あつ、はい！ すいません、今すぐに！ じゃあ、かりんさん、ちゃんと休憩しててよね！」

話し始めると長いというか、やるべきことを忘れて話の方に没頭してしまうところがある俺だが、今回もうっかり晴子さんに一言いられるまでおしゃべりしてしまった。やるべきことの優先順位を考えろっていうのは、俺としてはよくよく分かっているつもりのことなのだが、しかしどうして、それを実行するのはやはり難しいということなんだろうか。

ううむ…、これでは志穂に堂々と注意することができないではない

か。自分で出来てないやつにされる注意ほど、聞こうという気を起  
こさせないものはないからな。



## わき道にそれながらも

「で、だな、晴子さんは今風呂に入っているわけなんだが……」

全速力で晴子さんに申しつけられた風呂掃除の任をやり遂げすぐさま給湯ボタンを押した俺は、当然のごとく一番風呂を晴子さんに譲って、それからリビングの椅子に座って頭を悩ませていた。

「俺はどうしたらいい？」

そう、別に忘れていたわけではないし目を反らしていたつもりもないのだが、俺には一つここでやらなくてはならないことがある。なんというかそれは、つまるところ…、晴子さんとの対話だ。

「俺としては、さっきのでもうあらかた説明したつもりだし、ぶっちゃけ話をしないといけないことはもう残ってないと思ってる。でも晴子さんは『また後で続きを聴く』とかなんとか言ってる。しゃった。それってことはつまりまだ晴子さんとしては聞けなきやいけないことが残ってるってことに違いあるまい。俺がないと思ってるも晴子さんがあると思ってるんならあるんだ。なにがそれなのかはよく分からないけど、でもあるっていったらあるんだ。さあ、俺はいったい晴子さんに何を聞かれるのか、みんなでいっしょに考えてくれ。というか、俺はなにを晴子さんに言ったらいいのか教えてくれ」

「お任せください、幸久様。私も精いっぱい知恵を絞らせていただきます」

「にゅ、あたしもがんばるよ、幸久君。よくわかんないけど」

「はい、私もです。私についてのことで、きっと私が一番よく分かると思いますから」

議長席たるお誕生席に腰を下ろした俺と共に机を囲んでいるのは広太、霧子、そしてかりんさんの三人。ちなみに雪美さんは食事が終わってからというもののソファーに横になってすやすやと安らかな寝息を立てている。きっとおいしいものをいっぱい食べて眠くなって

しまったのだろう。

食べたくなったら食べて眠くなったから寝て、ほんとに子どもみたいな人だが、まあ、それが雪美さんのあるがままなんだから俺が言えることはなに一つとしてないのだが。というか、むしろそういうところがかわいいと思うわけで、ありだと思います。

「っていうかさ、ほんとにこれから聞かれる細かいことってなんなんだろうな。前提条件は納得してくれたって言ってたけど、でもぶっちゃければ俺だってその前提条件くらいしか分かってないんだしさ、何聞かれたってまともに答えられる気がしないんだが」

「先ほど幸久様は過去と未来の話をなさいました。どういう経緯でかりん様が幸久様のお宅にお住まいになられたのかという過去と、これから幸久様がどういった選択をなさいどういった展開へと進まれるかという未来です。それならばこそ、次に晴子様がお聞きになりたいと思われるのは、今現在のことなのではないでしょうか。それが具体的に何を指すのかということは私にはわかりかねますが、ですがなんらか現在のことが聞かれるのではないかと考えます」

「なるほどな…、現在のことが。っていうか、現在のことがってなんだろうな。あんまりピンとこないんだけど」

「にゆう…、幸久君たちがりんちゃんはどうやって暮らしてるかってことじゃないのかなあ。おねえちゃんってけっこう心配性なところあるから、変なことになってないか気になるんじゃない？」

「？ 変なことって何だ、霧子」

「へ、変なことは…、変なことだよ…」

「…、あつ、エッチなこと考えてるだろ！ 霧子！」

「にゆう！？ そ、そんなこと考えたこともないよ!？」

「えっ？ ああ、違うのか、悪い。まあ、そうか…、そうだよな、霧子がそんなこと考えるわけないもんな。そう、そうだな、俺の思い違いか」

「ゆ、幸久君、えっちなのは、ダメだよ」

「分かってる分かってる。それはよくよく分かってる。っていうか、

じゃあ変なことって何だよ。えっちなことじゃない変なことって、俺にはいまいち思いつかないんだけど」

「にゅう…、幸久君、えっちだもん……」

「いやいや、落ち着け霧子。それだけで俺がえっちだと断ずるには根拠があまりにも少なすぎるとは思わ」

「幸久様、晴子様のお風呂がいかに長いとはいえ、いつもおおむね三十分ほどで出ていらっしゃることをお忘れにならないでくださいませ。時間がないとは申しませんが、しかし時間は限られています」  
「お、おお、すまん……。そうだよな、ここは俺がえっちかどうかなんてどうでもいいんだよな。今話し合うべきなのはそこじゃない。悪いな霧子、今はそう言うことで納得してくれ」

「にゅ、あたしも、ごめんなさい」

「なんだよ、別に謝るようなことじゃねえって。それにいつも言ってるだろ。男なんてえっちなのばかりだから、不用意に近づいちゃいけねえって、な？」

「…、幸久君、男の子も、えっちな人ばかりじゃないみたいだよ？」

「？ 霧子、ちょっと待て、何に気づいた」

「にゅ、だから、幸久君は、昔から自分も含めて男の子はえっちなのばかりだから気を付けろって言うけど、そんなことないかもって」

「…、それはつまり、ようするに、だ……」

「男の子と仲良くするときは、幸久君が言ってたみたいに気をつけないといけないこともあるかもだけど、でもこわいわけじゃないんだなあって」

「そ、そうなんだよ、男は怖いばかりじゃないんだよ。俺みたいに優しいのもいるだろ？」

「にゅん、高校では昔みたいに意地悪する人もいないし、みんなけっこう優しいかも。」

「おお、そうか…、霧子ようやく分かってくれたのか。いや、分か

ってはいたのか？　ようやっと納得してくれたんだな」

「にゅん、やっぱり、なんでもやってみないとわからないんだね」

「ん？　霧子ちゃん、あなた、いったいなにをやってみたのかしら？」

「お、お友だち、だよ」

「…、男の？」

「にゅ、にゅん」

「俺以外の？」

「にゅん」

「…、……、…、あ？　ああー！！　あれだろ！！　あの、なんていったか……、あいつ！！　俺はまだ会ってないけど、その…、あれ！！　前に霧子にメールしてた、あれ！！」

「…、せ」

「はい、瀬戸君！！　思い出した！！　瀬戸君！！　一年生で、なんか霧子に付きまどってるとかい、あれ！！　あれが何かしたのか！？　霧子に何かしたのか！！」

「な、なにも……？」

「その三点リーダは、なに！！」

「なんでも、ないもん……。っていうか、瀬戸君は、別にあたしに付きまどってるわけじゃないもん」

「…、それは失言だった、悪い。でもその瀬戸君が霧子とお友だち？　なのは分かった、つもりだ。…、分かてる、分かてるよ、俺は別に霧子の交友関係を全部洗いざらい把握してるわけじゃないんだからな。っていうか、前は瀬戸君のことお友だちではないって言ってたと思うんだけど、どういう心変わり？」

「えと、もうお友だちかなって」

「うん、分かった、そうか、そういう風に思ったんなら仕方ない。それでは、霧子ちゃんには『お友だち』の瀬戸君を、『おにいちやん』の俺に紹介してもらおうかな。いつでもいいよ、瀬戸君が死ぬ覚悟を持って俺の前に顔を出せる瞬間が来たら、いつでもかかって

おいでなさい。返り討ちにしてやる」

「にゅう…、あつ、でも、そういえば、瀬戸君、幸久君に会いたいわって言うってたかも？」

「あつ？ 俺に会いたい？ どうして？ 霧子の友だちなんだろう？」

「分かんないけど…、でもなんかそんなこと言ってたかも？」

「…、まあ、いいや。俺に会いたいわって言うんなら会わせてやることにしようぜ。奇遇にも、俺も瀬戸君とは一度じっくりとお話する必要があるだろうからね」

「幸久君…、暴力は絶対ダメだよ……？」

「霧子、暴力なんて振るわないさ。霧子のお友だちに対して、どうして暴力なんて振るうことができるだろうね。そう、暴力なんていらないんだよ、『お約束』には。ただ、霧子に近づかないでいてもらうだけなんだから、ちょっとお話しするだけで十分だよね」

「ゆ、幸久君、お話しするだけって言うっても怖いんだもん……。きつと瀬戸君も怖がっちゃうよ」

「なんだ、ちょっとくらいおしゃべりするだけでビビるなんて、瀬戸君はそんなになよっちいのか？ そんなやつには霧子とお友だちする資格はないぞ」

「どんな人でも、あのとときの幸久君は怖いと思うけど……。でも、瀬戸君はどっちかというとかわいい系だと思うよ」

「かわいい系の男子なんていないんだよ、霧子。いるとしてもかわいいと思ひ込んでる系男子だけだ」

「そんなことないよ、幸久君。瀬戸君はあたしよりもずっとちっちゃいし、女の子みたいにかわいいんだから」

「女の子みたいにかわいい？ はっ、何言ってるんだか、さすがの俺でもそれは信じられないな。いくら霧子の言ってることだとしても、それは信じてやれない」

「にゅ、ほんとなのに……」

「霧子よ、男の子には男の子の身体バランスというものがあってだね、それはどういじくったとしても女の子のそれにはなりえないん

だよ。だから、女の子のようにかわいい男の子なんて幻想生物なんだ。ありえないんだ」

「そんなことないよ、幸久君だって瀬戸君のこと見たらそう思うはずだもん。きつとびっくりするもん」

「どうだろうねえ……。まあ、実際に見てみれば分かることでしかないけどな。いいさ、霧子がそうまで言うんなら、せいぜい見るのを楽しみにしとくことにするさ」

「…、幸久様、晴子様が出ていらっしゃるまで、そう時間があるわけではございません。何の話し合いも出来ていないと言って差し支えない状況で、こうして時を徒に浪費していくのはいかなものかと思われました、恐れながら口を挟ませていただきました」

「ほんとだよな、うん、脱線してる場合じゃないんだって。これってけっこう大事な話し合いだからさ、しっかりしとかなないと俺の身が若干ピンチなわけよ。でも俺、基本的に脱線しがちだから、どっか行っちゃいそうだったら今みたいに突っ込んでね、かりんさん」

「は、はい！　が、がんばります！」

「んゝ…、ゆきひさくん…、おかあさんのこと、よんだゝ…:…?」

「だいじょぶですよ、雪美さん。呼んでないですから、ゆっくり寝てて平気ですからね」

「はゝい…、そうするゝ…:…」

「よし、じゃあ話を戻そう。晴子さんが俺に聞いてきそうな、かりんさんに関する現在のことってなんだと思う」

「私が思うに、かりん様がどのように暮らしているか、つまりどのようなタイムスケジュールで日々を過ごしているかということ聞かれるのではないでしょうか。どの程度の家事を受け持っているのかということは、我が家におけるかりん様の存在の浸透度を知る上で欠かすことのできない一つのファクターのように思えます」

「なるほどな…、可能性はある」

「幸久様、そういうことでしたら、私がどのような待遇を受けているかということも知るべき重要な情報なのではないでしょうか？」

それを知るのは、つまり直接的に幸久様が私のことをどう思ってくださるかということにつながることで、幸久様のお気持ちを量る上で不可欠なものです」

「そっか、それも聞かれるかも……。うーん、ちょっと考えただけでもけっこうあるな、聞かれそうなことって。やっぱこういうことはやっておいて正解だな、少しは対策しとかないと話し合いにすらならないからな」

「備えあれば憂いなしと言いますし、何事も事前の仕度があつてこそでございます」

「うん、よし、よさそうなのがじゃんじゃん出てきてるし、この分なら晴子さんになに聞かれてもへっちゃらだな。もう、どんな質問でも余裕で応えられるに決まってるじゃん」

「幸久様、今出たものはあくまでも可能性というだけであつて、晴子様は何を聞いていらっしゃるかとは分からないままです。まだ余裕を見せられるには少し早いのではないでしょうか」

「そんなことないって、平気平気。きっと晴子さんもよく分からないことは聞いてこないと思うし、心配しないでもいいんだよ。広太は心配性だな、まったく」

「幸久様がそうおっしゃられるならば、私には差し挟む言葉の持ち合わせはございません。なんとかその補助を行なうことができるよう、全力であたらせていただきます」

「おう、存分にそうしてくれ。まあ、特にやることはないだろうけどな」

『霧子、お風呂、次入っちゃって』

「にゅ、はーい、入るよ」

「あれ、もう出てきたんだ。晴子さん、今日は早いなこのあとやるテレビでもあったっけ？」

「幸久様とお話をなさるためにお出になられたのではないでしようか」

「あー…、かもな」

とりあえず、俺としては準備完了で風呂から出た晴子さんを迎える  
ことができたわけなのだが、しかし広太の言いたいことだって分か  
らないでもない。大丈夫、分かってるって。

俺だって絶対大丈夫なんてこと思ってないって、ほぼ大丈夫だと思  
ってるんだよ。



## 風呂からあがった晴子さん

どうしてかいつもよりも早くに風呂から出てきた晴子さんだったのだが、しかし『俺と話の続きをするために早めに出てきたに違いない』という俺たちのしていた予想は微妙に外れていたようで、晴子さんは風呂から出てくるや否やソファに座ってテレビをつけ、いつもどおりに夜の時間を過ごし始めてしまっていた。そして俺はいえ、そんな風テレビを見始めてしまった晴子さんに声をかけることもできず、ただどうすることも出来ない体でリビングの椅子に静かに腰をおろして時が過ぎゆくを感じ入っていた。

ちなみにさっきまでソファで寝ていた雪美さんはどうしたかといえば、ちよつとした食休みのつもりで横になっていたのが本気睡眠に移行しつづあったようで、晴子さんがリビングに戻ってきた時点でベッドルームに強制連行させられていた。というか、俺が晴子さんに言われて強制連行したわけなのだが。まあ、一時間もすれば起きてくるだろう。あるいは、このまま朝まで目を覚まさないかもしれない。

「どっちにしても、自由だよな……」

だがしかし、自由な雪美さんをうらやんでばかりもいられない俺は、なんとか展開のきっかけをつくるためにテレビがCMに入るのを待っていた。今晴子さんが見ているバラエティはどちらかと言えばCMが少ない番組で、それに加えて晴子さんがCMが始まるたびに水を飲みに行ったりトイレに行ってしまったりと何かしらを始めてしまうので、なかなかその機会を得られずにいたのだが、しかしさすがにもいうことがないというか、これ以上肩すかしを食わせることもなさそうな気配を感じる。きっともうすぐ訪れるCMが展開の契機になるだろうことは、もはや明らかだった。

しかし、実際のところ、今観ている番組は晴子さんの的にどうでもいい番組であって、いつもだったら別に観ないようなものなのだ。ど

うして晴子さんは今日に限ってそんな番組を観ているのだろうか。まあ、晴子さんにとって俺の優先順位はそんなに高くないわけで、単に気まぐれで観ているだけなのかもしれないのだが。それとも、晴子さんは俺と話をするのを避けているのだろうか。確かにそれは晴子さんにとっては単に面倒なことだろうし、晴子さんの思考パターン的にやりたくないと思って然るべきことなのかもしれないが。というか、こちらは話をするためにここに来ているわけで、いくら晴子さんがめんどくさいと思ったとしてもそれをしないままおめめと帰ってしまうわけにはいかないのである。いや、確かにさっきので十分話をする事ができたのでは、と問われればイエスと応答するにいささかの躊躇もないのだが、しかし晴子さんが『あとで続きを』と言っていたからには話はするのであって、これ以上はしないまま終わりという選択肢はないのである。

「はあ…、つまんな…」

「…、晴子さん、あの、聞きたいんですけど、いいですか？」

ただの暇つぶしで観ているにしてもあんまりな晴子さんの心の底からの嘆息は、ようやく始まったCMに被るように発せられた。晴子さんはそのままほぼ無意識にリモコンに手を伸ばしチャンネルを変えようとするが、しかしそれをさせるわけにはいかない俺は急いでその手が届かないところまでリモコンを移動させる。そしてそれから、俺は晴子さんに声をかけていくことにする。

「なによ、幸久、リモコン返しなさい。あたしは別の番組を観るのよ」

大きなクジラのぬいぐるみ枕を抱きしめながら、晴子さんはくると身体をこちらに向け不満そうな顔でそう言った。いや、どちらかといえば不満というよりも、むしろ不機嫌顔かもしれない。

「晴子さん、いつもは今の時間はなにも観るものないですよ？それに他の局に回しても晴子さんがいつも観てるのはどこでもやってません。つまらないテレビ番組を惰性で観ることほくらだないことはないっていつも言ってますし、別にテレビ、消しちゃっても

いいですよね？」

しかし、ここでもいかに不機嫌そうな顔をされたからといって、俺は一步引いてしまうわけにはいかない。そう、仮に一步引いたとしても、ここにおいては何も解決しないのだ。それなら少し怖くても前に出よう。そうした方がきつと多少はマシに違いないから。

「テレビ消して、どうしようっていうのよ。そんなことしたらあたしが退屈するじゃない」

「退屈は、するかもしれないですね。でも晴子さん、さっき、後で話の続きをするって言っていましたよね。俺としては、その話の続きをするのがいいんじゃないかなあって思うんですけど」

「話は、しなくていいわよ、しなくていいことにしたわ。面倒だし、聞く必要あることなんて別にないでしょ」

「あれ、そうなんですか？ 俺はてっきり、晴子さんの方に聞きたいことがあるからああやって言ったんだとばかり思っていました。」

晴子さんは、別にもう聞きたいことはないってことですか？」

「聞きたいことは…、なくはないけど」

「なくはないなら聞いてくださいよ。晴子さんらしくないですよ、齒切れ悪くって」

「…、うるさいわね、あたしらしくないなんて、あんたが言えることじゃないでしょ。あんたはあたしの何を知ってるのよ。『あたしらしさ』なんて、あんたに規定されるほど安くないわよ」

「…、そうですね。晴子さんらしくないかどうかは分かりません」  
「話は、しないでいいのよ。あたしがそれでいいって言ってるんだから、それでいいの。あんたはあたしの言うことに従ってればそれでいいのよ、分かってるでしょ、いつものようにしなさいよ」

「でも晴子さん、何か聞きたいこととか言いたいこととかあるんですよね」

「…、そりゃ、なくはないわよ」

「それなら聞いてください、言ってください。俺は今日、そのためにここに来たんです。晴子さんと話をするためにここに来たんです。」

お願いですから話をさせてください」

「どうしても、話をしたいっていうの」

「もちろんです、晴子さんとお話したいです」

「…、じゃあ、あんたがそこまでどうしてもって言うなら、仕方ないわね。特別に、少しだけ話をしてあげることにするわよ。伏して感謝しなさいよね」

「もちろんです、晴子さん。付き合ってくれて本当にありがとうございます  
ざいます」

「で、話をするって、何の話をすればいいのよ」

「なんの話って、それはもちろんアレですよ、かりんさんのことです。かりんさんのことで何か分からないこととか、知りたいことがあったら遠慮なく聞いてください。わからないところはかりんさんに聞きながらですけど、分かりやすく応える所存です」

「…、幸久、あんた、さっきからかりんさんってうるさいのよ。なんなのよ、ちょっと美人の女が家に来たくらいで浮かれちゃって、みっともないいったらないわ。っていうかその女は何歳なのか教えなさいよ。あたしにしてみれば、別に喧嘩の相手が年上とか年下とか全然関係ないけど、でもやっぱりそういう基本的なところは抑えとかなないとダメでしょ。あんたもそう思うでしょ、幸久」

「まさしくその通りだと考えています、晴子さん。まさに、仰る通りです。かりんさんは、えっと、二十歳です」

「二十歳？ あたしの一個下じゃない。あたし、今年で21だし」

「ああ、そういえばそうですね…。そっか、かりんさんって晴子さんよりも年下だったんだ…」

「ちょっと、二見かりんさん、そういうことだからあたしのことはちゃんとさん付けで呼びなさいよね。あたし、基本的に一個下には厳しいわよ」

「あれ、そうだったんですか？」

「当然でしょ、一個下には厳しくするのがルールなのよ。世の摂理とも言うわ」

「はゝ、なるほど…、勉強になります」

「そうよ、晴子さんのことをどんな尊敬しなさい。それじゃあ、仕方ないから話を始めましょうか。二見かりんさんは、あんたのところにいるっていうけど、それってあんたと同じアパートに住んでるってことよね。あたし、あのアパートってどんな人が住んでるのかよく知らないんだけど、でもけっこう人住んでるっぽい感じするし、部屋の空きとかあるの？」

「部屋の空きは、たしか一つありましたね。二階の奥の部屋が開かずの間的に空室になってます。っていうか、その部屋は十年くらい前からずっと空室のままらしいですし、大家のおっちゃんも埋める気ないみたいです。でも、理由ありっぽいんですけど、それを聞いたことはないですね」

「ふうん、まあ、別にどうでもいいわね。で、その人はどこに住んでるのよ。近くにある他のアパートか何か？」

「いえ、うちです」

「うちって、あんたの住んでる部屋ってこと」

「はい、俺と広太の住んでる部屋です。あのですね、うちのアパートは各部屋2LDKでして、けっこう広いんですよ。それで、今まで客間として空けてたところにかりんさんに入ってもらったんです」

「なんで、別に確実に結婚するってわけでもないのに同棲してるのよ。ちょっと、話が頭に入って来ないんだけど」

「いや、まあ、事実だけ見たら同棲なのかもしれないですけど、でもそういうのじゃないです」

「事実以外は問題にならないわ。あんたは、自分のしていることがどういう風に観られるようなことなのか、ちゃんと認識して生きてるの？」

「…、たぶん、出来ているとは思うんですけど…、自信ないです」

「そういうときは出来てないのよ。あんたはクズだから、出来てる気になってるだけに決まってるじゃない」

「まあ、無難にそうですね」

「自分の分っていうのをちゃんと弁えときなさいよ。あんたはただでさえダメなんだから、せめて自分がダメだってことくらいは分かっている」と話にならないわ」

「はい、気をつけます」

「まあ、そういうことになっちゃってるっていうなら、仕方ないんじゃない。っていうか、ただ追い出せばいいっていう話でもないし、どうしようもないわね」

「そうなんですよね…、かりんさんをうちから出したって、何の解決にもなりませんから…。そんなのただかりんさんを困らせるだけっていうか、嫌がらせ以外の何物でもないですし」

「まあ、どうしたらいいかっていうのはあんたが自分で考えるべきよね。自分の問題なんだから、自分で立ち向かうのが筋ってものよ」

「…、がんばります」

「勝手にしなさい。…、あゝ、もうめんどくさくなってきたから最後の質問にするわ。あんたは、あたしとその二見かりんさんだったらどっちの方が好きなの」

「どっちが好きか…、っていうとちょっと分からないんですけど…」

「じゃあ、どっちの方が大事かっていうのもいいわよ。二人から同時に何か頼まれたとして、優先するのはどっちかってこと」

「優先順位が高いのは、どんなときでも晴子さんです。それは間違いないありません。…、あつ、でも、命の危機とか、そういうのだったら話は別ですからね？ やっぱりどうしても、自分の中のルールを曲げてでも優先しないといけないことってあるじゃないですか」

「まあ、あんたはそういう感じよね、だいたいのところ。まあ…、そう、それならいいのよ、それなら。何の問題もないわ。あんた、ちゃんと分かっているじゃない。それでこそあたしの弟子よ、学ぶべきことはちゃんと吸収してたのね、あんたも」

「？ ありがとうございます？」

「…、幸久、ちょっとあたしのこと『晴子ねえちゃん』って呼んで

みなさい」

「えっ？ おねえちゃんですか？ それは霧子の」

「いいから、呼んでみなさいよ。いつもなら無礼にあたるけど、でも今だけ許してあげるわ」

「いや、でも、あの、恥ずかしいです、晴子さん」

「なに、あたしの言うこと」

「あゝ！ 呼びます！ 呼びますから！！ …、は、晴子…、ねえちゃん…？」

「…、幸久、あんた、別にかわいくないわ」

「え？ あ…、えっ？」

「かわいくないわ、ぜんぜんかわいくない。霧子の方がずっとずっとかわいいわ」

「まあ…、それはまあ」

「でも、かわいくないけど、これからもあたしがかわいがってあげるわ。あんたはかわいくないけど、でもかわいい弟子だからね、しかたないわ。うん、仕方ないわよね」

「そう、なんですか？」

「なによ、不服なの？」

「いや、あの、超うれしいです」

「そうね、弟子は素直が一番よ、幸久。…、もう一回呼びなさい」

「晴子ねえちゃん？」

「…、悪くない、決して悪くはないわ…。あつ、もう話は終わるだから、さっさと家に帰りなさい」

「えっ？ あつ、はい、分かりました。それじゃあ、あの、またです、晴子さん」

「今度はちゃんとあんたがつくりなさいよ、料理」

「はい、そうします」

「ほら、さっさと消えなさい。霧子にはあたしから一言伝えとくから」

そうして、俺はよく分からないままに晴子さんのお話を終え、家

路に就くことになったのだった。まあ、いちおう晴子さんに納得してもらうことは出来たみたいだし、十分にいいといえればいいのかもしれないけれども。まあ、とりあえず、今日のところは話をするのはこれくらいで十分だろう。

しかし、どうして急に晴子さんは俺にあんな呼び方をさせたのだろうか。あんまり急な話だったから何が何やらわからなかったぞ。



## おうちに帰ってきて

「うお、カギ開いてるし!? …、ああ、弥生さん、中にいるのか…、忘れてた……」

天方さん家にかりんさんを紹介するというミッションをなんとかクリアした俺は、少なくとも晴子さんにはなんとなく分かってもらえたんじゃないかという満足感を覚えながら家路についていた。しかし、俺の説明を聞いた晴子さんが諸々に対して納得してくれたかどうか分からないが――理解はしてくれたかもしれないけど、きつと納得はしてくれていないと思う――、とりあえず最後は上機嫌だったし風向きは悪くないような気がする。

そして、あんまり晴子さんに諸々説明するのに熱中していたからか今の今まで忘れていたのだが、俺はこの後に弥生さんのために晩飯をつくることになっていたんだった。確か、買い物くらいは済ましておいてくれるように頼んだはずだし、きつともうすぐに調理可能な状態が出来上がっているに違いない。

「そういうところは、弥生さん、ちゃんとしてるからな。基本的にやるって言ったことはやってくれるわけだし、助かるっちゃ助かる」  
「幸久様、お疲れでしたら弥生さんにご飯をおつくりする役は私が引き受けますが」

「いいよ、かりんさん、気にしないで。俺は全然元気でピンピンしてるから、もう余裕で料理出来るよ。マジ、もう、これほどまでに元気だったことはかつてないほどだから、料理は俺がめっちゃするよ」

「そ、そうでしたか…、余計な口を挟んでしまい、もうしわけありませんでした……」

「いいのいいの、そんなこと気にしないで。それより、かりんさんこそ疲れてるよね。すぐにお風呂の仕度させちゃうからさ、かりんさんが一番に入っちゃっていいからね」

「いえ、そのような、幸久様が一番に入ってください」

「いや、だってかりんさん、俺が風呂入ったとしたら、その間に弥生さんたちの晩ごはんつくっちゃうでしょ。ダメだよそんなの許さないよ」

「そ、そんなまさか…、そんなことしません」

「まあ、実際にするかしないかはそんなに問題じゃないから、気にしないでいいよ。とにかく、かりんさんは先にお風呂入っちゃってね。今日は慣れないこといっぱいして疲れたと思うから、ゆっくり入ってきてね。っていうか、今日はお湯張ろう、久しぶりにゆっくりお湯に浸かってさ、疲れ取ってきてね」

「はい、お気遣いありがとうございます、幸久様」

「広太、俺は飯つくるから、風呂の支度任せたぞ」

「はい、承りました、幸久様」

「っていうか、弥生さん、いるんなら顔くらい出したらどうですか！…あれ、くつあるのに、なんで出てこないの…？」

「弥生様は、先ほどパソコンをお持ちになって何かお仕事をなさっているとおっしゃっていましたので、集中して音が耳に入らないのではないのでしょうか。以前に、集中なされると周りのことが認識から外れてしまうと仰ってらっしゃるのをうかがったことがございます」

「はあ…、弥生さんがそんなこと言ってたのか…。集中なんて、あの人からだいぶ遠いもののように思えるけど、まあ、あの人も集中することくらいあるってことなのか…。」

まあ、とりあえず、弥生さんがあまりにも集中している結果、ようやく帰宅した俺たちのことが認識の中に入っていないとして、しかし俺たちがここでこうして帰宅したことは事実として存在している。しかしそれならば、さっさとあがって認識してもらうことにしよう。というか、これから俺は晩飯の支度をするわけで、いつまでも机の上で大荷物を広げられているとテーブルのセッティングが出来ないから困るのだ。

「弥生さん、帰ってきましたから荷物片付けてくださいね。片づけ

てくれないと、晩飯づくりま…、せん、よ……?」

「…、んあっ!? おお…、ゆき、おかえり。今、何時?」

「えっと…、あの、九時半くらいです」

「はあ…、もうそんな時間かあ。いやあ、集中してたら三時間とかあつという間だねえ」

「いや、あの、弥生さんがパソコンやってるのはいいんですよ、なんとなくわかりますから、ノートパソコンだしここまで持ってこれたっていうのは分かるんです。でも、あの、都さんは、何をやるんでしようか……?」

「都ちゃんがなにやってるか? そりゃ、ゆき、あれだよ、トレスだよ、トレス」

「トレスってトレースですか? 一回書いたのを紙に写し取ってるってことですよ?」

「そうそう、あの光で下から照らして、下に敷いた紙の絵を上を原稿用紙に透かしてなぞるんだよ。なんかね、都ちゃんはあのきれいな原稿用紙にダイレクトで描くのは心が辛いからムリなんだって。だからね、文房具屋さんでわら半紙を買ってきてそれに描いて、あの光の出る箱で透かして写すんだって。別に、どうせ最後に消しゴムで消すんだから同じだろうに、難儀だよねえ」

「いや、俺はマンガ家の人はどうやって描くのが一般的なのかはよく知らないんで、それがどうなのかってことは分からないんですけど、でもとりあえず教えてほしいんですよ。なんで都さんは、わざわざあのでっかい光の出る箱を俺の部屋まで持ちこんでそれをここでやってるんですか」

「いや、それはおねえさんにもよく分からないね。おねえさんはただ都ちに『ゆきが晩ごはん食べさせてくれる』って教えてあげただけで、気付いたら都ちはそこでその箱を抱えて絵を描いてたよ」

「ちょっと弥生さん、どんだけ周り見えてないんですか。いろいろちゃんとしてくださいよ」

「おねえさんにもいろいろやるのがあってね、集中しないとダメだったんだよ。まあ、都ちんも片づけてっていったら片付けてくれると思うし、だいじょぶだよ。とりあえず、ちよっと待っててね、今都ちんを正気に戻すから。都ちん、ゆきが帰って来たよ、都ちんも帰ってきてよ」

「……………」

「あれ？ 都ちん？」

「……………」

弥生さんのちょうど向かいでトレス台にかぶりつきで絵を描いている都さんだったが、しかしどうしたのか弥生さんがその肩を叩いても微動だにしない。いや、実際のところは微動だにしないというわけではなく、ものすごい速度でシャーペンを動かす都さんがそこにいるわけなのだが、しかし弥生さんの呼びかけには一切の反応を示さない。

一切休むことなくシャーペンを動かし続けているところから見ても、おそらく意識がないわけではない。まさか意識を失ってなお本能のままにペンを走らせ続ける、なんてウルテク発揮しているわけではないだろうし、いたいどうしたというんだろうか。

もしかして、弥生さんと同じ『集中すると周りが見えなくなる』っていう性質のさらなる上位互換みたいな感じだったりするのだろうか。しかし、仮に今周りが見えなくなっているにしても、こんなに外からの刺激に対して盲目になれるものなんだろうか。だって普通、肩叩かれたり声かけられてりしたら気付くものなんじゃないのか？  
だって、そんな状況だったら自分が声かけられてることなんて明らかじゃん。さすがに気づかないとおかしいって。

「ねえ、都ちん。お片付けしないとゆきがご飯つくってくれないよ」

「…、あゝっ！！ 線が曲がったっ！？ 何事！？ っていうか、誰っ！！」

「おお、都ちん、おかえり」

「あれ…、やよちゃん……？ ……、あぁっ！？ そうそう、あたし、三木くんの家でトレス作業してたのよね、忘れてたわ。どおりであるまり馴染みのない部屋にいたと思った」

「も…、都ちんがなかなか自分の世界から帰ってきてくれないから、もう少しでゆきに晩ごはんつくってもらえなくなるところだったよ。ダメだぞ、都ちん、ほどほどにしないと！」

「…、あら、三木くん、おかえりなさい」

「気付いてもらえてうれしいです、都さん。ずいぶんのめり込んでお仕事なさってたみたいですけど、すごいですね。人間、そんなに一つのことに集中できるものなんですねぇ……」

「えっ、そうでもないわよ、あたしよりも集中力のある人なんてたくさんいるわ」

「そうなんですか？ そうなると、マンガ家業界っていうのは、化け物みたいな集中力の持ち主の集まりみたいなものなんです」

「そうなのよ、あたしなんてまだまだ」

「ところで都さん。一つ聞いていいですか？」

「？ なにかしら？」

「今、トレスして何か描いてたまましたよね？ それで、線が歪んだって言ってましたけど、だいじょぶですか？」

「…、うわっ…、ほんと、すごい歪んでる……。もう、曲がったところの話じゃないじゃない……。なにこれなにごと……？」

「たぶん、さっき弥生さんが都さんのこと呼びながら肩掴んでガタ揺すってたから、そのせいじゃないかと思いますよ」

「やよちゃん！ トレス作業とペン入れ作業はとっても大事で繊細な行程だから邪魔しちゃダメって言ったじゃない！ もう…、これじゃこの一ページ丸々ダメよ……。あ…、原稿用紙一枚無駄にしちゃった……。20分の作業が無駄になっちゃったわ……」

「ごめんね、都ちん。あたしもお腹空いてて、ついカッとなってやっちゃったよ後悔はしていない。でも原稿用紙一枚よりも今日の晩御飯の方が大事だよ」

「そんなことないわよ、原稿用紙はとっても大切なものの……。あたしにとってみれば、血の一滴とおなじもののなのよ」

「なんだ、血が一滴垂れちゃったくらいなら、問題ないね。歯磨きしてるときとか、たまに歯茎から出たりするしね」

「やよちゃん、言葉尻だけとらえてうまく落とそうとしないでちょうだい！　とっても大切ってことが言いたかったのよ、あたしは！」

「えー、でも別に問題ないっしょ。だって都ちん、使ってるのボールペンでもつけペンでもなくてシャーペンじゃん。ミスったとこ消せばいいっしょ、消しゴムで」

「いや、なかなかそうもいかないのよ。確かに消せばこの原稿用紙に描かれた線は消えるかもしれないけど、でもこの原稿用紙に線を引いたっていうあたしの記憶までは消せないの。分かるでしょう？」

「いや、分からないよ、都ちん。そのこだわり、あたしにはよく分からないって。っていうかさ、都ちん、マンガ家さんなんだから消しゴムかけも上手なんじゃないの？　マンガ描くのに消しゴムいっぱいつかうって、友だちの同人作家が言ってたよ」

「確かにそうね、あたしなんて特にたくさん線引いちゃう方だから消しゴムもかなりかけるわ。でも、そこまで上手ってわけじゃないから、あんまり原稿用紙で消しゴムはかけたくないの。だから消しゴムかけは最低限で済むようにこうして、少し手間だけどわら半紙に一番最初の下書きしてトレスをするんだし、仮にシャーペンでも失敗したら一から描き直すようにしてるのよ」

「都ちん、それめんどくない？」

「面倒ではないわ、それがあたしのやり方だし、それで慣れちゃってるし。まあ、最近は庄司くんが消しゴムかけすっごく上手くなってくれてて、間違えちゃったときで彼がいるときは消してくれるようにお願いしてるんだけどね」

「広太ですか？　そこにいますけど」

「えっ、いるの？　…、いるに、決まってるわよね、ここ三木くんのお部屋なわけだし。庄司くん！　ちょっと消しお願い！　ゴムで

!!」

「はい、先生、どちらに消しゴムをおかけしましょうか」

「このコマの、この人物の胴の輪郭線のよたってるここ全部消しちゃって。引き直したいの」

「はい、了解しました、先生」

「はあ…、いつ見ても惚れ惚れする消しっぷりね。ほんとに、庄司くんがいれば他のアシなんて一人もいないわ。まあ、昔からアシスタントを使って描いてたことなんて一度もないんだけど」

「他になにか、お役にたてることはありますか、先生。なんなりとお申し付けください」

「平気よ、ありがとう。あつ、このあと三木くんがご飯をつくってくれるみたいなの。トレス台移動させたいから手伝ってもらってもいいかしら?」

「はい、お任せくださいませ」

「あと、なんか最近少し光量が少ないみたいで作業しづらいのよ。もしかしたら配線がへたっちゃってるのかもしれないからチェックしてもらってもいいかしら?」

「承りました。それでは、今からあちらにトレス台を移しがてら中を改めてみます。配線に問題がありましたら修理してしまいますが、よろしいでしょうか」

「ありがとうね、庄司くん。さすがに有能ね」

「お褒めに預かり、光栄にございます。先生は原稿作業に備えてお食事をしっかりなさって、栄養の補給と体調の調整に努めてください。今月の原稿は、いつもより余裕を持って納めることが出来るようにがんばりましょう」

「うん、今月はいつもよりネタの出がいいし、きっと〆切前に編集に渡せると思うわ。あたし、最近ちょっと調子いいみたいなのよ」

「広太、かりんさんは」

「はい、かりん様はお湯を張っているところですので少々お待ちくださいと申し上げたのですが、しかし問題ないとおっしゃられました」

た。今はお風呂にちょうど入られたところです」

「そっか、おっけ、分かった。そんじゃ俺は二人分料理つくっちゃまうから、広太は二人のこと観ててあげてくれ。なにかやってあびげられることがあったらやってあげてくれ、屋飲んだ」

「はい、了解いたしました」

「それじゃ弥生さん、都さん、少し待ってくださいね。これから簡単につくっちゃいますから」

そういうわけで、俺はこれからやいさんたちとした約束の通りに晩飯をつくることになったのだった。まあ、時間も時間だし、少し簡素なものになるだろうけど二人から文句が出ることはないだろう。とりあえず、弥生さんが買って来たはずの食材のチェックから始めるとうかしら。



## 俺の関知しない会話

「弥生さん、買ってきた晩飯の食材って、この冷蔵庫の中のビニール袋でいいんですよね？」

「ん？ あゝ、そうそう、そのスーパーの袋に入ってるのがおねえさんの買ってきた食材たちだよ」

「豚肉と…、キャベツ、なす、にんじん、ピーマン、きゅうり。…、弥生さん、いったいなにが食べたくてのチョイスですか。なんか、とりあえず目についた野菜を買ってみたけど、物足りなさそうだから肉買ったみたいない感じがしてならないんですけど」

「うん、まさにそのとおりだよ、ゆき。まあ、でも、それだけあれば野菜炒めくらいは出来るよね。おねえさんは野菜炒めがあればそれでいいよ」

「いや、別に野菜炒めに限らず、これだけあれば何かしらできますけど…、分かりました、別に何か食べたいものがあって買い物したわけじゃないんですね」

「うん、そうそう。なんていうか、ゆきにお任せするよ！」

「最初はいろいろ考えながら買い物してみようと思ってたけど、でも最終的にはめんどくさくなっただけでしょ、どうせ。まあ、分かりました、そういうことなら、こっちで勝手に料理しちゃいます」

「ほんじゃゆき、よろしくね。だいじょぶだよ、おねえさんはゆきのつくってくれたものならなんでもおいしく食べれる自信あるから」

「…、俺の料理がおいしいっていう褒め言葉だと、思っておきますよ。まあ、一時間もしないで出来ると思うんで、ちょっと待っててください。あつ、そういえば、ご飯はどうするんです、白い飯は」「白いご飯は、ゆきが前に炊いてくれたのが冷凍庫の中に玉になって眠っているのだよ。それを一人一個解凍して食べちゃうのだ」

「そうですか、それじゃあ新しく炊かなくてもいいんですね。うし

「んじゃ、さっさとつくっちゃいますか」

「楽しみにしてるより、ゆき。まあ、ないと思うけど、おねえさんにお手伝いできることがあったらなんでも言ってるね」

「このキッチンだったら、俺一人で全部やっちゃった方が楽ですから、そっちで俺の邪魔しないようにのんびりしててください。それが間違いなく、一番のお手伝いですから」

「おっけー、何もしないでのにんびりしてるのは得意じゃないけど、がんばるよー」

「…、テレビでも観ててください」

「あー、確かに報道ステーションがもうじきはじまるね。観ないといかんですよ」

「へえ、弥生さん、ニュース観るの好きなんですか？ さすがは大学生ですね」

「んー、ニュースって、昔っからなんとなく好きなんだよねー。家で観るのも大抵NHKだし」

「そうだったんですか、勉強熱心ですね」

「勉強熱心ってわけじゃないよ、ただぼんやり観てるだけだからね。ニュースを観て何か知りたいことがあるわけでもないし…、言っちゃえば情報を浴びてる感じなんじゃないかなー。まあ、暇つぶしだけ」

「暇つぶしなら、別にエンタメでも観てればいいのに、物好きですね」

「んー、でもおねえさんは昔からそんな感じだからねー。習慣みたいなもんだよ」

「それなら、まあ、そもそも俺が口出すことでもないですし。とりあえず、すぐにつくっちゃいますんで、ちょっと待っててくださいね」

「ほいほーい」

と、いうわけで。

「さて、飯つくるか……」

別にしなくてもよかった約束（晩飯を弥生さんにつくってあげるという、アレ）によって、俺はキッチンに立っていた。せっかく今日一日溜めていた料理力をこんな形で発散させることになるとは思わなかったが、仕方ない、事の成り行きに従って動くことにしようではないか。

まあ、本来ならここは、晴子さんのために全ての料理力を振るい、その残りでもってして弥生さんと都さんに晩飯を振る舞うつもりだったのだが、しかし俺は晴子さんのために腕を振るうことが出来なかった。それならば仕方あるまい、この身に溜めこまれた一日分の料理力をここに集約させるしかあるまい。やっぱり一日に一回は料理しないとダメだよなあとか、最近地味に料理する頻度が減ってきいて、しみじみ思うのだ。

「まあ、これだと野菜炒めが一番無難だけど…、でもただ炒めるだけってのも…。んゝ、味噌炒めにするか。あと、きゅうりは箸休めの浅漬けだ」

やることさえ決まってしまうえば、料理というのは比較的シンプルな作業だ。料理という一連の作業の中でクリエイティブなのは最初と最後、つまりなにをつくろうと考えたりどう盛りつけようと考えたりするところだけで、他はすべて切るだの焼くだの煮るだのの作業が組み合わせられているだけなのだ。まあ、その単純な作業をどのようにするかというところでもクリエイティブな感じがなくはないのかもしれないが。

「まずは浅漬けの処理からするか」

きゅうりはだいたい三ミリくらいの薄さで均等に輪切り。そしてそれをボールに移して塩と顆粒の昆布だしを振りかけて軽く揉む。少ししんなりしてきたら細切りにしたしそと合わせてビニール袋に入れて口を縛り、冷蔵庫に投入。料理が出来上がるころにはちょうどいいあっさりした箸休めが出来上がる。きゅうり二本分つくったから明日に半分くらいは明日に持ちこすことになるだろうけど、一日経ったとして、それはそれで味が染みてていい酒のつまみになるこ

とだろう。

「…、しまった、無意識で酒のつまみになりそうなものをつくってしまった…。弥生さん、断酒とか言ってたのに、マズいかなあ…。…、まあ、いらないって言われたら明日の朝飯だな」

弥生さんに何かをつくってあげるといことは、それはすなわち弥生さんの酒のつまみを用意してあげることと直結することである。それに、本来だったら弥生さんの晩飯というのは晩酌と同じなのであって、酒メインの飯おまけみたいなところがあり、そんなわけで俺もむしろ飯的なものよりもつまみ的なものをつくることがほとんどだったのだ。

だからこそ、というとおかしいかもしれないが、今もぼんやりとつくっていたら飯の箸休めというよりも酒の箸休めに近いものをつくってしまったではないか。まあ、別に飯の箸休めとしても問題はないうのかもしれないけど、でも実際、弥生さんの酒のつまみの心配をしている俺がいるのも同様に確からしい。うゝん、俺は弥生さんのつまみをつくることにはあまり積極的ではないというか、正直言うと少しは酒の量を減らせよとか思っているわけで、この無意識的な反応は決して本意ではない。しかし習慣とは恐ろしいもので、頭の中で思っていることとは反することであっても、「弥生さんに料理をつくる＝つまみをつくる」の公式が頭の中で出来あがっているといることなのかもしれない。

「いや、酒のつまみをつくっちゃうっていうか、けっこういろんなものが酒のつまみとして通用するとかいうか、ちよつと濃いめの味付けだったら酒のつまみになっちゃうのがいけないんだろ。うん、前に弥生さんも、厚揚げの煮付けとか茄子の煮びたしとか、そういう普通の和風っぽいおかずも酒のつまみになる、みたいなこと言ってたし、俺の思考が偏ってるんじゃないかって、酒飲みの嗜好が普遍すぎるに違いない」

…、うん、まあ、なんでもいいか、そんなこと。俺は黙って好きなように好きな料理をつくることにしようじゃないか。多少野菜はキ

ライかもしれないけど、それでもなんだかんだと残さずに食べてくれるところが弥生さんのいいところなのであって、それが生来の性格に因るのか酒のみであるところの性質に因るのかなんて、それこそ些細なことではないか。

そんなこと気にする必要など、ありはしないのだ。

「次は、なすと豚肉の味噌炒めだ」

というか、あんまり時間をかけるのも悪いよな。九時には帰ってるって言ったのに、実際には30分も過ぎちゃってるわけだし、これ以上待たせたらさすがに申し訳ない。というか、それ以上に、あんまり遅い時間までうちの中をうろうろされるのはあんまりうれしくない。出来るなら11時になる前には食事を終えて帰っていただきたいところだ。

「ちよつと、集中するか……」

本気で集中すれば、おそらく味噌炒めくらい30分もかからずでできあがる、はずだ。大丈夫、今日一日料理力を溜めに溜めた俺なのだ、一日分のパワーをすべて解放すればそれくらいのこと、わけないぜ。

「あつ、そういえば、都ちん」

リビングの方からニュースの声とか弥生さんたち話し声とかが聞こえてくるけど、でもそんなのは無視無視。別に俺に対して話しかけてるわけじゃないんだから、そんなところに注意を払う必要などないのだ。晴子さんに鍛えられた料理力、今ここでこそ発揮して見せようではないか。とりあえず、絶対にもうまいって言わせてやる！

「どうしたの、やよちゃん。コミュニケーション取りたいなら、せめてテレビの画面から視線を外してくれないかしら？」

「そういう都ちんこそ、トレス台の上の原稿から視線を外そうよ。大丈夫だよ、そんなに穴が空くほど見つめなくっても、都ちんのひいた直線も曲線も、肉眼で見る限りはゆがんんだりしてないよ」

「ダメよ、そんなこと言ったって騙されないんだから。きつとどこかが歪んでるはずよ。だって描いたのはあたしなのよ、どこも歪ん

でないなんてありえないことよ。絶対どこかしら、少なくとも一か所は歪んでるの」

「もう、そんなこと言ってるから、都ちゃんはいっつもギリギリライフなんだよ。もう少し妥協していかないとダメだよ、いろんなところで」

「ダメよ！　どうして妥協した原稿なんて雑誌に掲載することができるかしら！　だからあたしは、あんまりたくさん連載を抱えることができないのよ！」

「えー、でも月に六本も連載してるって多いんじゃないの？　その辺の業界事情みたいなのは、あたしはちょっと分からないんだけど」  
「確かにここ一年くらいで、だいぶ作業速度が上がってるわ。かなりいろんなところが楽になってるから、そのことは間違いないのよ。本当に、庄司くんには足を向けて寝られないわ」

「私など、ほんの少しだけ先生のお手伝いをさせていただいているに過ぎません。先生の作品は、すべて先生が考えられたものではありませんか。私はそのお手伝いをする事ができることを、光栄なことだと思っています。感謝など、なさらないでください」

「いや、でも、本当に、庄司くんには感謝してるのよ。あたしが下書きとかトレス下絵を入れている間に部屋の掃除とかお茶の支度とかの家事全般してくれるし、買い物とかも頼めばあつという間にばっちりしてくれるし、あたしが人物のペン入れしたら同時並行くらいで背景入れてくれるし、消しゴムもホワイトの修正もプロかと思うくらい上手いし、ここ半年くらいは仕上げ工程も八割以上受け持ってくれてるからあたしは人物のペン入れが終わったら次にやらなきゃいけない別の連載のプロットの構成に入れるし、もう庄司くん一人でアシスタント五人分くらいの働きをしてくれてるの。それでいてアシ代は一人分とちょっとしか受け取ってくれないで、ほんともう、結婚してほしいくらいよ」

「都様、申し訳ありませんが、結婚をすることはできません。ですが、お断りするお詫びとして、これから一層都さまの力になるこ

とができますよう、精進させていただきます。つきましては、また都様のお時間をいただきまして、トーンワークとベタフラについて御指導をいただければ幸いです」

「庄司くんには、もうあたしから教えることなんて一つもないわ。もうね、他の先生のところにも胸を張って送り出すことができるくらい庄司くんの技量は上がってるのよ。現に、今やってる原稿の担当もね、背景アシとして他の先生のところに来てほしいから紹介してってしぶといのよ。まあ、そんなこと庄司くんにさせるわけにはいかないからね、きっぱりお断りしてるけどね」

「へえ、なんかひろも大変なんだねえ。：、あれ、ってことはさ、都ちゃんは、けっこう余裕あるの？ それにしてはいつもいっぱいっばいになってる感じがするんだけど？」

「余裕なんてないわよ、あるわけじゃない」

「でもさ、作業効率が上がってるっていうんだったら、当然余裕は出てくるはずだよ。だって、単位時間当たりの仕事量が増えるんだから、根本の仕事総量が変わってないなら単位時間が減るはずじゃん」

「？ 作業効率が上がったら、当然新しい連載が入るでしょ？ 庄司くんが手伝ってくれてるから、あたしは月刊連載を六本も抱えていられるのよ」

「…、そっか、都ちゃんはドMなんだね」

「ちょっと、やよちゃん、どうしてそんな結論が出てくるのよ！ おかしいでしょ！」

「そこでピンとこないってことは、都ちゃんはかなり潜在的なMなんだよ。でもそっか…、都ちゃんを見てる限りマンガ家ってどっか自分を追い詰めるところがあるっばいし、都ちゃんには似合いのお仕事なのかもしれないね……」

「やめて！ あたしはMなんかじゃないのよ！」

「自分がMっぽい状況に置かれてるって、気付けないのが特にMっぽいんだよ」

「そんなことないわ！ 撤回を要求するわよ！」  
なんだかよく分からないが、リビングの方が騒がしい気がする。い  
かんいかん、集中するんだ、俺。外の音に惑わされるな。俺が今し  
なくちゃいけないのは可及的速やかに今つくっている晩飯を仕上げる  
ことであって、それ以外の何ものでもないのだから！



## 素面の酒飲みとマンガ家

「ところで都ちん、話は変わるんだけどね、この紙袋を観てください」

「？ ああ、そういえばそれ、やよちゃん、最初から持ってたわね。どうしたのよ、近所の本屋さんの紙袋なんて持ってきて。なにか面白い本でも買ってきたのかしら？」

「うん、けっこうおもしろいものが売ってたんだよねえ。だからこう、ついうっかり買っちゃったのだ」

「やよちゃんの面白いものって：、エロ本？」

「都ちん、この大きさの紙袋には雑誌は入らないよ」

「いや、エロマンガの単行本だったら普通に入るじゃない。大きさ的には、だいたいそれくらいよ」

「へえ、そうなんだ。おねえさん、エッチなマンガはあんまり読まないから知らなかったよ。おねえさんは基本的にリアル派だから。っていうか、都ちんはマンガの方がいいってことなんだね。やっぱりマンガ好きはエッチなのもマンガがいいんだね」

「ちよっと待って、やよちゃん、そういう話にあたしを巻きこもうとしないでちょうだい。あたしはただ一般的で常識的な知識としてエッチなマンガのサイズがそれくらいだっていうことを示しただけで、それ以上の意図をもって発言したつもりはないわ。困るのよ、そういう男子中学生がするような会話にあたしを巻きこまないで」

「えー、そうなの？ 猥談しようよ、都ちん。女同士なんだから恥ずかしくないもん」

「あたしとやよちゃんは確かに女同士かもしれないけど、でもこの空間には庄司くんも三木くんもいるじゃない。エロを糧に生きてるやよちゃんと違ってあたしは猥談なんてそもそもしたくないんだから、なおさらお断りだわ」

「なんだよー、お酒飲んだらエロの権化のくせにー。このむつつり

都ちんめ〜」

「お酒飲んできるときの話はしないでっていつてるでしょ！ 前後不覚なんだから自分の発言に責任持てないわ！」

「いや、まあ、別に都ちん、お酒飲んでも猥談しないけどね」

「あつ、そうなの？ それならいいんだけど。…、そんなことより、やよちゃん、早く話を進めましょうよ。その本屋さんの紙袋の中身がどうかしたの？ いったい何が面白いっていうの？」

「うん？ ああ、この紙袋の話？ あゝ、うん、まあ、面白いっていえば面白いけど…、都ちんの猥談の方が面白いかなあ……。うん、やっぱり都ちんの猥談の方が面白いよ、間違いない」

「いや、あたしは猥談なんてしないっていつてるじゃない。どうしてやよちゃん、そんなにあたしに猥談させようとするのよ」

「なんでって、そりゃあたしが猥談好きだからに決まってるじゃない。自分でこんな持つてきていてなんだけど、でもあたしは猥談の方が好きなんだよ」

「やよちゃんが猥談好きなのは知ってるわよ」

「うん、知られてるの知ってる。ところで話は戻るけど、ここに楽しい紙袋があつてね」

「…、やよちゃん、その紙袋の話がしたいなら、素直にその紙袋の話だけをしてくれてかまわないのよ？ 別にどうしても間に猥談挟まないといけないルールなんてないんだから、ストレートに取り上げたい話題を出してくれていいんだからね？」

「うゝん、でもやっぱり、あたしのキャラ的にそういうあたりはなぞつとした方がいいかと思ってね」

「別にそんなこと気にしないでもいいじゃない。それに、あたしはやよちゃんのこと猥談キャラだとは思ってないわ。むしろ分かりやすい酒飲みキャラよ」

「あつ、じゃあ話のつなぎ目で一口ずつお酒飲んだ方がいいかな？ その方がいい？」

「やよちゃん、あなたいつからそんな細かいことを気にする娘にな

っちゃったのよ。キャラとかどうでもいいじゃない、そんなこと気にしながら生きてたら窮屈でしょうがないわ。それに、話の節目ごとにキャラに沿った何かをしないといけないなんて決まりごとはないんだから、やよちゃんはいつもおりにしてればいいの。というか、そしたらあたしは何キャラで、話の節目ごとに何をすればいいのよ」

「んー、都ちゃんは発狂係だから、節目ごとに叫び声をあげればいいと思うよ」

「いやよ、そんなの。どこからどうみても、どこに出しても恥ずかしくない狂人じゃない。あたしは絶対にそんなことしないわよ、絶対にね」

「それは、『絶対に押すなよ』的な……」

「フリじゃないわよ、やよちゃん」

「うん、分かってるよ。でね、この紙袋なんだけどさ」

「ああ、ごめんなさい、せっかくやよちゃんが本筋に話を戻して紙袋に触れようとしたのに邪魔しちゃって。さあ、やよちゃん、話してくれていいのよ。あたしは聞く準備万端なんだからね」

「ありがと、都ちゃん。さあ、それじゃあ、問題です！ この紙袋の中には何が入ってるでしょう！ ヒントは、面白いものです！」

「うーん…、やよちゃんのおもしろいもの……？ あたしの推理が正しければ…、エロ本……？」

「都ちゃん、落ち着いて、話がループしてるよ。エロ本じゃないです」「エロ本じゃないとすると…、ダメだわ、もうお手上げよ。やよちゃん、近所の本屋さんで買ってくる、やよちゃんにとって楽しいもので、エロ本以外のものって言われても、全然分らないもの」

「そっか…、都ちゃんは、あたしのことを混じりッ気なしの純然たるエロキャラだと認識してるってことだね。そこまではつきり言われると、いっそすがすがしいよ」

「せめてもう少しヒントをくれるか、もう答えを教えてちょうだい。今のままじゃ絶対に答えにはたどりつけないもの」

「もー、しょうがないなあ……。えっと、じゃあヒントね。この袋の中身は、マンガです」

「分かったわ！ エロマンガね！」

「都ちゃんは、どうしても話をループさせたいんだね。でもあたし、天井はやつても一回の話で一度までだと思うんだ。都ちゃんは、かなり天井好きってことかあ」

「天井よりも、むしろ親子丼の方が好きよ？」

「そうなんだ…、親子丼の方が好きって、都ちゃんはエロいなあ」

「えっ？ 親子丼ってエロいの？ まあ、たしかにたまごとじが半熟だとドロドロで若干エロくないとも言えないうかもしれないけど…、そんなに？」

「とりあえず、袋の中身はエロマンガじゃないよ。おまけでヒントもう一つ出すと、このマンガは都ちゃんにもかなり身近なマンガです」

「あたしに身近ってことは、あたしの好きな作家さんってこと？」

でも、あたしの好きな作家さんの中でやよちゃんも好きそうってなると、あんまりいないと思うんだけど…、ほら、あたし、けっこう趣味がニッチだから」

「いやあ、都ちゃんに身近だって言ったけど、でも都ちゃんが好きかどうかはわからないなあ……。まあ、たぶん好きなんじゃないかとは思ってるけど、むしろキライかもしれないし、分かんないね」

「もう、やよちゃん、そんな曖昧なヒントじゃ分かるものも分からないわよ。っていうか、せめてそれがどんなジャンルの作品かとかくらい教えてくれてもいいじゃない。あたしもそこそこマンガは読むけど、それだけじゃ分からないもの」

「あれ、都ちゃん、マンガ読むの？ 買いに行つてるとこ全然見たことないんだけど。それとも、昔はかなり読んでたのよ的な昔取った杵柄ってやつ？」

「なに言ってるのよ、やよちゃん、あたしの部屋来たことあるでしょ。いっぱいマンガ、あったでしょ？ あたしは外に買いに行かないで、気になったマンガはみんなネットで注文しちゃうから、本屋

さん行かないのよ」

「あゝ、うん、あったね。美少年と美少年がわっしやいわっしやしてるマンガがたくさん」

「待って！ それはあくまでごく少数！ 実際は全体の一割にも満たないものを、『たくさん』とか弁を弄してあたかも全てがそうであるかのように言わないで！ というか、どうしてやよちゃんはそれを知ってるの！ なんか気恥かしいから見えないところに隠したはずなのに！！」

「？ 女同士なんだから、エロ本がないかどうか探りいれるのは当然だよ？ まあ、そういう本は、その過程でうっかり見つけてしまった副産物的なアレで、今では後悔してます。でも、都ちゃんもそういうことに興味があるお年頃ってことだよな」

「そんなフォローのされ方うれしくない！ フォローするくらいなら、なにも見なかったことにしてほしかった！ というか、あれはただの資料だから、別にあたしが好きってわけじゃないのよ！！」

「えゝ、でもページのところどころに恥ずかしい乙女の痕跡があつてですね」

「あゝっ！！ なんなの、やよちゃん！！ いったいあたしをどうしたいっていうの！！」

「どうもしないよ、都ちゃん。ただあたしが言いたいのは、あたしもそういうの嫌いじゃないってことだけだよ。でも個人的にはシヨタ×シヨタよりは、むしろどちらか片方が大人である方が好ましいよ。より一層言うなら、受けが成人男子であることが好ましいよ」

「…、まあ、そういうのに対する需要もあると思うわ。でも、あたしはシヨタはシヨタと絡むべきだと思うの。少年と少年の、友情にも似た想い合いが、あるふとした瞬間に恋愛へと昇華する姿が、美だと思うのよ、あたしは」

「都ちゃん、資料なんてウソじゃん。そういうのガッツリ好きなんじゃない」

「…、好きよ！ 好きです！ シヨタ好き変態腐女子です！ いい

じゃない、好きなんだから！」

「うん、いいと思うよ、趣味は人それぞれだからね。ところで、都ちゃんは、シヨタとシヨタが絡むとき、少年の局部は大きい方がいいの？ それとも少年なりに幼い方がいいの？」

「やめて、やよちゃん！ こんなパブリックスペースで自分の性癖を暴露し合うなんて、イヤよ！ っていうか、けっきょく下ネタに行っちゃってるじゃない！ 下ネタはイヤだって言ったのに！！」

「すべての道はローマに通ず、といえますよ、都ちん。つまり、すべての話題は下ネタに通ず、と」

「そんな格言じみた言葉で誤魔化そうとしないでちょうだい、やよちゃん。もう下ネタはやめましょう。ほら、そんなことより、やよちゃんの持つてるその紙袋。紙袋の話をしましょ？ 下ネタなんて非生産的極まりないわ」

「あたしはね、少年の局部は不釣り合いなくらい大きくていいと思うの。その方が受け側を征服する感じが強くなるし、受け側の戸惑いがかわいいと思うんだよ」

「やよちゃん、おっさんのエロにしか興味がないのかと思ってたけど、でも意外と淑女的ね……。やよちゃん……。恐ろしい娘……。」

いや、そうじゃなくて、もう下ネタはやめましょうよ、やよちゃん  
「下ネタはしようと思ってするものじゃないよ、都ちん。下ネタはいつだって春に吹きすさぶ一陣の風のように、唐突にやってくるものなんだよ。そしてそれは嵐となっていくまででも」

「確かにやよちゃんは一年中頭が春だけど、でもだからって四六時中下ネタで会話を成立させなくたっていいじゃない！」

「えー、都ちんだって変態シヨタコン腐女子のくせに、人のことが春とか言えないと思うんだけど」

「そ、それは……。あ、あたしは変態かもしれないけど、でも慎重深い変態だわ！ 淑女としてのあるべき姿から外れるようなことはしたくないもの！」

「なんだよー、あたしだってただライトな猥談してるだけだもん。」

こんなのジャブだよ、ジャブ」

「やよちゃんは剛腕だから、ジャブが重いのよ……」

「それは都ちんが弱すぎるんだって。っていうか、都ちんだって変態强度高いはずなのにファイティングポーズ取らないのがいけないじゃん。戦う前から降参なんて、それこそ変態淑女の名折れだよ」

「淑女たるもの、公共の場でパンピーに迷惑をかけるものではないわ、やよちゃん。最近はそういうのも少しずつ市民権を得つつあるみたいだけど、でもやっぱり密やかにあるべきなのよ、淑女は」

「むう、それは一理あるけどさ……」

「だからやよちゃん、淑女としてともに淑やかにありましょうよ。ほら、やよちゃんの大好きな報道ステーションが始まったわよ」

「あっ、ほんとだ、見よつと」

「そうそう、それでいいのよ。そういう話がどうしてもしたいっていうなら、また今度余裕ができたときに付き合ってあげるから、今は大人しくしていきましょう」

「ところで、弥生様」

「ん？ ああ、ひろ、今までどこにいたのさ」

「部屋の中に潜んでおりました。お二人のお話の邪魔をしてはいけないと思い、静かにしていたのです」

「ふうん、ぜんぜん気配しなかった。ひろはすごいなあ……。んで、なんだい、ひろ。何か聞きたいことでもあるのかな？」

「はい、もし可能であるならば教えていただきたいのですが、けっきょく弥生様が持っていていらっしゃる紙袋には、なにが入っているのでしょうか？」

「…、そうよ、忘れるところだったわ。やよちゃん、いったいその紙袋、何が入ってるのよ」

「えっ？ ああ、まあ…、こういうのはノリと勢いで見せるから面白いんであって、今こんな空気の中で出してもそんなに面白くないと思うよ？」

「いいわよ、そんなの。それよりも、こんなに中途半端な状態でな

し崩しにされるほうがいやだわ。もうつまらなくてもいいから見せてちょうだい」

「うーん…、まあ、別に見せるのはいいけどさ…、はい、開けていいよ、都ちん」

「それでいいのよ、それで。っていうか、最初からそうしてればさっきまでの下ネタの流れはいらなかったんじゃないかしら……。ん？ あれ、これ……」

「これは、先生の新刊、ですね。確か、今日が発売日だったのではないかと記憶しています」

「そうだよ、今日は偶然本屋さんで都ちんの新刊見つけたから買ってきてさ、せっかくだから都ちんに見せちゃおうと思ったのさ」

「…、たしかに、これは、テンション上がってるところに勢いで見せないと駄目ね、うん。主に、あたしの心が駄目ね……」

「とりあえず都ちん、サインください」

「うん、まあ、それはいいんだけど…、ああ、これは修正作業が行き届かなかった回が収録されている巻じゃない…、あそこのパースだけでも、なんとかして修正しとけばよかった……」

「…、よし、これで晩飯完成、か……」

「幸久様、お風呂を上がりました」

「…、んあっ！？ ああ、かりんさん、お風呂もう出たんだ…、早かったね」

「あの、幸久様、リビングの方がだいぶにぎやかですが、どうかなさったのですか？」

「あ…、いや、俺もよく分からないんだ。集中して料理してたから、ぜんぜん周りの音とか聞こえなくて」

「そうだったのですか、それでは、何があったか弥生さんに聞いてみることにします」

「いや、まあ、別にろくなことじゃないと思うけどね……」

とりあえず、集中力と料理力を放出して弥生さんたちの晩飯を一気に仕上げた俺は、お風呂上りでほかほかのかりんさんからかけられ



た一言によって意識を取り戻したのだった。だが、意識を現実に戻してはみたのだが、しかし思った以上にリビングの状況は混乱とじていて、今さら入り込んでいくのはムリだと思うことに躊躇はなかった。

まあ、話に割り込んでいくのはムリだろうから、晩飯をぶっ込んで話を一時中断させてしまうことにしよう。それくらいしか、今の俺に出来ることはないだろうからな。

## お互いを知り合うって、どういうこと？

「とりあえず、晩飯出来ましたよ、二人とも」

「あっ、ゆき、ご飯できたのかい？」

「はい、そういうことなんで、さっさとテーブルの支度…は、広太がしたか。あとはご飯ですけど、弥生さん、自分の部屋からご飯玉持ってくるって言ってましたけど、持ってきました？」

「あゝ、まだ。取ってくるよ」

「都さんは、なにしてるんですか？ マンガなんて読んでないで、ご飯食べる準備をしてくださいよ」

「…、あっ、パースが狂って…、ああ…、トーンがずれて…」

「ったく…、ご飯食べ終わるまでマンガは没収ですよ。読むなどはいませんか、飯を食うときくらいは読むのをやめてください」

「ああっ！？ やめて、三木くん！！ あたしはマンガ家としてしなくちゃいけないことがあってね！！」

「他の人のマンガを読んで勉強ですか？ そんなの後でやってくださいよ、今は飯にしちゃってください。時間も、これ以上遅くなったら夜の作業に差し支えますよ。…、おっ、これ、霧子がよく買ってるマンガ家だ。人気マンガ家らしいですけど、都さんもそういうのを読んで勉強とかするんですね。でも、思うんですけど、人の作品って読んで勉強になるんですか？ こういうものをつくるようなことって、結局は自分が思いつくかどうかなんだから他人の作品読んでも何かを思いつくってわけじゃないと思うんですよ。いや、でも、俺はものづくりとか基本的にしないんで、俺が見当違いなこと言ってるって可能性も大いにありますけど」

「幸久様、このマンガは先生の最新作です」

「えっ、これ、都さんのマンガだったんですか！？ ちょっと、それならそうと先に言ってくださいよ！ もう…、知った風なこと言っちゃったじゃないですか……」

「三木くん…、今、なんて言った……？」

「？ 知った風なこと言っちゃって恥ずかしいって」

「もう少し前」

「えっと、他人のマンガなんて読んで勉強になるのか、って」

「それは、あたしはなると思ってるけど、でももう少しだけ前」

「…、『このマンガ家、霧子がよく買ってる』？」

「そう！ そこ！ このマンガの作家の作品を！ よく買ってる子  
がいるの！？」

「そ、そうですね…、確か、好きって言ってました。このマンガ自  
体を持ってるかどうかは分かりませんが、これ以外に何冊か持  
ってるみたいです。面白いって貸してきたこともありましたよ」

「なんていい子なのかしら…、買って読んでくれるだけじゃなくて、  
布教までしてくれるなんて……。ね、ねえ、三木くん…、その子っ  
て、女の子よね？ きりこ、って言ったし、女の子の名前よね？」

女の子が、読んでくれてるってことよね……？」

「そうですね、女の子です。あの、あっちの方に天方っていう表札  
の下がった一軒家があるの知ってます？ その家の、かわいいこち  
やんです、俺の幼なじみ」

「あ、その家は知ってるわ。このあたりにある珍しい名字の家はだ  
いたい覚えてるから」

「あれ？ 都さん、引きこもりですよ？ アパートから出られな  
い呪いがかけられてるのに、出歩いたりできるんですか？」

「そんな呪いかけられてないし、そもそもあたしは別に引きこもり  
じゃないのよ、三木くん。ただなかなか家から出る機会が見つから  
ないだけで、家から出るのが怖いとかじゃないの。だから夜中とか、  
作業が詰まったときはこのあたりをうろうろ徘徊してるわ」

「徘徊って…、せめて散歩とか、ぼかして言うてくださいいよ……」

「まあ、そこはいいのよ、問題じゃないわ。ここで言いたいのは、  
あたしはそんな心因的に引きこもってるわけじゃないってことと、  
それから三木くんが言ってる女の子の住んでる家は知ってるってこ

とよ」

「な、なるほど…、そういうことでしたか……」

「そ、それで、あのね、三木くん…、その…、そのマンガ家のことが好きな女の子なんだけど、そのマンガ家のこと、なんて言ってた……？」

「なんで『そのマンガ家』っていうんですか、このマンガの作者は都さんなんでしょ、ちゃんと自分のことをどう言ってたかって言ってくださいよ」

「そんなこと言えないわよ！　そもそもあたしは読者さんと直接コミュニケーション取れないんだから！！」

「えっ、それって理由として認められるんですか？　なんか、全然つながってない気がするんですけど」

「つ、つながってるわよ！　読者さんから送られてきているらしいファンレターすら読めないあたしが、読者さんの生の声なんて真正面から受け止めきれないじゃない！　だからせめて、その矛盾が自分に向いていないんだって錯覚させるくらいしてもいいじゃない！　メンタルは弱いよ、あたしは！！」

「ほんとに都さんは、後ろ向きに全力疾走ですよね」

「自分のメンタルが吹けば折れるような弱さだって自覚してるんだから、きちんと防衛線張っておくのは当然よ。自分のメンタルを守れないと、あたしは×切を守れないのよ」

「もう、いつそすがすがしいくらいのネガティブですね。メンタルの弱さを克服しようっていう方向に向ければいいじゃないですか、その思いを」

「メンタルの弱さはそう簡単に治らないのよ、三木くん。それはあなたのロリコンが治らないのと同様に、ね……」

「いや、俺はロリコンなんかじゃありませんよ、やめてください、さも当然のようにそういうことを喧伝しようとするのは。かりんさんだって聞いているじゃないですか、かりんさんの中での俺の評価を不当に貶めて何が楽しいっていうんですか」

「でも三木くん、あなた、みくちゃんを見るときの目が性的よ」

「そんなことありません、俺はただ純然たる母性でもってして、小さい女の子もかわいいと思っただけであって、別に性的な目で見ているなんてことはありません。絶対ありません」

「そんなことあるわよ。三木くんはみくちゃんを見ているとき、やけに息が荒いわ。でも成人女性を見るときはそんなでもないわ。口リコン以外の何ものでもないわ」

「いや、そんな、息を荒くしているなんて、そんなことあるわけないじゃないですか。俺はいつでも通常運行ですよ。息を荒くするタイミングなんて、全力疾走したあとくらいしかありません。ましてや、女の子とおしゃべりしながら息を荒くするなんてありませんあれえ、ええ、ありません」

「ゆ…、幸久様……？ 幸久様は、小さな女性にしか興味がおありではない、ないのですか……？」

「ほら！！ どうするんですか、都さん！！ かりんさんがあらぬ誤解をしたじゃないですか！！」

「いや、でもね、聞いてほしいんだけど、あたし思うのよ。お互いを知り合うってどういうことなのかってね」

「…、いいでしょう、聞きましょう」

「三木くんはかりんちゃんのことを知りたいと思ってるし、かりんちゃんは三木くんのことを知りたいと思ってるんだから、つまりお互いに知り合っただけのこととしていていいじゃない。そんなときにお互いの性癖をひた隠しにするっていうのは間違ってると思うの。こんなこと言うのはやちゃんの仕事かもしれないけどね、でも隠し事をしないっていうのはどんなことについても言えるべきことだと思わない？」

「都さんの言ってることは至極真つ当で、きっと正しいことを言ってるんでしょうけど、でも釈然としませんね。理解はするけど納得はしないっていうのは、きっとこういう気持ちのことを言うんだと思います」

「だいたいね、お互いに性癖を理解し合っていないと、根本的なところで勘違いが発生するかもしれないじゃない。それはダメなのよ、絶対にダメ。だからね、お互いを知り合うっていうのは、そういう深いところまできちんと知り合っていないといけないものなのよ」

「仮にそれを知り合わなかったとして、いったいどんな勘違いが生まれるっていうんです。別に聞きたくないから言わないでいいんですけど」

「だからね、ロリコンに対しておねえさんスタンスからのアプローチは無意味だし、M男に対して優しさアピールとか気づかいアピールは効果が薄いしってことよ。三木くんはロリコンなんだから、かりんちゃんはまだ少し庇護欲に訴えかけていくのがいいと思うのよ。今のままじゃ、どこまで行っても『いいおねえさん』ってところまでしかたどり着けないと思わない？」

「俺は女性を年齢で差別するようには教育されていません。そして俺はロリコンではありません」

「まあ、どうしても認めたくないならいいのよ。でも三木くん、もし明日朝が来て、かりんちゃんが寝坊したらどうする？」

「起こしますけど」

「そうよね、もちろんそうよね。それじゃあもし、かりんちゃんが急にお料理苦手になっちゃったらどうする？」

「料理くらい俺が全部つくりますよ」

「うん、そうでしょ。それならね、もしかりんちゃんが、実はシャンプーをするのが苦手で一人でお風呂に入るのが苦手っていうことを隠してて、でも今まではそういう子どもっぽいところを知られなくて隠してたんだけど、それを三木くんが偶然知っちゃったとしね、どうする？」

「…、いっしょにお風呂に入って、シャンプーしてあげますね」

「つまり、そういうことなのよ」

「…、どういふことです」

「だから！ お互いの性癖を知っておけば、こんなにもスムーズに

話が進むってこと！ 三木くんがひどいロリコンで、そこから派生して病的な世話好き属性と潜在的なおにちゃん属性を併せ持つてるっていう風に知った上での確にアプローチをかければ、こんなに簡単に『いっしょにお風呂でドキドキ』イベントが演出できるわけじゃない！」

「な、なるほど…、都様のおっしゃること、勉強になります…。」

「いや、かりんさん、勉強になっちゃダメだよ。こんな人の戯言かなにも学んじやいけないし、吸収してもいけないんだよ」

「つまり私は、明日からもっとずばらに生きればいいということなのでしょか…。それは、とても難しいことですね…。」

「違うわ、かりんちゃん、愛されキャラはずばらキャラではないの。確かに他人に多大な世話をかけるという意味で両者は近いものを感じるかもしれないけど、でもそこには決定的な断絶が存在するわ。なぜなら、ずばらキャラはがんばらないからダメなんだけど、愛されキャラや世話されキャラっていうのは『がんばっても、ダメ』なのよ！」

「『がんばって…、ダメ……！』」

「そう、そのあたりは素人さんには難しい塩梅だと思うけど、でもそれを上手く出来るようになったとき、あなたは三木くんの中で一番の愛されキャラになることができる、はずよ！ 確証はないけど！」

「どうしてそんな、確証ないのに自信満々なんですか。っていうか、かりんさんに変なことを吹き込むのはやめてください」

「…、幸久様にとって、そういった関係にあるのは、霧子様ですね」

「広太、変なこと言うなよ、都さんが食いつくだろ」

「あら、三木くんにはもう病的にお世話する相手がいるの？ それじゃあかりんちゃんがいくらその方向でがんばってもその子の次にしかねないわね。庇護欲の捌け口は、二つもいらないわよ」

「都さん、その、性欲の捌け口みたいな言い方、なんとかありませんか」

「でも三木くんは、日ごろうつ屈した庇護欲をその心に溜めこんでいて、でもそれを続けているといつか小さな女の子に手を出してしまいそうで恐ろしいから、その子を病的に世話することで溜めこんだ庇護欲を吐き出しているんでしょう。それって、たいして変わらないと思うんだけど」

「そもそも、俺は日ごろ庇護欲を心に溜めこんでいません。っていうか、うつ屈した庇護欲って何ですか、意味分らないですよ」

「まあ、三木くんがどうしてもそうだっていうんなら、そうなのかもしれないわね。あたしにはそれがほんとかどうかは分からないけど」

「都ちん、ゆき、冷凍ご飯玉持ってきた」

「あら、やよちゃん、おかえりなさい。遅かったわね」

「えー、そうかな？ ふつうに來たつもりだけど？」

「気にしないでいいのよ、言うほど遅かったわけじゃないから。それよりも三木くん、あなたの性癖の話なんてどうでもいいのよ」

「性癖の話を言い始めたのは都さんじゃないですか」

「そんなことないわよ、気のせいよ。それでね、その、三木くんのお友だちの、きりこちゃん…、なんだけど」

「えっ？ ああ、はい、霧子ですか」

「うん、そう。あのね、えっと、できれば今度、サインでも、しちやおっかなって、思ってたね……？」

「サインですか？ ああ、きっと喜びますよ、好きらしいですから」  
「で、でもね、直接会ってサインっていうのは、正直ムリだから…、あたしの部屋に積まれてるあたしの本のうち一冊にサインして、三木くんがプレゼントしてあげてほしいの。お願い、出来ないかしら……？」

「別にいいですよ。それで都さん、さっきの話の続きですけど」

「ゆき、そんなどうでもいい話はしなくていいから、おねえさんは早くご飯が食べたいです。お腹がペコちゃんですよ」

「ああ、もう、弥生さんは食っちゃっていいですよ。俺は都さんに



話があるんで」

「ダメダメ、あたしは都ちんといっしょにご飯食べるって約束したんだから、一人で先に食べるなんて出来ないよ」

「…、どうしておおむね全てのことに對して大ざっぱな弥生さんが、そんなしょうもないことには細かいんですか……」

「細かいよ、ゆき。大事なことだよ」

「…、分かりましたよ。それじゃあ二人ともさっさと飯食っちゃってくださいよ。都さんに話をするのは、そのあとでも一向に構いませんから」

「ほんじゃゆき、電子レンジ貸してね」

「はいはい、好きに使ってくださいよ」

「やよちゃん、あたしの分もチンしてちょうだい」

「はいはい」

とりあえず、いろいろ釈然としないけど、でもまあ、今は飯の時間なわけだし、引き下がることにしようと思う。しかし、とにかくかりんさんにあらぬ誤解を与えたりするのは許すことができないわけだし、ここはあとできっちり都さんと話し合っておく必要があるだろう。

今は見逃すけれど、でもだからって許すわけじゃないってことを、きちっと理解してもらわないといけないのである。

## 飯を食って、部屋に入って

「うあゝ、ごはん、うまゝ」

「ほんと、三木くんのつくるご飯はどれもおいしいわね。将来いいお嫁さんになるに違いないわ」

「はいはい、そうですね。じゃあ、食べ終わったら食器はキッチンの方に出しといてください。別に洗ってなくても全然構いませんからね」

「おろ、ゆきはどこ行くんだい？ おねえさんたちが自分のつくったご飯を喰らうところを見ていかないのかい？」

「いや、そんなものを眺めててどうするっていうんですか、別に楽しいものでもないでしょうに。俺は学校で出た宿題をやるんですよ。終わらせないわけにはいかないですからね」

「そんなの、おねえさんたちの食事風景をひとしきり眺めた後にやればいいじゃない。なんならおねえさんが後でその宿題とやらを見てあげてもいいよ？」

「いや、今やってる範囲は少し難しいですから宿題を見てくれるっていうんならそれはすっげえ助かるんですけど、でも別に俺が弥生さんたちの食事風景を見ていないといけない理由はないですよ？

それとも交換条件ってことですか？ 食事している様を見てないと宿題見てくれない、みたいな」

「別にそんなこと言わないけど、でもなんか、食事している姿ってちょっとエロくない？ おねえさんのそういう姿を見られるのって、役得って感じじゃないかい？」

「いや…、そうでもないです。女の人が食事をしている様子は昔からいくらでも見たことがありますけど、それがエロいと思ったことは一度もないですね。っていうか、どうして弥生さんが自分の食事する光景をエロいと思ったのかってことのほうが俺には分からないですよ。不思議極まりないです」

「どうしてつていわれても、なんとなくそう思っただけ？」

「そうですか……。まあ、なんでもいいです。とりあえず、俺は部屋に行って宿題やってますから、食い終わったら一声かけてください」

「ほいほい」

というわけで、弥生さんと都さんに晩飯をつくり終えた俺は、さっきのひと悶着には目を瞑ることにして自分の部屋に入ることにしたのだった。きつとほんの少しの言葉のやりとりでさっきの大問題を解決に導くことは出来ないだろうから、今日のところは勘弁してあげることしよう、ということなのだ。

まあ、あれは単に、あくまでも都さんの妄言でしかないのだから、俺が真に受けなければそれで終わりと言えば終わりなのだ。かりんさんに悪い影響が出ていないかは少し心配だが、それについては、それこそあとでフォロースれば問題あるまい。あと、霧子にサインした本を渡してほしいみたいなのを言っていたけど、それもあとで帰り際にでも渡してもらえば済む話でしかない。

故に、今この場における最優先事項というのは自分の宿題を片付けることなのであって、弥生さんが言うように二人の食事風景を眺めて時間を無為に浪費することではないのだ。

「あっ、幸久様、宿題でしたら私がお手伝いいたします。高校のお勉強でしたら、私も先生をお招きして教えていただいたことがありますので、お力になることが出来ると思います」

「ああ、そうなんだ。それじゃ宿題はかりんさんに見てもらってもいいかな？」

「はい、お任せください。もし幸久様が分からない問題と対面することになっても、私がなんとかお助けできるようにします！」

「そういうことなんで、弥生さん、別に宿題手伝ってくれなくていいです。食べ終わったらキッチンに食器出して洗って、それから一声かけて帰ってくれて構わないですから。あっ、そっちにあるノートパソコンとかは諸々全部持って帰ってくださいね。置いて帰った

ら捨てますから」

「えー、捨てないでよー」

「いや、置いて帰らないでくださいよ」

「でもこれ、全部一氣に持って帰るとなると重いんだよねえ……」

それにほら、これからもこっちで作業することもあると思うからさ、少しこっちに資料とか置いておいた方がいいと思うのよ。分かる？」

「分かりません。置いていったら全部捨てます」

「もう…、ゆきのケチ！ あたしだってひろにお世話されながら作業したいし、りんちゃんとかキャツキャウフフしながら作業したいのに！」

「別にすればいいじゃないですか、止めませんよ。でもうちに資料やらなんやら、置いていったら全部捨てます。情け容赦なくひとつ残らず捨てます」

「おかあさんみたいなことしないで！ あたしの部屋にあるものをいらないって決めつけて捨てるのは、やめて！」

「いや、そりゃ、弥生さんの部屋にあるものは勝手に捨てたりしませんけど、でもここは弥生さんの部屋じゃありませんから。この部屋に弥生さんが資料とか置いていったら、それは俺にとって間違はなく邪魔なものでいらないもので、捨てるべきものなんですよ。だからうちにものを置いていくのはやめてください。大事な資料もそうでない資料も、まとめて一袋で、ポイですよ。それじゃ、その辺のところ覚悟しておいてください。俺は宿題をしにいきますんで、失礼します」

「うー、うー、ゆきのいじわるー！ 女子の細腕で、こんなにいっぱい荷物が運べるはずなのに！」

「別に一回で運べなんて言いません、何往復もしてください。どうせ持ってくるときだって、何往復もしたんですよね？」

「必要になるたびにその都度行ったり来たりしたんだもん！ そんな引越屋さんみたいにはしてないよ！」

「だもんどか、やめてくださいよ、年甲斐もない。小さい子どもで

もあるまいし、もう少し大人としての語尾選びがあるべきだと思いますよ、俺は」

「えー、いいじゃん、だもんとかいっても。大人だって少女に戻りたいときがあるものだよ。ね、都ちん？」

「なんであたしに言うの？ あたしは別に、そんなこと思うことないけど？」

「ああ、都ちんはもう少女じゃないからね、うん、仕方ないね。でもあたしはまだ少女として枯れてないから、だもんとか言いたいんだよ」

「ちよつと！ やよちゃん、あたしが枯れてるってどういうこと！ 確かに最近徹夜明けの朝方とか節々が痛かったりするけど、でもそれは聞き捨てならないわ！ 不用意にそんなこと言うんなら、あたしはへこむわよ！！」

「あー…、都ちんにへこまれるのはちよつとなあ……。うん、ごめんね、都ちん、あたしが言い過ぎたよ」

「それでいいのよ、やよちゃん。そういう不用意なことは言わないようにお願いするわ。仕事へのモチベーションとかに、激しく関わるからね」

「うん、気をつけるよ。都ちん、へこむと三日はダメっ娘になっちゃうんだからねー。やっぱ気いつかうよ」

「弥生様、都様、私が思うに、お二人は女性として非常に魅力的なのではないかと。私は執事故、異性というものにそれほど興味を持つことはありませんが、しかし客観的な目で見て、お二人は大層魅力的であると考えられます」

「？ 庄司くん、執事っていうのは、異性に興味がないものなの？ それは執事としての習性みたいなものなの？」

「都様、執事とは傳くもの、主の生活のすべてをサポートするものなのです。つまり、私は主である幸久様の生活全般をサポートするために存在しています。そういう風に考えますと、執事というのは家具なのです。確かに執事というものは、従者の中では位が高いと

いわれることが多いですが、しかしそれであつても主に仕えるものであるという事実は変わりません。それならばこそ、私は幸久様のことを最優先に考え、幸久様のためになることを最優先で為すのです。それが私に課された至上命題であり、私にとつての金科玉条なのです。それだからこそ、私にとつては幸久様のために為すことがもっとも望むことであり、それ以外のことは必然優先度が落ちるのです。ですので、異性への興味や幸久様と関わりにならない趣味的なことなどに対する関心は、もちろん他の執事という存在がそれをどう捉えているかは分かりませんが、私の中ではかなり低いのです。私は、幸久様のために存在しているようなものなのですから」

「なるほどね、三木くん、彼はなかなか重いわね。なんていうかこう、彼女でもないのに病的なまでに献身的な女の子くらい重いわね。しかも同性だからいろいろ難しいわ」

「分かってくれますか、都さん」

「分かるわ。あたしも確かに、彼にほんの少し、それこそ三木くんのついで程度のお世話をしてもらつてるけど、それでも本当に手厚く尽くしてもらつてるわ。でもそうよね、あたしは三木くんのおまけなのよね。うん、おまけであれだけ濃厚なら、おまけじゃない三木くんにはどれだけの濃度のご奉仕が降りかかるのか、推して知るべしってことね。執事っていう存在を、あたしは舐めてたんだと思うわ」

「まあ、ひろはいい子だと思うよ、あたしは。いい子だけど、彼氏にするのはちよつとないかなあ。だってひろ、基本的にゆきの方しか見てないし、でもだからってゆきにするのと同じだけの熱を持つて見つめられたら重いしね。なんか縛られちゃいそうで、おねえさん腰が引けちゃうよ。りんちゃんも、そう思わない？」

「いえ、広太さんは、仕える者の鏡です。もし愛する人に対してもそうして接することができるならば、それはとても素敵なことだと思います。滅私の奉仕とは、究極の愛だとは思いませんか、お二人とも。私も、出来ることならば朝目を覚ました瞬間から夜眠りに落

ちる瞬間まで幸久様のために尽くしたいです……」

「あゝ、りんちゃんも基本的には重たい娘さんなんだったね、うん。おねえさん、忘れてたわけじゃないけど、でも、最近そういう気配を表に出すことが少なくなってたから意識から外れてたよ」

「そういえばかりんちゃん、三木くんと別々の部屋で寝てるのよね。なんでいっしょの部屋で寝ないの？ 三木くんのベッドでいっしょに寝るか、かりんちゃんのお布団でいっしょに寝ればいいじゃない。別に許嫁なんだからいいんじゃないの？」

「み、都さま、いけません、そのようなことをおっしゃっては……！」

嫁入り前にこうして住まいを共にしているだけでもあまりよろしくないというのに、そのようなことまでしては……、不純です……！」

「えゝ、でもりんちゃんはゆきのこと好きなんですよ？ 好きなんだよ？ まさかこの期におよんで好きじゃないなんていうわけないんですよ？」

「も、もちろんです！ 幸久様のことは、……、あ、愛しています！」

「だったらいいじゃない、問題なんてなにもないよ、りんちゃん。」

女の子はね、大人になったら好きな人とはエッチなことしたくなっちゃうものなんだよ。だからね、りんちゃん、不純な気持ちも全部自分なんだって受け入れないといけないんだよ」

「弥生さん、やめてください、そんな自分を中心にすべての女性を語るのは。弥生さんが全世界の女性の基準点だっていう保証はどこにもないんですから」

「ゆき！ そうやって女性を神格化するがいけないとはあたしには言えないけど、でもその勝手な象徴化がりんちゃんを縛ってるとは言えないのかい！ りんちゃんだって普通の女の子なんだよ！」

「うわ、そう言われると俺が間違ってるみたいに聞こえる。間違ってるのは全てをエロで解決しようとする弥生さんなのに！」

「まあ、でも、一回くらいいっしょのお布団で寝てみてもいいんじゃない？ いっしょのお布団で寝てみたら、相手の寝像が悪いとかいびきがひどいとか歯ぎしりがヤバいとか、いろいろ気付くことが

あるよ。それに、その場の流れに流されて一線越えちゃったりなんだったかもしれないしねグヘヘ」

「弥生さん、グヘヘって笑うの止めてください。そこはかたなく親父的でイヤらしいですよ」

「いや、おねえさんはね、ただゆきとりんちゃんがエッチなことをしてるのを覗き見ようって腹積もりなだけで、なにもイヤらしいことなんて考えてないんだよ。あくまでも学術的な好奇心だよ」

「様々なことに学術的な好奇心を持っている全ての人類に謝罪しろ！！　もう、なにもかもイヤらしいだろ！！」

「不思議だよね…、おねえさんはゆきのことは大好きだしりんちゃんのこと大好きだし、ゆきとエッチしてもいいと思うしりんちゃんとエッチしてもいいと思うんだよ。でも、一番はゆきとりんちゃんがエッチしてるところを見たいんだよ」

「黙れ！　この場から消えされ、淫魔めが！！　広太、飯食い終わり次第、弥生さんをこの部屋から叩き出せ！！」

「ごはん食べ終わるまで待ってくれるあたり、ゆきってば優しいんだから。大好き！」

「もうイヤ、この人！　なんでこんなにポジティブなの！　俺にはどうしようもない！　…、かりんさん、もうあっちに行きましょう……。宿題、見てくれるとうれしいです……」

「はい、お任せください！」

「ゆき、部屋で二人っきりはチャンスだよ！　まだ高校生なんだから、ちゃんと避妊してね！！」

「弥生さん、酒飲んでないときの方がめんどくさいよ！！　もう、さっさと酒飲めよ！！」

そうして、俺はあんまりエロ方面押してくる弥生さんから逃げるように部屋の扉を閉じたのだった。実際のところ、弥生さんは酒を飲んで酩酊していてもそこまで意識が混濁することはなく、比較理的的思考を保っているのだ。そして、酒を飲んでいないときは、その思考がさらにクリアに洗練され、常よりも高度な会話行動を可



能になっているのだろう。

しかし、そうして出来るようになった高度な会話行動が全部いろいろダメな方向にのみ向けられるというのは、どうなのだろうか。つまり、総じて言うと、弥生さんがダメということでもいいのだろうか。

イチャイチャって、なんだろう？

「おはよう、姐さん」

「ああ、三木、おはよう。今日はいつもよりも余裕を持って登校することが出来たのだな」

「そういえば、確かに、そうかもしれない。今日は霧子の目覚めが良かったからな、時間のロスがほとんどなかったんだ」

「そうか、それはよかった。今後もこれぐらいの時間に登校することが出来るように心がけるのだぞ」

「まあ、霧子次第だな。霧子が起きないことには俺も出発できないから、そういうことは霧子に言ってくれ、姐さん」

昨日の夜はいろいろ大変だったが、しかしそれでも朝は欠かさずやってくるのであって、時間というものがこちらの都合など意に介してくれるはずもないのである。ともかく、俺は朝の訪れとともに目を覚まし、今日も霧子を叩き起こして学校へとやってきたのだ。

昨日は宿題をしたあと、少しの間かりんさんとおしゃべりなどしていたから寝る時間が少し遅くなってしまっ、多少の眠気を未だ抱えたままなのだが、しかしだからといって霧子を起こすタスクが消えてなくなるわけでもなく、眠い目をこすりこすり天方家の扉を叩いて俺よりもさらにもっとずっと眠そうにしている霧子を引き連れて学校へとやってきた。途中何度か霧子の意識がトびかけて危ないところもあったが、まあ、時間的にはかなり余裕を持って到着することができたのは重畳というものだろう。

だからこそ、こうして姐さんと穏便におしゃべりすることができているわけであって、遅刻ギリギリじゃない時間にがんばって登校するのも悪くないかもしれないか思っていたりする。いや、だって、遅刻したりすると姐さんは厳しいからさ、こうして平和におしゃべりすることもなかなか出来ないんだ。姐さんは、あれだ、自分には特別に厳しいけど、身内にもそれなり以上に厳しいから。

「天方のせいにするんじゃないぞ、三木。何事も個人個人の心が次第なんだからな、お前ができることもすべきことも、なんらかあるはずだぞ」

「そう言われちゃうと、はいとしか言えない」

「それならば、はいと言っておけ。意識をするだけでも違うものだからな」

「でもまあ、俺以上に霧子が意識しないとダメなんだぞ？ 分かってるか、霧子？」

「にゅん…、ねむい…」

「…、だろうな、うん。お前はいつだってそんな感じだよ。分かった、俺がなんとか頑張るから、霧子はいつもどおりに出来ることだけやってくれ」

「にゅん…、ねむいよ…」

「はいはい、もうホームルーム始まるまで寝てていいから。机はこっちだぞ、霧子」

「にう…」

「天方は、いつも眠いのだな。眠る時間はむしろ早いと聞いているが、どうしてそうまで眠いのだろうか」

「さあ、それは俺には分からないな…。でも霧子が眠そうなのなんて、それこそ昔からだし、なんかこれが通常状態って感じなんじゃないか？」

「そうか、三木にも分からないのか。一番付き合いの長い三木に分からないのであれば、それが私に分かる道理はあるまい」

「まあ、あれだよ、きっと霧子は成長期なんだよ。寝る子は育つっていう、あれだろ」

「天方はまだ成長するのか…、背が高いというのは一つの大きな身体的特徴で、少なからず便利などころもあるだろうが、しかしあれ以上というのは少し女子としては辛いものがあるのではないか？ ただでさえ天方は自分の身長の高さにコンプレックスを持っているというのに、かわいいそうではないか」

「いや、別に俺も何か確信があつて言つたとかじゃないから、そんなこと言われても困るんだけど……。ま、まあ、霧子の背がこれ以上デカくなったとしても、俺が見捨てたりしないから、心配ないつて」

「三木くん、紀子ちゃん、おはようございます」

自分の席に座り一時間目の授業である古文のノートを開いている片手間で俺に意識を向ける姐さんと、その傍らに立って専らおしゃべりに興ずる俺にそうして声をかけてきたのはちょうど今しがた登校してきたらしい、通路を一本挟んで姐さんの隣の席に座る佐原湊<sup>サハラ ミナト</sup>だった。

彼女の身長はメイよりも少し大きいくらいで、背の順に並べば前から五番目か六番目になる小さい娘だ。クラスの中でもかなり人懐こい方で、交友関係はかなり広いらしく俺もよく話をしてもらっている。

「ああ、佐原か、おはよう。今日も予鈴前にきちんと登校してきて偉いな」

「おつす、佐原、毎日予鈴前登校なんて偉すぎるな」

「いや、そんな、ふつうだよ、ふつう」

「三木聞いたな、予鈴前に登校するのは普通のことなのだ。ということはつまり、それをきちんとすることが出来ていないお前はどんなのだろうな。論理的に見て、分かるな？」

「姐さん、いったい何が言いたいんだい。まあ、だいたい分かってるつもりだけど」

「いやなに、何が言いたいというわけではない。ああ、私は何かをお前に言おうというつもりはないのだぞ。分かるだろう、私からお前に言うべきことは、今以上にはなにもないのだ」

「うん、分かる、分かりはするよ、姐さん。俺もね、人並み以上には察しがいい方だと思ってるからな。姐さんの言わんとすることは分かっている。分かっているけど、でもここはあえて分からないと言っておこう。さっぱり分からん」

「そうか、分からんか。分からんならば致し方あるまい、私もこのようなことをするのは心が痛むのだが、少々修正が必要かもしれない……。出来ることならば自ら己を省み、よくないところを発見してくれるとよかったのだが、残念だ」

「おしゃべりするのとかイチャイチャするのとかは歓迎だけど、修正するのはちよつと勘弁してください。むしろ、姐さん、俺とイチャイチャしよう。きっとその方が俺を修正するよりも楽しい、俺が」

「…、イチャイチャするというのは、具体的にどういうことだ、三木。私にはそれが具体的に何を指すのか分からないのだが、お前を修正することと両立することができることか？　もしそうならばしてやっても構わないが、私の持っている知識のそれがお前の言わんとするものと一致しているとして、おそらく両立は不可能なのではないか？」

「おや？　姐さんが、こんなしょうもない話題に食いついてきたぞ？」

「あれ、姐さんはイチャイチャを知らないのかい？　なんと…、一般常識だと思っていたのに……」

どうしてか急に俺を修正したくなってしまったらしい姐さんの意識を別のベクトルに反らすためだけに振った話だというのに、乗られても困るではないか。しかし、もしかしたらこの話題、広げたら姐さんからの修正を回避できるんじゃないか？　いや、まあ、たぶんムリだと思うけど。

「いや、理論と概念は知っている。しかしそれがどのようなものを具体的に指すのかということとは分からない」

「…、俺が、霧子としばしばしてるんじゃないか？　俺も専門家じゃないから具体的にどれとは言えないけど」

「そうだったのか。いや、それでは、三木もそれについて知らなかったということなのか？　なんということだ、それでは私たちはそれについて、これ以上間近まで迫ることは出来ないということではないか」

「ああ、残念ながらそういうことになる。俺と姐さんの二人だけじ

やイチヤイチヤが具体的にどういふものなのかを知ることが出来ないんだ……。悲しい…、哀しい話だ……」

「そうだな、しかし仕方あるまい、それならばただ為すべきように修正することにしよう。なに、本来の目的に立ち返るだけだ」

「それはイヤって言うてるじゃない！」

「ふ、二人とも、ケンカしちゃダメだよ……」

「ケンカ？ ああ、別にこんなのケンカじゃねえって。これは、なんていうか、コミュニケーションだって。よくあることだよ」

「そ、そうなの……？」

「俺と姐さんはマブダチだぜ、ケンカなんてするわけないじゃん！  
っていうか、真正面からケンカしたら俺が叩き潰されて終わりだし。そんなことより、佐原、イチヤイチヤするってどういうことなんだ。教えてくれ」

「い、イチヤイチヤする……？」

「そうだ、俺はただ勢いと思いつきで言っちゃったわけなんだけど、でも実のところ、俺自身もそれについてよく知らないってことが分かってしまった。そう、俺も姐さんといっしょで理論と概念しか理解してなかったんだ。というわけで佐原、もしイチヤイチヤについて具体的に知っていることがあったら教えてくれないか？」

「あ、あたしも、ごめんね、今までイチヤイチヤするような相手がいたことがないから、よく分からないの……。あつ、でも、ドラマとかでの話でいいんだったら、少しは分かるかも」

「おお、本当か、佐原。それでは、佐原の持っている知識を私たちにも分けてくれ。そうすれば、本当に三木への修正とイチヤイチヤが両立できないのかが確かめられるからな。そして、もしも万一、それら二つが両立することができるもののだとしたら、三木の願望をかなえてやることにしよう。ただし、破廉恥なものはダメだからな？ あくまでも私たちが友人として在り続けることが出来るものだけだからな」

「うん、まあ、姐さんは破廉恥に対するハードルがめっちゃ低いか

らきつと破廉恥なことになるだろうけど、とりあえず了解だぜ！

さあ、佐原、知っている限りのイチャイチャについて教えてくれ！」

「う…、うん！ ええっとね、イチャイチャっていうのは、基本的には恋人同士の男子と女子がするんだと思うの。でも、ときにはそうじゃない人たちがすることもあるみたいだけど、でもそれもとても仲良しの二人っていうのが多いと思うよ。つまり、イチャイチャは男女が二人の仲を確かめるためにするんじゃないかな？」

「なるほどな、俺の知ってるイチャイチャとそう大差はないみたいだ。よし、それじゃあ佐原、その詳しいところまで教えてくれちゃってくれ、頼む」

「う、うん、がんばるね。えっと、やっぱりイチャイチャするっていったらまずはスキンシップだと思うの。たとえば手をつなぐとか、恋人同士ならキスをしたりとかね」

「……………」

「…、ダメだ、佐原、キスの一言に僕らの姐さんは沈黙してしまっただよう。どうやらイチャイチャはお気に召さなかったらしい、残念だ……………」

「えっ、ダメだったの？ 二人は恋人同士じゃないんだから、別にキスすることなんてないのに。…、三木くんは、紀子ちゃんとはカレカノじゃないんだよね？」

「そう見えるか？ 俺と姐さんが」

「ううん、見た感じあんまりそういうのっぽくはないと思う。どちらかというと、やっぱりお友だちって感じだよ」

「だろ？ だから、何がどう転んだってキスをするなんてことはないんだよな。でも、どうやら姐さんはキスっていう言葉自体がもはや気に入らないらしい」

「そうなんだ…、それは、残念、なのかな？」

「分かん。でもたぶん残念なんだと思う。でだ、どうして姐さんは顔を真っ赤にしているんだろう？」

「えと、それは、分かんない……………」

「分からないときは、人に聞く！ 姐さん、顔が真っ赤だぜ？」

「……………」

「ダメだ、固まってる。どうしちゃったんだ、姐さん」

「…、はっ！？ 三木、このような公共の場所で、私に何をするつもりだ！！」

「おお、おかえり、姐さん」

「い、いかんぞ、私は、そういったことはよしとしない。そのようなことは、本来は秘め事ではないか。このような往来ですることではない、破廉恥だ」

「？ なんの話？ イチャイチャの話？」

「私は騙されないぞ！ お前はそうして言葉を弄し、私を弄ぼうとしているんだ！」

「し、してないよ！ 人聞き悪いよ！」

「お、お前はいつもそうだ！ 疑うことを知らぬ純真な女子を、言葉巧みに騙し、思うままにしているではないか！ だが私に限っては、そうはいかんぞ！ 何でもお前の思い通りには、ならないのだぞ！」

「ちよちよ、ちょっと待って！？ 急に何の話！？」

「し、しらばつくれるな！ このようなところで、て…、手籠めにしようなどと…、信じられん、この破廉恥漢め……」

「えっ？ なんて？ 急にトーン落とさないで、聞こえなかった」

「う、うるさい！ お前は私をこれ以上辱めるつもりか！ 弄ぶだけでは飽き足らぬというか……！」

「うわ、やべ、状況が俺の知らないところに飛んでった！ 佐原、助けて！」

「ご、ごめんね、三木くん……。あたしは、よく分からないから助けられないよ……」

「だよな！ 当事者が分からないのに、第三者が分かるはずないよな！ うん、自分でなんとかする！」

「そこに正座するんだ、三木！ お前には修正の前に説教が必要な



ようだからな!!」

「はい……」

「そもそも、お前はいつもだな……!!」

とりあえず、俺は姐さんに言われたとおり床に正座するのだった。というか、もうあの状態になってしまったら姐さんから逃げることは出来ないわけで、お説教だろうが修正だろうが甘んじて受けるしかないのだ。そもそもその身体能力と運動性能が段違いの姐さんが相手では振り切って逃げるなどという選択肢が、浮かびすらしない。そして一度始まってしまった姐さんのお説教は長く、朝のホームルームが始まるまでの約十分を使いきってなお終わらず、先生たちが教室に入ってきた時点で一時中断となったのだった。まあ、一時的に解放されたとはいえ、まだ姐さんの気が済んでいないだろうから今日の休み時間は全てお説教に奪われることは覚悟しておいた方がいいだろう。

いったい何が悪かったのかと言えば、きっと悪ふざけをしたのがいけなかったのだろう。

### 三木くんの、よくないところ

『幸久くん、元気ないけど平気？』

「…、平気……」

朝のホームルームがつつがなく進行していく中、俺は自分の机に力なく突っ伏したままぼんやりと視線を虚空に漂わせていた。

朝一で眠かったからかうっかりと口を滑らせてしまった俺は、朝っぱらから姐さんに濃密なお説教を受け水一滴出ないほどにギリギリと絞られたのだった。長年にわたる晴子さんからの罰ゲーム人生を送る俺に、物理的な罰の伴わないお説教だけでここまでダメージを与えられるのはきつと姐さんだけだろう。

まあ、そもそものところは俺が悪いのだろうから文句の言いようもないのだが、しかしだからといってあんなに怒らなくてもいいじゃないか。お説教を受ける側の俺はただすべてを甘んじて受けるしかないんだか、もう少し手心を入れてくれたって罰は当たらないはずなのに、あそこまで徹底して責め立てなくてもいいはずなんだ！

しかし、姐さんは基本的に怒っていても理性的なので、手は出さないと決めたら手は出さないから本当に純然たるお説教のみだったはずなのに、どうしてこんなに心が摩耗しているのだろう。晴子さんのお説教は要所要所で手が出るから、お説教による精神的な圧迫と相乗効果でダメージが倍加していくのはなんとなく分かるのだが、しかし姐さんはそれが無い。純粹にお説教のダメージだけで俺の心を砕いているのだから恐ろしい。

今までなんとなくそうなんじゃないかと思っていたが、しかしやはり姐さんは晴子さんと同じくらい怒らせてはいけない存在なのではないだろうか。…、いや、今さら、『なのではないだろうか』とか言っているから俺は学習しないんだ。姐さんは、間違いなく『怒らせてはいけない人ランキング』の上位にランキングされるべき人なのであって、そのところをきっちり押さえていないといけな

いのだ。ちなみにそのランキング、一位は晴子さんで二位は庄司のお婆さんだから、姐さんは三位くらいにランクインだ。

『またのりちゃん怒らせたの？』

「いや、俺は別に姐さんを怒らせたかったわけじゃないんだ。うん、俺はいつだって姐さんと仲良くしたいと思ってるわけだし、そうじゃないときなんて一時たりとも存在しないといってもいい。でも世界の理がそれを許さないんだ。俺はこんなこと望まないのに、世界が悪いんだよ」

『幸久くん、世界のせいにしてもしょうがないよ。それに、のりちゃんはもちろん理由がないと怒らないんだから、きっと悪いのは幸久くん』

「それは、分かってる。でもさ、悪いのが俺なんだろうことはよく分かってるんだけど、いったいどこがマズかったのか…、いや、悪かっただろうところも分かってる。分からないのは、その悪かっただろうところがどうして、如何にして悪かったのかってことが分からないんだ」

『どういうこと？』

「…、つまり、俺は押しちゃいけないスイッチを押したんだろうってことは分かるんだ。でもそのスイッチがどんな配線をしていて、どこにつながっていて、いったいどの爆弾を作動させたのかが分からない。確かに何か爆発して、その結果として姐さんは俺に対して怒ったわけなんだろうし、それは間違いないんだけど、でも俺はこれから何をどう気をつけたらいいのかが分からないんだよ」

『幸久くんは、自分が何が悪かったかは分かっているけど、それがどうしてのりちゃんを怒らせたか分からないってこと？』

「まさにそのとおりだ。俺はこれからのためにそれをはっきりさせておかないといけないんだけど、一人じゃそれが出来る気がしない。メイもいっしょに考えてくれるとすっげえお助かりなんだけど？」

『ちよっただけならお手伝いしてもいい。でも、自分で考えなきゃいけないのがほんと』

「それは、もちろん、分かってる。メインで考えるのは俺だ。メイは、とりあえず、補助で。アイデアとか発想の糸口とかを出してくれると助かる。っていうか、俺が状況を思い返すために話を聞いてくれ、それだけでもいい」

『分かった。お話聞いてあげる』

「ありがとう、メイ。あのな、実はさっき、久しぶりに予鈴の前に学校に来れたから姐さんとおしゃべりしてたんだ。ほんと他愛のない、なんてことのないおしゃべりだったんだけどな」

『幸久くんと他愛のないおしゃべりでのりちゃんが怒っちゃうのはよくあることだと思うけど』

「うん、俺もそう思う」

『ということは、幸久くんがそのおしゃべりの中でのりちゃんにやなこと言った』

「姐さんが気を悪くするようなイヤなことを言ったつもりはないんだけどな……。ほら、一応一年以上友だちやってるわけだし、なんとなく最大級の地雷は分かってるっていうか、そこは回避できてると思うんだよね」

『それじゃあ、のりちゃん、怒ってないんじゃない？』

「いや、それはどうだろう…、確かに姐さんは説教っぽいところがあるけど、でも意味もなく説教してくるってことはないんだよね。やっぱり俺にどこが悪いところがあって、姐さんがそれに対して怒っていて、だからお説教なんだよ。だから怒ってないってことはないと思う」

『そう？ のりちゃん、怒ってるとき以外でお説教すること、あると思うけど。でも理由なく怒ることがないっていうのは、あたしも同じこと思う』

「えー、マジ？ 姐さんがお説教するのって、俺としてはいつでも教育のためだと思ってるんだけど、違うの？」

『そういうときが大半だと思うけど、でもそうじゃないときもあると思う』

「そう、なのかな……？　俺にはちょっと、詳しいところは分からないわ」

『わからないの？』

「ああ、俺も姐さんのことは少しずつ分かってきてると思うんだけど、でもやっぱり男と女だからさ、完全に分かり合うっていうのは難しいと思うんだよね。だから今はまだ、全部を理解するっていうのは出来てないと思う」

『…、分かってないっていうのと、分かってほしいっていうのは、どこが違うと思う？』

「ん？　そりゃ、本人のやる気だろ」

『うん、そうだね』

「とにかく、俺は姐さんのことをわかってほしいってつもりなんだけど、なかなか思うようにはいかないってことだ。男と女っていうのは、それだけ分かり合うのが難しいってことだな、うん」

『幸久くんがそう思うんなら、きっとそうなんだろうね。幸久くんの中ではね』

「…、メイさん、どうしたんですか、とげとげしいですよ？」

『そんなことない、ただ、のりちゃんかわいそうって思っただけ』

「…、ああ、朝っぱらから俺に説教させられてな。別に姐さんだって好き好んで説教してるわけじゃないんだろし、俺もいろいろ気をつけないといけないよな」

『そうじゃないと思うけど。別に、朝からお説教しなくちゃいけなかったことがかわいそうって言いたいわけじゃないと思うけど』

「メイさん、目力怖いんですけど……」

『のりちゃんも、振り回されてかわいそう。それもこれも、幸久くんがいけないのに』

「えー…、そんな諸悪の根源みたいな言い方しなくても……。そこまで言われるなんて、俺こそかわいそうじゃね？」

『そんなことない。幸久くんは、ひどい』

「そんなに言わなくても……。さすがにへこむ……」

『とにかく、今回のりちゃんがなんでお説教したのか分かってあげないとダメ。のりちゃんがかawaiiそう』

「…、俺はかわいそうじゃない？」

『かわいそう。ほんとにかawaiiそう』

「だよね！」

『哀れを誘う、あんまり女の子のことが分かってないから』

「あっ、そっち…」

『自分のどこがいけないのか、よく考えないと』

「考えたいのはやまやまなんだけど、でもなかなか自分じゃ自分の悪いところは分らないんだよな」

『どこがいけないかの検討くらいつかないの？』

「実は見当は、一応ついてる」

『あれ、ついてるの？』

「ああ、そうなんだ。あのな、さっき姐さんとおしゃべりしてるときに、ちよっと怒られそうな気配になったから姐さんの意識を反らすために姐さんとイチャイチャしたいって言ったんだ。もちろん、それはイヤらしいことをしたいとかそういうことが言いたかったわけじゃなくて、こう、もう少し目に見えてキャッキャウフフしたかったっていうか、霧子と俺の関係みたいになりたいと思ったからなんだよ」

『そんなこと言ったの、幸久くん』

「ああ、そしたらな、姐さんが思った以上に食いついてきたんだけど、俺はイチャイチャについて詳しく説明できなかったから、近くにいた佐原にそれについての解説をお願いしたんだ。そしたら佐原はイチャイチャっていうのは恋人同士が仲良くするような感じだよ的なことを言ってだな、で姐さんはそれを聞いて一瞬フリーズしてからお説教タイムだ。きつと俺がイチャイチャしたいだのなんだの言ったのがいけなかったんだと思うんだよ。でもそれがどう悪かったのかは分からない」

『のりちゃん、フリーズしてたの？』

「そうなんだよ、ほんの何秒かでしかないんだけどさ。まあ、おおかた俺がバカなことを言ったんだってことを佐原の解説を聞いて再確認したってところだろうけどな」

『あたしは、違うと思うなあ……』

「えっ？ 違うの？ それ以外に姐さんがフリーズしそうな理由って何かある？」

『幸久くんは相手のことを決めてかかるところがあるから、分らないかも。それとも、相手のことを分かうとしてないの？』

「それは、どういうこと……？」

『…、女の子は、幸久くんが思ってるよりも複雑ってこと、だと思う。のりちゃんも女の子だから、そう』

「…、なるほどな。姐さんも、いろいろ複雑ってことだな。それで、姐さんはどんなふうに複雑なんだ？」

『のりちゃんは、すごい真面目。よくないことは絶対しないし、相手にもさせたくないと思ってる。だから風紀委員に入って活動してるし、その中でも特に熱心。これが、普通に外側から見えるのりちゃん、幸久くんが決めてかかっているのりちゃん』

「確かに姐さんは今メイが言ったとおりな感じだ。もう、まさに姐さんって感じだ」

『でもそんなのりちゃんだけど、でもやっぱりみんなと同じ女の子だからいろんなことに興味あると思う。男の子のことだって気になるだろうし、すごい真面目な性格の反動でえっちなこととかにも、実は興味あると思う。でもそれを表に出したくはないから、頭の中でぐるぐる考えちゃう。だからのりちゃんは、基本むっつり』

「…、まさか、姐さんはそんなことないって。うん、やっぱり姐さんは、そういうのはないって。だって姐さんだもん。姐さんだから、そういうのじゃないんだ」

『そういうところが決めてかかっているっていうのに…、幸久くんは人の話聞かないんだから』

「えー、俺、けっこう人の話は聞いているつもりだぜ？」

『もう、幸久くんはいつもそうやって、まず真っ先に自分をかばうんだから。そういうところが柔軟性がないっていつてゐるのに』

「いや、俺としては、俺の思う素直なところを述べているつもりなのであって、別に自己保身のためにそう言ってるわけじゃないんだけど……」

『少しは素直になって、他人の話を聞いてみる方がいい。幸久くんはいいところいっぱいあると思うけど、でも女の子のことについてにぶいのと、自分の考えに凝り固まって他人の話を聞かないのはよくないところだよ』

「そんなにかなあ……？ 別にそんなことないと思うけどなあ……」

『あたしは、そんなことあると思う』

「…、そう、だな。メイにそういうこと言われるのも何回目かだし、ちよつと気をつけてみるか」

『それがいいと思う。ちよつと気をつけるだけで、いろいろ見方変わるだろうから』

「見方？」

『周りの人の、今まで見えてなかったところが見えるかもしれない。見えなかった気持ちに気付くかもしれない』

「見えなかった気持ちって？」

「…、みんなけっこう、幸久くんのこと、好きってこと……」

「…、メイが、なんかしゃべっ…、たあああああああああああああああああああああああああ！ 一言以上しゃべってるの、初めて聞いた！！」

「な、なにっ！？ 三木くん、どうしたの！？」

「三木ちゃん、しいゝ、ですよ」

「あっ…、はい、す、すいません……。メイが、急にぼそつとしゃべったので、びっくりして……」

「びっくりしたにしても、今はホームルームの途中なんだから、騒いだらダメよ」



「三木ちゃん、どんな理由があったかは分かりませんが、先輩のお話を遮ってはいけませんよ？」それはあとで先生が、二人っきりで聞いてあげるですから、今は静かにしましょうね」

「いや、あの、二人っきりで聞いてもらわなくても、平気です、はい」

「そうですか？ それでは、それはまたのきかいにしましょうね」

「またの機会にもしなくていいわよ、そんなこと。それより連絡の続きをするから、ちゃんと聞いてね。もちろん、三木くんも聞くよ？」

「は、はい、もちろんです」

うう…、しまった。メイが急に二音節以上しゃべるものだから、びっくりして大声をあげてしまった。気をつけないといけないな、こんなホームルーム中にデカイ声出すなんて、ただの迷惑以外の何ものでもないぞ。

しかも、あんまりびっくりしたもんだからせっかくメイがしゃべった言葉が耳に入って来なかったじゃないか。いったいメイはなにを言ったのか、ああ、気になる……。

## 二人三脚のパートナー

「ところで姐さん、一つ聞きたいんですけど、質問してもいいでしょうか？」

「なんだ、それは私がお前に説教をすることよりも重要なことか？」

「…、俺としては、それなり以上に重要なこと。もちろん、姐さんがこうして俺に説教をしてくれるっていうのはうれしいっていうか、うん、もちろん一番重要なことは姐さんが俺のために説教してくれることだよ」

「そうか、それならば聞かなくていいな、そのようなこと。お前にとってより重要なことである私からの説教を優先的に行なっていくことにしようではないか。お前も、それがうれしいだろう、この変態めが!!」

「あれっ!?! 変態にされた!?!」

「黙れ!! お前が変態でないならば誰が変態だというのだ!!」

「変態は、世にはびこってるよ、姐さん」

「…、確かに、それはそうかもしれない。訂正しよう、お前は世にはびこる変態、もといクズの一人だ。この、変態っ!!」

今は一時間目と二時間目の間の休み時間。俺は今朝の失態（と思われる悪ふざけ）の代償として姐さんのアグレッシブな説教をこの身一身に受けていた。具体的には、椅子の上に立っている姐さん（上履きは脱いでいる）の前で頭を垂れて肅々と正座している俺という構図なのだが、実はこれ、いつもよりも若干厳しい体勢だったりする。いや、厳しいといってももちろん、姐さんはただお説教をしているだけであって拷問吏のようなことはしないわけで、こう、精神的に圧迫されてる感じ？

特にきつく感じるのは、俺が正座して姐さんが椅子の上に立っていることで生じる圧倒的な視線の高さの違いである。おそらく一メートル近く上から見下ろされているわけで、正直今までこんなに見下

されたことはないため若干戸惑っている。そしてわずかに目を伏せている俺の目の前にちょうど姐さんの黒ソックスがあり、おそらくこのまま顔を上げ目線を上向きにしてやれば姐さんのスカートの中を覗き込む形になるだろうことは高確率で明らかだった。

いや、そんなことしないだけだね。女子のスカートの中に興味があるかと言われれば、そりゃ俺だって健全な高校生男子だから否定はしないけど、でも今そんなことをしてしまえば、というかそんなことをする予備動作を見せただけでも姐さんの黒ソックスに包まれた御々足が俺の顔面に突き刺さることだろう。俺としては、興味はあっても痛いのはイヤなので、ここは何もしないを選択するのが正解だろう。

「まあ、しかし、どうしても聞きたいというのであれば聞いてもいいぞ。寛容の心で聞いてやろう」

そして姐さんは椅子の上で立つのをやめてそのままその椅子に腰かけ脚を組むと、傍らの机に肘を突いてあごを乗せて、物憂げな表情で俺のことを軽く見下ろすのだった。普通はこんな座り方をしたら、床に正座している俺にはスカートの中のものが余裕で見えてしまうんだろうが、しかしそこは姐さん、絶妙な脚の組み具合で見えそうで見えない演出を忘れない。というか、それは逆にエロいのではないだろうか。

それから姐さんはその黒ソックスの足を俺に向かってスツと伸ばすと、俺の頭部がその射程内にあることを明示するためか、フワリと優しく微笑んでから俺の顎先に二三度ペチペチと軽く打ち、そして器用に頬を撫でるのだった。もしその脚が思い切り繰り出されたとしたら、おそらく俺は数分の間床を転がって悶絶することになるだろうことは明らかだった。

というか、その優しい表情が、俺としてはむしろ怖かった。でもどうしてだろう、怖いと感じているのに、なんかドキドキしてる俺がいる。何この気持ち、痛みへの恐怖とかじゃないんだけど。もしかして、いつの間にか俺、足フェチに目覚めたのか……？ それは、

ほんとに変態じゃないか……？ ……あぁ、でも姐さんの足、ソックススベスベしてるし、筋肉と脂肪のバランスが絶妙にやわくて、なんか気持ちいいかも……。

「っ！？ 三木！！ 脚にほおずりするな！！」

「…、はっ！？ ごめん、姐さん…、血迷った……」

「ま、まぁ、いい…、私も、ついな……。そ、それで、聞きたいこととは、何だ……？」

「あっ、うん、すまんかった、姐さん。あのさ、体育祭で俺、二人三脚に出ることになってたと思うんだけど、誰とペアになってるかとか覚えてる？ 俺、出場種目決めるとき不貞寝してたから見てなくて」

「むっ、そうだったのか。しかし三木、分かっていると思うが、いくらお前が参加することのできない話し合いだったとしても、それは寝てもいいということではないのだぞ。いかにお前が参加できないとしても、それが授業時間中に行なわれていることは確かなのだから、真面目に参加していなくてはならないのだ。今こうして、自分の参加種目について分からないことが出てきてしまうのも、それが原因ではないか」

「反論の余地もないほどに正論なんだけど、でもあのときは拗ねたかったんだよ。分かってくれとは言わないけど、見逃してください」

「…、そうだな、過ぎたことをぐちぐちと言っても始まらない。それよりも今は、より着目すべき現在を見据えることにしよう」

「そうしてくれると助かるよ、姐さん」

「それで、二人三脚のペアが誰だったかだったな」

「そうそう、あっ、もしかしてペアって姐さん？」

「いや、私ではない。二人三脚が行なわれる時間はちょうど私の小隊が風紀の場内巡視担当になっているからな、時間的に参加することとは出来ないんだ。下に仕事を押し付けて、上が競技に参加するというわけにもいかないだろうからな」

「まぁ、そうだよな…、それは仕方ないか。でも、そっかぁ、姐さ

んとペアだったら、きつと楽だったろうにねえ……」

「それは、どうしてだ？」

「だって姐さん、きつと俺と息が合うやつの中では一番ちょうどいいじゃん。霧子は背が近いからやりやすいけど運動神経切れてるし、志穂はめっちゃ脚早いけど背ちっこいし。そう考えると、少し背の高さは同じくらいってわけにはいかないけど、運動神経よくてきっちり息合わせられてってなると姐さんが一番いい。でもお仕事あるっていうなら仕方ないか」

「そうか、三木は二人三脚は私と組むのが良かったのか。うん、そうか、うんうん、私とて、出来ることならばそうしてやりたかった。しかし私にも仕事というものがあるからな、仕方ない。ここは涙をのんで諦めてくれ、三木」

「ああ、そういうことにするわ。まあ、ムリなもんはムリだよな」

「…、待て、どうしてそんなにあっさりと諦める。お前は、私と組むのが一番いいのだろう。それならばもう少し粘り強い交渉をしてみようとは思わないのか」

「いや、確かにそうすることができたらいいかもしれないけどさ、でもムリなもんはムリでしょ？ 姐さんにムリさせるっていうわけにもいかないし、そんな俺の事情で姐さんに迷惑かけるのもダメじゃん」

「ま、まあ、そうだな。それが一般的に見て正しい選択だろうな」

「だからさ、残念だけど姐さんに迷惑はかけられないから、ここは涙をのむことにするよ。決められたスケジュールを変更させるのも大変だろうし、姐さんの部下の人に迷惑かけることにもなりかねないからさ」

「そう…、だな……」

「？ 姐さん、どうかしたの？」

「…、まあ、私と組みたいというのは…、嘘ではあるまい……。今はそれだけでいい……」

「…、姐さん……？」

「…、期待させるだけ期待させて……。いや、なんでもない。三木、お前とペアになっているのは真田だ」

「真田？ ああ、真田、幸村か。あの、戦国武将の」

俺のペアは真田幸村らしい。真田幸村というのは、実は俺の隣の席——通路を挟んで隣なので、ちょうどメイの逆側の席に当たる——だったりする。背は姐さんとそう変わらないほどで女子の平均身長くらい。髪は耳に軽くなるくらいのセミロングで、前髪を全部持ちあげるヘアバンドをいつも身につけている。一番の特徴は右の目尻のところにある泣きぼくろだ。

高名な戦国武将である真田幸村と同姓同名だが、しかし外見や性格はあくまで女子っぽい女子で、名前の持つ雄々しさにはそれほど近くない。またどこかの運動部に所属しているらしく、運動部連中とよくおしゃべりをしているのを目にする。俺はあまり運動部方面に知り合いが多くないので、その話の輪に入っていくことがなかなか出来ず隣の席でありながら未だまともな会話を果たしていなかったりする。

まあ、それはご近所との会話というとなんにも無難にメイをチョイスしてしまふ俺の怠慢が招いた事態かもしれないが、なに、これを機会に交友を広げていけばいいじゃないか。なにこともポジティブに考えないといかんよな。

「三木、本人の前でそれを言うんじゃないぞ。本人もかなり気にしているんだからな」

「えっ、気にしてるの？　なんでよ、かつこいいじゃん、真田幸村。俺も、そういう見るからにかっつけえ名前がよかったよなあ」

「女子が、そんなに雄々しい名前を喜ぶと思うのか。とにかく、本人に戦国武将がどうのと言うんじゃないぞ。傷つけることにもなりかねないからな」

「わ、分かったわ、気をつける。しかし、真田かあ…、あんまりしゃべったことないんだよなあ……」

「む、そうだったのか？　お前は女と見れば見境なく話しかけるの

かと思っていたが、そんなことはなかったのだな。意外だ」

「姐さん、それはちよっと、認識としてひどすぎませんか？ 俺、そんな見境なくないよ？ 女子がそこにいるから話しかけるなんて、むしろそんなことあんまりしてないはずだよ」

「私は、そうは思わないが。まあ、いい。とにかく、お前は真田と二人三脚のペアになっているからな。きちんと覚えていろよ」

「…、了解」

「さあ、それでは説教の続きをしようか」

「いや、姐さん、悪いんだけどお説教はちよっと待ってくれ。俺は出来るだけ早めに、真田によろしくお願いしに行かないといけないんだ。決まったのが昨日だから今さら感しかないかもしれないけど、でもそういうところはきちんとしていたほうがいいと、姐さんは思わんかい？」

「ふむ…、なるほど、道理だ。いいだろう、三木、今すぐ真田によろしくお願いしてこい。きちんと、遅くなって悪かったと謝るのだぞ」

「もちろん、分かってるぜ、姐さん。任せといてくれ、そういう気づかいとか思いやりとかは、俺の得意分野だからな！」

「不用意なことを言って真田を傷つけるなよ、分かっているな」

「ばっちりだぜ、姐さん！」

それではいざ行かんと立ち上がり、そして振り返った俺だったのだが、

「三木くん、なにか呼びましたか？」

真田は俺の後ろに立っていた。しかしこれは別に不思議なことではなく、真田の席は俺が正座しているところから机三つも離れていないところにあるわけで、ぶっちゃけていうならば今の話も全部真田に聞こえていたとしてもおかしくはないのである。

「なんだか、真田って言われた気がしたんですけど、気のせいでしたか？」

「気のせいなんかじゃないぜ、真田。俺と真田、体育祭で二人三脚

のペアになったって今姐さんに聞いてな、これはよろしくお願いしないといけないと思ってな、今ちょっと真田のところに行こうとしてたんだ」

「そうだったんですか、それはちょうどよかったみたいですね。あたし、今少しお手洗いに行ってたんです」

「ああ、そうだったのか、それは本当に、ちょうどいいタイミングで戻ってきてくれたんだな。というわけで、体育祭はよろしくな、

真田」

「こちらこそ、よろしくお願いします、三木くん。二人三脚だって、一位になればその分の点数がもらえるんですからね、がんばりましょうね」

「ああ、それでな、練習とかするか？ 俺としてはどっちでもいいんだけど、真田がやった方がいいと思うんならやろうと思うんだ。実は二人三脚ってやったことないからさ、練習した方がいいのか分からないんだよ」

「あゝ…、実はあたしもやったことはなくてですね…。でもやっぱり、二人の息を合わせないといけないから練習はした方がいいと思うんですよ。たぶんあの動き、簡単そうに見えて難しいでしょうから」

「そっか…、じゃあやった方がいいかもな。それじゃさ、放課後にもどうだ？ ちょっとだけ試しにやってみる感じで」

「あつ、ごめんなさい、放課後はすぐに部活が始まっちゃうんです。だからやるなら始業前に朝練をするようにしてほしいんですけど、ダメですか？」

「ああ、それでいいぜ。朝連は、何時からがいい？」

「あたしは何時からでも平気ですよ。朝はどちらかというと早起きな方ですから」

「そうか…、じゃあ七時からでもいいか？ それくらいからやれば、休みを挟み挟みいってもそこそこ練習できると思うんだ」

「分かりました、それじゃあ明日の朝七時ですね。その時間で待ち



合わせですよ、三木くん？」

「おっけ、了解。それじゃ、そういうことで」

「はい。あつ、もう二時間目が始まっちゃいますね」

「おお、ほんとだ…、そんなじゃな。姐さんも、また次の休み時間に」

「ああ、そうだな、また次の休み時間に、説教の続きをすることにしよう」

「お手柔らかに、よろしくお願いします」

とりあえず、今この場でのお説教は免れたが、しかしどうやら根本的にゆるされたというわけではないようだった。まあ、自業自得なんだから甘んじて受けよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3185o/>

---

Prism Hearts

2011年9月19日01時01分発行